狼と少女の物語

くらいさおら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狼と少女の物語

【Ｎコード】
Ｎ６８２３Ｊ

【作者名】
くらいさおら

【あらすじ】
勇者を召喚しようとしたら見事失敗。いきなり異世界に放り出された男は、なぜか人狼になっていた。出逢った少女と旅をすることになり、彼は未知の世界へと足を踏み出す。どんな出逢いがあるのか、どんな事件があるのか。作者にも分からない物語が始まった。
勇者を召喚した理由とは。なぜ彼は人狼になったのか。謎を含んだまま、狼と少女は旅を続ける。（半分最強モノです）

第1話

その日、彼は緊張の極致にあった。
県庁にいくつかある会議室のひとつに、彼は同僚と二人で座っていた。

隣の部屋ではプレゼンが行われている。
彼のプレゼンは次。時間にしてあと15分後。
ある公共施設の指定管理者選定のためのコンペだ。
同僚に一言断り、彼はいそいそとトイレに立った。
用を済ませ、鏡の前に立ち手櫛で髪を整える。

あと5分。
鏡に背を向け、歩き出した瞬間。
鏡の表面が滴を落とされた水面のように、王冠型の盛り上がりを作り、彼を飲み込んだ。

真っ暗な中、細いチューブの中をゆっくりと滑り降りるような感覚にとらわれていた彼は、しびれたような頭でコンペのことを考えていた。
このプレゼンで、彼と彼の所属する会社の運命が決まってしまう。

選定から漏れたら、彼の会社に未来は無い。
近い将来、良くて会社更生法の申請。大胆なリストラ付き。プレゼンで下手を打った者がどうなるか、言うまでも無い。
悪ければ倒産だろう。そしてこの可能性のほうが高い。

この地方では、なまじ規模があるだけに彼の会社が倒れたら連鎖が起きる。

いきなり消えちゃって、敵前逃亡だと思われているだろうな、と考えたとき、チューブの先に光が見え、人影がいくつか見えたと思った瞬間、彼の下からチューブの感覚が消えた。
チューブから吐き出され、その人影の前に放り出されると思った彼は、受身の姿勢をとる。
突然視界が真っ暗になり、垂直に落ち始める感覚に襲われ、彼の意識は消失した。

石壁に囲まれた部屋の中で、壮年の男が肩を落とす。
しばらくの間、身じろぎもできずにいた。

同世代の男たちが二人、１０代前半と思われる少女がひとり、その男を背後から見下ろしている。
非難がましい視線と労わるような視線、落胆の視線が注がれる中、男はようやく立ち上がった。
そして、少女に向かって片膝を付き、頭を垂れ、言葉を紡ぎ始める。
「王女様、申し訳ございません。
わたくしの力では召喚の呪文は完成できぬ様子。
いま少しのところで魔力が途切れたようでございます」
落胆の視線を送る少女に男は続ける。
「しかし、影までは見えてございます。
この場にこそ召喚はできませんでしたが、この世のどこかに落ちているはずでございます」

王女と呼ばれた少女が答える前に、非難がましい視線を送る男から、嘲りと怒りの言葉が投げつけられる。
「さんざんに勇者召喚などと期待させておいて、このざまか、宮廷

魔術師」

さらに言い募ろうとする男を、労わるような視線の男が遮る。

「残念ではありますが、いまだ誰も完成させていない、いや、思いつきもしなかったことです。頭ごなしに貶めることはありますまい、騎士団長？」

「そうはおっしゃるが、宰相。今まで掛けた金と時間が虚しく消えたのですぞ。金はまた民から集めればすみますが、時間は取り戻せぬのです。次は捜索に金と時間をつぎ込むと？こうしている間にも……」

騎士団長と呼ばれた男は宮廷魔術師と呼んだ男にさらに言い募ろうとするが、少女の言葉がそれを止めた。

「騎士団長、宰相、おやめなさい。騎士団長が言うとおり、今は時間がありません。失敗を責めているときではないのです。即刻勇者の捜索隊を。そして今後どうすれば良いのか、対応を考えましょう」

「はっ。申し訳ございません、王女様。捜索隊をすぐにでも」

「では、軍議の召集を、すぐ」

騎士団長と宰相が答え、王女が頷き部屋を出る。

宮廷魔術師から伝えられた情報を元に、捜索隊は国内はいうに及ばず、大陸全土に散った。

が、勇者の消息は伝えられないまま、１０年の月日が流れた。

彼には８歳以前の記憶が無かった。

正確には８歳くらい、ということで、いつ生まれたのかが判らないため、外見からそう判断されていた。

気付いたときには、小さな村の前に立っていた。
名前も覚えていない。家族の顔も、言葉も解らない。
不安という気持ちだけを抱えて、彼は立ち尽くしていた。
幸いなことに、通りすがった三人家族に拾われた。

両親は何事も無かったかのように通り過ぎようとしたが、彼より少し年上に見えた少女は、子供特有の正義感から彼を放っては置けなかった。
両親は、捨て置くように少女に言い渡し、強引に彼女の手を引いて家路についた。

その理由は言わなくても解るだろう。
生活が決して楽ではないこと、彼の素性がまったく解らない上、言葉すら解さないこと、他にもいろいろあるが、それが主な理由だった。

しかし、と両親は思う。
この時代、親の庇護下にあってすら人買いに攫われ、奴隷として売買される子供は後を絶たなかった。
その家族が住む村でも借金や食料不足といった理由から売り払われた子供や、遊びに出たまま帰らなかった子供は、一人や二人ではない。

そして彼は、それなりに整った顔立ちをしていた。
　このまま見捨てれば、彼を待つ運命は大して選択肢の多いものではない。
誰にも省みられず餓死するか、森に迷い込み、そこに住む獣や魔物に跡形も無く喰い尽くされるか、奴隷として売られるか、だ。

奴隷として売られた場合、過酷な労働に就けるならまだましだろ

う。

男色の餌食にされ、飽きれば転売。幾年かのうちに正気を失い狂死するだけだ。

言葉すら解さないのであれば、尚のこと生きていられる時間は少ないことは火を見るよりは明らかだ。

まだ世間を知らない少女だが、このまま放っておけば彼が死んでしまうことはなんとなく解った。

彼女の両親は、しょうがないことだとは理解できていたが、彼女に負い目は追わせたくないとも考えていた。

ほんのちょっとした偶然で、少年は家族を得ることになった。

両親はふたりを分け隔てなく愛し、姉弟として育てた。

家族や村人から言葉や一般常識、その村に駐屯する騎士団から身を守る術を学び、１０年過ごすうちに彼はどこにでもいる普通の少年として育っていた。

背中に文字のような痣があることと、時折誰も思いもつかなかった方法で暮らしを良くする方法を言い出すこと、夜中に突然姿を消すことを除いて。

第2話

春がようやく来た街道は、汗ばむほどの陽気だった。

二つの影が並んで進む脇を馬車が通り過ぎ、早足の旅人が追い抜く。

片方の影はのんびりと歩き、もう片方はじゃれ付くようにまとわりつきながら歩いている。

少年と少女というには少しばかり歳を取っているが、男性と女性というにはまだ若い。

「もうちょっと急ごうよ、ルティ」

刃渡り３０ｃｍの短刀を腰に佩いた身長１７５ｃｍほどの少年が、少女にまとわりつくように言い募る。

服装は周囲の人から浮かない程度に一般的なデザインで、薄茶色に統一されていた。

くすんだモスグリーンのマントとフードが一体型の外套を羽織り、フードは後ろに撥ねている。

マッチョではないが、充分筋肉が発達した身体で俊敏さが伺えた。

顔立ちはあどけなさが残るが、短く刈り込まれた灰色の髪と切れ長の目が精悍さを醸し出し、年上の女性からは可愛がられるタイプと言って差し支えないだろう。

「うっさいわね、アービィ。

せっかくいい気持ちで歩いてんだから、あんたも少しのんびりしなさいよ。

それから、まとわりつくな。犬」

姉がやんちゃな弟を窘めるような口調で言う少女は、身長１６０ｃｍほど。刃渡り７０ｃｍほどの一般的なブロードソードを背負い、

スレンダーな体型を軽量タイプの革鎧で固めている。鎧の上から少年とおそろいの外套を羽織り、フードを撥ねている。
年の割りにはしっかりした顔立ちで、芯の強さがうかがい知れる。美人と言えるが肩まで伸ばした栗色の髪は、年相応の可愛らしさも引き立たせていた。

「犬って言うな、犬って」
アービィと呼ばれた少年が、ふてくされるような口調で答える。
ルティと呼ばれた少女が、うんざりしたように応じた。
「はい、はい、狼だもんね、アンタは」
そのせいでここを歩いてるってことを忘れるんじゃないわよ、とルティが続ける。

「う～、反省してるってばさ。
うっかりしてただけじゃん、これからは気をつけるよ」
本気で済まなそうにしているアービィに、ルティは追い討ちを掛けた。
「反省って、何回目よっ。朝寝ぼけて出てきて、宿屋を阿鼻叫喚に叩き込んで。
満月と新月の度にやらかしてるじゃないのっ」

「月に二回じゃないかっ」
アービィが地雷を盛大に踏んだ。
「そんだけやってりゃ……充分すぎよっ」
自主的な出入り禁止の村を幾つ作るつもり、と言いながらアービィの耳を引っ張る。
「やめて～、ルティっ。ごめんなさいっっ。
伸びる……耳伸びるっ！！」

「だいたいね、二尋近い狼が食堂に出てきたら、誰だって驚くでし

ょうがっ！！」
力いっぱいアービィの頭を叩きながらルティが怒鳴る。
「ちょっ、今ここで、それを大声で言う？僕がやったことと大差ないんじゃ？」
アービィの反撃にルティは口を押さえて辺りを見回し、人が聞いていないことを確認して少々残念な胸を撫で下ろす。

「ちょっと、うっかり、しただけじゃないの。
あんたに言われたくないわ」
「撫で下ろしやすそうな胸でよかったね」
再度、アービィは地雷に両足で飛び乗った。

「や～か～ま～し～い～っ」
アービィの後頭部にルティの脚が飛び、アービィは道端に昏倒した。
「ちょっと休憩。休憩よ」

ルティは伸びてるアービィを道端に蹴り転がし、側にある石に腰を下ろす。
本当になんでこんなことになったのか、二人が育った村での出来事を思い返していた。

アービィは拾われてから数年後、満月と新月の日の夜中になると姿を消すようになった。
両親は昼間の仕事の疲れからぐっすりと眠っており気付くことは無かったが、ルティは何度か隣の部屋のドアが開く音に気付いていた。

朝になるとアービイはベッドにいるのだが、そんな朝は戸口の前

に何かしらの獲物が転がっていた。
だいたいは兎であったり、鴨等の野鳥であったりだったが、年を追うごとに大型の獲物が増えていった。

最初は気味悪がっていた両親だが、獲物が特に腐敗している様子もなく、暮らし向きも楽ではないため、そんな落し物を楽しみにしている風もあった。
精霊の贈り物と教会の神父が言い出したことで、村人たちもたまに回ってくるお裾分けや、自分の家の戸口前の落し物を楽しみにしていた。

ある夜、何かが投げ出される音に目を覚ましたルティが窓から家の前を見ると、巨大な狼がふたまわりほど小さな狼をくわえて来て、家の前に投げ出し森に帰っていくところだった。
しばらく痙攣していた小さな狼は、小さく鳴いてから身を起こすと裏の井戸の方に歩いて行った。

それを追ったルティが裏に回ると、そこでは擦り傷や切り傷を体中に作って顔を涙と鼻水でぐしょぐしょにしたアービィが水を浴びていた。
月明かりの中、アービィが素っ裸であることより血まみれの姿に驚いたルティは、とっさに声だけは出してはいけないと判断すると部屋に取って返しシーツを抱えてきた。
そのままアービィをシーツで包み、家に引きずり込む。

両親に気付かれないように手当てを済ませ、部屋に叩き込んでドアを閉め、自分も部屋に入り朝を待った。
翌朝、ルティがアービィの様子を見がてら起こしに行くと、アービィの傷は既に治っており、何事も無かったような一日が始まった。

それ以降、獲物が転がっている回数は減り、狼が引きずられてくることが増えた。
ルティの中で疑問が膨らみ、確信に代わった。
ある満月の夜、ルティはアービィが出て行った後、井戸の前で待つことにした。
何があっても驚かない。何があっても受け入れる。そう決心して。
数刻後、何かを引きずる音の後、よろぼうような足音がして、狼が姿を現した。
驚いたように切れ長の目を見開き、ルティを見つめた狼はがっくりとうなだれ、背を向け歩き出した。

アービィは人狼の子供だったのだ。

魔獣を村に置いておく訳には行かないという常識と、姉弟として育った情がせめぎ合う。
ルティの中で情が常識を秒殺した瞬間、ルティはアービィに飛びつき、抱きしめていた。
しなやかな毛皮に顔を埋め、ルティは泣いていた。

行かないで欲しい。この秘密は二人で墓まで持っていこう。何も聞かないし、何も心配は要らないとルティは泣いてアービィを朝まで抱きしめていた。

朝日が昇る前、世界が明るくなり始めるとゆっくりと獣化が解け、ルティがよく知るアービィの姿に戻り、ふたりとも涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔を井戸の水で洗い、それぞれの部屋に帰った。
そして、そのまま平穏な日々が続いていくはずだったし、そう信じていた。

半年前までは。

その日、騎士団の駐屯地は慌しい喧騒に包まれていた。

隣村が野盗団と魔獣に襲われたという情報が入っていた。

それぞれが別々の意思で村を襲うことは珍しくなかったが、生き残った人の話では、あきらかに野盗団は魔獣を従えていたという。

力任せの野党団や、迷い込んだ魔獣など、騎士団の敵ではない。

しかし、魔獣を従えさせることができる野盗団となると、それなりの統率が取れ、魔術師の存在も疑われる。

騎士団の人数は決して多くなく、それぞれに連携を取られては村への突入を防げないかもしれない。

ならば取り得る作戦の選択肢は、多くない。

王宮への増援依頼。とても間に合わない。

敵拠点への先制攻撃。拠点は不明。

敵を懐深く引きずり込み包囲殲滅。理想ではあるが如何せんこちらの数が少ない。

村の入り口を固め、水際で撃退するしかない。

村の周囲に垣を築き、村人の避難路はひとつ確保し、防衛の拠点を構築する。

村の男手が陣の構築に駆りだされ、女手は後方で支援作業を行う。

アービィもルティも、それぞれができる作業に汗を流していた。

垣や陣の構築は野盗団の襲撃の前に完了し、村の士気は高まっていた。

そして何事もないまま、隣村が襲われてから三ヶ月の時間が過ぎた。
防備を固めた村を強襲することの愚を悟った野盗団は、村人の士気が下がるときを待っていた。

村の近くまで斥候を出し、軽く挑発し、すぐ逃げる。
村人たちの神経を、紙やすりで削るような行動を繰り返していた。

深夜。
そろそろ夜明けも近くなった頃。
もっとも人々の集中力が薄くなる時間帯。
風切音が垣を越えたと思った瞬間、見張りの騎士の首が掻き消えた。
同時に村の入り口に炎の玉が炸裂し、不運な騎士を吹き飛ばす。
退路のはずだった道からは手に剣やメイス、弓矢を携えた野盗が雪崩れ込む。

村の中心に降り立った魔獣は、駐屯地を襲おうと走り出したとたん、何かにぶつかるように足を止めた。

そこには2mを遥かに越えた狼が立ち塞がっていた。

一瞬のにらみ合いの後、魔獣に飛び掛り、喉を噛み裂いた狼は、雪崩れ込む野盗の群れの中に飛び込むと、手近にいた男からその喉を噛み裂き始めた。
野盗団に恐慌が起こり、村を蹂躙するはずだった戦いは、自分が生き残るための戦いへと変わった。
剣が、メイスが、矢が狼に襲い掛かるが、毛皮は全てを弾き返し、片っ端から野盗を噛み殺していく。

もとは人間だったとは思えない肉塊が転がり、狼以外動くものがいなくなった。
村の入り口に跳んだ狼の姿を見た魔術師は、移転魔術でからくも脱出に成功。騎士団は数名の犠牲で村の防衛に成功した。

村の入り口に仁王立ちになった狼は、気が抜けたのか振り向いた瞬間獣化を解いてしまった。
あっけに取られる村人や騎士団とアービィが向かい合う。
夜が明け、アービィとルティは村を出た。
それが三ヶ月前、ふたりが18歳になってすぐのことだった。

「確かに、村にいて良いって村長も、騎士団も、神父様も言ってくれたんだけどね……」
村の中だけの話であれば、それでもよかった。
が、逃げた魔術師からどんな噂が出るか判らない。
魔獣の住む村。そのような噂が流れては、村はやっていけない。

他の村や町からの迫害、不売、不買。
人的交流の拒絶、騎士団の引き上げ、いや騎士団による討伐。
教会による悪魔指定、聖騎士団による討伐。
数え切れない不利益が考えられる。

アービィは、自分が殺されたことにして村を出た。
放っておけなかったルティは、狼に殺されたことにして村を出た。
両親は悲しんだが、村の利益を優先するべきというアービィとルティの言葉に、泣く泣く見送ってくれた。

魔獣を育てたという罪は、娘を殺されたうえ、アービィが人狼であることに騎士団や教会すら気づかなかったということで不問。形

だけの村八分を演じることで誤魔化すことにした。

当面の二人の目標は、四つの国にそれぞれひとつずつある精霊神殿に赴き、全ての魔法を習得すること。

人狼が人として暮らせる場所を探すことが最重要ではあるが、他人に旅の目的を聞かれたときは呪文の習得ということにしている。

彼らの育ったフォーミット村があるインダミトの国には、水の精霊を祭る神殿がある。

神殿はフォーミットから歩いて三十日ほどの距離にあるフュリアの町にあり、あと数日のところまできていた。

村を出るときに両親や村人、騎士団からもらった餞別の路銀はとっくに尽き果て、彼らは途中から冒険者ギルドに登録し、カネを稼ぎながら旅を続けている。

このため、途中で旅が停滞することもあり、三ヶ月も掛かってしまっている。

水の神殿で精霊と契約後、地、火、風の神殿に行くことになるが、次はどこにするかは全くの白紙だ。

「いいかげん、起きなさいよ」

ルティに蹴り飛ばされ、アービィは渋々身体を起こす。

「まったく、ルティは手が早いんだから」

「アンタがいけないんでしょ。

何のために村を捨てたと思ってんのよ。

途中途中で狼騒ぎ起こしてたら疑われるじゃない」

あまりにももっともなルティの言葉にアービィは返す言葉も無くしょぼくれる。

「ま、いいわ。

まだ誰かさんが獣化してるかなんて、誰もそんな発想は無いんだ

から」

頼むから神殿の町で獣化だけはしないでよね、と念を押して、ふたりは歩き始めた。

第3話

フュリアの町に着いたふたりは、さっそく神殿に赴き、精霊との契約を済ませる。

ルティは白呪文を、アービィは黒呪文を選んだ。

人狼のアービィがなぜ精霊と契約できたかというと、精霊にはそもそも善悪の概念が無い。

精霊を裏切らないという契約さえすれば、人であろうが魔物や悪魔であろうが、その魔法を使うことができるようになる。

呪文は精神力を源とし、その消費度からレベル1から4に分類され、精霊との契約完了時に全ての呪文が意識下に埋め込まれる。

呪文を使用するたびに、消費された精神力は強靭になり、高いレベルの呪文が使えるようになっていく。

呪文に耐えうる精神力がついたとき、意識下から上位の呪文が浮かび上がり使用可能となる。

筋肉に負荷をかけ、壊れた筋繊維が修復されると壊れる前より強靭になっているという、筋力トレーニングと同じような概念であり、当然成長には個人差が出てくる。

各呪文レベルには、使用者の精神を保護するための使用制限があり、どのレベルも一日に使える回数は１０回までとなっている。この回数は、初心者では3回であるが、精神力がつくに従い１０回まで増えていく。

充分な睡眠か、触媒と回復薬を併用することで、その時点における最大使用回数まで回復することができる。触媒なしでは、端数を切り捨てた最大回数の半分までが限度だ。

現在、ルティが使用可能な呪文は、水の白魔法レベル1の体力を回復できる『回復』が一日に3回。アービィが使用可能な呪文は、水の黒魔法レベル1の水流を敵にぶつける『水流』が一日に3回だ。

今後、他の精霊と契約すれば、使用可能な呪文のバリエーションは増えるが、各レベルの使用回数が増えるわけではない。

バリエーションが増える代わりに、適材適所の使い方を考える必要があった。

一度白呪文を選んだものは、途中で黒呪文を習得することはできない。ごくごく一部の例外、桁外れの精神力を持つ者や、魔装品による補助が無ければ、一生を通して片方の属性しか習得できない。

精霊との契約を済ませたふたりは、目抜き通りに戻り宿を探した。さすがに神殿の町の目抜き通りにある宿屋は、ふたりには贅沢すぎた。懐具合と相談しながらさんざん歩き回って、裏通りにある木賃宿を選んで荷物を置いた。豊富な資金があるわけではないので、安宿、相部屋が基本だ。

「さて、改めて言っておくけど。
夜中に襲い掛かったら命は無いものと思ってね」

ルティが言う。

「はい、はい、まだ死にたくないですからね～」

荷物を片付けながら、気のない返事をするアービィ。

彼はそこまで命知らずではない。

実際、人の状態であれば普通に性交は可能なアービィだが、興奮状態では獣化しやすいため性交などもっての外だ。

ルティもアービィが嫌いなわけではなく、如何に姉弟として育ったとはいえ血は繋がっていないし、男女としての意識もないわけではない。

今までにも幾度かいい雰囲気になったことはあるのだが、後一歩、キス寸前で獣化してしまうアービィには気の無い振りをすることにしている。精神力が弱いんだから、バカ。『はい』は一回でいいの。

呪文の習得は、アービィの精神力を育てることも目的のひとつであり、それは獣化の完全コントールに繋がる。

ひいてはふたりが安心して暮らしていける、ということにも繋がるのだ。

「とりあえず、なんか食べに行こうよ、ルティ」

この腹減らしが、と吐き捨てるように言いながら、ルティはアービィと共に部屋を出た。

人の気も知らないで、と口の中だけでルティは呟いた。

宿から程近い酒場で腹を満たしたふたりは、ゆっくりとエールを傾けながら今後の予定について相談していた。

「とりあえず、回復呪文を先に修めたほうがいいと思うのよ。毒やらパラライズやら、呪いやらのね。

だから火の神殿に行きたいと思うんだけど」

「僕は何でもいいんだけどさ、回復もいいけど、防御があったほうが良くない？

地の神殿行ってから火でもいいと思うんだ。

補助の呪文は最後でいいかな。風の神殿は一番後だね」

アービィはルティの意見を尊重するつもりだが、言われるがままになるのも癪なので、敢えて異を唱えてみる。

「そうね、その方がアンタが怪我しなくて済むかもね。そうしようか？」

「ど・ど・ど・ど・どうし、た、の……？」

ルティが意見を曲げるなど、今まで数えるほどしかない。

「だって、どうせアンタは呪文なんか使わずに肉弾戦でしょ？」
まぁ、そうだけどさ、と言いながらアービィはエールをあおり、でも、と言う。
「僕は傷つかないよ？」
獣化した状態のアービィを傷つけられるのは、銀の武器だけである。銀は武器にするには致命的に硬度が低いため実用性が無いうえ、貨幣や装飾品としての用途がほとんどであることから戦場に銀製の武器が出てくることはまずない。事実上アービィを傷つけることは不可能と言える。

攻撃を受けた後、すぐに獣化を解くと人の身体には傷が残るが、獣化している時間が長ければ傷は残らず、初めてルティがアービィの正体を知ったときのように、人の姿であっても傷の治りは異常に早い。
「アンタ、町の喧嘩にまで獣化するつもり？」

そんなことしたら、あっという間に通報され、騎士団が飛んでくる。
騎士団程度に後れを取るとは思えないが、それはアービィひとりならと言うことだ。
二人でいるときに獣化してしまったら、ルティは魔獣使いとして認識されてしまう。
その際ルティを守りながら逃げ切れるかということや、ルティを捨てて逃げられるかと言われたら、それは無理だ。

ルティひとりでは、騎士団を敵に回して生き残れるとは思えない。
その後、魔獣使いとして全世界を敵に回した女の子が一人で生きていけるかと問われれば、それも無理だと言わざるを得ない。

何よりも喧嘩をするような事態を招かないことが最優先ではあるが、この世界ではそうも言っていられない。獣化しなければアービィの皮膚は、普通の人よりちょっと丈夫、と言った程度でしかない。

「う～ん、でもさ、傷ついたとしても、僕は毒も麻痺も呪いもしばらくすれば中和できるし。

やっぱり……ルティは中和なんて無理だもんね、そっち先だね」

「判れば、よろしい」

ルティは自分の言ったとおりに方針が決まり、満足してエールをあおる。しばらくしてからってことは少しは効いちゃうって事でしょ、それが心配なのよ、バカ。

「じゃあ、方針も決まったことだし。

路銀稼ぎにいきますか、オネーサマ」

「気持ち悪いわね、オトートギミ」

勘定を済ませ、店員にギルドの場所を聞いて店を出る。

商店のほとんどは既に閉まり、酒場と娼館くらいしか営業していない街の中で、ギルドの事務所はすぐに見つかった。

依頼が貼ってある掲示板から自分たちに見合う仕事を探し、カウンターで手続きをする。

請け負う仕事を指定し、名前を登録する。

表示されている報酬の一割がギルドの仲介料で、これがギルドの収入となる。

仲介料は先払いで、失敗しても払い戻しは無い。

基本的に成功報酬で、必要経費は認められない。

準備に資金が必要な仕事は、報酬の一部、または全額が先に支払われる。

もちろん仕事が完遂できなければ、全額返金だ。死んでいなければ、の話だが。

どんな仕事を請けても自己責任である。

極端なことを言えば、今日登録したばかりの駆け出しが、ドラゴン討伐の仕事を一人で請けても良い。

仕事を見極める目も重要であり、自分の実力を間違いなく把握することも重要だ。

返り討ちに遭って死んだところで、何の保障もない死に損だからである。

生きて戻ったところで、討伐の証拠品をギルドに提出できなければ失敗とみなされ、報酬の5倍の違約金を取られる。

払わずに逃げたところで、回状が大陸全土に回るため、二度と依頼を受けられなくなるか、結局は違約金を支払う羽目になるのだ。

この日ふたりが請けた仕事は、町から二日の行程にあるエクゼスの森にある泉に住み着いた大蛇の討伐だ。

この泉は森に暮らす獣の憩いの場でもあり、旅人たちの重要な休息場所でもある。

魔獣が住み着いて以来、森から獣が姿を消し、旅人や猟師が泉に近寄ることができず、交易や食料の調達に不都合が出ている。

期限は特に切られておらず、今まで数組のパーティが逃げ帰ってきていることから、それなりに困難な仕事と言える。

森の中であればアービィが獣化しても問題は無いだろうと言うことから、この仕事を請けたのだ。

「明日、情報収集と物資の調達。
夜のうちに町を出て途中は野営しよう」
「そうねー、宿代ももったいないし……金が無いとつらいわぁ」
嘆くルティをアービィが宥める。
「まぁ、そう言わないで。今回の報酬は金貨1枚だよ。
それだけあればしばらく保つって」
「そうね、仲介料を払っても銀貨９０枚だし、なんとかなりそうね。
帰ってきたら木賃宿ともおさらばよっ」

大陸の四国家は共通の貨幣を用いている。
銅貨１００枚で銀貨1枚。銀貨１００枚で金貨1枚の交換レートだ。
金貨一枚あれば4人家族三か月楽に暮らせる。
一泊二食付きの標準的な宿代が、銀貨1枚。
町で働く人の昼食代が銅貨5枚から１０枚といったところだ。
（銅貨1枚が日本円で１００円、銀貨1枚が１０００円、金貨は１００万円か）

「じゃあ、前祝に、酒とつまみ買って行こうよ、ルティ」
「ちょっと良いお酒、買っちゃおうか」
まだ開いていた商店で酒とつまみを仕入れたふたりは、いそいそと宿に戻っていった。

案の定、翌日は昼過ぎまで二日酔いで動けなかったふたりは、夕方になるなり酒場で周囲の旅人たちを巻き込んで飲んだくれていた。
情報収集という名目で。

第４話

ギルドから仕事を請け負ってから、三日が過ぎた。

懲りないふたりは三日連続の二日酔いで、魔獣討伐への出発が遅れていた。

「ルティ、今日は飲んじゃだめだよ。
いい加減物資を買い込まないと、お金が、ね」

おずおずと言い出すアービィだが、ほぼ半々の量で飲み食いしているため、あまり偉そうなことはいえない。

「う～～、頭、痛い～。
気持ち悪い～。
お腹も痛い～。
水～」

ルティはシーツにくるまったまま、年頃の女の子とは思えない言動を繰り返すだけだ。

「僕だって、頭痛いし、気持ち悪いし……」

ぶつくさ言いながらも水を差し出すアービィ。

「早く頂戴～」

ベッドに身を起こし、アービィから受け取った一気に水をあおり、ルティは一息つく。

「やっぱりエールがいい～」

一言、言うないやなシーツを被って丸くなり、動かなくなってしまった。

アービィは、溜息をつきながら部屋を出て、携帯食料や水、回復薬、触媒等を買い込みに町へ出た。

宿から歩いて１０分ほどの目抜き通りには、さまざまな店が軒を連ねている。

個人で営業している店は、それぞれ扱う品が生鮮食品であったり、保存食、武器防具、魔装品、日用雑貨と専門に分かれていた。

武器や防具、魔装品は商店が扱っているものもあれば、職人や工房直営の店もある。

どちらかといえば、商店にあるものは大量生産の規格品であり、直営店にあるものは高級品といえた。もちろんオーダーメイドの製品もある。

然程明確ではないが店にも格があり、一般向け、プロ向け、貴族向けなどいろいろだ。

この他、ギルドの店もあり、少々割高だが詳しいアドバイス付きなので、それを利用する駆け出しの冒険者は多い。

割高な理由は、特定の仕入先を決めることはギルド御用達の看板ができてしまうため、生産者から直にではなく、町中の各商店から順番に仕入れているからだ。

商品のクオリティは平均的だが、他の店で売っている商品についても性能差やメリット、デメリットを教えてくれる。

営利が第一の目的ではないので、ぼったくられることもなく、交渉の必要が無いため安心して買い物ができるという利点も大きい。

アービィは、往復六日分、探索に予備を含めて三日分、計九日分の携帯食料と、回復薬を十個、投擲にも使えるナイフを五本買い込んだ。

食料は干し肉とパン、野菜の瓶詰めが一日分ずつひと包みになったレーションと呼ばれるもので、一日分が銅貨五十枚だ。質より量が優先され、腹さえ満たせれば良いというレベルで、味は期待できない。

回復薬は、体力を回復できるもので、一個が銅貨十枚。ナイフは

鋳造の大量生産品で、一本銅貨五十枚だ。
店を出た後、買い忘れに気付き、慌てて店に戻る。
「すいませ～ん、ちょっと今買った荷物預かってもらえますか～？」
会計カウンターのお姉さんに荷物を預かってもらう。万引きと間違えられないための処置だ。
「ひょっとして、呪文使えるようになったばかりかな？回復セットの説明は要る？」
カウンターのお姉さんに言われ、呪文の使用回数を回復する回復薬と触媒について説明を受け、回復セットを七個購入する。回復セットは、銅貨八十枚だ。

アービィは基本的に武器を必要としないし、ルティに新しい武器を買うほど懐は暖かくない。
ルティの防具は充実させたいところだが、当人が二日酔いで轟沈している状態では、何を買っていいのかも解らない。
アービィは武器防具屋を素通りし、生鮮食品を扱う店で保存の利く野菜類を買った。
その後、いくつかの店を回って酒を一瓶、安い干し肉を少量買い足し、宿に戻る。
途中、ギルドに寄って、明日の早朝に討伐に向かうと告げた。

別段、期限を切られている訳ではないので、討伐に行くと宣言する必要はまったく無いのだが、そうでもしないとルティが今夜も飲んだくれてしまいそうだし、そうなったら自分が巻き込まれるのは火を見るより明らかだからだった。

まだ陽が高いうちに宿に戻ったアービィは、水浴びだけはしてきたらしいルティに酒瓶を渡す。
「さっさと飲んで、今日は寝ちゃおうよ。

明日、夜が明けたら、すぐに出よう」
テーブルに干し肉とピクルスを並べ、グラスを二つ置く。
「ちょっと宿代払って、水浴びしてくるから、ルティは先に飲んでていいよ」
すぐに瓶の封を切ったルティを置いて、アービィは部屋を出た。

「すいませ～ん、宿代払っちゃいたいんですけど～」
アービィはカウンターに声を掛け、女将さんが出てくるのを待つ。

アービィとしては、ルティに支払いを任せ、その間に水浴びに行っておきたかったのだが、動く気配の無いルティに頼むことを諦めていた。
「はいはい、あれ、これから出るのかい？」

妙齢の女性がカウンターに立ち、アービィに問いかける。
「いやいや、明日夜明けに出るんで、先に払っちゃおうかと思いまして」
この宿の看板娘でもある女将の一人娘に言いながら、懐から貨幣を取り出す。
「そうなんだ、ちょっと待ってね。一晩銅貨五十枚で、四日分だから、銀貨二枚ね」
言われた枚数の銀貨をカウンターに並べて、アービィは世話になった礼を言う。
「明日は皆さんが起きる前に出ちゃいますから。お世話になりました」
「じゃあ、部屋はそのままでいいから。
また戻ってくるんでしょ？　置いておく物があれば預かっとくよ」

どこの宿屋でもやっているサービスだが、一応それに対しても礼を言う。

「ありがとうございます。
たいして荷物ないし、全部必要なものなんで、持って行きますよ」
「そう、こっちは手間が掛からないだけだからいいけどね。
じゃ、またのお越しをお待ちしてるわよ。
気をつけてね」
あと、これはサービスよ、お連れさんがいっぱいお酒買ってくれたからね、と言いながら娘が酒瓶をアービィに渡す。
いつの間に、と思いながら酒瓶を受け取り、礼を言った後、アービィは水浴びに向かった。

水浴びの後、部屋に戻ると、早々にルティは出来上がりかけていた。
半分諦めの気持ちで椅子に腰掛け、アービィもグラスを取る。
「ルティ、明日は何が何でも行くからね」
「な～ん～で～。
いいじゃ～ん、気分次第で～」
既に呑んだくれる気満々のルティに、アービィは死刑宣告のような重々しさで言葉を投げつける。
「お金、もう無いからね。
ルティだけ牢屋に泊まるの？」

実は、まだお金はあると思っていたが、夜中にアービィが寝ている間にルティは財布からお金を抜き取り、それで宿から酒を買って飲んでいたのだ。節約すればあと二、三日くらいは泊まれるはずだったが、きれいさっぱりルティが呑んでしまっていた。

とりあえず、これまで収集した情報を整理する。
泉に住み着いた大蛇は、全長が１５ｍを超えている。太さも大人がふたりで抱えてもまだ足りないと言われているところから、尻尾の一撃はかなりのものだろう。

確認されたわけではないが、なんらかの妖術も使うらしい。
魔封じのアイテムを持っているわけではないので、妖術を使われる前に速攻で倒すしかない。

できる限り早く到着し、それぞれの呪文回復に努め、体力精神力共に余裕のある状態で戦いを挑むしかないと言うことに落ち着いた。
そうと決まればさっさと呑んで、早く寝るだけだ。
アービィは干し肉を齧ると、本格的に呑み始めた。
まだ陽は高く、窓の外の町は賑やかだった。

第5話

朝靄の煙る中、フュリアの町の入り口に二つの影があった。

多少ふらつく脚で歩き始めたアービィとルティは、エクゼスの森に向かう。

「だ～か～ら～、呑み過ぎなんだってば、ルティは～」

「やめて～、話しかけないで。頭がガンガンする～」

荷物のほとんどを担ぐアービィがルティに文句を言うが、ルティは耳を塞いだまま歩いている。

街道は早春の冷え込んだ空気が漂い、人影はほとんど無い。陽が昇れば王都に向かう街道へ出る人も増え、賑やかになるはずだ。

元はと言えばエクゼスの森を通ったほうが王都には早道なのだが、森の中に大きな道を敷くことはできなかったため、主要街道は一度東に迂回する。

土木工事の技術が発達していないこともあるが、森は重要な食料調達の場でもあり、切り開いてしまうことのデメリットが多いためである。

フュリアの町を出た日の翌日の昼過ぎ、途中食事の間だけの休憩で、予定より一日早くエクゼスの森への道と街道との分岐点に着いた。

調べた話では、ここから森に入り、二時間ほど進んだところに泉への細道があり、さらに一時間で泉に着くと言う。

ルティが習得したばかりの呪文を使い、疲労を回復しながらの行程だったので、なんとか一日早く着くことができたのだ。

ここでしっかりと睡眠を取り、ルティの呪文使用回数を回復する

必要がある。
先にアービィが仮眠を取り、その後ルティが熟睡できるようにアービィが夜通しの見張りに立つ。
そして翌早朝にアービィが仮眠し、昼前には泉に着くように出立する予定だ。

手早く野営の準備を完了させ、干し肉を焚き火で炙り、一切れ齧ったアービィは荷物を確認する。
案の定見つかった酒瓶をしっかり抱え込み、ルティの抗議に耳を貸さず焚き火の側に転がった。
しばらくしてアービィの寝息が聞こえ始め、ルティは酒瓶の奪取を諦めた。

ルティはアービィの寝顔を見ながら、考え事に沈む。
なぜ、この人狼はやさしいんだろう。それ以前に人の側に立っているんだろう。
村を襲った野盗と魔獣の群れから村人を守った。人狼が人の味方をしたなどという話は、これまでルティは聞いたことが無い。

そもそも人狼とは、魔獣の中でも最強の部類に入る。
経験を積んだ人狼は、ドラゴンすら倒せると言う。
それだけではない。人狼は最強というだけでなく、最凶最悪であるとも言われている。
凶暴性、冷酷性、不死性、呪文への耐性、回復力、その膂力、つまり純粋な力と、どれを取っても「人」が抗える魔獣ではない。
この少年のどこにそんな力が隠されているのか、不思議としか思えない。

人里離れた山奥に住み、人との交流は持たず、人の前に姿を現すときには殺戮の嵐が吹き荒れる。

ただ強いだけでなく、人としての知力も兼ね備えている。悪魔の化身とも呼ばれる所以だ。
人化した際にもその性質は引き継がれ、人として町の生活に馴染むことは無い。
町に住む人狼の目的は、エサを効率よく狩るためでしかない。

このやさしい人狼も、村に来る前は人を喰らっていたのだろうか。
村に来た理由は何なのだろう。あたしと逢って以来、まだ人を喰らっていないが、これからどうなるんだろう。
もし、この人狼が、その本性を現したとき、あたしはどうすればいいのか。
止めるのか。いや、止められるのか。
それ以前に、まず、最初に喰われるのはあたしなんだろうか。逃げるのか。逃げられるのか。逃げていいのか。
間違いなくあたしはアービィを愛している。
愛する「ひと」がそうなってしまうとき、あたしはどうすればいいんだろう・・・

考えれば考えるほど、ルティの思考は混乱していく。
普段、あれほど飲んだくれるのは、思考の放棄のためだ。
ずっと、ずっと、一緒にいたい。あなたが人に追われるようなことになって欲しくない。
あたしはあなたを守れるほど武に優れていないし、智に長けてもいない。そんなに強くない。
この旅は、あなたに強くなって獣化を自在に操れるようになって欲しいから、それだじゃない。
あたしが、あなたを守れるような強い人になりたい、から。

陽が沈み、辺りが暗くなってもルティの思考は止まらない。
ふと、見るとアービィの尻から背中に掛けて蠢くものがある。ま

た尻尾が具現化したのね、ぼけ狼。
そういえば、アービィの背中、右の肩甲骨辺りには不思議な痣があった。
文字のような、記号のような。ただの痣じゃない気がする。あれは何なのだろう。

村にいた頃、あなたはいろいろなことを思いついた。頭がいいだけだと思っていたけど。
川から水を引き、家々に水道って言うものを作った。
水浴びしかしなかった村に、お風呂ってものを作った。
水車や風車なんて、おもちゃだと思っていたら、道具として使えることも教えてくれた。
井戸から水を簡単に汲み上げられる道具も作ってくれた。
食べたことも無いような料理やお菓子も作ってくれた。
あれは人狼の知恵なの？

ルティの思考がループに陥った頃、アービィが目を覚ました。
「ルティ、頼むから熟睡してね。
呪文の使用回数が回復しないからね」

珍しくルティは素直に寝た。
考え疲れていた以上に身体も疲れていたのだろう。すぐに寝息が聞こえ始める。
辺りの気配に気を配りながら、アービィはさっきまで見ていた夢を思い返す。

記憶に無い街、人。
その街は石造りの街だった。
二人が育ったフォーミットの村にも、初めて来た大きな町である

フュリアの町でも見たことのない建築様式だった。
見上げるような高い、四角い石造りの建物が隙間無く並び、窓には透明な板がはめ込まれている。

道の両側には数え切れないほどの人が溢れ、中央には考えられないスピードで通り過ぎていく鉄の乗り物が整然とすれ違っていた。
三つの目玉が違う色に光る化け物がウインクするたび、人や乗り物が歩き出し、走り出し、止まる。

街の中には高い橋が川以外のところにも渡され、そこを鉄の乗り物や鉄の大蛇が走る。
空を見上げれば、巨大な鉄の鳥が羽ばたくことなく、耳を劈くような音を立てて翔け抜ける。
もちろん、一ヶ所に留まって見た光景ではない。
その夢の中でアービィは、当然のように鉄の乗り物や、大蛇、鳥に乗っている。

アービィは考え込んでしまった。
記憶の中に無い光景。明らかに違う文明だとわかる。それも今住んでいる世界より、遥かに発達した文明だ。
幾つかの道具や知識、食べ物で、今の世界で作れそうなものや実践できそうなことをやってみた。
夢で見ただけのはずなのに、なぜか元々知っていることのようにできてしまう。

鉄の乗り物や大蛇、鳥も、構造は解る。いや、知っていると言ったほうが良い。しかし、この世界では材料も、部品を加工する技術も、組み上げる技術も、運用する知識や技術も無いことも解る。いや、知っている。
なぜ、知っているのか。

アービィは夢を見るたびに考え込み、混乱していた。

幼い姿の自分が、両親に慈しまれ育てられている。
その姿は今の姿とはまったく違う。黒髪に黒い瞳だ。
同じ年齢の子供たちが、集団で部屋に並んで座り、大人の言うことを聞いている。
解散した後は、思い思いの遊びをしている。
その中に自分の姿を見つけるが、やはり今の姿とは違う。
しかし、それは自分だと思うのだ、いや、判るのだ。

ひょっとしたら、自分はあそこにいたのかもしれない。
いつか、あそこに帰ることになるのだろうか。
懐かしい、暖かい場所。帰れるものなら帰ってみたい。あの世界、少なくともあの周りには、戦争も殺戮も無いことは雰囲気で判る。

でもそれは嫌だ。
愛する「ひと」と別れてまで、行きたくない。一緒にいたい。行くなら一緒に行きたい。
もし、帰ることになったとき、自分はどうすればいいのだろう。
忌み嫌われる人狼を、家族として迎えてくれた愛しい「ひと」。

初めて人を喰らおうとして来た村の前で、やさしく微笑んで僕を連れて行ってくれた君。
両親を説得して、姉として僕を守り、育ててくれた君。

僕が大人の狼に鍛えられ、傷だらけで帰ってくると、何も言わずに手当てしてくれた君。
君がいたから狼たちは、あの村を襲わなかったんだ。
でも、僕はまだ、君に何の恩返しもしてないよ。

東の空が白むまで、アービィは夢を思い出していた。
口を開けて寝ているルティを揺り起こし、しばらく寝かせてもらうことにする。

そして彼は夢を見た。
見慣れぬ服を着た自分が鏡の前に立ち、後ろを向いた途端に鏡に飲み込まれる夢を。

真っ暗な管の中を滑り落ち、出口が見えた瞬間に滑っていた管が消失し、落ちていく。
気付くと狼の中に立ち尽くし、自分も狼になっている、つまり、それはこの世で最初にある記憶に繋がる夢だった。

第6話

仮眠を交代した時点で、すっかり熟睡したルティは呪文の使用回数が完全回復していた。
さすがに八時間近く徹夜で見張りをしていたアービィは疲れたようで、横になるとすぐに寝息を立て始めた。
また夢を見始めたアービィがうなされ始めると、ルティはアービィの頭を抱え、揃えた自分の膝の上に乗せてやる。

アービィの髪を撫でながら、夜が明け切るのを待つ間、ルティは寝る前に考えていたことを再開しようとするが、やはりうまく纏まらない。
考えることを放棄したルティは、アービィの寝顔を眺めながら、こんな時間がずっと続けばいいと思っていた。
陽がまた昇り、アービィが起きる気配を感じたルティは、気恥ずかしさから慌てて膝を抜いた。

「ごぶっ」
「きゃあっ」
悲鳴が交錯し、頭を抱えてのた打ち回るアービィを、慌てたルティが介抱する。

「優しくとは言わないからさぁ、もうちょっと柔らかく起こすとかしてよ」
「起こしても、起きなかったくせに」
アービィはズキズキする頭を抱えルティに文句を言うが、理不尽な嘘で切り返された。
所詮、言ったところでどうなるものでもないという諦めもあり、アービィはそそくさと野営の後片付けを済ませ、森へと歩き始めた。

エクゼスの森に入り、泉への道を見つけた二人は、周囲を警戒しつつ泉の畔まで来た。
獣の気配はまったく無く、ギルドで聞いた話を裏付ける。
「さて、どうやって大蛇を誘き出すかだけど。ルティ、何か良い手はある？」
「これだけ生き物の気配がないとエサもないはずだから、ここにいるだけで出てくるんじゃない？
じゃ、あたしは隠れて見てるね」
アービィは、不承不承水辺に降り、水面に石を蹴り込む。まったく人を何だと思ってるんだ、あ、エサか……
魚の気配も無い水面にV字の細波が起き、尖った方をこちらに向け、一直線に近寄ってくる。
水面を割って姿を現したのは、予想したとおり優美な姿の大蛇だった。
腰の短刀を抜き放ち、逆手に構えたアービィと大蛇が睨み合う。
どちらにも隙が無いため、動くことができない。
ふと、大蛇の全身から緊張が抜け、それにつられてアービィが構えを解こうとした瞬間、大蛇の姿が景色に溶け始めた。
アービィは近くの大木を背にし、背後から襲われる危険性を消した後、周囲の気配を探る。
大蛇が姿を消した辺りに濃厚な気配を感じると、アービィは水辺に近寄り短刀を構え直す。
再び姿を現した大蛇は、さっきとはすっかり見た目が変わっていた。

美しいとしか良い様のない裸の女性の上半身に、ちょうど臍の辺りから下に蛇の下半身が生えている。
「ラミア……」
アービィは呟くと、ニヤリと笑みを浮かべる。
ラミアは少年が浮かべた笑みを虚勢と取ったか、上半身を揺らし、人間には解らない言語で言葉を紡いだ。
「アービィっ！！　『誘惑』の妖術が来るわよっ！！」
ラミアの意図を悟ったルティが木陰から飛び出し、ラミアに向かってナイフを投擲するが、距離がありすぎたためか、近くの水面に波紋を起こしただけだった。
ルティを意に介さず『誘惑』の呪文を詠唱し、見ているだけのアービィを尻目に完成させる。
アービィに向かって指を差し、動かないアービィに妖術が掛かったことを確信してから、ラミアはルティに向き直る。

「さて、久し振りの獲物ね。
おいしそうな男の子と、食いでのありそうな小娘か。
男の子は後の楽しみに取っといて、あなたから喰ってあげる」
凄艶な笑みを浮かべ、静かにルティに近寄る。
「アービィ……」
ルティはアービィを見たが、惚けたような顔でぼーっと突っ立っているだけだ。

この時点でルティが使える呪文は、『回復』のみ。つまり、攻撃の手段は背負っている剣のみだ。
実際問題としてルティは、それほど剣が得意なわけではない。
村を出る際に、持ち出せる武器がそれしかなかった、と言うのが実情だ。

それでも、ただ喰われるわけには行かない。アービィを守らなけ

れば、という意識が、ルティに剣を握らせた。
不安定な構えでラミアに剣を向け、一気に切り掛かるが、ラミアの動きは素早く、剣は空を切る。
今度こそはと切り返すが、素手で軽く弾かれてしまう。

じりじりと詰め寄られ、闘気を恐怖が上回った瞬間、ルティの腰が抜けた。
へなへなと座り込んでしまったルティに、ラミアが尻尾を巻きつけようとしたその時。

空の盥で岩を叩いたような軽い音が響いた。
ラミアが頭を抱えて蹲る後ろで、ニヤニヤしたアービィが短刀を刃を横にして持ち立っていた。
「へ……？」
ラミアとルティが、同時に間抜けな声を出す。

「なんで……平気なの？」
再度、ハモるラミアとルティ。
「そいつは喰わせねぇ。
それと、後のお楽しみって何なんだよ？」
一瞬にして膨らませた闘気に、ラミアは人狼の影を見て全てを悟った。そりゃ、あんな化け物に妖術が効くわけないわ。
たじろぎながらも逃げられるように構えたまま、虚勢を張りつつラミアは答える。
「女は追い返すことにしてるの。
男は死ぬまで精を搾り取っていたわ」
アービィはうんうんと首肯しながら聞く。
「つまり、だ。
あんなことやこんなこととか・・・？」

ラミアは具体的に言おうかとした瞬間、もうひとつの殺気を感じ、首肯するに留めた。
「ちょっと、話を聞け」
ラミアの肩を抱え、ルティに聞こえないように、耳元でアービィが囁く。
「僕の想像が正しければだけど……。
君は娼館に勤めたらいいと思うんだ。
男の精は絞り放題でお金が貰えて、食べたいものも買い放だ――ぷべっ!!」

皆まで言わせず、先ほどラミアを恐怖させた殺気の元がアービィを張り倒す。
ほぼ同時に、ラミアの尻尾がアービィを打ち据える。
「なんてこと言うのよっ!!」
三度ハモるラミアとルティ。
「だって～、無駄に殺生したくないし～。
あんなこととか、こんなこととかできるなら人化できるんでしょ？だったら需要と供給の関係が成立するんだから、平和な解決策じゃないか～」

再度アービィを張り倒すルティ。キャインキャインいいながら逃げるアービィ。
逃げる機会を失って立ち尽くすラミアが、そこにいた。
「いや、ね、それも一度は考えたのよ、娼館。
でも、見たところ、あれって、好みじゃない男まで相手にしなきゃいけないでしょ？」

「まあ、そうよね。
じゃあ、王都あたりで高級娼婦を目指すなんていかがかしら？」
呆れたルティが提案する。

「あれなら拒否権もあるみたいだもんね～」
いつのまにか側に戻ってきたアービィが同調する。
「そうね、それも、ありか、な。
最近、ここ、誰も来てくれないのよ。
来ても蛇の姿見ただけで逃げちゃうし。
河岸替える潮時なのかもね」

「じゃあ、これで討伐完了ってことでいいのかな？
証拠はどうしましょうか、アービィ？」
ラミアの答えに満足げなルティの問いに、アービィは考え込む。
通常、討伐の証拠は身体の一部だ。
ギルドは、この証拠品を魔装品やその材料として売却し、利益を上げている。
仲介料程度では、旅から旅へと渡り歩き、住所が確定しない冒険者の人頭税までは賄い切れないからだ。

この場合、口八丁で泉からラミアを追い出したわけだから、一応泉の状況復帰という目的は達せられた。
今回は、魔獣の討伐は手段であって目的ではない。
が、いくらギルドに魔獣がいなくなりました、と言ったところで証拠がなければどうしようもないのだ。

ラミア自身がギルドに出向くなど、論外中の論外。町中がパニックになる。
身体を切り取るのも論外だ。偽者を仕立て上げたり、偽物を作るのも、バレたら二人とも牢屋行きだ。
さて、困ったね、とアービィは考え込んでしまった。

「このティアラじゃだめかな？」

ラミアが髪に着けていたティアラを差し出す。
「これが無いと妖術が使えないのよ。
鑑定士が見ればラミアの持ち物ってことくらいは判るはずよ」
「もう、妖術は使わない、ってこと？」
驚いたルティが聞く。
つまり、魔獣としては生きられない。妖術が使えないラミアはそれほど戦闘力が高くない。
今後、どこかで人を襲えば、あっというまに討伐されてしまう。
人化して、町に溶け込むしか生きる術は無いのだ。
「そう、妖術はいらないわ。
魔獣全てが人に害をなそうと思っているわけじゃないもの」

とりあえず、ラミアのティアラを討伐の証拠としてギルドに提出し、依頼を完了させることにして、フュリアの町に帰ることにした。
ラミアは、王都に向かうつもりだが、女一人で旅させるのは危険じゃないかと言い出し、当面一緒に行動することになった。
ルティは反対したが、危険なのはラミア自身ではなく、途中で襲った男のほうじゃないかとアービィに言われ、渋々承知した。あなたに言い寄りそうなのが一番嫌なのよ、気付け、ぼけ狼。

「ところで、名前は、ラミア？」
「そーねー、以前人化していたときには、ティアって名乗ってたわ」
人化してたのかい、というルティの突っ込みを無視して、アービィは自己紹介をした。
「じゃ、よろしくね、ティア。
僕はアービィで、こっちはルティね」

フュリアの町に向かう途中の野営地で、酔い潰れたルティを寝かし、アービィとティアが不寝番の暇潰しに話している。

これからのこと、人との係わり合い。心配の種は尽きないが、人化の経験が皆無ではないティアなら、なんとか暮らしていけるだろう。

娼婦になれとは、あの場の咄嗟の思い付きでしかなく、アービィとしては自分のように人の間に溶け込んで欲しい。

狼の里で感じていた冷たさと、ルティと家族として過ごしていた時期に感じた温かさとの差から、ティアにもそんな温かさを感じ取って欲しいと思っていた。

朝、二日酔いのルティが起き、野営地を引き払って三人が歩き出す。

「あたしね、決めたの」

突然ティアが言い出した。

「王都に行くのも良いんだけど、あなた達に付いて行きたい」

「なんでよ～、あたしは、魔獣使いじゃないんだからっ！！」

ルティが叫ぶ。

「いいじゃない、楽しそうだし」

意に介さないアービィ。彼は純粋に楽しそうだとしか思っていない。

ルティは解っているようね、あたしの狙い。じゃあ、宣戦布告でいいかしら。

「はっきりした態度じゃないと、奪っちゃうからね」

ティアは、ルティを指差し、宣言した後、騒ぐルティを無視してアービィの首に抱きつき、唇を近づける。

もう少しでお互いの唇が触れ合うと言うところで、ティアは目を閉じた。

数瞬の後、ティアの唇に、明らかに唇とは違う冷たい感触が伝わ

る。

目を開けたティアが見たものは、きょとんとした表情でお座りをしている、巨大な狼だった。

第7話

「ねぇ、あなたたちは、この後どうするの？」
ティアに聞かれ、ルティは王都を経由し、火の神殿、地の神殿、風の神殿と巡るつもりだ、と今後の予定を話す。

「ふ～ん、その後は？」
ルティは少し考え、本当の目的を話す。
「アービィが獣化をコントロールできるようにするのが目的なのよ。だから呪文を使うことで精神力を養って欲しいの。で、その後は安心して暮らせる町に落ち着きたいわね」
「じゃ、ルティはアービィと結婚するつもりなの？」

「け・け・け・けっ……こん？
ちょ、いや・・・姉弟よ、あたしたちはっ！！そ・そ・そ……」
一瞬で真っ赤になったルティは、必死に誤魔化そうとするが、ティアはからかってばかりだ。

フュリアの町に戻り、討伐の証拠としてラミアのティアラをギルドに提出し、報酬を受け取って懐が暖かくなった三人は、少し贅沢な宿を取った。
三人相部屋ではなく、アービィは一人、ルティとティアが同部屋になったため、ガールズトークが繰り広げられていた。

「じゃあ、あたしも一緒についていって、アービィと結婚しちゃうってのもありね」
「ラミアと人狼のハーフなど聞いたことは無いっ！！
却下っ！！」
「うるさい小姑だこと」

エクゼスの森からフュリアの町まで来る間、二人の交わす会話からお互い惹かれあっていることは理解できていたが、はっきりと恋愛関係になっていない二人をからかうのが楽しくてしょうがない。
なんだかんだ言って、うまくやっているルティとティアだが、いろいろと火種は絶えなかった。

ティアは、化け物扱いしないでくれた二人に感謝しているが、楽しいことは楽しいのだ。
魔獣として生きていた頃より、格段に楽しい。
かつて人化していたこともあるので世事に困ることは無いが、人をエサとしてしか見ていなかったときと違い、ルティやアービィ以外の人との交流は新鮮だった。
魔獣同士に連帯感など無いため、アービィを特別視することもないし、ギルドで討伐の仕事を請け負うことに抵抗も無い。

「ところでティア、聞きにくいんだけど……食べ物って普通に食べられるの？」
ルティとしては、普通の『人』として付き合いたい。できれば『男の精』を搾り取ることはご遠慮願いたかった。
もう少し年齢を重ね、その辺のことも解ってくれれば、また話は違うのだろうが。
「う～ん、それは平気だし、それだけでも生きていられるけど……男の精は欲しいわね。
そういう種族だし」
「サッキュバスとどう違うのよ？」
今ひとつ違いが分からないルティ。
「あいつらはね、それしか能が無いのよ。
あたしらとは違うわ。

一緒にすんな。
でも精は欲しいわ～」
「搾り取っちゃったら、相手は死んじゃうんじゃないの？
そういうことなら遠慮して欲しいっていうか、やめて欲しいんだけど……
そういえば、精を搾り取るって、どうやるの？」
想像は付くが、一応確認してみる。

「あなたたちと変わらないわよ、することは」
「へ？
変わらないって？」
「えっちよ、えっち」
また真っ赤になるルティ。

「じゃ・じゃ・じゃあ、ここでするってこと？」
「そうね、でもあたしは気にしないわよ」
「あたしが気にする～っ！！」
冗談じゃない、見たくないわよ、と心の中で叫ぶルティ。結局部屋に男を引っ張り込むということなのだが、同じ部屋でして欲しくは無いし、聞いていて気持ちのいい話でもない。

「死にはしないわよ、加減すれば。
いままでは加減する必要も無かったから、死ぬまで搾り取っちゃったけどね。
いいじゃない、お互い気持ちよくなって、あたしはお腹も膨れるんだから」
「別の宿に一部屋取ろうか？」
これが普通の人相手であれば、ふしだらだとか非難のしようもあるが、種族固有の行動とあっては完全否定もできない。

「アービィと同部屋になればいいじゃない、あなたが。
今までだってそうしてきたんでしょ？」
「まぁ、そうといえばそうだけど……」
となりでそんなことはして欲しくない。
「じゃ、あたしがアービィと同部屋になって……」
「嫌だ断る駄目だ絶対駄目却下っ！！」
皆まで言わせず、真っ赤になって怒鳴り散らすルティ。
真っ赤になったのは怒りだけではないと思う。

「そんなら、いいじゃないの、ルティとアービィが同じ部屋で。
あたしはあたしでよろしくやるわよ。
聞こえるようにしてあげようか？
そしたらアービィも獣（ケダモノ）になってくれるかもよ？」
またそこに戻り、炊きつけようとするティア。
「だから、あたしたちは姉弟なんだし……そういうこと……
しようとすると……本物の獣になっちゃうし、あのぼけ狼は……」
後半は心の中で呟くルティだった。

隣の部屋には、なんとなく背筋が寒くなった狼がいた。

「ところで、本当に魔獣討伐に抵抗は無いの？」
強引に話を切り替えるルティ。
「うん、全然ないわ。
別の生き物だもの。
あなたたちだって、魔獣じゃなくても危険な動物や盗賊とかなら
討伐するでしょ？
それと一緒よ」
さらっと答えるティア。
「よかったわ。

お金は湧いてくるわけじゃないし、さすがに面倒は見切れないもの」

ルティの心配は、『精』のことと、魔獣討伐だったので、かなりほっとする。

「二、三日はゆっくり休むけど、すぐにギルドで仕事請けるからね。その前にティアの装備を揃えなきゃね」

ティアは、ラミア本来の姿であればそれなりの攻撃力、防御力ともにあったのだが、ティアラを失った今、姿を変えることはできなくなっていた。

「うん、すごく楽しみなんだ、それ」

「代金は貸しといてあげるからね」

「ま、出世払いの催促なしでお願いするわ」

返す気などまったくないという風でティアが答える。

ティアラがないとラミアは妖術も使えなくなるため、水の神殿で精霊と契約し、白か黒どちらかの呪文を使えるようにしておきたい。

呪文に頼らない力任せの戦い方でも充分通用する下地はあるのだが、呪文が使えたほうが便利ではある。

ラミアのティアラは高価な魔装具として、市場に出回ることがあるので、もし見つけたら買っておきたいところだ。もっとも金貨二、三枚程度の値はするので、気軽に買える物ではないが。

「ティアってスタイルいいし、可愛いし、羨ましいわ……」

ティアの胸元を見つつルティが呟く。

改めて見れば、ティアは均整の取れたプロポーションのうえ、あどけなさを残した可愛い顔立ちをしている。

肩より下まで伸ばした銀の髪は、白髪とは違う輝きを見せている。

「でしょ、この姿が一番成績良かったのよ」

わざと胸を揺らせ、ティアが答えた。

「えっ？この姿がって、どういうこと？」
「うん、ラミアには本来顔ってないのよ、口だけしか。あとは好きに弄くれるの」

まったくイメージが湧かない。顔が無い？
「じゃあ、もしティアラがあれば、全然違う顔に変えられるの？」
「そうよ～、鼻から上だけならいくらでも。ルティそっくりにだって、アービィそっくりにだってね。でも、口は変えられないから、誰かに成り代わることはできないわよ」
アービィに成り代わってルティをおちょくることができないのが残念ね、と笑う。
変わっていく瞬間を見てみたいと思うルティだった。

「じゃあ、明日は神殿に行って、そのあと武器防具屋巡りかな」
「そうね、じゃあ、そろそろ……」
いい加減眠くなったティアが、寝ましょうか、と言おうとしたが。
「アービィ呼んで呑みに行こうか？」

翌日、二日酔いというより酔っ払った状態で神殿に行き、不敬であると追い返された三人組がいたとか。

第8話

ルティとアービィが育ったフォーミット村は、大陸の南端にある。

いびつなアラビア数字の8に似た形をした大陸は、狭い地峡により陸続きではあるが、南北に分かれていた。

比較的温暖な気候の南の大陸には四つの国があり、それぞれが前述の地水火風の神殿を祀っている。

東西南北にほぼ均等に大陸を分割した各国は、精霊が加護するかのように風土、産業に特色を持った。

ルティたちの住む水の神殿を祀るインダミトは、南から北に向かってなだらかな傾斜を持つ国土で、幾筋もの河川が流れている。

大河の中には他の三国を流域に納め大陸最北まで流れる大陸最大のグラース河もあり、水運を活かした商業や加工業が発達した。

それなりの地下資源も持っているが、採掘に伴う国土の破壊や、鉱毒被害は無視できず、宝の持ち腐れになっている。

中でも致命的なことは、鉱物資源のほとんどが、グラース河の支流に存在していることだ。

もし、この地域で大規模な採掘事業を行えば、グラース河の流域に鉱毒による住民の健康被害だけではなく、一帯の第一次産業が壊滅し、二次被害は国の根幹をも揺るがしかねない。

さらには、他国への被害もあるため、微妙なバランスの上に成り立っている南大陸の平和すらぶち壊しにしかねない。

このためインダミト国では、他国の飲料水や農工に不可欠の『水』を握っているにもかかわらず、大陸内では少々立場の弱い交易を主とする商業国として生きるしかなかった。

兵を集め、覇を唱えることも充分可能でありながら、戦乱の引き金を引いた国、と言われることによる不名誉を甘受したくないという、王の意向もあった。

大陸の東に存在するビースマック国は、鉄鋼の国だ。

峻険な山岳地帯が多く、人口はさほど多くないが、国そのものが要塞と化している。

地の神殿を祀るこの国は、山岳地帯に降る雪に支えられた水資源や、そこに眠る地下資源も豊富だ。

短く急流ばかりの川は、大陸の東に広がる海に注ぐものがほとんどで、採掘に伴う鉱毒被害や河川の氾濫が他国に影響を及ぼす心配がほとんど無い。

が、平坦な地形が少なく、せっかくの資源を加工し製品として付加価値を付けるための場所を、それほど多くは持てなかった。

もし、充分な平野がビースマック国にあるならば、南大陸の覇者となっただろう。

しかし、他国の領土を侵食してまで国土を広げることに価値観を見い出すことのなかった歴代の王の意向もあり、他国へ資源を輸出し、見返りに製品を輸入することで、南大陸内での地位を確立していた。

そこにはインダミト国同様、戦乱の引き金を引いた国という誹りを受けたくないという、王の意向もあった。

西に位置するストラー国は、国土の大半が平野を占める、酪、農業を主とした国だ。

穏やかな気候の元、優秀な生産技術で他国への食料供給により、南大陸内での地位を確立していた。
人の食料のみならず、家畜家禽の餌料までを余裕を持って生産できる肥沃な国土を持っている。

が、それはグラース河の恩恵によるもので、自国独りが孤立を守れるものではない。
何れの国も、かつて南大陸に覇を唱えた帝國の末裔であると自認していたが、ストラーこそ正統なり、という誇りを持っている。
それは他国の技術力や経済力に対し、尊大な態度でしか自らのプライドを守れないという劣等感の裏返しでしかなかったが。

もちろん、食料を供給できるということは、何よりもの強みでもあるのだが、兵力でも他国を圧倒したいという欲求も、またあった。
それ故、国力に不釣合いな兵を抱え、他国に比べ多くの国家予算が軍事に費やされている。
それを感じ取っている各国は、ストラー国の重要性を認めているがために、煽てたり、下手に出たりで尊大な国王を手玉に取っていた。

国王は、国の持つ力と自分の力が同等と思いこみ、他国に対する態度はあくまで尊大だった。
特権意識の権化のような貴族や騎士階級が幅を利かせ、経済の要である庶民は虐げられている。
風の神殿を祀るこの国は、様々な問題を孕んだまま、商人たちの懸命な努力で崩壊を免れていた。

最も北にあるラシアスの国は、地峡を挟んで北の大陸と対峙している。

起伏に富んだ国土は農業に適した地は少ないものの、海沿いには天然の良港を多数持ち、沿岸にはいくつもの好漁場が存在する。

南の大陸の住民が蛮族と呼ぶ北の民は、ラシアスの国土だけではなく、温暖で暮らしやすい南大陸を狙っている。

絶え間ない侵略に対し、南大陸の盾を自認するこの国は、大陸の防衛に多大な時間を取られ、産業も発達できずにいた。

政情は安定しているが、それは敵があってこそだ。

王を中心に民は纏まっているが、漁業以外の産業を育てる余裕がない。

その漁業すら、遠洋漁業の技術が未発達のこの世界では、他国に比べてまだマシといった程度の規模でしかない。

勢い、他国の製品を輸入することになり、それを持って蛮族に相対するが、自国には生産能力がほとんどない。蛮族の撃退に、手一杯の状態だ。

当然一国で蛮族に対する軍事費をすべて捻出できるはずも無く、他国からの資金や物資の援助で辛うじて凌いでいる。

金だけ出して血を流さない他国に対し不信感をもつラシアス国だが、国民の「大陸の盾」としてのプライドが、火を祀る国を崩壊の淵へと転落することを防いでいた。

蛮族と呼ばれる北の民は、統率者となる王がいない。

部族ごとに、欲求の赴くままに暮らしている。

暗く、長く、家から出ることすら儘ならない冬。

風は吹き荒れ、雪が叩きつける冬。

人を養える土地は少なく、家に篭れば娯楽などセックス以外ほとんどない。

子は増えるが、増えた子を食わせるには南方に進出するしかない。瞬きするかのような春から秋にかけて、あらゆる物を収奪しなければ次の冬は越せない。

同じ北の民同士で繰り返される襲撃や収奪、殺戮の歴史は、彼らを最強の戦士に育てるための歴史でもあった。

春から秋は、生まれた子を育て、長い冬ごもりに備えるための季節でしかない。

彼らにとって、凍らない土地、河、海は、憧れ以外の何者でもない。

地峡を通り抜け、温暖な大陸に移住することは、彼らの悲願でもあった。

極北の地には、魔王の城があるともいわれ、季節を問わず集落を襲う魔獣もまた、彼らが南下する要因でもあった。

南の大陸四国家では、北を征服し安全を確保するより、地峡を利用し、北の民の南下を防ぐ方が効率がよいと判断され、地峡にある要塞を築くことで対処している。

娯楽をセックス以外に見いだせない彼らの地でも、近交劣化は経験的に知られていた。

自らの生の痕跡を残すために、男も女もお互いを求め合う。その結果、数世代のうちに、集落は近親者ばかりになってしまう。

打開するためには他の集落との交流しかないが、限られた生存の場を奪い合っていた彼らに平和的な交流などという発想はなかった。

極めて希に友好的な血の交換もあったが、基本的には他の集落を

襲い、子を産める女以外をは皆殺しにしてその集落を乗っ取る、の繰り返しだった。

今現在で性成熟していない他部族の幼子を育てるなどという発想は皆無で、適齢期といわれる女以外は生かしておく余裕もなかった。

ごく希に奴隷として南の大陸に幼児が売り払われることもあったが、殺されなかっただけマシと考えていいものか、判断に苦しむことでもあった。

幼い頃から、家の中に限らず至る所でセックスを目の当たりにしていた民にとって、性的な禁忌もほとんどないうえ、羞恥心も薄いため、娼婦としての価値は高かった。

北に住む民の特徴として、金髪碧眼であることも、異国情緒としての希少価値になっていた。

そして、これが更に偏見と差別に拍車を掛けることになっていた。

北と南の宗教も、偏見と差別を生み出す要因となっている。

南の四国家は、それぞれの祀る精霊を信仰しているが、国家間に宗教上の対立は無い。

唯一神マ・タヨーシが祝福した四大精霊という位置付けで、微妙な教義の解釈の違いはあるが、緩やかな一神教であるためか、互いに対立を生み出すほどではない。

原理主義者は自らの奉信する精霊こそ、唯一絶対の神から祝福されし精霊と言い、他を排斥しようとするが、それはごく一部だけだ。

対して北の民は、部族集落ごとに信仰する精霊や神が異なる多元的な多神教である。

それぞれに対立は見られず、お互いを認め合うか無関心であり、マ・タヨーシすら数多の神の一柱として、信仰の対象になっている。

しかし、南の四国家におけるマ教では、北の民が信仰する神は全て邪神か悪魔と位置付けられていた。
長い歴史の中でマ・タヨーシを崇めるため、各地の民話を取り込み、都合良く解釈した結果ではあるが、自らに同化しない北の民を貶めるため、という意志も働いていた。

マ教自体に他宗教排斥や教化の教義はないが、一部の為政者は北の脅威を必要以上に煽るため、原理主義者や純朴な信者を利用していた。

さらに南の大陸で使用される呪文と、北の民が使用する呪文は異なる。
四大精霊呪文のほとんどが現象を操るものであることに対し、北の民が使用する呪文は精神に作用するものが多い。
系統立った研究はされていないが、どちらかと言えば悪魔や悪霊が操る妖術や、催眠術に近い。
この点からも南の民は、北の民を魔獣同等に見做していた。

同じ人同士、ましてや魔獣から逃れた民を、南の大陸国家が拒むとは思わず避難してきた北の民を待っていたものは、偏見と差別、そして迫害だった。

この偏見や差別、迫害といったものは、南の大陸の北に行けば行くほど強くなる。
ルティたちが育った南の地方では、お互い相容れない民、といった程度の認識で、移住や売られてきた北の民が石持て追われるほどではない。

少々規模が大きな町には娼館があり、そこには数人の北の民がい

た。

貴族や騎士階級、大商人と呼ばれる家には使役される奴隷がおり、そのほとんどは北の民である。

が、北の地方では、娼婦以外に南大陸で生きる術は無く、見かければ狩りの対象になる地方すらあった。

魔獣の南大陸への直接侵攻を防ぐ盾として、北の民を支援するという発想は無く、両者の間には埋め難い深い溝が横たわっていた。

第9話

「あ～、酷い目に遭ったわ。
神官様のお説教責め、石の床に正座付き。
まだ、脚が痺れてるみたい……」
宿のベッドに腰を下ろしたルティがぼやく。

「なんなの、あの拷問は……。
初めてよ、あんなつらい目に遭ったのは。
人間ってよくもまあ、あんなこと思い付くわね」

ティアは文句を言いながら椅子に座っているが、上体をテーブルに投げ出している。
「しょうがないじゃないさ～。
へべれけの状態で神殿に乱入したら、そりゃぁ叱られるって。
確かに、ティアには拷問だよね。
普段はとぐろ巻いてりゃいいのが、いきなり脚を折りたたむんだもんね」
ルティに関しては達観したアービィが文句を言いつつ、ティアには同意する。

「で、僕はいつまで、ここで正座してればいいの？」

「あれほど言ったのに、また獣化したまま出て行こうとしたからでしょっ！！」
ルティが怒鳴りつける。
「だから、大声で言っちゃダメだって。

それに耳と尻尾だけだったじゃないか～」
敵わぬまでも反論するアービィだが、ルティの勢いは止まらない。
「この世のどこに狼の耳と尻尾つけてうろつく馬鹿がいるのよ！？」
「でもさ～、あれ可愛かったわよ、ルティ。
あのまま行ってたら、きっと女の子に大人気だったんじゃない？」
ティアは余計な茶々を入れ、アービィを庇う振りをしてルティを煽る。

「そういう問題じゃないでしょっ！！」
ただでさえ、年上のお姉様から可愛がられそうな顔立ちのアービィだ。
『付け耳』『付け尻尾』なんかしてたら、いったいどうなることやら。ちゃんと動くし。あれは、あたしだけのものなんだから。

「だいたい、酔っ払ったまま出て行こうとするからじゃない」
危うく口に出しそうになり、無理矢理話を戻そうとして、ルティは自爆した。

「ほ～、酒場からの帰り道で酒買った人は、どこのどなた様でしたっけ？」
アービィが反撃する。
「あまつさえ、意識が飛びかけてたあたしの口に、無理矢理酒瓶突っ込んでくださったお姉様は、どちら様？」
ティアが追撃する。

「え……いや……、あの…それは……てへっ」
ルティは思わぬ反撃にしどろもどろになる。

「てへっ、じゃなぁいっ！！

ティア、君も偉そうなこと言わない。
そのまま一瓶飲んじゃって、すぐ追加を買いに飛び出しちゃったでしょ。
ルティも止めに行くのかと思ったら、一緒に買いに行っちゃうし。
女の子が肩組んでラッパ飲みしながら街中練り歩くって、どういうこと？」
アービィがティアにも矛先を向ける。
「あれは……ほら……、だって……」
まさかこっちまで来るとは思っていなかったティアは、初めて見るアービィの剣幕に涙目になっていた。

「二人とも、罰として、僕がいいって言うまで、そこで正座っ！！」
「ごめんなさぁ～い」
「ごめ〝ん〟な〝ざぁ～い」

二人を放置し、部屋を出るため、アービィはすっくと立ち上がった。
が、痺れ切った脚は完全に感覚が消え失せてため、その場で前のめりに倒れ込む。テーブルに頭から突っ込んだアービィは、そのまま動かなくなった。
「ちょっと……あたしたち、アービィが目を覚ますまで、このまま？」
逃げればいいのに、妙に素直な二人だった。

インダミト王国の王都エーンベアでは、最近行方不明者が頻発していた。
治安は大陸の中でも良い方だが、特定の裏通りに入ればこの限りではない。
もともと貧民窟の人口など把握できるはずはなく、その辺りで多

少の行方不明者が出たところで誰も気にも留めない。
エーンベアに限ったことではなく、少々規模が大きな街では当たり前のことだ。
しかし最近は、貧民窟の住民ばかりでなく、一般居住区の庶民、貴族や騎士階級からも行方不明者が頻発している。
警備隊が捜索に当たっているが、行方不明者は増えるばかりだ。
自分たちの家族や仕えるべき貴族にも行方不明者が出るに至り、王宮騎士団も傍観しているわけに行かず、重い腰を挙げた。
大規模な人買い組織が煽りを食って幾つも潰されたが、彼らは今回に限っては無関係で、行方不明者の足取りは全く掴めず、その数もまた増えていた。

夕暮れ時の喧騒が聞こえてくる王都の裏通りの一角で、二人の男が対峙していた。
最初は、肩が当ったの当らないのと、ありがちな難癖から始まったが、今ではどうも雰囲気がおかしい。

片やどこにでもいる破落戸のような、目つきの悪い男。
もう片方は、フード付きのロングコートを纏った男。フードを目深に被っているため、その表情は判らない。

破落戸が、肩が当たっただろうと因縁を付け、裏通りに引きずり込んだのだが、その通り、肩を当てたのはロングコートの男だった。
破落戸は金を出せだの、身ぐるみ剥いでやろうかだの脅しているが、男は全く動じない。

「グダグダ抜かさず……早く獣化したらどうだ、人狼」
低く男が言い放つ。

一瞬の間があり、破落戸は目を見開いた後、男に向き直って身構

える。
「なんだ……判ってやがるんじゃねぇか。なら、お望み通り……お前の脳を喰ってやろうか！！」
そう言うなり顔だけが狼に変化し、男に飛びかかる。
「ふん、全身獣化もできねぇ屑め……」
一気に間合いを詰めてくる人狼に動じることなく、男は吐き捨てた。
人狼の振り上げた手が、男に向かって振り下ろされようとしたその刹那、コートを跳ね上げ、両の腰に佩いた短刀を抜き放つ。
切っ先が下から人狼の鼻先を掠めたと思った瞬間、大上段に振りかざした両手の短刀が、人狼の頭に叩きつけられた。
まるで豆腐を切るかのように、何の抵抗もなく振り下ろされた短刀は、人狼の身体を縦に三つに切り裂いていた。
「けっ、手応えもねぇ……
もっと強ぇ奴がいるんだろう？次はそいつを用意しとけ」
切り裂かれた人狼が着ていた服をもとに、人化していたときの足取りが追われ、住処が突き止められた。
そこからは多数の人骨が発見され、一部残った衣服から、それは頻発していた行方不明者のものと判明した。
それから王都で、行方不明者が出ることは無くなった。
「酷い目に遭った……」
三者三様に、この日二度目の同じセリフを言う。
フュリアの街の夕暮れ時、アービィとルティ、ティアは、水の神

殿で精霊との契約を無事に済ませてから、武器防具屋に向かっていた。
　ティアはかなり悩んだが、この先ラミアのティアラが取り戻せるか、新調できれば呪術を使えるようになるので、白魔法を選んでいた。

「さっきは驚いたわ。アービィったら、倒れた後、痙攣し始めちゃうんだもん。
　もう大丈夫？」
　心配そうにティアがアービィの顔を覗き込む。
「脅かさないでよね、本当、馬鹿なんだから」

　内心では心配でしょうがないのだが、表情には出さず、アービィの頭をぺしぺし叩きながらルティが言う。
「脚が痺れてただけじゃなく、貧血も起こしたんじゃないの？
　格好つけていきなり立ち上がったりするからよ」
　あんまり心配させないでね、とルティは心の中で続ける。

「ごめん、ごめん…いやぁ、立ち上がって歩き出したと思ったんだけどさ～
　気付いたらベッドにいるんだもん。
　びっくりしたよ」
　二人懸かりでベッドまで運ばれたアービィが、目を覚ましたときに最初にみたものは、涙目でおろおろしているふたりだった。
　まだ正座止めて良いっていってないけど、まぁいいか。珍しいもの見れちゃったし。

　アービィという、ある意味最強の前衛がいるため、ティアまでが無理して前に出る必要はない。

むしろ後衛でルティと連携した方が、戦術の幅が広がる。

ルティの武器は近接戦闘用のブロードソードなので、ティアは中遠距離支援用として弓矢を、護身用としてダガーを二振り購入した。

防具は、動きやすさに重点を置きたいティアの意向で、軽量のチェーンメイルと革鎧にした。

ついでにルティにもチェーンメイルを新調する。

ルティのチェーンメイルは既製品でぴったり合うサイズのものがあったが、ティアのほうは多少手を加えないと入るものがなかった。主に胸とか、胸とか、胸とか。

「丈はちょうどだし、ウエストもいいんだけどね～」

ちらりとルティを見てから、アービィに言う。

「ま、後数年してご覧なさい、垂れちゃって大変なんだからね」

カチンときたルティが、聞こえよがしに呟く。

「あら、もう２００年はこの体型維持してるのよ。

ルティは垂れる心配皆無だもんねぇ～」

気にも掛けないと言わんばかりに、平然と言い返すティア。

「それってずるくない？

何よ、心配皆無って！？

まだ育つんだから！！

それに…２００年って何、いつまで生きる気よ！！？」

ムキになって言い募るルティ。心の中では血の涙が流れている。

ふっ、と軽くため息をつき、肩を竦めて見せながらティアが答え

る。
「まだ……ねぇ……
ラミアは５００～６００年くらい生きるのよ。
体型なんて変わらないし。
アービィはどんなプロポーションが好み？」
何気なくトドメを刺している。

アービィに話を振られ、答えを聞きたくないルティは矛先を自らへと変えさせようとする。
「口が減らないわね、後天性年齢過多」
「口が悪い子ね、先天性胸部未発達症」
鎧の上に羽織る外套を選びながら、にこやかに会話を続ける二人に、アービィは恐怖した。

必要な物が一応揃い、一度宿に荷物を置きに戻る途中、アービィは二人と別れギルドに寄った。
装備や所持品を揃えたことで、残金が心許なくなってきている。
宿はあと二泊が限度だ。当座の日銭を稼がなくてはならない。

ティアも、人間流の戦闘に慣れなければならないし、自分も呪文に慣れなければいけなかった。
掲示板を眺めるが、手頃な討伐依頼がない。

端から順に見ていくと、フュリアからエーンベアまで行く旅人の護衛の依頼があった。
とりあえず明日にでも面接して決めたいとのことなので、先方に会いに行く約束を取り付けてもらう。
明日の朝、再度ギルドに来てから先方の時間希望を教えてもらうことにして、アービィは宿に向かった。

宿に戻り、食事に誘うため二人の部屋に行くと、ルティはベッドでシーツにくるまって座っていた。
視線は虚空を彷徨い、ときどきぶつぶつと何事かを呟いている。

テーブルを見ると、既に空になった酒瓶が一本転がっていた。
その横では、勝ち誇った表情のティアが、優雅にグラスを傾けている。

どうやら第二ラウンドがあり、ティアのＫＯ勝ち、それも圧勝だったようだ。
軽い目眩を覚えつつ、アービィはテーブルに着き、無言で空のグラスをティアに差し出した。

「ルティも聞いて。
明日、護衛の依頼の面接に行くから。
朝一番でギルドに行くよ。
エーンベアまで行く護衛だからね。
上手く行けば旅費が掛からずに行けるかもしれないよ。
絶対寝坊とか、しちゃダメだからね。
これ逃したら、ここに泊まるお金無いから」

もそもそとシーツからルティが出てくる。
「え～、お高く泊まった貴族とかだったらやーよ。
でしょ、ティア」
目が腫れぼったくなっているところを見ると、本気で泣かされたらしい。

「背に腹は変えられないのよ。
あ、ルティはどっちでも一緒？」
追い打ちというか、今度こそトドメか。

「いいわ、今日は引いてあげる……今日の負けは明日の勝ちに繋がるのよ……
何とでもお言いなさい……あは……はは……ははは……うわ～ん」

第１０話

そして夜が明けた。
三人は、眠い目を擦りながらギルドに向かう。

一晩泣いたらすっきりしたのか、ルティとティアの間にギクシャクした雰囲気はない。
アービィが心配するほど、二人は本気で喧嘩していたわけではない。
ルティの自虐を含め、それなりに楽しんでいたらしい。おろおろするアービィの様子を楽しんでいた節もあるが。

ギルドが開き、受付カウンターで面接の時間を聞くと、すぐに依頼主もこちらに来るという。
ギルドのロビーで待っていると、歳の頃は十四、五歳くらいの少女と、執事だろうか五十絡みの紳士が入ってきた。
ギルド職員の仲介で互いに挨拶を交わし、面接が始まる。

「さて、この度はわたくしどもの依頼にご応募いただき、ありがとうございます。
わたくしは、ボルビデュス家の執事をしております、クリプトカリオン・イリタンス・ウーディニウムと申します。
長い名前では呼び辛かろうと思いますので、わたくしのことはクリプトをお呼びください。
こちらはボルビデュス伯爵家の次女、レイテリアス・ヒュデロッティ・ボルビデュス様でございます」

こちらが若いにもかかわらず礼儀正しい、程よく気さくさも漂わせた紳士が自己紹介する。

「あ、ご丁寧にどうもありがとうございます。
僕はアービィ・バルテリー、こちらがルティ・バルテリー。
その横がティア・バリスネリアです」
アービィも丁寧に自己紹介する。

「ほほう、ファミリーネームが同じということは、アービィ殿とルティ殿は、ご夫婦で？」
「はいっ」「姉弟です」
ルティが元気よく答え、皆まで言わせずアービィが被せる。
ちょっと嬉しいアービィだが、恥ずかしさから即否定してしまった。
ルティの視線がきつくなったことには、殺気と共に気付いていた。
横ではティアが肩を震わせている。

「ご姉弟で冒険者ギルドに登録なさっているのですか。
さて、ここからエーンベアまでの道中を護衛していただくわけですが、皆様がどれほどの実力をお持ちかも知らずに依頼するほど、わたくしどもは命知らずではございません。
現在までで最強だった相手を教えていただけますか？」
当然だ。特にギルドメンバーのクラスやレベルが決められているわけではない。
相手の実力を測ることは、当たり前のことである。

「え～っと、そこのカウンターで確認してもらえれば分かることですが、つい先日、ラミアを討伐してきました」
ティアが言った。ここでピンピンしてるけどね、とこれは声に出さずに呟く。

クリプトがカウンターに目をやると、ギルドの職員が首肯しラミ

アのティアラを提示する。
「さようでございますか。
この辺りの街道沿いであれば、せいぜいゴブリン、リザードマンくらいのものでしょうから、充分すぎるご実績ですな。
いかがでございましょう、お嬢様。この方たちにお願いすることにしたいのですが」

クリプトはレイテリアスに伺いを立てる。
それまで黙って遣り取りを見ていた少女が口を開く。
「はい、わたくしは構いません。
クリプトのお墨付きであれば心配することもないでしょう。
わたくしも長い名前では呼びづらいでしょうから、レイとお呼びください。
アービィさん、ルティさん、ティアさん、短い道中ですがよろしくお願いいたします」
礼儀正しく挨拶し、頭を下げる。

貴族が平民に頭を下げるなどという前代未聞の光景は、あまりの衝撃に固まるルティとティアの「ひゃい」という間抜けこの上ない返事により、レイテリアスが噴き出すことで終了した。

報酬の交渉も簡単にまとまり、銀貨五十六枚ということで、アービィたちの取り分は銀貨五十枚と銅貨四十枚だ。取り分が銀貨５０枚を切らないように調整してくれたのだろう。
では、町の外に馬車を用意しますので、昼に町の門までお越しください、というクリプトの言葉に送り出され、アービィたちは宿を引き払うため引き返す。
ギルドを出た彼らの背中に、食料等はすべてご用意いたしております、というクリプトの声が追いかけてきた。

「なんか、話が良すぎて怖いくらい。なんか裏がありそうね」
「ま、なんかあったらアービィが全部消し飛ばしちゃうでしょ」
ルティの言葉にティアが頷きながら返す。
「僕は殺戮兵器かいっ」
物騒なことを言いながら、しばらく世話になった宿を払い、荷物を担いで町の門で馬車を待つ。

「あ、あれじゃない？」
二頭立ての馬車が彼らの前に止まる。

「では後ろに荷物を。
よろしければ、ルティ殿とティア殿は中に、アービィ殿は御者台へどうぞ」
それとも、ティア殿が御者台のほうがよろしいですかな、と控えめな笑みで付け加える。
苦笑いと共に、結構です、と答え、アービィは御者台に座り、がっくりと肩を落とすルティ、笑いを噛み殺すティアとレイが馬車に乗り込む。
「では、出発致します」
鞭をひと当てくれ、馬車はゆったりと走り出した。

御者台ではクリプトとアービィが世間話を、馬車の中でも三人娘が楽しそうにお喋りをしていた。
「でね、舞踏会なんか堅苦しくて嫌だって言うのに、お父様に無理やり連れて行かれちゃって。
男どもが群がってくるのを、かわしてお料理食べるのが大変だったわ～」
薄い栗色の髪を揺らし、同色の瞳をくるくるさせて、楽しそうにレイが話す。
まだ発育途上だが、しっかりと自己主張をしているプロポーショ

ンは、ルティに嫉妬を覚えさせていた。
「レイ様って、初対面では堅苦しい方かと思っていましたけど…
私たちなんかにいいんですか、そんな砕けてしまって？」

呆気に取られるルティが聞くが、そんなこと気にしなくていいのよ、堅苦しいのはお屋敷の中だけで充分、とレイは手をひらひらさせて答える。
「いいの、いいの。あなたたちも畏まらないで欲しいの。
みんな、伯爵家ってことで、崇め奉っちゃって下さるけどね～、偉いのはお父様だし。
私はどうせ、どこかに嫁ぐから伯爵を相続することもないからね」

「すごいわ～レイ、あたしの知ってる貴族は、平民が口をきくなんて絶対許さなかったわ。
とんでもなく高飛車で、ふんぞり返ってたもの。
レイが言うとおり、偉いのは親なのに、その威を借って威張っちゃうのが多いのよね～
中でも鼻持ちならないのが…アーガストルとセラストリアっていったかしら。
兄妹なのかな。
いつも一緒にいるみたいだけど、特に女の方ね酷いのは」
ここぞとばかりにティアが言った。

「ティア、それは言いすぎじゃ……？
それに、なんで知ってるのよ、そんなこと」
ルティはヒヤヒヤしながら窘めつつ聞いた。え？『エサ』探しの途中でいろいろ見たって？

「ごめんなさい、それ私の兄と妹……」
済まなそうにレイが言った。

やっちゃった、という顔のルティと、一瞬どうしよう、という顔になったが開き直るティア。

御者台では、さすがに拙くない？　という顔のアービィがクリプトの顔色を伺っている。

「良いのです、アービィ殿。

貴族たる者、決して全てが高貴なわけではございません。

わたくしが申し上げるのは不敬になるやも知れませぬが、民を慮れぬ者は貴族たる資格はないのです」

はぁ、そんなものなんですか、とアービィは聞いた。まさか身内から批判が出るとは思わなかったからだ。

「はい、確かに貴族というものは、庶民から税金を取り立てることができます。

しかし、それは決して己が欲望のためではございません。

ましてや、贅沢、享楽といったものに費やしていいものではないのです。

民を富ませ、領地を富ませ、民を、領地を、ひいては国を守るために使って然るべきものです。

わたくしたちは、普段民からいただいた、いえ、お預かりした税金で生かされているのです。

お坊ちゃまは、将来のために現在は子爵の爵位を賜り、領地経営を実地でお学びになっておられますが……

ご主人様のように、民を想い税を決めるのではなく、他の家に負けたくないという一点のみを思って税を取り立てる。

所詮子爵の領地が、公爵様やご主人様の領地と同じ税収を上げられるわけがない。広さ、質共に違うのですからな。

お坊ちゃまは、それがお分かりになっていない。

戦場での槍働きだけが、民を守るということではございません。

戦を起こさないこととこそ、重要でございます。それは服従するということでは、決してございませんが。

一朝事あれば、この老骨とて剣を取ることに、ためらいはございません。

が、そうならないように、政を行う。

これこそが為政者として、貴族としての義務と、わたくしは心得ております。

民が安心して暮らせる、戦の無い世の中、それを守れぬようであれば……

あれでは、いつか、反乱が起きまする」

一気に言い切ったクリプトに感嘆の想いを抱くアービィだった。

「今、聞こえたでしょ、クリプトの演説」

苦笑しながらレイは馬車の中で続ける。

「本当にその通りなのよ。

私はこの家を出る身だから、私のために家のお金をあまり使って欲しくないの。

今回の旅は、精霊との契約のためっていうのが名目で、実際には世間を見知るためってことなんだけど、一応、私のお小遣いから出しているわ。

もっとも、それだって父様を通して、民からお預かりしてるお金ってことなんだけどね」

肩を竦めて見せるレイ。

「いいんじゃないのかなぁ、それくらい。

それに見合うだけのことを、してくれているなら、ね」

ルティが考えながら、言葉を選んだ。

野営の際にもレイはレーションに文句をつけることなく、水で飲み込みにくいパンを流し込みながら言う。
「妹なんか甘やかされてるから、天幕付きの馬車に寝台車でしょ、それから料理人付よ。
嫌になっちゃう」
「一番下ってそういうものよね。
でも、あたしも見たことある貴族ってそういうのばかりだったから、あれで当たり前だって思ってたわ。
今回の旅は、なんていうか、いろいろと勉強させられるわ」

ルティは少し考え、続ける。
「でもさ、貴族様がぱーっとお金使わないと、そこに溜まっちゃってお金は動かないわよね？
あと、他の家の人呼んだときに、みすぼらしい家だとか服、食事とかだとバカにされちゃわない？」
面子や見栄というものが必要なことは、使う金額のレベルが違うだけでどこにでもある。
無駄に金を使うことはよくないが、多少の贅沢、面子や見栄がある程度は大切なことも解る。

「それはね、確かにあるわね。
でも、普段の食事とか着る物にまでお金は掛けなくていいと思うのよ。
お招きした方に不快な思いはさせられないわ。
そのために普段は質素でもいいと思うし。
あとね、家の造りや装飾品、衣服や食事にいくらお金を掛けても、お金が回るのはそこだけよ。
もっとね、道の整備、橋を掛ける、農地の開拓とか、いろいろと使うべきところはあるわ。

そのための増税なんて、絶対駄目よ。
農地の開拓を民に押し付けて、上がりだけを、それも机の上の勘定で農地の広さだけで決めちゃった税なんて、無意味よ、無意味。
ちゃんと自分たちがそこを見て、実際に鍬を振るうのはそこに住む民なんだけど、開墾して、そうじゃなければ、まだ何も作物が採れない土地に税を掛けることになっちゃう。
そしたらどうなると思う？
税を払うために……今まで頑張って切り開いた土地や家を手放したり、身売りしたり……
兄様の領地ではそんなことも起きているらしいの。
私は勉強する。
今は全収入の六対四で、四を私たちが税としていただいてるけど、もっと良い税の方法があるはずだわ。
同じ税収になるにしても、もっとみんなに公平な税の方法があると思うの。
関税のせいで物価が高くなるから、民が物を買えないなんておかしいわ。
隣の領地に行けば半額で売ってるのよ。
安い関税で安くたくさん売れれば、その売り上げからの税が増えるわ。
全部が全部じゃないけど、それは関税の収入より多くなるはずだと思うのよ。
品物によって税率を変えるべきだと思うわ、私は。
これから私は世界を回ってみたい。
税のことだけじゃなくて……完璧な方法はないにしても、どこかに絶対今より良い方法があるはずよ」
力強く言い切ったレイを、感嘆の眼差しで見るルティとティアだった。
この貴族の娘が女王になる国だったら、住みやすい国になるよね、

きっと。

ついでに、ティアの『エサ』にしちゃえば、そのバカ兄様。

何か、良いヒントが頭の端を掠めた気がするアービィだった。夢で見たような気がするんだけどなぁ。

第11話

あの夢の中では、みんな平和そうだった。
国や政に対して文句ばかり言ってたよな、子供すら。

この大陸で、そんなことしたら……死罪なんだっけ？
でも、あの夢のなかじゃ、誰もそれで死罪になんかなってなかったな……？

王は……敬われて、でも政には口出ししてない。
宰相が取り仕切ってたけど、ころころ交代してた。
議会とかいったな、民が選んで、選ばれて集まった人が宰相を選んで……面倒くさそうだな。
集めた税の使い方をみんなで相談している風景があったと思ったな。

税は…直接のと間接のがあった、確か。
四割は取られてなかったよなぁ……

軍は……あった、よな？
宰相が将軍で、あれ、騎士じゃないし、貴族でもないな。
参謀は騎士だ。貴族は……あれ、貴族なんていないじゃん……？

アービィはレイの話を聞きながら、時折見る『覚えている夢』を思い出していた。
その中にレイに役立ちそうなヒントがありそうなのだが、うまく考えがまとめられずにいた。
あまりにも多元的に、様々なことが絡み合っていたからだ。

ふと、焦げ臭いような臭いを嗅いだ、気がした。
ティアも反応しているが、言っていいのか判らず、視線で問いかけてくる。

音もなくクリプトが立ち上がり、闇に向かって闘気を膨らませていた。
その時点で、アービィには見えていた。
多数のゴブリンが、殺気をはらんで野営地を遠巻きにしている。
いくつか違った雰囲気の殺気は、おそらくリザードマンあたりだろう。
ティアが泉を去ってから大して日数は経っていないが、早くもエクゼスの森には生き物が戻り始めたのだろう。
それを狙った魔獣もまた、戻りつつあった。

この小物感はコボルトにも共通するが、やつらが洞窟から出てくることはあっても、こんな平原にまで来ることは希だ。

クリプトの闘気に押され、ゴブリンは突入の決心が付かないようだ。
ここでもう一押ししてやれば、おそらく退くだろう。リザードマンは残るだろうなぁ、知性のかけらも無いから。

レイとルティが不思議そうにクリプトを見上げた。
アービィとティアが立ち上がり、三人はそれぞれ１２０。を担当するように、中心にレイとルティを囲んで背を向け合う。
ルティも気配を察知するが、無理に囲みの輪に割り込もうとはせず、レイに寄り添う。

アービィが一気に闘気を広げた。

怯えた感情が伝わってくる。
突っ込むか、逃げるか迷っているようだ。

ティアは、魔獣だけが知っている人狼特有の闘気に、腰が抜けそうだった。
人には単純に闘気としか伝わらないが、魔獣であれば種族特有の匂いというか、雰囲気を感じることができる。

今ここで人狼に怯えることはないはずなのだが、種族の血に溶けた人狼への恐怖は押さえ難いものがある。
アービィという個体に恐怖など持たないが、人狼に対する恐怖はティアの中に溶け込んでいた。　あのとき、こんな闘気を浴びせられたら……泣いちゃったかなぁ？
怖くて狂っちゃったかもね。抑えてくれてたんだね、アービィ？

周囲の殺気が移動し、ティアの守る１２０。の範囲に収束した。
ゴブリンはティアから発した恐怖感を、自分たちに拠るものと勘違いしたようだ。

恐ろしいまでの闘気を発する二個体への恐怖より、囲みの中心にある雌の匂いがゴブリンたちの欲求を上回らせた。

豚の鳴き声のような雄叫びを上げながら、ゴブリンの群が突っ込んでくる

冷静に位置を変えたクリプトが、ティアの横に寄り添い、懐から鋼線を引き抜きゴブリンに投げかける。

ティアはクリプトの意図を察し、鋼線が掴みきれなかったゴブリ

ンの群れに突入し、ダガーを盛大に振る舞う。

ティアがダガーの血糊を振り払うと同時に、クリプトが鋼線を手繰り寄せると、ゴブリンはチーズを切断するかのようにバラバラになった。

崩れ落ちたゴブリンの身体から、噴水のように血が噴き上がる。

ルティは目を見開いて、ティアとクリプトの殺戮の業を見ていた。

血を嫌悪することはないが、二人の業は、もし自らに向いたらと思うと戦慄せざるを得ない。ティアって強いんだ。よく生きてられたわね、あたし……

ゴブリンが片付いたとき、アービィは全く動いていない。

違う方向からの殺気を嗅ぎ取っていた。

そちらはまだ突入してくる気配は無かったが、クリプトが移動したことにより開いた穴を見逃さなかった。

バタバタとした足音と、殺気が押し寄せる。

今し方潰えたゴブリンと、連携を取っていたわけではない。明らかに別の意志だ。

アービィは、押し寄せる殺気の群に対峙した。

意識を集中し、獣化しないように闘気を操る。

人狼が持つ純粋な『力』のみを全身に漲らせ、押し寄せる殺気、リザードマンの群に飛び込んだ。

息を止め、最小限の動作で的確に短刀を翻し、弛緩と力の集中を繰り返す。

業など一切持たないリザードマンを寸刻みにしたアービィは、自分たち以外に動くものがないことを確認し、短刀を腰に納めた。

溜め込んだ息を吐き出す音の後、クリプトとレイによる賞賛の声と拍手が響いてきた。

アービィが使う短刀は、普通のものとは違う。

斬人斬馬の剛刀。イメージとしては肉厚の日本刀だ。

この世界で剣とは、その重みを以て敵を叩き潰すという思想のもとに作られている。鍛造技術が発展途上の世界で、玉鋼の業を見いだすことは、まだ偶然に頼るしかない。

アービィとルティが村を出るとき、友達がアービィに贈った短刀は、偶然からできた玉鋼に近いものだった。

友はアービィの『力』の性質を正確に見抜き、この世界で一般的な剣では、刃を叩き潰すだけになることが解っていた。

友は、父親の鍛冶場から一振りの刀を持ち出してアービィに渡し、これは叩きつけるんじゃない、引くようにして切れよ、と伝えた。

友の父は、村八分を演じる義務があり、アービィに刀の特性を伝えることができなかった。

友は、まだ子供であることを隠れ蓑に、村に駐屯する騎士団からもそう唆され、アービィへの使者となった。

友の父は満足げに、だが演技を楽しむように息子を怒鳴りつけ、鉄拳制裁を加えた。

友は父の拳を受けながら、親子は楽しそうに笑い、寂しそうに涙を堪えていた。

アービィは刀を抜く度、友の言葉を思い出す。

オレはルティが好きなんだ。
頼む、守ってくれ、アービィ。
オレはルティを守るだけの力はない。
でも。アービィなら大丈夫だ。
頼む、守ってくれ、アービィ。
もし、ルティを傷つけたり、泣かしたりしたら、オレがお前を殺しに行ってやる。
まぁ、返り討ちだろうけどな。

笑って見送ってくれた友が流していた涙は、忘れない。ねぇ、僕はルティを守れてるかなぁ？

「お見事でございます、皆様」
クリプトが賞賛の声をあげる。

三人の戦闘力に劣等感を感じたルティは、ちょっと拗ねたように言う。
「あたしは……何も……できなかった……よ？」
全員が即答で否定した。

「そんなことはございません、ルティ殿がお嬢様に寄り添っていただけた。
それがなければわたくしがそこに行きました。
わたくしが働いた。
それこそがルティ殿最大の功績の証拠でございます」

久し振りに身体を動かせましたし、と嬉しそうに付け加える。

「ルティがレイに付くのが見えたから、あたしは走れた。ルティのお陰よ」

「あの……さ……、ルティがそこにいてくれたから、僕は安心して……征けたんだよ」

そうかなぁ、と、しゅんとしているルティに、そうだよ、心強かったよ、とレイが取りなす。

「それでは、そろそろ寝ることにしますかな」

クリプトの言葉で話題が変わり、不寝番の順番を決めて、それぞれは馬車に潜り込んだり、毛布にくるまる。

最後になったルティに、最初に不寝番に立つクリプトが、功を焦らないことです、と声を掛けた。

首肯したルティは馬車に入り、ティアと並んで毛布を被った。

「ねぇ、ティア。あたしって足手まといだったかなぁ？」

ルティは、まだ拘っている。目に見える形で役立ちたいという気持ちが強い。

「いい、ルティ。剣を振り回して敵を殲滅するだけが、強いってことじゃないのよ。ルティは、しっかりバックアップできる態勢を保つのが、一番大事。

全員が突っ込んじゃったらさ、誰がレイを、いえ、みんなを守るの？

剣を振り回しながらじゃ、呪文は使えないのよ。

全体を見渡して、自分が何をするのが一番いいか、よく考えておくといいわ。

自分の特性を良く考えて、ルティ」

普段、口げんかばかりしているような気がするティアに、思わぬやさしい言葉を掛けられ、気持ちが落ち着いていくルティだった。

「でも……、強くなりたい……」

第１２話

朝、馬車は走り出し、クリプトとアービィが御者台で、レイとルティ、ティアは馬車の中で、のんびりとしたひと時を過ごしていた。
昨夜の野営地から王都エーンベアまでは、歩けば四日ほど掛かるが、馬車では後二日の行程だ。
今夜は、エクゼスと王都の間にある小さな村、アールスタで一泊することになっている。

「今夜は～、お風呂～」
レイからこの村には温泉があると聞き、アービィが村に風呂文化を伝えて以来すっかり風呂の虜になっていたルティは、それを楽しみにしている。

真っ昼間から襲撃してくるような野盗や魔物はおらず、それぞれは流れる景色を眺めていた。

夕暮れが迫る頃、アールスタの村に到着した一行は、程々の格式を持つ宿屋に並びの部屋を取った。
アービィとクリプト、レイとルティ、ティアが同室になったが、ここでもクリプトがルティに、交代しましょうか、と一言付け加えることを忘れなかった。

落ち着いた雰囲気の食堂で上品な食事を楽しんだ後、それぞれは宿自慢の大浴場に出向いた。
ティアもエサ探しの旅をする最中に風呂に入った経験はあるが、過度に暑かったり寒かったりする環境が苦手な性質のためか、あまり長く入っていることはできない。

それでも身体を適度に冷ましながら、場がしらけない程度に二人に付き合っていた。

女性陣と男性陣が大浴場から同時に出てきて、入り口で行き合う。部屋に戻るまでの廊下で、反則よ、まだ十五じゃないの、これからまだ、という、虚ろな目をしたルティから漏れるうわ言のような呟きは、アービィとクリプトは聞かなかったことにした。

部屋に戻ったあとアービィは、クリプトに疑問に思っていたことを聞く。

なぜ、従者がクリプト一人なのか。

高貴な家の、跡取りではないにしろ、娘が、従者一人連れただけでうろうろしていて大丈夫なのかということだ。

いくらクリプトの戦闘力が人間離れしているとはいえ、数に頼んで押し寄せれば全てを防げるはずはない。

人手を集めても、伯爵家の娘であれば身代金にしろ、売り払うにしろ、大概は元が取れる。

外に出るなら、伯爵家の私兵に護衛させれば、ギルドに依頼するより圧倒的に安上がりではないか。

それに、ギルドは仕事の仲介をするだけで、人物まで保障しているわけではない。

今回アービィたちが護衛に付いたが、冒険者の中には荒っぽい者やならず者もたくさんいる。

護衛が略奪者に早変わりしないとも限らないのだ。

私兵であれば伯爵家に忠誠を誓っているのだから、まず安心して任せられるはずだ。

クリプトは、少し考え答える。

「お嬢様は、様々な方とお話をしたいとのお考えです。限られた身内や、関わりを持つものだけでは、世界を知ることはできないとお考えのようです。傅かれるだけでは、思い上がり、尊大なだけの人間になってしまう。

それはお嫌なのでしょう。

ま、ストラーの貴族どもを見てしまっては、そう思うのも仕方ございませんが。

もっとも、それを見て、貴族とはこうあるべきと勘違いなされている方も、多々いらっしゃるようですが」

そう言いながら、クリプトの表情に苦いものが混じる。

おそらく、大方の貴族や、レイの兄妹を思い浮かべたのだろう。

常日頃、兄妹は、貴族らしく振舞えと言っては、人を顎で使い、レイにもそれを強要してくるのだ。

「そのような人間を見てしまって、これではいかんとお考えになったようです。

それから様々な方とお話をすることによって、自らを省みられるというのも大きな理由ですな。

護衛の者の人物ですが、それはわたくしにも、お嬢様にも、多少は人を見る目というものはございます。

それでも、万一の場合は……」

そこまで言って、クリプトはにやりと笑みを浮かべ、わたくしも居りますれば、と言いながら懐から鋼線を引き出す。

背筋に冷たいものを感じながらも、じゃあ僕たちはクリプトさん

やレイさんの御眼鏡に適ったんですね、とアービィは言った。
にっこりと笑って首肯するクリプトと、柔軟な考え方を持つレイに対して、アービィは尊敬にも似た感慨を抱いていた。

アービィの想いとは別にクリプトは、将来の手駒を探す目的もありますが、と声に出さず呟いた。

村を出れば王都までは、ほぼ一日で到着できる。
初めての王都に、期待感が膨らむアービィだった。
朝食に降りてきたルティの目が腫れぼったいことは、とりあえず気にしないでおく。クリプトさんも見ないようにしてるもんなぁ…

レイは、相変わらず気さくに給仕の少女に声をかけ、暮らし向きや村の景気、治安や不満等、庶民の声を聞こうとしている。
それなりに質素で飾らない格好だが、布地の質の良さは見れば解るし、何よりも洗練されたレイの物腰で、貴族であることは一目瞭然だ。

声を掛けられた少女は、緊張でガチガチになってしまい、最初は何か粗相でもあったのかと怯えていた。
宿の主人は、さすがにガチガチになることはなかったが、次の給仕の募集を掛けることを考えざるを得なかった。

この大陸で貴族を怒らせるなどということは、即、死に繋がる。
下手をすればその場で手打ちのうえ、近親者にも何らかのとばっちりが出る。

重罪者でもない限り一族郎党を根絶やしにすることはできないが、貴族の機嫌を損ねた平民の近親者が後々どのような目に遭わされる

かは、想像に難くない。
住んでいる場所を逃げ出して流民に身を落とすか、一生嫌がらせを続けられるか。年頃の女性であれば、淫らな代償を取り立てられることも多い。

「ごめんなさい、そんなつもりで声を掛けたわけじゃないの」
済まなそうにレイが頭を下げる。
ここでもルティとティアが示したものと同じ反応が見られ、全員が苦笑いする。

「レイってさ、それ見たくてしてるの？
貴女も気にしなくて大丈夫よ。
この人は、そんな酷い人じゃないわ」
ここまで一緒にいてレイの人となりを見て、個人や信頼する人を侮辱でもしない限り、耳の痛いことにも素直に耳を傾ける人物であると理解したルティが助け船をだす。
「バイアブランカ様のご威光で、この村は、みにゃ、安定した暮らしでごじゃいまちゅ」
噛んだ。
少女は顔を真っ赤にしている。

そうね、直轄領だもんね、と言いながら、噛んだことは聞き流し、レイは考える。

やはり、貴族然とした格好ではダメだ。
自分からどんな話が流れるかを、この可愛らしい娘は怖れている。
今ここで手打ちにしなくとも、あとで少女の痕跡すら残さず消すことは、バイアブランカ王家には簡単なことだ。

もっとも、讒言など、バイアブランカ王が嫌う最たるものであるが、下級貴族や役人にまでそれが浸透しているわけではない。

少女の怖れは、血肉に溶け込んだものだ。

しかし、もし、少女の正直な意見をバイアブランカ王が聞いたなら、顔をしかめつつも喜ぶだろう。

彼の賢王は、レイと理想と同じくしている。

先王の意向で王家の子供たちは、幼児期を過ぎてから数年の間、下級貴族や騎士の家に放り出され、金銭的にも厳しい育ちをしてきた。

もちろん、王家に対する敬意と礼儀も叩き込まれるが、それは王家の人間としてではなく、仕える身としての敬意と礼儀だ。

その教育を通して、自らの立場を自覚させ、その敬意を受けるに足る人物となるべく、厳しく育てられてきた。

特に王位継承権の高い者ほど、庶民に近い暮らしを経験させられた。

税の意義を始めとして、国を成り立たせるために平民に忍従させていることを、肌で感じさせてきた。

しかし、王家の意向とは別に、旧来の、貴族とは平民を従わせるべき、と考え続ける者も多い。

中には強力なリーダーシップを以て、民をひとつに纏め良好な関係を維持するレヴァイストル・シンピナートゥス・ヴァン・ボルビデュス伯爵のような賢者もいるが、ほとんどは武力と権力にものを云わせ、領民を虐げる者ばかりだ。

レイは兄に、妹に、愚者の誹りを受けて欲しくはない。

が、彼らは父の溺愛の結果、鼻持ちならない貴族に育ってしまった。

領民を愛し、家族を愛する父が、なぜそう育ててしまったのか、

レイには理解できない。
おそらくは、直轄領以外でインダミト一の税収を挙げ、領民と良好な信頼関係を結んでいるボルビデュス家の子息であるにも拘らず、経営する領地では苛烈な税の取り立てで、本家や他の諸侯領地に対抗しようとしている。

これを恥と言わず、なんと言おうか。
レイは、給仕の少女が言葉を噛んだ恥ずかしさから顔を赤くする以上に、恥ずかしいことだと思っていた。ビースマックの公爵家に嫁いだ姉様はどうお考えなのかしら……

これ以上詮索しては、王宮のスパイと勘違いされてしまう。
レイは後ろ髪を引かれながらも、給仕の少女を解放した。

各自が旅装を整え、クリプトが手早く馬車を宿の玄関に回す。

「たまには……、ティア殿、御者台にお座りになりませぬか？
馬の扱いを覚えておいて、損はございませぬぞ」
腫れぼったい目でこの世の全てを恨むような表情だったルティの顔が、一気に晴れやかなものに変わる。

いや、昨日と同じで結構です、言おうとしたアービィに、黙れ、と言わんばかりの全員の視線が突き刺さり、アービィは素直に馬車に潜り込んだ。

馬車の中ではレイによる尋問が暫く続き、人狼であること以外を二人は話した。
ティアはフュリアの街で知り合ったことにしている。

「悪いこと聞いちゃったわね、ごめんなさい……」
レイがアービィに頭を下げた。
「じゃあ、アービィはご両親を探すために？」
曖昧に頷く二人に、これ以上の詮索は配慮がないと判断したレイは話題を変える。

「その痣って見せてもらっても良いかしら？」
レイは、昨夜のガールズトークの中で話題に出た、アービィの背中にあるという痣が気になっていた。
これまで痣を見せた相手は、ルティと両親、川遊びをするような友達だけだった。アービィとしては、誰かに積極的に見せびらかすつもりはないし、恥と思っていないので痣があることは隠すつもりもない。人前で服を無闇に脱がない、というだけのことだ。
実際、昨夜の風呂では、クリプトにも見られている。

いいよ、と気軽に答え、アービィは上半身裸になり、背中を見せる。
発達した筋肉の上に、見たことのない文字のような形の痣が浮いていた。
「へ～
なんか、痣じゃないみたいね……
まるで入れ墨のような……刻印のような……
痣にしては形がはっきりしすぎかも。
なんか、知らない魔法で刻んだみたいね。
ご両親に関わる手掛かりなのかもよ？」

なんか昔見たことがあったような気がするわね、と心の中で考えるが、はっきりとは思い出せない。

クリプトは、十年ほど前に見た『十代後半から二十代前半の身体のどこかに文字のような痣を持つ男』を探すお触書を思い出していた。

しかし、馬車に揺られる背中に『文字のような痣を持つ男』は、どう見てもまだ十代だ。

お触書の男とは、年代が合わない。

まさか、な、と呟き、思考を馬車の操作に戻す。

陽が傾く頃、王都の堅牢な城壁が視界に入ってきた。

まだこの時間では、王都を出てくる旅人も多数いた。

その中に、ロングコートを着込み、フードを目深に被った男がいた。

馬車とすれ違った男は振り返り、馬車を見送る。

しばらくその場に立っていたが、「狼に、蛇か」と呟き、今出てきたばかりの王都の門に向かって歩き出した。

第１３話

王都エーンベアは、インダミトのほぼ中心に位置する。
バイアブランカ王家が、まだ地方の小さな領主であった頃からの居住地だった。
五百年前に大陸に覇を唱えた大帝国が崩壊した後、急速に力をつけ、周囲の領地を併呑し勢力を広げてきた。
群雄割拠の時代を生き抜き、各地で同じように勢力をつけた三つの家門と覇を競い合った。
が、五十年続いた戦乱の時代は人々を疲弊させ、戦力の均衡は戦への意欲を急速に萎ませていった。

今から四百五十年前、大陸の東西南北に拠点を置く四つの家門は、幾度かの和平会議の後、大陸をほぼ均等に四分割し、それぞれに治めることとし、長い戦乱の時代が終わった。
各国は、互いを侵攻する意志を持たないことを、もとは大陸の中心にあった精霊の神殿を、地水火風の四つに分祀し、各国に置くことで示している。

もともとあった精霊神殿は、大陸全土で信仰されていた唯一神マ・タヨーシを祀る神殿に変えられた。
マ教はストラーとして独立することになる地に本拠を持っていたが、一国に宗教的権威が傾くことを恐れた他の三国の意向により、遷都に応じた。時の教皇の平和を望む意志が、大きな混乱を抑えたといわれている。
その結果、現在、マ教の神殿は、四ヶ国の国境が接する中心に位置し平和の象徴になっていた。
そして、中立を維持するため、神殿を中心とした半径５ｋｍのエリアは、どこの国にも属さない都市国家となっている。

エーンベア城に近い貴族街の一角にある、ボルビデュス家上屋敷の前に停まった馬車から、五つの人影が降り立った。
二人と三人に分かれた影は、それぞれに別れを惜しみ、互いに頭を下げてから二人は屋敷の中に、三人は城下町へと歩き始めた。

今度領地に戻る際にも護衛をお願いしたいものです、というクリプトの言葉には、もしその時にこの街にいればお受けしますよ、とアービィが返答していた。

「さて、宿はどういたしましょうか、オネーサマガタ？」
「安くていいわよ。少し切り詰めておきましょう」
「食事に出歩くのは面倒だから、安くてもいいけど食堂完備がいいわね」

宿を探しながら、三人は町の喧騒を楽しんでいる。
様々な店や、露天商が並び、盛んに客を呼び込んでいる。

屋台で串焼きを買い込んだ三人は、それを齧りながら大通りを歩く。

フォーミット村から出たことがなかったアービィは、フュリアの街の規模にも圧倒されていたが、さらに上回るエーンベア城下町の様子に、瞳を輝かせていた。
ルティは両親に連れられ何度か来たことがあるが、何せ十年以上前の話だ。記憶はかなりあやふやになっている。それでも両親と楽しく歩き回った記憶を頼りに街を歩いていた。ティアもエサ探しの旅の途中でこの町に何度か立ち寄っていたので、主にティアがアー

ビィを案内するように歩き回る。

陽が沈む頃、ルティがアービィと出会う直前に来たとき、両親と泊まった宿の一室に、三人は荷物を置いた。

一晩銅貨五十枚の安宿なので三部屋を確保し、それぞれは自由な時間を過ごす。

食事の際にアービィが、明日からギルドで仕事を探そうと提案する。

なにせ、比較的安全な旅だったこともあり、誰もが呪文のレベルはおろか、使用回数さえ増えていなかった。

エーンベアをしばらく拠点にしたいので、護衛の仕事は請けず、討伐や街中での雑事を主として受けようと話し合った。

馬車は確かに歩かなくても済むが、舗装された道ではないのでそれなりに揺れ、疲れが溜まる。

慣れない馬車旅の疲れからか、三人は酒もそこそこに部屋に引き上げ、珍しく早くに寝てしまった。

翌朝、三人はギルドに行き、魔獣討伐のリストを眺め、ああでもない、こうでもないと相談していた。

親切な他のパーティが、三人が知らない魔獣の強さや、地理を教えてくれた。

その情報を加味し、検討した結果、アールスタとエーンベアの間にある丘陵地帯に出没するリザードマンの群れを討伐することにした。

リザードマン自体は大して強い魔獣ではないが、今回は数が多いため脅威となっているようだ。
併せて、その群れの中にオーガがいるらしい。
オーガは呪文や妖術を使うわけではないが、一般的な人間より身体がふた周りは大きい。
巨体はそれだけで武器であり、正面から力で挑むことは自殺行為といえた。
何故かは解らないが人間を嫌悪しているむきがあり、街の外で出会ったら躊躇いもなく襲い掛かってくる。
完全駆除で銀貨二十枚、それ以外にリザードマン一体に付き銅貨十枚、オーガ一体に付き銀貨一枚が追加される。

エーンベアとアールスタの間に広がるシェラフィ丘陵で、三人は討伐の後始末をしていた。
茂みの中からアービィがルティに声を掛ける。
「ルティ～、なんか着るもの頂戴～」

リザードマンを十体倒したとき、茂みから突然飛び出してきたオーガに一撃を喰らい、ティアが負傷した。
周囲に人影がないことを確認してあったアービィが、咄嗟に獣化してオーガの追撃を止めた。
たじろぐオーガの喉笛を噛み千切り、強引に戦闘を終わらせたが、人狼への恐怖からリザードマンは逃げ散り、全身から殺気を発散するアービィの完全獣化を初めて見たティアも恐怖のあまり気絶してしまった。
アービィは充分追撃可能だったが、ルティがティアの治療にかかったことと、下手に走り回って人に見られることを怖れたため、この日の討伐はここまでになった。

「待ちなさい。
ティアが気が付くまでは、放っておけないでしょうが」
獣化した際は身体の大きさが変わってしまうため、着ていた物は裂けてしまう。
従ってアービィは獣化を解いた今、全裸になっているため、繁みから出てくることができない。

短刀も放り出されたままであり、文字通り丸腰だ。
もっとも、今ここで襲撃されたところで獣化すれば良いだけなので、何も問題はない。寒いということを除けばだが。
このため、最低限の着替えは持ち歩いているが、今は手の届くところにない。
それでルティに持ってきてもらいたいところだが、ティアが完全に伸びているので手を離すわけにいかない。
今暫く寒さに耐える必要がありそうだ。

「もうちょっと考えて戦いなさいよ。
獣化が悪いとはいわないけどね、呪文も使っておかないとダメでしょうが」
意識を取り戻したティアに一回、自身に一回『回復』を使用したルティが、アービィのバッグを投げてよこす。
繁みの中で衣服を身に付けたアービィが枝を掻き分け出てきたところに、ティアが『回復』をかける。
エーンベアに戻るまで、何があるか判らないので、呪文の余裕を残したまま、引き上げることにした。

リザードマンの群は、まだ数十体は残っていそうだし、オーガも数匹いるらしい。
これから暫くは、エーンベアとシェラフィ丘陵を往復することになりそうだ。

街の入り口で呪文を使い切り、ギルドに行き報酬を受け取る。
宿に戻った三人は、反省会と称して早速呑み始め、翌日への鋭気を養った。

十日ほどシェラフィ丘陵に通った結果、リザードマンの討伐が完了した。
成功報酬として手数料一割を抜いた銀貨十八枚、ボーナスとしてリザードマン八十三体分の銀貨八枚と銅貨三十枚、オーガ六体分の銀貨六枚、合計して銀貨三十二枚と銅貨三十枚を手に入れた。
アービィは討伐二日目から、獣化することなく呪文中心の戦闘を心がけ、衣服の消費を抑えつつ、呪文のレベル上昇に勤めていた。
ここまでの戦闘で、アービィとルティはレベル1の使用回数が四回に、ティアは五回使えるようになった。ティアは、ラミアがもともと持つ魔力のおかげか、成長が早い。
まだ誰も、レベル2の呪文が使えるようにはなっていない。レベルの壁は厚いようだ。

新しい依頼を探すため、朝早くからギルドに来ていたアービィたちに、クリプトが声を掛けてきた。
「お久し振りでございます」
「あれ、こんなところで珍しいですね。依頼か何かですか？」
アービィの問いに、横に首を振りながら答える。
「いえ、本日はアービィ殿たちに用がありまして」
「名指しですか？
光栄なことなんですが、ギルドのロビーでそれは、さすがに」
冒険者を指名しての依頼がないわけではないが、それでもギルド

を通すのが筋だ。
ギルドを通したくない場合は、冒険者の居場所を探し、そこへ出向いて依頼する。
それを知らないクリプトではあるまいに、何故、とアービィは首をかしげた。

実は、と前置きし、ギルドの職員に謝罪してからクリプトは話し始めた。

大陸の四国家は、北の民の侵略に対し、ラシアス一国が兵を出し、他の三国家は資金や物資の援助に留めている。
しかし、ここ数年は北の民の南下の圧力が強まり、ラシアスは国力を削り取られ、戦線の維持が難しくなってきていた。
事ここに至り、「大陸の盾」は砕け散る前に、他国へ補強を依頼してきた。

各国は、常備軍の派遣こそ渋ったものの、義勇軍の派遣には同意し、国民に対して応募を呼びかけた。
それと共に、各諸侯には私兵の提供も呼びかけていたのだ。
常備軍の増強は、国家間に無用な緊張を強いるものであるため、それぞれの牽制が義勇軍と諸侯軍の派遣への流れを作っていた。

ボルビデュス家にも、当然兵の提供が求められているのだが、クリプトはこれを機にアービィたちを家臣に加えたいと考えていたのだ。
フュリアからエーンベアまでの行程で目の当たりにしたアービィの戦闘力にクリプトが惚れ込み、アービィたちの人と成りを気に入っているレイの是非にとの希望もあった。
当主ボルビデュス伯爵の許可を得たうえでアービィたちの行方を

捜していたのだが、まったく見つからなかったため、ギルドにアービィたちの行方を聞きにきた、ということだった。

ラシアスの状況と各国の判断だけを話し、もしよろしければ我が軍に加わりませんか、とクリプトは訊ねた。

義勇軍では、配属がバラバラになるやも知れませぬが、我が軍であれば配慮ができますぞ、と続ける。

確かに魅力的な話ではある。

兵舎が用意され、食事も保障される。

もちろん給金も、ある程度は期待できるだろう。

しかし、彼らの目的は、まず何よりも四大神殿の巡礼だ。

ラシアスまで行くのは予定通りだが、そこに縛り付けられてしまっては元も子もない。

さらに北の民の侵攻が一段落するか、ラシアスの国力が回復した後、ボルビデュス領に縛られてしまうのも本末転倒だ。

レイやクリプトならば、アービィとティアの正体如何に拘らず、旅のときと同じように付き合えるかもしれないが、領民や家臣、兄妹までそうだとの保証はない。

レイやクリプトに、多大な迷惑を掛けることになるのも嫌だ。

僅かの間にそこまで考えたアービィは、礼を失しないように気遣いながらクリプトに断りの返事をする。

そして、ギルドを通しての期間限定の依頼としてなら受けますよ、と付け加えた。

残念そうなクリプトに、ルティが別の話題を振る。

「領地へはいつお帰りに？

準備とか、大変なんじゃないですか？」

「今はご主人様の横でお手伝いすることが多いのです。
領地には執事長も居りますので、そのあたりの手配は問題ありますまい。
あと十日ほどしたら、ご主人様はレイ様をお連れして、ご子息アーガス様の領地を回り、ボルビデュス領にお戻りになります。
その際の護衛は、引き受けていただけますかな？」
これは断らせませんよ、と言外に含ませて答える。
もちろん、今からギルドに依頼します、と付け加えることをクリプトは忘れなかった。

ボルビデュス領は、インダミトの最北部にあり、四国家が国境を接する重要な地域だった。
その後に火の神殿に行くためには通らなければならない場所でもあるため、ここまで旅費が掛からず行けるのは歓迎することである。
この話は迷うことなく承諾した。

しばらく世間話をした後、クリプトは他の用事を片付けに行くと、ギルトを出て行った。
「では、またその日が決まりましたらギルドにお知らせいたします」
「楽しみにしてますね」

クリプトを見送り、それまでに切り良く片付けられそうな仕事を選ぶ。

三人は、あの気持ちの良い主従を護衛しての旅を、心から楽しみにしていた。

第１４話

「がっ……はっ……げぶっ……」
人通りが途絶えた薄暗い裏通りの一角に、若い男の呻き声が響いた。
ロングコートを纏い、フードを目深に被った男の足下にうずくまった若者が、苦悶の表情で胃液をまき散らしている。

「どうした、やり返さねぇのか……？」
男が低い声で問いかけるが、若者はうずくまったままだ。

「いきなり……なん……で……？」
アービィは、掠れた声で問いかけた。

「質問に質問で返すんじゃねぇ……」
男は、ようやく上体を起こしたアービィの顔面に、膝を入れる。
吹っ飛んだアービィの胸座を左手で掴んで引きずり起こし、腰から短刀を抜いた。

「獣化しろよ、人狼。
俺には解るんだよ、お前等の獣臭がな」
短刀をアービィの頬に当て、軽く引く。

アービィの頬に一筋傷が入り、鮮血が滴り始めた。
「どうだい、お前等のために作った純銀の剣の味は？
早く獣化してくれねぇか？
早く、早く、早く、早くっ！！
人の姿のままじゃ切り刻めねぇだろがぁっ！！」

クリプトから護衛の依頼を受けた翌日、夕方から大通りに市が立つと聞いたアービィたち三人は、仕事を早めに切り上げ市を見にきていた。

屋台で以前買ったことのある串焼きや果物を買い、齧りつつ歩きながらアクセサリーや小物を眺め、初めての市を楽しんでいた。

が、普段から人混みになれていないせいか、アービィたちは人波のなかで翻弄されていた。

アービィは、僅かの間にルティとティアの姿を見失っていた。

その人混みの中でいきなり腕を引かれ、裏通りに引きずり込まれたアービィは、態勢を整える暇もなく顔面に拳を受けてしまった。

そして、呆然とするアービィに、男が言い放った。

「死ねや、人狼
今まで何人喰らいやがった？」

ようやく体勢を立て直したアービィは、男の問いかけに棒立ちになり、胃の辺りに膝を入れられ、うずくまったまま胃液を吐き散らしてしまったのだ。

胸座を掴まれ、壁に押し付けられたアービィは、力なく男の目を見た。

そこには信念と怒りを湛えた、しかし静かな、涼やかな双眸があるああ、このひとは正義だ。

一点の曇りもなく、正しく、正義だ。

正義に拠って立つひとだ。

戦いの始めにあった戸惑いや、理不尽な暴力に対する怒りは消えてしまう。
既にアービィに戦意はなく、どうやって戦いを避けるかしか頭にない。
胸座を掴んでいる男の腕を取り、振り解こうとするが、自分の腕は痺れていて力が入らない。

「ちっ……情けねぇ屑め
そうまでして生きたいか……」
男は短刀を鞘に戻し、胸座を掴んだ腕を放し、アービィの喉元を締め上げた。
そして、右腕を振り上げると、アービィの顔に拳を、肘を撃ち下ろし始める。

「覚えとけよ……
てめぇからは完全な狼の匂いが溢れまくってんだ……
これじゃぁ……つまらねぇだろ……
次は獣化して全力できやがれ……
そしたら……殺してやるよ」

アービィは既に反応できない。
咳き込み、呻き声を上げるだけで、男の腕を掴んだ手からは力が抜け始め、殴られるままになってしまっている。
男の鉄拳の嵐は、左腕を掴んだアービィの両腕が、力なく垂れ下がるまで続いた。

男が手を離すと、アービィはその場に崩れ落ち、ぴくりとも動かない。

唾を吐き、男は去っていった。

それから一時間ほどで、アービィは意識を取り戻した。
殴られ蹴られして破れた皮膚は既に塞がり、打撲の腫れも引いている。
暴行のダメージは、ほとんどない。
人狼の回復力が発揮された結果だ。

しかし、出血こそ止まったが、頬には一筋の傷がぱっくりと開いている。
人狼の回復力を以てしても、純銀の武器で付けられた傷は治りが遅い。
ルティたちに、なんて言えばいいか判らないまま、宿への道をアービィは歩き出した。

アービィとはぐれたルティとティアは、暫くアービィを探していたが、あまりの人混みに途方にくれていた。
この状態で二手に分かれて探しても、三人して迷子になるのと同じことだ。

諦めた二人は、とりあえず楽しむことにして、市に並ぶ屋台を覗き始めた。
一時間ほどして宿に戻ると、アービィも前後して戻ったようだ。
ルティは文句のひとつも言ってやろうと、アービィの部屋のドアをたたく。

いつもなら、元気良く返事をしながら飛び出してくるアービィが、黙ってドアを開けた。

思い詰めたような顔には一筋の傷があり、何かがあったことを偲ばせていた。

文句を言おうと口を開いたままで固まるルティの腕を、雰囲気を察したティアが引っ張る。

心配そうにルティが、アービィの目を覗き込んだ。

アービィの目は、初めてルティに人狼であることを知られた夜と同じ色を湛えていた。

独りにさせておいて欲しい、とようやく口を開いたアービィに、何かを言おうとしたが、上手い言葉が見つからないルティは小さく頷くだけしかできない。

見かねたティアが、おやすみ、ちゃんと寝るんだよ、ルティもね、と言いながらルティを部屋に押し込み、自分も部屋に帰る。

三人が出逢ってから初めて、会話のない夜が過ぎていった。

城下町の貧民街にあるマ教会の一室で、ロングコートの男と神父が対峙している。

「神父殿、今度は大物だ。
楽しませてくれそうな狼と蛇だぜ」

「もう仕止めなさったか？」

あまり派手にはしてくださるな、と神父は思うが、言って聞く相手ではないことは承知のうえで、付け加えずにはいられない。

「いや、今夜狼は捕まえたが、放してある。
蛇は狼の後だ。オマケみてぇなもんだな」

精々気を付けるさ、と気にもしていない。

「何故、捕まえなさったのに、殺らずにお放しになど！？」

神父が色めき立つ。街に人狼がいることに我慢がならないようだ。
「つまらねぇからだよ。
獣化してくれねぇんだ。
張り合いがねぇだろ。
なぁ、神父殿、仕事ってのはやりがいがあって楽しくやらなきゃいけねぇよな？
ま。そういうこった」

男は、まだ何か言いたそうな神父を残して部屋を出る。
閉じていくドアの隙間から、あれは俺の獲物だ、神父殿たちは手を出さないでくれ、という男の声が聞こえてきた。

アービィは、真っ暗な部屋の中で、身動ぎもせず闇を見つめていた。
隠していた正体がバレた。
明確な殺意を向けられた。

あの状態から即獣化して相手を噛み裂くなど、アービィにしてみれば造作もないことだった。
しかし、男の目を見た瞬間、闘気が失せてしまった。
それと同時に相手の殺意が消えたことも、獣化できなかった理由だ。

あの人の目は正義だった。
あの人は何の疑問も持ってなかった。
人狼を『討伐』する。その意志に溢れた力強い目だった。
僕らが魔獣を討伐するのと、同じ。

僕は居てはいけないの？

穏やかに暮らしたいと人狼が思っちゃいけないの？
人を喰らってなんかいないよ？
人狼ってだけで……生きてちゃ……ダメなの？

アービィの目から涙が止めどなく溢れる。こんな僕じゃルティを守れないよ。

考えれば考えるほど、アービィは全てが解らなくなってきた。

ドアが開いて室内に冷たい空気が流れ込む。ルティが部屋に入ってきた。鍵を掛け忘れていたらしい。
見るとルティも泣いていたようだ。
ベッドに並んで座り、アービィに向かって口を開く。

「ねぇ、アービィ……
あたしには、あなたの辛さは解らない。
なんて言ってあげればいいかも。
今日何があったかは聞かないわ。
聞いて欲しくないでしょ？
それくらいは、解るよ。
ねぇ、あなた泣いてたでしょ？
あの夜以来じゃない？
いつも我慢してたの？
いいのよ、泣いても。
あたしの前で、そんな我慢しないで」

一瞬、躊躇った後言葉を続けた。

「お姉ちゃんは、それじゃ寂しいよ？」

はっと目を見開いてルティを見る。
ルティがこくんと頷き、揃えた膝を掌てぽんぽんと叩く。
アービィは、ルティの膝に顔を埋め、声を殺して泣き続けた。

第15話

翌朝は、霧のような雨が降る、気だるい雰囲気の朝だった。
今日一日の活動は制限され、鬱憤が溜まりそうかといえば、そうでもない。
温かい雨が静かに降り注ぐ、休養を取れと言わんばかりに。

食堂でティアは、笑顔こそないがすっきりとした表情のアービィと、どこか疲れたような、でも安心したような表情のルティと向き合っていた。
気まずくはない沈黙の中で朝食を終えると、ルティは、ちょっと眠いから、と言って部屋に戻った。

ティアはアービィを部屋に誘い、食後のお茶をゆっくり飲みながら、向き合ってアービィの言葉を待つ。
さすがに人狼に関るであろう話は、他人の目のある食堂でするわけには行かない。

やがて、アービィは、昨日ティアたちとはぐれてから朝までにあったことを、静かに語りだした。

「何て言うか……
朝っぱらからお酒が欲しくなるような話題ね」

ティアが溜息を吐き出しながら感想を述べる。

話すことは全て話し尽くしたとばかりに、アービィは黙っている。

「ね、アービィ……
あたしもね、ちょっと違うけど、似たようなことあったの。
殺されかけるようなことは、なかったけどね。
百年くらい前に、人化していた頃のことなんだけど。
ちょっとした気の迷いだったのかなぁ、エサとして捕まえたはずなのに、ね。
しばらく、一緒に住んでたのよ」

この男の『精』なら、ずっと欲しい。いつまでもいて欲しい。
普通なら搾り尽くして、一日で使い捨てるはずなのに。
それがどうしたことか、もう何日も同じ宿にいる。

いつの間にか、ティアは男に惚れていた。
身勝手に、自らの欲望を吐き出しているだけの男ではなかった。
精一杯慈しんでくれているのが、ティアに伝わっていた。
行き擦りの男女であるはずなのに。

男は商用の旅の途中だった。
ティアは、男についていくことに決めた。

男が住む村で、一緒に暮らし始めたティアは、ラミアであることを隠し、男の『精』を搾り尽くさないように気を使って生活していた。
当然、他の男の『精』を欲することもなく、二人で穏やかに暮らしていたはずだった。

ある日、男が所要で出かけていた際、神父がたまたま訪ねてきた。
断る理由もないティアは、気軽に神父を家の中に招き、茶菓でもてなした。

聖職者が淫らな真似をするはずもないという安心感が、ティアの警戒心を薄くさせていた。

間違いなく、この神父は聖職者であり、自らを厳しく律することのできる人物だった。

そう、男女の間違いを起こすような心配は、全くなかった。

しかし、彼は悪魔祓いを志し、そのための努力も怠らないひとでもあった。

男といる間は、決して着けることのなかったラミアのティアラ。

たまには磨いておくかと思って、テーブルに置きっ放しになっていたのだった。

急にそわそわし始めた神父が、その場を取り繕うように、用事を思い出した、と言って家を出たとき、ティアは全てが崩れ去ったことを理解した。

入れ違いに戻ってきた男の前で、ティアはラミアのティアラを髪に飾り、獣化した。

腰を抜かした男が後ずさり、壁に立てかけてあった護身用の剣に手を伸ばす。

ようやく立ち上がった男は、剣を振りかざしたが、その剣はティアを掠めただけで床に突き刺さった。

男は、逃げよう、とだけ言い、ティアの手を握った。

嬉しかった。

もう、ここで命尽き果てても悔やまないと、ティアは思った。

しかし、思い直す。

自分は、ここで姿を消して行方を晦ませることはできる。
その後、人里を離れ、一人で暮らすことも可能だ。

この男にそれを求めていいのだろうか。
自分ひとりのために、この男の輝くかもしれない未来や、出会うはずのひととの縁を全て断ち切る権利は、あるのだろうか。

もともと寿命が違うのだ。
この男と永遠に別れなければならない日が来ることは、解っていたではないか。
それが、今、来ただけのことだ。

ティアは、毅然とした態度で男に言った。

「お願い。あなたは、ここにいて。
化け物は、あなたを殺そうとして、そのまま逃げたって言っておいてね」

男の返答を待たず、尻尾を男の首に巻きつけ、息を止めないようにして頚動脈を一気に絞めあげる。
瞬時に意識を手放した男をそのままに、ティアは姿を消した。

翌日、姿を変え、二人で暮らした家をティアは見に行った。
未練と言っていいだろう。やはり、男のことが心配だったのだ。
もし、男が悪魔憑きとして迫害されるようなことがあれば、どうしようと思っていた。
ティアに男を助ける術はない。
助けてしまえば、悪魔憑きどころか、悪魔そのものにされてしまうだろう。

しかし、ティアは見に来ないではいられなかった。

そして、ティアが見たものは、周囲をマ教の札を下げた注連縄で囲い、劫火に包まれる家を項垂れて見つめる男の姿だった。

幸い、神父が男に励ます言葉を言い、村人たちも男に寄り添っていた。

それから数ヶ月の間、ティアは姿を変えたり、消したりしながら男の様子を見守った。

男が迫害されるようなことは無いと確信したティアは、未練を抱きつつも安堵して村を去った。

ここまで話したティアは、なぜかエールを飲んでいた。

ちょっと呂律が怪しくなり始めている。

「だ～か～らぁ～。

あたしは後悔してないって言ったら嘘になるからさぁ～。

アービィには後悔して欲しくないのよぉ～。

あなたはぁ～、あたしと違ってぇ～、ルティを守れるだけの『力』があるからぁ～。

自分の～、気持ちにさぁ～、素直にぃ～、ね」

最後の「ね」だけは力強く言い切り、今日はこの天気だし、あたしも寝るね、とティアはベッドに潜り込んでしまう。

アービィは自分の部屋に戻る途中、ふとルティの部屋の前で立ち止まった。

ドアを叩こうとして、鍵が掛かっていないことに気付く。

そっと部屋に入ると、ルティはベッドで気持ちよさそうに眠っていた。
やはり、徹夜でアービィを膝枕していたため、寝不足なのだろう。
「自分の気持ちに素直に、か……」
ティアの言葉を口の中で繰り返し、アービィは寝ているルティに顔を寄せる。
今なら、このまま唇を重ねても、気付かないかな。
そう思ったとき、ルティが寝返りを打つ。
アービィの心臓が、破裂しそうな勢いで拍動を始めた。
自分の感情に戸惑うアービィは、うっかり獣化してしまった。
狼の体重がベッドに伝わり、ルティの頭が大きく沈む。
急に落下するような感覚に、ルティが目を覚ました。
ルティは目を開けるが、焦点が合わず、何度か目を擦る。
しばらくして、ようやく世界が形を成し、ルティは目の前に何があるか把握した。
ルティがそこに見たものは、照れくさそうに自分を見下ろす巨大な狼の顔だった。
隣の部屋から聞こえてきた怒声と破壊音に、慌ててティアが部屋に飛び込んでくる。
ティアの眼前に広がっていた光景は、鼻面を押さえ、ピスピス鼻を鳴らす巨大な狼と、手を腰に当て、轟然と立ちはだかる少女の姿だった。

さっさとしちゃいなさいよ、と怒鳴る少女の声を、ティアは聞かなかったとことにする。
足元には、枕元にあるはずの銀の燭台が、無残に変形して転がっていた。

翌日、討伐の仕事に出て行く三人組のうち、少年の鼻梁には一筋の傷があった。
そして、レイたちの護衛としてこの町を出る前日まで、平穏な日が続いていた。

第１６話

明日は、レイたちを護衛して、この街を出る日だ。
アービィたちは、クリプトと落ち合い、必要な物資の買出しに出ていた。
携帯食料の他、次の村まで日持ちするような生鮮品も買い込む。
その後、ボルビデュス家の上屋敷に行き、伯爵と顔合わせすることになっていた。

「緊張するわ」
ルティが呟く。
「ルティ、地は出さないでね」
ティアが茶々を入れ、アービィが同意する。
「失礼ね、こんな礼儀正しいレディを捕まえて、なんてことを言うのよ」

クリプトが苦笑しながら、馬車に誘い、三人を屋敷に案内した。

屋敷の入り口でレイに再会し、ひとしきりお喋りをした後、応接間へと案内された。

白髪の混じり始めた薄い栗色の髪に、がっしりした体格の人物が、ほぼ同時に応接間に入ってくる。
丁寧に借り揃えられた鼻の下の髭が、この人物に風格を与えていた。

４０代半ばだろうか、髪と同色の瞳から放たれる鋭い視線は、アービィたちの人となりを見極めようとしているかのようだ。

三人は慌てて立ち上がり、多少ギクシャクしながら挨拶をした。
完璧な作法でアービィたちに答礼すると、三人の前のソファーに腰を下ろした。

「ようこそ、いらした。
私がインダミト国伯爵、レヴァイストル・シンピナートゥス・ヴァン・ボルビデュスだ。
まぁ、腰を下ろされよ。
レイから話は聞いている。
実に頼もしい人物であるとな。
長い旅になるが、その間よろしくお願いする」

ここでも貴族が平民に頭を下げるという、実に反則な行動が見られたが、レイのおかげで免疫ができていた三人は平静を装って頭を下げる。

「既に、娘がやってしまったようだな？」
それを見て、レヴァイストル伯爵は豪快に笑った。

暫く世間話をするが、厳つい印象とは裏腹に、気さくな人物でもあるようだ。
領民たちのことを想う気持ちが、言葉の端々から伺える。
アービィは護衛の人選について、クリプトに聞いた疑問と同じことを伯爵に尋ねたが、それにはクリプトと同様の答えが返ってきた。

翌日の出立の時間を打ち合わせ、屋敷を辞する。
屋敷を出る際、追いかけてきたレイが三人を買い物に誘い、クリプトが馬車を用意する。

アービィは女の子三人の買い物がどのような結果を招くか、ここまでの旅で思い知らされていた。
ルティとティアの二人に付き合うだけで、討伐より疲れてしまう。
街中の護衛は、クリプト一人でおつりが来るというものだ。
適当な言い訳を付け、宿の前で降ろしてもおうと、クリプトにアイコンタクトを送る。
が、死なば諸共でございます、という視線しか帰ってこなかった。

たっぷり半日買い物に付き合わされたアービィは、既に疲れ切っていた。
馬車があるおかげで荷物持ちこそ免れたが、いつまでもアクセサリーや服を選ぶ三人をただ待つだけの時間は苦痛でしかない。
それどころか、これはどうだ、あれはどうだ、とアービィの服まで選び始めた。
着せ替え人形にされたアービィを、クリプトは微笑ましそうに眺めるだけで、一切助けはしてくれなかった。
辛抱でございます。おふたりの今後のために。

何がおふたりだ、と心の中で毒付くが、決して悪い気分ではない。
それでも疲れることは疲れる。
アービィは、自分の装いに対して興味がなく、実用本位のものしか選ばない。
それでここまで来ていたし、片田舎のフォーミットでは、たいしたものがないというのも理由のひとつだった。

そんなアービィに、レイがとんでもないことを言い出す。
兄様の領地に寄るときには、歓迎のパーティもあるのよ、嫌だけど、と。
護衛の分際で、そんなもの出られない、嫌なら断ろうよ、と言ったが、そうもいかないらしい。

礼服一式を買い揃えられ、アービィは暗澹たる気分になっていた。
もっとも、予期せずドレスを手に入れることができたルティとティアは狂喜していたが。これでアービィも少しはあたしを見直すかしら。

明日は早いから、と、夕食後は軽く飲むだけで、それぞれの部屋に戻り、荷物を整える。

アービィは、礼服一式を眺め、途方に暮れていた。
そこへ、ドアをノックする者がいる。

どうぞ、と答え、アービィはドアを開けに立つ。
ルティやティアなら、ノックしつつも、無遠慮にドアを開けるだろう。どうすんだ、僕が脱いでたら。あ、殴られるだけか。ティアだと危ないかもね。

ドアを開けると、そこには以前会ったロングコードを着た男が立っていた。
身構えるアービィを押しのけ、テーブルに着き、酒瓶と干し肉を並べる。

「何をしている？
早く、来い」

警戒しつつ、アービィがテーブルの反対側に着くと、男は苛立ちながら言葉を続ける。

「気が利かない奴だな。グラスぐらい出せ」

「人の姿をしている奴を切り刻む趣味は無ぇ。座れ」

当面の害意がないことが解り、アービィは男と対面する。
３０歳になったくらいか。
短く刈り込んだ銀髪に、黒い瞳。
彫りの深い顔だ。
双眸には強い意志が湛えられている。この前見た目と同じだ。

「なんで、この間、いきなり、あんなことを？
えっと、……？」
グラスを並べ、男が持ってきた酒を注ぎながら、アービィが問う。
「バードンだ。
家名はあるが捨てた。
孤児だからな。
ラシアスのマ教孤児院で育った」

聞かれもしないことを喋り始め、呆気に取られるアービィからグラスを引っ手繰り、バードンは続ける。
「俺の両親と姉、弟は人狼に食い殺されたんだ」
返す言葉が無いアービィは、黙って続きを促す。そりゃぁ気の毒だったけど、そんなこと僕に言われたって困るよ。

「俺は、孤児院に放り込まれた。
それからは在り来りのことだ。
それを苦労だなんて言ったら他の連中に殴られちまう。
だがな、俺は誓った。
お前等人狼は、ただの一匹も生かしちゃおかねぇってな。
俺の両親を殺した人狼は、たったの一匹だ。
冷静に考えりゃぁ、他の人狼にとっちゃ八つ当たりだろうな」

じゃあ、放っておいてよ、と心の中で想いつつ、アービィはグラスの酒を舐めた。

「俺は、孤児院で育った後、そのまま教会に入って、聖騎士団に入った。

お前等を殺す業を鍛えるためだ」

しかし、厳格な規律を持つ騎士団は、バードンの性には合わなかった。

彼は騎士団からはみ出してしまうが、教会の悪魔祓い組織が彼を放ってはおかなかった。

個人の戦闘技術を徹底的に叩き込み、正規の悪魔祓いとしてではなく、人の間に隠れ住む悪魔を暗殺する、独立した殺し屋に彼を作り上げた。

「俺は、俺みたいな子供を、これ以上出したく無ぇ。

だから、親の仇以外の人狼だってぶち殺してぇんだ」

僕は人を喰いたいなんて想ってない。言いがかりだ。

喉まで出掛かった言葉を飲み込む。

そんなことを言っても、この正義の人には口先だけの誤魔化しにしか聞こえないはずだ。

「それに、お前知ってるか？

中途半端にしか獣化できない人狼ってな、人と人狼の間にできた子供なんだぜ」

聞きたくない。

それがどういうことか、アービィには想像が付く。

今までに、平和的に人狼と人が愛を交わしたなんて聞いたことが無い。

どう考えても、人狼が人を無理矢理犯した結果だ。

百歩譲って、人を騙した結果だ。
愛の結晶と信じている者が獣化したときの、母親の気持ちは想像に余りある。
愛を注ぎ、慈しみ育てた子供が、悪魔の化身だなんて。

アービィが、ルティとの一線を越えられない理由でもある。

「親も不幸なら、そんな生まれ方をした子供も不幸だ。
迫害され、呪われ、醜く歪み、人を呪う。
呪われれば呪い返すだろ。
それが次を生み出す。
そんなもの断ち切らなきゃならねぇのは解るな？」
人狼同士に連帯感など無い。
アービィは頷く。もし、僕の前に人狼が立ちはだかって、ルティを傷つけようとしたら、躊躇い無く殺せるよ。

「俺は生きてる限り、一匹残らず狩り尽くしてやる。
それだけの力は身に付けたつもりだ。
てめぇも、手も足も出なかったようにな」
出さなかっただけだけどね。もっとも人の姿じゃあなたには敵わないけど。
アービィは心の中で呟く。

「弱い者を切り刻んでも面白くねぇ。
強えぇ、人狼の溢れかえる自信を踏みにじってやらなきゃ、俺の気が済まねぇ。
正々堂々と、小細工など弄さずな。
だから、てめぇが人の姿である限りは、手を出さねぇでいてやるよ。
だから、必ず、次は狼になれ」

「あなたと戦う意志はないよ。
その必要を、僕は認めない」
アービィは、これまでのことをバードンに話し、今後も一切人に仇成す気など無いと言った。
ルティと二人、穏やかに暮らせる場所を探しているだけだと。
もちろん、バードンが理解してくれるなどとは考えていないが、言わずにはいられない。

「へっ、そんな言い分聞いて、はいそうですか、なんで言ってたら、俺の商売はあがったりだ。
そんなことで見逃すとでも思ってるのか？」
視線が切り結び、もし二人の視線が熱を持つなら、周囲は燃え上がっていただろう。

「アービィ、いる？
あ……お客さん？
失礼しました」
突然ルティが入ってくるが、バードンの姿を見て背を向けた。

「あ、どうぞ、お気になさらず。
もう、お暇しますので」
アービィに相対していたときとは、別人にしか見えない柔和な顔が、ルティに振り向く。
柔らかな物腰で挨拶したバードンは、アービィに一瞥をくれ、部屋を出て行った。

「誰？」
バードンを見送ったルティが聞いた。

「うん、この前、町で知り合った人。見送りに来てくれたんだ」

眠り損ねちゃったから一杯やろうよ、と、その場を取り繕う。

納得できないルティにグラスを渡し、バードンが持ち込んだ酒を注ぐ。

早く寝ないといけないんだけどな、と思いながら、アービィは礼服の話でルティの気を逸らしていた。

第17話

早朝、一行は二台の馬車に分譲し、エーンベアを出発した。
一台目ではアービィとルティがレイを、二台目ではティアとクリプトがレヴァイストル伯爵を護衛する。
もっとも、伯爵自体が戦力に数えて良いほどの武勇を誇るので、ティアは回復役に徹していても充分だ。
それぞれの馬車には侍女が二名ずつ分乗し、身の回りの世話をする。

休憩地でのテーブル設置や水汲みなどの力仕事は、アービィとクリプトの仕事だが、男手が二人とも同時に離れるわけには行かないので、アービィは雑事を引き受けるつもりでいる。
野営時の不寝番も、基本的にはクリプトとアービィの仕事だが、深夜までと早朝はルティとティアが担当することになった。

まず、北東に向かいバイアブランカ王家直轄領内のホルボーン村を目指す。ここまでは三日の行程だ。
次いで北の山岳地帯を抜け二日の行程で東の商業都市ティムス、さらに北東へ進み二日でアーガストル・シンプレックス・ヴァン・ボルビデュス・ラガロシフォン子爵の居城があるラガロシフォンに到着する。
ここに三日滞在した後、いよいよレヴァイストル伯爵領ボルビデュスに到着する14日間に亘る旅の予定だ。

途中、小さな集落もあるが、伯爵が宿泊できるような格式の宿があるのは、ホルボーン、ティムス、ラガロシフォンしかない。

行程に余裕を持って組むか無理をするなりの調整をすれば、小さな宿で宿泊することもできるのだが、伯爵は宿に無駄な気を使わせることは望まない。

このため馬車の平均的な速度で走った場合、そのような村は通過するようにして、領地への往復は野営が何度か入るようになっていた。

もちろん、通過してしまう村に対する気遣いも忘れず、食料等はそこから購入するようにしている。

伯爵にとっては野営することも楽しく、相手に迷惑を掛けたくないからのことであって、宿の格式に不満を持つからではないのだ。

宿に限らずこの世界では、庶民が行く施設、貴族が行く施設と格の違いと区別があり、下手に格が違う宿を利用すると、却って相手に迷惑が掛かってしまう。

かつて伯爵がまだ若かった頃、何気なく小さな集落の宿に一晩泊まったことがあるが、宿の主人を始め使用人までが就寝時に宿の外の地べたに寝てしまったのだ。

貴族と同じ屋根の下に寝るなど、不遜な身の程知らずの行いだ、と言うことだった。

当時子爵だったレヴァイストルがいくら、気にしないから、と言っても、後々子爵様と同じ屋根の下に寝たという話がどこからか伝わり、役人から問答無用で罰を受けるか判ったものではないと、宿の人々はほうほうの態で逃げ出してしまった。

またあるとき、道端にある茶屋に立ち寄り水を求めたときも、店員の少女は水の入ったその店で一番上等の器を盆に載せ、自らの頭より高く差し上げ運んできたものだった。

高貴な方が口にするものが、庶民の頭より低いところにあるなど

とは許されるものではない、ということである。

すっかり辟易したレヴァイストルは、それ以来公的な移動の際には自領以外では野営を好むようになった。

それなりの格の宿でも、投宿した際には町村の有力者が押しかけ、お機嫌伺や陳情にやってくるので、それはそれで面倒だとも思っているが。

しかし、庶民にその態度を取らせることこそ貴族的振る舞いであると、態々そのような宿に泊まり、怯える庶民を酒の肴にする貴族も多い。ひどい場合に言い掛りをつけては金を払わずにいたり、娘を差し出させる者もいるとも聞き及んでいた。

アーガストルにはいつも厳しく言ってはいるが、伝え聞く話にはあまりよい評判はなく、心配は募るばかりだ。

出発した当日は、慣らしも兼ねているため、王都のほど近いグラース河の広大な河川敷で野営する。

クリプトはもちろん、伯爵も手馴れた手つきで火を熾し、野外での食事を楽しんでいた。

夜半、小規模なゴブリンの襲撃もあったが、これも伯爵が先頭に立ち撃退してしまった。

護衛の必要なんか無いじゃないの、と思うアービィたちであった。

それでもそれぞれが適切に呪文の修練に励むことができるので、旅の終わりにどれほどの上達があるか、楽しみになっていた。

翌日の野営時には魔獣の襲撃もなく、行程の遅れを出すことなく、ホルボーンに到着した。

ホルボーンの宿に入り、一頻り有力者の相手を済ませた後、一行は夕食までのゆったりした時間を過ごしている。
クリプトが宿のロビーで寛いでいると、ルティが話しかけてきた。

剣の指導をして欲しい。
ルティの願いは、アービィを守ることができる武技も身に付けること。
アービィの戦闘力そのものに心配は無いが、アービィ一人が全てと戦えるわけではない。
ティアも充分な戦力だが、ルティは自分でアービィを守りたいと願っている。
少しでもアービィの負担を減らしたい。上手く言葉にできないのですが、呪文での助力だけでは不安なのです。

いきなり後ろから、偉い、と大声と共に大きな掌がルティの背中を叩いた。
レヴァイストルが満面の笑みを湛えてルティを見下ろしていた。

私が稽古を付けよう、という伯爵の言葉に恐縮する。

伯爵は大剣をよくする。
愛剣は、ルティ同様の両刃のブロードソードだ。
クリプトも剣を扱うが、レイピアを得意としていた。
それであれば、同種の剣を使う者が稽古を付けるべきだ、というのが伯爵の意見である。

ルティの返事も聞かず、部屋に取って返した伯爵は、愛剣を腰に佩きロビーに戻ってきた。

こうなっては遠慮するわけにも行かず、ルティは剣を取りに戻る。

宿の裏庭に出た伯爵とルティは、まず小手調べとばかりに立ち会った。

殺す気で来なければ腕前が判らんからな、と言う伯爵に対し、ルティは全力でも敵いませんからと言い、全身に殺気を漲らせ飛び掛った。

裂帛の気合と共に剣を振り下ろすルティだが、伯爵は軽く捌き続ける。

十合ほどの打ち合いの後、伯爵はルティの剣を弾き飛ばした。

肩で息をするルティに対し、伯爵は息も乱れていない。

それは当然だろう。

幼少の頃より、父や騎士たちから厳しく武芸を叩き込まれ、四十半ばになっても鍛錬を欠かさない伯爵と、あくまでも我流で剣を振り回すだけのルティでは、呼吸法、動作の効率、筋肉の使い方、全てが違う。

一朝一夕に上達はしないがな、と伯爵は言い、剣の基本からルティに指導を始めた。

構えから始まり、打ち込み、引き戻し、薙ぎ、払い、受けと一連の動作を細かく指導する。

熱の入った指導は終わる気配を見せず、伯爵の方針で旅の途中は全員が同じ食卓を囲むことになっている食堂では、『おあずけ』を喰らった一行がスープの湯気が消えていくのを恨めしそうに見詰めていた。

もっとも侍女たちは、この時とばかりに伯爵様と同じテーブルで食事を取るのは不敬ですと宿の主人が言ったことにして、他の食堂でさっさと食事を済ませていたが。

翌朝、まだ陽が昇る前に、ルティの部屋のドアが激しく叩かれた。
筋肉痛に悲鳴を上げるルティがやっとのことでドアを開けると、そこには満面の笑みを湛えた伯爵が、剣を携えて立っていた。
さぁ、朝の鍛錬だ、と半泣きのルティを引き摺って裏庭に出る。

昨夜同様、熱の入った鍛錬が終わると、伯爵は爽やかな笑顔で、ルティは半死半生で朝食の食卓に着いた。
クリプトから話を聞いていたアービィが心配そうに、ティアとレイが笑いを噛み殺し朝の挨拶をする。
クリプトは、伯爵が毎朝剣を振っていることは知っているので、平然と挨拶をしていた。
もちろんクリプトも伯爵も、ルティから「アービィを守りたいから剣を習っている」という理由に関しては口止めされていた。
アービィもなんとなく察してはいるが、ここは口出しすべきではないと言うことくらいに空気は読める。
ティアは、明日からあたしも弓の練習をしようかな、と思っていた。

ホルボーンを出ると山岳地帯に入り、馬車の速度は落ちる。
途中小さな村で食料を買い足し、山道の開けた場所に野営地を定めた。

行程上無理をした場所なので、既に陽は落ち、足元が危ない。
火だけ熾し、簡単にレーションだけで食事を済ませ、早めに寝て翌朝早く出ることにした。

夜間、花を積みに行くことは危険が伴うため、女性陣は水分を控

えているので、かなり喉が渇くようだ。
野営時は男性女性で馬車を分けるのだが、女性陣の馬車からは長い間話し声が聞こえてきた。

寝付けない侍女の一人が窓の外を眺めていると、馬車から２０ｍ程離れたところに影があった。
不寝番のクリプトがすぐ気付き、ルティとティアを起こすように侍女に伝える。
気配を察知した伯爵とアービィが馬車から飛び出し、それぞれに剣を構える。

焚き火の明かりの中に入ってきたのは、全長が３ｍほどの大熊だった。

伯爵を背後に庇い、アービィが前に出る。
下手に弓を射て手負いにすると厄介なので、ティアは馬車に待機していた。
ルティも侍女たちの護衛に馬車に残り、アービィとクリプトが並び、背後に伯爵が控える。

緊張のあまり獣化しそうだが、全身の力を抜き、とにかくリラックスする。
焦げ臭い殺気が押し寄せてきた瞬間、アービィは跳躍し、熊の一撃を避ける。
アービィを狙って振り下ろした腕にクリプトの鋼線が絡まり、目標を見失った熊の態勢を大きく崩した。
ほぼ同時にアービィの跳躍に合わせて、水平に打ち出された伯爵の剣が熊の顔面を捉える。

熊は片腕で顔を掻き毟り、もう片方の腕で大地を叩こうとするが、

クリプトの鋼線が腕を切り落とした。
大地を叩こうと振り上げた腕が消え、動きが鈍る熊の背中に、アービィと伯爵の剣が再度打ち下ろされる。

ティアが呼び出され、残酷ですが、とクリプトに言われ、動く標的に弓を射る。
１５m程の距離から放った十本のうち、六本までが命中し、熊が再度暴れ始める。
クリプトの鋼線が熊の首に巻き付き、クリプトが腕を振ると重い音を立てて熊の首が地面に転がった。

翌朝、熊の死体を全て馬車に積み、ティムスに向け出発した。
もちろん、黎明期から伯爵にしごかれて、ルティは死にそうな顔で馬車に揺られている。

道中、リザードマンが襲ってくるが、ルティを前面に出し、適度に呪文で回復させながら撃滅する。
たった二日であるが、ルティの動きには無駄がなくなり始めていた。
ティアは内心焦りを覚えてしまい、夜にでも弓の修練をしようと心に決めていた。

夕暮れが近付く頃、商都ティムスの城壁が遠くに見え始めた。

ティムスの宿で、熊の処理を依頼した。
熊は、肉はもちろん、胆嚢と掌は特に高く売れる。宿の主人が銀貨十五枚で売捌いてきてくれた。
レヴァイストル伯爵は手数料として主人に銀貨五枚を渡し、残り

をアービィに渡してくれた。
三人は恐縮しつつも、臨時収入に大喜びする。
ここでも有力者たちの挨拶があり、それを無難に捌いた後夕食となった。

「次はご子息の領地ですね」
アービィが、何気なく確認する。
「うむ、寄らないわけには行かないのだがな。
皆の前で恥を掻くことが無ければ良いのだが」
「ティア、ルティも、兄様には気をつけてね。
たいした実力も無いくせに、手だけは早いんだから」
ティアの胸を見ながら、レイが二人に言う。あたしは見もしないのっ！！？

「レイ様、僕たちは別に宿を取ったほうがいいんじゃないですか？」
ルティとティアの心配もあるが、一介の冒険者が話に聞くような子爵の屋敷に泊まることで、何かしら余計な問題を起こさないかが心配だった。主に、ティアが何かやらかすのではという心配だったが。

「それがねぇ、どんな風の吹き回しか、城に泊まれって言ってるのよ。
いつもは、絶対城には足を踏み入れさせないくせに。
多分だけど、ルティとティアがいるからじゃないかなぁ」
またティアの胸を見ながらレイが言った。またっ！？　あたしは見ないのっ！？

夕食後、怒りを何かにぶつけるかのように、いつもより激しく剣

を振るルティの姿が見られたとか。

翌朝、鍛錬が終わったあと、伯爵がルティに声を掛ける。
「ルティ、昨夜は太刀筋が乱れておったが、心に迷いでもあったか？」
しっかりバレていたが、まさか自分のコンプレックスのせいだとは言えず、言葉を濁す。言えません、乳のせいだなんて。

「ま、だいたいは……解った……が……、剣を持つ……ときは、心を静める……ようにな」
伯爵、笑いを堪えながら言わないでくださいっ！！
朝食時、本気で泣きそうなルティがいた。

ティムスからラガロシフォンまでは、余裕のある行程なので食後暫くゆっくりしてから出発することにした。
出発までは自由時間となったため、アービィは街に出かけた。

ふと思いつき、アクセサリーショップに行き、ルティとティアに髪飾りを買って帰った。
ティアには、ティアラでなくてごめんね、と付け加える。
アービィから髪飾りを受け取り、嬉しそうに髪に飾ったルティは、それからしばらく気味の悪い笑みを浮かべていた。

翌日の昼前に、ラガロシフォン領入り口の村グラギリスに到着した。
ここは通過だけだが、その分昼食用の食料を購入する。
村での買い物を済ませ、通りを馬車で通過しているときから、レ

ヴァイストル伯爵とレイの表情が曇ってきた。

「アービィ君、買い物を頼んでしまって済まなかったね。ここでは私やレイ、クリプトは顔を知られているのでな。伯爵家の馬車から降りてきたのだから、当家縁の者ということは判ってしまうが、それでも我々が行くよりは気を使わせずに済む。特に、この村ではな」

それはそうだ。領主の父当人が買い物になどきたら、村中がパニックになる。

せめて、使用人か、依頼を受けた者である必要はある。

「ところで、買い物をしていて、村人たちから何か感じ取ったかね？」

アービィは食料を買った店の店主の態度を、思い返す。

必要以上に謙った態度。五十に手が届こうかと言う男が、まだ二十歳にもなっていない少年にぺこぺこしていた。

無理矢理貼り付けたような愛想笑い。頬の筋肉だけで作ったかのようで、決して目は笑っていなかった。

店も慌てて片付けたような、雑然とした感じだ。

それを伯爵に言った。

「そのとおりだよ。

見たまえ。

通りも一応はきれいだ。

が、不必要に積み上げられた木箱や樽が、家々の壁を隠している。

不自然な土の色も、慌てて埋め戻したのだろう。

アーガスの差し金だろう。

さっき買ってきた店は、品揃えはどうだったかね？

値段は？

品質は？

他にもすれ違う民の挨拶だ。
少しでも早く、私たちの前を離れたいと言う気持ちが透けて見える」

つまり、と伯爵は続ける。
私は怖がられている。と。
畏怖ではなく、怖がられているのだ。
万が一、領主の父を怒らせるようなことがあれば、間違いなく死罪。

アーガスは、領地の経営が上手くいっているように見せたいのだろう。
小言を言われたくないのだ。

改めて見てみれば、村は荒廃しているようにも見え、人々の目に生気がない。
畑のあちこちには、大きな岩や切り株が放置されている。
それなりに整備されている畑は、領主の直轄で小作農が管理しているのだろう。

関税が高いとも言われている。
ラガロシフォン領はボルビデュス領に内包されているから、ボルビデュス領の関税以外は掛からない、はずだ。
直接他国から入る物流にのみ、ボルビデュス領と同額の関税をラガロシフォン領では徴収できる。
どうやら、それにはボルビデュス領より高い関税を、さらにボルビデュス領から入ってくる物流にまで、関税を掛けているらしい。

そういえば、さっき買った食料も、ずいぶんと高かった。

ラガロシフォン城が近づくに従い、レヴァイストル伯爵の表情は、険しくなる一方だった。

第１８話

レヴァイストル伯爵は、苦り切っていた。
来る度に酷くなる息子の領地の様子。
民は極貧に喘ぐが、息子は何の対策も練っていない。

それどころか税を集めろとの号令ばかりで、何故税収が落ちているのかの原因を考えることもない。
何も自ら鍬を振るえと言っているわけではない。
土地から収穫が上がらない、店舗の売り上げが上がらないといった直接、間接の原因を探り、対策を練り、民を指導しなければならない。

日々の暮らしに追われる民に、原因の追究や、対策といったことまで任しているのであれば、貴族など不要で害悪でしかない。何せ、生産性皆無の『職業』であるからだ。
戦乱の時代であれば、領民を守るために剣を振るう『職業』という解釈もできた。
しかし、現代における貴族とは領地を経営する『職業』だ。
自らは職業、例えば商業や農林水産業、工業に携わることなく、徴税という特権の下に、領民の暮らしを守りながら、その税を給料として生活する『職業』であるといえる。
もちろん、現代でも野盗や魔獣といった脅威から領民たちの安全を守るために、それぞれが養う軍を率い先頭に立って戦うことも重要な職責のひとつでもある。

アーガストル子爵は、特権階級であるという一点にのみに立ち、領民の幸せや安全などは二の次だった。
領民にとっては、貴族に傅き全てを投げ出して尽くすことこそ、

無上の幸せであると信じていた。

自分は、レヴァイストル・シンピナートゥス・ヴァン・ボルビデュス伯爵の子息である。

父の威光に逆らい得る者は、精々がところ、王族や爵位が父より上の一部貴族だけだ。

父の努力や、それに伴う信用といったものが作り上げた威光にぶら下がり、自らは努力する必要などなく、権力とは転がり込んでくるものだと思い込んでいる。

当初は父を真似て善政を敷こうとしていた彼だが、ストラーの貴族や一部の思い違いをした貴族と付き合ううち、どこかが狂い始めた。

領民が父に対し膝を折るのは、無理のない税と共に福祉という見返り、さらには安全の確保、公正な裁判といった、多大な努力があるからこそであって、彼のような無策無為な貴族に対し、本気で尊敬の念を抱く者など皆無である。

それでも彼は、王族や貴族同士の付き合いを通して見てきた振る舞いのうち、平民に対して威厳を持って接するという点だけを、貴族らしさとして真似していた。

ラガロシフォン城に馬車が到着し、レヴァイストル伯爵一行はアーガストル子爵の出迎えを受けた。

護衛であるアービィたちは、もちろん貴族の出迎えを受けるような立場ではないが、父の到着とあっては子爵であろうと城門まで迎えにくるのは当たり前のことである。

伯爵とレイは応接間に、クリプトとアービィたちは次の間に通される。

扱いに差が出るのは当たり前のことなので、特に彼らに不満はない。
不満があるとすれば、この後歓迎のパーティーなどに出なければならないことだ。
もっとも、ルティは脳天気にドレスが着られることを喜んでいるが。

子爵と伯爵に型どおりの挨拶を交わしている間、アービィたちはクリプトからいつくかの注意を受けていた。
別に敬意など払う必要などございませんが、態度だけは作法に従っていただきたく存じます。
妹君もおいでですが、こちらに対しても同様。
やたらとご自分の権勢を誇示したがる方々でございますので、ご機嫌を損ねると余計不愉快なことになり兼ねませんのでな。

どうやらクリプトも、この二人に対して敬意というものを抱いていないようだ。
が、悲しいかな宮仕えの身、叩き込まれた作法と主人への限りない敬意が、出来の悪い子息の前での態度を嘲りに変えずに済ませていた。

作法などとは無縁の生活を送ってきたアービィとルティは、クリプトによる即席のマナー教室の生徒となっていた。
パーティーの際は、ぼんく……いえ、子爵様がお二人に不埒な真似をしないとも限りませぬゆえ、護衛というお立場をご利用なさり、できる限り伯爵様かレイ様のお側におられますよう、とティアをちらりと見てから、クリプトは言った。あぁ、クリプトさんまでっ！
！　またティアだけっ！？　あたしはっ！？

陽が沈む頃、ラガロシフォン城の広間を喧騒が埋めていた。
伯爵の来訪とあって、近隣の村や城下の有力者たる騎士階級のものや、隣接する領地を持つ貴族たちも、パーティーに訪れている。

無理矢理礼服を着せられたアービィは、なんともいえないこそばゆさを感じていたが、ルティやティア、レイは、感嘆の思いでアービィを見上げている。

１７５ｃｍのがっしりした偉丈夫。きちんと刈り揃えた髪を丁寧に整えられた涼やかな顔立ち。
貴族の振る舞いを身に付けていないだけで、その点を除けばどこに出しても恥ずかしくない立ち姿だった。
もっとも『その点』が一番問題じゃないか、とアービィもルティも思っていたが。

パーティー会場に入り、所謂上流階級の者たちの中に放り込まれたアービィたちは、居た堪れないほどの居心地の悪さを感じていた。
なぜ、このような場に平民どもが、と言う視線。
または、ルティとティアを値踏みするような視線。
何れにせよ、長くは居たくない場である。

伯爵は、貴族の仕事ともいえる親善外交のための会話に忙しく、レイはさりげなく縁を求める男どもを当たり障りないように交わすのに忙しい。
いつしか、三人は壁際に追いやられ、酔っ払わない程度に酒を飲んでいた。

会場を出て行くタイミングを計っていると、アーガストル・ラガロシフォン子爵がグラスを片手に、三人に寄ってきた。

クリプトに教わったように、当たり障りのない挨拶をする三人に、アーガストルは尊大な態度で答礼する。
そして、言わずにおけばいいものを、恩着せがましく話し始める。
「ようそこ、我が領、我が城へ。
いかがかな、パーティーは楽しんでおるかね？
本来なら、君たちのような立場の者が、このような場に立てるものではないからな。
父上の護衛ということで、特別に許可しておいた。
精々、楽しんでいってくれたまえよ」

伯爵と同色の髪と瞳。
しかし、伯爵とは大きく違う弛んだ頬、二十を越えたばかりだというのに突き出しつつある腹、鋭さのない欲が澱んだ瞳。
おそらく、領民の貧困など考えずに、美食飽食に励んだ結果であろう。
そして、伯爵とは比べ物にならない貧弱な腕。
おざなりの剣の稽古しかしていない。鍛錬を積んでいるとはお世辞にもいえない。

アービィたちは、腹の底から湧き上がる不快感を必死の努力で隠し、頬に笑みを貼り付けていた。

「レディ、護衛の仕事は楽しいか？」
ルティとティアをねっとりとした視線で眺めながら、アーガストル子爵は言った。
アーガストルの問いに、言葉すらもったいないと思う二人は、短く肯定の返事をする。

この若者と女は、姓が同じところを見ると片方とは姉弟か夫婦、片方が恋仲か。

それを喰らい尽くされて、嫉妬の炎に焼かれる姿を見るのも、また一興。

いくら抗いたくとも、貴族であるこの私に逆らう愚か者などいるはずはないな。

自領内の痩せ細った鶏がらのような女どもとは、大違いだ。

こちらの胸など、そうそうお目に掛かれるものでもない。

あちらは多少劣るが、まぁ貧弱というわけでもない、とアーガストルはと腹の中で考える。

「そんな汚れ仕事より、どうだ、この城に入らぬか？

我が側室ともなれば、後々の伯爵側室ぞ。

悪い話ではあるまい？」

呆れ返って笑いしか出てこない二人に、よく考えておきたまえと言って、アーガストルはその場を離れた。

七対三の割合でティアと胸を見比べられたルティは、心底嫌そうな顔でアーガストルの背中を見送った。

……ティア、やっちゃっていいわよ。思いっ切り搾り取っちゃいなさいよ。

……イヤ。選ぶ権利くらいはあると思うの。

ルティはアービィもちょっとは怒ってくれてもいいのに、と思って振り向く。

そこには、にこやかな表情で、分厚いオールドグラスを握り潰したアービィがいた。

ようやく嵐が去ったと思うまもなく、今度は嫌味な態度の女の子

から声を掛けられた。

「お姉様の護衛って、あなたたち？」

相手は子供とはいえ貴族であるし、クライアントの娘であり、妹だ。

最低限の礼を失わないように、三人は自己紹介し、挨拶をする

こちらも伯爵やレイと同色の髪と瞳を持った、十二、三歳ほどの少女。

長い髪を縦ロールに巻き、全体にゆるやかにウェーブが掛かっている。

まだ成長途中の肢体は、レイを見れば将来が楽しみだ。

ドレスの腰に手を当て、低い身長をものともせず軽く顎を上げ、斜めに見下ろすように立っている。

セラストリア・アリーナ・ボルビデュスよ、と名乗り、やはり値踏みするような視線を送ってきた。

「もうね、退屈でしょうがないの。

私の護衛に鞍替えしない？

北の大陸を征服しちゃいましょうよ。

ったく、身の程知らずな、あの連中を返り討ちにして、ついでに我が領にしちゃいましょ。

あんな連中、いなくなったら良いと思わない？」

思わない。

何を言い出すのかと、三人は呆気に取られる。

どちらの大陸であっても、民は生きることに必死なのだ。

南の大陸への侵攻を許せるわけではないが、三人とも北の民の気持ちくらいは、解っているつもりだった。

大陸への侵攻、防衛のどちらに正義があるわけではない。

何も撃退しないでも、平和的な解決策もあるんじゃないかとも、アービィたちは思っている。

「どうせ、私もどこかに嫁ぐ身よ。伯爵領は手に入らないの。だったら、何か大きな手柄でも立てて、王族辺りに嫁ぎたいじゃない？　ストラーの王族なんかだったら、ここよりいい暮らしが出来ると思うの。手伝わせてあげるわ」

逆らうの？　私は伯爵令嬢よ、と言い、さぁ、答えなさい、と迫ってくる。

どうあしらうか、三人が頭を悩ませていると、レイが不穏な空気を察知して人垣を掻き分けてきた。

「セラス、無茶なこと言わないの。この方たちは、あたしとお父様が護衛にと依頼した方たちよ。あなたのおもちゃにするために連れてきたんじゃないの。だいたい、立場を利用して相手に答えを迫るなんて、脅迫よ」

レイがセラスを窘めるが、父の溺愛を一身に受けた少女は、そんなことどこ吹く風だ。

「お姉様、私は名誉を与えようとしてるのよ。平民が貴族の役に立てるなんて、この上ない名誉じゃない。護衛みたいな地味～な仕事より、よっぽど嬉しいはずなの。決まってるわ、そんなこと」

その態度は不遜すぎるわ、というレイに、お姉様こそ平民に甘い、そんなことでは嘗められるわ、というセラス。

お互いに視線が火花を散らし、互いに、今夜は意見してあげる、

と言って、睨み合いながらその場から離れていく。

ごめんなさいね、楽しんでね、と三人に言うレイに、なんで貴族が平民に謝るのよ、と文句をつけるセラス。

ざわめく会場の真ん中で、額に指を当て俯く伯爵の姿が見られた。

夜も更け始め、広間からは少しずつ人が減り始める。そろそろお開きの時間だろうか。

……アービィ、他の女の子に目を奪われちゃって、あたしは目に入らないの？

……初めて着たドレス、似合わないかなぁ？

パーティーは、クリプトの心配をよそに、とりあえずは無事に終わった。

パーティーの後、伯爵と共に剣の鍛錬に励むルティの横で、クリプトから弓の手ほどきを受けるティア。

ルティはここまでの旅の間、伯爵の指導でかなり剣の腕が上がっている。

たった数日とはいえ、基礎から叩き込まれたことが効いているようだ。

ティアも弓についてクリプトに相談したところ、適任の熟達者はいないが基礎くらいであれば、とクリプトが教官役を買って出てくれたのだ。

こちらは魔獣補正のせいか、かなり上達が早い。

ダガーについても手ほどきを受けているので、そちらも腕が上がりそうだ。

深夜、城内に最低限の警備の兵だけを残し、皆が寝静まった頃、ティアの部屋に忍び込もうとする人影があった。
もちろん、パーティーの際、ティアに目を付けていたアーガスだ。

合鍵を用い、静かに。だが、鈍重な足音を立て、部屋に忍び込む。
当然、ティアは気配で目を覚まし、待ち構えていた。
あからさまに撃退してしまっては、後々面倒なことになりそうなので、あくまでも寝ぼけたことにする。

アーガスがベッドに寄りかかり、ティアの髪に手を触れる。
まだだ、ここで飛び起きては、目を覚ましたと思われてしまう。
気持ち悪いが、もうちょっとの我慢だ。

起きる気配がないと判断したアーガスが、ティアの唇に自分の唇を近づけた瞬間。

石と石がぶつかり合うような音がした。

ティアは、顎を引き、腹筋だけで上体を一気に起こしたのだ。
力いっぱいの頭突き。
アーガスは、言葉を発することなく気を失ってティアの上に崩れ落ちた。

一呼吸入れ、大きく息を吸い込んで悲鳴を上げる。

慌てて警備の兵とアービィ、ルティが部屋に飛び込み、伯爵、レイ、セラスが遅れて飛び込んでくる。

ティアに覆いかぶさるように失神しているアーガスと、どうしていいか判らず困惑する兵を見て、レヴァイストル伯爵は再度額に指を当ててしまった。

第１９話

一夜明け、レヴァイスル伯爵は、アービィたちを居室に呼んだ。
部屋に入ると伯爵の他、レイとクリプトがいた。
「昨夜は息子が大変な失礼をしてしまった。
成り代わり、謝罪する」
と言って、丁寧に頭を下げる。
最初から撃退するつもりでいたティアは、却って怪我でもさせてしまったのでは、と恐縮していた。
「気にしないで、ティア。
頭かち割っちゃってもよかったのに。
いい薬よ」
さり気なく酷いことを言うレイ。
ところで、と前置きし、伯爵は話し始める。
「もう手をこまねいている場合ではないと思う。
この領地は限界だ。
子爵領という名目はそのままに、レイに任せようかと思う。
何れ、レイにはやってもらうつもりでいたのだ。それが少々早まったと思えばよい。
息子は、当分の間、私の元に戻す。
本来であれば、ここはアーガスの子供に継がせるはずだったが、まだそれは当分先の話だろうしな」

それが良いとルティは思う。
領民の姿や態度、村の活気等を見て、ここに住みたいと思う者はいないだろうと感じていた。
領民が増えなければ税収も上がらず、この領地の価値は下がる一方だ。

さりとて、このままレイが治めるにしても、地力が下がりきった今は他から援助するにしても難しいだろう。
他の地方からの税収を、そのままばら撒くのでは反発を買うだけだ。

伯爵が息子をある意味見限ったのも、朝食時に経済の改善について意見を交換した際、他地域からの税のばら撒きしか息子が考えていなかったからだ。

「それで、だが。
庶民の視点から、この地の問題点、どうすればいいかの改善点を、思いつくままで構わないので、私たちに話してくれないかね？」

とても難しい話だ。
今日明日で領地の暮らしが劇的に良くなる特効薬などない。
子爵がいなくなることによって領民が怯えなくなる、という環境改善の特効薬くらいだ。
さらに、跡取りが事実上の謹慎という、不名誉極まりない噂が他の諸侯領地に流れるのも問題だ。
伯爵は、敢えてその不名誉を被ろうとしてはいるが。

どう答えたものか、悩んでいると伯爵は言葉を続ける。
「実はだ、領地に帰ってから言うつもりだったのだが、レイに縁談が来ている」

レイの驚愕の声が上がった。
「どこのどなたです？
私には、まだ……」
貴族の娘として、どこかに嫁ぐことは覚悟している。
それが望まぬ相手であっても、だ。
家を伸ばすため、政略結婚など貴族の間では当然のことだからだ。

「ランケオラータ殿だ。レイ。
それでも、嫌かね？」
ニヤリとして伯爵は言った。
一瞬にして、レイの顔が朱に染まった。

ランケオラータ・ロザエネルヴィス・ヴァン・ハイグロフィラ・アンガルーシー子爵。
財務卿ハイグロフィラ公爵家の跡取りだ。
領地を持たない王宮住みの新興公爵ではなく、インダミト王国勃興期からの由緒正しい公爵家のひとつである。

血筋だけでレイが惚れるとは思えない。
幼少時に王宮で会って以来、幾度か舞踏会や公式行事などで話す機会があり、密かに思いを寄せていた相手だ。
どうやら、ランケオラータ子爵も、レイを憎からず思っていたらしい。

「私とて木石にあらず。
娘の幸せは常に考えているさ。
ハイグロフィラ公爵もな、財務卿としてのお立場からもお前の見識に期待しているそうだ。
あちらは当家など比べるべくもない領地。

今回のことは、領地経営の実地演習として最適ではないかね」

縁談が決まったからといって、今日明日にもすぐお輿入れ、というわけではない。

1～2年の準備期間をおくのが普通だ。

その間、1年ほどこの地を任せ、ラガロシフォン領の建て直しを兼ねて、領地経営について実地特訓をするつもりでいた。

「では、そのことも踏まえて、意見を聞かせてくれないかね？」

ルティは考え込む。アービィも考え込んでしまった。

ティアは、もとが魔獣であるせいもあって、わりと醒めた考えでいる。

「伯爵、あたしのような者が言うのは僭越かもしれませんが。

今すぐ、特効薬になるような対策はないと思います」

ティアが話し始めた。

「まず、アーガストル様を伯爵の下に置くのは、謹慎と思われるだけで良いことはないでしょう。

見聞を広めるという名目で王都にお出しになり、伯爵のご信頼置ける方にお預けし、叩き直していただく方がよろしいかと思います。

親元であれば甘えの気持ちが出るのは致し方ないこと。

ここは、ひとつ、恥を忍んで他の方にお任せするべきではないでしょうか。

もとより、謹慎の不名誉を甘受されることを、お覚悟しておられたご様子。

それよりは、まだよろしいのではないでしょうか」

伊達に長生きはしてないわね、さすが後天性年齢過多、とルティがティアだけに聞こえるように呟く。

伯爵は黙って聞いている。
視線を動かすことで、ティアに続きを促した。

お黙り、先天性胸部未発達症、とルティにしか聞こえないように呟き、ティアは促されるままに続ける。
「その上で、レイ様のご婚約を発表し、この地をお任せする。慶事はそれだけで人の心を高揚させます。そこへ……」
レイをちらりと見たあと、レイ様からの受け売りですがと断ってから続ける。

「関税の撤廃。特にボルビデュス領からの物流には二重関税になっていたと聞き及びます。
これでは商店が儲けを出そうとしたら、とんでもない高額な単価になってしまいます。
領内の特産品、これは原材料、加工品を問わずですが、これを脅かすものには、高額な関税でよろしいかと思いますが、それ以外の領内で生産できないものは、関税なしでも良いかと。
関税の考え方を変えても良いのではないでしょうか。
全ての品が、同率の関税である必要はございません。
関税を貴族の収入と考えるのでなく、領内産業の保護とお考えいただければ、ご理解していただけると思います」
伯爵は興味深そうに頷き、さっそく検討しよう、と言った。

「租税ですが、今この領地では、畑の広さから算出されています。ですが、ここに来るまで見てきた畑には、きちんと手入れされていたものと、岩や切り株が放置されたものとありました。
この両方が同じ収穫を得られるとは思えません。
調整が必要ではないのでしょうか。

おそらく、ですが、整備されていた畑は子爵様がお持ちの土地で小作人に使わせているもの、放置されている方は庶民の持つ土地なのではないでしょうか」

その通りだった。

アーガスは、地味の良いところは権威を盾に民から安く奪い取り、高い小作料を取って貸し出していた。

収穫が期待できないような土地は放置したまま、何の支援もしていないのだった。

鍛冶屋がいても原料となる鉄が関税のため高価では、耕作の効率を上げる農機具を安く作るなど無理な話だった。

道具を他領から求めようにも、同じく関税の壁が立ちはだかる。

馬は子爵家の乗馬と馬車用に徴発され、牛を養う牧草を生産できる土地はなかった。

人力で、さらに木製の手作りの農具で、岩と切り株に立ち向かっているのであれば、農地の開墾には多大な労力と時間が掛かるだけだ。

「牛馬、飼料にも関税を掛けず、さらにはレイ様が購入し、庶民に売るのです。

ただ、他の土地から持ってくるのでは施しになってしまい、庶民のプライドが育ちません」

伯爵とレイは感心して聞いていた。

庶民に領地経営の知恵がここまであるとは思っていなかったのだ。

アービィとルティは、魔獣に対する認識を改めた。さすが後天性年齢過多ね。

「なるほど、関税をそのように考えるなど、今までにないことだ。場所によっては十倍税、二十倍税が当たり前だものな。これでは庶民が必要なものすら買うことはできぬ。そうすると、通行税や渡橋税なども考え直す必要があるな」

アービィが何かを思い出したように話し始めた。

「租税は、穀物を作る者からは、その収穫物を徴税していますよね」

伯爵は首肯する。

「思いつきなので、いろいろと問題も出るでしょうが、農民がその年に食べる量以外を全て領主様が買い上げ、そこから税の分を引く、といったやり方はいかがでしょうか。

これであれば、商人に買い叩かれることもありませんし、保存の利く穀物であれば不作の年に放出して飢饉を防ぐこともできるのではないでしょうか」

充分検討するに値する意見だな、伯爵は頷き、他にはどうかね、と続きを促す。

「道や橋、そういったものは作りっ放しでは駄目だと思います。適切な補修が必要です。

そのために、通行税や渡橋税はなくす必要はないでしょう。

ただ、貴族の収入にしかならないと思われては反発を招きますので、この年この目的の税の収入はいくらで、それを何にいくら使ったか、民に知らせればいいと思います」

何も無税にしろとはアービィは思わない。

レイが言っていたとおり、公共事業に必要な税は取ればよい。

何事もバランスである。

税が、そのまま貴族の豪奢な生活にだけ使われていることが、問題なのだ。

ティアの話を聞き、夢で見た知識を少しずつ思い出していた。

「失礼ながら、昨晩のようなパーティーにお金をかけることは、一部の商人しか潤いません。
レイ様から伺った話ではありますが。
道や橋の補修、架け替えなどに、無職の者を使うことも良いのではないでしょうか。
現在の人頭税は稼ぎのない者からも税を取ります。
稼ぎのないものが払えるわけがない。いきおい流民が、犯罪に手を染めるものが増えます。
この者たちを伯爵様やレイ様が行う事業でお使いになれば、仕事を与えることにもなり、税も見込めましょう。
給金に税を上乗せした額で募集を行い、支払いの際に税を引いて渡すのです。
もちろん、説明の上で、です。
こうすれば税の取りっぱぐれもありません」
アービィは無意識のうちに源泉徴収を思い浮かべていた。

今まで伯爵領での土木工事は、私兵を使って行っていた。
有事以外に生産性のない集団の有効活用である。
これはこれで正しいのだが、固執する必要はないし、私兵と無職者を上手く組み合わせればいいのだ。

「税については、言いたいことはまだあるだろうが、この辺りにしよう。
いろいろと検討すべきことが多いな。
他には何かあるかね？」
税についてだけでも、もっと多くの意見を聞きたいところだが、他のことも聞いてみたい。

ルティはレイと話していたときに考えていたことを、纏まってはいないですが、と前置きして話し始めた。

「特産品の話が出ましたが、私たちはここの特産品を知りませんので、例えばの話で聞いてください。
他の領地でも簡単に買える物は、それほど作る必要はないと思います。
他で作れないものに力を入れる。農産物に限ったことではありません。
原料を持ってきて、作ったものを他領に売ればいいのではないでしょうか」
それは解っている。その作るものが解らないのだ

「パンは普通にありますよね？
チーズとトマトは？
あと、卵と砂糖はありますか？
アービィ、あれ作ってよ」

ルティに言われ、厨房を借ります、と言ってアービィが厨房に消えた。
暫くしてアービィは、見たことのない、両面が焦茶色で中は黄色いスポンジケーキのような物を運んできた。

「どうぞ。
名前は……何か閃きでカステラって言ってます。
卵と砂糖をよく混ぜて、小麦粉を入れてまた混ぜます。
型に入れてオーブンで焼けばできあがりです。
小麦粉は粒が固いものから作られたものの方が上手くできます。
混ぜ方や分量は料理人の皆さんに見ていただいたので、分かると思います。
もうひとつあるんですけど、パン生地ができてから……お昼に出しますね。
今は、とりあえずこれを食べてみてください」

伯爵が一切れ摘み、口に入れる。
ゆっくりと飲み込んだ後、無言でレイに食べるよう促した。

レイは一切れ、恐る恐る口にする。
しっとりとした歯触りに、適度な甘さ。
たった一口で、レイはこの菓子の虜になっていた。

ティアもまだ、ルティから聞いているだけで、アービィが作った菓子や料理は食べたことがない。
レイの様子を見て、期待いっぱいの顔で一切れ摘み、口に入れる。
「アービィ、何で今まで作ってくれなかったの!!?
ルティも、何で今まで教えてくれなかったのよ～。
こんなの食べたことないわっ!!」

ほぼ同時に、厨房と使用人の部屋からも、感嘆の声があがっていた。

「砂糖はこの辺りでは作られてないようですが、フォーミットより南の島ではかなり作っています。
そこからある程度まとめて運べば、料金も少しは安くできるでしょうし、あちらの農家と契約して伯爵領専用に作ってもらえるかも知れません」
ルティが砂糖の入手に関しても提案する。
「砂糖は高価だが……
これは優先して回す価値はありそうだな。
どうかな、レイ?」
「独り占めできないのが残念ですが、ラガロシフォン領内の菓子職人に伝えましょう。
作り方を言って回らなければいいんでしょう?」

レイがいかにも残念そうな表情を作り、全面的に賛同する。
「あとひとつが楽しみだな」
伯爵は、難問解決の糸口が見えたことが、嬉しそうだった。

「なんだね、これは！？」
昼食時、伯爵の声が食堂に響いた。

悪ノリしたアービィが、厨房から借りた調理服を着込んでサーブする。

テーブル上には、直径３０ｃｍ程の薄いパンのような物の上にトマトを煮詰めた物を塗り、チーズと干し肉、腸詰めや何種類かの野菜を乗せオーブンで焼き上げた物が幾つも並べられていた。

放射状に均等に切り分けられた物を、直接手で持ち口に運ぶ。

伯爵が唸り、レイは黙々と次々に口に押し込んでいく。
「乗ってる物が同じでも…んぐっ
生地が変わると……また……新鮮ね……」
食べるか喋るかどちらかにしろ、はしたない、と伯爵がレイを窘める。

「乗っている物は、チーズと相性の良いものなら何でもいいです。
海で採れるものも良く合いますよ。
イカとか貝が最高です」
満足げにアービィが説明した。
ティアも、初めて食べる、何でいままで、と同じことを言っていた。

パンと料理は別々に食べるのが、この世界の常識だった。
精々皿に残ったソースを拭うくらいだ。
生地に干し葡萄や木の実を練り込んでから焼くことはあっても、何かを乗せて一緒に焼くという発想はなかった。

「生地が薄い方は間食に、厚い方はそれだけで食事になるな。パンに肉、野菜も同時に摂れる。理想的だな。
が、今ここにあるものは、私には少々くどい。何もこの通りに作らなくてもよいのだろう？私には生地にトマト、チーズだけでも良いな」
伯爵は改良点を含め、感想を述べる。

レイは、アービィを料理人として雇いたいという誘惑と戦っていた。
「他にも乗せるものは、領内のパン屋や食堂に基本の作り方だけを教えて、あとはそれぞれの店で特色を出してもらいましょう」
ただ教えるだけでは、それ以上の発展はないとレイは考えていた。ヒントを与え、職人のプライドに賭けてみよう。領民たちには、職業に誇りを持てるようになって欲しかった。

「ところで、この料理はなんて言うのかね？」
伯爵の問いに、アービィは夢で見たことは話さずに答える。
「これも閃きなんですが、ピザっていいます。
あと、試してみたんですけど、いちいち生地を練らなくても、普通のパンに同じように乗せて焼けば、多少食感は違いますけどできますよ」

アービィは、山羊や水牛の乳からもチーズは作ることができ、そ

れを使えばまた違った風味になることや、今でこそチーズは他領から買っているが、将来自領内で牧畜が発展すれば、さらに安価に作れることなどを説明した。肉に旨みがなく、使役以外使い道がないと考えられていた水牛も、その乳をチーズの原料とするならば立派な資源になる。他の領で水牛の乳からチーズを作っていないのであれば、これも立派な特産品だ。

その他、水車を使った製粉方法、水道の敷設も提案する。

午後のお茶の時間が近付き、満足した伯爵は、最後にひとつ我が儘を聞いてくれんかね、と言って会談を切り上げた。

夕食時、アービィはまだ調理服を着ていた。

食卓には、アービィが指揮して作ってもらった料理が、並んでいる。

何れも夢の中で見たものだ。

中には作っている夢を見たものもある。

この世界にもフライパンや、炒める調理法も存在したが、中華料理のような豪快な炒め物という発想はなく、下拵えの範疇だった。

厨房にあるもので、アービィが作ったものは五品。

青菜と鶏肉の炒めもの。チキンステーキに青菜の茹で添えるメニューは普通にあったが、一口大に刻んだ鶏肉と青菜を合わせて炒めるという発想はなかったらしい。

芙蓉蟹。オムレツはあったが、何かを混ぜることはなかった。幸い近くの川では大きなカニが採れるらしい。片栗粉はなかったが、

コーンスターチがあったので代用する。

乾焼蝦仁。ケチャップは煮詰めたトマトで代用。エビも大きな種類しか使わないらしく、一口大にした。

青椒肉絲。この世界でも竹は普通にあるので探し出すことはできた。たが、食材として認識されていなかったので、説得が面倒だった。ピーマンは普通にあった。

卵炒飯。長ネギがなかったのでタマネギで代用。長ネギが流通する地方もあるらしいので、当地での栽培を提案した。

アービィは今まで知らなかったが、この世界でも一部の地域では稲作が行われていた。

ラガロシフォン領にも、小規模ではあるが稲作農家があったのだ。ただ、米を炊くと言う発想はなく、ピラフのように油で炒めて蒸し煮にし、サラダのように付け合わせに利用されていた。

アービィは夢の記憶を手繰り、飯盒を使って米を炊いたことを思い出し、適当な鍋で炊いてみた。

アービィが伯爵に頼まれたことは、できるかきりの料理だった。それも庶民がすぐにできそうなもの、と言う注文付きで。

醤油さえあれば、とアービィは夢の中でしか味わったことのない、しかしなぜか懐かしく、良く知っている調味料の不在に地団駄を踏む思いだった。

それでも、伯爵を始め全員から賛辞をもらえたので、満足することとした。

夢の中ではもっといろいろな調味料があり、味付けも様々だった。

醤油や味噌があれば、この世界の食事はもっとバラエティに富んだものになりそうだ。

アービィは、知る限りの料理と調味料の作り方を、厨房の職人たちに教えていた。

ラガロシフォンが世界有数の食の都として栄えるのは、さらに時代が下った別の物語となる。

こうして、思わぬ収穫をボルビデュス家にもたらしたラガロシフォン滞在は、まもなく終わろうとしていた。伯爵にさあ剣の稽古だ、と声を掛けられたルティを除いて。

第２０話

「クリプトさんっ！！
伯爵とレイ様をっ！！」
「お任せあれ！！」
クリプトが鋼線を引き出し、伯爵は剣を構える。

「ルティ、ティア、来てっ！！」
三人は無言で走り出した。

「速い……」
キマイラは蛇の尻尾でセラスを巻き取り、信じられない速度で森の中を走っている。アービィたちも必死に追いかけるが、キマイラは樹木などないかのように駆け抜けていく。

魔獣キマイラ。
三つ首の狂獣。ライオンと山羊と蛇の頭を持ち、ライオンの四肢、山羊の胴、蛇の尾が合成された不可解な魔獣だ。
北の大陸で初めて確認され、最近南大陸にも入り込んできたと報告されている。
地峡要塞で食い止められなくなっているのか、ラシアスの国力の低下を象徴する事例である。

森の中に突入しているため、既に伯爵たちから姿は見えない。
セラスからは見えているかも知れないが、少し離れてしまえば樹木が遮ってくれる。
アービィは今なら大丈夫だと判断した。

「ルティ、ティア、乗って！！」

アービィは瞬時に獣化し、二人は背中にしがみついた。
風を巻いて走り、一気にキマイラを追い詰める。

――追いついたらヤツを飛び越えるから、その前に飛び降りて追っかけて。

アービィはキマイラが見えてきたときに、ルティたちに念話で話しかけた。

二人から了解の返事が来たとき、キマイラのすぐ後まで追い付いていた。

――いくよっ！！

走る速度を落とした直後、二人の体重が背中から消えた。
その瞬間、アービィはキマイラを飛び越え、前方に出て振り返る。

キマイラは、蹈鞴を踏んで立ち止まり、ライオンの頭が低く不気味な唸りをあげた。
巨狼と魔獣が対峙した。

一瞬の間をおいて、巨狼がキマイラに走り寄る。
山羊の頭の突きと蛇の頭の噛みつきは無視し、ライオンの喉笛に食らいつく。
巨狼を引き剥がそうと、ライオンの腕を叩きつけ、掻き毟るが、巨狼の毛皮に阻まれ傷をつけることさえできない。
巨狼が首を振りたくると、キマイラは僅かな抵抗しかできず、ライオンの頭は沈黙した。

山羊の目に、恐怖の色が浮かぶ。
返す刀で山羊の首を噛み裂いた巨狼は、間髪を入れず蛇の頭を噛

み砕いた。

力なく倒れた胴体が、痙攣し始めセラスを締め抱えていた蛇の尻尾が弛んでいく。

ルティとティアが素早く尻尾を断ち切り、セラスを確保した。

セラスは失神しており、巨狼の姿は見ていない。

――今のうちに獣化解くから、着るもの頂戴～

情けない念話にルティが巨狼の鼻先にバッグを差し出すと、それを銜えてそそくさと繁みに消えていく。

ルティと巨狼が近付いたとき、セラスが起きる気配がした。

ティアは、さりげなくセラスの身体を抱え直してからその頸に手刀を落とし、セラスを再度眠りの淵へと突き落としていた。

「いくらムカつくからって、頸折っちゃだめよ、ティア」

「優しいと言って欲しいなぁ……

クライアント様の娘だもん、あんな怖いもの見せらんないでしょ」

ティアは少しずつ慣れてきたのか、アービィの獣化を見ても、気絶も腰を抜かしたりもしなくなってはいた。

背中に乗っているときは、振り落とされないようにすることで精一杯で、考える余裕もなかったし、今も危なかったが。

「また、迷惑を掛けてしまったな。

娘を助け出してもらって、感謝する」

野営地に戻ると、伯爵が深々と頭をさげてくる。

アービィたちにしてみれば、護衛対象を危機に陥れたとして、契約解除されても仕方ない失態だと考えていた。

しかし、伯爵にしてみれば、娘が護衛の言うことを聞かず招いた余計なトラブルだと考えている。

散々、馬車や火から離れる際には護衛の誰かに声を掛けるように言われていたが、セラスは深夜こっそり馬車を抜け出したのだ。

確かに年頃の娘が、例え繁みや岩を隔てたとしても、誰かに見守られながら用を足すなどは恥ずかしくて仕方ないのだろう。

ましてや相手は気心知れた家人や使用人ではない。

しかし、分からなくはないからといって、何をしても良いなどということはない。

家の中や周囲を護衛に固められた領内の集落の中ではないのだ。

明確な害意、殺意を持って向かってくる魔獣や野盗が相手なのだ。

貴族の立場を以てすれば、この世の全てが自分の思い通りになると勘違いしている娘には、良い薬になったことだろう。

もっとも、それは助かったから言えることではあるが。

もし、あの場でキマイラが少女を攫うと言う行動に出なかったら、いきなり喰らうという行動に出ていたなら、そう考えると幸運を思わずにはいられなかった。……ん？　「攫う」？

ルティとティアが、交互に『回復』をセラスに掛けている間、伯爵は深い思考の淵に沈んでいった。

レイは顔面蒼白でアービィたちの帰りを待っていた。

ティアに抱えられ、力なく腕を垂らしたセラスを見たときには、心臓が止まるかと思った。

それでも生きていることを確認できたときには、安堵と共に思わず泣き出してしまった。
仲違いしているようではあっても、やはり姉妹なのだ。

レイは、このできの悪い妹を愛している。
それ故にだろう、直して欲しいからこそ、口うるさくなってしまうのだ。
それが却って父の溺愛を呼び込むという、逆効果になっていることにレイは気付いていなかったが。

息を吹き返したセラスは、反省の色もなく護衛の三人を詰り始めた。
「なぜ、もっと早く来ないの？
あたしに何かあったらどうするつもりっ？
お父様、こんな役立たず、早くお払い箱にしてっ！！」
さすがにレヴァイストル伯爵も、この物言いには腹を据えかねたようだ。

「お前は……自分が何をしでかしたかもわからず、そう言うのか。
自力では何もできず、助けていただいた方に対し、そのようなことを言っていいと思うのかね？
一声掛けるだけの手間を惜しんで危機を招き、ここにいる全員に迷惑を掛けたという自覚はないのか？」
それでも声を荒げることなく、諭すようにセラスに言う。

「迷惑だなんて……
確かにお父様、お姉様には迷惑を掛けたと思うわ、ごめんなさい。
でも、平民どもになんで迷惑なんて掛かるのです？
私は伯爵令嬢です。

平民どもが尽くすのは当たり前ではないですか、違いますか、お父様？」

少し落ち着いたか、父に対しての言葉が丁寧になるが、あくまでも自分は悪くないと言う態度に終始する。

まだ何か言おうとした伯爵に背を向け、馬車に乗り込みドアを閉める。

そのまま毛布に包まって、レイが声を掛けても返事すらしない。

おろおろする侍女たちにレイが、気にしなく大丈夫、さぁ、寝ましょう、と言ってその場を治めた。

これ以上の襲撃はないと思われるが、念のためクリプトとティア、アービィとルティのチームで不寝番をすることになった。

この日の朝、アーガスにボルビデュス領への異動を申し付けた伯爵一行は、ラガロシフォン城を出発していた。

アーガスは納得しがたいという顔だったが、父の厳命とあっては逆らえず、城を明け渡す準備に追われているはずだ。

セラスは、仲の悪いレイが来るラガロシフォンにいても美味しいことはないと判断し、ボルビデュス領に帰ることをさっさと決め、馬車に便乗してきたのだった。

馬車の中でも我儘三昧で、平民と同じ場に居たくないと駄々を捏ねたため、面倒になったティアは御者台に移っていた。

昼食のため立ち寄った川の畔の休憩地でも、やれ天幕がない、テーブルがみすぼらしい、平民の癖に同じところで食事をする気か、と散々であった。

伯爵はこの末娘に甘いので、済まなそうではあるがアービィたち

に少し席を外してもらえないかと言ってきた。

さすがに残り物を喰えというほどのことはなく、食事は別の場所でほぼ同時に摂ることになった。

テーブルは一組しか持って来ていないので、アービィたちは川原に座って食事することになっていたが。

可哀相なのは侍女たちで、特段する必要もない給仕をさせられ、といっても後ろに立っているだけだったが、食事は後回しにされていた。

そんな状態でまともに野営ができるのか、心配していた矢先の魔獣による襲撃だった。

伯爵は、自分の教育の間違いを思い知らされたようで、かなり打ち沈んだ様子だ。

アービイたちも腹に据えかねる部分が多いので、どう慰めていいかわからず、黙々と護衛の任をこなしていた。まだあと二泊もあるのね……

翌朝の出発時、ティアがセラスに言った。

「ねぇ、セラストリア様。

領民の皆さんが尊敬しているのは、間違いなく、お父様ですよね。

いろいろと民のために頑張っていらっしゃる。

だからだと思うんですよ。

あなたは、民のために何かなさいましたか？

それで、尊敬を得られるとお思いですか？

民はあなたの奴隷じゃないし、税はあなたのお小遣いじゃないんですよ」

セラスが顔を真っ赤にして何か言おうとしたときには、ティアは御者台に登ってしまっていた。
追いかけようとしたセラスを伯爵が止め、馬車は走り出す。
馬車の中でセラスがティアについて伯爵に散々文句を言うが、伯爵は既に聞いていない。

日中は無事に行程をこなし、ボルビデュス領まであと一日という、最後の野営。
セラスは、まだいかに自分が優れているか、アービィたちに力説していた。
話半分以下で聞くにしても、そろそろ疲れが見え、全員の集中力も切れかけていた。

そろそろ寝る、という時間になり、各自が寝床を設えているとき、クリプトから警戒の声が上がった。
その時点でアービィは既に短刀を抜き、闇に向かって身構えている。
「いつもながら、お見事ですな」
クリプトが賛辞を述べ、鋼線を引き出した。

見上げるような熊が、闇の中から姿を現す。
いつぞや倒して小遣い稼ぎになった熊と同種のものだ。

今回もクリプトが鋼線で動きを止め、アービィが切り掛かり、ティアが弓で援護する。
前回と違い、ルティの剣の腕が上がっているので、倒すことは難事ではない。

前肢二本を切り落とそうとしたとき、後ろから女の子の叫び声が聞こえてきた。
別の襲撃かと思い、慌ててアービィが振り向くと、剣を振りかざしたセラスが走り込んできた。手柄立てたいんだね～。

意図を察知したアービィがセラスを通す。
クリプトが鋼線を引き絞り、万が一にもセラスに攻撃がなされないように前肢を切断した。
ティアは熊の目を狙い、弓を射掛ける。

血飛沫が飛び散る中に突入したセラスは、思い切り剣を振り下ろした。
熊は殴り倒そうとした腕がなくなった勢いで態勢を崩し、セラスの剣を真正面から受ける。

非力ゆえか、熊の身体を切断するには至らず、肩口から腹部に掛けて深い裂傷を負わせるに留まった。
反撃を恐れたアービィが、後ろから熊の首を一刀で切り落とした。

重い音を立てて熊の首が落ち、切断面から血が噴き上がる。
セラスが切った部分からは腸が零れ落ち、熊はそのまま前のめりに倒れ絶命した。

「あいかわらず、すごい切れ味ですね」
アービィがクリプトに賛辞を送るが、クリプトはそれどころではないようだ。

見ると、セラスが胃の内容物を吐き散らし、全てを吐き出してもまだ吐き気が止まらないようだった。
うずくまり、下を向いてえずき、咳き込んでいる。

「どうしたの？」
アービィが問いかけるが、胃液を吐く音で返された。

「刺激が強すぎましたかな」
クリプトには判っていた。
この少女は、敵を倒し、殺すことは、物語や人伝の話の中でしか見聞きしたことがないことを。
「いきなり、血まみれになって、腸を目の当たりにしてしまいましたからな。
ご無理だったのでしょう。
早めにお休みいただかないと、心が折れます」
昨夜の汚名返上を試みたが、やはり命の遣り取りは重荷だったのだろう。

アービィは、セラスを気の毒だとは思ったが、考えていたことを思わず口にしてしまった。
「セラストリア様、大丈夫ですか？
領地が魔獣や野盗に襲われたとき、先頭に立つのが貴族です。
こんなことで吐いていては、お父様のように尊敬を得られるとお思いですか？
夢のまた夢ですよ」

私が剣を振るうわけじゃない、私は兵に命令すればいいんだ、兵が私の命令どおり動けばいいんだから、と言い返すセラス。
顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっている。

「でもですね、兵が切った敵を見て吐いちゃってたら、どうなります？
その間、命令がなくなっちゃいますよ。

その隙に攻め込まれちゃって、まだ吐いてたら、ああなるのはセラストリア様じゃないのかなぁ？」
アービィは、熊を指差して言った。

セラスが熊に刻んだ傷口からは血が流れ、毛皮の下の黄色い脂肪層が覗いている。
その下にはピンク色の肉が見え、間から腸が零れ落ちている。
それをもう一度見て、また吐き気を催したセラスは、早く片付けて、そんな気持ち悪いもの、と叫ぶ。

「あれ、セラストリア様は、肉をお食べになったことはないんですか？
臓物料理も？
あれですよ、あれ。
気持ち悪いなんていったら罰が当たります」
そこまででご勘弁を、とクリプトが慌てて割って入り、その場を取り繕う。

クリプトがセラスを馬車に送っていく間、アービィとルティ、ティアは、熊の死体を運びやすいように分解し始めた。
「アービィ、よっぽど腹に据えかねてたのね？
あそこまで言っちゃうなんて、珍しいわ」
ルティが言う。

「へ？
僕は、特になんとも思ってなかったけど。
本当に大丈夫なのかなぁって。
随分と勇ましいこと言ってたじゃない？
このまま兵を率いることになったら、と思ったら、心配になっち

やったんだよ」

天然、恐るべし。

この場合、難詰するよりもキツイ攻撃だっただろう。

プライドの高い人間は、心配や同情を何よりも嫌う。

解っていてやるなら嫌味な奴とでもいえるが、アービィは純粋に心配していたようだ。

到着まで、まだひと悶着ありそうね、とルティは思った。

第２１話

セラスにとって、悪夢のような夜が明けた。
読んだり聞いたりした物語には、書かれていないことばかりだった。
当然のことだが、セラスが読むような子供向けの物語で、死体の詳細な描写を入れるものなど皆無である。

無敵の英雄が、敵を薙ぎ倒し、お姫様を救い出す。
その中にも無数の死が描かれているが、絶対的な悪に描かれたキャラクターは、ただ倒れ伏す。
敵役は、あくまでも憎らしく描かれ、そのような人物や魔獣に憐憫の情を抱く者など居はしない。

英雄の慈悲を強調したい場面を除き、無惨に切り捨てられるだけだ。
が、そこには血や、簡単な四肢の切断程度の描写こそあれ、ビジュアルに訴えるような、それこそ昨夜の熊のような腸がこぼれ落ちるような描写は、ない。

セラスは、戦いとはもっと容易いもので、自分は格好良く美しく終わり、周囲からは感嘆や畏怖を込められた賛辞で飾られるものだと思っていた。

それがどうだ。
熊に一太刀浴びせることはできた。

全てが自分の力ではなく、アービィたちが弱らせ、クリプトが前

肢を切り落としていたからこそだ。
だから、自分は無傷で済んだのだ。

当然、あとはトドメだけという安心感も、トドメを刺す栄誉を得たいという打算があったことも否定できない。
熊の状態を鑑みれば、残る脅威は牙だけだった。
美しく、華麗に、造作もなく熊を一刀両断にしたはずだった。セラスの中では。

それがどうしたことだ。
太刀筋はいい加減でまぐれ当たりの袈裟懸け。

当たったから良いようなものの、それでもトドメにはほど遠い。
アービィが熊の首を落としてなければ、自分は噛み砕かれていたかも知れない。

その後、目の当たりにした血飛沫と腸。
あんなにグロテスクで吐き気を催すものが、この世にあったのか。
あろうことか、アービィがそれを指さし、あれは食べ物だと言った。

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ。

あれが美味しいわけがない。
皿に乗ってくる料理になるはずがない。
平民が喰らうものと、私の食べるものを一緒にするなっ！！

セラスは、朝が来ても目が覚めなかった。
起床はしている。

が、全てが虚ろだった。
食欲などきれいさっぱり消し飛んでいる。
朝食は干し肉をかるく炙ったものとパンだが、肉を見た途端に熊の肉の断面を思い出してしまい、また吐き気がこみ上げてくる。

青い顔をして座っているセラスを見て、ルティがアービィを肘でつついた。
「やり過ぎだったんじゃないの？
肉見た途端顔色真っ青よ」
「ん？
ああ、やっぱり干し肉ばっかりじゃイヤになっちゃうよねぇ」
……ぼけ狼……

「セラストリア様、お食事がお気に召さないようなら、少しお体を動かしに行きませんか？」
アービィは、目で伯爵に同意を求めながら、セラスに話しかけた。

「イヤよ。まだ寝ていたいだけなんだから……」
「そう言わずに行ってくるといい。
食事は、また後でも構わないからな。
あとは城に着くだけだ。
そう時間も掛からん」
伯爵はアービィの真意を悟ってか、あっさりと許可を出してしまった。

急いで朝食を胃に納めたアービィは、嫌がるセラスの手を引き、野営地を離れる。

「イヤ、止めてよっ！！
平民が気安く触るなぁっ！！」
文句を言うが、アービィは全く気にせず引きずって行ってしまった。

「ティア～、弓借りるよ～」
ティアの返事を聞き、御者台に置いてある弓矢を取り、森に消えていった。

アービィの意図をようやく悟ったルティが、慌てて追いかける。
ティアも立とうとしたが、税制の件でふと何かを思い付いた伯爵に引き留められていた。

森に入って少し歩いたところには泉があり、渡りに少し遅れた鴨が数羽水辺を歩いていた。
セラスに静かにしていて、と言ってアービィは弓に矢をつがえる。

空気まで引き絞るような緊張感にセラスは息を呑み、ついアービィの指示に従ってしまった。

息を止めて狙いを定め、矢を射る。
弓を離れた矢は狙い違わず、一羽の鴨の腹を貫通した。
他の鴨が飛び立った後、アービィは獲物を回収した。

側の木の枝に頭を下にして鴨を吊し、頭を切り落として血抜きをし、羽をむしった。
セラスは言葉もなく、青い顔で見ている。
そこへルティが到着し、アービィに文句を付け始めた。
「何トドメ刺してんのよっ！？

いくらなんでも可哀相じゃない！！
ただでさえ食事も取れないのよ！！
追い打ち掛けてどうすんの！？」

「まあまあ、大丈夫だよ。
セラストリア様はお強いから。
ちょうど良かった。
あとひとつ採ってくるからさ、お湯沸かして持って行っててね～」

ルティの追求を軽くかわし、またセラスの手を引き野営地へと戻る。
鴨を適当に吊るしておき、今度は川の側まで来て全体を眺めた。

グラースの支流で、東の海に注ぐ川らしい。
水深は膝程度と浅いが、水量が多く流れは重い。
何ヶ所かは浅い瀬になっており、岩が顔を覗かせている。

アービィは瀬に入り、岩の下を片端から探り始めた。
瞬く間に数匹のカジカを掴み出し、セラスのいる河原に放り投げてくる。

皿に乗った調理済みの魚しか見たことがないセラスは、足下で跳ねるカジカを不思議なものを見るような目で見下ろしていた。
鴨とは感覚が違うのか、先程のような嫌悪感はなく、好奇心に溢れる少女の目に戻っている。

「こんなもんあれば、充分かな
戻りますよ、セラストリア様」

野営地に戻ったアービィは、カジカを捌き始める。
セラスはまた血を見るのが怖いのか、その場を離れようとするが、伯爵に止められてしまった。

アービィは手際よく処理している。
鱗を剥き、頭を落として腸を引きずり出す。
「ほら、セラストリア様、昨日見た熊の腸のミニチュア」
ひぃっと小さな悲鳴を上げるセラスに苦笑しつつ、腸から胃袋と肝臓だけ取り分け、桶に汲んできた水できれいに洗う。

ルティはアービィが何を作ろうとしているかすぐに分かったので、火を熾し、鍋に湯を沸かし、岩を灼いていた。
アービィは悪意でも荒療治としてでもなく、セラスが食事を摂れないのは、単に干し肉が口に合わないか厭きただけだと思っている。
純粋に善意だけで動いてるからなぁ…止めても無駄だろうし、大好物だし。

カジカの頭を半分に割り、ぶつ切りにした身と胃袋、肝臓と一緒に強めに塩を当てる。
そして、お湯が沸くのを待ち、沸騰したお湯で霜を降った。
この間にルティはタマネギとショウガをスライスしている。
霜を降ったカジカを沸いた鍋に入れ、白ワインとショウガ、塩を入れ、再度沸騰したところでタマネギを放り込み、煮え立たないように火から遠ざける。

アービィは、続いて鴨を捌く。
手早く解体し、肉は部分に分け、ワインと塩に漬けた。
レバーや砂肝は、水に晒して血抜きする。

ティアは、料理の出来が担保だからね、とブツクサ言いつつも水汲みに川へ何度も行っていた。

ササミの部分は別に取り分け、灼いた石に乗せ、軽く両面に焼き色を入れた。

血抜きし塩を振ったレバーは、暫く火を通し、砂肝は竹を割いて串を作り、熾火にかざして塩焼きにする。

焼き色を付けたササミは薄くスライスし、手持ちのショウガとニンニクを潰して刻んだものを添え、レモン汁に塩を溶いたものと合わせて出す。

カジカの潮汁は、塩で味を整え、椀にとって出した。

アービィは、醤油とワサビが存在しないこの世界、おろしがねを持ち合わせていないこの状況を呪った。この三つがあれは思い残すことはないのに～

腸を見せつけられたセラスは、昨夜の記憶と生理的嫌悪感が沸き上がり、危うくまた吐くところだった。

伯爵は、セラスの様子を感じ取り、肩に手を置き力を込める。

肩から暖かみが全身に伝わるようだった。

そして、いつの間にか側に来ていたレイに手を握られると、セラスは不思議と心が静まるのを感じていた。

「さぁ、それなりに上手くいったと思いますよ。
みなさん、どうぞ」

躊躇うセラスを伯爵が励まし、食べるように促す。

「イヤ……

だって、さっきまで生きてたのよ、この鴨も魚も。
可哀相じゃないのっ！！」

「セラストリア様。
あなたがいつも召し上がっている肉や魚だって、そこに来るまでは生きていたんですよ。
ただ、目の前で死んでないだけです。
私たちは、生き物を食べないと生きていけないんです。
他の命をいただいて生きているんです。
可哀相なんて、ただの感傷。
食べてください。でないと、この鴨も魚も無駄死になってしまいます。
命は続くんです。たとえ死んでも、食べた人の、生き物の血肉になって続くんです」
ルティがセラスを諭す。

「でも、可哀相なものは可哀相なのっ！！
あたしは、こんな可哀相なものは食べられないわ。
……これからは野菜だけ食べる……」
まだ抵抗するセラスの言葉に、ティアがついに怒った。

「何甘ったれてるの！！？
何が可哀相よ。
今まで散々食い散らかしてきたくせに。
今度は、野菜だけですって？
なんて思い上がり、なんて偏見。
野菜だって生きてるのにっ！！
ものを言わないだけで、植物だって一所懸命生きてるのよっ！！
見て御覧なさい、一本の木で葉っぱが重なる？
自分の身体に、しっかり陽の光が当たるようにしてるの。

だから森の植物は光を求めて、他の樹より上に行こうと競争してるのよ。
何でだと思う？
生きてるからよっ！！」

「……」
まさか叱られるなんて思っていなかったセラスは、目を見開き、ティアの言葉を聞いていた。
助けを求めるように伯爵やクリプトに視線を送るが、返ってきたのは厳しい視線だった。

まさか、誰も自分の味方をしてくれないなんて……
お父様まで……

さすがにティアの言葉に納得できる部分があったのか、黙ってササミのタタキに手を伸ばす。
賛辞を述べては負けと思っているのか、黙って食べ続けるが、手が止まることはない。

ついでカジカの潮汁に手を伸ばし、椀を覗くと、二つに割られたカジカと目が合ってしまった。
声にならない悲鳴を上げ、椀を落としそうになり周りを見るが、それを責める視線はなかった。

「魚ってすごいですよね。
例え全身そのままで出てきても、グロテスクに思わないのって魚くらいですからね～」
のんびりとアービィが言う。

確かに、豚や牛、鳥の丸焼きは、人によっては生理的嫌悪感が先に立つかも知れないが、魚の塩焼きにそれを抱く人は、まずいない。

「目玉の周りと、頬の肉が旨いんですよ。
いつも動かし続けてるからかな、いい味なんです。
あと、骨周りも旨いんで、食べにくかったら手で持って齧っちゃってくださいね」

なんだかんだいって、アービィの言うとおりに食べるセラス。

きれいに食べつくした後、セラスは何も言わず馬車に乗り込んでしまった。

少しだけ穏やかな表情で。

「アービィは伯爵家の専属料理人になるべきよ。
うん、給金も期待して良いわよ」

馬車の中では、アービィを引き留めたいレイとの攻防が続いていた。

あれから一言も喋らないセラスだが、アービィの作った料理を平らげた後、彼らを見る目には嘲りや見下しは含まれていない。

態度を崩すことはなかったが、それは彼女の精一杯の抵抗だったのだろう。

道の彼方にボルビデュスの城壁が見えてきた。

護衛の旅が終わろうとしている。

第２２話

カレイジャス・ヴィンテグティブ・インプラカブル・バイアブランカ王は、一枚の報告書を前に考え込んでいた。

豪華だが、嫌味のない上品な調度品に囲まれた王の居室。

今ここには王以外の者はいない。

扉の外に衛兵が二名、影から王を警護する間者が天井裏に数名いるだけだ。

レヴァイストル・シンピナートゥス・ヴァン・ボルビデュス伯爵より送られてきた、アーガストル子爵の異動願いに添えられた、文字のような記号のような痣を持つ少年についての報告書。

王は、ラシアス王国の第一王女であり、現摂政ニムファ・ミクランサ・ミリオフィラム・ネツォフ・グランデュローサ王女から十年ほど前に送られてきた、一通の依頼書について思い出していた。

十代後半から二十代前半の黒髪に黒い瞳、文字のような記号のような痣を身体のどこかに持つ男性を探している捜索隊の便宜を図って欲しい、そしてその内容で触書きを出して欲しいとの依頼書だ。

当時ラシアス王国に放っていた間諜からの報告では、彼の国で勇者の召喚魔法を行使したというものがあった。

おおかた、北の民への対抗策のうちのひとつであろうが、相手に王がいない以上、個人を召喚してもあまり意味がない。

いくら武勇に優れた勇者であっても、大軍にひとりで対抗することはできないからだ。

もちろん、ラシアスが公式にそれを認めることはないが、当然他の国でもこの情報は握っている。
幾度かあった公式の表敬訪問時に、健在であったロベリア＝グランデュローサ王に、オフレコで聞いたことはあったが、認めるはずもなかった。

そして、レヴァイストル伯からの報告書。
痣という点では合致しているが、年代が合わない。
それに痣といっても報告書の文面だけでは、形まであっているかの確証は得られない。
何かの手違いか、欺瞞か。

北の大陸の奥地に魔王が降臨して北の民を圧迫し、それが南大陸への侵出を誘発しているのでは、という報告もある。
降臨したのか、隠れていたものが顕在化したのかは判らないが、魔獣が活発化した時期とほぼ同じ頃だ。
であれば、その魔王を倒すことで北の大地を安定させ、南への圧力を軽減させようという戦略ならまだわかる。

ラシアスの勇者が魔王を退治し、大陸の平和を取り戻す。
魔王に打ち勝った『勇者』を倒せるものは、おそらくこの世にはいないだろう。
そして、その『勇者』という最終兵器を手にした国が、大陸の覇者に一番近い位置にあるのは自明の理だ。

さらに、北の大地を安定させ、南大陸の平和を取り戻したという功績は、両大陸を制覇する上で何よりもの大義名分にできるだろう。

ラシアスは今苦境に立っている。
十五年前までは、他国からの好意的な援助だけで、北の脅威に立ち塞がっていた。
十五年前、ラシアスでクーデターまがいの政変があり、一時的にとはいえ国は大きく揺れていた。
数年で国内の混乱を収拾しきったロベリア王の手腕は見事であったが、これを期に健康の不安が増したという。
その頃から北の奥地に魔王が降臨したという噂が、広まり始めていた。

ちょうど勇者を召喚した、という時期に一致する。

現在のラシアスは、前年に健康不安の増したロベリア王が国の象徴へとその立場を落とし、ニムファ第一王女が摂政として政治の実権を握っている。

ここ数年はラシアスの勇者捜索隊が国に入ってくることはなくなっていたが、あの権力欲と征服欲の権化のようなニムファがこのままおとなしくしているとは思えない。
当時十三歳の小娘が国を憂いた結果の行為であったとしても、現在は二十三歳になった一国の元首が弄ぶには強力過ぎる玩具と言わざるを得ない。

どうやら十年の時を経て、どこにも勇者が現れたという報告がないということは、勇者の召喚は失敗したか、召喚されたとしても、勇者は今のところ自らの立場を理解することなく、覚醒することもなく、市井の人として暮らしているのだろう。
そもそも報告書にあった若者が、そうだとの確証もない。

カレイジャス王は、長い思考の後、宰相ウルバケウス公爵を呼び出した。

王は黙してレヴァイストル伯からの報告書を、宰相に手渡した。

宰相が読み終え、何も言わずに報告書を王に渡す。

他言無用であると王は言い、報告書に火を付けた。

夕刻、王は二通の命令書を用意していた。

一通は、王直属の間諜部隊に対するもので、少年たちの素性調査と安全確保、他国の手に落ちそうな場合は身柄の確保と万が一の場合は殺害することが記されている。

これは宰相を通すことなく、直属の部隊長に手渡される。

万が一、他国の間諜が紛れ込んでいるとも限らないので、言葉は一切発することなかった。

そして、もう一通、宰相に手渡された命令書は、レヴァイストル伯に少年についての詳細な報告と監視、そしてこれからの動向の詳細な報告、万が一の場合の確保を命じることが記されていた。

無言で一読した宰相が蝋封し、王が指輪を蝋に押し当てる。

王は、アービィたちが国外へ出ることを、止めるつもりはない。

おそらく、まだ他国の間諜は、アービィたちの存在には気付いていないだろう。

それを態々事を荒立ててまで、知らせてやる必要はない。

間諜の監視をつけておけば充分であるし、他国へ行ってもそれは同じだ。

それに、何者かに殺されるようなことであれば、『勇者』として

の器がなかったということで、そこで終わりだ。

『勇者』は扱いによっては、国を滅ぼす劇薬ともなりかねない。

『勇者』を欲しがる他国の間諜と、無用の暗闘を行ってまで国家間の摩擦を起こす必要は認められない。

『勇者』を以って大陸を統一したとしても、飼い慣らせる保証などないし、飼いこなせるとも思わない。

いつ王国に牙を剥くかも分からない、そのような『危険物』を国内におく必要はない。

ただでさえ、国の運営が難しくなったこの時期に、あまり多大な労力を裂いているわけにもいかなかった。

ラシアスから依頼のあった義勇軍と諸侯軍の編成や、指揮官の任命。

それに伴う予算の組み換えに伴う混乱の収拾と調整や、増税に伴う諸手続き。

王とはいえ独裁者ではないので、何から何まで自分の好きにできるわけではないのだ。

指揮官の人選は難航しているらしい。

他薦自薦が入り乱れ、軍務卿ボナリエンス公爵へ面会を願うものが後を絶たず、軍の政務が滞ってしまっている。

指揮権をその手に握ろうとしている、一部子爵クラスの青年貴族を中心としたグループの突き上げが激しくなっていた。

諸侯軍で勇名を馳せ、国内での勢力を伸ばすことを画策しているグループだ。

派遣軍の指揮権を握り、さらには連合軍の指揮権を狙っている。

あわよくば北の大地にまで攻め入り、その功績を元に帰還後の発

言権を強めようとしていることは明白だ。
他国との協調すら危うくしかねないグループだが、単に排除してしまっては諸侯軍が軍事力として成り立たなくなってしまうことも、軍務卿の胃に穴を開けようとしていた。

単純に考えれば、派遣される諸侯の中で最高位のものが指揮権を持てばいい。
しかし、公爵は、軍務卿である自分を含め国政の中枢を担っている。
その者が義勇軍程度の重要性の低い任務で、国を離れるわけにはいかない。

侯爵も、大臣ではないにせよ、国政の中で重要な地位を占めているため、同様に派遣するわけには行かない。
レヴァイストル等の伯爵は、国にとって重要な地域の領主である者が多く、こちらも長期間領地を離れさせるわけには行かない。
いきおい男爵か子爵となるが、この人選が問題だ。

男爵のような下級貴族では、他国の指揮官と衝突があった際、なかなか強気には出られない。
派遣軍のイニシアチブを最初から求めないというのであれば、それでもいいかもしれないが、国と王の面子がそれを許さない。
ある程度他国に対し強く出られる人物であっても、公爵の軍は指揮に従わないことも考えられる。
そこで親の権勢を後ろ盾にできる子爵が妥当、ということになる。

ところが、公爵の子息たる子爵は、次期大臣として国政に携わっている。侯爵子息も同様。
では、伯爵子息に人物がいるかというと、たとえ人物が優れていても、これもまた公爵の軍が指揮に従わないという危険性もあった。

従って、五大公爵家のうち誰かが貧乏くじを引くことになり、それは他の大臣から目の仇にされているハイグロフィラ家になりそうだ。

だが、あからさまな人事もできないため、ボナリエンス軍務卿としては、ハイグロフィラ財務卿から言い出すのを待っている状態だった。

その財務卿ハイグロフィラ公爵からは、派遣軍は諸侯軍主体にして欲しいとの意見が上がっている。

義勇軍は、国の常備軍ではないが、予算は国家予算から出すしかない。

いくらかの寄付を募ることも可能だが、それだけで軍が動くほどの資金を集められるはずがない。

平民が主体の義勇軍であるため、装備を個人負担にしてしまっては、碌なものは期待できない。

よくて鋳造大量生産の剣、甲冑を所有している者など、ごく僅かだ。

そんな軍を国外に出すことは、国のメンツに関る問題になってしまう

さらには、給金も支払う必要があるだろう。

国に差し迫った危機があると認識している者は少ない。

兵のモチベーションは、給金によってあげるしかない。

給金を餌に兵を募れば、食い詰めた者や犯罪者が紛れ込まないとも限らない。

そのような者たちが、いく先々で略奪や諸々の犯罪行為に走らな

いとは限らないのだ。
それこそ、国の面子どころか、国の威信、信用に傷を付けかねない。

それでも義勇軍は出せません、では、他国への面子もあるので、他と同規模の軍を組織することは止むを得ない。
そのために割く予算は膨大なものとなり、当然予算を切られる部門は常備軍だけにとどまらず、様々なインフラ関係にまで及び、今度はそれでは国の運営が成り立たない。
一律のシーリングで決まるような単純な話ではないので、書類上の金の移動に彼の部下は疲弊しきっている。

いきおい増税となるが、北の脅威が身近でない国民にはその必要性が認識され難く、国民の説得も押し付けられた財務卿は、自身の胃の耐久テストをさせられている錯覚にとらわれていた。
また、自ら派遣軍は諸侯中心でと言い出した手前、子息ランケオラータ・アンガルーシー子爵が派遣軍指揮官に立候補することを求められている雰囲気だ。

外務卿クリナム公爵は、他国の義勇軍の規模や、準備の進捗状況を探り、同時に協議させられている。
何れの国も腹に一物を隠し持っており、でき得る限り自国の負担を減らしたい。
当然といえば当然だが、自国負担を減らすというよりは、他国により多くの負担を負わせ、国力を削り取ってやろうというのが本心だ。

外務卿は、胃に穴が開きそうな熾烈な外交戦を続けており、彼の部下には過労で倒れた者や暗殺されたと思われる者すら出ている。

同時に他国に通じている者や、ハニートラップなどに引っ掛かり情報の漏洩を強いられている者もおり、その対策にも頭を悩ませている。

内務卿アポノゲトン公爵も国内治安の維持や、他国の間諜の摘発のだけではなく、国内産業の育成保護などにも労力を割かれている。万が一、他国との戦争になってしまったり、北の大地に攻め込むことになっては、貿易立国のインダミトは、破滅しかない。

現状では資源の採掘や、加工するための工業が発展していないのだ。

周辺住民や流域諸国の反発を抑え、いかに一国内で総力戦を戦えるだけの産業を興すか、内務卿の手腕に懸かっている。

財務卿からは、予算の組み換えが伝えられ、両者の部下たちは折衝を繰り返している。

お互いの言い分は判るが、お互い譲れないところはあるのだ。

ラシアスに破綻されては大陸防衛の負担が増えるだけなので、できる限り援助で済ませたい。

この一点では意見を同じくしているが、両者の思想の違いや実情を絡めた意見の相違が、予算編成を困難なものにしていた。

王はなんとか国をまとめる努力をしているが、視野狭窄の跳ね返りどもの独走をいつまで食い止めていられるか、心もとないものもあった。

レヴァイストル伯爵による王への報告は、別にレヴァイストルがアービィを売ったというわけではない。

臣下として、当然の行動である。

アービィがどのような戦略的価値を持つかは、人探しのお触書からでは解らないが、お触書が出るほどの何らかの価値はあると解る。年代が違うという点を含め何かの意義はあるだろう、それを判断するのは王室だと考え、報告書を認めたに過ぎない。

犯罪者であるならすぐにでも捕縛するのだが、情報を求めるだけで捕らえろとかの命令が入っているわけではなかったはずだ。

今後、勝手に解釈し、捕らえるなり殺そうとする者が出るかもしれないが、他領に入ってしまっていてはレヴァイストルにはできることは少ない。

保護するという選択肢もあったが、他国が絡んでいる以上領民を危険にあわせる可能性に手を出すわけにはいかない。

個人的に好感をもった若者にレヴァイストルができることは、今現在を不自由なく過ごさせることしかない。

一個人としての友情よりも領民の安全、封建制度下では王への忠誠が優先されるからだ。

王が捕らえよといえば捕らえなければならないし、保護しろといえば保護しなければならないが、できることなら捕らえるということはしたくない。

万が一、納得できない理由で命令が来てしまった場合、どうやって彼らを逃がすか考えておく必要はありそうだった。

入れ違いで旅に出た、とでも言うしかないのだが。

とりあえず、王宮から何らかの返答が来るまでは、アービィたち

を確保していなければならない。
ただ、ここにいろと言っても彼らには目的があり、数日の歓待以上に留めておく理由が見つからない。

レイは料理人としてアービィを引き留めたいようだが、それは既に断られている。
ならば、と伯爵はいろいろな討伐を、地元のギルドを通して依頼していた。

これであればアービィたちに断る理由もなく、ラシアスにある火の神殿へ行くまでの旅費稼ぎとして、毎日のように依頼をこなしている。

十日ほどして、早馬が王の命令書を携えて戻ってきた。
王の命令は、報告義務はあるものの、レヴァイストルに裁量権を与えるものでもあった。

王からの命令書が届いた翌日、アービィたちは伯爵を訪ねていた。
伯爵領到着当初はボルビデュス城内にやっかいになっていたのだが、ギルドへ行ったり討伐に出たりには、何かと不自由が多く、三日前から城下に宿を取っていた。

いつまでも伯爵領でやっかいになっているわけにもいかず、そろそろラシアスに向けて旅立つことを伝えに来たのだった。

「伯爵、大変お世話になりましたが、僕たちはそろそろお暇しようと思います」
アービィが代表して切り出した。

「そうかね、いよいよか。
君たちにはこちらの方が世話になった。
護衛としてはもちろんのこと、ラガロシフォンのことや、セラスのことでな。
いくら礼を言っても足りないくらいだ」

「いえ、伯爵。
あたしに剣のご指導をいただいたり、クリプトさんにはティアが弓をご指導いただいたりと、こちらこそお礼の言いようもありません」

ルティは、アービィを守れる力になれそうな自分に成長できた今回の旅に、心から感謝していた。

「実は、あたし、ある理由からお金を貯めなければならなかったんです。
ここに滞在している間、仕事の斡旋までしていただいて、本当に助かりました。
普通にギルドに通うだけでは、こんな良い仕事は取れなかったと思います。
それに宿まで口利きをいただいてしまって、ありがとうございました」

ティアはラミアのティアラを買うための貯金ができたことを、素直に喜んでいた。さすがに何を何のために買うかは、言えなかったが。

「いつ、出立するのかね？」
伯爵は、王に報告するための情報収集を兼ねて訊ねた。

「討伐の仕事が明日完了しますので、二日ほど休養がてら物資を買い集め、四日後の朝、出立しようかと思っています」

また二人が飲んだくれて寝坊しなければ、ですがとアービィは答えた。
テーブルの下で力一杯アービィの足を踏みにじりながらルティとティアは首肯していた。

「そうか……
では、ひとつ提案なんだがね。
明日は宿にいてもらうとして、その後はまた城に来ないか？
いや、実はもう一度君の料理を味わいたくてな。
ウチの料理人たちにもな、覚えて欲しいのだよ。
旅に必要な物は、その講習料代わりに私に用意させてくれ。
そして最後の夜は、ささやかだがパーティーをやらせてはくれないかね？」
思わぬ伯爵の提案を、アービィたちは恐縮しながらも、ありがたく受けることにした。

討伐の仕事を全て終わらせ、ギルドから報酬をもらったアービィたちは、その足で酒場に繰り出した。
「ティア、昨日伯爵に言ってたお金を貯める理由って、やっぱりティアラのことでしょう？」
ルティが訊ねる。

「そうよ、やっぱり、あれがないと、あたしはあたしじゃなくなっちゃいそうで……
不安なのよ。
お守りみたいなもんだから」
ティアは眠そうな目で答えた。

「あると、いいね。

あまり店に並ぶことないみたいだもんね。
ごめんね、取り上げるようなことしちゃって」
ルティは殊勝な顔で謝る。

「それはいいのよ。
そのお陰でこんな楽しい旅に付き合えることになれたんだもん。
感謝してるのよ、あたしは」
ティアは心底嬉しげにルティの肩を叩きながら言う。

突然、テーブルに頬杖をつき、半分寝ながら話を聞いていたアービィが、態勢を直して大きな声で喋り始めた。
「そうだよね～
やっぱり、ラミ――あぴぃっ」
慌ててティアがアービィの口を塞ぎ、ルティが空いた木皿で後頭部を痛打する。

皆まで言わせず、テーブルに突っ伏して痙攣しているアービィを両側から抱え、店主に平謝りしながら支払いを済ませ、逃げるように宿に戻った。

深夜の宿の廊下に、傍迷惑な罵声が響き渡る。

翌朝、宿を引き払うときまで、廊下で正座させられるアービィの姿が見られたとか。
ラガロシフォンでのパーティーで、ドレス姿について一言も言ってもらえなかったルティは、さり気なく根に持っていた。

第２３話

宿を引き払ったアービィたちは、ボルビデュス城に用意された部屋に荷物を下ろした。

なぜ、朝まで正座していたか、その前の記憶がおぼろげなアービィは、まだ呆然としている。

さすがに公衆の面前でティアの正体に関る発言をしてしまっては正座もやむなしだが、必要以上にカリカリしているルティにはお仕置きの理由を聞けなかった。獣化した記憶は無いし……

ティアにこっそりとルティが怒り狂っている理由を聞き出し、アービィは真っ青になって平謝りに謝る。

一段落したところで、厨房の料理人たちがアービィに材料のことを聞きに来た。

ようやく機嫌を直していたルティに頼んで、使用人を連れて買出しに出てもらう。

アービィは、別の使用人を連れて、周辺の竹林に筍を掘りに行く。まだ初夏というには時期が早いので、筍も充分に見つかった。

米を磨ぎ、磨ぎ汁で筍を煮出し灰汁を抜く。

夢の中では一晩放置しないと食べられた物ではなかったが、この世界の筍はそこまで灰汁が強くないようだ。

平行して小麦粉を練り、ドゥを二種類伸ばす。

さすがにハンドトスまではできないので、厚さを変えるに留まるが、記憶を頼りにトスでの広げ方を実践し、料理人たちに後々の工夫を頼んでおいた。

昼の賄はピザトーストを作り、買出しが遅くなったルティが食いっぱぐれ、盛大に文句を言われる羽目になる。
ルティを宥めるため、デザートに出すはずだったカスタードプリンを作り、料理人たちの度肝を抜いておいた。

アービィとルティが晩餐の準備に追われているとき、ティアはここぞとばかりに伯爵に連れて行かれてしまった。
伯爵は、レイの参謀としてティアに残って欲しかった。
ここで、ティアは貸し金業について新たな提案をしていた。
ただの金貸しではない、低金利長期返済の起業支援の金融政策だ。

これまで金貸しといえば、この世界に金利規制の法がないことをいいことに、高利貸しが横行していた。
生活苦から借金に手を出し、首が回らなくなり自殺する者や、身売りする者が後を絶たない。
また、アーガスのような領主が、地味の良い土地を巻き上げるために、無理な金利で金を貸し、その抵当に土地を奪い取るということもまた横行している。

自業自得は放っておけばよいが、無茶な金利には歯止めをかける必要があるし、その規制で悪徳な業者が領地を出て行くことは歓迎できる。
また、優れた発想を持つ者がいても資金がないせいで世に出られないのは、社会の損失だとティアは言う。

あの見識は並大抵の者ではない。
伯爵は、ティアのことをラガロシフォンの建て直しに、なんとしても必要な人材だと見ている。

途中から妻のファティインディとレイも加わり、具体的な施政に

ついての相談も行った。
ファティインディは、勉強のためにとセラスも連れてきている。

セラスは、あの一件以来ティアに懐いていた。
正面から叱られて怖がっていたのだが、よほどのことを言わない限りあのときのような叱られ方はしないと分かったので、怖いもの見たさもあり周囲をちょろちょろしているうちに懐いてしまったようだ。
もっとも、既に二度ほど使用人への態度と借り物の扱いについて、雷を落とされていたが。

教育係としても残って欲しいは異例尽くしだった。
料理人とサーブ担当は交代でだが、クリプトを含む執事たち、侍女、庭師までの使用人もテーブルに着く。

当初はアービィが教えたレシピで調理されたものを、使用人まで含め全員がという話だったが、アービィたちがこれまでの感謝の印にということで、このようになったのだ。

今夜も調理服を着込んだアービィは、料理方法や応用についての質問に答えている。
侍女服を借りて着込んだティアとルティも、必要以上に張り切っていた。今日こそは可愛いって言ってくれないかなぁ……鈍感狼……

宴のあと、厨房を片付けているとき、アービィがルティに近寄り耳元で何かを囁く。

ティアは、ルティが一瞬で真っ赤になるのを、微笑ましく見ていた。

それから寝るまでの間、ルティの足取りは地上１０ｃｍ位に浮かれあがっていたらしい。

翌日、アービィたちがボルビデュスを離れる前日、伯爵はアービィたちに詳しい予定を訊ねる。

もちろん情報収集を兼ねてのことだ。

アービィは、まず教都ベルテロイに向かい、それからは決まっていないが、ラシアスを縦断して火の神殿があるグラザナイへ行くと言った。

せっかくだから、王都アルギールにも行ってみたいし、できるなら地峡要塞ウジェチ・スグタも見てみたいと思っていると予定になっていない予定を説明した。

ベルテロイまでボルビデュス領からは馬車で三日ほどだ。

これは伯爵所有の馬車で、クリプトに送らせるつもりでいる。

ベルテロイからグラザナイまでは最短ルートでも馬車を使っても二週間、歩くだけだと一ヶ月は掛かるだろう。

途中アルギールに寄ると、さらに一ヶ月。

ウジェチ・スグタ要塞とグラザナイの往復にも一ヶ月は掛かるだろうと伯爵は言った。

やはり、馬車を調達するか便乗できる護衛の仕事を見つける必要があるだろう、そう考えていると、伯爵からいい情報を教えられる。

ラシアスは、起伏に富んだ地形のため、徒歩による移動は効率が

悪い。
軍を迅速に移動させるためにも、街道は整備されている。
このインフラ整備に乗じて、駅馬車と呼ばれる交通機関が発達しているらしい。
駅馬車を使えば、徒歩の倍以上の速さで移動できるという。
実は、各駅にはギルドの支部があるため、足取りを掴みやすいという事情もあって、伯爵はできるなら駅馬車を使うといいと勧めてきた。
もちろん、そのことは伏せてだが。

今夜のパーティーだが、これも貴族が開催するパーティーとは思えない次第となっている。
アービィたちへの感謝を込めて、という意味合いはもちろんのこと、領内の産業に役立つ情報が詰まっているのだ。
ラガロシフォンに占有させる料理以外は、盛大に振る舞い、領内に広めたいという思惑があった。

家庭料理と呼べる範疇の簡単にできる料理は、単調になりがちな街の食堂や宿の客寄せにも使えるだろうし、菓子は新しい産業を興せるとティアに言われたのだ。
簡単にできる菓子とお茶を提供し、お喋りが楽しめる店舗をティアは提案していた。

今現在、外で食べる場所は、酒場か食堂しかない。
きちんとした食事か、酒しか選択肢がないのだ。
酒場では酔漢が多く、女性や子供だけで安心して行ける飲食店がない。

産業構造が未発達で、一日の労働時間が12時間を超え、まとまった休憩をとるという発想がない世界では、今までそのような喫茶店に相当する店は必要とされることはなかった。

いや、不必要だったのではなく、発想がなかったのだ。

どんな人でも12時間働き詰め、などということは不可能だ。

昼食や適度な休憩は、意識せずともそれぞれが取っていた。

それは、態々お茶請けなどを準備していて、それはそれで時間を取られるものだった。

また、気が向いたときに適当に休憩時間を入れていたため、非効率的でもあった。

その時間を狙った隙間産業というべきものは、これから充分に発展する可能性を秘めている。

客の奪い合いという競争が起これば、それは様々な技術やサービスの革新を促すだろう。

そこから出る税収で領内を整備し、関税や個々に掛かる税を下げることができれば、他領からの移民や物流を呼び込むことができるだろう。

ラガロシフォンに独占させることも選択肢の一つとしてあったが、領内全体を盛り上げ、それを以ってラガロシフォンへ経済効果を波及させた方が収益が上がりそうだと伯爵は考えていた。

日が傾き始め、ボルビデュス城の前庭には篝火が焚かれている。

領主の家族、使用人、領民が入り乱れ、並べられた料理を堪能し

ていた。

さすがに今日は、アービィたちが主賓だ。

再度、礼服を着せられ、ルティとティアはドレスを着飾っている。

二人とも、アービィからプレゼントされた髪留めを着けていた。

伯爵領の名物料理が並び、昨日のレシピを料理人たちが意地に賭けて改良を加えたものもある。

日頃粗食に耐える下層階級の者たちは、ここぞとばかりに食べ物を腹に詰め込んでいた。

この世にこんな旨い物があったのかと涙を流さんばかりの人々は、これが当たり前にその辺りに転がっている材料や、自らが作り出したり獲ってきた材料から作られていると知り仰天した。

さらには、食べ物だと思ってもいなかった筍が、こんなに旨い物だと知り、また仰天する。

唯々発想力の違い。日々の暮らしに追われて、心に余裕がないがためであった。

聡い者たちが筍の調理方法を聞きだし、後に筍料理文化を広めていくことになる。

伯爵やレイは、その現状を改めて認識し、まだまだ領民たちは幸せから程遠いところにいるのだと、愕然とする想いであった。

セラスも考え方が改まってきたのか、領民たちに必要以上に尊大に振舞うことはなく、周囲を却って疑心暗鬼にさせてしまっていたが、領民たちの生の声を聞けたのはいい経験になっただろう。

パーティーが始まって暫くした頃、アービィはルティを会場の端に連れて行った。

「あ、あ、あの……さ……
髪留め、着けてくれて嬉しいな……
……ルティ、きれいだよっ」

真っ赤になってそれだけをやっと言うと、アービィは照れ臭そうに走っていってしまった。

しばらく顔を真っ赤にして、逆上せたようなしまりのない顔で気味の悪い笑みを浮かべ、小さく笑い声を漏らすルティがいた。もう、そこまでいったらキスくらいして見せてよ……

ティアは、羨ましくも微笑ましく、しかしどこか寂しそうな顔で、二人を眺めていた。あたしにも言って欲しかった、な……

アービィは、使用人の中に高位の水の呪文を使える者がいると知り、幾つかの実験をしてみた。

近くの川で取れたマスに似た魚の腸を抜き、そこに『凍結』を掛けてみてもらった。

案の定、いい具合に身は凍りつき、暫く放置しておくとちょうどいいルイベができたのだった。

この世界でも、淡水魚は人体に入れば致死性の寄生虫を持っている。

知識が浸透していない世界では、知らず食べたり、火の通りが甘い状態で食べたりして罹患し、命を落とす者が後を絶たなかった。

当然、ある程度の知識層の間では、魚は生で食べてはいけないという常識がある。

しかし、この方法を使えば、生であっても充分食用に耐えるようにできる。

レモンと塩で味付けされたルイベは、革命とも呼べる料理であった。

厳冬期にしか手に入らない、もしくは永久氷土や氷河から運ぶ財力のある者しか手に入れられない氷が、呪文により簡単に手に入り、何度か続けて使用することで長時間氷を維持することもできた。

蓋ができる金属の薄い筒に牛乳と砂糖、そしてやはりこの世界でもあったバニラビーンズを入れ、氷の上で筒を回転させる。

想像したとおり、筒の中にはアイスクリームができていた。

まずは『凍結』を使った者が、精神力の代償としてアイスクリームを試食する。

指に取り、口に入れた瞬間に、舌の上で溶けてなくなる食感に、鼻腔に抜ける香り。

彼は思わず歓声を上げていた。

それにつられ、周囲に人が集まってきた。

アービィは、わざとレイとセラスを後回しにして、伯爵夫妻、使用人、そして領民たちに器を回す。

あっという間になくなってしまったが、数人の術者が名乗り出て、追加を作り続けた。

散々に勿体をつけて、レイに器を渡した。

一口食べたレイは、伯爵令嬢の上品さをかなぐり捨て、黙々とアイスクリームを口に運ぶ。

すぐ、これは売れると判断できたが、領民の多くが知ってしまった以上、ラガロシフォンの占有事業にすることは無理だとも悟っていた。

何せ、ちょっとした発想の転換だけで、作り方はあまりにも簡単なのだ。

残念さも手伝って、手元にあったアイスクリームを物凄い速さで食べつくしたレイは、お約束の頭痛に襲われていた。

もちろん、その横には頭を抱えて蹲る、ルティ、ティア、セラスがいた。

アービィは、ルイベには確証があったが、アイスクリームはほんの思い付きだった。

レイは、この新しい味をラガロシフォンの独占にできなかったことを、恨めしく思っていた。

バニラビーンズは、まだ生産量が少なく超が付く高級品であったので、これをラガロシフォンが占有することにしてプレミアを付け、他地域ではバニラなしにしようとアービィは提案し、やっとのことでレイの機嫌を直すことに成功した。

もちろん、レイにそのような独占欲や独善性があるわけではなく、ラガロシフォンを立て直したいという意識の現われからだった。

埋蔵資源のように限りがある資源と違い、再生産可能な資源は、需要が増えれば供給を絞り高利を貪る者が出る一方で、大量生産方法を開発し、多売により利益を上げようとする者が出るだろうと、ルティは考えていた。

どちらにせよ、一気に採れるだけとって資源の原資を壊滅させるほどバカではない、持続可能な資源の有効利用方法が社会基盤を強くすると期待するルティだった。

それでも、アイスクリームの味付けに他の果実を使うという発想は、いつのまにか領内全体に広まっていく。

アービィがちょっとした思い付きで作ってみたアイスクリームは、新たな食文化をボルビデュス領にもたらすことになる。

それだけではない。

商品の生産、製造用の鉄器の製造や流通、原材料の輸入や製品の搬送に伴う輸送、販売と、ひとつの商品開発が様々な産業の振興に繋がっていく。

攻撃にしか使わないものという常識を破ったこの方法は、呪文の使い方に革命を起こした。

火の呪文の応用性は知られていたが、他の呪文にごく一部を除き応用性はないと考えられていたのだ。

後に、黒魔法を使える者で、年齢から冒険者を引退した者や、荒事に性格が向かず知識として習得していた者に新たな雇用を創生し、中には事業を起こす者さえ出るようになる。

夜が更けても人々は帰る気配はなく、ボルビデュス城は新たな時代の幕開けを祝うかのように、喧騒に包まれていた。

第２４話

教都ベルテロイは、南大陸の中心に位置する都市国家だ。
南大陸で信仰される唯一神マ・タヨーシを祀る神殿がその中心にあり、周囲は教皇や枢機卿の住居や各施設が点在する。

第八十七代教皇フェウエルフェダル・タンゼンデを中心に、四人の枢機卿が補佐を勤め、大陸の安寧を祈願している。
タンゼンデ教皇は、北の民を含め、唯一神マ・タヨーシの加護の元、争いのない平和な世の中を望んでいるが、四人の枢機卿はそれぞれの思惑を胸に秘めていた。

両大陸の融和を望むカーナミン枢機卿は、他宗教の存在を消極的ではあるが容認しており、タンゼンデ教皇の信任が厚く、次期教皇と目されている。
デナリー枢機卿は、北の民の教化を第一義に考えており、それはそれで幸せを思う心から出ているためか、熱心な布教に力を入れ、決して武力による教化を望んでいるわけではない。
スキルウェテリー枢機卿は、唯一神マ・タヨーシの教えこそこの世の真理であり、従わぬ者は力で征服するべきと考えていた。
他の宗教の存在を認めず、原理主義に近い思想で、次期教皇の座を狙っているといわれている。
あの、バードンの上司でもある。
ルビン枢機卿は、強烈な主義主張はなく、それぞれの考え方には中立を保っている。
凡庸であることにも才能が必要であるかのように、枢機卿団内の意見が偏りがちになると、いつのまにか教皇の意志に沿うように調整する不思議な力量を持っていた。

教都は、軍事的にも政治的にも四ヶ国から独立し、その防衛は各国からの派遣軍が担っている。

神殿を中心にして東西南北に伸びる大通りは各国からの主要街道で、それぞれの街道を国の位置から時計回りにひとつずつずれた国の派遣軍が守りについている。

インダミト街道はビースマックが、ストラー街道はインダミトが、ラシアス街道はビースマックが、ビースマック街道はラシアスの軍がそれぞれにある関所に詰めている。

各国からの派遣軍は、近衛の第二師団と規定され、指揮官としての駐在武官は王族と取り決められていた。

何れかの国が教都を自国勢力としないための人質であり、融和のためでもある。

インダミト王国からは、第二皇太子パシュース・アローマンシュ・インプラカブル・バイアブランカ。

ビースマック王国からは、第三王子フィランサス・フルイタン・リシア・ブルグンデロット。

ラシアス王国からは、第三王子ヘテランテラ・ハイドロトリケ・ネツォフ・グランデュローサ。

ストラー王国からは、紅一点、第三王女アルテルナンテ・リラキナ・ミリオ・サウルルス。

以上の四名が、派遣軍の指揮官として、外交官としてベルテロイに駐在している。

駐在武官と枢機卿の互いが表立った支持を表明することはない。

しかし、インダミトがルビン卿、ビースマックがカーナミン卿、ストラーがスキルウェテリー卿、ラシアスがデナリー卿を支持して

いるのは、公然の秘密であった。

各国から伸びる街道は、大陸経済の大動脈となっており、様々なモノとカネが半径５ｋｍの小さな都市国家に流れ込んでくる。

ほしいモノがあればベルテロイに行け、と言われるほどの商都にもなっていた。

それだけのモノとカネが流れ込めばそれに伴う利権も発生し、神殿を祀る都市とは思えない裏の世界も存在していた。

歴代教皇は、形ばかりの取り締まりのみで半ば黙認していたが、現教皇の代になり少しずつ違法な、良心に反する取引は締め付けられて姿を潜めつつあった。

改革を行えば、それによって失われる利権を持った者は反抗する。

それぞれの利権団体から、枢機卿や司祭団への賄賂、抱きこみといった工作が続けられている。

ボルビデュス城でのパーティーの翌日、朝靄の煙る中に馬車を見送る人影があった。

レヴァイストル伯爵を始めとして、レイ、セラス、ファティインディや、家中の主だった者が馬車を見送る。

クリプトが御者台に座り、馬車を操る。

アービィとルティ、ティアは馬車に揺られていた。

出発に際しては、レイがまだティアを口説き、セラスはすっかり懐いてしまったのかティアの服の裾を握って離さなかった。

「ティア、残ってもいいのよ」

ルティがからかったが、何か言うとセラスが泣き出しそうだった

ので、ティアは黙っていた。

「巡礼の後、ここへ落ち着いてはどうかね？
君たちなら、騎士の待遇で迎えるよ。
ティアもそれまで待っていてくれるだろうし」
アービィとルティには、伯爵から声が掛かっていた。
さり気にティアを置いていかせようとしていたが。

ボルビデュス領ならば、落ち着くにはいいかもしれない、と考えながらルティは涙の跡をそっと指でなぞっていた。
アービィも内心ではここに骨を埋めてもいいのでは、と思っている。

ティアは、魔獣を必要としてくれる人が居たことに、素直に驚いていた。
エサ探しの旅の途中で見聞きした知識が、人の役に立つとは思ってもいなかったのだ。

クリプトが戻れば、レイはラガロシフォンに向けて旅立つ。
予想以上の困難が待っているだろうが、レイにとっては良い花嫁修業となるだろう。

しかし、その成果はレイの個人的な評価だけではなく、ラガロシフォンの人々の暮らし、命に直結するのだ。
失敗は許されない。上手くいかなかったからゴメンナサイでは、済まされないのだ。

アーガスは王都エーンベアに異動し、伯爵旧知のパストリス侯爵

に預けられる。
ごく近い将来ラガロシフォンに戻らなければならないため、軍事的な見習いよりは財務を見習わせたほうが良いと考え、財務卿の部下であるパストリス侯に預けられることになったのだ。

ボルビデュス家下屋敷に住み、暫くは伯爵家からの送金で過ごさねばならないが、パストリス侯の判断次第で宮中での仕事も任されるようになるという。
そうなれば、給金で暮らすことも可能であろう。

ティアが言ったとおり、親元で甘えたまま過ごすよりは、世間の目が厳しいエーンベアで修行させたほうが良いとレヴァイストル伯は考えたのだ。

セラスは、当分は親元だが、数年後にはレイ同様縁談も来るだろう。
それまでは、伯爵の仕事を見せ、時には名代に使い、世間を見せておこうと考えているようだ。

三日の行程は特に問題もなく、魔獣の襲撃も彼らにはいい呪文の修練になっていた。
ベルテロイに着く頃には、三人ともレベル1の呪文が八回使えるようになっていた。
アービィはレベル2の黒魔法『凍結』を一回、ルティはレベル2の白魔法『治癒』が一回、ティアは二回使えるようになった。
戦闘中に怪我を負っても、ある程度であればその場で直せるようになったのだ。

ベルテロイのインダミト街道関所に到着後、クリプトはここから帰ることになっている。
ティアは弓矢の手ほどきをしてもらったクリプトに、父親にも似た感覚を抱いていた。
もちろん魔獣に親子の関係があったわけではなく、世間一般で言う父親とはこういうものか、と言う感覚である。

別れに際し、気付かないうちに涙が流れていたことにティアは驚き、自分の感情を抑えきれずに困惑していた。
クリプトが手を振りながら遠ざかっていく。
三人は、馬車が見えなくなるまで、ゲートの前で見送っていた。
それはボルビデュス領を出るときの立場を、すっかり逆にしたかのようだった。

関所はクリプトの口利きのおかげで、たいしたトラブルもなく簡単に通過できた。
教都の中心に向かうにつれ人通りが多くなり、活気を感じるようになってきた。

神殿を見物し、信仰心のかけらもないティアとアービィが神殿の庭園で待っている間、それなりの信仰心を持つルティは参拝に行っている。

ティアは、神と言う存在は感じたことはあるものの、他の宗教を認めないばかりかその神と崇める対象を悪魔扱いすると言う宗教に、胡散臭さを感じ取っている。
誰が何を信じようと勝手だし、それを否定する気もない。
それ故に、自らの教義のみを正しいとして、他を同化させようとしたり、否定することを理解できないのだ。

魔獣にとってみれば、どうでもいいことでしかなかった。
生きていく上で、信じられるのは自分の力だけ。
力及ばなければ死ぬだけだと思っていた。

死後についても、地獄というものがあるのならそこに行くのだろう、と漠然と思っている。
そもそも自分自身、地獄から這い出てきたようなものなのだ。
罰が当たるのなんのと、気にしながら生きていく必要はない。
そのくせセラスには、偉そうに説教していたが。

結局のところティアにとっては、大切に思う相手が嫌な思いをしないことが正しい行いだ、という程度のことだ。

「ね、アービィ、面倒ね、人って。
こんなモノ作って、それに縋らないと生きていけないなんて」

アービィは、面倒ね、に対する答えを持っていなかった。
彼は、神という者が解らない。
神が全てを創りし者であるならば、何故、自分のようなモノを創ったのだろう。
必要なかったんじゃない？　と問いかけてやりたい。
人への試練と言うが、護るならいらないじゃん、と思う。

異教徒だって、神自身が創ったんじゃないの？　と聞きたい。
最初から創らないか、なんで滅ぼさないの？　と思う。

結局アービィは、矛盾を感じているのだ。
彼は、神や宗教に対して、まだ明確な考えは持てないでいた。

確かに良い人ばかりなんだよなぁ、アービィは思っている。フォーミットにある教会の神父さんなんて、僕が人狼って知っても優しくしてくれたし。あんな人ばかりだといいんだけどな。

ルティがなかなか出てこないので、庭園内を二人で散歩する。

「ね、アービィ、こうしてるとあたしたち恋人みたいに見えるかな？」

盛大にアービィが咽返り、挙動不審になる。

アービィは、それまでティアに感じていなかった距離が、気恥ずかしさから遠くなった気がした。

「慌てないでよ。

ルティが帰ってくるまで、練習させてあげる。

……それくらい、いいでしょ？」

「いや、あの……なんかドキドキしちゃって……

……獣化しちゃうよ……」

それを抑えるための練習でしょ、と今度はティアが盛大に噴出す。

どうやらからかっていたらしい。

遠くに二人を探すルティが見えた。

アービィは安堵して、ルティの方に駆け出した。どうやら助かった、か、な？

ティアは残念なような、安堵したような複雑な表情を浮かべ、アービィを追う。いいじゃない、ちょっと、くらい……

とりあえず懐は暖かいのだが、これからラシアス縦断が待っている。

うまく仕事があればいいのだが、移動には宿泊費以外にも馬車代

が掛かるのだ。
見通しが立つまでは、極力節約する必要があるだろう。

街の中心からは少し離れた宿を取り、三人は荷物を置いて街に出た。
食事は宿に併設された食堂で摂れるので、まずは酒だ。

酒場に突入しようとしたルティとアービィをティアが引き止め引き摺っていく。
「まずは、ギルドでしょっ！！」
さっきのドキドキがまだ止まらないのか、珍しくアービィから飲みに行こうとしていた。
そして、その反動か、ティアが真面目になっている。
二人は不承不承、ティアは仏頂面でギルドに向かい、依頼リストを眺める。

各国の第二近衛師団が駐留しているだけあって、周囲には大して危険な魔獣は出ないようだ。
「ろくな仕事がないわねぇ。
これじゃ宿代だけ稼ぐようなもんだわ。
早めに次の街に行ったほうがいいかもね」
溜息混じりにティアが言った。
昨日、勢い込んでギルドに行ったはいいが、ろくな仕事が残っていなかったのだ。
改めて朝から来てみたのだが、一日でそうそう良い仕事が舞い込むはずもなかった。

「そうねぇ……
ま、もう二、三日はいてもいいんじゃない？」
ルティは、あまり真面目に依頼書を見ていない。

何か別のことを考えているようだ。

この時点でアービィは別行動している。

ルティは、アービィがどうしているか、そればかりが気になっていた。

ルティのやる気ない態度にやきもきしながら、ティアは日々を過ごしている。

アービィは何を考えているか、朝、宿を出るとすぐ別行動になってしまう。

ルティは、落ち着かない態度で、依頼書を適当にしか見ていない。

いきおいティアが仕事を選ぶが、ルティはいい返事をしない。

アービィにも合流後に相談するが、こちらも心ここにあらずと言った風情だ。

三日目の朝、ギルトに行く気配も見せない二人に対し、ついにティアは暴発した。

「どうしたっていうのよっ！！

いったい、二人とも……っ

どうして……仕事探そうとも……しないのよ

アービィはどっか行っちゃうし

ルティもそればっかり気にして……

あたしが邪魔なのは……」

分かってるのよ、の一言が、どうしても怖くて言えず、黙ってしまう。

感情が高ぶっているのか、その後は言葉にならず、えぐえぐと泣き出してしまった。

アービィは困ったな、という顔をしているが、そのまま立ち尽く

すだけだ。
ルティは宥めようとするが、ティアは相手にせず部屋に閉じこもってしまった。
部屋の前で溜息をついたルティは、アービィと連れ立って宿を出て行った。

ティアは悲しかった。
仲間だと思っていた二人が、何か隠している。
まさか、ここでティアを置いて消えてしまうことはないと信じたかったが、あまりにも二人の行動は不自然だ。
ギルドはひとつしかないから別に依頼を受けているはずはない。
自分から消えてしまおうかとも思ったが、ここまでの旅の記憶はティアにその勇気を持たせなかった。
ティアは怖かったのだ。
自分が必要とされていないんじゃないか、邪魔じゃないのだろうか、と。

二人の気配がドアの外から消えたことが分かると、ティアは酒瓶を取り出した。

夕方、二人が宿に戻ると、ティアはまだ部屋にいるようだ。
ノックしてみるが返事はない。
ドアを押してみると、鍵が掛かっていない。

中に入った二人が見たものは、ベッドに膝を抱えて座り、すすり泣きしているティアの悲しそうな姿だった。

まず、アービィが、ティアの前に土下座した。
続いてルティも。

ティアは、いよいよ別れを切り出されるのかと覚悟した。

おずおずとアービィが何かの包みを差し出した。
受け取りたくはないが、つい受け取ってしまう。どうせ、当座の生活費でしょ、手切れ金ね、手切れ金……

頭を上げたルティが、ごめんなさいと言い、開けてみて、と続けた。

ティアが恐る恐る包みを開けると、その中から眩く輝くラミアのティアラが出てきた。

言葉が出ない。
口をぱくぱくさせ、ティアはティアラと二人の顔を見比べた。

「実はね、伯爵からここはいろんな商品が集まるところだって聞いていたんだ。
で、着いてからすぐ、ルティが神殿近くの店で見つけたんだよ。
でもさ、本物かどうかなんて、僕たちは鑑定士じゃないから分からないでしょ。
お店の人が信頼できる人なのか、いろいろお喋りしてみたり、周囲の店の人に聞いてみたりしててさ」
アービィが心底済まなそうに言った。

「で、その間二人で消えるのも変じゃない？

あたしはティアと一緒にいることにして、アービィが聞き込みって言うのかな、それしてて。
今日、確信が持てたんで、買いに行って来たのよ。
なんだかんだいって、あたしたちのせいでティアのティアラを失くさせることになっちゃったじゃない？
いくら、ティアがいいよって言ってくれても、ね」
ごめんなさい、てへっ、とルティが続けた。

ラミアのティアラは、普通の人間が持っていても安っぽい造りで、輝きはほとんどない。
それが、ラミアが身に着けていたり、ラミアの手の届く範囲にあれば、ラミアの妖気に反応して自らが光を発しているのではと思うほどの輝きを見せる。

以前ティアの正体がばれたときも、そのせいだったのだ。

「驚かしてやろうって思ってたんだけど、却って悪いことしちゃったね。
ごめんなさい」

「……てへっ、じゃないわよ……ばか……」
ティアは涙が止まらなくなり、左右に首を振るだけで、その後は言葉を出すことができなくなってしまった。

「でね、しばらくは仕事漬けになっちゃうけど、いいかな？」
ルティが言う。

晴れやかな笑顔で、ティアは頷いた。

第25話

「アービィ、起きて。
ねぇ……起きてってば……」
朝、まだ薄暗いうちからアービィは揺り起こされた。

「……！！」
寝ぼけているのか、ルティがダブって見える。
焦点が合わないにしては、二つの像の距離が離れすぎだ。

けらけら笑うルティと、口元を押さえて笑うルティ。
目を擦ってよく見る……見る……胸元を……

「こっちがルティ～――ぷぎゃぺっ」
少々残念な胸元の方を指さした瞬間に、目から火花が飛び散った。

「それにしても、聞いてはいたけどさ……
すごいね。ティア」
変身を解いたティアに、正座させられているアービィが言った。

ラミアのティアラを手に入れたティアは、妖術を使う能力と獣化の能力を取り戻していた。
昨夜、ティアはルティに、その変身能力を見せていた。

レイやセラス、ファティインディやボルビデュス家の使用人たち、果ては宿の女将まで、見たことのある人に片端から変身していた。
さすがに口元だけは変えられないので、顔全体を見ると違和感が大きい。

だが、口元さえ隠してしまえば、本当に見分けがつかない。
声と体型も変えられないので、化けきることは無理だが。

「本当の顔って、口元だけなんでしょ？
いつもの顔のモデルとかって、いるの？」
ルティが訊ねる。

「本当の顔は、こうよ。
モデルはいないの。
なんかいろいろ作ってるうちにこれに落ち着いたって言うか、ね」
いきなり目と鼻を消し、口だけにする。

「！！」
聞いてはいても、やはり驚いてしまう。
すぐに元に戻し、大笑いするティア。
朝っぱらから、他の部屋には大迷惑だ。

ティアラを渡した翌日から、以前とは打って変わって仕事を真面目に探すアービィだった。
護衛の仕事があればいいのだが、駅馬車が発達しているラシアスでは、あまり護衛の需要がないらしい。

ラシアスの国軍が、訓練を兼ねて駅馬車の護衛についているためだ。
ほとんどの駅馬車路線が国営の交通機関であるため、国の威信に賭けてこれを護衛している。

民間路線もあるが、こちらも同じように護衛していた。
駅馬車路線は、物流、人的交流の大動脈だ。

路線の維持には膨大な予算を必要とするため、全てを国が賄うには無理がある。

ある程度税を優遇することで、民間資本の呼び込みをしていた。しかし、道路だけ用意して後は任せた、というわけにも行かず、安全性に差が出ては民間路線の占有率が下がり、国庫の負担が増えるばかりなので、多少の無理は承知で両者を平等に護衛しているのだ。

一部の高級貴族がチャーター便を利用することはあるが、ほとんどの貴族と平民は一般路線を利用している。

貴族と平民が同じ馬車に乗り合わせ移動しているためか、両者の距離は他の三国に比べ親しいといえる。

実は、この両者の距離感が、国難に対し一丸となれる国民性を育てたと言えるし、国難が両者の距離を縮めているともいえるだろう。

最近では北の民の圧力が増し、護衛に割ける人数も減ってしまっているが、駅馬車の便数を減らす代わりに、一度に運行する台数を増やして輸送能力は確保した上で、護衛に必要な人員を三分の二まで削減することに成功している。

訓練を積んでいない兵は戦場で役に立たない、と考える高級将校の意向も大きく影響していた。

ベルテロイでの仕事探しを早々に諦め、アービィたちはベルテロイから半日の行程の、ラシアスの玄関口の町フロローに移動することにした。

フロローの町の中心には駅馬車のターミナルがあり、人々の活気

に賑わっていた。
駅馬車は、どこの町へ行くにも朝出発する。
以前は、昼出発の便もあったのだが、現在は中止されている。
窓口で値段を尋ねると、グラザナイまでは一人銀貨一枚だと言われた。
翌日発のチケットを三人分購入し、ギルドの場所を聞く。
ギルドに着いて三人は依頼リストを眺めるが、これといって効率の良い仕事が見つからない。
仕方なく宿を取り、翌日の出発に備え早く寝ることにした。
宿で仕入れたラシアスに関する情報の中で、ルティを喜ばせたものは温泉に関することだった。
ビースマックほど峻険な山岳地帯はないが、ラシアス全体にいくつかの山脈が走っている。
造山活動が活発な地域のせいか、国全体に火山が多く、温泉が点在していた。
駅馬車の駅の多くが、この温泉地に設置されているのだ。
それは過酷な仕事に就く御者や護衛の保養にもなり、温泉目的の客も呼べるという戦略でそうされているのだが、普通に移動する客にとっても良い息抜きになっている。
駅馬車は、出発すると昼食休憩までは走りっぱなしになり、昼食を駅で摂ったらまた夕方到着する次の駅まで止まらない。
もちろん、用を足す場合は随時停車するが、一日中馬車に揺られ続けることは、かなりの疲労を伴う。
まだサスペンションなどというものは発明されておらず、木の板

に薄いクッションを敷くのが精々だ。
ほとんど身動きもできず、一日揺られた身体に、温泉の疲労回復効果は何よりもありがたいだろう。

早朝、馬車はフロローの駅を出発し、グラザナイを目指し走り出した。

グラザナイまでの道のりは、二十八駅あり、十四泊の行程だ。
直線距離だけで見れば、ふつうに歩いて十日程の行程に見えるが、途中に山脈が走り、高低差が大きいうえに、ゆるやかな遠回りを余儀なくされる。
水の確保の点からも川筋を辿らねばならず、長期間の行程にならざるを得ない。

馬車の中には、老若男女様々な人が乗っている。
巡礼者が最も多いが、路線を乗り継ぎや、王都を飛ばして先を急ぐ商人など、目的も様々だ。

穏やかな目つき、敏い目つき、暗い目つき、鋭い目つきと、人柄も多様だ。
不思議な連帯感が、日常生活ではまず親しくならないであろう性格の者同士に、親近感を抱かせていた。

私生活では荒事を生業としている雰囲気を纏った者であっても、多数の兵士に囲まれている馬車の中で狼藉を働く気になるわけもなく、気怠い雰囲気の中に身を委ねている。

馬車に同乗した何人かとは、すぐに親しくなり、何泊かする内には全員と言葉を交わすようになっていた。

それでも長い間同じ狭い空間、同じ宿に泊まっている内、話す内容がなくなってしまったことは仕方がない。

馬車の中は沈黙が支配し、駅ごとに交代する御者は最初のうちこそ雰囲気を変えようと努力するが、それでもすぐに誰も話さなくなってしまう。

御者にとってみれば、それはいつものことなので別に気にすることではないし、雰囲気が重いわけでもない。

珍しい光景や美しい風景に行き合えば、御者に限らず誰彼なく気付いた者が皆に教え、それについて知識のある者が語ってみたりと、それなりに楽しんでいる。

アービィとルティは、長い付き合いの内にお互いの沈黙との付き合い方も身に付けていた。

なにしろ相手がいればそれで満足なのだ。

一日何も話さずいても、何の不満もない。

当初ティアは喧嘩でもしたのかと心配したが、二人にとっては当たり前のことだと気付き、不思議な感覚にとらわれていた。

それでも今は沈黙が人間関係の潤滑油になるということに、馬車の旅の途中で理解できた。

平均的な駅がある集落は、駅の設置に伴って維持整備のために必要なものを集めた結果できあがった所が多い。

駅を中心に宿や商店が設置され、厩舎や馬車の整備施設、駐車場、駐屯する兵のための兵舎や、いくつかおきに設置された大きな駅であれば慰安施設が並ぶ。

兵士用の施設であっても、機密事項に関わる場所でなければ、一般客の利用も可能だ。

何れのほとんどが国営であり、営利を目的としないため、安価に利用することができる。

もちろん、アービィには慰安所への接近禁止令が、ルティより厳しく申し渡されていた。言うまでもなく彼に行く気はないし、彼女も心配などしていないが。

馬車の中での会話はなくとも、一日の終わりに宿の浴場や酒場で行き合えば、その日の出来事や見た光景などについての会話が行われる。

火山が生み出す温泉が売りの駅馬車であるから、宿の作りに比べ浴場が立派である。

アービィたちも凝り固まった筋肉を解すため、温泉を楽しみにしていた。

十泊目の宿の浴場で、穏やかな目つきの締まった身体を持つ男がアービィに話しかけてきたことがあった。

アービィは、以前レイに話したように、巡礼に合わせて両親と故郷を探している、といったことを話した。

男はレイと同じように、痣が手掛かりになるやもしれぬ、と言った。

その際の男の視線が鋭くなったことは、背を向けていたアービィが気付くはずもなかった。

翌朝、アービィたちが乗る馬車が駅を出発する前に、アルギールに向けて早馬が走り去っていた。

そしてフロローに到着する前日、宿の裏の用水路で、酒の匂いをたっぷり纏った男の死体が発見された。

駐屯する軍医の検視により、酒によって用水路に落ちた挙句の溺

死と判断され、近くの無縁墓地に葬られた。

グラナザイまでの間にあったトラブルはこの死亡事故だけで、この世界においては比較的穏やかな旅だった。

老境の始めに足を踏み入れた男が三人と、うら若い気品漂う女性が一人、ラシアス王宮の一室に集まっていた。

白髪の男の一人に女性が問う。

「ヘルフェリー、もう十年の月日が無為に流れています。そろそろ、見切り時ではないのですか？いつまでも、希望的観測だけで民の税や軍を割くわけには行かなくなっているのです」

その問いにはヘルフェリーと呼ばれた男とは別の、栗色の髪をした男が、彼を指さして問いで返す。

「ニムファ様、未だ勇者をこの手にできぬことは、この宮廷魔術師の責任にございます。

いい加減我が騎士団も、成果の宛てのない憲兵の真似事を続けるにも限界がございます。

そろそろ、この男に責任を取らせるべきかと」

摂政ニムファ・ミクランサ・ミリオフィラム・ネツォフ・グランデュローサ第一王女が答える前に、もう一人の白髪混じりの男が口を挟む。

「騎士団長殿、それはつまり、摂政殿下に責任があるとおっしゃりたいか？」

騎士団長と呼ばれた男は、慌てて首を横に振る。

「コリンボーサ宰相殿、滅相もない。

摂政殿下になんの責任がございましょうか。
ただ、私は騎士団にも限界がございますと申し上げたいだけで…
…」

言い争いになろうとしたとき、ニムファが口を開いた。
「いいえ、私の責任でもあります。
しかし、この国難を救い、ラシアスを南大陸一の地位に引き上げるためには…
いえ、南大陸を統一し、かつての大帝国の後を継ぐためには、必要不可欠なのです。
もう少し、捜索を続けましょう。
これは国是として行っていただきます」
一度は自ら見切り時と言ったにも拘らず、勇者を求める心は揺れ動いていた。

最高権力者の一言に、逆らえる者はいない。
「このドーントレッド、宮廷魔術師の名に賭けて、命に代えましても、勇者を見つけ出しましょう。
つきましては、暫くのお暇をいただきたいと存じます」
王女の期待を一身に受け、膨大な国家予算をつぎ込んで敢行した勇者召喚の責任者、宮廷魔術師ヘルフェリー・ラトナギリ・ドーンレッドは、決意を述べた。
彼は、この十年の間、針の筵に座るような毎日を過ごしてきた。

北の大地の奥深く、北の民すら住まない秘境に、世界を滅ぼす大魔王が降臨したとの神託を受けた当時十歳の王女に相談された。
彼は、北の大地で使われている呪文を研究し、異世界より勇者を召喚するための方法を探求し、三年の月日の後に、勇者召喚の呪法を敢行したのだった。

が、異世界とこの世界をつなぐ闇の道の中が開き、その中に勇者と思しき男の影が見えた瞬間、闇の道は閉ざされ、男の影は消滅した。

しかし、王宮の魔術の間の床に刻み込んだ魔法陣の中心には、男がいた国の略称と思われる文字のような記号が浮き上がり、それから発した光は確かに男を捕らえていた。

闇の道が消えた後も記号からの光は衰えず、天井の板にはその記号が焼き付けられていた。

記号からの光は、木材を焼くほどの熱エネルギーを発していたのだ。

このことから、男の身体のどこかに同じ文字が焼印として残っているはずと考えた彼は、闇の中に垣間見えた男の特徴、つまり黒髪に黒い瞳をした十代後半から二十代前半の男を捜すように、王女に縋りついた。

各国に回された依頼書には、文字という確信がなかったため、天井に焼き付けられた記号を模写した絵が添付されていた。

その絵は、漢字の「日」という文字とよく似ていた。

彼は自室に戻り、身の回りの世話をする小姓を一人伴った後、いずこへともなく姿を消した。

ヘルフェリーが決死の思いで旅立ちを決意した日の前日、宰相マクランド・シアメンス・コリンボーサは二通の報告書に目を通していた。

一通は各地に散らしていた間諜からの報告書。

もう一通は、グラザナイから一日の行程にある名もない馬車駅に駐屯する軍医が書いた、その間諜の死亡診断書だった。

間諜からの報告書には、「日」の刻印のある男を発見した、との報告があった。

しかし、年代は十代後半、髪と瞳の色は灰色と記されていた。

軍医からの死亡診断書には、酒に酔った上で用水路に落ちての溺死、という表向きの報告と、頚骨を折られての即死で肺から水は検出されず、という宰相向けの報告が記されている。

刻印の確認が遅くなったのは構わない。狙っていたわけではないからだ。

早馬が王宮に到着し、折り返しの指示は馬車に追いつかないため、グラザナイでその男の確保を命ずる予定であった。

その命令が届く前、ギリギリのところで間諜は消された。

男の風貌は、十代後半、灰色の髪と瞳というだけで、これに該当する人物は掃いて捨てるほどいる。

当人が消したのか、それともどこかの国が気付き、男を確保するために消したのかは不明だ。

しかし、この男を手中にしておけば、摂政への忠誠心をアピールし、国内で自らの立場を強くするにはいい道具になるだろう。

他の二人を出し抜き、権力を一身に集めるには欠かせない道具だ。

いかに王家の血筋とはいえ、彼から見れば二十三歳の王女など、まだ小娘でしかない。

せいぜい権力の後ろ盾になってもらい、思い通りにやらせてもらおう。

彼は、再度グラザナイにいる間諜への男の確保、他国の間諜の排除を記した命令書を書き始めた。

うっかり手荒な真似をされて敵に回しても後が面倒なので、限りなく紳士的に、と付け加えた。

騎士団長クレナルト・エキナ・ラルンクルスは、焦燥感にさいなまれていた。

無能が服を着て歩いているような軍務卿カルダミ・アラグアイア・ディテイプリスと、摂政殿下に振り回された毎日。

権力欲だけで生きているような軍務卿は、ラシアス国軍を私兵のように扱い、気分次第で命令を出していた。

先代の軍務卿、エキノドルス・ホレマニー・ディテイプリス卿は、息子と違い有能で、クレナルトは人に仕える喜びを感じるほどだった。

貴族政治の欠点である世襲制の弊害が、見事な形で具現化した現在では、クレナルトは摂政から直接命令を受けるようになっている。

誰がどう見ても理屈に合わない命令の連発で、ウジェチ・スグタ要塞を壊滅の危機に陥れたカルダミ軍務卿は、責任を現地で戦死した歴戦の勇将リルバーシー・サンタレッデに押し付け保身を図った。

しかし、サンタレッデ共々討ち死にしたと思われていた副将の帰還により、彼の保身は崩れ、現在は名前だけの軍務卿として、蟄居させられていた。

このため、軍の実権は騎士団長のクレナルトに集中し、彼はウジェチ・スグタ要塞の建て直しに全力を挙げていた。

今回の他国への兵力供出の依頼は、この建て直しの一環として行われたものであった。

現在指揮官不在の要塞に、新たに指揮官も送り込まねばならない。

もしサンタレッデ将軍が存命ならば、彼は侯爵でもあったので、他国からどのような現場指揮官が来ても問題はなかっただろう。国政の中枢を担う公爵や侯爵が出てくるはずはなく、精々子爵程度なはずだからだ。

しかし、サンタレッデ侯爵亡き今、これに代わる将軍は騎士階級にしかおらず、誰が行っても連合軍の指揮権は他国に移ってしまう。伯爵クラスまでは、そうそう持ち場を離れるわけも行かず、子爵クラスを出すか、誰か現場を放り出させてまで行かせるか、その人選が難航している。

ディテイプリス卿の息子、カラディリア子爵が、この指揮官の座を狙っているとの噂もある。

祖父に似ていない父親にさらに輪をかけた無能者。

権力欲だけに目が眩んだ俗物。

ろくな噂を聞かないこの人物は、父親の失脚を自らの好機と捉え、その先にある軍務卿の座までも狙っていた。

もう間もなく各国から派遣軍が来てしまうので、この仕事は愁眉の急だ。

今にも北の民が攻め込んでくるかもしれないのだ。彼は、焦っていた。

その最中に、摂政殿下は、まだ勇者などと夢を見ておられる。

現実に『力』を有する彼には、勇者などという幻想に国運を賭けるほどの夢想主義者ではなかった。

この機会に目を覚ましていただきたい。

彼はそう願わずに入られなかった。

グラナザイに入ったアービィたちは、火の神殿で精霊と契約し、それぞれがレベル1の火の黒魔法『火球』とレベル2の『大炎』、レベル1の火の白魔法『解毒』とレベル2の『解痺』が使用可能になった。

ギルトに入り仕事を探すが、産業はほぼ商業のみで軍が経済まで握っている国では、討伐や護衛の効率のいい仕事は見つからない。

「これはウジェチ・スグタ要塞や、アルギールにいっても同じかなぁ？」

やたらと甲冑が目立つ町の酒場で、アービィは二人に愚痴をこぼす。

「そうねぇ…、この国の用事も済んだし、ビースマックに行こうか？」

ルティが同意した。

「ギルドにある仕事って、義勇軍の募集ばっかりで、他にあるかと思うと諸侯軍だもん」

ティアも首肯する。

「とりあえずさ、明日もう一度見て、それで何もなかったら、ビースマックに行こうか。

で、大回りでアルギールを通っていくか、ベルテロイに戻ってビースマック街道を通っていくか、なんだけどさ、どっちがいい？」

アービィは、今のこの国に見切りを付けた。

北の民の脅威が大きいこの地に、安住の地が見つかるとも思えない。

連合軍の遠征の成果を見てから、もう一度この国に来ても遅くはないと思う。

ティアにとっても、それは同じようなことなので、早々に出立することに同意した。

答えが出ないまま馬車のターミナルに行くと、アルギール周りでビースマックの国境までは、銀貨二枚らしい。

散々悩んで、アルギール周りで行くことにする。

もしかしたら、途中で生活費の足しになるような仕事が、あるかもしれないからだ。

翌朝、馬車に乗り込むと、フロローから一緒だった商人と、まだ同行することになった。

「おや、奇遇ですね、またよろしくお願いしますよ」

物腰も柔らかく挨拶する商人。

話すようになったのは、グラナザイ到着寸前だったので、名前を聞きそびれていた。

なぜか宿も同じだったのだが、いつも忙しそうに荷物の整理をしていたため、声を掛ける機会も少なかった。

「ええ、こちらこそ、よろしくお願いします。

そういえば、お名前も伺ってませんでしたよね？

あたしは、ルティ。こっちがアービィで、こちらがティアです」

フルネームを言うと、またティアにからかわれそうなので、やめておく。

「ご丁寧にありがとうございます。

私はハイスティとお呼びください。

しかし、この国は商売のやりづらいところですな。

なかなか日用品や装飾品が売れない。

王都へ行けば、少しはましかと思いましてな、こうしているわけ

です」

こちらも名乗り、以前よりは話しやすい雰囲気になってきた。

長い道中だ、楽しいほうがいいですよ、とハイスティが言い、馬車の旅がまた始まろうとしていた。

第２６話

「ねぇ、ルティ、なんでさぁ、ハイスティさんに自己紹介したとき、フルネームじゃなかったの？」

アルギールへの道中で泊まった宿の一室で、ティアが訊ねた。

「だってさぁ、たいがいご夫婦って聞いてくれるのに……きゃはっ。アービィがすぐ姉弟って言っちゃうでしょ？そのときのティアの視線が痛いのよ……」

それにアービィとティアが恋人みたいに見えちゃうじゃない、と心の中で叫ぶ。

「きゃはっ、じゃないわよ……アービィはまるっきり、その気ないわけじゃないんでしょ？」

「そう思うんだけどねぇ……姉弟として育ったのも事実だしね。照れくさがってるだけなんだと思いたいのよ、あたしとしては」

キスまでは行きそうなのに、アービィの獣化に何度も阻まれている。

「一回やっちゃえば、あとは平気だとおもうよ、あたしは」

ティアの言葉にルティは、その一回がたどり着けないの、と呟いた。

「ねぇ、ティア。ラミアの妖術って、どんなのがあるの？」

突然話題を変えたルティに、首を傾げつつ律儀にティアが答える

「う～んと、ね、幾つかあるわ。

まずは見てもらった『変身』と、相手を籠絡っていうのかな、虜っていうのか、要はヤりたい気分にさせちゃう『誘惑』。

それから強制的に寝かせちゃう『催眠』でしょ。

あとは、何回でもヤれちゃう『持続』かな」

聞いているうちに、ルティの顔が赤くなってくる。

ルティも年頃の娘なりに、性への興味はあるし、村の同性の友達からも情報は入ってきた。

近い年でも結婚している友達もいたので、知り合いの生々しい話を聞く機会も何度もあった。

その度にアービィとは、どこまでいっているのか聞かれるのが定番だった。

周りもいつも顔を真っ赤にして逃げるルティが面白くて、多少誇張して話していたが、概ねルティの性に関する認識は間違ってはいない。

「じゃあさ、『催眠』掛けてから『誘惑』って重ねられる？」

「どうしたの、ルティ？

そんなこと聞いて……？

まぁ、場合によっては『催眠』が効き過ぎちゃって、『誘惑』の効果が先に切れちゃうこともあるけど、できるわよ。

『催眠』の掛かりが浅いと……却って『誘惑』が掛かりやすいみたいね」

ルティの意図を悟ったか、できる範囲で望む答えを返す。

「そう……じゃあ、『催眠』でうとうとさせてから『誘惑』掛けて

……

でふつうに起こせば『誘惑』の効果だけが……

あんなこととか……こんな……」

「ちょっ……ルティ、目が据わって……

何考え……？

へんな笑い声漏れてるしっ！！」

まずい、あんまり期待持たせちゃいけない。あ、妄想の世界にいっちゃってる……

「その上でさ、『持続』なんか使っちゃったら……きゃっ」

引き戻さないと……

「ルティ、ルティっ！！

帰っておいでっ

涎……涎拭いてっ！！」

ティアの言葉に、我に帰る。

「はっ……

あの……聞かなかったことに……して、ね？

……

……

……でも……あたしにも『持続』を……」

「ルティ～

どうしちゃったの～？」

妄想と願望が入り交じり、ルティは混乱しきっている。

「ぎゃぁぁぁっ！！！

忘れてっ！　なんでもないわっ！！

今のあたしは、あたしじゃない～！！」

部屋の外では、酒瓶を抱えたアービィが固まっていた。

「あのね、盛り上がってるところで申し訳ないんだけど……
あたしの妖術くらいじゃ、アービィには効かないよ？
そもそもあの狼に効く精神妖術なんかないって」
額をテーブルに打ち付けるほど、一気に落ち込むルティにティアは大笑いした。可愛い子ね、こっちに『誘惑』かけちゃいたいくらいだわ。

アルギールまでは、天候が崩れやすい道程のため、7～10日の行程だ。
四日ほどは順調だったが、昨日からの雨で地盤が弛み、今日は昼に止まった駅でそのまま足止めになっている。

今頃はこの駅とひとつ先の駅から駐屯部隊の工兵が派遣され、雨の中危険な補強工事を行っているはずだ。
馬車の客にできることは当然なく、それぞれが温泉や酒、睡眠と思い思いのときを過ごしている。
明日からは崩れかけた場所を通ることも増え、余計な緊張を強いられるのであるなら、今のうちに休んでおこうというのが、皆の考えであった。

宿は銅貨15枚と安いし、足止めに対する補償も含め三食付きになっている。
幸い温泉を併設していたので、入浴も無料だ。

アービィは、食事の合間に浴場へ行っていた。
なにか血が騒ぐというか、入り浸りたくなるなにかがあるのだ。

この日三度目の入浴時、まだ陽は高い時間だが、どんよりと曇った空が気だるい気分にさせてくれる。

ゆったりと湯船に浸かっていると、湯気の向こうに入ってくる人影が見えた。

「ハイスティさん？」

「ああ、アービィさんでしたか。
ご一緒させてもらいますよ……」

身体を流し、湯船に浸かる。

平均的身長に、平均以上の腹周りを持つこの商人は、穏やかな性格だが、目つきは時折鋭いものに変化することがある。

太っているように見える身体だが、こうしてみると脂肪の下には、鍛え込まれた筋肉の鎧が隠されているのが分かる。

アービィは、この大陸を股に掛ける商人から、世界情勢を聞くのが楽しかった。

インダミトにも長くいたらしく、ラガロシフォンのことも耳にしていたようだ。

商売の良い機会がありそうだから注意しています、と言われ、アーガスが居なくなったという情報は、既に得ているようだ。

アービィは、ふと、背中の痣について話してみた。

なにか知っているのでは、と思ったのだ。

もちろん、真相までを期待したわけではなく、噂話にでも聞いたことがないかと思ってのことだった。

しかし、この世界を渡り歩く男でも、残念ながら寡聞にして聞きませんな、との答えだった。

行く先々で気にしてみましょう、とのことだが、それをどうやって報せてくれるんだろう、とアービィは不思議に思った。

そんな気持ちを知ってか知らずか、ハイスティは、いずれ何か大きな手掛かりが向こうから寄ってきますよ、と慰めるように言って、お先にと上がっていった。

脱衣所で身体を冷ましていると、後から出てきた男が、痣のことを聞いてくる。

珍しいですね、と声を掛けてきた男には、あまり詳しくは話さなかった。

フロローから一緒だった男に詳しく話したら、後日事故に遭い亡くっていたので、なんとなくはばかられるものがあったからだ。

何かご存知のことでも、と訊ねてはみたが、興味本意で申し訳ないと返されただけだった。

まだ脱衣所にいたハイスティが、足止めについて話し始め、話題を変えた。

彼もそのことは知っているので、さり気なく話題をずらしてくれたのだろう。

それから三人は天候への愚痴や八つ当たりとしか取れないようなことを話ながら、浴場をあとにした。

ハイスティは二人を慰安施設に誘うが、アービィはまだ命が惜しいと言って笑われ、もう一人の男は家族連れですのでと言って断り、それぞれに分かれていった。

その頃女湯ではルティたちが、同世代の娘とその母親の二人連れ

に、アービィをネタにからかわれていた。
ルティから、アービィの両親のことや痣のことを聞いたときには、母親の方が涙ぐみ、アンタがしっかり支えてやりなさいよ、奥さん、と言われ、ルティはのぼせて倒れるんじゃないかとティアが心配するほど、浮かれていた。

翌日、天候も回復し、馬車は走り出す。
アービィたちは、ハイスティとの雑談に興じている。
昨日痣のことを聞いてきた男は、妻とルティたちと同世代の娘を連れており、行き合った時には男性同士、女性同士はそれぞれに目礼し合っていた。

アービィたちがグラナザイに到着した頃、インダミト王国エーンベア城では、出征式が行われていた。
ラシアスに仇成し、大陸を脅かす、不逞の北の民を討ち鎮めるため、大陸を縦断する勇士たちを見送る式だ。

義勇軍約五千に諸侯軍約一万五千の大軍を指揮する財務卿ハイグロフィラ公爵子息ランケオラータ・アンガルーシー子爵に、指揮杖がバイアブランカ王より手渡される。
四カ国の基本戦略は、大陸の防衛である。
インダミト派遣軍は要塞に展開し、多国籍軍を形成。
緊密な連携を以て、侵攻を試みる北の民撃退の任に当たる。
現地での総指揮はラシアスの将に譲るが、各国軍への直接の指揮権は、それぞれの各国指揮官が保持している。

派遣軍に向け、出陣の演説を行うランケオラータを、アーガストル・ラガロシフォン子爵は、兵列の中から暗い目で眺めていた。

アーガスは、エーンベア到着後十日ほどは、おとなしくパストリス侯爵に付き従っていた。
パストリス侯は厳しくも丁寧に旧友の息子を指導していたが、父以外に厳しくされたことのないアーガスには、虐めとしか感じられなかった。

アーガスは、財務を修める気などさらさらなく、自分は優れた将であり、この度の戦で功を挙げ、父の鼻を開かしてやるものと決めていた。
パストリス侯爵の元で政務に励む振りをして、軍の有力者への付け届けを繰り返し、一部隊を預けられ一端の指揮官になることに成功した。

本来であれば、あの演説は自分がしていたはずなのに、なぜ父は自分を推薦しなかったのだろう、父の目は曇ったのかと考えている。
現地に着けば、妹婿など顎でこき使ってやろう。
旧知のストラー貴族たちと共に、貴族の振る舞いとはどんなものか、教育してやる。
自分にはその力量がある。アーガスは信じて疑わなかった。
各国でも様々な思惑を秘め、派遣軍は要塞を目指し進軍を開始した。

アルギールは、要塞から南にベルテロイまで国内を最短で結ぶ縦貫街道から、東に外れた位置にある。
これは、北の民の侵攻が直接王都を脅かさないためで、かなり不便であるがやむを得ない措置だ。

フロローから一旦北東に走るラシアス街道はS字を描いている。フロローからアルギールを経由し、グラザナイへと達したあとは西に大きく進んでまた東に戻り要塞へと到達する。

国内にはたいした産業はなく、対外貿易は完全な赤字であるが、北の民の脅威を防ぐ「盾」代として、各国の援助や長期の借款という形で穴埋めがなされている。

王都も各国から輸入された商品が溢れかえるが、ラシアスならでは、というものがあまり作り出せなかった。

農産品は各国同様に特定の偏りを見せ、他国より水産品は多いものの、加工品や工業製品に特色がない。

それでも庶民の暮らしに不自由があるわけではないので、大きな問題ではない。

今のところ町は平穏で、庶民の生活には活気があった。

アービィたちがアルギールに到着する頃、各国の派遣軍はベルテロイを通過し、フロローからグラザナイを目指す途中だった。

グラザナイで火の神殿に戦勝祈願の礼拝をすると共に、摂政ニムファ第一王女御前にて観兵式を行い、要塞へと進軍する予定だ。

アービィたちと入れ違いにアルギールを出立したニムファは、ドーントレッドがどこへ行ったのか、宛てがあっての行動なのかが、気になっていた。

権力闘争や権謀術数渦巻く王宮内で、彼女が唯一心を開ける臣下であった。

騎士団長ラルンクルスは、実直で誠実な男であり、信頼感も抜群

ではあるが、考え方が堅すぎる。
あまりにも全てに正攻法で当たるため、敵も多いし、謀にはまるで向いていない。

宰相コリンボーサは、自分を権力の後ろ盾としか考えておらず、互いの利害が一致すれば心強い味方であるが、いつ裏切られるか分かったものではない。

グラナザイに行く間、王都がドーントレット不在であることに、ニムファは言いようのない不安を覚えていた。

アルギールに到着したアービィたちは、ターミナル近くの宿に荷を降ろした。

ハイスティは、商品の売り込みに忙しいようで姿を見せない。
アービィたちはギルドへ行き、仕事を探すことにした。
さすがに路銀が心許なくなり、多少は妥協して仕事を探すことにした。
まだ貯えに余裕はあるのだが、ビースマックまでの道中でなにがあるか分からないからだ。

駅馬車のチケットは、乗り換え地点に限らず空きさえあれば、便を替えることは可能だった。

彼らが見つけられた仕事は、貴族の屋敷の警護と、飲食店、物販店の売り子だった。
アービィが警護へ、ルティとティアはそれぞれ飲食の売り子へと散った。

下級貴族の屋敷の入り口で、日がな一日中立っているだけの暇な仕事だが、それでも銀貨一枚は魅力だ。
アービィは、退屈と戦うことにした。

ルティとティアは、町中にある食堂のウエイトレスに応募し、採用されていた。
酒も扱う店だし、日中から飲むことは別段おかしくないこの世界では、多少なりとも腕に覚えのある女でないと、ウエイトレスは務まらない。

やはり、給金は一日銀貨一枚。危険料込みなのだろう。
店の制服に袖を通し、アービィが昼休みに来ないかな、と思うルティだった。
ティアは、同じ店の露天店舗での軽食販売に就いていた。

五日間、慣れない仕事で稼いだ金を、無駄遣いする気にならなかった三人は、珍しく宿の部屋で飲んでいた。
話題はそれぞれの店に来た客の話で、馬車で一緒だった親子連れが、偶然にもルティとティアの両方の店に来たということだった。
ハイスティも偶然同じ宿になっていたのだが、まだ営業回りをしているのか、姿を見ない。

ビースマックに向けて出立するため、明日で仕事を切り上げようと決めた三人は、ハイスティに挨拶くらいできないものかと話していた。

翌日、アービィとティアは仕事を終わることを雇い主に了承されたが、ルティはもう一日やって欲しいと懇願されていた。
その日から戻ってくるはずだった女の子が、急病で伏せってしま

ったらしい。
状況を理解できるだけに、ルティは断りきれず、横にいたティアも強いことは言えなかった。
結局ティアがアービィに伝えに行き、ルティは仕事に残ることに、二人は宿で待機ということにする。

ルティを送り出した後、やることがない二人は街に出てみることにした。
二人並んで歩く町並みは平和で、北の脅威に面した国の王都とは思えない穏やかさだった。

魔獣二匹が人化して、誰にも疑われることなく町中を歩く。
アービィとティアには他の魔獣の気配が分かるということは、他の魔獣にも二人の気配は分かるということだ。
だが、二人とも他の気配を感じることもなく、街を歩いている。
完全に人に溶け込んでいるのだ。

無性に嬉しくなったアービィは、ティアと一緒に過ごせるこの時間が、とても大切なものに思えた。
ティアが、練習してみる？　と言って絡ませてきた腕を、照れることなく受け入れられたのは、そのせいだったかもしれない。

そのまま二人が寄り添って歩いていると、背後に不穏な気配を感じた。
気配の正体に気付いた二人が、壊れた玩具の人形のように振り向くと、そこには荷物を取り落とし、こちらを指さしながら涙ぐむルティが立ち尽くしている。

その後暫らくは、取り乱すルティ、慰めるティア、どうしていい

か解らずうろうろするアービィの姿が見られたとか。

そしてその夜、宿の廊下では、正座させられているアービィとティアの姿が見られた。らしい。

第27話

修羅場の後、すっかり拗ねてしまったルティの機嫌を直すため、翌日丸一日中の買い物に付き合わされ、アービィは疲れ果てていた。

その間、反省の意味を込めて、ティアは宿に謹慎という形でアービィとルティをくっつけ、のんびりと一日を過ごしている。

アービィは、ルティが仲間外れにされたことに拗ねていると思いこんでいたので、話はさらにややこしくなっていた。

ルティも、照れくささからはっきり言えなかったので、いつの間にかそういうことになってしまい、どちらもティアを苦笑させることになった。

予定よりさらに一日遅れでビースマックへ向かう三人に、声を掛ける者がいた。

「おや、これは奇遇だ。

二度ならず三度とは、何かしらの縁がありますかな？」

ターミナルでハイスティが親しげに話しかけてくる。

王都で合う機会はほとんどなかったが、偶然またビースマックへの行程を一緒に過ごすことになった。

馬車の中では王都であったことを、互いに話す。

ハイスティもあまり商売にならず、これ以上いても小銭稼ぎにしかならず、滞在費と交通費を考えると得にはならないので、この国を出ることにした、ということだった。

あ、そうそう、と付け加え、治安も悪いですからな、と溜息をついた。

あまりその実感はなかったアービィが聞き返すと、先日の馬車で一緒だった家族連れが、何者かに襲われ亡くなったということと、町外れで首のない死体が発見されたということを知らされた。

「なんで……？
なんであんな……良い人たちが……っ？」
ルティは自分を励ましてくれた気の良い母子を襲った悲劇にしばし呆然となり、悲しみに涙を堪えられなかった。

「これは……余計なことを言ってしまいましたかな。
申し訳ない」
心底済まなそうにハイスティが頭を下げる。

「いえ……
ハイスティさんが……やったわけでも、悪いわけでもないんですから……頭を上げてください……」

余程ショックだったのだろう、ルティの顔からは血の気が引き、呼吸も荒くなっていた。
周りの客に断り、少し詰めてもらってルティを横にして寝かせる。

「ルティ、次の駅まで少しお休み」
アービィはルティの手を握り、そっと髪を撫でた。

この国に来て以来、痣のことを訊ねてきた人が二人死んだ。
母子はアービィに直接聞いてきたわけではないから、巻き添えになったとも言える。
暗い目になったアービィに、ハイスティも同じことを考えたのか、あの話はあまりしない方が良さそうですね、見せないに越したことはないですな、と耳打ちする。

アービィも同じことを考えていたので、肯くしかなかった。僕は不幸を運んでるの？

コリンボーサ宰相は、焦燥感に苛まれていた。
短期間に、国内に放ってあった宰相直属の密偵が、既に八名消されている。
どこかの国が「勇者」に気付き、腕利きを送り込んでいるようだ。

灰色の髪と瞳の若者の情報は、グラザナイ以降途絶えたままだ。
おそらく、消された密偵は近くにいたはずだから、若者は王都にいたのだろうが、コリンボーサまで情報が届いていない。

彼が抱えている密偵のうち、腕利きのほとんどが北の大地に放たれている。
国内に残った者は、少々腕の劣る者が多い。

功を焦ったり、連絡が甘かったりと、不満は多いが、現状では致し方ない。
それでも、家族を装わせて三人組で動かしていた密偵を消されたのは、痛い。

それぞれが人に溶け込む技術に長けていた彼らだけでなく、彼らに付けていた腕利きの連絡係を纏めて始末されてしまった。
若者の確保を任せていたチームが消滅してしまったのだ。

怪しい人物の目星はついているが、彼らで手に負えないのであれば、北に潜らせた腕利きの密偵を呼び戻さなければならない。

今、北からその者たちを抜くのは危険すぎる。

コリンボーサは、側に控える者に、連絡は密に、そして無理はせず些細なことでも連携を駆使し、正体を悟らせぬことを注意しろ、と命令するのが精一杯の対応だった。

自らの膝元を荒らしてくれた礼は、後で利子を付けてたっぷりとしてくれよう。

国同士の話になっても。な。

アービィは、ハイスティから話を聞いて以来風呂を控えている。

もちろん入浴はしているが、浴場に人の気配があれば控え、入浴中に人の気配を感じれば不自然にならないように早めにあがる。

背中を見せないように気遣いながらの入浴は、却って気疲れを増すようになっていた。

深夜、宿を抜け出し、人目を避けて山に分け入る。

周囲を確認してから獣化し、風を巻いて山道を走る。

なにも考えられなくなるまで、山中を走りたかった。

僕は……不幸を運んでるの？

嫌だ嫌だ嫌だ

このまま消えてしまいたかったが、ルティへの恋慕がそうさせなかった。

僕は……ルティの側にいたいから……
なんて自分勝手なんだ……

ルティの為なんかじゃなく……
自分の為じゃないか……

獣化した彼の脚で、踏破できない山などない。
悲しげな狼の遠吠えが、山に木霊した。

ビースマックへの行程は順調だった。
一度、崩れた道の補修に行き合い、一日の遅れはあったが、ほぼ予定通りに進んでいる。

ルティは、数日鬱ぎ込んでいたが、今は元通りになっている。
アービィは夜に走っているせいか、馬車の中ではうとうとしていることが多い。

ルティもティアも、アービィが酒を飲まず、夜消えていることには気付いていたが、放っていた。
二人とも、あの話を聞いて一番つらいのはアービィだと解っているからだ。

ハイスティは、楽しく過ごせるはずの道中を暗いものにしてしまった罪悪感からか、三人とは距離を取っている。

同情でも憐憫でもない視線でこちらを見るハイスティに、三人は

多少の気不味さと、放っておいてくれることへの感謝の視線を送っていた。

フロローを発った連合派遣軍は、大きな遅れもなくグラザナイまで到着していた。

その内側には、かなり危険な問題をはらんでいるが、まだ表面化してはいない。

派遣軍の中には、国という派閥とはまた別に、幾つかのグループができあがっていた。

指揮権をラシアスが持つことに、良しとしないグループ。

何れも良家の子息が多く、かさばるプライドと無駄な自信が、指揮権がないことに不満を抱かせていた。

この戦で一旗上げてやろうともくろむグループ。

地方貴族の子息や、男爵クラスの下級貴族が、さらに大きな領地や爵位を求め、派遣軍に参加していた。

彼らは、今回の戦が防衛を主体としており、侵攻戦が計画されていないことに、大きな不満を抱いていた。

悪いことに、指揮権を欲するグループの中にも防衛戦であることに不満を抱く者が多数いた。

それぞれの中に幾つものグループがあり、やがてその細かいグループは離合集散を繰り返し、薄汚い陰謀と共に派閥と融合し、派遣軍の中で大きな勢力となっていった。

ラシアスの危機をわが国の危機と同義だと考え、使命感に燃えた若い貴族や騎士たちは、そのグループがいくつかの勢力を形成する様を苦々しい思いで眺めていたが、数の力に押し負かされ、それ以

上のことはできなかった。

ランケオラータ子爵は、言いようのない不安と戦っている。自国軍中に戦乱を望むグループが存在することは当然掴んでいるし、その中心にアーガスがいることも解っていた。

インダミト国軍の中でアーガスが行った工作に乗った愚か者のグループが、毎夜幕舎を訊ねてきては北の大地への侵攻を進言していた。

今回の派遣の意義を説き、南の大陸には北を侵攻する意志がないこと、補給や戦線の維持の困難さを説き、その度に追い返していた。

しかし、アーガスがストラーの貴族たちに接近してからと言うもの、その進言攻勢がぱたりと止んでいる。

あの名誉欲の権化が、自分の説得くらいで功を諦めるとは思えず、ストラーの侵攻勢力と結んで何かを企んでいることまでは想像に難くないが、その正体が掴めない。

万が一、二ヶ国の軍から先走りをする者が多数出た場合、残る二国に合わす顔がないだけでなく、事態の収拾に残る兵を投入しなければならないかもしれないのだ。

自軍相打つ事態だけはなんとしても防ぎたい。

幕僚に命じ、アーガスやストラー貴族の周囲を探らせてはいるが他国の壁は厚く、その情報は上辺だけのものでしかなかった。

もちろん、ストラー側でも探ってはいるのだろうが、態々自軍の恥を晒してくるほどあの国は融通の利く国ではない。

ここはひとつ、自分が悪者になるべきか。

彼には、まだ決断できずにいた。

レヴァイストル伯爵は、二通の手紙を前に苦り切っている。
一通はパストリス侯爵、もう一通は宰相ウルバケウス公爵からのものだった。

パストリス侯爵からの手紙には、アーガスが派遣軍に参加したことと、彼の身を案ずる言葉、言外にぼんくらが消えてくれたことへの安堵を含めてだが、教育が不充分なまま手元から離れさせてしまったことへの詫びが記されている。

そして、問題は宰相からの手紙だ。
内容は、アーガスから提出された離縁状についての問い合わせだ。
今のところ宰相がそれを止めているが、王にこの一件が知れてしまえば大ごとになってしまう。重臣の嫡男が離縁するなどという醜聞は、国の威信に関わる一大事だ。ボルビデュス領にとっても、大打撃になる可能性が高い。そして、離縁が成立してしまえばアーガスは貴族ではなくなり、指揮権どころか義勇軍の一兵士に成り下がってしまうのだ。宰相は、そのことを理解したうえでの離縁なのかと問い合わせていた。
もちろん、レヴァイストルが認めればそれまでだが、本当にそれで良いのか、握りつぶすなら今だけだと、聞いていたのだった。

彼にはアーガスの思考が読めていた。
おそらく、馬鹿息子は派遣軍の中で戦功を挙げ、上位の爵位を得ることを目論んでいる。

戦功を挙げ、より大きな領地を手に入れることで、自らを冷遇した父を見返そうとしているのだろう。
どこで教育を違えたか、レヴァイストルは暗澹たる思いだった。

アーガスに軍事の才はない。
それ故に、パストリス侯に付けて財務を学ばせ、領地を堅実に経営させたかった。
もちろん、財務の才とてあるとは思えないが、最低限必要なことだと思ってのことだ。

それに、アーガスの持つ身体能力は、圧倒的に軍務に向いていない。
剣の修練はさせたものの、自分に勝つ相手とは絶対に試合をやらない。

そのせいか、すぐ相手が見つからなくなり、ひとりで修練する羽目になってしまった。
幼少の頃より自分が一番でなければ、我慢ならない性格だったのだ。
競う相手がいなければ、いつでも一番になれる。

少しでも厳しい稽古を付ける師範も、すぐ解雇している。
楽しかできない性格でもあった。

そのアーガスが軍で戦功を挙げるなど、夢のまた夢であろう。
軍師としての才は、身体能力とは関係ないのだろうが、アーガスに軍師が勤まるような知識教養はない。

父は、その悲しい現実を知悉していた。

レヴァイストルは、パストリス侯への詫び状を認めつつも、息子への対処を如何にすべきか頭を悩ませていた。

夕刻、ビースマックの国境が近づき、馬車は最後の駅に停車する。ラシアスとビースマックの国境の町ソロノガルスクの中心にあるターミナルに降り立ったアービィたちは、その日は宿を取り、翌朝徒歩で町外れにある国境の関所に向かった。

アービィは、表面上いつもの快活さを取り戻していたが、時折考え込んだような表情を見せることがある。

できるだけ、痣のことに触れないようにしてはいるが、もしかしたら自分の出自に関ることで悪いことがあるのではないかと考え込ませてしまうのだ。

ハイスティは馬車を降りるとすぐに、ここから先は、私の担当ではないので、と言って去って行った。

数日はここに滞在し、商売の動向を探ってから越境するらしい。名残惜しいのですが、いつかまたお目に掛かることもあるでしょう、どうぞご無事で。

在り来りの別れの言葉だったが、その前の商人の言葉に、ルティは何とはない不自然さを感じていた。担当？

関所は両国を行き来する人々で、賑わっている。

普段であれば、入出国審査などないに等しいと聞いていた。

国内経済を国外の資源や商品に依存するラシアスで、関所の審査を必要以上に厳しくすることは、経済の首を絞めるようなものだ。

余程の重犯罪者が逃亡したということでもなければ、ほとんどフリーパスといっていいだろう。

ところがこの日は、余程のことが起きたのだろう。

ラシアスから出る人の列は、なかなか前に進んでいない。

列に並ぶ人々からは、不満の声が上がり、役人たちがそれを宥めている。
いつもであれば、隣町に行くような気軽さで国境を越えることに慣れている人々は、役人に掴みかからんばかりの勢いで不満をぶちまけている。

まさか、この程度で軍による鎮圧を依頼することもできず、宥め役を押し付けられた役人の受難は、当分終わりそうもない。
何が原因なのか気になったティアが、並ぶ人々に声を掛け聞いて歩くが、犯罪者だの要人通過だのいろいろな説が飛び交っていた。

「ただね、ちょっと気になるのが、痣のある若者を探しているって話もあるのよ」
「ちょっとイヤね。
アービィが何か言われるわね、それは。
別に犯罪を犯してきたわけじゃないから、構わないんだけど……痣があるって判ったらどうする気かしら」
ティアが聞きつけてきた話に、ルティが疑問を呈する。

「ここまで大掛かりに検問まがいなことしてるんだからねぇ。
ひょっとしたら、王都に連行とかあるのかもね」
ティアが言うと、アービィは悲しそうな顔になる。

「僕が何かしたって思われてるのかなぁ……」
「大丈夫よ、アービィ。
あたしに任せて。
これの使い道って、いろいろあるのよ」
ティアは、荷物からティアラを取り出し、懐に忍ばせる。

朝方から並び、太陽が真上を過ぎた頃、ようやくアービィたちの審査の順番が回ってきた。
出国審査官は、今まで繰り返された退屈な質問を彼らに投げる。
ティアは、その直前にティアラを着け、アービィとルティの陰に隠れるようにして、周りに聞こえないように小さく妖術の呪文を唱えている。
審査官がいくつか質問をするうちにティアが前に出ると、審査官のティアを見る目が粘っこいものに変わる。
豹変したといっていいかもしれない。

「通っていいですか？」
「まだ、質問は終わっていないが……」
歯切れ悪く、審査官が言う。

「何も、問題はありません。
通っていいですか？」
ティアが審査官の額に指を伸ばし、そして再度言った。

「ええ……、どうぞ……
なに……も……問題……は……ない……」
アービィたちは、痣に付いて一言も質疑応答をせず、国境を通過した。

「ねぇ、なにやったの？」
好奇心いっぱいの顔でルティがティアに聞く。

「今頃、あの審査官、あたしの裸でも思い浮かべてるんじゃない？
本当は、あのままおっぱじめちゃうための妖術なんだけどさ。

ここでしちゃうわけにもいかないでしょ？
それに選ぶ権利はあると思うの。
で、最後に駄目押しでイメージを被せながら、ここを通してって言ってみたのよ」
ティアは、既にティアラを外し、荷物の奥底にしまいこんでいた。
審査官に気付かれないように『誘惑』を掛け、ティアの思い通りに誘導していたのだった。

「イメージって、
……ティアの裸？」
「ううん、してるところ」
ルティが一瞬で真っ赤になった。

こんなに上手くいくとは思わなかったわ、とティアは言って、笑う。男なんてこんなものよ。
なんとなく、背筋が寒くなったアービィだった。

ラシアスに大きな火種を残したまま、ビースマック最初の町エッシンフェルゲンを目指し、三人は歩き出した。

第２８話

ビースマックに入り、最初の町エッシンフェルゲンに到着した一行は、宿を定めギルドの場所を聞いた。
ラシアスでの旅は、ほとんど呪文を使う機会もなく終わってしまったので、ここではあまり贅沢は言わず、些細な仕事でも受けることにした。

ギルドのドアをくぐり、依頼リストのある掲示板に目を走らせる。

「ルティ、これなんかどうかな？」
アービィが一枚の依頼書を取り、二人の前に置いた。

あれからアービィは、時折憂いのある表情こそ見せるものの、いつもの快活な若者に戻っていた。

依頼書の内容は、エッシンフェルゲンの近くにある洞窟にひと月ほど前から住み着いた魔獣の討伐だった。

「なんでも請けようって無欲の勝利ね。
いいんじゃない、これいきましょうよ」
ルティはアービィの気が紛れるのならと、いつも以上に明るく振る舞っている。

ティアに、彼を支えられるのはあなただけ、と言われたことも大いに影響している。
そして、何者かに襲われ命を落としたという、気の良い母子連れにも言われたことだった。

ティアは、今のところルティの明るさはいい方向に出ていると見ているが、いつルティに無理が出てくるかが心配だった。

馬車の停車駅の宿に泊まった夜でさえ、ルティは剣の修練を休んでいない。

ティアが見ても、その上達振りには目を見張るものがある。

惜しむらくは、剣が彼女の体格と技術に合っていないことだ。

ブロードソードは、相手を斬るよりは剣自体の重みを利用して叩き潰す武器だ。

ルティの剣筋は、どちらかというと力で叩き潰すより、技とスピードで斬り裂く方が合っているように見える。

レヴァイストル伯爵は、正統派のブロードソードの技術を指南したが、ルティは正しく基本を繰り返し鍛錬するうちに、自分に合った太刀筋を体得したようだ。

それもアービィを支え守りたいという、彼女の強い意志の現れなのだろうと、ティアは思っていた。

そんなことを考えつつ、ティアは差し出された依頼書に目を通し、そして絶句した。

討伐対象として書かれた魔獣の種名は、ヒドラ。

九つの頭を持つ蛇の化け物。

真ん中の頭以外は、何度斬っても生え替わる不死の頭を持つ大蛇。

その真ん中の頭は、剣では斬り裂けない硬度を持つ、不死に等しい。

そして何より、ラミアの上位種。
一対一であれば、どう頑張ってもティアに勝ち目はない。
生理的に恐怖を感じてしまう相手だ。

「あの～、本気？」
ティアがおずおずと言う。

「うん、本気」
アービィはにっこり笑って肯く。
退路を断つようにルティも肯いた。

大きな仕事を請けるためには、手数料として元手も必要だった。
まだ多少の余裕があるうちに、大きな元手を手にしたいという計算も働いている。

しばらくテーブルに伏せていたティアが、決意したように勢いよく顔を上げた。
よく見ると涙目になっている。
「わかったわ。
やってあげようじゃないの。
いつまでも狩られる対象でいるわけにはいかないものね。
ラミ――ぅわん～っ――ぶはぁっ」
ラミアの意地を見せてあげるわ、と叫びそうになったティアは、慌てた二人に口を塞がれ、目を白黒させていた。

ヒドラが巣くった洞窟は、このエッシンフェルゲンの水源だった。
この街の地下の岩盤が硬い上、水脈も深いため、町中には井戸が極端に少ない。

さらに川は街より低い位置を流れるため、水を引くことは事実上不可能だった。

洞窟の奥に湧き水があり、その泉から流れ出る水は一度地中に潜った後、大地に濾過された清浄な水となって、街の側の崖から再び地上に流れ出ている。

流れ落ちる水を大きな器で受け、樋を使って街の各所に水道を引いているのは、技術の国の面目躍如といったところだろう。

しかし、洞窟に住み着き、泉に暮らすヒドラの吐く毒に汚染された水は、大地の力を以てしても浄化しきれず、飲料水としては当然のこと、生活用水、農工業用水としても使用できなくなっていた。

樋を外した貯水タンクからは、赤茶色に濁った水が溢れ、周囲の草木は枯れ果てていた。

これまでに三組の手練れの冒険者が討伐に挑んだが、何れのチームも返り討ちに遭い五名の犠牲者を出し、生き残ったものの二度と剣を取れない身体にされた者は七名に上っていた。

それゆえだろう、討伐の報酬は破格の金貨三枚だった。

多少の無理をしてでも、この依頼を請けようとしたことには、当然理由がある。

アービィもルティの太刀筋に関して、ティア同様のことを考えていた。

現在ルティが使用している剣は、鋳造の大量生産品だ。

そろそろ鍛造の、身に合った剣を持ってもいいだろう。

どうせ買うならばできる限り良いものを、もし可能なら鍛冶屋に

ルティの体格、技術を見てもらってオーダーしたい。
ビースマックであれば、それなりにいい剣を手に入れることは、他国より容易であろう。
が、そのために金は惜しみたくないので、いくらでも稼いでおきたかったのだ。

「じゃ、今夜はさっさと飲んで、早く寝ようね。
明日は夜明け前に出ようか」

陽のあるうちから宿の一室で飲み始めた三人は、今後の予定を相談する。
なんとなく、ティアの呑み方が自棄酒に近かったことに、アービィとルティは気付かない振りをすることにした。

剣の新調に付いてルティにはまだ言っていないが、ラシアスでの生活で路銀がかなり危うくなっていることも事実だ。
ちまちまとした依頼ばかりでは、宿代と飲食費だけに消えてしまう。

土の神殿があるツェレンドルフへの旅費や、ルティの剣ばかりでなくティアの短刀やダガーも、新調したいし、アービィももう一本刀が欲しい。
こうなると、街の周辺をうろうろしているゴブリンやリザードマン、コボルドといった小物ばかりでは、いつまでたっても必要な金が貯まらない。
多少の危険があっても、大物狙いで行こうということになった。

ビースマックは峻険な山が多く、人跡未踏の地域もまだ多い。
山から降りてくる強大な魔獣は人々の脅威となり、それがビース

マック国民の職人気質と相俟って武器製造技術の発達を加速させた。

他国に比べ領土の拡張や国力の伸展にそれほど意欲が見られないのは、魔獣の脅威が大きく影響している。

くだらないプライドの張り合いや領土の奪い合いなど、魔獣から民を守ることに比べ些細なことでしかないと歴代の王は考えていた。

中には自国の技術力を過信し、四ヶ国に均等に振り分けられた大陸をひとつに纏め、自国の指導の下優れた技術力を持って北に攻め入ろうと目論む貴族連中もいた。

選民思想に染められた彼らは、自国の技術は世界一と思い上がり、一部の民をも巻き込んで政治勢力を拡大することに血道をあげている。

しかし現実は、平地が少ないという国土の特色が、彼らの野望を満たすための人口という戦力を育てることを不可能にしていた。

ビースマック王ラーゴグランテ・ウェンディロフ・リシア・ブルグンデロットや多くの貴族、民もその事実はよく理解しており、ラシアスを支えるため、農業国のストラーと連携を取り、武器防具や様々な工業製品の開発改良に励んでいる。

陽が沈む頃にはさっさと酔い潰れた三人は、翌朝早くにエッシンフェルゲンを出た。

昼頃には洞窟に到着し、レーションを胃に納めてからトーチに火を灯し、洞窟の中に進入する。

曲りくねった洞窟だが、ほぼ一直線になっていて、泉まで迷うことはないと聞いていた。

「なんか、既視感があるんだけど、気のせいかな？」
「う～ん、ティアと初めて会ったとき、こんな感じで進んでたわね」

「じゃあさ、また口車で……」
アービィが冗談を言うが、それを皆まで言わせずティアが叫ぶ。

「無理無理無理無理無理無理無理無理っ！！
あんな最凶最悪の蛇、そんなの無理よっ！！
あれは知性なんかないわっ！！
動くものなら何でも噛み付いてくるんだからっ！！」
なんとなく震えているのは、気のせいではないはずだ。

途中いくつかの側道はあるものの、全てに看板や注意書きがあり、迷うと危険な側道には入り込めないように丈夫な鉄の柵が打ち込まれている。

奥に行くに従い瘴気が強くなるのを感じるが、ルティはともかく、狼と蛇の魔獣には何の影響もない。
時折ルティに『回復』を掛けつつ二時間ほど進むと、赤茶色の濁り水を湛えた広い泉に行き着いた。

ひとつの街の水源を賄うだけあって、そこから溢れ出す水量はかなり多い。
が、かつては街の生活を支えた正常な水はそこになく、今は濁った水が流れ出ているだけだ。

ヒドラは、その濁り水の中に、大きな背中を見せていた。
アービィたちの気配を感じたか、ゆっくりと九本の鎌首をもたげ、三人を見下ろした。

アービィたちは、打ち合わせどおりに行動を開始する。
ティアは後ろに下がり、全員の持っていたトーチを岩で固定する。
その後は『回復』、『治癒』、『解毒』に専念する。

ルティは、切り落とせる首をひたすら切る。
九本の首全ての攻撃を防げるとは思えないので、適宜呪文で回復する。

アービィは、切り落とした首が生え替わらないように、切り口を『火球』で焼き払う。
今のところレベル１の使用限界は８回なので、ミスさえしなければ足りるはずだ。
それだけでなく、隙を見て中心の首への対処もしなければならない。

できれば獣化せず片を付けたいが、場合によってはそうも言っていられないだろう。

情というものを感じさせない、冷たい１８の目が三人を射る。
アービィが跳躍し、全ての首の注意を引き付け、ルティが端の首へと切り掛かる。

アービィを追ってしまったために隙ができたのか、ルティは造作もなく二本の首を切り落とした。
しかし、アービィはタイミングが合わず、『火球』を叩き込む前に新たな首が生えてしまった。

着地したアービィは、呪文の詠唱こそ終わっていたが、タイミングを失い不発に終わる。
火の玉が具現化しかけてしまったので、もう一度詠唱からやり直しだ。

首の攻撃ばかりでなく、尾の攻撃も避けながら、詠唱を始める。
ルティは当たるを幸い首を切り落とすが、アービィの呪文が間に合わない。
想像以上の再生力だ。

何度か首を切り落としたとき、ヒドラの注意がルティに向く。
その隙を狙って、ようやく呪文の詠唱が完了したアービィが、切り口に向かって『火球』を叩き付けた。

肉を焼くいい香りが漂い、その切り口から新たな首が生えることはなくなった。

切り裂かれた痛みと、体全体に響く火傷の痛みにヒドラがのたうち、攻撃が止まる。
さらにその隙を狙い、ルティが首を切り落とし、アービィが『火球』を打ち込んだ。

六本までは順調に切り落とし、傷口を焼き払うが、ヒドラも死力を振り絞って暴れている。
叩き付けられる首と尾の攻撃は防ぎきれず、前衛の二人に疲労と傷が蓄積される。
ティアは、『回復』をルティに掛けるが、そろそろ追いつかなくなっている。

それまで慎重に狙いを定めていたアービィの『火球』が、二度続けて的を外した。
人外の戦闘力を持つアービィだが、精神力はまだ成長途中で、呪文のコントロールには不安がある。
疲労の蓄積が集中力を乱し、ここへ来て呪文の失敗へと繋がってしまった。

比較的優勢に進めていた戦闘が、切り札を失ったことによって一気に劣勢に傾く。
まだ『大炎』が一回残っているが、これは中心の首の口の中に叩き込み、内側からヒドラを破壊する作戦のため、今使うわけには行かない。
ティアが慌てて『回復』と『治癒』を掛け、アービィの集中力を取り戻すが、三本残った首は自由度が増したのか攻撃のスピードが上がり、受けるダメージが増加していく。

状況を把握したティアは、ラミアのティアラを身に付け、アービィと初めて対峙したときのようにその姿を消した。
予備のトーチから松脂を削り、鏃に布で松脂を巻きつける。

トーチから火を移し、二人に大声で指示を飛ばした。

「アービィも切り落とす方に集中してっ！！
あたしが、焼き払うわっ！！」

今までヒドラを倒すなど、不可能だと思っていた。
傷口を焼くなんて、発想がなかったのだ。

それでも身体に染み込んだ恐怖が、震えを呼び起こす。
必死に精神を統一させ、ティアは二人が首を切り落とすタイミン

グを計っていた。

ティアからの指示で呪文を放棄したアービィは、ルティと手分けして首を落とすことに専念する。

人狼の持つ目が素早い動きを見切り、残る片方を切り落とす。

そこへティアの火矢が命中し、再生可能な首の残すは一本、そして不死といわれる中心の首だ。

しかし、その時点でルティは限界に来ていた。

呪文は使い切り、自らの回復手段はない。

ティアの呪文もあと『回復』または『解毒』が二回、『治癒』が一回。

剣は刃が潰れ、既に肉を切り裂く用を成さなくなっていた。

ヒドラの攻撃を防ぎ、殴り返すのが精一杯だ。

硬度故か、動きの遅い中心の首は、攻撃という点では然程の脅威ではなかった。

しかし、尾はまだ充分な戦闘力を残し、ルティに迫ってくる。

アービィがルティと尾の間に割って入り、尾を弾いて攻撃を防ぐ。

その隙を突かれ、残った再生可能の首がルティに噛み付き、大きなダメージを負わせてしまった。

ルティは、もう立っているのがやっとの状態だ。

ティアが『治癒』を掛けるが、一度では治療しきれない。

アービィが首を殴り飛ばしてルティから引き剥がすが、意識が飛びかけたルティを尾が巻き取り、締め上げる。

ルティの手から剣が落ち、力が抜け、意識が混濁し始める。

アービィは、ルティにダメージを負わせた首を切り落とし、怒りに任せて『大炎』を叩き込んだ。
怒りが疲労と未熟を上回り、詠唱のスピードを上げさせたのだ。

枷が外れ、瞬時に獣化したアービィは、ヒドラの唯一残された中心の頭を両顎に捕らえた。
アービィが顎に力を入れた瞬間、腹の底に響く岩を潰すような嫌な音が響き、ヒドラの尾から力が消失した。

ティアがルティを救出し振り向くと、噛み砕いたヒドラの頭を吐き出した巨狼が、これでは足りないとばかりにヒドラの全身を噛み裂いている。

全身をヒドラの返り血で真っ赤に染めた巨狼の目は狂気が支配し、頭を振りたくり、身体を跳ね上げ、ヒドラの死体を噛み裂き切り飛ばす。
ティアはアービィを止めたかったが、狂気に染まった巨狼への恐怖が脚を竦ませていた。

「アービィ、止めて……もう……もう、いいわ……
もう……いいのよぉっ！！」
恐怖に引き攣れた涙声でティアが懇願するが、巨狼の凶行は止まらない。

唐突に喉を大きく鳴らした巨狼の動きが止まり、切れ長の目から狂気が消えた。
涙目で震えるティアに、念話が届く。
――ティア～、なんか着る物あるかなぁ？

アービィは、最後狂気に駆られヒドラを噛み裂いていたときに、ヒドラの毒をたっぷり含んだ血液を大量に飲み込んでしまい、あまりの不味さに正気を取り戻したのだ。
ティアから受け取った野営用に持ち歩いている毛布を切り裂き、即席の服にしてとりあえずは身に纏う。

ティアは意識を失っているルティに『回復』を掛けた時点で、呪文を使い切っている。
ルティは、『回復』が効いたのか、穏やかな寝息を立てていた。

いずれにせよ、このまま街に帰るのは危険だ。
疲労困憊で呪文も切れている三人には、現時点ではゴブリンでさえ脅威になってしまう。

当面の危機はなくなっているので、このままここに野営し、明日呪文が使用可能になったら傷を癒し、ヒドラの死体から討伐の証拠になる牙を抜いて、エッシンフェルゲンに戻ることにする。

ヒドラがいなくなれば、泉は数ヶ月で元の清浄な水を溢れ返させるだろう。

焚き火の側で、三人は眠ることにした。
ティアも疲労の極致にあり、身を横たえるとすぐに寝息を立て始めた。
アービィは、ヒドラの毒のせいで一晩中吐き気に悩まされている。

それでも全員のコンビネーションが上がってきたことに、アービィは安堵の溜息をついていた。

だが、狂気のコントロールができなかったことに、アービィは不安も感じ始めていた。

第２９話

インダミト王バイアブランカは、一通の報告書に目を通していた。
穏やかな瞳が文字を追い、満足そうに頷き、報告書を燃やした。

ラシアスに潜らせた間諜からの報告書には、痣を持つ少年がラシアスに確保されることなく、ビースマックに出たことが記されている。

ラシアスが無為に彼を出国させたのではなく、幾度か確保を狙っていたことと、それを実力で阻止したことも記されていた。

これで彼の国の宰相か摂政と事を構えることになるかもしれないというのに、王の瞳は穏やかなままである。

現状でラシアスがインダミトに抗議や最後通牒などできるわけがないということを、王は良く解っている。

もし、なんらかの抗議でもあれば、貿易や支援の停止や縮小、派遣軍の引き上げなど、いくらでも黙らせる手段を持っているからだ。

しばらく机に向かってペンを走らせた王は、宰相を通さずに側に控える密偵に新たな指示書を手渡す。

その内容は、ラシアスに潜った密偵に、ベルテロイにおいて少年の情報を集め、またラシアスに戻るようなら引き続き監視を続けろということだった。

ベルテロイにいる商人が、何を探り歩いていても不自然ではないからな、と王は呟いた。

昨日の戦闘で呪文を使い果たすほどに精神を削りきった三人は、

それぞれに呪文の使用回数が思ったよりも増えていた。
アービィとルティは、レベル1が10回に到達し、レベル2が3回に、ティアはレベル1が10回、レベル2が4回になった。

この調子で経験を積めばレベル3もそう遠いことではないが、さすがに昨日のような戦闘を連日行うことは体力が持たない。
できるだけ大きな仕事を優先はするが、連続ではなく軽めの仕事を挟んで請けることにした。

エッシンフェルゲンに戻り、三人はギルドにヒドラの牙を提出して、報酬の金貨三枚を手に入れた。
三人がギルドのドアを開けたとき、あまりに見窄らしい疲れ果てた様子から、ギルドの職員は失敗して帰ってきたものと思ったようだ。

なにせルティもティアも衣服の彼方此方が破れ、アービィにいたっては、毛布を切り裂いたものを身に纏っていたのだ。
誰がどう見ても、逃げ帰ってきた敗残の兵だ。

失望と諦めの表情で対応に立ったギルド職員の前に、ヒドラの牙が差し出されたとき、彼は暫く呆然としてしまった。

そしてその直後、歓喜が爆発した。
このひと月、街を悩ませた凶獣の牙。

これが意味することは、ひとつしかない。
若い冒険者たちは、ヒドラの討伐に成功し、街を危機から救ったのだ。

周りにいた冒険者たちに酒場に連行された彼らは、そこで手荒い

歓待にあった。
いつの間にか町長までが酒盛りの輪に加わっており、酒場は町長持ちの貸し切りとなっていた。

さっさと宿に戻って寝ようと思っていたアービィたちは、状況の急展開に付いていけず、そのまま酒盛りに突入してしまい、浴びせられる酒と質問に四苦八苦していた。
さすがにアービィは着替えさせてもらっていたが。

ヒドラは、個体名ではなく種族名であり、倒したあの一個体だけというわけではない。
そうそう何度もヒドラが水源の泉に巣くうことはないと考えられるが、アービィたちの戦術は、今後万が一のためにも学んでおく必要があった。

ルティが戦闘の経過を事細かに説明すると、周囲からは感嘆の声が上がる。
切り口を焼くなんてよく思い付きましたね、と言われたが、アービィにも直感としか説明ができなかった。
夢の中で読んだ記憶が朧気にある物語をヒントにしたのだが、まさかそのような説明で納得してくれるとは思えなかった。噛み砕くなんてなかったけどね。

結局その夜は、町長が解放してくれず、そのまま町長の屋敷に連れて行かれ、宴の第二ラウンドが始まった。
入れ替わり立ち替わり人々が礼を言いに屋敷を訪れ、歓喜の酒宴はいつまでも終わる気配を見せなかった。

翌朝、痛みが響きわたる頭を抱え、町長に良い武器屋の情報を聞く。

ルティの剣が、使い物にならなくなっていたのだ。
おそらく、腕の良い研ぎ師に任せても、もう再起不能と思われるほどに、刃は潰れ、刀身が歪んでいた。

昨夜の歓待の礼を言って屋敷を辞するとき、町長はいかにも残念そうに送り出してくれた。
町長は彼らを手放したくはなかった。

ヒドラを倒せるような冒険者は、そうそういない。
彼らがここに腰を落ち着けてくれるのであれば、街の安全を確保したも同然だった。

もちろん、町としても異存はなく、住居も都合の良い空き家を改修して提供すると言いだした。
三軒じゃなくて二軒が良いですよね、と言われ、ルティが浮かれまくっていたのはご愛敬だが。

もし、彼らが望むならこの辺り一帯を治める辺境伯に、騎士として取り立てるよう進言するつもりもあったのだ。

町長は自分の影響下に彼らを置きたいのではなく、純粋に町の安全と彼らへの感謝から提案していた。
しかし、昨夜の酒の席で聞いた彼らの話から、それを受けてもらえる可能性は皆無に等しいことも、また理解していた。

それでも屋敷を出ていく彼らに、町長はもう一度聞かずにはいられなかった。

アービィたちも、町長や町の人々の厚意は解っていた。

それだけに無碍に断ることははばかられたのだが、アービィは獣化をコントロールできないうちは、一ヶ所に腰を据えるのは危険だと解っている。

まさか、獣化を理由にはできないので、痣の件は言わずにいつもと同じことを話した。

そういうことなら仕方ないですな、でもいつか気が向いたらここへお戻りになっていただきたいものです。

心から町を案じ、三人を思いやる町長の言葉に心苦しさを感じつつ、屋敷を辞する三人だった。

町長が紹介してくれた武器屋は、昨夜盛大に飲んだくれていた若い女性だった。

目利きには自信があるから、好きなものを持って行けと言ってくれている。

半ば自棄鉢であることに気付いたティアが聞いてみると、ヒドラ討伐はいい商売になっていたみたいだった。

多数の冒険者がヒドラ討伐の名誉と報酬を求め、この街に集まってきていた。

宿屋や武器防具屋は、そんな冒険者相手に活況を呈していたようだ。

水不足の裏では、ささやかな好景気もあったが、街全体の苦境の中では喜ぶわけにもいかず、今その一部の好景気が去ったことを落ち込むわけにもいかなかった。

彼女は親から受け継いだ店を大きくするために、問屋に頭を下げ、生産者に教えを請い、武芸の鍛錬も行っている。

ひとえに客に合った武器を奨めるためであり、店を繁盛させるためであった。

残念なことに、彼女は武芸の才が皆無であったため、自ら槍働きをする立場にはならなかったが、それでも他人の武芸の向き不向きを見極める目を養うことになった。

幾つかの剣を手に取り、試し斬りをしたルティを見た彼女は、いかにも残念という表情をしていた。

ルティは、未だ自分の剣技が良いものとは思っていない。

武器屋主人の眼鏡に適わなかったのかと、落ち込みそうになった。

彼女は、がっくりしているルティの剣技に驚愕している

まだ荒削りだが、今後の鍛錬と良い「刀」があれば、この娘は化けると直感が言っていた。

彼女が残念という顔をしたのは、ルティに見合う剣、もしくは刀が、在庫にないからだった。

プロとして、客に合う剣を用意できなかった悔しさが、店で買ったら三割から四割は高くなるよと言わせ、直に鍛冶屋に行くべきだと利益度外視で奨める。

そして、とりあえずこれでも使っておきな、と女主人が片刃のロングソードをルティに渡す。

ちょいとばかりアンタにゃ長いから使いにくいかも知れない、だからお代は結構だよ、と彼女は笑った。

マグシュテットという村に腕の良い鍛冶屋がいると言われた三人は、土の神殿に行く前にそちらに行くことにした。

気に入った相手ならいろいろと相談に乗ってくれるが、気に入らなければいくら金を積もうが話もしないとの評判だという。

エッシンフェルゲンからツェレンドルフに向かって、東に伸びるビースマック街道の中間地点から北上した山脈の中腹に、マグシュテットはある。

神殿があるツェレンドルフへの行程からは外れるが、行く価値はありそうだ。

途中は小さな集落があり、そこへ行くのに苦労はなさそうだ。

ビースマック街道から往復4日間かかるが、それでも今後のことを考えるなら行っておくべきだろう。

金貨三枚を、そっくり武器に変えるつもりの三人は、もうしばらくエッシンフェルゲンで仕事を探すことにした。

再度ギルドのドアをくぐり、調整がてらの軽い仕事を請ける。

ヒドラに冒険者が集中していたせいか、町の付近にオーガが出没していた。

以前であればオーガは強敵であったが、ルティもティアも成長した今では、ゴブリンより少々手がかかる程度でしかない。

新しい剣を担いで討伐に向かうルティが、ふと思いついたようにティアに聞く。

「あのヒドラって、誰かを喰ったのかしら。

喰うためにあの泉に住み着いたのかな?

違うよね、住みやすい場所で暮らしたかった。それだけだよね?」

「そうね、あいつらは凶暴だけど人喰いじゃないわね。

目の前にいれば喰うかもしれないけど、人を狙っているわけじゃ

ないわ」

「そう考えると酷いことしたんだね、ヒドラにとっては。人間って我儘なんだね」

「違うわ、ルティ。生きているもの全てが、我儘なのよ。あのヒドラは自分が生き残るため、人間は多くの人が生き残るため戦うことになったのよ。あたしは、ヒドラは怖いし嫌いだけど、生きるのに必死なのは解るわ。人間が生きるのに必死なのも、ね。今回に限らず、我儘と我儘がぶつかり合って、たまたまそのときに強い方が勝っただけのことなの。人間だけが我儘ってわけじゃないのよ」

ティアの言葉に何かが吹っ切れたルティは、新しい剣を振りかざし、オーガに突っ込んでいった。

マグシュタットへの旅費に余裕ができたので、三人は町を出ることにした。

町長を始め町の有力者は彼らを引き留めようとしていたが、この街に縁を感じたアービィは、またすぐ戻りますよ、と言ってマグシュテットへ向け旅立った。

町の厚意で御者付きの馬車を仕立ててもらったので、行程は半分の日数で済みそうだった。

御者は、経験を積んだ老齢に差し掛かろうとしている紳士で、ボルビデュス家の執事クリプトカリオンを思い出させた。

適度に軽妙な話術と控え目な態度は、単調になりがちな行程を和ませるに充分だった。

やがて、マグシュテットの村が見え、武器屋の女主人に聞いた鍛冶屋を探す。

馬車には待ってもらって三人は、村人に鍛冶屋の場所を聞き、その仕事場を訪ねた。

ドアをノックすると、若かりし頃はさぞやと思わせる、上品な老婆が対応に出た。

「こちらが、グロッソ・プテリスさんの工房と伺ってきたんですが」

ルティか来訪の意を告げると、老婆は笑顔で彼らを迎え入れた。

質素ながらも品の良い応接セットに案内され、茶菓でもてなされた。

老婆は、剣を求めてここを訪れる客は、全て信頼置ける武器屋の紹介なので、人物に間違いはないからね、と笑う。

そしてすぐに笑顔を消し、注文に応じるかどうかは別よ、と言った。

「では、どうすればいいのでしょうか?」

焦燥感を抱いたルティが問う。

「簡単なことよ。

試験を受けていただくわ」

老婆、アルテナ・プテリスは答えた。

アルテナは、若い頃はかなり名の知れた冒険者で、剣の達人と言われていた。

南の大陸を渡り歩くうち、いつしか目的が良い剣を求めることにすり替わっていた。

何軒もの鍛冶屋を訪ね、自分に合った剣を鍛えてもらったが、納得のいく剣にはなかなか出会えなかった。

それはそうよ、一生モノだもの。どんな腕の良い鍛冶屋だって相性ってものがあるの。

そして、この片田舎の村でグロッソに出会い、自分の剣技に合う業物と出会ったのだ。

その後、旅の途中でできた刃毀れを、そのとき滞在していた村で研ぎに出そうとしたが、その研ぎ師には怖くて研げないと断られた。

やむなくマグシュテットに戻り、グロッソに研いでもらうことを繰り返すうち、いつしか愛が芽生え、冒険者を引退し、この村に腰を落ち着けたのだった。

アルテナは裏庭に三人を案内し、これを切ってと言った。

木の枝から吊り下げられた、糸で吊るされた一枚の紙。

まずティアが挑戦するが、紙は切れることなく糸の結び目から千切れ飛んだ。

次いでアービィが挑戦する。

友の父が鍛えた短刀を抜き、脚の位置を決め真横に構える。

息を止め、一気に振り抜くと、真っ二つに切断されたが紙は糸から千切れ落ちている。

アルテナが紙を拾い、切断された部位を見る。
「最初の子は、まだ力に頼りすぎね。
男の子は、かなりいい線いってるけど、やっぱり力が入りすぎてるみたい。
糸から紙が飛んでは駄目なのよ。
あと、切り口がくしゃくしゃになってるでしょ？
余計な力が入ってると、こうなっちゃうの」

次はあなたやってごらんなさい、と言われ、ルティが新しい剣を構える。
息を止め、一気に振り抜く。

紙は糸から吊るされたまま、下半分がなくなっていた。

「上出来ね。
まだ切り口が汚いけど、これから精進すれば、あなたは化けるわ。
これならうちの人の剣を使ってもらえるわ」
嬉しそうに言いながら、家の中に三人を連れて行く。

うちの人はダガーやナイフは打てないの。もし紙を切れていたとしても注文は受けられないのよ、となんとなく落ち込むティアにフォローを入れている。

硬い物を切るより、やわらかいものを切るほうが、格段に難しい。
たとえ切れたとしても形が崩れているのは、余計な力が入っているだけで潰しているに過ぎない。

グロッソの鍛える剣は日本刀に近い剣で、潰すより切り裂くための剣だ。
アービィが使っている剣が、図らずも同じ思想で鍛えられている。

それ故にアービィは、特に「刀」の修練をしていないにもかかわらず、不完全ながら切断することができた。

ティアは「刀」の概念がないため、叩きつけるように切るか突き刺すという動作が主だ。

無意識にダガーを紙に叩きつけてしまったため、紙は糸から千切れ、ぐしゃぐしゃになってしまったのだ。

工房に案内されたアービィたちは、グロッソと初めて対面する。

いかにも好々爺然とした風貌と、その雰囲気のままの人柄。

アルテナから試験に合格したことを聞き、アービィとルティの注文を聞く。

しばしの沈黙の後、グロッソが申し訳なさそうに口を開いた。

「済まんが、注文の分を打つだけの鉄がないのじゃ」

グロッソが言うには、叩き潰すための剣は鉄鉱石から作るが、グロッソの剣は砂鉄から鍛えている。

玉鋼の製法と、ほぼ同じだ。

一本分の材料ならある。

が、全員の剣を鍛えるためには、圧倒的に足りないのだ。

良質な砂鉄が村の近くを流れる川原から取れるのだが、最近は魔獣が出没し、武芸は嗜み程度のグロッソや、引退して久しいアルテナの手に負えるものではない。

一対一ならアルテナは滅多なことでは引けをとらないのだが、何分出没する魔獣の数が多すぎる。

砂鉄を採取する間のボディガードをしてくれるなら、喜んで打たせてもらおう。

代金は、依頼料を差っ引いて、金貨2枚で充分じゃ。

グロッソからの逆依頼だった。

暫くの間、マグシュテットの村に宿を取り、彼らは川原に出るグロッソのボディガードに行くことになった。

川原に多い魔獣は、ゴブリンとオーガ、そしてスライムだった。

ゴブリンは言うに及ばず、オーガも既にたいした脅威ではなくなっているが、スライムはまた別だった。

スライムは、思考能力のない単細胞生物で、エサとなる動物の匂いに引かれ寄ってくる。

エサを体全体で包み込み、体表から分泌される溶解毒で動けなくし、そのまま溶かし吸収する。

切り裂こうが突き刺そうが、ほとんどダメージはないどころか、下手な切り方をすれば分裂し増殖してしまうのだ。

悪いことに、飛び散った破片にも毒を残しており、これが皮膚に付着すればそこから毒が入り肉まで爛れ、酷いときには骨まで溶けてしまう。

そして、完全に殺すには、焼き払うか凍らせるか、または核を切るしかない。

叩き潰すような剣技では、うまく核に当たって殺せても、飛び散った破片で被害を受けてしまう。

きれいに、核ごと切り裂かなければならないのだ。

１０日間、毎日川原に通いつめ、剣の修練を兼ねてスライムを狩る。

敢えてアービィの呪文には頼らず、毒を受ければルティとティアが解毒する。

核を切り、スライムが息絶えてから、アービィが消毒を兼ねて呪文で焼き払った。

「なぜ、そんな面倒をするのかの？
呪文で焼くか凍らすほうが安全じゃないかの？」

「こうすればですね、剣と呪文と両方の鍛錬になりますし」

ティアは、紙を切れなかったことが余程悔しかったのか、スライムを毎日切り刻み、「切る」コツを掴もうとしている。

「感心じゃのう、楽に走らんとは、なんどれ、その心意気に免じて、そっちのお嬢さんが使える剣も考えてみようかの。

本来なら、得意なものしかやらんが。
不出来なものを出すわけにはいかんからの、あんたたちの心意気に感化されたようじゃ」

ダガーやナイフではなく、アービィが使う短刀をさらに短くした小太刀のような剣を考えているらしい。

これだけ集まれば充分じゃ。ひと月したらまた来てくれ。と言われ、一旦プテリス老夫妻に別れを告げた。

マグシュテットからツェレンドルフへ移動し、土の神殿で精霊と契約し、その後暫くは討伐の仕事をしながら剣の出来上がりを待つことにした。

グロッソの護衛依頼を受けた時点で、エッシンフェルゲン町長が付けてくれた馬車は帰してしまっていた。
歩いてツェレンドルフまでは、十日間の行程だ。
のんびり行こうか、そうアービィは言い、山を降り始めた。

第３０話

ツェレンドルフへと向かう三人は、途中にある村や町で、ヒドラ殺しの英雄として迎えられた。
どの村や町でも対ヒドラの戦術を聞かれているだけでなく、必ずと言っていいほど、その周辺の魔獣討伐も依頼されていた。

それだけなら剣や呪文の修練になるからまだいいのだが、討伐の後には村や町の有力者からの懐柔工作が待っていた。
有力者としては、アービィという英雄を配下に入れ、他に対しての優位を確保できれば、発言力の強化に繋がる。

美男美女が所構わずつきまとったり、若者を貴族並に扱おうとする大人たちに、アービィたちは辟易としていた。
ティアがつきまとう男連中をエサとして喰わないように、それを制止するのも面倒の元だった。

逃げるようにして集落を後にすることばかりの三人は、ツェレンドルフまでの残りの行程を野営で過ごすと決意していた。

既に季節は初夏を過ぎたと言っていい。
山岳地帯にしては珍しく蒸し暑い寝苦しい夜だった。
野営地をそっと離れたアービィは、近くの川原へ行き獣化する。

そのまま川に入り、水浴びを始める。
瀬を流れに逆らい這い蹲るようにして遡ったり、淵を犬掻きで泳いだり、水を堪能していた。

しばらくすると、質量のあるものが淵に飛び込む音がした。
何事かとそっと近寄ると、獣化したティアが水と戯れている。

「あら～、アービィも水浴び～？」
ラミアは暑いの苦手だから～、と間延びしたようにティアが言う。

――ティアっ、な・な・な・な・んて格好でっ！！
狼の状態では声帯こそあれ、舌は人語を喋る造りではない。
そのため、念話でコミュニケーションを取るのだが、あまりの状況につい唸り声まで出てしまっている。

「ん～？
別に～普通の格好よ～、ラミアの～」
首を傾げ不思議そうに聞き返すティア。

ラミアは、上半身は人間、臍の辺りから下は蛇だ。
そして、『普通』なにも身に纏っていない。
当たり前のことなので、ティアはこの状態に、羞恥心など欠片も持ち合わせていない。

初めて出逢ったときと同じなのだが、あのときは戦闘の緊張感から、そのようなことを考える余裕は、アービィにはなかった。
落ち着いた状況でいざ対面してしまうと、目のやり場に困るどころではない。

「あ～、もしかして～、これ～？」
ティアがこれ見よがしに両方の胸の隆起を両の手で揺らし、アービィに見せつける。

――ティア、なに考えて……

狼狽えるアービィだが、目が釘付けになってしまい、それに自分で気が付き、次には目が泳ぎまくっている。

「でもさ～？
やっぱりアービィは～、ルティの方が～、見たいんでしょ～？」
面白くなったティアが、さらにからかう。

――そんなアービィに、素晴らしいお知らせですっ！！
急にティアが念話に切り替える。

――？
何となく不穏な気配をアービィは感じていた。

――間もなく……、ルティも水浴びにやってきま～す！！

――！！

まずい。それはあまりにも拙すぎる。
この状況は、盛大に誤解されかねない。
いや、間違いなく豪快に誤解される。

――僕、野営地に戻ってるねっ！！
慌てて川から上がり、獣化を解いて服を着る。
ルティに行き合わないようにと、繁みを潜って野営地に戻ろうとしたとき、すぐ側から声が聞こえた。

「あ～、ティア、獣化してちゃダメじゃない～！！」
直後に響く柔らかいものが水に飛び込む音。

アービィは、人狼とはいえ健全な『男』だ。
脚が止まり、繁みの中からそっと覗く。

月に照らされたルティの裸体は、息を飲むほどの美しさだった。
剣技で鍛えられた、贅肉のないスレンダーだが、程良く脂肪層に包まれた柔らかな肢体。
ルティ本人はコンプレックスを持っているが、形の良い胸の隆起。
それを際立たせる腰の括れと、その下に続くふたつの隆起。

前を見れば……
無防備にティアと水を掛け合うルティの……

心臓が早鐘を打ち、頭に血が上ったと感じた瞬間――

繁みの木の枝をへし折る音が周囲に響いた。

突然の音に、反射的に胸を隠してしゃがみ込んだルティと、開けっ広げなまま尻尾を振るティアが見たものは――

いかにも、偶然だよっ！！　と言いたげにそっぽを向きつつ、切れ長の目だけはこちらを見ながら、後足で首元を掻く巨狼だった。

直後、羞恥と怒りに震えた少女の罵声が、闇を引き裂いた。

翌朝、目を真っ赤にしたまま正座するアービィの横で、レーションを掻き込むルティは、憤懣やるかたない、といった状態だ。が？

――なんでティアがいるのよっ！　そうじゃなければ……えへ……へへへへ……へへ……

「ちょっと、ルティっ！！！
またどこ行ってるの！！？」

ティアの声に我に帰るルティは、無意識に垂れた涎をそっと拭っていた。

ギーセンハイムの町に着いたとき、三人は不穏な空気を察知した。今までのような、ついでの討伐を望む声ではなく、ヒドラに匹敵する脅威をようやく排除できるという、期待に満ち満ちた声。

既に町に入る時点で下にも置かない待遇だった。

宿は最上級の部屋が「二部屋」用意され、貴族の晩餐会に出てもおかしくない料理が並べられている。

当初安宿を探しつつギルドへ行った三人を、半ば拉致するように連れ去った壮年の夫婦は、声を潜め困難な依頼を口にした。

ギーセンハイムから半日の行程にある夫婦が所有する別荘に、見たものを石にする化け物が住み着いたのは、１０年前のことだった。

それを退治するのですか、というルティの問いに、二人は首を横に振る。

いえ、いや、はい、と言いよどむ妻を遮り夫が話し始めた。

退治するのは屋敷に火を掛ければ容易いと思いますが、いえ、屋敷が惜しいのではなく、なぜ化け物がそこに住み着いたか、聞いて欲しいのです。

その上で退治していただきたい。

そして化け物の言葉を、一言一句違えずに私たちに伝えて欲しい。

今はこれ以上のことは申せませんが、ヒドラ殺しのあなた方でなければ、お願いできないことなのです。

まるで主人の鞭に脅える奴隷のように、床に頭を擦り付ける夫婦。

ここへ案内され、初めて対面したときに見えた気品や優雅さは、一切見られなくなっていた。

確かにギルドにはその依頼があったが、それは町長名義の依頼で、問答無用の討伐だった。

なぜ、態々困難な依頼にすり替えるのか。

裏があるのは間違いないが、夫婦の必死さには悪意を感じない。

ルティがとりあえず、明日別荘に様子を見に行ってきます、その上でどうやるか考えますね、と言ってその場を取り繕った。

普通に考えればまるで納得できない依頼だが、あまりにも必死な夫婦に拝み倒された形の三人は、できるできないは別にして依頼を請けた。

寝る前に作戦を打ち合わせるため、ツインベッドの部屋に集まった。

打ち合わせという名の酒盛りが終わった後、自然に部屋を出ていったアービィの後ろ姿とティアを交互に見るルティの視線が殺気立

っていたことは、ティアは気付かなかったことにしておきたかった。

翌日、夫婦の別荘までやってきた三人は、人の半身が映り込むほどの鏡を持ってきていた。

直に視線を合わせては危険なので、『透過』したティアがこれを持ち、アービィとルティがそれを見ながら屋敷内を進んでいく。

突然少女の高笑いが屋敷に木霊した。

「なにやってんのよ。
面白すぎ、あなたたち」

ベールを被った、絶世の美少女と言って差し支えない、抜けるような白い肌と碧眼を持った、16、7歳くらいの少女がこちらを指さし笑い転げている。

「ごめんなさいね、笑ったりして。
鏡を抱えてるのはラミアかしら?」

「何で解るの?」

実体化したティアが聞く。

「この子たちがね。
脅えちゃってるのよ」

ベールを取ると、そこには髪の代わりに無数の毒蛇たちが、目を伏せるようにして震えていた。

「可愛い~!!
怖くないよ~」

ティアがこれ以上ないほど、目尻を下げて蛇たちを宥める。

「戦う雰囲気じゃないわね。
依頼にもあるから、少しお話しましょうか？」
蛇が少々苦手なルティが、声を震わせながら言った。

蛇とは謂え、魔獣の一部である以上、かなりの魔属性を持っている。
その本能が、最初はティアに怖れを抱き、次いでティアの態度を見て完全に服従していた。

アービィが来訪の理由を話し、壮年の夫婦がなぜ魔獣の言葉を聞きたがるのかを問うた。
まず、敵意のないことを蛇の髪を持つ魔獣は言い、そして長い説明を始めた。

石にしてやろうと思わなければ、ならないわよ。
見たものすべて石にしちゃってたら、食事も取れないでしょ？
安心してこっちを見て。

私の名前はメデューサ。
見ての通り、元は北の民よ。
家名は無いわ。
１３のとき、無理矢理連れてこられて娼婦にさせられたの。

あのお二人に退治を依頼されたの？
いいの、私は気にしてないわ。

あのお二人から娘さんを奪っちゃったのは、私の自業自得だからねぇ。
実は、娘さんが私の恋人に横恋慕しちゃったのよ。

彼は女に対して優しすぎるというか、分け隔てないというか、そのときの気持ちに正直でね。
そんなところに私も、彼女も惹かれたんだけどねぇ。

だけど、まだ彼女は当時１５。
恋の駆け引きを楽しむ余裕かなんかなかったのよ。
私も１６の小娘だったけどね。

敵意剥き出しで私に突っかかってきた彼女に、私も敵意剥き出しだったからねぇ。
結局、彼は私を選んでくれたんだけど、彼女から見れば私がかっさらっていたように見えたのかな。

んで、よせばいいのに、私は彼女を散々罵倒して貶めて、馬鹿にしたわ。
馬鹿は私だけど。
そりゃぁ悔しかったでしょうよ、娼婦に、それも北の民に負けて馬鹿にされたんだもの。

以前、私が彼に北の妖呪の話をしたことを、彼が彼女に話したことがあったらしいのよ。
どこでどう調べたか、彼女が私にそのゴルーゴーンの妖呪を掛けてね、私はこうなったわけ。
それで終われば良かったんだけど、彼女、実はすごくいい子だったのよね。

私がこうなっちゃったの見て…まさか本当にそうなるとは思わなかったんじゃないかな……
自殺しちゃった……の……

遺書にはごめんなさいってあったわ。
謝るのはこっち。自業自得なのにね。

あのお二人は、化け物にされてすぐの頃から私をここに匿ってくれてるんだけど、やっぱり化け物の噂が広まっちゃってね。
討伐に来た冒険者を何人か石にしちゃったの。

『全解』の呪文で解石はできるんだけど、これが妖呪のいやらしいところでさ、私が解石しないとダメなのよ。
私はもう元に戻れないの。
妖呪を掛けた本人がいないからね。

そう言えば、討伐じゃなくて退治って言ったって？
多分、あの二人は退治したことにして、逃がそうとしてくれてるんだなぁ。

彼？
そこに立ってるわ。

部屋の隅には、前屈みで両腕を突き出し、その両手は何かを握ろうとしているか、揉みしだこうとしているような指の形を取った、驚愕している表情を刻み込んだ男の石像があった。

いきなり乳揉もうとしたのよ。
びっくりして思わず睨んじゃったら……こう……ね……

メデューサにつられ、ルティとティアは思わず額に指を当てた。
アービィは、同じポーズを取る三人と、男の石像を困惑した視線

で交互に見比べていた。

「作戦は全部変更するね」

アービィが、ルティとティアに手短に指示を出す。

ルティが絨毯やカーテン等の、燃え易い物を片付ける。

ティアは、ラミアのティアラをメデューサに付けさせ、人化させる。

ラミアのティアラは、それ自体に魔力があり、ラミア自身の魔力と共鳴して強力な妖術発動のトリガーになる。

他の蛇属性の魔獣であっても、装着すれば『変身』や『催眠』程度の低位のラミアの妖術を使えるようになるのだ。

人化した時点でティアラを外し、当面はそれで固定することにする。

その間にアービィは猪を狩ってくる。

肉は美味しくいただいた後、屋敷の一室で猪の頭を潰し、内蔵をぶちまけ『大炎』で焼き尽くす。

屋敷の一部が焼けてしまうが、それはご勘弁願うことにした。

メデューサを連れて戻ると無用の混乱を招きかねないので、一時的に隣村に匿った。

北の民を連れた若い三人連れは、小さな村ではかなり目立ったが、北の民を奴隷として飼うことはさして珍しいことではなく、好奇の目で見られるに留まった。

１０年前に突然消えた隣町の娼婦のことなど覚えている者は皆無であり、当面はアービィたちが買った奴隷と言うことで押し通すことにした。

一度ギーセンハイムに行き、夫婦を連れて村に戻った。
互いに害意を持っていないことは明白だったので、宿屋の一室で三人を対面させることにしたのだ。

メデューサと夫婦を残し、三人は部屋を出た。

「悲しいね、妖呪って」
ルティがポツリと呟き、三人は黙りこくっていた。

夫婦は、これ以上匿っていると多くの冒険者を呼び込むことになり、メデューサの身の安全を確保できないことが不安だった。
北の民への偏見がないということはないのだが、嫌悪しているわけではなかった。
誘拐され、娼婦に堕とされたという境遇に、憐憫の情すら抱いていた。

娘が命を絶つ原因となってはいるものの、それは娘の自業自得でメデューサに全てを被せようとは思えない。
娘の仕出かした愚かな行為の償いを、どんな形でしていいか解らず、せめてもの思いで匿っていたということだ。

メデューサは自らの愚かさが娘の命を絶つことになり、後を追うつもりでいたのだが、石化させてしまった冒険者と恋人を元に戻すまでは死ぬわけにいかないと思っていた。
火の精霊と契約できれば、いつかは『全解』を使えるようになる

のだが、そこまで蛇の髪のままで行くこともできない。
ベールを被っていたとしても、どこで何が起こるかわからないのだ。

両者がどうすればいいか解らないまま、無為に月日だけが過ぎていたところへ、アービィたちが来た。
ヒドラ殺しの実力を持つ冒険者たちであれば、メデューサを無傷で、最悪殺すことなく、確保または逃すことができるのではと、藁にも縋る思いで依頼したということだった。

ティアが貸したラミアのティアラの力で人の姿になることができたメデューサは、火の神殿へ行くと申し出た。
そして呪文を習得し、石化を解いた後は娘の後を追うと言った。

夫婦は、メデューサが火の神殿行きには諸手を挙げて賛成したが、死を選ぶことにだけは頑として同意しない。
石化を解いた後は、治癒師として人々の役に立ってみるというのはどうか、と提案している。
さらには、養女として家に迎えたい、とも。

それぞれの主張が平行線を辿り、このままではいつまでも決着がつかないと思ったメデューサと夫婦は、三人を部屋に呼び込んだ。

ルティが、あたしが口を挟んでいいかは解りませんが、と言ってから話し出す。
「メデューサには、ご夫妻の言うことを聞いてほしいわ。
娘さんを失った上、あなたまで失ってしまったら、ご夫妻の後悔はどれほどのことか。
そこを良く考えてほしいのよ」

ティアが続ける。

「火の白魔法だけじゃなく、水の白魔法も覚えてさ、本格的な治癒師を目指してもいいんじゃない？

あたしたちはこの後ストラーに行くつもりなんだけど、インダミトを通っていってもいいし、そのあとラシアス経由で、ストラーを目指すのもたいした遠回りじゃないわ。

一緒に行かない？

ラシアスからあなたはビースマックに戻ればいいし、ね？」

１０年の月日を独りで過ごしてきたメデューサには、仲間ができるということに何より心引かれるものがあった。

夫婦の心遣いは嬉しかったが、北の民を養女にすることへの風当たりの強さや、いつまでも甘え続けるわけにはいかないと考えて死を選ぶつもりでいたが、ルティに諭され少し考え方が変わってきた。

夫婦も、自分たちが後悔するから死を選ぶな、という言い方はあまりに自分勝手に思えたので、その言葉を言えなかったのだ。

しばらく考えた後、ティアの提案に乗ることにした。

「お世話になります」

床に降り、正座の姿勢を取ったメデューサは、夫婦とアービィたちに頭を下げた。

第３１話

「メディィって、随分と童顔っていうか、幼く見えるけど、確か２６歳くらいですよね？」

ルティが聞いた。

「うん、妖呪のせいで十年前から成長が止まってるのよ」

「ごめんなさい、悪いこと聞いちゃいましたね……」

申し訳なさそうに謝るルティに、メデューサが手を振りながら答える。

「いいのよ～、それだけは感謝してるの。

この状態での寿命がどれくらいかは知らないけど、見た目の歳取らないっていいわよ～。

あとね、言葉は普通に喋ってほしいんだけどな～」

楽天的な性格なのか、そのニ点に関してはあまり拘っていないようだ。

「じゃ、遠慮なく。

１６だっけ、止まったのは？

まだ成長するんでしょ、それ。

反則よ……」

どうしてもある一点に拘るルティ。

そして残酷な一言がメディィから投げつけられた。

「う～ん、もうあんまり変わらないと思うんだけど」

「……そう……もう、変わらない……の……」

「でもね、子供生むと大きくなるって聞いたわよ」
「――！！」
ルティが顔を上げた。
金属同士をぶつける音が聞こえてきそうな視線が、所在無げに焚き火を眺める若者に叩きつけられる。
「ティアっ！！　今すぐ『誘惑』っ！！」
「効きません」

ギーセンハイムの町を後にし、ツェレンドルフへの道中の野営地で、ガールズトークが繰り広げられている。
アービィは、話に入れずにただ苦笑いと共に佇むだけだった。

夫婦に別荘を焦がしたことを詫び、後処理の策を説明した三人は、メデューサを連れてツェレンドルフへ向かっている。
潰した猪の頭や骨と内臓が炭化したものを、メデューサの残骸としてギルドに申請してもらい、討伐依頼を取り下げさせた。
当面、これで町は平穏を取り戻すだろう。

今の時点で事の真相は、夫婦とアービィたちだけが知っていればいい。
メデューサの恋人には、石化を解いた後に説明すればいい。

ラミアのティアラを以ってしても、低位の魔獣では自在な変身はできず、髪や瞳の色まで変えることはできなかった。
南の大陸では、北の民への偏見が強いため、メデューサの立ち位置はアービィたちの従僕ということにした。
奴隷では、性的な想像まで掻き立て兼ねず、余計なトラブルを引

き起こしそうだったからだ。

ツェレンドルフへは三泊の行程だ。

当初、自分のせいで宿を取れないのかと心配していたメディだが、ビースマックに入ってからの三人の経緯を聞き納得した。

初日は敬語交じりの硬い会話に終始していたが、二日目ともなるとかなり砕けてきていた。

初夏を過ぎている時期に、焚き火を囲んでいては熱くて敵わない。

四人が車座に座り、焚き火は照明代わりにメディが背負う位置にいる。

ガールズトークに花が咲き、アービィは所在無げに脚を投げ出して座り、三人を眺めていた。

背後の気配に気付いたアービィが立ち上がり、振り向きざまに腕を振るった。

同時に焚き火に厚い布が投げかけられ、四人を照らしていた照明が、一瞬にして消滅する。

背後から剣を振り下ろそうとした男の顔面に、左に避けたアービィがすれ違いざまに右の掌底を叩き込む。

腕を振り抜いたとき、相手は糸の切れたマリオネットのように昏倒した。

真っ暗になっても狼の目は、敵を捉えている。

再度立ち上がって反転し、ティアを後から抱え込んだ男の側頭部を蹴り抜き、その勢いでルティの首に腕を回した男の顔面に拳を打

ち込んだ。

ティアは男が態勢を崩すと同時に身体を沈め、自分の頭越しに男の前頭葉よ砕け散れとばかりに蹴りを入れる。

焚き火を覆った布をメディが取り去ると、新たな酸素を供給された熾火が、再び燃え上がった。

炎に照らされた中にメディが見たものは、目を狂気に染め上げて男の喉を握りしめ、顔面に掌底を落とし続けるアービィと、半ば恐慌状態で泣きながらアービィを止めるティア、そして呆然と二人を見つめるルティだった。

怒り狂っていた。

明らかな悪意。唾棄すべき欲求。

その対象にルティが選ばれた。

今まで、人に対して殺意を抱いたことはなかった。

町中でルティにちょっかいを掛けてきた男と諍いになり、本気で腹を立て叩きのめしたことはある。

だが、追い払えれば充分で、二度と手を出してこなければいいと思っていた。

しかし、今回の襲撃は明らかに違う。

性奴隷狩りだ。

アービィを殺し、ルティもティアもメディもこの場で陵辱した上で、売り飛ばすための襲撃だ。

焚き火を消す手際といい、アービィのみに刃を向けたことといい、

それを生業にしている者の動きだった。

こんな奴らを生かしておきたくない。

ルティ目当てに町でちょっかいを掛けてきた輩にさえ抱いたことがない殺意を、人に対する殺意をアービィは初めて持った。

何よりこいつらは、ルティに触れた。

ルティを、仲間を売ろうとした奴らを、二度と日の下に出してやるものか。

アービィに残ったひと欠片の理性が、寸でのところで獣化を防いでいた。

ヒドラの時と同じだ、と感じたティアは、必死にアービィにすがりついていた。

殺させてはいけない。

この人狼を人殺しにしてはいけない。

もし、この男を殺させたら、人狼の本能が解放されてしまう。

その直感が、ラミアに染み込んだ人狼への恐怖を抑えつけていた。

泣きながらアービィを止めるティアの必死さに我に返ったルティとメディが、アービィの制止に加わる。

徐々に冷静さを取り戻したアービィが、男の喉から手を離した。

翌朝、縛った男たちを近くの村に駐屯する警備兵に任せ、アービィたちは簡単な事情聴取だけで開放された。

警備兵の話では、娼婦を義勇軍に同行させるために多数徴発され、多くの娼館が人手不足に陥っているらしい。

多数の健康な男が、いつ命の遣り取りがあるか解らない極限下で、数ヶ月の間女無しで過ごすことは難しい。
精神的に追い込まれた男たちが、近隣の村で暴行など働くようになっては、義勇軍なのか侵略者なのか分からなくなってしまう。
娼婦がいすぎて、困ることはないのだ

人買いを根絶することは難しい。
奴隷売買も同じだ。

経済的な行き詰まりが原因の人身売買は、残された家族を助けるための最後の手段だ。

そういった理由で売られている奴隷を安易に助けたところで、経済的な問題を解決していなければ、また別の人買いによる売買が繰り返されるだけだ。
幼少時より奴隷と言う存在が当たり前にいるため、誰もその悪に疑問を持っていないということも問題だった。

しかし、奴隷狩りで連れてこられる人々は、何の落ち度もない者が、理不尽な暴力によって無理矢理その立場に堕とされた者たちだ。

一応は奴隷狩りによって集められた奴隷の売買は法令で禁じられているが、買う側が判るわけはなく、売る側が公表するはずもなく、売られる側が口にすれば折檻、最悪口封じが待っているだけだ。

奴隷商人自ら狩りに出れば、元手も掛からない。
アービィたちに返り討ちに遭ったような奴隷狩りを雇っても、質のいい商品を選んで集められるため利鞘が大きい。

結局一つずつ潰していくしかないのだが、地下に潜った組織を潰しきることは難しい。
それでも今回の一件で、かなり大きな組織を潰せそうだと、警備兵は明るく言っていた。

ツェレンドルフに到着した一行は、その足で土の神殿へ行き、精霊と契約した。
さすがに一泊くらいはベッドに寝たいと誰もが考えたため、この夜は宿を取ることにする。

宿に付随する食堂でエールを傾けながら、今後の予定に付いて話し合った。
まだ三人の剣はできていない。
あと２０日ほどはどこかに拠点を持って、討伐等でラシアスでの旅費も併せて稼ぐ必要がある。

剣を受け取ったらベルテロイに戻り、そこからインダミトの水の神殿へ行き、その後レヴァイストル領に立ち寄ってから、ラシアスに向かい、火の神殿に行くことにする。
メディはそれまでにビースマックへ戻るか、ストラーまで行くかを決めると言う。

１３年振りの自由を、メディは満喫していた。

ベルテロイの酒場で、ハイスティはビースマックから来た商人に会っていた。
少年がヒドラを討伐し、さらにはこの１０年間近隣住人を悩ませ

ていた化け物も退治したという噂を聞く。

ふと、彼は近くの席にいる二人連れに、視線を引き止められた。
黒のローブを纏った魔術師然とした二人連れ。

片方は初老であることが伺え、もう片方は従者であろうか、まだかなり若い。
二人ともフードを深く被り、その表情が伺えない。

どこかで見たことがあると考えて、該当する者がラシアスを出たという噂を思い出し、それが事実であったと確信した。
どれ、ちょっとご挨拶でもしておくか、お得意さまだしな。

ラシアス宮廷魔術師ドーンレッドは焦っていた。
召喚に失敗して行方不明になった男の行方は杳として知れないが、痣を持つ少年の報告をコリンボーサが握りつぶしていたことを知った。

従者として連れて出た少女は、北の大陸出身の妖術使いで、殺人の業も身に付けた腕利きの暗殺者。
正体は謎に包まれており、各国の間諜からは本当に存在するのかさえ解らないと言われている。

ドーンレッドは自分だけの密偵として、彼女に幼少時よりあらゆる闇の業を仕込んできた。
深い愛情を注ぎ込まれながらも、厳しく育てられた彼女は、ドーンレッドに対し祖父への思慕に似た感情を抱いている。

彼女は、ドーンレッドとは暫く別行動をしており、コリンボーサ

の密偵が少年の確保に動いた時点から監視していた。
そして、彼らがインダミトの腕利きに妨害され、失敗した時も手を貸さず全ての動向を探り続けた。

その後、インダミトの密偵に張り付き、ベルテロイにドーンレッドを呼び寄せた。
ドーンレッドは、自らの呪文の成功に自信は持っていたため、痣を持つ少年が召喚した男だとはまだ信じていない。

それでも念のため、少年の確保をしておこうと考えた。
コリンボーサも同じ目的で動いているようだが、奴は第一王女への忠誠心からではなく、自らの権勢のために動いている。
摂政に対して孫にも似た想いを抱く魔術師は、召喚した男の力は権力や政争のためではなく、摂政のために使うべきと考えていた。

他国の密偵に張り付いていれば、少年の元に連れて行ってくれるだろう。
声を掛けてきた商人に柔和な笑顔を向け、ドーンレッドはそう考えていた。

ウジェチ・スグタ要塞は、様々な思惑を秘め沈黙していた。
地峡に聳え立つ白亜の要塞は、両大陸をつなぐ唯一の大きな街道を、その巨大な城門で塞いでいる。

要塞の北側には広く深い濠が掘られ、橋は城門の中に引き込み式になっていて、城門が開かない限りその姿を現すことはない。
かつて北の大地に攻め込んだときに開いたきりの城門は、永遠に開く予定のないその雄大な姿を濠に映すだけだった。

しかし、今、城門の内側では、北の大地に向かって巨大な殺気が膨張しきっていた。

インダミト王国子爵アーガス・ボルビデュスが先陣の位置にあり、騎兵と歩兵を合わせた五千の軍勢を率い、城門を開けさせようとしていた。

総司令官ラシアス王国子爵カラディリア・ディテイプリスの黙認と、副司令官バコパ・リシマキアの猛反対を無視したままで。

要塞総指揮官の人選は難航を極め、混乱と諦めの産物だった。

総司令官の座をラシアスの貴族が占めることは、どの国も反対する気はなかった。

宰相コリンボーサと騎士団長ラルンクルスの両者が、違う人選をしていた。

両者の主張は平行線を辿り、最終的に閣議での多数決となったが、多数派工作をしたコリンボーサと閣僚の良識に期待したラルンクルスとでは、勝負はする前から決まっていた。

コリンボーサは自分が安心して操りやすい無能者を、ラルンクルスは要塞を安心して任せられる歴戦の有能な指揮官を推していた。

多数決の結果を見たラルンクルスは、国の将来に言い様のない不安を感じ、常日頃反目し合ってはいるものの、国を深く憂いていることについては疑いようのない魔術師を思い浮かべていた。

総司令官の座に収まったカラディリア子爵は、その権力に酔っていた。

副指令のバコパを冷遇し、自分におもねり擦り寄る者を側近に取り立てている。

もちろん、袖の下を通る金属にも執着していた。

アーガスは、言葉巧みに、この無能者に取り入っていた。
口だけは威勢の良い戦略性の全くない大語壮言は耳に心地よく響き、北の民など鎧袖一触と嘲り慢心した作戦会議は思い込みだけで話が進んでいく。

侵攻の意志は全くなかったが、敵拠点を叩き向後の憂いを絶つという、情報の裏づけも何もない戦略が決定された。
心ある将は敵拠点などないことを熟知しており盛んに翻意を促すが、南の大陸だけの常識に囚われ、ゲリラ戦の経験など全くない貴族たちは、過去の戦物語から得た「戦訓」を頑なに信奉し、聞く耳を持たない。
既に彼らの目には陣を組んだ連合軍が、蛮族の群れを蹴散らす光景しか見えていない。

もとより、騎士階級の意見を聞くなど、考えもしない。
騎士階級は所詮家臣であり、貴族たる主人の言うことを聞いているだけでよい、と考えていたのだ。
ましてや騎士階級からの意見具申で方針を換えたとなれば、自らの間違いを認めることにもなり、かさばるプライドが許すわけもなかった。

さらに、愛妾や高級娼婦のいない南大陸の北端など、決して長くいたい場所ではない。
さっさと、短期決戦で華々しい戦果を挙げ、故郷に凱旋したいとしか考えていなかった。

城門が引き上げられ、橋が濠に渡され、五千の軍勢が北に進んでいく。

アービィたちはいろいろ考えた末、マグシュタットを拠点にして討伐の依頼をこなすことにした。
スライムを倒すことはあまり金にはならないが、剣や呪文の修練にはもってこいだった。

「ねぇ、ちょっと話がおかしくない！？」
ティアが叫ぶ。

「気にしちゃダメよ～！！」
ルティが叫び返す。

「考える前に手を動かしてっ！！」
アービィが叱咤する。

なぜか、スライムの群れが大きくなっていた。
その上、砂鉄が取れる川原や狩場になっていた比較的安全な森、農地を広げようとしていた草原にガーゴイルが出没するようになっていた。

ガーゴイルは石像に魂を入れた擬似生命体だ。
死への恐怖がないため、完全に破壊するまで動きを止めることはない。

格闘技や剣技など武芸の心得のある者にはたいした脅威ではないが、一般の人々には少々手に余る相手だ。
それが少ないとはいえ、数体うろついている。

何かの意志が働いていることは間違いないが、今のところ村や集落の中に入り込むことはない。

スライムもガーゴイルも人を見れば襲い掛かってくるのだが、両者が出会った場合は、ガーゴイルはスライムを殺すことを優先しているようだ。

今のところ、村人たちはガーゴイルを役に立つものと認識し、できるだけ出会わないようにして、スライムの駆除に間接的に利用している。

この日もガーゴイルの気配に注意しつつ、スライムを狩っていたが、いつの間にかガーゴイルが遠巻きにしていた。

メディに身体の物理的防御力を上昇させる1レベルの土の呪文『防壁』を唱えさせ、あらかたスライムを狩りつくした三人がガーゴイルに突っかける。

石造りのためか動きの鈍いガーゴイルは、三人の動きには付いてこられず、容易く打ち倒されていく。

が、痛みも恐怖も感じない擬似生命体は、腕や頭を失っても怯むこともなく、脚を失っても腕で身体を支え飛び掛ってくる。

ルティは斬るというよりは叩き潰すように剣を振るい、『透過』で姿を消したティアは『回復』や『治癒』で援護に回る。

アービィは剣ではなく掌底で四肢を砕き、怯んだところに『大炎』と『凍結』を叩き込んで熱膨張を利用して、内側から石を破壊していた。

三人の剣ができあがるまでの二十日間、彼らは一生分のガーゴイルを見た気分になっていた。

第３２話

グロッソが鍛えた剣は、今まで見ていた剣とは全く違うものだった。
今までの剣は、ツルギ。これはカタナだ。

グロッソは、三人の体格や剣技の特性を見極めた上で、それぞれに合う剣を鍛えていた。
片刃で僅かに反りのある刀身。
刃紋が波打っている。
鞘は刀身をしっかりと銜え込み、鯉口を切らねば抜けることはない。

その剣を携えて、試し斬りのためスライムを討伐に行く。
今まで使っていた剣も悪くはないが、切れ味が根本的に違う。

スライムを斬っても、飛び散ることなく真っ二つになるのだ。
もちろん斬りどころが悪ければスライムが増えるだけなのだが、破片が飛び散ることがなくなった。

討伐の合間にアルテナから剣の手ほどきを受けていたルティは、気の操り方の初歩を会得しかけていた。

刀身の先から気を投げ出すように斬る。
振り抜いたときに、刀身の形の刃が飛んでいくような感じだ。

三人とも、何度も吊るされた紙を切る鍛錬を重ねる。
アービィとティアはすぐに上達することはなかったが、アルテナから今後の努力である程度は上達できると言われていた。

ルティは、今では紙を歪ませることなく、切断できるようになっていた。

剣のおかげだと思っていたが、アルテナが言うには、どんな良い剣であっても太刀筋が狂えば紙は千切れるだけよ、と言われている。

もうちょっと上達すれば、石だって鉄だって、刃を傷めることなく気で切り裂けるわ、とアルテナは嬉しそうに言った。

プテリス夫妻に礼を言い、四人はベルテロイを目指して山を降りる。

エッシンフェルゲンを通過し、ビースマック街道を討伐の仕事を請けながら、１０日ほどでベルテロイに到着した。

ベルテロイに入る頃、アービィはレベル１の『水流』、『火球』、相手の動きを止める『地縛』が１０回、レベル２の『凍結』、『大炎』、指定した相手の力を倍加する『倍力』が６回になっている。

ルティは剣重視の修練だったので、レベル１の『回復』、『解毒』、物理防御を上昇させる『防壁』が１０回、レベル２の『治癒』、麻痺回復の『解痺』、呪文攻撃をある程度防げる『魔壁』が５回。

ティアは習得した呪文はルティ同様で、レベル２が７回使用可能だった。

「お爺様、あの少年たちです」

ドーンレッドに付き従う少女、リムノが教えた。

ベルテロイにいるドーンレッドは、ハイスティと酒場にいた。

他愛のない世間話と、ラシアス内での商売の見通し、ウジェチ・スグタ要塞から出撃した連合派遣軍の戦況など、機密に関らない範囲で互いに知る情報を交換していた。

ハイスティはビースマックにいる仲間からアービィたちの情報は常時得ており、間もなくベルテロイに来るであろうことは掴んでいた。

ドーンレッドはリムノを通してその情報を掠め取っており、このまま待っていれば彼らを捕捉できると睨んでいる。

ここ何日か、偶然を装い酒場で会うように仕向けていたのは、お互い様だ。

何れは始末しなければならないだろう。それもお互い様だった。

そしてこの日、アービィたちがベルテロイに戻ってきた。

「捕らえますか、お爺様？」

「いや、事を荒立てては、彼らを敵に回すだけだよ、リムノ」

祖父がやんちゃな孫娘に世事を諭すときの口調と視線だ。

「それでは逃がしてしまいますが？

連れの女を攫い、逆らえないようにすればよろしいか」

「そうすることは容易かろうな、リムノならば。

が、彼には我が国に忠誠を誓ってもらわねばならんのだよ？

もし、リムノがわしを盾に服従を誓わされたとして、それは本心からになるかな？」

そう言われればそうだ。

表面上の服従と、いつかは寝首を掻いてやろうという反逆心が同居するだけだ。

「考えが至りませんでした、お爺様。

では、わたくしは他の密偵を排除する、ということでよろしいのですね？」

満足そうに頷くドーンレッド。

正攻法で行こう。が、交渉が決裂したときは、守ってもらうぞ、と付け加えた。

ハイスティは、平静を装いつつ焦っていた。

ドーンレッドがアービィたちを狙っていることは明白だ。

召喚した張本人なのであろう。

いよいよ自分の妨害に、黙って見ていられなくなったのだろう。

さすがに一国の重要閣僚を排除と言う形で殺害などしたら、いくらなんでも国家間の表立った争いになる。

それに彼に付き従う少女を排除するには、多少の危険も伴うだろう。

数日前に彼は王宮に報告書を送り、王の判断を待っていた。

しかし、その返事が来る前にドーンレッドはアービィに接触してしまう。

一間諜の判断の域を超えた事態に、彼は困惑していた。

とりあえず、アービィたちを拉致するようなら、ベルテロイを出るまでに実力で取り戻すだけだ。

彼は覚悟を固めていた。

高級な宿の一室で、初老の男性と若者たちが対峙していた。

針で突付くだけで破裂しそうな空気が張り詰めている。

今から十三年前、第一王女が魔王が降臨したと神託を受けたこと。
三年の研究の結果、自分が勇者召喚の呪文を完成させたこと。
そして十年前に勇者を召喚したこと。
その勇者が行方不明になってしまったこと。
勇者には『日』型の刻印があること。
アービィの肩にある痣と、勇者にある刻印が同じである可能性が高いこと。

「そして、君のことを、我が国の騎士として取り立てようと思う。
お三方とも、君にとっては大切な人なのであろう？
共に取り立て、見合う仕事を考えよう。
どうかね、悪い話ではあるまい？」

ドーンレッドからの長い、長い説明の後、沈黙が支配している。
ドーンレッドは和やかな表情で若者たちを見ているが、目は笑っていない。
アービィたちは、困惑の表情で固まっている。

前夜、丁寧な招待状を受け取ったアービィたちは、この日の午後、一般的なお茶の時間に合わせてドーンレッドが投宿している宿の部屋に彼を訪ねていた。
和やかな雰囲気で始まった会談は、彼の突然の説明から一気に冷たい空気を纏い始めた。

天井裏ではリムノとハイスティが対峙している。
こちらは和やかさなど最初からなく、ドーンレッドが予めリムノを止めていなければ、たちまち血の雨を降らせていただろう。

一言も喋ることなく、視殺戦を繰り広げる二人の足元では、塑像のように固まったアービィたちがいた。
まるで些細な口げんかから、メディが力を解放してしまったかのようだった。

その力を解放しようとしているメディを目で止め、アービィは口を開こうとするが言葉は出てこない。
いつしか、日は傾き、窓の外は茜色に染まっている。

考え込んでいる四人に、ドーンレッドは言葉を掛けた。
「いきなり言われても、すぐ答えを出せるとは思わぬ。
今夜は部屋を用意した。
一晩、ゆっくり考えられよ。
もし、承諾してもらえるなら、王都までお連れする」
言外に断らせぬ、という意思を込め、ちらりと天井に目をやってから、笑顔でドーンレッドは言った。

「人払いはできている故、相談されることも自由だ。
私がいては相談もできまい」
そう言って彼は部屋を出た。

ドーンレッドが出ていた後の応接間は、沈黙が支配している。
四人が四人とも、混乱していた。

ルティは、アービィの正体が魔獣であるどころか、この世界の者ではないということに衝撃を受けていた。
それは、得体の知れないものへの恐怖故ではなかった。

他の世界で生活していた人間が、こちらの都合で勝手に誘拐され、年齢が変わっただけでなく人外の化け物にされていたのだ。

そのことに、心の底から怒りが湧く。
こんな理不尽なことがあるだろうかと怒りを抑えるのに必死だった。

ティアは、普通の人間が魔獣に堕とされたことが、腑に落ちなかった。
おそらく、ドーンレッドは、人間を召喚したかったはずだった。
アービィがいた世界にも人狼がいて、それを狙って召喚するとは考えられない。

人間であれば、性格についての不安は少ない。
桁外れの戦闘力を持つ人狼だが、アービィは例外中の例外であって、ほとんどは却って人に仇為すだけの結果に終わるだろう。
この世界の常識に囚われている以上、態々人狼を狙うとは思えないのだ。

なんらかの力、勇者が召喚されては都合の悪い者が、召喚呪文に干渉し、召喚された人物を弾き飛ばした上、人狼に変えたのだろう。
なんという理不尽。なんという悲劇。
ティアも、怒りに震えていた。

メディは、既に何がなんだか、解らなくなっていた。
とにかくアービィの戦闘力が並ではないこと、彼がとても重大な秘密を抱えていることくらいしかわからない。

「わたしは、何も言う資格はないと思うの。
宿に戻ってるね」

自分を襲った悲劇以上のことだとは、なんとなく解る。
そこに口出しもできないことも。

一抹の寂しさを抱えて、メディは宿へと帰っていった。

おそらく、この四人の中でまだ冷静だったのはアービィだった。
が、それも最初のうちだけで、自問自答するうちに混乱し始めていた。

生まれてから村の前に来るまでの間の記憶は、ほとんど無い。
確かに残る記憶は、ちょうど十年前からだった。

勇者を召喚した、という時期と一致する。
が、ドーンレッド召喚したという人物は、十代後半から二十代前半だという。
今の自分と同じくらいなのだろう。
年齢が合わない。そうだよ、僕じゃないよ、ね？

でも、と思う。
夢に出てくる知らない街や、知らない人。
でも懐かしい街や人。

あれが召喚される前の記憶なのだろうか。
その世界でも人狼だったのだろうか。ああ、だめだ。もう解らない。僕は誰なの？

どれほどの時間が流れただろうか、三人とも何も話せないまま時は過ぎ、窓の外は陽が沈んでいた。
言葉を交わすこともなく、何かを言おうとして目を合わせる度、喉まで出掛かった言葉を飲み込んでしまった。
ルティもアービィも自分を疑われることが怖かった。

得体の知れないものと思っていると疑われるのが怖かった。
得体の知れないものと思われるのが怖かった。
ティアは自分の推測を言うのが怖かった。

夕食の時間になったのか、侍女が部屋に入ってきて、何か召し上がりませんとお体に触ります、と言って、三人を促す。
アービィは、侍女があまりに心配そうに言うので、これ以上心配を掛けたくないという一心で、二人を促し食堂に行くことにした。

砂を噛むような食事を終え、それぞれは用意された部屋に案内された。
アービィがドアを閉める直前、ルティは声を掛けようとしたが、その口からは何も言葉は出なかった。

嫌味にならない程度の調度品が設えられた、上品な寝室。
アービィはベッドに転がり、この一日のことを思い返していた。

なんとなく不安に感じていたことの原因は、これだったのかと考えている。
自分の出自がまったく解らなかったこと。
この世界にない知識を持っていたこと。

解らないこともいっぱいある。
召喚されたとき、今くらいの年齢だったと言う。
なぜ、若返っていたのか。
なぜ、人狼になったのか。

そう考えているうち、彼は眠りの淵へ落ちていった。

ルティは眠れそうもないまま、ティアの部屋のドアを叩いた。
承諾の回答があり、入室する。

ティアは、涙でぐしゃぐしゃになったルティの顔を見て、静かに頷いた。
ティアを見詰める目からまた涙が零れ落ち、何も言わずティアに縋りついたルティは、堰を切ったように泣き出してしまった。
やがて、それは嗚咽に変わり、ティアはルティが落ち着くまで髪を撫で続けた。

「ねぇ、あんまりだよね、ひどすぎだよね？
いきなり攫われて……
一番苦しいのはアービィなのに、あたし……あたし……」

異世界など、物語の中だけのことだと思っていた。
アービィはあちらの世界で普通に暮らし、普通に恋愛もしていたに違いない。

何の前触れもなく、この世界に連れてこられ、人の忌み嫌う人狼に変えられたのだ。
その上、勇者などというものまで、押し付けられようとしている。

そして、アービィをこの境遇に陥れたラシアスに怒りを覚えると同時に、それがなければ自分はアービィに出逢うことはなかった事実に気付き、自分の浅ましさが恐ろしくなってしまったのだ。

もう一つ、ルティは気付いてしまったことがある。
アービィにとっての幸せは、おそらく元の世界に戻ることに違い

ない。

つまり……

それ故に、アービィに声を掛ける勇気がなかった。

自分の浅ましさが許せない。

そう言って、ティアに縋りついたまま泣いた。

「ルティしかアービィを支えられないの、悔しいけどね。

いつまでも泣いてちゃ駄目よ」

ティアはそう言って、ルティの髪を撫で続けていた。あたしじゃ駄目だもんね、解ってるわ、そんなこと。

夢を見た。

――よう、俺。

「誰？」

２０代後半だろうか、この世界では見ない服を着た、黒髪に黒い瞳の男が声を掛けてくる。

――俺だよ、俺。もう、顔も思い出せないかい？　１０年だもんなぁ。

「僕？」

――そう。召喚される前の俺だよ。

「やっぱり、勇者って、僕たちのことなんだ？」

――なんか、そうらしいなあ。

「そうらしいって、他人事みたいに」

――現実味がないんだよ。

こんなこと、ファンタジー小説の中だけだと思ってたけどな、そう言って、その男は話し始めた。

アービィには解らない単語もあったが、どうやら仕事の途中でこの世界に引きずり込まれ、意識をなくしたと思ったら狼になっていたそうだ。

それからのことは、アービィの記憶と同じだった。

――俺がそのままこっちの世界に着いたら都合悪い奴が邪魔したんじゃねぇかな。

「それって、あの人が言ってた魔王かな？」

――そうかもな。

「ねぇ、ひとつ聞きたいんだけどさ、元の世界に帰りたい？」

――いや。

「どうして？」

即答に対し、素直な疑問をアービィは問う。

――だってよ、もう１０年行方不明なんだぜ？　会社にも迷惑掛けたまま消えちまってさ。

どの面下げて帰れって言うんだよ。

「あっちにも好きな人とか、友達とかいたんじゃないの？」

――あー、思い出せないか？　そんなのもいたけどさ。１０年だよ、１０年。

戻ったとしてさ、どうやって説明すんだ？　ありのままに話したら精神病棟行きだぜ。

永遠に出られない、な。
「そう言われれば、そうだね」
記憶が繋がり始め、言葉も理解できるようになってくる。
ついでに失恋の痛い記憶も蘇り、失敗したと苦笑いする。

――まぁ、そんなのは言い訳でさ。もう帰る気ないよ。
だって、俺はおまえだぜ？　ルティ置いて帰れるか？
「無理」
アービィは即答した。一切の迷いも見せず。

――だろ？
「うん、でも本当にそれでいいの？」

――俺はおまえだよ。
おまえがルティと離れたくないってことは、俺がルティと離れたくないってことなんだよ。
「そうか～。あのさ、あなたが言ってることって、僕が考えてることなんでしょ？」

――そうだよ、俺が考えることはおまえが考えること。一緒だ。
「じゃあ、さっきから言ってる戻らなくてもいいってことはさ、自分への言い訳じゃないの？」
本当に帰らなくていいのか、アービィには自信がなかった。

――そうだ。俺はおまえだからな。
「やっぱり、帰りたいんじゃないか」

――もし、な、もしもだ。
俺とおまえの人格が分離できるもので、おまえの人格がこっちに残れるなら帰りたいさ。

「これから、その方法探してみようよ」

――さすが、俺。無駄に前向きだな。

「でしょ。ところでさ、勇者にならなきゃいけないのかな？」

これが一番解らない。

魔王なんて、姫様の神託とやらにしか出てきてないし、それこそ現実味がない。

噂の域でしかないのだ。

――そうだなぁ、中坊のころには憧れたよな、勇者になって世界を救うとかにさ。

「今はどうなのさ？」

――どうでもいいことだ。大切人さえ守れれば、それでいい。

「ルティのこと？」

――よくお分かりで。なぁ、いいか。

そう言って男は話し始めた。

もし、奴さんの口車に乗って騎士として取り立てられたとしよう。

俺はまずは対北の民、対他国の兵器にされちまうな。

で、本当に魔王とやらがいたとしたら、対魔王の兵器だ。

多分、態々異世界から召喚したってことは、俺には魔王を倒せる力が備わっているってことだ。

魔王を倒せる勇者に勝てる奴なんかいないよな。

この世で最強の「兵器」ってことだ。

この国の姫様は、その力が欲しいんだよ。
確かに俺を召喚したときは、純粋に国のためって考えだったとは思うがな。

それが10年歳を重ねるうちに、俺の力の意味が解ったんだ。
この世界に国がひとつだけってんなら、それでも良かったかもしれん。

ただな、姫様のご希望通り、魔王を倒しちゃって、他の国潰しちゃった後だよ。問題は。
姫様をぶち殺して、俺が王になることを止められる奴は、いないよな。

それじゃ、魔王とどこが違うんだ？
そんな物騒な存在にはなりたくねぇな、俺は。

どこか一国の所属になるのは危険。
戦争の火種だ。勇者争奪のな。今もそうなりつつあるが。

どこかに隠遁しても同じ。
世界を脅かすかもしれない存在を、許しておけるわけがないだろ？

結局、いちゃいけないんだよ、この世界に。
そういう意味では、帰りてぇよな。

そう言って、男は一息ついた。

「ルティを置いて？」
アービィは聞いてみた。

――だから言ったろ、俺とおまえが分離できるなら、だよ。
後ひとつ言えば、その時点でおまえが狼と分離ってのもな。
「あなたはルティを置いていけるの？」

――じゃあさ、おまえはルティを現代日本に連れて行けるか？
「どうすればいいのかな？」
言葉、風習、文明度、何から何まで違う世界に、いきなり放り込まれて平気なものか。
それにルティの両親はまだ健在だ。ティアやメディ、レイや伯爵、離れ難い人々がいる。
ルティにそれを選ばせるのは、酷過ぎるというものだろう。
仮にルティが全てを捨てて日本へ行くと決意したとしても、戸籍等の誤魔化せないことが山積している。
この世界と日本と、行き来できるならそれもいいかもしれない。
そんな都合の良い話があるとは思えない。

――なぁ、俺はおまえなんだぜ？
「そうだよねぇ。結局自分で考えなきゃいけないってこと？」

――そう。俺がこれから考えなきゃいけないこと。
「そうだね、僕が、だね」

――もう解ってると思うけどよ、俺はもう二度と出てこないぜ。
昔の夢は見るだろうけど、俺の視点とおまえの視点は同じなんだからな。
「あなたは僕で、別人格のもう一人の僕じゃないってこと？」

――そういうこと。自問自答してるうちに思い出したんだよ、俺を。

「記憶を、だね」

苦笑するアービィを尻目に、この世界でも日本人は若く見えるんだな、あの当時で２５だったんだぜ、と呟きながら、その男は消えていった。

「僕は、もう三十五歳なの？」

苦笑いしつつ問うたが、答える声はもうなかった。

アービィには解っていた。

あれは自分だと。

自問自答しているだけだったのだ。

口調が違っていたのは、元の世界での素の口調だった。

どっちが本物、とかいうことではなかった。

なぜ、人狼になってしまったのかは置いておくとして、今後の課題ははっきりした。

ともかく、当初の予定通り、呪文を極め、精神力をつけて獣化をコントロールすること。

それが第一で良い。

この世界を選んだのは、なによりも、ルティと離れたくないからだ。

そして、二人で穏やかに暮らすには、獣化のコントロールが不可欠。

もし、その魔王とやらが実在して、僕とルティの邪魔をするなら叩き潰す。

人狼にしたことを後悔させてやれば良い。

そのあとで僕とルティの前に立ち塞がる奴がいても、叩き潰す。
戦いや世界制覇を望んでいるわけじゃない。

とにかく一度、姫様には会ってみないといけないな。
なんでこの世界に呼んだのかって。
それで、言ってやろう。
僕たちに構わないで、と。

その前に、一度インダミトに行かないと。
メディの用事も済ませたいし、伯爵やレイにも久し振りに会いたいしね。

第３３話

「それじゃ、いってきます」
ベルテロイからインダミト街道を南下し、フュリアを目指す馬車にアービィたち四人は、ドーンレッドに挨拶してから乗り込んだ。
御者台にはリムノが乗り、手綱を握っている。

突然勇者などという迷惑極まりない話をされ、アービィが異世界人という秘密まで打ち明けられた一夜が明けたとき、ルティはどう彼に接していいか分からなかった。
どれほどの衝撃だっただろう、夜は眠れたのか、心の揺れはいかばかりか、心配は尽きなかった。
ティアと二人で過ごした不安な夜、アービィを一人で過ごさせてしまった後悔が、ルティを苛んでいる。

部屋のドアが叩かれ、意識をそちらに戻して返事をする。
入ってきたのは、晴れやかな表情のアービィだった。

「ルティ、昨日はびっくりしちゃったよね～」
あっさり言うアービィに拍子抜けしたルティは、安堵なのか心配の裏返しの腹立ち紛れなのか、何も言葉が出なかった。

ラシアスに行くこと。
でもその前にインダミトに行って、メディの用事を済ませ、ボルビデュス伯爵とレイに会いにも行くこと。

それをルティに話す。

「じゃあ、アービィは、騎士になるの？」

「うん」
ルティの問いに答えつつ、手はペンを取り、くしゃくしゃの紙の上を走らせる。
――ならないよ、姫様に文句言いに行くだけ。勇者なんて夢みたいな話、僕には無理。
どこで何を聞かれているか、リムノの気配が濃厚すぎて、とても言葉にはできない。
リムノ自身は完璧に気配を消しているつもりだったが、狼には通用しなかった。
当人は気付いていないが。
「とりあえずさ、一度宿に戻ろう。
メディが心配してるよ、きっと。
ドーンレットさんに言ってくるね」
アービィは軽く言い、ティアにも帰る用意してって言っておいてね、と言い残し部屋を出た。
「おはようございます。
昨夜考えさせてもらいましたが、僕たちはラシアスに行きます。
ただ、その前に水の神殿とボルビデュス領に行かせて下さい」
逃げるつもりか、と訝しむドーンレッドにアービィは続ける
「そちらの方にご同行願えれば問題ないのでは？」
天井を指さされ、ドーンレッドは苦笑しながらリムノを呼び、同行を命じた。

御者台に座るリムノは、金髪を風になびかせ、碧眼に困惑の色を漂わせていた。
なぜ、この同年代の男は、自分の気配が分かったのか。
おそらく、横に座る女の部屋に行っていたときも、気付かれていたのではないだろうか。

リムノは今まで人に対して恐怖を抱いたことがない。
半ば感情をなくしていることもあるが、人如きに恐怖を抱くような甘い修練を積んではいない。

それが、初めて得体の知れない恐怖を感じている。
異世界人だから？　リムノは無理矢理そう結論付けようとしていた。

小休止後、メディが御者台に上る。
同じ北の民として、話をしてみたいと思ったのだ。

間諜として人の間に潜り込む経験を積んだリムノと、娼婦として人との会話の技を磨いたメディ。
ぎこちないながらも会話が成立し、リムノが少しずつ打ち解ける雰囲気が出てきた。
メディに対しては、警戒心を持つ必要はないと判断したようだ。

リムノは、アービィたちに困惑している。
彼らは、北の民を同格の友人として連れていた。

全く偏見というものを感じさせない。

リムノに対しても、全くの同格として接していた。

もちろん、完全に友好的になることはないが、それは彼女が北の民ということではなく、ラシアスの手の者だからだ。

アービィは、ラシアスに行くとは言ったが、騎士になるとは言っていなかった。

これは、どう好意的に解釈しても、ドーンレッドの言葉に心動かされたという見方はできない。

リムノは、アービィの奪回を狙ってくるであろうインダミトの密偵に警戒したまま、アービィの心の内を探ろうとしていた。

しかし、アービィの対応を見ているうち、偏見のない見方をされることに心地よさを感じるようになっていた。

王都を通過しフュリアに到着した一行は、メディが精霊との契約を済ませるなり、来た道を戻り始めた。

治癒師として生計を立てるには、治癒と状態異常解除の呪文が欠かせない。

水と火の神殿詣は、メディの将来のため必要不可欠だ。

再度王都を通過し、ボルビデュス領を目指す。

ラガロシフォンに寄ってレイに挨拶しようと考えた彼らは、以前通った道を急いだ。

ウジェチ・スグタ要塞は、沈黙に包まれていた。

寂として声がない。

会議の席というのに、誰も発言しようとしない。

原因は単純だ。

アーガス率いる派遣軍が壊滅したのだ。

さらに救出のために急遽出撃したランケオラータ子爵率いる軍が、待ち伏せに遭い、これも壊滅。

五千の兵力が意気揚々と要塞の門を出てから３０日目、僅かに５００の敗残兵が蹌踉いながら、五月雨のように帰還しただけだった。

救援の軍の損害を含めれば、九割を超える未帰還率だ。

これまで、北の民に将などいないと思われていた。

今回のアーガスの出撃も、その前提に立っていた。

集落を一つずつ踏み潰し、支配域を拡げていこうという戦術だった。

しかし、襲撃した集落に人はいなかった。

人がいないだけではない。

食料から衣類、武器として利用できそうな物全てが持ち去られている。

各国からの補給は、ウジェチ・スグタ要塞までは届いている。

しかし、そこから先に補給部隊を出そうにも、その部隊に掛かる分の物資が足りない。

要塞に残っている貴族が、自分たちの食料の量や質をそちらに回すはずはなかった。

アーガスは、潰した集落から徴発するつもりでいた。

が、戦略物資の欠片も残さず、北の民は見事に避難していた。

建物こそ破壊していっていないが、焦土撤退作戦を行っている。

補給を求める伝令のみ出し、障害がないことに気を良くしたアーガスは、北の大地深く侵攻していった。
要塞からの距離が１０日分の行程を進んだとき、食料の残りが心許なくなった彼らの前に、北の民の軍勢が姿を現した。

いくつもの集落を襲ったが、そこで手に入れられるものは何もなく、無為な行進が続いていただけだったアーガスは、これで戦功を挙げることができると色めき立つ。
しかし、貴族の彼は自分に充分な食料を割り当てていたが、騎士以下の軍勢には食料の食い延ばしを強制し、兵士に一日に必要なカロリーを確保する努力は払っていなかった。

見通しの良い平原で対峙した両軍は、互いに陣を敷いて睨み合いに入る。
３日間が経過したが、北の民から仕掛けることはなかった。
威力偵察程度の小競り合いはあったが、北の民は派手に戦闘はするが、適当なところで退いていく。

偵察部隊からの報告を、自軍の威光が蛮族を蹴散らしていると思い込んだアーガスは、要塞に戻るだけの食料があるうちに、一気に決着を着けることを決意した。
南大陸の軍勢は、単純な方陣を形成し、北の軍勢と向き合った。

北の軍勢は、両翼を広く取った、横長の陣だ。
中央突破を狙う南の軍勢は、鬨の声と共に槍を構えて突っ込んでいく。

北の陣の中央に激突した南の軍勢は、そこまでの勢いを利用して北の陣を押し込んでいる。

北の軍勢は、南の陣を受け止めるが、少しずつ後退し始めた。

嵩に掛かって攻める南の方陣は、北の陣をくの字に押していく。

自然、北の陣の両翼が南の方陣を包み込みやすくなる。

アーガスは自分の周りをボルビデュス伯軍で固め、先陣は義勇軍から抽出した功名心に飢えた民兵で構成していた。

その民兵の中には、かつて軍役の経験を持ち、下士官教育を受けた者が少数ながら存在した。

その経験が危険を察知したときには、もう手遅れだった。

雪崩のように北の陣の両翼が襲い掛かり、一気に戦況をひっくり返された南の方陣は、瞬時に崩壊した。

アーガスは、襲い掛かる北の民の鬨の声に戦意を喪失し、僅かに残る生存本能で最後の戦闘行動を試みる。

彼が選択した行動は、逃走だった。

いや、逃亡だったのだろう。

救援を要請する早馬が走り、アーガスの周囲をボルビデュス譜代の騎士が守る。

アーガスに対する忠誠心など欠片も持ち合わせていないが、レヴァイストルに対する忠誠心が、かろうじてアーガスを見捨てることを踏み止まらせていた。

アーガスは、民兵に徹底抗戦を命じたが、国や貴族に殉じる義務感など皆無の兵が、自分を見捨てた将の命令など聞くはずもなかった。

さしたる抵抗もせず捕虜になる者、自らのプライドに掛けて最後

の抵抗を挑み惨殺される者が続出し、南大陸の先鋒軍は消滅した。

かろうじて戦場を脱したアーガスだが、北の軍の追撃は止まらず、絶望的な撤退戦を行う羽目になった。

ボルビデュス伯軍の精鋭が、決死の思いで北の軍に挑んでいく。

北の軍は殿軍を受け止め、その隙に他の軍勢がアーガスの護衛との間を遮断する。

確実に、一部隊ずつ挟撃して、敗走する軍勢を削り落としていった。

早馬の伝令に驚愕したウジェチ・スグタ要塞に残る派遣軍首脳は、急遽援軍を組織する。

自国貴族の先走りに責任を感じたランケオラータ子爵が、援軍を率い出撃した。

しかし、その時点でアーガスは手駒を全て失い、追撃戦は既に落ち武者狩りの様相を呈していた。

街道を外れ山中に逃れたアーガスは、たった一人でウジェチ・スグタ要塞を目指し歩き始めた。

不甲斐ない軍勢を罵り、自らの望みを打ち砕いた北の民を呪う。

突然目の前に現れた北の民に驚いたアーガスは、短い悲鳴を残して追っ手に背を向けた。

まさか、一軍の将がこのような体たらくということはないと思った追っ手は、誰何することもなく一刀の元にその背を切り裂く。

虚栄心と功名心に塗れ、自国の民や自領の精鋭を無為に失った貴族の息子は、北の大地でその短い生涯を終えた。

戦場にいたにも拘らず、彼の身体には致命傷となった背中の刀傷

以外、何一つ傷は無かったという。

戦場に急行するランケオラータ子爵は、軍務の経験がなかった。武芸の修練こそすれ、父に付いて財務の仕事を補佐する毎日だった。

地の利のない土地を進撃するというのに、斥候を出して進路の確認をすることをしなかった。

逆に地の利がある北の民は、巧妙に軍勢を山中や森林に隠匿し、ランケオラータの軍勢が通り過ぎるのを待つ。

そして、陣を組んでの通過が不可能な隘路に差し掛かったとき、隊列の前後から北の軍勢が襲い掛かった。

抵抗も逃亡もできない状況で、最後の一兵まで戦う覚悟を固めたランケオラータ軍だが、北の軍勢は包囲したままで投降を呼びかけた。

一部の将兵は投降することを良しとせず、剣を振りかざし無謀な突入を敢行するが、一瞬で北の軍勢に飲み込まれ、声を上げることなく死んでいく。

また北の蛮族の手に掛かることを良しとしなかった将兵は、その場で剣を自らの身体に突き立てた。

戦場の狂気に慣れていないランケオラータは、ここで心が折れ、投降を選んだ。

わざと逃された早馬が走り、再度の衝撃がウジェチ・スグタ要塞に響いた。

ウジェチ・スグタ要塞から各国に早馬が走り、派遣軍の悲劇は10日も掛からず、南大陸の住民全ての知るところとなった。

街道を進むアービィたちを、早馬が追い抜いていった。
その早馬に遅れること3日、アービィ一行はラガロシフォンに到着し、事の詳細を聞かされた。

レイは、既にボルビデュス城に戻るため、ラガロシフォンを発っていた。
今頃、焦燥感に実を焼かれる想いで、ボルビデュスへの道を辿っていることだろう。
アービィたちも、急ぎボルビデュス城に向かうことにした。

レヴァイストル伯爵は、深い懊悩に身を沈めている。
アーガスの戦死は止むを得ない。
情において忍びないものはあるが、戦場に出るものは殺される覚悟がなくてはならない。

しかし、彼の残したツケの大きさは、ボルビデュス家を滅ぼすに充分なものだった。

戦場での先走り、それによる軍への損害、ハイグロフィラ公爵とパストリス侯爵への背信、その他にも数え上げれば切りがない。
下手をすれば、一族郎党皆殺しにされてもおかしくないほどだ。

彼は、王都に出向きバイアブランカの前に剣を差し出すつもりだった。
当のアーガス亡き今、この償いにつり合うものは、彼の命だけだろう。

なんとしても、レイとセラスに累が及ばないようにしなければ、死んでも死に切れない。

ファティインディは、既に夫に殉じる気で、長い髪をばっさりと切り落としていた。

レイは、両親の覚悟を聞かされて、言葉もなく茫然自失となっている。

いかに将来を嘱望された才女とはいえ、まだ15歳の少女だ。

家族の不幸、不始末に併せ、婚約者が捕虜となっているのだ。

泰然としていろというほうが酷である。

セラスには衝撃が大きすぎると、まだ知らせていないようだが、家の中の雰囲気から何かを察している。

賑やかだったボルビデュス城は、既に葬式のような沈鬱な雰囲気に包まれていた。

城の入り口まで馬車は着いていたが、アービィたちは城内に取り次いでもらうことを躊躇っていた。

友の苦境をこのまま見過ごしていいものか、それとも家の事情に力にもなれない者が口を挟んでいいものか。

意を決して、門番に取次ぎを頼もうとしたとき、通用門が開き、レイが飛び出してくる。

手を取り合い再会を喜ぶが、すぐにレイは沈んだ表情になってしまう。

レヴァイストル伯も彼らを歓迎し、ささやかながら晩餐会が催された。

さすがに大人であるレヴァイストル伯は、彼らの前では明るく振舞っていたが、時折見せる沈鬱な表情が彼の深い懊悩の一端を垣間

見せている。

その晩は、早々に休むことになり、アービィたちは用意された部屋に案内された。

深夜、アービィの部屋に侍女が訪れ、伯爵がお越しになりたいそうですが構わないでしょうか？　と言ってきた。

アービィは、こちらから出向きます、と侍女に言い、服装を整え伯爵の居室に案内してもらう。

「夜遅くに済まないね」

「いえ、大丈夫です。

伯爵こそ……」

そこから先は言葉にできなかった。

「これを見てくれるかね？」

伯爵は、三通の手紙を差し出した。

よろしいのですか、と確認してからアービィは手紙に目を通す。

一通はバイアブランカ王からのもので、形通りの悔やみの言葉と、既に離縁されているが故に一族に沙汰なしとの通達だった。

次はパストリス侯からのもので、これも悔やみの言葉と、アーガスを引き止められなかったことへの詫び、そして跡取りを失ったボルビデュス家の将来を案じる言葉で締めくくられていた。

最後はハイグロフィラ公からのもので、やはり悔やみの言葉から始まり、レイの婚約者が軍事の才がないばかりに裏切る結果になってしまったことへの詫びと、パストリス侯同様、ボルビデュス家を案じる言葉が綴られている。

いずれもレヴァイストルを責める言葉は一言一句もない。
心配りの行き届いた手紙であった。

「君に頼みがある。
ランケオラータ殿を取り戻していただきたい。
これしか、私にはこの恩義に報いる方法が、思いつかないのだ」
軍を送り込むことは不可能だ。
領地の守りを洗いざらい吐き出すことになり、領民の安全を保障できない。

さらに、大規模な奪回戦を行っても勝算は乏しいだろう。
その間に、ランケオラータを殺されてしまうかもしれない。

ならば、確かな腕を持つ少数の冒険者を送り込んだほうが、可能性は高いと考えたのだ。
しかし、この気持ちのいい、レイの友達を死地に送ることになる。
伯爵は断って欲しいという、自分の希望に反した想いも抱いていた。

アービィは息を呑んだ。
貴族が、椅子から降り、床に頭を擦りつけ平民に懇願している。
初対面のときは、悪戯心もあって頭を下げたのだろうが、今回は違う。
レイのためにも、と続けるが、伯爵は床に頭をつけたままだ。

アービィはランケオラータ子爵に面識はないが、レイの婚約者ということは、以前の会話から覚えていた。
一体、何ができるというのか。

アービィは考え込んでいる。
レイのため、伯爵のため、何ができるか。

忌み嫌われる人狼の力が人の役に立つならば、役立ててみよう。
最初に頭を下げられたときに、行くつもりになっていたような気がする。

「伯爵、頭を上げてください。
今から見ることは、誰にも言わないでいただけますか？
奥様にも、レイ様にも。
例え、王様であっても」

約束する、と言った伯爵が、頭を上げるタイミングにあわせ、アービィは獣化した。
巨狼が伯爵の前に立った。

――僕の本当の姿です。
伯爵は驚愕のあまり言葉が出ない。

――この力が伯爵のお役に立てるのなら、僕は行きます。
伯爵は、狼の言葉に頷いた。
痣の意味はこれだったのか？　と心の中で呟いている。

普通だったら恐怖で腰を抜かしていただろう。
気を失っているかもしれない。

しかし、この巨狼からは恐怖感は微塵も感じられない。
征くとして可ならざるはない魔獣だ。
これほど心強い者はいないだろう。

――ただ、大変申し訳ないのですが……
伯爵は、どんな交換条件が来るのか身構える。
領地を差し出せと言われても飲むつもりになっている。
――なんでもいいですから、着る物を貸していただけないでしょうか？
沈鬱だったボルビデュス城に、久し振りに主の笑い声が響いた。

第３４話

「ルティ殿を呼んできてくれ。
あ、お前は部屋に入るでないぞ」
レヴァイストル伯爵は、部屋の外に控える侍女に命じた。

眠い目を擦りながら、ルティは伯爵の部屋のドアを叩いた。
入室を許可する声がしたので、失礼します、と言ってから、伯爵の部屋に入りドアを閉める。

「――！！」
ルティは、何度も目を擦り、状況把握に努める。

「……そういうことだったのね……
いえ、それは個人の自由だもの……認めなくちゃいけないのよね。
……だから、あたしに……手を出さなかった……の？」
ルティは、この世の全てが崩れ去ったというような表情で俯きながら、うわ言のように言葉を紡ぐ。
ルティが見たものは、椅子に腰掛け悠然と葉巻を燻らす伯爵と、シーツに包まって向かい合うアービィだった。

「いや、何か盛大に誤解しているようだが」
「だから言ったじゃないですか、絶対誤解されるって。
とりあえずさ、着替えがほしいんだけど」

「それでは、私が男色家だと、妻やレイに誤解されても良いと言うかね？」

なんとなく状況を察したルティは、無言でアービィの部屋に行き、着替えを取って戻ってきた。レイも連れてきちゃおうかしら。

「で、説得力を増すために獣化したってこと？
馬鹿じゃないの！？
ちょっと見ないでって言って、脱いでからすればいいのに」
しこたま叱られ、正座のまま説教されているアービィを、伯爵は微笑ましい目で見ている。

「まあ、ルティ、そのくらいにしてやってくれんかね。
妻やレイにも言うなということだしな。
しかし、レイには見せてやりたいものだな。
あの気の強い娘が、どんな反応をするかは楽しみだが」
潮時と見て伯爵はルティを宥めに掛かる。
それまで人狼といえば恐怖の対象でしかなかったが、改めて見るとその毛皮は優美としか言いようがなく、この魔獣のどこに死を撒き散らす力が潜んでいるかと訝しむほどだった。

翌日、アービィたちは、伯爵からの資金援助を得て、ラシアスに向かう。
資金に関しては心配ない、その他にも必要なものがあれば早馬で知らせてくれたらいつでも送る、と伯爵から後方支援の申し出もあった。

レイは、アービィの獣化以外のことを聞き、安堵と共に申し訳なさでいっぱいになっていた。
死地に友人を送ることにした父に対し、怒りすら覚えていた。
行かせないでほしい、ボルビデュスの不始末のせいで大切な友人

たちを死なせたくない、と父に抗議した。

当のアービィや、ルティ、ティアからも説得され、メディも地理に明るいから協力すると言い出したのだが、レイは首を縦に振らない。

「ならば、私も連れて行ってください。全部を、任せて……私だけ安全なところにいるなんて……」

貴族としての振る舞いではありません、とレイは同行を申し出た。

さすがにこれは同意できない。

伯爵も許可できない。

「レイ様、あなたが行ってはいけません。その間ラガロシフォンはどうするのです？領民を守ることが、貴族として一番大切なことではないのですか？」

ルティが諭す。

それでも首を縦に振らないレイに、アービィが宣告した。

「レイ様、足手まといです。僕たちが行くと決めたことですから、任せていただきたいのです。それに……人を殺すことになるかもしれません。ランケオラータ様も、それは望まないのではないですか？」

レイは、はっきりと足手まといと言われ、憮然とだが頷くしかなかった。

まだレイは、戦場はもちろん、野盗の征伐に出たこともない。

魔獣や獣を殺した経験はあるが、まだ人間を手に掛けたことはない。

いざというとき、一瞬の躊躇いで命を落すことになりかねない。

ティアは、人を殺さなければならない可能性があること、それが最も心配な点だ。

先日の奴隷狩りを撃退した際の、アービィの目を思い出していた。

あの時は、今一歩のところで狂気に染まり切ることはなかった。

もし、今回アービィが人を殺めるようなことがあったら、今度こそ人狼の本能が解放されてしまうのではないか。

それが心配でならない。

ティアは、その役は自分が負うと覚悟を固めている。

ルティが悲しむようなことがあっては、ティアは悔やんでも悔やみきれない。

メディは、一つの勝算を持っていた。

北の大地は、多神教の世界だ。

メディの生まれた集落は違うが、蛇を神と崇める集落も少なくない。

そのような集落の人間にとっては、ティアの獣化は神の降臨と同義語だ。

もし、ランケオラータがそのうちの一つに捕らえられているのであれば、ティアに神託を出させることで意外と簡単に解決するかもしれない。

違ったとしても、そのような集落の協力が得られるかもしれない。

無駄な血を流すことなく、帰ってこられるのではないかと思っていた。

しかし、それを今、ここで言うことは、ティアを窮地に陥れるだ

けだ。
なぜ、それなりに高位の魔獣が人に付き従っているのかは解らないが、態々この仲を引き裂く必要は認められなかった。
この魔獣を従えさせるほどの冒険者であれば、今回のことは難事のうちには入らないのではないか。そう思える。

ようやくのことでレイの説得に成功した一行は、リムノを伴いラシアスへ行くことにした。
北の大陸に渡る前に、向後の憂いは絶っておきたい。
ボルビデュス家の人々に見送られ、アービィたちは征く。

リムノはだいたいの事情は掴んだが、それを報告するように命令はされていない。
たまたま、行き会っただけのことだと思っている。

確かにランケオラータ救出は、インダミトに恩を売る良い機会だろう。
しかし、それを行うかどうか、判断するのはドーンレッドを含む国の中枢に位置する者たちだ。

既にランケオラータが捕虜となっていることは、南の大陸では周知の事実。
動くならとっくに動いているだろう。
それこそ、アービィたちがウジェチ・スグタ要塞に着く前に。

ウジェチ・スグタ要塞では、そのランケオラータ救出について、軍議が紛糾していた。
何れの国も救出にいくべきだと、考えているのは同じだ。

しかし、つい先日のアーガス部隊の壊滅劇が、将官の脳裏を占めていた。

北の大地にもできる将がいる。

一部の将官は自覚しているが、少なくともここにいる将官のほとんどより有能な将だ。

ラシアスはインダミトに対する立場を少しでも回復したい。

ディティプリス子爵の功名心が招いたともいえる、アーガスの独走。

副指揮官リシマキアの制止を振り切ったのはアーガスとはいえ、唆した上に出撃を黙認したのはディティプリスだ。

しかし、他国かに派遣軍を要請している状況では、ラシアス単独での救出作戦は不可能だった。

派遣軍から抽出した軍勢の御輿に乗りたい。それがディティプリスの本心だった。

インダミトは、中核となる軍勢と将を失った状況では、動くことはできない。

ましてや他国への要請など論外だ。

自力で取り返す。それが残された将兵の願いだが、これ以上の派兵は無理という現実に阻まれている。

ビースマックは、ランケオラータ子爵の命が危険であるという認識はある。

もちろん救出したほうが良いと考えているが、あまりにも馬鹿馬鹿しい理由で自国の兵を消耗したくない。

ランケオラータ子爵は人物は立派だが、軍人としての才はない。

そのような人物のため、大軍を動かす必要があるのか。
いや、軍を動かしてもアーガスの二の舞だろう。
救出作戦は、少数精鋭の隠密行動であるべきだ。

職人気質からか、極めて現実的な見方をしている。
しかし、ビースマックには、適任の人物はいなかった。

ストラーは、相変わらず口だけは威勢が良い。
派遣軍の精鋭を持ってすれば、蛮族など鎧袖一触。
食料がなくとも精神力で耐えるべきだ。
武器が届かなければ、腕がある。折れたならば足もある。手足を奪われても噛み付けば良い。

しかし、それを行うのは平民の兵だ。
自らは決して危険のある場所に近寄ろうとはしない。

アーガスを唆したのはディティプリスだけの責任ではなく、その大半はストラーの貴族たちに拠るものだった。
彼らは、またそれを行おうとしている。
そして、凱旋するための名誉だけを望んでいるのだった。

結局、各国の思惑が入り乱れ、軍議は決を採ることさえできずにいた。
北の民は、身代金等を要求することもなく、不気味な沈黙を保っている。

「リムノは一緒に行ってくれないの？」
ルティは諦めきれない様子で同じ問いを何度か繰り返している。

「私は、北の民よ。
それが北の民に刃を向けられると思って？
集落同士の殺し合いはあるけど、南大陸に力を貸そうとは思わないわ」
何度聞いてもリムノの答えは変わらない。
「南大陸の人に使われてて、北に潜入とかはしたことないの？」
それまでは何も言わなかったアービィが疑問を呈する。
ラシアスは対北に力を入れているはずだ。
この優秀な密偵を使わないはずがない。
「ドーンレッド様は、そこは考えてくださってるわ。
違う者が行くの。
私は、対南の国家要員よ。
南が荒れることは、北にとって望ましいもの」
「情報を教えてくれるくらいはいいでしょ？」
ティアが言った。
「答えられる範囲でね。
メディもいるんだから、私はあんまり役に立たないと思うわ」
そんなことはないでしょ、と言ってティアは矢継ぎ早に質問を並べる。
今回の戦は、明らかに組織立った戦闘が行われている。
その将の目星。
ウジェチ・スグタ要塞を通らずに北に渡る方法。
蛇を神と崇めている部族の数と規模。
ランケオラータだけではなく、捕虜はどこに捕らえているか、その候補地等。

リムノは、特に隠すべき内容はなかったか、それに対して判る範囲でよ、と断った上で答えた。

南の民は、北の民のことを蛮族と見下し、部族間の争いばかりで組織立った戦闘を行うことはできないと思い込んでいるが、一部は正しく、一部は間違いだ。

実際には、いくつかの大きな集団に別れ、その中には部族を率いる族長たちによる議会があり、指導者が選出されている。

今回は、特に優れた者が選出されたのだろう。

ウジェチ・スグタ要塞は、地峡の街道を塞ぐように建設されているが、周囲の山岳地帯には地元民族しか知らないような間道が、それこそ血管のように張り巡らされている。

この間道は、北と南の間にある極僅かの交易ルートとして活用されていた。

全ての北と南の民が対立しているわけではなく、国境を接している辺りでは、昔から僅かではあるが交流が見られた。

北の民の南大陸への移住は確かに悲願ではあるが、地峡に近づくにつれ山岳地帯は険しくなり、土地の生産力は極端に落ちる。

このため、北大陸の中心部に近くは優勢な部族集団が占め、さらに北や地峡周辺には弱小部族が圧迫され押し付けられている。

敵の敵は味方とばかりに、南大陸との交易で飢えを凌いでいる部族もあるのだ。

南大陸では、北の民の作るものはエキゾチックな雰囲気を持った珍しいものとして、産地不詳のまま高値で取り引きされている。

両者の利益が一致するなら、そこに殺し合いやいがみ合いは起き

ない。

部族集団は、同じ神を崇める集落で形成されている。
北の宗教は、他の神を排斥することはなく、互いを認め合っている。
部族同士の諍いは、宗教によるものではなく、生存権の奪い合いでしかない。

蛇を神と崇める部族は、中心部に多くいるが、決して多数派ではない。
他にもあらゆる動物が神と崇められているが、狼や熊、虎やライオンといった猛獣を神とする部族が多い。

捕虜が一人二人であれば、それは砂漠の中から特定の一粒の砂を探し出すようなものだ。
しかし、2千人近い集団を捕らえおける場所は、そう多くない。

候補はいくつかに絞れるだろうが、それは現地で情報を集めるしかないだろう。
リムノは物心付く前に、南大陸に渡っている。
地名等はほとんど分からないし、地図がない北の大陸では、自分が住んでいる周辺だけが世界の全てだった。

「結局、全部は行ってからかぁ～」
メディがぼやくように言った。
やはり、リムノの情報は、メディが知る以上のことではなかった。
ここはやはり、ティアに頑張ってもらうしかないか、と独白する。

ティアも図らずも同じことを考えている。
自分が獣化することで、北の民を味方に付けられるのであれば、

躊躇う必要はないだろう。

「ティア、もうすぐ寒い季節になるから、そこは気をつけてね」
メディはラミアの身体を気遣っている。
メディはアービィの正体を知らないし、ティアも教えるつもりはなかった。

ドーンレッドは、アービィたちをインダミトに送り出してすぐに、ラシアスに戻っていた。
ラシアスの王都アルギールに着くなり登城したドーンレッドは、ニムファに謁見を申し込む。

通常であれば謁見の間で報告ということになるのだが、宰相コリンボーサに聞かれるのは都合が悪い。
そのため、ニムファの私室で報告を行うことにした。

「摂政殿下、『痣』を持つ男を確保いたしました。
現在、リムノの監視下で、こちらへ向かわせております」
宮廷魔術師は、摂政に報告した。
これで、国を憂いた若き指導者に安寧をもたらすことができる。

彼は、「勇者」はあくまでも「魔王」に対抗するための人材だと思っている。
「魔王」が覚醒しては、南も北も、四国家もない。
これに対しては世界を挙げて立ち向かわなければならない。

彼は、そのための切り札だと考えていた。

「ご苦労様でした、ヘルフェリー。

これで、勇者は私たちの手に戻ってきたわけですね。
長かった……
いよいよラシアスは……
お下がりください。
長旅でお疲れでしょう、今日はゆっくりとお休みになって。
勇者が到着するのを待ちましょう」

摂政が言葉にしなかった部分に言いようのない不安を抱え、宮廷魔術師は退出し居室に戻ろうとした。
城の通路を歩く彼に、声を掛ける者がいる。

「宮廷魔術師殿、そのご様子では、勇者を見つけられたようですな？」
声の方に視線を送ると、コリンボーサが忌々しげな視線を叩きつけてきていた。

「これは、宰相閣下。
幸いにも、ベルテロイにて相見えることができましてな。
これもマ・ターヨシ神のご加護と言うもの。
現在、リムノがお連れいたしておるところ。
数日後にはアルギールに到着されるでしょうな」

「さようか。
大儀でしたな。
これで……。
今日はゆっくりされるがよかろう」
心底、労わるような視線と共に、労いの言葉を送る。

コリンボーサは考えている。
宮廷魔術師は摂政の寵愛こそ受けているが、それだけだ。

財力や、権力の基盤はそれほど大きくない。
せいぜい、勇者を釣ったエサは、騎士階級程度だろう。

おそらく、摂政に会わせれば、摂政が伯爵程度はすぐ与えようとするだろう。
しかし、伯爵という爵位は、摂政の独断で与えられるほど、軽いものではない。

閣議に諮らねばならず、それに反対意見を述べることは、反意と言われることはないだろう。
その前に、宰相の権限で子爵を与えておけば、こちらに与することは確実だ。

権威と財力しか人を惹きつけるものはないと信じる男は、最良の果実を我が物にするための策略を、柔和な笑顔の下に隠していた。

「私の役目はここまで。
あなたたちって、不思議ね。
ここまで私を偏見なしで付き合ってくれた人たちなんて、いなかったわ。
仕事じゃなければ、楽しかったでしょうね」
アルギール城の城門前で、馬車から降りたリムノが残念そうに言った。

衛兵に取次ぎを頼み、リムノは去っていく。
おそらく宮廷魔術師の下へ行くのだろう。

アービィは、これから起こるであろう権力との戦いが、心底嫌だ

った。

ドーンレッドは、アービィが騎士の地位に釣られていると、思い込んでいる。

おそらく、彼を自分の手駒とするために、様々な誘惑を仕掛けてくるだろう。

中には脅迫や、仲間を盾に取って膝下に敷くことを強制してくることもあるかもしれない。

もし仲間を傷つけるようなことがあれば、彼はこの国に敵対する覚悟がある。

なんであのひとは、召喚なんて面倒なことしたんだろう……

ルティは、リムノやメディとの旅を通して、北の民も普通の人間であることを改めて知らされた。

害意を持たずに付き合えば、友として互いを信じることは、難しいことではない。

北も南もなく、偏見のない世の中になれば、あたしたちも安心できるようになるかなぁ……

第３５話

城門の前で取り次ぎを待つ間、衛兵が彼らを見る目は、とても友好的とはいえないものだった。

それはそうだ。

ほとんど喧嘩を売りに来たようなものだ。

衛兵にこちらの雰囲気が伝わっているのだろう。

主に、近寄るもの全てに噛みつこうとする、狂犬のようなルティによって。

やがて取り次ぎに走った衛兵が、この国の文官の制服を纏った若い男を連れてくる。その慇懃な態度の男に案内され、アービィたちは城内の一室に通された。

「なんて言って断るつもりなの？」

何か穏便に事を納める秘策でもあるのかと、ルティはアービィに聞いた。

「ないよ。

ただ、文句を言ってやりたいだけだよ。

勝手に決めるなって」

事も無げにアービィが答える。

ルティの脳裏には、思い通りに事が運ばず怒り狂った姫に命じられて襲いかかる兵を片端から噛み裂く獣化したアービィの姿や、追っ手を逃れ人目を避けて二人で暮らすがすぐに見つかり手に手を取

っての逃避行の場面が、走馬燈のように過ぎっていた。逃避行……
きゃーっ。

顔を真っ赤にして怒鳴ろうとしたルティをティアが押し留める。
「はいはい、大きな声出さない。
どこで誰が何聞いてるか、分かったもんじゃないんだから」
アービィにちらりと視線を投げてから、天井の一角を睨み据える。

ティアが視線を投げたとき、アービィは既に天井に目を向けていた。
「そうだよ、ルティ。
リムノ、降りてくれれば？
堂々と聞けばいいよ」

リムノは驚愕していた。
完全に気配は殺していたはずなのに、一度ならず二度までも。

今度はアービィだけでなく、ティアにも気付かれた。
リムノは無言で下に降りた。

「僕たちの様子を窺って、靡きそうなら謁見、靡きそうもないなら懐柔しにくるつもりだった？
今夜にでも、君は僕に抱かれに来るんじゃない？
違う？」
その通りだった。
リムノはアービィの言葉に無言で肯く。

「悪いけど、僕は君を抱かない。
そんな無駄なことはしないで。
僕は文句を言いに来たんだ。
勝手に連れてくるな。
人の気も知らないで勝手に決めるなってね」

ドーンレットから受けていた命令は、四人の動向や会話を探り、懐柔工作の必要性を確かめることだった。
もし、懐柔工作が必要であれば、リムノをアービィ専属の女にする予定だった。

リムノは密偵として、情報を得るためや、特定の人物をこちらに寝返らせるために、自らの身体を贄に供することに、躊躇いはない。
そのために性の技も研いてきたし、容姿にも自信があった。

今まで、男色家や年齢に関わる特殊性癖の持ち主以外で、籠絡できなかった男はいない。
今回もそうするつもりだった。

「何考えてるのよ!!!
そんなことしたら許さないんだからぁっ!!!
リムノとは……リムノは……友達にもなれるような人だと思ってたのに……
なんで……？
なんで……あたしたちを…放っておいてくれないの？」

リムノは、ルティの口から、いつ北の民に関わる罵倒を投げつけられるかと、思っていた。
しかし、泣き出してしまっても、ルティからついにその言葉は聞かれなかった。

「リムノ、僕たちはどこか一つの国の道具にはならないよ。
何をしてきても無駄だから。
ドーンレッドさんに言ってきてよ。
早く姫様に会わせろって」

リムノはアービィの言葉に突き飛ばされ、ドアから部屋を出ていった。

どんな方法で迫っても、彼は彼女に指一本触れることはない。
この国に靡くことも、ない。
それが判る。

なぜかアービィの言葉は、素直に彼女の心に入ってきた。
リムノは気付いていない。
二人は連れ去られた元が北の大陸か異世界というだけの違いで、同じ境遇に置かれていることを。
それ故に、リムノはアービィの言葉には、納得できてしまうのだ。

リムノは思う。
あの三人の南の住人は、一言半句たりとも北の民を貶め、蔑み、差別するようなことは言っていない。
泣き崩れるほどの怒りに震えたルティですら、リムノを北の民だからと罵りはしなかった。

初めて自分を人として接してくれた南の住人の前に、刃を持って立たなければならない極めて近い未来に、リムノは溜息を吐くばかりだった。

リムノは、使役されるようになって以来初めて、ドーンレットに虚偽の報告をした。

謁見は、翌日の朝の政務が一段落したらすぐ行うと、決定された。一刻も早くここを出たいアービィたちだが、この国の庶民たちにも生活がある。

庶民の生活に必要な種々のことは、政務で決められている。

政務の混乱は、庶民の生活の混乱に繋がる。

間違いなく、謁見を先にすれば、その後の政務は大混乱だろう。

この国の首脳部に恨みはあるが、それ以外の政務官や国民そのものに含むところはない。

必要以上に迷惑を掛けることは、さすがに気が引けた。

その夜、アービィの部屋のドアを叩く者がいた。

城に到着した際に案内に立った、慇懃な態度の男だった。

彼は宰相コリンボーサの配下の者で、アービィを執務室まで連れてくるよう命じられていた。

アービィは、宰相の部屋へ案内された。

城内の廊下を歩く間、彼の視線は好意的なものではなかった。

嫉妬、値踏み、好からぬ企み。そんなものを内に秘めた視線。

宰相はこの若者を自分より高い地位に取り立てようとしている。

その嫉妬。

こんなどこの馬の骨とも知れぬ者に、どのような能力があるのか。

その値踏み。

そして、どうやってこの若者の足を引っ張り、地に引き落としてやろうか。その好からぬ企み。

宰相は、彼の予想の遙か斜め上を行く待遇を、アービィに用意して待っていた。

アービィが言われるままに部屋にはいると、コリンボーサは満面の笑みで出迎えた。

「ようこそ、アルギール城へお越し下さった。

ま、楽にされよ。

私がこの国の宰相を努めるコリンボーサだ。

明日は摂政殿下へのお目見えだが、どうかね、緊張はしていないかね？」

「いえ、大丈夫です、閣下。

しかし、僕のような下賤の者が、そのような方の御前に出て良いものなのでしょうか？」

アービィは、コリンボーサの笑顔は、決して善意や好意からのものではないことを、入室した瞬間に見抜いていた。

アービィを道具に、王女の歓心を買おうという企みが見て取れる。

彼は自分に人望がないことを無意識に自覚していた。王女を後ろ盾にすることでしか手にすることのできない、権力への渇望だ。

「いや、あなたは充分その資格をお持ちだ。

慎み深いところも、さすが勇者といったところかな」

そこから暫くは、歯の浮くような褒め言葉をコリンボーサは並べ立てた。

そして、これからが本題だと言うように、崩れた姿勢を直す。

「ドーンレッド殿があなたを見出し、その手の者がここまでご案内させていただいたようだが、ラシアスに仕官するに当たっての話などはされたかな？」

要は懐柔か、とアービィは心の中だけで呟き、そういえば騎士に取り立てることも可能だと言われましたね、と隠すことなく答えた。

「なんと！
それは誠か？
ああ、なんという恥知らず。
やはり、彼ではそれが精一杯か。
いや、これは大変な失礼をしたようだ」
彼には権限というものがありませんからな、と自らの権力を誇示しコリンボーサは続ける。

「いやしくも勇者殿を騎士などと、ふざけた振る舞い成り代わりお詫びする。
私はあなたを子爵への叙爵を約束しよう。
今後の働き如何では伯爵も夢ではなかろう」

侯爵くらいくれてやってもよい、と彼は考えている。
もちろん、まだアービィが本物の勇者であると確認できているわけではなく、侯爵はその後だ。
もし、後日、本物が現れれば、子爵程度を取り潰すなど造作もないことだ。

「僕は、皆さんが仰るような、勇者などというような、大層な者ではありません。
一介の冒険者です。
そのような者に爵位など……鼎の軽重を問われるようなことは、なさらないほうが……」
皆まで言わせずコリンボーサが言葉を被せる。

「いや、ご謙遜を。

ヒドラ殺しに化け物退治の英雄と、勇名は轟いていますぞ」
それから暫くは他愛のない話題に終始したが、明日の謁見をお楽しみに、という一言でコリンボーサとの対面は終了した。

そこから部屋まで、再度案内についた男は、アービィの待遇は精々武官程度と思っていたのだろう、それがいきなり子爵様ときて、彼の機嫌を損ねないように細心の注意を払っていた。
アービィは苦笑いしつつ、あなたが心配するようなことはしませんよ、お気になさらず、とドアを閉め、やっぱり謁見は政務の後で正解だなと考えていた。

深夜、気配に目を覚ましたアービィは、部屋の照明を灯した。
「無駄なことはしないでって言ったはずだよ」

天井に向かって言い放つ。
音もなく降りてきたリムノは、湯浴み着のような紗一枚を纏っているだけだ。

「何しに来たの？」
「無駄かどうかは、私が決めるわ」

照明のせいか、身体のラインがはっきり影になって見える。
紗は、脱がすまでもなく、破ろうと思えば簡単に引き裂ける拵えになっている。

この状態で自ら紗を引き裂き、大声でも出されたら、既成事実のできあがりだ。
まず、間違いなく、明日の朝日は拝めない。
生きたまま地獄とやらに放り込まれるだろう。ルティの手で。

そのことは別にしても、リムノの行動は意味をなしていない。

アービィは、リムノの仕事故、意義があるなら彼女が自らの決断で身体を開くことを、全否定するつもりはない。

ベルテロイからここまで、一緒に旅をするなかで、朧気ながら彼女の仕事について、理解できる範囲で理解したつもりだった。

「君の仕事は理解してるつもりだよ、リムノ。
でも、ルティが何で泣いたか分かるかい？
僕をどうこうってことじゃないと思うんだ。
リムノには、自分を大事に――」

「綺麗事だけで生きていけるとでも思ってるの!?
私は……私はこうするしかないの!!
ドーンレッド様の役に立つしか、生きる術がないのよ!!
あなたが私を抱かなくても、命令があれば誰かに抱かれに行くわ。
いまさら心配されたって……
あなた方の自己満足よ!!」

解ってる。確かに今更だ、とアービィは思ったが、言わずにはいられなかった。
自己満足だとしても。
「少なくとも、僕たちはそう思ってる。
大事にして欲しいんだ。
ルティだって判ってるさ。
そういう奴らがいるって解って欲しいんだ。
それに僕が――」

「そういうこと、か。
本当にあなたたちって、お目出度い人たちね。
いいわ、引き下がってあげる
あそこにいる彼女を、これ以上泣かせたくないからね」

ドアの方を見ると、目に涙を一杯に湛えたルティが、静かに立っていた。
「また、一緒に旅ができると……ね」
リムノはそう言い残して部屋を出た。

ルティは、涙が今にもこぼれそうになっているにも拘わらず、笑みを浮かべて言った。
「上出来よ、アービィ。
お説教は勘弁して上げるわ」

「なんでだよ
リムノは何もしてないじゃないか」

涙を拭いたルティが悔しそうに言う。
「あたし以外の女と……二人で部屋にいたからよ」

明日は謁見ぎりぎりまで寝ていたいね、とルティは言って部屋を出る。
ドアが閉まる寸前、どちらからともなく、一緒に、と言う言葉がこぼれた。

一瞬だけドアの動きが止まったが、再びドアが開けられることはなかった。

謁見の間は、異様な熱気と静けさに包まれていた。

登城と毎日の王家への謁見が許されている貴族の内、現在王都に住まう者たち全てが集まっていた。

摂政ニムファ第一王女が玉座に着き、宰相、内務卿、外務卿、財務卿等の主要閣僚が左右を固める。

誰もが、１０年前に異世界から召喚されたという勇者を、その目で確かめてやろうと固唾を飲んでいた。

居並ぶ目は、値踏みや疑いの色に染まっている。

１０年間結果を出せず、少なくない国家予算を浪費した宮廷魔術師の窮余の一策、つまり替え玉か、どこかで噂を聞きつけた山師の成りすましか。

大方の見方は、この二点だ。

その他にも本物ではあろうが、果たして言うほどの能力をもっているのか見極めようとしている者、如何にして自分の派閥に取り込むか思案する者、興味だけで見ている者、極一部に召集だからと来て早く帰りたいと思っている者がいた。

やがて定刻になり、一人の若者が謁見の間に召し出された。

飛び抜けて長身ではないが、実用的な筋肉に包まれていると一目で判る体格の男。

少し伸びた灰色の髪は、耳を半分ほど覆っているが、不潔さは微塵も感じられず、旅を日常とする冒険者の精悍さを醸し出している。

切れ長の目元に髪と同色の瞳は、権力に対しても理不尽を感じれ

ば戦うことを厭わないであろう強い意志を窺わせる。
美丈夫と言って良い顔立ちには、僅かにあどけなさも感じられ、それが近寄りがたい雰囲気を和らげていた。

摂政の前に進むと、片膝を着き、頭を垂れた。

ニムファは、今までの長い年月を思っていた。
漸く手に入れた勇者。
ラシアスの救世主。

ニムファはこの力を使い、南大陸はおろか北大陸までを統一し、後世の歴史家から『誰も成し遂げることができなかった両大陸の覇者』と書き記されることを夢想している。

手始めに、召喚の建前にした魔王と呼んでいる北大陸の奥地に蟠踞する蛮族を討伐し、次第に南下しながら北の大陸を制覇する。

南大陸の安全を保障したという実績と、勇者という兵器を背景に、南大陸の三ヶ国を従わせ、何れは滅ぼしニムファの帝国を築く第一歩を、今踏み出すのだ。

「顔をお見せください、勇者殿。」
たっぷりと時間を掛け、勿体をつけてからニムファはアービィに声を掛けた。

アービィは顔を上げ、ニムファを見た。
美しい女性だが、折角の美貌が欲にまみれている。
無惨、それがアービィの感想だった。

普通に見れば飲み込まれそうな美貌とカリスマ性があるのだろうが、視線の持つ全てを従えさせたいという欲求が台無しにしていた。

「よくぞ、我が国へお戻りくださいました。
私は１０年の長きに渡り、勇者殿をお待ちしていました。
さぁ、早くその証拠である紋章をお見せください」

アービィは片肌を脱いで右の肩胛骨あたりが見えるように、ニムファに背を向ける。
ドーンレッドが得意満面で、魔法陣から写し取った刻印と照合し、主要閣僚が順次確認する。

「間違いありません、勇者殿。
さあ、これでラシアスは救われます。
共に手を取り世界を。
宰相からの上奏通り、子爵に叙しましょう。
受けて、いただけますね？」

アービィは、服を直し、威儀を正してニムファに向かい、口を開いた。

「お断りします」

謁見の間にどよめきが広がった。
まさか、叙爵を断る平民がいるとは、彼ら貴族の想像の埒外だった。

無礼者、身の程知らず、傲岸不遜な輩といった罵声が飛び交う中、

ニムファが片手を挙げ、騒ぎを鎮める。

「なぜ、です？
平民が騎士を超え子爵に叙せられるのです。
どこの国でも、これほどの待遇は考えられません。
何が不満かお聞かせ願えませんか？」
さすが一国を率いるだけのことはある。
慌てふためき怒りに身を任せる有象無象とは違い、声を荒げることも、言葉を崩すこともない。

「まず第一に、勝手に、断りもなく僕の生活を叩き壊して、何の謝罪もない。
それで従えと言われて従う者がどこにおりましょう。
第二。魔王とやらが世界を脅かしているなら、それを倒すのは良しとしましょう。
ですが、なぜ、世界がではなく、ラシアスが救われたと仰るのですか？
なぜ、『世界に平和を』ではなく、『世界を』なのですか？」
アービィの問いの前半は、極当たり前のことだが、選民思想に凝り固まっている貴族や王族には理解しがたいものがあった。

「勇者殿が異世界で如何なる生活をしていたかは存じませんが、平民が叙爵されるなど、望外の名誉と思いますが？」
さも心外だと言わんばかりにニムファは答えた。

「僕のいた世界では、貴族など、何の役にも立たない過去の遺物でしかありません。
百年以上も昔にその役目を終え、今ではただの名誉称号で、特権など何もありません。
そのようなものにされたからといって、僕は少しも嬉しくないっ

！」

謁見の間は水を打ったように静まりかえる。

全ての価値観を全否定されたのだ。

アービィは続けた。

「この世界では確かに名誉でしょう。

それは否定しません。

必要な統治方法であることも解ります。

いきなり民主主義と言っても、愚衆政治になるのが落ちですから。

貴族の世は、まだ数百年は続くでしょう。

ですが、民を民と思わず、牛馬の如くこき使い、その命を蔑ろにすることが貴族の振る舞いというのであれば、僕はそんな人間ではありたくない！！」

ニムファや貴族たちは圧倒され言葉もない。

「ラシアスが救われるのは、何からなのです？

世界をどうするのです？

もし僕に力があって魔王を倒したら、次は何を？

僕はあなたの、世界征服のための道具にはなりません。

僕は愛する人と穏やかに暮らしたいだけです。

もし、魔王それを邪魔をするなら叩き潰しましょう。

ラシアスに敵対する気は毛頭ありません。

そして、もしラシアスが僕たちの前に刃を以て立ち塞がるなら、

僕は戦うことを躊躇いません」

しばしの静寂の後、謁見の間は再び怒号と罵声の嵐に包まれた。

それでもアービィは、怯むことなく立ち続けている。

やがてニムファが口を開いた。

「どうあっても、共に手を携えることはできないと仰るのですか、勇者殿」

「はい、僕を道具としてお使いになる、というのであれば。
摂政殿下、数々の無礼、お許しください。
……もう僕たちのことは放っておいていただけないでしょうか。
それでは、これにて失礼いたします」
完璧な動作で一礼し、ニムファを見つめる。

「そうですか……残念です。
ですか、勇者殿、私はあなたを諦めたわけではありません。
いつか、また…そう遠くない将来にお目に掛かれますことを。
そして、あなたたちの旅が幸多からんことを。
どうぞ、おさがりになって」

周囲からの視線を気にも留めず、アービィは謁見の間から出て行こうとする。
コリンボーサは呆気に取られつつも、ようやくのことでニムファに声を掛けた。
「よろしいのですか、摂政殿下？
引き留めるなり、敵対されるくらいなら――」

その一言は言わせないとばかりにニムファが言葉を被せる。
「諦めたわけではありません。
これからも目を離さず、いつでも抱き込めるように……
私の身体が必要なら……国を与えても……
ですが、決して敵対するようなまねは――」
ニムファが言い終わる前に、広間の出口で怒号が響く。

敬愛する摂政殿下を侮辱されたと激昂した衛兵が、アービィにハルバードを向け、何事かを叫んでいる。
ニムファは止めようとするが、既にハルバードは振り上げられ、打ち下ろし始まっていた。

最高権力者の周囲を護衛する者は、軍事の才には乏しくても、個人の技量は最高位の者が選りすぐられている。
いくら、アービィが勇者だといっても、丸腰で構えてもいない状態で、ハルバードの一撃に対処できるとは思えなかった。

ニムファが己の無力さを呪った瞬間、アービィがハルバードを避け、片手を開いたまま天にかざしたように見えた。

次の瞬間、衛兵は糸の切れたマリオネットのように、その場に崩れ落ちる。
立ち上がろうとするが、その度に腰から崩れている。

アービィはハルバードを避けながら、衛兵の顎の先端を掠めるように掌底を突き上げていた。
狙い違わず衛兵の顎の先端を掠めた衝撃は、彼の脳を頭蓋の中で小刻みに揺さぶった。

典型的な脳震盪の症状に襲われた衛兵は、完全に立つことができなくなっている。
やっと立ち上がっても、次の瞬間は床が起きあがってくるような錯覚に囚われ、床に顔から突っ込み動かなくなった。

アービィの動きと相俟って、妖術だと疑われたが、単純な物理と生理現象だ。

ほとんどの者の目には、アービィの掌底が衛兵の顎を掠ったことが、見えなかっただけだ。

横に立つもう一人の衛兵にアービィが訊ねる。

「この人、何番目？」

問いの意味を理解した衛兵が答える。

「順位を付けたことはないが、私を含め五本の指に入ることは間違いない」

「そうなんだ～
あなたもやってみる？」

既にアービィが臨戦態勢に入った状態から始めても、ハルバードを構える前にあの妖術紛いを受けるのが落ちだ。

衛兵は、無言で首を横に振る。

次いで白い手袋がひとつ、アービィに投げつけられる。

意味することは、たったひとつ。決闘だ。

アービィは、ニムファを見ることで許可を請う。

ニムファは、無言で首肯する。

勇者の戦闘能力を間近で見たい。

「よく逃げないな、無礼者よ。
ひとつ、貴族に対する礼儀というものを教育してやろう」

人垣を掻き分け出てきた偉丈夫が大音声で名乗りを挙げた。

「子爵ウェンディロフ・ラティフォン・ドン・テネサリムだ。
これが最初で最後だろうからな。

以後お見知りおきを、などとは言わん」
言ってるじゃん……

「何番目？」
アービィが気にも留めずに聞く。

「剣で私の右に出る者はない。
いや、武芸でと訂正しよう。
好きな得物を持ってくるが良い。
謁見の間で光り物を振りかざすわけには参らぬ故、中庭に出るが良い」

ここでアービィを殺せば、勇者に成り代わった上、ニムファの寵愛を一身に受けられるという打算がウェンディロフを突き動かしていた。

ニムファが、必要以上に厳かに告げる。
「勇者アービィ・バルテリーと、子爵ウェンディロフ・ラティフォン・ドン・テネサリムの決闘を、摂政ニムファ・ミクランサ・ミリオフィラム・ネツォフ・グランデュローサの名において許可します。
では、半刻後、案内を遣わしますので。
勇者殿、ご準備を」

第３６話

「あんた、一体、何考えてんのよぉっ！！」
王宮の一室にルティの怒号と罵声が響いている。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いっ！！
やぁめてぇ～」
情けないアービィの声が、遅れて漏れ聞こえてくる。

手持ちの剣を鞘に入れたまま床に並べ、その上に正座させられたまま、太腿を踏み躙られている。
後ろでは、ティアとメディが額に指を当て俯いている。

「そんなに怒らないでよ。
姫様は、極めて……ぎゃん！！……淑女的に送り出してく……れるって……言って……るってば」
呻き混じりにアービィが言う。

「その結果が、決闘ですってぇ！？
なんで、そんな、余計な、厄介を、背負い、こ、む、のっ！！」
一言ずつ、踏みつける足に力を入れる。
既にアービィは声も出なくなっていた。

「まあ、その辺で……
メディ、止めるの手伝って」
そろそろ頃合と感じたティアが、ルティを止めに掛かる。

メディもそろそろ慣れてきたのか、笑いを噛み殺しながらルティを宥めた？

「昨夜、もうちょっとあの子が積極的だったら危なかった？」
苦笑しながらアービィに聞く。

「火、に、……、ぶらっ、…、そ、そ、……、い、……ぇっ……」
アービィの身体から力が抜け始めてきた。

言葉も途切れ途切れだ。
さすがにやりすぎと感じたか、ルティの力が、少しだけ、緩んだ。

「いや、もうさ、面倒だから、適当に負けちゃえばさ、勇者っての
も、諦めてくれないかな、と」
アービィが、最高の解決策を思いついたとばかりに言う。

「ダメ。
勝ちなさい」
ルティが即却下する。
あんたが負けるなんて許せるわけないじゃないの。

やがて指定された時刻になり、迎えの遣いが来る。
アービィは、すっかり元通りに回復し、自分の剣をルティに預けた。
メディには、気付かないうちに『治癒』を掛けたことにしている。

「素手でやる気？」
ティアが驚いたように聞いた。

「うん、そのほうが怪我も少ないし、負けたって気になるでしょ。
剣持ってて丸腰に負けたなんて、恥ずかしくて言えないよ、家に

は。
で、勝負が終わったドサクサで城を出ちゃおうね」
あっさりと言って、アービィは中庭に向かった。

中庭には、先程謁見の間にいた貴族たちの、ほとんど全てが集まっている。
ウェンディロフ子爵は、軽甲冑を纏い、両刃のロングソードを腰に佩いていた。
アービィより１５ｃｍ以上の偉丈夫。
体の厚みも、アービィ以上だ。

アービィは普通の服装に手ぶら。
どう見ても街中の喧嘩、といった風情で中庭に出てきた。

１０ｍの間隔を置いて、両者が対峙する。

「貴様、素手とは、この私を愚弄する気か？」
「いえ、とんでもない。
僕はこれが一番得意なものですか」
怒りを目に湛えたウェンディロフに、アービィは笑顔で掌を見せた。

奴隷狩りの一件以来、アービィは獣化をある程度抑えつつ、狼の力を取り出すことができるようになっていた。
獣化した状態を１００とするならば、人間の状態で３０～４０の力を出すことができる。

それでも普通の人間の数倍に当たる能力だ。
当たり前の鍛錬しか積んでいない人間相手なら、充分おつりがく

る。

ニムファが決闘の開始を宣言した。

「どちらも、何があっても恨みごとはなしです。よろしいですね？」

両者から承諾の返事があり、それが開始の合図だった。

ウェンディロフが顔の右横に剣を構え、じりじりと間合いを詰めようとした瞬間。

一気に間合いを詰めたアービィの掌底が、ウェンディロフの左こめかみを打ち抜いた。

前に崩れ落ちるウェンディロフの顎を、下から打ち上げる掌底が捉え、一撃目ニ撃目とウェンディロフの脳を盛大に揺らす。

上体を起こされたウェンディロフの首に、アービィの腕が巻き付いたと思った瞬間、ウェンディロフの体が宙を舞い、後頭部から地面に叩きつけられた。

裏投げがきれいな弧を描いた後、背後に回り腕を固めつつ、頬骨に腕を擦りつけ、締め上げる。

「そろそろ、参ったかどうか、誰か聞いていただけませんか～」

アービィが暢気な口調で周囲に言った。

既にウェンディロフの意識はない。

間違いなく、一撃目で勝負は着いていただろう。

彼の記憶は開始の合図の後、剣を構えたところで途切れていた。

「聞くには及びません。
その辺で許してあげてください」
ニムファが、顔を青褪めさせて言った。

アービィがウェンディロフを締め上げるまで、開始から10秒ほどしか掛かっていない。
もし、アービィが剣を持っていたら、ウェンディロフの命は紙くずより簡単に飛び散っていたに違いない。

中庭は静まり返り、誰も声を上げられるものはいなかった。

「これは……ぜひ、またラシアスにお戻りいただけますよう。
あなたには……私を……国を差し上げても……」
ようやく言葉を発したニムファに、アービィは笑顔だけ向けて中庭を出た。

人ごみが引いた後の中庭に、二人の人影が残っている。
コリンボーサとドーンレッドだ。

「とんだ失態だな、宮廷魔術師。
十年がふいだ。
例え、あのときに召喚に成功していても、同じ結果だったのではないかね？
いや、捜索に掛かる費用や人的損害を考えると、まだマシだったのではないか。
追って沙汰を申渡す故、暫く謹慎するがよかろう」
コリンボーサはそれだけを言い残し、ニムファの後を追う。

ドーンレッドは、返す言葉がない。

悔しげに唇をかみ締め、両の手を強く握り締めている。
あまりに強く噛みすぎたため、口の中に塩気のある鉄の味が広がった。

やがて、ドーンレッドは無言でその場を去り、城内の居室に入った後、身辺の整理を始めた。

ニムファの後を追いながら、コリンボーサは考えている。
これで邪魔な者は、謹厳実直の塊のような騎士団長ラルンクルスだけだ。

ニムファは、あの宮廷魔術師をもう一人の父のように慕っていたが、この一件で彼の排除は成功したといえるだろう。
幸い、ウジェチ・スグタ要塞に放り込んだディティプリス子爵は、あの無能な父に輪をかけた底抜けの無能者だ。
このままではウジェチ・スグタ要塞の主導権がビースマックか、ストラーに移ってしまいかねない。
それを理由に摂政の信任厚い騎士団長を送り込めば、王都でニムファを操るのを止める者はいない。

一気に自らの権勢を増大できるようにしてくれた勇者とやらには、感謝してやっても良いくらいだ。
子爵くらいなら、このままくれておいてもいいかもしれん、とコリンボーサは卑近な笑みの下で考えていた。

ようやく開放されたアービィたちは、荷物を担いでアルギール城を出ようとしていた。
広い前庭を過ぎ、城門に掛かったとき、頭上に殺気が走る。

次の瞬間、ルティの背後にリムノが降り立ち、右腕を後ろ手に極めながら、喉元にナイフを突き付け――

既にそのときには、アービィが右側からリムノの喉元に、ティアが左側からリムノのこめかみにそれぞれの短刀と小太刀を突き付けていた。

二本の切っ先が、リムノの皮膚に触れる寸前で静止している。

リムノの左手は、ナイフを振りかざしたまま、動きを止められた。

それぱかりではなく、左手で剣を抜き放ったルティは、刀身を脇に抱え込むように後ろに向け、リムノの心臓の位置に切っ先を当てている。

リムノが左手に握ったナイフに力を入れようとした瞬間、それぞれの切っ先が皮膚を切らない程度にめり込んでくる。

ここでリムノは、ぴくりとも動くことができなくなってしまった。

ルティを殺したいわけではない。

アービィに服従を誓わせるため、喉にナイフを当て脅すだけのつもりだった。

万が一にもルティを傷つけたら、ウェンディロフの惨劇以上の恐怖がリムノを蹂躙する。

今、左腕を動かそうとしても、ルティの喉元にナイフが届く前に、気配だけでこめかみ、喉、心臓が貫かれるだけだ。

アービィもティアも、昨日までの友人のような目ではない。

心底凍りつくような冷たい目に、まるで狼と蛇のような目に変貌している。

おそらく、ルティも。

筋肉から力が抜け、ナイフが落ちる。
同時に三本の剣が鞘に収められた。

ドーンレッドの起死回生のため、独断でアービィの確保に走ったリムノだが、それは完全な失敗だった。
ラシアスは、アービィたちを完全に敵に回してしまった。

アービィたちが立ち去った後、リムノはその場に蹲り、長い間声を殺して泣いていた。
やがて、リムノは立ち上がり、そのまま城から出ると、アービィたちの後を追い始めた。

「アービィ、ねぇ……アービィっ」
さっきからメディが声を掛けるが、アービィは答えない。
こんな彼は初めてだった。

「ねぇ、ティア、どうしちゃったのかしら？
さっきから何度呼んでも、返事もしてくれないの……」

アルギールの町外れにある安宿に併設された酒場で、四人は酒を飲んでいる。
リムノの襲撃の後、すぐ駅馬車のチケットを取りに行ったが都合のよい便がなく、明日まで足止めされていた。

アービィが機嫌悪いなど、そうそうない。
落ち込んでいたりで話もしないことはティアも何度か見ているが、機嫌が悪くて返事もしないなど初めてのことだった。

今まで幸いなことに、彼は手酷い裏切りに遭ったことがなかった。
この世界で生きていくには致命的なことであるにもかかわらず、人に対してあまり疑いというものを持たないというのに、だ。

それで少々酷い目に遭ったことが何度もあるのだが、アービィは相手の立場を好意的に解釈し続けていた。
無理矢理の場合もあったが、ほとんどは自分の落ち度として片を付けてきた。

そんな彼が怒っている。
単純にルティに刃を向けたことだけに怒っていた。

リムノの立場や思考は、充分理解している。
あの状況で、リムノが取った行動は、根本的な部分を間違っているが、方法としては正しい。

アービィを手元に留めるには、ルティが必要だ。
そのためにルティを確保しようとしたに過ぎないのだが、その方法がアービィの怒りに火を点けてしまった。

リムノに殺意がないことは、充分承知している。
それ故に彼もリムノに対して、殺意は抱かなかった。
だが、もしルティに髪の毛一筋分の傷でもつけたなら、彼はリムノに刃を突き立てることに躊躇はしなかっただろう。

彼女がドーンレッドを守りたかった、ということも解る。
おそらく、ドーンレッドは、今回のことで宮廷内での発言力が低下しているだろう。

もしかしたら、失脚しているかもしれない。

彼が元の地位を保つには、なんとしてもアービィが欲しかった筈だ。

リムノが自分の生活のためにドーンレッドを守るとは思えず、純粋にドーンレッドの立場や命を案じてのことだろう。

それも解るだけに、アービィは自分の感情を持て余していた。

ルティも沈鬱な表情で、安酒を呷り続けている。

既に明日の二日酔いが、約束されている量だ。

ルティもリムノのしたことは、理解できていた。

だが、友達にもなれると思っていた人に対して、剣を突きつけてしまったことに嫌悪感が沸き上がっている。

いくら信頼したい人であっても、刃を向けられたなら刃で返すしかない。

アービィと二人静かに暮らすことを乱すなら、その相手に刃を立てることを躊躇いはしないが、まさかリムノがとの思いが強い。

ティアは、二人の感情がわかるだけに、今回は放っておくことにしている。

何を言ったところで、自分で決着をつけなければ、いつまでも感情の中に蟠りを抱えたままになる。

今後、リムノと再び見えたときに、蟠りを抱えたまま戦うことになったら、命を落すことになりかねない。

おそらく、リムノはドーンレッドを想い、アービィの確保に動くことは想像に難くない。

純粋な戦闘力でアービィを抑えることができないことは、リムノ

程の腕の持ち主であれば判っている筈だ。
そう遠くない将来、彼女と命の遣り取りをしなければならないことに、ティアは暗澹たる面持ちになってしまっていた。

「そうねぇ、アービィは、ちょっと照れてるのよ。
よく殺さなかったと思うわ」
ティアの答えにメディはなんとなく納得する。

アービィは、おそらく照れていることに、自分では気付いていない。
ヒドラと戦ったときも、奴隷狩りを叩きのめしたときも、ルティが危機に陥ったとき、彼の獣性が解放されている。
ヒドラにしろ、奴隷狩りにしろ、ああまでしなくても何とかなっていた筈だ。あたしの入る隙なんて全然無いじゃない。

「放っておいてあげてね、メディ。
二、三日もすれば、けろっとしてるから。
さ、明日は宿で寝てることになるわ、きっと。
こっちも飲んじゃいましょ」
今のルティの状態で、明日馬車に乗ることは、周囲に迷惑しか掛からない。
ならば、明日は宿で休眠状態だ。

ランケオラータ救出のためにも、早く北の大陸に行くべきなのだが、今は荒んだ精神を落ち着けなければ、致命的な失敗を呼び込みそうだった。
ティアも自分の感情を一時誤魔化すため、酒の力を借りることにした。

ベルテロイにある派遣軍宿舎の一室は、今にも破裂しそうな険悪な雰囲気に包まれていた。

ストラーの駐在武官アルテルナンテ＝サウルルスの執務室に、首から上が灼熱した鉄球と化したような男が乗り込んでいる。

ビースマックの駐在武官フィランサス＝ブルグンデロットは、本国から送られてきた報告書に激怒していた。

報告書を呼んだ勢いで、アルテルナンテの執務室に飛び込んできたのだ。

本来であれば、駐在武官同士の公式な会談は、副官を通じ相手の予定を確認した上で面会の約束を取り付けるものなのだが、今の彼にそのような余裕は無かった。

アルテルナンテはフィランサスの勢いに飲まれ、当初何が起こったのか理解できなかった。

お互いの副官がなんとかその場を取り成し、やっと落ち着きを取り戻したフィランサスの発言は、その場の雰囲気を元に戻すだけではなく、南大陸を一気に戦乱の渦に叩き込みかねない内容だった。

ビースマックからの報告書には、マグシュテット周辺でガーゴイルが確認され、その討伐に出向いた部隊が壊滅したことと、生き残りの証言からストラーの関与が疑われていることが記されていた。

生き残りの兵は、破壊したガーゴイルの一部を持ち帰っていた。

それは、ビースマックでは産出しない石材で、主にストラーの西部で建材や彫刻の材料として発掘されているものだった。

財務卿は、ここ数年の貿易関係を洗いなおしたが、ストラーからの石材輸入はほとんど無い。

ビースマックで充分必要量の石材は確保できるし、ストラーの石材は耐久性に難ありとビースマックの職人たちは判定していたので、輸入する理由も需要も少なかった。

ごく一部に彫刻材としての需要もあるが、質素剛健を旨とする国民性から、精々小さな装飾に使われる程度で、ガーゴイルを作るほどの大きさのものは必要とされていない。

つまり、このガーゴイルは国内ではなく、他国、おそらくはストラーで生産されたと見て間違いない、と報告書は締め括っていた。

「つまり、貴官は我が国が貴国に対し戦を仕掛けていると仰るわけですか？」

ようやく事態を飲み込んだアルテルナンテが発言した。

「然様です。サウルルス殿。

我が国としては、このガーゴイルの活動は、貴国のものと断じております。

納得のいくご説明をいただかない限り、このままでは通商活動の停止、いや場合によっては国交の断絶もあり得ると考えます」

副官の取り成しで、ようやく落ち着きを取り戻したフィランサスが言う。

普段、執務時間以外での付き合いのある武官たちは、お互いを愛称で呼び、砕けた話し方をしているが、今は公式の場だ。

呼び方も、話し方も、公式のそれになっている。

フィランサスは、それにもどかしさを感じていた。

より突っ込んだ話をするには、プライベートでのそれの方が早いと感じていた。

アルテルナンテにしても同様だが、事が事だけにそうもいかない。対応を一つ間違えれば、この場で宣戦布告があってもおかしくない話だ。

「しかし、貴国の調査だけで我が国の仕業とお考えになるのは、早計ではないでしょうか。

第三者の思惑で、貴国と我が国をいがみ合わせようとするものでは？

第一、我が国が貴国と争って、何の利があると言うのでしょうか？」

しかし、彼女の思考は別の方向も向いていた。

確かに、伝統的に農業国のストラーと工業国のビースマックは、互いにないものを補い合って経済を発展させてきた。

貿易の主な相手は互いであって、ラシアスやインダミトの割合は相対的に低い。

両国が戦争状態にならなくとも、通商活動の停止だけで充分に国内が沈滞する。

片方だけに利があるというわけではないのだ。

「しかしながら、サウルルス殿。

その第三者とはいずこの者なのでしょうな？

ラシアスやインダミトにその利があるとは思えませぬ。

まさか、北の大陸の者と？」

そう言いながらも、それは無いとフィランサスは考えている。

ラシアスは国力の疲弊したこの時期に、戦乱は望んでいない。

ニムファの野望が尽きることは無いだろうが、他国の戦力を国内に抱えた現状は、戦を仕掛けられる状態とはいえない。

せめて自国の体力が回復し、ウジェチ・スグタ要塞を独力で維持できるようにならなければ、他国を侵略する前に本丸を落とされてしまう。

インダミトのバイアブランカ王は、そもそも戦乱など望まない。四ヶ国のバランスが、南大陸の平和の要と考えている。

商業国であるインダミトは、戦乱による経済活動の沈滞は自国の沈滞に繋がるだけに、却ってこの諍いを鎮める側に回るはずだ。

北に至っては、組織的な戦争を仕掛けてくる発想すらないはずだ。防衛戦にこそ、今まで考えられもしなかった見事な組織的戦闘を見せたが、いくら弱体化しているとはいえウジェチ・スグタ要塞を簡単に抜けるとは思えない。

仮に抜いたとしても、地峡という地形は大量の軍勢を一気に通すことはできない。

従って、大陸内部に浸透される前に、出てくるところを片端から叩けば、それで済んでしまう。

それは南大陸側から見ても同じことで、北への侵攻はやはり難しいのだ。

長い沈黙がアルテルナンテの執務室を支配した。

その中で、彼女は一つの認めたくない推論を、纏めつつあった。

ストラーの王、つまり彼女の父は、プライドの高さだけが取柄の覇権欲のない男だった。

ストラーこそ、大帝国の末裔というプライドは高いのだが、それをもって他国を従えようという欲望はない。

だが、貴族の一部、特に王家傍流の公爵家や、その取り巻きの中

には、そのプライドが肥大しすぎたため、他国はストラーの前に傅くべきと考える者が多い。
特に彼らは、ビースマックを職人集団と見ており、ストラーとの対等な貿易相手というより、食料を恵んでやる代わりに技術力を提供させてやっていると、見下している。

戦を起こすような度胸はないが、謀を好み、他を自らのために動かすことを好んでいる連中だ。
他国の反王家勢力に手を貸し、王家の力を削ぎ、自らの影響力の強い一派に国を牛耳らせれば、自然ストラーの他国への影響力も上がってくる。

他国を併呑するのではなく、国として存続させたままストラーの膝下に敷こうとしている。
彼らは、ニムファとは別の形で、大陸を支配し、自らの欲求を満たそうとしていた。

ビースマック王家は、もともと領土の拡張の意欲が薄い。
ビースマックの貴族の中には、それを不満とする勢力が少数ながら存在していた。

もし、その二つが結びついたとしたら。
クーデター、その文字がアルテルナンテの脳裏に浮かんだ。

フィランサスも、ほぼ同時に同じ結論に達していた。
しかし、お互いにそれを口にすることはできない。
他国への侮辱とも取れるからだ。

「本官は、本国に事の詳細を問い合わせます。
貴官におかれましても、貴国のご様子を」

フィランサスに言えることは、それが精一杯だった。

「承りました。
ところでブルグンデロット殿、今日この後お時間は取れますか？」
公式の場でこれ以上突っ込んだ話は無理と判断したアルテルナンテは、終業後の酒の席にフィランサスを誘う。
お互いを愛称で呼べる席に移り、今後の対応を話し合うことにした。

「もちろん、可能です。
せっかくですから、バイアブランカ殿とグランデュローサ殿もお呼びしませんか？」
フィランサスは、インダミトとラシアスの駐在武官の名を挙げた。

「そうしますか。
では、それは本官からお知らせすることにしましょう」
アルテルナンテはそう言って、会談は終了、との意を示す。

南大陸では、国家間の同盟や提携と言ったことは、大陸協定と呼ばれる申し合わせで固く禁じられている。
微妙なバランスで保たれている国家間の力関係が、一気に崩壊するからだ。

既に二国間だけの話ではなくなっていると、駐在武官であり王家の人間である二人は、そう考えた。

第37話

教都ベルテロイにあるマ教神殿のスキルウェテリー枢機卿の私室に、バードンは唐突に呼び出されていた。

「インダミトの愚か者が北の大陸に突出して、壊滅した話は聞いておるかね？」

何事かと訝しむバードンに、スキルウェテリー卿が訊ねた。

当然知っているだろう？　という態度だ。

「はい。

既に承知しております。

あの莫迦共は救いがないですな」

バードンは、心底呆れたように答える。

「インダミトのレヴァイストル伯が、ランケオラータ子爵を救出するために冒険者を雇ったのだよ。」

スキルウェテリーは、情報を小出しにした。

続けてランケオラータが、レヴァイストル伯爵の次女の婚約者であることを説明した。

「子爵を救出すれば、レヴァイストルに恩を売れる。

そこでだ、お前に行ってもらいたい。

いや、人狼狩りが忙しいというのは解るがな。

お前以上の人物は、残念ながらいないのだよ」

断ることは許さない、と視線に含ませて言う。

インダミト王国の子爵を救出すれば、それだけでも彼の国はスキルウェテリーに頭が上がらなくなる。

さらに国王の信頼も厚いレヴァイストルを手の内に引き込めれば、インダミトの立場を完全に自派に引きずりこめる。
それはインダミトが支援している、全宗教との融和派であるカーナミン卿の力を削ぐことにもなる。

「断らせる気がないのに、よく仰る。
分かりました。
行きましょう」
バードンは、半分あきらめの表情で答えた。

聖騎士団から捨てられそうになった当時12歳のバードンを拾って、ここまで育ててくれたのはスキルウェテリーだ。
荒れ放題だったバードンに常識から世事、人前に出て恥ずかしくない礼儀などの全てを叩き込んでくれた。

スキルウェテリーも人生の約1／4はバードンと大差なかったため、他人事ではないという心情があった。
彼はストラーの没落貴族の子として生まれたが、物心がつく前に孤児院前に捨てられていた。

孤児院を出なければならない年齢に達した彼は、街で知り合った破落戸にいいように騙され、その使い走りのようなことをするようになっていった。
たいした実入りもなく、それこそ使い捨てのような生活が続き、明日喰うパンの心配が頭から離れない毎日だった。

綱渡りのような毎日は悪事との馴れ合いで、ある日寄付金が集まっているだろうと目星をつけていた教会に盗みに入る。
たまたま来訪していた聖騎士団にあっけなく捕まったが、それが

彼にとっての幸運だった。

もし、普通に町人や官憲に捕まっていたならば、彼は牢屋に送られ、そこで栄養失調で死ぬか、さらに世間に対して憎しみを抱くようになっていただろう。

捕縛され、問い詰められ、その日の食費と数日分の余裕が欲しかったと話した彼を、聖騎士団は盗みに入った教会に彼を預け、矯正することにしたのだ。

当初は食事があるというだけで教会に居ついた彼だったが、何もせずに食事だけ恵んでもらうことは彼のプライドを傷つけた。

しばらくすると彼は、神父たちの仕事を手伝うようになっていた。やはり使い走りのようなことばかりだったが、それでも人に必要とされるということは、彼にささやかな充実感をもたらす。

元の仲間たちがちょっかいを掛けてくることがあったが、聖騎士団が彼らを捕縛したことでその心配もなくなる。

聖騎士団にしてみれば、目をつけていた破落戸共を片付けただけに過ぎないが、図らずもスキルウェテリーにそのような者たちの末路を見せ付けることになった。

神父たちはマ教の教えに従い、博愛と自己犠牲の精神を彼に叩き込み、彼もそれに良く応えた。

彼は、長じるにつれ、自分もそうやって人を助けたいと思うようになる。

神父として働くことができるようになってから、彼はマ教の教えはあまねく世界に広がるべきという考えを持つようになった。

自分のような境遇の者が、まがりなりにも人様の役に立てるような人間に成長できたのは、マ教のお陰だと信じている。

また、そのような教えを持つ宗教は、マ教だけだと彼には感じられた。

特に北の民同士の殺し合いを聞くにつけ、彼らに対する感情は憐れみにも似たものになる。

北の大地で信仰されている多神教に人々を救う力はないと感じた彼は、それらの宗教は邪教でありマ教こそ全大陸を救う唯一のものだと信じるに至った。

人を救う力のない邪教は、排斥されるべきである。

北の大地にもマ教の光が届くようになれば、北の民も幸せになれると彼は信じている。

北の民を教化しようと考えるデナリー卿と考え方は近いといえるが、デナリー卿は異教徒に対して破折屈伏の姿勢を以って臨んでいる。

教団内で彼は当初デナリー卿に付き従っていたが、次第に彼はそれを手ぬるいと感じるようになっていった。

彼は、司教たちの中で考えを同じくする者を募り、枢機卿に選ばれた後はデナリー卿と袂を分かち、自らの信念に基づいて行動するようになった。

教皇の座を欲するのも、権力を欲するのではなく、布教を推し進めるための力が欲しいが故だった。

バードンが今を生きていられるのは、ひとえにスキルウェテリーのお蔭であった。

いくら純粋な力がスキルウェテリーを超えたとはいえ、バードンは彼に逆らうことはできない。

もし、あのまま騎士団を放り出されていたなら、人狼と大差ない人生になっていたはずだった。

もちろん、スキルウェテリーがバードンを拾ったのは、彼のためだけではない。

スキルウェテリーの所轄する悪魔祓い組織に、適していると判断されたことが大きな理由だ。

普通であれば、聖騎士団をはみ出してしまえば、教会と縁が切れてそれまでだ。

しかし、スキルウェテリーは彼の人狼への憎しみに目を付けた。

荒事を担当させるため、ちょうどいい人物だったのだ。

バードンは、インダミト内での人狼狩りを一時棚上げし、フロローからグラザナイを経由してウジェチ・スグタ要塞に向かい、さらに北の大陸へ渡ることにする。

教団内で原理派は何かと風当たりが強いため、一応の名目はウジェチ・スグタ要塞の慰問ということになった。

「それでは、卿、行って参ります。

必ずやご期待に応えましょう」

内心の面倒くささは隠しつつ、バードンはベルテロイを後にした。

ティアは、内心焦りを感じている。

リムノの一件の後は疲れ切った心身を休める必要があったが、今アルギールからグラザナイに向かう馬車の速度は、彼女にとってもどかしくて仕方がない。

ランケオラータ子爵が北の民の手に落ちた原因はアーガスの独走なのだが、その遠因を作ったのは自分自身だとティアは思っている。

レヴァイストル伯爵は、当初アーガスを手元で再教育するつもりでいた。

それをエーンベアに出すように進言したのは、他でもないティアだった。

もし、あの時、自分がそのようなことを言わなければ、アーガスはラシアス派遣軍に身を投じることはなく、ランケオラータが北の民の手に落ちることもなかったはずだ。

レヴァイストル伯の手元にいれば、伯爵は諸侯軍派遣の際にアーガスを将として送り出すとは思えない。

ティアは、そのことについて恨み言一つ言わなかった伯爵に、合わせる顔がなかった。

アービィもルティも、そのことについて、一言も言わない。

ラガロシフォンでそのことを知らされたときは、身体から魂が抜けたかと思ったほどだ。

ティアは、ランケオラータは自分の力を全て使って救い出すと、心に決めていた。

ボルビデュス領を出てから、ティアの精神状態が不安定になっている。

不機嫌というわけではないが、塞ぎこんでいることが多く、そうかと思えば必要以上に明るく振る舞ったりもしている。

ティア自身、危険な状態だとなんとなく理解できているが、無理にでも明るくしていないと不安に心が押し潰されそうになる。

そしてその後には、さらに重い不安感が襲い、また塞ぎこんでし

まうという悪循環に陥っている。

ティアの精神状態の波は、罪悪感や責任感から来ているのは解る。
アービィとルティは、それがティアの心を潰してしまわないかが心配だった。

「もうすぐ、グラナザイか。
これでメディは治癒師になる条件がそろうね」
アービィがメディに話しかける。

メディは、火の神殿で精霊と契約すれば、あとは修練を積むだけだ。
北の民の呪文はそれほど持っていないので精神系の治癒は難しいが、怪我や状態異常であればほとんどの症状に対応できるようになるだろう。

普通の生活を送っていたのでは呪文の修練の機会は少ないので、暫くは冒険者との二足の草鞋を履くのも良い。
ビースマックは魔獣の生息数も多いので、治癒師としても冒険者としても需要はあるだろう。

さらにあの国は職人気質の塊であることも手伝って、北の民への差別や偏見が比較的少ない地方でもある。
北の民の奴隷は多いが、基本的に使用人としての需要であり、娼婦の需要はあっても性的な奴隷は少ないといわれている。

「アービィ、火の神殿行ったら、すぐ北へ行くんでしょ？」
メディは、アービィにそう聞き返した。

「うん、冬になる前にけりを着けないと、半年近くは動けなくなっちゃうからね。
それに、北の民も捕虜を生かしておく余裕はないと思うし。
冬に備えて収穫を上げるためでしょ、きっと捕虜を取ったのは」
アービィは自分の推測を交えて答える。

「もう解ってると思うけどさ、私も行くよ。北に」
唐突にメディが宣言する。

アービィたちも、なんとなくそのつもりでいたのだが、ここまで来てメディはビースマックに返したほうがいいのではないかと思い始めていた。
命の保証がない。
生きて帰れる保証がないのだ。

もちろん、三人とも死に行く気はさらさらないが、北の大陸に足を踏み入れるのは初めてだった。
どんなことがあるか、全く予想がつかない。

「うん、気持ちは嬉しいんだけど……」
そう言ってから、アービィは不安要素を説明した。

「ねぇ、北の民の女を一人でラシアスに放り出す気？
そこからビースマックまで一人で帰れって言うの？」
このために用意していた答えを、メディは即、返した。

ラシアスは、常に北の民の圧迫を受けているせいなのだろう、北の民に対する偏見や差別は他の国に比べ物にならないくらい根強い。
北の民の女性が、誰かの所有物であることを証明できない状態で歩き回るなど、自殺行為に等しい。

攫われて奴隷商人や娼館に売り飛ばされるなどまだいい方で、強姦や殺人の被害者になることも珍しくない。

ラミアのティアラで魔力を取り戻して帰ることは、論外だ。
髪が蛇に変化するだけでなく、その蛇はそれぞれ自立して動く。
隠し通せるわけもなく、再度討伐の対象になり、そのうえ北の民への偏見や差別をさらに深めるだけだ。

そう考えると、北の大陸に一緒に行き、ランケオラータ救出後ビースマックに送るしかない。
最初からその答えであったにも拘らず、再確認するまでに時間を要してしまったのは、やはり北の大陸の内情が全くわからないからだった。

「十三年ぶりの里帰りよ。
いいじゃない、行っても」
メディは、三人の気を紛らわすように行った。

嘘だ。
里はもう無い。

他部族に襲撃され、一族郎党皆殺しになり、たまたま娼婦として売れそうなメディだけが生き残ったのだ。
生まれ育った場所は、荒廃しきって原野に戻ったか、他部族が占拠しているかのどちらかだろう。

近くまで行くことがあっても、悲しい記憶しか残っていない場所に、立ち寄るつもりはメディにはない。
忘れてしまったことにして通り過ぎるつもりでいる。

「そうだね、やっぱりメディにも、一緒に行ってもらいましょうよ」
ティアが言った。

ティアは、内心でメディに手を合わせている。
まったく予備知識が無い北の大陸に行くに当たって、メディの持つ知識は何よりの武器だ。

当初、救出方法など見当もつかなかったが、メディから蛇や狼などを神として崇めている部族があると教えられ、自分が獣化すれば解決の糸口になると教えられていた。
それ以外にも風習や、地理など、まだまだ教えてもらわなければいけないことは、山ほどある。

特に禁忌。
知らずにそれを犯した場合、協力的な部族だったとしても一瞬で敵に回しかねない。
知らない、で済まされることではないから、禁忌なのだ。

商習慣も南と違うのであれば、要注意だろう。
そもそも、今持っている貨幣が使えるのかどうかも怪しい。

もし通貨が違っているなら、地峡近くで南と交易をしている部族を探し出し、ここで両替しておかなければ食料を買うことすらできなくなる。
それ以前に南の住人にモノを売ることがあるのかすら、判ったものではない。

メディがいれば、その辺りの懸案はある程度解決できるだろう。
ティアが変化しても、瞳の色はともかく髪の色まで変えられない

のだ。

レヴァイストル伯爵への借りを返すために、ティアはメディを利用させてもらうつもりでいた。

心底申し訳ない気持ちで一杯だが、この救出作戦を成功させるには、メディの力は絶対に必要だと、ティアは考えている。

アルギールから、ほぼ10日の行程でグラザナイに到着した一行は、宿を押さえてからすぐに二手に別れた。

ルティとティアは、ウジェチ・スグタ要塞行きの馬車の手配に走る。

その間に、アービィがメディの護衛に付き、火の神殿で精霊と契約を済ませに行った。

幸いなことに、翌朝の便にまだ席の余裕があったので、四人分のチケットを購入できた。

あとは宿で待っていればいいだけなので、ルティとティアは並んで街を歩いていた。

「以前ここへ来たときには、要塞まで見物しに行くつもりだったのよね。

それが今度は、さらに北、か。

怖くない？　ルティ？」

暗い目をしたティアが聞いた。

「そうね、怖くないって言ったら嘘よね。

……

でも、ちょっとだけ期待もあるわ」

ティアの暗い目が気になったルティは、暫く考えて言葉を選ぶ。

今まで、三人は南の大陸から出たことがない。
ここまでの旅は、同じような価値観や、人生観を共有できる人々の間を渡ってきているが、これからはそれが分からない土地へ行くことになる。

「メディとリムノが、初めて会話らしい会話をした北の民なのよ。自分の周囲には、あんまりいなかったから。
フォーミットには、奴隷を持ってる人は少なかったし、娼館もなかったからね。
その辺は不安材料かな。
ティアも北へ行くのは初めてなんでしょう？」
ルティが聞き返した。

北の大陸についての情報が、南大陸では少なすぎる。
北の民に関する情報は、ほとんどがメディのような娼婦の寝物語や、僅かな交易による一部の人からの伝え聞きでしかない。

わざわざ危険を冒してまで、北を冒険する物好きは少なかった。
所謂冒険者たちは、生計のために少しでも良い報酬を求めて旅をしているわけで、北へ渡っても仕事がないのであれば、行く価値がない土地だからだ。

南から北へ行く人間は、使命感に燃えたマ教の神父か、南大陸に居られなくなった重犯罪者、あとは奴隷狩りくらいのものだろう。
いずれも北の民にとっては、迷惑極まりない者たちばかりだ。
これでは北の民が、南大陸の住人に敵意を持つのも仕方ないと考えられていた。

「あたしのせいなのよね、今回のことは。
メディやあなたたちを巻き込んじゃって、本当に……ごめんなさい」
ルティの問いに小さく頷き、暫く無言で歩いていたティアが、宿の玄関で突然歩みを止め、ルティに頭を下げた。
普通に歩いていたルティは、ティアを外に残す形になってしまい、慌てて振り返った。

「何言ってるの？
どうしちゃったのよ？
ティアが悪いわけじゃないじゃない。
気にすることじゃないわよ」
ティアの顔を覗き込むと、涙が流れている。
話は部屋で聞くわ、と言って、無理矢理ティアの手を引き、部屋に入る。

「あたしよ……あたしなのよっ
あたしが……伯爵に……いわなければ……
アーガスは死ななかったろうし、ランケオラータが捕虜になることもなかった……
なにより……何千人もの人たちが……
殺されたり……捕虜になったり……」
部屋に入るなり、抑えていたティアの感情が爆発した。

「あたしはラミアよ……人に害成す魔獣よ……
あなたたちのお陰で、人と暮らせるのかと思ったの。
でも……でも……あたしの言ったことで……
何千人も……」
ルティは何も言わずティアを抱きしめ、髪を撫でている。

「あたしは、人といちゃいけないんだよね……
判ってたんだ。
でも、少しくらい夢を見させてもらっても、いいかと思ってた……
でも……その夢から覚めたら……やっぱり……」
声が震え、その後は言葉にならなかった。
独り、一匹、一頭、一体という言葉が、頭の中をぐるぐる回っている。

「あなたは独りじゃないわ、ティア。
絶対、独りじゃない。
あたしたちがいるよ。
あたしたちが死んだ後だって、あたしたちの子供たちが、そのまた子供たちが、一緒にいるよ」
ルティは言い切った。
この優しい蛇を、ラミアを放ってしまうなんて、できるはずがない。

ルティの中で、ティアはアービィとは違った大切な場所を占めていた。
自分の命が繋がっていく限り、共に長い時間を共有したい、大切な「人」になっていた。

「いても……いいの？
あたしは一緒に……いて……いい……の？」
不安そうなティアに、無言で肯くルティ。

ティアは、嬉しさと同時に衝撃を受けていた。
この少女は、魔獣との間に子を成すことに、躊躇いを全く感じていない。

唯、愛する相手が魔獣で、自分が人であるだけだ、と当たり前のことを、当たり前に受け入れている。
その当たり前のことが、苦しくてたまらないのに。

ティアが、苦しさを感じている部分は、そこだった。
討伐する側とされる側。

深い溝があるはずだった。
それをこの少女は、軽々と超えていた。
いや、される側に行ったのではない。

溝を埋め、その中間にされる側を引き寄せ、救っていた。
溝だった部分には、討伐する側もされる側もなくなっている。

「ね、ティア。
いて欲しいの」

その夜遅く、宿の一室でアービィとルティは、向き合っていた。
メディは、精霊との契約が済んで安心したのか、早々と自室に戻りベッドに潜り込んでいる。

「ティアはようやく落ち着いたみたい。
今は安心した顔で寝てるわ」
ルティはそう言いながら、椅子に腰掛けた。

「よかった～。
心配したよ、ティアが泣きはらした顔なんだもん。
何があったかと思ったよ」

向かい側でグラスを傾けながら、アービィが答えた。

精霊との契約を済ませたメディとアービィが、ルティたちの待つ宿に戻ったときには、ティアは漸く落ち着きを取り戻していた。
ティアは、泣きはらした目を心配したアービィに、気を利かせたのだろう、そのあと酒場で珍しく羽目を外した。

飲み過ぎで二日酔いになることは多々あったが、ティアが酔い潰れたのは初めてだった。
ルティは、ぐてんぐてんになって動けなくなったティアをアービィに抱えさせて部屋まで送り届け、アービィを叩き出してからティアを着替えさせて寝かしつけて来たところだった。

「ティアの不安ってさぁ、アービィは解るんだよね？」
「うん。だいたいね」
言えない。
自分も全く同じ不安を抱えているなどとは、絶対に自分からは言えない。

以前ラシアスに初めて来たとき、自分の「痣」、召喚の刻印について、訊ねてきた人が二人死んだ。
そのうえ、巻き添えで片方の家族二人、計四人が死んでいた。

もちろんアービィが知らないだけで、四人ともラシアスの密偵だ。
国家間の暗闘の中で、武運拙く途半ばで倒れただけに過ぎない。
彼らには、その覚悟があり、アービィのことも、自らを直接殺した相手すらも恨むつもりはなかったはずだ。

しかし、アービィにとってみれば、自分に関わったがために死んだ、いや間接的に殺してしまったのではないかと、苦しんでいる。
おそらく、ティアもその先が怖いのだろう。

今目の前にいる大切な人まで、死に追いやることが怖いのだ。
それをルティに言うことは、アービィもティアもできなかった。

「同じような不安……ある？」
ルティか椅子から立ち上がる

「うん……」
傍に来たルティに、アービィは曖昧に肯く。

「怖いんでしょ？
独りになることが。
大丈夫。
あたしは、いつもここにいるよ」

顔を覗き込まれた、と思った瞬間、ルティの唇がアービィの唇に重ねられた。

「ほら、大丈夫じゃない」
顔を真っ赤にしながら、おやすみ、と言ってルティは部屋を出た。

翌朝、いつまで経っても出てこないアービィを起こしに行ったルティが見たものは、幸せそうな顔で鼻を鳴らしながら、床で丸くなって眠る狼だった。

昨夜に引き続き、顔を朱に染めたルティが、それでも幸せそうなアービィの耳を引っ張りながら、宿の食堂に降りてくる。

その光景を見ながら、じんわりとした幸福感を覚えながら、ティアはあり得ない想像をしていた。

この少女は、幸せをもたらす女神の化身ではないかと。

ひょっとしたら、南の住人と北の民との架け橋くらい、簡単に作ってしまうのかもしれない。

何につけ一応は、絶望的観測をするようになってしまっていたティアの心が、少しだけ解れてきた。

第３８話

北の大陸を目指す一行はグラザナイを馬車で発ち、七日目の夕方にウジェチ・スグタ要塞の後方支援基地リジェストの町に到着した。

ウジェチ・スグタ要塞の兵士にとってリジェストの町は、ほとんど変化のない平坦な毎日からの、解放と享楽の空間だった。

娼館が立ち並び、酒屋が軒を連ね、南の品を集めた商店が品揃えを競っている。

もちろん南方から運んでくる商品に生鮮食料があるわけでなく、ラシアス国民にとって異国情緒をかき立てる民芸品がほとんどだった。

それが今では派遣軍の、とりわけインダミトの兵にとっては、ふるさとへの郷愁を募らせる厄介なひと品であったり、ホームシックを癒す貴重な特効薬であったりもした。

アービィとルティにとっても、フォーミット近くで作られた民芸品は、両親を思い出させ、しばし慕情をかき立てられることになっていた。

ティアにしてみても、しばらくインダミトに居着いていたからか、懐かしさ混じりの視線で商店の軒先を眺めている。

しかし、それの和やかな時間は、到着時の身体の強張りを解す際の、僅かな間だけのことだった。

四人は到着した足で、地峡にある間道を踏破するための装備を揃えようと、ギルドの販売部で販売員にどれがいいか相談に行く。

「へっ？

今から、北の大地へ？
あんたら、気は確かかね？」

さすがに日も落ち、かなり冷え込んできている。
既に季節は晩秋と言っていい時期だ。
いくらなんでも夜間に、山岳地帯の間道を踏破しようと言う馬鹿はいない。

「いえ、今日は宿に泊まって、明日から装備とか携行品とか集めようと思ってるんです」
まさか誤解されるとは思ってもいなかったアービィは、慌てたように弁解した。

「いや、夜に行くとは思っちゃいないさ。
もう間道は雪に埋まって通れないってことだがね」

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」
一斉に驚きの声を上げる四人。

「そんなことも知らないところを見ると、あんたらインダミト辺りの人かい？
いや、そんなことって馬鹿にしたわけじゃない。
あんたらが住んでいた辺りじゃ、雪なんて降るかどうかだろ？
この辺りは、人の背丈より深く積もるんだよ。
南の人は知らなくて当たり前だけどな」
態々大陸中を旅して回るなど、余程手広く商売をしている者か、優秀な冒険者くらいの者だ。
ほとんどの一般人は生まれた地域から出ることは少ないし、商人や冒険者であっても一国から出るほどの者は、それほど多くない。

「それにしても、あんた北の民だろ？
ああ、あんた、こっちで生まれたのかい？」
メディが知らないとは思えず、勝手に販売員は納得してしまった。

「じゃあ、しょうがないな。
いきなり飛び出して死なれちゃ、寝覚めが悪いから」
そう言って、販売員は説明を始めた。

南の大陸も、やはり北に行けば行くほど気候は厳しくなる。
地峡を挟んだ両側はまだ比較的温暖だが、両大陸が接する地峡の一部には、両大陸の行き来を遮断するかのような高山地帯が横たわり、夏でも寒冷なうえ冬は長い間雪に閉ざされてしまう。

安全な通行に適した低地をウジェチ・スグタ要塞が塞ぎ、北の民の南下を防いでいた。
血管のように高山地帯を走る間道は、既にこの時期猛威を振るう雪に埋められ、ウジェチ・スグタ要塞を経由する以外両大陸を往来できる道はないと言って良い。

アービィもルティも、最も気候が温暖な地域の生まれで、ほとんどその地域を出たことがない。
ティアは寒いところが苦手なため、南大陸の南半分を主な行動範囲にしていた。
そのせいで、北方の夏や秋が短い季節感というものを、話では聞いているが実感できていなかった。

メディも北の大陸では比較的温暖な地域の生まれで、間道を通って南に売り飛ばされたのは夏だった。
その後の十三年の月日が、とりわけ屋敷に匿われ外出することがなかった十年間が、故郷の四季の記憶を薄れさせ、感覚を狂わせて

いた。

誰もが、まだ地峡を越えることは容易と考え、また大量の捕虜を使役するだけの収穫を見込める地域の本格的な冬は、もう少し先のことだと思っていた。

「間道が通れないことは分りましたが、ウジェチ・スグタ要塞を通ることはできないのですか？」

ティアが縋るような目つきになっている。

「昔は、こっちから行くのはよかったんだがね。北の民の勢いが強くなってからは、神父様くらいだ。通してるのはね」

割と楽天的にここまできたが、販売員の話を聞くにつけ、絶望的観測しかできなくなってきてしまった。

まず、現時点でウジェチ・スグタ要塞を経由する以外の道がないこと。

ウジェチ・スグタ要塞は通行の遮断が目的である以上、容易には通過の許可が下りないこと。

アーガスの独走は思った以上に深刻な被害をもたらしたため、インダミトに対する風当たりが強くなり、ウジェチ・スグタ要塞内ではインダミトの人々は白い目で見られつつあること。

そしてなにより、総指揮官ディティプリス子爵が全ての責任をアーガスとランケオラータに押し付け、救出作戦に消極的なため、アービィたちの通行許可を出す可能性は、限りなくゼロに近いこと。

深く考えずとも、あっと言う間にこれだけ、北の大地への道を阻む事由が挙げられる。
奇跡的に通行許可が下りるか、今現在通行可能な間道があったとしても、行ったが最後雪解けの頃までの数ヶ月は北の大地に足止めされてしまう。

ランケオラータ以外にもいると思われる捕虜を抱えての逃避行が、どのような結果に終わるかは、誰の目にも明らかだった。
焦りと見通しの甘さ、無知、そして己が無力さを思い知らされていた。

「なんで、そんなにぐちぐち言うのよっ！！」
ティアがルティに文句をつけ始めた。
安宿でアービィの部屋に四人が集まり、今後のことを話し合っていたとき、強固に北行きの主張を繰り返すティアを窘めたためだ。

「別にぐちぐち言ってるわけじゃないでしょ！？
ここから先に行けない以上、一度レヴァイストル伯爵に連絡を取って、根本的なところから相談た方がいいって言ってるだけじゃない！！」
言い方を変えて同じことを言っているため、かなり言い回しがくどくなっていた。
自分の言うことを解ってもらえないと感じ始めていたルティは、ティアに対してくどい言い方になっていたうえ、アービィやメディに同意求めるときには愚痴っぽさまで加わっていた。

「要は何もせず帰るってことでしょ！？
そんなことできると思ってんの！？
帰れるわけないじゃない。

高々、ちょっと雪が深いってだけのことじゃない！！」

「無理だよ、ティア。
吹雪いたら、前も見えないって言うじゃないか。
そんな中に飛び出したって、どうしようもないよ」
アービィが何とか宥めようとする。

アービィが人狼の力を解放すれば、雪など物の数ではない。
狼は、元々豪雪地帯を踏破する力を持っている。

しかし、人間やラミアが吹雪の中を彷徨うことは、自殺行為以外の何物でもない。
ラミアは妖術を得た代わりとでもいうかのように、高温や低温への適応力を失っている。
そこがまた、ティアの癇に障っていた。

「やってみなきゃ判らないでしょ！！
やる前からできないって考えちゃうわけ！？
なんか、良い方法があるかもしれないでしょ！？」
納得しようとしないティア。
ルティやアービィの言うことに対して納得できないのではなく、自分の理性に納得できない。

ティアも、一度戻った方がいいことは理解している。
リジェストで雪解けを待っているとしても、ここも雪に閉ざされてしまう以上、情報収集すら儘ならなくなってしまうのだ。

それでもレヴァイストルやレイに対する罪悪感と、これ以上動きようのないことから来る焦燥感が、ボルビデュス領への帰還を認めがたいものにしていた。

探せば道はあるはず。諦めなければ道は拓けるはず。

精神力で物理法則を変えることは不可能だが、呪文のあるこの世界ではそれがある程度は可能だと信じられていた。

確かに、周囲に積もった雪を炎の呪文で溶かしたり、風の呪文で吹き飛ばすことはできる。

しかし、呪文の使用回数に限界があり、回復には一晩の睡眠が必要である以上、溶かしたり吹き飛ばし続けることは不可能で、回復中に雪に埋もれてしまう方が早い。

天候まで操れる呪文は存在せず、神話上の神や悪魔でもなければ降雪を止めるなど不可能だ。

「二人とも諦めようって言ってるわけじゃないじゃない？
一度仕切り直ししようって言ってるだけでしょ？
ティア、お願いだから落ち着いて、冷静に考えて、ね？」

言い合いになったティアとアービィの間に、メディが割って入る。

「メディまで……二人の味方？
いいわ……
三人で帰ればいいでしょ！！
あたしは残って、北へ行く方法を見つけるの！！」

そのまま自室に戻り、ベッドに潜り込んでしまう。

さすがにティアも独りで行って、どうこうできるとまでは思っていない。

思っていないだけに、自分の感情と理性の整合性が取れなくなっている。

ティアの精神状態は、また不安定になってきていた。

以前は塞ぎ込むか、必要以上に明るく振る舞うかだったのだが、今回は攻撃性が見られている。
感情の起伏が激しく、付き合わされる方まで疲弊していた。

ルティは宥める術を持たないどころか、同じ理由で苛立っているせいで、ティアと衝突する場面が見られるようになっていた。
グラナザイでは予感のあったアービィとの甘い時間も、この状況では二人ともそのような気にならない。

ティアが孤立し、メディが気を利かせてティアの様子を見に行き、アービィとルティ二人きりの状況になっても、二人とも混迷の表情を消すことができない。
時間は無情に過ぎ、リジェストの町を雪が閉ざし始めていた。

少なくとも次の春が来る百日程先まで、北の大地に行く術は失われている。
メディは、自分が役に立たないことに苛立ち、アービィも自分の感情を持て余していた。

バードンは、アービィたちに遅れること十日程でリジェストを通過し、ウジェチ・スグタ要塞に到着した。
慰問の名目があるため、ウジェチ・スグタ要塞では歓迎され、密かに苦手を自認する説法を押し付けられる毎日を過ごしていた。

北の教化はマ教として不自然ではないため、北の中でも比較的温暖で雪はあっても行動可能な地域での布教活動を理由にしていれば、ウジェチ・スグタ要塞の通行は許可された。
バードンは、説法などから逃げ出したいこともあり、布教および北の実状を知るためと称して通行許可証をもぎ取り、意気揚々とウ

ジェチ・スグタ要塞を後にした。

指呼の距離に怨敵がいたことを、バードンは気付かずに北の大陸に渡っていった。

もし、リジェストにバードンが滞在することになっていたら、苛立っているアービィとの衝突があったら、血の雨が降っていたかもしれなかった。

バードンがアービィたちに気付かなかったことは、それはきっと、お互いに幸運なことだったのだろう。

北の大陸は、南から極北に向かって標高が低くなっている地峡に続く高地には、農耕に適した土地は少なく狩猟が主な産業となっており、主食となる穀物を含む農産物は、南大陸を含む周囲との交易に頼っている。

高地を下りると広大な平野が広がるが、土地はやせており、南大陸のように大量の人間を養うことは不可能だった。

その中でも比較的肥沃な土地は、有力な部族が占めており、数や武具の装備で劣る弱小な部族は、高地に押しやられている。

平野を占拠している部族にしても、大陸中央域から温暖な土地を求めて押し寄せる、さらに多くの部族連合を押し返すことで精一杯であった。

同じように中央域の部族連合も、極北の地から押し出してくる蛮族との戦いに明け暮れている。

いずれも己の生存を賭け必死の攻防を続けているが、雪に閉ざされる冬を生き残ることが優先され、大まかな勢力圏は固定されてい

た。

ある程度勢力圏を広げても、相手を押し切る前に冬が訪れ自然休戦になり、春に反抗の準備を整えた相手に押し戻されるということを繰り返している。

結局相手の土地を奪っても、維持に係る人員が不足しているうえ、冬を越すための食料を含む戦略物資の供給が追い付かず、冬の間に奪った土地に取り付いた人員の生活を維持できないからだ。

奪われた方も劣性を自覚した時点で土地の確保を放棄し、人員と戦略物資の維持に努め翌春の反抗に備えているため、奪回も容易だった。

年中行事のような土地の奪い合いは、それでもより北に位置する部族の南下への渇望が、少しずつではあるが、全体の境界線を押し下げていた。

南大陸の為政者は、地峡とウジェチ・スグタ要塞を以って、北の民の南下を食い止めるという戦略を持つものが多い。

それでも中には、北の有力部族と結んで蛮族の南下を食い止め、ラシアスの負担を軽減し、ひいては各国の少なくない北対策費用を減らそうという戦略を持つ者もいる。

バイアブランカ王家を筆頭とするこの勢力は、マ教内にあって南北融和派のカーナミン枢機卿を支援し、各方面に勢力を伸ばしていた。

今回のアーガスの独走は、インダミトの立場をかなり危うくするものだったが、ランケオラータが北の捕虜になったことは、却って僥倖だったかもしれない。

今回、戦術の教科書に載せたいような見事な戦を行ったのは、勢力圏から考えて平野の部族連合だとバイアブランカはにらんでいる。

ランケオラータが無理な反抗をせず生存を第一に考え、北の有力部族の中でそれなりの立場の者と対話の機会を作れるなら、南北協調のきっかけになる可能性もなくはない。

相手が中央域の強大な部族であれば、最大の問題となっている蛮族に直接対峙しているので言うことなしではあった。しかし、敵地を経由して支援をするよりは、少しずつ侵食していくほうが楽だろうと、バイアブランカは思うことにした。

財務に関わる仕事に就いていた彼は、国家予算における北対策費の占める割合の高さは充分承知している。

政務の中枢に近い位置にいたため、財務卿である父を通じて内外軍務の各卿や、その部下たちとそれぞれの仕事について親しく話をする機会を得ていた。

軍務の才には乏しくとも文官として政務の才に溢れ、将来を嘱望された彼は、その才を研く努力を怠っていない。

さらに彼はバイアブランカ王に目を掛けられており、王の対北戦略もある程度理解していた。

それもあってバイアブランカは、実際のところ、積極的な救出作戦の指示を出していない。

もちろん、派遣軍内でのインダミトの立場を考慮している部分もあった。

レヴァイストル伯が冒険者にランケオラータの救出を依頼したことも、スキルウェテリー卿が悪魔払いを救出に向かわせたことも、密偵を介して承知している。

スキルウェテリーの考えることなど既にお見通しのバイアブランカは、悪魔払いが余計なことをしなければいいと考えていた。

悪魔祓いにランケオラータの扱いをさり気なく気付かせ、彼にも

そう悟らせるため、密偵を神父に化けさせて悪魔祓いの監視に付けるかとも、バイアブランカは考えている。

冒険者たちはウジェチ・スグタ要塞の通行許可を取ることなど不可能だから、春までは動きようがなく、救出を諦めていないというポーズのためならば、それで充分だった。

あとは、ランケオラータがなぜ彼を北に放置しているかを理解することに期待し、その役割を果たした彼を無事帰還させるために冒険者たちを密偵に支援させる程度しかすることはない。

一度『痣』を持つ少年の顔も見ておきたいものだと、バイアブランカは考えている。

それにしても、と彼は思う。

インダミトも無関係とは言えないビースマックの焦臭い噂は、ベルテロイ駐在の息子から知らされている。

もちろん南大陸四国家のバランスが崩れるという由々しき事態なのだが、彼の国の王家傍流の公爵家には、レヴァイストル伯の長女が嫁いでいる。

『痣』を持つ少年は、レヴァイストル伯と関係が深い。

彼の存在が報告されてから、戦乱の兆しが絶えることがない。

バイアブランカ王は、改めて『痣』を持つ少年に、興味を抱いていた。

既に窓の外は暗い雪模様になっている。

数日間、四人はアービィの部屋に集まっては、事後の対策を話し合っていた。

毎回、帰還しようという話の流れになると、ティアが癇癪を起こして打ち切りになる、の繰り返しだ。
そろそろ方針を決めないと、雪解けまでこの街に閉じ込められることになってしまう。

そうなれば情報の収集はおろか、生活費にも事欠くようになる。
いくらレヴァイストルが資金援助してくれるとはいえ、ここまで資金を運ぶ術がなくなってしまうのだ。

討伐や、街の雑事と行った仕事がなくはないのだが、四人が普通に暮らしていけるほどの仕事はない。
何よりも、食料が不足がちになる厳冬期に、住人と要塞の将兵以外の人間が街にいることは望ましくないと思われている。

「そろそろ街を出ないといけないと思うんだ。
これ以上雪が深くなっちゃうと、どこへもいけなくなっちゃうよ。
要塞と往復くらいしか、できなくなるみたいだね」
アービィが、今日中に決断してくれという意味でティアを見た。

「どうしても、帰るのね？
帰らなきゃいけないのね？」
諦めきれないという表情のティア。

彼女は、レヴァイストルに、人に認められたことが嬉しかった。
魔獣としてではなく、性の対象としての女としてでもなく、能力を持ったひとりの「人」として認められたことが、嬉しかった。

なぜ、ここまで意固地になるのか、アーガスの件での罪悪感がそうさせていたと自分では思っていた。
だが、ここで無為に帰っては、せっかく認めてもらえたことがふ

いになってしまうのでは、ということが怖かったことに、ようやく気付いた。

宿からも、どうするのか早く決めてほしいと言われていた。
長逗留するのであれば、冬を越せるだけの食料を調達しておかなければならない。

宿としては、毎年収入のない時期に思わぬ収入源が転がり込むことになるのだが、食料は湧いてくるわけではないので、四人のひと冬分の食料を確保しなければならない。
そのためには、雪の影響の少ない街に仕入れてこなければならず、あと１０日もすれば雪で馬車すら走れなくなるため、今日明日がその期限と言われていた。

ティアにも、今が限界だということは理解できた。
自分の限界だということも。

「解った……
……ごめんなさい。
あたし……」
ティアが泣き崩れる。

三人には解っていた。
魔獣が人に認められるなど、今まで聞いたことがない。

罪悪感、焦燥感、責任感、ただでさえ、負い目に感じていたところに、自分の存在価値まで否定されかねない事態に、ティアは冷静な判断力を失っていた。
追い詰められ、現実から逃げようとしていたが、もう後に戻るしかないという現実を突きつけられ、ようやく冷静さを取り戻しつつ

ある。

三人は、まさかここでティアが折れてくるとは思っておらず、最後のバトルを覚悟していただけに呆気に取られていた。

いいの？　と言わんばかりの顔で、ルティが見詰めている。

メディは、振り上げた拳の行き場をなくしたような顔で、困ったような笑いを浮かべていた。

アービィも、やはり真意を確かめたいという顔になっている。

「でも、また戻ってくる。

諦めたわけじゃないの。

分ってくれるよね？」

ようやく落ち着いたティアが顔を上げた。

最後の問いは、三人への問いとレヴァイストルやレイに向けていた。

そして捕虜や死者となってしまった数千人の人々にも。

「うん、諦めてない。

絶対、またここに戻ってくるのよ」

ルティも悔しかった。

行けば何とかなると思って、たいして調べもせず、行き当たりばったりだった自分が悔しかった。

もし、ここで退いてはランケオラータが殺されないまでも、衰弱死してしまうかもしれない。

それでも、そこへ行く道が閉ざされているのであれば、今は彼の強運を信じるしかない。

アービィはどこかほっとしたような顔で、馬車のチケットの手配

に出て行った。
メディは悔しそうな表情で、酒の用意を始めていた。

アービィが戻ってきたとき、部屋の中は酒の匂いが充満し、既に出来上がったルティが床に崩れ落ちようとしていた。
メディとティアは、アービィの姿を認めると獲物を見つけた肉食獣のような目になっている。
とりあえず、逆らっては危険と判断したアービィは、諦観を漂わせつつ空のグラスを手に取った。

ランケオラータは、愕然としていた。
捕虜になったまでは、仕方がないと思う。

自信に軍事の才がないことは、誰よりも当人が知り抜いていた。
それでも北の蛮族に遅れをとるとまでは考えていなかったが、素人が軍人に戦で勝てるとは思い上がりも甚だしいと思い知らされた。

彼が愕然としたのは自分の思い上がりではなく、北の大地の現状だった。
捕虜の食事がまともではないのは分っていたが、ここまでとは思わなかった。

割るためにはハンマーが必要かと思うような、堅いパン。
味など期待するほうがどうかしていると思えるような、透明なスープ。
そこに浮いている、南大陸では雑草に分類されているような、草。
それが、一日に二回。朝晩に出るだけだ。

当初、彼は捕虜故の待遇だと思っていたが、強制労働の際に将兵

の食事を準備させられたときに見たものは、精々がところ草の量が捕虜より多い程度の内容だった。

つまり、消費カロリーが日常生活より多い軍事行動の際にも、南の下層階級より粗末な物しか支給できないということで、そのまま北の民の貧しさを物語っていた。

当然、このような食事では、戦場で傷つき体力を失った捕虜の命は、蝋燭の火より簡単に消えていった。

戦闘に突入する前に捕虜になった、まだ比較的体力が残っている者も、日に日に衰弱していくのが分る。

部下からは食事や待遇に関する不満を告げられていたが、勝者より待遇の良い捕虜がいるはずないと、彼は諦めるよう部下を説得するしかなかった。

そんな彼を見て、部下の中にはランケオラータは北の民に尻尾を振っていると、陰口を叩く者もいた。

彼は部下の陰口は仕方ないと考えている。

自分に対して不満が向いているうちは、北の民に対してあからさまに逆らうことはしない。

万が一、北の民に対して不満が爆発し、暴動でも起こそうものなら、今の状態では瞬時に皆殺しにされてしまうだろう。

周囲の冷たい目に耐えながら、彼は黙々と強制労働に従事していた。

その強制労働の内容も、彼に衝撃を与えていた。

未開地の開墾だと思っていたものが、常用の農地だというのだ。

まだ北の大地では焼き畑農業が主流で、大地は数回の焼畑でいと

も簡単に地力を失っている。

通常、放置された畑は十数年で地力を回復するが、使い続けられて消耗しきるか、そのまま放置されていることが多いため、農地に適した土地は減少する一方だと思われていた。

彼らが従事させられた強制労働のほとんどは、南の基準では荒れ放題の畑からの収穫作業だった。

引き抜くように指示された草を雑草だと思い粗末に扱って殴られた兵は、いきなり殴られたことによる理不尽さより、それが収穫物だという事実に呆然としていた。

もちろん、彼らにとって野菜と認められるものが栽培されているまともな畑も少数ながら存在するが、収穫物を捕虜に盗まれないために、そちらの収穫に駆り出されることはなかった。

穀類はそれなりに収穫量があるようだが、パンを焼く燃料のため無節操に森林を伐採した結果、春に鉄砲水が多発した経験から林業には消極的になっており、豊富な森林資源を抱えているにも拘らず、現在では却って林業が衰退している。

この他に石炭の採掘に従事させられたこともあった。

どうやら埋蔵量はかなりのものがあるが、道具が粗末であり、従事者の絶対数が不足しているため、生産量が上がらない。

鉱物資源も良質な鉄があるにも関わらず、同様の理由から小規模な産業でしかない。

その鉄は、部族間の戦のための武器防具に、優先して加工されている。

そのため、農、工具に回される量は僅かな割合であり、それが生産量を低下させるという悪循環に陥っていた。

小規模な部族内で全てが賄いきれるはずもなく、近隣の部族が連合体を作り、農林業、工業を分担しているが、部族間の力関係で弱小部族は各産業の過酷な過程を押し付けられていた。

南大陸の常識では考えられないほど、遅れた社会基盤だった。

比較的肥沃な大地を持つ南地方でこれならば、さらに北の地域はより過酷な環境なのだろう。

ランケオラータには、北の民が南の土地に移りたがる理由が、十日も経たずに理解できてしまった。

捕虜になって十数日目に、収穫が済んだ畑を見ながらランケオラータと部下が何気なく交わした会話が監督官の耳に留まり、彼等の運命は激変した。

本当に何気なく、だった。

収穫物の貧弱さに施肥に関することや、畑の効率の悪さから牛馬を使った開墾について、部下と改善策を話した、というより愚痴を言っただけだった。

監督官は標準的な北の民であり、良くも悪くも北の大地の常識に囚われていた。

ランケオラータを兵舎に連れ去った監督官は、処刑されると諦観した彼に、農業に関する改善策について、根掘り葉掘り聞き始めた。

ランケオラータは、ハイグロフィラ領より独立したアンガルーシー領を経営している。

当然財務だけではなく、農林業や工業の現場に立つことはないにせよ、生産量を上げるための施策を講じたり、指導を行ってきていた。

彼は監督官に北大陸に応用できそうな施策や技術を提案し、彼の領地から義勇兵にきた者を使い、現状で可能な範囲を実践させた。

もしかしたら、彼には北の民への優越感や、憐れみがあったのかも知れないが、監督官にしてみれば、今まで苦労してきたことにいとも簡単に解決策を示す若者の知識や経験は、失いがたいものに思えた。

翌朝、捕虜たちが起こされると同じ時間に、監督官を乗せた早馬が一騎、平野を占める部族の長が住む集落目指し走り去った。

第３９話

リジェストからグラザナイへ向かう馬車の中は、まるで通夜のようだった。
誰もが言葉もなく、押し黙ったまま俯いている。

辛うじて依頼できた早馬で、レヴァイストル伯爵に撤退を伝えたアービィたちは、伯爵からの返信を待たず、リジェストを離れた。
おそらくグラザナイのギルドに、伯爵から指示の手紙が届いているだろう。

宿で盛大に飲んだせいで、未だにぐらぐらする頭を抱え、四人とも半分眠っているようだった。
昨日は、陽の高いうちから呑み始め、アービィが馬車のチケットを買いに行っている僅か数十分の間に、ルティがまず沈没。
次いでティアとメディに、ルティとの進展状況を尋問されたアービィが、黙秘権行使とばかりに一時間と掛からず轟沈。

その後、散々に愚痴りながら、まるで砂漠の遭難者に渡した水を呷るような勢いでグラスを空け続けたティアが、三十分後唐突に爆沈。
最後に、ルティとティアをそれぞれのベッドに押し込んだメディが、アービィを放置したままあえなく自沈。
この間僅か二時間、まだ日没前の惨劇だった。いや、醜態だった。

幸い窒息死する者は出なかったが、眠り込んだ時間も早かったにも拘わらず、それぞれが目覚めたのは支度を済ませるにはあまりにも余裕のない時間ではあった。
それでも酒の臭いを振りまきつつも、馬車に乗り遅れることはな

かった。

馬車の中でアービィは、いつ尋問が再開されるかに脅えている。最初に脱落したうえ、ベッドまでの記憶どころかいつ離脱したかさえ覚えていないルティは、メディの荷物持ちにされた理由をまるで理解していない。

ティアはさすがに気が晴れたのか、それとも二日酔いで口を利く気力もないか、力なくうなだれ馬車の揺れに身を任せている。最後に力仕事を片付けたメディは、なぜ筋肉痛になっているか理解しておらず、少し身体を動かす度に小さく悲鳴を上げる始末だった。

御者は四人の具合に気が気ではない。万が一、いや彼は十中八九覚悟しているが、馬車内で吐かれでもしたら、大変なことになる。

掃除しようにも、洗おうにも水場は近くにないし、あっても凍り付いている可能性が高い。

髪を整えることすらせず、おそらくは昨夜から着替えていないであろう若い四人が停車場に来た時点で、姿形と振り撒かれる酒の残り香から、御者は惨事を確信していた。

まず間違いなく、最低一人は吐く。

それは希望的観測で、全員がそうなるであろうことは、長い経験から彼は悟っている。

それが馬車酔いか、二日酔いか、はたまたまだ酔っぱらっているからかは、彼には無意味なことだった。

彼は、仕事納めが馬車の本来必要ない清掃になる未来を、呪って

いた。

その後、彼の危惧は一部予想通りに当たり、一部は幸いにも外れた。

もっとも、外れてくれても、少しも嬉しくはなかったが。

まず、口火を切ったのはティアだった。

「ごめんなさいっ！！

馬車止めてぇっ！！」

口を抑え、止まり切らない馬車から飛び出す。

道端に四つん這いになったかと思いきや、盛大な勢いで胃の内容物、いや内容液を吐き出した。

暫く待ち、旅程を再開するが、その後は順番を決めたかのように、四人は馬車を止め、外に飛び出していった。

御者は予定通りの行程を諦め、最初の馬車駅から、行程変更の早馬を先の駅に走らせていた。

行きと違い雪に行動を阻まれるため、帰りの行程は十日の予定だったが、十二日目の夕方になって馬車はグラザナイに到着した。

御者に丁重に謝り、礼を言ってから、四人は町の雑踏の中に消えていった。

グラザナイに戻った四人は、宿に荷物を下ろした後にギルドへと向かい、レヴァイストル伯爵から手紙が届いてないか問い合わせた。

職員から数通の手紙を受け取り、ロビーで読み始める。

ルティが届いた順に目を通し、ティア、アービィ、メディの順に回覧されていく。
誰もが無言で読み終え、視線がティアに集中した。

手紙の内容は、四人を労い、次いで見通しの甘い状態でリジェストまで行かせてしまったことへの謝罪が記されていた。
そして、王には報告していないこと、王からは救出の指示がないことへの疑問が続いた。

最後に、雪解けを期し、再度北へ渡ることへの依頼で、一通目の手紙は締め括られていた。
二通目以降は、マ教の神父がウジェチ・スグタ要塞を越えたことや、要塞でのインダミトの立場、冬を控えて要塞の人員を削減することなど、情報が入る度に認められた手紙だ。

最後の手紙は、今からの四人の行動を決する内容となっていた。
他国の密偵等に情報漏れがあってはならない故、至急ボルビデュス領まで来られたし、とだけ記されていた。

既に時間も遅く、翌日の馬車の手配はできないので、宿に戻ることにした。
途中、初めての酒場に入った四人は、心地よい喧噪に身を委ね、ゆったりとエールを楽しんでいた。

グラザナイに戻る途中から、ティアは落ち着きを取り戻していた。
ルティは、後退することでティアの精神が荒廃することを心配していたが、却って冷静に考えることができたせいか、今までのティアに戻っていた。

冬は、既にグラザナイを覆っていた。
アービィたちがリジェストへ発った頃は晩秋へと移行する時期だったが、今は雪が降る日も珍しくない。

冬季になれば北の民の南下も治まるため、ウジェチ・スグタ要塞から一部の将兵が引き揚げてきている。
彼等の口からは、アーガスの独走の挙げ句の顛末や、ランケオラータが虜囚となったこと、北の民が戦上手であることなどが広まっていた。

ラシアスの人々は、北の民の驚異を差別や偏見に置き換え、見下すことで現実から目を逸らすことが常だった。
当然、インダミトの不甲斐なさを罵ることで相対的に自国のプライドを満足させると共に、国内にいる北の民への風当たりも強くなっていた。

わざわざ絡むために娼館へ行き、北の民の女性に侮蔑的な態度を取ったり、屈辱的な奉仕を求める者が続出し、従業員を守るために仲裁に入った経営者との間で諍いが起きる等のトラブルが多発していた。
それ以外にも、所用で北の民の奴隷を連れて外出した者が何者かに襲撃されたり、北の民の酒場女が就業中にも拘わらず店から連れ出され強姦の被害に遭うなど、ラシアス国内に住むことを強制されている北の民の安全は、日に日に悪化している。

さらには、主人と奴隷としては比較的良好な関係を築き上げていた両者の間にまで、その亀裂は及び始めており、以前ではあり得なかった虐待の嵐が吹き荒れることも頻発しているようだ。
北の民への驚異もさることながら、あれほど完璧な防衛戦を行う

には情報は不可欠であり、それは南大陸にいる北の民が流していると信じられてしまったからだった。

もちろん、多少の情報漏れがあったにせよ、アーガスやランケオラータの軍が壊滅したのは、ひとえに将の器に拠るところが大きいのだが、南の住人にはそれは認めがたいことだった。

このような空気の中、メディを連れた一行がトラブルに巻き込まれないはずはない。

四人掛けの円形テーブルにアービィとルティ、メディが隣り合わせ、ティアがアービィの正面に座っていた。

穏やかな気分でエールを飲んでいたアービィとルティ、メディの間に男たちが割り込んできた。

そのアービィを挟むように割り込んだ男たちは、卑近な期待に満ちた笑いを浮かべていた。

アービィには、彼等の考えることが手に取るように解る。

四人が席に着いた当初の心地よい喧噪は、周囲がメディの髪と瞳に気付いた時点で、風が砂の表面の風紋を刻み直すかのように変わっていった。

北の民であることを証明する金髪碧眼の少女が、呪術で肉体的成長が止まっていることはアービィたちしか知らないが、若い男女に連れられ酒場にいる。

ウジェチ・スグタ要塞で長い禁欲生活を送った義勇兵や、北の民への驚異を改めて感じたラシアスの住民には、メディの立ち位置はこの上ない生贄に映ったのだろう。

若い男さえ始末すれば、あとはオマケまで付いて思いのまま。

短いながら武具を持ち歩く生活に慣れた男たちは、腰に佩いた刃の切れ味を己が力と思い違いをしていた。

「兄ちゃん、結構なご身分のようだが、分不相応って分かって欲しいな」
「まあ、俺たちがよ、貰ってやる方が彼女たちも幸せってもんだろ？」
腰の剣をこれ見よがしにガチャガチャさせながら、男たちはアービィの肩に手を置く。

「北の女まで使って、三人でどんなお楽しみしてんだい？」
「俺たちに教えて欲しいんだけどな、お兄ちゃん以外に」

「お姉ちゃんも、こんなガキより俺たちの方がいいぜ？」
アービィに対し、これ見よがしにルティの肩にも手を掛け、剣を鞘から半分まで抜き、顔の傍に刃を近付けた。

娼婦として生きていたメディにとって、こんな男たちにでも、職業としてであれば身体を開くことに嫌悪はなかった。
だが、今眼前にいる男たちには、金銭を介した最低限の契約を交わす意志がない。

娼婦とは、この世界に於いても人類最古の職業であり、決してボランティアで行うものではなかった。
ましてや、男の力ずくで行われてよいことでは、決してない。

メディの目に明らかな侮蔑の色が浮かび、ルティとティアの目が怒りに染まった。
が、次の瞬間、三人の目は、恐怖と脅えと周囲に救いを求める色に染め上げられることになる。

その元凶であるアービィは、笑顔だけは絶やさず、しかし、その

目は怒りと狂気を静かに湛えている。
仲間を侮辱した行為。
仲間を傷つけとする意志。
そして何より。
ルティを汚そうとした。

何かが爆発したような殺気が、アービィを中心に広がり、武芸に心得のある者が、まず恐怖を感じた。
次いで感覚の鋭い者、生来争いを嫌う者と、殺気を感じられる者たちに恐怖が伝染する。

しかし、何よりも残念なことに、アービィに絡んだストラー出身の義勇兵は、その恐怖の意味するところを理解する能力はなかった。
国が持つプライドを自らのものと思いこみ、他者は自らに跪くものと勘違いする傲慢さ。
剣とは、自らの尊厳を守る最後の砦であることを理解できず、他者を自らの傲慢に従わせるための道具としてしか認識していない、罪なる無知。

アービィが席を蹴ったとき、男たちは自らの思い通りにことが運んだと、内心狂喜していた。

メディに向けた侮蔑は、南の常識からまだ理解できる範囲だった。
何よりメディ本人が、事を荒立てたくないという意志を乗せた視線をアービィに送っていた。

だが、ルティに対して剣を、刃を向けた時点で、アービィの自制心は空の彼方へ飛び去っていた。

さすがに獣化だけはしてはいけないと、分かってはいたが。

いきなり両側に座った男たちの顔面を鷲掴みにしたアービィは、そのまま店を出ていった。

慌てたティアが、店主に勘定を頼む。

もちろん、店を荒らした詫び代と、おそらくはまだ勘定を済ませていない、あの哀れな男たちの分を含めてだ。

ルティは、メディを無理矢理引きずって店を出る。

アービィを放っておいたら、あの男たちは、死ぬ。

彼をそんなことのために、お尋ね者にするわけにはいかない。

止められるのは、自分しかいないとルティは自覚している。

また、あの状況でメディを店に置いたままには、できるはずもない。

いや、この状況では悪意に、害意に、殺意に満ちた群衆が、襲って来かねない。

迅速にこの場を離れる必要があった。

そして何より、アービィを止めなければならない。

ルティが店の裏路地でアービィに追い付いたとき、既に事は決していた。

アービィに顔を掴まれた男たちは、痙攣し、正に死線をさまよっている。

アービィの指がこめかみに食い込み、そこからは血が滴り落ちて

いる。

慌てたルティとメディがアービィに体当たりし、男たちから手を放させようとするが、アービィの指はがっちりと食い込んで離れる気配がない。

既に聞こえていないだろうが、男たちの脳には頭蓋が軋む音が響いているはずだ。

身体から力が抜けきった男を、両手にぶら下げたまま冷たい目で見下ろすアービィと、ルティが対峙した。

「アービィ、ダメ。
もうダメ。
それ以上は……」

例えば、お互いに胸倉を掴み合ったまま店を出たなら、よくある町中での喧嘩だったろう。

しかし、アービィの取った行動は、相手の顔面を潰さんばかりに掴み締め、まったく無抵抗になった者を店から引きずり出している。

いくら男たちに非があるとはいえ、このままでは一方的な殺戮になりかねない。

周囲はそう見た。

ここまでなら、身の程知らずの死に損で、官憲がその場に居合わせでもしない限り、アービィを積極的に捕縛することはない。

だが、店にいた客のアービィに対するやっかみと、メディに対する偏見、そしてあまりにも過剰すぎたアービィの殺気が、何人かの客を官憲への通報に走らせていた。

一刻も早くこの場を離れる必要があった。
ルティの言葉に我に帰ったアービィが地面に叩きつけた男たちに、ルティとメディが手早く『治癒』と『回復』の呪文を施し、傷を塞いだ。
そして、官憲が到着する前には、四人はその場を離れていた。

宿の一室で、アービィは考えている。
明日、馬車でここを出るのは危険ではないだろうか。
さっき通報された件で、駅に官憲が張っているかも知れないし、途中検問があるかもしれない。
別に自分たちを守っただけで、相手に怪我を残したわけでもないので罪状はないはずだが、メディにどんな言い掛かりを付けられるか分かったものではない。
できる限り早くボルビデュス領に入りたいところで、余計な厄介ごとにこれ以上巻き込まれている場合ではない。
アービィは意を決し、それぞれの部屋のドアを叩いた。

最初は大変だった。
まず、メディが失神した。
いきなり巨狼が現れるより、目の前で獣化したほうがマシかと思ったのだが、いくら呪術で化け物になっているとはいえ、メディの心は普通の人と変わりはなかった。
人狼への恐怖は、北の大地でもそれを神と崇める一部の部族を除き、南大陸と同じだ。

それがアービィだと判ってはいるが、幼少期より大人たちから言って聞かされ、最早血肉に溶け込んだといってもいい人狼への恐怖は、そう簡単に払拭できるものではなかった。

メディはアービィの獣化を目の当たりにしたとき、ルティとティアを見比べ、笑い出したかと思った途端に、地面に崩れ落ちた。

ようやく慣れたティアが、鼻をピスピス鳴らすアービィを宥め、メディを介抱する。

ルティは苦笑いしながら、四人の荷物をひとまとめにしてアービィの背中に括り付けた。

アービィは、馬車で町を出ることで余計な厄介ごとに巻き込まれる危険性を考慮し、フロロー行きの馬車より早い時間に町を出ることを提案していた。

尚且つ、途中乗車をするにせよ、昨日のうちにグラザナイを出ている馬車に追い付いて、それに乗ろうとアービィが言い出した。

空きがあるか保証がないとルティは反対したが、そのときはそのときと言ってアービィは譲らない。

そこへメディが人間として当然過ぎる疑問を呈する。

「どうやって馬車に追い付くの？

夜を徹して歩いたところで、人間の脚が馬に勝てるはずがないじゃない？」

「うん、厄介ごとを招いたのは僕だから。

ひとつお詫びの印に、ね」

アービィは、空きのある馬車に追い付くまで、三人を乗せて走るつもりだった。

狼の脚であれば、踏破できない山道はない。
さすがに人目に付くと騒ぎを引き起こしかねないので獣道を行くことになるが、それでも馬車を曳く馬の巡航速度よりは早いだろう。
それが彼の判断だった。

雪がちらつく中、巨狼は三人を乗せ、山道を走りだした。
必死にしがみつくメディの目が、どこか虚ろだったことは気のせいではなかっただろう。

インダミト王国からベルテロイに駐在している第二皇太子パシュース＝バイアブランカと、同様にラシアス王国から駐在する第三王子ヘテランテラ＝グランデュローサは、困惑していた。
ビースマックのフィランサスと、ストラーのアルテルナンテから知らされた、焦臭い話。

当然、その日の酒席が終わるや否や、各自は本国に報せの馬を走らせている。
だが、インダミトはともかく、他の本国の動きは、鈍い。
パシュースは、ヘテランテラと二人で酒を酌み交わしながら、焦燥感に包まれていた。

「ヘッテ、大陸は割れると思うか？」
幾杯目かの杯を干し、パシュースは問う。

「パシュー、俺に言わせる気か？」
ヘテランテラは、質問に質問で返す。

「このままでは、間違いなく割れる。
望むのは誰だ？

お前の姉御か？」
パシュースは、ヘテランテラにとって、最も耳の痛いことを平然と言い放つ。

「いや、あの馬鹿女は、まだ勇者などという夢を見ている。大陸を割るのではなく、併呑するつもりだ」
あっさりと否定し、身内を貶めるヘテランテラ。

「では、どこだ？
影で糸を引くのは？」
敢えて問うパシュース。

幾度二人で飲んでいるだろう。
当事者を入れるわけにはいかなかった。

既に二人は、後処理を睨んだ話をしている。
望むと望まざるとに拘わらず、多大な労力を求められる、二国間の後始末。
貿易が沈滞すれば、事は二国間のことでは済まない。

だからこそ、フィランサスもアルテルナンテも、この二人にリークしていた。
その意味するところは、事後の援助。
であれば、四人で話せばいいことだが、そのためには迷惑を掛けられる当事者同士の同意か、共通の見解が必要だった。

生まれて以来国に篭もり、公式の表敬訪問以外に他国の人間との関わり合いを持たないほとんどの王族と異なり、ベルテロイ駐在の彼らは豊かな国際感覚を身に付けている。
彼等が将来国政に関与することがあれば、ここで培った感覚や人

脈が役立つはずだが、それができているのはインダミト一国だけだった。

ラシアスにしろストラーにしろ、ビースマックにしろ、せっかくの国際感覚を身に付けた人材を、政に活かしているとはいえない。ほとんどがマ教や他国と戦乱の意志を持たないという証明というか、人質のようなものと、駐在する当人以外は考えていたからだ。

特にストラーでは、他国から余計な入れ知恵をされてきた者といった扱いで、王の代替わりの後は自国に召還された後養子に出されるか、領地を持たない新興公爵に叙爵され、王宮で発言権のほとんどない政務審議官として一生を送るのが常だった。

アルテルナンテのように王女であれば、叙爵されることもなく、政略結婚の駒とされるのが、王族に生まれた女の運命だった。

「余程上手く片付けないと、お前の姉御が動きかねん」

パシュースは、イレギュラーを恐れている。

既にクーデターの企みは、当事者以外の二カ国にリークされた時点で、失敗に終わることは決まっている。

ただ、それがどのような形を狙ったクーデターなのかが判らなければ、どう潰すかの対処を決められない。

ビースマックを占領するつもりなのか、属国化するつもりなのか。

属国化といっても、王家を追放して新王朝を立てるのか、現在の王家を膝下に納めるのか、それとも貴族の切り崩しにより政治を壟断し、実質的な支配をもくろむのか。

パシュースは、貴族の切り崩しだろうと睨んでいる。

新王朝も、現王家に城下の盟を強要するのも、他の二国が承認し

ない。

現王家も領土拡張の意志はないが、国や王権を侵されるのであれば、死に物狂いの抵抗を行うだろう。

そもそもストラーの現王自体に覇権欲がないので、目に見える侵略行為を行う可能性はないと言い切って良い。

つまり、動いているのは、ストラーのプライドが肥大化しすぎた貴族ども、王家傍流の公爵家を中心とした一派だ。

その連中が、ビースマックの現王朝に不満を抱く貴族連を、焚きつけているのだろう。

おそらく、宰相を始めとする主要閣僚を君側の佞臣とでも騒ぎ立て、ガーゴイル等を組み入れた軍を挙げて一気に政治を乗っ取るつもりなのだと、パシュースもヘテランテラも読んでいる。

これであれば、潰すのは最も容易だ。

それぞれの王にリークするだけで、当事者の首が飛び、一族郎党皆殺しにして禍根を断つだけで済む。

が、その後に問題がある。

他国から嫁いだ正妻または側室を持つ家が幾つかあり、その女もクーデターに噛んでいるならともかく、全く蚊帳の外だった場合だ。

間違いなく禍根を残す。

当主に殉じさせて無罪の者まで殺せば、親元の国から何らかの報復があるだろう。

かといって無罪放免にもできず、証拠不充分という名目でクーデターに噛んだ者を野に放つことは、さらに危険だ。

国内の者同士であれば、疑わしきは罰するが押し通せるが、国同

士となるとそうもいかないだろう。

そして政の重要な位置を占めていた貴族たちがいなくなれば、当然国は混乱する。

そうなったとき、大陸の覇権に目が眩んだニムファが、何をするか分かったものではない。

「俺は、ベルテロイへ来て目が覚めた。

以前は姉貴と一緒に、大陸の制覇を夢見たさ。

だが、一国が武力で制覇するには、この大陸は広すぎ、一国の武力だけで支配をするには人が足りなすぎる。

あの馬鹿女にはそれが解っていないんだ」

ヘテランテラは吐き捨てるように答えた。

武力で制圧した地域や国が、征服者に対して心酔し臣下の誓いを交わすなど、まず期待できない。

面従背復が関の山だ。

当然反乱の危険がある地域の統治に、軍は欠かせない。

南大陸の四ヶ国の人口は、それほど大きな差はないと考えられるが、一国が全てを武力で従わせるには、統治に当てる軍の規模が追いつかない。

現在どの国も、常備軍があるとはいえ、それは国家間戦争を意識しての軍備ではない。

治安維持を主目的とした軍であり、国境警備隊も他国の領土侵犯に備えるというよりも、越境する犯罪者を対面する国の国境警備隊と協力して未然に防ぎ、または捕らえるための、どちらかというと警察組織のようなものだ。

その程度の規模装備で大陸全土を支配するなど、誰が見ても絵空事だと解る。
自国の産業全てを犠牲にしたうえ、国民の青壮年男子全てを軍に入れても、治安維持すら不可能だ。

ニムファには、それが理解できていない。
勇者を欲するのも、その威光に縋るためだ。

勇者の庇護者という名に、大陸全土がひれ伏すと考えている節がある。
ヘテランテラには、最早それは滑稽にしか見えていない。

「そういえば、その勇者殿に逃げられたそうじゃないか？
子爵ごときで釣ろうとしたそうだが、随分とお安い勇者様だな。
お前の姉御がよく諦めたもんだ」
パシュースがヘテランテラに、さり気なく探りを入れる。

「見事に啖呵を切られて逃げられた。
世界征服の手伝いは嫌だとさ。
馬鹿女が理解できるとは思えないがね」
まだ追っかけてる見たいたぜ、最後は自分の身体でも差し出す気だろう、とヘテランテラが吐き捨てる。

「おいおい、王族ともあろう者が下品な物言いだな」
ドアが開き、フィランサスが入ってくる。

椅子を逆向きに回し、背もたれに顎を乗せるように跨る。
人懐っこい笑顔を湛えたまま、無言で杯に手を伸ばす。

「人の杯に手を伸ばすのは、王族らしい振る舞いかしら？

そのうえ、その態度。
人の発言を下品だなんて、まず我が身を省みられてはいかがかしら」
続いてアルテルナンテが入ってきた。
こちらは、執務時間に見せる背筋の伸びた軍人然とした立ち居振る舞いを感じさせない、優雅と言うしかない動作で、椅子に腰掛けた。

「まあまあ、ご両所、まずは駆けつけということで」
パシュースが新しい杯を二人に渡し、強い蒸留酒を注いだ。

乾杯の声とともに、杯を干す。
アルテルナンテの顔が歪むが、三人は気にも留めずに新しい酒を注いだ。

「アルテの親父殿が勇者の噂を聞きつけたら、どうするもんかね？」
パシュースが話を向ける。

「そうねぇ、どう考えても頭を下げて、臣下になってくれとは言わないでしょうね。
男爵あたりで釣ろうとするんじゃない？
ストラーの男爵は他国の公爵以上だ、とか何とか言って」
心底うんざりという顔で、アルテルナンテが吐き捨てる。

どうしても他国の人間と話していると、自国の情けなさを見せ付けられるような気がして、誰もが自国の話をする際には吐き捨てるような物言いになっていた。
気を付けている筈なのだが、長い時間を共にしている甘えからか、口の聞き方に素の感情が出てしまうことが多くなっている。

当然、外交に関することになれば、それなりに本心を隠して話すのではあるが、だいたいこの時間が来るとどちらからともなく本心を明かしてしまっていた。
もちろん、本国もそのようなことは先刻承知で、建前で済むような懸案しか彼らに任せてはいない。

「俺の親父は、きっと、勇者殿に見合う剣を作ることができるのは、我が国だけとか言うんじゃね？」
フィランサスの冗談に全員が笑みを浮かべた。

「うちの親父殿も興味を持ち始めたみたいたぜ。
ただ、臣下に取り込む気はないようだ。
冒険者をやってるらしいからな」
パシュースは、他国を牽制するように言葉を選ぶ。

「今回のことに、彼らを投入するらしい。
レヴァイストルの長女がビースマックに嫁いでるだろ？
彼らに連れ出させるみたいだぜ」
フィランサスを見ながら、にやりと笑う。

「ああ、それは助かるな。
あの家が潰されると国が立ちいかん。
現当主には宰相も頭が上がらんし、跡取りはもっと切れる。
ただ、次男がな、今回のことに噛んでいるらしい。
あの家が欲しいみたいたぜ、分不相応ってものだがな」
フィランサスが答える。

「できれば、次男以外全部をインダミトに連れ出してくれんかね？
あと、目星はつけておくから、今回のことに噛んでいない女子供も」

まるで子供の使いを頼むかのように、フィランサスはパシュースに頼んだ。

「そんなことしたら、うちの狸の思う壺だぞ？
ビースマックがうちに牛耳られていいのか、フィー？」
パシュースが驚いたように聞き返す。

「構うもんか。
国が潰されるよりは余程いい。
それに、アーガスの馬鹿踊りの貸しは、まだ取り立ててないんだぜ？」
アルテルナンテを見ながら、フィランサスは嘆息混じりに答えた。

「申し訳ないわね、パシュー。
うちからもお願いするわ。
多分、うちは国内の後始末で手一杯よ。
とてもビースマックの後始末まで手伝うなんて無理。
本来なら、全てうちがするべきなんだけど……」
アルテルナンテも同様に答える。

「ただ、二人とも、いいか、あと一年は誤魔化してくれ。
アーガスがやらかした馬鹿踊りの後始末と、ランケオラータを何とかしなきゃいかん。
ランケオラータが上手く立ち回れば、北の脅威はぐっと減る。
そこでも狸は勇者殿を使うつもりらしい」
既にスキルウェテリー配下の悪魔祓いが、レヴァイストルに恩を売るため北の大陸に潜入している。
それを追うように、インダミトの密偵もカーナミン卿の協力で神父に化けさせ、ウジェチ・スグタ要塞を通っている頃だ。

ランケオラータは、レヴァイストルの要請に応えた勇者に、救出されなければならない。
王はそれに対し褒賞を与え、臣下として束縛することなく彼らを優遇し、次の依頼も長女を盾にレヴァイストルにさせるつもりだった。

他国がアービィたちに関与しようとすれば、密偵を使ってこれを阻止し、インダミトは決して表に出ずに勇者を使役する。
このためには、レヴァイストルにも気取られずにいなければならない。

ランケオラータ救出と、レヴァイストルの長女ハーミストリアの救出は、勇者をインダミトに繋ぎ止めるためのちょうど良い理由になる。
だが、さすがに同時進行は厳しいものがある。
パシュースは、確実に一つずつ片付けるべきだと考えていた。

「じゃあ、うちは馬鹿女を止める策を考えなきゃな」
ヘテランテラが、さも余計なことをという風に呟く。

「そうしてくれ。
その保証があれば、派手にやらせて国の大掃除にする。
誰もが納得する名目がなきゃ、そうそう家は取り潰せないからな。
だろ、アルテ？」
フィランサスの問い掛けに無言で首肯してみせるアルテルナンテ。

南大陸を四ヶ国が分割統治するシステムは、この４５０年それなりに機能してきた。
しかし、もう古い統治システムだといっていい。

人の移動や貿易が、一国の中だけで済んでいた時代なら、それでよかったかもしれない。

しかし、全大陸規模での人やモノの移動が始まった現代では、統一した統治機構が必要となってきている。

もちろん武力や経済力を背景とした一国支配では、早晩ほころびが出るだろう。

四ヶ国の共同統治が望ましい。

例えば、今現在行われているような、武官が顔を突き合わせ、それぞれの問題点を忌憚なく話し合えるような。

パシュースは、この駐在武官制度を新しい統治システムの叩き台にしようと考えた、父王の意向の元に動いていた。

大陸は、新たな時代のために痛みを伴う激動期を迎えようとしている。

そして、当人たちの知らないところで、アービィたちは国家間の思惑に巻き込まれていた。

第４０話

「アービィ～、お願いがあるんだけど～」
不必要に甘ったるい声で、半分酔っ払ったメディが呼びかける。

「何？」
こんな声で呼びかけられたのは、初めてだ。
アービィは不思議そうな顔をしている。

「あれ、もう一回やって～。
お・ね・が・い」

「ダメよ、メディ。
誰かに見られたら、どうするつもり？」
ルティが窘める。

「大丈夫よ～。
宿のロビーでやるわけじゃないし～。
いいじゃない、可愛いんだし～。
この部屋の中だけ、ね？」
食い下がるメディ。

「しょうがないなぁ……
あんまり嬉しくないんだけど。
可愛いって言われてもなぁ……」
ぶつぶつ言いながら、アービィは半獣化する。

ティアと水の神殿に初めて行こうとした際、酔っ払ったまま朝起きたときに気付かずやっていた、犬耳と尻尾のみの状態だ。

メディにしてみれば「可愛い」は正義であり最大級の賛辞なのだが、男としてそれはどうよ、と思わざるを得ないアービィだった。

獣化後、耳の後ろを弄くられ尻尾が左右に揺れると、メディの興奮が頂点に達した。

「すご～い！！

ちゃんと連動してる～！！」

アービィとしては無意識の動作なのだが、なにやら感動されていた。

さすがに女性陣の真ん中で下着まで下ろすわけにはいかず、尻尾は背中に背負うような状態だ。

ティアはその尻尾を握り締め、優美な毛皮の肌触りを楽しんでいる。

ルティに救いを求める視線を送るが、返ってきたものは怒りを湛えつつ頬をひきつらせ、三人を睨みつける視線だった。だから言ったじゃない。

獣化して、三人を乗せて山道を踏破し、馬車を追い越すというアービィの計画は、あえなく頓挫した。

鐙もない状態で、乗馬の経験がない三人が長時間高速で駆ける狼に、乗り続けることは不可能だった。

結局馬車よりはマシといった程度の速度、つまり早足で歩き、暫時休憩を挿みつつ野営で時間も稼いで、漸く先行する二台目を追い抜くことができた。

その間、人狼の気配で魔獣を近寄らせないため、アービィは獣化したままでいたのだが、久々の長時間獣化は彼の無意識に抑えつけられていた本能を解放し、リフレッシュさせる効果があったようだ。

やけに活き活きとした表情のアービィと、慣れない乗狼に疲れた果てた表情の三人との間に話し合いが持たれ、追い抜いた馬車を駅で待ち、翌朝から乗車することになった。
幸いにもチケットが取れたことで、そのまま宿に泊まったとき改めて獣化して見せたところ、メディがいたくお気に召してしまったということだった。

「もう、いっそ、完全獣化しちゃいなさいよ」
ルティが唆す。

「なんで～？」
半分諦め気味のアービィが、やる気なさそうに返事した。

「獣化コントロールの訓練よ」
冗談じゃない、あたしが触れる余地がないなんて言えるわけないでしょ。

「う～ん、理論が破綻しちゃってる気がするけど～？」
ま、いいか、と呟き、三人に部屋から出るように頼む。

「え～、別にいいわよ、前もそうだったじゃない」
メディが反論する。

確かにメディの眼前で獣化した。
もちろん、衣服は引きちぎれている。

今回もそれではあまりにも勿体無いので、一回全部脱ぐつもりでいた。

「だって、服脱ぐし」

「いいじゃない、気にしないわよ」

「見慣れてるし、ねぇ、ティア」

娼婦だったメディも、男の『精』を糧としていたティアも、男の裸に抵抗など微塵もない。

「あたしが気にするのっ！！」

ルティがメディとティアの首根っこを引っ掴み、部屋から引きずり出て行く。

独り取り残されたアービィは、服を脱いで丁寧に畳むと全身獣化させた。

――いいよ～。

念話での許可を伝えると、三人が入ってくる。

ルティは、入るなりアービィに仰向けになることを命じると、その腹に顔を埋めた。

メディはワインの瓶を数本抜き始めた。

ティアは、おそらくは食堂から借りてきたと思われる、直径が３０ｃｍはあろうかという大きなボウルを抱えている。

ティアがボウルを床に置き、メディがワインをそれに注いでいる。

――なにしてんの？

アービィの念話にティアが答えた。

「その口じゃグラスから飲むの無理でしょ？

手も使えないしねぇ」

――なんか、すごくおちょくられてるような気がするんだけど？
獣化を解けば普通に飲めるのだ。なのに、なんで？

「今夜は、このままでいなさいよ～。
毛皮に埋もれて寝る～」

――もう好きにして……
ルティに言われて完全に諦めたアービィは、どうとでもなれと、
ワインを舌で掬い始めた。

「じゃ、あたしも～」
ティアが荷物の中から、ラミアのティアラを引っ張り出してきた。
服を脱いでティアラを髪に飾り、獣化する。

――ちょっ、ティア、なんて格好でっ！！
狼が顔を背けた。

「いいじゃない、普通の格好よ……
……って、寒っ！！」

慌てて上半身に服を着るティア。
窓の外は雪がちらついている。
いくら暖炉がある室内とはいえ、ラミアの身体には予想以上に寒
さが凍みたようだ。

「蛇の部分は寒いわね～」
そう言いながら、狼の尻尾と自らの尻尾を絡ませてきた。
明らかに酔っぱらっており、ルティをからかっている。

「寒いんなら、元に戻ればいいじゃないのよっ」

ルティは尻尾を解き始めた。

「元にって、これが元よ～」

ティアは負けずに尻尾を絡ませている。

メディはこの光景を不思議な気持ちで眺めている。

この少女は魔獣に対してまるで偏見を持っていない。

人狼だけでなく、ラミアとも当たり前のように接している。

自分にだって、そうだ。

呪術によって姿を変えられているので、メディは自分を人間と自覚している。

生まれながらにこの姿ではないため、魔獣とは定義し難いので、自虐を含め化け物と自称していた。

しかし、端から見れば魔獣も化け物も大差ないだろう。

この少女は、意志の疎通ができ、心が通じるものがあれば、人と魔獣が共存できることを証明している。

意志や理性を持たない魔獣との共存は簡単とはいえないが、野生動物と同じように折り合いは付けられるはずだ。

食欲の対象としてや悪意を持って近付いてくる魔獣には、それなりに対処する必要はあるが、本来この二種はそういった性質の魔獣であるはずだった。

アービィやティアだけを見て、人狼もラミアも安全な魔獣だと判断できるわけではないが、全てが危険と言い切って良いというわけでもない。

人間であれば全て安全かと言えば、当然違うだろう。

悪意や害意、殺意を持って近付く者は少なくない。

極一部の異常者を除き、食欲の対象ではないというだけで、これで魔獣とどう違うのか。

他を陥れ、他人が苦しむ様を見て喜ぶような人間など、魔獣にすら劣るのではないか。

結局は育った環境や、それぞれが持つ個性が重要であり、人種や種族が性質を決する最終要素ではないという事だ。

楽しげにじゃれ合う三つの種族を見ながら、メディはそう考えていた。

――この飲み方って、すごく回るって言うか、効くね～。

既に念話すら危なくなったアービィは、ボウルのワインを舐め尽くしていた。

間違いなく、この飲み方というよりは、飲んだ量だろう。

６リットルは入るであろうボウルに、なみなみと二杯飲んでいる。

人間の身体であれば、とてもこの量を飲むことはできないが、なにせ３ｍ近い巨狼である。

どういう仕組みなのかはアービィにも理解できていないが、狼の状態だと酒にしろ食物にしろキャパシティが増大する。

床に横になったアービィの背中に、尻尾を死守したティアが重なっている。

いつの間にか、ルティはアービィの首の毛に埋もれるように、背中を預けて寝息を立てていた。

動くに動けないアービィとティアに毛布を掛け、ルティに別の毛布を被せる。
私もいいよね、と呟いてから、アービィの前肢と胸に背をもたれかけ、毛布を被った。

その後の行程では、寝惚けたアービィやティアが獣化したまま外に出るような騒動もなく、馬車は無事夕刻にフロローへと到着した。
ギルドにはレヴァイストル伯爵から手紙が届いており、ベルテロイの宿にクリプトとレイが待っていることが記されていた。

今からフロローを発っても、ベルテロイに到着するのは深夜を過ぎる。
一泊してから、昼前にベルテロイに着くように朝早くフロローを発つことにした。

翌日の昼前、ベルテロイに到着した四人は、伯爵からの手紙に書かれていた高級な宿の前に立っていた。
カウンターで来意を告げ、クリプトとレイの部屋を訊ねて、在室を確認してもらう。

その間はロビーで待たせてもらうのだが、どうも場違いな気がして居心地が良くない。
とはいっても、貴族の賓客であることが伝えられているからか、従業員の対応は至極丁寧なもので、それ自体に不快感を誘うものは一切なかった。

北の民であるメディに対しても、慣れない場所に戸惑う姿に微笑ましいという視線を送るだけで、決して馬鹿にしたような素振りを

見せることなく、完璧な作法で対応していた。
さらに、このような場所を利用する客たちも、あからさまな差別の視線を送るような無作法者はおらず、それが却ってメディに気を使わせることになっていた。
もっとも、この場違いな冒険者たちを邪険に扱って、インドミタ王国伯爵の不興を買うような馬鹿な真似をしたくないという意識が強かったことは、誰も否定しないだろう。

やがて、慇懃にならない程度に丁寧な物腰の初老の従業員が四人の下に来て、クリプトもレイも不在であることと、待合のための部屋を用意したことを告げにきた。
恐縮する四人を半ば無理矢理待合室に放り込み、決して優雅さをなくさないが、客が苛立たしさも感じない程度に手早く茶菓の支度を整えた。

それではこれにて、ごゆるりとお寛ぎください。
もし、ご希望がございましたら、そちらのベルをお使いいただければ、わたくしか担当の者が参ります。
そう告げて従業員は、部屋を出る。

次の瞬間、滝壺に巻き込まれた溺者が水面に顔を出した瞬間のような、大きな溜息が部屋を支配した。
ある者はソファに腰を落し、ある者は足首まで沈むのではないかと思うほどの絨毯にへたり込む。

伯爵の旅に同行した経験のある三人ですら、ここまでの格式の宿は初めてだ。
やはり、自分たちには酒場が併設されているような安宿が性に合う、と改めて感じていた。

到着する日が確定していなかったため、今日待ち合わせをしていたわけではないので、レイたちが戻ってくる時間も分らない。
まさか、この状態で酒盛りを始めるわけにもいかず、無聊を囲っているとドアを叩く者がいる。

ルティが返事をすると、先程の初老の従業員がドアを開け、レイの帰着を告げた。
待ちきれないという表情で、後ろからレイが顔を覗かせる。

ここではしゃぐわけには行かないのだろう、あくまで淑やかに挨拶をするとソファに腰を下ろした。
ひと月ほど前は家族の不幸や、婚約者が北の民に捕らえられるなどの衝撃のせいか、顔に生気が全く感じられなかったが、さすがに立ち直りをみせている。

アービィたちがボルビデュスに滞在してから約半年の時が過ぎ、その間にラガロシフォンを任されるようになっている。
領地経営の全てを任されているわけではないにしろ、かなりの責任を負っているようだ。

以前はあどけなさや可愛らしさが目立つ顔立ちだったが、今では引き締まった責任感に溢れた表情に変わっている。
もちろん、顔の造りまでが変わるわけはないのだが、漂わせる雰囲気が一気に大人びていた。
責任や立場が人を作るというが、ここまでとはアービィたちも思っていなかった。

「久し振りね、お元気でした?
今回のことは、本当にごめんなさい。

馬鹿兄貴の後始末なんか押し付けちゃったうえ、リジェストまで無駄足踏ませちゃって」

レイから話し始め、それにルティが応える。

「いいのよ、レイ。

あたしたちも見通しが甘かったわ。

お役に立てなくて、こちらこそごめんなさい」

クリプトとレイとだけであれば、砕けた話し方を求められているので、作法に気を使わない話し方になる。

「あれから、私はラガロシフォンに戻っていたんだけど、いろいろ調べてみたけど、なんか裏がありそうなの」

「どういうこと？」

ティアが聞く。

「なんかね、インダミトはランケオラータ様の救出に、それほど積極的じゃないのよ。

しばらく放置しておけって感じなの。

うちの馬鹿兄貴がやらかしたことが大きすぎて影に隠れてはいるんだけど、ランケオラータ様も戦が下手というか、できない方だから、かなりの被害を出しちゃったのよね。

で、罰としてじゃないんだろうけど、春までは動くなって。

バイアブランカ王と宰相のウルバケウス様からは、心配要らないってお手紙を頂いちゃったんだけどね……」

レイは納得できないという表情だ。

財務卿の子息が、北の民に捕らえられたままでいいはずがない。

それを気候の問題があるにせよ、放置しておけとは国の何らかの意志が働いているようだ。

救出の方法なら、いくらでもあるはずだ。
ウジェチ・スグタ要塞も、神父の通過は認めている。

マ教のカーナミン枢機卿を支援しているのは公然の秘密なのだから、それに働きかけアービィたちを神父に化けさせるくらいのことは容易いだろう。
伯爵クラスでは枢機卿にそこまでの依頼はできないが、王からの依頼となれば嫌とはいえまい。

伯爵は王の信頼が厚い。
捕らえられているのは財務卿子息だ。

なのに、なぜ、王は動いていないのか。
伯爵も王に依頼はしているはずだが、それに対して何の動きも見せていない。
ハイグロフィラ財務卿も動いた形跡がない。

外務卿は、ラシアスとの間で、アーガスの後始末に忙しい。
もちろん、北の民に対しての外交チャンネルなどないのだから、公式に外務卿が動ける場面はないのであろう。

軍務卿は、諸侯軍に対する補償や、新たな義勇軍の編成で忙しい。
内務卿も、国内の引き締めで手一杯のようだ。

義勇軍で戦死者の遺族や、捕虜になった者の家族への補償、負傷し護送されてきた者の治療や生活の保障等、それこそやることは馬に食わせるほどある。
アーガスの独走が招いた結果である以上、ボルビデュス領を干乾しにしてでもボルビデュス家が補償するべきなのであろうが、重要な地域を統べる名門を潰すわけにはいかないという国家の意思がそ

うさせていた。

幸いにというべきか、己が栄達のみに目が向いていたアーガスの先走りにより、ボルビデュス家から離縁が認められていたため、国の責任のみで被害者への補償が行われることに反対する者は表立ってはいなかった。

財務卿としては、いくらかでもボルビデュス家から引き出したいという思惑はあっただろうが、息子が娶る家を潰すような真似はしたくないという複雑な立場でもあった。

もちろん、バードンがスキルウェテリー枢機卿の命でランケオラータ救出に動いていることや、インダミトの密偵がそれを牽制し、ランケオラータと北の民の間にコネクションを作らせようとしていること、いざという場合には協力してランケオラータを脱出させるために動いていることは、ボルビデュス家には知らされていない。

さすがに財務卿には知らされているが、彼がそれを公式の場に限らずどこであろうと発言することはない。

「食事の席では難しいことといいっこなしで、楽しんでね。こんなことだけで済むと思わないけど、ひと月分のお詫びはさせてもらうわ」

そう言って、レイは一度席を立つ。

部屋は用意してあるから案内させるわね、と言って部屋を出て行った。

クリプトは、所要で今夜は戻らないらしい。

明日、出立に合わせ馬車で宿に戻ってくるように、出先に知らせを走らせてあるそうだ。

それぞれは部屋に案内されたが、あまりにも豪奢な造りで落ち着かない。
いつの間にかアービィの部屋に全員が集まり、所在無げにお茶を啜っていた。

「ねぇ、宿って換えてもらえないかな？」
メディがボソッと言った。

「僕も、なんかこう、お尻がこそばゆいと言うか……ねぇ？」
アービィが同意する。

「これじゃあ、気軽にお酒も飲めないもんねぇ」
ずれた同意をするルティ。

「我儘言わないの。
たまにはいいんじゃない？
勉強よ、勉強。
どこに出しても恥ずかしくないっていう言葉があるでしょ。
いまのままじゃ、どこに出しても恥ずかしい、よ。
伯爵の顔に泥塗るような真似はしないでね」
ティアは、我儘を言ってレイに迷惑を掛けたくない一心で宥めに回る。

暫くして食事に呼ばれ、食堂に下りる。
食事中は、ランケオラータの件にはなるべく触れず、ラガロシフォン領の経営の話になった。

アービィが作り方を教えてきたアイスクリームについては、まだ砂糖やバニラビーンズの単価を下げることができず高価な嗜好品の

ままだが、それでもいくつかの店が立ち始めたらしい。
最初はボルビデュス家が１００％出資の店を出し、そこで職人の教育を行って、それぞれが独立する方法を取ったそうだ。

その後、独立した職人が弟子を取り、ラガロシフォン領内だけでなくボルビデュス領内にも出店し、当初の取り決め通り、ラガロシフォン領内だけがバニラを使用し、ボルビデュス領では果実を使うことになっている。
もちろんラガロシフォン領内でも果実は使われており、少しずつではあるが国内に知られるようになってきた。

アービィは、夢の中の記憶を手繰って、特許や登録商標について、簡単に説明しておく。
アイスクリーム自体の製法は簡単なので、放っておけば各地に模倣商品が溢れかえり、ラガロシフォンの優位性は瞬時になくなってしまうからだ。

王に上奏し、王の許可証がなければ作れない、名乗れない程度の規制とラガロシフォンへのパテント料、そして簡単な罰則だけでも充分なので、早めに手を打っておく必要があった。
もちろん、アイスクリームを独占するだけが目的なのではなく、他の地域の商人や職人がそれぞれの地域の特色ある産業を守れるようにとの算段もあった。

他にも宿や食堂が中華もどきの料理を領民の口に合うように改良したり、客層に合わせて単価を調整できるように材料を工夫したりと、いい方向に動いているようだ。
領主が変わるだけで、領内の雰囲気がここまで変わるのかと驚く人が多いが、アーガスがあまりにもいい加減な領地経営をし過ぎたためのことだろう。

当面レイがラガロシフォンを預かっているが、ランケオラータが無事帰還できたら数年後には嫁入りであり、その後はセラスが任されることになっている。

当のセラスは、まだことの重大性を理解していないが、領地経営の勉強は早く始めておいて損はない。

来年あたりに伯爵が懇意にしている貴族領に、短期の留学のような形で何ヶ所か回ることになっているが、当人は親元を離れ遊びに行けるものだと思い込んでいるらしい。

ティアの説教が効いたのか、以前ほどの我儘は振りまいていないので、行った先で多大な迷惑を掛けることもないと判断されたのだろう。

「どこでそういう勉強したの、アービィは？」

不思議そうにレイが聞いた。

この時代には経営学や経済学の学校どころか、小中学校といった義務教育すらない。

精々、家庭教師を雇う程度だが、それとて教員資格のようなものがあるわけではない。

当然、一介の冒険者であるアービィが、そのような教育を受けてきたとは考えられず、レイの疑問は当然であった。

かといって、夢で見ましたとも現代日本から来ましたとも言えず、各地を旅するうちに知ったことや考えたことです、と誤魔化すしかなかった。

「それにしても、あなたたちって、すごい人たちなのかもしれないわね。

税のことだってそうだし、料理も。
それに今回の、なんだっけ、特許？　登録商標？
誰も考え付かないわよ。
模倣品にやられちゃうだけじゃなく、粗悪品に騙された人が増えたら信頼まで失っちゃうもんね。
それから似たような名前も登録しておかないと、名前の使用権を高く売りつけられそう」
頭の回転が速い人であれば、そこまではすぐ気付く。
レイに知識を伝え、以後国政に関る目端の聞く大人が改良を加えていけば、それなりに整った法制が敷けるのではないかとアービィは考えている。

この時代、特許や登録商標の考え方があるわけがなく、職人入魂の作であっても瞬く間に模倣粗悪品が溢れかえっていた。
改良を加え、単価を下げることは悪いことではないが、商品の評判だけを使った偽物が横行し、本家が潰されてしまった例は枚挙に暇がない。

「将来の財務卿正室としては、まだまだ勉強不足ね。
ねぇ、北の民ってどれくらい、人の数がいるんだろうね？」
レイはメディに問いかける。

「どうでしょうか……
南大陸よりは少ないとは思うんですが、半分って程ではないとは思います」
まだそれほど慣れ親しんでいないメディは、口の聞き方が庶民が貴族に対するものになっている。

「メディ、さんでしたっけ？
もっと砕けちゃっていいのよ。

さすがにお父様の前では私も気を使うけど、私とだったら気遣いは無用にして欲しいの。
教えてもらう立場だしね」
以前ルティたちに言ったことと同じようにメディに促す。

「じゃあ、できるだけ。
それなりに数はいるけど、増えられないのよ。
まず、食料が足りない。
食料を増やそうにも、農業の技術が遅れてる。
道具も部族間の戦ばかりで、武器に材料が使い尽くされちゃう、っていろいろね」
メディは開き直ることにした。

メディは未だに焼畑をやっている北の農法は、南に比べ格段に遅れていると思っている。
これを指導改善できる人材を北の大地に呼び込むことができれば、飛躍的に農業は発達できるだろうと、レイと話すうちに考えていた。

「ってことは、モノを買ってくれる人が、まだたくさんいるってことね？
これを取り込めたら、インダミトの経済って、すごいことにならないかな。
どうやってラシアスを抜くかが問題ね。
う〜ん、一国で考えるんじゃなくて、大陸同士で考えたほうがいいか」
随分と規模の大きなことを、レイは考えている。

「そうね、南に下りてくるのが私たち北の民の悲願だけど、それは暖かい土地に行きたいって希望だけじゃないしね。
北の大地が便利になって住みやすくなれば、態々そこから動きた

くないって考えちゃうかもね。
理想的過ぎだけど」
メディは、産業を興せない北の民の体質を思っている。
今この瞬間を生きることに必死であり、先々への投資という発想がない。

娼婦として南大陸の住人と接しているうちに、メディはそれを思い知らされていた。
もし、今、南大陸が北の民を受け入れたとしても、商売の常識や、損して得を取るという商売の駆け引きなどができる者が少ない以上、ただの厄介者で終わってしまうだろう。

それであれば、南大陸から商人や職人を呼び込み、北の大陸に南に負けないような産業を根付かせ、互いに交易することで共存する方法を考えたほうが前向きだ。
南大陸と対等の関係を築けるようになってから、人の行き来があっても良い。

もちろん北の民の文化を、南大陸の文化で塗り潰してしまおうということではない。
互いに尊重しあい、良き隣人として共に文化を発展させることができないとは言い切れない。

今すぐには無理だとしても、何世代も後の時代、あの三つの種族がじゃれ合っていたように、南大陸と北の民が共に手を取ることができる時代が来るかもしれない。
メディはそんな夢を見始めていた。この聡明な貴族の娘であれば、それが可能な気がしてきた。

ティアは自分の寿命が尽きる前に、それを見てみたいと思ってい

た。

第４１話

「今回は、大変申し訳なかった」
アービィたちの前で、レヴァイストル伯爵が頭を下げる。
実際お互い様なのでアービィたちに含むところはないのだが、いざ目の前で頭を下げられてしまうと却って申し訳ない気分に囚われてしまう。

ことさらティアは自分の進言でこの事態を招いてしまったと考えているだけに、まだ罵られた方が気分的に楽とも思えてしまう。
どうやら伯爵もそこに気を使ったようで、謝罪は敢えてあっさりと済ませていた。

「こちらこそ、いえ、あたしがあんなことを伯爵に申し上げたばかりに……」
前回会った際にはきちんと謝罪できなかったティアが、改めて頭を下げる。

「ティア、気にしないでくれたまえ。
いずれは同じことになっていた。
大陸内に戦争を起こさなかっただけ、まだましと考えよう」
アーガスの話はもう終わり、と伯爵が話題を変える。

「今はジタバタしても始まらん。
王も、天候や雪にはどうにも対処は無理とのご判断だ。
つらいが、春までランケオラータ殿が命を長らえることを、祈るしかない」
伯爵も、無理に行かせたところで死ぬだけと判っているような、自己満足の救出作戦を強行する気はない。

「マ教の神父様がウジェチ・スグタ要塞を通り、北の大地に渡っていると聞き及びます。僕たちも、例えば神父様の随行として、行くことはできませんか？」

アービィは、今すぐの救出が無理でも、多少なりとも情報収集や、協力してくれそうな北の民を捜せないかと考えていた。

「残念だがな、独りで行くことに、彼らは価値を見出しているのだよ」

マ教がこの世に誕生して以来、布教に護衛を伴わないことが、彼らの誇りだった。

武力を背景とした布教では教化ではなく征服だと考え、神父は独りで行くものと厳しく規定されている。

それはスキルウェテリー卿にしても同じ考えであり、布教と邪教の覆滅は別の次元と捉えていた。

第一に布教を行い、妨害する邪教には断固武を以て対処するが、その膝下にある民衆に刃を向けることや、布教を担当する神父が武具を携えて行くことはない。

もっとも、土着宗教が強固な信仰を集めている地域では、僧兵のすぐ後ろに神父が控えているという矛盾を、無理矢理飲み込んではいるのだが。

つまり、アービィたち四人が神父の護衛として随行することや、アービィが神父に化けることは、事実上できないということだった。

ルティたちをシスターに化けさせるには髪を剃る必要もあり、いくらなんでもこれを強要する気はない。

「現状においては、八方塞がりと言うわけだ。
今日はこれくらいにして、休んでいただこう。
晩餐会もできずに、済まなんだな。
明日は昼過ぎまで休みたまえ。
朝食が必要なら、遠慮なく家の者に声を掛けてもらえれば、すぐに用意させよう」
伯爵は苦しい胸の内を明かしつつ、再会の会談を切り上げた。

ベルテロイでレイとアービィたちが再会した日の朝、クリプトはインダミト駐在武官パシュース＝バイアブランカ第二王子に呼び出されていた。
王族が一貴族の執事を呼び出すことなど前代未聞だが、ことがことだけに因習などに囚われている場合ではない。

本来であればレイがその役を担うべきなのだが、未だ１５歳の少女に対し、無縁となっているとはいえ兄の不始末で肩身が狭くなっているところに、婚約者と実姉の危機、国家的な謀略を一気に押し被せるのは忍びないというパシュースの配慮で、クリプトが呼び出されていた。
パシュースからの密命を受けたクリプトは、当然のことながら主人は承知の上かどうかを訊ねた。

いかに第二王子とはいえ、他家の従者に主人を飛び越して命令して良いという道理はない。
しかし、パシュースからレヴァイストルに対する命令であると言われ、ならばとクリプトは納得することにした。

パシュースはクリプトの目の前で、彼にできる最上級の命令書、駐在武官としてではなく、インダミト王国第二王子としてのそれを

書き上げ、蝋封してクリプトに手交した。
何人たりとも宛名の人物以外に開封まかり成らぬとの言葉に、明朝ベルテロイを発ち、可及的速やかに宛名の人物に命令書を届けよと続けた。

フロローにアービィたちが到着した時点で、パシュースは彼等の足取りを掴み、今回の救出作戦の不首尾を察知した。
ならば、ランケオラータの命についてはスキルウェテリーが送りこんだ神父と、父王が送り込んだ密偵に任せておけばいい。

春までの間、勇者殿にはストラーに行ってもらい、少々派手に動いていただく。
彼の国の王はもちろんだが、今回のビースマッククーデターを企む一派が必ず接触してくるはずだ。

おそらく、プライドの固まりのような王の誘いを蹴れば、王の一派は手を出すことはないだろうが、彼らを目の敵にするだろう。
そして間違いなく、クーデター一派がその後に出てくる。

奴らは勇者を目立つ兵器としては、使おうとはしないだろう。
ラシアスのニムファが勇者の取り込みを目論み、しくじったことは、どの国でも国政に関わる一定の地位以上の者は承知している。

あからさまな勇者取り込みは、大陸覇権に意欲有りと宣言するようなものだ。
王族がそうするならば誰もが納得するだろうが、主権を持たない者がそうすることは、叛意有りと見られてしまうだけだ。

陰険な覇権欲に塗れた奴らは、秘密裏に事を運び、無言の圧力と

して勇者を使うために接触してくるだろう。
おそらくそれは、事が露見しても公爵家に類を及ぼさないように、その意を受けた中級貴族共だ。

未だ全容がはっきりしないクーデター一派の洗い出しに、勇者殿には働いてもらう。
その後のアルテルナンテの仕事がし易いように。

聞けば勇者殿の望みは、安住の地らしい。
それくらい、インダミトで用意してやろう。

勇者殿に気付かれないように、四方をぐるりと手の者で囲い込み、他国が手出しできないようにするくらい造作もないことだ。
重要なことは、勇者を臣下に引き入れることではなく、自国に勇者が住んでいるということに、ニムファを始めとした覇権欲に塗れた連中は気付いていない。

商業国家であるインダミトにとって、戦など一時の経済刺激にしかならず、その後の後始末に掛かる膨大なカネやヒトの浪費は望むものではない。
敗戦国を襲う莫大な戦時賠償金はインフレを呼び、国内に不満の荒らしを引き起こし、必ずや次の戦乱の火種になる。

インダミトの繁栄は、大陸の安定あってこそだ。
一国の経済を破綻させるほどの戦費や人的浪費を飲み込んでまで、戦による覇権は利のあるものではないとパシュースは考えている。

まあ、勇者殿、末永く仲良くやっていこうじゃないか。
クリプトを送り出したパシュースは、明るい顔の下に国家の意志を隠すように、笑みを浮かべていた。

パシュースの元を辞したクリプトは、レイが滞在する宿に戻ると、すぐに行動を起こした。

レイにパシュースからの命令について話した後、通常であれば二泊の行程を縮めるため、野営に必要な物資を集めに掛かる。

携行食糧はいうに及ばず、今回は必要なしとして用意してこなかった携行の夜具や、宿泊可能な馬車を調達に回った。

ボルビデュス領から乗ってきた馬車を下取りに出し、適切なサイズの中古馬車を購入し、レイが就寝できるベッドなどの設備を取り付ける。

本来の主客であるアービィたちのベッドも必要なので、室内を区切り男女の別を付けられるようにも依頼した。

翌朝までの納期なのでかなり無理を言ったが、物資調達の合間にはクリプト自ら作業を手伝ったため、深夜になって馬車は完成した。

職人たちを休ませたあと、クリプトは寝る間を惜しんで物資の積み込みを続け、翌朝一番にレイたちを迎えに行ったのだった。

ベルテロイからボルビデュスまでの行程は、以前に比べ魔獣の脅威が増大していた。

日中は大差ないのだが、夜間は以前には見られなかった、凶悪な魔獣が出没するようになっていた。

キマイラやマンティコア等が、単体でだが、襲ってくる。

その分ゴブリンやコボルト、リザードマンのような雑魚は減ったが、却って危険度は上がっているようだった。

ラシアスが駅馬車の護衛に力を入れることへのありがたみを、アービィたちは痛感していたが、暫く振りの戦闘は呪文の修練には役立ったようだ。

アービィとクリプトが交代で見張りに立ったのだが、絶え間ない魔獣の襲撃のせいで、戦闘行為を行える五人はほとんど徹夜になってしまっていた。

一泊の強行軍は、馬車の中での仮眠を含めても、レイ以外の睡眠時間が三時間にも満たないものだった。

そして、ベルテロイを立った翌日の深夜、ようやくボルビデュス城に到着することができた。

さすがにレヴァイストル伯爵は就寝済みと思っていたが、城門には篝火が焚かれ、伯爵自ら槍を携えて一行を待っていた。

挨拶もそこそこに、伯爵は一行を食堂に案内した。

そこには晩餐会と言うには質素だが、一般庶民の夜食と言うには豪勢すぎる料理が湯気を立てていた。

六食を冷えたままのレーションで済ませ、身体の芯まで冷え切っていた一行には、何よりのもてなしだっただろう。

充分に腹を満たし、伯爵の心遣いに満ち足りた気分にさせてもらった一行は、迷わず昼まで眠らせてもらうことにした。

もっとも、剣の腕がどれほど上達したか、伯爵が手合わせを楽しみにしていたルティは、翌朝叩き起こされたうえでの二度寝になっていたが。

レヴァイストルはルティと剣の鍛錬を済ませた後、クリプトのみを呼び出しパシュースからの命令書を開封した。

そこには、以下のことが書かれている。

一、アービィたちをストラーに派遣すること。理由は適宜考慮すること。

一、北の大地の気候改善を期し、ランケオラータ救出に向かわせること。現在スキルウェテリー配下の者が潜入しているため、これに遅れを取らないこと。

さらには、それを牽制するために密偵が神父に化けて潜入していることや、未だランケオラータの生死は不明だが、確定情報があるまでは生存を前提として行動することなど、事細かな指示が記されている。

「殿下はどこまでお話になられたかね？」

伯爵はクリプトに確かめたい点があった。

「はい、ストラーへ行って欲しいという点が一つ。

そして、春を待ってランケオラータ様の救出に行け、とだけでございます」

クリプトは、命令書の内容は知らない。

クリプトに言った以上のことが記されているということは、その部分は国家機密であり、言葉にした部分は他国にリークさせるためである。

防諜に無神経なわけではないが、駐在武官の発言など例え町外れに穴を掘り、その中に囁いた後穴を埋めたところで、翌朝には他の駐在武官の耳に届いている。

アービィたちをストラーに派遣することは、駐在武官全員の合意のうえと判断して良い。

同様にランケオラータ救出に再度赴かせることもだが、クリプトに言ってない部分はどこまで漏れているから知らないが、他国には聞かれたくないことなのであろう。

スキルウェテリーの手の者に後れを取るな、ということは、彼に恩を売られるなということで、言われずとも承知している。

伯爵は一頻り肯くと命令書に火を点け、クリプトに燃え滓の始末は命ずることなく、下がらせていた。

泥のように眠った後、さわやかというにはあまりにも高い陽の下で、アービィたちは朝食の分と一緒に昼食をとっていた。

彼らの疲労を気遣ったのか、傍には侍女が一人控えるのみで、伯爵やレイは姿を見せない。

ファティインディとセラス母子が連れ立って庭を散策しているが、こちらも挨拶を交わしただけで通り過ぎていった。

穏やかな午後の日差しは、既に木枯らしの季節であるにも拘わらず、彼らを優しく照らしている。

こんなに暖かい日は、いくら大陸の南半分に位置するボルビデュス領とはいえ、この時期としては珍しい。

昼食が終わって食器が下げられても、彼らはそこから動かず、気だるい午後の日差しを楽しんでいた。

彼らの食事中には大人しく通り過ぎていったセラスが、ファティインディの手を曳き戻ってきた。

そこには先程まであった遠慮など欠片も残っておらず、ファティインディを苦笑させている。

「アービィ、またあれ作ってよっ！！

黄色い、ふわふわしたあれっ！！
他に新作はないの！？」
すっかりカステラがお気に召していたようだが、微妙な作り方の癖が違うのか、厨房の料理人が作るカステラは、アービィのそれとは違うものになっていたらしい。

「ごめんなさいね。
厨房の者が作るものも充分に美味しいんだけど、微妙に舌触りが違うのよ」
ファティインディが言うには、アービィのものより食感が軽いらしい。
スポンジケーキとして考えるなら、そちらの方ができは良いと言えるのだが、クリームを伴わないカステラとしては物足りないらしい。

多分、下手くそさの怪我の功名なのだろうが、こればかりは言葉で説明の仕様がない。
アービィは、新作のアイディアを夢の記憶から手繰りつつ、カステラ作りに取り掛かった。

カステラを焼いている間、厨房を見せてもらったところ、小振りな豆が水に漬けられていた。
フォーミットの村ではあまり見ないものだったが、なんとなく閃くものがある。

料理人に聞くところによると、乾燥させたものを昨夜から水で戻しているらしく、今夜の賄いのシチューに入れるとのことだった。
使い道も下拵えも同じなので、多分大丈夫だろうと踏んで、半分ほど分けてもらう。
料理人もアービィのやることが楽しみなので、特に不満はない。

パン生地の準備をしてもらう間に、豆を水から煮る時間が掛かる工程の間にカステラを持ってセラスたちのところへ戻り、新作は夕食時に発表と告げた。

いますぐよこせ、と喚くセラスをティアとファティインディが締め上げている間に、厨房に退避する。

幾つかの行程を経て、潰して漉した豆を砂糖で甘く仕上げ、漉し餡を作り上げた。

料理人たちに味見をしてもらうが、砂糖が高価なため甘さ控え目にしたにも拘わらず、絶賛されてしまった。

豆を甘く煮ると言う発想はこの世界にはなかったらしく、どこで思い付いたのか質問責めにあってしまったが、まさか日本でとも言えず適当に誤魔化すことにした。

パン生地で餡子を包み、オーブンで焼き上げる。

残った餡はお湯で溶き、白玉粉はさすがにないため小麦粉で白玉もどきを作って、白玉汁粉として、厨房の使用料代わりに料理人たちに振る舞った。

夕食時、外見は何の変哲もないパンをかじった直後のみんなの反応に、アービィはなんとも言えない嬉しさを噛みしめていた。

その後、料理人たちから汁粉の話を聞きつけたファティインディによって、翌日のお茶の時間に合わせ、再度餡子を大量生産する羽目になってしまった。

夕食後、ルティはレイに、ティアはセラスに捕まっている。

アービィとメディは、伯爵の居室で今後のことを話し合っていた。

当面は北の大陸には、行くことができない。
暫くここに滞在してもいいし、旅に出るのも構わない。
伯爵はそう言って、どうやってストラー行きを依頼するか頭を悩ませていた。

パシュースからの命令書には、ストラーへの派遣とだけ記されていた。
おそらく目的はあるはずだが、記されていないところを見ると、伯爵には知らせたくないことなのだろう。

かといって問い合わせたところで、答えが返ってくるはずもない。
理由もなく行けとも言えず、どうしたものか思案に暮れていると、アービィから言い出した。

「春まで時間があるなら、ストラーの風の神殿に行きたいのですが」
アービィは、最後に残った風の神殿に行き、全ての呪文の準備を整えてから、北の大陸へ渡るつもりだった。
メディも、ここまできたら、全ての呪文を修めたいと考えていた。

北の大陸では、精霊呪文の他にメディが掛けられたような妖術も使われている。
風の呪文に直接妖術を封じるものはないが、少しでも戦いの幅は広げておいて損はない。

メディにしてみても、精霊と契約すれば即全ての呪文が使えるわけではないのだから、修練のために魔獣との戦闘は不可欠だ。
白魔法は日常生活の中だけでも習熟度を上げることは可能だが、戦闘の方が遙かに上達は早い。

魔獣討伐自体が人の役に立つことであるならば、これを躊躇うことはない。
風の白魔法は、治癒師に直接役立つものはないが、戦闘には役立つものばかりだ。

従って、無為に百日近い日々を過ごすより、ストラーへ行くべきというのがアービィたちの結論だった。
それをいつ伯爵に伝えるか、アービィたちも迷っていたのだ。

「そうかね。
では、引き続きランケオラータ殿の救出の依頼はするとして、何かあってそれが遅れるようなことがあっては困る。
そこで、だ」
伯爵にしてみれば渡りに船だが、そのようなことはおくびにも出さずに提案する。

「風の神殿までは、ここからだと往復でほぼ百日だ。
あちらからウジェチ・スグタ要塞まで直接行ったとしても、百日は掛かる。
時間だけ見ればちょうどかも知れんが、途中何があるか解らん。
馬車を提供しよう。
扱いは、明日からクリプトに聞いてもらう。
五日も練習すれば充分だろう」
依頼の一部だから断ってくれるなよ、と安堵の表情で付け加えた。

翌日から、クリプトによる馬扱いの特訓が始まり、旅を共にする馬の選定も同時に進められた。
アービィの気配を察知すれば、まさか逆らうようなことはないと思われるが、逆に恐怖で動けなくなる方が心配された。

クリプトに気付かれない程度に狼の気配を漂わせつつ、馬たちと顔合わせがてらの訓練を続けた。

その結果、最も気性の激しい牝馬と、対照的な牡馬の二頭が候補に残り、なんとなく男独りに肩身の狭さを感じていたアービィの強固な意見で、牡馬を連れて行くことに決定した。

出立の前夜、壮行会を兼ねた晩餐の後、伯爵はアービィを居室に訪ねた。

「特許や登録商標について、レイから君に教えてもらったと聞いたぞ。

あの小娘にしては上出来すぎだと思っていたが、やはり、というところか」

伯爵はレイから特許や登録商標について聞くなり、考えを纏めて王宛てに上奏文を送っていた。

国内産業の保護育成に心を砕いていたバイアブランカ王は、直ちにこの案を検討するよう内務卿に命じていた。

もちろん他国からの侵害があっては元も子もないので、四カ国が共同歩調を取るにはどうすべきか、外務卿とも意見交換するようにと付け加えた。

同時に各国との間に根回しのため、パシュースに叩き台の案を送り、駐在武官同士でも検討するように命じている。

さらに王家が富の独占をしては民が富まないと考えた王は、王権を持ってしても特許や商標は侵害してはならないとの条項をいれるようにと、内務卿に指示している。

これにより、領内で開発された特許技術を、一部貴族が独占する

ことを防ごうとしていた。
無論、まだ叩き台故に穴だらけだが、それはこれから詰めていけばよい。

そういった書簡が王から返され、発案者に会ってみたいと結ばれていた。
伯爵は、アービィを王に会わせるつもりでいたが、その前に確かめておきたいことがあった。

「君の、以前聞いた税のことも、そうだが、料理や菓子、社会制度の知識は、召喚される前の、世界の知識かね？」
伯爵は一言ずつ区切りながら、言いにくそうに訊ねた。

「……ご存知でしたか……」
アービィは思わず息を飲み、やっと一言を絞り出した。

「ああ。
ニムファ殿があそこまで派手にやったのだ。
どの国でも、一定以上の地位の者は知っている。
豊かな、文明が発達した世界のようだね」
伯爵は答えた。

アービィは、もし伯爵が臣下にと言うようなら、すぐさまここを辞し二度と戻らないつもりになっていた。
また、王がそう言うのであれば、ラシアスと同じことだ。

「私は、君を臣下になどとは考えていない。
もし、私がそう言って聞くくらいなら、ラシアスに留まっているだろう？
王は君の知識を欲しがるかも知れないがね。

それでも我が王も、ラシアスでの一件はご存知故、君を留め置けるとはお考えにはならないだろう」
伯爵はアービィの心配を打ち消すように、言葉を続けた。
「そう仰っていただけるなら、僕はありがたいです。
僕は、勇者などという器ではありません。
いつかお見せしたように……人でもありませんし。
今望むことは、平穏に暮らしたい、唯それだけのことなんです」
アービィは、自分が人の役に立つならばともかく、特定の欲望のための道具になるのは真っ平だ。
「私は、君がこの世界に呼ばれたことには、意味があると考えている。
それが、私が君を留め置こうとは思わない理由だ。
もし、単にニムファ殿の欲望、いや、あの時点では国を思う純粋な気持ちだったのだろうがね、それだけだったら、君は十年前の召喚失敗の際に消えうせていたはずだ。
それが、何故、行方不明になったうえ、十年もの長い間覚醒しなかったのか。
そして、その力。
前の世界でも人狼だったわけではなかろう？
不思議に思わないかね？」
アービィは伯爵の言葉を聴いているが、自分からは言葉が出てこない。
「おそらく、だ。
君がこの世界に来ては困る者がいて、それが妨害したのだろう」
そうだ。
『俺』が言っていた。

「召喚されたとき、既に今の歳くらいだったのだろう？
それを子供に戻し、且つ人狼に君の魂を封じ込めた」
う～ん、もっと歳上だったんだけどな。

「子供であれば、この世界で庇護者なしで生き残るのは困難だ。
もし、生き残っても、人狼が人のために動くなどとは考えまい」
拾ってもらえたなぁ……

「その者はそう考えたのに、今君はここにいる。
これは、もっと別の大きな意志が、君に何かを成せ、ということ
ではないかね？」
僕はそんな大層な者じゃないんですよ……

「その成すべきことが何かは、私には分らない。
だが、それが私が君をここに留め置くべきではないと、考えた理
由だ」
伯爵はそう言って、アービィの言葉を待つ。

「僕がこの世界に来ることを邪魔した者、つまり魔王を倒す、とか
そういうものなのかもしれないし、もっと別のことかもしれないで
すね」
アービィはあり得ないと思いつつ、苦笑いしながら言った。

「君は、もっと世界を見てきて欲しい。
その中で、自ずと成すべきことは見えてくる。
それは、君だけに限らないことだ。
この世に生を受けたもの全てが、それぞれに成すべきことがある
はずだ。
それに気付けず人の道を外れる者も多いがね」
伯爵はアービィを力付けるように言う。

「確実に、ひとつ判っていることがあります。
僕は、ルティと二人で穏やかに暮らせる場所を探す。
これだけは間違いがありません。
他に何があろうと」
アービィはそう答え、伯爵の目を見詰めた。

「成すべきことが済めば、それもいい。
ボルビデュス領は、君たちを歓迎するぞ。
もちろん、税を払ってくれるなら、だがね」
伯爵はそう言って、豪快に笑った。

「伯爵、僕はあなたが、僕を欲望の道具に使わないと信じられる限り、協力できることは何でもします。
北へ行けと仰るなら行きましょう」
そう言ってアービィは、差し出された伯爵の右手を強く握った。

そうだ、今まで僕は安住の地を探すと言っていたけど、逃げてばかりじゃないか。
何を成せと言われているのかは分らないけど、それも探してみよう。

それは、アービィが召喚されたことの意義について、初めて自ら向き合い、考えた瞬間だった。

第４２話

「てぇことは、あなたさんはこないだの戦で、捕らえられた捕虜を取り返しに行きなさる、と仰るわけですな？」

村人の問いにバードンは首を横に振った。

「いえ、私一人で何百人、いや何千人いるかも解らない、捕虜全てを取り返せるとは思っておりません。

ただ、何れの者もマ教の教えを信ずる者。

私が共にあることで心安らかになるのであれば、そう思い参ったわけでございます」

バードンはウジェチ・スグタ要塞を出た後、地峡に続く高地にそれぞれが一日の行程内に点在する、南の住人と交流を持つ集落を渡り歩いていた。

平野に住む部族に追いやられ、高地に点在する狭い居住可能な空間に、へばりつくように集落は点在している。

南の通貨が両替せず使用できる最北端で、比較的南に対して好意的な感情を抱く部族が暮らしている。

狩猟が主要産業で、それ以外にはほとんど何もないのは、高地の土地が農耕に向かないからだ。

主食となる穀物は、ラシアスを通した南大陸や平地の部族の中でも友好的な部族との交易に頼っていた。

高地の部族同士の関係には多少の好悪はあるものの概ね良好であることは、生活条件が似通っていることに加え、諍いをしている余裕がないということもあった。

「それで、捕虜たちはどの部族が押さえているか、ご存知のことがありましたら教えていただけますか？」
バードンの普段の物腰は柔らかく、言葉遣いも丁寧だ。

人狼に関わることになるといきなり豹変するが、スキルウェテリーに叩き込まれた礼儀作法と、生来の性格に拠るところが大きい。
布教活動で異教徒の中に溶け込むためには、反感を買うことが少なくて得なスキルだった。

「そうですなぁ……
平野の部族であることは、間違いないんですがね……」
村人は首を捻り考える。
付き合いのある部族からは、そのような話を聞いていない。

「では、最近交易か活発になっているということはございませんか？」
どれほどの人数が生き残っているかは分からないが、集落に済む人数が増えれば交易量が増すはずだ。

「そういえば、直接ことは付き合いはないんですがね、パーカホの村から木炭を買ったって話を聞いたことがありますね」
村人は思い当たる節があるようだ。

「それは、どこにあるんですか？」
これだ、と直感が告げる。

高地一帯では、薪をあまり使えない。
野生動物の住処となる森林を伐採しすぎては、自分の首を絞めるようなものだ。

そのうえ、平野部に鉄砲水でも起こそうものなら、ただでさえ好意的に思われていないのだから、あっさりと攻め滅ぼされてしまう。かといって、平野部の森林から薪を運ぶには、労力時間とも掛かりすぎてしまう。

このため、高地一帯では、乾燥した泥炭が一般的な燃料だった。高地を降りきった平野部の縁には、広大な湿地帯が広がっており、ここには無尽蔵とも言える泥炭が眠っている。

狩猟と平行して、春から秋に掛けて泥炭堀が行われ、冬までに乾燥させた物を運んで使っている。

大量の煤煙が出るため室内が煤けることや、煙逃しに屋根に穴が必要なことと、火力が低いことが欠点だった。

低品質であっても木炭の方が火力が強いため、南大陸から持ち込む品に昔から数えられていたが、冬季には供給が止まってしまうため、贅沢品と考えられている。

それが冬でも辛うじて交易が可能な北大陸で、入手できるようになることは大歓迎であった。

「平野に出てから北西に十日ばかりのあたりですよ。さすがに今から行くのは無理じゃないでしょうかねぇ。途中には私たちや、平野の部族が持ってる避難小屋くらいしかないんですよ」

北に渡りひと月ほどで捕虜が囚われている集落の当たりはついたが、どうやらここで打ち止めのようだ。

超人的な殺人技を持つバードンといえど、雪には勝てない。

案内人もなしに、目印すら雪に埋もれた時期に未知の土地を踏破

しようなど、ただの自殺だ。
高地の人々は、雪原を踏破する技術を持ってはいるが、他人にかまっていられるほど甘い自然環境ではない。

現状で取れる最善の手としては、高地の人々が交易に行く際に情報を集めてきてもらうくらいしかない。
集落の周辺で雪との付き合い方を学び、状況が許せばパーカホまで行ってみようとバードンは考えていた。

バードンが目を付けた木炭は、間違いなくランケオラータが関係しているものだった。
平野部の部族も、燃料に泥炭と薪を使っており、良質な木炭は高地部族を通して極稀に南大陸産の物を手にするだけだった。

集落の周辺には針葉樹を中心とした森林が広がっており、白炭や黒炭に適した広葉樹の数は少ない。
当然多くの薪は針葉樹が原料であり、消炭は熾き火になることはあるが、燃料としては適したものではなかった。

数が少ない広葉樹は燃料としては見向きもされず、数十年以上が経過し萌芽がしにくくなるものが多くなっている。
ランケオラータは、広葉樹を適宜伐採して燃料として炭焼きを行うと共に、森の更新を促進するようにさせた。

残念なことに、熟練の技術を要する炭焼き窯を作ることができる者がいなかったため、炭焼きは最も簡便な伏せ焼きで行った。
それでも針葉樹から得られる炭や泥炭よりは、遥かに良質な燃料としての炭を作ることができた。

同時に針葉樹からできる炭の断熱効果に着目し、家屋の床や壁に埋め込み燃料の消費を下げる工夫もしていた。

また、南大陸で飲まれている大麦を原料とした蒸留酒の製造過程にある麦芽の乾燥に、泥炭を使ってみようというアイディアも生まれた。

北の大陸で飲まれている蒸留酒に応用してみたところ、芳香が付くことが確認でき、もし南大陸との交易ができるならば主力商品となる可能性も出てきた。

交易という点から見れば、北の大地は巨大な市場となる可能性を秘めている。

北の大地の暮らしを良くしていくことができれば、北の民の南下への渇望を和らげつつ、緩やかな両者の交流が可能になるのではないか。

南大陸で行き詰まりを感じている者にとっては、北の大陸は新天地となる可能性もある。

農林業に限らず、いくつかの分野において北の民にとっての技術革新を伝えたランケオラータは、次第に捕虜というよりは重要な人物としてパーカホで遇されるようになっていた。

「それでは、準備はいいかね?」

伯爵がアービィたちに声を掛けた。

馬の扱いもクリプトから叩き込まれ、なんとか思い通りに動いてもらえるようになってきたので、実地訓練を兼ねて伯爵と共にエーンベアに行き、バイアブランカ王に謁見することになった。

当初はボルビデュス領からベルテロイに戻り、そのままストラー

の王都ストラストブールを目指すつもりだったが、伯爵に王の顔を立ててやってくれと拝み倒され、エーンベアに一度行くことになっていた。

その後、エーンベアから再度ボルビデュス領に戻り、ベルテロイを経由してストラーへ向かう。

「はい、伯爵。

じゃあ、頼むよ、ノタータス」

アービィが馬に一声掛け、馬車はゆっくりと動き出した。

伯爵が乗る馬車の後ろを、ノタータスが曳く馬車で追いかける。

素直な性格だが、かなりヘタレでもあるノタータスを連れて行くことに、レイヤセラスは反対していたが、危険を察知する能力は伯爵家の馬随一のものがあったため、伯爵とファティインディは賛成していた。

一つ危惧するならば、魔獣と出会い頭になったときに、その場で失神するか暴走するかが分らないくらいだろう。

いざとなればアービィがいるので旅程に不安はないのだが、ノタータスが足手纏いにならなければいいとレイは心配している。

ノタータスと相性が良かったセラスは、単純に友達を連れて行かれることが嫌なようだった。

以前はラガロシフォン経由のため十四日間に及ぶ行程だったが、ボルビデュスから直接王都への道は七日程度で到着できる。

もちろん、途中宿を取る回数を減らし、野営で時間稼ぎすれば五日で行くことも可能だった。

普通であれば七日の行程でいくのだが、今は時が時なのでできる限り短縮することにしている。

それに、投宿すると宿が馬を預かるため、ノタータスと一緒に過ごす時間が増える野営のほうが、却って都合が良かった。

ボルビデュスを出てから三日目の野営時、ノタータスの様子がおかしくなった。

耳がせわしなく動き回り、目もどことなく泳いでいるかのようだ。

ノタータスの耳が動き始めた直後に、アービィも不穏な気配に気付いた。

「ノタータスの方が早かったね」

この馬は、人狼より気配を早く感じ取った。

アービィの一言にティアが驚愕する。

伯爵を囲むように陣を組むが、その伯爵自体が剣を振るいたがっているので始末に悪い。

全員が剣や弓を構え、闇と対峙する。

やがて、闇を割って姿を現したものは、八本脚のトカゲのようなゲイズハウンドだった。

全長は獣化したアービィよりも大きい４ｍほどで、麻痺の効果を持つ毒が含まれている唾液を持つ凶獣だ。

通常は八本脚で歩き回るが、戦闘時には後ろ三対の脚で身体を支え、最前肢の一対は敵を抱え込むことが可能だ。

素早い動きと、水牛の首すら叩き折ることができる尾の一撃は、麻痺の能力と併せ脅威となる。

極北の地にしかいないといわれていたが、この１０年で徐々に分布を南下させている。

しかし、分布に連続性が見られないため、何者かが南大陸に送り込んでいると見る向きもあった。

クリプトのいるうえにノタータスがパニックを起こしかねないため獣化するわけにもいかず、剣と呪文で立ち向かわねばならない。もっとも、無闇に獣化していてはいつまでたっても呪文の習熟度も上がらないため、よほどのことがない限り獣化する意志はなかったが。

アービィとルティが前衛に出て剣を構えるが、いつの間にか伯爵も愛剣を構え横に立っている。

後衛でティアが弓を構え、メディは回復呪文をいつでも発現できるように詠唱を始めた。

クリプトは、万が一のために馬たちに寄り添い、鋼線を引き出している。

凶獣とアービィたちの間に張り詰める緊張が極限に達したとき、ゲイズハウンドが跳躍した。

後肢と尾に溜めた力を一気に解放し、手近にいたルティに襲い掛かる。

一瞬遅れて放ったティアの矢は闇を貫いただけで終わるが、二の矢はゲイズハウンドの着地位置を狙って放たれる。

ルティは軽くステップバックで襲撃をかわし、ゲイズハウンドが態勢を整える前に一歩踏み込んで前肢に剣を叩き込む。

ほぼ同時にアービィと伯爵の剣がそれぞれ前肢と首を捉えるが、堅い皮膚に阻まれ深手を与えるには至らない。

ティアの放った二の矢は狙い違わずゲイズハウンドの目を抉り、

凶獣の叫びが闇を切り裂いた。
当てずっぽうに振り回される尾がアービィを直撃するが、剣を盾にこれを防いだ。

盾にした剣がゲイズハウンドの尾に食い込むが、切断するには至らず軽いダメージを与えるに留まる。
しかし、強力な武器を封じる役には立ったようだ。
ルティがこの隙に懐に潜り込み、起こした上体に剣を突き立てるが、浅く入るだけで突き通すことはできなかった。

攻撃の直後にできる隙を突かれ、ゲイズハウンドの牙がルティを掠めた。
反射的に飛び退るが、直後に身体に痺れが走り、動くこともままならなくなる。

慌てたティアが『解痺』の呪文を唱えてルティの麻痺を解き、同時にメディが『回復』を掛けた。
瞬時に麻痺が解けたルティは、地面を転がってゲイズハウンドの追撃を寸でのところで回避できた。

片目を潰され距離感がつかめない凶獣に伯爵が走り寄り、その背に剣を叩き込むが、やはり鎧のような皮膚を割ることができない。
アービィが距離を詰め、伯爵に向かって大きく開けられたゲイズハウンドの口の中に、直接『大炎』を発動させた。

喉の奥に焼け爛れるような苦痛を感じた凶獣が、反射的に最後肢で立ち上がる。
下腹が無防備にさらけ出されたときに、か細い記憶を手繰ったメディから、そこの皮膚は柔らかいことを知らされた前衛三人が突進した。

ほぼ同時に三本の剣が凶獣の下腹に突き立てられ、それぞれが思い思いの方向に引き払われる。
アービィは喉に向かい、ルティは左真横へ、伯爵が下に剣を払うと、凶獣の腹から内臓が零れ落ち、僅かな間をおいて凶獣が後ろに倒れこんだ。

アービィが引き裂けた腹に『大炎』を叩き込むと、断末魔に暴れるゲイズハウンドの尾が伯爵に振るわれた。
咄嗟に飛び出したクリプトの鋼線が尾に絡みつき、切断するには至らないが勢いを殺すことには成功する。

喉元の鱗の隙間を突いてルティが剣を突き立てると、僅かに痙攣したゲイズハウンドはようやく動きを止めた。
ふと見ると、ノタータスが立ったまま、失神していた。

足元に広がる水溜りが、彼の恐怖を何よりも雄弁に物語っている。
やれやれ、という表情のクリプトが絞った布で身体を拭いてやると、彼はようやく息を吹き返し、短く嘶いた。

ゲイズハウンドの襲撃から二日後の朝、一行はエーンベアに到着し、王都の謁見に臨んだ。
王都に詰める貴族たちの好奇の視線の中、謁見の間に進んだ一行は、王の前で片膝を付き頭を垂れた。

「よくぞ、参られた。
噂は、聞き及んでおるぞ。
楽にされよ、勇者殿。
ボルビデュス伯共々、此度の働き誠にご苦労であった」

アービィたちは、王の言葉に頭を上げる。
バイアブランカは、穏やかな視線でアービィの涼やかな表情を眺めている。

「勿体無きお言葉、痛み入ってございます。
先般上奏いたしました、特許や商標はこの者の知恵にございますれば」
伯爵は王に対し、再度深く頭を垂れた。

「うむ、良いことを教えてもらったと思っている。
今後も、そなたの知恵を借りたいところだが……」
そう言ってバイアブランカはアービィを見た。
アービィが何かを言おうとするが、バイアブランカはそれを遮って言葉を続ける。

「そなたには、成すべきことがあるのであろう？
それをこの国に留めようとは考えておらぬ故、安心するが良い。
ただ、な。
たまにはこの国に立ち寄って、そなたの知恵を貸して欲しい。
それくらいはよかろう？
我が国は、そなたにいろいろとしてやれることは多いと思うが、いかがかな？」
そう言ってバイアブランカは、わざと人の悪そうな表情を作り、笑みを浮かべた。

「陛下、お心遣い、ありがとうございます。
そのように仰っていただけるのでしたら、できる限りお役に立ちたいと思います。
ただ、いつも、というわけには参りませんが、そこはご容赦いた

だきたいと存じます」
アービィはラシアスでの一件以来、権力者というものに不信感を抱いている。
もし、ここで臣従の誘いがあれば、決然と断るつもりでいた。

しかし、その一件は当然バイアブランカも承知しており、無理矢理縛り付けようとする愚を悟っていた。
であれば、支援と引き換えに知恵だけもらえれば、それで今のところ収支は釣り合うと考えていた。

最近、ビースマック製の品を騙った粗悪品が出回っており、この取り締まりに有効な手段を教えてもらったのだ。
これだけでも充分支援するに値する。

国内産業の保護に走るあまり、他国の権益を侵してばかりであるならば、国の威信に関る。
ビースマックが粗悪品の件で事構える気になれば、商業国のインダミトはたちまち経済が麻痺してしまう。

現在ベルテロイ駐在のパシュースを通し各国に根回しを行っているが、商品名の裏付けに例えば王の印などが必要になるとなれば少しはマシになるだろう。
もちろん印の偽造や、そのための賄賂といった抜け道はあるので、方法を詰める必要はある。

「うむ、それで充分。
大儀であった。
下がってよいぞ」
そう言ってバイアブランカは、玉座を立った。

アービィは、呆気に取られていた。
まさか、こんな簡単にことが済むとは思っていなかったからだ。

伯爵から大丈夫だとは言われていたが、ひと悶着あると覚悟していただけに、王のあっさりとした行いに肩透かしを喰わされた感じだった。
もっとも、この程度で済ますなら、呼び出すこともないんじゃない、と思ってしまっていたが。

「では、領に戻るとしようか」
レヴァイストルは、王が自重したことに安堵の溜息を漏らしつつ、アービィたちに声を掛けた。
伯爵自身、王がどう出るか読めていない部分もあったのだ。

再度5日の行程でボルビデュス領に戻った夜、アービィは料理人たちの許可を貰って厨房を使っていた。
作業台を前に、彼は夢の記憶を手繰っていた。

先日作った餡子はすっかり定番となり、毎日作られているようだ。
夜警の私兵たちの夜食用に、大き目のボウルに一杯作り置きがあった。

料理人に断って、餡子を半分ほど使わせてもらうことにする。
サツマイモに似た芋を細かく刻んで煮る間に、餡を水で延ばし練る。

寒天があれば言うことなしだが、海から離れたこの地方では手に入らないので、代用のゼラチンをぬるま湯でふやかした。
二等分したゼラチンと練り伸ばした餡を合わせ、よく混ぜてから四角いバットに入れておく。

煮えた芋を滑らかになるまで潰し、弱火に掛けて水で延ばし砂糖と少量の塩で甘みを調整する。
砂糖が溶けたところで火から下ろし、残りのゼラチンを混ぜ合わせ、こちらもバットに入れた。
『凍結』で作り出した氷を入れた大き目の箱に両方のバットを箱に入れ、周りを毛布で包んで冷蔵庫代わりにして冷やしておいた。

翌朝、朝食の後にアービィは、ルティを厨房に連れて行った。

「これさ、初めて作ってみたんだけど。
確か、今日ってルティの誕生日だよね。
本当だったら、デコレーションしたケーキなんかがいいんだろうけどさ、それは本職には勝てないから」
冷やしておいた羊羹を切り、ルティに差し出した。

フォーミットの村を出てからいつの間にか一年が過ぎ、二人は19歳になっていた。
アービィは生まれた日が分らないので、便宜上ルティと同じ日にしている。

「……覚えていて、くれたんだ……？」
ようやく、それだけ言葉にしたルティ。
あまりにも慌しい日々の中で、自分ですら忘れていた。

「嬉しいよ、アービィ。
ありがとう……
あれ、なんか目から汗が……
なんでだろう、ね」
素直に嬉しかった。

豪華にケーキを飾ったわけでもなければ、輝く宝石をプレゼントされたわけでもない。

この世界では初めて見る菓子だが、決して派手な見かけではない。だが、それはアービィが一所懸命、王都から帰って休みもせず作ってくれたものだ。

ルティには、この上もなく大切なものに思えていた。

「あと一日ずれてたら、野営地だもんね～。よかったよ、それだったら何もできなかったも――」

脳天気にアービィが言ったが、ルティはその言葉が終わらないうちにアービィの胸に飛び込んでいた。

「えっ？

あ？

いや、ごめん、ケーキの方が良かった？」

突然のルティの行動に、失敗したかと勘違いするアービィ。

「……違うよ……

嬉しかったの……

アービィが一所懸命作ってくれたんでしょ？

どんなものでも、それが一番嬉しいんだよ」

女の子にそこまで言わせるな、ぼけ狼。と、これはアービィに聞こえないように呟く。

厨房を覗き込むティア、メディ、レイ、セラス、伯爵、ファティインディや使用人たち全員が、『ぼけ狼』を除く同じことを呟いていた。

「お父様、あの御菓子はいつ食べられるんですの？」

「そうだ、そこで一気に口づけをっ」

茶々を入れようとしたセラスと伯爵がファティインディィに締め上げられる光景は、落ち着きを取り戻したルティが、まずは一人で堪能した羊羹を全員に持っていくまで続いていた。

第４３話

「ランキー、今度は何を作る気だい？」
兵たちを指揮するランケオラータに、声を掛ける者がいた。
彼を捕虜にすることになった、見事な集団戦の運用を見せた男に答える。

「ああ、ルムか。
いや、水くらい、自由に飲ませて欲しいもんだと思ってね」

「楽しみにしているよ。
上手くいったら、集落用にも作ってもらうからな」
「俺たちで試すのかい？」

「何のための捕虜だよ」
険悪な雰囲気など微塵も感じられない、古くからの友同士のように言葉の応酬を交わす。

北の大陸で人が生きていくうえでの障害は多いが、飲料水の確保も重大な問題だった。
河川は多いが、そのほとんどがコーヒー牛乳のように濁った泥混じりの水か、泥炭層を染み通ったｐＨが異様に低い、所謂ブラックウオーターと呼ばれる焦げ茶色の強酸性水かのどちらかだった。

当然そのまま飲めば腹を下し、即、命に関わってくる。
泥水であれば浮遊するシルトの沈殿を待ち、その後に煮沸すれば飲用にできるが、ｐＨについては緩衝材を用いなければどうしようもない。

それでもシルトが沈みきるまでには、一月近い時間を要していた。そして、沈殿させた後にはシルトが舞い上がらないように、水の取り扱いには細心の注意を要している。

さらに冬季には、これらの水は凍結してしまうため、雪を溶かすしか飲み水を確保する方法がない。秋には、雪が降るまでの飲料水を確保するため、水を各戸にある貯水槽に運ぶことも、捕虜たちの重要な仕事だった。

雪を解かした水は、雪の核になった埃が大量に含まれるが、泥水よりは遙かにマシだ。冬は、水を造らなければならず、このために燃料の消費も増えてしまうが、比較的清浄な水を飲める唯一の季節だった。

それでも一冬の間には、雪を溶かし続けた瓶の中にそれなりの埃が溜まっている。雪解け近い時期からは、埃を舞い上がらせないように、水を掬わなくてはならなかった。

ランケオラータは、まず泥水を処理する方法から着手した。水漏れしないようにがっちりと組んだ木箱の中を8：2の二槽に分け、仕切板の最下部にはスリットを設ける。広い方にはスリットより少し高い深さに多孔板の簀の子を入れ、その上にはガーゼのような布を敷いた。

良く洗った小指の先程度の小石を敷き詰め、その上に粒径1～3mm程度の小砂利を厚く敷いた。水を投入する際に小砂利が舞い上がらないように、想定した水面より少し上げた位置に多孔板を蓋のように固定する。

濾過された水が溢れ出すように狭い方の上部に穴を開け、樋を水受け槽に流れるように設置した。
濾過槽の底には穴を開け、濾材を通過して沈殿した泥を排出できるようにして、栓を打ち込んでおく。

わざと泥を混ぜた水で試してみるが、大量に流し込んでも泥を含む濁った水が出ることはなかった。
排砂孔も正常に機能したため、試作品は捕虜用として、各戸用の濾過槽を量産することにする。

ブラックウオーターは農業用水に利用することが多く、そのため農地はすぐ酸土化していた。
作物の傾向からブラックウオーターの水質を推測したランケオラータは、土壌改良に灰や炭を使うことから緩衝材として炭が使えるのではないかと推測する。

そしてブラックウオーターを飲料水化するための濾過槽には、針葉樹炭を濾過槽に合わせて整形した物をはめ込んでみた。
こちらは現在水を運ぶことができないため、春になったら試用することにした。

もし、これが上手く運用できれば、肥沃な泥を含んだ水を農業用水に、ｐＨを調整したブラックウオーターを飲料水に転用することができる。

「俺たちは、今まで食料の奪い合いしかしてこなかったから、何も知らないんだな。
お前たちは、無から有を作り出す妖術使いみたいだよ」
ルムはそう言って笑った。

「俺はその分戦には役に立たないからな。
お前、ウチの領にニ、三年くらい来ないか？
いろいろ教えてやるぜ」
ランケオラータも笑う。
彼は、既に帰郷後の北との交易を考え始めていた。

ささやかな誕生祝いをプレゼントしたあと、アービィたちは慌ただしくストラーへの旅の準備を始めた。
雪解けを期して地峡を越えるためには、遅くても五十日以内にストラーからボルビデュスに戻らなければならない。

ストラーから直接ラシアスを抜け、地峡を目指すルートもあるが、そうするとノタータスを連れて行かなければならなくなる。
地峡を越えた後の旅がどうなるか分からないので、ノタータスを連れて行くのは気が引けていた。

南大陸より魔獣が多いと言われている北の大地では、ノタータスの鋭い索敵能力は魅力だが、生きて帰れる保証がないためボルビデュスに置いていくつもりだった。
ベルテロイからは駅馬車もあるし、ストラーとの往復の間に少しでも乗馬に慣れる機会があれば、アービィが獣化すれば行程を縮めることも可能だという判断だった。

伯爵たちに見送られてボルビデュスを発ち、ベルテロイからストラー街道に入る。
ベルテロイから半日の行程で、ストラーの玄関口キャスシュヴェルに到着した。

アービィはこの国に来るに当たって、密かに楽しみにしていたことがある。

農業大国であり、酪農も盛んで、ラシアスほどではないが漁業も発展しているストラーは、他の三ヶ国に比べ食文化も発達していると聞いていた。

ボルビデュスに滞在中、自分の料理や菓子が喜んでもらえたことで、ルティとどこかに腰を据えた後は、料理を生業としてみたいと漠然と考えていた。

ティアやメディも一緒にいられたら最高だが、彼女たちには彼女たちなりの生き方がある。

無理に引き留めることはできないが、食堂なり酒場なりの経営が上手くいけば、彼女たちの職も用意できるのではないか。

アービィはそんな考えを、ルティだけには話してあった。

ルティは、二人で腰を落ち着けた後のことは漠然としか考えていなかった。

ティアは楽しそうだからついて行くと言って今まで一緒に旅をしてきたが、いつ離れていくかは彼女次第だ、と思っている。

以前ティアの心が不安定になったときに、自分たちが死んだ後も子孫が一緒にいると言ったが、無理矢理引き留めておくことはティアの生き方を縛ることになるだけだと気付いていた。

メディはギーセンハイムに石化した状態で恋人が待っているから、ランケオラータを救出したらそこへ帰るのだろう。

彼女を養子に迎えてくれるという夫妻も、その帰りを待っているはずだ。

それを無理矢理引き留めることは、やはりできないとルティは考

えていた。

アービィは、この国で将来に役立つことがあれば、積極的に学ぶつもりでいる。

そのためにも、ラシアスであったような厄介ごとがなければいいと、切に願っていた。

そんなアービィの願いは、キャスシュヴェルでの最初の夜に、あっさりと崩されてしまう。

この辺り一帯を治めるオトファ・パラキープ・ニリピニ辺境伯が、彼らの到着を関所から知らされるや否や、屋敷に招待したいと宿に馬車を差し回してきた。

顔も見せずに招待を断ったとあっては、いくらなんでも無礼が過ぎる。

相手の面子を潰して後々敵に回しても面倒なので、とりあえず行ってみるしかなかった。

「私はさ、なんか面倒なことになりそうだから、宿に残ってるよ。どうも貴族って性に合わない人が多くて、ね。

みんなボルビデュス伯みたいならいいんだけど」

メディが別行動を申し出る。

エーンベアで登城した際、バイアブランカ王や主要閣僚といったそれなりの人物であればどうということはなかったのだが、中級以下の貴族たちから向けられる好奇の目や、偏見、蔑みの視線は、やはり気持ちのいいものではなかった。

今回招待してきた辺境伯もそうだと決めつけているわけではないが、どうしても後込みしてしまう。

彼らを送り出した後、メディは一人ごちた。
これじゃ私を偏見の目で見てる連中と変わらないわね……

「よくぞ、我が招待に応じてくれましたな、勇者殿。
ま、ごゆるりとお寛ぎになられるがいい。
じきに食事の支度も整いましょう」
肥満体の男がアービィたちを出迎えた。

しかし、その表情には焦燥感が漂っている。
それさえなければ、領民にさぞ愛されるであろう、人の良さが伺える風貌だ。

ここまで馬車の中から見た整った町の風景は、彼が善くこの町を治めている証だろう。
それでも人々の表情は冴えない。

それは決して重税に喘ぐような、長期に亘って苦しめられた表情ではなかった。
信じていた取引先に突然裏切られ、心ならずも家屋敷を手放さなければならなくなった商人のような顔だ。

「そういえば、お連れの方は、もう一方いらしたはずだか？」
三人を見渡し、腑に落ちないという顔でニリピニ辺境伯が聞いた。

「はい、少々体調が優れないといって、宿で休んでいます」
よく調べている、とアービィは思いつつ、答える。

「さようか。

お体にはお気をつけられよ、とお伝えいただきたい。
この領内で偏見や差別の目で見るような不埒な者は、私が許しませんからな。
ご安心いただきたいものです」
なんとなく理由に気付いたニリピニ辺境伯は、それでもこの領以外のことは保証できませんが、と付け加えた。

「お心遣い、ありがとうございます。
ところで、僕たちをここへ呼んだ理由を伺いたいのですが？」
既に勇者殿と呼ばれることには、アービィは諦めていた。
いちいち違いますと言っても相手は聞いてくれないし、面倒になってきていたのだった。

「実は、この街から南に一日の行程に古い塔があり、観光の名所にもなっています。
この町はストラーの玄関口ということで、通行税や関税で潤っていますが、それだけでは他国から来る方々に恥ずかしくない町並みを整備するには足りません。
そこで、その塔を物見の塔として整備していましてな」
ニリピニ辺境伯は説明を始めた。

アマニュークと呼ばれるその塔は、今から５００年前の戦乱の時代にその場所にあった砦の一部で、ストラーとインダミトの境界を決める戦いの最前線だった。
現在の国境から一日の行程にあるこの塔は、ストラーがインダミトの外圧を跳ね返した証として、ストラー国民の自尊心を満たす役割を果たしていた。

ニリピニ辺境伯領は、代々ベルテロイから来る旅人や商人の通行税、物流に掛ける関税でストラー国内でも有数の税収を上げていた

が、見栄も手伝ってかより良い町並みを作るため、常に税金を投入してインフラの整備に努めていた。
おかげで民の暮らしも便利さでは何不自由ないレベルまで到達していたが、不必要とも思える町の工事のため、税の重さが徐々に暮らしを圧迫するようになってくる。

民の不満が高まってきたと感じた当代領主のオトファは、アマニュークの砦を物見の塔として整備し、そこを観光名所にすることにより、税の負担を減らすことに成功していた。
これにより、新たな雇用も創生することに成功し、民の不満もそらせたと思っていた矢先、この塔に困った問題が起きてしまった。

元はといえば戦乱の跡地であり、多数の戦死者が出た場所だった。
そこを慰霊もせずに、多くの人々が物珍しさでやってきては、塔に落書きをしたり、壁を破壊しそれを来訪の記念に持ち帰るようになってきた。

冥界の死者たちが静かに眠るための慰霊碑が、そうとは知らずに壊されたときに破局が訪れた。
慰霊碑が抑えていた冥界との通り道が開放され、過去の英霊の怒りと、それに触発された悪霊が噴出してしまったのだ。

塔の中は英霊と悪霊の戦いの場となり、見物客が巻き添えを食って殺される事件が頻発する。
当初は、惨殺死体が発見され、破落戸の仕業とされ犯人の捜索が行われた。

しかし、一向に犯人が捕まらないまま被害者が増えていくに従い、塔の見物客は潮が引くように減ってしまった。
事態を憂慮したニリピニ辺境伯は、私兵を投入し塔内の捜索を行

ったが、その最中に私兵が悪霊に英霊と間違われ襲われたことで原因が判明した。

スキルウェテリー卿の協力を仰いで悪霊払いを行ったが、英霊のみが除霊されてしまい、塔は完全に悪霊の巣窟と化してしまったのだった。

悪霊の霊力が強く数も多いため、マ教が送り込む除霊師や悪魔祓いは、ことごとく敗退していた。

このままでは、キャスシュヴェルの町そのものが廃れてしまうという危機感に、町全体が暗い雰囲気に包まれるようになってしまっていた。

ギルドには常に討伐依頼を出しているのだが、当初返り討ちに遭うパーティが続出し、今では誰も依頼を受けようとしなくなっていた。

そこへ、アービィたちが現れたというわけだ。

ニリピニ辺境伯も、アービィたちを取り込みたいという意思はあったが、それは権力のためにではなく、ひとえに悪霊を討伐したいという意志の現れであった。

長い説明と食事が終わり、辺境伯は深い溜息をついた。

勇者殿たちは招待の馬車が差し向けられたとき、ラシアスでの一件を思い出し、断るかもしれないとニリピニ辺境伯は危惧していた。

それが、とりあえず屋敷に招待するまでは成功している。

あとは、如何にしてこの依頼を受けてもらえるかだが、彼には王を接待するときと同じ方法と、あとひとつくらいしか思いつかなかった。

彼が取った方法は、山海の珍味を取り揃え、ストラー自慢の美酒を並べ、そこに多額の報奨金を併せて依頼するというものだった。
それで断られたら、彼は切り札を切るつもりでいる。

アービィたちは、しばらく難しい顔をして考え込んでいた。
できれば厄介事は背負い込みたくない。正直そう思う。

とは言ったものの、このまま逃げ出すのも癪に障るし、見捨てるのは寝覚めが悪い。
しかし、魔獣や人相手であればぶん殴れば済むのだが、悪霊相手で物理攻撃が効くのかが不安だ。

とりあえず、考えさせて欲しいと言ったが、ニリピニ辺境伯にしてみれば最後の望みの綱だったので、首を縦に振るまでは解放しようとしない雰囲気だった。
熱意に負けたアービィがついに依頼を承諾すると、ニリピニ辺境伯はようやく肩の荷が下りたという表情を見せた。

ニリピニ辺境伯は、夜も遅いからと盛んに泊まっていくことを勧めたが、連れの様子も心配ですので、と辞退して宿に戻る。
メディは退屈だったのだろう、部屋で既に飲み始め、できあがりかけていた。

「で～、あたしが行かなくて～、よかったかなぁ～？」
特に嫌味というわけではなく、心配そうにメディが聞く。

「そんなことなかったわ。
宿の人も、別になんか言ったりしてきたわけじゃないでしょ？
そういうことは嫌いみたいよ、ニリピニ辺境伯は」

ティアが心配を解すように答えた。

「あ～、そ～なんだ～。
じゃ～、却って悪いこと～、しちゃったぁ～？」
メディはほっとしたような、しょんぼりとしたような感じだった。

「ところでさ、討伐の依頼を受けることになっちゃったんだけど、いいかな？」
アービィが、申し訳なさそうに切り出した。

「い～んじゃな～い？
ぱぁ～っと片付けて～、早く神殿行こ～よ～」
その点に付いては、メディはあまり気にしていない。
呪文の修練にいいんじゃない、くらいに考えているようだ。

「じゃあ、正式に受ける、ということで。
それでね……」
アービィが事のあらましを説明する。

「う～ん、それって、今持ってる武器じゃ～難しいかもね～。
教会で～、法儀式したくらいじゃ～、悪霊に傷は付けられないかも～」
メディが指摘する。
おそらく、悪魔祓いが敗退した理由はそこだ。

マ教の法儀式では、人の心を害そうとする悪魔に効力は発揮しても、悪霊は力の根源が違うからか、あまり効果がないらしい。
対悪魔であれば、マ教の祝福法儀式はもちろんのこと、アービィにも傷を付けられるような銀製の武器でも対抗が可能だが、悪霊には銀製の武器は効果がない。

低位の悪霊や、悪霊と化してから時間が経っていなければ、まだ現世への執着心が強いため除霊により悪霊を解放することができる。

しかし、高位の悪霊や時間を経た悪霊は、現世に留まりたいという執着より、相手は何でも構わないので傷付けたい、殺したいという悪意が力の根源であるため、除霊という行為では悪霊を解放できないということらしい。

もちろん、通常の武器では全く効力がなく、例え切断しても元に戻ってしまうようだ。

今までは、南大陸にはそれほど強力な悪霊が出なかったことや、悪霊が出ても時間が経つ前に対処できていたために問題になることはなかった。

それが今回は悪霊の仕業と判明するまでに時間が掛かり、マ教では手に負えないレベルまでになってしまっていた。

では、どうするか。

メディが言うには、霊力の問題なので武器に精霊の加護があれば、悪霊は倒せるということだ。

北の大地では南大陸と違う精霊の加護により、より強い霊力で悪霊の霊体を破壊することで倒している。

悪魔には神、悪霊には精霊、ということらしい。

南大陸の精霊にもその力は充分にあるということなので、風の神殿で精霊と契約する際に、手持ちの武器に法儀式を施してもらえば何とかなるのでは、とメディは呂律の回らない口調で説明した。

地水火風全ての精霊による祝福法儀式済みの武器であれば、ほとんど全ての悪霊を簡単に破壊できるが、今から地水火の神殿に行っている時間はない。

とにかく、風の祝福だけでも得られれば、それでも対抗可能だという。
であるならば、明日にでも神殿のあるクシュナックへ出発する必要があるだろう。

方針さえ決まれば、いまできることはひとつしかない。
アービィは、既にできあがっていたルティを尻目に、ティアとグラスを合わせた。

翌朝、宿を経ったアービィたちはニリピニ辺境伯の屋敷へと行き、メディィが昨夜の非礼を詫びたうえでクシュナックで精霊と契約すると同時に、武器に祝福法儀式を施して貰うと説明した。
手の施しようもないと絶望しかけていたニリピニ辺境伯は、たった一晩で解決策を提示して見せたアービィたちを感嘆の想いで見上げている。

「では、ニリピニ辺境伯、行ってまいります。
できるだけ早く戻りますので、それまではやれる範囲で対策をお願いします」
アービィはノタータスに一声掛け、馬車を走り出させた。

ニリピニ辺境伯は、彼らの馬車を見送った後、私兵の中から精鋭を集めクシュナックへと送り出した。
もちろん、彼らの武器に祝福法儀式を施してもらうためだ。

さらに、度胸試しなどでやってくる莫迦者共を締め出すために、残した私兵の一部をアマニュークへ派遣し、無用の立ち入りを禁じた。
彼は、決して無能な領主ではなかった。

他の三ヶ国と国境を接する重要な地域を治めるだけあって、中央の高慢な貴族たちとは一線を画す人物だ。

領民を守るためであれば、どんな手段でも取る。

事の善悪は別にして、もし昨夜アービィが断る素振りを見せたなら、自らの娘であるイヴリーの身体ですら差し出す気でいた。

イヴリーも、貴族の家の娘だ。

当然その覚悟はあった。

だが、アービィがその前に引き受けたことで、それも杞憂に終わった。

もっとも、イヴリーが申し出たところで、アービィは自身の命がルティによって危機に晒されるため、全力で辞退しただろが。

イヴリーは、執務室に篭り、領民のためにあらゆる策を講じる父に、心酔に近い感情を持っている。

自分も父の、そして領民の役に立ちたい。

今朝、父がアービィたちと交わした会話を、彼女は知らない。

イヴリーは大広間に飾ってあった、純銀製の剣を手に取った。

第４４話

クシュナックへ向かう馬車の中で、メディは盛大に落ち込んでいる。

蔑まれ、差別され、偏見の目で見られることに慣れてはいたが、やはり気持ちのいいものではないし、諦めているといっても怒りがないわけでもなかった。

そういう目で見られたときは、怒りを露わにすることはなかったが、その程度のことしかできない奴め、という『蔑み』の目で見返していた。

結局、同じことをやり返しているだけだった。

差別する奴には、そういう奴だという扱いを、つまり差別していた。

偏見の眼差しを向けてくる奴が多い階層に属する者には、そのような見方をされる前から、どうせアイツは私のことをこう見ていると決めつける、つまり偏見があった。

昨日もそうだった。

ニリピニ辺境伯の招待に対して、人となりを知る前から貴族だからと、自分のことをどう見ているかを決めつけて、偏見の目で見て、蔑み、差別していた。

自分がやられて一番悲しいと思うことを、無意識にやりかえしていたのだった。

ニリピニ辺境伯にも下心がなかったとは言えないが、それは領民のことを思えばこそのことだ。

ラシアスでの一件を知らぬ立場でもあるまいに、それでも勇者を

抱き込もうとしたという後ろ指を指されることを覚悟したうえでの行動であるにも拘わらずだ。

見栄があったとはいえ、私財をなげうって町を発展させ、守ろうとしている人を、そんな目で見ていた。

民から集めた税金と言ってしまえばそれまでだが、税は貴族の私財だ。

それを自らの贅のみに費やすのではなく、町のために、見栄であっても結果的には民のために費やしているノブレス・オブリージュを地で行く人物だった。

ここにいる中で、いや今まで会ったことのある人たちを含め、自分が一番賤しい。

メディは自分を、そこまで追いつめてしまっていた。

頬を涙が、一筋伝う。

それは、今まで堪えていた何かの糸が、切れた瞬間だった。

涙が止まらなくなり、しゃくりあげ始める。

止めようと思っても、止まらない。

それどころか、呼吸の幅は狭くなる一方だった。

次第に声が漏れ始め、何時しかメディは号泣していた。

アービィたちがメディの豹変に気付いて心配しているのは解るのだが、涙も声も止められなくなっている。

馬車を曳くノタータスまで、何事かと後ろを振り返り、立ち止まってしまった。

正に号泣だった。

化け物にされたときでも、自分をこの姿に変えたことを悔いた恋

敵が、自ら命を絶ったときでも、その両親と和解したときでも、こんなにも号泣はしていない。

情けなかった。
悔しかった。
悲しかった。
ネガティブな感情が、全て自分を指さして嘲笑しているようだった。

アービィは、人狼が人からどう見られているか知っている。
それ故に正体を隠している。
灰色の髪も瞳も少ないとはいえ、差別や偏見の対象ではなかった。

ティアは、ラミアが人からどう見られているか知っている。
それ故に正体を隠している。
銀の髪も、今変化している栗色の瞳も、髪の色こそ少ないとはいえ、差別や偏見の対象ではなかった。

だが、メディは差別や偏見、蔑みの対象の目印である髪の色も、瞳の色も変えることはできない。
ラミアのティアラの力のお陰で、蛇たちが温和しくしているだけだ。

アービィにも、ティアにも、メディに軽々しく掛ける言葉はなかった。
ただ、何も言わず見ているしかなかった。

ルティにしてみれば、何を言っても傲慢にしかならない。
差別も蔑まれることもなく、偏見を持たれることもない、極普通の立場。

確かに貴族からは、平民ずれがと差別されることはある。
どうせ平民、と偏見を持たれることもある。

だから平民、と蔑まれることがある。
だが、それは別世界の者がどこか遠くで言っていることであり、
メディのように毎日指さされて言われることではなかった。

誰もが言葉もなく、どうしていいか解らなかった。
ただ、泣き崩れるメディの髪を、優しくそれぞれが撫でるしか、
できることはなかった。

その状況を、唯の一瞬で変えた者がいた。

ノータスは極度の緊張のあまり、以前ゲイズハウンドの襲撃を
受けた時と同様、立ったまま失神していた。
足下に水溜まりができる盛大な音が、再度彼の精神状態を雄弁に
語っていた。

「あ……」
馬車が進んでいないことと、盛大な水音にメディが気付き、声を
上げる。

「え？」
他の三人もそれに気付き、間抜けな声を上げた。

慌てて馬車を飛び出し、アービィが渾身の力でノータスが崩れ
落ちないように、首の下に潜り込んでその身体を支えた。
メディは白目を剥きかけた鼻面を、優しく撫でている。

ルティとティアは、クリプトから教わった通り、絞った布でノタータスの身体を吹き始めていた。

馬の身ながら、言語こそ解さないが、空気を読む能力ならば人を超えているノタータスは、優しくケアされていることに安心して目を開けた。

だが、首の下から伝わった、アービィかうっかり解放した狼の気配に、彼の意識は再び深い闇の中へ沈んでいってしまった。

「どーしよーかー？」

直後に襲ってくるルティの折檻に怯えつつ、アービィはノタータスを抱えたまま、棒読みのように訊ねる。

「気配を変えなさい」

ルティはアービィを威しにかかる。

「わかったよー」

ルティの殺意が伝わったアービィは、今度は本気で棒読みになり、狼の気配を収める。

ちょっと震えが入ったことは、御愛敬というものだろう。

二人の芝居がかった雰囲気に小さく笑ったメディは、ようやく涙が止まったことに安堵していた。

三人ともメディに泣いた訳など聞かず、ノタータスの復旧を待って馬車を走らせ始めた。

クシュナックは、キャスシュヴェルから馬車で五日の距離だ。

一日目に泊まった宿で近道がないか訊ねてみたが、途中かなりの

危険を冒して間道を抜けても一日分しか稼げないと言われてしまった。

街灯などないこの時代、夜を徹して走るなどできるはずもない。ノタータスの疲労も考えると、あまり無理もできないだろう。

ゲイズハウンドに襲われたときのこと考えるに、間道を抜けるのは彼の精神のためにも止めた方がいい。

アービィの獣化も、同じ理由から厳禁だ。

結局、二日目以降は宿を取らず、日の出から日没まで走れるように野営することに決めた。

宿に頼んで、翌日の朝食をレーション程度でいいので夜のうちに作ってもらい、宿泊費も夜のうちに清算することにした。

翌朝は日の出前に起きだして、黎明のうちに宿を発ち、クシュナックまでの街道をひた走った。

途中の集落でレーションと飼い葉を買い足し、水場を見つける毎にノタータスに休息を取らせつつ、道を急ぐ。

幸い、街道沿いで魔獣の襲撃に遭うこともなく、四日目の昼過ぎにクシュナックに到着した。

すぐに神殿に行き、それぞれは精霊と契約を済ませ、神官に祝福法儀式について相談する。

祝福法儀式は一日掛かるため、明日にならなければできないこと、お布施が少々高くつくとのことだ。

祝福法儀式は数人の神官が掛かりきりになるうえ、精神力をかなり削られてしまい、数日寝込むような事態になるため、その間の補償という形で、武器や防具一つに付き銀貨五枚のお布施を要求して

いるらしい。

何があるか分からないので、手持ちの武器と防具全てに祝福法儀式を受けることにした。

防具に関して神官と相談すると、例えばルティやティアのようにチェーンメイルと軽鎧を併用するなら、どちらか身体を覆うパーツが多い方だけ法儀式をすれば良く、アービィのようなブレストプレートと篭手となるならば各個にする必要があるとのことだ。

それぞれが必要と思われた防具と、アービィの二振りの短刀、ルティの剣、ティアの弓矢と小太刀、メディの剣、そして汎用性の広い共用のダガーを神官に預ける。

全ての分で金貨一枚を併せて渡す。

メディの剣は、ルティがマグシュテットに行くまで使っていたものだ。

幼い頃から身の回りに武具が当たり前にある環境で育ったメディは、剣であれば形になる程度に扱うことができた。

翌日の夕方、祝福法儀礼済みの武器防具を神官から受け取る。

見た目の変化は全くなく、預ける前と使い心地が変わったわけではない。

それでも刀身が放つ光は、どことなく輝きを増したようにも感じられ、生まれ変わったような印象を受けた。

その際に、ルティはひとつ気がかりなことを、神官に訊ねた。

「これで悪霊たちに、対抗できることは解りました。

ただ、慰霊碑が壊されたままでは、今いる悪霊を倒しても次々に出てくるだけじゃないですか？

どうすれば、それを止めることができますか？」

未来永劫に渡って、自分たちが悪霊と戦い続けるわけにはいかない。

慰霊碑がどれほど壊されているか解らないが、壊される前は封印の役割を果たしていたのだから、これに代わるものか修繕が必要だろう。

「そのことに付きましては、我々からも相談させていただこうと思っておりました」

四人は神官の話を聞く。

慰霊碑自体に悪霊を鎮める力を持たせるには、数カ月掛かりの祝福法儀式を施した石材が必要となる。

金属や木材では長い年月の間に腐敗し、効力がはがれ落ちてしまう可能性が高いからだ。

今回のようなことがあっても、簡単に悪霊が吹き出してしまわないように、アマニュークの砦自体に法儀式を施す必要があると、風の神官たちは考えていた。

まず、高位の神官とアービィたちが砦に突入し、立ち塞がる悪霊たちを討ち鎮めながら壊された慰霊碑まで行き神官が仮の封印を施し、その間無防備になってしまう神官をアービィたちが護衛する。

仮の封印が完了し、新たに悪霊が現出できない状況を作り出し、砦内をさまよう霊たちを滅し去る。

その後、地水火の神殿からも神官を派遣し、砦全体の法儀式と新たな慰霊碑の法儀式を同時進行で行う。

以後砦は立ち入り禁止にしていただきたいところですが、そうも

いきますまい。
そのためには、最低でもこれくらいの処置が必要です。
明日までに、あなた方と同行する者を選んでおきます、と神官は締め括った。

神殿を出ると外はすっかり陽も落ち、街は夕食を選ぶ家族連れや、一日の労働を終えひとときの憂さ晴らしのため酒場や娼館を探す者たち、それらを呼び込む商店の主や酒場女、娼婦たちの声が交錯している。
四人は肩を並べ屋台を覗いたり、さまざまな商店を冷やかしながら、街の風景に溶け込んでいた。

すれ違うどの表情も、不幸を感じさせるものは少なかった。
それを眺めながら、案外と幸せって簡単なことなのかな、とアービィは考えていた。

ルティの両親に拾われてすぐの頃、村の教会の神父から聞かされた昔話は、貧しかった人々が王族になったり、貴族になったり、ドラゴンを退治してたくさんの宝物を手に入れたりしたあと、「そして主人公は幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし」いう話が多かった。
間接的に幸せにとは、贅沢な暮らしができるようになることを示唆するものがほとんどだった。

確かに村の暮らしは裕福ではなかったが、貧困に喘ぐということはなかった。
昔話のような豪奢な暮らしを幸せというのなら、あの村は不幸だったのか。

そんなことはないとアービィは思っている。
ルティと一緒にいられる、それだけだって幸せだ。

お金が全くなければ、それは確実に不幸だ。
だが、豪奢な暮らしができるということだけが、幸せということなのだろうか。

あるに越したことはないが、あれば良いというものではないだろう。
もし、使い切れないほどの財産を手にしても、ルティがいなかったら少しも幸せを感じられないと思う。

この街には差し迫った危機は、今のところない。
もちろん、街を出れば魔獣がうろつき、野盗が獲物を狙っている。
不幸にして命を落す者や財産を奪われる者もいるのだが、それでも街をゆく人々は幸せそうな表情を見せている。
キャスシュヴェルの町にも、アマニュークの災いが起きるまでは、こんな顔が溢れていたのだろう。

アービィは、将来のことと併せて、そんなことも漠然と考えていた。

翌朝、神殿前で同行する神官と合流する。
その神官はエンドラーズと名乗る、仏頂面で不機嫌さを振り撒く男だった。

挨拶こそすれ、自分からは一言も話しかけてこない。
馬車の中でも目を閉じたまま、腕を組んで座っているだけだ。

途中水場を探しての食事の際も、持参したレーションを水で流し込むように胃に納めると、すぐに馬車に戻って目を閉じてしまう。場を持たせられなくなったアービィたちも、つられるように黙り込んでしまった。

かと言って、行程を急ぐために休息が少ないことや、馬車の乗り心地、宿を取らないことについて抗議するわけでもない。聞いたことには最低限だが答えるし、嫌々という感じは漂うが拒絶する感じではない。

どうやら極度の無口で、人付き合いが苦手なだけなのだろうと考えることにした。

それが解ってしまえば、こちらからも最低限の干渉だけに留めたほうが、お互いの精神衛生上好ましいとアービィたちは判断した。

息が詰まるような二日間と、密度の濃い空気が馬車の中を占拠しているような二日間を過ごし、キャスシュヴェルに到着した。

その足でニリピニ辺境伯の屋敷へ行くと、あからさまに雰囲気がおかしくなっている。

領主が迂闊な行動を取るべきではないと考えるニリピニ辺境伯は、執務室に篭って指示を出したり報告を受けたりしているが、今にも執務室を飛び出しかねない焦りを纏わり付けている。

報告に訪れ、指示を受けて行動を起こす私兵たちは、辺境伯の焦りが乗り移ったかのように、屋敷を飛び出して行った。

アービィたちの姿を認めると、僅かに落ち着きを取り戻した辺境伯は、侍女に茶の用意を命じ、アービィたちを執務室に招きいれた。

再開の挨拶もそこそこに、アービィが神殿からの対処法を伝え、

エンドラーズを紹介する。

当面の対処法の説明が終わると、次は辺境伯が現状の説明に入った。

アービィたちが不在の間に、かなり由々しき事態が発生してしまったとのことだ。

辺境伯が私兵を派遣し、度胸試しに集まる莫迦者共を締め出しに掛かる直前に、町の破落戸の一団が砦をねぐら代わりにしようと入り込んでいた。

観光客の足も遠退き、官憲も手出しできない危険域は、彼らにとって隠れ家にするには好都合に思えたのだろう。

私兵が到着し、砦の周囲に警戒線を張っている間に中から悲鳴が上がり、二人の破落戸が飛び出してきた。

中にまだ仲間が、と破落戸が怯えと狂乱の中で叫び、意を決した兵が突入した時点で更なる悲劇が起きてしまった。

彼らが砦に侵入したのは、アービィたちがクシュナックに出立する前日のことだった。

破落戸はいくつかのグループに別れ、砦の中を『探検』していた。

最初に悪霊に襲われたグループ五人は、わずか数秒の間に全員が声を上げる間もなく殺された。

以前は人目もあり、死体をすぐに回収できていたのだが、現在砦の中にいるのは破落戸だけで、それぞれは隠れているだけだと思っていた。

その状態で数日が過ぎ、悪霊が取り付いた破落戸の死体はグールと化す。

グールは肉体が腐敗し続けるが、内側は既に悪霊だ。

腐敗が進み、肉体が維持できなくなると、再度悪霊として現世に留まる。

グールに殺された者は、即グールと化し、更なる被害者を求めて彷徨い歩くのだ。

悪いことにグールはある程度生者だったときの記憶を引き摺っているため、仲間だった破落戸が逃げようとするルートで待ち伏せるという悪虐な方法で自らの仲間を増やしていた。

八日の間に最後の一グループ六人を残し、入り込んだ破落戸全てがグールと化し、辺境伯の私兵が砦を囲んだときに、そのうち逃げ切れた二人が飛び出してきたのだった。

慌てて救出のため突入した私兵に、たった今グールに変化した四人と他のグールが襲いかかり、瞬く間にグールが増えていく。

命辛々脱出した兵がなんとか砦の門を閉め、グールが外に出ることを防いだ。

それまでは観光客や破落戸という獲物がいたため外に出ようとはしなかった悪霊だが、たった今逃した獲物を追うグールにつられ、共に砦から出ようとしていた。

決死の思いで兵が門に閂を掛けて周り、今のところ外部への侵出は食い止めているが、いつそれが破られるか甚だ心許ない状況になっている。

一刻を争う事態になっていると判断したエンドラーズは、明日を待たずに現地へ向かうと言った。

馬車の中で見せていた無愛想、不機嫌といった雰囲気が一変し、

心の底から楽しそうな生き生きとした表情になっている。

「さぁ、いきましょう！！
私のことはご心配なく。
精霊の加護を受けた私に、悪霊如きが私に傷ひとつ付けられるものではありません」
エンドラーズは持参した荷物から、聖水と仮封印用の法儀式済み銀箔、法儀式済み聖剣を引きずり出し、身体に括りつける。
そんな嬉しそうにしなくても、という表情のアービィたちも手早く準備を整え、アマニュークへと出立していった。

アマニュークへ向かう馬車の中では、別人かと思うほど饒舌になったエンドラーズが、作戦の詳細を説明する。
詳細といっても、難しいことは何一つ言っていない。

私兵が持つ武器に聖水を掛けて簡易の法儀式を済ませ、万が一外部に侵出した悪霊に対処できるようにしてから、門を一つだけ開けアービィたちが突入する。
まずは、壊された慰霊碑を目指し、それに仮封印を施した後、心置きなく悪霊とグールを殲滅する。

「精霊が愛するこの世界を侵す者共を、私が許しておけるはずがございません。
アマニュークを以って、奴らの墓標としてくれましょうぞ」
うきうきとした口調でエンドラーズはそう説明した。

「楽し……そうですね、エンドラーズさん」
ルティは圧倒されている。
これから死地へ向かうというのに、まるで鴨射ちにでも行くような気楽さだ。

「当たり前ではございませんか。
何憚ることなく、悪霊共を滅することができるのですぞ。
これを愉しいと言わず、なんと申しましょうか。
ここまでの道中、逸る心を抑えるのにどれほど苦労したことか」
何のことはない、キャスシュヴェルまでの道中は不機嫌だったのではなく、無理矢理感情を抑えていただけだったのだ。

「でも、その楽しそうな雰囲気は、悪霊と戦えるだけ、というわけではなさそうですね？」
メディが、何か気になるという感じで問いかけた。

「お分かりですか？
マ教の無能共が失敗したのですぞ、これは痛快。
だいたいき奴らは、どちらが先か良く考えて欲しい。
精霊あってのマ教ということに、いつまでたっても気付かない無礼者共です」
エンドラーズは、今度は吐き捨てるように言う。

南大陸で精霊信仰の発生が先だったのか、マ教の成立が先だったのかは判然としていない。
ただ、大陸の中心にあった精霊神殿が、現在ではマ教の聖地となっている。

このことに反感を抱く精霊神殿の神官は、意外と少なくない。
精霊神殿が元はといえば一つのものを、四つに分けられてしまっていることも、かれらの反発を招いている。

当初は四国家の思惑でマ教を中心に置き、互いに反意無しということを証明するために四大精霊を各国に分祀したのだった。

そのせいでマ教は力を持ち、精霊神殿は求心力を失っていった。

マ教は唯一神マ・タヨーシが精霊を祝福したと喧伝し、精霊神殿は四大精霊がマ・タヨーシを祝福していると主張している。

互いに相手を滅するという発想はなく表面上は共存を謳っているが、南大陸における信仰の主導権争いは水面下で火花を散らしていた。

そのマ教がしくじったのだ。

エンドラーズは、それが痛快だった。

その様を見て、なんとなく似ている人を知っていると、アービィは感じていた。

日没までの僅かな時間ではあるが、エンドラーズの気迫が乗り移ったのか、ノタータスがいつになく張り切って道を行く。

完全に日が落ち、これ以上の行軍は無理と思ったそのとき、エンドラーズが馬車を出て御者台に登る。

「では、ご覧頂きましょう。
我が精霊呪文の奥義」
エンドラーズは手短に呪文を唱える。

アービィには、その呪文が火のレベル３『猛炎』であることが分った。

それを何故ここで、と訝しんでいると、エンドラーズは火球を掌に作り出し、上空へ投げ上げた。

馬車の前方数ｍに落下すると見られた火球は、地表に激突することなく、そのまま馬車の前方を照らす明かりとなり滞空している。

得意げな顔で振り向くエンドラーズと、恐怖に引き攣った顔で振

り向くノタータス。

「ええい、何を怖気づいておるのか、馬っ！！
あの火球が貴様に近寄ることはない。
案ずることなく進めっ！！」

エンドラーズが叱咤すると、そちらのほうが怖いのか、ノタータスはおっかなびっくり歩き始める。

しかし、いくら歩いても火球に近寄る気配はなく、火球は進行方向に一定の距離を保ったまま、馬車を先導するように中空を進んでいた。

ようやく安全と悟ったか、ノタータスの歩みが普通に戻ったところで、エンドラーズは満足そうに馬車に戻った。

「あれって、何なんです？」

アービィが呆気に取られたまま聞いた。

「あれは、『猛炎』を利用したものです。
通常『猛炎』に限らず、他の呪文も効果が続く時間は長くありません。
ですが、精霊との交信が可能な我々は、通常の呪文に精霊への祈りを加えることで、あのように効果を操ることもできるのです」

もちろん、無限ではありませんし、人により持続時間もまちまちですが、と付け加える。

天を飾る星の角度が変わる頃、エンドラーズの『猛炎』の効果が切れた。

再度呪文を使うのかと思ったが、さすがにこれ以上進むことは無理と判断したようだ。

「そろそろ野営と致しましょう。
焦って明日に疲れを残しても困りますし、あの利口な馬をこれ以上走らせるのも忍びない。
幸い、効果が切れる前に水場もあったようですので、そこまで戻りましょう」
そう言って、それほど効果が長続きしない『火球』を唱え、道を引き返す。

川の傍に野営地を張り、エンドラーズはレーションを胃に流し込むとすぐに横になり、気が付くと寝息を立てている。
嵐のような男の行動に、アービィたちは畏怖と呆れを感じていた。

ほぼ同時刻、ニリピニ辺境伯の屋敷で蠢く影があった。
イヴリーは、父に気取られないように広間に飾った純銀製の剣を取り、一日の移動に必要な食料や回復薬等の準備をしている。

もし、悪霊討伐に行くといっても父が許すはずがなく、かと言って屋敷で指を銜えて見ているのは嫌だった。
イヴリーは武芸一般を貴族の嗜みとして修めてはいる。

だが、それは道場剣法であり、実戦に役立つかといえば首を傾げざるを得ないものであった。
一本取ればそれで終わりの試合と、相手が倒れて動かなくなるまで斬撃を振るい続けなければ、自らが打ち倒されてしまう死合とでは、身体の使い方から体力の配分、心構えまでまるで別物だ。

イヴリーはそのことに気付いていない。
御前試合等で、それなりの成績を修めている彼女は、己の剣技が実戦に通用すると思い込んでいた。

僅かな照明に照らされ、鈍い光を放つ純銀の刀身に、イヴリーは魅入られている。

陽が昇り始める前の黎明に、アービィたちは起き出して馬車を走らせていた。
まさに日に夜を継ぐといった勢いで道を急いだため、陽が昇り切って暫くするとアマニュークの砦が見えてくる。

「さぁ、いよいよです。
悪霊共をたった今抜けてきた夜の世界へ還してやりましょうぞ」
エンドラーズは、全身から闘気を発散させている。

「そうですね、じゃ、一丁おっぱじめますか」
アービィが、獣化しないように気遣いつつ、今現在出せる闘気を全開にした。
一瞬エンドラーズの表情が驚愕のそれに変わり、次いでこれ以上楽しみなことはないといものに変化した。

「人とは思えない闘気。
いや、これは楽しみです」
エンドラーズは、高らかに笑い出す。

今から気を張る必要はないのだが、相手を安心させる効果があるかと思い、アービィは闘気を発散させた。
目的を達した今は、一度気を収め、精神を落ち着かせている。

ルティは紙を切る修練の息遣いを、思い出していた。
実体を持たない悪霊相手に、通常の斬撃が通用するとは思えない。

どれほど刀身に気を込めることができるか、それが生死の分れ目だと思っている。

ルティは頭の中で霊体を切り裂き続けている。

ティアは、エンドラーズが封印の法儀式に掛かり切りになる間、悪霊やグールを遠距離で仕留め近寄らせないことを考えている。

そのため矢を多めに買い込んで法儀式を済ませていた。

メディは、法儀式の間はエンドラーズから離れず、最後の盾になるつもりだった。

呪文の回数が多くないので、回復や治療はルティやティアの方が良い。

少しでも二人が回復や治癒に徹することができるように、悪霊の気を引くつもりでもいる。

日の出と同時にニリピニ辺境伯の屋敷から、一騎の馬が駆け出した。

馬上には、イヴリーが軽鎧に身を固め、純銀製の剣を二本佩いている。

全力で駆け抜ければ、アマニュークまでは昼過ぎには到着できるだろう。

彼女は、途中の集落で馬を徴発するつもりだった。

一分でも、一秒でも早くアマニュークに辿り着けるように。

第４５話

「それでは、皆様よろしいか？
突入致しますぞ」
もう待てないといった風に、エンドラーズが宣言する。

「じゃ、行きましょう」
眦を決したルティが応え、兵に合図を送る。

おそらく数体の悪霊かグールが、門が開いた隙に飛び出してくるだろう。
アービィたちは、それに構わず突入する。

襲いかかってくれば迎撃するが、外を目指すなら兵たちが待ち構えているので、そちらに任せばよい。
既に兵たちの武装は、聖水による簡易な法儀式済みだ。

数回の戦闘であれば、充分に耐えうるだけのものはある。
万が一のために聖水を別容器に取り分け、外部警備の指揮官に預けてある。

簡易法儀式ではどうしても対処できないほど凶悪な霊体やグールの場合には、直接聖水を掛ければ一撃で倒すことはできなくても、かなり弱体化することができるはずだ。
そのうえで近接戦闘に持ち込めば、後れをとるような事態は避けられるだろう。

そのために聖水の容器は、わざと割れやすいものを使用し、離れていても投げつけられるようにしている。

唯一の不安は、ついさっきまで仲間だった者がグールと化し襲ってきた際に、それを滅し去ることに躊躇いを感じてしまわないかだけだ。

一度グールにされた者を、元の姿に戻す方法はない。

『死者』に悪霊が取り付いている者に、火の白魔法『解呪』や『全解』では効果は得られないからだ。

速やかに滅し去ることこそが、なによりも死者のためというものだろう。

三、二、一の掛け声と共に、アービィたちが門の隙間に滑り込む。

十数体の悪霊やグールが門の隙間に殺到するが、アービィの剣がカウンターでそれらを斬り、爆散させる。

アービィを掻い潜った悪霊も、続いて襲ってくるルティとメディの剣やティアの小太刀、エンドラーズの剣が逃さない。

僅かに二体の悪霊が門の外にすり抜けるが、外で待ち構えていた兵たちが殺到し、寸刻みにするかのように滅し去る。

グールが抜け出さなかったことで、彼らの戦意に些かの曇りも見られなかったのは救いだった。

アービィたちは後ろを振り返ることもなく門を閉めるように命じると、戦乱の巷へと身を投じていった。

「さて、ここからが本番ですな。

お〜、寄ってくる、寄ってくる。

千客万来。

自然の法理にまつろわぬ者共を、解放してくれましょう」

エンドラーズは、日頃の枷を外していいことに歓喜の雄叫びを上げた。

エンドラーズの剣は、宙を滑るように寄り付く悪霊や、首の筋肉が失せてしまったかのように歩みとともに首を揺らすグールを、まったく寄せ付けずに切り捨てる。

横になぎ払われた悪霊は、剣の軌跡を境に分断され、上下の身体が宙に撒いた小麦粉のように爆散した。

縦に斬り捨てられたグールの両体が、噴き零れる血飛沫とともに日乾しにされたようになり滅却される。

やれやれといった表情のティアは、自らの悪意に苦しめられたうえ、無残なまでに滅される悪霊に同情してしまいそうだった。

それでも現世への悪意を残すわけにも行かず、小太刀を振るいグールの身体を斬り潰していった。

エンドラーズが先頭に立ち、次々にドアを開け部屋に突入する。

アービィとティアが続き、ルティとメディはドアの前に残り背後を警戒する。

室内に屯する悪霊を、エンドラーズとアービィ、そしてティアがはたきで埃を払うがごとくあっさりと殲滅し、廊下を滑るように寄ってくる悪霊は、ルティが斬り裂き、メディが叩き潰す。

エンドラーズは悪霊やグールたちにとって二度目の死を振り撒いていた。

「ねぇねぇ、エンドラーズさん。

慰霊碑の場所って、ひょっとして知らないんじゃないですか？」

片端からドアを開け、悪霊を切り捨てることに集中していたが、いくら倒しても減る気配を見せない悪霊に不安になったアービィが

問いかける。

「いかにもっ！！」

いとも簡単に、力強い返答が返ってきた。

「……

えっと、かな～り、無駄な行動？」

額に指を添えつつ、ティアが搾り出すように呟く。

「そんなことは……ございま……せんっ！！」

言い返すエンドラーズ。

「なんですか、今の微妙な間は！？」

突っ込まずにはいられないティア。

「いや、早く行かなければとは思うのですが。

分らないものは分らないのですよ」

さぁ、探しましょう、とエンドラーズは開き直って答える。

悪霊たちの群れを掻き分けるように、彼らは砦の中を進んだ。

四角形に作った回廊に東門から突入し、北から西、そして南へと向かって進み、そろそろ一周する頃だが一向に慰霊碑のようなものが見つからない。

三階建ての砦の四方の角に尖塔の崩れた後があり、そのうち一つを物見の塔として整備しなおしてある。

残りの三つは戦史の遺物として、そのままの姿でそれ以上崩れないように補強が成されていた。

塔に慰霊碑を作ったという話は聞いていないので、回廊のどこか

だろうとアービィたちは考えていた。
エンドラーズの自信満々の態度に、てっきり場所は知っているものだと思っていたのだ。

ニリピニ伯も、エンドラーズが聞いてこないのは、慰霊碑の場所や砦の造りを知っていると思ったからで、特に説明は不要だと思ってしまっていた。
ここへ来て、一行はすっかり手詰まりになっている。

これから一階を調べ終わって、二階三階と上がっていくのはいかにも効率が悪い。
かといって、当てずっぽうに開けて回り、見過ごしてしまってはさらに効率が悪い。

仕方がない、といった風に、また一部屋ずつ開けて確かめ、悪霊たちに死を振る舞う。
アービィは、一度撤収して周囲を固める兵たちに砦の造りを確認して再突入のほうがいいのでは、と考え始めていた。

疲労はたいしたことはないが、いつの間にか昼を過ぎている。
一度撤収することを言い出し、東門へと進み始めたとき、目的とする辺りで悲鳴が聞こえた。

昼頃にアマニュークに辿り着いたイヴリーは、兵たちに門を開けるように命じた。
しかし、兵たちはアービィたち以外を通すことはニリピニ伯により禁じられていたため、イヴリーの要求を聞いていいものか戸惑ってしまう。

当たり前に考えれば、辺境伯の命令とその令嬢の要求では、どちらを優先するかは考えるまでもないが、普段から令嬢への忠誠心も培われている兵たちにとって、抗い難い要求であることも確かだ。

それでも、令嬢への忠誠心より令嬢の身を案じる親心に近い感情が、門を開けることを拒ませていた。

また、兵たちは、砦内に法儀式済みの武器なしで突入するなど、日頃人殺しの技を磨いている自分たちですら無謀な行為であることを挙げ、そこへイヴリー程度の技量の者が法儀式を施していない武器防具で入ることは自殺行為でしかないことを指摘して諫めている。

それがイヴリーには気に入らない。

イヴリーは、それなりに自分の技量に自信を持っているが、それが道場剣法であることに気付いてはいない。

兵たちとの鍛錬でも、兵たちは道場のルールに則ってイヴリーと剣を合わせているに過ぎず、いざとなれば相手の喉笛に喰らい付くような隠された技術を見せることはない。

ましてや雇い主の令嬢に怪我をさせるわけにも行かず、適度なところで降参するように申し合わせが成されている。

ニリピニ伯も、娘を武人として育てたいという希望は持ち合わせておらず、最低限の武技と護身術が身に付けばよいという程度だったので、兵たちが娘との立会いに手を抜いていることには、ある意味感謝していた。

縛り上げて屋敷に送り返す方法もあったが、これは指揮官が寸でのところで留まってしまった。

結果的にはこれが一番良い対応策だったのだろうが、雇い主の令嬢への最後に残った礼儀がそうさせなかった。

ついに指揮官は、イヴリーの熱意に負けた。
イヴリーの父を想う心根に動かされた部分と、やはり目の前で命令されてしまっては逆らい切れない部分とがあった。

最終的に兵たちは、中にいるアービィたちとエンドラーズに期待することにして、対応を丸投げしてしまった。
兵のほとんどが剣を抜き払い、門に向かって構える間、指揮官は最後に残った聖水をイヴリーの剣に振り掛ける。

指揮官に法儀式を施すことはできなかったが、多少でも聖水の効力が剣に宿ればアービィたちと合流するまでくらいは持つだろう、そう期待しての行動だった。
そして、イヴリーを叱り飛ばして門から摘み出してくれることを期待しつつ、すり抜けてくる悪霊たちに備えつつ門を開けた。

イヴリーは、勇躍門の中に踊り込み、群がる悪霊に剣を振るう。
聖水の効果が悪霊を斬り裂き、まるで風船を割るかのように消滅させていった。

あまりの呆気なさに、何が彼らを恐れさせたのかイヴリーは訝しむが、技量の差だと勝手に思い込む。
だが、数十体の悪霊を斬り捨てた時点で、聖水の効力も切れていたことには、気付いていなかった。

そこへ、グールが襲い掛かる。
悪いことに、そのグールは私兵の犠牲者の一人で、イヴリーとも顔見知りだった。

殺されて一日程度ではそれほど腐敗も進まず、生前の姿をほとん

ど残している。
イヴリーは何故自分に刃を向けるか怒鳴りつけるが、生前の幽かな記憶より殺意と悪意が上回り、イヴリーに襲い掛かってきた。
寸でのところでグールの一撃をかわしたイヴリーは、剣を横薙ぎに一閃させる。
間違いなくグールの胸に刃が届いているが、斬り裂いたはずの部位は刃が通り抜けた瞬間に傷が塞がっていく。
門から遠ざかるように走り、グールの攻撃を避けるが足が縺れ床に倒れこむ。
床に仰向けに転がったイヴリーに、覆い被さるようにグールが圧し掛かり、喉に手が伸びてきた。
イヴリーの表情が驚愕の形に固まり、喉から悲鳴が絞り出されたとき、グールの姿が消失した。
アービィは、少女に圧し掛かるグールの脳天に、法儀式済みの短刀を投げつけた。
狙い違わずグールの脳天に突き刺さった短刀は、そこまで飛翔した物理エネルギーを減じながら、そのままグールを刃の進行方向に押し潰した。
呆気に取られ、茫然自失状態の少女をルティが引き起こし、門に向かって引き摺っていく。
突然我に帰った少女はルティの腕を振り払い、傲然とした態度で文句を言い始めた。
ルティは、この少女をニリピニ辺境伯の屋敷で見て、辺境伯令嬢であるイヴリーと知っていた。

このままここにいても、殺されるだけだということも。

「何を……

私もお父様のお手伝いをさせてくださいっ！！

どこへ連れて行こうとなさるのですか！！」

イヴリーは、ルティの手を振り払おうとする。

「決まってるじゃありませんか。

あなたが殺される前に、門から連れ出します。

ちょうど、私たちも外に用事がありますので」

平然とルティが答えた。

文句言う前に、何かいうことあるんじゃありませんか、お嬢様。

そう顔に書いてある。

「私が殺される？

誰に？

この私を誰が？」

理解し難い、といった風情でイヴリーが言った。

「たった今、潰されたカエルみたいな格好で、声だけは可愛らしく悲鳴を上げていらしたのは、どこのどなた様？」

急接近した悪霊を一刀両断しながら、ティアが畳み掛ける。

後から際限なく湧き出てくる悪霊に、さすがに疲れが見え始めていた。

やはり、ここは一度退き、慰霊碑の場所を確認してから出直さなければ、ジリ貧になるばかりだ。

「今のは知ってる顔だから驚いただけです。

ですか――」

なおも言い募ろうとするイヴリーが言い終わる前に、音もなく目の前に立ったアービィの平手打ちが気持ちのいい音を残してイヴリーの頬を捉えた。

全員が言葉もなく悪霊と戦っている。
アービィが手を出すとは思えなかったのだ。

――見た？　モロよ。手加減なし……？
メディがルティに囁く。

――あれ、手加減はしてるわよ、ティアなんて剣の腹で力一杯よ……
ルティが答える

――あれは痛かったわ～、目から火花が出るって、初体験だったもの。
ティアが注釈を入れる。

――アービィ殿も容赦がございませんな。
エンドラーズは笑いを堪えている。

――手加減くらいはしてるよ～
アービィが弁解した。

もし本気だったら、首の骨が一発で折れているだろう。
さすがにそれくらいはアービィも分って、脳震盪を起こさない程度に加減はしていた。

イヴリーは頬を押さえたままで、黙って立ち尽くしている。
いつの間にか、イヴリーとアービィを中心に、背中合わせの円陣

になっていた。

そのまま東門に向かってじりじりと進む。

アービィは床に刺さった短刀を抜き、イヴリーに渡した。

「とりあえず、これで身を守るくらいはできますよね？

とにかく一度外に出ます。

慰霊碑の場所が分らなくちゃどうしようも――」

「知ってますわっ！！

こちらですっ！！」

アービィにみなまで言わせず、イヴリーは円陣を突き破り走り出した。

取り残された一行は、付き合い切れんという表情になるが放っておくわけにもいかず、また有効な情報を持つなら利用するしかないと開き直り、イヴリーを追い始めた。

イヴリーは一行が付いてくるのを見ると、僅かに自尊心が満たされたか満足げな表情を見せていた。

東門の前に戻ったと思うと、門と反対側の大扉の前にイヴリーが立つ。

息を整えたイヴリーが扉を指で差しながら、こちらです、と意思表示する。

「この中？」

エンドラーズ以外の四人が、一斉にエンドラーズを見た。

一番近いところじゃないですか。八つの瞳がそう責めている。

入ってすぐ開けては見たが、奥が暗かったため、後回しにしようとエンドラーズがいきなり閉めてしまっていた。

その後、三回同じようなことがあったのだった。

「いいじゃないですか、皆様方。
ちょうど良い準備運動ですよ」
笑いながらエンドラーズは、まったく悪びれることなく答えた。

「この扉の中は、回廊から中心に向かう廊下です。
東西南北の回廊から伸びている廊下の交点になる部屋に慰霊碑があります」
アービィの平手打ちで少しは焦りが抜けたのだろうか、イヴリーはさっきと別人のような落ち着いた表情になっている。

「では、少々体力回復と参りましょうか、皆様。
おそらく、中は悪霊共の通り道。
今まで以上の数が襲って参りましょう」
エンドラーズが聖水で床に魔法陣を描く。

「この中にお入りください。
悪霊やグールから姿が見えなくなります。
皆様、回復薬と触媒はお持ちでしょうな？」
中心に陣取ったエンドラーズが全員に訊ねた。

魔法陣の中に入ると、外周には薄い曇りガラスがはめられたように外側が見える。
悪霊やグールが側を通るが、全く気付かないようだった。
時折、悪霊やグールが魔法陣の外周に触れると、弾かれたように数m跳ばされる。

全員が『回復』を掛け合い、疲労を取り去る。
触媒を用いて活性化させた回復薬で、呪文の使用回数を回復させ、

しばしの休憩を取った。

「ところで、さっき私の顔に手を挙げたあなた。
どういうおつもりかしら？」

差し迫った危機を脱したからか、イヴリーがアービィに突っかかる。

「お尻ぺんぺんの方が良かったですか？
大人の扱いのつもりでしたが」

アービィは微塵も悪いと思ってない。

イヴリーは十九歳になっているので、この世界でも充分大人と認められる年齢だ。

手入れの行き届いたしなやかな髪は、栗色と言うには少々色素が薄いが、それが光沢となり気品を醸し出している。

その髪を後ろで一つに纏め、鎧の背へと流しているが、先程の戦闘で埃まみれだ。

健康的に日焼けした肌は快活な性格を物語っているが、少々釣り気味の双眸は負けず嫌いな勝ち気さも表していた。

瞳は南大陸では一般的な栗色で、その下に続く鼻と口はバランス良く整えられている。

何不自由なく育てられたであろうが、その身体に無駄な贅肉は溜め込まれることはなく、そのせいではないだろうがルティには親近感を抱かせる体型を軽鎧に収めていた。

「……っ！！
なんて、はしたないっ！！

そんな、私を幼児扱いなさると!?」
プライドを傷付けられたか、イヴリーはアービィに絡み続ける。
「これは失礼しました。
幼児に。
あなたはまだお分かりではないようですね。
ここは命の遣り取りをしてるんです。
道場のように、一本取れば相手が引き下がるところじゃありません」
アービィが一気に切り捨てた。
「なによ、幼児に失礼ってっ!!
お父様にちょっと目を掛けられてるからって、いい気になってるんじゃないわよっ!!
だいたい、なんで討伐の命令を受けてるのに、クシュナックに行ったりしてんの!?」
顔を真っ赤にしてイヴリーが怒鳴り散らす。
あまりの言われように、身に染み付いているはずの嗜みすら吹き飛んでいた。
「あなたは僕たちと辺境伯様との話を、全部聞いていた訳じゃありませんね?」
アービィは、イヴリーを落ち着かせようとする。
ここで魔法陣を飛び出されたら、また余計な戦闘に巻き込まれてしまう。
まず、討伐は命令ではなく、依頼によるものだということ。
次いで悪霊を滅するには銀製の武器やマ教の法儀式ではなく、精霊による祝福法儀式が必要であること。

永続的な法儀式の効力を得るには、神殿に行かなければならないこと。

さらには、急にいなくなったイヴリーを、辺境伯が何よりも心配するであろうことを、アービィは懇々と説明した。

「そう……

私は……役立たずなの？

お父様の役に立ちたい、少しでも力になりたいって……そう思ってはいけないの！？

ダメってことなの！？」

イヴリーは自分の行動の迂闊さに気付いていたが、素直に認めるには中途半端に年齢を重ねていた。

もっと幼ければ、親に叱られたときのように素直に聞けたかも知れないし、さらに年齢を重ねていれば、間違いを糺すことに抵抗を感じないように成長しているかもしれなかった。

少女と青年の境にある時期特有のプライドが、彼女が本来持つはずの素直さを邪魔している。

「あなたは、本来辺境伯様のお側にあってお支えするのが、一番お役に立てるんです。

でも、今は……」

アービィは少しの間、どう言葉を続けるか迷った。

このまま役立たずと説教を続けて外に放り出すか、プライドを粉微塵にするのではなく、多少は満たせるように案内をしてもらうという形で治めるかを迷っていた。

一番簡単なのは、慰霊碑までの道も解ったし、イヴリーを砦から放り出して五人で進むことだろう。

だが、もう言うなりになることはないだろうが、外を固める兵た

ちがイヴリーの八つ当たりで蒙るであろう気苦労を考えると、このまま手元に置いた方がマシかも知れない。

自分たちは法義式済みの防具があるので悪霊から傷を受けることはないが、イヴリーはそうもいかない。

聖水の余分はないので、エンドラーズによる簡易な法義式も無理だ。

「では、こう致しませんか？」

アービィの迷いが解ったのか、エンドラーズが助け船を出す。

今からイヴリーを外に放り出すと、警護の兵たちに多大なる迷惑だ、とはっきり言い放ち、最後までご同行願います、と全員に宣言する。

戦闘に口出しは認めません、大人しく我々の指示に従ってただきます、と言い渡す。

不満げなイヴリーには目もくれず、アービィたちに向かい、慰霊碑までの作戦を提案した。

さして広くない廊下を進むため、陣は基本的に単縦陣で最も戦闘力があるアービィとエンドラーズが先頭か殿を務める。

次いでルティ、イヴリーと続くが、イヴリーの両側をティアとメディがエスコートする。

悪霊の噴き出し口に近付くにつれ、霊力が高まるために壁抜けくらいして来るであろうことへの対策だ。

ここまで進む間に悪霊たちの霊力を推し量っていたエンドラーズは、噴き出し口はさほど広くはなく、霊力の減衰が著しいことを感じていた。

広い噴出口があれば、冥界から漏れ出る霊力に後押しされ、砦の外壁など物ともせずにすり抜けることができたはずだ。

生物に対する攻撃力しか持たず、無生物を破壊することができない悪霊共には、冥界からの霊力の後押しがなければ、紙一枚の壁すら抜くことはできなかった。

慰霊碑の間と回廊を隔てる大扉が、何らかの封印効果が付与されているのか、霊力を遮断する役割を果たしているようだ。

だが、その大扉を抜ければ、噴出口まで冥界からの霊力を遮る物はない。

慰霊碑の間までの廊下では、どこから悪霊が湧き出てくるか予測が付かないのだった。

そのため、最後尾にも戦闘力が高い者を配置する必要があった。

隊列の中間に攻撃を受けた際、先頭にいては振り向く分だけ対処が一呼吸遅れてしまうが、最後尾であれば踏み込むだけで済む。

これだけなら誰でも務まりそうだが、同時にバックアタックにも備えていなければならないからだった。

「あなた、何者なのです？
風の神官風情で私に命令する気ですか？」

言葉遣いや態度は礼儀正しいが、あまりにも一方的な物言いがイヴリーの癇に障ったのか、態度に棘がある。

「これは、これは……
自己紹介がまだでございましたかな。
私は、風の精霊神殿最高神祇官、エンドラーズと申します。
精霊に全てを捧げております故、家名はございません」

イヴリーが言うような、ただの神官風情が貴族に対して命令する

などとんでもないという論法に従うならば、最高神祇官に貴族風情が対等の物言いをするなど、さらに許されない不遜な振る舞いだ。
最高神祇官に対等に物申すなど、王と上位の王位継承権者まで。
公爵家当主ですら、対等な物言いは無礼といわれている。

弾かれたようにイヴリーが後退り、片膝を突こうとするが、魔法陣から出そうになってしまい、エンドラーズに引き戻される。
場を改めてイヴリーは片膝を突き、頭を深く垂れ、顔の前で両手の指を組み合わせ、礼拝の形を取る。
生まれて以来、叩き込まれてきた最高神祇官への尊敬の念と、礼儀作法がそうさせていた。

アービィたちは、今まで軽口を叩き合ってきた相手がとんでもない人物と判明し、目を白黒させたまま立ち尽くしてしまった。
尊敬の念がないとか礼儀作法に疎いというわけではないが、場の展開に頭が着いていってない。

それに　風の最高神祇官は齢七十に手が届くと聞いていた。
眼前で超然とした佇まいを見せる男性は、どう見ても三十代半ばか四十に手が届くかといった容貌だ。

精悍さを湛えた顔の造作は、決して厳しさだけに染め上げられてはおらず、深い優しさを湛えている。
引き締まった身体には贅肉などひとかけらも認められず、近接戦闘に不可欠な筋肉への直接打撃を防ぐための適度な脂肪があるだけだ。

「え～っ！！
エンドラーズさん……いえっ、エンドラーズ様って、そんな偉い方でした……のぉっ！？」

ルティが叫ぶように聞いた。

「いやいや、そのような態度は不要ですぞ、イヴリー殿。
あれ？
言ってませんでしたかな、ルティ殿？」

初対面では、湧き上がる戦いへの期待感を抑えるために、終始不機嫌に見える態度でほとんど言葉も発していない。

その後は逸る気持ちが先走り、身の上の話などする機会は全くなかった。

そういえばニリピニ辺境伯の屋敷でも、状況を把握をするなり飛び出してきてしまったので、知っているはずの辺境伯も何かを言う暇すら与えられていなかった。

最高神祇官が人前に出ることは滅多にないため、イヴリーが知らないことも仕方のないことだった。

「聞いてませんっ！！
それに風の最高神祇官様は、もっとお年を召した方だとばかり……」

呆れ半分で、今までの態度を改めることを忘れたルティがさらに聞く。

「当年取って六十八の爺です。
精霊のご加護で肉体の年齢は止まりましてな。
代々最高神祇官は、何か超自然的なご加護を受けています。
五感の何れかが超人的であったり、人心を読み取る力があったりと」

私のような例は聞いたことがありませんが、と付け加えた。

「いえ、それはいいとしてですね……

そのようなお立場の方御自ら、このような危険な場所にお越しになっていいのですか？」
多少落ち着きを取り戻したアービィが訊ねた。

「出てくるまでは、大変でしたぞ。
皆、年寄りの冷や水とまで申しましてな。
解ってもらえるように、実力で出てきたまでです」
そういえば、風の神殿を出るときに、前日に会った神官を含め、誰も見送りに来ていない。
戦いの渦に身を投じる仲間なのに、と思っていたが、エンドラーズの態度から何となく曲解し、その件については聞くことができなかった。

ということは、最高神祇官が不在のうえ、アービィたちの武器防具に祝福法義式を施した神官たちだけではなく、さらに数人の神官が不在となっているということは、風の神殿は機能不全に陥っている可能性があるということか。

「さっさと終わらせようね」
僕が言いたかったのはそういうことじゃないんです、と呟きつつ、アービィが頭を抱えて言った。

前述の隊形を組み、大扉を引き開け慰霊碑への廊下に滑り込む。
すぐに人の気配を察知した悪霊が、音もなく接近してくる。

正面から来る悪霊は、エンドラーズが片っ端から斬り捨てる。
一瞬何かが爆発したように、煙のような粉塵が辺りにまき散らされるが、それに怯む者はいない。

イヴリーにはアービィの剣を片方貸してあるので、最低限身を守ることはできるだろう。
しかし、一対一の修練しか積んでいないうえ防具がないため、多数を相手にさせるのは無理と見て、両側のエスコートは不可欠だ。
群がる悪霊をいったいどれほど斬っただろう、廊下の奥に広間が見えてきた。
真っ先に大扉を通り抜けていれば、労力は四分の一以下で済んでいたはずだが、イヴリーを救うことはできなかったかもしれない。
「さて、ようやく到着のようですが……」
一行は広間に入っていった。
そこは、一辺が２０ｍ程の広間になっていた。
中心には、山から削り出しただけと言う風な平たい石が佇立しており、古語で死者を悼む言葉が刻まれている。
しかし、その言葉を打ち消すかのように、どぎつい色の塗料で言葉として発することをはばかられるようなスラングが、見るに耐えないほど書き連ねられていた。
そして、石の下部が集中的に打ち砕かれ、掘り返されたように地面に大きな溝ができている。
溝からは障気が溢れ出し、冥界から悪霊が湧き出ていた。
その石碑の前には、今まで襲いかかってきた悪霊とは全く別物の、強大な悪意を感じさせる身の丈１ｍ程の小柄な悪霊が、黒い衣を纏って立ちはだかっている。
レイス。

エンドラーズの口から言葉が零れ、それまでの表情が一変する。

寄りによってとんでもない悪霊が、現出していた。

悪霊というよりは、悪魔に近い存在。

数多の悪霊を使役する力を持ち、祝福法義式済みの武器でさえ急所を外せば無効化してしまう。

倒すには、的確に急所である眉間を突くしかない。

持てる魔力は、無限。

生前の精神力だけで存在しているためか、呪文の使用回数に限界はない。

祝福法儀式のおかげで物理的な攻撃は受け付けないが、繰り出されるレベル４の呪文が脅威だ。

そしてこちらの呪文は、身に纏う闇の衣が効力を減殺してしまう。

対抗するには、地の白魔法レベル２の呪文効果を減殺する『魔壁』と、レベル４の全ての攻撃を減殺させる『全壁』、そして風の白魔法レベル２の呪文を封じる『封魔』だけだ。

エンドラーズが全ての呪文を操ることができる稀有の人であるし、ルティとティアもレベル２は使えるようになっているので呪文の不備はない。

最も確実な戦法は、『封魔』レイスの呪文自体を封じてしまい、斬り捨ててしまえばよい。

しかし、風の最高神祇官を以ってしても、レイスが纏う闇の衣を通して呪文の効力を発揮させられるか、その保証は全くない。

『魔壁』でレイスの呪文のダメージを減殺し、斬りかかるしか方

法がないかもしれない。
なにしろ、レイスを倒さないことには、慰霊碑に祝福法儀式を施すことができない。

邪魔なのだ。
単純に、そこにいることが邪魔だ。

レイスさえ排除できれば、あとはエンドラーズが法儀式を行う間、アービィたちで悪霊を寄せ付けなければよい。
溝は、聖水を流し込んで悪霊の噴出を一時的に止め、持参した法儀式済み銀箔で塞いでしまえばそれで済む。

メディがイヴリーに寄り添い、他の四人がレイスの前に立った。
エンドラーズが『全壁』を、ルティとティアが『魔壁』を唱える。
その声を合図に、アービィが闘気を全身に漲らせ、剣を振りかざしレイスに突っかけていった。

第４６話

アービィが一閃した刃は、的確にレイスの喉元を捉えている。
確かな手応えをアービィは感じるが、レイスは怯む様子もない。

ならばと袈裟懸けに斬り下ろすが、これもレイスの身体を捉えるものの、ダメージは微塵も与えられない。
レイスの身体は斬れているのだが、刃が通り抜ける側から再度くっついてしまう。

まるで水を斬るかのようだ。
エンドラーズがアービィに指示を飛ばす。

「アービィ殿、眉間です。
それ以外は無駄っ！！」
そう言って、エンドラーズはレイスの正中線を狙って、剣を振り下ろす。

レイスの動きは、他の低位の悪霊と比べると、遙かに遅い。
だが、減速せずに方向転換できたり、数ｃｍであれば瞬間移動かと思うほどの速度だったりと、急所を捉えるのは困難を極めている。

防御呪文のお陰でレイスが放つレベル４の攻撃呪文は効果が減殺されているが、防御呪文の効果は永続ではない。
切れる前に重ね掛けを心掛けてはいるが、それでも間に合わないときがあり、その際に受けてしまったダメージは、徐々にだが蓄積されている。

闇の衣の中には腐った人体が収まっており、激しい腐臭をまき散

らしている。
両目は力なく濁っているが、的確にこちらを捉え呪文を放っていた。

低位の悪霊たちも寄り集まっているため、レイスに攻撃を絞ることもできず、これも斬撃の正確性を狂わせていた。
メディはイヴリーのエスコートで手一杯になっていて、レイスへの攻撃には加われないことも、責めきれない要因の一つだった。

それどころか、低位の悪霊共は防御力の低いイヴリーを狙い始めており、メディ一人では完全に防ぐことは難しくなってきていた。
ルティかティアが手を貸さなければ、破局が近いことは火を見るより明らかだ。

エンドラーズがイヴリーとメディめがけて、レベル４の火の呪文『爆炎』を放つ。
二人に掛けてある防御呪文の効果に期待しての援護だ。

辛くも『爆炎』を耐えた二人が周囲を見ると、蝟集していた低位の悪霊は全て身体から炎を上げて燃えていた。
ひと心地ついたメディが、疲労度が高そうなティアに『回復』を掛け、すぐに剣を構え直す。

アービィは『大炎』をレイスに叩きつけるが、こちらは全く効果がなく、周囲の木材に小さな飛び火を作っただけだった。
ここまで互いの攻防は一進一退だったが、ルティとティアの防御呪文が尽きてからは、防御が固いレイスが徐々に押し始めている。

――人の身でありながら、よくぞそこまで練り上げたものよ……
レイスから言葉が伝わる。

音声としてではなく、アービィやティアがするのと同じ念話とも違う、心に直接侵入してくるような「声」だった。

――だが、我を倒すには術が足りない……

そう言うとレイスは両手にそれぞれ『爆炎』を発生させる。

――まずは、そこな女……

ゆっくりとした動作で投げつけられた巨大な炎は、至近距離故に退避が間に合わなかったルティを直撃し、周囲の悪霊を巻き添えに盛大な火飛沫を弾けさせる。

ルティは悲鳴を上げて倒れると小さく痙攣し、動かなくなった。

「ルティっ！！」

アービィとティアが駆け寄ろうとするが、レイスの片手に残されていた『爆炎』が、再度炸裂する。

アービィの目の前を通り過ぎた炎は、これも悪霊を薙払いつつ、ティアを包み込んだ。

盛大な爆発が起き、ティアがはね飛ばされ壁に激突して崩れ落ちる。

爆発の影響は倒れ込んだルティにも及び、その身体を跳ね上げ、肺の空気を絞り出させた。

ルティとティアが細かく身体を痙攣させるが、間隔が少しずつ長くなり、やがて完全に動きが止まる。

怒りに相貌を歪ませ突っ込んでくるアービィにレイスが『爆炎』を叩きつけるが、人狼の呪文への抗堪性が辛うじて吹き飛ばされることを防いだ。

「貴様ぁっ！！」
突進力を『爆炎』で減じられたが、それでもアービィは全力を脚に込め、レイスに頭から突っ込む。

剣がレイスの身体を透過するのと同じように、アービィの身体が闇の衣を透過し、レイスの身体にめり込んだ。
急所である眉間を瞬間移動で数ｃｍずらし、致命傷を受けることを防いだレイスがあざ笑う。

向こう側に突き抜けたアービィが、再度レイスに突っ込む。
ダメージは与えられないが、次の呪文を妨害する効果はあった。

通り抜けざまに眉間を狙い剣を突き立てるが、レイスは間一髪の差で避けきっている。
何度繰り返したか、さすがにアービィも息が上がり始めていた。

息を整えたほんの一瞬の遅れが、レイスの呪文を完成させていた。
風のレベル４の呪文『雷電』、急減な突風を幾つも起こし、空気の摩擦で小型の雷を起こすものだ。

レイスの視線がイヴリーとメディを捉えている。
狙いは明らかだ。

既に戦力とはいえないルティとティアを後回しにして、小賢しくも回復薬を使ってくる二人を仕留めようというのだ。
アービィは、レイスの腕の動きを目で追い、『雷電』が発現する瞬間に自らの身体を電光に被せた。

剣が避雷針の代わりになり、アービィの身体を電撃が走り抜ける。

人狼の抗堪性を以ってしても、至近距離で炸裂した『雷電』には、アービィの身体は確かなダメージを受けている。

アービィは片膝を付き、剣を杖になんとか床に崩れ落ちることを拒んでいるが、後一発喰らえば意識を飛ばされるかどうかの危ないところまで追い詰められていた。

再度、レイスの掌に『爆炎』が発現し始めている。

再現フィルムを見るかのように、アービィが突っ込むと同時に『爆炎』が叩きつけられる。

目の前で炸裂した『爆炎』を掻い潜ったアービィが、レイスの身体に自らの身体をめり込ませる。

――よくぞ『爆炎』を耐え――

唐突にレイスの「声」が途切れる。

闇の衣を透過し、レイスの身体に自分の身体がめり込んだ瞬間に、アービィは『大炎』を発動させていた。

体内を焼く炎が腐肉を焦がし、異臭を辺りに振り撒く。

初めて感じる苦痛にレイスがよろめいて溝の前から退いた隙に、エンドラーズは『猛炎』に持続の効果を付与して溝の中に押し込んだ。

レイスの『爆炎』三発にほとんどの悪霊が巻き添えを喰い焼き尽くされていたため、一時的にでも溝から悪霊が出られなくすれば状況は打開できる。

エンドラーズの一手により、戦力の均衡が一気に崩れた。

ルティとティアは、炎と爆発のダメージで動けない。

特にルティは『爆炎』を二発喰ったと同じ状況で、正に生死の境をさまよっている状態だ。

メディがルティを引きずり戦場から引き離し、ティアにはイヴリーが駆け寄って回復役を使用するが、あまりのダメージに焼け石に水を掛けるかのようだ。

悪霊の噴出をひとまず止めたエンドラーズが駆け寄り、それぞれに傷を全快させる『快癒』を掛けて回る。

傷や火傷は瞬時に消え去るが、それでも二人は失神状態から覚めなかった。

しかし、呼吸が安定したことにエンドラーズは安堵し、大声でアービィに知らせた。

アービィは、ルティを自力で救えない無力感を怒りに転化し、レイスの身体を焼き尽くそうとしている。

呪文を発動させた状態でレイスに拳を打ち込み、レイスを内側から破壊していた。

闇の衣は呪文の火に焼かれることはないが、内側の腐った人体はほとんどか炭化している。

『大炎』を使い果たした後は、『火球』を使用限界の１０発叩き込んでいた。

既にレイスは動くことも『声』を発することもできず、なすがままの状態だった。

早い段階で眉間に一発打ち込めば、そこで戦闘は終わっていただろうが、ルティを殺されかけたアービィは、あっさりと苦痛から開放してやる気など、ひとかけらも持ち合わせていない。

完全に動きの止まった、しかし急所を的確に外されていたため、苦痛の中でも意識は鮮明なレイスの前で、アービィは剣を構える。

レイスの双眸が絶望の色に染め上げられた直後、アービィの剣はゆっくり、一秒に１ｍｍずつ、レイスの眉間に吸い込まれていった。

エンドラーズとメディが、再度集まり始めた悪霊共を斬り伏せる間、５分以上もかけてアービィは剣の柄までレイスの眉間を突き通していた。

レイスの後頭部に剣先が突き通り、とっくに絶命していたレイスの身体をぼろ雑巾のように、溝の中でまだ燃えている『猛炎』の炎の中に叩きつけた。

『猛炎』が作り出す上昇気流にレイスの死体が浮き上がると、アービィは狼の気を剣に込め闇の衣を斬り裂き始める。

レイスが生きていたときには魔力の相乗効果で剣を透過していた闇の衣も、本体が死んだ今、その能力の過半を失っていた。

切れ目から炎が侵入し、レイスの僅かに残った肉体を焼き尽くす。

『猛炎』の効果が切れると同時に、主を失った闇の衣は細かい切れ端となり果て、冥界へと還っていった。

呆然と立ち尽くすアービィの目の前に、炎が消えた溝から新たな悪霊が湧き上がる。一刀の元にアービィが斬り捨てると同時に、エンドラーズが聖水を流し込む。

銀箔で溝を塞ぎ、自ら手首を切り裂いて迸る鮮血で周囲に魔法陣を描き、祝福法義式を行う準備を開始した。

息を吹き返したティアが、済まなそうにアービィを見た後、弓に矢をつがえ、近寄る悪霊を片端から射抜いていく。

未だ意識が戻らないルティの側で、アービィは剣を振るい続けていた。
メディはティアの援護に回り、イヴリーが適わぬまでもアービィの援護に死力を振り絞る。

どれほどの悪霊を斬り捨てたか、誰もが解らなくなった頃、慰霊碑の間に悪霊が姿を現すことはなくなり、エンドラーズによる祝福法義式も完了した。
即座に回復用の魔法陣をエンドラーズが僅かに残った聖水で描き、倒れたままのルティを中心にして全員が回復の作業を行う。

一時間ほどの休息の後、ルティは漸く意識を取り戻した。
直に床の上に寝かせるのはつらいだろうと、アービィがルティを膝に乗せ、上体を抱えている。

徐々に視界が鮮明になり、皆の心配そうな顔が輪郭を成してきた。
安堵の表情で見下ろすエンドラーズとイヴリーに、涙を浮かべたティアとメディの顔が判別できた。

一番近いところからアービィの気配を察して首を傾けると、人目を憚ることなく涙を流すアービィの顔が目に入る。
そして、自分が今どのような状態に置かれているかを漸く理解し、爆発するかのような恥ずかしさに顔が真っ赤に染まった。

「恥ずかしい……よ」
ルティがやっとそれだけ言葉にすると、アービィはそのまま強く抱きしめて、ルティの頬に自分の頬を擦り寄せ、声を殺して泣いている。

「きゃっ……
みんな、なんか、いろいろゴメンね……」
身動きの取れないルティは、嬉しいような困ったような表情で全員に謝り、唯一動かせた右手でアービィの髪を撫で始めた。
結局アービィが落ち着きを取り戻すまでに、さらに一時間を要したため、残った悪霊討伐は明日に回してこの日は一度撤退することにした。

「アービィ、もう下ろしてっ！！
恥ずかしいからっ！！
歩けるっ！！
いやぁっ！！　自分で歩くぅっ！！
ぎゃぃあぁっ！？」
東門の中からルティの怒鳴り声が聞こえたかと思ったその時、内側から門が開き、ルティの怒鳴り声は悲鳴に変わった。

砦から出ると、冬の太陽は既に地平線下に姿を没し、警備隊が篝火を焚いて待っていた。
その夜、アマニューク砦の周囲では、篝火が途切れることなく焚かれ続け、人々の歓喜の声も絶えることがなかった。
もっとも、歓喜の主人公たちは翌日の討伐に備え、早々に寝袋に潜り込んでしまったが。

ルティが回復の兆しを見せていても、アービィは魔法陣を解いた後ずっとルティを抱えたままだった。
慰霊碑の間から回廊への通路を抜け、大扉を開ける際に、生き残りの悪霊やグールがいると危ないからと言って、ルティはなんとかこの羞恥プレイから逃れようとした。
しかし、大扉の前に立ったエンドラーズが、ものも言わずに大扉

を開け、『爆炎』を回廊に叩き込み、ルティの抵抗の術を奪ってしまった。

回廊に出た後も、東門を中心にして左右を『爆炎』で薙払い、ルティの抵抗を未然に防ぐ。

それでもルティは自分で歩けると最後のか細い抵抗を試みるが、アービィがそれに対しての反応を見せる前に、イヴリーによって無慈悲にも開け放たれた門から見える篝火に、羞恥の悲鳴を上げてしまった。

「よくぞ、ご無事にお戻り下さった、英雄殿」

警備隊の面々と、娘を心配して駆けつけたニリピニ辺境伯が安堵の表情で出迎える。

ニリピニ辺境伯が感嘆の面持ちで労いの言葉を紡ごうとするが、イヴリーの姿を見てそれ以上の言葉は出てこなかった。

アービィたちが無傷に近いのは、まだ理解できるが、イヴリーまでもがほぼ無傷で帰還したことに、辺境伯は感謝の念しか浮かばない。

イヴリーの不在と広間に飾ってあった純銀の装飾剣がなくなっていることで、娘の暴挙に気付いた辺境伯は、警備兵から連絡を受けるまでもなく、アマニュークに急行していた。

昔取った杵柄とやらで馬を駆けさせ、途中の集落で新たな馬を徴発し、半日でここまでたどり着いていた。

対策のために設えた本部を空けたり、全体を見渡し判断を下すべき立場を擲って娘の安否を気遣うなど、指揮官にあるまじき行為だ。

しかし、これを責めようという者は、誰一人いなかった。

それどころか、幕僚として辺境伯を補佐する者全てが、辺境伯の行動を是認し、指揮官に向後の憂いを少しでも感じさせないために、自発的に行動を起こしていた。

ある者は冒険者たちが怪我を負って戻ることを考慮し、治癒師を馬車に詰め込みアマニュークへと急行させる。

またある者は辺境伯の執務室に陣取り、次々に入る報告に対し、自らの職責で判断できるものには即座に指示を出し、辺境伯の判断が必要なもので急を要さない件は引き下がらせ、急を要する案件ならば辺境伯の元へ伝令を走らせた。

キャスシュヴェルの町が、ひとつになった瞬間だった。

領民たちは、領主の苦衷を知っていた。

多くの領民は、徴収された税が辺境伯の贅に費やされるだけではないことを知っている。

国外から来る賓客に嘲られることがあれば、それは伯の恥というだけでなく、自分たち領民の恥ということも、ストラーの玄関口を自認する国際感覚を身につけた領民には解りすぎるほど解っていた。

辺境伯が無様な肥満体になってしまったのも、ひとえに領民たちを想えばこそだ。

まさか、賓客に出す食事を見ているだけでは済まされない。

自らを以て毒味と成し、賓客たちをもてなすことも、キャスシュヴェル領主として逃れることのできない仕事だった。

キャスシュヴェルの民は、領主の体型が自らの欲望の結果ではないことを知っている。

アービィたちのアマニュークでの戦いが領民たちに伝わると、あ

る者はアマニュークへ駆けつけようと家を出た。
またある者は辺境伯の屋敷に行き、伝令を買って出る。

誰もが、アマニュークの災厄を、我がものと思っての行動だった。
それは辺境伯領を狙う周囲の貴族連を、落胆させるに充分なことだった。

玄関口の町を持つという栄誉は、ストラーのほとんどの中級貴族にしてみれば、喉から手が出るほど欲しいものだ。
見ているだけで入ってくる通行税と関税は、ニリピニ辺境伯の体型を誤解するような俗物にとって、己が贅を確約する以外の何物でもなかった。

社交界や王宮では、隙あらば辺境伯を蹴落とし、その座を奪おうと権謀術数が入り交じっていた。
そこには民を思う気持ちなど欠片もなく、己が栄達と豪奢な暮らしへの羨望しかない。

彼らはニリピニ辺境伯の失政を待つだけでなく、民を離反させるために間諜を送り込んでもいる。
アマニュークの災厄は、彼らにとって辺境伯と領民を離反させる千載一遇のチャンスだったが、却ってニリピニ領を一つに纏める効果しか見られず、敢えて離反工作など起こそうものなら、長年掛けて民に紛れ込ませた間諜を炙り出させてしまうだけだ。

結局彼らはニリピニ辺境伯が、以前より利用民からの信頼を集めることを、切歯扼腕しながら見ているしかなく、辺境伯領との間の関税を微妙に値上げする程度のささやかな嫌がらせしかできることはなかった。
それでも何人かの中級貴族は、辺境伯がアービィたちを逗留させ

たことを王に対する叛意ありと、嫌がらせの一環としてそれぞれの派閥の長に報告している。

砦内の残敵掃討を完璧に済ませたアービィたちは、エンドラーズを見送った後は戦いの疲れを癒すためもあって、辺境伯の勧めに従い数日間屋敷に逗留することにしていた。

風の精霊と契約を済ませたことで、全ての呪文を使うための準備ができた四人は、あとはランケオラータ救出のため北の大地を目指すだけだ。

辺境伯は、アマニュークの一件を早馬でオキプス・アクス・ミリオ・サウルルス王に報告している。

臣下として当然の行いだった。

アマニュークの災厄の原因、経過、対応、そして結果を詳細な報告書に纏め提出している。

その中で、もちろんアービィたちについても言及し、北の大地へ旅立つまで暫く当地に逗留させる旨も記載していた。

他の中級貴族たちから叛意ありと報告されていたことを辺境伯は知らなかったが、結果的にこの報告書が叛意はでっち上げだと証明するようなものだった。

そして、アービィたちを臣下に加える意志がないこと、辺境伯からも充分な報酬を支払うが、ストラー王国としても褒賞を出すべきだと結んでいた。

サウルルス王は、ニリピニ辺境伯からの報告書を読み、アービィたちを取り込む余地ありと見て胸をなでおろす。

そして、褒賞を渡すことを名目に、王都に来ること要請するよう

にニリピニ辺境伯に命じた。

王都ストラストブールは、ニリピニ辺境伯領キャスシュヴェルから、馬車で8日の行程だ。

往復と王と滞在の日数を考えると、ボルビデュス伯爵との約束まであまり余裕がない。

万が一の場合は、ストラーから直接ラシアスへ行き、国境の町でノタータスをクリプトに引き取りに来てもらうことも考えている。

当初はキャスシュヴェルからクシュナック、そしてストラストブールと回ってくる予定だったが、アマニュークの災厄で、思わぬ時間を取られてしまった。

ニリピニ辺境伯の勧めで、既に十日近くキャスシュヴェルに滞在している。

ルティの体調は既に元に戻っていたが、アービィが大事を取るといって聞かなかったことと、辺境伯だけではなく領民たちからの歓待を無下に断るわけにも行かなかったのだ。

あからさまに取り入ろうとする者や取り込もうとする者もいなくはなかったが、ほとんどは町の危機を救ってくれた英雄への素直な感謝の気持ちで接してきていた。

それにしても、そろそろ出立しなければ、北の大地への旅立ちが遅れてしまう。

名残惜しい気持ちを抱えつつ、アービィたちはキャスシュヴェルを発つことにした。

日の出から日没まで走るため、途中は宿を取らずに行くことをニリピニ辺境伯に伝え、アービィたちはキャスシュヴェルを出た。

町の人たちからの餞別を馬車に山と積み、町の門が見えなくなるまでアービィたちは手を振っていた。

ニリピニ辺境伯は、アービィたちが町を出るとすぐに早馬を仕立て、王都へと彼らの予定を知らせる。

打ち合わせ済みのことであり、無駄な日数を費やさずに済ませるためだ。

アマニュークの戦いで、アービィたちは呪文の習熟度を上げていた。

アービィは、レベル1が10回、レベル2が9回、そしてレベル3が2回使えるようになっていた。

ルティは、レベル1と2が10回、レベル3が4回だ。

ティアは、レベル1と2が10回、レベル3は7回。

メディが進境著しく、レベル1が10回、レベル2が8回、レベル3も1回使えるようになった。

地の白魔法は、防御力を上げる『防壁』、魔法防御力を上げる『魔壁』、呪いに掛かり難くなる『呪壁』が使える。

地の黒魔法は、相手の動きを封じる『地縛』、攻撃力を倍加する『倍力』、相手の立っている場所に局所的な地震を発生させる『地震』が使えるようになっている。

水の白魔法は、疲労を取る『回復』、軽微な傷を治す『治癒』、傷を全快させる『快癒』が使用可能だ。

水の黒魔法は、水流を敵にぶつける『水流』、体内の水分を凍らせる『凍結』、氷の刃が敵を襲う『氷刃』が使える。

火の白魔法は、体内に入った毒を中和する『解毒』、麻痺を無効

化する『解痺』、呪いを解く『解呪』が使える。
火の黒魔法は、小さな火球を敵に叩きつける『火球』、オーガ程度なら包み込む炎を生み出す『大炎』、数倍の大きさ、温度の『猛炎』が使用可能になっている。

そして、今回契約した風の呪文は、白魔法が周囲の敵を探知できる『探知』、相手の呪文を封じる『封魔』、味方一人なら動きを倍速にできる『加速』が使用可能だ。
黒魔法は、風の刃が相手を切り裂く『風刃』、小規模な竜巻を起こす『強風』、ワイバーンさえ叩き落とす『暴風』が使えるようになり、戦術の幅が広がった。

防御呪文や攻撃の補助呪文は基本的に一人用だが、パーティ全体にかけることもできる。
その場合は、効果が出ないものが出るか、全体に薄い効果になってしまう。
攻撃魔法も同様だ。

レベル４の呪文の習得は、低位のレベルとは少々事情が異なる。
レベル３までは、精神力が耐えられるほどに強化されていれば、下位レベルの使用限界が１０回に達していなくても習得できるようになるが、レベル４は精神の消耗が激しいため、レベル３までの使用回数が１０回に達していなければ習得できない。

残る呪文は、地の白魔法は全ての物理攻撃、魔法、呪いへの耐性を上げる『全壁』、黒魔法が相手を大地から弾き飛ばす『跳発』だ。
水の白魔法は戦いで落とした命を呼び戻す『蘇生』、黒魔法が津波の物理エネルギーを叩きつける『海嘯』が残っている。
『蘇生』は、病死や事故死に効果はなく、また時間が経てば経つほど失敗する確率が上がる。

チャンスは一度だけで、『蘇生』に失敗すると、二度と命を呼び戻すことはできない。

火の白魔法は、全ての状態異常を解消できる『全解』、レイスが多用した『猛炎』の数倍に達する『爆炎』が残っている。
風の白魔法は、的確に場所をイメージできれば瞬時に移動できる『移転』、空気の摩擦で雷を呼び起こす『雷電』が残されている。

これら全ての呪文を自在に使いこなせるようになれば、アービィの獣化も自在に操ることもできるようになるだろう。
しかし、レベル４の使用限界を１０回に達せられるのは、いつになるか、まだ予想も付かなかった。

ストラストブールまでの途中、立ち寄る集落全てで彼らはアマニュークの英雄として迎えられていた。
どこの集落も、ぜひ泊まっていって欲しい、アマニュークの話を聞かせて欲しいと懇願してきたが、先を急ぐため心苦しくも断り続けている。

当然反発もあったが、北の大地へ行かなければならないことを説明すると、ではその後ぜひ、とようやく解放してくれるのだった。
そして、どの集落でも、その地の領主へアービィたちの到着と通過は、早馬で知らされている。

野営地にその地の領主である貴族の使いが来たこともあったが、王からの召喚で急ぐという理由で招待を辞退し続けている。
それでも自派にアービィたちを引き込みたい貴族からの接触は、昼夜を問わず続いていた。

ある貴族は領内を荒らす魔獣の脅威を訴え、ある貴族は対立する領主の悪行をことさら過剰に訴える。

またある貴族はストラーを発展させるためという建前の聞こえの良い言葉を並べ立て、ある貴族はあからさまに天下取りを訴えた。

どれもこれも裏に野望や欲望が透けて見えるため、アービィたちは事を荒立てないように気をつけながらもニムファに言ったことを繰り返すのだった。

それでも、しつこく食い下がる貴族には、貴国の王からの召喚を無下にしてまで招待に応じる理由をお聞かせ願いたい、と強く出ることもあった。

ノタータスには少々負担だったかもしれないが、8日の行程を5日に縮め王都ストラストブールに到着したのは、既に日も暮れ辺りを闇が包む頃だった。

アービィたちが町を囲う城壁を潜る際には、衛兵が貴族を迎えるかのような態度で迎え入れた。

あまりの仰々しさに驚きを隠せない彼らに、衛兵はアマニュークの英雄を迎えるに当たって礼を失するようなことがあっては、ストラー王国の沽券に関ります、と背中に鉄棒でも入れたかのような姿勢で答える。

アービィたちは安宿の場所を聞くつもりでいたが、この様子では肩が凝ってしまいそうな宿しか紹介してくれそうもなく、試しに聞くとやはりその通りだった。

「う〜ん、できれば酒場併設のような、気楽なところがいいんですけど……」

アービィが困り顔で聞いた。

「いえっ。
皆様にそのような宿を紹介したなどと、後で知れたら懲戒モノです。
ぜひ、今紹介した宿を取っていただきたいのですが」
あくまで職務に忠実な衛兵も、困り顔になっている。

「じゃあ、今夜は野営してきますから、まだ着てないことにしていただくというわけには？」
打開策を提案してみたが、衛兵の答えは逃げ場を塞ぐようなものだった。

「それが、皆様方の馬車を確認した時点で、王宮へ報告しておりまして……
実は、宿には宰相であります、ステルバイ・コンディス・デュ・デバリ公爵がお待ちになっております」
逃げ道はないようだった。

アービィは、よそ行きの料理より庶民が普段食べているものに興味があり、それもあって安宿が良かったのだがそう言ってもいられないようだ。
宰相までが出てきてしまっているなら、顔を潰すようなことはできない。

王からの召喚のために急いでいると言う言い訳も、通用するわけがない。
ここは宰相の顔を立てて、待っているという宿に行かなければなるまい。
ここまでに見てきた貴族たちの行いに、暗澹たる思いになるアービィたちだった。

衛兵から宿の場所を聞き、馬車を街の中へ乗り入れる。
衛兵の一人が馬で先導し、目立ちたくないというアービィたちの希望を粉微塵に打ち砕いた。

おそらくストラストブール一であろう格式の宿の前で、先導の馬が止まり、宿の中から従業員たちが弾かれたように飛び出してきた。
他国の王侯貴族の到着時でさえ、ここまでの出迎えは無かろうという大仰さに、周囲の人々の視線が集まる。

馬車の扉がドアマンではなく、コンシェルジュによって引き開けられ、人々はどのような人物が降りてくるのか、扉の中を見詰めている。
その中を、腰が引けまくりのアービィが降り立ち、続いて申し訳なさそうな表情のルティ、なぜか泣きそうになっているティア、目が泳いでいるメディと続いて降りてきた。

周囲の人々は、どこの王侯貴族かと思って見ていたが、降りてきたのがまた少年少女の面影を残す、どうみても明らかに平民であることを見て取り、落胆の空気が馬車を中心に広がっていく。
その空気を、コンシェルジュの一言が一気に変えた。

「ようこそ、アマニュークの英雄殿」
ざわめきが広がり、そこここから感嘆と疑いの入り混じった声が上がる。

「さあ、どうぞお入り下さいませ。
中ではデバリ公爵様がお待ちでございます」
今度は感嘆一色の声が上がった。
まさか一国の宰相が、相手を間違えるはずはないからだ。

消え入るような小さな声で、お世話になります、とコンシェルジュに告げ、人々の視線から逃げるように四人は宿の玄関を潜った。荷物を担ごうとしたが、ポーターが毟り取るように全てを運び始めてしまう。

中に入ると、そこは自分たちが住む世界とは絶対に違う空間が広がっていた。

全ての従業員が礼儀正しく、控えめな笑みをもって接してくる。

それぞれに用意された一部屋で四人が充分に泊まれそうな豪華な部屋に通され、宰相様との会食の準備が整いましたらお知らせに上がります、と客室係が告げて扉が閉まる。

ベルテロイの宿でも感じたこそばゆさに、四人ともすぐアービィの部屋に集まってしまった。

サイドボードに用意されているお茶を飲みながら何を話すでもなく時間を潰していると、ご用意が整いました、と客室係が扉の外から声を掛けてくる。

ラシアスでも摂政に会う前の晩に宰相に会ったことを思い出し、気が重くなるアービィだった。

第47話

「王都ストラストブールへようこそ、アマニュークの英雄殿。そしてヒドラ殺しの英雄でもありますな。ご存じとは思うが、私が宰相を務めている公爵ステルバイ・コンディス・デュ・デバリです。以後お見知り置きを」

恰幅の良い五十代後半の男性が言った。

亜麻色の髪には白髪が混じり始めており、目尻の皺と共に年齢を物語っているが、視線には衰えを感じさせない力強さがある。

少々灰色がかった瞳を収めた垂れ気味の双眸は、初対面の者には親しみやすさを感じさせるが、それは相手を観察していることを悟らせないための擬態であった。

いささか肉が弛み始めた頬や頸は、往年の覇気を感じさせることはないが、これも擬態のひとつとなっていた。

柔らかに感じさせる物腰も、まずは安心感を与え警戒心を抱かせないための擬態なのだろう。

「その言い方はご勘弁ください。僕はそんな、たいしたことをしたわけではありません。エンドラーズ様がいらっしゃらなければ、何もできませんでしたし」

悪霊を斬り伏せることはできたが、封じたのは風の精霊神殿最高神技官だ。

今頃は不承不承公務をこなしているであろう、エンドラーズを思い出しながらアービィは答えた。

南大陸各国にある精霊神殿から神官が派遣され、アマニューク全

体に祝福法義式を施し、同時に新たに設置するための慰霊碑にも法義式を行っている。
エンドラーズが行うべき仕事は、それこそ馬に喰わせるほどある。

その際に見せるであろう不満たらたらの表情を思うだけで、自然と笑みがこぼれてしまうのはエンドラーズの人柄のお陰だろう。
アービィの笑みを自信の裏返しと取った宰相デュ・デバリ公は、考えを巡らせている。

彼は、王を輔弼する任を背負った宰相であり、建国の際の初代王の庶子の家系であった。
現王とも遠く血が繋がっており、主君に対する忠心と同様に親戚に対する親募の情も持っている。

現王は、とかくプライドだけが肥大した愚王と陰口を叩かれているが、一部は正しく、一部は間違いだ。
王の性格から戦乱を望まないことだけは、はっきりとしている。

残念なことに、王にそのような覇気は無い。
だが、王にはかつて南大陸を支配した、大帝国の直系だというプライドだけはある。

何れの国も帝国の末裔ということを喧伝はしているものの、かつての帝王の血は四王家の中ではストラーの王家にしか残っていないことは確かだった。
それを以って王は、南大陸に君臨したいという願望を持っている。

大陸統一は、一国が担う事業としては巨大すぎることを、王は熟知している。
四国家の中でも食料資源に恵まれたストラーは、最も多い人口を

誇るが、それでも大陸全土を支配するには人口が足りない。

従って、王の戦略は他の三国家を残したまま、その上位に自国を置くというものだった。

大陸の指導者。その称号を王は欲している。

しかし、それは戦略というにはあまりにも大雑把で、目標といったほうがいいものだ。

王は国家の方針を決め、細かいことは口出ししないという、家臣にとっては理想的な態度を取ってはいたが、お題目を唱えるだけでは方針を決めているとはいえない。

言い換えれば、何もしないで自分の立場を引き上げろ、他国を跪かせろと言うだけで、我儘を言っている子供とたいして違いはなかった。

それ故に閣僚たちは頭を悩ませ、無責任な一部の貴族は暴走を始めていた。

第二王女のベルテロイ駐在武官アルテルナンテラが、同じくビースマックの駐在武官フィランサスから怒鳴り込まれた一件は、この王の『我儘』と一部貴族の暴走が招いたものだった。

彼らの思い描く未来図は、ビースマックの王家を親ストラー派の閣僚で牛耳り、彼の国をまず膝下に収め、大陸内の食料と工業製品の供給源を押さえたうえで、残りの二国を膝下に敷こうという戦略だ。

デュ・デバリ公は、もちろん自国こそ南大陸第一の国という自負に溢れていたが、戦乱を引き起こした国という不名誉までは被るつもりはなく、これはインダミト王バイアブランカと同じであった。

戦乱による大陸統一ではなく、他国の尊敬を勝ち取り、それを以って合議制の主導権を握り他国を従える、というのが彼の戦略である。

他国にクーデターまがいの混乱を招いてまで自国の勢力を伸ばそうとする一部貴族は、彼にとって危険思想の持ち主であり、排除されるべき集団だった。

しかし、その実体の全ては掴みきれておらず、自分同様王家傍流だが新興の公爵家で政務参議官のアガシジィ・リンクス・デュ・リトバテス公爵が黒幕『であろう』というところまでしか掴めていない。

その他には下級貴族のアルトラン・プログス・デュ・ローグルバ男爵とジュリド・ロミス・デュ・ヴィングストニー男爵が怪しいが、確たる証拠もなしに仮にも貴族たる者を捕縛するわけにも行かず、どう対応したものかと頭を悩ませていた。

アルテルナンテからの指示で急ぎ内定を進めていたが、ビースマックのクーデターを企てる組織は、巧妙にその実体を隠している。

デュ・デバリ公の主導で晩餐会は続いていた。

彼の巧みな話術は、アービィたちの警戒心を少しずつ解している。

アービィの出自には敢えて触れることなく、ラシアスでのニムファとの遣り取り、ヒドラ殺しの武勇伝や、アマニュークでの戦いなど、和やかに話を引き出している。

もちろん彼は『勇者』の召喚も承知しているが、アービィをストラーに引き込むつもりはない。

確かに自国の地位を引き上げる裏づけにはなるだろうし、王はそ

う考えて褒賞を口実に王都に呼び出しているふしがある。
だが、一国を滅ぼすことができるかもしれない『勇者』など、国政を預かる身としては危険物にしか見えない。

もし、上手く自国に取り込めたとしても、常にその顔色を伺っていなくてはならないのでは、国を乗っ取られたも同然だ。
幸い、アービィたちからは覇権欲などは伝わってこないし、どこか一国の尖兵となりそうな危うさも感じられない。

もし王からその誘いがあれば断らせるよう釘を刺しにきたデュ・デバリ公だが、必要もないと判断し、今後の彼らの利用価値に付いて考え始めた。
さすがは一国の宰相というところか、アービィたちにそのようなことを考えながら食事をしているとは感じさせず、あくまでも英雄の武勇伝を聞きたがる老政治家を演じていた。

当面、彼らには擦り寄ってくるであろうビースマックのクーデターを企てる組織を、炙り出す役を演じてもらおう。
下っ端を少数狩り出したところで、首謀者はすぐに代わりを見つけ出すだろうから、組織が後戻りできなくなるまでは泳がせておくとするか。
デュ・デバリ公は、そう考えつつ、アービィたちの話に耳を傾けている。

ローグルバとヴィングストニーの両男爵は、リトバテス公爵から互いの接触を禁じられていた。
公爵は、自身の周囲を探るデュ・デバリ公の密偵の気配を感じていたが、これを消してしまえば自身に掛かる疑いを肯定すると同じだ。

さすがに閣僚ではないとはいえ、政務参議官として政治の中枢に近い位置を占めているだけあって、その辺りの嗅覚には優れている。
表面上は王に対する忠誠を前面に押し出し、王の国際的な地位向上をお題目に政務に励む姿勢を見せていた。

今回の企てが成功裏に終われば、血筋だけでその地位にある宰相を引き摺り下ろし、自分がその地位に納まるつもりでいる。
当然、両男爵には、最低でも伯爵、場合によっては侯爵の地位を約束することで、自派に引き入れていた。

もちろん、それ以上の爵位を持つ者や、彼らに連なる者も自派に引き込んではあるが、リトバテス公爵が尖兵として最も活躍を期待しているのが両男爵だ。
それは、万が一の尻尾切り要因であることも意味しているが、両男爵はそれにはまだ気付いていない。

小さな領地を大きくしたい、政治の中枢に食い込みたいという野心だけは誰にも負けない両男爵は、リトバテス公爵にとって都合の良い手駒だった。
彼らの野心はつとに有名で、もし企みが露見しても、彼らのみにその咎を負わせたところで誰も不審には思わない。

三代前の王の庶子であるリトバテス家は、現王とは親しい間柄であり、その信頼も薄くはない。
何より、幼少時より王の数少ない友として育てられている。

政務に関する悩みや迷いを相談される相手でもあった。
そのような人物を下手に疑い、そのせいで自らの立場を危うくするような者などそうはいなかった。

だが、ここへ来て宰相の密偵が自身の周辺を探り歩いている。公然とやるわけではないが、その濃厚な気配はリトバテス公爵には伝わっていた。

まだこの企てが露見しては困る。

両男爵は動きが派手なだけに、二人がリトバテス公爵家に出入りしているところを見られては、非常に都合が悪かった。

リトバテス公爵は自身が飼っている密偵を使い、両男爵に直接の接触を禁じるとともに、連絡係としてその密偵を使うことを命じていた。

公爵から密偵を預かった両男爵は、これを信頼の証と考え自分が飼う密偵とは比べ物にならないほど有能な密偵を酷使していた。

リトバテス公爵が密偵を貸し出したのは、両男爵の便宜を図るためということが第一義だが、彼らの暴走を防ぎ、監視の役を負わせるという意味合いも相当大きかった。

万が一、どちらかでも暴走した場合には、消すことも命じている。

和やかなうちにデュ・デバリ公との会食も終わり、アービィたちは彼が自分たちを取り込みに来たのではなかったという安堵に包まれていた。

やはりまだ年若く、老獪な政治家に掛かれば手玉に取られてしまう。

今回はそれが危機を招くようなことではなかったが、彼らは上手く踊らされようとしていることに気付いていない。

もっとも、デュ・デバリ公に、彼らを危機に直面させようという

気はないからだったが。

適当に立ち回らせ、ビースマックでのクーデターを画策する連中を擦り寄ってこさせ、その人物を特定するために使うつもりだ。

その結果、組織のあぶり出しが成功すればよし、その組織ではなかったとしても「勇者」を自派に引き入れようとするのは叛意ありと見ていいので、それはそれで意味のあることだった。

翌朝、宿の前には、デュ・デバリ公が差し向けた馬車が待っていた。

周囲の目を気にしつつ、四人は馬車に乗り込んだ。

御者は、主人から言いつけられた任務をこなしているだけだが、どこか納得できないものを感じていた。

この少年の面影を残した若者のどこに、主人が恐れを抱くほどの「力」が隠されているのだろう。

彼は長年数多の人間を運んできた中で培った観察眼でアービィを見たが、無邪気にも見えるその相貌からは何も感じる取ることはできなかった。

主人の人物を見る目を疑うわけではないが、これは何かの間違いではないか、彼はそう思いつつも、これも長年培われた職務への忠実さで、その思いを隠しつつ王宮へ馬車を走らせた。

王宮に到着後、アービィたちは控えの間に通された。

謁見までの暫くの間、四人は取り留めのない話で時間を過ごしていた。

「なんか焦臭い感じがするのよ。

デュ・デバリ公はラシアスのニムファ様みたいなことはしなかったけど、ここの王様がそうじゃないって保証はないわよね……」

ティアが昨晩から抱えた不安を言う。

「まぁ、そんなことがあっても、断るだけだよ。

どの国に住むようになるかは判らないけど、どこかの王様の臣下になりたくはないからね」

アービィはずっと思っていることを答えるだけだ。

「それで済ましてくれるならいいんだけど」

メディも不安を抱えているようだ。

素直に諦めてくれるなら良いが、拘束しようとしてくるなら、ストラー王国と事構えることになる。

風の精霊と契約が済んだ今、もう二度とこの国に来ないという選択肢もあるが、今回のことが元でインダミト王国に迷惑が掛かるのは、あまり好ましくはない。

できれば波風を立たせずに、ストラーを後にしたいところだ。

頭を悩ませているうちに、定刻が来たようで使いの者が呼びに来る。

四人はおずおずと、謁見の間へと連れられていった。

謁見の間では、サウルルス王とウイステリア王妃が玉座に座り、左右を主要閣僚が固めている

アマニュークの英雄を一目見てみようと、普段より多くの貴族たちが詰め掛けている。

もちろん、その中にはアービィたちに擦り寄り、自らの派閥に取り込もうと画策している者も多い。

大扉が開き、アービィたちが謁見の間に入ってくる。
玉座前の段差まで来て、一礼し、片膝を突いて頭を垂れた。

ストラーの礼儀作法から外れてはいるが、動作に卑屈さは見られず堂々としていた。
王は、それを無礼とは取らなかったが、中級以下の貴族たちの間には、無礼者、田舎者といった嘲りの声が潮騒のように広がっている。

「此度のアマニュークでの働き、誠に天晴れであった。
国を代表して礼を言おう。
あれは、我が国の誇りだ。
ニリピニ辺境伯より、そち等を篤く遇するようにとも言われておるでな」
サウルルス王は上機嫌で言う。

アマニュークは、インダミトに戦勝した記念碑でもあるそれが悪霊の巣窟と化したままでは、ストラーのプライドが許さなかった。

「もったいなきお言葉、ありがとうございます。
ですが、この度の手柄は悪霊を封じたエンドラーズ様のもの。
僕たちはお手伝いをしたに過ぎません」
アービィが謙遜からではなく、本心から答える。

「そち等の働き無くば、エンドラーズ殿とて不首尾に終わったやも知れぬ。
謙虚なところもさすがと言いたいが、謙遜は不要だ。
さて、呼びつけて礼を言うだけでは足りぬというもの。

そち等には充分な報償を以て報いよう」
何かとあれば自分の手柄と騒ぎ立てる多くの臣下と比べ、なんと慎み深く御しやすいことか。
サウルルス王は他国への親善訪問の際、アービィたちが付き従う姿を見て、バイアブランカやニムファ、グランデュローサが歯噛みする様を思い浮かべている。

「そのお言葉だけで、僕たちは充分です。
地位や名誉のためにしたことではありません。
依頼を受けて仕事をした。
それだけのことですから」
王の表情から焦臭さを感じたアービィが先手を打つが、それも建前の慎みと取られているようだ。

「地位や名誉はいらぬと申すか？
此度の報償、男爵の地位を以て報いるつもりであったが……
その方等、何を望むというのじゃ？」
王は理解し難いという表情で固まっている。
どう頑張っても、この価値観の相違は理解の範疇を超えている。

謁見の間のあちこちから、ざわめきが広がった。
男爵への叙爵を断るなど信じられないという表情の者、ラシアスでの一件を知っているため、やはり、という表情の者に二分されている。

その前者に当たる俗な貴族には、信じられない物言いだった。
彼らにしてみれば、侯爵を頂点とした栄達以上に望むものはない。
公爵は王の庶子以外には成ることは適わない以上、侯爵に叙せられる以上の栄達はないからだ。

王宮での栄達は領地や俸給の加増を意味し、それは豪奢な生活を保障するものであった。
それを断る者がいるなど、彼らの想像の埒外だ。

「はい、僕たちは王宮での栄達を望むものではありません。
どこか一国に臣従するつもりもありません。
望むものは唯ひとつ、平穏な暮らしだけです」
アービィは躊躇うことなく言い切る。

デュ・デバリ公は、やはりという面持ちで王とアービィの遣り取りを聞いていた。
この辺りで助け船を出さないと、王が禄でもないことを言い出しかねない。

万が一、英雄の連れている女を盾に取るようなまねをしようものなら、完全に英雄を敵に回してしまう。
アルギールの城門でリムノが焦りから取った行動を、デュ・デバリ公は把握していた。

「王よ、発言を許されたく」
デュ・デバリ公が脇から進み出る。

「許す」
サウルルス王は一言だけ答え、公の発言を促した。

「この者たちは冒険者を稼業としていると聞き及びます。
そのような者たちに、王宮勤めや領地に縛り付けることは牢獄に繋ぐと同義かと」
お近くにて失礼と断り、玉座に寄って王に囁く。

「強く縛ろうとしたラシアスは、『勇者』と敵対したと聞き及んでいます。
ここは野に放ち、密偵を付け、必要なときに依頼として呼びつける方が得策かと……」
デュ・デバリ公の言葉は、王にしか聞き取れない低さだ。

このまま留まることを強要しても、ラシアスの二の舞が落ちだ。
インダミトのバイアブランカ王は、謁見に呼びつけはしたがなにも拘束するようなことはせず、良好な関係を築いているという。

ならば、こちらもそうあるべきで、インダミトと同様の関係を築けばいい。
相手の持たざるものを持つことで満足させられるような安いプライドは、この際引っ込めていただこう。

王の無邪気さは嫌いではないが、どうせ持つならもっと崇高なプライドであって欲しい。
デュ・デバリ公はそう思っていた。

「公の言うことも、もっともだ。
では、その方等には別のもので報いることにしよう。
追って沙汰を知らせる故、しばらく待たれるが良い」
そう言ってから王は閣僚に閣議室に来るよう命じると、謁見の間を後にした。

「それではアマニュークの英雄殿の謁見の儀、これにて終了とさせていただく。
英雄殿、大儀でしたな。

控えの間にてお待ちいただこう」
デュ・デバリ公が宣言し、謁見の間に詰めかけた貴族たちは広間を出て行った。

王の誘いを断るなど信じられないという顔や、無礼者と詰りたくて仕方のない顔も見られたが、ほとんどはライバルが生まれずに済み安心したような顔だった。
幾人かの貴族が寄り集まり、どうすればアービィたちと近付きになれるかの相談をしている。

『兵器』として考えるなら、アービィと親しいと言うだけで充分だろう。
こちらから攻め入らなくても、強力な抑止力になり、恫喝になる。

アマニュークの英雄の二つ名は、ストラー中の貴族に知れ渡っている。
近隣の領地とトラブルが起きたときに、アービィたちにはギルドを通さずとも依頼ができるほどの仲、ということを喧伝できていれば相手は引っ込む。

アービィたちが控えの間に戻ると、次から次へと伯爵や、子爵、男爵といった中でも強力な後ろ盾を持たない連中が挨拶にやってくる。
口々に地位や名誉を望まないとは見上げた心掛けと誉めそやし、ルティやティア、メディに対しては容姿をほめまくる。

普段聞かないような言葉の羅列に、四人はなんとも面映くて仕方がない。
中にはあからさまに歯の浮くようなお世辞を言うものもあり、そのような対処に慣れていないアービィは困ったような笑みを浮かべ

るしかなかった。

貴族たちは困ったことがあれば、自分の屋敷や領地を訪ねて来るといいと言うと、それぞれの執務に戻っていった。

嵐が過ぎたような控えの間にはアービィたちだけが取り残され、すっかり疲れ果てた表情のまま固まっている。

当然、挨拶に訪れていた貴族たちの中には、デュ・デバリ公の手の者が混じっており、誰がどのようなことを言っていたか全てチェックしている。

詳細な報告書がその日のうちにデュ・デバリ公に渡され、アービィたちの当人も知らない役目は、当人たちの知らぬうちに半分以上が完了していた。

「卿等、彼の者に相応しい褒賞は何が良いかの？」

王は招集した閣議で問う。

「地位も名誉もいらぬと言うのであれば、叙勲も無意味でしょうな」

軍務卿ハラルドッシュ公爵が発言した。

「さすれば、金、ですかな？」

外務卿アルデフォイ公爵が、財務卿と内務卿を兼務するオルフノプ公爵を見ながら言った。

「そうですな、金貨十枚、そこに領地ではなく家を付けてはいかがでしょう？」

オルフノプ公爵は王に対して許可を求めるように聞く。

金貨十枚は、かなりの大金だ。

「それは名案。
家があれば、我が国を拠点としてくれるやも知れませんな」
デュ・デバリ公が王に許可を促す。

「では、金貨十枚と、王都に家、ということで決まりじゃな。
内務卿、良さげな空き家はあったかな？」
あっさりと王は決めた。

「はっ、ちょうど良い物件に心当たりはございませんが、至急探させましょう。
金貨はすぐにでも」
オルフノプ公爵は直ちに行動を起こす。

「では、私から彼の者たちに伝えましょう。
内務卿、手配をよろしく」
そう言ってデュ・デバリ公が閣議室を出ると、王と他の閣僚は謁見の間に移る。

「英雄殿への褒賞は、金貨十枚と王都に家を用意することとなりましたぞ。
これならお受けいただけましょうな？」
控えの間でデュ・デバリ公から褒賞が示されたが、アービィは困り顔だ。

金貨は素直にありがたい。
だが、家は困った。

「宰相様、実は僕たちはこの後、北の大地に行くつもりです。
もしかしたら、一年は帰って来ないかも知れません。

そのような者が家をいただいても……」
アービィがその点を正直に言う。
「その点はご心配なく。
そうであれば、新築をご用意できましょうぞ。
英雄殿に相応しい家を、さっそく設計させましょう。
ご不在の間は、しっかりと家はお守りします故、ご安心いただきたい」
デュ・デバリ公は、事も無げに返す。
できればしがらみはないに越したことはないが、これ以上無理に断っても角が立つだけだ。
いいように言い包められているような気がするが、アービィは受けることにした。
再度謁見の間に行き、閣僚たちの見守る中で褒賞の受け渡しが行われ、全ての次第が終了する。
アービィたちは、謁見が無事に終わりいざこざを起こすことなくストラーを発てることに、言いようのない安堵を感じていた。
王宮を辞し、宿に戻って翌日の出立に備え準備をしていると、リトバテス公爵の使者が今夜の晩餐への招待状を持ってきた。
無下に断ることもできずにいると、そこへローグルバ男爵の使者が午餐会の、ヴィングストニー男爵の使者が茶会の招待状を持ってくる。
仕方なしに全て了承の返事をして、四人はローグルバ男爵差し回しの馬車に乗り込んだ。
ローグルバ男爵邸からはヴィングストニー家の馬車が、次はリトバテス家の馬車がそれぞれの移動を担当することになっている。

ローグルバ男爵邸にアービィたちを乗せた馬車が入ると、続いてヴィングストニー家とリトバテス家の馬車が門を潜り、待機所に入っていった。

待機所の使用人はそれぞれどこの馬車かを確認し、爵位に見合う場所へ案内する。

ちょうど馬車の修理に来ていた大工が、使用人にどこの馬車か聞いてきた。

ヴィングストニー家とリトバテス家の馬車だ、と答えたとき、大工の表情に僅かな変化が見られたことに使用人は気付いていない。

大工は修理依頼を受けていた馬車を一通り調べ、手持ちの材料では補修しきれないと言って屋敷を後にした。

その足で馴染みの材木商に立ち寄り、いくつかの材料を注文し、ローグルバ家でヴィングストニー家とリトバテス家の馬車を見たことを世間話に混ぜて話す。

大工が工房へ道具を取りに行くと店を出た後、材木商は使用人に一枚の書付を渡し、使いに出した。

使いに出た使用人は、デュ・デバリ公の屋敷の前を通るとき、衛兵の前で書付を落す。

衛兵が紙を拾い、使用人を呼び止めてその紙を渡すと、使用人は礼を言って立ち去っていった。

衛兵が執事に紙に書かれた貴族の名前を告げる頃、使用人は書付を燃やした炎でタバコに火を着けていた。

第４８話

ローグルバ男爵は馬車の到着の報を聞くと、客間へと向かう。
その足取りは、あくまでも軽やかだった。

彼は彼なりに、今回のビースマックにおける政変への戦略を練っていた。
リトバテス公爵からは勝手な振る舞いを禁じられてはいるが、それはやった者勝ちで結果さえ良ければ独断専行は有耶無耶にできると思っている。
ヴィングストニー男爵が同じ考えであることは百も承知で、互いに足の引っ張り合いとどうやって出し抜くかに日々頭を悩ませていた。

アービィを自分の駒にできれば、ガーゴイルなどに頼る必要はない。
ガーゴイルを使ったビースマックの主要閣僚暗殺計画は、ヴィングストニーの主導で進められており、ローグルバが進める間諜を使い閣僚を懐柔するという計画は、どうしても派手さに欠く。

アービィが王の誘いを断っている以上、臣従を求めることは無駄だと判っているが、ローグルバはひとつの秘策を胸に秘めていた。
彼はまだ二十代後半で、適齢期の娘はいないが十四歳になった末妹のファルカがいる。

アービィとルティは同姓だが、夫婦ではないことは判っている。
アービィにファルカを娶らすことにさせ、未来の義兄となれば、その頼みはそう無碍にはできまい。
ローグルバ家は自分の息子が継ぐことは確定しているし、他の妹

たちはそれぞれか見合う家に嫁いでいるか、婚約済みだ。
これでファルカがアマニュークの英雄の正室に収まれば、彼の威光はかなりのものとなるだろう。

幸いにして父の教育のおかげで、妹たちは家の勢力を伸ばすための結婚ということには嫌悪感を抱いている様子はない。
まだアービィと結婚するようにとは言っていないが、場の雰囲気ですぐに理解できるだろう。嫌がろうとも家の意志だと言えば、逆らうこともないはずだ。

王からの報償は、王都に家を建てることが含まれていると聞いている。
彼らは、暫くは冒険者稼業を続けるのだろうが、不在の間はファルカに住まわせておけば良い。
その間のハウスキーパーくらいは負担してやろう。それくらいは、将来への投資と考えれば安いものだ。

そうしたうえで、アービィたちをビースマックへ刺客として送り込む。
ガーゴイルには指揮者が必要だが、アービィたちなら自立して動けるし、万が一の場合は自決してもらえば良い。

ローグルバ男爵はアービィたちを午餐会に招待する計画が、ヴィングストニー男爵とかち合わなかった幸運を喜んでいた。
四十代後半になるヴィングストニー男爵には、適齢期の娘がまだ二人いた。
先にこの話をされていたら、あちらにアービィをさらわれてしまうところだ。
義兄と岳父では、影響力がまるで違ってくる。

満面の笑みを湛え、ローグルバ男爵は午餐会の会場として設えた広間にアービィたちを案内した。
社交界で鍛えた洒脱な会話術は、適度な笑いを含ませて場を和ませている。

アービィと男爵、そしてファルカの三人で会話ができるように、男爵正妻のリネアータが女性陣をさりげなく会話に誘い込み、テーブルには二つの輪ができている。
男爵の妹売り込みが露骨になってきたとき、場の空気が一転した。

絶対零度のような凍てついた殺気が、一瞬その場を支配し、誰もが言葉を飲み込んだ。
まるで、天井から砕いた氷を大量に浮かせた冷水を、全員の頭上にぶちまけたかのような、心底から震え上がるような殺気。
殺気の主は、あくまでも笑みを湛えたまま、しかしその目は炎の形をした氷の刃を男爵に突き立てるようだった。

一番の被害者は、兄からは何も聞かされずアービィとの『見合い』の席に臨んだファルカだっただろう。
突然変わった理由が理解できない冷たい雰囲気。時折振り向けられる視線に気付いてからは、肉食動物の襲撃に怯える小動物のように小さく全身を震わせている。

義妹の異変に気付いたリネアータがルティの殺気を逸らすために話題を強引に変え、メディがルティの脇を突付く。
我に返ったルティが恥ずかしげに殺気を収めたが、ファルカは青い顔のままだった。

「そういえば、ルティ殿とアービィ殿はご姉弟とお聞きしますが、

髪も瞳も違いますね？」

リネアータの問いは人の出自に触れる内容で、場合によっては全てをぶち壊しにしかねないものだ。

しかし、ここまでの会話から察する彼等の人柄や、ルティの言葉の端々から感じられるアービィへの感情に気付いていたリネアータは、これがもっとも場を打開できるものだという直感に従っていた。

間違いなく、アービィが義妹を娶ることはない。リネアータは、そう理解した。

王侯貴族の婚姻の習慣と庶民のそれは、全く違うものだった。

王侯貴族の婚姻は、主目的は家の存続と勢力拡大だ。娘は政略結婚の形がほとんどだが、それは手段であって目的ではない。

そのため、正室の他に側室を持つ者が多いが、これは色を求めただけの結果ではなく、嫡子に恵まれなかった場合、自分の血筋が途絶えてしまうからだ。

大量の庶子を生み出す結果になり、それが領民への重税という形に振り替わろうと、貴族の最大の使命は家の存続である以上、跡継ぎを確保することは何にも増して重要なことだった。

結果として生まれた嫡男以外の使い道が、王侯貴族に限らず有力者の養子にすることであったり、政略結婚ということになっているだけだ。

それに対し庶民の婚姻は、お互い好きあったものが結ばれる一夫一婦である。そこには家の発展といった打算的なものはほとんどの場合存在せず、重要なことは本人同士の意志であり希望であった。

有力者といわれる者の中には側室や妾を囲う者がいることがあるが、それは既に庶民の範疇を超えている。

もちろん、親が嫁や婿を気に入らないであるとか、親同士の話し

合いで決まっているといったことも多いのだが、基本的にそのような親の介入がある場合、庶民ではなく王侯貴族を含む有力者の意志が絡んできている。

親または本人が栄達を望む者であれば、恋愛感情の有無に関らず婚姻が成立する場合もあり、それが不幸な結果だけを招くとも限らなかったが。

それでも王侯貴族が考える婚姻と、一般的な庶民の考えるそれの間には、埋めがたい溝が存在することも確かだった。

リネアータはそれを敏感に感じ取り、さらにルティの放った殺気から姉弟とはいえアービィとの間には何かそれを超えるものが存在することにも気付いていた。

「ええ、実は、僕はルティと血は繋がっていないんです。八歳くらいの頃に、ルティの両親に拾われたものですから」

ルティがどう答えようか迷っているうちに、アービィが横から口を出す。

普通の人に比べ、一般常識を知るためのスタートが八年遅れたアービィは、多少考え方に幼いところがあり、よく言えば素直、疑うことをあまりしない、悪く言えば幼稚、駆け引きといったものはあまりできない。

そこにさらに天然な部分があり、空気の読む能力は馬であるノタータスのほうが余程マシ、といったところさえあった。

戸籍が発達していないこの時代、養子として家族に迎えた男女が結婚することは珍しいことではなかった。

さらには王侯貴族の中では親戚同士や義兄妹、義姉弟の結婚も当たり前で、実の親子兄弟姉妹の近親相姦でなければ嫌悪感はない。

少々勘の鋭い者であれば、アービィとルティがこの先どうなるか

など、すぐに判る。

男爵は言葉を失い、リネアータは合点の行った表情に、ファルカはなんともいえない複雑な、しかし安堵の割合の大きな表情になった。

ルティはファルカの表情を見て、どうやらこの場の意義を知らされずに連れてこられたものと理解し、彼女に対し目で謝っていた。

「いずれ、お二人はご一緒に……？」

ファルカはようやく口を開く。好きな人を自分で決めることを許される、自分の知らない世界があることにはじめて気付いたようだ。

「ええ、そのつもりです」

アービィは即答し、ルティの顔が真っ赤になる。

「いいですね、羨ましいです。

私は、家の意志で結婚の相手を決められてしまいますので……」

ファルカは、無言の抗議を兄に向けながら言った。

だが、その抗議が聞き届けられることはないということも、彼女は理解している。

ファルカの言葉に対し、どう言って良いかアービィたちは分らなかった。

住む世界が違いすぎる。夜這いや祭りという名の集団見合いが当たり前の庶民と、家の存続を第一義に考えなければならない貴族。

知識としては理解できているが、実際目の当たりにして否定的なことを言われてしまうと、どう対応すればいいか判らない。

何を言っても自分たちの自由さを誇示し、貴族の息苦しさを貶めることになってしまいそうだ。

気まずい沈黙が広がりかけたとき、リネアータが打開を試みる。早く何とかしないと夫が正室側室などと言い出しかねない。

「夫が大変な失礼をしたようですね、ごめんなさい。実際貴族なんてこんなものなのです。アービィ殿の名声は家の権勢を広げるには充分。私としても、是非義弟に欲しいところなのですよ」

正直に話し、且つおどけて見せることで固くなった雰囲気を崩す。

男爵もこれ以上無理強いして、ラシアスの二の舞になることの愚を悟っている。

ただ、ヴィングストニー男爵にこの件を知らせずにおこう、彼がしつこく付きまとい失敗する様は楽しみだ。

ファルカの熱っぽい視線が気になったが、それは知らない世界への憧憬だろうと彼は思っている。

「いや、これは大変失礼をしてしまったようだ。妻の言うとおりでしてな、英雄殿。私はこの家を大きくする義務がある。それに囚われ過ぎたようです」

ここは素直に誤りを認め、素直な人物との印象を残したほうが得策だ。そのうえでアービィたちに対して好意を持っていることを印象付け、依頼をしやすくしておいたほうがいいだろう、そう考えた男爵は頭を下げた。

「王からの褒賞に王都に家を建てるというものがあったそうですが、ご不在の間の維持は私が請け負いましょうか？」

男爵の問いに、アービィは家を褒賞にと言われてから考えていることで答える。。

「実は、エンドラーズ様に相談しようと思っているのですが……僕たちがどれくらい住むかも判らないので、孤児院として活用していただこうかと」

男爵は考えを巡らせる。

これでは家を管理するという名目も使えない。

王からの褒賞を、仮に使う機会が少ないからといって売り払うなど、それこそ不敬であり、非難されるべきことだ。

だが、公共事業に役立てるという名目で風の神殿に寄付し、社会不安を煽る浮浪児を収容し教育するというのであれば、誰も非難できまい。

運営は褒賞の金貨十枚をエンドラーズが信頼できる商人に預けて運用し、風の神殿が持つ資金と共同で行えば、大人数を救うことは難しくとも何とかなるだろう。

マ教の孤児院もあるが、それだけでは不足しているのが実情だ。

このことを大々的に発表すれば、王に忠誠を誓う貴族や、風の神殿を敬う貴族からの寄付も見込める。

なにせ、事業主はアマニュークの英雄だ。それに王の褒賞をただ放置するのではなく、社会に役立てようというのだ。

これに一枚噛めば、社会的な賞賛を得ることができるという、打算的な貴族もいるだろう。遅れをとってはならない。男爵はそう判断した。

「さすが、英雄殿の考えることは違う。

私も微力ながら協力させていただこう」

幾分かの苦々しさを飲み込んで、男爵は賛意を示した。

やがて、茶会へ移動する時間が来て、アービィたちはローグルバ

家を後にした。
残された男爵は、悔しそうな表情を隠せない。
こうなった以上、ヴィングストニーやリトバテスの失敗を望むしかない。

我ながら卑しい考えとは思うが、家を伸ばし、上位の叙爵を得るためには形振り構ってなどいられない。
リネアータとファルカは、ビースマックでの企みを聞かされていないが、夫の、兄の行いに不安を感じていた。

ヴィングストニー家へ向かう馬車の中では、ルティは自分の感情が制御できなかったことに、落ち込みもちょっとだけ感じていた。
そして、ヴィングストニー家で、また同じことがあるのではないかという不安も感じている。
ローグルバ家ではうまく纏まったが、次もそういくとは限らない。下手気に貴族のプライドを傷付けてしまい、またラシアスと同じ騒ぎにならなければいいが、と考えていた。

ティアとメディは、アービィの慧眼に素直に感心していた。
だいたい、家などもらってしまい、王都に縛り付けられてしまってはストラーに臣従すると同じだ。

ストラーのサウルルス王家に限らず、どの国の王家に対する忠誠心など欠片も持ち合わせていない二人にしてみても、王からの褒賞を売り払ったり、放置しておくことは感心できることではなかった。
もう一つの褒賞である金貨十枚をつぎ込んで、家の管理をどこかに依頼することになり、結局は維持し切れず手放すことになると思っていた。

アービィは、いつかバードンから聞いた孤児として育ったという話は、他人事ではなかった。

自分はルティの家、バルテリー家に拾われたからまだ良かったが、下手をすれば路頭に迷い死んでいたかもしれない。いや、人狼の本性が勝ち、人を喰うことになっていたかもしれなかった。

それは別にしても、自分の幸運を思うに付け、少しでも不幸な子供を減らしたいという想いはある。

親を与えることは不可能である以上、自立するまでしっかり守ってくれる孤児院の必要性を感じていた。

極めて残念なことであるが、マ教の運営する孤児院は、運営資金の不足から里親が見つかればすぐに孤児を放り出してしまっていた。批判もあったが、運営全てが破綻してはそれまでと言われてしまえばそれまでだ。

善人に引き取られることも多かったが、人買いへの良い供給源にもなっていることは、否定のしようもない。

もちろん審査はしているのであろうが、善人揃いの神父たちを騙くらかすことなど、海千山千の人買いには朝飯前だった。

神殿が後ろ盾となり、信頼できる商人に孤児院の支援を依頼して自主事業を立ち上げ、商売や人としての一般常識を叩き込み、自活できるようになるまで孤児や浮浪児を守れる施設が必要だと、アービィは思っていた。

理想論でしかないし偽善と言われることも確かだが、やらない善よりやる偽善とアービィは考えている。

打算からでもいい、多少なりの寄付でも出してもらえれば、いや、理解を示してもらうだけでもよかった。

ヴィングストニー家に到着した馬車を、男爵と妻、二人の娘が迎えた。

ヴィングストニー男爵は五十に手が届くとは思えない若々しさを保っており、全身から覇気を発散させている。

惜しむらくは、紙一重で覇気が欲に傾いていることが、彼の若々しさを卑しさにも見せてしまっている。

ビースマックでのクーデター計画でガーゴイルによる侵攻策を推進しているが、これは彼の持つ破壊衝動のなせる業かもしれなかった。

懐柔、篭絡といったことは好まず、力攻めを身上とした政治姿勢は上昇志向の現れでもある。

アービィとルティが寄り添うように馬車から降りてくる姿を見て、ヴィングストニーはローグルバが何をしたか大体判ってしまった。

それは自分も同じことを考えて娘たち二人にも同席を命じていたからであり、その目論見が成功しないことも同時に悟っていた。

ラシアスの摂政ニムファはまだ年若いうえ、一国の最高権力者であるからか、周囲に面と向かってその行いを諫める者がいないため、アービィ取り込みを急ぎすぎ決定的な溝を作ってしまっている。

いくら力押しを身上とするヴィングストニーであっても、それくらいの駆け引きの心得は当然あり、ここで娘のどちらかを押し付けるような真似はするべきではないと即断できた。

ローグルバとはそれなりに友好的な話をしてきたようであり、派閥としては喜ばしいことだった。

さらにローグルバ家に取り込まれた様子もなく、ここで自分がアービィたちのストラーでの権益代表になれるなら言うことはない。

英雄のパトロンになり、それを自らの権勢の後ろ盾として、宮中での発言権を強化する。彼にとってのアービィの利用価値は、そこにあった。

年齢に裏打ちされた豊富な知識とウイットに富んだ会話術は、アービィたちの警戒心を解きほぐすに充分だった。

ここでもローグルバ家同様の遣り取りがあり、ヴィングストニー男爵は表面上積極的にアービイの家に付いての処置に協力することを約束した。

今すぐにアービィを従えることより、信頼を得て依頼をしやすい関係を築いたほうが得策だとヴィングストニーは考えている。

ガーゴイルだけで攻め切れるなら言うことはないが、万が一ということもある。後詰としてアービィを投入できれば、クーデターの成功確率はかなり上がるだろう。ビースマックで手引きする下級貴族に対する以後の恫喝にも使える。

もっとも、最大の問題は、騒乱を越す立場として他国に赴くことを、どうやってこの馬鹿正直な若者に納得させるかであったが。

リトバテス家での晩餐会まではまだ時間があるが、アービィたちが宿に一度戻りたいと言い出したため、茶会は二時間ほどで切り上げることになった。

再会を約束し、ヴィングストニーはアービィたちを見送る。

ヴィングストニー家の馬車で宿まで送り、定刻までリトバテス家の馬車も宿で待機することになった。

宿に戻ったアービィたちは、翌朝の出立に備え荷物の整理をすると共に、エンドラーズ宛に褒賞でもらうことになった家の処遇を相談する手紙を書いた。

宿に早馬による配達を依頼し、さらにその件に付いて明朝デュ・デバリ公にも相談するため、アポイントが取れないかを公と顔見知りという宿の支配人に相談する。

アマニュークの英雄からの頼みであれば、デュ・デバリ公も断りませんよという支配人にアポは任せ、リトバデス家の晩餐会へ行くため、アービィたちは馬車に乗り込んだ。

リトバテス家は、王宮から程近い一等地に広大な敷地を有していた。

豪奢としか言いようのない屋敷には、決して下品ではないが屋敷に負けない豪華な装飾品が並べられているが、それぞれの調和が取れていないところに主の権勢を誇示せずには入れない性格が見て取れる。

個々を見る目はあるのだろうが、適材適所に配置するセンスには欠けているようだった。

そこが政務参議官に叙せられてはいるが、歳若い閣僚に対しても強く出てはならない立場に留められている彼の限界を物語っている。

閣僚は事実上世襲制であるために、彼がいくら望もうともその立場が手に入ることはないのだが、それが今回のクーデター計画を決意させる一端でもあったかもしれない。

アービィたちを迎え入れた後、他愛のない会話から始まった晩餐会にはリトバテス公爵夫人のフォーシィとその子息が揃っている。

彼等はストラー貴族の例に漏れず、肥大化したプライドは他国を見下した態度に表れており、意識せずともアービィとルティの祖国であるインダミトを貶め、メディの故郷である北の大地を蔑視する態度にじみ出てしまっていた。

個人を貶めようという意識はなく、英雄と呼ばれる者であるなら

ストラーに居住するべきだと言いたいのだろうが、祖国や故郷を悪し様に言われていい気になる者は多くない。

リトバテス公爵は生まれながらの大貴族であり、宮中から出ることもなく世間ずれしていない。ローグルバやヴィングストニーのような、相手を持ち上げおもねるといった処世術は持ち合わせていなかった。

その子息たちも同様で、今は亡きアーガスを髣髴とさせるものがある。

出世に汲々とする必要もなく、王から与えられたままで人任せにしている領地からの収入一年分だけでも庶民の一生分の収入を超えているが、三代前の王の庶子が始祖の新興公爵であり、権力はあっても周囲から然程の尊敬を得られていない彼にとって、アマニュークの英雄のパトロンの立場は喉から手が出るほど欲しいものだった。

しかしリトバテス公爵も、ラシアスでの一件は聞き及んでいる。圧倒的な武を誇るアービィに、権力を背景にした恫喝が通用しないことは明らかだった。

アービィを懐柔しようと下手に出るという慣れない努力をしているが、それでも尊大な態度が見え隠れしてしまう。

ルティとメディの表情が固くなった頃合いを見て、アービィはローグルバやヴィングストニーに言ったこと同様に、褒賞としての家や金貨の処遇を相談してみた。

一瞬理解できないという顔をしてしまった公爵だが、内容を良く考えることなく賛意を示す。

実際彼にとって浮浪児や孤児など、どこか遠くの世界での話であり、彼の領地で彼の生活を支えるために発生している不幸について思いを馳せることなど全くない。他人のために金を使うなど、溝に捨てるも等しい行為だと考えていた。

しかし、アービィを取り込みたいという一念が、結果としては善行を積むことになった。

フォーシィは、実家のために嫁いできたのだが、長年連れ添ううちに公爵を愛するようになっていた。

実際、公爵は外に対しては善人ではなかったが、家庭においては良き夫であり良き父親であった。間違いなくフォーシィは、彼に愛されている自覚はあった。

それ故に、彼女にとって夫が世間から尊敬を得られないことや、夫が家庭内で見せる良き一面を外に向けないことが残念でならない。

その夫が孤児院の話に賛意を示している。アービィを自派に取り込むためとはいえ、他人の役に立つことをしようとしていることは喜ばしい。

彼女は、これで少しでも夫の行いに変化が見られ、世間からの見る目が変わることを期待している。

空き家で都合の良いものを見繕うのではなく、敷地探しや設計から始まる新築の予定だ。であれば、ストラー王国の印象をよくするチャンスでもある。

家の『権利』を褒賞とすることにして、権利はアービィがそのまま持っていればいい。

アービィからの注文で孤児院として設計建築し、運営を風の神殿に委託する。

運営資金は、これもアービィのへの褒賞金貨十枚を基金として、不足分は寄付を募る。基金の運用は信頼できる商人に任せて自主事業を興し、孤児たちの自立支援にする。

王から政務に付いての相談を受ける立場であるリトバテス公爵か

らの後押しがあれば、王も無碍には断れまいし、アービィが褒賞を拒否したともいえない。

フォーシィは孤児の自立支援を、自分の仕事にしようとしていた。世間知らずといっていいリトバテス公爵と違い、それなりに親の領地経営を見てきたフォーシィには事業支援の経験が僅かとはいえある。それを役立てられ、世間からの尊敬を夫が得られるなら、忙しく働くのも苦ではない。

地位でしかプライドを満たせない夫に、世間からの尊敬を得ることで満たされるプライドというものを、フォーシィは教えたかった。そして、このチャンスを与えてくれたアービィに、限りない感謝の念を抱いていた。

晩餐会は、始まったときに流れた固い空気を一気に払拭し、和やかに終わりの時間を迎えた。

リトバテス公爵家の馬車で宿に送られるアービィたちは、デュ・デバリ公が期待した以上の成果を挙げている。

宿に戻ると、支配人がデュ・デバリ公からの伝言を持ってきてくれた。

褒賞についての相談は、明朝政務が始まる前の時間であれば、王宮の執務室を訪ねてくれれば良いとのことだ。

「明日、デュ・デバリ公を訪ねたら、その足でこの国を出ようね」

アービィが三人に言う。

「あら、どうしたの？

みんな友好的っていうか、ニムファみたいなことはしてこないじゃない。

早く北に行かなくちゃいけないのは確かだけど、慌ててこの国を逃げ出すことはないんじゃない？」

ルティが答えた。

確かにこの国に来てからすぐにアマニュークでの戦いがあり、その後１０日ほどニリピニ利用に滞在してはいたが、戦いの疲れを癒すためであったので辺境伯に世話になりっぱなしだった。

ニリピニ領から王都までは文字通り駆け足であり、擦り寄ってくる集落や貴族たちのお膝元を避けての野営の連続だった。

王都に着いてからは、デュ・デバリ公との面会、王との謁見、ローグルバ、ヴィングストニー両男爵と、リトバテス公爵との会食に茶会だ。

レヴァイストル伯爵から言われていた『世間を見る』ということは、ほとんどできていないに等しい。

この国の文化を見るには、王都に一日か二日は滞在しても良いとルティは思っていた。

「う～ん、本当なら二、三日いてもいいんだけど、これ以上いても今日と同じことの繰り返しになっちゃうんじゃないかと思うんだ。

謁見の後、いっぱい人が来たじゃない？

多分、明日以降の予定を宿に聞きに来てると思うんだよ。

それに……」

明らかに自分を取り込みに掛かっている雰囲気は、しっかりとアービィには伝わっていた。

家を孤児院にということについては、そうできればいいという気持ちと、ストラーに拠点を置かないという宣言のつもりでもあった。

「今日会った三人だけどさ。

みんなも気付いたと思うんだけど、僕の言うことにほとんど反対

しなかったでしょ。
あの人たちが反対しなかったのは、僕に貸しを作りたいっていうのが判っちゃったんだ」
おそらく王からの褒賞をあのような活用のしかたをする者など、今までは皆無だったのだろう。三人が三人とも呆気に取られた顔になっていた。

これでアービィに直接寄付するとか言い出す者が出ると厄介だ。寄付が無償であるわけがない。
間違いなく、断りにくい依頼とセットになってくるだろう。依頼料が別だとしてもだ。
寄付は募る必要はあるが、それはあくまでも風の神殿に対して寄付してもらわなければならない。

「それに、王様だって分ったもんじゃない。最初、男爵がどうのって言ってたでしょ？ラシアスで子爵とか言ってたのと同じだよ」
アービィは面倒からは逃げるに限ると思っていた。

「そうね。
早めに逃げ出した方がいいわ。
明日、昼前には王都を出たいわね」
ティアが受け取った。
決して焦っているわけではないが、面倒ごとに巻き込まれて北の大地へ渡るのが遅れることは我慢ならない。

「分った。
じゃあ、今夜は早く寝ようか。
でも、ティア、焦らないでね」
我儘を言いたいわけではないルティが答える。

「焦ってないわよ。
面倒ごとに巻き込まれたくないだけ。
もうちょっと飲んでからでもいいんじゃない？」
「アービィの部屋でいいわよね？」
ほんの少しだけ膨れたようなティアが言い返し、メディが続けた。

「うん、じゃあ、お酒買いに行こうか」
楽しそうにアービィが言い、四人は夜の町へ買い物へと繰り出していった。

翌朝、朝食時にデュ・デバリ公は既に執務に就いている時間だと支配人から教えられ、手早く支度を整えた四人は宿代を払いにカウンターへ行き清算を済ませる。
ノタータスが引く馬車に揺られて王宮へ到着し、衛兵に取次ぎを頼むと、程なくデュ・デバリ公の副官が迎えに来た。

デュ・デバリ公は上機嫌でアービィたちを迎え入れ、従卒に人数分の茶を持ってくるよう命じる。
挨拶もそこそこに、アービィは昨日話したことと同じ内容をデュ・デバリ公に話した。

最初こそ難しい顔をしていたデュ・デバリ公だが、確かに最近浮浪児や孤児の増加は社会問題になっている。
単に親のいない子供が増えていることだけが問題なのではなく、犯罪の温床となっていることがさらに大きな問題だった。
子供の姿が娼館で見られることも増えていることも、報告されることが増えている。当然取り締まりの対象なのだが、娼館も巧妙に隠し官憲の目を逃れていた。

現在理不尽に働かされている子供たちの救済も重要だが、供給源を絶つことも同様に重要だ。

特効薬などあるわけはないのだが、アービィの提案は解決策の一つにはなり得る。

もし、アービィに恩を売ろうと寄付を申し出てくる者があれば、風の神殿が盾になって取り纏めを行い、新たな孤児院を建てる資金にしてしまうのも手の一つだ。それこそどんな金であっても、ありすぎて困るということはない。

善意から来る寄付か、アービィに貸しや恩を売るためかは、内定すればすぐに判明するだろうから、ビースマッククーデターの組織や、王朝に対して叛意を持つ者のあぶり出しにも使えるかもしれない。

王からの褒賞を形はどうあれ手放すなど前代未聞だが、これは案外いい方法かもしれなかった。

アービィを繋ぎ留めておくことはできないことは残念だが、好印象を与え来訪に抵抗を持たせないというだけで今回は充分と見たほうがいいだろう。

僅かの間にそこまで考えたデュ・デバリ公は、できるだけ早くストラーを発つと言うアービィたちを無理に引き止めることなく、王には自分から諮り、必ず実現させると約束した。

お互い晴れやかな表情で握手を交わし、アービィたちは執務室を出る。

王宮の入り口まで見送りに来たデュ・デバリ公は、アービィたちの馬車が見えなくなるまで執務室に戻ることはなかった。

風の神殿で精霊と契約するという、最大の目的を達したアービィ

たちは、ストラー訪問前に感じていた不安が杞憂に終わり、胸を撫で下ろしていた。

デュ・デバリ公は、期待以上の働きをしてくれたアービィたちに感謝している。

謁見後には怪しい人物を引き寄せてくれたし、屋敷に招待するほど取り込みたがった三人の貴族をあぶり出すこともできた。三人の貴族はそこで大きな失敗をしていた。

アービィの知遇を得たければ、宿を訪問するだけに留めればよかったのだ。

それが家族を紹介することまでしている。いや、家族を紹介することだって宿の訪問に連れて行くだけにすれば、然程怪しくはなかった。

お互い未婚であり、それも適齢期の者を引き合わせている。

どう見ても見合いとしか受け取れない。ローグルバとヴィングストニーはアービィと、リトバテスはルティと姻戚関係を持とうとしていた。

明らかな引き込み工作であり、今回のクーデターグループの中心人物と見ていいだろう。

王家に対して叛意を持ったところで、軍対個人での勝負は目に見えている。如何にアービィたち個々が武に優れているとはいえ、飛び道具の乱射や、集団で押し潰しにかかってしまえば対処するにも限界はある。

アマニュークの英雄への褒賞は家と金貨が王家から。そして政変を未然に防ぐための諜報としての働きへの褒賞は、家や金貨の運用をアービィたちの思い通りにすること。これは宰相たる自分からの褒賞として、間違いなく支払わせていただこう。

デュ・デバリ公は、ベルテロイにいるアルテルナンテに報告書をしたためながら、そう考えていた。

第４９話

パーカホの集落にある捕虜収容施設は、重苦しい空気に押し潰されそうだった。

ひとり、またひとりと、仲間たちが死者の列へと並んでいく。

秋が終わり、雪が積もり始めた頃は、誰もが楽観していた。一度は干戈を交えた敵ではあったが、いつの間にか厳しい自然を生き抜くために共闘する戦友になったと思っていた。

農地や燃料の改良、飲料水の確保といった実績は、決して捕虜を虐げる理由にはなっていない。

パーカホの人々も、捕虜を虐待したわけではなかった。

単純に食料が足りない。

それは判っていたはずだ。一気に二千もの人口が増えたのだ。

当然一集落で収容できるはずもなかったので、いくつもの集落が秋の収穫期の労働力として分け合っていた。

当初は冬までに勝手に死ぬ消耗品の扱いだった。

捕虜になった直後には、戦いで受けた傷や食料が不足気味であることから治癒呪文ですら追いつかず、約三分の一に当たる六百五十人が死の河を渡っていた。

だが、ランケオラータと部下の何気ない会話から、農地改良の機会を得ることになり、それ以降は北の大地に恵みをもたらす者という扱いに変わりつつあった。

人海戦術も駆使し、例年より多くの食料や燃料を集積することに

も成功し、餓死者や凍死者を出すことなく冬篭もりができるのではないかと、どこの集落でも楽観的な空気が支配していた。

北の大陸の中央部を抑える部族連合の襲来も、戦慣れした捕虜たちが最前線にでて撃退したため、人的被害が僅少で済ませられたことも影響していた。

一度敗れたとはいえ、ランケオラータが一歩退くことにより、能力ある指揮官に率いられた職業軍人による防衛戦は、中央部から略奪を目論み押し寄せてきた民を、いとも簡単に撃退してしまった。

集落の多くの人々は、数の力、職業軍人の力、優れた武器防具の力だと考えていたが、中には中央部の民の戦振りに疑問を抱いた者も、少数ではあったが存在した。

毎年繰り返される略奪のための侵攻が、今年はいつになく死に物狂いだったことと、その割には攻勢に粘りがなく、まるで死に急ぐかのように突っ込んで来る者が多かったことに、ルムを始めとした幾人かの指導的立場にある者が気付いていた。

さらに北から押し寄せる蛮族の脅威が、中央部の民を死に物狂いに、且つ捨て鉢にさせているのではないかという疑問だった。

例年であれば襲撃が終息する時期になっても、中央部の民の略奪は終わらなかった。

緩衝地帯となっている互いの平野同士を分ける山岳地帯は、また別の部族集団の居住地となっており、ここを冬季に抜くことは不可能だったが、中央部の民は協定に拠るものか征服したかは不明だが、拠点を築いているようだった。

この中央部の民からの圧力も、捕虜たちを生かしておく理由になった。

ランケオラータを始めとする捕虜たちは、自分たちの命を守るた

め、凍土に分け入り樹木を切り倒し防御柵を集落の周囲に張り巡らせた。猟の経験を有する者は、群で移動する大型の草食獣を狩りに行く。

防御柵は中央部の民の襲撃を防ぎ、戦況は膠着状態に陥り、その頃から北の大地はよりいっそう深い雪に埋められた。

雪は中央部の民に襲撃を諦めさせるに充分な理由になる。如何に雪に慣れた民といえども、背丈より深く積もった雪では戦のしようがない。

山岳地帯に篭ったと見られる中央部の民が息を潜めたことに、平野部の民はようやく一息入れることができたが、ここに誤算があった。

冬篭りのための食料は、戦がなければそれなりに食いつなげただろう。

だが、腹が減っては戦はできぬとばかりに襲撃の前後は大盤振る舞いになってしまい、予想以上に食料を消費してしまっていた。

もう一つ誤算があった。

人が死ななかったのだ。

通常であれば戦以外でも弱者が死んでいた。

乳幼児、老人、病人、怪我人といった、最も食料や人の手助けを必要とするものから死んでいた。

ルムを始めとした指導者層も、生き残った人々がどれほどの食料を消費するかを見誤っていた。

それまで諦めと共に見送っていた人々が生き残ると分れば、見送るはずだった側にも見送られるはずだった側にも生への執着が湧いてくる。

そこへ妊婦の増加も追い討ちをかける。数ヶ月に亘る捕虜生活の枷が緩むに従い、現地の女と情を通じ合わせる捕虜が続出していた。従軍できるほどの壮健な若者が、数ヶ月の間女なしでいられるはずがなかった。ましてや娼館が当たり前にある世界だ。独身の男で金があれば、娼館に行くことに抵抗を感じるものはそう多くない。生への執着は、性への執着であり食への執着だった。

だが、ついにそれも破綻する秋が来ている。

例年の季節の移り変わりと今年のそれが変わらないのであれば、どう勘定し直しても雪が緩む頃まで食料を保てる集落はない。

今更捕虜を殺すわけにも行かない。既に拘束は解いているし、中央部の民を撃退する際に武器も取らせてしまっている。おそらく、捕虜虐待が始まれば、いや、その気配を見せれば、生き残るために両者の間に凄惨な殺し合いが起きるだろう。

何より、平野部の民を富ませてくれる方法を教えてくれた捕虜たちを、今更殺すということは情からも忍びないという意識もある。

どうにかして一人でも多く生き残る方法を考え出さなければならなかったが、食糧不足から体力を失った者が冥界へと旅立つことを止めることができなくなってきた。

ルムはランケオラータを訪ね、食料を集めに行くための人手を出してくれるように頼んだ。

もちろん、ランケオラータに嫌はない。自分たちが死ぬか生きるかの瀬戸際だ。

狩りの経験のある者、雪の中で生きる術を知る者が名乗りを挙げ、集落の民と共に人の背丈より深い雪の中に踏み出していく。

珍しく晴れ渡った厳冬期のことだった。

アービィたちはストラーを出国したあと、ベルテロイに滞在している。

ボルビデュス領まで戻ると往復で六日の浪費になるため、ストラストブールを発つ際にレヴァイスル伯爵宛に行程を早馬で知らせていた。

以前泊まった宿で伯爵とクリプト、馬丁と落ち合う。

ここまで旅を共にしたノタータスと別れることは寂しかったが、北の大地で生き残れるかどうか分らない以上、おいていくしかなかった。確かに歩くより馬車のほうが移動速度は速いが、小回りが効かないこと、目立つことなどを考えると、必要なら現地で調達したほうが良いという判断もあった。馬車という交通機関が存在すればだが。

アービィたちは伯爵にノタータスを返し、北の大地へと旅立ち、伯爵は領地への岐路に着く。

伯爵は、その前にベルテロイ駐在武官パシュース第二王子に面会を求めた。アービィたちが北へ立ったことを報告するためだ。

その時点で、既にパシュースはアルテルナンテ経由で、ストラーにおけるアービィたちの行動は把握済みだった。

クーデターグループは、今すぐ動く気配はない。まだ準備不足ということもあるのだろうが、アルテルナンテの意を受けた宰相デュ・デバリ公が監視を強め、動き辛くさせている。

そのうち焦れて何かしらの動きを見せるだろうが、そのときに一気に潰してしまえば良い。

おそらくビースマックで手引きする貴族も動くだろうから、こち

らも一網打尽にできるようフィランサスが動いている。

もう暫くの間、それぞれの国でクーデターグループを締め付けつつ、泳がせておきたかった。

四国家での南大陸共同統治に、ストラーのプライドは邪魔すぎる。クーデターを潰すついでにプライドも潰し、各国に蔓延る覇権欲に塗れた連中もついでに排除する。

バイアブランカ王は、共同統治への地均しができたら、第一王子ヴィクラント・カレル・インプラカブル・バイアブランカを摂政にして共同統治機構へ出向するつもりだ。第二王子パシュースは、そのままヴィクラントの懐刀になってもらう。

国政を若い世代に任せ、自分は南大陸共同統治機構の主導権を握る。

それぞれの国が誰をその機構に出してくるかは分らないが、ビースマックとストラーはクーデターの後始末に忙しく、現王が出てくることはあり得ない。

国内の安定化にそれぞれの王のカリスマは必要だからだ。もっとも常識的に考えてクーデターを起こされかけた王が、共同統治の場に出てこられるほど恥知らずではないだろう。当然若い世代が出てくるはずだ。

ラシアスに関しては、ニムファが統治者の第一席を狙って出てくることは明白だが、ニムファ程度では老獪なバイアブランカに手玉に取られるだけだ。

ニムファ以外に彼の国には、政治ができる王族がいない。まさか代表に公爵クラスが出てこられるはずもないし、もし出てきたとしてもコリンボーサ宰相は統治者の器には程遠い。

いずれにせよ、共同統治機構が動き出す時点で、バイアブランカに対抗できる者が出てくる可能性は限りなく低く、彼が第一席を占めることは間違いない。

南大陸を安定させた賢王という栄誉を得た後は、その威光を背景に北の大地をインダミトの市場として巨大な利益を独占つもりだった。

既にパシュースは他の三国家の駐在武官と、共同統治機構に付いての話し合いを持っている。

フィランサスも、アルテルナンテも、乗り気だ。特にヘテランテラは、ニムファの野望が南大陸を戦乱の渦に巻き込む危険性をはらんでいることに気付いているためか、誰よりも積極的な賛意を示していた。

ヘテランテラは、ニムファを共同統治機構代表に祭り上げ、国内の建て直しを行う気でいる。第一王子エウステラリットは、人が良いだけのお坊ちゃんでしかなく、ニムファの暴走を止められていない。エウステラリット自身にも覇権欲も権力欲もなく、ヘテランテラが王になることに反対ではなかった。

パシュースはレヴァイストルの来訪を聞き、そろそろ彼を完全に自派に取り込む気になっている。レヴァイストルほどの聡明な貴族には、共同統治機構の重要な役職を受け持ってもらう必要がある。

今からそのことについて、考えを纏めておいてもらわなければならない。だが、どこまで彼に話したものか、パシュースは頭を悩ませていた。

パーカホの集落では、大々的に葬儀が営まれている。

まさか、であった。

巨大な角を持つ大型草食獣は、群れを作り季節的な移動を繰り返している。冬になると少しでも過ごしやすい南の地域に下りてくるため、平野部の民にとっては厳冬期を生き抜くための重要な食料だった。

食肉としての他、毛皮が防寒着に利用される。毎年生え変わる角は装飾品としての価値も高かった。橇を引く使役や荷役にも利用されている。

一部の集落では家畜化に成功し、乳を採取したり橇を曳く使役や、荷役としても利用されている。他の集落が持っている家畜化した個体を狩るわけにはいかないため、大規模な季節的な移動を行う群れが狩の対象だ。

集落を出てから二日目に、今までにない大規模な群れに行き会うことができた。

いつもに比べ、こちらの人では多いため、獲物も多く持ち帰ることができる。この草食獣はおっとりとして性格のため、差し迫った命の危険を感じるまで逃げることもなく、抵抗することもほとんどなかった。

ところが、今回に限って草食獣のおっとりとした性格が、発揮されることはなかった。

勢子が群れを追い込むまでもなく、一直線に射手の待つエリアに突進してくる。それは暴走というより、雪崩といったほうが良い勢いだった。

射手に対する殺意ではなく、何かに怯え、逃れるための暴走のようだった。３００ｋｇ近い巨体の突進を、生身の人間が止められるはずもなく、数人の射手が草食獣の蹄に掛かり吹き飛ばされる。

弾き飛ばされ骨を折るくらいなら幸運な方だった。運の悪い者は、蹄で蹴られ倒れた上を後続の草食獣が駆け抜けた。

草食獣の群れが駆け抜けた後には、これのどこが人間だったのかと思えないような肉片が散らばっているだけだった。それぞれの無事を確認するまで、肉片からではいったい何人の仲間が犠牲になったのかすら分らないほど、凄惨な光景だった。

それでも草食獣の進路から外れていた射手が射た矢により、１０頭の草食獣を仕留めることができたが、今はそれを喜べるような状態ではなくなっていた。

仲間たちのところに戻ってきた射手の、草食獣を仕留めた喜びの笑顔が凍りつき、生き残った全員が立ち尽くす。

そこへ、破局が訪れた。

普段なら冬篭りの真っ最中で、雪原に出てくることなどあるはずのない巨大な熊が、生き残った者たちに襲い掛かってきた。それも一頭や二頭という数ではなく、少なく見積もっても十頭を超えている。

信じられないことに、その目は狂気に染まり、黒いはずの瞳がオレンジ色に変色していた。それは明らかに正常な野生動物ではなく、魔獣の目だった。

熊は打ち倒された草食獣の死体に喰らい付き、砕かれた元は人間だった肉片を貪り始める。

数頭の熊は、仲間を襲った惨禍に茫然自失と立ち尽くす北の民や捕虜たちに襲い掛かり、引き倒し、身体を噛み砕いた。

態勢を立て直せた何人かの魔獣討伐の経験を持つ捕虜が、『猛炎』や『風刃』、『凍刃』で熊を薙ぎ倒し、『防壁』と『加速』で生き残った全員の逃走を助ける。

北の民の幻術『催眠』が功を奏し、生き残った熊全てが眠りこけたところに、呪文や剣の雨が降り注ぐ。

期せずして大量の食料を得ることができたが誰もが喜ぶ気にはなれず、帰路は運べるだけの肉を抱えて、魔獣の襲撃に怯えながら一目散に集落を目指した。

幸い、この時期の北の大地は、自然そのものが天然の冷凍庫になっているため、運びきれない獲物は雪に埋め、あとから取りに行くこともできる。とにかく今は、生きて集落に戻ること、そして魔獣の襲来を告げることが先決だった。

出発時より明らかに少ない人数しか戻ってこなかったことに訝しむ集落の人々は、食料調達チーム惨劇に言葉を失った。

悲嘆が集落を包み、夫や父、息子を失った女たちの慟哭が鈍色の空を引き裂いた。

しめやかに執り行われる葬儀の間、ルムとランケオラータは熊が魔獣になったということに付いて話し合っている。

遥か北の大地の奥、極北の地に北の民には使えない妖術を使う蛮族がいると言われていた。

今回、中央部の民がいつになく襲撃を繰り返していたのは、この蛮族の南下によるものかもしれなかった。

もし、蛮族が魔獣を作り出すことができるのであれば、これは由々しき事態だ。

人同士の戦であれば、居住地や食料の取り合いだけで、決定的な殲滅戦が行われることはない。なぜならば、ある程度生産させてから奪い取った方が、自分たちの労働量が減り効率がいいからだ。

だが、魔獣を使役しての侵略となれば、話は違ってくる。

理性など持たない魔獣は、進行方向にいるもの全てを殺し尽くさずにはいない。

食料調達チームには、南の住人がかなりの数入っていたため、レベル４の呪文を使える者こそおらず犠牲者を蘇生させることは適わなかったが、攻撃と防御に優れた呪文のお陰でなんとか帰還することができた。だが、熊などではなくキマイラやマンティコアのような合成魔獣や、コカトリスやバジリスクといった特殊攻撃能力を持つ魔獣が大挙押し寄せてきたら、これを防ぐ術はない。

北の民同士争っている場合ではない。一致協力してこれに対する必要があるとランケオラータは説き、ルムも同意見だ。

偶然北の民が防波堤となっているが、南大陸としても他人事ではなくなってくる。ウジェチ・スグタ要塞は、対人の防壁であり、魔獣の大群に対抗できるとは限らない。

南大陸への防壁として北の民を支援しなければ、魔獣の群れが南大陸を直撃する。いや、支援だけではなく、共に血を流すべきだ。

周囲の集落と連携を取ることも重要だが、南大陸との連携が必要になったとランケオラータは考えている。

北の民同士が争っている場合ではないとランケオラータはルムに説いたが、それはそのまま自分にも帰ってくる言葉だった。

北の民と南の住人が、争っている場合ではない。人同士が争っている場合ではなくなったと、ランケオラータは理解していた。

春まで待てるか。

雪が緩み、南に帰ることができる時がきたら、ルムを伴いインダミトに帰る。

どれほどの人が信じてくれるか分らない。北の民に篭絡され、南の資源を引き出すための謀略や、南への侵攻の手先だと勘繰られるかも知れない。下手をすればランケオラータ自身が殺される危険性

もある。

だが、ランケオラータは、その危険から逃げることは、貴族としての矜持を捨てることだと思っている。

自分ひとりが助かっても、そのために多くの人々を危険に晒すのであれば、それは貴族としての義務の放棄だ。

「なあ、ルム。

俺は立場を理解しているつもりだ。

だが、それを承知で敢えて聞く」

ランケオラータは、ルムをインダミトに連れて行くと決心した。

自分は捕虜であり、勝者であるルムたちにもの申せる立場にはないことは理解していた。

しかし、ランケオラータの物言いは、既に戦友に対するそれになっている。

「何だ、ランキー？

急に改まったりして」

ルムにしてみても、既にランケオラータは愛称で呼びかける対象だった。

多少は立場の優位を感じてはいるものの、彼の知識や教養、軍事以外に見せる人心掌握や統率の技術、適材を適所に配することを可能にする人を見る目は、尊敬の対象であり、最良の教材だった。

いつしかルムは、ランケオラータが北の大地を終の住処に選ぶことを望んでいた。

「今回の魔獣なんだが。

どうも作られてるというか、操られているというか。

もう、北の民だけの問題じゃないと思う。
南大陸と共同で最北の蛮族に当たらないとダメなんじゃないか？
俺をインダミトに帰してくれ。
そのとき、一緒に来て欲しい」
ランケオラータは正規軍を派遣すべきだと説く。

「俺が行っても大丈夫か？
いや、俺の身が大丈夫かという意味じゃなくて、俺が行くことで纏まる話も壊れるんじゃないか？
その心配がなければ、俺は行こう」
ルムの答えは明快だった。

彼自身、対人の戦や数体の魔獣であれば滅多なことでは後へは退かないが、魔獣の大軍を率いた蛮族には抗することは無理だと感じている。
ただし、軍の派遣は北の民の神経を逆撫でするだろう。そのための地均し、根回しが不可欠だ。いきなり南の正規軍が進撃したら、自分たちを討ちに来たと思われるのが落ちだろう。

もちろん、一気に最北の蛮族を討つことは困難で、当面は駐留軍を置いて蛮族の南下を食い止める。
それには中央部の民との協同が必要だ。

平野部の民と中央部の民は、お互いに相争っている。同意を得ることは困難に思えるが、それをしなければ北の大地が混乱するだけになってしまう。
幸い、中央部の民が程近い山岳地帯に侵攻している。それなりの立場の者がそこへ行き、根回しするチャンスといえた。

「中央部の民と渉りを誰が付けるかだが……

ルムには俺と一緒にインダミトに行って欲しいからな」
中央部の民と交渉するには、それなりの立場の者が行かなければ話にもならない。
本来であれば、平野の部族を束ねるルムが行くべきだが、ルムにはインダミトに来てもらわなければならない。

他の集落にしてみても指導者がいなくなっては困る。
下手をすれば殺されるかもしれないし、人質として中央部の民の集落に拘束されるかもしれないからだ。

「妹に、ヌミフに行ってもらう」
ルムはことも無げに答えた。

「いいのか？
どうなるかわからんぞ？」
心配顔のランケオラータが聞き返す。

「考えてもみろ。
代わりの効く者が行って、あちらが納得するとでも思うか？
殺されたら困る者が行かなきゃ、こちらの本気は伝わらないだろう」
ルムにしても心配は心配だ。
人として殺されなくても、女として殺されるかもしれない。
だが、その覚悟がなければ、中央部の民と話をすることすらできないだろう。

ルムはヌミフを呼び、中央部の民と話をつけてくるように命じる。
兄妹としてではなく、部族を率いる者としての命令だ。当然その命令に逆らえる者はいない。
もちろん、ヌミフも部族を束ねる者の妹として、その程度の覚悟

はある。

雪が緩む頃には、最北の蛮族の攻勢も始まるだろう。できる限り早く北の民同士の諍いを止め、協力体制を築かなければならない。

ランケオラータをインダミトに返すには、彼に雪と上手に付き合う術がない以上、春を待つ必要があるが、ヌミフが山岳地帯へ行くのは早い方が良い。

数人の供を連れただけのヌミフがパーカホの村を発ったのは、それから三日後のことだった。

表面上は平静を保っているルムが、誰より妹の身を案じていることを、ランケオラータは知っている。

それだけに南大陸の協力をなんとしても取り付ける。彼は固く心に誓っていた。

バードンは雪に行く手を阻まれて、焦燥の中で日々を過ごしていた。

結局、炭に関する情報を得た村で足止め喰ってしまい、ひと冬をそこで過ごす羽目になっている。

数十日を過ごすうち、村に馴染み溶け込むことには成功したが、ランケオラータに関する情報はほとんど入ってこない。たまに交流のある平野の集落に行く者もあったが、例年より集落の人が多いということしか聞けなかった。

おそらく、その増えた人というのが捕虜を指しているのだろうが、どの集落にいるのかが絞れない。

自分の目で確かめたかったが、ラシアス育ちとはいえ南大陸の気候に慣れきったバードンに、厳冬期の雪原を踏破することはできな

かった。

ようやく降雪が止み、吹雪に叩かれることも、視界が利かなくなって遭難する危険も減った今が、平野に下りるチャンスだった。

バードンは村人に案内人を頼み、まずは交流のある平野の集落を目指し、それから以前聞いたパーカホに行くことにした。

アービィたちがリジェストに到着する二日前のことだった。

偶然ではあったが、ハイスティはバードンが滞在していた村のすぐ隣村で足止めされていた。

やはり炭に関する情報からランケオラータの関与までは推測できていたが、交流のない集落に囚われているということしか分らない。

バードンの消息も分らず、先を越されているのではという焦燥が彼の出立を早め、バードンに先立つこと一日ではあるが、平野に向かって旅立っていた。

交流のある平野の集落までは、北の民であれば十日で踏破できる道のりではあるが、雪に慣れていないハイスティではさらに数日を要すると案内人は考えている。

降雪の日数こそ減ってはいるが、まだ完全に雪の時期が終わったわけではない。

平野に降りる道は数本あり、徐々に合流して最後は一本道になる。その途中途中には、夜を過ごすことができる避難小屋が点在している。吹雪に巻き込まれた際にすぐ退避できるように、作りは簡素だが数だけは揃えてあった。

初日は無理をせず、半日程度の避難小屋に入ることにしたが、それでもハイスティの足ではそれが限界のようだった。

小屋の中で寝袋に包まったハイスティは、つくづく大変な仕事を

請け負ってしまったと思い知らされていた。

ベルテロイを発って二十二日目の夕刻、アービィたちはリジェストの町に到着した。
まだ周辺は雪に閉ざされてはいるが、馬車が行き来できるほどに回復している。

「戻ってきたわね」
ティアは感慨深そうに呟く。
今度こそ。今度こそは北へ渡る。

「ティア、あんまり気負っちゃダメよ。
肩の力抜いて、気楽に、ね」
メディが心配げに声を掛けた。
傍から見ていて痛々しいほどティアは気負い込んでいる。

「そうよ、あたしたちが行けば大丈夫。
ってくらいに考えてないと」
ルティが気負いに固まり切ったティアの心を解すように言った。

酒場に繰り出し、北の大地への案内人がいないか、主人に聞いたところ一人の商人を紹介された。
セトナイと名乗る中年の男は、中肉中背のがっしりした体格で、抜け目なさそうな表情からベテランの商人であることをうかがわせている。

五日後に地峡を抜けた山岳地帯の集落を回るということで、それに同行させてもらうことになった。
案内する代わり、野盗や魔獣からの護衛をアービィたちがすると

いうことになり、案内料は護衛料で相殺することにした。

準備のため寒冷地仕様の寝具や防寒着などについて教えてもらい、犬の毛皮が最も防寒効果が高いという、意外な情報を得る。

熊は冬眠してしまうので雪原を活動するための毛皮を持つ必要がなく、それほど防寒着としては優れていないらしい。また一旦濡れてしまうと、乾くのに時間が掛かりすぎることも、防寒着としての用を成さない理由だった。

三人の視線に、アービィは急に不安に襲われていた。

「じゃ、いざとなったらよろしくね、アービィ」

「じゃ、じゃなぁ～いっ！！」

ルティの発言を即座に却下し、アービィはエールを呷る。

翌日からセトナイに教えてもらった情報に従い、寝具や防寒着を買い込み、数日分のレーション、回復薬、触媒を買い足す。

夜はセトナイと酒場で落ち合い、雪の中での過ごし方や凍傷になったときの処置、予防法などを教わり、翌日必要な物を買い足すということを繰り返し、出発の日までを過ごしていた。

その間に町のギルドにエンドラーズから手紙が届く。

孤児院の構想に全面的に賛同し、既にデュ・デバリ公との協議に入っているらしい。

心配事が一つ片付き、アービィは礼状をエンドラーズに送った。

出発の朝、陽が昇ると雪原は目を開けていられないほどの眩しさだった。

もう暫くすると雪が溶け始め、道は泥濘と化してしまう。その前に間道を抜けなければ、再度北への道は閉ざされる。

そうなると初夏まではウジェチ・スグタ要塞を経由するしかなくなる、ギリギリのタイミングだった。

ティアはこの幸運が続くことを、祈らずにはいられなかった。

第５０話

ヌミフ一行は、パーカホの村を出てから雪原を彷徨っている。
中央部の民が山岳地帯に拠点を築いていることはわかっているが、その場所を特定するまでにはなっていなかった。

山岳地帯に取り付き、避難小屋を利用しつつ中央部の民の拠点を探そうとしていた。
避難小屋のいくつかは破壊され、彼等が手近なところから略奪を行っていたことを物語っていた。

急な吹雪等で、避難小屋まで戻れなくなったときには斜面に雪洞を掘り、その中で一晩を過ごすこともあった。
下手に天幕を張っても、風で引き千切られたり、降り積もる雪に潰されたりとかえって危険が大きい。

雪洞に潜ってしまえば、その場所そのものが雪崩を起こさない限り、崩れる心配がほとんどない。
湿度は高くなってしまうが、防音効果も高く、水の確保も周囲の雪を溶かすだけだ。

氷点下の世界での排便は、凍傷にかかる原因にもなってしまうし、素肌に冷え切った風を受ければ体温が急激に下がってしまう。
どう頑張っても下半身を露出せずにはいられない排便は、死と隣り合わせの行為でもあったが、雪洞の中であれば風を遮断できるためその危険もない。そのうえ、排便後は雪で埋めてしまえば排泄物は凍りつき、臭いが出ることもなかった。

雪洞の中で豪勢に火を焚いてしまうと、熱が天井を溶かして抜け

てしまったり、生き埋めになる危険性はあるが、そこは加減を覚えれば済むだけの話だ。

男だけのパーティならば、数人が入ることのできる雪洞を作れば、孤独に耐えるという苦痛もない。

さすがに男女が一つの雪洞に入ることは、用便の問題もあり憚られたので、ヌミフは一人用の雪洞を掘っていた。

全く外界からの音を遮断された雪洞の中で、ヌミフは考え続ける。どうすれば中央部の民と大同団結できるのか。つい先日までは、血で血を洗うような抗争を繰り広げていた間柄だ。そう簡単に信頼関係を築けるとは思えなかった。

しかし、魔獣の群れが襲い来ることを考えると、過去の恩讐に囚われるべきではないということも分っている。

身体を差し出すか。その覚悟はあるが、いざそう考えると震えるほどの恐怖を感じる。

既に男の経験はあったが、好きでもない男に身体を開くことへの恐怖と嫌悪感は、やはり容易に払拭できるものではなかった。ましてやパーカホに恋人が待っている状態では尚更だった。

だが、平野部の民の指導者層に属する者の妹という立場は、それを覚悟させるに充分すぎるほどのものだった。

ほとんど強迫観念といってもいいかもしれないが、ヌミフは中央部の民の前で全裸に剥かれ、陵辱される自分の姿が目に浮かんでしまっている。

兄も、恋人も、その覚悟があってヌミフを送り出したものと思われた。恋人には止めて欲しかったとも思うが、それはできない相談であったし、止められたところでヌミフはそれを振り切って出てきただろう。

蝋燭の光が反射する明るい雪洞の中で、ヌミフは止めどない思考の中に沈んでいた。

ルムは立場上平静を装ってはいるが、身を焦がすような焦燥感と不安を感じている。

妹の身の安全は、今まで最優先で守っていたが、今回はそうも行かない。護衛には腕の立つ者を選んではあるが、中央部の民との交渉時に争いになっては元も子もないとこくらい、彼等も解っている。

できればヌミフの交渉結果を聞いてから南大陸へ旅立ちたいが、いつまでも待っているわけにも行かない。

降雪の時期が終わり、気温の上昇に伴う雪解けによって、道が泥濘と化す前に地峡へ続く山岳地帯まで辿り着いていなければ、また初夏まで身動きが取れなくなってしまう。

通常北の民が南大陸へ渡るには、ウジェチ・スグタ要塞を避けて間道を進まなければならなかったが、ランケオラータが同行していれば堂々と要塞を通過することができる。間道も雪解けの時期には泥濘に沈み、人の通行を妨げてしまうが、要塞を通る道は山岳地帯の中でも岩盤がむき出しになっている一体であるため、常時通行が可能だった。

旅立ちに適した時期は、今をおいて他にはない。ルムは決断を迫られていた。

やがて、彼は腹心の部下を呼び、不在の間の指揮権を移譲し、何があっても中央部の民と諍いを起こすな、と命じる。そして、平野部の民を纏めておくために各集落に使いを出し、指導者層に属する者たちを召集した。

ランケオータは、捕虜たちにどう言おうかを悩んでいる。間もなくインダミトに向かって旅立つが、中には取り残されると思う者もいるだろう。ルムと二人だけで魔獣がうろつく中に飛び出すなど、ただの自殺行為だ。

当然護衛として南大陸の諸侯軍の中から、気心知れたアンガルーシー領の者を連れて行くことになるが、村の警護にも残していかなければならない。

北の民の女と情を交わした男たちに気遣う必要はない。彼等は既に北の大地に骨を埋めるつもりでいる。

だが、南大陸に妻子や恋人、別れ難い親族を残している者も多い。その彼等全てを連れて行くわけにはいかない。携帯する食糧の問題もあった。大所帯になれば食料の確保も難しくなるからだ。

だが、いつまでも悩んでいる場合ではない。聞くところによると、雪解けが始まると、また北の大地は人の通行を妨げる泥濘の中に沈んでしまうらしい。そのような環境を知らない彼にとっては、雪解けは春を告げる喜ばしい現象であり、川に流れ込む小さなせせらぎの音は心地よいものという認識だった。

知らないということは罪だと彼は思い知らされている。もし、雪解けを待って侵攻していたら、捕虜になるどころではない。敵と相見えることなく自滅していたかもしれなかった。今後、さらに北へ侵攻しなければならないなら、北の民が持つ経験は何ものにも代え難い貴重なものになるだろう。

ランケオラータは副官を呼び、何があっても捕虜たちを纏め、浮き足立たせないこと、村人と協力して魔獣を撃退することの二点を最優先として命じる。そして、必ず戻ること、そのときには捕虜としてではなく、正規派遣軍としての立場を確立してくることを約束

した。

バードンとハイスティは、示し合わせたかのように一日ずつのずれで同じ避難小屋を利用していた。もし、ハイスティが一日でも同じ場所に長く逗留すれば、両者は顔を合わせていただろう。

両者に付く案内人は、期せずして同じ集落を目指している。山岳地帯の民であれば十日程で到着できる距離だが、雪になれない二人を伴っていてはさらに数日余分に見込む必要があった。

携帯する食料が多すぎては荷物がかさばるため、途中これも示し合せたかのように一日ずつを使って大型の草食獣を狩っていた。幸い、春の出産期に向けて動きの鈍い雌を狩りやすい時期であり狩り自体は容易で、一日掛かってしまったのは、獲物が見つからなかっただけであった。

避難小屋で解体した草食獣を燻製にして、勿体無いとは思いつつも持ちきれない分は処分する。作りたての燻製をアルコール度数の高い酒とともに飲み込み、体内から暖めていないと燃料の少ない避難小屋の中では凍えてしまいそうだった。

ハイスティは神父を装っていたが、マ教に酒に関する禁忌がないことに心から感謝している。もし、神父が酒を飲んではいけないということであったなら、彼は神父役をかなぐり捨ててしまうところだった。

それはバードンにもいえることで、それほど酒好きというわけでもなく、また暗殺者として酔うほど飲まないという自制心の塊のような彼であっても、寒さに対抗するには酒の力を借りなければならなかった。

セトナイと共にリジェストを発ったアービィたちは、巨大な馬の引く橇に乗せてもらっていた。

アービィたちが見慣れていた馬とは違う品種で、ノタータスよりかなり大きく体重は１ｔ近くありそうだ。毛足も全体的に長く、寒冷な気候に順応した結果と思われる。

一日で間道を抜け、地峡に続く山岳地帯の北の民の集落に到着した。比較的南大陸に対して好意的な集落では、この春最初の来訪者たちを手厚くもてなしてくれた。

セトナイはそのまま商売の話を始めていたので、アービィたちは村の指導者層を紹介してもらいランケオラータの消息に付いて訪ねる。

そこでは神父二人が同様に捕虜の消息を調べていたことや、ひと冬を集落で過ごし、八日ほど前に平野部へ向けて旅立っていったことを知らされる。

アービィたちは、その神父たちの後を追うことを即断しセトナイに相談するが、彼は平野部まで下りることはないという。商売の当てのない危険地域に、態々踏み込む物好きはいないというのがセトナイの言い分だった。

もちろん、アービィたちはセトナイにそこまで頼むつもりはない。間道の案内と北の民への渉りをつけてもらえれば充分だった。ここでセトナイと別れ、村人を案内人として雇うことにするが、メディがいることで交渉はすんなりと纏まった。

メディがアービィたちとの出会いを多少脚色し、娼館から救い出してくれた恩人と紹介したことが効いているようだった。

アービィたちは一晩その村で過ごし、翌朝早くセトナイに別れを告げ、村人の案内で平野部を目指して旅立つ。

ティアは未知の大地へ踏み出すに当たり、セトナイと別れた後はラミアのティアラを身に着けている。北の大地にラミアは存在しないと村人から聞き、ティアラを見られたところで迫害を受ける可能性は低いと判断していた。

もちろん、寒さに弱いラミアの姿になることはできるだけ避けたいが、ティアラを身に着けていれば呪術を使うことができる。

未知の魔獣と戦う羽目になったときや、北の民と争いになってしまったとき、精霊呪文よりラミアの呪術が効果的であるという判断もあったからだ。

「じゃあ、行こうか」

まるで隣の家に遊びに行くような気軽そうな物言いでアービィが出発を告げる。

緊張がないわけではないが、ティアの気負いを少しでも減らそうという心遣いだ。

メディの話では、北の大地では蛇や狼を神として崇めている集落があるということだ。

アービィは、有効であると判断できたら、獣化を躊躇うつもりはなかった。

「いよいよね」

ティアには、三人の気遣いが痛いほど伝わってくるのが解る。

気負わないように、そう言い聞かせていたが、それが却って気負いを呼び込んでいることにティアは気付いていた。

今では逆にそれを楽しめと自分に言い聞かせている。

村人たちの好意で犬橇を貸してもらい、ワラゴという名の案内人を含め五つの橇が犬に曳かれて村を出た。

ルムとランケオラータは、五人の兵士を護衛に旅立つことにした。人選に多少の混乱はあったが、敢えて北の民の女と情を交わした男たちの中から護衛を選んでいた。また戻ってこなければならないため、里心が付いてしまわないようにという配慮だった。

ルムは集落の守り神である大蛇に、ランケオラータはもちろん唯一神マ・タヨーシに道中の安全を祈願し、村を出た。それぞれの祈りの仕種を村人と捕虜たちは珍しいものを見る目つきで眺め、彼等を見送った。

北の民の信仰は、それぞれの集落や部族で崇める対象が異なることが多い。そしてそれが部族間の対立を生むことはない。

マ教ですら信仰の対象にしている中央部の部族があるほどだ。もっとも、その部族はマ・タヨーシを信仰しているだけで、南大陸の住人のように唯一神として他を否定することはない。

実在の動植物を守り神としている部族が、それを狩猟や駆除の対象にすることはないが、他の部族が狩ったり駆除したり、目の敵にすることがあっても、それを止める気は微塵もない。生きていく上で必要だからその行為に及ぶのであり、そこに干渉すれば殲滅戦になることを彼らは知っている。敵と認定した相手を殲滅できるならそれでも良いが、自らに被害が出るよことは許容できない。

いくら厳しい自然の中で死と隣り合わせの生活であっても、無駄な死を受け入れる気は誰も持ち合わせてはいない。生活圏の奪い合いならともかく、信仰の自由で殺し合うなど愚の骨頂だと北の民は信じている。

それ故に南から来るマ教の伝道師は、一部では暖かく迎え入れられるが布教には誰も耳を貸す者はなく、また一部では独善的な考え

方で毛嫌いされていた。

ときおり雪がちらつく中、七人のパーティは先を急ぐ。隣村を過ぎれば、あとは山岳地帯まで集落はなく、避難小屋があるばかりだ。ルムは、多少の不便さに目を瞑り、避難小屋は使わず雪洞を掘ることで野営するつもりだった。

確かに避難小屋は便利そうに思えるが、隙間風を完全に防ぐことはできず、場所によっては燃料が使い尽くされている可能性もある。暖を取るには雪洞の方が確実で、寒さに慣れていないランケオラータにはその方が安全と思えたからだ。

ランケオラータは南大陸への途上、何故北の民が南大陸に受け入れられないのかを考えていた。

異教徒。まずはそれだ。南大陸においては、マ教徒にあらねば人にあらずという風潮は確かにあるが、信仰心の篤い薄い当然あり、中には信仰心をほとんど持たない者だって普通にいた。南大陸出身者同士で信仰心の厚い薄いで差別があるということは聞いたことがない。南大陸出身の者の中にも異教徒はいた。当然差別や蔑視の対象であり、神父にとっては改宗強化の対象だ。出自は関係なく、信仰の対象が差別や蔑視の原因のはずなのに、北の民でマ教を信仰している者がいても、差別や蔑視の対象になっていた。

南のマ教信者の態度に対し、北の民の他宗教を信仰する者には、マ教を排斥しようという態度は見られない。ランケオラータは極普通の南大陸の貴族であり、敬虔なマ教の信者ではある。マ教を信じていない者に救いを、という気持ちがあり、そのためにはマ教を信仰するべきだと思っている。

だが、インダミトが支持するマ教のカーナミン卿は、他宗教との融和を謳っている。何故か。現実主義者のカーナミン卿は、宗教戦

争になることを恐れていたのだった。

殲滅戦しか選択肢の無い戦争。どちらかが死に絶えるまで続けられる戦争。聖戦の名の元にはどのような行為でも正当化されてしまう戦争。人を救うはずの宗教が人を死に至らしめる戦争。宗教の最大の矛盾点だ。

カーナミン卿は、その愚に気付いてしまった。

であれば、良き隣人として共存するしかない。他の宗教の存在を認める代わりに、マ教存在を認めてもらう。ただそれだけで良いとカーナミン卿は考えた。

ところがだ。他の宗教、つまり北の信仰は、もともとマ教を排斥しようなどとは考えていなかった。排斥どころか自らの宗教への改宗を求めてもいない。最初から共存が前提の立場だった。マ教の独り相撲だったのだ。自身の宗教観が崩れ行くのをランケオラータは感じていた。

では、他に何がある。南大陸で北の民は、娼婦や奴隷の立場に甘んじている。だが、それは南大陸がそれしか用意しなかったからだ。確かに性的に奔放な者が多いが、それは文化の違いだろう。北の大地では誰に対しても、無差別に身体を開いているわけではない。娼婦だから、誰に対しても身体を開いているだけであって、それも金銭という契約あってのことだ。

南大陸で生活している北の民の娼婦が、私生活において誰にでも身体を開いているわけではないことからも、それは理解できる。特定の恋人や配偶者以外に、濫りに身体を与えてはいない。淫らな民という蔑視は、謂れなきことだ。

精霊呪文ではなく呪術を使う。これも文化の違いだろう。彼等から見れば、治癒呪文や状態以上回復呪文はともかく、攻撃補助の白

魔法も攻撃に純化した黒魔法も好戦的と映っているに違いない。理解できないものを懼れることは仕方がないとしても、だから差別や蔑視の対象にしていいという論法は成り立たないはずだ。

事実、北の大地に精霊神殿がないだけで、北の民であっても精霊呪文を使うことは可能だった。

商習慣。それは互いに交流がなければ、共通の商習慣が発達するわけがない。南の常識を押し付けているだけだ。北の大地にも、交流のある部族同士での商取引は存在している。共通の貨幣を持たないため、交流がない部族同士が物品の遣り取りを行う場合は、物々交換か南の貨幣が用いられる。

必要がないからで、文明が劣っているわけではないだろう。必要があるところには、共通の貨幣か貴金属による、ごくごく当たり前の商取引が存在していた。

南の土地を狙っている。いや、移住を望んでいるだけだ。いったい何時、彼等が大軍を以って南大陸に攻め入ろうとしたというのか。北の民を通さじとする要塞を抜くために、武装した集団が襲い来ることはあった。だが、いまだかつて、収奪のために南大陸へ入ろうとした北の民がいただろうか。武装の理由は自衛だ。要塞からの攻撃を避けるための武装でしかない。彼等は暖かい土地を求めているのではなく、暖かい土地に住むことを求めていた。

もちろん、北の民にも野盗を生業とする者はおり、それが南大陸に進入することはあったが、北の大地においてもお尋ね者となっている。南大陸に仇成すために進入しているわけではなかった。

結局のところ、南大陸の占有権を主張するためと、金髪碧眼に抜けるように白い肌という南大陸出身者に見られない身体的特徴、北の民は全体に南大陸の人々より大柄であり、それに対する劣等感がそうさせているだけだった。人格によるものではない。南大陸で北

の民を配偶者に選ぶ者は、少数ながらいた。人格に問題ある民族というのであれば、配偶者として迎えることは考えられないだろう。

捕虜として数ヶ月を同じ生活圏で過ごした経験の中でも、戦場においては殺し合いもしたが、村での生活で虐待されたということはなかった。現在も共存していると考えていいだろう。

より北からの侵略。生存圏の奪い合いではなく、殲滅戦を仕掛けてきた最北の蛮族。この脅威は北の民だけの問題ではなくなっていた。中には北の民同士相討ち滅びてしまえと言う者がいるかもしれないが、その後は魔獣の群れが南大陸に雪崩れ込んでくる。

北の民を以って魔獣への防波堤としろと言う者がいるかもしれないが、魔獣に追われ死に物狂いの北の民が南大陸に雪崩れ込んでくる。

既に南大陸の問題になっている。であれば、手を結べる北の民とは手を結ぶべきだ。

ふと、焦げ臭い空気が流れた。ような気がした。戦闘直前の空気にも似た、害意を含んだ空気のような気がした。そのような空気に敏感な兵士たちが、ルムとランケオラータを囲み防御のための陣を組んだ。

ルムの指示で林の外れにある避難小屋まで周囲を警戒しつつ進んでいると、徐々に焦げ臭さが強くなっている。

避難小屋まであと数十mまで近付いたとき、雪原を一直線に襲い来る魔獣の影が遠望された。人間ではとても逃げ切れそうもない速度で迫る魔獣は、ランケオラータたちの姿を何時から認めていたのだろうか、迷うことなく襲い掛かってくる。

キマイラが二体。単独生活をする魔獣のはずなのに、信じられな

いほどの連携でランケオラータたちを追い詰めてきた。
一体が方向を変え、彼等と避難小屋の間に割って入り、もう一体が背後から迫ってくる。

兵士の一人が『猛炎』で牽制し、ランケオラータが『倍速』を唱える。全体掛けのためか、目に見えて走る速度が上がるわけではなかったが、追いすがるキマイラが詰める距離の減少が少しだけ減った。

彼等の前に立ちはだかるキマイラは『猛炎』をものともせず、彼等に襲い掛かった。

雪原に逃げても脚を取られるだけだ。眼前のキマイラを排除し、避難小屋に飛び込むしかこの状況を打開することはできない。もっとも、その後の打つ手もないことは確かだが。

兵士の一人が、飛び掛ってきたキマイラのライオンの頭に剣を叩きつける。他の兵士は二手に分かれ、前後のキマイラに『猛炎』、『大炎』、『凍刃』を放った。

瞬間、剣に怯んだキマイラが飛び退った隙に、避難小屋の扉に取り付くことができた。

慌てているせいか、扉の立て付けが悪いせいか、なかなか開いてくれない。ランケオラータが必死に扉を開けようとしている間、背後から石を砕くような音が響いてきた。

剣を叩きつけられたキマイラが、その相手をライオンの顎に捕らえ、頭蓋骨を噛み砕いた音だった。

もう一体のキマイラが、声を上げることもできず崩れ落ちた兵士の身体に喰らい付き、頑強だった肉体を貪り始めた。頭蓋を噛み砕いたキメラが顎を閉じ切ると、兵士の頭だった塊は身体から千切り取られ、そのまま飲み込まれていく。

死期線の痙攣をすることすら許されず、キマイラの胃の中に収められた兵士は、だが貴重な時間を稼ぎ出すことに成功した。奪い合うように兵士の身体を貪るキマイラは、ランケオラータたちが避難小屋に転がり込む間、彼等を省みる余裕をなくしていた。

避難小屋は雪の圧力に負けないように、かなり頑丈に作られている。扉も窓も小さく、キマイラが潜り込めるような大きさではない。扉は分厚い一枚板で、そう簡単に齧り開けられるものでもない。

小屋の中に転がり込んだ彼等は、手近にある物全てを扉の前に積み上げ、バリケードを構築する。

窓から蛇の尾を潜り込ませるキマイラに対し、兵士が剣を『大炎』を叩きつける。

衝撃や熱に蛇は引っ込むが、暫くするとまた入り込んでくる。呪文に限りがあるため、全員が剣を取り蛇に対して立ち向かう。

暫くすれば諦めて立ち去っていくと期待するが、キマイラは諦める気配を見せることなく小屋の周囲を回り始めた。とりあえず小屋の中にいれば殺されることはないが、キマイラがいる限り出ることは適わず、食料に限りもあることからこのままではジリ貧だった。

食い殺された兵士の肉体に味を占めたか、キマイラは執念深く小屋への侵入を試みる。徐々に扉が緩み始め、前後に揺らされてきてしまっていた。もし扉が破られるようなことがあれば、即突入されることはないにしろ、周囲の建材を噛み砕かれてしまえばそれまでだ。

バリケードなど人力で動かせるものでしかなく、キマイラの怪力の前では埃を払う程度のものでしかないだろう。

全員の表情に絶望の色が浮かび始めたとき、扉の外から魔獣の咆

哮が響き渡った。
小屋の中に気を取られていたキマイラの蛇の尾を、ハイスティが切り落としていた。

ハイスティは、キマイラ二体が執拗に小屋の周囲を周回し、中を窺っていることから人が襲われていると判断した。ランケオラータ救出のためには協力してくれる平野部の民が必要だった。人助けというより打算からの行動だったが、結果的に吉と出たようだ。

同行していた案内人は、キマイラの姿を確認した時点で返している。万が一にも襲われるようなことがあっては困るし、最悪の事態に備えて村に助けを呼びに行ってもらった。
ハイスティの戦闘力であれば、キマイラ一体であれば倒すことは可能だ。一体を残してしまっても戦力が上がった状態で篭城していれば、撃退できる可能性もあるかもしれないし、その間に助けが来るかもしれない。

二対が連携を取るなど考えてもいなかったハイスティは、キマイラの攻撃を防ぐのに手一杯になっていた。だが、戦場が扉から離れた隙を突いて、ルムが窓から飛び出しキマイラに飛び掛った。
不意を突かれたキマイラは山羊の首を切り裂かれ、急に動きが鈍った。手負いのキマイラにハイスティが斬りかかり、ライオンの首にも手傷を負わせることに成功した。

二人は言葉を交わすことなくキマイラに斬りかかるが、戦いを知っている者同士打ち合わせなど必要もなかった。
一体からの攻撃をかわし、手負いのキマイラを攻撃する。一太刀、二太刀と決定打ではないが毛皮を斬り裂く度、徐々に手負いのキマイラの動きが鈍り始め、ついには逃走する。

意気揚がるルムが勇躍もう一体に斬りかかるが、そこまで無傷のキマイラに跳ね飛ばされてしまった。

大地に叩きつけられ、受身を取り損ねたルムの肺から空気が絞り出され、息が詰まる。

覆い被さるように圧し掛かるキマイラをハイスティが斬り付け注意を逸らす隙に、ルムは地を転がってその場を離れた。

片膝を付き、剣を杖に息を整えるルムの横にハイスティが立ち、キマイラの攻撃に備えた。

小屋を背後に背負う現在位置を確認し、ハイスティは小屋に向かって窓を開けるように怒鳴った。

ランケオラータが反応し、窓を開けたことを告げたとき、ハイスティの表情が凍りつく。

ハイスティの意図を察していたルムは、ランケオラータが開けた窓に飛び込み、次いで飛び込んでくるはずのハイスティの妨げにならない位置に退避した。が、何時まで待ってもハイスティが飛び込んでくる気配がない。

訝しんだルムが窓から外を見ようとしたとき、矢のような勢いでハイスティが転がり込んでくる。

ハイスティはランケオラータの声を聴いた瞬間、状況が理解できず一瞬の隙を作ってしまった。

ルムに続いて窓に飛び込むために身を翻したが、その隙のため僅かに跳ぶタイミングが遅れていた。

そこへキマイラの前肢の一撃が襲い掛かり、背中を大きく傷付けられてしまった。

服が切り裂かれ、大流血しているハイスティに、ランケオラータ

が『治癒』を掛ける。全治までは『快癒』か『治癒』後数回掛ける必要があったが、ここまでの戦闘で呪文はこれが最後の一手だった。

避難小屋は冬の間に燃料を使い尽くされ暖を取る方法がなくなっていた。切り裂かれた服は、既に防寒の用を成さない。ランケオラータが自分の防寒着を与えようとするが、ハイスティは頑なにそれを断っている。

ランケオラータにもしものことがあっては、自分の努力が無になってしまう。それでは仕事を完遂することができない。申し訳ないが、防寒着は兵士たちから借りるしかないようだった。

傷は塞がっているので、あとは痛みが引くのを待つだけだ。そうすれば、あのキマイラを撃退できる。ハイスティは過信はしないが、互いの実力を冷静に測ることはできた。ルムもいるならば、それも容易かろう。それまでどうやって凌ぐか、今はそれに集中するべきだろう。

「ランケオラータ様とお見受けいたします。
私はバイアブランカ王より、あなた様救出の命を受けたハイスティと申す者。
ご無事だった様で何よりにございます。
こちらの方は？」
ハイスティはランケオラータに向き直り、初めて口を開きルムを見ながら聞く。
共に戦った短い間にルムに怪しさを感じることはなかった。
ハイスティは、ルムを信頼に値する人物と見ている。

「私を……？
王は……私をお忘れではなかったのですか。
ありがたいことです。

よくぞ、ここまで来てくれました」
初対面のうえ、命を助けられた相手だ。
おそらくは貴族階級ではないが、礼を尽くさねば恥と考えたランケオラータは、ルムに対する口調ではなく、宮中での口調でルムのことや、これまでのこと、魔獣を組織的に運用する最北の蛮族のこと、そしてそれに抗すべく南大陸の正規軍を派遣したいことをハイスティに話した。

「では、こちらの方をインダミトまでお連れして、ランケオラータ様はまた北の大地へお戻りになると仰るのですか？」
驚愕。良くも悪くも南大陸の常識に囚われているハイスティの感情は、それしかなかった。
だが、ランケオラータが洗脳された様子もないし、ここまでの辛苦から狂気に染まっている様子もない。

その双眸は知的な光を湛え、力強い意志の光が溢れていた。
どうやら、ランケオラータは本気のようだ。そして言っていることに間違いはないだろう。
全力を以ってインダミとまでお連れする。ハイスティはそう決めた。自分で決めたのだ。それを違えるわけにはいかない。例え魔獣に頭蓋を砕かれても死なないことに、ハイスティは決めていた。

問題は、目の前のキマイラだが、魔獣が組織的に動いているということも問題だった。
加勢が来ないとも限らない、とハイスティが考えたとき、それは起こってしまった。

窓の外から別の魔獣の咆哮が聞こえてきた。明らかに二体の魔獣が小屋の外にいる。

キマイラではなさそうだが、熊や狼といった野生動物でも、それを元にした魔獣でもないことは確実だった。

窓から外を窺うと、キマイラから少しはなれたところでマンティコアがこちらに向かって身を低く、窓に突進する構えを見せている。

マンティコア。

南大陸でも希に見られ、古くは戦乱の時代より遡り、大帝国勃興期には既に知られていた。ライオンのような身体は赤い毛皮に覆われ、コウモリのような皮膜の翼を持ち、飛行はできないが滑空を可能にしている。

２４本の毒針が生えたサソリのような節のある長い尾を持ち、その毒は伝説上の巨人を瞬時に絶命させるほどの威力と言われていた。この他少数ではあるが尾の形状にはいくつかの変異があり、太い針を一本持つ個体や、無数に生え替わる針を飛ばしてくる個体が確認されていた。

常に苦痛に歪んだような人面には、耳まで裂けた口に鋭い牙が三列に並んでいる。際限ない食欲の持ち主で、その食欲は一国の軍隊を食い尽くすほどだと伝承には語られていた。

自然発生した魔獣という説と、邪悪な魔導師が作り上げたキマイラ同様の合成魔獣という説があったが、今までに倒されたマンティコアに生殖器が見られないことから、合成魔獣と結論づけられていた。

その製法は古代に失われたと信じられているが、近年のキマイラやマンティコアの増加は、古代魔道が細々と伝えられてきたのか、復活させた魔導師の存在を示唆するものだ。

マンティコアも図体はでかく、窓や扉を通ることはできないが、やっと一体に減らしたものがまた増えてしまったことは由々しき事態だった。

通常、この二種の魔獣が出会ったら互いの血を見ずにはいられないはずなのに、争うことなく小屋の中を窺っている。協力をするということはないにしろ、互いの足を引っ張り合うこともなさそうだった。

「ご安心ください、ランケオラータ様。わたくしが必ずや、インダミとまでお連れいたします」

ハイスティの言葉は、ランケオラータにではなく、自分に言い聞かせるための言葉だった。

ハイスティがキマイラに飛び掛っていく直前に、そこまで案内に付いていた山岳地帯の民は、救援を呼ぶために道を急いでいた。ことは急を要するため、心臓が破れそうになってもその足を止めることはない。

平野部の民に恩などないが、交流のある村の者であれば見殺しにすることは忍びない。

いくら山岳地帯を歩き回り、一般的な人より頑強な足腰と体力を持つとはいっても、数時間走り続けることは不可能だ。気は急くが身体が付いていかず、道端に蹲り休憩を取る。そして息を整えるだけで体力の回復を待たずに走り出すが、既に限界を超えているのか一般人の早足程度の速度しか出せなくなっていた。

道の彼方に人影を見たとき、彼は安堵のあまり座り込みそうになるが、最後の力を振り絞ってこちらに向かって歩く人影に走り寄る。初冬の頃集落を渡り歩いていた神父の姿に見覚えのあった彼は、神父に避難小屋の窮状を話し、縋るような目で同業者の救援を頼み込んだ。

神父は皆まで聞かずに了承し、そこまでの案内人を危険回避と救援要請のため村へ返し、彼の走ってきた道を早足で去っていく。神父の後姿を見送った村人たちは、山岳地帯の集落へと救援を求めるため急ぎ足で歩き出した。

バードンは、急ぐあまり数時間の距離を走ることで体力を損失する愚を冒さず、急ぎ足で言われた避難小屋を目指した。ただ歩くよりは体力の消耗はあるが、息が荒くはなるが上がるようなことはなく、数分の休憩で整えることができた。

案内人と別れて三時間後、キマイラとマンティコアが小屋を窺っている場面に遭遇する。

バードンは腰に佩いた双剣のうち、通常戦闘用に持参した鉄を鍛えた剣を抜き放ち、気配を殺して魔獣たちに近寄る。純銀製の剣は、対人狼に特化したものであり、副次的に吸血鬼に対しても絶大な威力を発揮し、ほとんどの魔獣の身体を斬り裂ける。だが、致命的に硬度に劣っているために純銀を弱点とする以外の魔獣は傷つけることができても、刀身が使い物にならなくなるくらいに歪んでしまうからだ。

避難小屋の中に気を取られているキマイラとマンティコアのうち、危険度の高いマンティコアから仕留めることにする。

扉や窓に牙を立て、爪を叩きつけることに集中している二体の魔獣の背後１０ｍまで近付いたとき、バードンは失策を悟った。気配を殺していたため、前方の魔獣に気取られることはなかったが、自らの意識もそちらに向いていたからか、周囲に潜む別の魔獣の気配を拾い損ねていた。目の前を通っては、気配を消そうが何をしようが無駄だ。

背後に濃密な殺気の塊を察知したバードンは、前方の二体に突入

する。

突如背後から湧く二つの巨大な殺気にキマイラとマンティコアが振り向いたとき、バードンは１０ｍの距離を数呼吸で詰めていた。マンティコアの人面が驚愕の形に変化した直後、バードンの剣が振り下ろされる。体を捻ってかわしたマンティコアの翼に切っ先が食い込み、薄い皮膜を斬り裂いて魔獣から滑空能力を奪い去る。

返す刀で赤い毛皮を斬ろうとするが、これは体毛を削り取っただけで有効打にはならなかった。

バードンに対する報復は、迅速に成されようとしている。翼を斬られたマンティコアの人面が、驚愕から憤怒の形に変わりバードンを睨みつけ、毒針の生えた尾を振り回している。キマイラが離れた位置からひと跳びで接近し、三頭がそれぞれに攻撃してきた。

バードンは、蛇の頭の噛み付きをかわし、山羊の頭の突きを避ける。地面を転がりキマイラトマンティコアの踏み付けを避ける。もちろんやられっ放しではなく、キマイラの三頭を、マンティコアの前肢に斬りつけていた。

だが、バードンが放つ攻撃は二対一の形成を逆転させるための一撃には程遠く、精々キマイラやマンティコアの連続攻撃を躊躇わせる程度しかなく、ついさっき背後に感じたもう一体の殺気が迫りつつある今、決定的な一撃を喰らうまでそう時間は掛からないと思われた。

一度小屋に対比し冷静さを取り戻したルムは、現在目の前にいる魔獣以外にもバードンが察知した巨大な殺気と、それよりははるかに小物の気配を多数察知していた。ただ、その小物の中に混じる殺気ではない邪悪な気配が気に掛かる。悪意、害意、殺意といった邪

気を綯い交ぜにしたような、ルムたちにとって最悪の事態を期待するかのような気配だ。

その邪悪な気配といくつもの殺気は小屋を十重二十重に取り囲み、キマイラとマンティコアの攻撃の成否を見守っているかのようだった。このままでは屋外で戦う男が危ないと、咄嗟に判断したルムとハイスティは窓から飛び出し、バードンと魔獣の間に割って入る。

巨大な殺気の正体はすぐに判明した。一つ目の巨鬼。サイクロプスが林の中から現れる。

知能は低く、作戦と呼べるような高度な連携は不可能だが、その怪力だけでも脅威だ。普通の人間の全てを倍にしたような体躯からは想像もできない俊敏さを誇り、一つ目とは思えない正確な距離感を有している。オーガの持つ人への嫌悪感をさらに強めたような敵対的な性格は、人の姿を見たが最後、殺し尽くさずにはいられない。生木を引き抜いただけのような棍棒を武器として振り回すその姿は、悪鬼、悪魔の化身、殺戮の権化として北の民に恐れられている。

魔導師の実験の成果であるとか、力を求め悪魔に魂を売った者の成れの果てであるとか、その生い立ちには諸説あるが、正確なところは判っていない。単独生活を送り、食欲と性欲に塗れた本能だけが、その行動を起こす衝動であった。

如何に人間離れした戦闘力を持つ三人といえど、凶悪な魔獣三体が相手では分が悪い。窓の中から回復薬で呪文の使用回数を強引に回復させた兵士が『猛炎』、最初で最後の一撃を放ち、魔獣が怯んだ隙に三人は避難小屋へと退避した。

ありったけのがらくたを窓と扉の前に積み上げ、バリケードを強化するが、それが何時まで持ちこたえられるかはあまり期待ができない。ハイスティやバードン、ルム一人ずつであれば、この程度の魔獣の囲いは掻い潜って逃げることは可能だが、戦いにまるで慣れ

ていないランケオラータを連れて逃げ切ることは絶望的だった。

周囲は陽が暮れ、急速に闇が支配しつつある。如何に魔獣とはいえ、疲れを感じないはずはない。闇が支配する時間帯は、多少なりとも小屋への破壊活動は抑えられるかもしれない。それを期待しつつ、各自は携帯食料で腹ごしらえし、ハイスティとバードンが呼んだ助けが来るまでの長い戦いに備えた。

ほぼ同時刻、ランケオラータたちが魔獣の攻撃を受けている避難小屋から一日の行程まで、アービィたちは追いついていた。寒さに強い犬たちが引く橇の行程は順調で、初日は転倒してばかりだった四人も橇の扱いに慣れた三日目頃からは、目に見えて進む速度が上がっている。

日没前に避難小屋の一つに辿り着き、僅かに残る燃料に火を灯してレーションを胃に収める。翌日も黎明を期しての出発のため、早めに寝ることにして犬の毛皮に包まったところにハイスティとバードンの案内人が転がり込んできた。

事態を把握したアービィが、犬橇二台をここまで走り続けてきた案内人たちに預け、残り三台に荷物を括りつける。ワラゴに問題の避難小屋までの道を確認すると、迷うことない一本道という答えが返ってきた。

「判りました。僕たちはすぐに行きます。
あなたも、救援を呼びに行ってもらえませんか」
アービィは、獣化して一気に駆け抜けるつもりだ。
やはり、メディのこともあり、ワラゴに獣化を見せることは憚られたので、救援を口実にここで別行動にしたかった。

「冗談じゃない。昼間ならともかく、夜道では慣れない者は迷いかねん。
俺も行こう。
聞くところによると、あんたたちの仲間だけじゃなく俺たちの同胞もいるそうじゃないか。
土地の取り合いの殺し合いならともかく、魔獣と戦ってるんなら助けに行くぞ」
ワラゴは、村でも名うての猟師であり戦士でもあった。
その彼の見たところ四人で戦力になりそうなのはアービィだけだ。
女がどれほどの荒事に耐えられるか、ワラゴは期待していない。
乗りかかった船を降りるほど落ちぶれちゃいないさ、と言って、救援を呼びに戻ることを頑として認めなかった。

しばらく押し問答が続くが、時間の浪費でしかない。アービィは決心し、まずは二人の案内人を犬橇で送り出す。

「とにかく、僕たちで行きます。
一刻も早く救援を」
アービィが念話で犬たちに帰村を命じ、闇の中に送り出す。
犬たちはアービィの正体に気付き一瞬恐怖に身を竦ませたが、アービィに害意がないことを悟り案内人たちを乗せて闇の中へ消えていった。

「いいですか、ちょっと向こうを見ててもらえます？」
当然、みんなでね、と付け加え、服を脱いだアービィが獣化する。

――こちらを見ていいですよ。
不意に頭に中に入ってきた念話に訝しみながら振り向いたワラゴは、不安げな表情で自分を見つめる巨狼の姿に腰を抜かした。

ワラゴは立ち上がることも、言葉を発することもできない。だが、彼には巨狼に害意がないことも判っている。
巨狼を見た瞬間は死んだ、と思ったが、今はようやく落ち着きを取り戻し、巨狼を見上げている。

「なるほどね、これなら大丈夫だ。
みっともないところを見せちまったが、忘れてくれるとありがたい。
じゃあ、行こうか」
まだ声が震えているが、それは恐怖からだけではなく、畏怖の感情が多分に含まれている。

――忘れます。できれば僕のことは他所で言わないでいてくれるとありがたいのですが。
アービィから同意と依頼の念話が届いた。

「じゃあ、商談成立でいいかな。
ところで、悪魔が何で人の味方してるんだい？」
ワラゴから素朴な疑問が返された。

――それは追々話します。じゃあ、行きましょうか。
悪魔という単語に落ち込みつつ、アービィは答え、扉の前に立つ。

数瞬の後、立ち尽くす巨狼からの念話が全員の頭に届いた。

――ごめん、もう一度、あっち向いてて。扉が小さくて……出れない……

馬っ鹿じゃないの、というルティの罵声と共に、全員が振り返り巨狼に背を向ける。

扉の開閉音が聞こえ、その後、獣化を解いた全裸に突き刺さる外気の冷たさに、アービィの悲鳴が闇を引き裂いた。

第５１話

漆黒の闇の中をアービィは駆けた。赤外線暗視装置でも覗いているかのように、魔獣の目は闇の中に点在する障害物を捉え、的確に避けていく。

ルティたちは三台の犬橇に分乗し、ワラゴの先導でアービィの後を追っていた。

駆け始めてすぐに犬と巨狼の速度差からルティたちは取り残されたが、もし、犬たちの速度が巨狼に拮抗できたとしても身を切るような寒風がそうはさせなかった。ほとんど無風の夜だったが、犬橇の進行に伴って必然的に発生する強風は、露出した顔面から容赦なく熱を奪い、あっというまに全員に震えを取り付かせていた。

それでも歩くよりは数倍早い速度で、問題の避難小屋まで急行する。防寒着を身体に巻き直し、フードを顔に巻きつけて目だけを出した状態で、犬橇に身を委ね、漆黒の闇を切り裂いて進んでいた。

もっともアービィ単騎で魔獣の群れに踊り込んでも、全く問題ないとルティは考えていたので、その点について焦ってはいなかった。だが、魔獣に襲われ恐慌状態に陥った者たちが、アービィにも刃を向けないとも限らない。通常の武器でアービィを傷付けられるとも思えないし、アービィが反撃するとも考えられないが、誤解は少ないに越したことはない。万が一にも彼等が銀製の武器を持っていたら、アービィとて無事にはすまないだろう。

それを思うとルティには、犬橇の速度がもどかしいものに感じられている。

ルティの焦りを感じ取ったか、ワラゴがそれを紛らわせるかのように話しかけてくる。

寒風の中では口を開くだけで体温を奪われてしまうため、必要以外のことは喋らないほうがいいのだが、ワラゴはルティの焦りが見ていられなかった。このまま犬橇を飛び降りて、走り出してしまうのではないかと不安に狩られるほどの焦りようだった。もちろん、犬橇のほうが早いに決まっているのだが、自力ではどうしようもないことからくる気の焦りだ。

ルティはワラゴの気遣いを感じつつ、アービィと出会ってからのことをティアやメディの正体以外を掻い摘んで話した。

長い物語を語り終えたルティに、ワラゴは何故悪魔の化身が人と行動を共にしているか、理解できた気がした。

この娘なら、悪魔に心を持たせることができたというのも納得できる。共にいる女二人も何かしらの訳有りなのだろうが、自分から言い出さない以上無理に聞く気はなかった。

アービィは全力疾走に近い速度で、一日の行程を三時間で駆け抜ける。

やがて、闇の中に三体の魔獣が小屋を取り囲み、入り口を広げようと窓や扉に牙を叩きつけているところに行き着いた。一瞬の間さえ置かず、唸り声を上げて魔獣たちの意識をこちらに引き付け、手近にいたサイクロプスに飛び掛った。

サイクロプスの持つ棍棒の一撃をまともに受けるが、巨狼の毛皮なんなく弾き、サイクロプスの両腕を痺れさせた。跳躍した勢いのまま、サイクロプスの喉元に牙を打ち込む。仰向けに倒れたサイクロプスに覆い被さった巨狼に、マンティコアの毒針が襲い掛かるが、突き刺さるだけで毒は瞬時に中和されていった。

まるで蚊にでも刺されたかのようにマンティコアの尾を跳ね飛ばし、サイクロプスの喉元に牙を立てたまま首を一振りすると、盛大

な血飛沫と共にサイクロプスの肺から空気が噴出し、瞬く間に巨鬼の命が消えていく。

全身を返り血に染め上げた巨狼が、残る魔獣と対峙した。マンティコアが三列に並んだ牙を巨狼の前肢に、キマイラがライオンの首を巨狼の首元に噛み付かせ、山羊の角を脇腹に突き立てる。残る蛇の首で毒を注入せんとところ構わず噛み付くが、どの攻撃も巨狼をたじろがせることすらできなかった。

前肢で大地を蹴り、上体を跳ね上げ魔獣を振り払うと、マンティコアもキマイラもいとも簡単に跳ね飛ばされた。怯んだ隙を突いてマンティコアの喉を噛み裂き、返す刀でキマイラのライオンの首を噛み千切る。即死したマンティコアを省みることなく、キマイラの山羊の首を自らの頭を叩きつけた一撃でへし折ると、最後に残った蛇の頭を噛み砕き仕上げとした。

魔獣たちに突入する前に感じていた邪悪な気配が、魔獣の劣勢を悟り援護の攻撃呪文を放ってくるが、生身の人間の身体であればともかく、獣化したアービィの毛皮にダメージを与えられるものではなかった。

『爆炎』と『雷電』、『海嘯』が立て続けに襲い掛かるが、既に息絶えた魔獣の身体を焼き、叩くだけでアービィには僅かに痛痒も与えられない。

邪悪な気配にアービィが対峙したとき、気配からは動揺が伝わってきた。幽かに残る記憶。アービィにもほんの少し動揺が走る。フォーミットの村を襲った魔獣使いの魔術師と同じ気配。言葉も解らなかったアービィに、優しく生きる術を教えてくれた騎士たちを殺した魔術師と同じ気配。

アービィの目に狂気が宿った。一足飛びに邪悪な気配の元に駆け

寄るが、その気配も同距離を飛び退っている。かなり狼狽している気配も混ざっており、以前のように『移転』を使う余裕がないようだ。幾度か同じことを繰り返し、徐々に距離を詰めるが、突然両者の間に邪悪な気配から呼び込まれた魔獣が雪崩れ込んでくる。

それは先日パーカホの狩猟部隊を壊滅に追い込んだものと同じ、熊が変化した魔獣の群れだった。アービィへの恐怖と、自らを作り出した者の命令に逆らった後に襲い来る恐怖が拮抗し、僅かに後者への恐怖が勝った結果、熊たちはアービィに突進する。魔獣になったことで野生の本能は失われ、遺伝子に溶け込んだ人狼に対する恐怖の記憶を薄めさせ、到底敵わぬ相手だということを忘れさせていた。

狂気に染まったアービィが哀れな熊たちに手加減するはずもなく、人間相手なら致死性の膂力を発揮する暇を与えられることもないまま、熊たちは片端から喉を、四肢を、身体を噛み裂かれ、藁のように倒れていった。

アービィの跳躍を封じたと判断して、邪悪な気配は『移転』の詠唱を開始する。熊を殲滅したアービィが邪悪な気配に飛び掛った瞬間、『移転』が発動し、間一髪で気配が消えた。狂気の根源が失せたことでアービィの目に正気が戻り、全身を返り血で染めた巨狼は呆然とその場に立ち尽くしていた。周囲には元は魔獣だったことすら伺わせない肉塊が、まだ残る体温で湯気を立て、雪の上に流れた血が凍りつき始めていた。

ランケオラータが小屋の中で外の異変に気付いたとき、既に全ては終わっていた。魔獣の咆哮が響き、次いで悲鳴が響き渡り、数多くの断末魔の絶叫が響き続けた。突然静寂が訪れたと同時に邪悪な気配が消え失せ、一つだけ残された巨大な殺気が急速に萎んでいく

のが解った。
窓を塞ぐバリケードをどかして恐る恐る外を覗くと、月明かりに照らされたそこは凄惨を極めた地獄の光景が広がっていた。

魔獣だった肉塊と夥しい流血の跡に、一頭の巨狼が全身を血に染め上げ悄然と立ち尽くしている。やがて救援と思われる一団が近付く気配があり、ランケオラータは危険を省みず大声で叫ぶ。同時に後ろから覗いていたバードンが純銀の剣を抜き放ち、巨狼に向かっていった。

「だめだ、近寄っては!!
狼が、人狼がっ!!」
その声を無視した救援の一団が姿を現したとき、ランケオラータは絶望に囚われた。
例えバードンがどんな超人的な技量を持っているとはいえ、あれほどの魔獣を瞬時に片付けた巨狼を止められるとは思えなかった。
次の瞬間にはバードンと、救援の一団が血に塗れることを覚悟し、ランケオラータは思わず目を閉じた。

ハイスティは、走り寄る救援の一団にルティやティアの姿を認め、窓から飛び出していた。
アービィの姿がないことを訝しむが、今はそれどころではない。人狼から引き離さねば、あの少女たちは瞬時に殺されてしまう。バードンが巨狼に走り寄ることを確認し、自らは走り寄るルティたちを庇う位置に跳躍した。

裂帛の気合が夜気を切り裂いた。
バードンが横一閃、純銀の剣を巨狼の顔面に振り抜く。

アービィはバードンの姿を認め、悲しげな目で眺めると、その剣を両顎で受け止める。
純銀製の武器は脅威だが、刃を立てられなければどうということはない。金属と岩が噛み合う衝撃音が響き、アービィの牙が純銀の刃を噛み止めた。そのままじわりと両顎に力を入れると、硬度に劣る銀の刃はいとも簡単に変形し、武器としての用を成さなくなる。

人狼から庇うように割って入ったハイスティの横をルティがすり抜け、驚愕の表情で剣を放したバードンの腕に縋りついた。これ以上アービィに対して攻撃させないように、必死に腕に縋りつく。人狼に戦いを挑むような男だ。ルティが全力で止めたところで簡単に引き剥がされてしまうだろうが、それでも縋りつかずにはいられなかった。

――バードンさん、あとで。
アービィから念話がバードンに届く。

――ルティ、大丈夫だよ。ここではやらない。それより、着る物頂戴。
安心させるように血染めの巨狼から念話が届いた。

避難小屋の中は一触即発の空気が漂っていた。
ランケオラータとルム、ハイスティにバードンと生き残った四人の兵士が、アービィとルティ、ティアにメディ、そして案内してきたワラゴと向き合っている。

「どういうことだ、人狼。
貸しでも作ったつもりか？」
バードンが低い声で問いかけた。

「そうじゃありませんよ。レヴァイストル伯爵に頼まれて来ただけ。ランケオラータ様を助けるためです」
アービィが答える。
ランケオラータを掌中に収めたい三者が、期せずして揃っている。それぞれの思惑はあるが、当面ハイスティとアービィたちは共闘できよう。だが、スキルウェテリー卿の意を受けたバードンは、なんとかしてランケオラータを自分で連れ帰りたい。それに、目の前で獣化していた人狼を、そのままにできようはずもなかった。
「人狼が人のために？
とんだお笑い草だな。それを信じるとでも？」
使い物にならなくなった純銀製の剣は捨てているが、この状態なら縊り殺すことは可能だ。それに獣化を解いているならば鉄の剣でも刺し通すこともできる。だが、『人』を斬ることは、殺すことは彼の信条に反していた。
どうしようもないジレンマに、バードンは普段の言葉遣いや物腰を忘れていた。
ハイスティは、混乱の極にある。アービィが人狼だった。その情報は得ていない。まさかのまさかだった。
だが、これでランケオラータ救出は成ったも同然だった。囚われているだろう集落を探す手間は、ランケオータ自ら出てくることでなくなり、今後魔獣の襲撃があろうとも人狼がいれば撃退は容易だ。
目の前にいるバードンが何故人狼を目の敵にしているかだが、利用できるものは全て利用する主義のハイスティには、その頭の固さが理解できない。そんな諍いは南大陸に帰ってからやればいいことだ、と彼は考えていた。

渦中のランケオラータにしても、混乱していることには変わりがない。

王が救出のためにハイスティを遣してくれたことは解る。アービィたちの話を聞くに、許婚の親であるレヴァイストル伯爵が冒険者に依頼したことも解る。

だが、バードンの行動原理がわからなかった。神父が義憤に駆られてきたのとは、少々雰囲気が違っていた。そのうえ、窮地を救ってくれた者に対して、とてつもない殺気を隠そうともしていない。

現実主義者のランケオラータは、人狼に対する恐怖心は人並みに持っているし、今でもアービイに対する恐怖感は消えていないが、助けてくれた上に食い殺そうともしていない態度に、安心感と信頼感を持ち始めていることも確かだった。ルムに至っては、現状をまるで把握できず、目を白黒させるのが精一杯だ。

「とりあえず、状況を整理しましょう。

バードンさん、命の恩人に殺意を向けるなど、感心できることではないと思いますが」

ランケオラータが言った。

ランケオラータは、ここまでのことを詳しく話す。

捕虜になってからのこと。北の大地の苦しさ。何時果てるともない土地の奪い合い。そこへ押し寄せた今までにない魔獣の群れ。最北の蛮族からの侵略圧について、長い時間を掛けて語った。

南大陸の住人のほとんどは、十把一絡げに北の民を見ていた。北の大地の中で殺しあう蛮族、というのが一般的な南大陸の住人の認識だ。一部には山岳地帯、平野部、中央部とさらに北の部族に分かれていることを把握しているものもいたが、その程度だった。

だが、南大陸に対して友好的かどうかは別にして、北の民の南下することへの欲求を理解できないわけではなかった。ウジェチ・スグタ要塞も、北の民の南下を防ぐ意味合いだけで、こちらから侵攻する意志は南大陸にはない。精々征服欲に塗れたラシアスの摂政ニムファが、両大陸を統一した女王という称号を欲しがっているくらいだ。

ランケオラータは北の民の窮状を説明し、それが北の大地だけの問題でないことを理路整然と解いた。北の民を以って最北の蛮族の障壁と成せばいいというのではなく、共に手を携え、それに当たる。そうすれば、その脅威が去った後には、交易により両者が平和の中で繁栄を謳歌できるはずだと、彼は熱っぽく解き続けた。

ハイスティにしてみれば、それは夢物語だと思えてしまう。誰が、北の民の誰が南大陸の住人を信頼し、南大陸の住人の誰が北の民を迎え入れるというか。余程の物好き以外、そんな者がいるとは思えなかった。ハイスティは、この際だからと無遠慮にその点に付いて問いかけてみた。だが、ランケオータの答えは明確だった。

共に血を流す。それだけだ。

おそらく、現在のところ、最北の蛮族は北の大地の中央部を席巻している。突然南大陸の派遣軍が進軍すれば、北への侵略と取られるだろうが、最北の蛮族を南の派遣軍が討てば、それは信頼に変わるはずだ。ましてや南大陸の四国家は、北の大地への領土的野心は微塵も持ち合わせていない。

一度最北の蛮族を討ち、この後は交易によって南で生産される武具や食料を北に売り、北で生産される資源を南が買えば、互いに利益が上がるうえ、南の派遣軍が常駐する必要もなくなる。

その間、南の派遣軍は領土的野心を持っていないことを証明しつつ、北のインフラ整備にも当たり、両大陸の融和に努める。誤解を受けることもあるだろうが、それを解き信頼関係を打ち立てること

も派遣軍の重要な仕事となるだろう。

これから長い時間を掛けて両者の心を解きほぐす必要はあるだろうが、最北の蛮族という共通の敵ができた今は、南北融和の最大のチャンスでもある。対等の関係でそれに当たり、余計な功名心やこれを期に優位に立とうなどとは考えないことだ。恩を売るチャンスではなく、対等の立場に立つチャンスだとの認識が必要だった。

ランケオラータはそのためにインダミトに戻る。そして北の窮状を知らせると共に、対等な立場になれることを証明するためにルムを伴っている。現状において、ランケオラータとルムの立場は、どちらが主でどちらが従ということはなかった。平野部を統べる長として、ルムはインダミトに赴く。その立場であればランケオラータよりは上位になり、いうなればバイアブランカ王と対等の人物だが、それを以って北の民が上位だという気は、ルムにはない。

ランケオラータの説明が終わり、長い、長い沈黙の後、バードンが口を開いた。

「人狼、面を貸せ」

そう言って、バードンは避難小屋を出て行った。

面倒くさそうな表情のアービィが後を追うが、ルティが止めに入る。

「大丈夫だよ、獣化はしないから。
それに、話せば解るさ」

ルティを振りほどき、アービィも小屋を出た。

「当面、信じてやる。ありがたく思え。
純銀の剣もなしに人狼に掛かっていくほど、おれは莫迦じゃない」
小屋の外で待っていたバードンが、悔しそうに吐き出す。

「いずれ、遣り合わなきゃいけないの？
さっきので解ったでしょ、あなたでは僕に勝てない。
僕は人を喰らう気なんかないから、放っておいてください。
お互い、無駄なことは止めましょうよ」
アービィにはバードンの気持ちが解らないではない。
親の仇として生かしておけない。自分と同じような子供を増やしたくない。この気持ちは理解できた。

だが、だからといって自分が殺されることは容認できるはずもない。身勝手と言われようと、他に人を喰らっている人狼がいることに心は痛むが良心の呵責はないし、そのような人狼が狩り尽くされてもそれは自業自得だと思っている。バードンが自分に突っ掛かってくることは、言い掛かりでしかない。
共に手を携え人狼狩りをしようとまでは言わないが、バードンのすることを邪魔するつもりも、自分を殺しに来ること以外では、まるでなかった。だから、アービィには今のこの時間が無駄なものにしか思えない。

「勝てるかどうかはやってみなきゃ解らんだろうが。
それは次に会ったときまで預けておいてやる。
俺は帰る。
犬橇を一台よこせ」
それだけ言うとバードンは小屋に入ろうとする。

「一緒に帰ればいいじゃないですか。
どうせ方向は同じなんだし。

それに、犬橇は僕のものじゃないから、ワラゴさんに聞かなきゃ判りません」

当面傷付け合うことがなさそうだと判断して、アービィはそう言いながら後を追った。

いつかは命の遣り取りがあることを覚悟して。

同時に、もし誤解が解けるなら、孤児院構想に一枚噛んで欲しい相手でもあるとアービィは思っていた。

小屋の中ではルティとティアとメディが心配そうな顔で、ランケオラータとルム、そしてハイスティが難しそうな顔で待っていた。

傷一つなく戻ってきたアービィとバードンを見て、ルティたちはほっとした表情になるが、ランケオラータたちの表情は変わらない。

アービィが不審に思っていると、ハイスティが口を開いた。

「実は、私の使命はランケオラータ様をご無事にインダミトまでお連れすることなのですが、どうやらアービィさんたちがいれば充分なようですね」

ここで初めてハイスティはアービィたちに正体を明かした。

もちろん、ラシアスの密偵を始末したことや、ラシアス国内でアービィたちを監視していたことは伏せている。

ルティたちから驚愕の声が上がった。ここで会ったときに、何故商人であるハイスティが神父の格好をしているか、ずっと訝しんでいたのだった。だが、インダミトの密偵ということであれば、その理由も理解できた。

そして、ここからが核心です、と前置きしてハイスティはルムに発言を促す。

ルムは、ここで魔獣の襲撃を受けたことで、ひとつの危惧を抱き始めていた。

ヌミフのことも心配だが、パーカホを始めとした集落がどうなっているか、魔獣の群れに襲われていないか心配になってきたのだった。戦力としては捕虜となっている兵士たちがいるので、今日明日に壊滅することはないだろうが、無尽蔵に魔獣が生産できるとしたら、いつかはジリ貧になる。一刻も早く南から派遣軍を呼び込む必要は感じているが、行軍には数ヶ月を要するだろう。

その間、指揮官不在の集落の戦力を、ハイスティとバードンに纏めて欲しいということだった。

本音を言ってしまえばアービィに行って欲しいのだが、ここから南大陸までどのような危険があるか判らない。安全にランケオラータをインダミトに送るには、ハイスティとバードンよりもアービィたちに任せるほうが確実だった。集落は防御柵もあるし、なにより人数は揃っている。核となる人物がいれば、その戦力の向上は計り知れず、軍務の経験のないアービィよりも組織に身をおくハイスティに分があることは確かだった。

ハイスティは、今後の北の大地におけるインダミトの地位向上、ひいては交易が有利になると判断し、ランケオラータとルムをアービィに委ねることに決めていた。だが問題は、バードンだった。

ハイスティはスキルウェテリー卿がどのような人物か知り抜いている。その直属の部下ということであれば、これもマ教原理主義者である可能性が高いと考えるのが普通だ。そのような人物が北の民を守るために集落に留まるわけがなく、それどころか異教徒である北の民の集落は殲滅するべき対象だ。バードンを集落に引き入れることは、魔獣を集落に引き入れると同義になってしまうかもしれなかった。

アービィと一時的に和解していることで毒気が抜けたバードンは、周囲の空気が自分の正体に付いて話すことを望んでいると理解できた。別段それを隠すつもりは元からないし、山岳地帯の集落で神父を演じていたことは、一部において真実だ。人狼狩りに特化しているとはいえ、マ教の悪魔狩りとしての仕事は人に恥じるものではない。

それに事ここに至っては、インダミトに恩を売ろうというスキルウェテリーの思惑も、どうでもいいことだった。

「私は、マ教のスキルウェテリー卿の下で悪魔狩りに従事しております。

インダミトに恩を売るため、ランケオラータ様をお救いすることが、私に課せられた使命でした」

アービィを除く全員の表情が凍りついた。

「ご安心ください。私は異教徒を悪魔とは同列視しておりません。悪魔に誑かされた哀れな人々に振るう剣を、私は持ち合わせておりません」

ルムは酷く莫迦にされたような気がして、表情をさらに固くする。それに気付いたバードンは、取り繕うように言葉を続ける。

「これはお気に触りましたか。申し訳ございません。

建前というものもございまして。

本音で申せば、先程のことをご覧いただいたとおり、私の仕事は悪魔狩りの中でも人狼狩りに特化したものです。

ですが、魔獣が人に仇成さんとすることを見過ごすほど、独善に溺れてもおりません。

喜んで集落の守りに就きましょう。

そこの人狼とは、いずれ雌雄を決することにしておきます」

バードンはマ教に恩は感じているが、他人にその教えを強要しよ

うとまでは思っていなかった。どちらかといえばスキルウェテリーよりカーナミン卿の考え方に近い。

何より、魔獣が我が物顔で人を襲おうとしている方が我慢ならなかった。さらに先程の邪悪な気配も気になる。

バードンはランケオラータにスキルウェテリー卿宛ての伝言を依頼する。ランケオラータを掻っ攫われて合わせる顔がないというもの本音だった。派遣軍が来るまで魔獣相手に技を磨き、その後アービィと雌雄を決する。

派遣軍と共に戻るならよし、もし戻らなくてもどこに隠れていようと探し出してやると、バードンは表情とは裏腹に心の中で叫んでいた。

翌朝、ハイスティとバードンは、そこまでランケオラータとルムを警護していた兵士たちと共にパーカホへ向かった。アービィたちは、ひとつの依頼を完遂できた安堵と共に彼等を見送る。だが、まだ北の大地を脱したわけではなく、ここからも昨日のように魔獣の襲撃があるかもしれない。気を抜くには早かった。

ルムは一晩をアービィたちと語り明かし、人狼に対する警戒心を解いている。もちろん、それはアービィという個体に対してだけで、人狼全てに対することではないし、恐怖感が全て払拭されているわけではない。

ワラゴを先頭に、ランケオラータを橇に乗せて進み始めた。ルムも橇に乗るように勧められたが、北の民の意地からか、歩くことを選んでいる。当初ランケオラータも歩くといっていたが、やはりここまでの疲労が溜まっており、すぐに息が上がってしまう。その都度休憩するよりは橇に乗っていてもらった方が早いので、全員で説得した結果渋々ながら承諾したのだった。

「ランケオラータ様がご無事で、あたしは何よりです。
ようやく肩の荷が下りたというか……」
ティアは、ランケオラータが生きて横にいることで感無量になっていた。
これでレイやレヴァイストルにやっと顔向けできる。

「何故、ティア殿が？」
素朴な疑問をランケオラータが口にする。

ティアは、ラガロシフォン領でのアーガスとの一件から、彼を王都に出すようにレヴァイストルに進言したこと、その結果が今の状況であることを話した。

「私は生きている。
それぱかりではなく、南大陸と北の大地が一つになれるかもしれないきっかけを持って、ね。
そう思えば、そのきっかけはアーガスのスケベ心でもあり、あなたの進言なのかもしれない。
感謝するべきことで、あなたが謝ることではないよ」
ランケオラータは、ティアに対して全く含むところはない。
アーガスには未だ収まらぬ怒りはあるが、ティアに言ったように考えれば少しは治まる。

「そう言っていただければ、少しは気が楽になります。
ありがとうございました。ランケオラータ様」
ティアは、心から礼を言った。

「礼を言うのはこちらの方だ。
しかし、北の大地まで来るなど……

幸い、ルムたちのお陰で平和裏に事が進んでいたからいいようなものの。
どうしてそこまで？」

「実は、あたしはラミアなんです。
魔獣として二百年近く生きてきました。
レヴァイストル伯爵は、初めてあたしを認めてくれた方なんです。
魔獣ではなく、女の性をでもなく。人として」
意を決したティアが獣化する。さすがに寒さには懲りていたので、
上半身に防寒着を纏ったままだったが。

「なるほど、そういうことか。
それでもあなたへの感謝の念は変わらないよ。
でも、そういうことなら私が無事でよかったね。
礼はルムに言ってもらった方が良いかもね」
ランケオラータは、なんとか驚きを隠し通した。あまり驚いては
「恩人」に対して失礼だと考えたからだ。
だが、ふと横を見るとルムが平伏していた。

「ちょっ……ルムさん、どうしたんです？」
予想外の展開に慌てたティアが、ルムの手を取った。

「畏れ多くも御自らわたくしのような者の手をお取りになるなど……
お礼など勿体のうございますっ！！
女神様のお役に立てただけで光栄でございます！！」
畏まり、地面に額を打ち付けるかのような勢いで、ルムは平伏し
ていた。

「えっと、メディ、どういうこと？」
戸惑うティアが獣化を解き、メディに聞く。

「ルムさんの部族は、蛇を神としてるようね。
そういう方の前で、いきなりあなたが正体明かしたらこうなるわ。
先に言っておけばよかった。
ごめんなさいね、ルムさん」
しまったという顔でメディが説明する。

「えっと、ルムさん、あたしは神なんかじゃなくて、ラミア。魔獣ですから。
そんなに畏まらないでっていうか、今までどおりにしてください」
困り顔のティアがルムに言うが、ルムは顔を上げることができない。
精神の髄まで染み込んだ、神を敬う信仰心がそうさせていた。

ティアが頼み込み、ようやく顔を上げたルムだが、納得しがたいという顔のままだ。
ルムには、ティアは大蛇の女神にしか見えない。
ティアは確かに正体を利用できるときは獣化を躊躇うつもりはなかったが、このような形で具現化してしまうのは不本意だった。敬って欲しくて正体を明かしたわけではない。ましてや、ルムの部族がそうであることを見越していたわけでもなかった。

「やっぱり、アービィ殿たちに残ってもらったほうが良かったかもしれんな、ルム」
中央部の民で蛇を神と崇める部族に対しても、ティアの威光は効くだろう。さらに狼を神とする部族に対して、アービィの獣化も効くはずだ。こちらは獣化の瞬間を見せなければ、だが。

「そうだな。
ティア様がいらっしゃれば、少なくとも中央部の五分の一はひれ

伏す。
それに中央部には、狼を神としている部族が多い。
アービィ殿が行けば、かなりの効果が見込めるな。
いかがだろう、インダミトへ行った後、私と一緒に戻ってくれないか？」
中央部との大同団結に、ティアとアービィは欠かせないとルムは考えている。

「必要であれば行きますよ」
ティアとアービィの答えは簡潔だった。
戦うことを躊躇いはしないが、戦わずに済ませるためなら喜んで往く。

ウジェチ・スグタ要塞までの一本道を照らす太陽は、北の大地に遅い春を運んできていた。
ティアは、またここへ来ると、百日ほど前のリジェストでは失意の中で誓ったことを、今は希望の中で誓っていた。

人狼に襲撃され、手持ちの魔獣を全て失った邪悪な気配の根源は、数度の『移転』を繰り返し、やっとの思いで最北の根拠地に逃げ戻っていた。あの人狼には一度ならず二度までも、魔獣の実験を邪魔された。ラシアスの小娘が召喚した『勇者』とやらの魂を人狼に封じたが、消滅させることができなかったのが痛かったかもしれない。
まあ、良い。多少の障害は、救世主たる自分の英雄譚には不可欠だ。

北の大地を我が物に、そして両大陸を我が物に。魔を統べ、人を統べ、全てを我が前に平伏させる。最北の蛮族と蔑まれた、我等が恨みを思い知らせてやる。

我が神の名において、両大陸の愚か者共に思い知らせてくれよう。

第５２話

「ねぇ、このままウジェチ・スグタ要塞を抜けるのは危険だと思うんだけど、どうかなぁ？」

ワラゴに犬橇を返し、明日はウジェチ・スグタ要塞に向かうという夜、ルティが皆に聞いた。

「そうだね、危ないかも」

「少々浮かれていたな」

皆が異語同音に答える。

ランケオラータを一刻も早くインダミトに連れ帰りたいが、このままウジェチ・スグタ要塞に行ってしまっては、かなり面倒なことになりかねない。

この世界には『生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ』などというふざけた戦陣訓のようなものはないが、『全力を尽くして戦った名誉ある捕虜』という認識もない。生還は喜ばしいことではあり、暖かく迎え入れてはもらえるがそれだけのことだ。以後、兵か下士官であれば軍から放逐、将校は査問会の後閑職に追いやられ、栄達とは無縁の重要度の低い書類に決裁ですらないサインをする日々が続くだけだ。

このままウジェチ・スグタ要塞に行けば、良くてランケオラータは査問会に、ルムとメディは捕虜扱い、最悪の場合怒りにまかせて惨殺か、メディには陵辱のうえ慰安婦への道が待っているかも知れなかった。まさかそこまでのことはないにしろ、ランケオラータが手間を取られることだけは間違いなく、インダミトへ戻るまでに数ヶ月は掛かる可能性が高かった。

ここはアービィたちが来た道、ウジェチ・スグタ要塞を避けて間

道を行くべきだろう。だが、行きはセトナイの案内だったため、細かい道までは覚えていない。ランケオラータが間道を知るはずもなく、平野の民であるルムも知るはずがない。メディも同様で、再度ワラゴか商用のある者に案内に立ってもらわなければならなかった。

結局、ワラゴもそうそう村を空けるわけにも行かず、商用にしてもすぐではないため、三日の足止めを食ってしまったが、結果的にはルムのティア熱を下げることができたので良かったのかも知れなかった。南大陸に渡った後、ティアを神扱いするあまり、ラミアの正体を口走られても困るからだ。

三日後、リジェストへ商用で行く村人が案内に立ち、来た道を逆に歩いて南大陸へと戻ることができた。だが、ここからラシアスを抜けるまでが問題だ。当然ラシアスの王都アルギールは避けるとしても、神殿の町グラザナイと教都ベルテロイと接するフロローを通らないわけには行かない。北の民への風当たりは強いし、ランケオラータの顔が将兵にはある程度知られていることも問題だった。

いろいろと考えた挙句、グラザナイへは向かわずに国内をS字に走るラシアス街道を西に向かい、そのままストラーへ抜けることにした。リジェストから早馬で風の神殿に手紙を送り、最高神祇官エンドラーズに手引きを依頼する。同時にレヴァイストル伯爵にも手紙を送り、予定を伝えておく。ランケオラータも実家宛に無事を知らせる手紙を送り、国に帰るまでは情報は押さえておくように頼んでいた。

おそらくラシアス街道からストラーへ向かう街道の分岐の町ガルーカ辺りで、エンドラーズとレヴァイストル伯爵からは返事がもらえるだろう。エンドラーズの協力が得られるならばそのままストラーへ向かい、無理であればグラザナイへ向かう。リジェストからガルーカまでは七日で到着するので、そこで数日滞在することにして、

その間にレヴァイストル伯爵へ経路に付いての手紙を送っておけば、こちらの動向はインダミトに伝わるはずだ。

リジェストから駅馬車に全員が乗り込み、ガルーカへ向かう。ルムにとっては生まれて初めての駅馬車の旅だ。見るもの全てが新鮮で、北の文化の遅れを痛感させられる。交通のシステムや治安維持、政治体系からインフラ、果ては食文化まで学ぶべきことはたくさんあり、圧倒されている場合ではない。

自らに足りないものを確認しつつ、ルムはあらゆることを目に納め、頭に叩き込んでいく。即北の大地で受け入れられるとは思えないが、徐々に浸透させればよい。どれほど南大陸から商人を呼び込みたくても、インフラの遅れや治安維持ができていなければ、それはただの絵に描いた餅、夢物語でしかない。

判らないことは素直にランケオラータに聞き、それを北の大地の風習に合わせ取り込むにはどうすれば浸透しやすいかをメディに聞く。力が支配する北の大地では、政府などはない。いきなり全てをそのまま取り込むことは不可能だ。集落同士を結ぶ道も獣道を踏み固めただけのもので、石畳で舗装された道など皆無だ。それを作ろうにも有力者が私財をはたいて作るしかないのが現状で、税制すらないため金を民から集めることも現状では無理だ。急に金を集めるといっても、それが確実にインフラに使われるという保証がなくては民は金を出すわけがないし、権力や強制力の基盤が腕力というだけでは、簡単に反乱が起きるだろう。

南大陸の資本を呼び込みたいが、北の大地を開発するメリットがなければ、誰が資本を投下するというのか。道だけ作って利益がなければ、金をどぶに捨てるようなものだ。地下資源の豊富さは北の大地の最大の魅力で、それを如何にアピールし南大陸の貴族や商人

の資本を引っ張り出すか、ルムはその大使の役をいつの間にか負うことになっていた。

しかし、いきなり北の大地を代表してしまっていいのか、ルムはそこに戸惑いを感じている。今までは自分の部族の発展だけを考えていればよかった。今回のインダミト行きも、そのためのつもりだった。だが、南大陸に渡ってから、様々にものを見聞きしランケオラータやメディと話すうちに、自分の部族だけのことを考えていたのでは、南大陸の資本は呼び込めないと気付いていた。

北の大地には決定的な力を持つリーダーがいないため、それぞれの部族がばらばらに南大陸と交渉を行っていては、一件のビジネス規模が小さくなってしまい、効果的な大資本によるインフラ整備はいつまでたってもできない。せめて平野部の民と中央部の民が大同団結したあとに代表者を選び出し、その者に一任するようにしなくてはまともな開発はできないだろう。

だが、その窓口はどうするのか。誰が北の民の利益を代表して南大陸の為政者や商人たちと交渉するのか。その者が自分の部族だけに有利になるような交渉をしてしまっては、その恩恵に与れない部族の不満が高まり、また戦乱の中に逆戻りだ。

貴族制もないため、最初は誰がリーダーになるかで権力闘争や勢力争いが起きる可能性が高い。集落や部族を率いる族長がそれに当たるのだろうが、それぞれに力関係はあるものの基本的には横一線だ。

自然が厳しいからこそ、誰か一人が、一部のグループだけが特権階級になるのでは、民の不満は解消されまい。特権階級が南大陸に領土的野心を抱いては、戦乱は全体陸を巻き込んで収拾が付かなくなってしまう。かといって南大陸に北の大地を従うような状況も歓迎できない。

政体を整えるためには、やはり手本がなくてはならず、それは南大陸の貴族制や王制だろう。しかし、急激な変化は混乱を呼ぶだけだ。最初は平野部と中央部から、それぞれの代表者を選び出すことから始めればよい。幸い、平野部にはルムがいる。中央部の民にもそれなりの指導者がいるだろうから、ルムとその者が協議して北の大地を経営していくようになれば、次第に政体も整っていくだろう。当然途中に混乱もあるだろうが、いきなり全てが上手くいくはずもなく、産みの痛みは覚悟しておかなければならない。

南大陸の住人にとっては北の大地は領土的魅力には乏しく、これを武力で征服しようという発想はほとんどないといっていい。だが、大昔から連綿と培われた北の大地への蔑視は、これからも当分払拭できることはないだろう。もし、南大陸の為政者たちが、北の大地の代表者に対して侮蔑的な態度を取るのであれば、両大陸が手を携えて発展するなどは夢のまた夢だ。そして、現状ではそうなってしまう可能性が高い。

ルムは、それも仕方のないことだと考えている。今の今まで殺し合いと土地の奪い合いに明け暮れていたのだ。南大陸にわたってみる人々の顔は、日常的な命の危険を感じている様子は見られない。北の大地では雪に閉ざされていない期間は他の部族との争い、雪の時期には飢えと寒さによる命の危険に日常的に晒されている。その危険がないだけで、人々の表情はこんなにも明るくなるのか。ルムには驚愕の想いだった。

「なあ、ランキー。
俺たちも、こんな風に豊かな暮らしを送れるようになるのかな」
ルムは北の大地が南大陸のように発展できるか、それが心配だった。
たいした産業がない北の大地は、武力による支配を受けずとも、

経済的に、文化的に支配されてしまうかもしれなかった。南大陸からモノを買うだけの存在にはなりたくない。

「大丈夫さ。ルム。
俺が見る限り、北の大地は資源の宝庫だ。
こっちから頭を下げて売ってもらいたいくらいだよ。
鉄、燃える石、建物に使う石や木材、それに貴金属と宝石。
それからな、寒さに強い作物だってあるだろ。
例えば麦。これは俺たちにとっても主食だ。
南大陸と北の大地は分業制にすればいいんだ。
何から何まで自分たちで揃えようとするから、領土が欲しくなる。
任せちまえばいいんだよ」
ランケオラータは、南大陸こそ意識改革が必要だと思っている。

確かに北の大地は魅力的な市場だ。物が揃っていない。食料が足りない。南大陸の全てを売りつけても売りすぎということはないだろう。一気に両大陸で産業や技術が発展する可能性を秘めている。ただし、人的交流には気をつけなければならない。お互いに優秀な人材の行き来は必要だが、無節操に人の移動を認めるわけにはいかない。

もともと北の民は南大陸へ移住したがっている。これを規制しないでいたら、北の大地から人がいなくなってしまい、南大陸はそれだけの人を養うほどには恵まれていない。

北には北のやるべきこと、南には南のやるべきことを、互いに理解しあう必要がある。

「そうだな。
もし、ウジェチ・スグタを解放しちまったら、北には俺しか残らないかもしれん。
不満は出るだろうが、北から出なくても充分なように南の資本っ

ていうのか？　それを引っ張り込めばいいんだな？」
ルムはなんとなくだが理解できてきた。

「そうだ。
最初は食料や日用品を売り込みに行くが、そっちの農地が改良できれば食料も買い込みに行くぜ。
ストラーの北部は北の大地に気候が似ているからな。
その辺りで作ってる野菜の苗とか種を買っていけよ。
大半は栽培できるぜ。
それにそっちから売ってもらった資源は、ビースマック辺りで加工してインダミトが仕入れて売りにいく。
モノは還流するんだよ」
おそらく、北の大地が資源を生み出し、南大陸は加工工場となる。
おぼろげながらも、ランケオラータは将来の姿を見始めていた。

そして、バイアブランカはランケオラータがその地均しができると読んで、彼を北に放置していた。四国家による共同統治機構の先には、ゆるやかな両大陸の共同統治も見据えている。誰か一人が絶対の王に成り上がるのではなく、責任ある者たちが知恵を出し合い、この世界を統治するべきとバイアブランカは考えていた。

アービィはルムとランケオラータやメディとの会話には余り割り込まず、魔獣たちを率いていた邪悪に気配に付いて考えていた。
一体何のために、あんな合成魔獣や野生動物を魔獣化する必要があるのか。当然侵略のためなのだろうが、人的被害が多すぎては侵略する意義がない。戦争だと考えれば、殺し合いが起きることも当然なのだが、広大な土地だけが手に入っても、魔獣がそこに住む人々を殺し尽くしてしまっては、その後の領地経営は成り立たない。
いずれ魔獣が手に余ることになるのは、火を見るより明らかだ。目

的のためには手段を選ばないというのだろうが、手段が目的を崩壊させるとしかアービィには思えなかった。

あれが、敵？

いずれ雌雄を決しなければならないときが来る予感が、アービィにはあった。

駅馬車は特にトラブルもなくガルーカに到着した。まだエンドラーズからもレヴァイストル伯爵からも返事は来ていないので、数日滞在するための宿を取る。資金には余裕があるので、無理にギルドで仕事を探す必要もなく、久々にのんびりと過ごすことのできる日々だ。宿に荷を置いてから近くの安酒場に繰り出した。

本来ランケオラータをそのような店に連れて行くことはお互いのマナー違反なのだが、駅馬車の旅は貴族も庶民の皆ひとしなみに同じ宿に泊めてしまうので、ランケオラータはすっかり慣れてしまっていた。店側に貴族であることを言わなければいいだけだ。そのうえ北の大地での生活で、貴族然とした服装など既に失くしていたことも幸いしていた。

気取った食事のマナーに囚われない庶民の生活は、時折眉を顰めることもあったが堅苦しさとは無縁の気楽さがあった。ランケオラータは、それまでであれば見下しの対象であった行為、立てなくなるほどに飲んだくれることの楽しさを知ってしまった。

もちろん、自宅であれば人目を気にせず飲むこともできたが、使用人たちの目は常に光っており、最終的なところで踏みとどまらざるを得なかった。

ぐてんぐてんになったランケオラータを、アービィとルムが左右から抱えて宿に向かう。まだ飲み足りない他の面子は、途中で酒を

買い足し、つまみになりそうな物を仕入れた。ルムは店の中を物珍しそうに眺めている。北の大地に物販の習慣がないわけではないが、不定期に立つ露天の市がほとんどだった。

こんなところでも豊かさの違いを見せつけられた気がして、ルムは多少凹んでいる。

宿に帰り、ランケオラータをベッドに放り込んでから、アービィの部屋に全員が集まった。

「メディはどの辺りの生まれなんだい？」

何気なくルムが聞いた。

「う～ん、答えない方がいいかも知れませんよ」

もしルムが自分の集落を皆殺しにして、自分を売り飛ばした部族だとしたら、お互い良い気持ちではない。

メディは当時十三歳だったので、かなり記憶は残っている。ルムとは間違いなく初対面なので、ルムが自分を売り飛ばし家族を皆殺しにした張本人ではないことは確かだが、その部族ではないという保証もなかった。

北の大地ではありふれた出来事なので、怨みがないわけではないが、今更敵討ちでもない。もしそうだとしても、ルムが言わなければそれまでなのだが、気まずさは残るだろうし、それは伝わってしまう。メディとしては、どちらかといえば思い出したくもないことだ。真相を探りたいとも思わない。

「そうか……

いや、悪かった。

聞かなかったことにしてもらえるとありがたい」

ルムも思い当たる節は皆無ではない。それどころか、集落を皆殺しにしたことなど、両手では足りないほどあった。メディの部族も

それは同じことで、皆殺しにされるまではいくつもの集落を襲っていた。

これが北の民を団結させる上での困難な点であり、お互い様で割り切れるほど根が浅いことではなかった。

平野部の民も、南大陸からの侵攻があったからこそ纏まっていただけであり、中央部の民とは部族集落ごとに争っていた。中央部の民にしても同じことで、最北の蛮族の南下が彼らを纏めているだけだ。だからこそ、今はチャンスと言えた。南大陸はもともと北の大地を征服しようなどとは考えておらず、今回の侵攻は戦略を理解できなかったアーガスの独走でしかない。

南からの侵攻圧がなくなれば、平野部の民は両面作戦を行う必要はなく、北からの侵攻のみに備えればよい。中央部の民にとってみれば、平野部からの侵攻がなければ、最北の蛮族に備えれば良いだけだ。最北の蛮族が魔獣を前面に押し立て攻めてくるならば、平野部と中央部の民共通の敵と言える。中央部の民が殲滅されてしまえば、次は平野部の民が直接の脅威に曝されてしまう。そして平野部を抜かれたら、次は南大陸だ。

ルムとランケオラータはそう考えたからこそ、今は肩を並べることが可能になった。次は中央部の民にもそう考えてもらうために、ルムは命と貞操の危険も顧みず妹のヌミフを派遣している。中央部の民をヌミフが説得できたとしても、目に見える利益を南大陸から引き出せねば、盾にされ使い捨てられると思われてしまう。それではたちどころに空中分解して、中央部の民までもが敵に回りかねない。

目に見える利益は、インフラ整備や物資の援助などが考えられるが、只で渡していては北の民は南大陸から施しを受けるだけの存在に成り下がってしまい堕落するだけだ。誰だって働かずに食料や生活必需品、嗜好品が手に入れば、活力を失ってしまう。さじ加減が

難しいところだ。当面は南大陸の持ち出しでインフラを整備し、北の大地の資源を南大陸へ運ぶことになるだろう。

では、ある程度の持ち出しは覚悟するとして、誰がそのインフラ整備の作業をするか。派遣軍をそれに当てればよい。最北の蛮族に備える砦や、兵站に必要不可欠な道の舗装整備、やることはいくらでもあるし、組織的に動くことが可能な軍というものは、その作業にはうってつけだ。仕事への意欲はあっても職にあぶれた者の救済や、食い詰め者の更正にも一役買うこともできる。予算をどうやって捻り出すかが難問だが、北の大地で生産される資源の輸送も軍務にして商人に売り、そこから人件費や維持費を生み出す手もある。

ランケオラータの農地改革が効を奏していれば、食料調達も多少マシになるだろうし、軍務の一環として食料生産を行っても良い。最北の蛮族と戦になるとはいっても、会戦が毎日行われるわけではなく、インフラ整備や食料生産も訓練の一部として行っていけば良い。

北の民にどうやって継続的に様々な技術や商慣習を伝えるかだが、軍役を一年単位に区切って継続の意志のない者に北の大地への永住を斡旋する方法もある。捕虜の中にも現地の女と情を通じ合わせた者がいるように、軍役で駐留する者の中にもそのようなことがあってもおかしくはない。

さらに、南の習慣を身につけた者で、それを北の民に伝えるのに最適な者がいる。

娼婦や奴隷として南大陸で生活する北の民たちだ。全員が全員南大陸に永住したいわけでも、北の大地に帰りたいわけでもないため、希望者を募る必要はあるだろう。また、金で買った娼婦や奴隷を雇い主が無料で手放すことは、単純に考えても損になるだけなので、国なり諸侯が買い上げ、身分を回復させた上で北の大地に帰さなければならない。

いずれにせよ膨大な予算が掛かってしまうが、それは必要経費として南大陸全ての人々が負担しなくてはならないだろう。もちろん、いずれ北の大地の生産力が上がれば、利子をつけてたっぷりと取り返させてもらえば良い。

おそらく、バイアブランカは、ランケオラータが北の民の捕虜になった時点で、そこまで読んでいたはずだ。臣下が捕虜になったことは憂慮すべきことだが、無理に取り返そうとして更なる戦乱を引き起こすよりは、相手の内懐深く潜り込ませ、こちらにとって損のないようにすると同時に、相手にとって捕虜として生かしておいた方が後々メリットになるように仕向けたほうが良かった。

ことあるにつけ、ランケオラータからそう聞かされていたルムは、相手の掌の上で言いように踊らされているような気がして、それはそれで癪に障るのだが、相手が良かったと思っている。

「メディは、この先どうするの？」

ルティが話題を変えるように聞いた。

既に地水火風全ての神殿の巡礼は済んでいる。あとは呪文のレベルと使用回数を上げるだけでいい。そして、北の大地へ一緒に行ってくれるという話も、ランケオラータを連れ帰れたことで終わりになったといっていい。順当に考えるなら、ストラーからベルテロイ経由でビースマックへ入り、ギーゼンハイムの町へ帰ることになる。

できればこれからも一緒に旅ができればと思うが、さっきの言い方では北の大地にいい思い出がない以上、再度同行を求めるのも酷だ。なにより、ギーゼンハイムには、メディを待つ人々がいる。メディの意向を尊重するべきだと、ルティを始めアービィもティアもそう考えていた。

「そうねぇ……
ギーゼンハイムに帰ろうかしら。
もうちょっとで石化を解くこともできるのよね。
いつまでも石のままにしておくわけにもいかないし。
あの人たちも待っていてくれるから」
メディも、アービィたちと旅をしているのは楽しい。だが、いつまでもアービィたちの世話にばかりなっているわけにもいかないとも考えている。呪文のレベルはギーゼンハイムのギルドの依頼を受けることで上げてもいいし、治癒師として開業してその中で上げることも可能だ。
寂しいことだが、潮時というものかもしれない。

「メディ、俺と一緒に北の大地へ帰ってもらえないか？
辛い思い出があることは重々承知だが。
今は、有能な人材が北の大地には必要なんだ」
言いにくそうにルムが言った。

「うん……
私で役に立てるなら、とも思うんですけど……
やっぱり、待たせちゃってる人たちがいる街へ、私は帰ります」
恋人や、あの娘の両親、いずれ義両親になる人たちを放ってはおきたくない。
石化させたままの冒険者たちへの贖罪もある。
メディにとって故郷はギーゼンハイムであり、そこがいつか帰るところだった。

「そうか。
だが、気が変わったらいつでも言ってくれ。
俺には、いや、北の大地には君の持つ知恵が必要なんだ」
諦めきれないという表情でルムが言った。

「そう……
じゃあ、メディと旅ができるのももう少しなんだね。
寂しいけど、喜ばなくちゃいけないことなのかな？」
アービィが新しい酒の封を切る。

「そっかぁ～
やっぱり、そうだよね。
でも、いつでも遊びにいけるもんね」
ティアがメディの肩を抱いて、グラスに酒を注ぐ。

「まだ、お別れの乾杯には早いから。
もう少しの間だけど、よろしくね、メディ」
ルティは涙が溢れそうになっている。
この旅のゴールはボルビデュス領だ。そして、その時点でメディとは別々の道に分かれている。ベルテロイからは、メディはビースマックへ、ルティたちはインダミトへそれぞれ向かうことになる。
ルティは、いつも以上に明るくはしゃぎ、涙が流れそうになるのを誤魔化していた。

ガルーカでの滞在は三日が過ぎ、ようやくエンドラーズとレヴァイストル伯爵からの手紙が来た。エンドラーズからは協力の承諾の返事が、伯爵からはベルテロイで待つとの返事だった。
ガルーカから直接ストラーまでは駅馬車の便があり、ほぼ七日で国境の町クルチャトスクに着き、そこから越境してストラーに入ると、六日の行程で神殿の町クシュナックに着く。ストラー側の国境の町デジャンにエンドラーズが馬車を手配してくれるとのことだ。
馬車は神殿の持ち物なので、神官が御者として同行するからベルテロイに入る時点で乗り捨てればよいと、エンドラーズの筆跡で書か

れていた。本当は自分で行きたかったが、全神官に止められてしまったので、仕方なく神殿で待っていると手紙は締め括られている。

アービィはエンドラーズを引き止める神官たちの姿が目に浮かび、思わず笑みがこぼれてきてしまった。

レヴァイストル伯爵からの返事は、ベルテロイのいつか泊まった宿で待っているとのことだった。そこからランケオラータを連れて王都に向かい、バイアブランカに謁見し、今回の褒賞を与えるということらしい。ランケオラータはそのままハイグロフィラ領で疲れを癒し、政務に復帰することになるだろうと書かれている。

ルムはそれを聞き、できれば再度メディを除くこの面子で北の大地へ戻りたい旨を上奏して欲しいといってきた。ランケオラータも同意見で、レイとの婚礼の前に片を付けておきたいと言って、レヴァイストル伯爵に再度手紙を書いていた。

国境の町クルチャトスクまでの行程は、天候にも恵まれ予定通り七日で到着した。風の神官はデジャンではなくクルチャトスクに来て待っていた。これはランケオラータの通関の際に、悶着を起こさせないための心遣いだ。ルムに関しても神官の威光は有効で、何よりエンドラーズ直々の招待状を急遽用意してくれていたのが効いた。

ラシアスから北の民が出国する際には、たいがい嫌がらせのような尋問があるのが常だが、神官と招待状のお陰もあってほとんどフリーパスで通過してしまった。

神官が同行してくれた理由は、それだけではない。どうやらストラーの貴族の間諜がアービィたちの動向を掴み、再度取り込みに動きそうな気配があるらしかった。王家直属の間諜がそれを始末していたのだが、それはアービィたちの知るところではなかった。特に警戒もしていなかったし、見張られていたわけでもなく、偶然から

間諜の張っていた網に掛かっただけなので、知らない間に事は済んでしまっていた。もちろん、神官はそれを承知していたが、アービィたちには貴族からの接触に気をつけてというだけで、間諜同士の暗闘に付いては触れることはなかった。

どうやらビースマックのクーデター計画は、アルテルナンテやフィランサスの懸命の努力にも拘らず、近く発動しそうな状況になっているようだった。急に活発になった各国の間諜の動きが、それを物語っていた。パシュースは既にその情報をアルテルナンテを通じて掴んでおり、フィランサスもいつ暴発してもいいようにするための対応に追われている。

パシュースは、アービィをビースマックに潜入させ、政務参議官リンドリク・レレウピイ・ブレフェリー子爵に嫁いでいるレヴァイストルの長女ハーミストリアの救出に向かわせるつもりでいた。四国家のベルテロイ駐在武官たちは、ストラーとビースマックの掃除のためには、クーデターを完全に未遂に防ぐのではなくある程度まで起こさせてしまい、国家反逆罪で摘発できるだけの罪状を自ら作り出させるつもりでいた。もちろん国家反逆罪は計画だけでも充分死罪にできるのだが、下手をすると首謀者は地下に潜ってしまい、トカゲの尻尾切りのように下っ端だけが摘発されて終わってしまう可能性が高かった。当然ある程度の犠牲も覚悟の上だが、他国から嫁いできた者や、重要閣僚、重要人物に被害が出てしまっては困る。

ストラー国内に武力蜂起が起きるわけではないので、ビースマック国内に目を光らせておけばよい。まさかどこかの国の正規軍を投入するわけにも行かないので、ビースマックの近衛兵に閣僚や重要人物の護衛を徹底させ、冒険者を雇って他国から嫁いで来た者を一時的に母国に避難させる計画だった。ストラーではアービィたちを立ち回らせた結果、リトバテス公爵を筆頭に、ローグルバ男爵とヴ

ィングストニー男爵が中心人物であることは炙り出してある。

フィランサスが父であるブルグンデロット王に働きかけ、宰相ディアートゥス公爵が必死に内定を進めた結果、キリンドリクス男爵とプルケール男爵が怪しいことが判ってきた。この他にレヴァイストル伯爵の長女ハーミストリアが嫁いでいるブレヘリー公爵家の次男であるハラ・ジャードニー・ブレフェリーも主犯クラスということは、フィランサスは始めから掴んでいた。ハラは、ハーミストリアの夫であり兄である長男のリンドリクを追い落とし、子爵の地位、つまり次期当主の地位を狙っている。あわよくば父である政務参議官パルバ・キラセリナ・ブレヘリー公爵までも追い落とし、その座も狙っているとも考えられた。

ガーゴイルの配置は終わっているようで、マグシュテット周辺からガーゴイルの姿は見られなくなっていた。おそらくテストは完了し、王都シュットガルド周辺に配置したのだろう。さらにフィランサスが近衛第二師団を率いて救援に赴くことを妨害するために、ベルテロイから神殿の町ツェレンドルフを経由し、王都シットガルドまで一直線に伸びるビースマック街道の何処かにも配置しているはずだ。

パシュースたちは、ストラー国内の始末はアルテルナンテに、ビースマック国内の始末はフィランサスに、ラシアスの摂政である征服欲の権化ニムファの抑えをヘテランテラが担当することにしている。そして、要人警護はビースマックの近衛第一師団に、国外脱出をアービィたちに担当させるつもりだ。もちろん、一回の冒険者に国が依頼をするわけにはいかない。そのようなことをしては、鼎の軽重を問われてしまう。そこでハーミストリアの救出をレヴァイストルに依頼させ、それに託けて要人や他の国外から嫁いできた貴族婦人、子女の避難の護衛をさせることにしていた。

問題はどのタイミングでアービィたちを、ビースマックに向かわせるかだ。ランケオラータを王都に送り届け、それを労ってからと考えていたが、状況がそれを許すかどうか予断を許さなくなってきている。一国の王に相当する人物も連れている。バイアブランカ王は、この人物に援助という形で恩を売り、北の大地をインダミトの市場にすることを目論んでいる。パシュースは北の大地を暫くはインダミトが独占することが父の狙いであることを知っているため、あまり大っぴらにはしたくなかった。北の大地を市場にと狙っているのは、インダミトばかりではないからだ。

王家が馬車を用意し、王都まではそれで連れて行く。その後はランケオラータとルムは王都に留まり、アービィたちはボルビデュス領へ行くことになるだろう。そのタイミングでレヴァイストルにクーデターをリークし、ハーミストリアの救出を依頼させる。ただ、ビースマックの状況次第では、ランケオラータとルムはベルテロイ到着時に近衛第二師団が預かり、ルムを国賓扱いにすることでアービィたちの負担をなくし、すぐにビースマックに行ってもらうことになるかもしれない。その場合は他国にルムの立場が知られてしまい、北の大地で競争することになってしまうが、ビースマックとストラーには恩を売れるので、多少は優位に立てると判断できた。

ストラー国内では王家直属の間諜が、アービィたちに近付こうとするクーデターグループの貴族が放った間諜を始末し続けていた。だが、貴族たちは表立って王家に抗議するわけにも行かなかった。抗議などしようものなら、王家に弓引く門閥ということを自ら喧伝するようなものだ。そのうえ、今の状況で王家に弓引くということは、ビースマックでクーデターを企む一群ということまで自ら暴露するのと同義だ。

六日間はアービィたちにとって平和に過ぎ、予定通りクシュナックに到着した。到着時既に陽は沈み、夜の帳が町を包んでいたため、その日はそのまま神殿が用意した宿に入った。部屋に荷物を下ろし一息ついていると、宿の使用人がそれぞれを呼びにきた。全員がロビーに下りると、そこにはお忍び姿のエンドラーズが待っていた。

「また活躍のご様子。
それにしてもご無事でなによりです、皆様」
相変わらずの物腰でエンドラーズが挨拶した。

「いつも無理ばかりで申し訳ございません、エンドラーズ様。
馬車の手配から何から……
それに、王様からいただいた家の処遇までお手伝いいただいちゃって、お礼のしようもありません」
アービィが丁寧に頭を下げながら礼を言った。

「いえいえ、とんでもない。
なかなか頭の固い連中が多くて、孤児院の設立が遅れていたところです。
こちらとしても大変ありがたい。
王は、少々思惑が外れ困り顔ではありましたがな」
痛快このうえない、という表情でエンドラーズが笑った。

「ランケオラータ殿も随分とご苦労されたご様子。
あまりのんびりとはできますまいが、せめて今夜くらいは羽を伸ばされるがよろしかろう。
今宵はエンドラーズとっておきの店にご案内いたしましょう。
ところで、そちらの方が北の？」
エンドラーズがルムに話を振る。

「お初にお目に掛かる。
私は北の大地で平野部の部族を統べる者で、ルムと申す。
以後お見知りおきを願いたい」
権威とは無縁の男だけに、へりくだり過ぎることはないが、それでも最低限の礼節は心得ている。
丁寧に頭を下げ、自己紹介する。

「ご丁寧にありがとうございます。
申し送れましたが、いや、皆様との会話でもうご存知とは思いますが、私は風の神殿最高神祇官のエンドラーズと申します。
こちらそこ、以後お見知りおき願います。
さあ、それでは夜の街へと繰り出しましょうぞ」
エンドラーズが急き立てるように全員を宿から連れ出し、お忍びの際には必ず立ち寄る酒場へと案内した。

「さあ、どうぞお入りください。
店主とは長い付き合いです。
余計な口はききませんし、外見に似合わず口の堅い男です」
エンドラーズは店主を紹介し、人数分適宜注文した。

「え～と、エンドラーズ様?
お酒など召し上がって、よろしいのでしょうか?」
ルティが恐る恐る聞いた。

「私は、今幻でございます」
しれっとした顔でエンドラーズが答え、店主が相槌を打つ。

「ここにいるのはエンドラーズ様に良く似た男。
エンドラーズ様は、今頃神殿でお祈りを捧げておられるはずですよ」

真面目な顔で言うが、目は笑っている。

「あまり皆様ご存じないようですが、精霊神殿の神官に禁忌はございません。

身を滅ぼすような誘惑に正面から挑み、これをねじ伏せてこそ強固な信仰心が得られるというもの。

酒如きが我が精霊への信仰を妨げようなど、百年早いというものです」

筋が通っているような、いないような理屈で皆を煙に巻き、エンドラーズは大杯を手に取った。

飲み比べを挑まれたと勝手に判断したルムが同様に大杯を手に取り、エンドラーズの音頭で乾杯すると一気に飲み干す。北の大地で普通に飲まれている蒸留酒に慣れたルムには、南大陸のワインなど水の如しだ。顔色一つ変えることなく、つぎつぎに杯を空けていく。エンドラーズも負けじと飲み、周囲の客たちが呆気に取られる中、凄絶な飲み比べが始まってしまった。

その最中もアービィとエンドラーズは孤児院に付いて互いの考えを戦わせ、ランケオラータもそこに加わった。

「なんですか、その孤児院というものは？」

ルムが初めて聞く言葉に反応する。

「親を失った子供を、親に代わって育てる施設ですよ。

アービィ殿が王からもらった褒賞の家を、我々に寄付してくださいましてな」

エンドラーズが孤児院について、事細かに説明する。

北の大地に孤児院などという発想がなく、ルムは今ひとつ理解しにくいようだった。

「北の大地にも欲しいな、それは。
罪滅ぼしじゃないけど……」
ルムは良いと思ったものは、取り入れてみようと考えていた。
部族同士の殺し合いで家族を失うことなど、掃いて捨てるほどあった。

「部族ごとの皆殺しの後、売れそうな子供を南大陸に売り払うことが当たり前の風習があるうちは、孤児院なんて北の大地には無理だと思いますが」
メディが素直にその点に付いて指摘する。
ルムもエンドラーズも難しそうな顔になる。

「そうだ。
たしかにそうだなぁ。
でもなぁ、メディ。
こっちへ着て俺の考え方も随分変わってきたんだよ。
まだ、孤児院ってものに明確に考え方は持てないけど、北の大地が変わっていくうえでは必要だよな」
まずルムが言った。

「今のところ理想論に過ぎませんが、北の大地にもそういう種が蒔かれたと思われてはいかがですか？
メディ殿の境遇も理解できますが、諦めてしまっては何も始まりません」
エンドラーズもメディの指摘はもっともだと感じてはいた。
だが、ルムの発言に期待できるものがあるとも感じている。

「そうですね。
今すぐには無理だろうけど……
北の大地も豊かになれば、殺し合いの必要もなくなりますもんね」

メディは、ルムの考え方が変わっていることに気付いていた。
いつか、自分が生きているうちに、自分のような不幸な子供が作り出されることがなくなる日が来ることを、メディは願わずにはいられない。

その後も真面目に話をしてはいるが、エンドラーズとルムの飲み比べは終わる気配がない。どちらかが杯を干せば、もう一方もすぐに後を追う。いつしか巻き込まれたランケオラータが酔い潰れ、ルティの呂律が怪しくなったところでお開きとすることにした。

「皆様、またストラーへ、風の神殿にお越しください。
いつでも歓迎いたしますぞ」
そう言ってエンドラーズは、しっかりとした足取りで風の神殿へと帰っていった。

ルムとアービィがランケオラータを両側から抱え、完全に出来上がっていたメディをティアとルティが抱える。ルティも既に出来上がっているのだが、メディが意識はあるが立つこともできなくなっているので、最後の気力を振り絞っていた。しかし、酔っ払いの行動故、メディを抱えたまま次の酒場に雪崩れ込もうとする。ティアも半分以上正気をなくしており、引き摺られるように酒場のドアに近付いて行く。
さすがに見かねたアービィが、ランケオラータをルムに預け三人を連れ戻し、宥めるようにして宿まで戻る。

「いかがでしたか？
エンドラーズ様は、随分とお楽しみだったご様子ですね？
アービィ殿からお手紙を頂戴して依頼、首を長くしてお待ちになっていらっしゃいましたから」

御者を勤めてくれている神官が、笑いながら聞いてきた。

「ええ、そりゃぁもう。
ご覧の〜、通りでぇす」

ティアが呂律の回らない口調で答えた。歩いているうちに酔いが回ってしまったようだ。

翌朝、一人の例外もなく頭痛に襲われた一行は、苦笑いする神官の手綱捌きに身を任せ、ストラーの玄関口キャスシュヴェルの町へと出発した。

メディは、皆との旅が終わりに近付いたことを肌で感じ、少しだけ沈んだような面持ちになっている。昨夜も途中でそのことに気付き、涙がこぼれそうになってしまったために酒を過ごして誤魔化していた。あと五日でお別れだ。そう思うと、もっと一緒に旅をしていたい気持ちと、早くギーゼンハイムに帰りたい気持ちが鬩ぎ合っている。インダミトの王都まで一緒でもいいじゃないかとも思うし、そうしてしまったらまた北の大地まで行ってしまいそうな気もして、それではいつまでもあの娘の両親を待たせることになってしまうとも思ってしまう。

いつしか涙が溢れ出し、メディは静かに泣いていた。

アービィたちも、別れが近いことを感じていた。引き止めたい気持ちと快く見送りたい気持ちが、メディ同様に鬩ぎ合っていた。いっそ時間が止まってくれたらいいのにとルティは思ってしまう。馬車はゆっくりとだが順調に走り、思い出を語りつくすには短すぎる五日間はあっというまに過ぎ、キャスシュヴェルの町並みが見えてくる。

別れはもうすぐに迫っていた。

第５３話

ヌミフは中央部の民との接触には成功していたが、大同団結を説得するまでには至らず、人質という形で囚われの身になっている。当初は問答無用で陵辱のあと殺してしまえという意見が大勢を占め、危うく犯されるところだったが、従容とした態度と覚悟を決めた表情に、中央部を統べる族長であるプラボックが待ったを掛けた。

プラボックに性欲がないわけではないが、わざわざ身の危険を冒してまでやってきた平野部を統べる若き族長の妹を、陵辱のうえ殺したとなれば平野部の民全員が火の玉となって襲いかかって来かねない。しらばっくれることは不可能だ。

ヌミフが狩りや遠乗りの途中とでもいうならまだしも、明確に交渉という目的を持って自分たちを探しに来ているうえ、拠点を発見し乗り込む際に同行してきた供を一人パーカホに帰している。たとえその直後に事故で死んだとしても疑われることは間違いないし、ましてや陵辱のあとが判ってしまったら言い逃れなどできるはずもない。

とりあえず話は聞くことにしたが、長年殺し合った相手のいうことを、鵜呑みにするほどプラボックはお人好しではない。と言っても最北の蛮族の脅威は、中央部の民には対処し切れるものではなかった。過去幾度も押し寄せてきては撃退してきたが、突然魔獣の群を前面に押し立てて攻めてきた晩秋の戦で一敗地にまみれ、中央部を追われていた。

確かに平野部の民と団結すれば、戦力は倍以上に膨れ上がるし、当面の食住に困ることはなく魅力的な提案といえた。だが、南大陸の住人が進駐してくることには、安易に同意できない。最北の蛮族と南大陸の軍に挟撃されては、いかに精強を誇る北の民といえどひ

とまたりもない。謀略ではないかとの疑念を、プラボックは捨て切れなかった。

ヌミフには指一本触れるなと命じ、彼女の供回り共々軟禁してはいるが、持て余していることも確かだった。ルムが来たというのであれば、交渉なり話し合いにもなるのだが、族長の妹というだけのカリスマでは、部族の生き残りを賭けた話し合いなどできるはずもない。ルムの動向を聞けば、南大陸に渡ったという。

益々謀略の臭いを感じてしまうプラボックだった。

幸か不幸か当分の間、平野部は雪解け水が道を泥濘に沈め、河川を氾濫させてしまうため、組織立った軍事行動を不可能にさせてしまう。この間は一年を食いつなぐための農耕の準備期間に当てるのが常で、互いにゲリラ戦しかできず、精々威力偵察に小規模なグループ同士の小競り合い程度しか起き得ない。暫くは考える時間があるということだ。

中央部に残した偵察部隊からは、魔獣が消えたとの報告も来ている。先日アービィが殲滅した結果なのだが、それをプラボックが知る由もない。食料の備蓄を進めつつ、ようやく膝下に組み入れることに成功した山脈の部族を使役して、情報を集めるべきだ。プラボックは情報の重要性を、本能で知っていた。

バードンがヌミフの捜索に出ると言いだしたのは、偶然にも彼女が囚われの身になった日のことだった。集落の防衛はハイスティに指揮させた方が、バードンより遙かにマシだった。組織の中で生きてきたハイスティは、単独行動が多いとはいえ連携というものを熟知している。それに対しバードンは完全な個人行動が主で、組織の運用など経験は皆無だった。一兵卒として戦場を縦横に走り回ってこそ自分の真価は十全に発揮されるのであって、指揮官として全体

を見渡す能力などないに等しい。
バードンは、年功序列で自動的に指揮官に上げてしまうことの愚を、自らの特性から知っていた。過去幾多の優秀な兵が戦功への報償として指揮官に祭り上げられ、その個人が持つ最大の能力を封じられるのを見ている。刃を揮う場において最高の能力を発揮する人間を維幕に縛り付けた結果、決定的な判断ミスを犯し大軍を壊滅させたなどの事例は枚挙に暇がない。

泥濘に覆われた大地は、多人数での組織的な行動を封じている。同程度の能力を有する数人の小グループ単位での行動が、この場合は効率が良かったが、釣り合わない者同士を組ませては低い能力に均一化されてしまうため、バードンに限っては単独で捜索に出ることにしたのだった。
この時期魔獣の行動も泥濘に妨げられるため単独行動に不安はなく、さらに一対一であればバードンの戦闘力を以てすれば、大概の魔獣は撃退は可能だ。

ヌミフの動向は掴んでいるため、北にある山脈地帯を目指すことにする。途中いくつかある集落は、ルムの勢力圏内であるため、寝場所や食料、緊急時の支援は期待できると思って良かった。雪が溶けるほどに寒さは緩んできているとはいえ、日が暮れてしまえばかなり冷え込みは厳しくなる。犬の毛皮の外套と夜具を担ぎ、バードンは泥濘の中へと踏み出していった。

別れが近いという少しだけ沈んだ気持ちで、アービィたちはキャスシュヴェルの町に入った。
いくらなんでも素通りでは悪いので、ニリピニ辺境伯の屋敷を訪ねた。屋敷には忙しそうに人が出入りし、町の整備に忙しそうだ。門番の私兵に取次ぎを頼むと、兵もアービィたちを覚えていたのか、

すぐに応接室まで案内してくれた。暫く待っていると、辺境伯がイヴリーを連れて現れる。

アマニュークの整備もほぼ終わり、観光名所として人を集めているそうだ。周辺にも出店ができ始め、徐々に新しい町ができつつあるという。まだ永住するようなものは出ておらず、数日ごとに仕入れにキャスシュヴェルに交代で戻っているらしい。それでも土産物屋のほかに飲食店がいくつかあり、簡易宿泊所も何軒かできている。

アマニュークは四つの尖塔を持っていたが、激戦で全てが崩れ去っていた。そのうち一つを物見の塔にしてあり、そこから古戦場を一望でき、その向こうにはインダミトの平原が広がっている。崩れた三つは戦争遺跡として保存する予定だったが、物見の塔が人気で一つでは観光客を捌き切れず、もう一つ改造する予定だ。

「悩みどころはそこなのですよ。

全部を元通りに作り直して、在りし日のアマニューク砦として復活させるか、戦の愚かさを後世に残すため二つは崩れたままにするかで」

辺境伯は本気で悩んでいるようだ。

「私は、二つは崩れたままが良いと思うんです。

物見の塔が欲しいなら、別の場所で新しい名所にできるようにすれば良いと思うんです。

戦の馬鹿馬鹿しさを見てもらうべきです」

イヴリーの意見ははっきりしていた。

アービィたちも意見を求められたが、やはり二つは残したほうが良いと思ったのでそのように答えた。

ルムは最初何を話しているのか理解できなかった。北の大地に観光という概念がないからだが、それは生きることに必死すぎて余裕がないからだった。しかし、南大陸に来てからというもの、見るも

の全てが新鮮だった。見るということがこんなに楽しいことだとは、ルムは初めて知った。

「私は北の大地から出たのは初めてです。まだ、その物見の塔とやらは見に行ったことはありませんが、人を喜ばす方を優先した方が良いかと思うのですが」

ルムは景色を見て喜ぶならそのほうが良いと思う。

戦の後など見ても楽しくなどないだろうとも思った。戦の後など、集落の中だけでもそこらじゅうにあった。そんな珍しくもないものを、なぜ取っておくのかと素直に疑問に感じていたのだ。

「急ぎ旅ですかな？もしよろしければ、明日にでもご案内しましょうか？アービィ殿にも悪霊のいなくなったアマニュークを見ていただきたいと思っておりましたし」

辺境伯が皆を誘った。

急ぎといえば急ぎだし、二日くらいの余裕はあるといえばある。

ランケオラータは北の大地の自然は、それだけでも見る価値があると思っていた。なにもインダミトの市場とするためだけに、北の大地を育てる必要はない。

峻険な山並みや、それに続くなだらかな丘陵地帯は南大陸の自然とは違う景観を作り出し、南大陸とは微妙に違う植物相は独特の景観の彩りになっている。雪に閉ざされている風景も、ラシアスやストラーの最北部とビースマックの高山地帯以外では、見ることはできない珍しい光景だ。地峡から平野部に降りるまでの山岳地帯や、中央部と平野部を隔てる山脈地帯には温泉が湧く場所もある。

ラシアスの駅馬車が好評なのは、第一に魔獣や野盗に襲われる心

配のない、国軍の警護による旅の安全が確保されているからであるが、いくつもの駅に点在する温泉や山間の変化に富んだ景色も大きな魅力になっている。

ルムにとっては資源というと鉱物や木材、食料といった物が思い浮かんでしまうが、北の大地の雄大な自然の風景や、各地に点在する温泉も、大きな観光資源といえた。冬の厳しさは筆舌に尽くしがたいが、乾燥した風が吹き抜ける夏の涼しさは、南大陸の湿った夏に慣らされた者にとって、魅力的な避暑地になるだろう。

そこで商習慣が発達していない北の大地へ、避暑に訪れる人々を対象として南大陸から商人が売り物を持って行く。そして現地での働き手は北の民を雇わせる。南大陸と北の大地の合弁企業のような形を取ればよい。共通の通貨がないため、給与は南大陸の貨幣で支払い、南大陸資本の商店で使わせているうちに、徐々に浸透していくだろう。

幸い、鉱物資源に恵まれた北の大地だ。信頼できる人選で造幣局の分室を各国が北の大地に置けば、南大陸の貨幣が不足することはあるまい。もちろん貨幣の作りすぎはインフレを引き起こすので、各国が慎重に調整すべきだ。バイアブランカ王が構想する共同統治機構がこの役割を担えば、ある程度うまく調整できると考えられた。

南大陸資本の商業が軌道に乗れば、北の民が独立して北の大地資本の商業も発生する。競争はそれからでよい。最初は北の大地資本を保護する施策を採らなければ、商売慣れした百戦錬磨の南大陸の商人たちの独壇場になってしまうだろう。目先の利益に目が眩み、北の大地の経済を食い物にするような商人は、できる限り排除されなければ、いつまでも北の民の南下への渇望は癒すことはできない。

ランケオラータは一刻も早くインダミトに戻るべきだと考えていたが、ここでルムに観光地というものを見せておいて損はないと思いついた。辺境伯の誘いは渡りに船といえる。

「では、辺境伯殿、ぜひご案内いただきたく思います」

ランケオラータは、それまで考えたことをニリピニ辺境伯に話し、ルムにとってアマニュークを見ることは重要なことだと熱っぽく語った。

ルムはランケオラータが北の大地のことをそこまで想ってくれていることに、目頭が熱くなる想いだった。それと同時に学ばなければならないことは、まだまだ山積していると思いを新たにする。だが、いつまでも部族を統べる自分が南大陸に滞在するわけにはいかない。バイアブランカ王への謁見が済んだら、最低限の知見を得た後直ちに北の大地へ戻らなければならない。ルムは自分の代わりに妹のヌミフを、インダミトに派遣するつもりになっていた。

ランケオラータにしてみれば、ただ北の大地や北の民のことを想って言っているわけではなかった。当然インダミトの発展が第一だ。だが、数ヶ月の北の大地での生活は、可能性に溢れたフロンティアを見せ付けられた思いだった。何を以って偏見や差別の対象だったのかと思うほどの純朴な人々の暮らしが少しでも良くなり、南大陸と争うのではなく競い合って両者が発展できれば、より良い世の中になると信じてのことだった。

二リピニ辺境伯は北の大地の改革について興味を示し、もし商人を北の大地へ送り込むことができるようになったら、自領の信頼できる者を推薦させて欲しいと言った。ランケオラータに嫌はないが、インダミトの利権を優先させてもらえるならと釘を刺すことを忘れない。二リピニ伯も死の危機を潜り抜けてきた若者を蔑ろにしてインダミトと事構えるつもりはなく、まずは存分にインダミトが北の大地を味わってから割って入りますと返した。

翌日、日が昇る頃アービィたちの馬車にイヴリーが便乗し、一行をアマニュークに案内した。二リピニ伯は深夜に配下の訃報が入り、

そちらを蔑ろにするわけにいかないと同行が不可能になっていた。残念そうに見送るニリピニ伯に、出発の挨拶をして馬車は走り出した。

一日の行程は途中ゴブリンの襲撃があったが、ルムが先頭に立ち撃退する。日々剣を取る生活で鍛えられた武技は、ゴブリン程度は鎧袖一触に葬り去る。剣の血糊を振り払い、布できれいにふき取り油を塗り直す。己が命を託す剣を、ルムは大切に扱っていた。

やがて、以前来たときとは全く別物の光景が見えてきた。アマニュークの周辺は、作りこそ簡易なものだが商店や宿が立ち並び、賑わいを見せている。

馬車を宿に預け、一行は酒場に繰り出した。ストラーで一般的に食べられている料理がメニューに並んでいるが、残念ながらまだここだけというものまではできていないようだ。イヴリーに聞くと、それぞれの酒場や飲食店では新メニューの開発に余念がないのだが、ある程度完成されたストラー料理のレシピはあまり改良の余地がないらしく、突飛なものばかりできてしまっているらしい。

中にはアービィがラガロシフォンで伝えたアイスクリームを出したいと考えている店もあるらしく、商標や特許についてイヴリーに釘を刺すような場面もあった。どの店で働く顔も、これから新しい街を作っていく希望と活力に溢れている。ルムは北の大地もこうなって欲しいと思いながら、店で汗だくになって働く人々や道行く人々を眺めていた。

翌朝、アマニュークの砦に一行はやってきた。既にたくさんの人々が砦の中を見物し、物見の塔に登っている。イヴリーの案内で中に入り、まずは慰霊碑を見に行った。悪霊やレイスとの戦いの思い出を語りながら、イヴリーをからかいつつ慰霊碑に参拝する。あの時点では応急修理だったが、現在は新規の慰霊碑に取り替えられていた。

「これは、何のための物だい？」
ルムが不思議そうに訊ねた。

「今から４５０年前、ここで大きな戦がありました。
我がストラーと、ランケオラータ様の母国インダミトとの間で、国境を決める争いでした。
この砦は、ストラーが国境を死守するために作られたものです。
この砦の奪い合いで多くの人々が亡くなりました。
戦が終結した後、亡くなった人々の霊を慰めるため、ここに慰霊碑を建てたのです」
イヴリーが慰霊碑の由緒に付いてルムに説明する。

北の大地では墓は重要だが、慰霊碑という考え方はなかった。家族や愛する人の亡骸を放置したくないという気持ちからのもので、葬った後の墓参りという発想はない。霊という概念はあるが、それぞれが心でしっかりと慰霊することこそ重要で、シンボルを作るという考え方がルムには理解できなかった。

「そうか、こうやって霊を慰める方法もあるのか。
だが、それを見世物にしているんだろう？
いいのか？」
ルムは疑問を素直に返した。

「確かに見せ物にしてますね。
それでお金を稼いでいる。
考えようによっては、死者への冒涜とも取れなくはありません」
イヴリーはあっさりと肯定する。

ですが、と前置きしてからイヴリーは続けた。

私は必要なことだと思っています。なぜなら、この砦を見ることで、そして物見の塔から遠くまで広がる平原を、そこに沈む夕陽を見ることで、こんな素晴らしい自然の中で戦をすることの愚かさに、気付くかも知れないからです。今日ここに来た人々の中では誰も気付かないかも知れませんが、明日には気付く人がいるかも知れない。

数え切れないほど人が見に来ても、ほとんどの人が景色のきれいさに感動するだけかも知れない。でも、その中でたった一人でも良い。戦の愚かさに気付いた人が、たった一人でもいてくれたなら、この地で命を散らした英霊たちは鎮まるのです。そのたった一人がいつか起きる戦を止めるかもしれません。それを信じたいのです。もちろん、一人でも多くの人に知って欲しいです。建て前もありますが、と付け加えてイヴリーは語り終えた。

ルムは黙って聞き、そして考える。戦が愚かだとは思っていなかった。いつでも生活圏広げるために、侵略を跳ね返すために剣を取ってきた。正義は我にありと信じて、敵を討ち続けてきた。間違っているとは思ってもいなかったが、討たれた敵も同じことを考えていたであろうことに、ルムは気付いてしまった。

皆が手を取り合って、平和に暮らせるに越したことはない。部族の垣根を越えて、共に暮らせることが幸せなことだと、理屈では判っている。

だが、北の大地の自然が、それを許さないと思い込んでいた。痩せた土地から収穫できる食料には限りがあり、全ての人々の腹を満たすことは不可能だと、頭から決めつけていた。しかし、ランケオラータから教えられた農法や水処理、炭焼きや炭を利用した断熱方法といった生活の知恵は、今まで思い込んでいた限界を突破させる可能性が高い。収穫が上がり、水が確保でき、冬の寒さを凌げるようになれば、他の部族を滅ぼしてまで収奪する必要などなくなる。ルムの部族一人勝ちになるのではなく、中央部の民にもその技術を

伝えればよい。ヌミフがそれに気付いていれば、大同団結の交渉も容易になるだろう。

そう考えれば、食料や僅かの農地や狩り場の奪い合いで戦をするなど、愚かとしか言いようがない。慰霊のやり方はそれぞれの伝統や考え方があるからとやかく言う必要はないが、戦が愚かだということは同じだった。

正義の戦など、この世には存在しない。生存権を賭けて戦わなければならないときはあるが、どちらにも言い分はある。

勝った方だけが正義を名乗れるだけであって、負けた方には正義がないわけではない。

その人、集団、部族、民族、宗教、国家それぞれの信じる正義があり、その中に欲望という悪を飲み込んでいる。戦争とは欲望のぶつかり合いが話し合いで解決できなかった結果であり、ルムにはその概念はないが、外交の延長線上にあるものだ。言葉による戦いと譲歩と妥協が限界を超えたとき、暴力的な方法で全ての言い分を通そうとする。それが戦争という外交手段だった。

南大陸は四百五十年前に全大陸に戦乱の嵐が吹き荒れ、総人口のほぼ四割が死者の列に並んだ。実際に剣によって命を奪われた者はそのうち　四分の一ほどだが、そのほとんどは働き盛りの世代とそれを継ぐ世代だった。戦場で剣を振るうのは、いつだってその世代だ。残りの四分の三　は、働き手を失ったことで生活が成り立たなくなり餓死に追い込まれた者や、食料の生産が滞ったため間接的に餓死に追い込まれた者たち、つまり体力的に劣る弱者たる幼子や老人たちだった。

肥沃な大地を持つ南大陸の住人たちは、弱者が剣に拠らず命を落とすのを見て戦の愚かさに気付き、四国家を並立させることを選び戦乱を終結させることができた。

剣よりも鋤や鍬を選び、自ら食料を生産し得ない弱者の腹を満たすことができた。

だが、北の大地は、今まさに戦乱に明け暮れ、弱者は切り捨てられている。それが当たり前だと思い込んでいた。

その当たり前がひっくり返されようとしている。武力に頼った征服ではなく、文明を、平和をもたらす栄誉の方がよほどマシだとルムは思った。もし世界が明日滅びることが判っても、俺は北の大地に苗を植えよう。

「アービィ殿はどう考える？」

ルムは、ふと魔獣が何を考えているかが気になった。

「そうですね～。

死者への冒涜って言うなら、殺し合いなんか生への冒涜だし、死者を作り出してるだけだし。

良いんじゃないですか。

殺し合いに向けるより、貪欲と思われようと何かを作り出す方に向けられる活力の方が」

アービィにも死者を悼む気持ちはあるし、鞭打つような仕打ちは許されるべきではないと考えている。

だが、死者すら商売の種にする貪欲さを、否定する気はない。貪欲さが戦争へ向かわないだけで、どれほどマシなことか。商人同士の競争は当然あるし、裏に回れば汚い話が山ほどあることも承知している。それによって死に追いやられる人々がいることも。それでも戦争がもたらす大量の死よりは、圧倒的に少ないし、理不尽な暴力に対抗するより容易に逃げることだって可能だ。商売に失敗したからといって、即、死を選ばなければならないという強制などはない。

「無理に北の大地に、南の風習を持ち込むことはないんですよ。受け入れられないことは、どうしたって無理ですもん」
ルティがルムにフォローを入れた。
ルムが少々視野狭窄になりかけているように見えたからだ。

「なぜ、ここに人が集まると思います？
自分が住む近くにこういうのがないからですよ。
みんな、日常から逃げたいんです。
仕事、しがらみ、競争、疲れることばかりですからね」
メディが続ける。
これまでの旅も、日常からの脱却だった。

ただ虚しく寿命が尽きるまで、あの夫婦が用意してくれた屋敷に閉じこもり、世話されるだけの日常。それが突然破られ、目が眩むほど刺激的な毎日が続いてきた。
もし、アービィたちがギーセンハイムに来なかったら、その中にティアがいなかったら、今の自分はあり得なかった。
そして、間もなくこの旅も終わり、自分は日常へ帰って行く。

「北の大地にしかないものが見られることが大事ですよ、ルムさん。ただ、便利さに慣れちゃってる南大陸の住人が、ある程度快適に過ごせる施設は必要かも知れません。
さっきメディが言った日常からの脱却って、野営みたいに不便さを楽しんじゃう部分もあるんですけど、やっぱり程度問題ですからね」
ティアが纏める。

その夜、ルムは夢を見た。
南大陸から多くの人々が北の大地にやってくる。湿地帯や河川、

湖には舟遊びを楽しむ光景が広がっている。温泉宿は満員になり、窓の明かりの中には人々の笑顔が溢れていた。

まだまだ足りないものは山ほどある。訪れた人々を、何でもてなすか。今まで北の大地独特の食べ物は、固いパンと薄いスープしかなかった。機能ばかりが優先され、寛ぐことなど考えられていない家屋。

確かに南大陸のものをそのまま持ってきただけでは、北の大地へ人々が訪れる理由がない。だが、最初は模倣で良い。南大陸で一般的なものを、北の大地で採れるものに置き換えることから始めよう。やはり人を派遣し、人材を育成しないとダメだ。人材を招くだけでは、いつまでも南大陸の模倣から脱却することなど不可能だ。

北の大地で採れるものを目の前にして、北の大地にある道具でどうすればいいかを考えなければいけない。才能溢れる者であれば、すぐに応用ができる。だが、すべての人々にそれを求めることは酷だ。教わって帰ってくる者には、材料や道具の違いが最初の壁になってしまう。殺し合いにしか才能を発揮させる場のなかった民に、いきなりその壁を独力で乗り越えさせるのは、かなり難しいことだろう。

まだ夜が明け切らぬうちから目を覚ましたルムは、それから朝食に呼ばれるまでずっと考え込んでいた。だが、それは解決策のない難問に呻吟する苦しさではなく、思考することが楽しいひと時だった。

アマニュークを発った一行は、キャスシュヴェルに戻ってからニリピニ辺境伯の歓待を受けた。さすがに町を発展させ続けているだけの人物だ。ルムが欲しい人材を派遣することを、その場で約束する。ランケオラータもインダミトが料理に関しては、ストラーに劣

ることは理解している。観光客の満足度は料理の良し悪しが大きく影響する。そこは一日の長があるストラーに任せても問題にはならないし、そうでなくてはならないだろう。

多少優位性を失うことになるが、バイアブランカ王もその程度のことは読みに入っているはずだ。もとより、ある程度の優位性さえ確保できていれば、いずれ四国家が鎬を削ることになるときが来てもインダミトの優位は揺るがない。

ストラーでは、農作物の生産調整をして市場での値崩れを防いでいるほどだ。他国にほぼ原価で売れるほど、ストラーの農業や酪農の生産力は高い。税として四割を国が取っているが、余剰分は保存の効く農作物の作付けを奨励することで無駄を出さないようにしている。その枷を外しても良いのだ。好きなだけ作り、売ることができる。

十のうち四を税として納めれば六しか残らないが、二十作って八を税として納めても十二も残る。農業や酪農のギルドが代表して北の大地へ販売してもいいし、国営事業として税の増収分のほか余剰になる生産物を生産者から国が買って販売しても良い。いずれにせよ、ストラーに損はないだろう。北の大地の生産力が上がっても、人口の増加に簡単に追いつけるとは思えない。経済が活性化すれば南大陸も人口の増加が予想されるので、農業や酪農業の規模が肥大化しても問題はないだろう。

ビースマックにしても、鉄器やその他の工業製品の膨大な需要ができるのだ。販売に関しては優秀な販売網を持たないため、インダミトに任せなければならないが、それでも大量に買ってくれるなら問題はない。原料は南大陸で生産される鉱物だけでは追いつかないが、北の大地に眠るほぼ無尽蔵ともいえる鉱物資源は、産業革命がおきていないこの世界では、どう頑張っても使い尽くせるものではない。

ラシアスはこれといった産業がないため、北の大地との交易で利益が薄いと思われるがそうではない。物流に掛かる通行税や関税、それに伴い人々の移動により国内に落ちるカネの規模は莫大だ。自国がなにもせずとも勝手にカネが落ちていく。考えようによっては、最も利が厚いかもしれなかった。何より、北の民への備えとしてのウジェチ・スグタ要塞の維持が必要なくなる。交易が軌道に乗った後は、アマニューク同様観光資源として活用することも可能だ。唯一心配されるのは、急激に人の交流が活発化することによる治安の悪化だが、その程度は抑え込めるだけの軍備は持っている。

問題は、どの時点でインダミト以外の三国家に、北の大地への参入を許すかだ。

バイアブランカ王は、今回のビースマックでのクーデターを片付けた後、ストラーとビースマックの国際的地位が相対的に低下した時点でインダミトが北の開発に乗り出し、ある程度の利権を確保するつもりだ。その後、南大陸の共同統治機構を発足させると同時に、インダミトの優位性を確保しつつ、他の参加国の参入を徐々に解禁するシナリオを描いていた。

ニリピニ辺境伯領での一夜が過ぎ、いよいよベルテロイへ向けて出立した。ベルテロイに近付くにつれ、メディの口が重くなり、ルティとティアにも伝染する。昼過ぎにベルテロイの城壁が見え始め、メディの旅は終わりを告げた。

爽やかな寂しさの中、レヴァイストル伯爵の待つ宿へと向かう。今夜はそれぞれの行く末に幸多からんことを祈って、ささやかながら宴席を設けてあると聞いている。もちろん、ランケオラータの生還祝いとアービィたちへの慰労、ルムの歓迎の意味も込めてのことで、レヴァイストル伯爵が手配していた。

宿にはレヴァイストル伯爵の他、ファティインディ、レイ、セラスが待っていた。アービィたちの姿を認めた伯爵とファティインディが深々と頭を下げ、ランケオラータの姿を見つけたレイが飛び出した。

涙でぐしゃぐしゃになった顔のまま、公衆の面前にも拘らずレイがランケオラータにしがみつく。貴族としてあるまじき振る舞いだが、誰一人それを責める者はいなかった。

セラスは嬉しそうにティアに纏わり付き、パーティ会場へ手を引いていこうとするが、荷物すら置いてない状態であることをファティインディに突っ込まれ、慌てて部屋へと案内しようとする。微笑ましい光景に、アービィはようやく肩の荷が下りた気持ちになっていた。

伯爵はメディとルティの手を取り、感に堪えないという表情で何度も感謝の言葉を繰り返していた。

嵐のような再会のひと時の後、それぞれの部屋に荷物を置き宿の広間に集まると、そこには宴の支度が整えられている。伯爵の音頭で宴は始まった。

「婿殿、この度は、我が莫迦息子のせいで多大なご迷惑をお掛けした。
心からお詫びを申し上げる」
伯爵がランケオラータに詫びる。

もちろん、ランケオラータに伯爵に含むものはない。岳父になる人物から頭を下げられ、彼は慌てて取り成そうとする。

「父上、そのようなお言葉は勿体無く存じます。
無事帰ってくることができましたし、もう水にお流しいただけますようお願いいたします。

それも、何もかも、ここにいるルム様と、アービィ殿たちのお陰です」

ランケオラータは、既に父に対する物言いになっている。

そして、いくら身内だけの集まりとはいえ、一国の王に相当する人物を自国の貴族に紹介するのだ。それなりの対応に変えていた。

「ルム様、この度はなんとお礼を申し上げてよいやら。

どうぞ、心行くまでお楽しみいただき、旅のお疲れを癒していただきたく存じます」

レヴァイストル伯爵も一国の王に対する言葉遣いだ。

だが、ルムにはそれがくすぐったくてしょうがない。特にランケオラータとは、さっきまで俺お前で話していた間柄だ。

「伯爵、お心遣いには感謝するが、私は教えを受けに来た身。

どうか対等のお立場でお話いただきたい。

ランキーも、いいじゃないか。さっきまでと同じで」

ルムの言葉で座が一気に和やかになる。

レイは、ランケオラータとルムに北の大地での生活に付いて、事細かに聞いている。セラスはティアから離れようとしなかった。ルティとメディが最後の夜とばかりに話し込む。明日は王都へ向かう者たちと、ビースマックへ帰る者に分かれるのだ。いくら話しても話し尽くすということはなかった。アービィと伯爵は、北の大地との交易に付いて意見を交換している。一般的な就寝時間を過ぎても、宴は終わる気配を見せず、セラスは途中で眠気に負けたかファティインディによって部屋に連れ帰られていた。

セラスがいる間は涙を堪えていたメディだが、堰を切ったように涙が溢れ始めた。半年以上の時間を、ほぼ毎日一緒に過ごしていたのだ。名残惜しくないわけはない。ルティもティアも涙を両目一杯

に溜めている。アービィの目にもうっすらと光るものが見えていた。
四人の心を察した伯爵たちが宴の終わりを告げ、アービィたちに広間を譲ろうと席を立とうとしたときのことだった。

突然、広間に入って来る者がいた。
既にほとんどの人々が眠りに付いている時間だ。何事かと訝しむアービィたち。伯爵も一瞬事態を把握できなかったが、広間を照らす光の中に浮かぶ闖入者の顔を見て、その場で臣下の礼を取った。アービィたちも慌てて伯爵に続く。ルムだけがどうしていいか判らず、そのまま立ち尽くしていた。

インダミト王国ベルテロイ駐在武官パシュース・アローマンシュ・インプラカブル・バイアブランカ第二王子だった。
王家の次男が一伯爵を訪ねてくるなど、前代未聞の出来事だった。当然のことながら、伯爵を呼び出せば済むことだ。それが何の報せもなく突然の来訪。何かあったと伯爵は臣下の礼の姿勢のまま考えている。

「突然の来訪、驚かせて申し訳ない。
ルム様、ご無礼の段、平にご容赦いただきたく存じます」
そう言ってパシュースは片膝を付き、頭を下げた。伯爵同様、一国の王に対する態度だった。

「ですが、今は火急のとき。
このままで話をさせていただくご無礼をお許しください」
パシュースは椅子に座り、再度ルムに頭を下げた。

ルムに嫌があるはずはなく、また、状況は理解できないが一国の王子が慌てている様子から、どうぞとしか言えなかった。

では、失礼ながら、と前置きし、パシュースはアービィに向かって話し始める。

ビースマックでクーデターが起きる。

フィランサスがベルテロイに潜伏する間諜を捕らえ、事の仔細を吐かせていた。

ビースマックの主要閣僚と大きな発言力を持つ政務参議官を君側の奸臣として誅し、政務を乗っ取る計画だ。実行日は今日から十五日後。既にガーゴイルは王都を囲むように配置され、ビースマック街道の要所にも、フィランサスの妨害のためにかなり数が配置されている。宰相を始めとする主要閣僚や政務参議官の屋敷周辺にも、巧妙に隠蔽して配置されていた。

もともとビースマックは職人気質のものが多く、貴族と庶民の距離は近い。特権意識も余り強くなく、その領地の元締めくらいの気分でいる者すらいた。だが、一部貴族は外交や婚姻などで、ストラーの文化に触れる者がおり、その中には貴族が特権階級であるという一種のカルチャーショックを受けてしまった者たちがいた。

貴族と庶民の距離の近さに我慢ができず、政治を壟断して一気に自分が特権階級として君臨したい。そんな欲望が、他国を影響下に収めたいストラーの一部貴族と結びついた。ストラーでは王家傍流の新興公爵家が国内ではほとんど発言力がなく、ストラーこそ大帝国の末裔という自尊心を満たすため、他国への影響力を欲してビースマックのクーデター勢力に手を貸していた。

王朝を倒すほどの度胸はなく、王の権威の下に自己の権勢を誇示したいという、いかにもスケールの小さな欲望だが、ガーゴイルという対人兵器を手にしてからは無視できなくなっていた。既にクー

デター計画や首謀者は露見していたが、決定的な証拠にかけるため下手に手を出しても小物がトカゲの尻尾切りにされるだけで、首魁は闇に潜ってしまうと考えられたため、ある程度決起させてしまおうということになっていた。だが、決起の日が判らなくては対応の仕様がなく、泳がせているつもりが自由に泳がれてしまっていた。

ようやくフィランサスが間諜を捕らえて尋問してみれば、決起の暇では余りにも短かく、それが判明したのがついさっきだった。軍がベルテロイから王都シュットガルドまではどう急いでも十八日だ。明日取るものもとりあえず急行したとしても、間に合わない。そこで、ちょうどベルテロイに到着したアービィたちに馬車を提供して急行させ、その間に早馬で王都には知らせておく。主要閣僚と重要人物の警護を近衛第一師団が固め、アービィたちには到着次第国外から嫁いだ者たちを連れてベルテロイに戻ってもらい、四国家の駐在武官が責任を持ってそれを守り切る。

同時にフィランサスとアルテルナンテは、それぞれが近衛第二師団を率い、ビースマックおよびストラーの王都に戻り、クーデターの首謀者捕縛に走る。ヘテランテラは、ラシアスの摂政ニムファが混乱乗じて兵を起こさないように、ラシアスとビースマックの国境の町ソロノガルスクに赴き国境を固める。そして、ベルテロイの防衛にはパシュースが備えることになっていた。

本来の計画では、アービィたちは王都へ行った後はボルビデュス領に滞在するだろうから、そのときにレヴァイストルにクーデターをリークし、ハーミストリア救出に託けて動かすつもりだった。だが、クーデターグループに焦りでもあったのか、決起の日はすぐそこだった。

事ここに至っては、レヴァイストルを利用するなど回りくどいことはしている余裕はなく、異例中の異例だがパシュース自らアービィに依頼に訪れたということだった。

アービィにはパシュースの説明から、インダミトの意図を察知することはできた。できれば国家間の謀略などには、関わり合いを持ちたくない。クーデターはもちろんだが、それを利用しインダミトの立場を優位にしようと企むのも、立派に謀略だ。

アービィとルティはインダミト国民である以上、パシュースが命令の形で言ってきたら断りようがない。だが、パシュースは依頼の形を取っている。これは強制的に命令に従わせようとして、アービィが国を出てしまうことを恐れているということだ。そこになんとも言えない厭らしさを感じてしまっている。

しかし、アービィは快諾した。

即答だ。

レヴァイストル伯爵の顔色が、みるみる蒼褪めていくのを見てしまったからだ。以前レヴァイストル伯爵の長女ハーミストリアが、ビースマックに嫁いでいることは聞いていた。伯爵の目が懇願の色に染まるのが、手に取るように判ってしまったのだ。

もう一つ理由がある。メディだ。

メディが故郷と思っているギーセンハイムは、ビースマック街道上の要所だ。このままではギーセンハイムが戦場になってしまうかもしれない。それを見過ごすわけにはいかなかった。見ればメディも、あっという間に真っ青になっていた。

「メディ、もう暫く付き合ってもらうからね」

全てを察したルティが、涙混じりにメディに言った。

アービィもティアも、頷いている。

「ありがとう、みんな」

溢れる涙を拭うことなく、メディが答えた。
故郷が戦乱に巻き込まれようとしている。アービィたちにそれを救う義理はないはずなのに、些かの逡巡もなく行くことにしている。
メディには、感謝の言葉しか言うべき言葉は見つからなかった。

第５４話

「俺も行こう。
アービィ殿、嫌は言わせんぞ」
ルムが歓喜に満ちた表情で言う。
いくら政治や商業の中に身を置こうとしても、やはり根は戦士だ。
諍いなどではなく、流血の予感があれば自らの血がそれに近付こうとしてしまう。

「そうは、いかん。
ルムは俺と王都に行ってもらう」
ランケオラータが苦笑混じりに止めた。

それぞれがすべきことは違う。今ルムはビースマックに行っている暇など、ない。
地峡から続く山岳地帯の民のため、自らが属する平野部の民のため、山脈が隔てる中央部の民のため、その両者の間で揺れる山脈の民のため、最北の蛮族のため、全ての北の民のため。ルムは王都エーンベアに行くことが最優先だ。バイアブランカ王と戦うために。
もちろん、その戦いは剣を、槍を、弓を用いて相手を傷付けるための戦いではなく、己が舌が全てを決する戦いだ。

「いや、しかしだな……」
尚も言い募ろうとするルム。

「だめだ」
切り捨てるランケオラータ。

「あたしたちのことならご心配なく。

ルム様には、今すべきことがありますわ」
追い打ちを掛けるようにティアが言う。苦笑混じりのランケオラータの視線を受けてのことだ。
その言葉を受けて、ルムは不承不承だが別行動を受け入れる。

「ティア様がそう仰られるなら……」
つい、うっかり女神扱いの言葉遣いが出てしまい、ルムとティアは慌ててしまい、事情を知る周囲の苦笑いを誘っていた。

「では、ルム様は我々が責任を持って王都までご案内致します。アービィ殿、ビースマックでのこと、よろしくお願いする」
パシュースは今夜中に馬車と腕の立つ御者を用意し、明日の払暁を期してベルテロイを発てるようにしておくことを約束して官舎へと帰って行った。

町々に潜む間諜が替えの馬や急ぎ旅故宿を取っていられない分の食料や水といった生活必需品を用意していること、どこでそれを受け取れるか、路銀の補給といった細々としたことは既に決めてあり、それは御者として同行する配下の者が承知している。
翌朝、いかにも残念そうなルムや、心配そうな表情の伯爵一家に見送られて、アービィたちはシュットガルドへと出立した。ここからは作戦行動として扱われるため、黒幕が判らないようにパシュースには会いに行かない。ほとんどのことは御者が把握しているため、わざわざ会って指示を仰ぐ必要もないからだ。
もちろん、フィランサスもアービィたちのことは承知しており、陰から支援できるようにと密偵を町々を行き来する商人に化けさせて、偶然進行方向が一致した商用の旅人として付かず離れずの位置に付けている。

「あの〜。
さっきから付いてくる人に、野営地に来るように伝えられます？
それか、もうちょっと殺気を抑えてもらうようにでもいいんですけど……」
アービィはフィランサスが付けた密偵の殺気に気付いていた。

ベルテロイを発ってビースマックに入るなり、濃厚な気配が伝わってきた。御者は当然把握していたが、誰が何時から付くかまでは知らされていない。密偵同士顔は知らないが、その纏う気配は承知している。馴染みのある気配を察知すると同時に、申し訳なさそうなアービィがそう言ってきたのだった。

御者は平然を装っているが、内心はかなり驚愕していた。今付いているビースマックの密偵は、気配や殺気の殺し方からしてそれなりの手練れと思われる。一介の冒険者で、その僅かな気配に気付ける者がいるなど信じられなかった。最初は警戒しすぎた自分の殺気が漏れたかと思ったほどだったが、アービィは明らかに違う方向を見ながら密偵の姿形を伝えてきた。おそらく気負いすぎなのだろう。間もなく自国でクーデターが起きようというのだ。いくら手練れの密偵とはいえ、興奮を抑えられないのかもしれない。
とは言ったものの、どうやって他国の密偵とコンタクトを取るか。呼びつけるわけにもいくまい。
御者は考えあぐねた挙句夜を待つことにして、アービィにそのとき呼んでしまえと言った。

夜、ビースマック街道を少し外れた、小さな川の畔に野営地を張る。街道沿いにはちょうど良い野営地が見つからなかったからだが、ここでなら件の密偵を呼びつけても目立たないだろうと御者が考えたからだ。手早く火を熾し、干し肉を炙り、レーションを温める。全員が腹を満たし、緩やかなときが流れ始めたとき、アービィが闇

に向かい手招きした。
闇の中から、いかにもそこら辺にいそうな風体の男が現れる。かなり不機嫌そうな表情だ。

「あの、申し訳ないんですが、もうちょっと殺気を抑えられませんか？」
もう、周囲にバレバレですよ」
アービィがその男に言った。

「いつから気付いていたんだ？」
男は信じられないという表情に変わり、アービィに聞いた。
誰にも気付かれない自信はあった。よほど腕の立つ同業者にでも気付かれない自信だった。アービィに付いた密偵が気付いたのは、予め聞かされていたからということもあるし、暫く後をつけてから腕を見るつもりで少々殺気を向けてみたのだった。

「ビースマックに入って、すぐ付きましたよね。
そのときから」
当たり前のような口調でアービィが答える。

「参ったよ。
気を付けよう」
そう言って男は去っていく。

男が去って暫くしてから、日中よりは遥かに弱い気配を感じるだけになった。
「あの辺りで見張ってるんですかね？」
アービィが御者に方向を指すと、その指した先から驚いたような気配が伝わる。
御者は気付いていなかった。そこら辺で目を光らせているだろう

くらいにしか思っていなかったのだった。

通常であれば、少し戻った辺りにある町で宿を取るのだが、急ぎ旅のため町を無視して進めるだけ進んでいる。エンドラーズのように火の呪文に継続を掛けられるのであれば夜の行進も可能だったが、残念ながらアービィは継続を掛けることはできなかった。馬に付いては、途中の町々に交代用の馬を用意してあるので、潰さないようにだけ気をつければよかった。

残照がある間は進み、完全に陽が沈んだところで野営し、黎明の明るさが感じられたらすぐに出立する。軍の全力行軍、つまり早駆けを続け野営で時間を稼ぐ行軍よりも速いペースで進んでいる。馬の足なので当然といえば当然なのだが、それでも普通の馬車の旅の倍近い速度だ。通常の徒歩の旅で四十日以上は掛かるであろう行程を、十五日以下で踏破しようというのだから、それでもまだ速度を上げたいと感じてしまう。

ビースマックは峻険な山岳地帯が多く、人が居住できる場所は少ない。山間の隘路を縫うように走るビースマック街道は、東西に長いが南北に伸びる支線は少ない。アービィたちの剣を鍛えたグロッソが住むマグシュタットまでの支線のように、数日分の行程を持つものは珍しい方だった。東西に長いといっても国土の東半分近くは、人の居住には向かない山岳地帯だ。

その山岳地帯から産出される良質な鉄鉱石と、量は少ないがこの世界で燃える石と呼ばれる石炭、大量の森林資源がこの国の基礎生産力を支えていた。ほとんど人跡未踏といってもよい山岳地帯にも、細い街道が網目のように走り、小規模な集落と鉱山や炭鉱、木材や燃料に適した樹木を育む森林を繋ぎ、工業原料の搬出道となっている。

この山岳地帯のお陰でビースマックは南大陸の工場としての地位を築き上げたが、平野は狭く人の居住に向いた土地は極端に少なかった。このため貴族が広大な屋敷を建ててしまっては、庶民が住む場所が足りなくなり、領地の生産力が落ちてしまう。こういった背景から貴族と庶民の距離は住居という観点からも極めて近く、それは人としての距離も縮めていた。古代ローマで見られたパトローネスとクリエンティスの関係に近いといっても良かった。

パトローネスに当たる領主たる貴族は、そこに住むクリエンティスに当たる騎士階級以下の領民の様々な相談事を解決し、その見返りに領民たちは貴族の危機が訪れるようなことがあれば、一丸となって難局に当たる。このような伝統が息づくビースマックにおいて、インダミトの一部やストラー、ラシアスの貴族的態度は、庶民からの収奪でしかなく、そのような振る舞いをする貴族はあっといまに騎士以下の領民の流出を招いてしまっていた。それゆえ、貴族たちは、ある意味庶民の顔色を窺いながら領地経営をしなければならず、決して特権階級に胡坐をかいているわけにはいかなかった。

もちろん、ある程度の特権を持つ貴族に面と向かって歯向かう庶民などおらず、領地からの逃亡は無理難題を押し付けられた領民の取る最後の手段だ。つまらない理由で一度領地を逃れてしまえば、他の領地の貴族たちに即回状が回り、どのクリエンティスに入り込むことも不可能だった。つまり、国を捨てるしかなく、領地からの逃亡はそうそうあることではなかった。

もっとも、あまりにも酷い仕打ちに耐えかねた領民の逃亡が、全て門前払いにされるわけではなかった。どこの領地でどのようなことが行われているかは、物流のルートにのって国内にすぐ広がってしまう。他の領主が眉を顰めるような理不尽な領主の行いで逃亡する庶民を助ける領主も多く、元の領主が取り戻そうとしてもカネなりモノで補償するなりして救うことも多かった。そのようにして助

けられた庶民は、新たな領主に忠誠を誓うことがほとんどで、こうして新しいパトローネスとクリエンティスの関係ができあがる。

ほとんどの貴族は領地において善政を敷くしかなく、これが貴族と庶民の距離を縮め、国土に恵まれないこの国を他国から一目置かれる存在に育て上げていた。

だが、こうした距離の近さを快く思わない貴族も少数ながらおり、その中のさらに一部がストラー貴族との姻戚関係を結ぶに至って、庶民への態度に代表される表面的な貴族的振る舞いに憧れを持つようになってしまった。それが今回のストラーの一部貴族と結託してのクーデター計画の主因になっている。

彼らの目から見たビースマックの貴族たちは、庶民の顔色を窺い、その動向に一喜一憂する情けない者たちであり、彼らの理想とする貴族像とは、庶民の上に君臨し、富を一手に集め、豪奢な生活を送るというものだった。

脆弱な老害たちを一挙に葬り去り、若い貴族がビースマックを再生させる。このクーデターは王家への謀叛では断じてなく、君側の奸臣を一掃するための快挙である。彼らはそう信じ込んでいた。

ブルグンデロット王は焦燥感に苛まれていた。ベルテロイに駐在させている三男フィランサスから、クーデターの計画を知らされてから約百二十日、一季節に相当する四ヶ月近い時間が流れている。その間、積極的に内定は進めたが、参画している者の捕縛は控えるように強く上奏されている。

フィランサスからの情報では、王家に直接弓引くものではないと知らされていた。自らの命の危険はないものの、殺害の対象となる者は国の柱石たる宰相を始めとした主要閣僚に、政務参議官と聞く。由々しき事態と言わざるを得ない。これらの人々を殺害してしまっ

て、どうやって国を立ちいかすというのか。その先の戦略が全く見えない。

クーデターを容認などするわけがないが、先々に納得できる戦略があるのであれば、まだ理解はできる。だが、それがないのであればクーデターですらなく、暴動でしかない。そのような者共に政権を預けるほど、ブルグンデロットはそこまでは無能ではない。

ブルグンデロット王は、自らを有能だと思うほど自惚れてはいない。政務、外交、内政、財務といった全てに、閣僚たちの方が豊かな才を示していると自覚している。彼は自分の仕事は閣僚たちがその才を遺憾なく発揮できる環境を整えることと、最終的な責任を全て被ることだと弁え、一切余計な口出しはせずにいた。閣僚たちもその信に応え、十全にその才を発揮していた。

参謀を必要としない指揮官の典型と言われる、インダミト国王バイアブランカの対極に位置する人物であり、それが両者ともが賢王と謳われる所以であった。

その賢王が焦燥感に苛まれている理由は、自らの無力さに起因するものではなく、表立って閣僚たちに護衛を付けられないからだ。フィランサスは宰相ディアートゥス公爵にある程度事を起こさせるよう命じている。先手を打ちすぎては首魁が闇に潜り、以後の再起の芽を残してしまうからだ。王もある程度の犠牲はやむを得ないと考えているが、もちろんそれが少ないに越したことはない。誰一人として替えが利くような人物ではないからだ。

できることなら彼らの屋敷を十重二十重に警護の兵で取り囲み、逆臣の兵を迎え討ってやりたい。だが、そのようなことをしてしまえば、首魁のみならずクーデターグループ全てを闇に逃すことになる。今できることは、屋敷の使用人に王家直属の影の者を紛れ込ませ、警護の戦力を底上げするくらいのものだ。

クーデターグループがガーゴイルを持ち出してくることは判っているが、閣僚たちの屋敷周辺から石像の類を全て撤去させることも、計画を察知したことを悟らせてしまうため実行に移せない。近衛第一師団はいつでも王都全域を掌握できるように、展開の準備は整えてあり、非番の者も自宅待機を命じてある。もちろんクーデターなど察知していないという風を装うため、通常の王城警護と訓練に勤しんでいるように見せかけている。

打てる手は全て打ち、あとは迎え撃つだけだと泰然としているべきなのだが、どうしても立ち後れてしまうことへの不安は打ち消すことができない。自分の安全は間違いないが故に、閣僚や参議官の一人でも殺されたり傷つけられたらと思うと、居ても立ってもいられない。

しかし、フィランサスと宰相ディアートゥス公爵に全てを任すと決めた以上、ブルグンデロットにできることはなく、結末がどうなろうとそれを受け入れる覚悟を固めるより他はなかった。

フィランサスからは、閣僚たちや参議官の夫人のうち他国出身者を一時的にベルテロイに避難させるため、腕の立つ冒険者を派遣したので便宜を図るようにと手紙が来ていた。王はディアートゥス公爵に諮り、クーデター決行の前夜にディアートゥス公爵邸で晩餐会を催し、その闇に紛れて王都を脱出させることにした。殺害対象にされている政務参議官ブレヘリー公爵家の次男ハラ・ジャードニー・ブレフェリーがクーデターグループに名を連ねているため、防諜の観点から異例の当事者間での口頭による招待と応諾が行われた。

ディアートゥス公爵は使用人に目立たぬように晩餐会の準備を進めるように命じ、招待を受けた者たちには当事者以外には、たとえ家族といえど予定を話すことを禁じた。誰の家族にクーデターグループが紛れているか、全てを洗い出せたわけではないからだ。閣僚や参議官たちは、平静を装い政務に励みつつも、家族まで疑わなけ

ればならない事態に呻吟した。妻に子女を連れて避難してもらいたいとも思うし、ブレヘリー公爵家の例もあることからどこから情報が漏れるか判らないため、無邪気な子供にすら疑心暗鬼にならざるを得なかった。子供が積極的に情報をリークなどするはずがないとは思うが、ベルテロイに行くなどと言えば、珍しい玩具や知的好奇心を満たしてくれる書籍が手に入ると、はしゃぎ回ってそこら中に言って歩くのが目に見えている。かと言って真実を告げれば、精神的に未熟な子供たちが挙動不振に陥るだけならまだしも、重圧に押し潰されかねない。

殺戮の現場に妻子を残すことを良しとしない一部の政務参議官は、国外に脱出させるのではなく領地へ逃すことを検討していた。だが、いかにも急いで逃がすことは、クーデターグループに悟られる危険性が高く、どのような口実を付けるかで頭を悩ませていた。既に目端の聡い者が、領地に残っている父の急病を理由に領地へ妻子を送り出しており、この手は使えなくなっている。同時期に何ヶ所でも急病が発生するなど、流行り病か酷暑の夏でもない限り余りにも不自然だからだ。

クーデター決行まであと五日と迫った夜、王都シュットガルドにある公爵家の大邸宅で、三人の男たちが額を寄せて話し込んでいた。

バグルス・レイオカ・アディポサリ公爵は先代王の庶子で、現王ラーゴグランテ・ウェンディロフ・リシア・ブルグンデロットの異母兄だ。先王の正室には長く嫡子が生まれず、側室が産んだバグルスが長らく第一皇太子の地位にあった。しかし、バグルスが１３歳の時、待望の嫡子が正室に生まれ、ラーゴグランテがそのまま王位を掻っ攫っていってしまったのだった。その後、新興公爵家として王家直轄領から生活するには充分すぎるほどの領地と王の政務特別補佐官の地位を与えられ、国内ではそこそこの経済力を持つ貴族と

なっている。

今、ラーゴグランテにもしものことがあった場合、バグルスの王位継承権は第四位であるため、王家の男子を皆殺しにでもしない限り王位は転がり込むことはない。フィランサスを暗殺することは、ベルテロイに混乱を引き起こすことになり、マ教から目を付けられることによる不利益のほうが大きい。即疑われることはないにせよ、他国にフィランサスを暗殺する理由が全くないこと、同時に王や他の皇太子を殺してしまっていては、誰がやったか大々的に発表するようなものだ。

そのような国とまともに付き合うような他の三国家ではなく、ビースマックを孤立させるだけの結果になる。食料の生産力に劣るビースマックが、一国では立ち行かなくなるのは目に見えており、そのような形で国を乗っ取っても少しも利益がない。そう考えたバルグスは、クーデターグループにカネを出すと同時に、成功の暁には宰相か財務卿の座を要求していた。

宰相として国に君臨して王から実権を奪い取るか、財務卿として蓄財に励んで豪奢な生活を取るか、彼はいまから夢に溺れている。

バルグスの召集に応じて深夜に公爵邸を訪ねていたのは、クーデターグループの首謀者であるネオラン・ローグス・キリンドリクス男爵と、政務参議官ブレヘリー公爵家の次男ハラ・ジャードニー・ブレフェリーだった。もう一人の中心人物であるタニエ・ペルヴィカ・プルケール男爵は、偶然自邸を訪ねてきた内務卿アークアタ・アトロペル・ソナータ公爵の嫡男イリデッセントに足止めを喰らっており、今夜の謀議には参集することはできそうもなかった。

キリンドリクス男爵は成功の暁には宰相の座を、プルケール男爵は軍務卿の座を欲している。ハラは責任などというものは一切無用で豪奢な生活を送れたらそれでよかった。そのためには閣僚などという面倒ごとには巻き込まれずに、領地の増大と非常勤の政務参議

官の座、そして給金の大幅な加増を求めている。

「計画が漏れているなどということはないだろうな。
今更後へは退けんのだぞ」
アディポサリ公爵が小心者の表情を歪め、二人問う。

「ご安心を、公爵様。
誰にも気取られてはおりませぬ。
あの無能者共が、我等が計画に気付くとは、とても思えませぬ」
ハラが自信満々に答える。

「然様にございます。
万が一、気付いたとしても、我等が崇高な計画を邪魔立てできるとは、とても。
それどころか、雪崩を打って我等に付き従う者が出ましょうぞ」
どこから出てきた自信なのか全く解らないが、キリンドリクス男爵も追随する。

「まあ、よい。
近衛第一師団の取り込みはどの程度進んでおるかの？」
公爵は王都を掌握できる軍事力を持つ、近衛第一師団を恐れていた。
近衛第一師団をクーデターに参加させるか、最悪でもこの動きを封じることができれば、成功の可能性は飛躍的に上がる。

「はい、近衛第一師団は殿下が掌握しております故、全軍を寝返らせることは無理かと存じますが、一部はこちらに」
キリンドリクス男爵が答える。

「あと、気になることは勇者とやらだが。

北の大地から戻った後の足取りは、インダミトにでも行っておるのか？」

これも重要だと言わんばかりに、公爵はハラに視線を向ける。

「はっ。

勇者の足取りはベルテロイから途絶えておりますが、おそらくはインダミトに向かったものと思われます」

ハラは推測でモノを言っている。

間者をベルテロイに送り込んではいたが、フィランサスに簡単に狩り出され、動きを封じられていた。

少しでも謀略戦の心得があるならば、間者からの報告がなくなった時点で消されたことを疑い、新たな間者を送り込むのが常道だが、残念なことに彼にそのような心得はない。

「そうか。

監視の目を緩めるでないぞ。

勇者などがこの国に入り込んで、王が助けでも求めてみろ。

クーデターなど簡単に潰されかねん」

公爵は、勇者を手駒に加えようなどとは思っていなかった。

小心の成せる技ではあったが、自らより力を持つ者を引き込んで、のちのち立場をひっくり返されるなど真っ平だったからだ。ラシアスでの一件は、当然公爵の耳にも入っている。国家が抱き込もうとして無理だった者を、一介の公爵家が扱いきれるものではないことは、考えるまでもなく判っていた。

おそらく、不必要な正義感を持つ勇者は、王家から救援の依頼があれば、それを受けるだろう。万が一にもビースマックに入るようなことがあれば、即消すように密偵には命じてある。

「もちろんでございます。

街道沿いにはガーゴイルの他、優秀な密偵を配しております故、

もし入り込んできてもすぐに捉えることも難しくはありますまい」
ハラが答えた。

ハラにしてもキリンドリクス男爵も、今ここにはいないプルケール男爵にしても、アディポサリ公爵のことは全く買っていなかった。スポンサーとして利用しているだけで、クーデターの最中にドサクサで消えていただく予定だ。小心者で猜疑心の塊のようなこの人物は、事が成った後禍根となって残るだろう。下手をすれば計画を実行した自分たちを、消しに掛かってくるかもしれない。そのようなことになる前に、舞台からはご退場願うことに彼らは決めていた。ハラは、ストラーのヴィングストニー男爵から供与されたガーゴイルの全てを、アディポサリ公爵に見せていない。いくつかの型があるガーゴイルのひとつだけは隠してあり、これは既に公爵家の周辺に巧妙に隠してあった。

「すべて抜かりはないようだな。
では、後は実行に移すのみ。
これから計画が動き出す直前まで、会わぬほうが良いだろう。
連絡はそれぞれの密偵を使うこととしよう。
では、今夜は計画の成功の前祝だ」
公爵は二人を食堂に誘い、庶民が一生働いてもグラス一杯分すら飲めそうもない、高級な蒸留酒の封を切った。

ギーセンハイムに到着したアービィたちは、メディと別れ宿を取った。
積もる話もあるだろうし、三人水入らずで過ごさせてあげたかったからだ。

「寂しいわね。いいことなんだけど、やっぱり」

ルティが鼻を鳴らしながら言う。

「そうよねぇ、今の今まで、ここにいるのが当たり前だったもんねぇ。

また、三人に戻るのかぁ……」

目を真っ赤にしたティアが相槌を打つ。

毎日が楽しいだけではなかった。苦しい日々もいつも隣にいたのだ。もちろん諍いもあったし、口を聞くことすらない日もあった。それでも半年以上の時間を共に過ごした仲間と別れるのは、心安らかなことではない。

「なんか、嫌そうじゃない、ティア。

その言い方」

ルティが聞き咎め、わざと意地悪く突っ込みを入れた。

「二人に当てられ続けるのが、ね」

ティアもわざと意地悪く言い返す。

「口が悪いわね、後天性年齢過多」

ルティが言い返す。

「口が減らない子ね、先天性胸部未発達症」

ティアも言い返す。

エーンベアの武器屋で交わした、逢って間もない頃の会話を思い出し、二人は噴き出した。

「なんか、懐かしい言い回しね。

これからも、よろしく。お二人さん」

ティアが涙混じりに二人に言う。

どうも最近涙腺が緩くなったわ。人との付き合いが長くなったか

らかしらね。

アービィは、言葉が出てこない。

これで二度と会えないわけでもないし、明日にはまた会えるのに、その後にある別れは避けようもないことが解っている以上、寂しさを隠すことはできなかった。ビースマックに来れば、いつでも会える、そうは思っていてもやはり寂しかった。

かなり以前から解っていたことなのに、いざその時が来てみたら寂しくてしょうがないのだ。黙ってグラスを呷るだけだった。

そこへ二人の会話が聞こえ、つい吊られて噴き出してしまった。

「ありがとう、二人とも。
しんみりしてる時じゃないよね」
アービィは二人の気遣いに感謝した。もっとも、ルティもティアも気遣いなどしていなかったのだが。

「でさぁ、さっきからそこで見てる人。
表へ出てもらえるかな」
アービィが珍しく喧嘩を売るような行動に出た。

ルティとティアの顔色が変わった。まだアービィの目は正気を保っているが、アービィから喧嘩を仕掛けるなど今までなかったからだ。突然のこと過ぎて原因が解らない。敵意や害意は伝わってきていなかった。それどころか店は満員の客で溢れかえり、特定の人物がこちらを見ていることに気付いてもいなかった。

二人が止める間もなく、一人の男の顔面を鷲掴みにしてアービィは店を出た。

「さて、吐いてもらいましょうか」
アービィは言葉こそ荒げていないが、男の頭蓋が砕けそうになっている。

「どうして黙ってるんですか？
ギーセンハイムに入ってから、ずっとつけてきてますよね？」
男の身体から力が抜けつつある。
答えろと言われても、これでは無理だ。

アービィは、この男から発せられるねちっこい殺気に苛立っていた。ギーセンハイムの門を潜って以来、ひと時も離れることがなかった。おそらくはクーデター派の間諜なのだろうが、それなりの手練れなのだろう、ルティはおろかティアすら気付いていなかった。
ルティもティアも手元にいる以上危害を加えさせるようなことはないが、メディが心配だった。いっそ化け物の状態になっているのであれば、危害を加えようとしたものを石にしてしまえばいいので安心だが、今は人間の姿のままだ。どうやらアービィの動きを封じるために、三人のうち誰かを人質に取ろうとしているようだった。
ルティとティアに手を出す隙がない以上、メディを狙ってくるのは明らかだ。あの夫婦の家に護衛ができるような兵がいるはずもなく、かなり危険な状態といえた。

突然、アービィに体当たりをかました人影があった。弾みで掴み閉めていた男の顔から手が離れる。
人影は二つあり、ルティとティアだった。

「なにやってんのよっ！！
殺しちゃうでしょっ！！」
ルティが制止し、ティアが男に『治癒』を掛ける。

受けたダメージが深すぎたのか、アービィの指が食い込んでいた傷は治ったが、意識までは戻っていない。

「理由は後。
とにかく乗って」
周囲に人影がないことを確認し、アービィは獣化した。

――ティア、ティアラ付けといて。あと、『催眠』って、効果は単体？　面？
『催眠』の効果の確認は、対人の呪文ではあるが、指向性があるのか、仕掛けた範囲一帯の人全てに効果があるのかを確認したかった。

「分ったわ。
アービィがそこまで慌ててるなんて、メディね？
『催眠』は単体よ」
ティアがラミアのティアラを髪に飾りながら答え、アービィの背に乗った。

「後で正座ね。
メディが無事だったら勘弁してあげるけど」
ルティも状況を推測できたのか、アービィの背に乗る。

一気に建物の屋根まで駆け上がり、通りにいる人々に姿を見られないようにして、メディが帰っている夫婦の家まで駆け抜ける。途中、急ぐ余り二人が振り落とされそうになり短い悲鳴を上げてしまったが、気付く者がいたとしても狼の姿を認める前にアービィは駆け去っていた。

夫婦の家は明かりが落ち、一見平和な眠りに包まれているように

見えた。だが、アービィには闇の中で息を潜める悪意の塊が見えていた。

メディは生まれて初めて、家族の団欒というものを知った。アービィたちとの旅では、仲間というものの温かさを知ることができたが、さすがに団欒とまでは無理だ。

北の大地に住んでいた頃に家族はいたが、生きることで精一杯の生活は、団欒と言うにはほど遠いものだった。それでも父が獲物を抱えて帰って来られた日に、家族で火を囲んでいるときに感じる安心感と安らぎは、何にも代え難い大切なひとときだった。

それがこれからは毎日ある。明日食べるものの心配をする必要もなく、義父が危険に毎日曝され無事帰ってくるか心配する必要もない。家ではいつでも義母が笑みを湛えて家事に勤しみ、メディを慈しんでくれる。さっきまでの夕餉には、楽しげな笑い声が絶えることはなかった。

夫婦はアービィたちを夕餉に招待したがったが、固辞されてしまっていた。しかし、それは三人水入らずで過ごせるようにとの気遣いということは理解できたので、感謝の意を伝えるに留まっていた。明日こそは、「家族」の恩人にきちんと礼をしたいと思っていた。

偶然というか、偶々というか、ラミアのティアラという魔装具を持っていたことで、メディを人の姿に戻してくれた。それだけに留まらず、北の民への偏見が強いラシアスにある火の神殿まで連れて行き、治癒師として生きていく術まで与えてくれた。そして、途方に暮れていた自分たちまで救ってくれた若者たちに、どうすれば恩を返すことができるか、夫婦は思いも付かなかった。

既に春になり、火を入れることのなくなった暖炉の前で、夫婦はメディの冒険譚に耳を傾けていた。彼らにとって改めて宣言するま

でもなく、メディは娘だった。その娘が人に助けられて火の神殿まで行ってきたというだけではなく、北の大地にも渡りインダミトの貴族を救出して凱旋してきたうえ、北の大地と南大陸の手を繋ぐことまで成し遂げようとしてきたことに、夫婦は誇らしさで一杯だった。同時にもう二度と危険なことには近付いて欲しくないとも思う。身勝手と言われようと、娘を二度も失いたくなかった。

メディもその気持ちは痛いほど解る。メディにしてみても、両親を二度も失いたくはない。アービィたちと別れることは身を切られるような痛みを感じるが、それ以上にこの夫婦、いや、両親を悲しませたくはなかった。

笑いながら、ときに心配げな表情でアービィたちとの冒険譚に耳を傾けてくれる二人を見て、寂しさを安心感が包み込んでくれるのをメディは感じていた。

突然居間の扉が開け放たれ、手に剣を携えた五人の男たちが乱入してきた。メディは反射的に椅子を蹴って立ち上がり、手近にあった酒の入ったグラスを一番近い男の顔面に叩きつける。怯んだ男から剣をもぎ取り一閃するが、すんでのところで避けられてしまった。

直後に身構えたメディが見たものは、夫婦を背後から固め、その喉元に短刀を向ける男たちの投降を促す視線だった。

悔しさに表情を歪めたメディが剣を床に叩きつけたとき、背後の窓から衝撃音が響き、続いて夫婦の様子に異変が起きた。

後ろ手に固められ、喉元に刃を向けられた状態で眠れるはずなどないにも拘わらず、二人は深い眠りに、それも恐怖で失神した様子もなく穏やかな表情に変わり落ちていった。

精霊魔法に強制睡眠の呪文はない。夫婦の様子と状況を理解したメディの口元に浮かんだ凄絶な笑みに、男たちが訝しむ。

次の瞬間、リーダー格の男は強烈な睡魔に襲われた。仕事の最中に、それも極度の緊張感と、これから目の前の少女を陵辱できるという邪な興奮の中で、眠気など感じるはずはない。だが、その疑問に答えを出せる前に、男の意識は安らかな眠りの中へと溶け込んで消えた。

他の闖入者たちが、もがきながら崩れ落ちたリーダーに動揺していたとき、窓を潜り抜けたアービィが夫婦を抱えた男二人の間に飛び込み、二人の喉を両の手でそれぞれ締め上げ瞬時に意識を奪う。続いて部屋に滑り込んだルティとティアが夫婦を確保し、残った男たちから距離を取った。そのときには、既にアービィが残り二人の男たちに拳を叩き込み、床に打ち倒していた。

「アービィ、頭大丈夫～？」
ルティが笑いを堪えつつ聞いた。

「何、その微妙にムカっとくる心配の仕方……」
言葉とは裏腹にアービィも苦笑いを浮かべ、額をさすっている。

「大丈夫でしょ、頑丈なんだし。
じゃ、ここは任せたわ。」
呆れ顔のティアはそう言って、後始末のために御者を呼びに出ていった。

「助かったわ、みんな。
ありがとう。
でも……
アービィ、頭大丈夫？」

気を失った男たちを縛り上げ、蹴りを入れながらメディは礼と共にアービィに聞く。

「メディまで……」

アービィはいじけていた。

酒場から夫婦の家まで一気に駆け抜けたアービィの目には、窓越しに室内の様子が遠望された。ティアに夫婦に『催眠』を掛けてもらい、狼の姿を見られることを防いでから突入するなどという悠長なことは言っていられないと判断し、直前で二人を飛び降りさせ、アービィ単身でそのまま窓から突入しようとした。

だが、窓は巨狼が通り抜けるには余りにも小さすぎ、焦りから目測を完全に誤っていたアービィは、盛大な衝撃音と共に家の外壁に激突した。結果的に衝撃音に度肝を抜かれた男たちの統制と動きに乱れが生じ、ティアが『催眠』を詠唱する余裕を作り出していた。

その間に獣化を解き、慌てて着替えてから室内に飛び込み、男たちの無力化に成功したのだった。

両親に手を出した男たちには殺してしまいたいほどの怒りがあるが、今は堪えるべきだ。なぜ、このような行動に出たのか、尋問してからだ。さすがに殺すことは躊躇われるので、ティアが戻ったらティアラを借りるくらいにしておこうかしら、とメディは考えている。

アービィがリーダー格の男を叩き起こし、椅子に座らせた。尋問しようとしたが、『催眠』の効力が持続しているのか、まだ目を覚ます気配がない。アービィが絞め落とし、打ち倒した男たちも同様に伸びており、こちらは物理的なダメージが大きい分時折痙攣まで

していて、尋問など無理そうだった。

「ティア、ティアラを貸してくれないかな？」

しばらくして御者を連れて戻ってきたティアに、御者には聞かれないようにメディが言う。

「だめよ、あなたが考えていることは判る。

でも、それをしたらご両親が悲しむわ。

止めておいて」

ティアは貸す気などさらさらない。

いくら化け物になっているとはいえ、メディはもともと人間だ。もう戻れないとは言っても、人間だ。そんな真似はさせるわけにはいかなかった。

今は怒りが勝っているが、いずれ平静を取り戻した際に良心の呵責に苛まれてしまうかも知れないし、なにより両親が悲しんでしまう。結果的に男たちを始末することになるとしても、それはその道の専門家に任せるべきだった。

インダミトの間諜である御者にしてみれば、ビースマックの間諜の情報を得るいい機会だ。ただ殺してしまってはもったいなさ過ぎる。それはアービィたちをつけてきた、フィランサス直属の密偵にしても同じことだ。敵対勢力の情報が労せず手に入る。普段であれば敵同士のはずの二人の間では、既に話は付いていた。御者としては男たちをインダミトに連行したかったが、今はクーデターの情報を得る方が優先される。今夜一杯は預からせてもらうが、夜明け前にはフィランサスの密偵に、男たちを引き渡す約束になっていた。大きな貸しを作れたということで、今回は手打ちにすることになったのだった。

『誘惑』を掛けて聞き出し、後で記憶を消してしまえば、この一件はなかったことになり、後は泳がせておけるし簡単だった。だが、さすがに御者の前でラミアの妖術を使うわけにはいかないので、尋問は御者に任せることにした。しかし相手もプロである以上、そう簡単には口を割らないと思われる。

口を割らないのではないかという点と、このまま消してしまえばクーデター発覚を悟られるのではという点を御者に聞いたところ、インダミトでは捕虜にした間諜の尋問には特殊な薬を用い、自殺を防ぐと共に抵抗を封じることができるとのことだった。マ教が邪教に認定しているある宗教では、巫女が降霊術を行う際にトランス状態になるために、植物から採取した向神経系薬を使う。インダミトの諜報機関では、これを精製してマイナートランキライザーに相当する抗不安薬を作り出し、自白剤として用いていた。

重要機密であり、非人道的なことなので、詳細を説明することはしなかったが、拷問しなくても尋問でき、記憶も消せるとだけ説明し、御者は男たちを馬車に押し込み、何処かへと消えていった。

ふと見るとメディが浮かない顔になっていた。

「どうしたの？」

心配げな表情で、ルティが聞いた。

「うん、私がいると……

両親が危ない目に遭う……

やっぱり、消えちゃった方が…いいのかなって……」

肉体的なダメージはなかったが、精神的に打ちのめされたメディが呟くように言った。

「そんなことは、ない。
安心しなさい、メディ」
いつの間に目を覚ましていたのか、ルティと同時に夫婦が言った。
三人の言葉は、全く同時に異語同音に重なった。

「ルティ……
お父さん……？　お母さん……？」
メディは絶句していた。

あのような生命の危機に陥った後だ。メディといることへの恐怖が上回ってもおかしくない状況だった。ところが、両親は迷うことなくメディに安心するようにといった。一瞬の逡巡でもあれば、メディは消えることで安心できた。だが、両親の迷いひとつない言葉は、メディの打ちのめされた心を優しく包み込んでいた。
涙が滂沱と溢れ、言葉が出てこない。母に抱きついたメディを二人は優しく抱きしめ、髪を、蛇ではなくメディ本来の金髪を、その感触を愛しむように撫で続けていた。

ちょっとだけ鼻声になったティアが、メディに声を掛ける。
「もう、心配ばっかり掛ける子なんだから。
お父さん、お母さんにいっぱい甘えなさいよ。
今までの分、取り戻しちゃいな」

「うん、ありがとう、ティア、みんな。
もう私は迷わないわ。
ありがとう」
ベルテロイに入るときに感じた爽やかな寂しさの中、晴れやかな表情のメディが答えた。

その言葉を受け取るアービィたち三人も、同じ思いだった。

夫婦とメディを残し、翌日の平和な再訪を約して三人は屋敷を出た。

宿に戻った三人は、言葉を交わすこともないまま、それぞれの部屋に入った。

暫くしてアービィの部屋の扉を叩く者がいた。

無言で扉を開けたアービィは、まだ涙が止まらないルティの姿を闇の中に認めた。

部屋に招き入れ、扉を閉める。

「いよいよ、お別れね」

涙を堪えきれないルティが呟く。

ねぇ、ちょっとだけ、いい？　と言って突然ルティがアービィに縋りつく。

二つの影は、そのままひとつになり、闇の中へ溶け込んでいった。

第５５話

一夜が明けた。鳥の囀りが清々しい。

いつまでも出てこない二人を不審に思ったティアがアービィの部屋まで行くと、中からルティの罵声が響いてきた。慌てて中に入ろうと扉に手を掛けると鍵が開いている。そのまま中に入ると、お座りさせられた巨狼に向かって、罵声を浴びせ続けるルティがいた。それだけで、ティアには昨夜二人の間に何があったか、手に取るように解ってしまった。

昨夜、アービィは縋りついてきたルティの髪を撫でながら、暫くは宥めていた。ルティがアービィを見上げ目を閉じたとき、自然にキスできた。いい雰囲気になり、二人とも望んでいたことであったし、そのままベッドに倒れこんだのだが、これからというときにアービィの精神が限界突破し、一気に獣化してしまったのだった。

頭を抱えるティアにアービィの念話が届く。

――呆れてないでルティを止めてよ～、僕だって好きで獣化したんじゃないのに～。

溜息をつきつつ、ティアがルティを引き摺って部屋を出ようとする。

「離してっ、ティアっ。
今日と言う今日は、あのボケをっ！！
……『誘惑』掛けちゃってっ！！」
ルティは混乱の極みか、欲望丸出しの言葉すら吐いていた。

それどころか、うっすらと涙まで浮かべている。

「ちょっと、帰ってきなさい、ルティ。
アービィは、もうちょっとしっかりしなさい。
早く元に戻って、服着て、朝ごはん食べよ。
ね、ルティは落ち着くっ！！」
ティアが二人を宥め、叱咤し、取り成した。

そのままルティを引き摺り、宿の食堂でアービィを待つ。
暫く待っていると、目を真っ赤にしたアービィが入ってくる。ルティはようやく落ち着いたのか、ティアに言った自分の言葉を恥じたのか、すっかり静かになっていた。蒸し返してルティの機嫌がまた悪化しても嫌なので、ティアもアービィも昨夜のことに触れようとはしなかった。

御者は、昨夜早い時間のうちに、捕らえた男たちからギーセンハイムにおけるクーデター支援作戦のあらましを尋問し終わっていた。もちろん一人が捕らえられただけで全てが露見しないように、一人一人が知る情報は限定されている。だが、リーダー格の男がギーセンハイムにおける中心人物であったため、一部を除いての情報を引き出すことができていた。しかし、ビースマック王国の間諜ではなく、アディポサリ公爵家が雇っている密偵だったため、ビースマックの機密に関した情報は引き出すことはできなかった。昨夜の記憶全てを消し去り、再度昏睡状態にしてからフィランサスの密偵に引き渡していた。

フィランサスの密偵は、ほとんど同じような手順で男たちからクーデター支援作戦のあらましを引き出していた。自白剤はインダミトだけではなく、ビースマックでも開発されている。職人気質の国

柄か、インダミトのものよりさらに強力で、後遺症の残らないものだった。どうせ同じ情報を共有することになるのなら、二人の密偵が共同で尋問に当たればよいと思われるが、それぞれ自白剤に付いては国家機密であるため、尋問の場に他国の密偵を入れるわけにはいかなかったのだ。

夜明け前に解放された男たちは、昨夜の記憶が曖昧なまま家路に付く。指令を出していた張本人が記憶を消されていては、周囲にそれを怪しいと思う者はおらず、それを怪しいと思える立場の者は情報の統制のため別行動だった。男たちから引き出された情報を元に、ほとんど全てのガーゴイルの配置とクーデターグループの名簿は暴露された。急遽呼び寄せられたフィランサス配下の密偵団により、グループの人員たちは昨夜の男たち同様の運命を辿り、急速に支援作戦の能力を奪われていった。ガーゴイルを操る役割の者たちからガーゴイル起動のキーワードを聞き出し、町中に隠蔽されたガーゴイルを毎夜起動させては関節等の動きの要の部分を破壊して回る。

アービィたちが王都に到着する頃には、発見したガーゴイル全てが稼動不能になる。全てを洗い出せたわけではないと、希望的観測をすることはない密偵たちだが、それでもほとんどの脅威は排除できたと確信していた。密偵団に狩られたクーデターグループの人員たちは、尋問を受けた記憶を消されており、クーデター決行日まで予定通りの行動を続けることになる。

昼過ぎまで休んだアービィたちは、午後のお茶の時間に合わせてメディィを訪ねた。

この日の朝一番で、メディィたち家族はギーセンハイムを統括する貴族が管理する人別事務所に行き、正式に養子縁組を済ませ、新しい戸籍を得ていた。

メデューサ・ルブロドルッサ。

これが新しいメディの名前だ。メディは家名を持つことになった。

旅の途中では動きやすい服装が優先されたため、メディがスカートやドレスを着ることなど、ほとんどなかった。それが今は、ルブロドルッサ夫妻が選んだドレスを身に纏い、アービィたちを迎えている。金髪がドレスの青に映え、碧眼が見事な調和を見せている。呪詛のせいで16歳で成長が止まったメディは、初々しい雰囲気を漂わせている。思わずアービィは見とれてしまい、ルティに力いっぱい蹴りを入れられる羽目になった。

和やかな雰囲気でお茶の用意されたテーブルを囲み、改めてメディの父となったアギリスから礼の言葉が述べられる。アービィたちにしてみれば、改めてこのような形で言われてしまうと照れること頻りなのだが、さすがにお茶らけた雰囲気にすることはできなかった。メディの母となったサリスは、甲斐甲斐しくアービィたちの世話を焼いている。メディは、昨夜あれからずっと話し合っていたようで、すっかり落ち着きを取り戻していた。

これからのこと、治癒師として開業する場所は屋敷の一部を改装することなどが話題に上り、アービィはメディの生活に心配のないことを確信していた。ビースマックは北の民への偏見が比較的弱い。全くないというわけではないのだが、奴隷として所有していたとしても、重要な働き手として大切に扱われていた。

もし、ルムとバイアブランカの話し合いが上手くいき、北の民との交易が始まれば、一番最初に北の民が市民権を得るのはビースマックだろうと思われている。

メディはそのことを両親に話していた。アギリスは町長の役職でこそないが、ギーセンハイムではそれなりに知れた名家の当主だ。当然領主の貴族とも待ちの運営に付いて話をする機会もある。今後は北の民の名誉回復と、奴隷解放が課題となることは、彼の目には

既に見えている。メディを中心にした北の民のコミュニティができるであろうことも、彼らが街の新しい勢力になることも、それをどうコントロールしなければならないかもアギリスの重要な仕事になる。

いきなり奴隷の立場から開放された北の民が、それまでの恨みを晴らすため暴動を起こさないとも限らない。いくら大切に扱われていたとはいえ、奴隷は奴隷だ。今からその地均しはしておくべきだろう。メディだけが優遇されていると思わせてもいけない。身内びいきは他の嫉妬を呼び込み、余計な亀裂を生じさせるだけだ。さじ加減は難しいが、メディもそれは自覚していた。

晩餐の時間が来ても、使用人がいないルブロドルッサ家ではサリスが準備をしなければ、何もできてはこない。町有数の名家であるが、失意の時を過ごす間、使用人には暇を出してしまっていた。このため、今日はどこかの店を予約するつもりであったが、メディの提案で共同で晩餐の準備をすることになった。

アービィとルティ、サリスが連れ立って買出しに行く間、メディとティア、アギリスが食堂の設えをする。最初はもてなす側が心苦しいといっていたのだが、是非やらせて欲しいというアービィの熱意に負けたのだった。

アービィたちは、ルブロドルッサ家に心から感謝していた。メディの帰る場所を作ってくれたのだ。いくら感謝してもし過ぎということはない。そのせめてものお礼に、今夜の晩餐はもてなされるだけではなく、こちらからも何かできないかと思ったのだった。

ビースマックの料理は、ストラーやインダミトのような食材に恵まれた国々とは違い、食材が不足しがちな風土から、それを解消するための工夫が凝らされている。農地や牧畜に適した土地が少ない

ため、ストラーから食料を輸入しているが、輸送中の鮮度の低下が少ないものが多く、食材のバリエーションはそれほど多くない。また鮮度の低下を防ぐため肉類は生きたまま運ぶことになるため、途中の餌料代などで輸送費が嵩み、他国に比べ少々割高で、やはり種類も少ない。同じ食材が続いても、それらを少しでも美味しく、飽きが来ないように食べるための加工技術は進んでいた。標高が高く寒冷で痩せた土地でも栽培できるジャガイモに似た芋が、この国では主食になっていた。

芋は主食であるためか、然程料理のバリエーションは多くない。主菜の味で食べるため、茹でるか蒸すくらいのものだった。野菜類もキャベツに似た葉野菜の酢漬け、つまりザワークラウトのようなものやピクルスが主流だ。肉類は腸詰にされているものが多く、その種類は豊富だった。また、加工の過程で出る屑肉を、固めて薄く延ばし焼いたものは、労働者の間食として一般的だった。食材の種類が少ないためか調味料は発達しており、食材の残りから様々なソースが作られ、顆粒のスープの素こそフリーズドライ製法が開発されていないため見つからないが、ペースト状に煮詰められたものが瓶詰めで売られていた。

アービィは、ビースマックの料理が元いた世界のドイツ料理に似ていることに気付いていた。世界は違えど風土が似ると食べる物も似るのかと、妙な感心をしていたところだったので、『本場』のハンバーグを食べてみたいと思っていた。屑肉を薄く焼いたものは、肉と塩、少々の香辛料だけというシンプルさで、どちらかというとタルタルステーキを焼いたようなものだった。市場で聞いて歩いたが、肉の繋ぎにパン粉や卵を入れる方法は、まだこの世界ではないようだった。

屑肉とはいえ、痛んだものではあるはずがなく、脂身を適度に含

んだ牛と豚の切り落としを買い込む。玉ねぎに似た野菜はすぐに見つかり、卵と牛乳、そしてパン粉にするためとはいえ少々上等なパンを仕入れる。ソース用にトマトとニンジンのような野菜と小麦粉、バター、牛の骨、その他セロリやエシャロットのような香味野菜数種類を買い込んだ。そして、デミグラスソース似たソースも買い込む。薄く焼いた肉に掛けて食べるのが普通のようだった。

ジャガイモやベーコンのようなものは、各家庭で常備していると聞いていたので、これはルブロドルッサ家にあるものを拝借することにした。

ルブロドルッサ家に帰り、厨房を借りる。既にサリスが塩漬けの豚肉を戻した物を煮込んでいた。アイスバインに似た料理だ。他にも牛のレバーを練りこんだ肉団子を煮込んだものや、肉を薄く叩いて塩胡椒で下味を付けたものが用意されている。おそらくそれに塗すのだろう、溶き卵と胡椒を混ぜたパン粉と、ラードが用意されている。

それぞれ、レバー・クネーデル・ズッペとシュニッツェルに相当する料理だった。

アービィは、玉ねぎを刻み、バターで甘みが出るまで炒め、一度皿に取り粗熱を取る。その間にジャガイモを向いてスライスしたものを水に晒す。ニンジンを細長く切り、面取りしたものを砂糖とワイン、水で茹で、沸騰したところで塩とバターを放り込む。別鍋で玉ねぎとセロリ、エシャロットを炒め、トマトを加えた後、デミグラスソースを鍋に開け、赤ワインを加えて煮込んでおく。

屑肉を叩いて挽肉にし、卵と粗熱を取った玉ネギ、下ろしたてのパン粉と牛乳を加えて粘りが出るまで練りこんだ。練ったパテを両手に交互に叩きつけるようにして成型しつつ空気を抜き、真ん中に凹みをつけてパテを完成させた。

水気が減ったニンジンの鍋に別に茹でてあったレンズ豆を加え、グラッセを完成させる。フライパン二つを熱し、片方でベーコンを炒めて油を出し、そこにスライスして水に晒したジャガイモを入れ、焼き目が付いたところで蓋をして弱火に落す。もう片方のフライパンを熱し、ラードを敷いてからパテを並べ入れ、両面に強めに焼き色を付けてから弱火にして蓋をする。

やがて、両方のフライパンの中身に火が通り、ジャーマンポテトとハンバーグステーキが焼きあがった。

食材の種類こそ少ないが、様々な方法で作られた料理がテーブルに並び、六人の晩餐が始まった。

ルブロドルッサ夫妻は、初めて食べる味に驚き、アービィにどこで習ったのか聞き始めた。もちろん、日本で覚えたとも言えず、いつの間にか思い付いたことにしたが、サリスは作り方を根掘り葉掘り聞き出している。

アービィは夫妻の作った料理が思い通りの味だったことに感動し、忘れかけていた世界を思い出していた。

料理は、人間の味覚はどこでも一緒だった。確かに今まで回った地域によっては、風土によっては苦手な味があったことは否定できない。慣れない食材であれば尚のことだ。だが、それでもどこかで食べたことのある料理がいくつかはあり、そのお陰で極度のホームシックになることはなかった。偶然なのか、必然なのか、前の世界の記憶を失っていたせいか、食を受け入れられたことをアービィは感謝していた。これならルティと一緒にこの世界に骨を埋めることに不安はないね。

話は尽きなかったが、翌朝早くに出立するアービィたちを、メディたちは引き止めなかった。永の別れではない。またすぐに会えるということを言い聞かせるためにも、別れはあっさりとしたものだ

った。

翌朝、御者が操る馬車は、普通では考えられない速度でギーセンハイムの町を出た。

アービィたちがメディの家に寄るということは、パシュースもフィランサスも承知していた。出立時には慌しくて申し出る余裕がなかったのだったが、馬車を通常の三倍のスピードで走らせた結果、一日か二日の余裕ができていた。ギーセンハイムに到着する前に、御者がフィランサスの密偵を通してベルテロイに報告している。ギーセンハイムから土の神殿の町ツェレンドルフまでは、急げば馬車で一日。さらにそこから王都までは、同様に馬車で三日あれば行けそうだった。クーデター決行の二日前には到着できる計算だ。黎明のうちに出発できれば、その計算通りになるはずだった。

フィランサスからビースマックの宰相ディアートゥス公爵を訪ねるように言われており、打ち合わせが慌しくならないように一日くらいは余裕が欲しい。途中休憩もそこそこに馬車はギーセンハイムを遠ざかり、ツェレンドルフへと急いでいた。

当然、時間が合わなければ、ツェレンドルフを通過することになる。ノタータスとの旅のお陰で馬の扱いを覚えていた三人は、御者の疲労度を考え適度に手綱を交代する。御者が仮眠を取り、ルティが手綱を握っている間、アービィとティアは呪文の混合に付いて話し合っていた。

エンドラーズがやったように、『火球』なり『大炎』に、ティアの持つ『持続』を混ぜられないかということだ。元々呪文を維持させるために使われるエンドラーズの『持続』と、性交の継続を目的として肉体と精神に作用するティアの『持続』は、呪文の性質が違

う。それをどうやって混合させるか、かなりの難問だった。
試しにアービィが『大炎』を放ち、その火の玉に向かってティアが『持続』を掛けてみたが、精神を持たない火の玉に効果はなかった。アービィに直接『持続』を掛けようとしても、人狼が持つ呪文への抗堪性がそれを許さず、効いてしまえば性欲だけが突出し、いきなり獣化する危険性もあったため重ね掛けの実験は控えている。
あれこれ話していたが、結局は効果の方向性の違う呪文の混合は無理という結論に落ち着いていたが、アービィは時間短縮のためどうしても諦め切れなかった。

黎明から走り、陽も傾き始めた頃ツェレンドルフの町を通過しようとしていたが、馬が限界のようだった。パシュースが手配した馬車屋で馬を交換し、あと少しだけ走ろうということになった。
町を出て、暫く走ったところで陽が沈み、周囲を急速に闇が包む。この日はどうやらここまでのようだ。
野営に適した場所に馬車を止め、火を熾す。レーションで腹を満たし、翌日に備えそれぞれが夜具に包まったとき、突然アービィが馬車から飛び出した。

そのまま『大炎』を発動させ、火の玉を投擲せずに掌の上に維持している。魔獣かクーデターグループの襲撃かと、全員が身構えていると、アービィはもう一つの呪文を詠唱し、火の玉を前方に放った。地面に落ちた火の玉は、それから暫くの間風に吹かれつつも明るさを維持している。

「できたよっ！！
できた。
『倍力』で火の玉の力を上げてやればよかったんだっ！！」
アービィははしゃいでいる。

さらに一発『大炎』を発動させ、『倍力』を足してから宙に放つと、ゆっくり火の玉が下降し周囲を照らしていた。

「ほらほら、上手くいった～」

また『大炎』を放ち、呪文使用回数の限界まで続けようとするアービィを、唖然として見ているだけだったルティが我に帰って殴り飛ばす。

「何、してんのよ、この、ボケぇっ！！

辺り一面火の海にする気！？

地面に落ちてちゃダメでしょうっ！！

馬だって怖くて進めないわよっ！！」

言われてみればその通りで、アービィから数m離れた位置に八ヶ所の焦げ後ができている。

「う～、ごめんよぉ……

上手くいくと思ったのにぃ～」

確かに、『大炎』にしろ、『爆炎』であろうと、効果の継続時間は数瞬だ。それをまだ数十秒とはいえ光を発し続けられたのだ。大変な進歩といえるが、これではただの環境破壊でしかない。

いかに火の玉を空中に留め、数時間単位で継続させるかだが、はやり桁違いの精神力を誇るエンドラーズならではの技だ。松明を持って先導する手もあるが、馬が怯える可能性が大であり、馬の足に対して余りにも遅すぎるうえ、体力を消耗し翌日の行程に影響が出かねなかった。

電気の利用法がまだ確立していないこの世界では、ヘッドライトに相当するものは松明しかなく、火を恐れる馬が引く馬車では使用できなかった。松根油を利用したカンテラはあるが、とても夜道を照らし通すことなどは不可能で、馬の足では危険を察知したときに

はもう手遅れになってしまう。まさか、御者がいる前でアービィが獣化して馬車を曳くわけにもいかず、現状では夜間の前進は手詰まりとなっている。

それでも全員が眠りに就くまで、アービィはぶつぶつと何かを呟いていた。

近くの森から動物たちが動き出す気配がし始める黎明のとき、アービィたちは起き出して馬車を走らせ始める。

交代で手綱を握り、その間は夜の睡眠不足を取り戻すため、馬車の中ではできるだけ寝るようにしている。それでも不規則な揺れで下から突き動かされていては、満足に眠ることはできなかった。

その行程も、シュットガルドまであと一泊だ。

ディアートゥス公爵は、今までにない焦りを感じている。

目の前にいるフィランサスからの伝達にあった冒険者たちは、まさに疲労困憊の極にあった。そればかりか、腕利きといわれている御者に扮したパシュース直属の密偵も、同じような有様だ。一つだけ安心できるかもしれない根拠は、自分も見知っているフィランサス配下の密偵までが、同様に疲労困憊に態だということだ。よほど急いで来たのであろうことは、想像に難くない。だが、今にも崩れ落ちそうなアービィやルティ、ティアの表情は、これから建国以来の国難に立ち向う身にとって、あまりにも頼りないものだった。

ディアートゥス公爵も当然聞き及んでいるラシアスの一件は、話に尾ひれが就いたものではないかと訝しむのも無理はない。

「さて、勇者殿。

とにもかくにも、ひと眠りされて疲れを癒されてはいかがか？

それでは食事も摂れなかろう。

風呂もご用意した」

ディアートゥス公爵がそう言うと、アービィたちは心底ありがたいという表情で答える。

「はい、公爵様。

立ったままで、本当に失礼で申し訳ありません……

申し訳ございませんが、お言葉に甘えさせていただきます」

それ以上は言葉が出てこない。

今にも、いや、ソファーを勧められても立ったままのアービィたちは、座った瞬間に眠り込みそうだった。

通常、馬車で四十日以上掛かる行程を、途中馬を代え放題だったとはいえ、十三日で駆け抜けたのだ。途中ギーセンハイムで一泊分の休養を取っているとはいえ、疲労困憊になるのも仕方のないことだった。

乾坤一擲の戦いに無残にも敗れた敗残兵のような佇まいのまま、アービィたちは侍女に連れられ部屋に荷物を下ろす。既にそれぞれの部屋には湯が沸かされており、打ち合わせでもしたかのように三人は湯船へと突入した。ルティとティアは、侍女に時折眠り込んでいないか見に来て欲しいと頼み、アービィは部屋に置いてあった砂時計を侍女に渡し、三回ひっくり返して出てきていなかったら、助けて、と情けないことを頼んでいた。

ルティは湯船に漬かりながら、昨夜のことを思い出していた。

ゴブリンやコボルド、リザードマンといった雑魚のような魔獣が、五月雨式に襲撃してきていた。それぞれの群れを撃退することは難事ではないのだが、いつまでも続く襲撃に御者を含む四人の神経は紙やすりで削られるかのように消耗させられていた。結局徹夜のまま馬車を走らせたが、疲れが嵩みすぎで馬車の中で眠ることもできず、一睡もせずに昼頃ディアートゥス公爵の屋敷に到着したのだっ

た。

御者に聞いても、この辺りに野生動物が出没することはあっても、僅かでも知性を持った魔獣は出ることはない。シュットガルドの防備は固く、定期的に魔獣討伐を行っており、知性のある魔獣であれば経験からこの地域の危険性は知っていたはずだ、と言われただけだった。その危険性を知っている魔獣が何故出てきたか。居留地に何かしらの危険が迫ったからではないか。その危険は一体何なのか。そこまで考えたとき、遠くで自分を呼ぶ声が聞こえ、目の前に花畑が広がっていることに気付いた。

「ぶはぁっ！！？
何か見えた！？」
盛大にむせ返り、鼻水まで垂らして苦しむルティに、扉の外から侍女が心配そうに声を掛けてきた。
どうやら完全に眠り込み、湯船に沈んでいたらしい。

「ルティ様、だいじょうぶでございますかっ！？
お気を確かにっ！？」
まともに言葉を返せず、さらに心配した侍女が扉を開けて入ってくる。

「ごめ〝ん〝な〝ざい〝……
ね〝ぢゃい〝ま〝じだぁ……」
なんとか、その後謝り倒して心配する侍女に退出してもらい、後始末をして浴室を後にした。冗談じゃないわ、あんな胸が主張してる子なんかに……

やはりティアも、昨夜の魔獣の襲撃に付いて考えていた。
あきらかに何かに怯えていた。破れかぶれに見えた。進むも敵、

戻るも敵の状況で、少しでも突破の可能性が高い方に賭けたように見えた。何が彼らをそこまで追い詰めたのかが解らない。他の強大な魔獣だろうか。だが、そのような状況の中で、彼らは危険を回避しながら生きていたはずだ。その嗅覚は人間以上のはず。ティアにも覚えのあることだった。ティアは、そのまま思考の海に沈んでいった。

「ティア様、ティア様っ！！
お返事をなさってくださいっ！！
誰かっ！！
誰かぁ～っ！！」

扉の開く音と同時に侍女の悲鳴が聞こえ、ティアは目を覚ました。どうやら目を開けたまま熟睡し、かなりの時間湯船に沈んでいたらしい。

蛇属性のティアは、少々水に沈んでいたところで命に影響などないのだが、普通の人間である侍女がそれを知るわけがない。水死しているのではと思って、助けを呼んでいたのだった。

「あ、ごめんなさい、あたし熟睡しちゃってた？」

目を覚ましたティアが平然と上体を起こした。

その瞬間、ただでさえ恐慌状態にあった侍女の精神は限界を超え、その場に崩れ落ちてしまった。

人が倒れる音に慌てた他の侍女たちが浴室に雪崩れ込んできたとき、ティアは全裸のまま輝くような銀髪から湯を滴らせ、心配そうに倒れた侍女を覗き込んでいた。

アービィは昨夜の魔獣たちの恐怖に歪んだ表情を思い返していた。自分をみる魔獣たちの目は、自分たちが魔獣を見るものと同じだ

った。討伐の対象にしなければ自分たちの暮らしが危険に晒されることは解っているが、彼らも人間を倒さなければ安全を確保できない。魔獣を庇う気は全くないが、人間だけが一方的に善な訳でもないことは、以前から気付いていた。

昨夜襲い掛かってきたゴブリンたちは、何かに追い立てられていたようだった。逃げ道に自分たちがいただけなのだろう。もし違う方向に逃げていたら、あのゴブリンもコボルドも、リザードマンも死ぬことはなかった気がする。刃を向けるということは、命の遣り取りをするという一種の契約で、どちらかが息絶えるか逃げ切るまでは解除されることはない。その契約に則り、アービィたちも魔獣たちも刃を振りたてた。その結果、アービィたちが生き残ったということに過ぎないのだが、どうにもしっくりこないところがあった。

アービィもまた、ルティやティアのように思考の中に沈んでいったが、閉めた扉の向こうから助けを呼ぶ叫び声に現実に引き戻された。

いそいそと服を着て叫び声の方に行くと、ティアが通された部屋の前で侍女たちが大騒ぎをしている。

「どうしました？」

とりあえず一人落ち着かせて状況を聞く。

「あの、ティア様が生き返って……」

大筋をすっ飛ばした回答が帰ってくる。

だいたい何があったか理解したアービィは、どう言い繕おうか頭を抱え込んでしまった。

「とりあえず、放っておいて大丈夫ですから。

あの子、普通の人よりちょっと息が長いんで。

皆さんも、どうかお引き取りいただいて。

後でキツく言っておきます」

無茶苦茶な理論でその場を誤魔化し、とりあえず侍女たちに下がってもらった。

騒ぎを聞きつけたディアートゥス公爵の焦りと不安は、さらに大きく膨れ上がっていた。

「では、よろしいか、勇者殿」

夕食前の穏やかな時間が流れる中、ディアートゥス公爵が言う。

まるでこれから建国以来の国難が、待ち構えているとは思わせない空気だ。

「はい、お陰様で生き返りました」

アービィたちは入浴のあと、公爵が用意してくれた軽食で胃を落ち着けると、夕方までぐっすりと眠らせてもらったのだ。

「本当に生き返った者も、いたようじゃな？」

そう言って公爵は呵々大笑する。

ティアの浴室での話は、あっと言う間に邸内に広まっていた。

目を見開いたまま湯船に沈んだ美女が、突然起き上がり言葉を発する。死霊狩りを生業とする鋼鉄の神経の持ち主でもなければ、驚くなという方が無理な話だ。だが、無類の演劇好きとして社交界に名を知られているディアートゥス公爵は、この一件を劇の鍵として使えないかを既にクリエンティスの劇作家に話していた。

「それはともかく。

フィランサス殿下からは伺っているが、私も立場上念には念を入れねばならんことを理解して欲しい。

諸君らの腕前を疑うことも、職務のひとつだと言うことをね。殿下のご推薦する方々を疑うのも心苦しいのじゃが……ひとつ腕試しをさせていただけまいか？」

初対面以来、アービィたちを信頼し切れない公爵が提案した。

身元は確かだろう。インダミトのパシュース殿下のお墨付きのうえ、ベルテロイからはフィランサス殿下の密偵が目を離していないはずだ。氏素性に高貴さこそないものの、流れの冒険者風情に家柄を求めるなど、ストラーの中央貴族共に自発的なスラム街の掃除を望むようなものだ。

どうやってアービィたちの腕を試すか。武勇伝を聞くくらいで済むなら苦労はしない。ギルドの記録も、ここ久しく受けていないので、ヒドラ殺しの英雄という異名は知ってはいたが、それだけでは心許ない。かと言って、家中の腕に覚えのあるものと立ち合わせて、どちらかがクーデター当日、つまり明後日の払暁に使い物にならなくなっていても困る。

公爵は頭を悩ませた末、剣の技術を見ることにした。即ち、糸で吊るした紙片を剣で切り裂けるかということだ。公爵自身若かりし頃は、それなりの剣客として名を馳せていた。マグシュタットに定住する前のプテリスから、紙を破らずに剣で切り裂く修練を教えられ、苦心惨憺の末何とかこれをものにした経験がある。ただそれだけでは道場剣法とはいえ、充分に実践的な技術だと肌で知っていた。

もう一つ、枠に貼り付けた紙を、こちらも紙を縒り細い棒状にしたもの、つまり紙縒りで突き通せるかというものだ。これは気をどれだけ込められるかが要諦で、一瞬の気迫がモノを言い、突き通そうとする速度が遅ければ、紙縒りは簡単に折れ曲がってしまう。公爵は、この技術をついにものにすることができなかった。アービィたちにとっては、こちらはプテリスから教わっていない未知の技術だ。

公爵は齢六十に喃々としているが、今でも剣の修練は怠っていない。魔獣討伐には先頭に立って剣を振るう。これが貴族としての矜持であり、努めでもあると自覚している人物だった。これらの修練に使う小道具は、改めて作らせるまでもなく作り置きがいくらでもあった。公爵は使用人に命じ、それぞれの小道具を三つずつ広間に持ってこさせる。

アービィたちが広間に入ると、そこには家中の使用人たちが見物に集まっていた。もちろん、今現在作業を抱えている厨房の職人や、ベッドメイクに走り回る侍女たちは来ていないが、庭師や執事といった警護のような荒事も非公式に担当する部署の者は残らず集まっている。

アービィたちは、周囲からの値踏みをするような視線を感じるが、決して嫌な感じはしていない。どの視線もヒドラ殺しの英雄の技を、その眼に収めようと期待に満ちていた。

三人は順番を相談し、ティア、アービィ、ルティの順で行うことにした。やはり、格闘術ではアービィに分があり、変幻な技ではティアに一日の長があるが、剣技に関してはルティが真打だ。

ティアが吊るされた紙片の前に立ち、精神を統一する。紙片の揺れが収まった瞬間、小太刀が一閃され、紙片は千切れ飛んだ。糸からは引き千切られることはなかったが、切断面は拉げており満点とは言いがたいが、公爵は満足げに頷いている。

次いでアービィが無造作に短刀を抜き放ち、右斜め上から左下へと振り抜く。紙片は斜めに切断され、切断面に拉げも見られないが、糸に残された紙片が揺れ動いている。公爵の眉が釣りあがり、かろうじて驚愕の表情になることを抑えていた。

最後にルティが紙片の前に立つ。腰に佩いた剣の柄に手を置いた

ルティの全身から、力が抜けていくのが見ていても解った。数呼吸の後、息を止めたルティが鞘から剣を抜き放つ。流れるような動作で右斜め上から下へ払った剣が、左から右へと水平に振り切られる。その瞬間に紙片に変化かは見られないが、ルティが剣を鞘に戻したとき、紙片は四つに切り裂かれ舞い落ち、糸は微動だにもせず垂れ下がっていた。

広間から大歓声が上がり、公爵は今度こそ驚愕の表情で固まっていた。プテリスが若かりし頃に見せた技と寸分違わぬ見事な太刀筋だった。

続いて紙を張った木枠が三つ、広間に持ち込まれた。障子の桟を大きくしたようなものだ。公式文書を記録するための高級紙より、さらに上質の薄紙が貼られている。その手触りは、ごわごわした羊皮紙よりも和紙に近い。さすが技術の国の面目躍如といったところだろう。アービィはその手触りに、なんともいえない懐かしさを感じていた。

これもティア、アービィ、ルティの順で挑むことにした。

まずティアが紙縒りを手に木枠の前に立ち、呼吸を止めて一気に突き通そうとするが、これは敢え無く紙縒りが拉げるだけだった。

次いでアービィが挑むが、紙縒りの先端が紙を貫通する。だが、僅かに1、2ｍｍ程度貫通したところで、紙縒りの後ろは拉げてしまった。それでも公爵は紙縒りが木枠に張った紙に刺さったというだけで、アービィの集中力の片鱗を見て取っていた。

最後にルティが挑む。先程と同様に呼吸を整え、紙縒りを軽く指で挟んで持つ。息を吸い込み、一瞬で全てを吐き出すような気合一閃、紙縒りが繰り出される。紙縒りの先端が５ｍｍ程度薄紙を貫通し、残りの部分も拉げることなく残されていた。紙に対して垂直に

突き立てられた紙縒りは、広間を吹きぬけた歓声に伴う風に、僅かに揺れている。

公爵は、これで充分、という表情で三人を見ていた。
そこへ、一人の少女が挙手し、公爵に発言の許可を求める。
公爵は少女の意図を察知し、アービィに視線を送った。

パーピャ・ゲッコーと名乗る少女は庭師の一人で、公爵家の警護を担当する影の者だった。公爵からは剣を交える試合は行わないといわれていたが、あれほどの技を見せられては黙っていられない。自分より遥かに技術の高い若者たちに、殺しの技で挑んでみたいと逸る心を抑えられなくなっていた。
公爵が発言を許可し、パーピャがアービィたちの前に出る。

「この度は誠にお見事な技を拝見させていただき、ありがとうございます。
私は、この家の警護を担当しておりますパーピャと申します。
剣士としては皆様に敵いようもありませんが、体術に些かの心得がございまして、是非お立会いを願いたいと存じます」
素直に相手を認め、剣技では敵わないことを口にした。
相手を侮っていては、勝てる相手にも後れを取ってしまうことを、パーピャは知っていた。

「体術ということであれば、僕が」
隙のない動きからパーピャの実力を見て取ったアービィが、それを受諾する。
公爵が困り顔で見ているが、パーピャは意に介さない。

「いつ始めます？」

アービィが問う。

「既に始まっております」

パーピャの影が消えた。

パーピャの作戦は単純だった。

アービィの背後に回り、首を取って落す。所謂チョークスリーパーを狙っていた。

実際の戦いであれば首に巻きつけた左腕で右腕の肘を握り抱え込み、右の掌を後頭部に当て、そのまま左腕で一気に締め上げるとともに、右手で頭を捻り頚骨をへし折るのだが、試合であれば頚動脈を絞めて落すだけだ。

一度体を沈めてアービィの視界から消え、左脇を掻い潜り背後に回る。そこで上体を戻しながらアービィの首に自らの左腕を巻き付けようとする。

その瞬間、アービィの右掌底がパーピャの右顎寸前で止められた。充分に体重の乗せて撃ち下ろされたカウンターの掌底が、そのまま打ち抜かれるようなことがあれば、パーピャの下顎骨は砕け、頚骨は衝撃を吸収しきれずへし折られていただろう。

一瞬で決まった勝負は、当事者以外にはまったく目が追いついていなかった。いや、パーピャ自身も、アービィの殺気に顎を打ち抜かれ、実際にダメージを受けた気がしてしまい失神している。

パーピャの姿が消えたと思った瞬間に、アービィが身体を捻った。次の瞬間には腰を半ばまで落としたパーピャの顎に、アービィの掌が添えられているように見え、そのあとパーピャが崩れ落ちたのだった。

失神から醒める気配のないパーピャが運び出されると、公爵はいつの間にか全身を伝う冷や汗を拭ってアービィに向かってようやく口を開いた。

「お見事。ヒドラ殺しの英雄。そしてアマニュークの英雄殿」

食堂には公爵とアービィたちが向かい合い、和やかな雰囲気を取り戻していた。

食事が運ばれ、アービィたちは凄まじいとしか言いようのない健啖振りを見せていた。今一歩で下品になるところをギリギリで踏みとどまっているその姿に、公爵は柔和な笑みを向けている。無理に貴族のしきたりを庶民に当てはめ眉を顰め嘲笑うような下賤な趣味を、公爵は持ち合わせていない。それでもルティが時折見せる洗練された所作は、後から習い覚えたものではなく、生来の血がさせるものではないかと公爵は感じ取っていた。

「いろいろと手間を取らせて申し訳なかったな、英雄殿。勇者殿と呼ばれることはお嫌であるようだから、こう呼ばせていただこう」

悪戯っぽい笑みを浮かべた公爵が言った。

「はい、それでも大仰過ぎとは思いますが。もう諦めました」

苦笑いとともにアービィが答える。

「では、場所を移していただく。明後日の話もせねばなるまいからの」

一切の笑みを消し、厳しい表情になった公爵は、アービィたちを伴い執務室へと誘った。

嫌味にならない程度の豪奢な装飾品に囲まれた公爵の執務室は、

さぞ気持ちよく仕事が出るであろう環境であり、訪れる人に威圧感を与えることのない趣味の良さだった。

テーブルに就いたそれぞれに、侍女が食後の酒をサーブする。

「ま、軽く嗜みながら。
お気楽にな」

公爵は目だけは笑わせずに、穏やかに打ち合わせを始めた。

テーブルには、ハーミストリアの他、軍務卿と二名の政務参議官の妻の名前が記された紙が置いてある。

明日の宰相邸でのパーティーの後、アービィたちが連れ出す者の名だ。この名を良く頭に叩き込んでいただきたいと公爵は言った。

アービィたちが了解の意を返すと、公爵は紙をすぐに燃やす。

「明晩、この屋敷でパーティーを行う。
その場には、私を含む閣僚と政務参議官全てが、夫人同伴で訪れることになっておる。
英雄殿たちには、パーティー終了時に先程の名簿にあった奥方たちを連れて、この国を出ていただく。
おそらく、途中の襲撃ははぐれ魔獣くらいのものと思われるでな。たいしたことはないじゃろうが、充分に気をつけていただきたい。
そのままベルテロイでインダミトのパシュース殿下の指揮下に入っていただく。
ま、各国まで送り届けろとまでは言わんでな、そこでお役御免になるはずじゃて」

公爵の言葉は、あまりにも簡単に事を纏めていた。

ビースマック出身の妻たちは、この名簿に名を連ねていない。国の恥辱は自らの手で雪がなければならないと考えた各閣僚は、自宅を襲い来るテロリストたちを家族で迎え撃つことにしていた。中に

は妻子を領地や国外に逃している者もいるが、誰もそれを責めるつもりはない。安全の確保に心を砕くことは、決して逃げではないからだ。

アービィたちは、テロリストの掃討に手を貸せないかと申し出るが、それよりも他国から嫁いできた人々を傷付けるわけにはいかないと言う公爵を説得するまでには至らなかった。戦乱とは無縁の時代であっても、貴族たる者いつ何時出会っても剣を取る覚悟はできていた。そして、剣を取る以上は、剣の下に斃れる覚悟もできている。

同時刻、プルケール男爵邸に、キリンドリクス男爵とハラが集まっていた。

「いよいよ、明日だな。準備は大丈夫か、お二方」

プルケールが問う。

「ああ、任されよ。既に各方面への手回しも済んでおる。あとは、一気に片を付けるだけだ」

キリンドリクスが答える。

「公爵も驚くだろうな。決起は、明後日の払暁と信じきっているはずだ」

ハラが歪んだ笑みを見せた。

本来の予定では、決起は明後日の払暁、各閣僚と政務参議官の屋敷を襲撃し、迅速に掃討を行い、夜明けとともに新政権の樹立と王への謁見を求めるはずだった。

だが、偶然なのか計画を察知されたのか、昨日になって明晩に宰相邸で殺害対象の人物全てが集まるパーティーがあるという情報が、カネに困っているところを抱き込んだブレヘリー公爵家の使用人からもたらされた。千載一遇のチャンス到来といえる。ついでにアディポサリ公爵も油断し切っているであろうことから、一緒に始末してしまおうということになった。

急遽町の各所に配してあるガーゴイルの稼動確認に配下の者を走らせたが、どれも時限式ではないため明晩は担当者がキーワードを唱えるだけで済む。

邪魔者となる近衛第一師団も、大隊長一名の他、小隊長クラス数名を抱き込んである。いずれも女や博打で首が回らなくなっている者や、家族に病気の者やカネの掛かる者がいるため日常的にカネに困っている者たちだ。使者がそれぞれの官舎に走り、明晩の決起を伝え、適宜準備は整えられていった。

「それでは、お二方、我らが神に祝杯を捧げようじゃないか。我らが神に栄光を！！」

プルケールが音頭を取る。

「我らが神に栄光を」

二人が唱和し、杯を挙げる。

アービィたちは、ディアートゥス公爵との打ち合わせ終了後、逃走のルートや障害となるものを確認するため、街中を散策に託けて歩き回っていた。三人は無言で、だが、念話で話し合っている。もちろん、ルティから送ることはできないが、アービィもティアもルティが意識を向けてくれれば考えることを思念で拾うことはできた。

城下町を回り、だいたいの街の造りを把握してから、公爵邸から

城門までの最短ルートを検討しながら貴族の居城区まで戻ってきていた。貴族の居住区は、爵位の高い者から王城に近い場所に屋敷を配されている。最外郭は男爵や子爵の区画だ。この辺りに住む者たちは、ほとんど全ての者がより王城に近い場所への転居を望んでいる。

例外は子爵クラスで次期公爵家の跡取りくらいの者だろう。

ふと、アービィが貴族の居住区に入ってすぐに動きを止めた。

ティアもルティも、何も感じることはできない。

――どうしたの？

ルティが思念を送る。

――うん、ちょっと。この道は最短だけど、迂回したほうがいい。

アービィが返す。

アービィは感じ取っていた。

フォーミットで、北の大地で感じた、邪悪な気配に似た波動を。

第５６話

「第二大隊、前へ」

夕刻近く、近衛第一師団の官舎前にある広場に、凛とした声が響く。

第二大隊長フォーライ・ブラキソマが、指揮台の上から号令していた。

「第二大隊は、只今より明後日朝までの夜間市街戦訓練に入る。各中隊は所定の計画通り、シュットガルド市街地各所に展開。追って別命あるまで待機せよ」

ブラキソマの命令に従い、第一から第六までの各中隊が敵味方の二手に分かれ、王城から三本放射状に延びる大通りに沿って展開する。今夜は奇数中隊が守備、偶数中隊が攻撃側になり、模擬戦を繰り広げる。

市街地を見下ろす山を背にした位置にある王城の前に、貴族の居住地区があり、さらにそれを取り巻くように商業地区、その外側に庶民の居住地区が広がり、急峻な山々をその一部に取り込んだ城壁が半円形に市街地を囲んでいた。

夕刻までに市街地を王城から西に走る中央通りには第一中隊、北西に走る北通りには第三中隊、南西に走る南通りには第五中隊が貴族居住地区と商業地区の境界に、それぞれがバリケードを築き上げ、偶数中隊は一度城外に出る。深夜になって、人々が寝静まった頃、偶数中隊が城門から攻め入り王城を目指す。奇数中隊はこれを阻止し、王城を守る。王城の第一門の前に掲げた連帯旗を奪えば偶数中隊の勝利、朝までこれを守り通せば奇数中隊の勝ちである。明るいうちにそれぞれの中隊は所定の場所で、今から行われることに必要な準備を整えていた。

貴族居住地区とそれ以外の交通を遮断したところで、夕刻以降はほとんど問題にならないため、市街に大きな混乱は見られない。運悪く夕方近くに、出入りの貴族の屋敷に行っていた商人が面食らう程度だった。

近衛第一師団は、第二王子パルストリック・マトグロッセ・リシア・ブルグンデロットが師団長を務めている。

ベルテロイに駐在する第二師団と違い、師団長が直接指示することはなく、事実上名誉職だ。実際の指揮は歴代軍務卿の嫡男が執ることになっており、現在はアクロコル・ドニクティス・ロクソゾス子爵がその任に当たっている。第一師団が軍事行動を行うときは、王都に敵が攻め込んできたときであり、もはや国が落ちるかどうかの瀬戸際ということを意味する。それだけに規律や訓練は厳しく、ロクソゾス子爵の力量では師団を掌握しているとは言い難かった。

それでも師団が軍の態を成しているのは、各大隊長がそれなりの指導力を有し、騎士としての矜持がそうさせているからだ。

訓練の申請は各大隊長の裁量に任され、形ばかりの書類一枚でたいした審査もされず、ほとんどフリーパスだった。そのため、夕刻近くになって急に発動した命令を、大隊長の気紛れと感じた兵はいても、異常だと思う兵は極一部の例外を除き存在しなかった。

近衛第一師団第二大隊が王都の要所を確保した頃、宰相ディアートゥス公爵邸に何台もの馬車が滑り込んでいた。貴族居住地の中だけ、それも王城に近い位置を移動していた馬車からは、第二大隊が各所に展開している行動は見えていなかった。

それぞれの馬車からは軍務卿、財務卿、外務卿、内務卿と十人の政務参議官が夫人同伴で降り立つ。和やかな表情で出迎えるディアートゥス公爵に、礼儀正しく挨拶してから邸内に消えていく各人の表情も、穏やかに落ち着いているが、数人の婦人たちは緊張に顔を

引き攣らせていた。

広間には立食スタイルのパーティー会場が設えられ、山海の珍味が所せましと並べられている。暖かそうな湯気を上げるもの、既にこの時期金満家でなくては入手不可能な氷で冷やされたものが食欲をそそる匂いを立てていた。

ディアートゥス公爵が広間の中心に立ち、パーティーの開始を告げると侍女たちが高級酒の栓を抜き、各人に次いで回る。軍務卿ロクソゾス公爵が挨拶に立ち、当たり障りのない話を手短にしてから、乾杯の音頭を取った。

さんざめくパーティー会場のそこここでは、明日への不安やしばしの別れを小声で話し合う夫人たちがいる。その声を意図的に掻き消すように、閣僚や政務参議官たちは必要以上の大声で話し、笑い合っていた。

その頃、アービィたちは屋敷の裏に馬車を置き、いつでも出立できるように待機していた。既に護衛する夫人たちとの面通しは済んでおり、その際にハーミストリアとはレイやセラスの話でしばし歓談している。定刻まではまだ暫くあるため、手持ち無沙汰でいるとパーピャがやってきた。

「アービィ様、昨日は身の程知らずに対し、お相手いただきありがとうございました。

最後に寸止めされたことは、私の未熟を思い知らされました。

私は、アービィ様を絞め落とす気で挑みましたが、遥かに及ばないようです。

次に我が国にお越しになるまでには、もう少し本気で当てていただけるよう努力します」

素直に負けを認め、更なる精進を誓う。

「パービャさん、あまんり卑下しないで。
充分強いと思うよ。
止められたのは、偶々だから。
でもね、試合でも絞め落とす気じゃだめ。
殺す気じゃないと、ね」
アービィがアドバイスすると、何か感じるものがあったか、パービャは深く頷いた。

「どうもありがとうございます。
では、次は殺す気で挑みます。
……
何か、嫌な気配が……？」
パーピャが何かを察知したときには、アービィが身体中から闘気を発散させている。

パーティーが佳境に入る頃、市街各所に展開した各中隊で諍いが起きていた。

「ここを通すわけには参りません。
どうかお引取りいただきますよう、お願い申し上げます」
中央通りのバリケードを守る第三中隊第一小隊第二分隊長が、強引に貴族居住地区に通ろうとする同中隊第三小隊に対し槍を向け、一歩も退き下がるまいと頑張っていた。

「貴官は黙って通せばよい。
小隊長命だ。
抗命罪は死罪だぞ。分っているのかっ！？」
第三小隊長が顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。
それぞれの背後では状況が理解できない第一小隊第二分隊と、第

三小隊が困惑の表情で槍を向け合っていた。

「小隊長殿とは命令系統が違います。
どうしても小官の分隊をどかしたいのであれば、第一小隊長殿を通してご命令をいただきたい」

分隊長は、軍としては至極真っ当な返答をする。
第三小隊は第四小隊と共に攻撃側の突進力を削ぐため、バリケード前面に展開しているはずだった。

言葉に詰まった第三小隊長が歯噛みして悔しがっている頃、第五中隊でも同様の睨み合いが続いていた。

こちらはバリケードの防備に就く第一小隊第二分隊と、前面に展開していた第三第四小隊とが向き合ったとき、異常を察知した第一小隊長が矢面に立っている。

「貴様、大隊長殿のご命令だ。
今すぐ、そこをどけ」
第三小隊長が吼えるが、第一小隊長は全く動じない。

「中隊長殿からは新しい命令は受けていない。
中隊長殿が解任になったならともかく、現状においては貴官を通すわけにはいかん」
こちらも軍として至極真っ当な返答だ。
直属の指揮官が健在であるにも拘らず、さらに上級指揮官がそれを飛び越えて下級指揮官に命令を出すなどということはない。それをしてしまえば、中級指揮官の存在理由がなくなってしまうからだ。

軍の規模が大きくなり、一人の指揮官では戦況全てを見渡すことができなくなってきた現在では、その戦闘規模に見合った判断能力

を持つ者がその場に見合った指揮を執る必要があり、それを無視して上級指揮官が一局面に口を出すようになってしまっては戦局全体を見誤る。

今回の訓練では大隊長は審判の役だ。一小隊の配置に口を出すべき立場ではない。それは各中隊長の専任事項になっているはずだった。第五中隊長は第一小隊長から報告があった、中隊長を無視した命令とやらにきな臭い匂いを感じ、第一小隊長に現地死守を厳命し、斥候小隊に各中隊の様子を探るように命じた。

「埒が明かん。
第三小隊、前へ」
「どかぬと言うなら是非もない。
第三第四小隊、前へ」
中央通と南通りで同様の命令が下された。

「退くなら反逆罪の罪には問わん。
今すぐ、槍を収め、原隊に復帰せよ」
第三中隊第一小隊第二分隊長と第五中隊第一小隊長の警告が、別々の場所でほぼ同時に響き渡った。

同士討ちの危険を孕んで同じ中隊同士がにらみ合う頃、城外ではさらに深刻な騒ぎが起きていた。

「どういうことか説明してもらおう」
偶数中隊を統括指揮する第二中隊長が、自らの指揮下にある第二小隊長と、第四中隊第二小隊長に向かって叫んでいた。

守備側の奇数中隊と違い、進撃予定時刻まですることのない偶数中隊では、烹炊班が炊き出しを始め、通状警備に就く兵士以外は武

装を解き、最低限の装備を身に着けているだけだった。槍やロングソード、盾といった重兵器は、所定の場所に集められ、各自は自衛用の短剣を腰に佩き、鎧もそれぞれの決めた場所に置かれていた。

その状態を第二中隊第二小隊と第四中隊第二小隊が完全武装で取り囲み、通常警備兵を殺害し、残りの将兵に投降を呼びかけていた。

「中隊長殿に恨みなどあろうはずもございませんが、我らが理想のため、今暫くの間ここにて拘束させていただきます」

第二中隊第二小隊長が代表して話し始めた。

「貴様、反逆罪だぞ、これは。
何をしているのか、分っておるのか！？」

第二中隊長が激昂する。

「中隊長殿は、この国の現状をどう思われますか？
庶民をのさばらせ、貴族を貴族とも思わない。
誰のお陰で日々の暮らしが成り立っているか。
誰のお陰で生かされているのか。
それを現閣僚や政務参議官は、まるで庶民の手先のようだ。
貴族は庶民の上に立ち、これを指導するべきだ。
心ある指導者たる貴族の方々が、この国の現状を憂い、行動を起こされる。
我らはその尖兵となり、この国を正道に立ち戻させるのだ」

口髭を震わせ、高邁な理想を語る庶民層出身の小隊長。

「貴様とて庶民だろうが。
その話だと、虐げられる側に貴様はいるのではないか！？」

第二中隊長が冷静に返す。
次の瞬間、彼はあることに気付いた。
狂っている。国軍相討つなど狂っている。爵位に釣られたか……

「小官たちは、事が成った暁には男爵位が用意されております。
そうなれば、中隊長殿とは立場が逆転。
今のうちに謝罪されるならば、暴言はなかったことにして差し上げますよ」
想像通りの言葉が第四中隊第二小隊長から返される。

彼らの瞳には、欲望と、偶数中隊全員の生殺与奪の権を握っていることから来る優越感、そして狂気が浮かんでいた。

同時刻、各奇数中隊が抑えたバリケードの内側と王都を囲む城門の周辺で、石が擦れあう不協和音が響き渡った。何体ものガーゴイルが動き始め、宰相邸や第一師団の官舎、常備軍の駐屯地、治安維持に必要な兵の詰め所、そしてアディポサリ公爵邸に向かって進み始める。
一つ一つの動作はぎこちなく、一つの動作から次の動作に移る速度は遅いが、一つの動作を完成させる時間は異常に早い。極端なコマ送りを見ているかのような動きだ。いつ倒れるかハラハラする動きだが、確実に一歩ずつその距離を詰めていく。

「ルティ、ティア、ハーミストリア様をっ！！
パーピャは公爵様たちをっ！！」
アービィはそれだけを言い残し、屋敷を飛び出して邪悪な波動に向かって駆けた。

ルティとティア、パーピャはパーティー会場に急ぐ。
広間ではパーティーが佳境を迎え、ざわめきに紛れて閣僚や政務参議官たちは、あと数時間後に訪れるはずのテロ対策について話し

合っていた。
そこへパーピャがディアートゥス公爵に、異常事態の報告が届ける。公爵は子細を確認するため、側に控える使用人に外を見てくるようにと、会場の動揺を誘わぬように落ち着き払って命じた。
使用人はウエイターの姿を崩さぬまま広間を後にし、廊下へ出た瞬間に本来の仕事、つまり影としての動作を取り、屋敷から姿を消し去った。パーピャは侍女服のまま公爵の側に付き、袖口とスカートの中に忍ばせた短刀をいつでも抜き放てるよう構えている。

暫くして外を見に行った使用人が、再びウエイター姿で戻り、ガーゴイルの襲撃を公爵に告げた。

「どうやら、パーティーにゲストがいらっしゃるご様子。
奥方様たちには申し訳ないが、ここからは男共が楽しみの時間と相成ります。
どうか、次第の不手際をご寛容下されば幸いにございます。
誓って後日、この償いをさせていただきましょう。
では、これにて、中締めと相成ります。
奥方様におかれましては、これより案内の者が付きます故、その指示にお従いいただきます」
軍務卿夫人とハーミストリア、そして後二名の政務参議官夫人にルティとティアが付き従い、それ以外の夫人たちを宰相家の影の者が取り囲んで広間を退出する。

「さて、どこから漏れましたかな。
ま、犯人探しは無用か。
今は、どう生き延びるか、それが先決じゃて」
ディアートゥス公爵は壁に飾られた剣を取る。

それ以外の者たちは、付き従ってきた従者から、それぞれの剣や槍を受け取った。

「必要でしたら、どれをお使いいただいても構わぬ。
何、実用本位の物ばかりじゃ。
使ってこその剣や盾。
弁償のご心配など、無用！！」
気合い一閃、公爵が剣を振り下ろす。
誰もが公爵が剣の鍛錬を欠かしていないことは知っていたが、これほどの太刀筋とは思っていなかった。

「宰相閣下は衰えという慎みを、ご存じないようですな。
これでは、いつまで経っても若者が育ちませぬ。
いい機会ですから、一度くらい殺されてやっては如何？」
政務参議官ブレフェリー公爵が笑いながら言う。

「手厳しいのう、ブレフェリー殿は。
ま、今回のことを防げなかった無能な老人は、事が終われば引退じゃ。
王に願い出て、蟄居という名の隠居でもさせていただくとしようかの」
ディアートゥス公爵も笑いながら返す。

「宰相閣下、それは困ります。
わたくしなど、まだまだ未熟者。
今暫くはご指導願います。
……親父、まだ枯れちゃ困るんだよ」
四十を目前にして充分すぎるほど政務の経験を積み、次期宰相を今すぐにでも継げるほど有能だが、それ故に自分には国を治める老獪さに欠けることを熟知している嫡男が茶々を入れる。久々の荒事

に若かりし頃の血のたぎりを思い出し、その頃の言葉遣いに戻っていた。

「若造が吹きおるわ。
まだ父は枯れてはおらぬぞ。
どちらが多く石像を壊せるか競争じゃ！！」

年甲斐もなく息子の言葉に乗せられた公爵が吼え、やはり荒事へ期待に血がたぎるか剣を息子に突きつけ、大笑いした。

場が和んだところで全員が剣を、槍を構え、広間の大扉を睨みつける。

次の瞬間、盛大な破壊音と共に大扉が弾け飛び、二十体のガーゴイルが広間に雪崩込んできた。

動きこそぎこちないが、動作の一つ一つの速度を見て取った公爵に、油断はない。ガーゴイルの動きの癖を見切り、隙を突いて間接を狙い剣を叩きつける。ガーゴイルの構造自体はあまり頑丈ではないようで、簡単に腕も脚も叩き落とせるが、痛みも恐怖も感じない石像は、完全に破壊するまでは動きを止めることはない。

片脚を失えば片腕で補い、人間にしてみれば不自然な姿で歩き、両足を失えば両腕で這い寄る。

攻撃も殴る蹴る、体当たりに頭突きと単純だが、岩を叩きつけられるようなものだ。モーションは大きいから動きは読めるが、一動作が一呼吸にも満たないうちに完成されてしまうため、全てを避け切ることができない。一瞬で叩きつけられる攻撃に、閣僚や政務参議官の年齢による体力の急激な損耗が追い打ちをかけ、徐々に劣勢へと押しやられていた。若い政務参議官たちにしても同様で、疲れを知らない無機物と、いつかは疲れが気力を上回る生身の差が顕在化し始めている。ましてや老体を庇いながらの戦闘だ。劣勢は否め

なかった。

パーピャも公爵を援護しつつの戦闘に、次第に無理が出始めている。

刃物を持たないガーゴイルの攻撃は、出血がない分致命傷にはなりにくいが、頭に一撃を食らえば即死しかねない。一撃で死なないまでも、脳震盪でも起こせば、次の一撃がこの世との別れになる。四肢に受ける一撃も、受けどころを間違えれば即骨折だ。骨が折れなくとも鈍い痛みは動きを阻害する。ある意味刃物より質が悪いと言えた。

ガーゴイルが振り下ろす腕や、蹴り抜く脚を受け流す自身の手足は、徐々に打撲によるダメージが蓄積されていく。パーピャに限界が近付いてきた。

ここまで完全に破壊して脅威ではなくなったガーゴイルは、まだ五体だ。あと十数体が暴れ回り、ビースマックの重要人物を襲っている。

老骨に鞭打って戦うディアートゥス公爵は、まだまだ意気軒昂だったが、少しずつだが意志と身体の動きが一致しなくなってきた。それでもガーゴイルの隙を突き、腕を、脚を、首を落としている。

だが、突然剣を取り落とし、その場に立ち尽くす。

背後から拳を打ち込んできたガーゴイルの動きを読み切れず、一撃を食ってしまったのだった。

笑いながら言われた言葉に、今納得し、では一度殺されてみるかと、公爵は心が澄んでいくのを感じていた。

「親父ぃっ！！」

棒立ちになった父とガーゴイルの間に割って入った嫡男だが、攻撃を防ぐには至らない。

このまま、二人纏めて撲殺されると誰もが諦めた。

次の瞬間、破壊音と共に腕を振り上げたままガーゴイルが吹き飛ばされる。

何が起きたか理解できない人々の目に、片っ端からガーゴイルを弾き飛ばし、当たるを幸い牙で噛み砕く巨狼の姿が飛び込んできた。

瞬く間に全てのガーゴイルを完全に破壊し尽くした巨狼は、公爵に一瞥をくれると破壊された大扉から、また姿を消し去った。

公爵はその眼差しから、パーピャはその発せられる闘気から、巨狼の正体を朧気に悟っていたが、その推測を口にすることは永久にないと自身に誓っていた。

アービィは記憶に残る邪悪な波動を感じた瞬間に、屋敷を飛び出していた。偵察のつもりで街を駆け抜け、ガーゴイルが宰相邸に迫るのを確認すると、念話でティアと合流地点を城門の外と相談した後、町中のガーゴイルを破壊して回った。

近衛第一師団の官舎を襲ったガーゴイルを殲滅した直後、ルティの思念が宰相邸の危機を告げてきた。走っても間に合わないと判断したアービィは、瞬時に獣化して建物の屋根に跳び、一気に宰相邸まで翔け抜けた。その途中、近衛第一師団第二大隊が、馬車を抜けさせる予定の大通りで睨み合いを続ける場面に遭遇し、馬車を護衛するルティとティアに安全なところで待つように伝え、自身は宰相邸に突入する。そして、ガーゴイルを殲滅し、宰相とパーピャに視線で後を頼むと告げた後、ルティの元へと飛んだのだった。

馬車で待つルティはアービィの気配を誰よりも先に感じ取り、正体を見せるわけにはいかないと、着替えを入れたバッグを抱えて馬

車を飛び出した。同時にティアは馬車を曳く馬に思念を送り、御者の制御を無視させてアービィが見えないところへと誘う。慌てる御者を誤魔化しつつ、その混乱に乗じてルティが飛び出すのを援護した。

街角の物陰に巨狼の姿を見つけたルティは、バッグを放り投げる。バッグを器用に銜えた巨狼が姿を隠し、ルティはアービィが出てくるのを待った。

「ルティ、中央と南通りが封鎖されてる。どうも、近衛師団の中にも反乱に加わったグループがいるみたいなんだ。北通りから行こう」

アービィが見てきたままのことを言った。

「分ったわ。随分と厄介ね。決起は明日のはずなのに、どこから話が漏れたのかしら」

ルティが同意と疑問を口にした。

「それは公爵様に任せておこう。僕たちはあの人たちを無事ベルテロイまで連れて行くほうが大事だよ」

念話でティアに現在位置を知らせ、拾いにくるように伝えたアービィが答える。

やがてティアが馬を思念で操る馬車が現れ、アービィとルティを拾い、そのまま北通りを目指した。

第一師団官舎は、現在混乱の極みにあった。

反乱を起こしたのが第二大隊全体なのか、一部なのかが分らない。宰相邸を包囲するという第二大隊長の命令が、大隊全体に宛てだと

確認されているためだ。だが、場外では偶数中隊が包囲され、武装解除されている。さらに中央通りと南通りで小隊同士が睨み合っているという噂が流れている。

師団長パルストリック第二王子以下副師団長ロクソゾス子爵、第一大隊長ピラムターバ、騎馬大隊長ジャウー、魔道大隊長ブラキラムら師団首脳は、情報の少なさに有効な手が打てない。迂闊に兵を出し、近衛師団相討つ事態は絶対に避けたい。かと言って噂が真実であれば、このままでは最も恐れる同士討ちが始まってしまう。

第二大隊長が反乱に身を投じたことは確実だが、それ以外に誰が反乱に加わっているかが判然としなかった。そして、現在は官舎で兵装待機している各大隊の誰が反乱に加わっているか、誰もが疑心暗鬼に陥っていた。

そこへ第二大隊第三中隊第一小隊長からの伝令が、息せき切って師団官舎に走りこむ。ここに至って第一師団は動き出す。師団長令ではなく、市街で反乱を起こした第二大隊第三中隊第三小隊と第五中隊第三第四中隊を逆賊と認め、これを討つ正式な第二王子からの命令が下った。しかし、どの大隊も動けない。第二大隊の様子から、部下を信じられなくなっていたのだった。これがクーデターグループの狙いだった。

シュットガルドの混乱は、治まる気配を見せなかった。

アービィたちを乗せた馬車が北通りへ向かっているとき、中央通りでは第三中隊第三小隊を、南通りでは第五中隊第三第四小隊を、それぞれ残りの小隊が包囲している。包囲された側は、貴族居住地区からの脱出者を阻む意図でバリケードを占拠していた。第三第五中隊長が投降を呼びかけるが、小隊長たちは頑として聞き入れない。しかし、兵たちは反乱ということをここに来て理解しており、小隊長の命令と中隊長の命令の間で板ばさみになっている。

城外では、別の混乱が巻き起こっていた。

第二中隊第二小隊と第四中隊第二小隊に、丸腰の兵士たちが踊りかかった。槍や剣で脅していれば、まさか近衛相討つ事態には至らず大人しく投降すると思っていた反乱側の両小隊長ばかりでなく、第二中隊長にも予想だにしなかった動きだった。

丸腰の同僚相手に本気で槍や剣を叩き付けることができない兵たちを、片っ端から殴り倒していく。辛うじて態勢を保っていた反乱側の兵たちも、小隊長の行動に疑問を感じていたためか槍の穂先で突くことも、剣の刃を立てることもせず、自衛に徹していた。それでも騎士へ取り立てるという甘言に釣られた兵の手に掛かり、命を散らす兵士たちが続出していた。

その間に反乱部隊を除く中隊は、急速に武装を整え戦闘準備を完成させていく。一旦偶数中隊全体が戦闘態勢を整えてしまえば、いくら反乱部隊が先手を取っていたとはいえ多勢に無勢だ。場外の反乱は、程なく収束に向かって行った。

騎士大隊長が師団長の許可を取り、市街へと出撃していた。歩兵中心の第一大隊では展開の速度が遅く、対応に遅れが出る危険性があったからだ。騎士大隊は第三中隊からの情報を元に迅速に市街へ展開し、中央と南通りでは反乱部隊へ投降を呼びかける。北通りに急行した騎馬中隊は、そこに展開していた第二大隊第五中隊を拘束し、第二王子からの命令通り、国外脱出するはずの馬車の逃走路を確保した。

アービィたちが北通りまであと少しのところまで来たとき、背後が急に明るくなり、貴族居住区の一角に火の手が上がった。アービィは馬車を戻すように御者に言ってから飛び降り、火の手が上がった方角へ走った。

ハラや、キリンドリクス、プルケールに裏切られたアディポサリ公爵邸には、十体のガーゴイルが突入していた。片端から使用人や侍女を殴り殺したガーゴイルは、状況を理解できず、恐怖に固まるアディポサリ公爵を追い詰めていた。その最中に殴り飛ばされた使用人が廊下の照明に激突し、そのとき倒れた松根油から火が上がった。廊下に倒れた使用人や侍女たちを、生者も死者もひとしなみに盛大な火葬に付しながら、屋敷はあっという間に火に包まれてしまった。

アービィは迷わず火の中に飛び込み、生存者を探して走る。だが、目に入るものは元は人間だったことが辛うじて分るほどに焼き尽くされた死体か、生きながら焼かれ既に手の施しようがない犠牲者ばかりだ。その中でまだ息のある者から、絞り出すような声でアディポサリ公爵の救出を依頼され、アービィはそのまま屋敷の奥へと走りこんで行った。

アディポサリ公爵にガーゴイルの腕が振り下ろされようとした瞬間、アービィがガーゴイルをタックルで吹っ飛ばす。壁に激突したガーゴイルは、そこに人が余裕で通り抜けられそうな穴を開け、そのまま関節が外れたのか動かなくなった。次々に襲い来るガーゴイルは火事の炎に熱せられ、触れば火傷しそうなほど熱くなっている。

アービィは蹴り上げ、掌底を叩き込み、『凍結』の呪文を叩き付け、ガーゴイルを破壊し続けた。

程なく全てのガーゴイルを破壊し尽し、アディポサリ公爵を救出して外へ出るが、公爵は恐怖のあまり口を利くことができないようだった。

屋敷の前で待機していた馬車にアディポサリ公爵を運び込み、第一師団官舎を目指す。同乗している軍務卿夫人からアディポサリ公爵の素性を知らされ、共に国外へ連れて行くわけには行かないと判

断したアービィは、第一師団にアディポサリ公爵の保護を依頼するつもりだった。

第一師団官舎に駆け込んだ馬車から、軍務卿夫人とアディポサリ公爵を背負ったアービィが降り、副師団長アクロコル・ドニクティス・ロクソゾス子爵、即ち彼女の息子を呼ぶように衛兵に告げた。

とっくに国外へ脱出しているはずの母から呼び出され、何事かと慌てて飛び出してきたアクロコルは、アービィが背負う人物を見てさらに慌てて衛生兵と治癒師を呼んだ。

アディサポリ公爵を第一師団に預けたアービィたちは、アクロコルから北通りを確保していることを確認し、来た道を戻っていった。

宰相邸前には第一大隊が展開し、周囲を警護している。アービィたちが馬車を止め、現在の状況を聞いていると、邸内から宰相ディアートゥス公爵が剣を携えて出てきた。

「英雄殿、どうやら反乱は鎮圧できそうじゃ。
どうするかの、もう逃げていただく必要もなくなりそうじゃて」
老いて尚、血気盛ん。先程のダメージは、鍛えた身体からすでに抜け落ちていた。
公爵は楽しそうに言う。
だが、その視線は感謝の光で彩られていた。

「そうですか。
それはなによりです。
宰相のお心遣いにはとても感謝しておりますわ。
ですが、この国難。
夫の側で力にならなくて、何が妻ですか。
私たちは残ります」
軍務卿夫人が一同を代表して答える。

「さようか。
では、そのようになさっていただこう。
そのほうがいい」
公爵は満足げに答え、すぐに北通りを確保する騎馬大隊に馬車の通過がなくなったことを伝令に託して知らせる。同時に早馬を手配し、ベルテロイのフィランサスに反乱鎮圧と、婦人たちの国外脱出の要がなくなったことも知らせる手はずを整えた。

既に中央通りと南通りでも、反乱軍は鎮圧されている。部隊の行動に疑問を持った兵たちが、次々に投降したのだった。第三中隊第三小隊長と第五中隊第三小隊長はかろうじて自決直前に身柄を確保したが、第五中隊第四小隊長の自決は止められなかった。
第二大隊長は行方不明。既に反乱軍の統制は第二大隊長名で行われていたことが判明しており、あれこれ詮索するまでもなく国家反逆罪は明白だった。城外に逃亡した様子はなく、程なく捕縛されるものと見られていた。

「どれ、飲みなおしといこうかの。
いかがかな、英雄殿？」
ディアートゥス公爵が問う。

「はい、では遠慮なく」
アービィが答える。

公爵に付いて屋敷に入る。
カーゴイルが暴れ、荒れ放題に荒れた広間には、主要閣僚たちと政務参議官が車座になって酒を飲んでいた。
ビースマック出身の夫人たちは、ガーゴイルこそ排除したが、街中に反乱軍が溢れている危険性を考慮して宰相邸に留まっていたた

め、夫と共に歓談に興じている。

「まあまあ、あなたたち、何てはしたない！！」

いかにも嘆かわしいという表情で軍務卿夫人が一同を叱り付ける。

普段は優雅な振る舞いを常に意識している友人や、毅然とした態度を崩すことのない夫を含む重要人物たちが、荒れ放題の床を掃除することもなく直接座り込んで杯を煽っていたのだ。額に指を当て俯いた軍務卿夫人に夫であるロクソゾス軍務卿が杯を渡す。

「まあ、そう言うな。
たまにはいいもんだぞ。
祝杯じゃ。
英雄殿も、早く来なされ。
宰相ばかりが武勇伝を聞けたなど、許せん」

すっかり出来上がった夫の姿に、毒気を抜かれた夫人が自棄を起こしたかのように杯を受け取り、一気に煽る。

「英雄殿、旅の途中の楽しみにと思っておりましたが、今から語っていただきますよ」

逃がさないぞ、という意志を込めて夫人がアービィを見た。

アービィたちは、徹夜の覚悟を固めていた。

第57話

フォーライ・ブラキソマ第二大隊長は、プルケール男爵邸で息を潜めていた。

こんなはずではなかったとの思いが強いが、今更やり直しなど無理な相談だった。

同じ思いはここにいるプルケール男爵もキリンドリクス男爵も、ハラも抱いている。

計画通りに事を進めていれば、今頃からガーゴイルと反乱軍が同時に閣僚や政務参議官の屋敷を襲撃するはずだった。各屋敷を襲う事は戦力の分散を招き、アディポサリ公爵の始末も後回しになってしまうため、宰相邸に殺害対象が集まるチャンスを狙って前倒しで決起した結果が、この体たらくだった。

唯一成功したと思われたアディポサリ公爵の始末も、邸宅を焼いて無関係の使用人たちと公爵の家族、といっても夫人と同居していたまだ子供のいない嫡男夫婦だけを焼き殺しただけに終わり、公爵は救助されたうえに近衛第一師団に身柄を確保されてしまっている。公爵の口から自分たちの存在が知らされることは明白であり、同時に自分たちの輝くはずだった未来が失われたことは考えるまでもなかった。

逃亡しようにも、武装解除された反乱軍に身を投じた小隊長が指揮する部隊以外が既に街の要所を固めており、騎馬大隊が捜索を開始している。今できることといえば、捜索の手が伸びてくるのを座して待つか、潔く自決の道を選ぶか、自首するかの三者択一だ。

「良い夢を見させていただいた。

皆様には申し上げたいことは山ほどあるが、事ここに至ってはお覚悟を固められることをお勧めいたします。

では、一足先に失礼仕ります。

お庭を拝借してもよろしいでしょうか？」

ブラキソマは、同僚に捕縛されるなどという屈辱に甘んじる気は、全くない。

家族郎党に類を及ぼさないことだけを考え、自決する決意を固めていた。さすがに神前を血で汚すことははばかられたので、庭で自らの首に刃を立てることにした。せめて最期くらい武人らしくありたい。もし捕縛されてしまったら、これまで築き上げた名誉を眼前で全否定されたうえでの縛り首、つまり異教徒の罪人としての処刑が待っている。

反乱を起こしておいて虫がよすぎるとは思うが、汚辱にまみれる前に武人として死にたかった。

止める者が誰もいない中、ブラキソマは庭に出た。

手入れの行き届いた庭は星明かりに照らされ、平和そのものの佇まいを見せている。

いったい、どこで間違えたのか、ブラキソマは想いを巡らせた。計画通りに事を運ぶべきところを焦ったからか、戦力の集中という欲を出したからか、いやそもそもクーデターなどという大それたことを考えたからなのか。だが、答えが出るはずもなく、もし出たとしてもブラキソマには、もうどうでもいいことだった。

剣を喉に当て、そのまま前に倒れ込む。

一瞬だけ喉に痛みを感じたが、次の瞬間ブラキソマの意識は暗転した。

窓の外から人が倒れる音が聞こえたとき、ディアートゥス公爵家の使用人が息急ききってプルケール邸に飛び込んできた。彼もまた未来を失っていたが、武人の如き潔さなど欠片も持ち合わせていなかった。

殺害対象がまだ宰相邸に全員残り、反乱の鎮圧に祝杯を上げている。起死回生のチャンス到来とばかりに注進に駆けつけたのだった。

プルケールとハラが色めき立つが、キリンドリクスは覇気をすっかり失ってしまっていた。事後に明確なビジョンも持たず、地位とカネだけを求めた下級貴族は、今はもう保身しか頭にない。

「もう逃げよう。

ブラキソマが死んでくれたのだ。

奴に全て押し付ければ、我々は安泰じゃないか？」

キリンドリクスが言う。

「あの卑怯者が近衛師団の手にあるんだぞ、言い逃れなどできるものか。

それより我らが決起を潰せたと信じ切っている者共を一気に討ち払い、そのまま王に謁見してしまえば、近衛師団といえど我らが配下だ。

行くぞ」

ハラが応え、剣を手に取り立ち上がる。

「そうだ。

予定では今からだったはずじゃないか。

まだこの屋敷の警護用にとってあるガーゴイルが残っている。

十もあれば油断しきった者共など、問題にならん。

それに、秘術もあるしな」

「冗談じゃない。

三人でどうしようというのだ？
今は落ち延びることが先決。
ストラーに逃れ、次の機会を創るべきだ」
キリンドリクスは同意せず、二対一に分かれての押し問答が始まった。

「では、後始末は如何致しましょうかな、お歴々」
ディアートゥス公爵が言った。

邸内の後始末を放り出して、外へ飛び出した使用人の行き先を特定し、邸内の様子を探ったパーピャが戻り、公爵に報告する。

「待っていれば、あちらから来てくれるのではないかね？」
内務卿が言う。

「これ以上壊されてはかなわぬがの。
仕方ないか。
己が何をやらかしたか、その身にたっぷりと教えてやらねばの。
国を乱すということが、どういうことか思い知らせてやろうぞ」
顔には出さないが、公爵は激怒している。

「では、近衛第一師団の第一大隊を動かすことはないと？」
師団に名誉回復の機会を与えたい軍務卿が嘆息する。

この騒乱をアナーキストによるテロとして、貴族に犯罪者などいないと言い張るには、第二大隊が起こした騒ぎが大きすぎ、既に庶民の耳に入っている。

「そうしてやりたいのは山々だがの。

ブレフェリー家を潰すわけにはいかんぞよ」
公爵が苦い物を飲み込むように言った。

ブレフェリー家の次男ハラが、この騒乱に一枚噛んでいるどころか、首謀者に名を連ねていることは掴んでいた。それを真っ正直に捕縛してしまえば、一族郎党皆殺しにしなければ治まりがつかなかった。国家反逆罪とは、そういった犯罪だ。

「ひとつ、ここはヒドラ殺しの英雄殿に、正式に依頼をばしようかの」
公爵がアービィを見た。

「宰相、それはなりませぬぞ。
英雄殿の手を犯罪者の血で汚すおつもりか？」
外務卿が気色ばんだ。
そのような非道が許されるはずもない。ビースマックのお家騒動の後始末を、他国の若者に押し付けたとあっては国の名折れだ。

「いやいや、英雄殿にはき奴らがここへ踊り込んだときに捕縛を手伝っていただくだけじゃ。
後始末は我らで付ける」
そう言って公爵は説明を始めた。

被害者と思われたアディポサリ公爵が黒幕ということが、近衛師団での事情徴収で発覚し、アディポサリ公爵はそのまま拘禁している。既に公爵一家は皆殺しになっているため、あとは公爵を縛り首にするだけで済む。残る三人の首謀者たちは、どうせ起死回生を夢見てここに来る。それを捕らえ、暴動に巻き込まれたことにして、あの世とやらに避難していただく。

好都合なことに、パービャの報告ではガーゴイルも連れてくるのかということだ。首謀者三人は、パーティに招待していたことにして、ガーゴイルの手に掛かったことにすればいい。しかし、戦闘の相手が人間だけなら、ディアートゥス公爵たちだけでも充分に対処できるが、ガーゴイル相手では少々分が悪いことは先程の戦闘が証明していた。ここまで死人を出すことなくきているが、最後の最後に出していては画竜点睛を欠くというものだ。

屋敷の警護に就く近衛師団は、反乱者たちを油断させるためもあり、いったん撤収させている。ここまできてカーゴイル相手の市街戦などやらかして、周囲に被害が出てることは甘受できない。

そうこうしているうちに、パーピャが客の到来を告げた。

「どうやら、おいでのようだ。
どれ、もう一汗かくとしますかな。
英雄殿、これは正式な依頼じゃ。
今から邸内に侵入するガーゴイルを、無力化していただきたい。
人間には指一本触れる必要はありませんぞ。
方法はお任せいたす。
報酬の相場が分からんのでな、金貨五枚で如何かな?」

ディアートゥス公爵が、その場にいる全員を見渡しながら言った。

「どれ、明日は身動きが取れなくなりそうですな」

翌日襲ってくることが確実な筋肉痛に、既に表情を歪めた外務卿が剣を取る。

「卿はお若い。
私は明後日辺りかと。
我が家の不始末は、我々に」

苦笑いと共にブレフェリー公爵が槍を取る。

「公爵様、一枚で充分です」

ルティが三人を代表して答え、大扉の左右に進みティアと構える。

アービィは、正面で素手のまま客が現れるのを待っていた。そのアービィにパーピャが近付き、何かを渡した。

「アービィ様、これをお使いになって下さい。

指に填めて握り込めば、拳を痛めることはございません。

アービィ様ほどの拳であれば、岩を砕くくらい造作もないかと」

パーピャが渡した物は、暗器の一種で所謂メリケンサックのような物だった。

アービィは礼を言って、暗器を指に填め、拳を握り込む。それはわざわざアービィのために誂えた思うほど、手に馴染んでいた。

「よいか、始めるぞ」

部屋の明かりを落し、真っ暗になった中にハラの声が低く響いた。

明るいうちに確かめたから間違いはないが、今三人が立っている場所は部屋の床一面に描かれた魔法陣の中心だ。

北の大地に伝わる不死者への転生の秘術。

一度行えば二度と生身の人へ戻ることは適わない、不退転の意志を必要とする外道の邪術。

メディを蛇の髪を持つ化け物にした妖呪と同系統だが、これは術が自らに向くものだ。

「もう後戻りはできないぞ。

腹を括れ、キリンドリクス」

プルケールが叱咤する。

「分っている……

もう後戻りはできないということだな……」

キリンドリクスは怯え切っている。

キリンドリクスの胸中など推し量ることなく、ハラが複雑な呪文を唱え始める。謡うような節回しにプルケールの呪文詠唱が重なった。少しの間を置いてキリンドリクスの詠唱も重なり合うが、彼の声はどこか震えを帯びている。

まだ、ここにいる三人は、誰もこの呪術の成果というものを見たことがない。ただ伝え聞く話では、通常の武器が通用しなくなり、精霊による祝福法儀式済みの武器のみがその身を傷付けることができるという。マ教の法儀式で祝福された武器や、一般に魔性の生物を滅することのできる銀の武器では、この呪術で生まれる不死者を傷つけ滅し去ることは不可能といわれている。

精霊の祝福法儀式は、その手間と費用から手持ちの武器にそれを施す物好きなど、ほとんどいない。これがハラたちの目の付け所だった。

所謂ヴァンパイア等とは違い、陽の光を恐れる必要もなく、にんにくや十字架等の聖印といった弱点もない。流れる水を渡れないという欠点もない。心臓にホワイトアッシュの杭を打たれようと、既に停止している心臓を傷付けられたところで、なんの痛痒もない。せいぜい、物理的な衝撃を受ける程度のものだ。

やがて、低く力強い二人の詠唱と、細く震えがちな一人の詠唱がユニゾンの旋律を重ね合わせ、呪法の祈りが完成する。突然魔法陣が鈍い光を放ち、心臓の鼓動のように光が明滅した。その明滅に三人の心臓の鼓動が同期する。徐々に明滅の間隔が長くなり、ついに

は鈍い光が部屋に充満した。
その瞬間、三人の心臓は動きを停止し、全身の細胞から酸素を求める声無き悲鳴が体中を駆け巡る。痛みとも苦しみとも付かない感覚が消えうせたとき、三人の瞳から光が消えるが、その足はしっかりと床を踏みしめていた。

「成功のようだ」
心底嬉しそうな笑みを浮かべたハラが、二人を当分に見て言う。

「ついに、神の力を手に入れた、ということだな」
プルケールは笑いを止められない。

「なんだ、恐れるほどのことでもないじゃないか。
誰だ、いい加減なことを言いやがったのは」
もっと恐ろしい苦痛を伴うと思い込んでいたキリンドリクスが、拍子抜けしたような表情で笑い始めた。

「行こうか。
まずは、祝杯だ」
ハラが用意してあった杯に強い蒸留酒を注ぎ、二人に渡す。
一気に飲み干した三人は、床に杯を叩き付け、狂ったような高笑いを上げた。
壁に映るはずの三人の影は全く見えず、不死者であることを証明している。
だが、三人は気付いていなかった。砕けた杯の破片に映りこむ姿が、既に腐敗した人の形に変化していたことを。

馬車に積んだ十体のガーゴイルをディアートゥス公爵邸の前で解放すると、ハラを先頭に三人は屋敷に進入する。

逃げ惑う使用人たちを蹴散らし、広間へ突入した。

「ようこそ、我が屋敷に」

ディアートゥス公爵が剣で指しながら言う。

「莫迦息子よ、最早語ることもなし」

ブレフェリー公爵が続く。

「愚弟よ、是非もなし。

兄の手で送ってやる」

リンドリク・ブレフェリー子爵が、怒りを抑えつつ静かに言い放った。

「雁首揃えてご苦労なことだ。

我らがこの国を統べてやる。

安心して逝くが良い」

ハラの言葉が合図になり、全員が戦闘に突入した。

ルティが気合と共に振り下ろす剣が、ガーゴイルの関節部を正確に捉え、腕を、脚を切り落としていく。

ティアの小太刀は腕や脚を切り落とすことはないが、これも関節部を的確に捉えて突き立てる。魔力の流れを切断されたガーゴイルは、その動きを止められていく。

アービィは暗器を填めた拳で、当たるを幸いガーゴイルの身体を打ち砕いていた。

時折ガーゴイルの反撃を受けて体のあちこちに打撃を喰らうが、ティアとルティが素早く『治癒』を唱え、ダメージを打ち消していく。

戦闘開始から十分と経たないうちに、稼動可能なガーゴイルは一体も残っていなかった。

アービィたちがハラの捕縛に手を貸そうとしたとき、ディアートゥス公爵たちは苦戦していた。

相手の動きはそれほど早くない。だが、剣が当たり身体を切り裂いても、槍が身体を貫いても、三人の動きが止まることはなかった。それどころか、傷は見る間に塞がり、何もなかったかのように反撃してくる。

加齢から来る衰えに、軍務卿と外務卿の息が上がり、内務卿と財務卿は剣を杖に片膝を付いている。ブレフェリー公爵親子はなんとか攻撃を凌ぎ、ダメージを受けることはないが疲労の蓄積は馬鹿にならなくなっていた。ディアートゥス公爵ひとりが、相変わらず年齢を感じさせない動きで三人と剣を撃ち合わせている。

傷を受ける心配のないハラたち三人は、防御というものを一切考慮する必要がない。それ故に持てる力の全てを、攻撃に注ぎ込むことができる。日頃の鍛錬とは無縁なハラを始め、三人とも剣技は全く無いに等しいが、防御することなく力任せに叩き込んでくる剣は、それだけでも充分脅威だ。そのうえ心臓が停止している今、全身が酸素の供給を求めて脈拍が上がることも、酸素を送り込むために呼吸が荒くなることもない。淡々と続く剣の嵐は、徐々に生身の人間たちを追い詰めていた。

「貴様、邪法を使ったな！？」

三人に影がないことに気付き、リンドリクが叫んだ。

「もはや、我らは神の域。

無力な人間どもは死ぬがいい。
王もじきに後を追わせてやる」
感情というものを感じさせない、背筋が凍るような声が響いた。
妖呪のせいか、ハラたちの身体は既に人間のそれではなく、声すら変わり始めている。

ディアートゥス公爵も不死者への転生の秘術のことは、話には聞いたことがある。それには気付いたが、傷を付ける手段が無いことにも同時に気付いてしまった。精霊の祝福法儀式を受けた武器など、所有していない。対魔獣ようとしては装飾用の銀の武器があるくらいだが、それでは不死者に傷を付けることなど適わない。完全に手詰まりになってしまい、ハラたちの剣を防ぐことで精一杯だった。

ガーゴイルを片付けたアービィは、ブレフェリー公爵の槍が次男の心臓を一突きするのを見た。だが、ハラは何事もなかったかのように、手にした剣で槍を叩き折ると、無造作に穂先を引き抜いた。傷口から血が噴き出すこともなく、穂先が引き抜かれた傷口は見る間に塞がっていく。それは、アマニュークで目の当たりにした、レイスと同じだった。

「公爵様、僕たちにお任せをっ！！
相手は人間じゃありません。
その剣じゃ無理ですっ！！」
キリンドリクスの剣をアービィは暗器を填めた拳で弾き、ディアートゥス公爵の前に出た。
ルティがハラと、ティアがプルケールと対峙する。

アービィは、風の神殿で祝福法儀式を受けた剣を、キリンドリクスに一閃する。

キリンドリクスの腕が身体から離れ、水っぽい音と共に床に落ちた。瞬く間に腐敗し、鼻を突く刺激臭があたりに充満する。傷口からは腐臭を放つ粘液が流れ出し、キリンドリクスの表情が驚愕に染め上げられ、絶叫の形に口が開かれた。だが、その口から言葉の態を成した声が出ることはなく、人間とは思えない魔獣の咆哮と同じ音が漏れただけだった。

妖呪の完成直前、恐怖から声を震わせたキリンドリクスの詠唱が微妙に効果を狂わせ、不死者にはなってはいたが、人としての理性を徐々に失わせていた。不完全な妖呪は、確かに通常の武器では傷つかない身体をもたらしたが、完全な不死者になることは適わず、死に損ないの魔獣を作り出しただけだった。

既にハラもプルケールも言葉を発することはなく、魔獣の咆哮を放っている。その目には理性の光はなく、ただひたすら破壊衝動に突き動かされルティとティアに剣を撃ち下ろしていた。

アービィが再度剣を一閃し、もう片方の腕を切り落とす。アービィに魔獣をいたぶる趣味は無いが、キリンドリクスの予測不可能な動きに狙いを外してしまった。僅かに残る本能が傷を受ける恐怖を感じさせ、キリンドリクスは屋敷を這い出した。

ルティとハラ、ティアとプルケールの戦いもほぼ同じ過程を辿り、ハラたちは三人ともディアートゥス公爵邸の庭の一角に追い詰められていた。

アービィはレイスのと戦いで得た戦訓から、最後は体内に『猛炎』を叩き込むつもりでいる。さすがに邸内で炎の呪文を発動させるわけにはいかず、この状況はかえって好都合だった。

アービィたちを追って、ディアートゥス公爵たちも庭に出た。公爵は、国の恥辱を自らの手で雪ぐことができない無力感に苛まれていたが、だからといって全てを投げ出す気にはなっていない。攻撃

の手段が無くとも、ことの全責任を取ることでアービィたちの心理的負担を減らそうとしていた。

「英雄殿、全ては我々の不始末。
何があろうと、全責任はこの私じゃ。
一切の慈悲は無用にて、お頼み申す」
ディアートゥス公爵がアービィに伝えた。

「私からも。
ひと思いにお願い致す。
せめてもの親心と思ってくだされ……」
血を吐くような思いでブレフェリー公爵が叫んだ。

「解りました。
お心遣いありがとうございます。
では、決着を」
アービィが答え、剣を構えつつ『猛炎』を発動させる。

「はい、公爵様。
そのお心、しかと」
ルティが答え、剣を鞘に戻し、居合いの呼吸を取る。

キリンドリクスがアービィに突進する。両腕を失ったが、追い詰められた魔獣の本能が、最後の攻撃に転じさせていた。
突っ込んできたキリンドリクスの肩から腹へ剣を叩き付け、開いた傷口に発現させた『猛炎』を叩き込む。身体の内側から焼かれる苦痛にキリンドリクスがのた打ち回る。やがて動きは止まり、身体が焼き尽くされ一握りの灰と化した。

ルティが剣を戻すのを見て、攻撃を諦めたと取ったハラが、ここ

を先途と突っ込んでくる。
　ハラの切っ先がルティに届く間合いに入ると見るや、ルティが気合と共に一歩踏み出し、鞘から抜き放った剣を袈裟懸けに振り下ろす。自ら剣に吸い込まれるように突進したハラの身体が、肩から腰にかけて切断された。
　切り口からは腐臭を放つ粘液が流れ、腰から下の身体が見る間に腐敗する。上半身が腐敗することはなく、ハラは苦痛に動くことすらできない。
　キリンドリクスを焼き尽くしたアービィが、ハラの上半身に『猛炎』を叩き付けた。

　ほぼ同時にティアとプルケールの戦いも、同じような終焉を迎えた。刃渡りの短い小太刀故、一刀両断というわけにはいかなかったが、それが却って嬲り殺しの結末を招くことになってしまった。全身を切り刻まれたプルケールは、その傷口から腐臭を放つ粘液を流しのた打ち回る。
　アービィが止めの『猛炎』を傷口から体内に叩き込み、プルケールも一握りの灰と化す。

　瘴気漂う邸内で、ディアートゥス公爵を始めとした閣僚と政務参議官は、悄然と立ち尽くしていた。誰もが無力感に苛まれ、クーデターを未然に封じた勝利の喜びは感じることはできなかった。全ての民に幸せをと思い国政に携ってきたが、やはり政は難しい。どうしたって不満を抱える者は出るのだ。

「英雄殿、まったくもって申し訳のないことじゃ。
　犯罪者の血で英雄殿の手を汚すことになろうとは。
　どうか、この無能な年寄りが、身を引くことで許していただきたい。

これからは若い者が国を見なければ、昔のようなやり方しか知らん我々では、また同じことになるじゃろうて」
ディアートゥス公爵が閣僚を代表してアービィたちに謝罪した。
そして、今の言葉は政界からの引退宣言だった。

「許すも何も、僕たちが口を出すべきことではございません、宰相閣下。
ですが、閣下が引退などしては、困る方々が多いのではありませんか？」
アービィは、この宰相が無能ではないことを肌で感じていた。
そして、責任は別の形でとるべきではないかと考えている。
それ故か、言葉遣いが政治家に対するものになっていた。

「ここで引退とは、お逃げになるおつもりですか、閣下」
リンドリク・ブレフェリー子爵が言う。

「いや、逃げようなどとは考えてはおらぬ。
だがな、誰かが責任を取らねばならんのじゃ。
それに、私のような政のやり方では、またこのようなことを引き起こしかねん。
やり方を変えねばならんのじゃよ。
それには、君たちのような若い世代でなくては無理だ。
私たちのような頭の固い世代は、もうお役御免じゃろうて、な」
閣僚たちを見ながら公爵が答える。

「それを逃げと申し上げております。
責任を放り出して、悠々自適といく気でございましょうか？
今は後始末を付けることこそ、責任を取るということでは？
そのあとで、いくらでも引退なされればよろしいかと存じます」
切り返すリンドリク。

「屁理屈じゃのう。
だがな、実際に反乱が起きてしまっておる。
どの面下げて王に会えというかね？」
公爵も責任逃れで宰相を辞そうというのではない。
考え付く責任の取り方が、これしか思い浮かばないのだ。
地位やカネに恋々として、晩節を汚す気はない。いや、既に汚れた晩節をさらに酷いものにする気はなかった。

「フィランサス殿下からは、反乱を起こさせるよう命じられていたのではないですか？
であれば、起きたことは必然。
これに責任をお感じになる必要はないと愚考いたします」
リンドリクも重責を押し付けられるのが嫌なのではない。
この国を立て直すためには、まだ宰相の力が必要だと考えていた。
どこに反乱の芽が残っているか、まだ予断を許さない。一気に国内の掃除をするための豪腕は、若いリンドリクたちにはまだない。

「まさに愚考じゃな。
しかし、こうして不満を持った者たちが、ささやかに文句を言ってくるだけならばともかく、国をひっくり返そうとしてきたということはじゃな。
我らの政が不適切ということの証じゃないかね？」
クーデターが起きてしまった事実は変えられない。公爵は、その時に在任していた者たちに国の柱石たる資格はないと思っていた。

「不満なら、私たちも抱いております。
当然ではないですか。現状に満足などしてしまったら、国を良くすることなど到底できませぬ。
あの者たちとて、いえ、庇い立てなどする気は全くございません

が、あの者たちにとってはそれが良いと判断してのこと。
ならば、我らも我らの信じるように、国を良くする努力は放棄してはならないのではございませぬか？
宰相閣下、我ら若い世代も精一杯の努力はいたします。ですが、若さ故に暴走しないとも限りませぬ。理想に走る余り、周囲が見えなくなりかねませぬ。
どうか、我らが充分な経験を積み、舵取りを誤らぬようになるまでは、閣下たちに厳しくご指導いただけますよう、伏してお願いいたします」
リンドリクは決して自分を無能だと思ってはいなかったが、誰一人として不満を抱かせることなく国を治められるなどと思うほど自惚れてはいない。

二人の言い合いに軍務卿と内務教が口を挟む。
反乱を起こした軍の総責任者である自分と、国内の治安を預かる自分が責を負えば全て丸く収まろうと言うのだ。二人とも、宰相を政の中枢から外すわけにはいかないと考えていた。

誰かが責任を取らなければならないということは、リンドリクも承知している。これだけのことを引き起こしておいて、罪人たちを罰するだけでは済まされない。だが、そのせいで宰相の首が飛ぶことは、今は困る。かと言って軍務卿と内務卿に全てを押し付け、宰相には何の咎めのもないということでは、宰相が地位に恋々としていると取られかねない。

ディアートゥス公爵の嫡男も論戦に参入し、若い世代と現リーダーたちの言葉の応酬は、激化の一途を辿り止む気配を見せることはなかった。

第５８話

シュットガルドにアービィたちが到着した翌朝、ベルテロイの駐在武官官舎の一室でインダミト第二王子パシュースは、それぞれの国から派遣された王族武官と相対していた。

「今回の後始末だが、首謀者は国家反逆罪だ。これを縛り首ということは、やむを得ん。甘い処置は次を招くだけだ。だが、一族郎党皆殺しは拙い。王族に手を出していないし、国民を虐殺しようとしたわけでもないからな。せいぜい追放刑だろう」

パシュースがビースマック第二王子フィランサスと、ストラー第三王女アルテルナンテを見ながら言う。

「そうだろうな。特にアルテの方は難しかろう。直接王家に弓引いたわけでもないし、ある意味ストラーの立場を上げるための行動だ。庇う気はないがな」

ラシアス第三王子ヘテランテラが続けた。

フィランサスは、当初皆殺しにする気でいた。下手に残して逆恨みされてもつまらない。王家に直接弓引く真似はしていないが、国の柱石たる宰相を始め閣僚を殺害しようとしているのだ。充分すぎるほど国家反逆罪だ。それも一族郎党皆殺しでも足りないほどの。

だが、計画に関っていたのは、これまでのところどう調べても家長一人ずつだった。家族は全く知っている気配がない。計画の漏洩を恐れてのことだろうが、杜撰な割にはそこだけはしっかりしてい

た。
その状態で下手に一族郎党皆殺しというのは、多少気が引けた。いつまでもそのやり方で良いのかということも、気が引けている原因だ。かと言って追放刑で逆恨みされても敵わない。

フィランサスもアルテルナンテも処遇には頭を悩ませていた。特に国内において全く騒ぎにもなっていないストラーでは、リトバテス公爵以下のグループを死罪にするには少々強引過ぎると取られかねない。

「そこでどうだ、先日引き合わせたルム殿にくっ付けて、北の大地へ入植させるというのは。
もちろん、爵位は没収、もしくは下位のものにする。
うちから出す予定の者より高いと困るからな。
公爵は伯爵程度に、子爵だの男爵は騎士階級にしてくれ」
パシュースは、命を助ける代わりに新天地へ態よく追放してはどうかと言っていた。

暫く考えて、フィランサスとアルテルナンテは頷いた。

「そろそろ出るわ。
どうするか、ちょっと父と宰相に諮ってみる」
アルテルナンテが言った。

明日の夜明け頃、シュットガルドではクーデターが起きるはずだ。もちろん、分り切ったことであり、獲物を罠に引き込むようなものだった。

「じゃ、俺もだ」
フィランサスが続く。

「国境は任せておけ。
とりあえず、あの莫迦女が出てきたらとっちめてやるよ」
ヘテランテラが応じる。

「ここは、任せてもらおう。
まさか、ヘッテの姉御がこっちを抜こうとは思うまいがな」
パシュースが答える。

「すまんな、パシュー。
反乱を起こした連中は、放っておいても勇者殿が始末してくれるだろう。
下手をすると、宰相が後始末の前に親父に自分の首を差し出しかねんのでな。
それを止めんといかん」
フィランサスが言って席を立つ。
それが合図となり、四人の王族武官は、それぞれの役割を果たすべく部屋を出て行った。

まさか、ベルテロイに対して刃を向ける愚か者はいるまい。当面することのないパシュースは自室に戻り、王都に送り出した友に思いを馳せていた。狸と対等に渡り合えるか、それが心配だがランケオラータが付いているし、レヴァイストル伯爵にも言い含めて非公式な顧問として同行させている。
ベルテロイに滞在する間、何度も会談を重ねルムの思考を見て取ったパシュースは、最初こそ蛮族との思いがあったが、私心のないルムに好意を持っている。他の王族武官たちにもルムを紹介し、共同統治機構立ち上げ後の顔繋ぎも済ませていた。おそらく、ビースマックからはフィランサスが、ストラーからはアルテルナンテが共

同統治機構に出てくると思われる。利権確保に二人が乗り出すことは当然といえるが、今はそれどころではないだろうという読みがルムを紹介することを決断させた。間違いなく二人とも国へ戻る。今回の後始末が終わるまでは戻って来られまい。その間に北の大地での利権を確立してしまえば、インダミトに損はない。

ラシアスは問題外だった。彼の国は無理矢理他国と競合してまで北の大地に進出するまでもなく、通行税や関税で充分潤うことができる。また彼の国民が抱く北の民への偏見も、北での商業活動には不都合なことをヘテランテラは知っていた。その偏見が消えるまでには、百年を単位とする時間が必要であろうことも。

それが薄れた頃には、北の大地にラシアスが食い込む余地が残されている保証はない。それは分っているが、現状で北の大地へ積極的に移住しようなどという商人は、リジェスト周辺に極少数いるだけで、他は強制的に放り込みでもしない限り皆無といっていいだろう。利権を失うことも困るが、それで国民の反感を買ってしまっても困る。

だが、国民などというものは勝手なもので、自分は行きたくないが他の三ヶ国が利益を上げているのは許せない、自分たちにも利を、と叫び出すことは火を見るより明らかだ。

ヘテランテラの思惑が、せいぜい他の三ヶ国に交易を頑張ってもらい、南大陸の盾として疲弊した自国にカネを落としてもらう、それに尽きることをパシュースは知っていた。

その頃、インダミトのエーンベア王宮ではパシュースに心配された友が、パシュースの父親と会談を終えようとしていた。

「では、バイアブランカ殿、私が北の大地へ戻り次第、妹のヌミフをこちらに遣します。もっとも生きていればですが。

いろいろとご指導のほど、よろしく賜りますよう、お願い申し上

げます」
　ルムがバイアブランカに向けて頭を下げた。
「その点につきましてはご心配なく。
それより妹君の安否が心配ですな。
今はそちらを優先されてはいかがかな？
当面の取り決めは既に充分。
それに、ランケオラータを正式に派遣しますしな」
　バイアブランカがルムを気遣う。

　ルムが王都に到着してから八日が過ぎていた。
到着が夜になったにも拘らず、バイアブランカは王宮にルムを迎え入れ、手厚く遇していた。
　例え相手が一国の王だとしても、これは破格の扱いだ。陽が沈んだ時点で公式な立場からは離れることが、南大陸では常識だった。執務が長引いて深夜に及ぶことはあっても、公式の会談や謁見が、日没後に行われることはない。晩餐会は公式行事とはいえ、目的が親睦を深めるためのものであり、会談や謁見の後で行われるため、それは例外と考えられている。
　それが日没後にも拘らず、晩餐会ではなく公式な『会談』としてルムを迎えている。『謁見』ではなく、『会談』だ。既にバイアブランカは、ルムを同格の王として遇していた。もちろん、下に見られることでルムの気分を害して交渉を難しくすることのないようにとの策略だが、この若さで北の大地の半分近くを統べる能力に敬意を表してのことでもあった。

　バイアブランカの言葉遣いも、家臣や民に対してのものではなく、一国の王に対するそれになっていた。ルムはその態度に多少作意を感じてしまい警戒心を抱いたが、それでも堂々たる振る舞いを心がけ、バイアブランカに対し一歩も退かぬ気概を見せていた。もっと

も、バイアブランカにしてみれば若者の虚勢にも見えてしまい、微笑ましく感じていたため、ルムの気概が空回りしていたことは否めなかった。

「お心遣い、いたみ入ります。
ですが、あれも北の大地で揉まれた女。
ああは申し上げましたが、そう易々と死にはしないでしょう。
我らも早く、経済という概念を身に付けませねば、バイアブランカ殿の好いようにやられてしまいますからな」
笑いながらルムが答えた。

「これは痛いところを。
こちらとしては、早めに片を付けなければならぬようですな。
ランケオラータ、そちは今から北の民じゃ。
我らが思う儘にならぬよう、気を付けるがよい。
卿よ、諦めてもらうぞ。
跡取りは、先の戦で死んだものと心得よ。
伯もな、娘御の婿は死んだものと思われよ」
バイアブランカがそれぞれに言う。

ランケオラータを付けておけば、他の三国に対する優位は揺るがない。そのためには、多少の知恵を付けてやり、インダミトが対北の大地交易で出血を覚悟で損を取ることは、後々の投資と思えば安いものだ。ランケオラータはルムとの友誼から、精一杯北の民が潤うように振る舞って構わない。
バイアブランカやインダミトの商人たちの手の内をさらけ出すことになるが、いきなり海千山千の商人たちが貨幣経済を持たない未開地に突入したら、あっと言う間に収奪し尽くしてしまう。
もとより商人とはそういたものである以上、それを止めることは死ねと言うようなものだから、バイアブランカとしては止める気な

どさらさらない。また、手加減しろと言われて、損をするためにわざわざ北の大地くんだりまで出掛ける物好きがいるとも思えなかった。

ここは国が損をしておくべきと考えたバイアブランカは、ランケオラータをルムに貸すことにしたのだった。国政の中枢に近いところで父の仕事を手伝って、財務の仕事の経験を積んでいたことで培われた実力は、百戦錬磨とまではいかないにしろ、北の大地をインダミトの商人たちの草刈り場とすることくらいは防げるであろうと期待されていた。もちろん、表立っての行動は極力控え、ルムや北の民の知恵袋としての活動が求められている。自国の商人に敵対行動と受け取られては、暗殺の危険がつきまとうからだ。

「陛下、私は再度北の大地へ渡るつもりでおりましたし、この場でそれを願い出るつもりでおりました。
願ってもないことでございます。
よろこんで行って参りましょう。
そのうえ、陛下との経済戦争。
武人ではございませんが、血が滾ると言うものでございます」
これこそがランケオラータが最も能力を発揮できる分野であり、文官としては男子の本懐とも言えるだろう。
自分の魂が高揚するのを、ランケオラータは感じていた。

「まあ、仕方ございませんと申し上げるよりない、というところでございますな。
跡は次男に継いでもらいましょう。
もうすぐ引退して悠々自適と思っておりましたが、まだまだのようですな」
ランケオラータの父である財務卿ハイグロフィラ公爵は、まだ歳若い次男を思い浮かべ、政務や財務を一から仕込まねばなるまいと

考えていた。

ランケオラータが捕虜になった時点で、次男には跡継ぎになることを告げてある。当人は兄の帰還を心より望んでおり、棚ぼたで家督を継げるようになったことはあまり嬉しくないようだった。もちろん、兄が亡き者となったのであれば、否応なく継がなければならないので覚悟はできているが、やはり兄に生きていて欲しいと思っていた。

「娘は亡き者と考えましょう」

レヴァイストル伯爵の言葉に、全員が驚愕の表情を作る羽目になった。

伯爵は、レイを北の大地へ送り出すことに決めていた。

ランケオラータの決意は、ベルテロイ滞在時に聞いている。その晩、レイからは北の大地へ行く決心を聞かされていた。親心としてはランケオラータとの婚約を解消し、安泰な結婚生活を送ることができる相手を探してやりたかった。当然そこには伯爵家として勢力を伸ばさなければ、という思惑も含まれている。

だが、伯爵は娘の意志を尊重することを決めた。

アンガルーシー子爵夫人としての立場はなくなるが、困難に自ら立ち向う二人には、好いた相手と結婚する幸せがあっても良いと考えたのだ。もちろん、そこには北の大地での権益を得ることができるという打算も、北の大地で初めて根を下ろすことになる貴族としての栄誉も、その領地から上げられる収入がボルビデュス家とハイグロフィラ家を潤すことになるであろうという打算も含まれていたことは否定しない。長女がビースマックに根を張り、次女が北の大地に根を張ろうとしているならば、三女に婿を取って家を発展させれば良い。

「義父上、レイテリアス殿のことは、お任せいただきたく存じます。

この命に代えましてもお守りする所存」
ランケオラータが頭を下げた。

「伯爵殿、私もお約束いたしましょう。
レイテリアス殿の安全は、平野の民の名誉に賭けてお守り致す」
ルムも同様に頭を下げた。

この日までに決められた内容は、互いの通商は基本的に自由。物々交換か金本位の取引が基本だが、北の大地に南大陸の貨幣が浸透するまでとし、極力早く現地で貨幣の鋳造を行う造幣局をインダミトが設置することとした。もちろん、他の三国家の了承が必要なことは言うまでもないことなので、その時点で南大陸の全国家が北の大地で経済戦争に突入することになる。南大陸の商品と北の大地の金を交換し、現地でその金を貨幣に鋳造する。

それで貨幣に必要な貴金属全てを賄えるとは思えないが、鉱脈の存在も確認されているため、北の民を雇って貴金属の採掘を進めれば、南大陸から貨幣の流失を防ぐことはできるだろう。同時に積極的に北の大地内での貨幣の還流を推し進めなければ、南大陸が全ての貴金属貨幣を巻き上げてしまい、南大陸にとんでもないインフレを引き起こすことになる。

商人にそこまで考えて商業活動を行える者がどれほどいるか不明だが、それほど多くはないと思われた。自由に南大陸にカネを持ち帰らせることは危険なので、北の大地から南大陸へいかなる形での貴金属の持込には、高額の関税を設定することにする。

北の大地の購買力が上がり、かつ様々な商品の生産力が上がるまでは、保護貿易の方針を採るしかないだろう。急な経済統合は、両者に混乱をもたらすだけであったし、南大陸の経済力は北の大地を丸抱えできるほど強くはない。

今回のルムの来訪は、ほとんど顔繋ぎのようなものであり、平和的な交易をしようという両者の意志の確認ができればそれで充分だった。

ランケオラータを北の大地に常駐させ、顧問として活用しつつルムには様々な政策を実施してもらう。北の民が潤わなければ南大陸に利益をもたらすことは不可能だし、搾取では現在以上の軋轢を生むだけだ。四百五十年に及ぶ平和の維持は、経済によって戦乱が巻き起こることを防ぐ知恵を、心ある為政者には身に付けさせていた。

「ハイグロフィラ卿の次男が、今日よりアンガルーシー子爵を継ぐがよい。

ランケオラータは子爵ではなく、カトスタイラス候として余に仕えてもらうぞ。

カトスタイラス領は、俸給代わりだ。

代官を派遣して、領地の経営に気を使わなくてよいようにしておく。

税収は、必要経費以外は自由にせよ」

バイアブランカの言葉に目を白黒させる一同。

カトスタイラス領は、然程大きくはないが王家直轄領の一つで、インダミト最南端にある。たいした産業はないが、大陸から船で行き来できる島々は、サトウキビに相当する植物や、バニラが自生していた。これを適正に管理栽培すれば、巨万の富を築くことができる。

バイアブランカは、ラガロシフォンでの経済発展が甘味によるものだと気付いていた。これから新たな産業を興すのであれば、甘味がひとつの鍵になることを見抜き、レイを娶るランケオラータにこの地を預け、国内産業の発展に寄与させるとともに、北の大地での原料の入手を容易にすることにした。

北の大地に貴族制などはないが、インフラの整備のためには関税や通行税などを徴収し、財源を確保しなければならない。当然民からも現代の住民税に相当する人頭税や、所得税なども徴収しなければならないが、今まで税制とは無縁の生活を送ってきた北の民にいきなり馴染ませることは困難だ。

そこで通商で赴く南大陸の住人がある程度投資として負担することになるが、所得税や人頭税が高すぎては誰も住み着かない。いきおい主たる税収は関税と通行税に頼ることになるが、あまり税率を上げすぎては売価に跳ね返ってしまう。

その辺りの調整は、ある程度経済に明るい者でなくては勤まらない。そして、関税や通行税を徴収するには、貴族なりの権力者でなくてはならないが、北の大地には貴族などいない。北の大地をインダミトの一貴族の領地としてしまうわけには行かないが、権力の裏付けや後ろ盾となることはできる。

インダミトの貴族が徴税官を勤め、その税はルムの収入になり、それを使ってインフラを整える。そのためもあってランケオラータが行くのだが、子爵程度では他国が納得しないだろう。ということで、王族しかなれない公爵は無理としても、侯爵くらいにしておかなければ説得力が無いというわけだった。

「非才の身ながら、ご期待に応えられるよう、精一杯努めます」

ランケオラータは、そう言って膝を突いた。

ビースマックの王都シュットガルドでは、宰相ディアートゥス公爵がアービィたちを連れてブルグンデロット王に謁見していた。

結局リンドリク子爵に説得されたというより押し切られた公爵は、今回の一件の後始末が付くまでという期限付きで宰相の座に留まることとした。だが、反乱を引き起こしたという責は誰かが取らねば

ならず、軍務卿と内務卿が、その職務内容から進んで責を負い辞任することになった。その報告と、アービィたちに対する褒賞に付いて王と協議するため、公爵は反乱の会った夜が明けてすぐに王に謁見を申し込んだのだった。

クーデターについて心を痛めつけていたブルグンデロット王は、閣僚や政務参議官に犠牲者が出なかったことを何よりも喜び、宰相の続投は望むことであると告げ労いの言葉を掛けていた。軍務卿や内務卿の辞任は認め難いことではあったが、事ここに至ってはやむを得ないと了承する。後任の人選には充分卿たちの意見を充分反映するようにと意見を付託し、勅旨に署名する。実際問題として、両卿の嫡男はまだ経験不足だ。

新しい血を閣内に導入しても良いが、侯爵級の人間で軍務、財務に明るい人間が見当たらなかった。無能の集団というわけではなく、どの候補者も一分野においては傑出した才を見せるのだが、全体を見渡してバランスをとれるかというと、得意分野に偏りがちになるという欠点が見られたのだった。

王は、両卿の嫡男に継がせ、院政を敷かせるつもりでいた。

細々とした後始末は午後の会議で決めるとして、今は目の前にいる若者たちに対する褒賞に関して頭を悩ませていた。

国を救った功績は、どう評価してもしすぎるということはない。本来であれば、侯爵の地位ですら足りないほどだ。王は、当初侯爵の地位と直轄領の分領を以って、若者たちに報いるつもりで謁見前に宰相に打診していた。アービィたちも自分たちを国に縛り付けるためではないと感じていたので、無碍に断ることは躊躇われたのだが、結果的にビースマックに縛り付けられてしまうことには変わりがないため、心苦しくも断ることを宰相に伝えている。

では、どうしたものか。王はアービィたちを前に考え込んでしま

っていた。

実際のところ、アービィたちにしてみれば、パシュースからの依頼で動いていたのであり、ベルテロイに戻れば報酬を受け取ることができるし、昨夜公爵から金貨一枚でガーゴイル退治を追加で引き受けていた。その後不死者と化したハラたちを倒したことに付いては、公爵から追加料金として金貨五枚を打診されていたが、金貨一枚で手を打っている。

つまり、これ以上褒賞をもらう謂れがなく、既に王からの感謝の言葉で充分だといえた。現実問題として、黙っていれば分らないことではあるが、ここで褒賞という形で報酬を得てしまうと、依頼に対して二重に報酬を受け取ることになり、パシュースに対する不義理となってしまう。ストラーで家を貰ってしまったときは、完全にその点に付いてうっかりしており、あとでニリピニ辺境伯に謝罪していた。もっとも、孤児院にするという形で手放しているうえ、ニリピニ辺境伯もそれについて問う気はなかったので何の問題にもならなかったのだったが。

以上のことをブルグンデロット王に説明し、これ以上の褒賞を辞退した。いくら王から黙っていれば分らないとは言われても、どこからか話は漏れるものであり、後にしこりは残したくはない。アービィたちの国籍は、今でもインダミトである。自国の王族に対し不義理を働くわけにはいかなかった。

「陛下、一つお願いがあるのですが」

アービィがおずおずといった。

「なにか。

遠慮などする必要はないぞ。

申してみよ」

ブルグンデロット王が答える。

「反乱の首謀……いえ、被害者が不死者に転生したという場所を見てみたいのですが。

まだ、破壊はされていませんか？」

どうやら昨夜アービィが感じた邪悪な波動は、プルケール邸から発せられていたものらしい。

アービィは、フォーミットや北の大地の避難小屋で遭遇した邪悪な気配と、昨夜の波動に同じものを感じたことが、気になって仕方がなった。

もし、現場がまだそのままで維持されているのであれば、その場に行ってみたい。もしかしたら自分がこの世界に召喚されたときに、それを邪魔して人狼に変化させられたことと何かしらの関係があるのかもしれなかった。

「そのようなことに興味をお持ちか？

構わぬ。

まだ捜査の途中であろうからな。

宰相から口を利いてもらえば、何の問題もなく入れるだろう」

勇者とは、思わぬものに興味を持つものだと感心やら呆れの感情を抱きつつ、ブルグンデロットは許可を出す。

「ありがとうございます。

それでは国に帰る途中、寄って参ります。

王様、これからもお元気で」

アービィが挨拶し、王の下を辞去する。

「うむ、気を付けて帰られよ。

また、いつでも来られるが良い。

ビースマックは、いつでも勇者殿を歓迎するぞ」

いかにも残念そうにブルグンデロットは見送った。

臣下に欲しいという気持ちも強かったが、それは叶わないようだ。大いなる自由人たちは、一つの国などという小さな籠に押し込めるべきではない。そうブルグンデロットは感じており、それが羨ましく思えていた。

プルケール邸に到着したアービィたちは、御者に待つように頼み、ディアートゥス公爵に書いてもらった許可証を門兵に見せてから場所を聞いて邸内を進んだ。

邸内の奥まった部屋のそれはあった。

入り口だけで窓の無い部屋。照明も携帯式の燭台のみのようで、今もそれに火が灯されていた。

床には不気味な文字がちりばめられた魔法陣が描かれ、周囲には砕けた杯の破片が燭台の火を受け、鈍い輝きを見せていた。

この部屋に来るまで、捜査に派遣された兵以外に人は見られず、当主を失った家族や使用人たちは、王宮にある拘留房に拘禁されたらしい。アービィがいくら世事に疎いとは言え、国家反逆罪を犯した者の家族がどのような末路を辿るかくらいは知っていた。

良くて服毒による自決。もちろん表向きは急死とされるが、それでも家族郎党が一斉に急死するのだ。数日のラグを置くとはいえ、世間に対し見せしめといっていることは明らかだった。だが、これはまだ寛大な処置であり、家族が全く知らないうちに計画が進んでいたときくらいのことだ。普通は、一族郎党全て公開処刑。王宮前の広場で、関与が甘いものは断頭台、関与が深いものは縛り首だ。もちろん、斬り落とされた首や吊るされた死体は、腐乱するまで放置。そのままゴミとして処理される。

プルケールとキリンドリクス両男爵の家族が、どれほど計画に関与していたかは知らないが、昨夜宰相邸に姿を見せていないことから、ほとんど知らなかったのではとアービィには思われた。それがいきなり朝になって、当主の罪状で王宮に引っ立てられている。身に覚えの無いことで断罪されなければならない恐怖を想像し、アービィはせめて死罪にならないようにして欲しいと上奏すべきかと考えていた。

アービィは、しゃがんで魔法陣の線を手でなぞる。今は邪悪な波動を感じることはない。

どういう関係かは分らないが、あのフォーミットでちらりと影だけ見えた魔術師が関与しているのではないかと思われた。確たる証拠や根拠は無いのだが、なぜかアービイはそう確信している。

ひと廻りなぞり、起点に戻る。続いて内側の線をなぞり、書かれている文字をなぞる。微かに記憶にあるルーン文字と梵字に似ている二種類の文字が、おそらくは図形として描かれていた。もちろん、アービィが召喚される前の世界にあったルーンや梵字とは違うものだ。

全ての文字をなぞっているアービィは、特に意味があってしていたわけではなかった。ただ、なんとなく見てみたかっただけだし、そのままの勢いでなぞってみただけだった。

全ての文字をなぞり終わったとき、アービィは魔法陣の中心に腰を落としていた。

その瞬間、魔法陣が不気味に鳴動を始め、明滅を繰り返す。ハラたちが不死者に転生したときと同じ明滅だった。

不意に邪悪な波動を感じたアービィが、部屋の中にいた全ての人たちに避難を促し、自分も魔法陣を出ようとしたときそれは起こっ

た。

爆発するような勢いで魔法陣が発した閃光にアービィが飲み込まれ、ルティが悲鳴と共にアービィの手を引こうと魔方陣に手を伸ばす。だがルティの手は魔法陣の周囲に出現した見えない障壁に阻まれ、まるで感電したかのような衝撃にルティの身体が弾き飛ばされた。突然の衝撃に意識を失ったルティをティアが抱え起こそうとしたとき、ルティを助けようとしたアービィもまた、見えない壁に弾き飛ばされていた。

光が消えたとき、魔法陣の中で倒れたアービィは、ピクリとも動かなくなっている。実際には数秒程度の間だったが、ティアには数時間にも感じられた。

ルティの悲鳴を聞きつけた兵が駆けつけたとき、アービィとルティが倒れた横でティアが完全に取り乱していた。兵はティアを何とか落ち着かせようとするが、ティアの耳には兵の声が届くことはない。

大声で兵が助けを呼び、数人の兵が駆けつけてくる。詳細な状況が把握できないが、勇者一行が危機的状況であることだけは分る。一人が宰相に報せに走り、残りの人員でアービィとルティ、そして今は放心状態のティアを宰相邸に運びこんだ。

幸い、ルティは宰相邸に到着するまでに意識が回復し、ティアもそれに伴い僅かだが落ち着きを取り戻すことができたが、アービィが目を覚ますことはなかった。

そのままルティにとって永遠かと思うような一晩が過ぎ、ようやくアービィが目を覚ました。

「あ、おはよう……」

ベッドから上体を起こしたアービィに、泣き腫らした目を真っ赤にしたルティが抱きついた。
「もう、心配ばっかり……」
その後は言葉にならない。

「え、あ、ちょっと、ルティ……」
一晩も意識不明だったことすら気付かないアービィは、ルティの行動に驚くばかりだった。

ティアもドアの外にいたのだが、そこへ入って行くほど空気が読めないわけではない。アービイのことは心配なのだが、ここはルティの思い通りにさせてやるべきだと思っていた。
宰相邸に運び込まれた後、一時的に意識を失うほどのダメージを受けたにも拘らず、ルティは頑として側を離れずにアービィの世話を焼いていた。といっても、アービィが目を覚まさない以上、脱水症状を起こさないように、時折口に水差しから水を含ませる程度しかすることはなかった。
その間、ティアは城の魔導師たちに、妖呪に付いて教えを請うていた。

万が一にもアービィに妖呪の影響が残っては大変だ。二人とも『解呪』を使えるようになってはいるが、メディのようなこともある。魔法陣を描いた者が、プルケールかキリンドリクスかハラかは分らないが、既にこの世から消滅している以上、場合によっては解呪できなくなるかもしれなかったからだ。

長年魔道に関して研究を重ねてきた城の魔導師たちでも、北の大地に伝わる不死者への転生秘術は文献に記された以上のことは分らなかった。文献は手順や効果は記されていたが、魔法陣自体は使い捨てであり、一度発動させたものが再度効果を表すことはないとも

記されていた。つまり、今回の魔法陣発動は、完全なイレギュラーであり、どのような効果があるか誰にも分らない。

事実、アービィの人狼としての一面が持つ呪文や呪いへの抗堪性がなければ、不死者に転生していたかも知れず、魔法陣の中にルティが飲み込まれていたかと思うと、ティアは全身に冷や汗が流れるのを感じていた。

アービィを包んだ閃光が消えたとき、北の大地の最北にある城の一室では、邪悪な波動を纏った魔導師が宙空に描いた魔法陣を覗き込んでいた。その中には、床に描かれた魔法陣の中心に倒れたアービィの姿が映りこんでいる。

アービィに影があることを見て取った魔導師は、宙空の魔法陣を舌打ちと共に消し去っていた。

第５９話

アービィは閃光に包まれてから、目を覚ますまでの記憶が全くない。

魔法陣の線と文字のようなものを指でなぞり終えたとき、周囲が光に包まれたと感じた次の瞬間には、目に涙を溜めて自分を覗き込むルティの顔が目の前にあった。わけが分からず、自分がベッドにいることだけを把握し、とりあえずおはようと言ってみたのだった。

ルティから、まる一日意識が戻らなかったことやルティ自身も意識を喪失したことを聞かされ、アービィは自身の迂闊な行動を死ぬほど悔いていた。安易な行動でルティを危機に陥れた自分が許せなく、ルティやティアが見たことがないくらい落ち込んでしまった。

すぐにでも、北の大地ヘルムやランケオラータたちと行かなければならないのだが、全身から力が抜けたような感覚が続き、立ち上がってもすぐに座り込んでしまう。心配したディアートゥス公爵が暫く逗留するように言ってきたので、心苦しくも厄介になることにしていた。

アービィがいくら大丈夫だと言っても、ルティとティアは頑として首を縦に振らない。アービィは公爵やルティ、ティアの世話になることに申し訳ない気持ちで一杯だった。同時に、言葉では説明しきれない違和感を、体内の其処彼処に感じている。

アービィが目覚めた頃、最北の地にある神殿の一室では、邪悪な波動を纏った魔導師に声を掛ける者がいた。

「グレシオフィ猊下、如何なされました？」

腰まで伸ばした北の民に共通する金髪を一つに纏めた女性が、こ

れも北の民には共通の碧眼に憂いを湛えて訊ねている。
年の頃は二十代半ばだろうか、艶やかな表情は男たちを振り向かせるには充分な魅力に溢れ、少々吊り気味の瞳と適度な高度を持つ鼻梁、控えめな口元はそれぞれが整ったバランスを保っていた。

最北の地に多くの信徒を持つ神に仕える巫女の服装を纏った女性に声を掛けられた魔導師は、こちらも神官の服を纏っている。紫を基調とした配色は神殿内にいる他の巫女や神官に同じ配色の者はいないことから、最高位の神官であることを伺わせていた。
魔導師は暫くの間、宙に描いた魔法陣を見つめていたが、手をかざしてそれを消し去ると巫女に向き直った。

「オセリファよ。
どうやら南大陸の下賤な者共には、転生秘術を使いこなすことなど無理なようだ。
せっかく魔法陣の描き方から教えてやったのに、まるで成っていない。
不完全な詠唱などしおって、魔力を魔法陣に残しおった。
あれでは数刻と生きられまいて。
確かに、通常の武器や銀の武器では傷付けることすら適わぬが、自壊するじゃろうて。
やはり、精霊呪文の如きたいして精神力を要さない、安易な呪文しか使えぬ下等な者共に、我が神の秘術は荷が勝ち過ぎだったようじゃ。
おかげで面白いことも見られだがな」
神像を見上げていたグレシオフィと呼ばれた魔導師が、オセリファに向き直り答える。

その身が纏う邪悪な波動とは裏腹に、柔和という言葉を受肉化させたらこうなると思われる、穏やかな表情だ。北の民の象徴である

金髪は、白いものにほとんどが置き換わっているが、切れ長の眼窩に納められた碧眼には意志の力が溢れかえっている。僅かな弛みに深い皺を刻んだ頬に支えられた高い鼻と、笑みを湛えた小振りな口元は、全体に漂う波動を中和する効果を持っていた。

グレシオフィが見上げていたその神の像は、台座を含めた高さが３mに達する巨大なもので、背後に後光のように魔法陣を背負った、黒山羊の頭と踵がない山羊の下半身を持つ人型の石像だ。この部族が山羊を神と崇めていることが、見て取れる。ただ、普通の黒山羊ではないことを、神像の背に生えている蝙蝠のような翼と、像の目に填められたルビーのような宝石が表していた。

プルケール邸の床に描かれた魔法陣と、ついさっきまで宙に描かれたそれと、神が背負う魔法陣は、大きさが違うだけの同じものだ。魔力を残した魔法陣は、神が背負うそれが常に感知していた。この世界のどこであろうと同じ魔法陣の存在は、神が支配する力であるため常に感知されるようになっている。

神の背負うそれと、他の魔法陣との違いは二つあり、ひとつは前者が永続的に効力を持つことと、後者はたった一度の使用で効力を失うことだった。もうひとつは、神が背負う魔法陣が神界への亜空間回路を開くためのものであり、他は神が背負う魔法陣への亜空間回路を開くためのものであるということだ。

転生の秘法は、まず任意の場所に描いた魔法陣と神が背負う魔法陣の間に亜空間回路を開き、然る後に神の背負う魔法陣が神界から秘法の効力を引き出す。そして任意の場所に描かれた魔法陣へ亜空間回路を通じて効力を送り、力を受け取った魔法陣が光というエネルギーに転化させ発現させるというものだった。

魔法陣の使い方にはもう一つあった。亜空間回路で通じ合ってい

るためか、任意の二つの魔法陣の間では周辺に存在する人や魔獣の持つ固有の波動が伝わるということに気付いていた。魔法陣を使用している者の魔力が高ければ、魔法陣周辺の光景すら覗き見ることができた。秘術を発現させずにいれば、一種の監視装置としての活用法もあったのだ。

グレシオフィは、プルケール邸に描かれた魔法陣に魔力が残っていることは、神が背負う魔法陣に反応が残っていることで分っていた。どれほどの魔力が残っているか確かめるために、自身の執務室の空間に魔法陣を描いたところ、亜空間回路を通じて人狼の波動を感じ取った。

そして、その人狼の波動がフォーミットや北の大地の避難小屋で、自身の邪魔をした者と同じものであると感じ取ったグレシオフィは、プルケール邸の魔法陣に残った魔力で人狼に対して転生の秘法を叩き付けたのだった。もちろん、予想されたことではないため、秘法が発動するかどうかの確証はなかったが、上手くいけば儲けものという程度の気持ちではあった。

人狼が立っている魔法陣は、プルケールたちが使い残した魔力しかないため、もし魔法陣が発動しても不死者になるが転生の秘法が完成することはない。つまり逆に言えば、プルケールたちのように数刻で身体が崩れ始め、死を迎えるであろうことが期待できた。

残念ながら人狼が持つ呪文への抗堪製が不死者への転生を防いだが、魔力というエネルギーを直接叩きつける結果となった。そして、グレシオフィは一つのことに気付いた。

つまり、術者がそこにいなくても別の魔法陣を通して、秘法を発現させることができるということだ。これはどういうことかというと、敵対する部族や民族の城や町を魔法陣で囲み、転生の秘法を発動させればその中にいるもの全てを転生させることができるという

ことだ。どの程度の規模まで効力を及ぼさせることができるかは、今後実験してみないと分らないが、城ひとつ、町ひとつを壊滅させられるのであれば、核に相当する戦略兵器として使うことができる。

私兵を増やすためであれば完全な不死者に転生させる必要はなく、ヴァンパイアのように夜しか活動できないミディアンでも充分だ。完全な不死者にしてしまってはグレシオフィ自身と同等の力を得てしまうため、これを従わせるには多大な労力が必要になってしまうからだ。殲滅のために使うのであれば、プルケールたちが犯した失敗をわざとすれば良い。恫喝や駆け引きにも使える。

偶然が生んだ結果にしては、充分すぎるほど使える兵器を手にすることができた。魔獣を飼い慣らす実験の結果を一瞬で食い殺し、合成魔獣を殲滅したあの人狼は、殺しても飽き足らないほどの憎しみがあるが、この結果をもたらした点に関しては感謝してもいいだろう。グレシオフィは、そう考えていた。

オセリファは、自分同様に影を持たないが陽の光を避ける必要のない主人が強大な力を得たことを、その笑みから感じ取っていた。

アービィたちがディアートゥス公爵邸に逗留し始めて、三日が過ぎた。

公爵は、事の顛末をシュットガルドに向かっているはずのフィランサスと、ベルテロイを守るパシュースに知らせるための早馬を出している。あと五、六日もすれば、両者に伝わるはずだ。

現在アービィは、長時間歩くことができない。どこにも傷はなく外見は健康そのものに見えるのだが、立っているだけでも極度に疲労を感じてしまい、五分と歩いていられない。体力が落ちているというのとも違い、心拍数が必要以上に上昇し、力が抜けてしまって

いた。さすがに下の世話まで頼むのは矜持が許さず、死ぬ気でトイレまでは行くのだが、それが却って疲労度を増してしまい、アービィはほとんど寝たきりの状態になっている。

「ごめんね、ルティ。
僕がしっかりできないから……」
アービィがベッドの上で呟いた。

「いいのよ、アービィ。
ずっと走りっぱなしだったんだもの。
少しは休めってことよ。
今は、ちゃんと治して、ね」
ルティは、少しでもアービィを安心させようとしていた。

「アービィ、これなら食べられそう？」
ティアがリンゴやナシ、ブドウに相当する果物を持って部屋に入ってきた。
ルティが少しでもアービィの側に着いていられるように、ティアが食事から何からの雑事を引き受けていた。

「ありがとう、ティア。
水っ気が多いと飲み込みやすいんだ。
助かるよ」
アービィは上体を起こしながらティアに礼を言った。
あれほど頑健だったアービィが、ルティの手を借りなければベッドから起きることも儘ならなくなっている。
ティアが買ってきた果物をルティと手分けして切り、アービィに渡す。

だが、アービィは一切れずつ食べたところで戻しそうになってし

まった。食欲はあるのだが、胃が受け付けない。水なら飲めるが、酒はもちろんのこと、茶やコーヒーのような刺激の強いものは戻してしまっていた。かろうじて果物を絞ったジュースやすりおろしたものであれば飲み込めたので、ティアは果物そのものを勧めてみたのだった。

「ごめんね、せっかく買ってきてくれたのに」

「ごめん、無理させちゃって……」

口を押えてむせ返るアービィとティアが、同時に謝罪の言葉を口にする。

「気にしないでね」

「気にしないでね」

また同時に、今度は同じ言葉を口にしてしまい、沈鬱な空気に支配されていた寝室に、珍しく笑いが零れた。

アービィは、この異常は不死者への転生邪法と人狼の能力が反応した結果だと感じていた。もともと不死性を持つ人狼が邪法を浴びた。何らかの力同士が干渉し合い、身体に異変を起こしたのだろうと感じていた。ベッドから置きあがれないことも重要だが、ルティとティアには言っていないもう一つ重要なことに気付いていた。

獣化できないのだ。

力が抜け落ちているのは、人狼の力が失せたからかもしれないと、アービィは考えている。もし、このまま永遠に獣化できないのであれば、それ自体は歓迎できることだが、力が抜けてしまったままで一生ルティに面倒をかけることは絶対に許容できないことだった。その不安は刻一刻と大きくなっている。それともう一つ、別の不安がある。

もし、突然獣化の能力が戻り、予期せぬときに獣化してしまうか

もしれないという不安だった。

ルティやティアだけといるときであれば心配はないのだが、公衆の面前で突然獣化してしまったら取り返しの付かないことになる。今、この時だって、いつ獣化してしまうか判らないのだ。以前であれば自分の中にいる巨狼をいつでも引き出せたし、封じ込めることができたが、今は巨狼の気配を全く感じられなくなっていた。

「アービィ、今は眠りな。
何にも心配しなくていいから。
寝ちゃいなさい、ね。
ルティもよ」
不安に押し潰されそうなアービィに、ティアはそう言葉をかけて部屋を出た。

ルティはこの三日間、入浴とトイレに行く以外の時間全てをアービィの側で過ごしている。睡眠もアービィの横に簡易ベッドを持ち込んでいた。食欲はあっても食物を受け付けないアービィに気を使って、食事の内容は果実のすりおろしやパン程度の簡単なものだった。ティアにはルティまで体力を落としてしまわないか、それも心配でならなかった。
せめてしっかり食べて睡眠も取るように言っているが、ルティはティアに気遣いつつも、判ってはいるが食は細くなってしまうし、睡眠も何かあったらと思うと浅くなってしまっていた。

「北の大地へは、後から行けばいいじゃない。
ちゃんと治さないと、あっち行ってからもっと大変だよ」
ちょっとだけごめんね、と言ってルティは部屋を出た。
ふと、側にいることが重荷になっているのではないかと、それが

気になってしまったのだった。

「うん……」

そう答えたアービィは、ルティの気配を感じなくなると同時に、眠りに落ちていった。

「ティア、アービィ大丈夫かなぁ？」

ティアの部屋に来たルティが不安げに言った。

「大丈夫よ、ルティ。
あの狼がこんなことでくたばるわけないじゃないの」

ティアは答えるが、やはり心配だった。

「そう、だよね？
大丈夫だよね？」

ルティは目の下に隈を浮かべた疲れ切った表情で、再度問いかける。

アービィの前では気丈に振る舞っているが、限界は近かった。

「ルティ、少しでもいいから寝なさい。
あなたが倒れたら、アービィが心配しちゃうよ。
そしたら良くなるものも治らないからね」

ティアはルティの気持ちは解るが、休息が必要なことも解っていた。

今はとにかくルティを休ませなければ、共倒れになってしまう。
ルティには周りが見えなくなっていると、ティアは気付いていた。

ティアは、でもでもだってでなんとかアービィの部屋へ戻ろうとするルティを、無理矢理自分のベッドに寝かせた。荷物からラミア

のティアラを取り出し、髪に飾ってからルティに向き直る。
本来は使い道が違うんだけどね、と呟いてからルティに『催眠』を掛け、深い眠りに突き落とした。

「アービィ、起きてる？」
そっとアービィの部屋に入ったティアが問いかける。

「うん、起きてるよ」
ティアの気配を感じ取ったアービィは、既に目を覚ましていた。疲れを感じている割には眠りが浅い。ちょっとしたことで、すぐに目が覚めてしまっていた。それがまた疲れを誘っているのだが、アービィにはどうしようもない。

「ルティは、あたしの部屋で寝かしてきたわ。
安心して。
散々駄々捏ねて子供みたいだったけど、『催眠』掛けちゃったから。
明日まではぐっすりよ」
アービィを安心させるため、口元に笑みを作りながらティアが言う。

「ありがとう、ティア。
ルティが心配でさぁ。
ね、ちょっと聞きたいんだけどさ、いいかな？」
それはルティにはとても聞けないことだ。

「なに？
あたしで答えられること？」
訝しげにティアが聞いた。

「うん。
ティアじゃないとダメかな」
そう言ってアービィは続けた。

ねぇ、もしティアがラミアに戻れなくなったらどう思う？
嬉しい？
悲しい？
もし、人間と同じ寿命になったら、それはどう？
五、六百年生きるんだよね、ラミアって。
それが百年も生きられなくなっちゃったら、どうかな？

「ひょっとして、アービィ、獣化できなくなったってこと？」
ティアが驚愕の表情で聞いた。

「うん……
狼の気配を身体の中に感じなくなっちゃったんだ」
アービィが答えた。

ティアは、しばらく腕を組んで考え込む。
ラミアに戻れなくなったことは、一度あった。アービィたちと出逢ったときだった。ラミアのティアラをギルドに提出し、変化の能力を手放したときだった。
それを悲しいとか嬉しいという感情で考えたことはなかった。いずれティアラを買い直すつもりでいたからだ。

それが永遠に戻れなくなったとしたら。
今まで考えたこともなかった。
アービィは獣化しないほうが幸せなのだろうと、ティアは漠然と思っていた。だが、自分はどうなのだろう。この一年というもの、

ラミアの姿に戻ったのは数えるほどしかない。片手で足りるだろう。
それを悲しいと感じたことはなかったが、嬉しいと感じたこともない。いつでも蛇の気配は身体の中に感じているからだ。
自分のアイデンティティでもあるラミアとしての姿を、簡単に捨てられるかどうかは解らない。
今、現在であれば、アービィやルティと過ごすこの時間に、ラミアの姿も能力も必要ない。能力に関しては、あれば便利という程度の認識だ。あれば便利はなくても平気ということだろう。

寿命が短くなると言うことも同様だ。共に時間を過ごしたいという者がいなければ、寿命などいくら長くてもたいした差ではなかった。それ以上に、アービィやルティ、メディという大切な者たちを見送るばかりというのは、悲しいかもしれなかった。
余生が数百年であろうと、数十年であろうと、ティアにとってそれはたいした差ではなかった。

「あたしには、よく解らないわ。
ラミアとして生きているわけじゃない今はとても楽しいし、ラミアの姿に戻る必要性は感じないわ。
永遠に戻れなくてもいいかも、ね。
でも、自分の本来の姿をなくしちゃうのは悲しいかも。
寿命なんて関係ないわ。
長すぎるっていうのも考え物よ」
ティアは曖昧な答えに終始する。
アービィに対し、狼の能力を失ったことを喜ばしいことだと言い切るのも憚られるし、同情というのも違う気がする。もともとアービィは異世界人であり、別人格であったはずの狼に封じ込められていたといってもいい。それと決別できるのだから喜ばしいことだろうとは思えるが、それで元の世界へ還ることができるというわけでもない。

ティアの思考はループに陥っていた。

「そうだよね、いきなり聞かれても。
それに、まだ戻れる状態で聞かれても解らないよね。
でもね、僕は嬉しい。
でも、寂しい。
なんていって言いか解らないけどね。
ごめん、ティアに無理矢理答えを聞きたかったわけじゃないんだけど」

アービィはどうしたらいいか解らないという表情で言った。

「いいのよ、アービィ。
気にしないで。
今は、気が弱くなってるんじゃない？
もともとはどうなの？
神殿巡礼も、呪文の修練も。
何のため？
狼と決別するためだったの？」

ティアには、アービィは同意が欲しいだけだということが理解できた。

だが、自分の力で狼と決別したわけでも、封じ込めたわけでもない。もし、この後唐突に狼の本性が現出してしまったら、今のこの状況を喜んでいるとしたらアービィは壊れてしまうかもしれない。狼が失せたのではなく、一時的に姿を隠しているだけだと思っていたほうがいいだろう。認め難くても、自然に狼から離れていくことはない。十年以上に及ぶ時間を共有したアービィの中の狼は、既にアービィと同一人格と言っていいだろう。ティアはそう考えている。

アービィが獣化をコントロールして狼を封じて生きるのではなく、いつでも好きなときに獣化できる世の中。それは人と人狼が和解で

きた世の中だ。
だが、アービィ以外の人狼が人と和解できるのか。両者の間で紡がれた千年以上の血塗られた歴史を、これからたった数十年でこの人狼が変えていけるのか。
類稀な、人の側に立てる人狼。この存在は、これから先両者が和解し、共に歴史を刻むためには必要だと思われた。
唐突にティアは残酷なことに気付く。
そのためには、アービィは人狼でなければならない。人狼として生を歩み、人狼として死んでいかなければならない。

「うん、そう言われると……
そうだね、決別とは考えていなかった、かな」
アービィは答えた。
それはそうだ。狼が消えるなどと考えたこともないからだ。
同一人格であり、自分自身である狼と、決別するということは考える必要はなかったからだ。今、狼の気配を感じられなくなって、初めて気付いたとこだった。

アービィは、正直なところ迷っていた。
狼の圧倒的な力が惜しいわけではない。
だが、十年以上の時間を共に過ごし、互いに人格を占有しようということもなく、折り合いよくやってきた。もし、人狼が生来凶暴で、冷酷で、残虐な生物であるとしたら、それは無理な相談だっただろう。だが、アービィという存在は、人狼であろうとも育った環境が人格形成に与える影響があるということを証明していた。であれば、凶暴、冷酷、残虐といったサガは、後付けの性格なのだろう。いつかバードンが言っていた通り、憎み憎まれ合う境遇が造り上げているものなのだと想像できた。
改めて考えると、人と人狼が和解できるというのであれば、狼を消し去ったり決別する必要などないのだった。

「ねぇ、アービィ、良く考えてみて。
ルティもだけども、あたしもメディも、伯爵も、ルムさんや、ラ
ンケオラータ様とその護衛に付いていた人たちだって、ハイスティ
さんだって、あなたが人狼って知った瞬間から掌は返していないで
しょ？
今までにだって、誰かそれでアービィに石を投げつけた人ってい
た？
いいんじゃないかなぁ、狼がアービィの中にいても」
敢えてバードンは外すティア。

ティアにとって、アービィはある意味希望だった。人と魔獣が共
存していた、ティアの中に眠る原始の記憶がそう言わせているのか
もしれなかった。アービィに余計な使命を負わせることに心苦しさ
を感じつつも、ティアはアービィから狼が消えうせるのは、損失だ
と思うようになっていた。もちろん、それを言葉にも表情にも出す
ことはしなかった。

「そうだね。
いいなぁ、いつでも好きなときに獣化できたら」
アービィの言葉に、一瞬内心を見透かされたかとティアは動揺し
てしまった。

「起こしちゃっといて、こんなこと言うのもなんだけど。
アービィも、今日はぐっすり寝ちゃいなさい。
試しに『催眠』掛けてみようか？」
内心の動揺を誤魔化しながらティアが言う。

「うん、試してみようか。
『誘惑』はルティに殺されるからダメだよ」

苦笑しつつアービィが答える。

「じゃあ、ちょっと待っててて」

そう言ってティアラを取りに、ティアは部屋を出た。

暫くして、わざと時間を掛けて戻ったティアは、穏やかな表情で眠るアービィを見て、安心したようにまた部屋を出て行った。

第６０話

「如何でしょう、プラボック殿、ヌミフ殿だけでもパーカホに戻されては。
南大陸の謀略であるかどうかの人質なら、私で充分ではございませぬかな？」
イーバの村の集会所で、バードンは対峙したプラボックに言った。

「そうは、いかん。
南大陸に対してなら貴様だけで充分だが、ルムが何を企んでいるのか解らぬ以上、この女を解放することはできん」
プラボックはそう答えるが、実際のところヌミフの提案を受け入れる他はないと思っている。

既に春が来たとはいえ、本格的に狩猟や農耕を始められるのは、もう暫く先の話だ。彼らが現在占拠している山脈から流れ出した雪解け水が、平野の大半を泥濘の荒野と化している。この水が退き、痩せた大地に僅かばかりとはいえ肥沃な土を被せなければ、焼き畑を実施したところでたいした収穫は上げられないし、そもそも人が活動することもできなかった。
もともと山脈の民しか養えない食糧の備蓄が、そろそろ底を尽き掛けている。いきなり居座った中央部の民を養いきれるほど、山脈には食料の生産能力はなかった。
それが、今までなんとか食い繋いで来られたのは、中央部から避難する前に、魔獣に襲われ命を落とした者が多過ぎたという皮肉な前提があったからだ。
それは山脈の民にしても同じことで、中央部の民を一蹴した魔獣の群が山脈地帯を席巻した際に、数多くの命を食い散らかされていた。そうでなければ彼らが一戦も交えずに、中央部の民の膝下に敷

かれるはずはない。地の利を得た防衛戦術は、過去に中央部からも平野部からも敵対勢力の侵入を許すことはなかった。

だが、魔獣の攻撃により先頭に立っていた指導者を討ち取られ、さらに数多の戦士を討ち減らされた挙句、構築した防御柵のほとんどが破壊され、半ば茫然自失の状態では、いきなり雪崩込んできた中央部の民に抗する気力は残されていなかった。

そのうえ、帰るところを失い、およそ十日分の食料だけを抱えて中央部から避難してきた民には、後がないという必死さがあった。今までであれば少人数で襲来し、食料の略奪程度で引き上げていただけのことが、一気に大規模な侵攻へと拡大された。

過去類を見ない大攻勢に、抗する術を失っていた山脈の民は、食住を提供することを条件に降伏を申し出た。事実上の無条件降伏に近いが、命だけは残して欲しいということだ。

口減らしか、奴隷として活かすか央部の民は迷ったが、平野部へ侵攻した部族が多数の戦死者を出して撃退されたことで、口減らしの必要がなくなるという皮肉な結果に降伏を受け入れ、最も大きなイーバの村を占領したのだった。魔獣が席巻した村の惨状に、憐憫の情が湧いたことも否定できない事実ではあった。中央部の民に、同病相哀れむの気分が蔓延したといってもよかったかもしれない。

いずれにせよ、いくら人が減ったといっても、元々の人口より増えてしまった状態では、どう頑張っても春の本格的な到来前に食料が尽きることは確実だった。

山脈地帯で泥濘を避けてきた動物たちを狩ろうにも、魔獣の驚異が完全に去ったという保証はない以上、迂闊に出歩くことも危険だったため、食料の補充が思うに任せなかったことも響いていた。

そこへ持ってきてのヌミフの提案だった。

平野部が食住の援助をするという。そればかりか、南大陸から兵だけでなく、武器防具の提供を引き出し、中央部に盤踞する最北の蛮族に逆侵攻を掛けるといった。

撃退が成った暁には、中央部の民には元の勢力範囲での居住権が保障され、中央部の民が求めるなら平野部の民の兵はもとより、南大陸の兵も退くという。もちろん、最北の蛮族の驚異があるうちは、中央部の民が求める限り、南大陸の兵が最前線に駐屯するという至れり尽くせりな申し出だ。

あまりにも話が旨すぎて、プラボックでなくとも疑心暗鬼に陥り、簡単には信じることなどできなかったことだろう。

そのうえ、平野部を統べるルムが国賓扱いで南大陸のインダミトに行った。ここでなんらかの取り決めをしてくることは、間違いない。いずれ北の大地の分割統治であろうことは、想像に難くない。寧ろ、ルムとインダミトによる、統治という名の侵略と考える方が自然だろう。

だが、プラボックたちが追いつめられていることも、また確かなことだった。民は統治者が誰であろうと食わせてくれる限りは、多少の不満は腹に飲んではいても付いてくる。食わせられなくなったときは、躊躇うことなく反乱の牙を剥いてくるだろう。

山脈の民も、魔獣襲撃の混乱で茫然自失だったからこそ、たいした抵抗もなく膝下に敷くことができたのだ。それ以降プラボックは、山脈の民を襲った魔獣の襲撃は、自らの故郷を蹂躙したものと同じであるという同情心も手伝って、食料の分配は厳しく公平を期していた。

事ここに至り、プラボックはヌミフの提案を受け入れる決意はしたものの、ルムと直接話し合うまではヌミフを解放することはできないと考えている。

だが、バードンには強気の態度で臨んでいるが、内心は助けを求めて縋り付きたい気持ちがあることを否定できなかった。

バードンはプラボックの内心の、半分程度は読みとれている。だが、ここで強気に出たり、高圧的な態度は禁物だ。もっとも、対人狼以外ではバードンが何よりも嫌うことではあったので、あり得ないことではあった。

言うまでもなく、プラボックの危惧は理解している。人心の機敏には敏感でなければ、神父など務まるわけがない。対人狼対悪魔の殺戮兵器である前に、バードンは人を救うことを目的とした神父の端くれであることは自覚している。説法より荒事が好きなだけで、しなければならないときには粘り強く話し合うくらいのことは造作もないことだった。

「仰ることはごもっともでございます。
ですが、ヌミフ殿の身を案じる者が多いこともご理解頂きたい。
では、こうしては如何でございましょう？」
バードンは妥協案を提示する。

つまり、自分とヌミフは人質として残る代わり、ヌミフに付き従ってきた側近たちをパーカホに返す。そして、二人の安否を知らせると共に跳ねっ返りたちがいた場合それの抑えとし、ルムに現状を伝える役を担わせる。
これが最も現実的な現状打破ではありますまいか、とバードンは締めくくった。

プラボックは、暫く考えさせて欲しいと言ってバードンを拘束させた。バードンは大人しく後ろ手に縛らせたが、引っ立てられようとした瞬間に、関節を自ら外し、事も無げに拘束を解いた。

「貴様……」
プラボックが呻くが、バードンは何もなかったかのように言う。
「無駄でございます。
いかなる拘束も私は抜けましょう。
もとより、こちらに留まる所存。
必要ありますまい？」
バードンには事を荒立てようという気は、全くない。
だが、拘禁される謂われもない、それだけのことだ。

「そうだな。
我らとて……」
危うく限界、救いを求めていると言いそうになり、プラボックは慌てて口を噤む。

マ教神殿で政争と権謀術数の中で育ったバードンにしてみれば、北の民は直情径行に過ぎるとしかいいようのない素直すぎる人々だった。純粋な力を見せることも必要なときがあることは、直感で解っていた。

「いかがです、また縛り上げますか？」
止めだろうとの思いを込め、バードンは言った。

「いや……
必要あるまい。
好きに振る舞え」
蒼ざめた顔でプラボックはバードンを解放するように、側近の者たちに言った。

バードンは、妥協を悪いことだとは思っていない。
それぞれに思惑がある以上、全てが自分の思うままにできるはずがない。それを押し通そうとするから、戦が起きるのだ。神父の端くれとしては、戦など望むものではない。人狼との闘争は、全く別の次元のものだ。
であれば、他と共存するためには、己が要求を引っ込めなければならないときもある。当然、全てを引っ込めるわけにはいかないから、そこには駆け引きが必要で、それを妥協というのだ。バードンが考える妥協とは、楽をしたいがための手抜きの結果ではなく、意見を異にする両者が共存するための知恵を絞った結果のことを指していた。
プラボックの言葉に感謝の意を伝え、バードンはヌミフが軟禁されている家屋へと向かった。

「ヌミフ殿を解放するには能わず、申し訳ございません。
私もここに留まることになりました」
バードンはヌミフが軟禁されている家屋に行くなり、頭を下げた。

「あの……
そんな気を使わないで下さい。
大丈夫です。
兄が帰るまで、私の役目はここにいることですから」
ヌミフにしてみれば、ひとまわり近く年上の男に頭を下げられるなど、経験がないため戸惑うだけだ。何より、侵攻を止められるだけでも充分なことだけに、それ以上のことが不可能だったからといって、謝られてもそれを否定するほど傲慢ではない。
だからと言ってそれに甘えるわけにはいかなかった。ヌミフは顔

を合わせる毎に、平野部と中央部の団結を訴えてはいた。だが、謀略の疑念を捨てきれないプラボックには、顧みられることはなかった。ヌミフは自らの無力さに打ちひしがれてはいたが、力がない以上はどうしようもないと諦めかけていた。

いっそ抱いてくれたなら、睦言の中で言いくるめられるものをとも思うこともあったが、プラボックを始めとした中央部の民は、自分に指一本触れようとはしなかった。

だが、この男が来てから、急に空気が変わったことをヌミフは感じていた。それも良い方に。それは、兄が自分に付けていた側近が、解放されたことで確信できた。

「ヌミフ殿、今暫くのご辛抱にございます。必ずや、事態は好転しましょう」

バードンは、何故かは解らないが、あの人狼が助けに来ることを、心の底から信じていた。

プラボックはどのタイミングで、配下に平野部の民に世話になることを告げるか悩んでいる。下手に言えば、反乱を引き起こすだけだ。

ある意味食住を保障されるということは、征服されるということと同義だからだ。

理屈では理解している。だが、中央部を追われたとはいえ、今まで平野部の民にも、山脈の民にも侵略させることはなかった過去の栄光をプラボックは思い返していた。

だが、栄光や、ましてや見栄で生きていけるほど、北の大地は甘い所ではない。駆け引きより力が優先される所だった。

「バードン……殿、話がある。よろしいか？」

ヌミフの側近を解放してから三日後、プラボックが突然ヌミフとバードンが軟禁されている家屋に訪ねてきた。

好きに振る舞えとは言われたが、人質の身で好き勝手にするわけにはいかないと、わけの分からない理由を言って、バードンはヌミフと起居を共にし、自主的な軟禁状態に身を置いていた。もちろん、護衛のためであるが、寝室は別に取っている。

「如何されましたかな？」

ゆったりとした所作で、茶を喫しながらバードンか応じる。軟禁される前とプラボックの言葉遣いが変わっているが、敢えてその点を指摘することはしなかった。

「この茶は南大陸にはございません。リジェストやウジェチ・スグタでもお目に掛かりませんでした。実に味わい深い。良い値で売れますな」

バードンが飲んでいる茶は、所謂熊笹茶のようなものだ。一般的な茶を栽培するには、北の大地は寒すぎる。麦茶に利用できる大麦は栽培されていたが、食料としての利用が最優先され、次いでエールや蒸留酒の原料とされているため、嗜好品としての茶までは回ってこなかった。

熊笹のような笹であればそこら中に自生しており、いくらでも採り放題だった。いよいよ食糧が不足すれば、種子を食用として利用することもある。

この葉を陰干しして焙煎したものに熱湯を注ぐと、ちょうど良い

茶として喫することができた。
南大陸にはない味であり、これは売れるのではないかとバードンは思っていた。

「売る？
金や銀と交換するということか？
こんなものが売れるというのか？
俄には信じられんな」
プラボックにとって茶とは、ごく希に南大陸から入ってくる紅茶や煎茶のようなものを指している。北の大地ではありふれた植物から作られる、貧しさの象徴だと思っていた代用品のようなものが、売り物になるなど信じられなかった。

「はい、パーカホにいる南大陸の住人たちにも、愛好家が多くいます。
ありふれたもので大量生産できるのであれば、たちどころに財を成すことができますな。
まずは新し物好きの貴族に広め、高値で売りさばき、充分に広まったところで安く庶民に。
やり方次第で、いくらでも。
神父など辞めて、これで生計を立ててみるのも一興ですかな。
ところで、何か御用がおありだったのでは？」
話が脱線したままだったので、バードンはプラボックに話を振る。

「うむ、茶の話は後でゆっくり聞かせてもらうとして。
我らは平野の民と手を結ぼうと思う。
だが、庇護下に入るとか、膝を折るなどということではなく、あくまで対等の関係でなくてはいかん。
そうでなければ、民を説得するなど無理だ」
プラボックは三日間悩み続けていた。

食住の援助は喉から手が出るほど欲しいが、それで平野の民に膝を折れというのなら、中央の民の誇りが許さない。闘いもせず、服従するわけにはいかないのだ。

あくまでも対等の関係。援助を受けなければならない状態に陥った時点で、既に対等ではないのは自覚しているのだが、それだけは譲れない一点だった。

「こちらとしても、それを望みます。

あくまで対等な関係です。

では、話は付いたということで、私たちは帰ってもよろしいですかな？」

バードンにしてみても、平野の民に北の大地を制覇する力まではないと解っている。南大陸の四国家が、大陸全土を制覇しきれないのと同じことだ。

「悪いが、それはできん。

ルム殿が戻り私と話し合うまでは、不自由をさせて申し訳ないが、ここに留まっていただきたい」

掌を返されては堪らない。それがプラボックの心情だった。それに、まだ腹心にすら話していないのだ。いきなりヌミフとバードンが消えては、脱走を疑われかねない。

「しかと、承知。

今暫く囚われを演じましょうぞ。

ヌミフ殿、構いませぬな？」

その程度のことが解らぬバードンではない。訝しげなヌミフを余所に、プラボックと笑い合っている。

「では、パーカホに報せを」

おそらくヌミフもバードンもそれを心配するのではと思い、プラボックは使いを出すことを申し出た。

「いや、それは今暫くお待ちいただきましょう。
既に我らの安否は知らされております。
まだ、プラボック殿の腹の中だけのことでございましょう？
今の時点で、このことを知るのは、ここにいる三人……だけで充分かと」

バードンは少しだけ迷ったが、天井裏をちらりと見て、そこに潜むプラボックの影の護衛も言外に数え入れた。

完全に気配を消していたと思っていた影が息を飲む気配が伝わり、プラボックのこめかみに汗が一筋流れた。

「そうだな……
ところで、さきほどの茶の話だが」
プラボックは話題を変えた。

「はい。
ですが、神父ごときの浅知恵など、多寡が知れております。
いずれルム殿が、ランケオラータ様をお連れしてお戻りになりましょう。
その折りに、よくご相談なさると良い。
ランケオラータ様はインダミトで財務卿をお勤めになる方のご子息故、商売には明るい方でございます。
それまでに、この茶をできる限り大量にお作りなされよ」
バードンは、半ば本気で商売替えをしようかと思っていた。

「そうか、そうだな。
我らも変わらねばならんな。

如何かな、バードン殿。
貴公の目で構わんので、茶の材料が生えているところを見ていただけまいか？」
プラボックの腹は決まっている。

民を食わせると同時に、生かさなければならない。戦ばかりでは、民の命すら消耗品と化してしまっていた。
もし、茶で交易ができ、食料の入手が可能になるのであれば、自衛以外での剣を置くことも吝かではなかった。いや、それを望んでいたと言ってもいい。

「喜んで」
バードンは短く承諾の言葉を返し、ヌミフを伴い、プラボックについて村を出た。

北の大地は、短い春を謳歌していた。木々は一斉に芽を吹き、まだ残る雪の切れ目からは双葉が顔を覗かせている。動物たちの気配も濃厚で、これから訪れる繁殖期に向けて旺盛な食欲の跡を残していた。

「これはこれは……
山菜の宝庫ですな」
サバイバルテクニックに長けたバードンには、村の周辺は食料庫にも見えた。
もちろん、副菜としての利用しかできない物ばかりで、主食の不足を補えるような物はない。
だが、南大陸ではあまり採れない物が多く、ストラー北部やラシアスの特産品や珍品扱いで、高値で取り引きされる物ばかりだった。
その他にもアービィやレイが見れば、大喜びするであろう竹林も広がっている。

「こんな物も金や銀と交換できるのか……」
プラボックは、己の価値観が変わっていくのを感じていた。

「高値が付きますぞ。
もちろん、採りすぎては値が崩れますし、翌年に採れなくなってしまいますので、管理は厳しくする必要はありますがな」
バードンとプラボックは、山脈地帯や中央部で採れる農産物について語り合いながら、中央部を臨む高台に出た。

広大な大地が果てしなく広がっている。
なだらかな丘陵地帯に続く、きちんと管理さえすれば豊穣を約束してくれそうな平原。コーヒー牛乳のような色の水を湛えた大河が、おおきく蛇行し幾つもの支流を従えている。おそらく春の洪水期が、山脈地帯から肥沃な土壌を運んでくれているだろう。丘陵地帯の奥には峻険な山岳地帯が続き、幾つか煙を上げている山もあった。その吹き上がる煙は、そこに温泉があることを窺わせている。

「どうかね、われらが故郷の大地は？
何も、ない。
何も、採れない。
南大陸の住人には、何故我らがあれほどに南に行きたがるか解るまい」
プラボックは、嘆息しながらバードンに言った。

「とんでもない……
素晴らしい土地です。
これは……宝の大地だ」
バードンは呻いてしまった。

素人目に見ても、作物さえ選べば両大陸の穀倉地帯となる可能性が見て取れた。

それだけではない。

地下資源も豊富だと聞いた。ビースマックで僅かに生産されている燃える石や、利用方法が確立していない燃える水が大量に眠っているとしたら、薪にほとんどの燃料を頼っているこの世界に、燃料革命が起きるかもしれなかった。

燃料の革新があれば、それに伴って工業の躍進があるだろう。もちろん、それは農業や漁業にも応用できる。南大陸は、全ての土地の有効活用ができているとは言い難い。北の大地は言うに及ばずだ。

今の倍や三倍くらいに人口が増えようと、この大地は全てを養い切って、なお余力がありそうだった。

バードンは、興奮気味にプラボックに語っていた。人狼狩りのときに見せる熱意と同等か、それ以上の熱意を以ってプラボックに北の大地の可能性について語っていた。

プラボックとヌミフは、なかば呆気に取られてバードンの豹変を見、そして聞き入っていた。

北の大地が人を養える。それどころか、南大陸を養って尚余力があると言う。俄かには信じられないが、南大陸で生きてきた人間が言うのだから、それなりの裏付けがあってのことだろう。

千年以上に亘って続けられた、殺し合いの歴史が終わろうとしている。二人はそんな予感に包まれていた。

そのとき、バードンはふいに邪悪な波動を感じていた。

遥か彼方の平原から、天に向かって一条の光が伸びる。近くで見れば荘厳な光景なのかもしれないが、この距離では串のような太さの光にしか見えなかった。

だが、そのようなか細い光であるにも拘らず、そこからは巨大で

邪悪な波動が伝わってきた。

その頃、インダミト王都エーンベアを発った、ルムとランケオラータ、レイの三人は、ベルテロイでアービィたちの帰りを待っていた。だが、そこへシュットガルドから早馬が到着し、反乱の鎮圧とアービィの体調不良を伝えてきたのだった。

「ランキー、どうするかね？」

ルムとしては、護衛のことを考えるとアービィたちを待ってから、北の大地へ戻りたいと考えていた。

自分ひとりならどうということはないが、武の才が全くないランケオラータとレイを連れて北の大地を無事に抜けるには、アービィたちがいたほうが良い。

「先に行こう。

ヌミフ殿を王都に送るのは早いほうが良い。

それに、北の大地の春は短いんだろ？

やるべきことは多いぞ」

ランケオラータとレイにしても、アービィの具合が心配で仕方ないのだが、詳細が分らずいつまで待つかの見通しが立たない以上、ここでいつまでも待つわけには行かないと判断していた。

春のうちに田畑ですることは多い。

そのためにエンドラーズを通して、ストラー北部の農家から北の大地に合う作物の苗を買い付ける手筈も整えていた。ストラー北部を経由すると、北の大地への到着がかなり遅くなるので、風の神殿の町クシュナックに苗を用意しておいてくれているはずだ。作付け時期は、十日もずれると収穫に大きく影響が出るため、あまりゆっくりもしていられないのだ。後日改めて、ヌミフがストラー北部の

視察に行けば良い。
　ベルテロイからクシュナック経由でラシアスに入り、ウジェチ・スグタ要塞を通ってパーカホまでは、およそ四十五日の行程だ。途中急いだとしても四十日は掛かってしまう。
　短い北の大地の春は、待ってはくれない。一刻も早くパーカホまで戻る必要があった。
　おそらく、今頃はパーカホに残してきた人々が、作付けのための土壌の改良に奔走しているはずだ。

「そうですね、アービィのことは心配ですけど、今は行きましょう。早馬を帰しておけば、パーカホの村で合流できますわ。うまく行けば、リジェストかウジェチ・スグタ要塞で会えるかもしれませんね」
　後ろ髪を引かれつつ、レイも決断した。

「よし、では行こう。
長い付き合いになると思うが、よろしくお願いする。
ご夫妻」
正式な式は挙げていないが、二人の結婚は王にも報告されている。北の大地での生活が安定したら、レイは両家の両親や家族、アービィたちを呼んで北の大地のお披露目を兼ねて、盛大に式を挙行するつもりでいた。

　シュットガルドは、夏に向かって気温が上がりつつあった。
　寝ているだけでも汗ばむような気候で、それだけで体調を悪化させてしまいそうだが、アービィは一気に回復していた。
　食欲も戻り、この数日分を取り戻すかのように、普通の人の倍ほども喰っている。

「急がないとさぁ……ランケオラータ様と……ルムさんに……んぐ。置いて……行かれちゃうから……」

周囲が心配するほどの勢いで、食べ物を片っ端から消滅させていく。

「喋るか、食べるかどっちかにしなさいっ！！」

呆れたルティが叱り付けるが、アービィは意に介さず旺盛な食欲を見せる。

目の前の食べ物と格闘しながらも、アービィは今回の異変に付いて考えを巡らせていた。

邪悪な光を浴びてから狼の気配が消え、立ち上がることも儘ならなくなった。それが数日で、急に回復した。まるで何事もなかったかのようにだ。

結局原因は分らないのだが、不死者へと転生させる力と、もともと狼が持っていた不死性が打ち消し合い、極度に損耗したのだろうと思うことにしている。呪文への抗堪製がなければ危なかったかもしれないと、アービィは思っている。残存魔力であれだったのだから、充分な準備を施された魔法陣からの一撃を喰らえば、かなり危険であろうことは想像に難くない。

不死者とは、かつては生命があったものが、既に命を失っているにも拘らず活動しているモノである。つまり、生物としては死なないければ不死者へとは転生できない。その強制的な死と、狼の不死性が拮抗し、狼自体が大きなダメージを受けている状態だった。

「どこ行っちゃったのかしらね、アービィの中の狼」

ルティが何とはなしに呟く。

アービィとしてはルティには黙っているつもりだったが、ティア

からきちんと状態を言うようにと諭され、今朝になってルティにも狼の気配を感じなくなったことを伝えていた。

「う～ん、よく分らないんだよ、それが。
消えた感覚もないんだ。
こう、なんて言うのかなぁ……
もし、僕の中からいなくなったのなら、抜けていく感覚があってもよさそうなのに、そういうのはなかった。
光に包まれたとき、弾き飛ばされたにしても、そういう感覚はなかったんだよね」
アービィは、狼はダメージが回復するまでは、野生動物がそうするように気配を消してどこかで蹲っているのではないかと思っている。ただ、それを言葉で説明するのが難しそうなので、二人には言わずにいるだけだった。

「なんとか封じ込められるようにって思っていたのに、実際にいなくなっちゃうと寂しいものね。
アービィがいらないって言うなら、それでも良いんだけどさ」
ルティが言った。

「まぁ、いいよ。
暮らしていくうえでは、なくても良いもんだから」
とりあえず、ルティとティアに気遣わせないように、気のない振りをしておく。
アービィにしてみても、実際消えてしまうとなると寂しいものはあった。
この世界で物心ついたときから、ずっと感じてきたものであったし、それなりの愛着はあったのだ。

テーブルにあった全ての食べ物を消滅させた後、茶を飲みながら

アービィは今後の予定を二人と相談した。
自分の変調を知ったランケオラータたちは、おそらく先行するはずだ。であれば、リジェストかウジェチ・スグタ要塞で合流できればいいし、間に合わないか追い抜いてしまえば、パーカまで行ってしまえば良い。
そのためには、ベルテロイに戻ることなく、ラシアスとの国境の町エッシンフェルゲンに向かい、ラシアスの王都アルギールを経て火の神殿の町グラザナイから一気に北上し、リジェストを目指す。これが一番早く北の大地へ向かう道だ。三人は、このルートで行くことに決め、アービィの体調が一時的ではなく完全に回復したという確信ができ次第、シュットガルドを発つことをディアートゥス公爵に告げた。

ベルテロイのパシュースにその旨伝えることを依頼し、翌日からアービィは精力的に街の周辺を走り始めた。
パーピャとも立ち合い、身体の切れが戻ったことを確認できた三日後、アービィは北の大地へ発つことをルティとティアに告げた。

「公爵様、長い間お世話になり、ありがとうございました。おかげさまで、すっかり良くなりました。
それでは、行ってきます。
どうぞ、これからもお体にはお気をつけになってください」
アービィはそう言って、差し出された公爵の手を握り締めた。

「もう行くのか、と言っても仕方ないようじゃの。
せめてフィランサス殿下がお戻りになるまでは、いて欲しかったんじゃが」
公爵は、いかにも残念そうに言う。

救国の英雄に、あと数日でシュットガルドに到着するフィランサスに会って欲しかったのだ。
フィランサスの知己を得ていれば、今後ビースマック内で何事かをすべきときには不自由はしない。もし、この国を終の棲家としてくれるのであれば、なおさらだった。もちろん、それを以ってこの若者たちを国に縛り付ける意志はなかったが、もし、という希望は捨てきれずにいた。

「ええ、僕たちを待ってくれている人たちがいますので。
では、また来ます。
公爵様、御機嫌よう」

アービィたちの乗る馬車は、ベルテロイから同行してきた御者が手綱を握り、ビースマック街道を西に向かって走り出した。
ツェレンドルフを経由し、ベルテロイへ向かう途中からエッシンフェルゲンへと北上する。
アービィの体調を気遣ってか、シュットガルドへ向かうときとは違い町々に泊まりながらの行程だ。

途中、ギーセンハイムでは、メディと再会できた。たった十日ほど前に分かれたばかりなのに、随分と久し振りのような気がした。既にメディはクーデターの失敗を知っており、依頼達成を心底喜んでくれた。
新しい家族を得たメディは、以前とは見違えるような明るい表情をしている。アービィたちといるときずっと暗い顔をしていたわけではないのだが、それでもどこかに憂いや翳りを持った表情をしていた。
旅に合わせた服装ではなく、十数年分を取り戻すかのように、いや、北の大地ではお洒落などとは無縁の生活だったメディは、初めて着飾る事の楽しさを満喫していた。

まだ両親が買って与えているばかりだったが、メディは早く自分で稼ぎたいと目を輝かせる。アービィたちとは依頼の報酬は山分けしていたのだが、両親はそれを自宅を治癒院へと改装する費用に使うように言っていた。

瞳を輝かせて夢を語るメディに、アービィたちは心の底から嬉しくなり、元気を分け与えられたような気分だった。

メディと両親に見送られ、エッシンフェルゲンへとビースマック街道からはずれ北上する。二本の街道が離れ始めた辺りで、北へ行く街道は山道になっていく。

小高い場所からビースマック街道を眺めると、ビースマックの近衛師団旗を掲げた軍勢が視界の中を通り過ぎていった。

第６１話

ラシアスとの国境の町エッシンフェルゲンは、雨に閉ざされていた。

この辺りにしては珍しく、車軸を流すような大雨が、もう四日も続いている。アービィたちはこの雨のせいで、この街で三度目の朝を迎えていた。

四日前にエッシンフェルゲンに到着した夜は、街に近付くに連れ酷くなる土砂降りの中での強行軍だった。さすがに御者一人を雨中に放り出しっぱなしというのは、三人の良心が許さず、交代しながらの強行軍になり、街に入ったときには全員が濡れ鼠と化していた。

ラシアス側の国境の町ソロノガルスクからは、ラシアスの駅馬車路線を使うため、御者はここから馬車をベルテロイに持ち帰ることになっている。だが、この豪雨の中を一人で戻るにはあまりにも無理があり、駅馬車路線もラシアス王都アルギールまでの道が豪雨で不通になっていたため、四人は同じ宿で無聊を囲っていた。

到着した夜は、ずぶ濡れの身体を風呂と酒で暖める方が優先され、疲労困憊のうちに泥のように寝てしまっていた。　翌日、町長に挨拶に行ったところ、ヒドラ殺しの英雄来るの報があっと言う間に街中に回り、豪雨で街中が手持ち無沙汰だったことも加え、昼頃からとんでもない規模の宴会となってしまった。さすがに毎日宴会というわけもなく、昨日は平穏な一日だった。ゆったりと過ぎていく時間の中で三人はすることがなく、朝からエールやワインを飲みながら時間を潰す。そんな中でもアービィは自分が倒れていなければ、今頃はラシアスの王都アルギールに近い所まで行けていたはずだったと、臍を噛んでいた。

そして、今日も雨。
昨日よりはまだましだが、それでも外へ出ることを躊躇うような降り方だ。街の古老の話では、風向きからすると明日辺りには、かなり小降りになるだろうという予想を聞いていた。
焦ったところで不通になっている道が、復旧するというわけでもない。崖崩れや土砂災害ということではなく、河川の増水で沈下橋が完全に水没しているらしい。ならば、雨が上がって、数日もすれば通行可能になるだろう。
それまでは駅馬車も走らず、走ったところで再度足止めだ。

ルティはエッシンフェルゲンに着いてから、なんとも言えない妙な感覚に捕らわれることが多くなっている。
この風雨にしても、アービィの焦りを他所に、長く続くわけがないという安心感がある。道が不通になっているという情報を聞いても、地すべりなどの土砂災害ではなく、河川の増水によって道が冠水しているものだという予感があった。当初はアービィを落ち着けるため、都合のいいように思い込みたいだけかと思っていたが、古老の予想や、駅馬車の事務所からの情報でルティの天候等についての予感は裏付けられていた。
そのこともあって、焦りを隠せないアービィとティアから見て苛立つほど、ルティは落ち着きを見せている。だが、そのおかげでアービィとティアの焦りが、かなり緩和されていることも事実だった。
一晩明けて、宿の食堂に集まった三人は、窓の外を見て溜息をつく二人と、明るい表情になった一人に分かれている。

「今日も雨かなぁ……」
アービィが呟く。

「まだ足止めのままかぁ……」

ティアがうなだれて続くが、ルティがそこへ言葉を返した。

「大丈夫よ。
明日になれば、馬車は走るわ。
今日の昼には晴れないまでも、雨は上がりそう。
なんとなくだけど、風の匂いが、ね」
きっと平気。そんな確信があった。

「ここんとこ天気の予想が当たりまくりのルティの言うことだから、信じてみようか、アービィ？」
四日間、ルティが昼からはどうなる、明日はどうなると言っていたのを気休めだと思っていたティアだが、古老の話と一致していたことでルティの感覚を信じることにした。

「そうだね、とにかくソロノガルスクに移動して、切符は買っておこうか」
ティアが言わなくてもそのつもりのアービィは、窓の外を眺めながら返答する。

馬車ごとの越境は必要ないため、御者は三人を国境まで送り、天候が回復するまでこの宿に滞在することにした。宿代自体はパシュース持ちなので、代金の受け取り証明を作ってもらえばよい。だが、一般的な庶民を対象とした商店や宿はほぼ日銭商売であったため、一部の貴族相手の商店や宿以外は領収書というものが普及しておらず、泊まっていた宿に説明するのに一苦労していた。

一年ほど前にティアが誑かして越えた国境を、今は逆向きに越えようとしている。王都であれだけのことがあったのだ。出入国ともビースマック側は、かなり神経質になっている。当然ラシアス側も

反乱を起こした者が逃亡してこないかと神経質になっているのだが、それとは別の緊張感も伝わってきた。
ビースマックからの出国は、拍子抜けするほど問題なく通れた。
だが、ラシアスに入国する際に一騒動が待っていた。

「申し訳ございませんが、ここで今しばらくお待ちくださいませ、勇者様」
普段であれば、親切ではあっても威厳を忘れることなどあり得ない近衛師団の標準兵装を着込んだ騎士が、アービィたちに向かって最敬礼で言っている。

「えっと、あの、僕たちが何か？」
戸惑うアービィ。
まさか、あの摂政がまだ手を伸ばしてきたのかと訝しむ。
ここで騒動を起こすわけにもいかず、ティアがラミアのティアラを使うかどうか悩んでいるところへ、明らかに周囲の人間とは違うオーラを纏った青年がやってきた。

「勇者殿、足止めなどして申し訳ない。
私は、第三王子ヘテランテラ・ハイドロトリケ・ネツォフ・グランデュローサ。
ベルテロイ教都駐在武官で第二近衛師団長を務めている。
以前は、姉が大変な失礼をしたようで、成り代わり謝罪させていただこう」
ヘテランテラは周囲が何事かと騒ぎ始める前に、アービィたちを第二近衛師団が仮の師団幕舎として接収した宿へと案内した。

「そういえば、入国審査ってしましたっけ？」
気になっていたことをアービィが聞いた。

本来、アービィが属する社会階層の者が、王族に口を聞くなどあり得ないことなのだが、最近ではすっかり慣れてしまった。

「私が同行している。
これ以上の入国審査はないだろう。
それに、勇者殿にそんなものが必要かね？」
ヘテランテラはあっさりと言い放つ。

確かにヘテランテラが同行している以上、一介の入国審査官が意義を唱えることなどできるはずもないのだが、後半についてはアービィから「はい」とは返答しにくい言葉だった。

「確かに殿下とご一緒させていただいていればそうなのですが。
僕は何も聞かなかったことにして良いですか？
それで、ここで僕をお待ちになっていらした理由は、お聞かせいただけるのでしょうか？」
苦笑いしつつ、アービィが答える。

「さすが、察しが良いな。
まずは、この度のビースマックでの働きについて、礼を言わせていただく。
勇者殿たちをお待ちしていた理由だが、私自身の判断もあってのことだが、貴国のパシュース殿下から頼まれてのこと」
ヘテランテラはそう答えてから、説明を始めた。

ヘテランテラ自身がソロノガルスクに来た理由は、ニムファがこの機会にビースマックに向けて兵を起こしたときの抑えのためだった。もちろん、ニムファがあからさまな侵略行為をするとは思えないのだが、救援を理由に派兵し、その後ビースマックに対し影響力

を行使し、実効支配しようという魂胆であることは考えずとも想像できていた。

そして、案の定ビースマックに潜んでいた間諜が王都に走っており、常備軍から抽出された一個大隊を派兵したという情報が、ヘテランテラの元にもたらされている。

その後シュットガルドからは、アービィたちの状況を含め日々情報は入ってくるが、ラシアス軍が進撃を止めることはなかった。今更軍を救援という名目で越境させたところで恥を掻くだけなのだが、ニムファにはその情報が届いていない。アービィたちを足止めしていた集中豪雨は、ラシアス軍だけではなく、王都アルギールへ情報を運ぶ間諜や早馬の足も止めていた。

軍が最上級指揮官の戦略を、前線の判断で変更するわけにも行かず、かといって新たな命令が下されることもなく、アルギールとソロノガルスクのほぼ中間で派遣軍は足止めされている。

この間、ヘテランテラはアービィたちを待ちつつ、万が一派遣軍が独断専行した場合には実力を以って止めるための準備を進めていた。

「雨が上がり王都に情報が行けば、常識的に考えて軍は帰還するはずなのだが、姉上がそれを良しとしないかもしれん。

場合によっては、振り上げた拳の落し所を見つけられずに、復興援助とか、逃亡者が国境を越える前に阻止するとか抜かして、軍に国境を越えさせるやも知れんのでな。

それでなのだが、このまま勇者殿が駅馬車で北の大地へ向かえば、途中で軍とすれ違うことになる。

困ったことに、軍の指揮官があの男なのだよ。

勇者殿が叩きのめした、な」

ヘテランテラが、ここからが話の核心だと言うように、語気を強めた。

ニムファが派遣した軍の指揮官には、以前アービィが決闘で叩きのめしたウェンディロフ子爵が汚名返上とばかりに志願し、宰相コリンボーサの裁可もあってその座に収まっていた。この二人が顔を合わせればどうなるか、執念深いウェンディロフの性格から考えて、血を見ずに済ますことなどないことは想像に難くない。

「ああ、あの人……
悪いことしちゃいましたねぇ、あの時は」
アービィの認識はその程度だ。

だが、貴族として育ってきたウェンディロフは、負けるとは思っていなかっただろうが、決闘の後生かされていることに限りない屈辱を感じていた。ましてや、相手は素手だ。油断がなかったとはいえない。それをウェンディロフは油断を誘う卑怯な駆け引きと決め付けることで、なんとか自尊心の崩壊を防いでいた。
控え室に運ばれた後に意識を取り戻したウェンディロフは、しばし呆然としていた後、嵐のように怒り狂った。神聖な決闘を、侮辱されたと受け取ったのだった。
ヘテランテラがそう説明したが、アービィはそれがどうしたという感じで首をかしげていた。

「勇者殿、さすがに国内で貴族を殺されては、我が国としても困るのだよ」
アービィの表情に、言わなきゃ解らんかと言外に含ませて、ヘテランテラは言った。

「いやいや、殺し合いをする気はありませんよ、いくらなんでも」
アービィは手と首を力いっぱい振った。

「ところが、だ。
あちらは、そう思っておらん。
それにだな、これも困ったことなんだが、やはり決闘の後に生かしておくのはいかがなものかと思うのだ」
ヘテランテラは王侯貴族としての考え方からは、やはり離れることはできない。
彼等にとっては、名誉は時と場合によって、命より重くなるのだ。

だが、庶民であるアービィは、力比べをして両者のどちらかが死ぬなど、受け入れ難いことだ。
名誉は、決して命の上位に来るものではない。生きていてこそ、だ。死んでは、その後にいくら褒め称えられようと意味がない。誹られようとも意味はない。自分の死体に鞭打たれたところで、残された人々の想いはともかく、自分は既に何も感じないだろうし、その人々に何かをしてあげられることもできないのだ。それ故に、アービィは例え決闘であろうと、相手を殺す気などなかった。

「もし、勇者殿と奴が街道のどこかですれ違って、決闘になってだな。
まあ、勇者殿が敗れるとは露ほども思わんのだが、問題はその後なのだ。
今度こそ、彼は自決する。
さすがに、それでは困るのだよ。
ああ見えても、あの男は戦場で役立つものでな」
それ以外で役に立った例はないがな、とこれは言葉に出さずに呟く。

「そこでだ、我が近衛第二師団から一個中隊を抽出し、ウジェチ・スグタ要塞に急行させる。
勇者殿は、その中に紛れていただく。

多少のことであれば、強行軍で突っ切って見せよう」
ヘテランテラは続ける。
とりあえずウジェチ・スグタ要塞の視察とでも理由をつけて、中隊規模で差し向ける。その軍勢の中にアービィたちを隠してしまえば、万が一すれ違いざまに存在を嗅ぎ付けられても、常備軍と近衛師団の権威の差によってウェンディロフを黙らせることは難しくない。文句があるならソロノガルスクにいるヘテランテラ殿下までどうぞ、というわけだ。

「そういうことでしたら、お願いいたします、殿下」
人死がないに越したことはないと、アービィは考えることにした。ヘテランテラがアービィの取り込みのために、下手に出ていないとも限らない。だが、もしもそうであったときは、近衛師団には悪いが離脱するだけのことだ。

実際、ヘテランテラはアービィを取り込めるなどとは思っておらず、パシュースに多少でも貸しができればという考えで動いていた。また、個人的に好感より嫌悪感の方が先に来る人物ではあるが、ウェンディロフを殺されてもいろいろと面倒だった。中には彼の武の才を慕っていたり、憧れている者もいたのだった。それ以上に、国内で武の才においては右に並ぶ者無しとの誉れ高き貴族が、名も知れぬような庶民に正々堂々たる決闘で一方的に惨敗して殺されるなど、国の威信にも関ってくる。

「じゃあ、話は決まりだ。
明日の朝、夜明けと共に出るつもりだ。
そろそろ河の水も引き始めるだろう。
あまり酷ければ、駅で逗留するように指揮官には言ってある。
勇者殿に万が一のことがあっては、大変だからな」
ヘテランテラはそう言うと、第二師団から抽出した特別編成中隊

隊長を呼び出す。

やがて、四十代後半と思われる、歴戦の下士官という雰囲気を身に纏った体格の良い男性に連れられて、ガチガチに緊張した面持ちの若い男が入室し、二人はヘテランテラに最敬礼する。ヘテランテラが軽く答礼を返した後、二人はアービィたちに向き直り、同様の行動を取る。アービィはあまりの丁寧さに呆気に取られ、答礼を返せないうちに若者は姿勢を戻してしまった。

そのままの姿勢でアービィの答礼を待つ下士官は、微動だにしない。もちろん、最上級指揮官の執務室に入室するのだから、脱帽しているので右手を帽子の鍔に当てる敬礼ではなく、腰を折ってのお辞儀だ。腰を約４５度に折り、顔は相手をしっかり見る。答礼を見落としては、さらに失礼だからだ。

帽子の鍔に右手の指を当てる型の敬礼は、本来であれば目上の者に対して着帽のまま挨拶することは非礼に当たるため脱帽のうえお辞儀をするのだが、軍事行動中にそんな手間を掛けていられないとして、脱帽を簡略化したものだ。

アービィは、敬礼といえばこの世界でも帽子の鍔に指を揃えて当てることが一般的だったため、二人の行動に着いていけなかった。つまり、敬礼という言葉を、たった一つの動作として認識していた。

ようやく、敬礼ではなく普通のお辞儀として認識したアービィたちが、二人の将兵に深々と頭を下げたことによって、下士官の敬礼は解除された。ヘテランテラは、アービィたちが軍の礼を知らないことを察し、若者を咎めることもなく、直立不動の姿勢を保つ二人に楽にするように申しつける。

「若い方が特編中隊の指揮官、もう一人が副官だ。
雑事は副官が担当する。

遠慮なく、申し付けられよ」
ヘテランテラが言った後、自己紹介を互いに済ませ、翌朝の再会を約して顔合わせは終わった。

臨時の幕舎として接収した宿にはアービィたちの部屋も取ってあり、三人にはそれぞれに従卒が付いた。もちろん、ルティとティアには女性の兵だ。

「どんな些細なことでも構いません。
ご遠慮などなさらず、なんでもご命令下さい」
従卒たちは三人を部屋に案内し、直立不動の姿勢で言う。

「ちょっと、僕たちはそんな扱いをしていただくほどの者では……」
アービィが慌てて言う。

「とんでもございませんっ！！
師団長閣下直々のご命令でありますっ！！
それに、あのウェンディロフ様を数秒で倒されたとか。
そのような方の従兵を命じられることは、大変な誇りであります！！」
アービィに付いた若い兵が瞳を輝かせて言う。

「そうです。
それに、そのアービィ様を片手で捻るルティ様、それをお止めできるティア様も……」
女性兵が頬を赤らめつつ続けた。
言うまでもなく、その視線の先にはルティとティアがいたのだが、二人は背筋になんとなく寒気を感じていた。

アービィ対ウェンディロフの決闘の顛末はほぼ正しく、その前の控えの間でのルティによるアービィへの折檻は極めて歪んだ形で、第二近衛師団に流布されていたようだ。

頭を抱え込んだルティと、照れたり戸惑ったりと忙しいアービィを見て、ティアは苦笑いを漏らしていた。

部屋に荷物を置き、翌日まですることがなくなったアービィたちだが、下手に動くと従卒たちがすっ飛んでくるので気を使ってしまい、部屋から出る気がなくなってしまっていた。いつもであれば、街に繰り出して酒場にでも行くのだが、それにも付いてきそうだったし、一緒に飲むことはできそうもなかった。かといって、部屋で三人で飲もうにも、扉の外に人を控えさせて飲んだくれるのは気が引けた。珍しく三人は顔を合わせることもなく、それぞれの部屋に備え付けの蒸留酒を飲むだけで、早々と寝てしまった。

もっとも、絵に描いたような庶民育ちのルティとアービィは、別料金だと思って従卒に酒の支払方法を聞きに行ってしまったが。

その夜、アービィは夢を見た。

いつか、ベルテロイでドーンレッドから自分の正体を告げられたときと同じような始まり方をした夢だった。

――やぁ、僕。

「え？　狼？」

――うん。

「どこ行ってたの？　心配してたんだよ？」

――僕は、いらない子なんでしょ？

「え？　え？」

巨狼が泣いていた。
切れ長の瞳から、涙が溢れている。
当然会話は、音声を介するものではなく、脳裏に響く念話だった。

――僕は、いらな――
「そんなこと、ないっ！！」

アービィは思いっ切り狼の念話を遮った。
狼が思わす息を呑む。

――だって……
「いなくなっちゃって心配してたんだっ！！
いらなくなんてないんだよ！！」

アービィは気付いていた。
異世界人としての自分が完全に同化した今、狼もやはり自分なのだと気付いていた。
封じ込めたり、分離して消し去ったりする対象ではなく、常に共にあるべき対象だった。世界が人狼を恐れている以上、いつでも具現化させるわけにはいかないが、いつか好きなときに獣化できる世の中になって欲しかった。

――……
「僕は、僕の中にいなくちゃダメだ」

――でも、みんな僕のこと怖がるし、僕だって隠してるじゃないかっ！！
「……だけど……」

そう言われてしまうと、アービィには返す言葉がない。だが、狼を拒絶することは、自己否定になってしまう。

――ほら、やっぱり僕はいらな――

「そんなことないっ！！」

――前に自分で言ってたじゃない、ルティと暮らすのには、異世界人の人格と僕が僕から分離しなきゃって。

――そうだ。俺は分離しなきゃ還れねぇ。だがな、還る気がなきゃ分離する必要もねぇだろ？　おい、狼、お前はどうしたいんだよ？　消えちまっていいのか？　ルティと離ればなれになっちまっていいのかよ！？

黒髪に黒い瞳を持つ男が、突然闇の中から現れて狼の頭を力一杯叩いてから言った。

「そうだよ、ルティと離れなきゃいけなくなっちゃうよ。

……って、もう出てこないんじゃなかったの？」

アービィは驚いて訊ねた。

――あぁ、そのつもりだったし、完全に同化したからもう出てこれないと思っていたんだがな。あんまり俺がぐだぐだぬかすんで、苛立ってたら具現化しちまった。

男は苦笑いしながら言った。

結局、アービィも黒い髪と瞳の男も、狼も、同一人物だ。考えることは一緒。

狼は、自分の存在を肯定したい。して欲しい。ただそれだけのことで、拗ねているようなものだった。魔法陣の光を受け、大きなダメージを受けて暫くは、野生動物と同じように息を潜めて体力が戻るのを待っていた。その間に、この世界の人間としてのアービィが見せた迷いが、狼の言っていることだった。

異世界で二十五歳まで暮らしていた自分から見ると、アービィも狼も自我が形成されてから十年程しか経っていないためか、考え方がかなり幼く感じられる。まだ精神年齢が肉体の年齢に追いついていない感じだ。もっとも、二十五歳からの十年は、アービィと狼として成長していたため、異世界人としての成長はなかったので、実年齢であれば三十五歳になっているはずなのにそこまで成熟したという実感もなかったのだが。

アービィが厳しく言い諭すことは無理そうだったし、狼に至っては拗ねて駄々を捏ねているだけにしか見えない。

いくら否定しようとも、自殺すらできない不死性を持つ身体では、全てを受け入れて寿命が尽き果てるまで生きていくしかないのだ。

異世界の自分は、商社勤めだったが、研究開発部門に所属していた。継続性が求められた研究は、土日祝祭日など関係ない不規則な勤務シフトを組まざるを得ず、休みが合わない学生時代の友達や恋人とは、いつしか離れてしまっていた。共同で研究を進める仲間とは四六時中顔を合わせているからだろうか、仕事以外でまで付き合う気は起きず、たまに飲みに行くことはあっても社外ではほぼ没交渉だった。

営業や総務、企画の者たちは、他社との付き合いのためカレンダー通りの休みを取る必要があり、二週間近く顔すら合わせないことも稀ではなかった。そのためだろう、同僚とは名ばかりでこちらとは社内にいるときですら、仕事以外の内容はほとんど話す機会さえ

ない。

それなりにやりがいのある仕事だったが、人間関係のあまりの薄さに寂寥感に苛まれることが多かった。両親とも縁が薄く、家庭に良い思い出もほとんど無いからか、郷愁を感じることはない。既にあの世界に未練を感じることはほとんどなく、この世界に骨を埋める気になっている。

この世界の人間としてのアービィにも、異世界での記憶はかなり戻っていた。確かに便利な世の中だった。そして、日本は平和な社会だ。町から町へ移動するだけでも、命の危険と隣り合わせになるこの世界とは大違いだった。

だが、そこへアービィ・バルテリーとして戻りたいという欲求は、まるでない。異世界人としての自分をそこへ戻したいとは思っているが、その自分でさえももう戻りたいとは思わなくなっていた。

狼としての自分は、異世界から召喚された自分が、若返らされ、異世界での言葉も含めた記憶ごと封じ込められた器だった。欲求の赴くままに原野を駆け、森を潜り抜けていた。食欲を満たすため、人の姿になってフォーミット村の入り口に立ったときは、この世界の言葉すら解らなかった。

もし、異世界人の魂が封じ込められていなかったら、そこら辺にいる人狼と同じような性格が形成されていのだろう。だが、無意識下に存在していた前の世界での人格と記憶が、この器にされた人狼を殺戮マシーンへと成長させることを拒んでいた。そして、ルティ一家に拾われて人狼として迫害されることもなく、人への憎しみや怨みを持つこともなく、慈しまれながら育てられた。その結果として、今のアービィとしての寛容を絵に描いたような人格や、ほとんどの人に対して敵意というものを持たない性格が作られている。

狼が自分をいらない子だと感じていることの理由の一つは、時と

して爆発しそうなくらいの殺意を抱いてしまう性格を、人狼の本性だと思い込んでいることに拠るものだった。

人狼が人間と共生できるはずがないという常識は、この世界では強固なものだ。狼としてのアービィ自身、見聞きしてきた話からもそう思う。だが、自分はほとんど問題なく、人間との共生を果たしている。では、他の人狼が今からそうなれるかと言われたなら、それは無理だということも理解していた。矯正などできるとは思ってもいないし、できると思うほど思い上がってもいない。このまま人間と暮らし続けることは、他の人狼に反発や嫉妬、妬みといった負の感情を喚起してしまうのではないかという恐れも感じていた。

しかし、アービィは気付いていないことがある。

人狼はそのほとんどが、徹底したインディビジュアリストでエゴイストだ。狼としてのアービィが育った狼の里は、たまたま群れていただけに過ぎない。フォーミット村で暮らすようになったアービィを鍛えていた狼も、血縁者というわけではなく、ただの気紛れからだった。フォーミット村を襲わなかった理由も、アービィがどうされるか見てみたいという欲求からだった。もちろん、森に迷い込んだフォーミットの村人が、群れに属していた人狼に襲われ痕跡さえ残さず食い尽くされるということはあった。

アービィが人と暮らすことについても、物好きな奴がいる、という程度にしか他の人狼たちは感じていない。利害の衝突があれば、人狼同士の殺し合いすら厭わない生物だ。仮にアービィがバードンと組んで人狼狩りに従事したとしても、それを裏切り行為だと糾弾するような人狼は、ただの一人も存在しないだろう。そして、アービィが人狼救済に走ったとしても、利がないと思えば協力もしないし、害がないと思えば敵対もしない。

狼としてのアービィが気にするほど、他の人狼たちは別個体の生き方に干渉する気もないし、同胞意識など持ってはいなかった。言い換えれば、アービィ自身が気にする必要もないということで、異世界人の自分はそれに気付いていた。

――いつまでぐだぐだ抜かしてるんだ？　いい加減にしろよ。狼、お前は存在を認められたい。俺たちはそれを認めたい。それでいいじゃねぇかっ！！

黒い髪と瞳を持つ男が狼を蹴り飛ばし、闇に消えていく。
今度こそ出てこねぇぞ、と言いながら。

――僕は……

自分を抱きしめるのは恥ずかしいなと思いながら、アービィは無言で狼の鼻面を抱きしめていた。誰がなんと言おうと、最後は自分が自分を肯定しなければ、自我を持ってしまった生物は生きてはいけない。

次の瞬間、狼の姿が朧気になり、アービィの身体に浸透していく。それを期に、それまでどこにも感じていなかった狼の気配が、確かに体の中に感じられるようになった。どこにいる、というのではなく、自覚したといってもいいかも知れない感覚だ。

異世界人としての記憶や、狼としての感覚が自然に溶け合い、一つの魂になっていく。不思議な感覚が全身を包み込み、アービィは再び深い眠りに落ちていった。

第６２話

翌朝、陽が昇る前から幕舎前の庭は、喧噪に包まれ、命令と復唱が飛び交っていた。
暫くすると重要な任務を前にした緊張感に眦を決した、キビキビした動作の兵たちが走り、報告とそれに対する新たな命令、そして復唱が其処此処から聞こえてくる。

その喧騒の中に、兵士とは違って少々緊張感が足りない表情の三人が近付くと場の雰囲気は一変し、兵たちだけでなく将校の動きまでが殺気立つ。将兵にとってみれば、今回の任務は戦ではないものの、第三王子が迎え入れた国賓級人物の護衛だ。
もし、任務中に失態を犯せばそれはすぐに師団長、つまり第三王子まで報告が上がり、それは出世街道から放り出されることを意味し、この人物たちの覚え目出度くなれば出世に直結する。もちろん、アービィたちに査定などする気は欠片もないのだが、将兵たちはそのように理解していた。

出発までの僅かな間、ルティとティアはアービィの微妙な変化に気付いた。

「ねぇ、アービィ、狼が帰ってきたの？」
ルティが訊ねる。

「え？
ルティ、気付いたの？」
不思議そうにティアが聞いた。
当然、ティアも気付いていたが、ルティがアービィの中に潜む魔

獣の気配に気付くとは思っていなかった。

「うん、帰ってきた。
もう、どこへも行かないよ」
穏やかな表情でアービィが答えた。

アービィは、ルティの感覚が鋭くなっていることを不思議には思わなかった。何故かは解らないが、ルティにも判るだろうと感じていた。
上手く言葉では説明できないのだが、狼は帰ってきたのではなくアービィと完全に魂が溶け合っていた。器として用意された狼と、異世界から召喚され放り込まれた魂、そしてアービィという魂が完全に一つになっていた。
おそらく、アービィという個体に対して鋭敏な感覚を有するルティであれば、その漂わせている雰囲気に狼を感じ取ることはできたのだろう。

「そう、よかった。
よかったね」
ルティは安堵の言葉を口にしてから両手を後ろで組み、アービィの胸板に自分の額を付け、狼に意識を向けて言った。

ティアは、アービィの表情が以前より穏やかになっているのを見て、これで良かったんだと納得している。
人狼に対する生理的と言っても過言ではない恐怖がなくなったわけではないので、この世界から人狼という生物がいなくなってしまえばいいという感情は残っている。だが、アービィが人狼を完全にコントロールできるようになれば、人狼という生物種にとっての朗報だということも理解できる。
生まれてから人格が完全に形成されるまでに、充分な愛情と人間

としての教育を受ければ、通常の人となんら変わらない生活を送ることができる。アービィがそれを証明できれば、忌み嫌われるだけだった人狼にも、一般社会での生存権を得る可能性が出てくる。そして、アービィはそれを証明しつつある。

そういえば、人狼と人の間に不幸にしてできた子供の受け入れ先は、社会は用意していない。アービィがストラー王家からもらった家は、風の神殿の管理下で孤児院として活用されることになっている。これと同様に、不幸に行為の結果生を受けた人狼後を引く子供たちを、受け入れることはできないだろうか。誰が主体になって管理するのか、神殿か王家か、国家によって委託された第三の機関か、それについてもまだ何の構想もないが、何れかがやらなければならない事業だろう。全てが上手くいくと思うほどティアは楽観主義者ではないが、やってみる価値はありそうだ。

この旅の終わりまでに、アービィやルティとその話をしてみよう。それからランケオラータやエンドラーズにも、バードンにも話してみよう。私の成すべきことが見つかったかもしれない、ティアはそう考えていた。

やがて、特編中隊の出発準備が整い、従卒がアービィたちを呼びにきたことでティアの思考は中断された。

アービィたちを馬車に迎え入れ、副官が従卒たちを連れて同乗する。

それを見届けた隊長が列の先頭に立ち号令を掛けると、特編中隊は動き出した。

天候が回復した街道は、それを待ち焦がれていた人々で早朝にも拘らず活気に溢れていた。その人々や駅馬車を追い抜きながら、中隊は進んでいる。もちろん、中隊の列を邪魔しようという者などい

るわけもなく、対向する人々や駅馬車も近衛師団旗が見えると道を譲っていた。
アービィたちの姿は、馬車の周囲を囲んだ騎士小隊によって隠されていた。当然中からも外は見えず、景色を眺めて暇を潰すこともできないのだが、ウェンディロフが率いる軍とどこですれ違うか解らないため、やむを得ない措置だった。

副官と従卒は、馬車の中では必要最小限の会話しかせず、アービィたちから話しかけない限り三人の会話に入ることもなかった。従卒たちは話しかけられると喜色満面なるのだが、副官は最重要人物に自ら言葉をかけるなど無礼と心得ているのか、それともこのような若造共が自分より上の立場であることが気に入らないのか、はたまたはしゃぐ従卒たちの態度が気に喰わないのか、終始無表情を保ったまま馬車の中に座っていた。

「あの、ちょっと質問なんですが、よろしいでしょうか?」
しばらく続いた沈黙を破り、アービィが副官に訊ねた。

「はい、御用でありますか、アービィ様」
謹厳実直を絵に描いたような副官は、背筋をピンと伸ばしたまま答える。

「火の神殿で、二日か三日滞在する余裕は取れますか?」
アービィは、手持ちの武具に、風だけではなく、火の神殿でも祝福法儀式を施すつもりだった。魔法陣からの光は武器で防ぐことはできない。防具の光への耐性は、上げておいて損はないはずだ。できれば全ての精霊神殿で祝福法儀式を施してから北の大地へと行きたいところだったが、さすがにその時間的余裕はなかった。全て回っていたら、四十日近く掛かってしまうだろう。

「これは、異なことを。
この行軍はアービィ様のために行っているものあります。
アービィ様のご都合次第で、馬の脚の限界まで急ぐことも、ここで何日逗留しようと意のままであります。
ご遠慮などご無用であります」
表情を変えるどころか、眉一つ動かすことなく副官は答えた。

確かに、言われてみればその通りで、ウェンディロフを殺させないためにアービィを隠しているのだ。アービィが急ぎたければ急ぐし、留まりたければ留まる。それに、考えてみればアルギールよりリジェスト寄りのグラザナイで、鉢合わせする危険性はないと思ってよい。

「はぁ……
では、手持ちの武器防具に祝福法儀式をしていただく間、留まっていただきます」
アービィはそう頼んだ。

考えてみれば、アルギールを過ぎてしまえば護衛の必要はないのだが、ヘテランテラはリジェストまでの同行を命じている。そのうえ旅費も、全て近衛第二師団持ちだ。パシュースとの話は付いているのだろうが、報酬は別にもらえることになっている以上、これでは待遇が良すぎるのでアービィはどうしても遠慮がちになってしまっていた。

アービィたちがラシアスの王都アルギールに向けて動き出した頃、ランケオラータとレイ、ルムを乗せた馬車は、クシュナックまであと一日の行程だった。

生活に必要な物資は、後を追うように派遣されたハイグロフィラ公爵軍とカトスタイラス領警備軍から抽出した、総計六百名規模の独立混成大隊が運搬する手はずになっている。その大隊は、今頃ベルテロイで祝福を受けているはずだ。

どちらの軍も諸侯軍の編成においては近衛に相当する精鋭たちで、軍律や統率には全く問題はない。

大隊長が北の大地に残る者たちを含めた総指揮を執ることになっているが、全ての権限はランケオラータに集約させてあり、意識せず理想的なシビリアンコントロールになっていた。

ストラーを経由するランケオラータに代わり、北の大地までの行程中の全責任を負う大隊長には、インダミトのバイアブランカ王からラシアスの摂政ニムファ宛の親書が託されている。

総指揮官が大隊を離れるわけにはいかないため、司令部から主席参謀が大隊とは別ルートで先行してアルギールに向かい、摂政ニムファに謁見を求める手はずになっていた。

ラシアス内の通過とウジェチ・スグタ要塞での休養の許可を求めるだけでなく、最北の蛮族への戦略を納得させるための重要な任務だ。

伝統的に北の民に対する偏見と差別意識の強いラシアスの為政者たちは、最北の蛮族の驚異が中央の民と平野部の民とを順次押し下げていることなど、北の民の内紛としか見ていない。勝手に自滅してしまえ、くらいにしか考えていなかった。

だが、バイアブランカは、この巨大な市場となる可能性を秘めた大地に、平和をもたらすことを望んでいる。最北の蛮族に対し軍を進めてはいるが、殲滅戦を行う意志はない。彼らを煽動する勢力を討ち鎮め、北の民同士の講和の仲介をするつもりでいる。もちろん、

緒戦で全てを片づけられると考えるほど、バイアブランカは楽天家ではない。暫くの間は、最北の蛮族と中央の民の勢力圏の境界線に駐留し、最北の蛮族の侵略を撃退しつつ、講和の機会を窺わなければならないだろう。バイアブランカが平和を希求する善意の王ということではなく、商業国家であるインダミトは平和の中でしか繁栄できないという戦略の下、巨大な市場を作り上げ国を富ませるという義務感から動いているものだった。

これを手ぬるいというラシアスの閣僚もいるだろうが、ニムファが十四年前に受けた最北の地に魔王が降臨したという神託があるため、彼女の許可は取りやすいと考えられる。自らの手を汚さずに脅威を払えるのであれば、利己主義者が多いラシアスの閣僚からの領内通過の許諾も簡単に取れると思われた。

クシュナックではランケオラータとルムの護身用の武器に、風の神殿で祝福方儀式を施すため、三日間滞在する予定でいた。後を追う兵の武器は、水の精霊の祝福方儀式済みで、こちらは火の神殿で追加の儀式を施す予定だ。兵装によっては、金貨千五百枚近くの莫大な予算が掛かってしまうが、アービィから絶対に必要だと言われていたので、生活雑貨をかなりの量を諦め、こちらに回すことにした。もっとも、諦めた生活雑貨は、ルムから見れば贅沢品でしかないのだが。

「義父上様が、血の涙を流していたような気がするのですが……」
「気にするな。
半分は国持ちだ。
父の血涙はそのせいかもしれんな……」
レイの呟きに、ランケオラータも顔をひきつらせて答えていた。

「楽しみだな、ランキー。
どんな苗を、用意してくれてるんだろう。
俺たちに扱いきれるのかが、心配なんだが……」
ルムが期待半分、不安半分に言った。

「安心しろ。ついでに期待しておけ、ルム。
いろいろあるし、かなり大量だぞ。
それからな、技術指導に神官殿を派遣してくださるように、俺が頼んでおいた。
もちろん、布教なんぞしないからな」
ランケオラータが答える。

「かなり大量って、どうやって運ぶのです？」
レイが訊ねた。

「それは、神官殿がやって下さる」
こともなげにランケオラータは答えた。

もとより精霊の神官は布教などしていないので、全く心配はしていない。神官としては完全な善意であり、金品や布教といった見返りを求めることなどあり得なかった。

マ教は救済や安寧を求めるための宗教であり、信者を増やすことは迷える子羊たちを救うための主たる活動だ。言うまでもなく、寄付という形のカネ集めのためでもあり、活動資金を調達しなければ何も救済などできるはずがない。もっとも、裏でどんな汚いとこが行われているか、誰でもカネが集まればどうなるかくらいは知っていた。

だが、精霊神殿は信仰の対象ではあったが、宗教とは微妙に異なるものだった。精霊の存在を信じるだけで良く、戒律も教義もほとんどないに等しい。精霊を裏切らない。ただそれだけで、呪文を使えるようになれるという恩恵がある。

だが、それだけしかない、とも言えた。精霊は、何の救済も、日々や死後の安寧も保証などしてくれない。

それでも人々は、物理法則を無視した神秘の技を授けてくれる精霊に、深い信仰心を持っている。目に見えない安寧や魂の救済より、目に見える奇跡を、ということだ。それ故か、マ教がしゃかりきに信者や寄付金集めに奔走する姿を後目に、精霊神殿には労せずしてそこそこの寄付金が集まっていた。

布教は行わない、生活費はほぼ自給自足、神殿を豪奢にするわけでもなく、必要最小限の維持改築のみ。では、何にカネを使うかというと、神秘の解明だ。悪霊や悪魔に対抗する祝福方儀式の確立や改善のため、北の大地の呪法を調査したり、マ教だけでなくあらゆる宗教の悪魔払いについて調査研究を怠らない。エンドラーズが修めた『持続』の効果も、こうして編み出されていた。

つまり、今回農業技術指導で北の大地へと赴く神官も、この探求のために行くのだった。南大陸の国家が後押しするだけでなく、北の民からの招聘だ。こんな機会はまたとない。もちろん、指導の手を抜くつもりなど、彼らは欠片も持ち合わせていない。民の安息日や夜を利用しての探求になるのだが、彼らはこれを厭う気持ちもまた、欠片も持ち合わせていなかった。

このとき、風の神殿では、用意された様々な野菜や稲の苗や種を前に、エンドラーズが自分を行かせろと、駄々をこねていた。派遣予定の神官としてもこの役を譲る気などさらさらなく、さながら子供同士の喧嘩のようだった。

クシュナックの風の神殿では、エンドラーズがランケオラータたちの到着を、今や遅しと待ち構えていた。

既に運搬用の馬車には、アスパラガスやジャガイモ、ダイコンにタマネギ、キャベツやハクサイ、トウモロコシ、他にも様々な野菜の苗や種、そして寒冷な気候に強い種の種籾が運び込まれ整理されていた。幸いなことに、ストラー北部にも大規模な泥炭地帯があり、野菜類の大半はそこに適応したものか、ある程度の耐性を持つものが選ばれていた。これを五台の馬車に積み込み、それぞれに御者と神官が一人ずつ乗り込む。

この他にエンドラーズの独断で、多くの家畜と家禽が後を追うことになっている。もちろん、飼料の種や苗もつけてだった。

中央部以北の詳細な情報がないため、場合によっては農耕より酪農の方が、その地域に向いているかもしれないという、エンドラーズの判断と配慮だった。こちらにも馬車が五台ほど同行するが、風の神殿だけでは人員を賄いきれないため、地水火の神殿に応援を要請していた。

「暫く振りですな、ランケオラータ殿。
ルム殿のご首尾は如何でしたかな？
ときに、そちらの可憐な女性は、もしや？」

エンドラーズは、北の大地へ渡れないという残念さを身体全体に滲ませながら、訊ねた。

「エンドラーズ様も、お変わりないようで何よりございます。
ルム様のご首尾は上々。
さらにエンドラーズ様のご助力で、思った以上の成果で怖いくら

いでございます」ランケオラータが歓に堪えないという表情で礼を述べる。

「この度のご助力、誠にありがとうございます。
北の民を代表して礼を申し上げます。
そのうえ、指導に当たる方々まで派遣していただけると聞きました。
我らにできる恩返しがあれば、何なりとお申し付けいただきたい」
ルムが続けて頭を下げた。

「私はレイテリアス・ヒュデロッティ・ボルビデュスと申します。
近くハイグロフィラ家に嫁ぐ身でございます。
まだ、ボルビデュス家の者ではありますが」
レイが自己紹介する。

「なんと、ランケオラータ殿も隅には置けませんな。
しかし、レイテリアス殿は北の大地へ行かれると。
ルム殿を前に失礼極まりないことですが、なんて勇気のある方だ」
エンドラーズは眉を歪ませて言う。

「何、お気になさらぬよう。
まさにその通り。
治安が良いとは、私からは決して言えぬ地。
感謝に堪えませんな」
ルムは、レイが来てくれることには心底感謝している。

既にレイは北の大地の商品展開を考えている。
良質な商品を適価で南大陸に供給することが、北の民の地位向上に繋がり、ひいては両大陸の人的交流に繋がっていくことを、レイはこのときまでに理解していた。

経済による征服であっても、将来血を流すことになってしまうとも気付いている。

良質な商品には、北の大地で産み出されたものだという証明が必要だ。そうでなければ、あっと言う間に粗悪な模造品で北の民を貶めようとする者や、そこまではいかなくとも粗悪品で一儲けしようという者が出ることは、考えるまでもない。

例えばだが、バイアブランカ王家を含む四王家やベルテロイのマ教神殿、各地の精霊神殿でもよいので南大陸を代表できる機関が承認し、ルムなりの誰か北の民のリーダー的立場の者が認定する印のような物があれば良い。南大陸から北の大地へ売りに行く商品にしても、逆側からの承認と認定をすればよい。

幸いにも北の大地は、呪法が発達している。

偽造に対して呪いを発動させることはできなくても、特定の形を指定して、それを特定の染料で描かなければ、溶けて無くなるくらいのことはできよう。レイは誰かが苦労して開発した技術なり意匠を勝手に使い、開き直る輩に容赦など必要ないと考えている。アービィならどう考えるかしら。レイはそれが気になっていた。

アービィたちを護衛する特編中隊は、ソロノガルスクを出てから五日の行程で、とアルギールのほぼ中間まで差し掛かった。

幸い、河川の増水も収まりつつあり、南から順次渡河できるようになってきていた。中々にきわどいタイミングで、アービィたちが近付くまでは、渡河など思いも寄らないほどの増水状況だったらしい。まるで水の精霊の加護を受けているかのようなタイミングだと、周囲の住民や駅馬車路線の宿場の人々から言われていた。

先行させていた偵察小隊からは、北へ行けば行くほど河川の増水

の度合いが酷く、大陸最大のグラース河の増水が治まらないことには、そこで足止めになりそうだいという報告が届いている。ウェンディロフ率いる大隊もそこで足止めされているため、渡河の際に確実にすれ違ってしまうものと思われた。

この河を渡れないのであれば間道を伝い、ベルテロイからアルギールを結ぶ街道に道を変えるのだが、かなりの遠回りになることを覚悟しなければならなかった。さらに間道は細い道が続き、途中にある集落も小規模なものばかりで、大隊規模の軍勢が行軍するには向いていない。

騎士階級と兵だけで構成された一般の大隊であれば、野営など躊躇うものではなかったが、貴族階級が指揮官とあってはそうもいかないという事情もあった。

また、いっそ橋自体が流されてしまったのであれば、間道を行くしかないのだが、橋は水面下に沈んでいるだけで健在だ。なぜなら、増水時でも水流の圧力で橋が破壊されないように、欄干などの水の抵抗が大きくなるような構造物は廃され、かつ通常の水位からさほど高くないところに設置されているからだ。この構造であれば、増水時に橋が流され、その廃材が川をせき止めて洪水を引き起こす可能性も低く、橋が流されたときの再建も低コストで済ませられるメリットがあった。

雨も上がり、後は水が引けば良いだけなので、ソロノガルスク側に多数の情報を抱えた間諜たちが、アルギール側にウェンディロフ大隊が待機している状況だった。

その状況に特編中隊が乗り込むということは、大量の間諜がいる中で行動することになる。それではアービィたちを秘匿するなど、どう考えても無理な相談だ。間諜の中にウェンディロフのシンパがいれば、渡河の許可が下りた途端に注進に走ることは間違いなく、

そうなれば橋のどちらかで決闘騒ぎになることは、火を見るより明らかだ。

そのため、特編中隊は偵察小隊からの報告を受けてから敢えて進軍を止め、グラース河直前の宿場からさらに一つ手前の宿場で待機していた。

このとき、グラース河の対岸では、ウェンディロフが焦っていた。ビースマックの政変の報に接し、摂政ニムファは果断に救援部隊の派兵を決断した。もちろん、そのままビースマック王都シュットガルドを制圧し、ラシアスに都合の良い傀儡政体を作り上げる腹積もりでいることを、ウェンディロフは理解している。いつぞやの汚名返上とばかりに宰相コリンボーサに近付き、必要以上の熱意と少々の賄賂、そして以後コリンボーサの派閥に入り忠誠を誓うことによって、派遣部隊の指揮官への推挙を勝ち取った。

彼の武の才は、北の民の進入に際してはかなりの程度有効だったため、ニムファもこれを拒絶するような理由はない。

ウェンディロフはこの戦で戦功を挙げ、未だ相手を決する事のないニムファの婚約者への名乗りを挙げるつもりでいた。ニムファの父である現王ロベリア・カーディナリス・ルドウィジア・ネツォフ・グランデュローサは、体調を崩したまま床に伏せり、どう楽観的にみても老い先短いと考えざるを得ない状況だ。現王の崩御の前に婚儀を整え、成婚した上で現王を見送る。国としては最高指導者不在という事態は避けたい。そう遠くない未来にニムファの婚儀は、現実的なものとなるはずだった。

その重要な戦を前にして、雨が足を止め、河が行く手を阻んでいる。

グラース河近くの宿場で最も高級な宿を接収し、臨時に定めた幕

舎の一室でウェンディロフは荒れ狂っていた。どいつもこいつも気合が足りない。断じて行えば鬼神もこれを避くというではないか。河川の増水がいかほどのことというのだ。雨中の行軍を厭う等、光輝あるラシアス軍、それも武勇の誉れも高いウェンディロフが率いる軍にあるまじき怠慢だと、喚き散らしている。

だが、橋が沈んでいては、どう頑張っても渡河などできるはずもない。子爵の権威を以ってすれば、それ以上の爵位を持つ者以外は思い通りに動かせるものと思っていたが、自然の力の前では人は無力だということを嫌というほど知らされていた。

既に王都アルギールを出た直後から降り始めた雨は十日以上も降り続き、一昨日辺りからようやく治まる気配を見せたが、河川は上流域に降り注いだ水を吐き出し切れていない。この地に逗留して早五日が過ぎてしまっている。

いつまでもここで手を拱いていては、ビースマックの政変が現体制、反乱側のどちらにせよ方を付けられてしまうだろう。そうなってはウェンディロフ大隊が国境を越える大儀が失われ、彼の野望もそこで潰えてしまうことは確実だった。如何に不安定な状態にあるとはいえ、王からの救援依頼もない状況で強引に他国の首都に進駐するような暴挙は許されるはずがない。現体制にしろ反乱側にしろ、今現在ビースマックの権力を握る者がラシアスに対して戦を仕掛けてくるというのであればともかく、内政に専念するというのであれば、ウェンディロフ大隊の行き場は完全に失われてしまう。

その焦りの中に、翌日には水も引き渡河できる見通しだとの報告が上がってきた。

彼は、対岸にアービィがいることを、この時点ではまだ知らなかった。

夜、アービィたちを含む特編中隊は、いくつかの宿に分散して泊まっている。
その中で指揮官や副官、参謀たちとアービィたちが泊まっている宿は、司令部として借り上げられていた。
従業員たちには緘口令を敷き、外出も兵に同行させるという機密保持体制の中、ロビーにはアービィと指揮官、そして副官の三人が集まっていた。

「アービィ様、どうやら進退窮まったようであります。
どうやってもウェンディロフ様の軍勢をやり過ごすことは適わぬ様子。
そこで、中隊はこのまま進み、アービィ様には騎士で構成した一個小隊をお付けいたします故、側道にてご待機願いたくあります」
指揮官と副官が相談した結果、街道から外れ山岳地帯へ向かう側道にアービィたちを隠し、本隊は堂々と進軍してウェンディロフ大隊とすれ違う作戦を提示してきた。万が一ウェンディロフにアービィについての情報が漏れていた場合にも、隊列を改めさせればよい。だが、ヘテランテラ直属の中隊を臨検する度胸のある貴族など、この国にはいるはずがない。もし、アービィたちの姿が遠望でもできてしまえば、ウェンディロフは決闘を申し込んでくるかもしれないが、いないものはどうしようもないはずだ。

問い合わせが来たところで、殿下直々のご命令によるウジェチ・スグタ要塞視察と言って、後は知らぬ存ぜぬで通せば良い。
こちらの指揮官が騎士階級だからと、身分の違いを持ち出したところで、子爵如きが近衛師団をどうこうできるはずはないのだった。

「お気遣い、ありがとうございます。
でも、もうバレてると思いますよ。
さっき、早馬が出たみたいですし」

アービィは、せっかくの作戦が実施前から無駄になった偶然を、残念そうに告げた。

この宿場にも間諜の手が伸びていたのではなく、それはアービィの動向を探るためではなく、宿の都合で偶然居合わせてしまっただけだった。それが運悪くウェンディロフのシンパだったので、早速注進に走ったということだった。当然グラース河で足止めなのだが、渡河の迅速さは個人と隊列を組まなければならない軍とでは比べるべくもない。欄干のない橋であるため、通常の隊列ではなく、それ用に組み直す必要があった。ウェンディロフたちは、アルギール側でそれを待っているだけで良い。常備軍が近衛師団に道を譲るのは当然で、近衛師団といえど摂政の命を受けた軍を、わざわざこちらが行軍を中断して足止めするわけにはいかないからだ。

「では、アービィ様はいかがなさるおつもりでありますか？」

重大な齟齬を来したにも拘わらず、副官は取り乱す様子も見せず、慌てることなく言った。

「いくらなんでも、天下の往来でいきなり決闘なんてする人はいません。

立会人やら場所の確保やらの準備も大変でしょうし。

改めて場所と時間を設定しようにも、そのせいでただでさえ遅れてる行軍を、そんな理由でさらに遅らせるわけにはいかないでしょうから、何も起きませんよ。

せいぜい僕の顔を見に来る程度でしょう。

それに、あの人にはもう一回決闘やるような度胸は、ないと思いますよ」

一悶着くらいはあるだろうとは思っているが、ヘテランテラの心配は杞憂に終わるだろうと、アービィはかなり楽観している。

ウェンディロフの剣の才は、一般人よりは優れているだろうし、

アービィがニムファに謁見した場においては、確かに右に出る者はいなかったのかもしれない。だが、立ち合ってみて判ったが、彼の剣は道場剣法の域を出ていなかった。構えからして合図がなければできていなかったし、アービィの動きを予測できなかったうえ、目がついていっていない。剣の修練は積んでいるのだろうが、戦場では相手が同じ武器を申し合わせてくれる保証などあるはずもない。

本気で立ち合えばどうなるかくらい、いくら彼でも判るはずだ。

アービィは、そう考えていた。

「分かりました。

ですが、小官といたしましては、最悪の事態を想定する必要があると思われます。

万が一、彼の子爵様がその場で決闘を申し込んできた場合、つまり後日日を改めてと申し込まれた場合であまります。

アービィ様のご意向に沿って行動するよう、師団長閣下からはご命令を受けておりますので、その際のご対応をお決めいただきたくあります」

ほとんど喋ることのない指揮官に代わり、副官がアービィに問う。

本来であれば、最悪の事態を想定し、その準備をするのは指揮官の役割だ。

だが、今回指揮官に任じられた騎士階級の若者は、まだ中隊規模の部隊を指揮した経験もなく、血を見る可能性のある作戦に従事したこともなかった。国賓級人物の護衛部隊の隊長としては甚だ心許ない人選であるが、北の民の侵入を撃退した経験を豊富に有する副官を付け、彼の取る行動を通して若者に教育を施そうというヘテランテラの心積もりだった。

もともと護衛など必要としないアービィたちに敢えて護衛として付けることで、副官とアービィたちの協議は極力血を流さないよう細心の注意を払う内容になるはずだ。作戦とは、何が何でも敵を殲

滅するということではない。戦略に基づいた目的があり、それを達成するための手段が戦術、作戦と呼ばれるものだ。

この作戦の元となる戦略は、アービィたちを、安全且つ迅速にウジェチ・スグタ要塞まで送り届けるということだ。

そしてそれは、同時に北の民に経済という概念を伝え、その生活を改善することによって南下の意志を減少せしめ、両大陸の融和を図るべく派遣されたランケオラータ・カトスタイラス侯爵の護衛しつつ、最北の蛮族を討ち鎮め、北の大地に安定をもたらすためという、南大陸の大戦略に基づく。

そのための戦術としては、途中の障害を全て力で取り除く必要はなく、避けられる戦いは避け、その時間を行軍に費やすべきであった。もちろん、全ての戦いから逃げろということではない。近衛師団の名誉も守りつつ、ということもある。

戦略を全うするための作戦は、朝令暮改では困るが臨機応変であるべきだ。

「そうですね。
受ける必要はないですね。
あの人に北の大地まで来る度胸があれば、あっちで受けてあげますよ。本気で。
ただ、どうしても受けろと言ってくることは、殿下の軍に対して弓を引くということで良いかと、言ってやればよいかと思います」
アービィは答えた。
威光や権威というものは、このような時こそ使うべきものだ。
堂々と進軍し、ウェンディロフ大隊に道を譲らせれば良い。

「では、川岸まで進出でありますか？
それともこの場で彼らの通過を待ちますか？」
アービィが、本気で、と言ったときの表情に背筋が寒くなった指

揮官が、おずおずと訊ねる。

「川岸まで行きましょう。

宿は満員でしょうから、河原で野営ということで。

幸い、雨も上がって、場所によっては地面も乾いてきてるでしょうから。

渡河の許可が下りたら、すぐに橋に出られるように待機しましょう。

ここではすれ違うのに狭いですし、宿場や住民に迷惑です。

広い、河の向こう岸ですれ違いましょう。

それに、近衛第二師団の中隊が道を譲ったとあっては、後々拙いのでは？」

アービィが断を下す。

「承知いたしました」

副官が我意を得たりとばかりに、満足げな表情を浮かべて、大きく頷く。彼は、これで駆け出しの上司に、駆け引きの経験を積ませることができるな、と考えている。

それに、叩き上げの副官としては、もちろん諍いが無いに越したことはないが、近衛は常に堂々とあるべきと考えていた。

ヘテランテラから、アービィたちを無事ウジェチ・スグタ要塞まで送り届けよ、との厳命を受けているとはいえ、急造の大隊如きに道を譲るなど、末代までの恥晒しと思っていたところだった。騎士階級に属する中隊指揮官は、相手の総指揮官が子爵という貴族であることに腰が引けてしまっているが、これは性根を叩き直す良い機会と教育係を兼ねる副官は考え、アービィの配慮に感謝していた。

「では、特編中隊は、明朝夜明けを期してこの地を出立。

夕刻前までに河原まで前進し、そこで野営。

そのように進めてよろしいでしょうか？」
副官が指揮官に確認するように行程の案を提示し、アービィと指揮官が了承したことで、この夜の軍議は終了した。

「ちょっと、またこの間みたいな騒動は勘弁してよ。
それに殿下のお心遣いを無にするつもり？」
宿の一室でルティがアービィに喰って掛かる。その横では、ティアが黙って考え込んでいた。

ルティにしてみれば、万が一にも決闘騒ぎになることは、絶対に認められない。ヘテランテラの配慮が無駄になってしまうのだ。

「そんな気はないよ。
大丈夫。
聞くところによると、あの人は周囲に、あれは油断だとか、素手に惑わされたとか言ってるらしいじゃない。
そんな人が、僕の前に立てるとは思わないよ。
意外と目の前にいても、気付かない振りするんじゃないかなぁ……」
アービィは、まるで意に介していない。

「でも、万が一によ、あの人が挑んできたら？」
ティアもこんなところで足踏みはしたくないし、無駄な人死には避けたい。後から遺族に仇と狙われては、割に合わなすぎるからだ。

「う～ん……
ティアが隠れて『誘惑』掛けちゃって、ラシアスからビースマックに入った時みたいにさ……
それか、立ち合うだけはして、さっさと絞め落とすから、その寸

前に『誘惑』掛けて記憶飛ばしちゃうとか？」
アービィも少々不安になったか、消極的な提案をした。

「卑怯ね～
いいかも、それ。
せっかくだから絞め落としちゃえば？」
ルティが同意する。

「勇者とか英雄とは思えない発言ね。
ま、いいわ。
やってあげる。
狼が還ってきてから、ちょっと変わった？」
ティアもそれで無事に済んで、足止めされないのであれば、拒否する理由はない。

アービィは提案が受け入れられてほっとしているが、内心では狼じゃなく『俺』のせいなんだよな、と呟いていた。

第６３話

「アービィ・バルテリー殿がこちらの隊におられると聞いた。私は、ラシアス王国子爵ウェンディロフ・ラティフォン・ドン・テネサリム。是非、お目通りを願いたい」

朝のグラース河川敷に、ウェンディロフ子爵の大声が響いた。

昨夜、アービィたちがグラース河の河川敷で野営していた頃、増水が収まり沈下橋が水面から顔を出すと同時に、一騎の早馬がソロノガルスク側からアルギール側へと駆け抜けていた。

「夜分遅くに恐れ入ります。ウェンディロフ子爵様の隊とお見受けいたします。急ぎ、お耳に入れたいことがございまして、まかりこしました。お取次ぎをお願いいたします」

商人に姿をやつした間諜が、ウェンディロフの投宿する宿の入り口で口上を述べ立てる。

「何事か。ここをウェンディロフ様の幕舎と知っての狼藉であれば、容赦はできんぞ」

衛兵を務める兵が、間諜の正体を悟ることなく威嚇した。

「それ故に、参上した次第。どうかお取次ぎを」

ここで騒ぎを起こすのは得策ではないと判断した間諜は、身分を申告することなく、辛抱強く兵に訴えかける。

だが、子爵の威を借る兵は、自分が兵として取り立てられるまで同じ階層に属していた姿の者を、完全に見下していた。相も変わらず、この喧しい下心の塊をどうやって追い払うか、そればかりを考えていた。おおかた、儲け話や子爵に取り入るために、ここへ来たのだろうと考えている。夜も更け始めた時間に、子爵様にそのような者を取次ぎなどしたら、その場で軍を放逐されかねない。

それ故、彼は半ば必死になって、この男を追い払おうと無駄な努力を重ねていた。

「さようでございますか。
では、いた仕方ございませんな。
……
引っ込んでろ、下っ端」

間諜は兵に当て身を一発食らわせ、もう一人の衛兵も同じように眠らせ、宿に入っていった。

大隊の司令部に見知った顔を見つけると、衛兵不在の状況を説明してから子爵への面会の許可を求めた。

「相変わらずだな。
もうちょっと辛抱強くないと、間諜としては失格なんじゃないのか？」
「まぁ、そう言うな。
あとな、衛兵は処罰するなよ。
結果はどうあれ、衛兵じゃないんだろ、あの二人」
司令部要員にからかわれ、間諜は頭を掻きながら答える。

「解っている。
その責はこちらだからな」

間諜がいつ何を報告に来るかは解らない。
それに対して今回のようなことばかりでは、情報の伝達に重大な齟齬をきたしてしまう。衛兵を務める者には、接触の可能性がある間諜については周知してある。だが、ここ数日の足止めで、そのようなことは全くなくなっていたため、全体の士気が緩んでいた。

この夜、衛兵手当てを欲しがった二人の下級兵が、衛兵当番に交代を申し出ていた。徹夜での門番はすることがほとんどなく、退屈極まりないものだ。ほとんど立ちっ放しで、一定時間ごとの交代時しか休憩も取れない。交代を持ちかけられた衛兵当番は、バレたら懲戒モノだと最初は断っていたが、名義はそのままで、手当ても三分の二、残りの三分の一はそのまま本来の当番がもらえばいいと言われ、退屈から逃れられるとつい交代してしまっていた。
間違いなくこの四人は懲罰対象なのだが、それを見落とした者も懲戒の対象となるため、この司令部要員はここで揉み潰すことにした。つまり、彼が最終的に責任を取る立場にいたのだった。

「子爵様は、どちらにおいでだ？
案内してくれ。
急ぎ、お耳に入れなければならんことがある。」
間諜は、子爵が寝てしまう前に、なんとしても伝えなければと焦っていた。
それから暫くして、幕舎はとんでもない喧騒に包まれた。

「どうしようと仰るのです、ウェンディロフ様。
決着は着いているんです。
もう一回あなたと決闘などする必要を認めません」
アービィは冷たく言った。
北の大地へきたら本気で受けてやるというアービィの言葉は、立

会人が確保できず不正を防げないと一蹴されていたため、あとは何とか逃げ切るしかないと必死になっていた。

「私は降参などしておらん。
まだ充分戦えた。
それに、まだ生きている。
従って、あのときの決着は着いているとは認めん。
もし、受けぬと言うのであれば、卑怯者と喧伝されると思うことだ」

ウェンディロフは言い返した。

もう既に一時間以上も、押し問答を続けている。

グラース河に架かる橋の両側に、アービィたちを護衛する特編中隊とウェンディロフ大隊が対峙したが、両隊から隊旗を携えた騎士が橋上に出て顔を合わせ、それぞれの所属と任務を確認した後、ウェンディロフ大隊が道を譲っていた。渡河後、道を譲られたことに対して特編中隊指揮官がウェンディロフに礼口上を述べ、返礼の際にウェンディロフがアービィとの面会を求めたのだった。

副官の後押しを受けた指揮官だったが、ウェンディロフの武勇伝と、子爵と騎士という階級の違いには抗しきれず、腰が引けてしまっていた。ヘテランテラの威光を以てすれば、子爵如きが何を言おうとどうということはないのだが、今ここにいない権威と眼前で威嚇する権威に板挟みにされていた。

結局、副官が尻を叩こうかと思案しているところへ、面倒になったアービィがティアを伴ってやってきたのだった。

アービィは、獲物を見つけた肉食獣の眼になったウェンディロフを一瞥し、指揮官に人払いと陣幕の設置を頼む。

四方に陣幕を張り巡らせ、誰からも中が見えないようにしてから、アービィとティアが幕を上げてウェンディロフを招き入れた。
不安げな指揮官に、アービィは眼で安心しろと伝え、副官には完全な人払いを徹底させた。

アービィにしてみれば決闘などには全く価値を見いだせないのだが、ウェンディロフにとっては存在を否定されたままなのだった。是が非でも一矢報いるか、いっそ殺されてしまわなければ立場がない。それに、御前での決闘の際には、素手で剣に挑むなどという、油断を誘うような卑怯な手を使われた。同じ武器と防具を用い、条件を等しくしなければ優劣を付けることはできない。
同条件で戦え。それが　ウェンディロフの言い分だった。

「僕は急ぐんです。
それに、ウェンディロフ様はここで死んで任務をどうされるおつもりですか？」
もういい加減にして欲しいという意識が、アービィに迂闊な一言を言わせてしまった。
今の言い様では、　ウェンディロフが負けることが前提だ。

「聞き捨てならん！！
私に勝ち目など無いと言うか！！」
ウェンディロフが激高する。
事実、狼が完全に同化したアービィに対して、彼に勝ち目など万に一つもない。

「もう、見ていられませんわ。
ウェンディロフ様、どうしてもアービィに殺されたいのでしたら、まずあたしと立ち合ってからにしていただけませんか？」

いつの間にかラミアのティアラを髪に飾ったティアが、二人の会話に割って入る。

「女、身の程知らずもいい加減にしろ。私に――」

「あなたは彼女にも勝てません」

ウェンディロフが吼えようとしたところで、ティアの意図を悟ったアービィが畳みかける。

「おのれっ！！この場で決してくれるわ！！」

ウェンディロフが立ち上がると同時に、ティアの指がウェンディロフの額に触れる。

このとき、ティアは『誘惑』の詠唱を完了させていた。

「あなたは、ここで、することは、何も、無い」

一言ずつ、区切るようにティアが言う。

「……ここ……で……することは……なに……も……な……い」

ティアの指が触れた途端、ウェンディロフの眼から闘気が失せ、呆けたようなしまりのない顔に豹変した。

ウェンディロフは、ティアの言葉に追随するだけだ。

ティアの言葉には、『誘惑』を掛けられた男には抗うことなど不可能な強制力が発生する。本来であれば、このまま男の命が尽き果てるまで性交にのめり込ませるのだが、今はそうするつもりはない。

ティアは一見愛おしそうな仕草でウェンディロフの頬を撫でながら、そのまま命令を続けた。

「今すぐ、ここを立ち去りなさい。

そして、全てを忘れる。
そう、アルギール城でアービィと立ち合ったことも、アービィという名前も」
そこまで言って、ティアはウェンディロフから手を離した。

「お客様がお帰りです。
どなたか、送って差し上げて。
何もおもてなしできないなんて中隊の名誉に関わりますから、お茶を差し上げてからお願いします」
ティアが陣幕の外に向かって言った直後、ウェンディロフは踵を返し、自ら陣幕を上げて外へ出た。後は両部隊の将兵に任しておけばいい。

「お疲れ、ティア。
ありがとうね
ごめんね、良いエサになりそうだったのに」
アービィが礼を言う。

「そうねぇ。
昨夜のうちに来てくれたら、搾り取って帰してあげたのに、ね。
その分アービィが――」
――冗談はそこまで、ね、ティア！！
皆まで言わせずルティの思念が届いた。
思念だけではなく、火傷しそうな熱まで伴っているようだった。
いや、間違いなくティアは熱を感じ取っていた。

――ちょ、そそそんにゃ、こととは……からきゃってうだけなのよっ。
ティアは恐怖し、意識の上であるにも拘わらず発音を噛みながら念話を返した後、ふとアービィを見ると、蒼い顔からは冷や汗が滝

のように流れていた。ん？　何でルティ気付いたの？

「あちらの隊に伝令をお願いできますか？」
司令部になっている馬車の中で、ルティが指揮官に言った。

「はっ！！
伝達内容を願います。」
師団長の命令を全うできなかった悔恨を滲ませつつ、指揮官は直立不動の姿勢でルティに返答した。

「あの大隊からは、誰もこちらに来ていない。
それをあちらの司令部に徹底させてください。」
ウェンディロフがアービィに面会した事実があってはならない。
彼が呆けているうちに、大隊司令部にその旨を伝えておかなければ、誰かが蒸し返しかねない。いずれ、国元に戻った際にはアービィと立ち合ったことは思い出すだろうが、当面はその心配はない。

「はっ！！
誰もこちらには来ていない。
彼の大隊に伝令を出します」
ルティの言葉を復唱し、指揮官は司令部要員に命令を下す。

副官は、ルティの配慮に心の中で最敬礼していた。
もちろん、ウェンディロフが追いかけてくることを防ぐためなのだが、アービィと彼が面会したという事実はヘテランテラの耳に入れるわけにはいかない。この実直で素直で、このまま戦場に出せば真っ先に突撃して戦死しそうな若者の経歴を傷付けることになる。
いっそのこと、そうなれば彼を死から遠ざけられるものを、と思いながらも、副官はルティの配慮に感謝せずにはいられなかった。

指揮官から司令部付きの伝令要員に命令が下され、司令部の面々が馬車から出て行く。指揮官は隊列の掌握に、副官は参謀たちを引き連れ陣幕の後片付けや、宿場内の慰撫に出掛けていった。

「さて、どうしてくれましょうかねぇ、このアホ蛇とボケ狼」

振り返ったルティが向けた視線の先には、恐怖に顔をひきつらせ、小刻みに身体を震わせるティアとアービィが正座させられていた。

やがて、何事もなかったかのように、両部隊は離れ、そして進軍していく。

特編中隊の後ろから、郵便の早馬を装った間諜たちがアルギールへと急いでいた。そのほとんどはビースマックの政変が、現体制側による鎮圧が成功した情報と、アービィたちの動向を伝えるものだった。遠からずウェンディロフ大隊には、帰還命令が出されるはずだ。

今の時期に国境を越えさせる必然性がない。ソロノガルスクではヘテランテラが待ち構えているが、命令系統が違うため帰還までは強制できない。だが、国境侵犯という赤っ恥を掻くことは防げよう。その間にアルギールのニムファが賢明な判断を下すことを願うだけだ。

万が一にもウェンディロフ大隊が独断専行するならば、ヘテランテラ率いる近衛第二師団は国の名誉を守るため、ウェンディロフ大隊を殲滅する腹積もりだった。

だが、その心配も当面は去ったものと思われた。

特編中隊は、グラザナイに逗留することで発生するであろう行程の遅れを、いまのうちに稼いでおくために、グラース河をわたった

以降は野営を基本としていた。日没時にちょうど宿場に到着できるのであれば宿を取るのだが、わざわざタイミングを合わせるために行軍の速度を調整することはなかった。当面の危険が去ったため、アービィたちが乗る馬車を騎士が取り囲むこともなく、アービィたちが御者台に出る機会もできている。

アービィは御者台から周囲の景色を眺めながら、以前この周辺の山々を獣化して走ったことを思い出していた。

以前この道を通ったとき、アービィは人狼であることに押し潰されそうになっていた。それから一年が過ぎ、狼と同化している今は、そのことを辛いと思うことはなかった。肩にある『日』型をした痣の謎も異世界への召喚ということで解明され、そのことについても自分の中で決着が着いている。

普通の人であれば、何の前触れもなく異世界に召喚されたなら、言葉や食べ物、風習の違いに発狂しかねない。切羽詰まっていたとはいえ、やはり子供の考えることは詰めが甘すぎる。

もし、あの邪悪な気配を纏う魔導師にして邪神の神官グレシオフィが召喚途中に干渉せずに、そのままニムファの前に現れていたら、僅かな日数でそうなっていた可能性が高い。また、狼に封じ込められる際に、日本人としての記憶やアイデンティティ、価値観が残ったままであったら、それでも発狂していたかもしれなかった。

アービィにとっての二つの幸運、グレシオフィにとっては二つの齟齬だったが、そのおかげで生き延びることができたうえに、ルティに巡り会うこともできた。楽観的な性格に育ったアービィは、召喚や人狼への転生という点においては、ニムファやグレシオフィを怨むこともなくなっていた。

既にアービィはこの世界の言葉でモノを考え、夢を見ている。ド

ーンレッドに召喚のことを聞かされた夜や、狼が拗ねていた夜に見た夢に出てきた自分は日本語を話していたが、受け答えする自分はこの世界の言葉だった。記憶が戻ってくるに従い、日本語で会話する比率は上がったが、思考はこの世界の言葉のままだった。

もちろん、今でも日本語でモノを考えることはなく、時折これは日本語ならなんて表現するか、頭の中で翻訳する程度になっている。このことは、アービィがこの世界の住人として、完全にアイデンティティを確立したと言って良い。

もう一つ、味覚の点でも狼に封じ込められたことは、幸いだった。日本人だった頃、学生時代に貧乏旅行で香港へ行ったときに、海辺にある現地の労働者向けの食堂に入ったことがあった。当然有名な高級料理を食べられるだけのカネなどなく、ローカルな安いものしか頼めなかった。そのときに出てきた臓物料理は、味こそ抜群に旨かったものの、口内一杯に広がる内蔵の生臭さに閉口したものだった。

この世界において、庶民が最も口にする機会が多い肉料理は、牛や豚、山羊、羊、鶏に相当する動物の内蔵を煮込んだものだ。これも慣れなければ内蔵の生臭さで飲み込めないかもしれなかったが、狼としてだけで生きていた頃に獲物の内蔵を生で喰うことに慣れていたため、その臭いにやられることはなかった。

勇者降臨を妨害しようとした行為が、却ってその勇者をこの世界に順応させてしまったという皮肉な結果を招いていたのだった。

アービィは、召喚されたことは許しがたい暴挙だとは思っているが、そんなに悪い人生ではないと思っていた。

出発の前のルティによる制裁は、もちろんそれぞれの悪ふざけが過ぎたものであり、険悪な雰囲気など欠片も残していない。こんな平和な時間がずっと続けばいいと、アービィは御者台から周囲の景

色を眺めつつ、そう思っていた。

アルギールを前にして、アービィたちと司令部は頭を悩ませていた。

何もなければこのまま王都を突っ切り、グラザナイへと向かえばいいが、間違いなく間諜からコリンボーサあるいはニムファにアービィのことは伝わっているはずだ。ニムファがどう出るか判らないし、ここで余計なトラブルに巻き込まれたくはない。ウェンディロフが相手であれば、ヘテランテラの威光や権威でなんとでもなるが、ニムファはそれ以上の威光や権威、そしてなにより権力を握っている。騎士階級に属する一介の指揮官など、彼女の前では吹けば飛ぶ綿埃以下の存在でしかない。

アービィも、できればあのねぇちゃんには二度と会いたくないと思っていたので、王都を迂回する方針にはすぐ決した。だが、どう迂回するかで、全員が頭を悩ませている。

城壁の外側を巡らせてある外周路を通るのは、即発見されるので検討するまでもなく却下。最も迂回距離が短いのだが、論外であった。馬車が通れないような獣道も論外。その他にある細い間道も、二百人規模の中隊が隊列を組んで行進するにはあまりにも細すぎ、また途中の集落も小規模で中隊の腹を満たすだけの食糧の備蓄もない。さらには中隊規模で野営ができる平地も少なかった。

なぜなら、王都周辺の平地は全て畑として活用されているので、そこに踏み込んで陣を張るなどという暴挙は、如何な近衛師団といえど許される行為ではない。

アルギールで食料を補充するという、大ボケな進軍計画を立てたのは、何事もそつなくこなすベテラン下士官という評価を得ていた副官だった。もっとも、王都で食料調達することの危険性に気付いた者は皆無であったので、誰一人として彼を責める資格のある者も

いなかった。

「あの、別に中隊が纏まって行動する必要はないんじゃないですか？」

ティアが遠慮がちに発言する。

そうなのだ。別に必ずしも中隊が全員揃って行動する必要はなかった。必要に応じて分離しても良かったのだった。アービィたちを群衆の中に埋もれさせなければ、ということに拘るあまり、発想が硬直化していた。

「そうであります。

では、小隊ごとに行動するということでよろしいか、諸官」

副官がティアの発言を受けて続けた。

特編中隊は、定四十名の歩兵小隊が四個小隊、定員二十名の騎士小隊が二個小隊で編成されていた。

「では、中隊は小隊単位の六隊に別れ、行動するものとする。

尚、司令部は第一歩兵小隊に随行するものとする。

アービィ様たちも、ご同行ありたく存じます。

いかがでしょうか」

指揮官が訊ねた。

騎士小隊に馬車を随伴させることは、騎士の機動性を殺すだけになる。このため、司令部とアービィは歩兵小隊に同行することが望ましかった。

「はい。

そうさせていただきます」

ルティが代表して答えた。

「了解であります。
特編中隊は、アルギールを迂回するため、これより小隊単位の行動に移る。
集合は明後日。
場所はアルギールからグラザナイへ向かうラシアス街道上の集落、ヤツークとする。
足の速い騎士小隊は先行し、ヤツークにおける受け入れ態勢を完了させるものとする。
各小隊の行動開始は、明朝日の出とする。
途中、野営は農作業の妨げとならない場所を適宜選ぶこと。
以上下達よろしくありますか？」
副官が指揮官に許可を求め、許可を受けるとそのまま各隊へと伝令を走らせた。

副官の手際の良さは、いつもながら惚れ惚れとするほどだ。それでいて上官のメンツを潰すようなマネは、一切していない。おそらく、副官の頭の中では今後の行動指針が既に決まっており、ここまでの行程でも、選択肢のある場面では上官が自発的に考えたと思わせるように仕向けつつ、自分の思い通りに事を運んでいたのだろう。
そう考えると、アルギールで食料調達の予定を組んでいたことも、いつ若い上官がその危険性に気付くか、試験をしていたのかと考えられなくもなかった。

第一歩兵小隊は、アルギールを南に迂回し、へ抜ける間道のうち最も南に離れた韜晦路を取った。昨夜行われた韜晦路をどうするかの検討の場では副官は主導を取ることはなく、分隊長以上の下級指揮官を集め、自由に討議させた。指揮官が口を出しそうになれば話題を逸らしてこれを止め、小隊内の討議の方向性がずれてくれれば、さり気なく下士官にこれを伝えていた。

この場は、あくまでも、小隊内から結論を上げなければならない。指揮官はその決定に誤謬がないと認められたら、あとはその責任を取るだけということを、副官は無言のうちに教えていた。

各隊から韜晦路の決定が伝えられ、司令部がそれを調整のうえ了承し、それぞれの進む道が決められた。

翌朝は、夜明け前から出発の準備が進められ、日の出と共に各隊はそれぞれの韜晦路へと散っていく。

第一歩兵小隊は、全ての小隊が発ったことを確認し、最後に出発の号令が掛けられた。アービィたちが乗る馬車の周囲を歩兵ががっちりと固め、どこから魔獣の襲撃があっても全て跳ね返すという意志を漲らせている。

駅馬車が通っている主要街道周辺は、馬車警備のラシアス国軍によって魔獣は狩り尽くされている。だが、間道や主要街道から外れた地域では、王都周辺といえど魔獣が出没することがある。小隊の誰もがアービィの戦闘力を承知してはいるものの、師団長閣下の賓客の手を煩わせるわけにはいかないと、士気は高揚していた。

ヤツークまでは一本道で迷う心配もなく、ここでもアービィは長閑な景色を眺めて楽しむことに決めていた。

アービィたちがアルギールを迂回している頃、ランケオラータに随伴する独立混成大隊の主席参謀は、ラシアス王国の摂政ニムファへの謁見を恙なく終わらせ、ベルテロイまで戻っていた。

インダミト所属の軍がラシアス国内を通過すること、ウジェチ・スグタ要塞で休養を取ることの二点について許可を求めたが、一部閣僚の反対をニムファが無視し、ほぼ要求通りの許可が出ていた。

反対の理由は、アーガスの独走で欠員が出たままのインダミト駐

留軍の補充に回すべきだという意見が一点。北の大地のインダミトによる独占は認められないという意見が一点だった。

前者については、この春以降北の民の南下圧が急激に減少していることで、補充の必要性が薄れていたこと。秋以降帰国していたストラーとビースマックの駐留軍が、同様の理由でこの春の再派兵を遅らせているが、特に影響がないことで説得力を失っていた。ストラーにしろビースマックにしろ、国内情勢がそれどころではないということが本当の理由だが、それは当然伏せている。

後者については、インダミトが北の大地を領有したわけではない。従って他の参入を妨げるものは全くなく、ラシアスの意向次第でいくらでも北の大地で商業活動は可能だったが、国内に蔓延する北の民への偏見や蔑視がラシアスの人々に地峡を渡らせないだけだった。

ごねる閣僚を黙らせたのは、インダミト財務卿ハイグロフィラ公が作成した通行税や関税による莫大な収がラシアスに落ちるという試算表だった。

この試算表を見て黙り込んだ閣僚たちを無視して、主席参謀はニムファに許可を迫った。だが、コリンボーサ宰相が通行税の積み上げを言い出し、紛糾し掛けたところで主席参謀は切り札を切った。

最北の蛮族の驚異をここで持ち出し、アーガスの不始末をこれで雪ぐと言ったのだった。もちろん、ルムや中央の民との交渉については、伏せたままでだ。ただでさえ、北の民の驚異を間近に感じているラシアスだ。インダミトがその肩代わりをするといっている。それどころか資金の供出も求められず、戦略物資の運搬については通行税と関税を掛けても良く、おまけに不足分はラシアス国内で調達するという。

少々の戦略眼の持ち主であれば、これほどの好条件には裏がある

こととくらい、すぐに見抜くだろう。インダミトが北の大地を独占しようと目論んでいることは明白だ。

だが、真っ先に財務卿が、この提案に飛びついた。ラシアスの財政は、北の民を撃退するためもあって、軍事費が占める比率が他国に比べ異様に高い。その軍事費を圧縮できるうえ、国庫への直接収入まで確保できるのだ。これを逃す手はないと、財務卿は考えた。

次いで内務卿が賛成に回る。

北の民の流入は、国内の治安を悪化させる要因だった。もっとも北の民がらみの犯罪の多くは、不法入国を除けば差別や蔑視の行き過ぎで暴力に発展させているラシアス国民によるものがほとんどなのだが、いくら北の民であっても人を殺したり傷付ければ犯罪だ。さらには人売や街娼といった非合法な性産業の取り締まり、それに伴う性病の対策にも、多大な予算が喰われていた。内務卿も、ある程度他国に利があったとしても、これは認めるしかなかった。

外務卿は、腹の中では最初から賛成だった。インダミトが大陸の盾を買って出るなら、他国に頭を下げて回る屈辱から解放される。戦略物資の輸入も、援助という形を取っている以上、通常の関税どこかあらゆる税を取ることはできなかった。一方的な取り決めを、覆すことができない無力感から解放される。これだけで外務卿が賛成するには、充分すぎるほどの理由だった。

主要閣僚五人のうち、三名が賛成に回ったのを見て、宰相コリンボーサも賛成に回る腹を決めた。インダミトに借りを作るのは癪だが、ラシアスの国情はのっぴきならないところまで追い詰められていることを、多少なりとも政治感覚を有する宰相は理解していた。

ニムファに忠誠を誓うことは、カリスマ性を欠片も持たないことを自覚している自分の権勢を保障するためだったが、国自体が傾い

ては権勢などにどれほどの価値が残るのかくらいは弁えている。
相変わらず摂政は両隊陸の覇者になることを望んでいるが、そんな夢物語に付き合っている余裕はない。如何にして未だ乙女心を捨てきれない摂政を説得するか、宰相は賛成の声を挙げる機会を窺いつつ、頭を捻り続けていた。

当のニムファは、さらに甘い考え方をしていた。現王である父が健在ならば、まずもって許されるはずのない甘さだ。
この世界に植民地という概念はないが、ニムファはインダミトの目論見をそれに近いイメージで捕らえていた。インダミトに北の大地を平定させ、然る後にインダミトを我が物にすれば、北の大地も転がり込んでくる。切り札であるはずの勇者に、簡単に袖にされた以上、それに替わる道具を探し出す必要があった。そこへインダミトからの提案だ。
彼女は、完全にバイアブランカの掌の上で踊らされていた。

最後まで反対し続けているのは、最近政務に復帰した軍務卿ただ独りだ。
軍事費の削減は、所謂キックバックの減少に他ならない。既にあまりの無能さに嫡男はウジェチ・スグタ要塞総指揮官を罷免されている。異動ではなく罷免だ。息子のメンツなど知ったことではないが、これでウジェチ・スグタ要塞から入るはずだった利権が完全にふいになった。
後釜は謹厳実直の騎士団長ラルンクルスだ。
この男が金品を私するとは思えず、これから入るはずだった金蔓を叩き切ることは間違いない。
これ以上入るはずのカネを削られてたまるものかと、軍務卿は強固に反対し続けていた。

結局ニムファは、宰相コリンボーサの思惑通りに動いた。

軍務卿を黙らせ、如何にも民を思う余り他国の温情に縋らなければならない悲劇の女王を演じているが、その美貌の裏に隠していると当人だけは信じている醜悪さは、口元を隠す扇を通して滲み出てしまっていた。

ニムファは、労せずして最良の果実を手にできる悦びを隠しきれず、独立混成大隊の参謀長に了承の旨伝えるようにコリンボーサに命じた。コリンボーサも、これでインダミトの大動脈を抑えたことを理解し、特に異論なく命令を受領する。

もちろん、バイアブランカ王は、将来ラシアスが北の大地との交易に、巨額の関税や通行税を掛けてくるであろうことは読んでいた。そのときはビースマック側の沿岸を通り、船による交易に切り替えればよい。

フォーミット以南の小群島から砂糖を輸送する際に、船による輸送量が荷馬車に比べて格段に多く、効率が良いことに彼は気付いていた。ストラー側には砂浜が多く、寄港に適した港が少ないため、岩礁地帯が続き天然の良港が多いビースマック航路の方が安全と考え、既にパシュースに根回しを命じてあった。

参謀長は、ニムファから寮内通過及びウジェチ・スグタ要塞での休養の許可を得ると、すぐにベルテロイへと取って返した。その際にラシアス街道とラシアス・ストラー街道の分岐点の町ガルーカか、ストラーとの国境の町クルチャトスクで、ランケオラータにこの情報が伝わるように同行していた密偵を派遣している。参謀長はアルギールで購入した馬を駆り、ラシアス街道までの間道を一気に駆け抜け、僅か六日間でベルテロイに帰還していた。

参謀長の帰還を待って、独立混成大隊はラシアス街道を北上する。先行する偵察小隊は、戦ではないため前方の危険察知を主目的とす

る必要もなく、先々の宿の手配に走っていた。いきなり六百人規模の宿泊客を捌ける宿場町など存在しないことは当たり前で、宿が前もって準備を整える猶予を与えるための当然の措置だった。

北の大地を目指す三つの集団は、着実に歩を進めている。

第６４話

ラシアスの王都アルギールの手前で、小隊単位の別行動になった特編中隊は、一泊の行程後にヤツークの宿場に集結していた。

アルギールさえ迂回してしまえば、この後には障害はないはずだった。将兵の表情には安堵の色が浮かび、全体の雰囲気も弛緩したものになっている。だが、副官はここで気を抜くことの危険性を理解している。いつニムファが干渉してきてもおかしくない。できるかぎり迅速に、アルギールから離れる必要があった。

アービィと闘いたがっていたウェンディロフとは違い、ニムファが高圧的な態度で接してくることはないのだろうが、それはアービィたちに対してということであり、中隊に対してはその保証がない。

ニムファが強引に特編中隊の足を止めようしないとも限らない。その場合、王都を守る近衛第一師団と、ベルテロイ駐在の近衛第二師団が相討つ危険性を孕んでいた。両師団ともそれぞれが育て上げたプライドがあり、他方を見下してそれを満足させる風潮もあった。

片や王都の守護者。片や大陸均衡の守護者。

師団の名称に入る数字が若いということも、第一師団が第二師団を見下す理由の一つだった。それに対して第二師団は、第一師団を国内奥深くに篭もったまま礼典ばかりに気を使う軟弱者の集団と見下していた。

もっとも、第一師団が働かなくてはならないという事態は、王都が陥落するかどうかの瀬戸際ということを意味し、第二師団が働かなければならない事態とは、南大陸が動乱の渦中にあることを意味するため、両師団が無聊を託ちつつ罵り合いをしていることは、大陸が平和であることの証明でもあった。

幸いなことに特編中隊がグラザナイに到着するまで、第一師団と鉢合わせすることもなく、平穏だが退屈な行程が続いた。だが、アービィもルティも、ティアだけでなく中隊副官も、ニムファがこのまま大人しくしていてくれれば良いと思っている。北の大地へ着く前に、出国に手間取るような悶着は起こしたくはなかった。

グラザナイに到着するなり、アービィたちは手持ちの武器防具を全てに祝福法儀式を施すため、火の精霊神殿に行った。

何故か神殿では火の最高神祇官で待ち構えており、訝しげにするアービィたちを見て笑みを湛えている。

「エンドラーズから聞いておるぞ、そなたたちの活躍は」

火の最高神祇官は歳相応の好々爺という雰囲気を湛え、笑みを消すことなくアービィに言う。

そして半ば呆れ顔で、あの洟垂れ相手に風の神祇官たちも大変じゃろうと溜息混じりに付け加えた。

「エンドラーズ様をご存知で？」

思いもよらない名前を聞いたため、アービィは間抜けな問いをしてしまった。

精霊神殿の神祇官同士が知らぬ仲のはずはない。それに、アマニュークの一件では風の神祇官だけでは手が足りず、土水火の神殿にも応援を依頼している。

その点を指摘され、アービィは自分の発言の間抜けさに気付き、思わず赤面してしまった。

洟垂れという言葉が気になったようなアービィに、エンドラーズが七十歳になろうとしているのに対し、自分は既に九十歳を超えて

いると説明した。
そして、ルティに目をやった最高神祇官は、そのまま表情を驚愕の形に変え、暫くの間言葉が出なかった。

「あの、あたしの顔に何か？」
訝しげにルティが訪ねた。

「あ、いやいや、なんでもない。
失礼をした。
いや、何でもないということはないな。
そなた、意識を呪文に集中させてみるがいい」
まじまじとルティの顔を見ながら、最高神祇官が言う。

「呪文に、ですか？
はい……
えっ！？」
ルティは言われるままに呪文に意識を集中させ、驚愕の声を上げてしまった。
集中させた意識の底から、地水火風のレベル４呪文が浮かび上がっている。

ルティが使用可能な回数は、レベル１と２は１０回に達しているが、レベル３はまだ４回しか使うことができないはずだった。通常であれば、レベル３までの使用回数が１０回に達しない限り、レベル４の呪文が意識の底から浮かび上がることはない。火の最高神祇官が驚くのも無理はない。歴代の最高神祇官の中でも特に呪文の熟達に才を示した者に限って、ルティのようなことが起きたことがあったが、過去においても数えるほどしかいない。それも南大陸の四国家に精霊神殿が分祀された四百五十年前以降には例がなく、まだベルテロイに精霊神殿があった頃の話だ。

「よほど精霊に気に入られたようじゃの、そなたは。いかがかな、旅の後でも構わんから、いずれかの神殿に仕えぬか？」

なんとか平静を取り戻した最高神祇官は、ルティをスカウトし始めていた。

「はい、自分でもびっくりしてます……せっかくですが、あたしに巫女仕えは無理です。旅がいつ終わるか判りませんし、そのあとは……」

ルティはそう言ってアービィを見る。

「さようか。気が変わったらいつでも来るが良い。いずれの神殿でも、間違いなく歓迎、いや、最高神祇官への道が待っておろうぞ」

ルティの才を愛しむように言った最高神祇官は、諦め切れぬという表情だ。

だが、ルティの視線の先を見て全てを悟った彼は、それ以上ルティを説得することを諦めていた。

それから二、三祝福法儀式に関する打ち合わせののち、三日後に武器防具を引き取りに来るということに決した。世間を騒がせたアマニューク でのレイス騒ぎ、ビースマックでのクーデター紛いの騒乱について互いの意見を交換し、火の神殿を後にした。

グラザナイに到着した特編中隊は、アービィたちの武器防具に火の神殿で精霊の祝福方儀式を施す間、三日の休暇が与えられた。

思い思いに町に出て束の間の休日を満喫する将兵を見ながら、ア

ービィはこれから先のことを考えていた。
どこでランケオラータ一行と合流できるか、まるで見当が付かない。途中で手紙を出そうにも、半ば隠密行動だったアービィたちは手紙を出すことも、返事を受け取ることができなかった。ウェンディロフやニムファの出方次第では、グラザナイへの到着がいつになるかも判らないということもあったからだ。
だが、ようやく、この先の行程ならある程度の見通しを立てることができるようになった。とは言っても、グラザナイ以北で大きな町はラシアス街道を西へそれたカルーガと、ウジェチ・スグタ要塞の後方支援基地になっている南大陸最北端の町リジェストしかない。
ここから先の行程では、アービィたちは日数を稼ぐためカルーガを回る平坦な街道ではなく、グラザナイからリジェストまで最短の山岳地帯を踏破する予定だ。リジェストで合流できるタイミングでなければ、ルムの本拠地であるパーカホまでの間で追いつくしかなかった。
ランケオラータたちの動向が判らない以上、出立が遅れたアービィたちの方が北の大地までは遠いと判断すべきだろう。アービィはルティとティアを宿に残し、グラザナイのギルドに手紙を預け、リジェストのギルドでランケオラータが手紙を受け取れるように手配し、自分たちの動向を報せることにした。

ギルドに手紙を預け、町を歩きながらアービィは火の最高神祇官が言ったことを思い出していた。
北の大地に禍々しい気配が渦巻いている。地の神殿から寄せられた情報にあった邪法と同じ気配で、アマニュークに充満していたものとも似ている。火の最高神祇官はそう言った。
彼には最高神祇官が精霊の加護によって身に付ける特殊技能のうち、遠見の術が身に備わっていた。

アマニュークの一件は偶然と思われるが、ビースマックに短期間吹いた気配と、今現在北の大地に渦巻く気配は同じものと彼には見ている。アービィがこれから行く先に、彼は漠然とした不安を抱いていた。遠見の術を以てしても、未来までを見通すことはできない。最高神祇官といえど、予言者や預言者ではなかった。精霊は過去の知見を現在にもたらすことはできても、未来を知らしめるような能力は持っていない。彼は、ここまではアービィに話していた。

とにかく、充分すぎるほど気を付けよと。今更いっても詮方ないことだが、できれば全神殿で祝福法儀式を施すべきだとも。

現実問題として、今からビースマックとインダミトに戻っていては、北の大地に渡る時期が秋にずれ込んでしまう。それではランケオラータたちの役に立つどころではない。最高神祇官の危惧は重々承知のうえではあるが、ここは急ぐべきだとアービィは考えていたが、一つ策を講じてみる気になっていた。一発勝負の短期決戦のような仕事ではないので、その策でも充分事足りるのだろうと思うが、問題は材料の調達と依頼する相手の都合だな、とアービィは思っている。

再度ギルドへ足を運び三通の手紙を書き終えると、それを早馬に託してアービィは宿へと戻って行った。

中隊司令部と一緒に泊まる宿に戻ると、裏庭がなにやら騒がしい。嫌な予感がしたアービィが裏庭に出ると、ルティと中隊一の剣の使い手である騎士が立ち会っている。

試合は始まったばかりらしく、両者とも十歩ほどの距離を取って動いていない。ルティは居合いに近い技を身につけており、全身の力を抜いてリラックスした状態で両手を下げている。騎士は、全身から闘気を立ち上らせ、両刃のバスタードソードを正眼に構えていた。

ルティは完全に受けの姿勢で待っているが、騎士は打ち込めない。騎士には自分が剣を振り下ろすより先に、ルティの刃が騎士の胴に食い込むのが見えてしまっている。ルティはルティで瞬間的な爆発力では騎士に一歩引けを取ることが判っている以上、自分から切り込んで行っては踏み込む前に騎士の剣が打ち下ろされることが見えてしまっていた。

剣筋ではルティに鋭さで軍配が上がるが、総合力で騎士が互角以上に持っていっていた。

「その辺で終わりにしときなよ」

両者の緊張が極限に達したところで、アービィが止めに入る。

このままでは、どちらにも余裕がなくなり、打ち合いではなく斬り合いになってしまいそうだった。既にルティは汗ぐっしょりになっている。如何に緊張した状態だったかが、手に取るように判った。一方の騎士も、よく見れば構えた剣が僅かに震えており、こちらも正確な太刀筋は望めそうにもなかった。

盛大な吐息と共に、両者の緊張がほぐれる。

ルティが汗を拭い、騎士は腕を軽く揉みながら、互いに次こそは決着をと言い合っていた。

別の騎士が二人に労いの言葉を掛けてから、アービィに向き直り片膝を付いて話しかける。

「アービィ様、是非、私と立ち会っていただきたい。

ウェンディロフ様を瞬殺したという技の冴えを、この目で、この身体で受けてみたいのです。

もちろん、敵わぬまでも、私も精一杯戦わせていただきます。

よろしいでしょうか？」

「う〜ん、いいですけど……
怪我しないでくださいね」
万が一にも怪我でもさせたら、護衛として付けてくれたヘテランテラに申し訳が立たないし、この騎士も任務が全うできなくなってしまう。

「ええ、そこは。
少なくとも、ウェンディロフ様より体術では私の方に分があると思っております」
騎士には自信があるようだった。
敵わぬまでも、とは、礼を失しない程度の社交辞令で、本心はそうは思っていないことが見て取れる。
勝てないまでもそれなりの勝負になる、その程度の自信を持てるくらいには鍛えているようだった。

「じゃあ、恨みっこナシですよ。
始めましょうか？
不意打ちとか言われても、あとあとめんどーー」
他の騎士に審判と開始の合図を頼もうと、アービィが視線を外した隙をついて騎士が左の拳を打ち込んできた。

アービィは軽く右手の甲で騎士の拳を弾き、続いて打ち出されてきた右の拳を左の掌底で受け止める。
肩まで響く痛みに騎士が顔をゆがめた瞬間に、右の掌底が騎士の頬を打ち抜いた。脳震盪を起こさない程度に手加減された掌底というよりは平手打ちだが、それでも騎士の意識は飛びかけて棒立ちになる。そのまま、後ろに回って羽交い絞めに捕らえ、一気に反り投げに移行する。
振り解こうとした騎士の身体から重力の感覚が消えうせ、次に重力を感じた瞬間、騎士の身体は池の中に叩き込まれた。

両腕を固めた状態で、そのまま地面に叩き付けては受身が取れず、騎士の首が折れかねないため騎士が振り解こうともがく間に立ち位置を変えて、池の側まで引き摺ってきていたのだった。

「まだ、やります？」

騎士が池の中で身を起こすのを待って、アービィは訊ねた。

「いえ、もう……

参りました」

池から上がった騎士が深々と頭を垂れる。

拳を受け止められた瞬間で、騎士は負けを悟っていた。下手に動けば手首が折られる、その恐怖に身が竦んだときには左の頬に衝撃を感じ、次に腕と首が決められたと思ったら水の中にいた。

ティアは二人を眺めつつティアラを磨いていた。

もちろん、宿の部屋に篭り、他人からは見えないようにだ。ティアはこのティアラを買ってきたときの二人を思い出すと、自然と笑みが漏れてくる。あのときは、まさか二人がティアラを買いに行っているとも知らず、随分拗ねていたものだった。

それまで、ごく一時を除き一匹で生きてきた魔獣が、人から離れることができなくなっていると自覚したときでもあった。そしてアービィという個体だからであるということは理解しているが、人狼に対する考え方が代わってきたことも自覚していた。

そうでなければ、人狼の子供を人の社会に自然と溶け込ませるための仕事をしようなどとは思うはずはない。

平穏な午後のひとときが流れていく中で、ティアは自分たちの行く末に思いを馳せる。

アービィとルティが二人でどこかに落ち着く傍にいたいという気持ちと、人狼の社会参加支援の事業を興したいという、およそ魔獣らしからぬ気持ちがある。前者は場所を選ばないし、ルティは子々孫々までと言ってくれているが、後者はどこでもよいというわけにはいかないだろう。

人里離れた山奥で、ティアと人狼の子供たちだけで暮らしていても、何の解決にもならない。協力者がいて、地域が受け入れなければ、唯の自己満足の自活コミュニティでしかない。その協力者や地域も名もない市井の善人だけでは、コミュニティの規模が少々大きくなる程度だ。

いきおい、国や権威の協力を取り付け、王都なり神殿の町に、拠点を築き上げなければならない。その協力を取り付けることや、忌み嫌われる人狼を地域に受け入れさせる労力は、生半可なことでは済まないだろう。

なによりも、人狼すべてが恐怖の対象ではないことと、人狼が人と共存できること、人狼が人の役に立てる存在であることを証明しなければならない。およそ人々が人狼に抱くイメージとは、真逆の幻想と一蹴されかねない。

だから、アービィの存在は、ティアにとって今掌中にあるラミアのティアラより、重要なものだった。彼が人狼であることを隠さずに済む世の中になれば、彼の種族への風当たりも少しは弱まるかもしれない。だが、人狼が何らかのトラブルを起こす度に、アービィが非難の矢面に立たされるだけになってしまうかもしれない。つまり、人々にアービィという攻撃対象を与えるだけになってしまうかも知れない危険性をはらんでいることを、ティアは理解していた。

今回、北の大地へ渡る理由は、ランケオラータとルムへの純粋な

友誼と、レイへの純粋な好意からだ。ティアの場合、そこへランケオラータやボルビデュス家、捕虜にされた人々や北の大地で無為に命を散らした人々への罪滅ぼしと、レイを支援することによるレヴァイストル伯爵への恩返しも含まれる。

だが、人狼の社会参加支援を考え始めた今は、最北の蛮族をアービィが平定すれば、人狼の社会的な立場を引き上げることができるという目論見も生まれていた。アービィを利用するようで気が引けなくもないが、きっと理解してくれる。ティアはそう思っていた。

「今夜さぁ、バーベキューなんてどうかな？」

ティアが眺めているのに気付いたアービィが、裏庭から大声で言った。

「何よ、バーベキューって？」

ルティが聞く。

「あ、たいしたことじゃないんだ。

焚き火で肉とか野菜とか焼くだけなんだけどね。

野営の時は時間との勝負で慌ただしいから、たまにはゆっくりやるのもいいかと思ってさ。

宿も材料仕入れてくるだけだから。

ちょっと都合聞いてくるね～」

つい日本での言葉で言ってしまったアービィが説明した。

確かに焚き火を使っての料理はあるが、たいていの野営は手早さが求められ、皆が寄り集まってわいわい楽しんでいる余裕はなかった。また、日常の調理でも薪で火を熾すため、わざわざ野外でレジャーとして焚き火料理をする習慣もない。

アービィは咄嗟にバーベキューの訳語を考えたのだが、そのよう

な環境では訳語があるはずもなかった。

宿からは了承され、この日の宿泊費は宿から材料を買うという形になった。宿の従業員と連れ立って、アービィが仕入れにいくことになり、ルティとティアが同行しようとしたが、副官から紙を用いた鍛錬方法を聞かれたルティは半分憮然としながら居残ることを了解した。以前もあったわよね、あたしが居残るの。

従業員を含めて三人の買出し部隊は、宿から少し離れたところにある市場にやってきた。

大通りにも市場はあるのだが、こちらは業務用市場になっていて、宿屋や食堂、酒場といった事業者が仕入れに来るところだ。当然、小売店を通さない分単価も安く、流通に時間が掛かっていない分鮮度も良かった。

宿の仕入れも兼ねるということで、肉は宿で用途に合わせて切り分けてもらえるため、塊のまま買い込むことにした。牛と豚の肩とロース、バラ肉を各１０ｋｇ相当、鶏は十羽買い込む。野菜の市場では、トウモロコシやタマネギ、ニラとキャベツ、きのこ類を大量に買い込んだ。

「ね、アービィ、今回はなんか新作あるの？」

ティアはアービィが市場をくまなく見回って、あれやこれやと材料を選んでいるのを見て、何か考えながら買い込んでいると思っていた。

「うん、宿に硬い粒の小麦粉があるって聞いたからね」

そう言いながら、アービィはレモンのような柑橘類を、いくつか籠に入れていた。

宿に戻ったアービィは、厨房の職人に頼んで焼肉に適した厚さに肉を切ってもらい、バーベキューに使う全体の半分ほどを酒と塩、幾つか見つけた辛味のある調味料に漬け込む。それからリンゴやタマネギ、ニンニク、ショウガを摩り下ろして煮切った酒と混ぜ合わせ、塩をメインにしたタレを大量に作った。

豚のバラ肉を粘りが出るまで徹底的に叩き、キャベツとニラ、シイタケをみじん切りにして、キャベツには軽く塩を当てた。硬い粒の小麦粉に少量の塩を入れ、熱湯を少しずつ入れ練り上げる。パンにするわけではないので、イーストは入れていない。３ｃｍ程に小分けにし、打ち粉を打った台の上で直径８ｃｍ程になるように薄く伸ばし皮を作っていく。

日が傾き、食事の時間が近付くと、裏庭にレンガで組み上げた竈に火を熾し、熾き火を大量に作り上げた。野営の焚き火は、照明であり、危険回避の防御用でもあるため、ある程度大きく炎が上がっていないと都合が悪い。鍋やフライパンを使った調理はできるものの、調理に使っていては炎が小さくなってしまうし、バーベキューには向いていない。

各自が好みの肉や野菜を熾き火の上の金網に放り投げ、焼けるそばから食べ始める。日頃から身体を鍛えているだけあって、全員が素晴らしい健啖ぶりを示していた。

アービィは、バーベキューが始まる直前から用意していた挽肉とキャベツ、ニラ、シイタケを合わせ、酒と塩を振ってから全体が纏まるように練り合わせてタネを作った。

薄く延ばした皮に少量のタネを取り、皮の半円分に水を付け、二つに折り合わせた後片側にひだを付けながら閉じこんでいく。

宿から巨大なフライパンを借りると、竈をもう一つ作り盛大に火を熾した。

フライパンから煙が上がり始めたときに油を多めに敷き、タネを小麦粉の皮で包んだものをフライパンに並べ始めた。暫くそのままにして、いくつかを取り上げ裏の焼き色を確認してから、フライパンに湯を注ぎ込み、手早く蓋をする。

それでも蓋をするまでの短い間に盛大な水がはぜる音が響き、油が飛び散った。油が飛ぶことは予め言ってあったのだが、何をしているか覗きに来たルティとティアが、油爆弾をまともに喰らって悲鳴をあげ、井戸へと走って逃げていく。

水分が飛ぶまでの間は火の勢いを少し殺し、水が沸騰する音がしなくなったことを確認して蓋を開ける。薄い皮を通してニラの緑が鮮やかに透けて見え、この世界初の焼き餃子が完成した。宿の従業員に濡れ雑巾を用意してもらい、フライパンをその上に載せて油の沸騰を抑えてから餃子を取り上げ、焼き目を上にして皿に盛った。

醤油がないため、塩と旨み成分を含んだ調味料で下味を付けてあるので、餃子そのもののできに不満はないのだが、アービィはラー油に相当する物があっても醤油がないこの世界を、生まれて初めて呪っていた。アービィは、どこかに落ち着いたら醤油と味噌の醸造も始めようと、固く心に誓うのだった。

厨房から鶏を捌いた後のガラをもらい、軽く茹でて骨に残った肉を毟り取り、再度煮出して作ったガラストックを酒と塩、胡椒で味を調え、灰汁を取りながら沸騰させたところに適当な野菜と少々厚めの皮で作った餃子を放り込み、水餃子も作った。

さらに、深い寸胴鍋に浅く湯を沸かし、調理する物が湯に浸らないように小鍋を入れ、その上にキャベツを敷いたザルに餃子を並べて蒸し上げ、蒸し餃子も作る。

アービィは揚げ餃子まで作って餃子四種コンプリートしたかったが、蒸し餃子ができたところでタネが尽き、またルティとティアが呼びに来たため、餃子作りは中断せざるを得なかった。

裏庭では、中隊司令部が緊張がほぐれた反動からか、手の付けられない大騒ぎとなっていた。普段は謹厳実直を受肉化したような副官が、率先して場を盛り上げ将兵から喝采を浴びつつもからかわれている。若い指揮官は既に酔い潰されて、部屋に片付けられていた。もちろん、それは嫌がらせなどではなく、そうでもしないと責任感の塊のような指揮官が、任務中に息を抜くことなどしないからだった。ただでさえ敵襲に備えて睡眠は浅く、細切れにしか取っていない。見張りに立つ不寝番を気遣い、ちょっとした差し入れや息抜きのために短時間代わるといったことも、毎晩欠かすことはなかった。もっと手の抜き方を教えないと、この指揮官は戦場に出る前に過労死するのではと、中隊全体が心配するほどだった。

そんな指揮官に、ひと時の安眠を贈りたいという中隊司令部の好意は、指揮官にとってかなり手荒な形で具現化された。ここまで来ていれば、王都のニムファが追ってこようが要塞まで逃げ切れると判断してのことだった。

アービィも酒のグラスを片手に、召喚以来初めてのバーベキューを楽しむことにした。が、既に肉類は食い尽くされており、タマネギ少々が残されているだけだった。もっとも餃子の味見等で、まったくの空腹というわけではなかったが。

「ねぇ、僕は何を食べればいいの？」

しょげたアービィが涙ながらにルティに聞く。

「え～、またなんか作ってよ～」

だめだ、できあがってる……

とりあえずグラスを干したアービィは、酒瓶片手に厨房へと戻って行った。

厨房に戻ったアービィは、残った材料を前に考え込んでいる。
鶏の手羽先を別口で仕入れていたらしく、かなり大量に残っている。基本的な香味野菜も、ニラを含めてまだ残っていた。かなり大量に作った挽肉も、まだ餃子を中隊司令部の分を含めて一回作るくらいはありそうだった。タネは尽きていたが、材料は充分ある。その他に豚肉のスライスとガラから毟り取った肉が、そのままとってある。

アービィは、油を熱している間に、唐辛子と長ネギを刻み、ネギには塩を強めに当てておく。充分熱した油に刻んだ唐辛子を入れ、簡単なラー油を作った。辛味が充分出た頃合いを見て『凍結』で油を一気に冷やし、刻んだ塩ネギをラー油に漬け込んだ。
それから手羽先を煮込み始め、酒と塩で少々強めに味を入れる。
ガラから毟り取った肉とラー油ネギを混ぜ合わせ、適当なつまみを作ると、アービィは本格的に飲み始めた。

まだ空腹感が残るアービィは、手羽先を煮込んでいる間に豚のスライスに塩胡椒し、フライパンで焼き始める。季節外れのカブを厨房の隅から見つけ出し、皮を剥いて四つ切りにして豚のスライスに乗せ、酒を振ってからフライパンに蓋をする。暫く待ってからカブの葉をざく切りにしてフライパンの隙間を埋め尽くし、ふと思いついてレモンをスライスして焼いている肉に挟み込んだ。
火から遠ざけ、カブが蒸し焼きになるようにしてから、手羽先を煮汁から取り上げ皿に盛った。煮汁はそのまま『凍結』で一気に冷やし、ゼラチン質を固まらせて煮凝りにしておく。手羽先とラー油ネギ、そして豚とカブの蒸し焼きレモン風味を持って、裏庭に戻った。

「ルティ、ティア、新作～」
アービィが二人に声を掛けた。

「遅い～
何してたのよ～」
でき上がりかけのルティがフォークを持って近寄ってきた。
「細かいと食べにくいわよね」
ティアがフォークでラー油ネギと格闘し始めた。いや、細かいからじゃなくて酔っ払ってるからじゃないの？
ふと思いついたアービィが、庭の木の枝を二本折り、皮を削って箸を作った。何の違和感もなく、箸が手に馴染む。
やっぱり、日本人なんだと、アービィが感慨に耽りつつ、ラー油ネギをつまみ始めると、ティアが興味津々という視線を送ってきた。
「使ってみる？」
アービィがさらに一膳の箸を作ってティアに渡す。
「アービィの世界の食器？」
やはり、日本人でもまともに使えない人がいるような食器だ。初めて持ったティアは、さらに悪戦苦闘していた。
「うん、慣れると小麦の粒だって持てるようになるよ」
「信じられないわよ」
そうは言いつつも、ティアは生来の器用さからか、ぎこちなさが残っているが、なんとかネギをつまめるようになっていた。
「場合によってはフォークより便利かもね」
ティアが言った。
「でしょでしょ？」

アービィは自分が開発したわけでもないのに、日本のものが褒められて嬉しそうだった。

ふと、ルティが静かなので見てみると、喉を押えて言葉が出なくなっているようで、恨みがましい目でアービィを睨んでいた。

「どうしたの、ルティ？」

背筋が凍るように殺気を感じたアービィが声を掛け、ティアは無意識にアービィから離れた。

「……

どうしたのじゃないわよっ！！

何、これは！？

食べてみなさいよ！！

ティアもねっ！！」

ルティが漸くといった感じで喉から声を絞り出した。

アービィは、大体の味の想像は付いていたし、それなりに上手くいったと思っていた。カブの火の通り具合など、絶品だと密かに自負していたのだ。

「なんか、おかしかった？

どれどれ……

カブはいい感じじゃない……

ねぇ、ティア？」

アービィはカブの味見を済ませ、ティアを見た。

そこにはルティ同様に言葉が出てこない状態で、苦悶に表情を歪ませたティアが涙目になっていた。ティアは黙ってアービィに肉を差し出す。

「ん～？
レモンの風味が効いてていいでしょ、これ……
……苦ぁっ！？」
アービィは思いもよらない味に、思い切りむせ込んでしまった。

爽やかな酸味とレモンの香りを付けようとして、肉にレモンを挟んだのだが、火を通したことが災いした。火を通さなければ、アービィの思い通りになったはずだが、レモンに火が通り、さらには火を通す時間も長過ぎたようで、レモンの皮が持つ苦味だけが抽出され、すっかり豚肉がそれを吸ってしまったのだった。カブは肉の上にあったため、レモン汁に触れることはなかったため無事だったのだが、肉とカブの葉はしっかりと苦味を吸い込み、その苦味は全ての味を覆い尽くしていた。

「そうよ、何、この苦さ
とても食べられないわよっ！！」
ルティがアービィを力一杯叩く。

「ごめんよ～
こっちで口直しして～
これは……僕が責任持って食べるから……」
いくらなんでも食材を捨てるのは忍びなかった。
苦味を堪えつつ肉を口に入れるが、とても飲み込める代物ではなかった。

「よしなさい、勿体無いけど、捨ててきなさい。
それは既に食べ物じゃないわよ。
毒よ、毒」
ルティが咳き込みながら言った。

「……ごめんなさぁ～い」
半泣きのアービィが、厨房に謝りながら肉を捨てに行った。

翌日の夕食時、アービィは汚名返上とばかりに昨晩仕込んだ煮凝りを使って、大量の小龍包を作っていた。
朝から町の材木屋に行き、板を買い込んで来る。夕方まで掛かって木枠を組み、大きなザルと合わせて簡易の蒸篭を幾つも作った。昨日作った裏庭の竈全てを使い、一気に蒸し上げたものを司令部要員や宿の従業員にも振る舞った。もちろん宿へは厨房の使用料代わりだ。

後に、グラザナイがこの世界における餃子発祥の地として有名になり、中隊司令部から退官した者がそれぞれの故郷で餃子と小龍包を広めていくのは、また別の時代の物語である。

こうしてグラザナイでの短い安息の日々は終わりを告げ、火の神殿から祝福法儀式済みの武器防具を受け取り、特編中隊はウジェチ・スグタ要塞を目指し山道を早駆けで北上を始めた。
街道を行く人々は、中隊の緊迫感溢れた行動と将兵の表情に、一体これから何が起きるのかと、好奇心と不安がない交ぜになった眼差しを送っている。夏の日差しが強くなり始めた日の出来事だった。

第６５話

六百人に及ぶ集団がグラザナイを訪れ、火の神殿に常軌を逸した数量の武器防具に対する祝福方儀式の依頼したのは、アービィたちがそこを発った四日後のことだった。

火の最高神祇官は、精霊の加護によって授けられた遠見の術によって独立混成大隊の来訪を見通していたため、神祇官全てを召集していた。水の精霊から祝福されていた武器防具は、火の精霊を受け入れやすくなっているため、通常より儀式に掛かる時間も、一度に祝福できる数も遙かに多くなっている。

それでも六百人分を一度で処理しきれるはずもなく、ラシアスにいる全ての神祇官を召集しても九日の時間を必要とした。

その間、大隊は貴重な休暇を取ることができた。だが、それが最後の平穏であることを、羽を伸ばす全ての将兵は理解している。

なにしろ、これから行くのは南大陸の法治が届かない北の大地だ。四百五十年の平和に慣れた南大陸ではなく、戦闘の規模は小さいとはいえ、常に戦乱渦巻く北の大地だ。

安寧に慣れた南大陸の軍が、あまりにも呆気なく殲滅されたことは記憶に新しい。いや、南大陸の軍人にとっては、幾星霜経ようとも忘れられない恥辱だった。

そこへ征く。

これ以上軍人冥利に尽きることはなく、そして恐ろしいことはなかった。

グラザナイで羽を伸ばす将兵は、ひとりの例外もなく娼婦を求めた。もちろん六百人が一度に押し寄せたら、娼館どころか街の機能

が停止する。独立混成大隊は、グラザナイの城壁外に宿営地を造成し、小隊単位を交代で街に入らせて休ませていた。

独立混成大隊が武器防具の祝福法儀式完了を待っている頃、アービィたちはウジェチ・スグタ要塞で特編中隊との別れの宴も佳境に差し掛かっていた。

駅馬車で七日の行程を、中隊は五日で駆け抜けていた。アービィたちは馬車に乗せられていたのだが、余裕を持って行程を組む駅馬車とは違い、陽があるうちに行けるところまで行って、夕暮れになれば野営、そして暗いうちから起き出して日の出と共に出立を繰り返した結果だ。

ウジェチ・スグタ要塞に着いたときに、アービィたちは真っ先にランケオラータ一行の動向を確認した。

リジェストに立ち寄った際に、ギルドで手紙の受け渡しを確認したところ、レイからのメッセージが残されていたので、だいたいの動向は掴めてはいる。彼らはアービィたちに先立つこと三日で、このウジェチ・スグタ要塞を抜けていた。

「どうかな、今頃ワラゴさんの村かな、レイたち」

ルティが誰とはなしに呟く。

「ルムさんがいるんだから案内人はいらないでしょ。もうパーカホに向かって山岳地帯を抜けてるかもよ」

アービィが楽観的観測を元にした意見を言った。

「どうかなぁ、魔獣に備えて護衛を探してるかもしれないわよ。また、あんなのが襲ってきたら、ルムさん一人じゃどうしようもないもの」

ティアが悲観的観測の立場から反論する。

いずれにせよ、要塞到着が日没間際だったため、この夜のうちに地峡に踏み込むことは無理な相談だ。よく見知った道でさえ、街灯などないこの世界では月明かりがなければ漆黒の闇だ。

それ故に誇り高き近衛師団から抽出された中隊といえど、慣れない道を踏破できたのは陽があるうちだけだった。夕暮れになれば野営していたのは、翌朝の早い出立に備えるためだけではなく、慣れない夜道を行軍する危険を避けるためでもあった。ましてや一度も足を踏み入れたことのない地域など、命さえ惑いかねない頻闇の世界が広がっているだけだった。

その辺りはアービィたちも理解している。

身を焼くような焦燥感と諦観がない交ぜになり、そのまま要塞内での別れを惜しむ宴が始まった。

特別な儀式が存在するわけではないのだが、中隊としては勇気ある若者たちに惜別の情を感じていたし、アービィたちもここまで同行してくれた中隊に何もせずに別れることはできないほど感謝している。といっても軍など元はと言えば荒くれ男の集団だ。やることといえば女を抱くか、酒を飲むかしかない。ルティやティアがいるこの場で、全員でアービィを引きずって娼館に繰り出すわけにもいかず、ウジェチ・スグタ要塞の酒を飲み尽くすことで別れの儀式としていた。

ティアにしてみれば気遣いなどいらないし、久しぶりにエサを喰い放題にできるチャンスでもあったのだが、ルティの冷たい視線が痛かったため、心ならずも自重していた。

だが、ルティとしては、後で知ったがそう思われたのは不本意で、搾り尽くして殺さないでね、くらいにしか思っていなかったのだった。ルティは、ティアとは人のように付き合っているが、彼女が魔

獣であることは忘れていない。差別や偏見ではなく、魔獣が持つ種特有の個性を尊重するがためだ。

さすがに同室のときにラミア特有の食事はしてほしくないと思うし、見えなくともそれによって人が死ぬことは許容したくないとルティは常々言っていた。ましてや、死ぬことがないからといって、食事の対象がアービィになることは、何があっても許さない。当たり前じゃない、あれはあたしのもの。

しかし、ルティはラミアの食事を一切否定する気も、全くない。ティアにとっての食事とは性交と半ば同義であり、食べ物だけではラミアが生きる上での必要条件が満たされないことは、重々承知していた。

ティアは宴の最中、ある想いに囚われていた。

特編中隊は、北の大地に渡ることなく、ここからベルテロイに戻る。確かに指揮官を始め、副官以下ラシアス中の精鋭が揃っていると言っても過言ではない集団だ。だが、彼らに人相手の実戦経験は、皆無だ。これで最北の蛮族と相対したとき、その戦闘力を十全に発揮できるかと考えると、その答えは否だった。

自分を含め異形の者に対してであれば、彼らは躊躇いもなく剣を振り降ろせるだろうが、人の形を取る者に対しては剣に躊躇いを持たせずにいられるかは疑問だった。

ランケオラータに付き従う軍の詳細は知らされていないが、おそらく南大陸の一般常識から導き出される精鋭が選抜されるのだろう。それは、まず間違いなくランケオラータの領地で近衛と呼ばれる立ち位置の者たちのはずだ。ティアはここまで見てきて、近衛の軍が実戦に通用するとは、到底思えなかった。彼らにできることは、威儀を正し、王族の権威の象徴であること。それ以上でもそれ以下で

もなく、実戦に投入すべき軍ではないと、ティアは見ていた。
独立混成大隊の下士官たちが抱いた危惧と同様の危機感を、ティアは感じていた。

確かにティアが思った通り、独立混成大隊はハイグロフィラ領とカトスタイラス領の近衛に相当する私兵部隊から抽出した軍だ。当然、領主屋形の警護が主たる任務で、魔獣や野盗の討伐に出ることはほとんどなく、人を斬った経験は皆無に等しい。武芸には優れ、道場剣法ではない実戦スタイルの剣技を身に付けてはいるが、その剣が実際に人に向かって振るわれたことは、数えようと思えば片手にさえ余るほどだった。

実戦経験がない軍が、極限状態に陥った際に脆いことは、指揮官の資質を差し引いても昨秋の恥辱が物語っている。
おそらく、集団戦の指揮に長けたルムが相手でなくとも、実戦慣れした北の民に乱戦に持ち込まれたら、独立混成大隊には成す術はないだろう。訓練という予定調和の中でしか剣を振るう必要のない軍人と、毎日を戦乱と闘争に費やす戦人が相対したとき、どちらが生き残るかなど考えるまでもない。騎士や貴族の名誉ある戦いのような様式美に則った決闘と、何が何でも生き残ろうとして、そのためには手段など選ぶ余裕などあるはずのない戦いとでは、考え方からして大違いだ。

独立混成大隊は、南大陸の常識が通用しないところで闘わなければならない。だが、それを理解できているのは、指揮官と一部の参謀たち、そして魔獣や野盗討伐の経験を積んだ後に、各領の近衛に相当する部隊に抜擢されていた歴戦の下士官たちだけだった。
口煩く訓練と実戦の違いを部下に伝えようとする各級指揮官を、部下将兵たちは次第に疎ましく感じるようになっていた。

爽やかな寂しさを残しつつ、ウジェチ・スグタ要塞からベルテロイへと引き上げる近衛第二師団特別編成中隊を見送ったアービィとルティ、そしてティアの三人は、少しふらつく足取りで南大陸と北の大地を隔てる地峡を渡り始めていた。

ランケオラータ救出の際には、リジェストから間道を縫って北の大地へ渡ったため、早朝に出発してワラゴのいる集落に到着したのは夕刻近くだった。だが、今回はより北の大地に近い地点からの出発であるため、最も近い集落には昼前に到着できると聞いていた。さらに、そこを経由してワラゴのいる集落まで行くなら夕刻前に、直接目指すなら昼までには無理でも、まだ陽の高いうちにたどり着けるらしい。

ラシアスの騎士団長であり、現ウジェチ・スグタ要塞の総指揮官ラルンクルスからは、昨夜そのように聞いていた。

ラルンクルスは、アービィがいなければ、愛娘に対する愛情にも似た感情と敬愛を抱く摂政ニムファが、覇権欲に囚われることはなかったと思っている。その点でアービィに対して良い感情を抱けない部分もあるのだが、それはアービィの責任ではないことも充分すぎるほど理解していた。まずもって宮廷魔術師のドーンレッドが勇者召喚などしなければ、ニムファは国を想い民を想う優しい娘のまま、政治を学ぶことができたはずだったし、この若者がそれまでの生活を台無しにされることもなかったはずだった。

自分も召喚の場に居合わせた以上、アービィの人生を叩き壊した罪から逃れることはできない。例え、アービィがそのことを全く気にしなくなっていたとしても、ラルンクルスから罪の意識が消えることはなかった。今更それを言っても、十年以上の月日が取り戻せるはずもない。異世界とこの世界の時間の概念が違えば、もしアー

ビィを元の世界に送り返せたとして、数百、数千の年月が過ぎていないとも限らない。最悪、アービィがいた世界が滅び、消滅しているかもしれないのだ。

ラルンクルスは自分にできることは、これから最北の蛮族を討つ若者に対し、全力で支援することと、今は行方を眩ませているドーンレッドを探しだし、アービィを召喚した瞬間に戻す、つまり召喚しなかったことにする方法を探求させることしかないと思っていた。

アービィたちは道に迷う危険性を避け、まずは地峡から最も近い集落に入っていた。

そこでランケオラータたちの動向を確認したところ、この集落で一泊の後にワラゴの集落へ向かったということだった。護衛を雇ったかどうかも訊ねたが、この春から凶悪な合成魔獣が一切出ないことから、護衛というよりはポーターを五人雇っていったらしい。もともと北の大地の道は、馬車が通るほどには整備が行き届いていない。人が歩くには問題ない程度の凹凸でも、馬車の車輪を通すと耐え難い振動となってしまうのだ。

このため、乗車用であろうと荷駄用であろうと、ウジェチ・スグタ要塞から最短の集落まで人と荷物を運んだら、魔獣がいてもいなくてもそこから引き返さざるを得なかった。そこからは三人と苗を担いだ五人の神父たち、そして荷役に雇った者五人たちだけで、徒歩でパーカホを目指している。家畜まで連れて行くことは不可能だったので、独立混成大隊が到着するまで家畜たちはリジェストの町の酪農家に管理を委託してきてあった。

ランケオラータやルムが危惧していた合成魔獣のほとんどはアービィが殲滅していたのだが、その事実に気付いた者はほとんどいない。合成魔獣を使役していた最北の蛮族でも、グレシオフィと高位の幹部数名以外には、そのことは伏せられていた。

小さな集落で昼食を取った後、アービィたちはワラゴのいる集落を目指して、足早に山道を進み始めた。

「久しぶりだな、南の住人たち」
ワラゴが懐かしそうに言った。
まだ百日と経っていないが、ずいぶんと時間が過ぎ去ったように思えていた。

「まだひと季節しか経ってませんよ。
これでも急いできたつもりなんですって」
アービィが苦笑交じりに答える。

「お前たちの連れは、先日パーカホに向かって行ったぞ。
女連れだし、運ぶものも多かった。
急げば途中で追いつくのではないか。
狼が走ればすぐだろう？」
ワラゴがランケオラータたちの状況を教えた。

男所帯や冒険者稼業に慣れた女性であれば、行った先で適宜必要な物を買い集めて済ませてしまうが、つい先日まで貴族の家庭で育っていたレイはそうもいかなかった。ラガロシフォン領の建て直しで多少の苦労を知ったとはいえ、不足した物資はボルビデュス領からすぐに送り込むことができたため、生活必需品の不足という状況など想像すらできないことだった。
いくら後から追ってくる独立混成大隊が生活必需品を運んでくるとはいえ、それまでにも着替えや化粧品等、細々と使う物をいろいろと持ち込んできている。北の大地の状況をランケオラータから聞いて、それなりに荷物は厳選したのだが、それでも通常の旅人の荷物とは比較にならないほどの量に膨れ上がっていた。

馬車に乗っているときには気付かなかったその量に、ルムは半ば呆れ顔になったものの、ヌミフに少し分けてもらえないかとレイに頼み込んでいた。

アービィはリジェストで南大陸の酒と茶をワラゴへの土産として買い込んでいたので、それぞれの酒を酌み交わしながら話し合っていた。既に陽は沈みかけ、これから山岳地帯を降りることは無謀だった。馬車ではないので、松明でもあれば暗闇ではないのだが、それはそれで面倒な話だ。一本の松明が明朝まで燃え続けるわけでもないし、危険を冒して徹夜で走ってまで追いつくほどのことはない。

今夜はこの集落に腰を落ち着けて、明日の朝早くに出れば、それで充分だとアービィたちは判断していた。

「なんでも六百人近い軍を連れてくるそうだが、その食料をどうするのか聞いたのだよ。

北の大地でいきなり六百人分の食料は購えないからな。

そうしたら運ぶと言うじゃないか。

どういうつもりか、分かるかい？」

ワラゴが心配する点は、そのような大人数を連れてきても食糧不足で自壊するのでは、という点だった。

運ぶと言われても、北の大地の道は大量輸送には向いていない。兵一人一人が運べる量など高が知れている。そのうえ現在の平野部には、勢力圏を追われた中央部の民までが犇めいている状態だ。

そのような状況で、六百人の腹をどうやって満たすのか、ワラゴには想像も付かなかった。

「多分ですけど。

後から来る軍は、しばらくこの辺りの集落に、分散して滞在する

んでしょう。
精鋭部隊を抽出して、ランケオラータ様を追わせる。
残りが何分割かになって、ウジェチ・スグタ要塞とこの辺りを往復して食糧なんかの輸送を担当して、他が道の整備をするんじゃないでしょうか。
それで荷馬車が通れるようになったら、一気に進むんじゃないかと思いますよ」
ティアが答えた。

ほぼ間違いなく、その通りだろう。
そうして戦略拠点を山岳地帯と平野部に築く。互いに距離がある集落や村を連結するように宿営地を恒久化し、南大陸から商人を呼び込んで、軍だけではなく民間も戦略物資の輸送に活用するつもりだ。その過程で山岳地帯の集落は、物資の集積基地化されるだろう。
当然カネが落とされ、それを原資にして軍や南から来る商人相手に商売を始めることは、充分可能だ。今のうちから南大陸から食料を輸送する段取りを付けておけば、軍はその戦力を道の整備に集中できるし、山岳地帯の集落には巨額のカネが落ちる。
既に南大陸との交易で貨幣経済が確立されつつある山岳地帯の民たちに、不都合な要素はほとんどない。
だが、もうちょっときちんと説明しておいてほしかったと、ティアは思っていた。

「さすが慧眼だな、蛇の女神殿
では、我らは今のうちから、軍相手の商売を準備しておけばよいと？」
ワラゴもそれなりに目端が利くためか、すぐに話を理解している。

彼は集落の指導者層ではないが、それなりに各方面に顔が利く。
暫く待たれよ、と言い残し、彼は住居を出ていった。

暫くして彼は、集落の指導者と商に敏い者たちを連れて戻ってきた。

「話を詳しく聞かせていただけるかな？
もとより我らは南大陸と事構えるつもりなどありはしない。
それに、ここで恩を売っておけば、後々移住もしやすくなろうて。
いや、我ら年寄りはもう動く気はないが、若い者たちに道を示す義務があるからな。
もっとも、若いもの全てが移住されては困るがの」

壮年から老境へ差し掛かろうかという男が、連れてこられた一団を代表して言った。

ティアは、ワラゴが集落の指導者たちを呼びに行っている間に纏めた考えを、南大陸の商習慣も交えつつ説明する。

なによりも、この集落を含め山岳地帯を、蛮族討伐の軍事拠点に作り上げなければならない。今のところ最北の蛮族たちは中央部を席巻はしているものの、山脈地帯を越えて平野部に雪崩込む気配はないとはいえ、そうなったら次はこの山岳地帯が狙われることは考えるまでもない。南大陸に尻尾を振るのではなく、協力してこの難事に当たる。指導者はそう考えていた。

商に敏い者たちといっても、商人として日々の糧を得ているわけではなかった。狩猟を主な生業としているが、それができないときに南大陸との交易で糊口を凌いでいたに過ぎない。だが、他の集落にはそれを生業とする者もいるので、いきなり商業ルートの構築から始めるというハンディは山岳地帯の民全体で考えればないと考えてよい。

今はその者たちと共同で、一刻も早くリジェストに食料の仕入れルートを確立する必要がある。後から来る軍にしても、部隊を分けるよりは戦力を集中したいであろうし、リジェストに商業ルートを

確立するなら軍が来る前でなくては、弱小な北の民が食い入る余地がなくなってしまう。まずは保存の利く主食類の購入確保だ。

幸いなことに、ストラーの商人たちにとってラシアスは御得意様だ。ストラー国内が食糧不足にでも陥らない限り、発注すればしただけ商品を送り込んでくる。ラシアス王国にしても、食料を始めとする商品が国内にはいることは関税や通行税の増収に繋がるため、歓迎することであり過剰に税率を上げて妨害する要素など微塵も見当たらない。

今までであれば間道を使って細々と通商するしかなかったが、ウジェチ・スグタ要塞総指揮官がランクルスに代わっている今、彼がアービィに抱く罪悪感が北の大地への輸送に最大の助力となることは間違いない。

酒を飲みながらではあったが、これからの生活に希望を見いだした山岳地帯の民たちも、ランケオラータたちを支援する方策に見通しが付きそうなアービィたちも、次から次へと考えが湧き出し、酔う暇などまるでなかった。結果として、明朝を期してアービィたちはウジェチ・スグタ要塞に集落の者を連れて逆戻りし、ラルンクルスと交易の利便について交渉することになり、ワラゴは他の集落との連絡に走ることになった。

「今って、パーカホまでの行程で、食べ物は採れてます？」

アービィがワラゴに聞いた。

以前来たときは、角を持った大型の草食獣が狩れるとのことだったし、橇が使えたため、ある程度食糧の携行が楽だった。現在の状況によっては、この集落でどれほど食料を調達していかなければ行けないか、それを確認しておかなければならなかった。

「草は少ない。

下手に取って喰うと腹を下すからな。

慣れないことは、しないことだ。
獣は、結構採れるぞ。
お前たちなら、雑作もなかろう。
だが、水には気をつけろ。
平野部に出ると、いきなり腹を下す水ばかりだ」
南大陸でも馴染みのあるウサギや、鹿といった小型から中型の獣たちが、今こそ次世代を残す時とばかりに山野を駆けている。それを狙うキツネや熊も彷徨いているため、狩猟ができるならそれほど食料に困ることはないだろう。ワラゴが言うとおり、アービィとティアが獣化して狩りをすれば、三人が十日間喰うには充分すぎる獲物を狩ることは雑作もないことだ。
しかし、平野部に出ると泥炭層を染み透った水か、細かい泥を大量に含んだコーヒー牛乳のような水がほとんどで、飲料に適した水は普段からそこを行き来している人間しかそのありかを知らない。

「じゃあ、パンを十日分買えますか？
それと、ワラゴさんにパーカホまでの案内をお願いしたいんですけど、いいですか？」
ルティが訊ねた。

いっそアービィは狩った獲物を丸ごと食えば、栄養バランスはほぼ完璧だ。この時代、まだ栄養学などは発達していないが、それでも経験的な食べ合わせや、単食の危険性は認識されている。肉しか口にしない十日間は、間違いなく便秘を引き起こし、改善策がなければそのまま体調不良が続いて、いざというときの命取りになりかねない。もちろん短期の便秘で即命の危険が出るというわけではないが、体調不良による判断力や反射の低下が恐ろしかった。

「それくらいなら大丈夫だ。
カネでもいいし、明日何か狩ってきてくれてもいい。

案内は了解した」
ワラゴは少し思案の後答える。
売ることに問題はないが、在庫に不安があった。カネは食えないので、短期的には何か狩ってきてくれた方がありがたいと考えていた。

「解りました。
明日、狩りしてから出掛けましょう」
アービィが答える。

そういえば、最後に獣化したのは、ビースマックでメディ一家が危機に陥って以来だ。何かをするためでなく狼を解放したのは、一年以上も前にビースマックでメディと出会う直前に、ギーセンハイム近くの川で水浴びして以来だ。
今まで獣化の必要がなかったからなのだが、特編中隊と同行していてはおいそれと獣化はできないという理由もあった。しかし、シュットガルドを出て以来、平穏であったことは確かだ。闘争のためではない獣化も悪くないと、アービィは水浴びした夜を思い出しながら考えていた。

翌朝、不必要に早く目覚めたアービィは、多少酒が残った頭を振りつつルティとティアを起こし、手早く支度を済ませると集落を出た。宿のような気の利いた施設などないため、三人にあてがわれた小屋で昨晩打ち合わせした結果、獣化はアービィのみでティアは弓矢で狩りをすることになっていた。

集落が見えなくなった所で、アービィは茂みに潜り込む。服を脱ぎ、バッグにしまい込むとひと息ついた。辺りの枝をへし折る音が響き、茂みの中から巨狼が姿を現した。

「久し振りね、元気になった？」
ルティが愛おしそうな表情で、巨狼の鼻面を抱えながら言う。
――うん、もう大丈夫。
アービィが念話で答える。
――じゃ、行ってくるよ！
そう言い残すと、巨狼は音もなく茂みに姿を消していった。

北の大地は、短い夏を謳歌している。
日差しはそれなりに強くなっているが、乾燥した風が熱さをあまり感じさせず、南大陸のじっとりとした夏に比べ、はるかに過ごしやすい。ルティは、この気候は南大陸の住人にとって、避暑地として大きな価値を持つと思っている。多くの人が訪れるならば、そこには少なくないカネの動きと、雇用が生まれる。
獲物を追いながらも、ルティの思考は北の民が自立した生活を送るにはどうすればいいか、そのことで占められていた。

アービィは獣化した後、獲物を狩りつつ山を駆けた。短時間のうちに鹿二頭に熊と猪をそれぞれ一頭ずつ狩っていた。念話でルティとティアを呼び、自分の背に獲物を括り付けて集落の近くまで運ぶ。ワラゴは自分の正体を知ってはいるが、わざわざ騒ぎを起こすことはないと思ったからだ。背から獲物を下ろし、集落に運び込んでワラゴに渡す。
「これでパン十日分くらいになります？」
アービィが聞いた。

「ああ、充分すぎるな。
干し肉と合わせて、二十日分くらい持っていくか？」
ワラゴが笑いながら答えた。

「ワラゴさん、ちょっと時間ありますか？
誰かに鹿を捌いておいていただけると助かります。
その間に、ちょっと一緒に来ていただきたいんですが」
狩りの間に、アービィは望んでいた物を見つけていた。

清冽な清水が流れる底床が小砂利の川に自生していた、丸みを帯びたハート型の葉を持つ抽水性の植物。砂利の中に伸びる節くれだった地下茎は、間違いなくアレだった。試しに葉を齧ってみたが、鮮烈な辛味が鼻を突き抜け、アービィは思わずその場で鼻をピスピス鳴らしてしまった。南大陸では見ることのなかった山葵を見つけたとき、これは良い商売になるとアービィの直感が告げていた。記憶の中にあった知識ではここの冬を越せない植物だと思っていたが、異世界なので多少耐寒性も違うのだろうとなんとなく納得する。

集落から出て再度獣化すると、ワラゴを乗せてワサビの自生地へと向かう。

――これです。これは、北の大地の特産物にできますよ。
アービィがウキウキしながら言った。狩りの際にツルマメも見つけていたので、醤油と味噌の当ても付いていた。

「ダメだ、狼。
これは、毒草だ。
辛いだろ、危ないぞ」
ワラゴの答えは辛辣だった。

――誰か、これを食べてお腹下した人っていますか？
アービィが聞く。

「いや、辛くてな。
毒に当たるほど大量に食った者はいない。
腹を下したという話も聞かないな」
実際のところ、初めてこれを食べた人は、葉を一口食べて辛さのあまり吐き出してしまったらしく、それ以来食べられるものではないという認識になっていただけだった。地下茎を摩り下ろして薬味として使うということは、まだ誰も試していないらしい。

――じゃあ、ちょっと良いこと教えますよ。帰ったら、食べてみてください。
そう言うとアービィは、手ごろなワサビを数本引き抜いてもらった。

半信半疑のラワゴを乗せて集落に戻る。
鹿は捌き終わっていたので、適当な固まり肉に切り分け塩を塗りこんだ。
タマネギとハーブを何種類か刻み、浅い大きな鉄鍋を熾き火で熱してから肉の六面全てを焼き固め、火から距離を取ってとろ火の火加減にする。肉の周囲にタマネギとハーブを散らし、小さな鉄鍋を被せて暫く放置した。串を刺して中まで火が通ったことを確認してから、肉を火から下ろして冷まし、肉汁を落ち着かせる。その間に鍋に残った肉汁に酒を加えて煮詰め、塩コショウで味を調えた後、目の細かいザルで漉してグレービーソースもどきを作った。
ワサビの地下茎の皮を剥き、摩り下ろしてグレービーソースと薄く切った鹿肉のローストに合わせて試食してもらう。

「まぁ、お前の言うことだから、大丈夫とは思――

なんだ、この……
喰ったことのない味はっ！？」
ワラゴは、この世界で初めてワサビを堪能した男になった。

「ちょっと、あたしの分は？」
ルティがすかさず皿とフォークを持って肉を奪う。
アービィが止める暇もなく、ルティはワサビをたっぷりと付けてから口に放り込んだ。

「ティアにもあるよ。
集落の皆さんの分も。
ワサビは、ちょっとだけですよ。
多すぎると、ああなりますから」
指さした先には、涙と鼻水どころかだらしなく口を開いてよだれまで駄々漏れにして立ち尽くし、声も出なくなったルティがいた。

この他にも、茎の塩揉みを刻んで炙った干し肉を薄く切ったものとパンに挟んだサンドウィッチや、鶏わさ、テンプラもどきを作ってみたところ、どれも辛味が新鮮で好評だった。
再生産の難しい作物といえるワサビは、大量に採取してしまうとその年限りになってしまう。もともと消費量が少なくて済む商品でもあるため、採取量に気を使い自生地の保全と新規のワサビ田の開墾を進めれば、山岳地帯にとって有力な交易の材料となるだろう。
この他にもテンプラにできる山菜なども多種見つけられたため、季節によっては大きな収入源を確保できたことになる。大量栽培が可能なものは少ないため、持続可能な資源として利用規制は厳しくしなければならないが、そこは山岳地帯の民に任せるしかない。

このまま酒盛りが始まってしまい、アービィたちがランケオータたちを追って山岳地帯を下るのは、なし崩しに翌日にずれ込んでし

まった。
　さまざまなワサビ料理を集落の若者たちに教えながら作っていたアービィは、ツルマメを使った醤油の作り方を考えている。平野部ではかなりの量が取れるらしいので、醤油だけでなく豆腐やモヤシなど、新しい産業が興せると思っていた。えんどう豆があれば水耕栽培で豆苗も作ることができる。土地が痩せている北の大地にはうってつけだろう。ほかにも水耕栽培できるものはないか、アービィは記憶の底を漁っていた。

　翌朝、十日分の食料を担いで集落をたったアービィたちとワラゴは、ランケオラータたちの後を急ぎ追った。確かに地峡を渡って以来魔獣の気配は感じないが、警戒を怠るわけにはいかない。

「ねぇねぇ、僕が獣化して荷物全部担いじゃえば、少しは早く進めるんじゃない？
　多分、獣とか魔獣も寄ってこないだろうし」
　アービィが提案した。

「そうね～。
今更隠す必要もないもんね。
じゃ、お願いしようかしら」
ルティが同意した。

　アービィはそそくさと茂みに消えると、獣化して戻ってくる。

――いいよ～、括り付けてくれるかな。
手が使えないため、荷物の固定はルティやティアの役割だ。

「相変わらず、心臓に悪いが……

改めて見ると、いい毛皮だな。
これなら寒さも心配なかろう？」
ワラゴが頬を引き攣らせながら言う。

左右に二人分ずつの食料や荷物を振り分けて背負い、アービィは歩き始めた。
さすがに荷物から解放されたルティとティアの足取りは軽く、それまでとは比べ物にならない速度で道を進んでいる。
四日後、前方を十五人には満たない集団が、大荷物を担いで歩いているのが見えてきた。

――ねぇ、あれランケオラータ様とレイたちじゃない？
遠くまで見通せるアービィがまず気付き、ルティに知らせた。

「うん、そうよ。
一気に追いついちゃいましょう」
アービィの背に飛び乗って遠くを見渡したルティが答える。

――じゃあ、獣化解くからちょっと待っててね。
アービィは、レイにまだ正体を知られていないことを思い出し、一行の足を止めようとした。

「いいわよ、そのままで。
レヴァイストル伯爵も言ってたじゃない、レイがどんな顔するか見てみたいって」
ルティとしては悪戯心というわけではなく、いずれ事があれば知られてしまうのだし、重大な局面で混乱を引き起こすよりは今のうちがいいと考えていた。

「そうよ～、ちょっとおどかしちゃいましょうよ」

ティアも同じ考えだ。
ティアはそう言うなり、ラミアのティアラを取り出すと獣化した。
もちろん、ルティの視線が冷たいので、上半身には服を纏ったままだった。既にアービィもティアも、ランケオラータとルムには正体を見せている。大きな混乱はないだろうと、そのときは思っていた。
「それにさ、あの人たちの分も背負ってあげたら、アービィ」
ルティは最初からそのつもりでもあった。
――はいはい、僕は馬か。
完全に諦めた表情でアービィが伝えてきた。

遠くから自分を呼ぶ、聞き覚えのある声にレイは振り向いた。
その後が大変だった。
まず、狼と妖蛇の姿を認めたレイが卒倒し、次いで風の神官が『暴風』や『雷電』を繰り出す。ランケオラータとルムは、狼と妖蛇の正体にすぐ気付いたがレイの介抱から手が放せず、彼らを止めることができない。ポーターたちは完全に腰を抜かし、その場にへたり込んでいる。
ティアに『暴風』や『雷電』が命中すれば大怪我になってしまうので、アービィが片っ端からその身で受け止めていた。
ルティとワラゴは近寄るに近寄れず、ランケオラータとルムが止めに入り、神官たちの呪文使用回数が尽きるまで、風の刃と雷光が舞い続けていた。
――ごめんなさい～、脅かすつもりだったんです～
情けない念話がランケオラータとルム、目の焦点がまるで合って

いないレイに届いた。
ティアの姿を認めたルムが、顔面蒼白になり地べたに平伏する
「私が付いていながらティア様に刃を向けるなどという狼藉、誠に以て申し訳なく――」
気のせいか声が震えている。

「あの、悪いのはこちらですから、どうかお顔を上げてください」
恐縮したティアが取り成し、ルティが決まり悪そうに続いて謝る。
「ごめんなさい。
こんな大事になるとは思わなかったんです……」

アービィは騒ぎが一段落したところで、傷口を舐めている。神官たちが『快癒』を掛けようとしたが、既に傷口は塞がり始めていたため、念話で丁重に断り、届く範囲の傷口を丁寧に舐めていた。

「アービィ殿でしたか。
知らぬこととはいえ、大変なことをしでかしてしまい、申し訳ございません」
アマニュークの一件で顔見知りになっていた神官が謝るが、アービィも悪ノリしていたので自業自得だ。

「もう、あなたたち、勘弁してよ……
本気で死ぬと思ったわ。
いきなり大きな狼とラミアが近付いてくるんだもの。
荷物背負った狼なんて変だなとは思ったけど、やっぱり怖かったんだからっ。
でもね、アービィが人狼で、ティアがラミアだったなんて……。
今まで全っ然、気付かなかったわ。
それに、アービィ、何よ、脅かすつもりだったって」

半泣き状態でレイが言った。

「言っておいて良いものかどうか悩んだのだが、な。
当人たちからじゃないと、良くないと思って言わなかったんだよ」
ランケオラータが困ったような顔で言う。
そのときのレイの恨みがましい視線に気付き、後で夫婦喧嘩の原因にならなければいいがと思うルティだった。

「ごめんなさいね、レイ。
ちょっと悪ノリしすぎたわ。
お詫びといっては何だけど、荷物は全部アービィに括り付けちゃって」
獣化を解いてからティアが言った。

――それ、僕が言うならともかく、何でティアが……　そのつもりだけどさ……
アービィが抗議するが、ルティが率先してレイの荷物をアービィの背中に括り付けていた。

「どう、重くない？」
一応、表情だけは心配そうにしたルティが聞く。

――うん、全然平気なんだけど、もう乗らないかな？
アービィは平然とした表情で答える。
まだ少し積み残しているが、これ以上は荷物が安定しそうにもなかった。

「アービィ、それくらいは持てるわよ。
ありがとう」
一度死ぬほど驚いた後は、レイはすっかり狼のアービィに馴染ん

でいた。

「パーカホに着いたあとは、滅多のことでは獣化しないでくれよ。あそこには、ごく普通の南大陸の住人も多いからな」

ランケオラータが一応釘を刺す。

――解りました。近くまで行ったら元に戻ります。

アービィとしても、安心して獣化できる環境があるならいいのだが、余計な混乱を引き起こしたいとは思っていなかった。

やがて十六人と一頭の集団は、パーカホの村を目指して再び歩き出す。

アービィの毛並みが夏の日差しを反射して、美しくきらめいていた。

第６６話

パーカホの村は、指導者の帰還に沸いていた。
北の民はルムの、南大陸の住人たちは新婦を連れたランケオラータの姿を見た途端、村中に歓声が湧き上がる。何よりも若き指導者たちの無事と、結婚を祝う声がそこここから上がっていた。

ルムは村の周辺を見て驚きの表情を隠せない。
まず、作物が整然と並ぶ畑。
さすがに南大陸のストラーに広がる畑に比べるべくもないのだが、北の大地では初めてとなる管理された畑の名の恥じないものに仕上がっている。
そして、それを囲む馬防柵を応用した防壁と濠。
魔獣の大軍相手では多少心許ないが、それでも突破にはかなりの苦労を強いることができそうだった。堀にはまだ水は張られていないが、近くの川から運河を掘削しつつあり、これができれば平時の飲料水確保も楽になりそうだ。
もちろん、運河の水は灌漑にも利用され、作物の収穫量向上にも貢献できるだろう。わずか百日程度では全てを完成させることは無理だが、独立混成大隊が土木作業に加われば、来年の秋までにはかなりものが作れそうだった。南大陸の住人たちは、周囲の村落にも畑の整備や防護柵の工事指導に行き、そこでもそれなりの成果を上げていた。

畑の収穫量向上には、堆肥と共に人の排泄物を無駄なく肥料として使うようになったことも、大きく影響していた。それまで北の大地では焼畑が農業の主流であり、施肥という発想はあまりない。当然排泄物は無為に捨てられるだけで、南大陸のような人為的な窒素循環ができあがっているわけではなかった。冬の間南大陸の住人た

ちは自らの排泄物を捨てることなく、雪を避けられるように建てた小屋の中に掘った穴に集め、適宜藁などで保温してその発酵に勤めていた。当初は周囲に臭いも立ちこめ、北の民に眉を顰めさせていたものだったが、この春からの作物の育成状況や収穫量の向上を見て北の民も積極的に下肥の作成に加わるようになっていた。

私兵としてボルビデュス家やハイグロフィラ家に仕えてはいるが、もともと農家の次男三男といった立場の者や、農業に従事していた義勇兵が多くいたため、農業の改善はそれまでの南大陸のやり方を少々修正するだけでよく、ほとんど苦労というものはしていない。苦労といえば、経験的な技術を説明する際、それをイメージできない北の民に理解させることくらいのものだった。

基礎的なことは既にできかけていたので、農業技術指導としてこの地に来た神官たちは、作物別の育成のコツを指導するだけでよく、さっそく持ち込んだ苗を植え、タネをまく作業の準備に取り掛かっている。

一方、馬防柵や堀の作成は、間諜を専門としてはるものの、軍事の専門家でもあるハイスティがその実力を遺憾なく発揮していた。地形を十全に利用し、それまでは簡単な柵で村を取り囲むだけだったものを、城壁と呼ぶに充分すぎるほどものに作り変えていた。

もちろん、南大陸の王城や貴族の城のような石造りの防壁を作るには、材料も技術も、材料を運ぶための道も不充分であったため、村の周囲で手に入る針葉樹を主な材料としたものだった。

ルムは、村の状況を見て満足すると共に、南大陸の文化技術に対して畏怖を抱いていた。

これは北の民が劣っているということではなく、文化を醸成する余裕がなかったということであり、それだけ厳しい環境におかれて

いたということだったのだが、ルムは南大陸に対して民が劣等感を持たなければいいのだがと感じていた。

「ルムさん、この短期間にこれだけのものを作り上げたってことは、もう北の民と南大陸の住人の差はないってことですよ」

ルムが抱く南大陸への劣等感を敏感に感じたアービィが、ルムに近寄り囁いた。

「そうなのか？

俺には、北の民は南の住人に教わらなければ何もできないものにしか思えなかったんだが」

まだ北の民の潜在能力を認められないルムが半信半疑で聞いた。

「そうですよ、ルムさん。

知らなかっただけ。

やってる余裕がなかっただけ。

それだけです。

南大陸にはそれがあった。

でも、北の民には、この苛酷な環境を生き抜いてきた強靭さがあるじゃないですか」

ティアが横から口を挟む。

技術に圧倒されている若き指導者に、自信を持たせることが今は大事だ。南大陸に依存するのではなく、したたかに利用するくらいでなければ、この先海千山千の南大陸の商人たちに手玉に取られるだけだ。

「そうだな。

俺たちは、今まで生き残ることだけに精一杯で、戦の技術だけしか磨いてこなかった。

だが、それができたってことは、これから学べばいくらでも文化

を発展させることができるということだな」

ルムは、忙しく立ち働く北の民と、同じように動き回る南大陸の住人に希望に満ちた視線を送っていた。

今ここにいる南大陸の住人たちは、捕虜という形でこの地に留まっているが、何分の一かは北の民の女性を配偶者に選び、この地に骨を埋めることを選択している。既に同胞と呼んでいい人々だ。独り身の者も、南大陸への帰還を望む者がいる反面、この地に残ることを選ぶ者も多くいた。今すぐ戻るより暫くはここにいたいと思っている者や、将来配偶者を見つけてから戻ろうと思っている者、そのようなことに関係なく北の大地に新天地を求める気になっている者と様々だった。

いずれにせよ、捕虜という扱いは既になく、同胞として、同じ村の者としての付き合いになっていた。

南大陸へ帰還する人々には、北の民への偏見を多少でも解消するという副次的な働きも期待されている。付き合ってみれば解ることだが、文化の違いは差別や偏見の原因とはならない。他を見下すことでしか自らの優位を確保できない愚かな者がいる限り、差別も偏見もそう簡単にはなくならないだろうが、他を認めなければ自らも認めてもらえるはずもない。まがりなりにも北の民と協力して生きてこなければならなかった捕虜たちには、そのような偏見を抱く余裕も差別などしている余裕もなかった。

このことが良い方向に作用すれば、南大陸へ帰還する彼らは、強力な北の大地のサポーターとなることが期待されていた。

ルムは、旅の後始末がひと段落すると側近を呼び、最も気掛かりだったこと、ヌミフの消息を訊ねた。兄としての立場もあったが、ここはそれを堪え、指導者としての立場で聞いている。

「バードン様が山脈地帯の集落イーバでヌミフ様と合流され、同行の者たちは無事帰っております。
バードン様とヌミフ様がイーバに留まり、ルム様のお帰りをお待ちしているようです。
中央部の民が、どのようにして山脈地帯の民を支配したかは不明ですが、現状は両部族が共同で過ごしている模様。
中央部は、最北の蛮族が席巻し、山脈地帯への食料の供給はほとんどありません。
彼の部族を率いるプラボック殿からは、いずれ平野部と合同したいとの意向を伝えられましたが、ルム様との話し合いを求めています。
ただ、既に山脈地帯の食糧事情が逼迫しているため、非公式ではありますが食料の援助を行っております。
我等としても、戦を仕掛けてくるのであれば別ですが、無為に命が失われることは見過ごせず、私の独断でこれを許可しました。
ルム様のご裁可なしに事を進めましたこと、お詫び申し上げます」
側近は、かいつまんでこれまでの状況を説明した。

「そうか……
あちらも苦しいのだな。
解った。
いろいろと苦労をかけたようで済まなかったな。
お前を責める要素など、何もない。
俺は、明日、イーバへ行こう。
プラボック殿と会わねばなるまい」
過去を考えれば『殿』付けなどできない間柄ではあったが、今はそんなことに拘っているときではない。

最北の蛮族の脅威はこの春以降ないということだが、それが永遠

に続くとは思えない。平野部を襲った魔獣の群れは一度きりだったが、中央部はついにその住処を追われているのだった。昨年の春以降どれほどの戦があったのか、想像も付かなかった。

そこまでした最北の蛮族が、南下の欲望を満足させたとも思えない。なんらかの理由で、さらなる侵略のための力を蓄えているものと見て間違いないだろう。

最北の蛮族が南下を始める前に、平野部と中央部の民の大同団結を現実のものとする必要があり、それは焦眉の急と言えた。

幸い、村の防備にはハイスティがいれば、独立混成大隊が到着するまで何とかなるだろう。農業については、神官たちに任せておけば良い。統率についてもこの側近がいれば問題ないだろう。それにいずれは南北大陸の共同統治機構にルムは出て行く予定だ。そのためにも次の指導者を育てておく必要があった。自分の目が届きやすくなった今、彼を次代の指導者として認知させ、その力を育てるチャンスでもあった。

「アービィ殿を呼べ。
ティア様とルティ殿もな。
お三方に同行していただき、俺はプラボック殿に面会を求める」
ルムは側近にそう言って、いつくかの指示を出してから報告の面談を切り上げた。

「また、旅に同行していただきたい。
俺は、これから山脈地帯のイーバという集落へ行き、中央部の長と話をするのだが、彼の地には狼を神とする部族が多い。
アービィ殿にはご苦労を駆けて申し訳ないのだが、一肌脱いでいただけまいか」
ルムが平野部の長としての立場で、口調も改めて依頼した。

「構いませんが、一応、形だけでもランケオラータ様の許可を取っていただきますよ」
アービィが答えた。

ランケオラータ救出は、レヴァイストル伯爵から依頼されてのことだ。そしてその次のアマニュークでの一件は、ニリピニ辺境伯から依頼を受けている。ビースマックでの反乱への対処は、パシュース第二王子の依頼で動き、それぞれ報酬を得ていた。今回北の大地へ来たのはランケオラータに頼まれたからであり、アービィたちの意志であるのだが、正式な仕事の依頼ではない。つまり、アービィたちには収入がないということだ。

それまでの仕事で多少の蓄えがあるとはいえ、一生を安泰に暮らせるほど稼いでいたわけではなく、いつまでも持ち出しで喰っていけるはずもなかった。

アービィたちがどこにも属したくないという意向を知っているレイとランケオラータが相談し、カトスタイラス領には属さない形で改めて個人の護衛の仕事として依頼をしていた。それを受けた以上、アービィの雇い主はランケオラータであり、ルムが個人的にどこかへ連れて行くことは許されない。

「解っている。
だが、面倒なものなのだな、南大陸の習慣というものは。
ランキーには後で言っておくから、一応出る準備だけはしておいてもらえるか？
三、四日もあれば着くだろうから、たいした荷物にはなるまい。
帰りは他の村落の様子を見たいから、少々回り道になるが、食料はそこで手に入るはずだ」
ルムは少々やりにくさを感じつつも砕けた口調に戻して了承し、

ランケオラータに話を通しに行く。

もともとランケオラータの戦略の中に入っていることであり、アービィに自殺攻撃でもさせるというのであれば別だが、ルムが連れて行くことに対して否を言うはずはなかった。わざわざ面倒なことを言い出したのは、今後南大陸の住人と付き合って行くうえで必要なしがらみでもあるため、今のうちに慣れてもらおうというアービィの思惑もあったからだった。

翌朝、数日分の食料と護身と狩り用の武器を携えて、アービィ、ルティ、ティア、そしてルムの四人は山脈地帯に向かった。

ルムの帰着にパーカホが沸き返っている頃、バードンとヌミフが形式上捕らわれの身ということになっているイーバの村は、死者の集落と化したかのようだった。

非公式ながら平野部からの食料援助で、餓死という最悪の結末は避けられていた。だが、人心地ついた中央部の民は、祖父の地を離れることを良しとせず、魔獣が席巻した山脈の向こう側に残る同胞を放っておくことに罪悪感を覚えていた。いくつかのパーティが山脈を越え中央部へと進入し、同胞たちに避難するよう説得に向かっていた。

しかし、彼らを待っていたものは、人の気配が途絶えた集落と、不死者と化したかつての同胞たちだった。

日中に集落へと到着した彼らは、人気のない集落をいくつも回っているうちに夜を迎え、そこで不死者の襲撃を受けた。

生者に比べ不死者は動きが鈍く、走って逃げれば振り切ることは難しくはなかった。だが、探索に来たパーティを襲った不死者の群れは膨大な数で、どこへ逃げても別の不死者たちが待ちかまえている状態だった。襲撃を受けた瞬間に、何もかも捨て、何も考えずに

逃げ出せば、あるいは助かった者も多かったかも知れない。しかし、かつての同胞が、救いを求めて集まってきたものと思いこんでしまったパーティは、初動の対処が決定的に遅れてしまった。

不死者は動きこそ鈍いが、その膂力は生者のそれを遙かに凌駕していた。

ある者は首を絞められ、瞬時に意識を失い生きたまま喰われ、ある者は首を引きちぎられ、またある者は胴を切断された。いくつものパーティが痕跡さえ残さず食い尽くされたが、かろうじて三人の生還者があった。それとて最も年若い者たちを、無為に喰わせてなるものかと決死の思いで不死者の群れに突入し、我が身と引き替えに血路を開いた英雄的行為があってのことだった。

やっとのことで不死者の群れを脱した三人が、中央部では数少ない街と呼べるターバの集落にたどり着いたのは、陽が昇り始めた頃だった。

そこで三人はターバの人々から彼らを襲った災厄について聞かされた。

中央部にある集落のうち、小規模にものがいくつか白い光の柱に包まれた。いつかバードンとプラボックが、山脈地帯から遠望した邪悪な気配を纏った光柱だった。それから数日ごとに小規模な集落を光の柱が包むことが三回続き、光に包まれた集落からの便りがなくなった。魔獣が席巻した昨秋を乗り切った同胞たちだ。心配しないわけがない。それまで食料を巡って諍いをしたことがあったとしてもだ。放っておくわけにもいかず、三つの集落の様子を見に三つのパーティを派遣することになった。

魔獣の襲撃で遺棄された集落を中継地点にして、それぞれの集落にパーティが辿り着いたのは夕暮れ時を過ぎ、夜の帳が降りる頃だ

った。そこで同胞の姿をした不死者たちに襲われ、ようやく数人が脱出に成功し、中央部を新たに襲った災厄の正体をターバにもたらした。そして、消えた同胞の捜索隊を出すかどうか悩んでいるところへ、不死者の群れからかろうじて逃れ切った三人が転がり込んで来たのだった。

大量の不死者は、グレシオフィが転生邪法の魔法陣で集落を囲み、そこに住む人全てを一気に転生させていた人々の成れの果てだった。だが、一度に囲み切れる面積には限りがあり、あまり広すぎると邪法はまるで効力を発揮しないか、発揮してもビースマックでハラたちが転生したような、寿命の短い不死者しか作ることができなかった。

一定の面積内であれば、完全な不死者へと転生させることも可能ではあったが、自身と同等の不死者に転生させてしまうと力が拮抗し、支配に支障を来すと考えたグレシオフィは、何度かの実験失敗の後に不完全な不死者への邪法を完成させていた。この邪法で転生させられた不死者たちは、当初の目論見通り夜しか活動できない中途半端なものでしかなかった。日光の下では活動できないどころか、身体が崩れ去ってしまうのだった。

グレシオフィは、不死者たちにいずれ日光の下で活動する能力を授けることエサに、忠誠を誓わせていた。

邪法を受けた三つの集落から夜のうちに往復できる集落がないため、今のところ二次的な人的被害は捜索隊だけだったが、邪法や不死者たちの特性をターバの民が知る由もなく、いつ、かつての同胞に襲われるかと人々は戦々恐々と日々を過ごすしかなかった。

決死の思いでターバの街を後にした三人が山脈地帯に戻ったのは、ルムが北の大地戻る十日前のことだった。

「プラボックさんって、どんな人？」
イーバへ続く坂道を上りつつ、アービィがルムに訊ねた。
「う～ん、直接会って話したことはないんだがな。
愛しき怨敵。
と言ったところか」
自身の言葉に納得できないという顔で、ルムは答えた。

プラボック率いる中央部の民は少しでも南へ、ルム率いる平野部の民は自らの生活圏を維持し続けるため、互いの血を流し合う仲だった。これまで同じ戦場で相対することはあっても、直接剣を交えることはなかった。生起した戦のほとんどは、配下同士による生存圏の奪い合いだ。それでも互いに戦運びから性格を知り抜いている。退き時を心得え、闘いの機微を知り抜いた手強い相手と互いを認識していた。

今、中央部の民は背に腹は代えられないという思いがあるからこそ、手を結ぶという選択肢が生まれている。だが、これで最北の蛮族を討ち果たした後、荒れ果てた中央部を捨て、平野を奪取しに来ないという保証はない。間違いなく蛮族との戦線は中央部に形成され、その地は焦土と化す可能性が高い。戦の後に復興させる労力よりも、もう一戦行って平野部を占領する方が圧倒的に手っ取り早い。

そのような北の大地の内紛が続けば、南大陸がどう出るか、だいたい予測がつく。

今回最北の蛮族を討つために、初めて南大陸の軍が北の大地に駐留する。決して中央部や平野部の民を救うための奉仕活動などではなく、地峡から押し出してくる北の民を止めるための一方策であることは、ルムにも解っていた。中央部の民が最北の蛮族の立場になれば、南大陸の四国家は再度軍を編成しこれを討つだろう。そうなっては平野部の民も、南大陸から見ればいつ押し寄せてくるか分か

らない蛮族同等に看做されてしまう。
果たして恩讐を超え、永続的に手を結ぶことはできるのか、ルムはそれが気掛かりだった。

「話が拗れなかったら、僕もティアも獣化しなくていいんですよね？」
先日レイを脅かした際の騒動を思い出し、アービィが聞いた。

「そうだな。
無理に騒動を起こすことはないだろう。
ティア様のお手を煩わすのも最後の手段だ」
やはり同じことを考えたか、ルムが答える。
ラミアの妖術に頼る気は、元よりない。
誑かして手を結べたとしても、プラボックが正気に戻るまでの僅かな間でしかないし、そうと判れば二度と話すらできなくなるだろう。いざという時、ルムがティアに望むことは、大蛇の姿であり、ラミアの容姿だけだった。

「そうですよね。
僕が普通の大きさの狼だったらいいんですけど、あからさま過ぎですから」
アービィは苦笑いしつつ言った。
野生の狼は、せいぜいアービィが獣化したときの半分程度の大きさだ。それにアービィが獣化した姿は、神と言うにはあまりにも禍々しすぎる。

イーバの村の入り口で警備に立つ中央部の民に、ルムは来意を告げプラボックへ取り次ぎを頼んだ。
以前であれば顔を合わせただけで、血を見ずには済まされない間

柄の二つの部族が、ぎこちない動作ではあるが礼儀正しく振る舞っていた。ルムは何とも言えない滑稽さを自分に感じ、警備兵がいなくなってから苦笑いを浮かべた。

やがて、待つほどもなくプラボックがヌミフとバードンを伴って、村の入り口までルムたちを出迎えに来た。

「直々のお出迎え、痛み入ります。
私が平野部を統べるルム。
こちらは、南大陸の住人たちで、アービィ、ルティ、ティア……です。
以後お見知り置きを」
再度ぎこちなさを漂わせながらルムが挨拶する。

「本来なら我等から出向かねばならぬところをご足労いただくことになり、まことに申し訳ない。
私が中央部を統べるプラボックだ。
此度の食糧援助には、言葉もないほど感謝してい……
これは言ってもよろしかったかな？」
丁寧な物言いの中に、わざと笑いを含ませようとしたプラボックには、多少の余裕があった。
プラボックは、今回の非公式な食糧援助はルムの許可がないことを承知している。

「いや、構いません。
私がいても同じように判断していました。
独断専行と言ってしまえばそれまでですが、無為に命が消えることを見過ごせなかったことは当たり前のことでしょう」
もちろん、剣を交えていたらそうは行きませんが、とルムは付け加えた。

まだ指導者というには若すぎるルムに対して、プラボックは既に四十を超えている。
幾多の戦乱を勝ち抜き、今回こそ一敗地に塗れこそしているが、それまで最北の蛮族に対し一歩も退かなかった男に対して、ルムはそれなりの敬意を抱いている。言葉遣いにも、それは表れていた。
対してプラボックは、まだ二十代半ばで広大な平野部を統一したこの男に対し、味方であればどれほど頼もしいかと畏敬の念を抱いていた。

「さようか。
それは良かった。
私の不用意な発言で、あなたの側近が罰せられては寝覚めが悪いというもの。
その件はこれくらいにして。
ヌミフ殿、今まで不自由な思いをさせて申し訳なかった。
兄上にお越しになっていただいたのだ。
話が済んだ後は、共にお帰りいただこう。
バードン殿……？」
プラボックはヌミフに頭を下げ、次いでバードンに頭を下げようとして、彼の姿が見えないことに気付いた。

「あの二人、積もる話があるみたいで」
ティアが、バードンとアービィが連れ立って村の囲いを出たことを告げた。
横ではルティが落ち着きをなくしているが、ティアはバードンが丸腰だったことに気付いていたため、ほとんど心配などしていない。
ルムとプラボックは二人が何故いなくなったか訝しんだが、それでも一刻も惜しい両雄は、プラボックが仮の住まいと定めた小屋へと肩を並べて歩いていった。

「よく戻ってきたな。
俺に殺されるために。
褒めてやる、狼」
暫く振りに顔を合わせたアービィとバードンの間では、視線が交錯し、まるで火花を散らしているかのようだった。

次の瞬間、ものも言わずにバードンが拳を繰り出し、アービィの頬を的確に捉えた。
脳がシェイクされるような感覚に、唐突に怒りが湧き上がったアービィが拳を握り、バードンの頬を殴り飛ばした。アービィは、自分が初めて人に対して拳を握ったことに驚き、そのまま立ち尽くして自分の手を見詰めていた。
後ろに一歩下がったが、かろうじて倒れることだけは堪えたバードンが再度拳を固め、アービィに殴りかかる。
バードンの拳と、咄嗟に繰り出したアービィの拳が交錯し、ほぼ同時にお互いの顔面に炸裂する。反動で両者が後ろに仰け反るが、どちらも倒れることだけは頑なに拒んでいた。

「気が済んだ。
戻る。
また、今度だ。
蛮族を討ち果たしたら、今度こそ獣化しろ」
数回拳を叩き込み合ってから、さっぱりした顔つきでバードンは言い、さっさと村へと戻って行った。

取り残されたアービィは、何故怒りが湧き上がったのか、今まで固く戒めていたのに何故人に対して拳を打ち込んでしまったのか、バードンが何故あの程度のことで気が済んだのか、呆然と考え込んでいた。

おそらく、バードンであればアービィの拳がクリーンヒットしても死ぬことはないだろうという甘えがあったということは、なんとなくだが理解できていた。だが、何故、怒りが湧いたのか、何故バードンがあれで満足できたのか、その答えはいくら考えても解らなかった。

「援助していただく側からの申し出としては、これ以上不遜なことはないと承知の上で言わせていただく。
決して中央の民は平野の民の膝下に敷かれるのではない。
これだけは譲るわけには参らん」
プラボックが言った。

中央の民の中には、未だに平野に侵攻し、これを占領してそこの民を奴隷として使役しろと公言する者も少なくない。今まではそうして食料や生活圏を確保していたので、当然といえば当然の発言だ。プラボックとしては、そのような者たちを慰撫しつつ、有耶無耶のうちに同盟関係を作り上げてしまいたいと考えていた。ルムにしてみてもそれは同様で、中央の民の中にそのような意見を持つ者がいて当然と思っている。

「それはこちらも望むところです。
援助とは申し上げたが、ただでくれるというわけには行かないことは、ご承知おきいただきたい。
当面、余剰というほどではないが、そちらに回す分の食糧はあります。
ですが、いずれ底を突くことは自明の理。
我々に隷属しろというのではなく、共に汗を流す。
食い扶持は自分たちで作り出していただきたい」
ルムは中央部を併呑しようなどという野望は持っていない。

もし、中央部の民を食糧援助を盾に支配下に置くなどということになれば、最後まで彼等を食わせる義務が生じてしまう。それよりも平等に土地を分かち合い、中央部の民には自活してもらうようにことを運ばなければ、共倒れするしかないことをルムは理解している。

「そう言っていただけるなら、私は民を説得できる。
万が一にも、我らが使役されるということであったなら、私は民の尊厳を守らねばならなかっただろう。
心遣いに深謝する」
プラボックは、ヌミフやバードンから聞かされてはいたが、平野を統べる指導者直々の言葉で安心したようだった。

「間もなく南大陸のカトスタイラス、ハイグロフィラ領の軍が到着します。
彼らは、報告にあった不死者どもに対抗する武具を携えてきます。
アービィ殿の話では、奴等に対抗するには、精霊の祝福を受けた武具が必要とのこと。
通常の剣や槍では、切る側から傷口が塞がってしまうらしいのです。
軍が到着すれば、中央部にのさばる最北の蛮族どもを討ち払い、あなた方の父祖の土地を取り戻すことも可能かと」
中央部から命辛々生還した者からの報告に話題が移り、アービィから耳打ちされたことをルムが言った。

「そうか。
それではいくら精鋭を送り込んでも無駄だったわけだ。
精霊の祝福というが、我らが崇める神々の祝福ではいかんのか？」
プラボックは自力で対抗できないことが残念でならない。

「それは、残念ながら困難と言わざるを得ません」
バードンが話に割り込んだ。
「何故かね？」
プラボックが問う。
「何故なら、神の力で対抗し得る相手は悪魔だからです。
こちらの方の言われるように、悪霊相手では多少部が悪い。
我等を守護してくださる神の力では、悪霊を滅し去ることはできません。
そもそも神の力は慈愛の力。
悪魔に対しても折伏を旨とします。
悪霊に相対した者が神と比肩し得るほどの力持っているのであれば、これも可能とできるかもしれませんが、そこまでの者は残念ながらおりません。
北の大地に渡って以来見て参りましたが、いくつかの部族では地水火風とは違う精霊を崇めているご様子。
その精霊たちであれば、あるいは」
プラボックの疑問にバードンは答えた。
ルティはバードンとアービィの顔が腫れ上がっていることに気付き、二人の間で何が起こったか理解した。だが、その割には二人ともさっぱりとして表情で、いがみ合う姿勢を見せていないことが何故なのか解らなかった。お互いに目を合わせることはないが、相手の意見を否定のために否定するようなことはせず、それぞれの主張が食い違うときだけ、はっきり己の言うべきことを主張するだけだった。
「そうか。

ならば、その部族のシャーマンに手を貸してもらう。
ただ、それが可能かどうかは、やってみなければ判らんな」
プラボックは中央の民の中から、樹木や自然物に宿る精霊を崇める部族を思い出そうとしていた。
精霊を信仰の対象とする部族も山脈地帯に避難していた。その中には部族を統べる立場のシャーマンがいたはずだ。協力を取り付けることは容易いが、祝福法儀式があるかどうかが判らない。バードンからマ教の祝福法儀式の次第を教わって、見よう見まねでやってみてもそれが効力を発揮するか怪しかった。

「一気に大量にはできませんが、農業の指導に来ている風の神官様に祝福法儀式を施していただくことならできるのではないですか？
いずれ、地水火風全ての神官様が北の大地にいらっしゃるはずですし」
ルティが対案を出す。
現在独立混成大隊の到着をウジェチ・スグタ要塞で家畜たちと共に待つ神官たちは、風の神官の他に地火の神官がいる。水の神官は、独立混成大隊に同行して、今頃ラシアス街道を北上しているはずだ。

「ルティ殿、といったな。
大変ありがたいことだが、それは最後の手段とさせていただこう。
まずは、我々の手ですべきことをする。
それでできないようならば、素直を神官殿にお願いするとしよう」
プラボックが答える。
祝福法儀式ができるかどうか極めて怪しいところだったが、最初から投げてしまっては中央部の民は自立するための拠り所がなくなってしまう。

ただでさえ、食料の援助を受け、居住地や農地までも提供してもらい、農耕の技術まで伝授してもらうというところだ。そのうえ父

祖の地奪回の兵まで供出してもらう。これ以上甘えてしまっては、事実上平野部と南大陸に征服されてしまうようなものだった。
プラボックの心情を察したルティは、それ以上風の神官による祝福法儀式を強く勧めることはなかった。

「バードン殿、アービィ殿、一つお聞かせいただきたい。不死者へと転生された者を、元に戻すことは可能か？」
プラボックはその点に苦慮していた。
なんと言ってもかつての同胞だ。苦楽を共にしてきた同胞だ。
既に理性を奪われているとはいえ、自らの手で斬り捨てることには躊躇いを感じてしまうだろう。かといって南大陸の軍に討ち果たされては、今後にしこりを残しかねない。もし、戻せないのであれば、自らの手で葬ってやることが、せめてもの手向けとも思える。

「はい、残念ですが」
バードンが口の中苦いものを感じつつ答えた。

「そうか。
ならば、尚のこと我らの手で精霊の祝福を得、彼等に安息の眠りを捧げる必要があるな」
それが同胞への義務だ、とプラボックは続けた。

「大まかな取り決めはこのくらいでよろしいかと思います。
提案なのですが、私はヌミフを南大陸へ出すつもりでいます。
見聞を広めてもらい、蛮族を討ち果たした後に北の大地を経営するための知恵をつけてきてもらおうと思っています。
プラボック殿も、どなたかお出しになりませんか？」
ルムが言った。

ヌミフは唐突な言葉に戸惑っている。
今の今まで北の大地を出て南大陸へ行くことなど、夢にも思っていなかった。冬に凍らない土地に憧れはあったが、使命を帯びて行くことなどあるはずがないと思っていた。

「ヌミフ、せっかく再会できたのだが、また暫くの間お別れだ。お前には、広く世界というものを見てきて欲しい。
南大陸の真似をすればいいというわけではないぞ。
そこは履き違えるな。
南大陸と競い合って、北の大地を発展させるにはどうすればいいか、それを考えてこい。
既に、インダミトのバイアブランカ王には話が通っている」
戸惑いのあまり挙動不振に陥ったヌミフに、ルムが平野部の指導者としての立場から命じた。
ヌミフは、ただ頷くだけだった。

「そうか。
了解した。
明日までに人を選んでおこう。
さて、今日はもう遅い。
今夜はイーバで歓待させていただこう。
もっとも、その食料はそちらのものだがな」
そう言って、北の大地初となる指導者同士の会談を切り上げたプラボックは、豪快に笑った。
そこには卑屈さなどまるでなく、民を食わせていくためにはどんなことでもしてやろうという、強かな指導者としての顔があった。

民族の滅亡という危機を前にしてのことではあったが、千年に及んだ血で血を洗う歴史の終わりが始まる。その瞬間だった。

第67話

歴史的な会談から一夜明け、アービィたちはパーカホへの帰途に着いていた。

イーバへ行くときは、アービィ、ルティ、ティアでルムを護衛する形になり、四人で行動していた。しかし、現在はヌミフ、バードンと、プラボック、そしてヌミフと共に南大陸へと赴くオンポックを入れた八人の大所帯だ。

ルムとプラボックの会談後に設えられた宴席で、アービィが雑談に紛れさせて言った今後に関するいくつもの難題は、到底ルムとプラボック二人だけで決めきれるものではなく、ランケオラータも含めたうえで話し合わなければならないことだった。

これまでルムもプラボックも指導者とはいえ、部族や集落間の利害調整が主な仕事で、行政の経験はほとんどない。だが、これからは、利害調整はもちろんのこと、インフラ整備や土地の割譲、最北の蛮族への備えとしての共同戦線の管理、南大陸からいかにして資本を呼び込むかなど、やらなければならないことは多岐に亘り、その膨大さにルムもプラボックも顔を蒼ざめさせている。

一方昨夜突然宴席に呼び出され南大陸へ行けと命じられたオンポックは、まるで状況を理解できず目を白黒させるだけだった。

このプラボックの甥に当たる十六歳の少年は、呼び出される直前まで南大陸へ堂々と行くことなど、あり得ないことだと認識していた。彼にとって南大陸は、雪に苦しめられることのない憧れの地であり、いつかは移住したいと夢想する文字通り夢の国だった。それが、まさか南大陸の国家に密入国ではなく、国賓級の扱いで送り込まれることになろうとは思ってもいなかった。

周囲を大人たちに囲まれてパーカホへ向かう道中で、少年は耳に入る会話の半分も理解できなかった。しかし、知識欲と知的好奇心に溢れた少年は、解らない言葉や文脈がある度に、最も歳が近そうに見えるティアを捕まえて根ほり葉ほりその意味を尋ねている。今まで武力こそ全ての解決策と信じていた少年だが、幾度かの失敗とその度に掻いた恥により多少の分別を身につけていた。

少年は、バードンがイーバにやってきた際に、拷問に掛けてウジェチ・スグタ要塞防備の隙を聞き出し、軟禁ではなく暴力によって恭順させ、侵攻の手引きをさせれば良いと考えた。さらにはヌミフを軟禁しておくだけでは勿体無いとも。夜になって、彼は叔父にそう持ちかけてみたが、できるものならやってみろ、と突き放されただけだった。これは彼の性格が歪んでいるというわけではなく、北の民として当然の発想しただけのことだ。

その夜、オンポックは短刀を懐に忍ばせバードンの寝所へと忍び込んだが、気配を察知したバードンに平手打ちを喰らい、意志と意識を刈り取られ、気付いたときには自分の寝所で朝を迎えていた。

翌朝、バードンはプラボッからの謝罪を微苦笑と共に受け流していたが、自分を拘束しようともせず、しろとも言わなかったことに言いしれぬ恐怖を抱きつつ、オンポックは複雑な表情でその場面を眺めていた。

幾度目の返り討ちに遭った翌朝、意識を取り戻した彼の目に飛び込んで来たものは、穏やかに彼を見下ろすバードンの顔だった。

殺されると思い再度目を閉じるが、いつまで経っても息が詰まることもなく、殺気を感じることもなかった。恐る恐る目を開けると、そこには相変わらず穏やかなまま自分を覗き込むバードンの双眸が

あった。

何故殺そうとするのか、と言うバードンの声と、何故殺さないのか、と言うオンポックの声が重なり、バードンが大笑いする。馬鹿にされたような気分で憮然とするオンポックに、バードンは静かに語りかけた。

オンポックにとって、死は当たり前すぎるほど身近なものだ。餓死、凍死、病死、狩りの際の事故死に戦による強制的な死。いつ誰に訪れるか、南大陸でも無縁ではないとはいえ、北の大地での死との遭遇率は南大陸とは比べ物にならないほど遙かに高い。自然環境が最大きな要因だが、政治が機能しないどころか存在しないに等しいことも、また大きな要因だった。

バードンは、北の大地と南大陸の差異をオンポックに説き、どうすれば万民にとって最大公約数の幸せが実現できるかを考えるべきだと言った。

それまでオンポックは、自分の幸せしか考えたことしかない。せいぜい自分にとって大切な人々、大きな枠組みでは自分が属する部族までだ。万民全てが納得できる幸せなどないと、端から考えることもしなかった。限られた土地と食料、生活圏の奪い合いに明け暮れる毎日は、誰かの幸せは誰かが不幸を甘受しなければならないことだと思っていた。

当然南大陸への移住も、そこの生活へ解け込むのではなく、生活圏を奪い取ることだと考えていた。北の大地の考え方を、価値観が全く違う南大陸に当てはめようとしていただけだった。

南大陸の住人も、北の民が移住してくることを無碍に拒絶したわけではない。『窮鳥懐に入れば猟師これを撃つこと無し』に類する概念はこの世界にも存在し、当初南大陸の住人も歓迎こそしなかっ

たものの、北の民を迎え入れていたものだった。だが、北の民の流入する人数が増え、あちこちに北の民のコミュニティができ始めると、周囲の住人たちとの間に軋轢が生じ始め、やがて諍いが頻発した。

もともと価値観の相違から地域のコミュニティに解け込めない北の民は多く、それが身を寄せ合うようにして独自のコミュニティが自然と形成されていく。

あとは北の民の理論が暴走し、生活圏の奪い合いが南大陸の住人にも押し付けられ始めた。食文化や一般的なマナーの相違がある時点で疎ましがられることが多かった北の民排斥の動きが南大陸で起きるまで、それほどの時間を要することはなかった。

個々人の付き合いにおいては問題になりにくかった些細な価値観の相違も、集団同士になると決して相容れることはできない決定的な溝になるという、アービィが召喚される前に住んでいた世界でもあった民族問題は、時代も世界も超えて存在していた。

その後、南大陸の住人たちの間に北の民への蔑視と偏見、差別が生まれ、北の民の間に南大陸の住人たちへの怨恨が醸成されるのは自然な流れだった。それでも雪に苦しめられることのない南大陸への移住は、北の民にとっては悲願でもあり、蔑視と偏見、差別に耐え、恨みを呑んで南下の飽くなき欲望を捨てることはなかった。

オンポックもまた、若さ故の浅慮もあってか、この考え方から逃れることはできるはずもなかった。だが、対するバードンはいい大人でもあり、聖職者でもある。教義の正邪はさておき、万民を幸せに導くことこそ、至上の使命と考える者だ。アービィに対する異常なまでの敵愾心も、両親の仇が人狼であることも大きな原因の一つだが、万民の幸せを害する者を排除するという使命感が最大の原動力となっている。

だが、北の民を排除する気は、バードンにはなかった。また、マ教の教えを説き、教化すれば南大陸に解け込めると思うほどおめでたい狂信者でもなかった。マ教の説く教えの中で博愛の精神という部分が南北両大陸の融和に繋がるものと理解し、異なる者の存在を認め、両者が妥協し合うことが重要だとも考えていた。

オンポックは、これも若さ故の素直さからか、バードンの言葉に耳を傾けるようになっていった。自分が敵わない相手と認めたことが最大の理由であったが、それでも他者の言葉を聞くようになったことは、彼にとって大きな進歩だった。

プラボックがバードンと話し合う際にはできるだけ同席させてもらうように努め、プラボックが帰った後もそこに残ってバードンを質問責めにした。ときにはヌミフとも語り合い、その際の疑問を二人でバードンにぶつけることや、二人の意見の相違をバードンに判定してもらうこともあった。

こうしてバードンやヌミフと打ち解け、二人を慕うようになったオンポックが、南大陸へ派遣される者に選ばれることは自然な流れだった。実のところ、プラボックはあまり歳近い者を選んで自分より先進的な考えを持たれ、権力闘争になっても困るという思惑が働いたことも否定できない。

もっとも、これから先二人で行動する機会が増えることで自然と親密になり、平野と中央の民の橋渡しとなることをプラボックが期待して、わざと男性を選んだということもあったのだが。

そこはかとなくプラボックの意図を察知し、ルムは複雑な心境だった。ヌミフに想い人がいることも承知していたし、それが側近の一人ということも知っていた。だが、いずれ二人が身を固めることになった場合、そのときは側近からは除外しなければとも考えていた。身内びいきと取られては、いろいろとやり難くなるからだった。

妹の恋路を邪魔する気は全くないのだが、得がたい側近を失うこともまた避けたかった。心の端でヌミフとオンポックが良い仲になってくれたらいいかもしれないと、ルムは考えるようになっていた。

アービィは、ルムの気も知らずティアとヌミフにまとわりつくように歩くオンポックに、微笑ましい視線を送っている。どことなく、フォーミットにいた頃の自分を見ているようで、親近感が湧いていたのだった。

あの頃の自分はルティにまとわりついてばかりで、それこそ男女が一緒にいてはいけないとき以外、四六時中ルティの後をついてあるいていた。ルティも突然できた弟を可愛がり、どこへでも連れ回していた。

いつしか男女を意識するようになり、ルティに守られるのではなく、守りたいと思うようになっていた。今、僕はあのとき思ったようになれてるのかな？

パーカホに戻った一行は、ランケオラータにプラボックとオンポックを引き合わせ、早速話し合いの場を持った。

いっそランケオラータが統治者になってしまえば政治は上手く行くのだろうが、それでは北の民は南大陸の支配下に入ってしまう。インダミトのバイアブランカ王がランケオラータに対する命令権を有している以上、それは認められないことだった。

平野の民と中央の民の共同統治は、ルムとプラボックの合議制が理想なのだろうが、この非常時に合議制などという手間の掛かることをしている余裕はない。当然食料支援や土地を割譲する立場のルムたち平野の民が優位なのだが、中央の民が支配されるわけでは断じてない。

ルムにその気が無くとも、統治者の立場に収まってしまえば、中央の民に不安と不満が渦巻くことは確実だ。ルム自身、力ずくで小規模な部族間の調停こそやってきた経験はあるが、統治の経験はほとんどない。年齢的にも成熟したプラボックに、経験や洞察力などいくつもの点で劣ることは自覚していた。

それに、いずれ立ち上げられる南北大陸の共同統治機構に、ルムが出て行くことは既定路線だ。その際北の大地の最高権力者が出て行くことになれば、その後に権力闘争が勃発することは火を見るより明かだ。さらに最高権力者が両大陸共同統治機構にいては、北の大地がその者の勝手放題にもなりかねない。バイアブランカ王はそれを狙っている節もあるが、ランケオラータから内々にその構想を聞かされたアービィは召喚される前の世界にある国連を引き合いに出し、一国の元首と国連大使のような関係が望ましいと進言していた。

共同統治機構は、あくまでも各国の利害関係を調整する場であり、その第一人者が両大陸の覇者になることがあってはならない。アービィはその危険性を説き、各国の内政と共同統治機構の間には、厳然たる独立性を確保するべきと言っていた。

もちろん、国連は召喚される前の世界の事例であり、そのままこの世界に当てはめてすべて上手くいくとはアービィも思い上がってはいない。それをこの世界に合うかを判断し、使えるようならこの世界に合わせてアレンジするのは、ランケオラータたちこの世界の政治に暁通する者の仕事だった。

それを受けて、ランケオラータは平野の民と中央の民で、小規模ながら共同統治の実験をすることにした。もちろん、ルムとプラボックには実験の目的を事細かに説明し、同意を得たうえでのことだ。

政治の経験が乏しい二人にしても、実験と言われるとあまり気分

の良いものではなかったが、実地で政治を学ぶことができるとして、前向きに捉えていた。

結局、ルムが一歩譲り、中央の民の自尊心に配慮する形で、共同統治の第一人者にはプラボックが収まることとなった。これは、逆に考えればプラボックには、難しい舵取りが要求されることになる。

食料の分配も土地の租借も、中央の民を優先することなど、僅かにでも政治センスがあればできることではなかった。

僅かでも中央の民を優遇すれば平野の民が黙ってはいない。なにしろ、ここを耕し、土壌を改良し、まがりなりにも畑に仕上げたのは、言うまでもなく平野の民だ。それを無償に近い形で明け渡すのだ。収穫が多く見込める土地ばかりを中央の民が独占するなど、許せるはずもなかった。

反対に平野の民に対してプラボックの遠慮が過ぎれば、今度は中央の民が納得しない。中央の民は平野の民の奴隷ではないと、激しい突き上げを喰らうことは確実だ。

租借地の位置も重要な要因だ。

山脈に近ければ近いほど、最北の蛮族との最前線に近くなる。もともと平野の民が住んでいるとは言え、どちらかに偏っては防壁代わりにしたという誹りは免れない。

最高権力を手にする代わり、最も重い義務を背負わされたことに、プラボックは思わず身震いした。

ルムにしても、気楽に構えていられるというわけではなかった。

プラボックが意図しなくても出てしまう偏りを正し、両地域の民それぞれに不満を抱かせないように補佐するという重要な役割がある。それでもプラボックが利害関係の調整に忙殺されることは間違いなく、インフラ整備や食糧の増産、南大陸との交易まで目を届か

せることは不可能だ。北の大地を経営する細々としたことは、ルムが担当しなければならない。

それぞれの民の統治は、ルムとプラボックではなく、ナンバー2の者が当たることになった。平野も中央も、幾つもの点で意見の相違が出ることは確実で、それぞれの統治はしなければならない。ルムにせよプラボックにせよ、利害調整や大陸経営に専念できるように、個々の統治に気を囚われることがあってはならなかった。それぞれの小さな利益に気を取られていては、より大きな視野で物事を見ることなど到底無理だからだ。

とはいっても人である以上完璧を求めても無理なことは、アービィもランケオラータも承知している。

その辺りを補佐するためにもランケオラータが来ているのであり、第三者の立場からの調整の他、アンガルーシー領の経営とインダミトの国政に携わった経験を活かした税制やインフラ整備などの内政と南大陸との折衝、そして軍政などの補佐が重要な使命だ。

レイもその意味では重要なスタッフの一人であり、進んだ考え方を持つアービィや豊富な知識を有するティア、庶民の目線から的確な提言をしてくるルティも同様に、重要なスタッフだとランケオラータは見ていた。

その中でもアービィは、この世界より文明が発達した異世界から召喚されたと聞いている。その知識や教養は北の大地を経営するうえで、何者にも代え難い財産となることを、ランケオラータとレイは感じ取っていた。

当のアービィは、専門馬鹿と言っていいほど世事には疎かったが、それでも新聞くらいは読んでいたので、通り一遍の知識はあると思っている。アービィは北の大地の政治形態に、アメリカの連邦制をイメージしていた。平野の民と中央の民をそれぞれ州に、プラボッ

クとルムを大統領と副大統領、そしてランケオラータたちスタッフの面々を連邦政府に見立てている。もちろん全く同じようにできるはずもないし、大統領制や議員内閣制をいきなりできるとも思ってはいない。いずれは統治者や議会の直接選挙があっても良いとアービィは思っているが、王制や貴族制が主流のこの世界に急激な体制改革をもたらすことは、他者の傲りだと自らを戒めていた。改革はこの世界で生まれ育った人間から自然に醸成されてこそできることであり、中途半端な知識を振りかざして世の中を混乱させるなど、犯罪行為にも等しいことだとアービィは自覚していた。

インフラ整備にしても、交易ルートの確立にせよ、何をするにもカネが掛かることをランケオラータは理解している。そのためには、なんとしても南大陸から資本を引き出さなければならなかった。だが、交易の旨味がなければ、誰一人として相手にしてくれるはずもない。商人や国家は、慈善活動で運営されているものではないからだ。そのためにも北の大地に眠る金銀銅といった貴金属や鉄等の金属鉱脈、アービィが石炭や石油と呼んでいる燃料資源を採掘事業として軌道に乗せ、富に換えなければならない。そして物流と軍の移動の迅速さを確保するため、石畳による道の舗装と中継基地の設置も最優先事項といって良い。その他にもそれこそ馬に食わせると言うほど、やるべきことは山積されていた。

軍令に関しては当面ハイスティに任せておくが、独立混成大隊が到着した時点で、その指揮官に権限を委譲する。やはり、餅屋は餅屋で、軍を効率よく運営するには、間諜ではなく将軍を当てるべきだ。さらにハイスティには、ヌミフとオンポックをインダミトまで連れて行くという、重要な任務があるからだ。

そして、軍令は軍政の指揮下にあり、軍政は軍人であってはならないというルールをアービィが主張し、彼には珍しく譲ることはな

かった。守勢の際には軍部に任せておいて構わないが、一転攻勢に出たときに歯止めが利かなくなる恐れがあったからだ。

軍事行動は政治の延長に過ぎず、軍の独断専行を許していては大局を誤ることをアービィが住んでいた世界で日本が証明済みだった。

現在北の大地に残る南大陸の住人も元を質せば軍人なので、こちらも五百から六百人程度の一個大隊規模に編成し直す。全員を軍としてしまうと第一次産業に通じる者の絶対数が不足してしまうため、全体の半分程度で軍を編成することになった。基本的には志願制にするが、当人の特性によって柔軟に対応することにした。

これに併せて、北の民も軍を編成することになったが、根本的な部分で戦術思想が異なる両者を同一の部隊に配属することは無理がありすぎた。基本的には南大陸の軍が戦線を維持し、北の民で編成する部隊は遊撃隊と位置づけ、決戦兵力として活用するべきだとアービィとハイスティが主張した。

それぞれの指揮官と司令部を設置し、その上位に統合幕僚本部のような機関を置き、全体の統括をする。どちらにも悪意などないとしても意見の相違が顕著なため、この部門の担当になる者は胃が丈夫であることが第一の資格だとアービィは思っていた。

意見の相違は軍という概念から、戦場での振る舞い、生への考え方と多岐に及んでいる。それぞれが独立した戦士という考え方が主流であり、生き残るためには手段を選ばない北の民。規律を重んじ上官の命令の下統率の取れた行動を第一と考え、名誉のためには死をも厭わない南大陸の軍人。この二つを統一指揮するなど、現状では望むべくもなかった。

いずれは北の民も南大陸指揮の軍編成と戦法に慣れる必要はあるだろうが、いきなりそれを押し付けることによって北の民の良さを消してしまうことは避けたかった。

「軍の話になったところで、南大陸の、いえ、インダミトの戦略についてお話させていただきます」
ランケオラータが話題を替えた。

「いずれ南大陸で共通の認識にしたいと考えていますが、今のところ足並みを揃えることは難しい状況ですので、インダミトのとお断りしておきます。
第一に、インダミトは北の民との共存を望んでいます。
本音で話してしまえば、我々は北の大地は今後巨大な市場となると考えています。
これを放置しておくことは、国家の成長にとって大きな損失です。
幸い、ルムさん、プラボックさんとはこうして手を取り合うことができたことは、大変な僥倖と認識しています。
できることでしたら、最北の蛮族と呼ばれる部族とも、通商の意志があるならばしたいと考えています。」
ランケオラータはここまで言って一息つく。

「ですが、最北の蛮族は報告によるところでは、中央の民の皆さんを不死者へと転生させ、これを侵攻の尖兵としている。
これは、南大陸の安全保障の面からも看過できることではありません。
もちろん、最北の蛮族全てが我々に敵対するわけではないという、希望的観測もあります。
これからは、和戦両面を基本戦略として、最北の蛮族との話し合いと同時に不死者や魔獣による侵攻を挫き、中央部を取り戻し、平野部以南への進出を食い止める。
これを最優先としたいと考えます」
何かご質問は、とランケオラータは付け加えた。

「質問があります」

ルティが挙手した。
それまではざっくばらんな話し合いが続いていたが、ランケオラータの話し方の変化に伴い雰囲気が一変していた。

「ランケオラータ様は、話し合いを続けるとおっしゃいますが、その窓口はどのように開くのでしょうか？
ルムさんとプラボックさんに質問ですが、今まで最北の蛮族との間で、話し合いというものが成立したということはありますか？」
ルティの話し振りまでが一変していた。
国政に携ったことも、軍議に参加したこともないのだが、ラシアスの近衛第二師団と行動を共にした際に見聞きして、軍議とはこんな話し方だったと思ってのことだった

「全く、ない」
「一度も、な」
ルムとプラボックの答えは、簡潔にして明瞭だった。
つまり、和戦両面という方針の一翼が、早くも折れたということだ。

「そうですか。
では、私からもプラボックさんに質問です。
不死者の襲撃以前に、最北の蛮族との直接戦闘はいつ頃にありましたか？
魔獣ではなく、人間とです」
ランケオラータが質問した。

「そうだな、ほとんど奴らの攻勢は魔獣が戦闘に立ち、少数の人間がその指揮を取っていた。
魔獣が攻め切ればよし、撃退すれば、魔獣を盾にして人間は逃走している。

その質問は、最北の蛮族と話をする機会があったか、ということだろう?

その答えは、皆無と言っておく」

プラボックが答えた。

「その通りです。

残念ですが、基本戦略は撃退ということになりますね。

第二の基本戦略ですが、インダミトには最北の蛮族を滅ぼすという意思はありません。

あくまでも、基本は、ということですが。

もともとの中央部との境界線まで押し返せれば、それ以上南大陸の軍が北に攻め入ることは、今のところないと言っておきます。

ですが、場合によっては、少数精鋭を最北の蛮族の領土に潜入させることがないとは言いません。

また、皆さんが攻め入ることを積極的に支持しませんが、止めることもないと言っておきます」

インダミトの戦略は、基本的にこの二点だ。

可能ならば北の大地全土を市場としたい。

最北の蛮族とも共存を視野に入れている。

彼らが共存を拒み、あくまで敵対するというのであれば、これを滅ぼすことなく南下を食い止める。この二点に尽きた。

一民族の殲滅など、どう頑張っても不可能だ。

広い大陸に紛れ込まれてしまえば、外見に差異のない北の民の中から最北の蛮族のみを狩り出すことなど、大海に落とした砂粒を探し出すことに等しい。そうなれば、民族の恨みを呑んだ刺客を野に放つことになり、いつ果てるとも知れない不毛なゲリラ戦を戦わなければならなくなる。

要は、市場形成の邪魔さえしなければそれだけでいい。一定のラインを決め、それ以上南下しなければこちらからも攻め入らないと

いうことを最北の蛮族が受け入れるなら、その防備くらいは南大陸で肩代わりするつもりだ。

さらに、そのラインを越えて通商したいという部族があるならば、境界を越えた後に戦闘を仕掛けない保証さえあれば、これを拒むつもりもなかった。

だが、現状では最北の蛮族に、和平の意志はないと見るしかなかった。

そうであれば独立混成大隊が到着するまでに、最北の蛮族に対する最前線をどこに設定し、前線基地をどこに置くかを決めておかなければならない。

最前線は、山脈地帯の中央側の麓に設定し、前線の拠点はイーバで構わないだろうというのがプラボックの意見だ。ルムもアービィもこれに異論はない。イーバを要塞化し、不死者と化した中央の民を一歩も踏み入れさせない体制を築き上げなければならない。主要街道はもちろん、細い間道まで全てを封鎖する必要があった。

あとは、どうやって中央に取り残された同胞を救い出すかが問題となる。

不死者に襲われたものからの報告で、不死者は夜しか活動できないと推測されていた。夜間の警戒が緩まないような歩哨のローテーションも考えなければならない。単純な三交代四交代では、必ず緩みが出る時間帯ができてしまう。

通常の人間同士の争いではなく魔が絡んでいるということは、インダミトの一地方領主で対処しきれる問題ではなくなっている。取り急ぎ各国やマ教教会、精霊神殿に協力を取り付け、南大陸全体の問題として捉えなければならない。

差し当たり、ベルテロイのパシュース第二王子に諮るべきだろう。

だが、それらが協力体制を整え、北の大地に軍を送り込めるようになるまでは少なくとも半年は掛かる。国内が大混乱の最中にあるビースマックやストラーは、それ以上の時間が必要かもしれない。半年で準備を完了できたとしても、ちょうどその半年後の雪に閉ざされ軍の移動ができなくなる時期を考慮すれば、早くて次の春までは現有勢力で対処するしかない。かなり厳しい戦いになると、全員が冷たい汗を流していた。

「気になることがあります。
相手には転移呪文を使う術者がいますので、道の封鎖だけでは不充分ということを周知してください」
アービィがそれ以上の問題提起をする。

「だが、どうやってそれを防ぐ？
魔法障壁を、大陸を横断するような規模で作るなど不可能だ」
プラボックが、注意するだけではどうなるものでもない点を指摘した。
こちらは全体を守らなければいけないが、相手は任意の一点に攻め入ればいいのだ。勝利条件が厳し過ぎる。

「中央部に向けての警戒だけではなく、全周囲を警戒するしかありません。
防衛線は背後に回られて、そちらから急襲された場合かなり脆い。これを防ぐには、背後も警戒するしかありません。
確証があるわけではないのですが、術者だけが密かに潜入し、魔法陣を秘密裏に作ったうえで、大量の不死者なり合成魔獣を魔法陣を通して送り込んでくる可能性も捨て切れません。
魔法探知に使えるようなものはありませんか？」
ティアが指摘を受け答える。
アービィとティア、バードンや神官であれば、呪文の発動に伴う

気配を感知することは不可能ではない。
だが、一般の人間にそれを求めても無理な相談だ。何か探知機のようなものが必要だった。

「う～ん、そんな都合の良いものはないなぁ……
神官殿に作ってもらえるようなものがあればいいが。
せめて、ティア様が言った魔法陣を探知できるようなものでもあればいいのだが……」
ルムが苦しげに答えた。
一同の表情が曇り、解決策のない袋小路に嵌ったような錯覚に囚われていた。

「どれほどの効力があるかは判りませんが、我が神のご加護の元結界を張ってみましょう。
同時に、精霊神殿の皆様にも同様の結界を張っていただくことで、対処できることもあろうかと存じます」
バードンが思いついたように提案する。

アービィは思い出した。
アマニュークで休息を取った際、エンドラーズが張った結果以内に悪霊やレイスが侵入してくることはなかった。レイスはあの部屋から出てこなかっただけといったらそれまでだが、少なくとも周辺を浮遊する悪霊からアービィたちの姿は見えていないようだった。
そのことを同時にルティとティアも思い出し、それを説明する。

「では、バードン殿と神官殿たちに、各集落を回っていただき、結界を張っていただくということでよろしいでしょうか。
バードン殿、どうかよろしくお願いいたします。
神官殿たちには、私から話を通しましょう」
応急ではあるが対応策の目処が立ち、ほっとしたような表情でラ

ンケオラータが言った。

「プラボックさん、覚悟しといてくださいよ。
これからは何か一つ決める度に、ギャンギャン文句言われますから。
最初は黙ってるかも知れませんが、慣れてきた頃からすごいですよ」

アービィが重苦しかった雰囲気を振り払うように、人の悪そうな笑みを浮かべてプラボックを脅かす。

「アービィ殿、文句と言われるが、こちらは世話になる立場だ。
中央の民に文句など言わせんよ」

それに対して不敵な笑みを浮かべたプラボックが答えた。

「あら、文句が聞こえてくるって、歓迎することですわ。
陰でこそこそ文句言ってなんかいられたら、何が良くないか判りませんもの。

それで不満ばかり溜められて後で爆発されるより、プラボック様が腹痛に悩まされる方がずっとマシなことだと思いますよ」

意識して場の雰囲気を和らげようとしたレイが言う。

「そうですよ。
為政者の悪口なんて、何したって出ます。
それより、悪口や文句を自由に言える雰囲気が大事なんじゃないでしょうか。

為政者の悪口を言ったら罰せられるなんてことで反対意見を封じたら、レイの言うとおり反乱が起きますよ」

レイの気遣いに気付いたティアが続けて言った。

「耳が痛いなぁ、ティア。
じゃあ、アンガルーシーとカトスタイラスでは私の、ラガロシフォンではレイの悪口が渦巻いているとでも？」
ランケオラータが混ぜっ返す。

「はい、きっと」
ルティが一言で済ませ、笑いが弾ける。

平野の民と中央の民による連邦国家が誕生した。
もちろん、まだ国家としての体裁が整っているとはいえない。そこに住む人々に帰属意識もまだ生まれていないといって過言ではない。
だが、今まで何の希望も見出せなかった北の大地に、大きな希望が芽生えたことだけは確かだった。

「ところで、ルム殿。
なんでティア殿だけ、ティア様と呼んでいるんだ？
まさか……」
プラボックの問いにルムが答えに窮する。

再度、笑いが弾け、事情を知らないプラボックとオンポック、そしてバードンが憮然とした表情を作り、プラボックだけが何かを思いついたように笑い出した。
彼は、盛大に誤解しているようだった。

第６８話

「ねぇ、絶対プラボックさん、誤解してるわよね？」
ティアが参った、という表情でルティに言った。
夜、北の民と南大陸の住人たちの話し合いが持たれた後、アービィたちは男性陣と女性陣に分かれ、それぞれは寝るまで雑談に興じていた。

「そうよね、あのときの顔。
今頃ルムさんを問い詰めてるか、からかってるか、どっちかよ」
ルティも同じ様な表情だ。

「どうしたの？
何か不都合でもあったの？」
状況を飲み込めないレイが訊ねる。
その横ではヌミフが首を傾げていた。

「うん、ちょっとね。
ルムさんの一言が、ね」
ルティが迷いながら言葉を選ぶ。

ティアがラミアであることを明かすことは簡単だが、それにプラボックがどう反応するか、全く予想がつかなかった。いきなり斬られるようなことはないとは思うが、ようやく打ち解けかけた平野と中央の民の間に亀裂を生みかねない。
平時であれば時間を掛けて話をすればどうにかなるかも知れなかった。だが、数多の同胞を魔獣に殺されてから間もない中央の民にとって、ティアとアービィの正体は不倶戴天の敵と見なされる危険

性が高すぎた。
だからといってティアを放逐する気など、ルティは欠片も持ち合わせていないし、なによりレイが許さない。ティア自身も必要とあらば正体を見せることに躊躇いはないが、無用の混乱を招きたいとも思わない。

「参ったわね」
溜息とともにルティが呟く。

「参ったわよ」
ティアも溜息しか出ない。

「ちょっと、二人で悩んでないで、私にも聞かせてよ」
レイが頬を膨らませながら言った。

レイにティアの正体を明かしたところで、何の問題もないだろう。既にアービィは、レイに巨狼の姿を見せている。その際にレイはパニックに陥ってはいたが、以後アービィを避けたり、嫌悪する様子はない。

「うん……
やっぱり隠し事はよくないよね。
実は――」
意を決したティアが、ラミアのティアラを取り出した。

「おい、ティア殿とはどういう間柄なんだ?
ルム殿、言ってみろ」
蒸留酒による酩酊感も手伝ってプラボックは上機嫌だ。

「いや、そのように言われるような間柄などでは、断じてない。なぁ、そうであろう、アービィ殿？」
助けを求めるような目で、ルムがアービィを見た。

「ええ、決して」
アービィは短く答えるが、決して歯切れ良くはない。

「良いじゃないですか、正直に仰れば」
ようやく事情を察したバードンが、無責任に意味深な言い方をする。

「そなたの想い人というわけではないのなら、俺がいただくぞ」
プラボックが絡んだ。

「そんなことは、断じて認められませんな、プラボック殿」
ルムは思わず気色ばむが、弱り切った表情だ。
もちろん、プラボックが本気でティアを口説くなどと、ルムは思ってはいない。からかわれているということくらい理解している。

ランケオラータも困り顔になっている。
ティアやアービィが魔獣であろうがなかろうが、そんなことはランケオラータにとっては些細なことですらない。だが、同時にルティとティア同様の危惧をランケオラータもアービィも抱いていた。
それ以上に北の大地にいる南大陸の住人や、まもなく到着する独立混成大隊の反応が怖かった。
北の民のラミアへの反応は、ルムを見ていればだいたい予想がつく。ラミアは寒さに弱い性質があり、北の大地では魔獣として認識されるほどの被害を出していなかった。だが、南大陸では、ある程度恐れられる魔獣として認識されており、存在が確認されれば討伐の対象にもなっている。

さらに問題になりそうなのは、アービィの存在だ。

人狼への恐怖は北の大地であっても、南大陸と大差ない。狼を神として崇める部族からは、神を剽窃する悪魔として憎悪の対象になっている場合すらあった。

ルムの話によれば、プラボックの部族はそこまでではないらしいが、アービィが獣化した場合どのような反応を示すか、同胞を魔獣に殺された今では予想がつかなかった。

戦場で切羽詰まったときに、それを打開するためにアービィやティアが急遽獣化した際、それまでに知らなければ大混乱に陥る危険性をはらんでいる。

命を救われたり、親しく話していれば、アービィやティアという個体には危険がないことは理解できる。だが、数千万といる人々全てと話し合うことなど不可能だ。人伝に聞くとしても途中でバイアスが掛かった人を介すれば、悪意の有無に拘わらずどのようにねじ曲げられてしまうか、やってみないことには解らなかった。

「ねぇ、ルムさん。
やっぱり隠し事はいけないと思うんだ。
特に今みたいな時なら、なおさら
オンポック君、ティアにティアラ持って、ここへ来るように伝えてくれないかな。
あと、ルティに僕の着替えを持ってきてって」
アービィはオンポックに言ってから、ランケオラータとルム、そしてプラボックに向き直った。

「ランケオラータ様。
こちらで初めてお会いした際に護衛に付いていた方々は大丈夫で

したよね。
噂で広まると後で面倒なことが起きかねませんから、事実として皆さんにお話しください。
軍にも周知徹底してください。
ルムさん、プラボックさん、これから見ることを、それぞれの民の皆さんに伝えてください」
アービィが言った。

その意図を悟り、バードンは部屋を出る。「バードン殿、どこへ行かれる？」
バードンの表情が豹変していた。
それを訝しんだプラボックが問う。

「私は……
今ここにいる……べきでは……ございません」
歯を噛みしめる音が聞こえそうなくらい奥歯を食いしばり、なんとか平静を保ったバードンは、それだけを言い残すと部屋を出た。

「どうしたというんだ？」
プラボックは状況が理解できていない。

「今から僕がやることをいきなり見ると、ああなる人がいるかも知れません。
戦場でそれが原因で、恐慌を起こす人がいるかも知れません。
だから、今のうちに見ておいて欲しいんです。
僕と……ティアを」
アービィは心の中でバードンに感謝の意を表す形で手を合わせ、ひと呼吸置いて獣化した。

部屋の中を静寂が支配し、プラボックの表情が凍り付く。
次の瞬間、裂帛の気合いが空気を裂き、アービィの脳天にプラボックの剣が叩きつけられた。

――……

巨狼は避ける素振りも見せず、プラボックの剣を額で受ける。
人狼の不死性は銀制の武器以外では冒すことは能わない。プラボックの剣は、祝福法儀式を施していないあたりまえにある鉄製の鍛造品だ。アービィの毛皮を切り裂くことはできず、血の一滴すら落とさせることはできなかった。
その場にいた全員の表情が凍り付く中、プラボックの手が剣から離れ、床に落ちた。

「あなたは……神……
神狼……？」
ようやく手の痺れが引いたプラボックから言葉が漏れた。

巨狼が首を横に振り、アービィの声が脳裏に響いてくる。

――違います。僕は、人から忌み嫌われる人狼です。神なんかじゃないです。

そう伝え、アービィは、長い、長い物語を語り始めた。召喚される前からの話だ。
異世界のこと、鏡に吸い込まれたこと、気付いたら狼になっていたこと、ルティとの出会い、旅立ち、ティアとの出会い、旅から旅。

そこへ眦を決し、ラミアのティアラを髪に飾ったティアと、血相を変えたルティが飛び込んできた。

ティアはレイだけの前ではなく、主要な面子が集まっている前で獣化しようと考えここに来た。ルティは、アービィとティアの獣化を止めるつもりでティアを追いかけてきていた。

巨狼とプラボックの立ち位置。床に落ちた剣。それを見た瞬間にルティは何が起きたかを理解し、プラボックに向き直り、腰に佩いた剣に手を添えた。その両目には、ヒドラや奴隷狩りと相対したときのアービィと同じ、冷たい炎が宿っている。

――ルティ、大丈夫だからっ!!　落ち着いてっ!!

アービィが慌ててルティを止め、巨狼がルティとプラボックの間に割って入る。

「なんで……

人の気も知らないで……

どうして、あんたは人を心配させることしかしないのよっ!!」

そのまま剣を抜き、峰打ちに持ち替えたルティが、泣きながら巨狼を打ち据える

――ごめんなさぁい!!　いやぁっ!!　痛い痛い痛い痛い痛い痛いっ!!

傍目には、巨狼がぎゃんぎゃん鳴きながら逃げ回るだけだが、駄々漏れの念話は情けないの一言だった。

「えっと……

あんなもんですから、あれは」

額に手を当て、渋い表情で首を横に振りつつティアは俯く。

決意と毒気を抜かれ、ティアはどうしたものか迷っている。

「よろしいのですか？

止めなくて」
ルムがティアに聞く。
「あれ、楽しんでますから。
放っておきましょう。
それより……」
一瞬の間を置き、ティアが獣化する。
ラミア本来の姿、全裸になってはルティの癇癪に油を注ぐようなものなので、上半身には衣服を纏ったままだ。
「なるほどな。
ルム殿がティア殿を崇めるわけだ」
合点がいったようにプラボックが頷く。
「離反する人が出るかも知れません。
ですが、話によると相手は不死者とのこと。
あたしの能力がどこまで通じるかは判りませんが、アービィの力は絶対必要です。
万が一、戦場でアービィの獣化を見て恐慌に陥ったり、新手の敵と思われては一気に戦線が崩壊します」
ティアの説明に、プラボックが赤面した。
「しかし、アービィ殿も人が悪い。
先に言ってくれてからなら剣など抜きはしなかったものを」
プラボックが深々と頭を下げる。
――すいません、配慮が足りませ――あぁっ！　ルティ、もうぶたないでぇっ！！
臥せの態勢で謝りながらアービィは前肢で頭を庇おうとするが、

狼の体の構造上前肢を頭の上に上げることはできず、ほぼ無防備のままルティの一撃を受けていた。

「しかし、人狼を従えるとは、ルティ殿こそ神か？」

腹を見せ、降参のポーズを取る巨狼を横目に漏らしたルムの呟きは、喧噪にかき消されていた。

「改めて見ると、アービィの毛皮ってきれいよねぇ」

後から入ってきたレイが、そう言いながら巨狼の腹に顔を埋める。

「あぁっ、なんてことをっ！

ダメっ！　これはあたしのっ！」

ルティがレイを引き剥がしにかかる。

「いいじゃない、ちょっとくらい。

減るもんじゃなし」

毛皮の感触を楽しむようにレイがアービィにすがりつく。

「減るのっ！　あたしの分がっ！」

ルティが強引にレイを引き剥がし、巨狼の腹に顔を押しつけた。

レイに少し遅れて入ってきたヌミフは、獣化したティアに硬直し、口を聞くことすらできなくなっていた。

「やはり、伏せておいた方が得策かと思うのだが、どうかね、ランケオラータ殿」

思案顔でプラボックが言った。

アービィに対して自分が取った行動が、おそらく先入観なしの北

の民が見せる反応だとプラボックは考えている。

もしかしたらアービィに対しての恐怖心から、ルティに手を出す者が出ないとも限らない。もし、ルティの命に関わることでも起きたら、そのときはアービィが狂気に染まる。話に聞いたヒドラや奴隷狩りに対して以上の、殺戮の嵐が吹き荒れることは間違いない。

ランケオラータとルムが南大陸に向かった際、魔獣に追い詰められたところを獣化したアービィに救われた。そのときに護衛として同行していた南大陸の住人からは、今のところアービィの噂は広まっていない。バードンとハイスティが固く口止めしているからでもあったが、それでも護衛の兵たちがアービィに感謝なり好意がなければ、あっという間に悪意の噂は広まったはずだ。

アービィが巨狼の姿で戦功を挙げるまでは、このことは伏せておくべきだ。プラボックはそう考えている。

だが、そのためだけに配下の民たちを死地に追いやるような戦術は取れない。それもまたプラボックの考えでもあった。

「そうですね。
私は少し安易に考えすぎていたようだ」
熟慮したランケオラータが答えた。

命を救われたなら当然見方も変わるが、一般的な人狼に対する考え方はそうそう払拭できるものではない。プラボック同様に、そのためだけに部下の命を危険に曝すことはできないと、ランケオラータは思い至っていた。

アービィを恐れるくらいならまだ良い。人狼に与するとして、ルムやプラボックに対して反乱でも起こされたら、それこそ一大事だ。

今は中央の民が山脈の民を支配下に入れているが、これは魔獣襲撃の混乱に乗じた結果であり、平和的な同盟などではなかった。茫然自失だったからこそ無条件降伏に近い形で事が治まったが、今後いつ何時怨みが再燃しないとも限らない。

アービィの存在は、中央の民が魔獣を操っていたと誤解させるには充分だった。

これで反乱が起き、鎮圧に武力を行使などしてしまったら、山脈の民との間には埋めがたい溝を再度掘ることになる。当然平野の民も中央の民も一枚岩なわけではなく、当面差し迫った危機に対処するために手を結んでいるに過ぎない。人狼に対する拒絶は、北の大地全体を再び戦乱の状態に叩き込む危険性を孕んでいた。

「アービィ殿、ティア殿。

あなたたちがその姿を見せてくれた勇気には、心から敬意を表する。

だが、私は北の大地の安定を優先させなければならない立場だ」

悪役は引き受けるとランケオラータとルムに目配せしたプラボックが、ルティとレイとじゃれ合う巨狼とラミアに向き直った。

プラボックの表情から雰囲気を察した巨狼が座り直し、ラミアがとぐろを巻く。

プラボックは、たった今三人が話し合った内容を、魔獣二頭の心を傷つけないように気遣いながら話し始めた。

――気にしないでください、プラボックさん。僕たちも北の大地へ来てから、少し危機感が薄れていたかも知れません。

巨狼から念話が届いた。

もちろん、アービィたちが浮かれていたわけではない。生命への

危険性という点において、北の大地は南大陸とは比べものにならない。それは承知で乗り込んできている。その点では南大陸にいるときよりも、遙かに危機感を持っている。そう簡単には殺される心配のないアービィでさえ、あの邪法の本拠地に近付いていることで、相当な警戒心を持って神経を張りつめていた。そのためにも、獣化には躊躇いを持つべきではないと考えてもいる。

だが、南大陸のような組織立った治安維持組織がなく、法治国家の呈を成していない北の大地では、獣化を見られたところで官憲に追われるようなことはないだろうと思い込んでいた。だが、確かに官憲に追われることはないだろうが、それより始末が悪いことが起こるかもしれないとアービィは気付いていた。

「あたしたちにお気遣いは無用です。
獣化する必要がなければ、それに越したことはありませんから」
同様にラミアが答える。

自由に獣化できる環境に、憧れることは当然ある。しかし、獣化が混乱を招くというのであれば、それを控えることは人間との付き合いに必要なことくらい弁えている。そして、この二頭の魔獣は、人間と共に生きることを選んだ。であれば獣化を今まで通りに控えて生きるか、自由に獣化できる環境と理解を勝ち取るかだ。

北の大地を安定させる闘いであると同時に、二頭の魔獣たちにとっては自由への闘いでもあった。

「申し訳ない」
ルムとランケオラータが頭を下げた。

二日後、独立混成大隊が到着し、カトスタイラス軍から選任された総指揮官と、ランケオラータとは顔見知りのハイグロフィラ軍の

指揮官を含む司令部要員が着任の挨拶に訪れた。ここで独立混成大隊は第一大隊と名称を変更し、捕虜の立場から解放されたボルビデュス軍と義勇兵たちで再編した部隊が第二大隊となり、北大陸連隊を編成することとなった。そして、連隊司令部は第一大隊司令部が兼務することが伝えられた。その場で第二大隊司令部から第一大隊司令部へ現状報告が行われ、逆に第一大隊司令部からはランケオラータに物資の輸送状況が説明された。

石畳の舗装などない北の大地の街道は、行き来する人が南大陸の街道に比べて圧倒的に少なく、牛馬での通行に問題はないものの、物資を満載した荷馬車の通行には向いていない。道幅も細く、充分に踏みしめられているわけではないので、車輪が土にめり込むことが多々あると見られていた。

また、北の大地では馬はほぼ指導者たち特権階級の乗り物として、ごく一部で利用されているだけだった。大量に運用しようにも、飼料を確保すること自体が難しく、牧場が成立するような環境ではなかった。牛にしても荷駄の運搬に使役されるだけであり、組織だった牧畜が行われているわけではない。

南大陸から連れてきた軍馬や、エンドラーズが用意した家畜や家禽の飼料は、当面これも南大陸から運ぶことで話は纏まる。できる限り現地で調達したいところだが、現状では持ち込んだ苗や種も育っておらず、それしか手がなかった。飼料の運搬と同時に、伝令に使用する馬も追加で南大陸から持ち込むように、ランケオラータは命じていた。

その夜、ルムの家に、プラボックとルムをはじめとした北の民の主立った指導者たち、連隊司令部、第二大隊司令部、ランケオラータとアービィたちが集まった。アービィ、ルティ、ティア、バードン、ハイスティは公的な立場ではないが、ランケオラータの幕僚に相当するとして、この場へ同席を求められていた。

北の民を代表してプラボックが、独立混成大隊の到着に歓迎と感謝の言葉を述べる。それに対して総指揮官から答辞が述べられ、両者の間に固い握手が交わされた。

それまでは互いに剣を交える相手としてしか認識していなかった両者の間に、それぞれの考えは別としても正式な共闘関係が成立した初めての瞬間だった。

次いで、山脈以南の防衛体制、ウジェチ・スグタ要塞とパーカホ間の街道を石畳での舗装や食料を始めとした戦略物資輸送等の兵站計画の概要が説明された。

第一大隊は、現状認識のために二度手間になることは承知で、全員がパーカホに入っていたが、当然食料が追いつかない。そのため、最北の蛮族に相対する最前線の防衛任務と、舗装工事や戦略物資輸送等の兵站任務を、第一大隊と第二大隊が交代で行い、各中隊には北の民が数名ずつ随伴し、風土気候風習に不慣れな南大陸の住人を補佐することになった。

アービィ、ルティ、ティアは当面ランケオラータの補佐任務に就くが、中央部の偵察結果によっては独立遊撃隊として中央に残された人々の救援や救出、敵中深く進入する任務が与えられることになっている。

軍の統一指揮は連隊長に一任するが、戦略はランケオラータが指揮官たちの補佐を受けて、ルム、プラボックと協議のうえ決定する。軍はあくまでも戦術面の決定権に留め、独走などを起こさないような歯止めが必要だった。この世界でもシビリアンコントロールが原則ではあったが、各国の軍務卿自ら先頭に立って剣を振るうことも建前としての原則でもあった。それが貴族の義務と考えられており、必ずしも完全なシビリアンコントロールとなっているわけではなか

った。ましてや北の民においては、指揮官先頭こそが部下を死地に向かわせるためには必要不可欠な条件であり、勇気の証明であった。

だが、電信などの通信技術が発達していないこの世界で、指揮官先頭は良いとして、軍の独走は何があっても防がなければならなかった。

アービィは異世界で旧日本軍が犯した失敗を説き、前線指揮官の裁量権を大幅に狭めることを勧めていた。本来であれば前線指揮官にこそある程度自由な裁量権を与えてこそ然るべきだが、守勢防御が基本戦略となっている以上、独断専行は厳に戒めねばならない。

「山脈地帯を防壁として、これより先へは防衛線を進めるべきではありません」

アービィが言った。

「なぜ、ですかな、アービィ様？」

連隊戦務参謀が問い詰めるように聞いた。敵本拠地を一気に衝くことが不可能なことくらい、状況説明を受けた今は理解していた。

だが、敵拠点が中央部の比較的山脈寄りにあるというのであれば、緒戦でこれを落とし、前線を勧めるべきだと戦務参謀は考えていた。

「相手に空間移動の方法がある以上、絶対防衛戦は事実上意味を成しません」

アービィはそこで言葉を区切り、こちらが山脈以南全てを守らなければならないことに対し、敵は任意の一点をある程度自由に設定し、何の前触れもなく攻め入ることができるということを、改めて全員に認知させる。

例えば、食糧や武器のような戦略物資の貯蔵施設や、軍の司令部、そして今全員が集っているここなどに、移転呪文で魔獣や不死者を

放り込むことも可能と見なければならない。防衛の方法としては、敵軍の侵攻を食い止めるというよりは、ゲリラ戦を仕掛けてくる敵を包囲殲滅することが優先されるのではないかとアービィは考えていた。

不死者の多くは夜しか活動できず、日光を完全に遮ることのできる拠点がない限り、勢力圏を広げることはできない。山脈の中央側に広がる裾野には、一日の行程内に集落は存在せず、大軍が昼をやり過ごせるような大規模な洞窟もない。この状態で不死者が列を成して攻め入ることは、事実上不可能と見て間違いないだろう。以前の報告にあったように、いつくかの拠点を持っているだけだと思われた。おそらくは、不死者転生の邪法を大規模運用できるかどうかの実験が行われ、その成果が今現在中央で確認されている不使者の群れなのだろうとアービィは予想している。

このまま放置すれば未だに中央で抵抗している集落が、不死者の原料にされてしまう可能性が高い。食糧事情は南大陸からの兵站が確立できれば一気に好転することが期待できるので、なるべく早いうちに中央に残る人々を避難させ、補給ルートを確立することが必要だった。

中央を緩衝地帯として、最北の蛮族と和戦両面から対峙し、機を見て和平交渉を持ちかける。平野の民や中央の民がそうであるように、最北の蛮族も一枚岩ではないという可能性は残されている。

この騒乱の首魁が和平に応じるとは考えられないが、考えを異にする最北の部族があってもおかしくはない。そのためにも敵領地への大軍による直接侵攻は避けるべきであったし、中央を完全に平定するには現在の戦力ではあまりにも不足している。拠点を築きつつ敵領土へ迫ろうにも、途中の敵拠点全てを潰さなければ補給線が寸断され、攻勢限界を超えた瞬間に戦線が崩壊することは、素人でも

理解できることだった。
和平への足掛かりとして、この騒乱の首魁を討つというのであれば、自分たちのような軍律に縛られない自由な立場の者が潜入したほうが良いとアービィは考えていた。

言葉を区切り、暫く沈黙した後、アービィは再度話し始める。
「戦線を北上させるべきでないという論拠ですが、なによりもその補給線が弱点になるからです。
敵の主力は食料や生活物資を必要としない不死者です。
もしくは食料の現地調達に何の問題もない魔獣です。
不死者はそもそも物を食べることはないし、日光が弱点で昼の行動できないだけで、休息を必要としません。
魔獣については、食料は人でいいわけです。
戦闘行動と摂餌行動は同じということですから、戦いに勝てばその時点で腹も満ち足りてしまいますし、暫く絶食しようとすぐ死ぬわけではありません。
却って、食欲が最大の戦意高揚になると見て良いでしょう。
それに対し、こちらは食料も休息も必要とする生身の生き物です」

軍事に関する知識がそれほど豊富でないことは、アービィは自覚している。ましてやちょっとした趣味にしていた艦船模型の延長で齧った程度の太平洋戦争、それもほぼ海軍に偏った表面上の知識だけだ。古代ローマや中世ヨーロッパの戦争に関しては、ほとんど知識がない。ありがちな現代の知識を以って負け戦をひっくり返すようなｉｆ戦記ではなく、リアルな自分の体験を通しての知識でこの戦いを潜り抜けなければならなかった。

アービィはこの戦を、太平洋戦争の島嶼戦に準えて考えることにした。それもアメリカ側が採用した飛び石作戦を手本にしてだ。もちろん、戦史を専門に研究したわけではなく、聞きかじり程度の知

識でしかないが、日本の失敗とアメリカの成功例を連隊の参謀たちに教えれば、あとは専門家たちが仕事をすると考えていた。

あの戦いで日本はアメリカとオーストラリアを分断するために、南太平洋の島嶼を万里の長城にしようとして失敗している。ラバウルからガダルカナルまで足を延ばし、補給線が伸び切ったところで日干しにされた。主要な島を占領し、飛行場を建設して要塞化しようとしたが、当時の日本が持つ資源と技術では無理な話だった。

それに対してアメリカは、絶対に占領することなど不可能なオーストラリア大陸を、フィリピン奪回に執念を燃やすダグラス・マッカーサー率いる南太平洋方面軍の反撃策源地とした。

ここから島伝いに北上し、日本の生命線ともいえる南方資源地帯と日本本土を結ぶ航路を抑えることができるフィリピンを奪回する戦略だ。そして、ラバウル等の強力な拠点は正面から潰すのではなく、背後に回り補給線を絶って無力化する作戦を採用した。航空機と潜水艦による通商破壊だ。

脅威となる基地を構築できた島は、日本にとってもアメリカにとっても都合の良い地形だが、アメリカはその工業力に物を言わせ、多少の不都合も強引に地形を変えてまで利用することができた。ブルドーザーやパワーショベルといった重機が、この時期から既に充分にあったのだった。

基地の構築を人力に頼り、そのような補助機材の開発など省みることはなく、華々しい艦隊決戦しか頭にない日本海軍の参謀たちには、考えつくはずのない戦略だった。

本来艦隊決戦は、漸減作戦の最終段階だったはずだ。

中部太平洋を押し渡ってくるアメリカ艦隊を、潜水艦と機動部隊による航空攻撃で減らしたうえで、数で劣るが性能に勝る連合艦隊が撃滅するという構想だった。

だが、いつしか決戦兵力こそ艦隊の華という思想が蔓延し、手段が目的にすり替わり、決戦兵力たる戦艦部隊を動かすためには不可欠な補給部隊や輸送船の護衛部隊を軽視どころか蔑視する風潮が生まれてしまった。これは陸軍にしても同じことで、『輜重輸卒が兵隊ならば、チョウチョトンボも鳥のうち』という戯れ歌に代表されるような輸送部隊に対する蔑視や輸送そのものに対する軽視の例は、中国戦線やインパール作戦を筆頭に枚挙に暇がない。

その陸軍は、敵拠点を無力化するためには、現地を占領するということしか考えていなかった。

占領してしまえば現地の統治も必要になり、さらに人と物資を食い潰される。そして、一度占領した地を手放すなど英霊に申し訳が立たないという、まるで理論的ではない理由で占領地にしがみつき、最後は玉砕というお定まりのコースを辿ることばかりだった。もっとも、これは軍部ばかりに責任があるのではなく、敗退ということの責任を極度に論う国民性にも問題があったと言わざるを得ないが。

食料は現地調達という、戦国時代から少しも進歩していない戦略が、結果的には全てを破綻させた。

日本に残り、陸軍省や海軍省の建物の中だけで作戦を考えていた参謀本部や軍令部の構成員たちには、現地情報というものが根本から抜け落ちていた。地図とイメージの上だけで練られた作戦。彼らの作り出す戦略は、現地の状況とは乖離した理想でしかなかった。

南方資源地帯という言葉に、当時の人々は騙された。ジャングルに入れば果実がたわわに実り、手を伸ばせばそこに食べ物がある世界。そう信じ込んでいた。

だが、何故、現地の人口が少ないか。それは、その地域はそれだけの人口しか養うことができないからだった。

補給が途絶え、たわわな果実が実るジャングルを期待して逃げ込んだ日本兵たちが見たものは、高温多湿であっても水の確保すら難

しい、ましてや何が食べられて何が毒なのかすら分からない緑の地獄だった。

既にアービィが異世界から召喚されたことは、連隊には周知されていた。隠すまでもなく、ラシアスでニムファと起こした悶着や、ストラーのアマニューク砦を解放したこと、ビースマックでの顛末を知らない軍関係者はいない。当然、未知の知識を得られるということも判っており、アービィが薄れかけた記憶を頼りに話す太平洋戦争の話を、連体司令部の面々は黙って聞いていた。

「つまりですね、相手は攻撃できる範囲が狭いという弱点がありますが、神出鬼没に遊撃戦を展開できるという強みも持っているということです。

拠点は避けることはできますが、神出鬼没に出てくる魔獣は避けられない。

補給線を寸断させるには充分すぎる戦力です」

アービィが言う。

夜間しか行動できない不死者は航続距離の短い戦闘機で、移転呪文で任意の地点に移動させられる合成魔獣は潜水艦に見立てることができた。もちろん、この世界、この時代に人々に、飛行機や潜水艦を説明しても理解は得られない。アービィはそこを誤魔化しながら、必死に説明していた。

四百五十年の間本格的な戦争がなかった南大陸では、戦の教本はそれ以前に起きた戦を題材にしている。それらは研究し尽くされ、アービィが住んでいた異世界の中世ヨーロッパと大差ない戦術が編み出されていた。もっとも、それを現実に試す機会はなかったのだが。

アービィは太平洋戦争の知識が、そのままこの世界に通用するとは思っていない。国民性の違いや、地形、技術、資源等々、条件が違いすぎる。だが、共通する点もあるだろうと話してみただけだ。

「では、こういうことでいかがでしょうか」

若い参謀が挙手し、発言の許可を求める。

ランケオラータに促され、若い参謀が発現した内容はこうだった。

「小官は、移転呪文による魔獣の攻撃も、それほど脅威ではないと考えます。

理由としては、今から申し上げるとおりであります。

移転呪文は精霊呪文にしかないということで、移動できる限界の距離を先ほど風の神官殿に伺ってまいりました。

その結果は、どれほど優れた術者であっても一日の行程を飛ぶことが限度で、最北の蛮族の勢力圏からここを一気に突くことは不可能と判断されました。

敵はどこに出没するか判らないという優位を保ってはいますが、山脈地帯を越えて拠点を作られない限り、こちらの本拠地が危険に晒されるということはないと考えます。

従って、不死者同様、山脈地帯に移転してきたところを包囲殲滅できるのであれば、これもまた脅威とはなりません」

「つまり、山脈地帯を死守し、中央側への偵察を密にして敵拠点の構築を許さない、ということだな?」

ルムが聞いた。

「その通りであります。

小官といたしましては、山脈地帯の集落に南大陸の人員を小隊単位で配置し、土地に明るい北の民の皆さんに常時哨戒をお願いしたいと考えます」

若い参謀は、そう述べて発言を終えた。

ランケオラータは、この参謀の発言を聞き、心強い思いがしていた。

北の民を見下すことなく、対等な立場でその能力を活かそうとしている。さらに、中央の民に無条件降伏に近い服従を強いられている、山脈の民たちの自尊心を取り戻す方策さえ考えてあった。

それとは別に、北の大地の経営には明るい材料でもあった。

最北の蛮族の脅威が去らないうちは、南大陸から観光客を呼び込むことは躊躇われていた。だが、最北の蛮族に対して平野部が巨大な障壁として立ちはだかるのであれば、山岳地帯とパーカホまでと限定して南大陸から人を呼び込める。

兵站のための舗装工事は、そのまま観光客の脚にも利用できる。馬車が一般的ではない北の大地に、ラシアスに倣った駅馬車路線を敷くことも必要だった。当然資本を呼び込むだけではなく、危急時に戦力の迅速な移動にも有効だ。

北の大地は短い夏を終えると、急ぎ足で冬がやってくる。

雪に閉ざされる前にどこまで工事が進められるか、最北の蛮族との交渉チャンネルを開くことはできるのか、課題は山積されているが、誰もが瞳を輝かせて未来を語り始めていた。

第６９話

アービィたちが北大陸連隊と今後の方針を協議している頃、南大陸の中心にある教都ベルテロイの駐在武官官舎に、四人の王族駐在武官が集っていた。

ひとつの敷地内に隣接して建てられた官舎は、故郷の王宮に比べれば狭いものだったが、王族の権威を汚さない程度の豪華さと庶民の反発を抑える程度の品の良さが漂っている。必要最低限の生活に必要な部屋と執務室、そして応接室と会議室しかないが、無駄に広い王宮よりよほど暮らしやすいとストラー第三王女であり、この官舎の主であるアルテルナンテは感じていた。

インダミト国第二王子のパシュースが最初に訪れ、ストラー国内での騒乱の後始末に慰労の言葉を述べた。次いでラシアス国第三王子のヘテランテラが同様に声を掛ける。最後に少々疲れた表情のビースマック国第三王子のフィランサスが、三人に礼を述べた。

ようやくのことで、南大陸の四国家全てを巻き込んだビースマック騒乱の後始末が終わり、アルテルナンテの主催でささやかな慰労会が行われていた。

「我が国民をあまり酷使しないでもらいたいものだな、アルテ、フィー。

話は聞いたぞ。

勇者殿がシュットガルドでぶっ倒れになったそうじゃないか」

パシュースが二人を見ながら言った。

「その点については申し訳なくおもうけど、酷使という点ではあなたには負けてると思うの。

充分な休養も取らせずに北の大地に放り込むなんて、人の所業とは思えないわ」

侍女に任すことなく、王女自らがワインを注ぎながら答えた。

これから話す内容が内容なだけに、食事の準備はともかくこの場には四人しか入れられない。

パシュースは、いや北の大地へは勇者殿が自発的に行ったのだが、と呟きながら、グラスにワインを受ける。

ストラーではアマニューク砦で悪霊退治をした後、国内に燻る他国へ影響力を持ちたがる貴族を炙りだしていた。ビースマック騒乱の後に、フィランサスが持ち帰った完全体のガーゴイルが決め手となり、リトバテス公爵とローグルバ男爵、ヴィングストニー男爵の両男爵を始めとした一派十数名を検挙することができた。

もともとの打ち合わせ通り貴族特権を全て剥奪のうえでの追放刑が決まっているが、多少手間取ったためルムたちの出立には間に合わなかった。後日、国の官憲が付き添いのうえ、地峡を越えることになっている。首謀者に名を連ねる貴族家長たちは、ビースマック同様家族にすら計画を漏らしておらず、家族にとっては青天の霹靂だっただろう。付き合いのある友人たちがいる国で起きた騒乱に心を痛めていたら、その友人とあろうことか自分の家族が首謀者だったなど、性質の悪い冗談にもならない。

「宰相には俺が着くまでは引き留めておけと言ってあったが、入れ違ってしまったらしい。

ヘッテにまで手間を掛けさせて済まなかった」

フィランサスは素直に頭を下げるが、グラスはアルテルナンテの方向へ出されていた。

ビースマックは、ストラーほど後片付けは楽ではなかった。

首謀者たちはほとんどが騒乱の中で命を落としていたが、手先となっていた下級貴族や騎士階級の軍人たちの処分に頭を悩ませていた。特に小隊や中隊を率い、率先して反乱に身を投じた小隊長や中隊長は、その全てが捕縛され縛り首になっている。

だが、その配下で命令に従っただけの兵をどうするかで、閣僚たちの意見が分かれていた。

反乱に身を投じた以上は罪は罪。全員を捕縛して取り調べたうえで反乱の意志がない者は軍から放逐、少しでも共感を見せたものは終身禁固という意見が一つ。

もう一つは、命令に従っただけの者をここで罪に問うことは、再度の反乱の芽を残すことになり、向後の憂いとなるとして、罪には問わないとするものだった。

さらに首謀者の家族は追放刑で決まりだったが、その中の一人であるハラの家族を追放となると、ブレフェリー家が国から消える。宰相の懐刀として、国家の柱石を担うこの家を潰すわけにはいかなかった。しかし、ブレフェリー家だけを優遇するわけにもいかず、そうなると他の首謀者の家族も国内に留め置きとなり、ストラーの処断が過酷なものと写ってしまうだろう。

散々頭を悩ませたが、ある程度の処断は必要ということで表向きは厳しい沙汰を下していた。

まず、反乱に参加した兵は、全員を捕縛して取り調べの結果、命令に従っただけの者は沙汰無し。反乱の意志はなかったものの、積極的に手を貸したものは期限付き禁固ということになった。

そして、ブレフェリー公爵家は改易。リンドリクを伯爵に叙爵したうえで、新たな伯爵家として政務参議官に任ずる。父である政務参議官ブレフェリー公爵は家族の監督不行き届きとして、男爵に降

格のうえで他の反乱首謀者の家族たちと共に北の大地へ追放刑に処す。だが、これは当然公表などしないが、ランケオラータの懐刀としての役割を負わせるための方便だ。

ランケオラータはまだ若い。若さは武器だが、国家の経営には老獪さも必要だった。そして、これの処分であればハーミストリアに咎を負わせることなく、インダミトの顔を潰すこともない。さらには北の大地の利権にビースマックも食い込むことができる。少し考えれば誰にでも分かってしまうことだったが、強引に押し通していた。パシュースもそれは承知していたが、敢えて異を唱えることはしなかった。

「いや、礼や謝罪には及ばんさ。
莫迦女が始めようとした火遊びを事前に吹き消しただけだ。
それに、中隊を出したのは俺の独断で、勇者殿へのせめてもの罪滅ぼしと思ってくれ。
ウチの莫迦女を遣り込めただけにしてくれた勇者殿には、あれくらいではまだ足りんくらいだ。
なにせ……」
ヘテランテラは言葉を区切り、一同を見渡した。

「この世界に勇者殿を攫ってきたのは、我が国だ。
どう申し開きしようと許されることではない。
勇者殿の異世界での暮らし、家族、友全てを奪ってしまったのだからな。
魔王すら倒す力を持つというのならば、我が国を滅ぼすことだって雑作もないはずだ。
だが、勇者殿はそれをしなかった。
滅ぼされても文句一つ言えない我が王室だが、民を路頭に迷わせ

ることにならなくて済んだ。
それだけでも、俺は勇者殿に一生頭が上がらん」
ヘテランテラは心の内を吐露した。

「ラシアスとしてはどうなんだ？
北の民の手助けはできないか？」
パシュースが聞く。

「国民感情を鑑みるに、諸手を挙げてとはいかん。
数百年の間に積もりに積もった悪感情を払拭するのは、そう簡単ではないことは解るだろう？
閣僚たちも貴国の軍が通過するのを認めた理由は、我が国の負担が減る、という一事だからな」
難しい顔でヘテランテラが答えた。

「だが、我々が送り込む物資への関税や通行税で、貴国は潤う。
これは北の民への感情を和らげるのに役に立つだろう？
だからといって、安易な関税の吊り上げはやらせるなよ」
後は貴国の政治が片付けるべき仕事だ、とパシュースは付け加えた。

「それに関しては釘を刺しておこう。
既にインダミトとビースマックは商港の整備を進めている、とね」
目先の利益で将来に亘る大きな権益を逃すほど宰相コリンボーサは莫迦ではないだろうが、政治センスに乏しい摂政ニムファがどう出るかヘテランテラは一抹の不安を感じている。

「我が国は、勇者殿には全面的に協力させていただくわ。
国内の膿を出させてくれたのだし、ね。
どうすればいいかしら。

関税と通行税を下げる？
我が国も、商港を整備させようかしら」
アルテルナンテが言う。
無償で食糧援助はやれないことではないが、国庫は無限ではない。
また、いくら勇者に対して恩があるといっても、何の利益も上げられないのであれば、国として動くことはできない。

「当然我が国もだ。
彼の地で勇者殿が困るなんてことは見過ごすことはできない。
やはり、関税と通行税か？
あとは商港の整備だな？」
フィランサスが追随する。

高額な関税は商品の単価を引き上げ、購買意欲を下げさせる。
ラシアスに儲けさせるためにはある程度の関税は甘受するが、さらに行く先で高額の関税が掛かっては庶民の手には入り難くなり、貴族だけではたいした需要にはならない。
もう一つは、万が一ラシアスの関税が吊り上げられた際の、交易ルートの確保に繋がる。

「そうか。
ならば話は早い。
当面、関税と通行税を下げてくれたらそれで良い。
良い物がいろいろあるらしい。
金、銀、銅、鉄、宝石も、燃える石も、燃える水も大量にあるそうだ。
アルテのところが出してくれた作物の生産が軌道に乗れば、南大陸の食糧事情も好転する。
当面はこちらの食料を売るばかりだろうがな。
そして当然だが、我が国は自国民保護に全力を挙げる。

勇者殿だけでなく、忠勇な我が国の侯爵も彼の地に渡ったからな」
パシュースは、場の雰囲気が自ら思い描いた通りであることに安堵し、南大陸の安全保障上過去に類を見ない改変案を話し始めた。

「君たちも知っての通り、過日北の民の指導者であるルム殿が我が国を訪れた。
その際にウチの古狸と話し合って、最北の蛮族に対して共同戦線を張ることで合意している。
当面はカトスタイラス領とハイグロフィラ領の兵と、あのアーガスの馬鹿踊りで北の捕虜になっていたボルビデュス領の兵がそれに当たることになっている。
今後だが、北の民とは交易を行う関係上ウジェチ・スグタ要塞は開放したい。
無闇な移住はルム殿も困るといっていたので、許可証なりを出してもらって消極的禁止だ。
もちろん、南大陸から北の大地への移住は歓迎すると言っていたし、奨励したい。
流れ込まれて困るのは、南大陸に敵意を持つ者だけなんだ、実際には。
つまり、武力を持ってルム殿に連なる民を追い返すのではなく、交易によって北の民に南下の意義を失わせればいいと言うことだ」
グラスのワインで喉を湿らせ、パシュースはここからが本題だとばかりに三人の顔を見渡す。

「ウジェチ・スグタ要塞に詰めている各国の兵を、ランケオラータ侯爵に預けたい。
もちろん軍自体の総指揮は、ヘッテのところのラルンクルスでいい。
今はインダミト国の諸侯連合軍だが、南大陸連合軍として北の大

地に住まう山岳地帯の民、ルム殿率いる平野の民、山脈の民、中央の民を支援する」

パシュースの口調が熱を帯び、頬が紅潮したのは酒のせいだけではなかった。

三人の王族武官は、そうこなくてはいかん、という表情を浮かべ、力強く頷いた。

この世界初の南北両大陸合同の戦略会議があった翌朝、ヌミフとオンポックはハイスティに連れられパーカホを出た。

ウジェチ・スグタ要塞通過後はラシアス国内を一気に縦貫し、ベルテロイを経由してインダミトに入る予定だ。既にパシュースからヘテランテラを通して道中の安全確保は依頼済みであり、ラシアスの北の民に対する国民感情がどうであれ、ウジェチ・スグタ要塞からベルテロイまで軍の護衛が付くことになっているが、彼らはそのことをまだ知らない。

憧れの地であり、敵地でもある未知の世界への期待と不安を抱え、ヌミフとオンポックは旅路を急ぐ。

ハイスティはそんな二人から矢継ぎ早に出される質問に答えながら、微笑ましい想いに捕らわれている。

商人に身を窶し、国家間の薄汚い謀略や諜報に従事してきた彼にとって、この百日ほどは久々に正体を隠すことなく表街道を歩くことができた貴重な日々だった。身体までも休めるような安寧の日々ではないにせよ、睡眠時すら緊張感から解放されることのない南大陸での毎日とは別世界だ。もちろん各国の諜報員が紛れ込んでいることは承知しているが、対北の民としての情報収集が主任務であるため、互いの利害がぶつかることもなく消極的休戦が暗黙の内に成立していた。

地峡を越えればまた商人として動き回ることになるので、その説明をさたところ、何故身分を偽るのかという素朴な疑問が返され、ハイスティは返答に窮してしまった。裏切りや殺し合いには慣れていたが、裏切りを前提とした付き合いや、それを職業とすることにヌミフもオンポックも驚きを隠せない。それ以上に裏では腹の探り合いがあることはいいとして、殺し合いをしながら表面では友好を唱いあげ、言葉だけでなく本当に友好関係を築いていることが信じられなかった。

友好を唱える人々に、隠れて殺し合っているのではない。皆承知の上で友好を唱い、殺し合う。北の民であれば、片方が滅びるまで矛を収めることはなく、話し合いなどは無条件降伏を伝えるときまであり得なかった。

これから先、インダミトへは視察という名目で行くのだが、実態は留学であり、南大陸の考え方や価値観への洗脳とも言える。ルムもそれは承知の上だが、完全に洗脳してしまっては後々軋轢を生むだろう。北の民自らが南大陸の価値観を、周囲の人々に押し付けては反感を生むだけだ。南大陸で生まれ育った北の民とでもいうのなら兎も角、生まれも育ちも北の大地で、そのうえ指導者の身内となれば、北の民を南大陸に売り渡したとの誹りを受けても仕方がないだろう。

無理に北の民の価値観にこちらから諂う必要は全くないが、南大陸の価値観に染め上げる必要もない。普通に南大陸の価値観や考え方で物事を教え、折に触れて北の大地にどう応用させるか、両者で考えればよい。若い二人がどちらかにかぶれた思想に染まらないように、常に注意し、適した人材を充てればよいとハイスティは考えていた。

期待に満ちた瞳を輝かせた二人を連れて、ハイスティがウジェチ・

スグタ要塞の前にたどり着いたのは、パーカホを出てから十二日後。朝夕に吹く風に、時折涼しさを感じ始めた夏の終わりだった。

ハイスティがヌミフとオンポックを連れてインダミトへ旅立つのを見送った後、アービィたちは引き続きそれぞれの打ち合わせを続けている。

アービィは、ルムとプラボックと共に北大陸連帯司令部と各級指揮官たち、バードンや精霊神官を交えた戦術会議に臨み、ルティとティアは、ランケオラータ夫妻に北の民でも商売に明るい者を交えた商戦略会議に入っていた。

「山脈地帯全ての集落に、南大陸の兵を配置することは不可能であります。

数字の上では可能に見えますが、その場合各拠点に配置できる人数は手薄になり、休息を取ることは無理になります。

いかに口で精強とは申し上げても、睡眠すらまともに取れない状況では、防衛戦闘は無理であります」

戦務参謀が、兵力についての説明を終え着席する

「山脈の内、人馬が行動可能な範囲は、平地において馬が全力で駆けて、三日ほどの長さと聞き及んでおります。

それ以外は人の足では踏破できない峻険な高山地帯か、常に泥濘と言って過言ではない沼沢地であります。

従いまして、我々が防衛行動を取ることが可能な地域に、重点的に前衛部隊を配置し、高山地帯及び沼沢地は、平野部との境界に防衛線を構築すべきと思慮いたします」

作戦参謀が発言を終え、再度戦務参謀に発言を促す。

「イーバに司令部を設置することに異論はないと考えます。
しかし、当初計画しておりました山脈の集落全てに南大陸の兵を配置することに関しては変更を余儀なくされています。
全兵力を投入すればこれもまた可能ではありましょうが、兵站に重大な支障を来してしまいます」
核心に触れる前に戦務参謀は着席し、再び作戦参謀に発言を促した。

「イーバに司令部を置くことに、変更はありません。
警戒配備に就く大隊の戦闘に携る人員は約六百名、四個中隊です。
各中隊は百五十名で、五個小隊で構成され、小隊三十名は三個分隊、分隊十名は二班五名ずつで構成されています。
イーバより中央寄りにある十九の集落に一個小隊ずつを配置し、半数を前線勤務と休養に分けます。
休養に当たった班は、イーバを含めて四カ所に拠点を構築し、所属中隊ごとにそこに集め、万が一の場合戦力を集中活用するための予備兵力とします。
前線勤務は、分隊ごとの三交代。日の出から日没までをひとつ、日没から夜半までをひとつ、夜半から日の出までをひとつとして、一日に隙が出ない警戒態勢を取ります。
幸い、拠点とするイーバより中央よりの集落は、歩兵の一日の行動圏内に収まっていますので、この計画であれば山脈防衛線上を常に五名の班が哨戒できることになります」
作戦参謀はここまで説明し、会議に出席した面々に質問はないかと問う。

「五名とは心許ないな。
もっと増やしてもらいたい」
プラボックが言った。

「もちろん、南大陸からの増援がありましたらそうしましょう。
ですが、現状ではこれが限界であります」
後方支援を主任務とする戦務参謀が答える。
「北の民の方々にも働いていただきます。
イーバより後方の集落に詰めていただき、万一の決戦兵力となっていただきます。
ここからは志願があればですが、前線の小隊にも入っていただきたい」
作戦参謀がプラボックに言った。
「了承した。
山脈の民を充てよう」
プラボックは少し考えてから言う。
「それはダメです」
アービィが挙手しながらも、否定は許さないという気迫を見せながら言った。
「アービィ様、ご説明を。
ただ、ダメだけでは……」
アービィの意図を感じ取り、険悪になりかねない雰囲気を察知した戦務参謀が、アービィに正式な発言の機会を作る。
「では。
山脈の民の皆さんは、盾ではない。
前線は、中央の皆さんがするべきです。

今でこそプラボックさんたちに服従してはいますが、元々は独立した部族集団です。
いくらそこに住んでいたからといって、支配下にある部族のみを最前線に放り込んだら反感を買います。
志願があれば別ですが、顔色を窺っている今、こちらから志願を募ることは強制に等しいものがあります。
まずは、中央の皆さんが範を垂れ、山脈の皆さんが自発的に防衛に加わるのを待つべきです」
アービィは山脈の民が自尊心を取り戻すためには、最前線に出るべきだとも考えていた。

今のままでは、山脈の民は中央の民の支配下のまま、未来永劫屈辱を飲み込んで暮らしていかなければならない。この戦乱が終わればそれぞれの居住地に帰ることになるが、山脈の民は父祖の地を奪い返せたことにはならない。
だが、現状で山脈の民を最前線に投入することは、使い捨ての駒にしたと受け取られるだろう。志願を募っても、アービィの言う通り強制でしかない。

「では、どうしろと？」
プラボックが問う。

両者に険悪な空気が流れる前に、作戦参謀が発言の許可を求めた。

「山脈の皆さんには、高山地帯の麓なり沼沢地との境界なり、行っていただかなければならないところがあります。
中央の皆さんに、山脈の守りはお願いしたいと考えていました」
連隊司令部やランケオラータにしても、山脈の民の自立は大きな問題だった。武力で奪われた土地を自尊心と共にいかに平和的に戻させるか、それも後々にしこりや貸し借りを残さないようにだ。

中央の民にしてみれば山脈は仮の住まいであり、父祖の地を取り戻せれば無理をしてまで居座る必要はない。何もしなくとも出て行くだろう。

しかし、魔獣に蹂躙され、屈辱的な条件で中央の民に膝を屈した山脈の民の自尊心は、それでは取り戻すことはできない。征服されたことで自尊心を失ったまま堕落し、常に援助を集るようになるか、下手をすれば新たな火種にもなりかねなかった。

比較的安全な後方で防衛任務に就けつつ、彼らから最前線に出ると言い出すように誘導することも、戦務参謀に課せられた重要な任務だった。

「ですが、我々は山脈の地理に詳しくない。山脈の民の中から、各小隊に数名ずつは付いていただかなければなりません。それでいかがですか？」

戦務参謀が長い説明を終え着席する。

「承知した。我らとて、山脈の民を盾として後方で安寧を貪るつもりは、元よりない。父祖の地を望む最前線に就くことに、嫌があるわけではないからな。それに、山脈の民を永遠に面倒見続けるわけにもいかん」

プラボックは戦務参謀の説明に納得し、自らの案を撤回した。

「前線の防衛体制については、各部会で早急に実施計画を纏めてもらう。兵站任務についても同様だ。

早急に舗装と、食料を含む物資の輸送を始めなければ、我々が来たことで北の大地が餓えかねない。
自壊するために来たのではないからな。
兵站に関しましては、平野の民の皆さんに働いていただきます。
ルム様、それでよろしゅうございますか？」
連隊長がルムに確認した。

「最前線に就く栄誉はいただけないのかね、連隊長殿？」
先陣切って剣を振るえないことに、ルムは僅かに不満を感じていた。

「その機会は、この先いくらでもありましょう。
それよりも、腹が減っては戦になりません。
前線の防衛も兵站も、どちらも同等に重要な任務であります。
それに、ルム様にはランケオラータ様とともに、平野の経営をしていただかなければなりません。
剣など、当分の間油にでも漬けておいていただきましょう」
連隊長がにべもなく言い、ルムが盛大に落ち込んだところで会議は終了となり、部会ごとの細部の詰めに移行していった。

「まずは、食料の自給率を上げることだ。昨年とは比べ物にならないほど収穫が見込めるとは言っても、中央と山脈の民が流れ込んできている。
人口が倍以上だ。
当面カトスタイラス領のカネで南大陸から食料を買い込むが、それだけでは早晩立ち行かなくなる。
来年の収穫が、今年の倍以上になるようにしてもらいたい。
これは、南大陸と交易する以前の問題だ」

今は第一大隊と名称を変えた独立混成大隊が入っただけでも、食糧の増産分は相殺されている。そこへ中央と山脈の民が流入し、食糧事情は一気に悪化していた。

何よりも食料の確保が、優先される状況だ。

地峡に続く山岳地帯を除き、貨幣経済が発達していない北の大地に購買力はない。かといって、ランケオラータは食料を始めとする物資を恵むなどとは、微塵も考えていなかった。

カトスタイラス侯爵の名で購入し、それを北の大地で産する貴金属と交換する。鉄やその他の金属、燃える石や水は、ランケオラータが持つカネや、北の大地で産した貴金属を加工したカネ、南大陸から来る商人たちが持ち込むカネで購い、貨幣経済を根付かせることをランケオラータは考えている。

貴金属鉱山の運営が軌道に乗るまでは、ランケオラータは食料を始めとした物資の代金を立て替えるだけだ。

造幣も、技術を持った者がインダミトから派遣されるまでは、棚上げになっている。

造幣の許認可については、財務卿が父であるハイグロフィラ公爵である以上問題ないが、誰の手に渡るか知れない貨幣の鋳造がいい加減であってはならない。少しの手抜きで北の民全ての信用を、失わせることになる。

以前から南大陸と交易していた山岳地帯の民を除き、北の大地に貨幣経済が根付かなかった理由は、平野にしろ山脈にしろ、中央にしても単一部族で一枚岩というわけではなく、多くの部族が入り交じっていたからだった。これまでは部族毎に自給自足の生活を送り、互いの交流は積極的とはいえず、略奪や土地の奪い合いが頻発していた。

それがアーガスの独断専行を迎え撃つために平野部が纏まり、結果的に中央と山脈の民を受け入れることが可能になった。そう考えると、アーガスの罪も多少は軽くなるかも知れない。

中央や山脈の民にしても、最北の蛮族が一気に侵略してこなければ、ここまでの纏まりを見せることはなかっただろう。最大の災厄を却って奇禍とできたことは、犠牲となって亡くなった人々に対してはなはだ不謹慎だが、喜ぶべきことであったかも知れなかった。

ランケオラータは、この機会に北の大地に経済の概念を植え付け、反映の基礎とするつもりだ。

それはルムへの個人的な友誼や、純粋に両大陸の平和を望む心情から来る部分もあったが、平和の内でしか繁栄することができない商業国家としての宿命を背負った、インダミト王国の国家戦略に則るものであった。

「あたしたちが買い込むために南大陸から運ぶ物資や、北の民からの徴税はいかがなさるおつもりですか？」

ティアが訪ねた。

税の概念がない北の民から、いきなり人頭税や年貢を取り立てる等の徴税は難しい問題だった。

南大陸では当たり前になっている貴族の徴税権は、インフラ整備の資金として活用されることが前提だ。そして領主が見窄らしい生活を送っていては、他領から見下されることがあるため、貴族はある程度の見栄を張り豪奢な生活をする必要もあった。

領民たちは、領主が他の領地より豪奢な生活を送ることを、自分の見栄としている部分もある。ウチの領主様はお前の所より羽振りがいいぞ、それを支えているのは俺たちだ、というわけだ。領主自らが清貧であっては、領内が遠慮して経済が滞るだけでなく、税収

が足りていないのではと領民が不安になる。当人が望むと望まざるとに関わらず、もちろん程度問題だが、貴族はふんぞり返っていることは、反感を買うことも多いが、それ以上に領民を安心させる効果が大きいのだった。

ただし、それはあくまでも南大陸の常識であり、そのまま北の大地に通用するわけではない。

インフラ整備の習慣がないため、税の目的を理解させるところから始めなければならない。それをしなければ、ただの簒奪者として、北の大地を叩き出されるだけだ。

「人頭税にしろ売上税にしろ、金銭で徴収する税は当分無理だ。だが、後になって取るとなれば反発は必至。

所得税や売り上げ税がない分、年貢を多くするしかないだろう。かといって、南大陸で一般的な四公六民では、民が餓える。

三公七民でいくしかない。

収穫を増やし、余った分は我々が買い上げる。

それである程度の収入が確保できたら、年貢率を下げて人頭税や売り上げ税を導入しよう」

ランケオラータが当面の方針を説明する。

金銭収入がない以上、収穫物による物納しか手がない。これをカネに換え、南大陸から物資を買い込む。

年貢を低く抑え、余剰収穫物を安く買い上げ民に貨幣を浸透させつつ、北の大地に還流させ市場を形成する。

やるべきことは気が遠くなるほどあった。

「北の大地内の税は解りましたが、関税や通行税はいかがなさいますか？」

ルティが聞いた。

今のところ主な購入者はランケオラータだ。
当たり前だが、商人たちは税を上乗せして売価を決定している。関税や通行税は主たる収入源だが、その分も結局は同じ懐から払うことになり、収入にはならない。

「もちろん徴収するわ。
今のところ私たちの懐内で出入りするだけだけど、将来北の民の購買力が上がって私たちを通さず購入するようになってくれなきゃ困るの。
でも、その時になっていきなり関税や通行税を取るなんていったら、商人たちは北の大地を避けてしまうかもしれないのよ。
ただし、南大陸の関税率は高すぎるわ。
低くても五割、高い領地だと二十割なんて場所もあるくらいよ。
ここは、せいぜい二割。
できれば一割、通行税と合わせて二割程度で良いと思うの」
レイが答えた。
レイの話す内容は、アーガスの失政でどうしようもなかったラガロシフォン領を、ティアからのアドバイスに従って立て直した経験に依っている。
目先に転がる安易な収入増に目が眩み、商人の流入を止めてしまっては本末転倒だ。関税や通行税を低い税率に抑え、活発な商業活動を促進し、売上税や所得税で税収を上げた方が、結果的に増収に繋がることをレイは経験から知っていた。

「私は軍にも期待しているの。
千人以上の購買力は馬鹿にできないわ。
最初は私たちの懐内でおカネが回るだけでしょう。
でも、北の大地の生産力が上がって、それから北の民が商売を覚えて、私たちを通さず仕入れができるようになれば、おカネは北の民たちに落ちるようになる。

いずれは私たちも南大陸から食料を買うんじゃなくて、北の民たちから買えるようになってほしいのよ」
レイの言葉をティアは頷きながら聞いていた。

「ティア、ありがとう。
あなたがいろいろ教えてくれたから」
ティアを見たレイが小さく呟く。

「え？
いや、そんな、ただ思ったことを口にしてただけだから、あたしは」
ティアが照れたように取り繕う。

以前、ティアは、魔獣としてではなく、性の対象という女としてでもない、一人の人間として認められたことが嬉しかったと言っていた。だが、それはティアが人間として認められたということではなく、ティアという一個の生物の存在価値を認められたということだった。その意義に気付いた今、それがティアを突き動かす原動力となっている。
本能の赴くままに生きていた頃とは違い、一人の男を愛してしまったとき以来、人に仇成すだけの存在である魔獣に存在価値があるなど、ティアは思ってもみなかった。それ故、ラミアという魔獣であることを隠して生きている。
アービィに魔獣の未来を託していたティアだが、自分もその未来を切り開いていることに、ティアはようやく気付き始めていた。

そこへ軍議から解放されたアービィとルム、プラボックとバードンが入ってきた。
最北の蛮族への備えにこの四人は欠かせないが、北大陸経営にも

欠かせない存在だ。おおまかな流れを掻い摘んでティアが説明し、交易や観光事業の話が始まった。

「アービィ、異世界にも燃える石とか水はあったんでしょ？どんな使い方してたの？」

ルティはアービィが部屋に入ってきたのを見ると、興味津々という表情で聞いた。

「燃える石も水も、一番の使い方は燃料だね。馬車の馬がいらなかったり、船を走らせたり、空を飛ぶ乗り物もあったよ。

それから、燃える水からは、いろんな物が作られてた。例えば、丈夫で肌触りがいい布とか、ガラスみたいなものとか」

アービィは思いつくままに話した。

「じゃあ、それ全部作れる？」

瞳を輝かせたレイが聞いた。

「うん、無理。

僕はそっち専門じゃないから。

それに、この世界にある鉄じゃ強度が足りないし、足りない薬とかがまだ多すぎるんだ。

多分だけど、あと四、五百年後だよ、燃える水を燃料以外に使えるようになるのは」

あっさりとアービィは言った。

アービィは、最低限の化学や物理の知識はあったが、工業系の知識については皆無に等しい。イメージで蒸気機関の仕組みは解っているが、図面を引けるわけでも、図面があっても組み上げられるわけでもなかった。

それにこの世界の冶金技術では、充分な強度を持った鉄を作ることはまだ無理だ。
まずは、高火力を得られる石炭による製鉄技術を進化させなければ、もしアービィが知識や技術を持っていたとしても、材料が手に入らない。未来の技術で文明が一気に進歩するなど、アービィにはどう考えてもあり得ない話でしかない。

「なんだ、つまらない。
じゃあ、今なら何に使えるの？」
ルティが面白くなさそうに言う。

「当面は、燃料だね。
薪より、炭より効率が良いよ。
それから冶金にはすごく役に立つ。
あとは料理。
ラガロシフォンで作ったピッツァとか、炒め物がもっと美味くできるかな。
温泉がなくても温かい風呂も沸かせるしね。
燃える水は灯りにも使えるよ。
火事には注意しないと危ないけどね」
アービィは考えつつ言った。

この世界でも石炭は、ストラーで無煙炭が産出し、ビースマックやインダミトで製鉄や暖房の燃料として利用されていた。
だが、その産出量はごく少量で、広範な利用法が確立しているわけではなかった。いきなりプラスチック製品や内燃機関を作れるほど、知見も技術も蓄積がない。アービィもたいした知識を持っているわけではないので、ヒントくらいしか出すことはできなかった。
それでも蒸気機関のヒントをビースマックの職人たちに提示すれば、そう遠くない未来に実用化に漕ぎ着けられるのでは、という期

待はあった。

「例えばさ、今風車とか水車で水を汲み上げたりしてるでしょ。それを動かすために、燃える石を使うんだ。お湯を沸かすと湯気が出るよね。鍋だと、お湯の表面全体から、湯気が立ち上るでしょ。それをね、先が窄まって小さな穴を開けた蓋から湯気を出すと、すごい勢いになるんだよ。ヤカンだと湯気の勢いってすごいでしょ。その勢いで風車を回せば、ね。出た湯気をまた鍋に戻せるようにすれば、水を足す必要も少ないから。これができれば、いろんなことに応用できるんだ」

アービィは蒸気機関の概念だけを伝えた。

もちろん、これだけで動力機関を完成できるとは思っていない。

「面白そうだな、それは。ビースマックからの入植者がいれば、北の大地の、特許とかいったか、それにできるんじゃないか？」

ランケオラータがアービィに言う。

「そうですね。ただ、かなり複雑な仕組みですから、ビースマックに開発を依頼した方が早いと思います。僕のいた世界でこれを考えついた人は、不世出の大天才と言われた人です。その人ですら、実用化までは一人では無理でした。ビースマックの職人集団が大挙して移住してくれるなら、あるいは北の大地だけでも開発できるかも知れません。

でも、それはかなり望み薄でしょうね」
北の民の利益を優先するなら独自開発だが、知見も技術の蓄積もまだほとんどない。
世界全体の進歩を優先するなら、ビースマックに開発を依頼した方が圧倒的に早いだろう。
アービィはそう考えていた。

「それよりも、燃える石や鉄、金銀銅の採掘道具、農耕機具の改良の方が先です」
アービィは言った。
犁（すき・プラウ）はこの世界でも発明されており、ストラーでは改良を重ね鉄製の良質な物へと進化していた。北の大地でも独自に発明され、進化の収斂によって南大陸で普及しているものと、ほとんど変わらない形の物が使用されている。鍬や鋤、スコップ、ツルハシにしても同様だった。
しかし、南大陸との決定的な違いは、その材料にあった。南大陸では鉄製の物がすでに一般化していたが、北の大地では絶え間ない戦乱のせいで鉄は武器へと優先的に利用され、農機具へはほとんど利用されていなかった。

ランケオラータは、農機具を南大陸から買い込めばいいと考えていたが、アービィは違った考えを提示した。
武具こそ南大陸から買えばよい。今後、最北の蛮族以外が、南大陸に弓引くことはないという証明にも繋がる、と言ったのだった。
もし、北の民が南大陸との戦を企むなら、武具を禁輸してしまえばよい。魔獣や野盗を防ぐためであれば、武具は買い込むだけで充分とアービィは言った。もちろん、独自開発の継続は技術の発展に繋がるため、これは奨励するべきとも付け加えている。

だが、今は農耕機具や採掘器具の開発や大量生産が優先だった。武具ではいくら頑張っても食料は作り出せないからだ。精霊神官たちは、南大陸から農具も持ち込んできている。鉄製農具の効率の良さは、既に北の民も気付いており、早くもそれらを手本とした模倣品が作られていた。

神官や義勇兵の中には鍛冶の技術を持つ者もおり、石炭を利用した製鉄も始められるだろう。そうなれば、その鉄を利用した採掘道具の改良も始まり、北の大地の生産力は、急速に伸び始めることは間違いない。

この冬は、雪に怯えるだけの冬でなくなる。

ルティは、アービィが言った蒸気の現実的な利用方法や、石炭を利用した効率の良い暖房を考えている。

ティアは、最北の蛮族もこの流れに乗ればいいものをと思っている。

次の春には、北の大地奥深くに足を延ばし、最北の蛮族と接触を持ってみよう。アービィはそう考えていた。

第７０話

北の大地の短い夏が終わり、季節は急速に秋から冬へと移行する頃、最北の蛮族を統べるグレシオフィは、焦燥感にも似た想いに包まれていた。

戦略にいくつかの齟齬が見られている。こんなはずではなかったとの思いが強い。

中央の民が山脈の民を蹂躙しかけたところまでは、グレシオフィの敷いた路線通りだった。その期に乗じて山脈地帯に不死者の群れを送り込み、一気に中央と山脈を我が物とするはずだった。

だが、中央の制圧が不完全で不死者の拠点が足りず、山脈まで不死者を送り込むことができなかった。そのうえ、ターバを拠点とする中央の民に阻害され、それ以上の拠点構築が進んでいない。

確かに不死者たちは通常の武器で傷付けることは適わないが、不完全であるために火に対する抗堪性が低かった。幾度かの戦闘でそれに気付いたターバの民は、新たに構築された不死者の拠点を日中に魔法陣を崩したうえで焼き払うという手段で抵抗を続けている。

そして、合成魔獣の生産が遅々として進んでいない。人間を原料としたサイクロプスのような魔獣は、それほど時間も掛からず生産できていたが、それ以上に強力で操りやすいキマイラやマンティコアのような魔獣は、それぞれ材料となる生物に不足をきたし、まだ数十体しか生産できていなかった。コッカトリスやバジリスクといった合成魔獣もいるにはいたが、知性が低すぎて充分な調教ができず前線に投入するには危険が伴う。

何故なら、術者から離れすぎると操縦が難しくなり、戦場のような混沌の中で一旦術者の支配下を離れてしまったものは制御不能になり、敵味方関係なく襲い掛かるという重大な欠点を持っていたか

らだった。そのうえ、コッカトリスとバジリスクの持つ石化能力は確かに強力だが、生物としての強靭さはそれほど高くない。

当初は不死者の拠点を徐々に山脈近くに構築し、移転呪文で山脈に送り込むはずだった。そして尺取虫が進むように、一足飛びに平野部に雪崩込み、ここを占領した後は南大陸を責め滅ぼすだけの戦力を蓄える。それが、グレシオフィが描いた戦略だった。

だが、合成魔獣を人狼に一度殺し尽くされたのが響いている。

現状では不死者の拠点三ヶ所の防備で精一杯だった。以前であれば移転呪文で南大陸まで跳び、魔獣の材料となる動物を南方から集めることもできていたが、平野部の警戒が厳しくなって以来ここを抜くことは困難になっていた。

移転呪文は、跳ぶ先の明確なイメージを脳裏に描くことが必要で、中途半端なイメージではどこに跳ぶか分からない。下手をすれば時限の狭間に弾き飛ばされ、二度とこの世界に戻れなくなってしまうかもしれなかった。そのためイメージしやすい地形や集落を目標に跳んでいたため、途中いくつかの集落周辺に出現してしまうので、平野の民の目に触れる可能性が高かった。

さらには最北の蛮族の中にも、不死者への転生を拒んだ部族もある。

全てを不死者に転生させてしまっては、日中グレシオフィを守る盾がなくなってしまう。日光を恐れる必要のない、グレシオフィと同等の力を持つ完全な不死者ばかりにしては、これを従わせることも多大な労力を必要とする。従って、完全な不死者は自分一人で良いとグレシオフィは考えている。そして、自らに従順な部族からは望む者たちを、服従を拒む部族はほぼ強制的に、不完全な不死者へと転生させていた。

不死者と生者を比較した際、動きの素早さを除いて不死者が全ての身体能力において勝っている。服従を拒む部族に対しては、この圧倒的な力を以って反乱を抑えていたが、日中に不死者の拠点を襲われては簡単に殲滅されてしまう。このため従順な部族から不死者の拠点守備に、生者を残しておく必要もあった。

問題は、グレシオフィに服従せず、不死者への転生も拒み続けている部族だった。

その人数や集落の数は少ないとはいえ、一気にこれらを不死者に転生させることは不可能だ。転生邪法の魔法陣で集落を囲もうにも、既に不服従の集落を魔法陣で転生させていたことが知られていた。彼らも必死に防戦に勤め、未だ全てを陥落させていたわけではない。もちろん、不死者の拠点を突かせることもグレシオフィは防いでおり、お互いに一進一退の攻防が続いていた。

これらの問題を孕みつつも、中央の集落を一つずつ落してはいたが、ターバを中心にした集落群を落とし切るまでには至っていない。

グレシオフィの軍勢は緒戦こそ連戦連勝だったが、不死者の弱点に気付かれてからは苦戦が続いている。だが、食料の補給を必要とせず、日光こそ弱点となってはいたが身体を休め疲れを取るための休息を必要としない不死者と、食料も休息も必要とする生者とでは、戦が恒膠着状態に陥ればどちらが有利か考えるまでもなかった。

山脈地帯を通して食料の補給は細々と続けられていたが、平野の民たちに中央に残った民の腹を完全に満たすほどの食料の余裕はまだなかった。輸送手段に馬車を持ち込んでいるとはいえ、多くの戦略物資を抱えて動きの鈍い補給部隊は、不死者たちや合成魔獣の群れにとって格好の標的となっていた。

補給作戦に従事する北大陸連隊の苦闘は無駄ではなかったが、最北の蛮族と中央の民の境界線は、じわじわと南下している。

厳冬期になり、完全に雪に閉ざされる時期になってしまえば、補給は困難だ。しかし、いかに不死者や合成魔獣といえど、雪という物理的な障害を無視できるものではなかった。互いに雪が全てを覆い尽くす前に、少しでも前線を推し進めようと、躍起になって苦しい戦いを繰り広げていた。

「まずいな。
いよいよ中央に残ったあなたの同胞たちを救い出さなければならない」
ルムが苦渋に顔をしかめて言った。
山脈に哨戒部隊が展開を終え、補給部隊も南大陸との往復を始めてから三十日ほどが過ぎていた。

「だが、彼らがいなくなれば、中央は不死者で溢れ返る。
まだ、彼らには踏ん張ってもらわなければ困る」
ルム以上に顔を歪めたプラボックが、言葉を絞り出した。

「それは承知のうえだ。
だが、彼らを見捨てた指導者に、民が付いてくると思うか？」
ルムはプラボックに決断を求める。

ターバを中心とした集落は、最北の蛮族の喉下に突きつけられた剣にも例えられる。これを放棄することは、中央を完全に不死者の庭にすることに他ならなかった。だが、ルムにしてみれば、彼らを捨て駒として使い潰すなど、思いもよらないことだった。そんなことをしてしまっては、ようやく信頼関係を築きつつある中央の民との間に、再度亀裂を生じかねさせない。プラボックにしても同胞を見捨てたとあっては、他の中央の民から指導者として見限られてし

まうかもしれないという危惧がある。南大陸に尻尾を振り、自分は安全圏に篭って仲間を見捨てたなど、指揮官にあるまじき振る舞いだと断じられても仕方なかった。

戦略上、大の虫を活かすために小の虫を殺さねばならないときは確かにあるが、それは今ではないとルムは考えていた。もちろん、非情に徹しきれない自分たちがいることを、理解したうえのことだ。

「解っている。

解っているが。

何故、我らが山脈を聖域化できていると思う？

もし、ターバを失うことになれば、容易に山脈の麓に不死者の拠点ができる。

そうなれば、山脈は脆い。

退かせるわけには、いかん」

プラボックは血を吐くような思いで言った。

今のところ、山脈に築いた拠点から一日の行程に、不死者の拠点は作らせていない。もし、一日の圏内に拠点を築かれてしまえば、合成魔獣と不死者が同時に山脈に雪崩れ込む。

「この戦乱が我らの勝利で終わったなら、俺は喜んで裁きを受けよう。

ターバを中心とした民たちの、な」

プラボックの気迫に圧倒され、ルムは返す言葉がなかった。

「ルム、ほんの少し前のことだが、お前と争っていた頃は幸せだったな。

いや、中央の民同士が争っていた頃と、言い直そう。

あの頃は、身内のことだけ考えていれば、それだけで良かった。

今は、家族の仇の身すら案じねばならん。

民を治めるということが、こんなに恐ろしいものとは、思いもよらなかった」
プラボックが苦しい胸の内を開かす。
「全員が、集落を枕に討ち死にしたいと、思っているわけではなかろう？
子供たちや女たち、年老いた者たちだけでも逃せんか？」
ルムは指導者の面子など気にしていない。
それではいけないことも承知で、彼らを見捨てることに抵抗を感じていた。
「ルム、お前の思いはよく解るし、昨日まで敵だった我らが同胞を思い計ってくれる気持ちはありがたく思う。
だが、何故彼らがあの地に留まっているかも、考えて欲しい。
渡したくないのだ。
互いに力の限りを尽くし、力及ばず地を追われるならば、それも運命と受け入れよう。
しかしだ、最北の蛮族どもは、奴らの同胞どころか、我らが同胞の命すら弄んだ。
そして、同胞相討つ。
これでは引き下がれん」
退かせられるものなら退かせたい、これかプラボックの本心だが、中央に残ろうとする彼らの気持ちも痛いほど解っていた。
ルムは我が身に翻って考えれば、それはその通りだと納得できる部分がある。
「しかし、このまま手を拱いていても、被害ばかりが増えるだけだ。
俺たちだけで話し合っていても埒が明かん。
ランキーやアービィ殿にも意見を聞こう」
ルムはそれでも救出可能な人間だけでも救うべきと思っている。

彼らなら、一も二もなく救出するというだろう。
それはルムもプラボックも分かっていた。

「そうだな。
全体の戦略に関ることだ。
彼らの意見も入れねばなるまい」
プラボックは同意した。
仮に、中央に残った民を切り捨てることを認めさせるにせよ、その後の戦略に影響がないわけではない。それを踏まえて以後の戦略を練らなければならないからだ。

ランケオラータとアービィが呼ばれ、再度中央の民救出に付いて意見が交わされた。

「降伏を認められる状況であれば、中央に残しておいても良いと思うんです。
でも、あの敵に降伏することは、皆殺しと同義。
いえ、それ以上に敵に兵力を、不死者の軍を作らせるだけです。
これでは、降伏などできるはずもないというのが、残っている方々の考えでもあるのではないでしょうか」
アービィは決めかねている。
救い出すにも、援助を続けるにも、今のままでは兵力が足りなすぎる。

「俺は、残すべきだと考える。
非情と取られるかもしれんが、中央に打ち込まれた楔として、最大限利用せねばならない。
後でいかなる誹りを受けようと、ターバを失うわけにはいかん。

その代わり、これを全力で支える。
幸い、春からの畑の改良や、神官殿たちの労のお陰でもあり、食料の生産能力はかなり上がっている。
それに、街道の舗装は途上とはいえ、南大陸からの輸送も今のところ順調だ」
ランケオラータは北大隊連隊長や幕僚から、時間がある限り軍事についてのレクチャーを受けている。
そのせいか、最近考え方が軍人に近くなってはいるが、素人の思い付きでもなくなってきた。

南大陸からの物資輸送も軌道に乗り始め、冬が訪れる前にかなりの物資を備蓄することはできそうだった。それを必要量中央に振り向ける。多少平野の食料が不足気味となるが、それでも前の冬よりは遥かにマシな越冬ができそうな見積りだった。

「確かに、今ここで退くことは、山脈の防衛体制に大きな不安が出ることは解っている。
それに、プラボック殿が言うように、父祖の地を離れ難いということも。
だが、非戦闘員まで残しておく道理はあるまい？」
ルムは、せめて戦闘に携らない、無力な民だけでも救出できないかと言い募った。

「それも解るんだが、ルム。
戦闘は戦士の仕事だが、戦とは総力戦なのだよ。
戦士のみで行うことはできない。
後方の備えが全くなくなっては、戦士は戦えんぞ」
プラボックが言った。

補給を含め、傷ついた戦士の治療や回復のための施設や人員、武

具の補修や増産、数え上げれば切りがないほど、直戦闘以外にも戦争遂行のためには人員が必要だった。それこそささくれ立った戦士の心を癒すための家庭や、恋人、それらを持たない者たちのための慰安施設としての娼館まで。形はどうあれ、非戦闘員だからといって戦争に参加していないわけではないのだ。そして、そのための人員はモノを飲み食いしないというわけではない。

「じゃあ、こういうのではいかがですか？
戦闘行為に耐えられない年配者や子供たちは、半強制的に平野部へ移住。
後方支援に就く女性や年配者、若輩者は希望者だけ移住する。
少なくとも、確固たる意志を持って戦闘に参加する者、支援する者は残っていただきましょう。
言い方は悪いのですが、ターバや中央で取り残された集落にいると、足手纏いになるような無力な方々には、残る人たちに安心していただくためにも平野に避難していただく。
これでどうでしょうか？」
アービィが折衷案を出した。

「アービィ、素晴らしい案だ。
と言いたいが、ターバだけでも無力な者たちが数百人はいるんだ。
中には自力で歩けない者だっている。
北大陸連隊の総力が千二百。
山脈の哨戒部隊と補給部隊全てを投入して、千二百だぞ。
とてもではないが守り切れん。
そして、何度もやれるほど余裕もない」
ランケオラータが残念そうな面持ちで言った。

「ですが、ランケオラータ様。
冬になれば補給が滞ることは判り切ったことです。

対して、敵は補給など必要なく、厳冬期でも多少雪に阻まれるとはいえ、自由に動くことができます。
そのうえ、冬は夜が長い。
今までより攻撃圏が広がり、攻撃できる時間も長くなります。
雪に閉ざされる前に全員を避難させないと、この冬が開けたときにはターバが不死者の集落になっていたなんてことになりかねません」
アービィが最も不安な点を突いた。

誰もが解っていた。
それ故に、石畳の舗装を後回しにしてでも、ターバへの補給を強行していた。補給自体は兵たちの努力により滞ることはなかったが、舗装作業は遅々として進んでいない。だが、ターバが自力での食料調達が難しくなっている以上、最優先はターバへの補給だった。数が少ないとはいえ合成魔獣がうろつき始めた中央は、不死者が夜しか行動できないとはいえ合成魔獣がうろつき始めた中央は、不死者が夜しか行動できないとはいっても安全な地ではなかった。
しかし、それを承知のうえでターバには踏ん張って欲しかった。
紛糾した話し合いは結局妥協点の擦り合わせに終始し、ターバへの補給部隊が少数の無力な人々を、希望者のみ連れ戻るということで落ち着いていた。

この時点で、パシュースがウジェチ・スグタ要塞の兵力を北の大地に送る提案は、駐在武官だけではなく各国からも賛意を得ており、出師準備を急ピッチで整えていることを、アービィを始めとした北の大地にいる者たちは、まだ知らされていない。

現在、ウジェチ・スグタ要塞には、南大陸四ヶ国からそれぞれ一個師団規模の軍勢が常駐している。近衛師団が二個大隊を基幹とした二個連隊で構成されていることに比べ、それぞれ四個大隊を基幹

とする四個連隊を擁し、総兵力は四万に近い。当初は国民感情を考慮して、ラシアスの軍だけはウジェチ・スグタに残る予定だった。しかし、要塞司令官ラルンクルスはこれを北の民への見方を変える好機と捉え、ラシアス軍の派遣も決定した。

各国師団四個連隊を一つは北の大地最前線へ、一つは補給部隊として、一つは万が一に備えた要塞防備、残りの一つは休養とローテーションを組んで対応することに決していた。国単位でローテーションを組んだ方が連携は取りやすいかと思われたが、現在北の軍に展開している軍はインダミト貴族の私兵だ。どのグループにもインダミト国軍が入っていた方が、なにかと都合が良いと判断されていた。また、ラシアス国軍が万が一突出やサボタージュしないとも限らない。その抑えとなるように連合軍である方が安心できるという点もあった。

既に常時臨戦態勢にある要塞では、内示を受けてから数日で軍の出師準備そのものは完了していた。だが、約四万名分の武具に精霊の祝福法儀式を施すという作業は、それなりの日数が必要であり、先発する師団から火の神殿へ行くことになった。その先発師団が火の神殿からウジェチ・スグタ要塞に戻るまでには、出師準備完了から四十日を必要としていた。

この後も急ぎ残りの師団の武具に祝福法儀式を施す必要があったので、地水風の神殿から神官を呼び集め、それぞれの出身国の精霊から祝福を受けることで、火の神殿に一極集中していた負担を減らす手筈も整っていた。第三陣が火の神殿を発つ頃、先発師団は要塞総指揮官ラルンクルスの見送りで、地峡を越えようとしている。

南大陸軍出陣を知らせる早馬が、軍の行進に先立ちパーカホへと駆け始めた。

秋は足早に過ぎ去ろうとしている。それに伴い、朝晩の冷え込み

が厳しくなってきた。
　冬の到来を目前に控えた今も中央の民の避難を進められず、アービィたちは全身をとろ火で炙られるような焦燥感に包まれている。補給部隊が何度も非戦闘員の避難を勧めていたが、ターバの民たちの意志は固く、誰一人として集落を捨てようとはしなかった。それでも乳飲み子や年端も行かない子供たちを抱えた母親や、怪我や病魔に冒され戦闘に参加できない者たちは、半強制的に補給部隊に委ねられ、平野部へと移り住んでいる。
　当初、怨敵に背を見せるなど卑怯者の振る舞いと、嬰児の避難にすら難色を示す者が見られたターバの民も、食料の消費を抑え冬季における長期持久態勢を築くためと言われ、徐々にではあるが理解を得られるようになっていた。

　季節の移ろいに伴って夜が長くなるに従い、足の遅い者を連れた行軍は危険度を増していた。夏であれば日没前に余裕を持って防護結界を施した宿営地に辿り着くことができていたが、最近では日没からしばらくしないと到達できなくなっている。補給部隊の兵たちだけならば、強行軍で日中に帰り着くことも可能だが、自力で歩けない者を連れていては無理な相談だ。
　宿営地を増やそうにもその維持管理には人手が必要になり、ランケオラータやプラボックが掌握している兵力では、現状維持が精一杯の状況だった。

　ウジェチ・スグタ要塞から南大陸連合軍が出陣した日も、アービィ、ランケオラータ、プラボック、そしてルムの四人によるターバ救援の軍議が行われていた。

「僕が行きます」
　アービィが短く宣言した。

「一人でか？
それは危険過ぎる。
今さっき、プラボック殿とも相談したのだが、南大陸に増援を求めようということになった。
新たな軍が到着すれば、一気に劣性を挽回できると思うが」
ランケオラータが止める。

「いえ、独りではなく、一頭で。
ターバより手前にある、不死者の拠点を潰してきます。
獣化していれば、僕は二、三十日くらい食べなくても平気です。
水さえあれば。
増援が来るなら、なおさら先に地均ししておくべきです。
もし、大規模な派兵があるなら、少なくともターバまでを聖域化して、ターバを最前線にする。
今いる程度の派兵であっても、敵拠点の排除は結果的に一時的なものであっても、宿営地の増設時に妨害を排除できます」
アービィもこれが場当たり的な対応で、南大陸の国家が動くことを前提の希望的観測であることは、充分すぎるほど理解している。
それに、前線を広げることは、自分でも否定していた戦略だ。補給線が伸び、そこが弱点になる。
だが、合成魔獣に守られた不死者たちの拠点が、ターバより山脈寄りにあることは都合が悪い。アービィが自ら戒めていた旧日本海軍の島嶼戦と、同じ様相を呈してしまっていた。

敵が新たに築こうとした不死者の拠点は、ターバの民がことごとく潰していたが、合成魔獣が守っている初期からの三拠点は手付かずのままになっている。新たな拠点を作らせていない以上、一度潰せば二度と作らせずに済みそうなことは予想できた。
前線は伸ばさず、ターバまでを聖域化することは可能かもしれな

かった。

「冗談じゃないわ！
アービィ、あんた独りで行かせられるわけないじゃないのっ！」
鬼神すら脅えさせそうな表情のルティが乱入してきた。
たまたまランケオラータに用があって来たのだが、そこでアービィが言い出したことを聞き咎めたのだった。

「いや、だって、ほら……
ね？」
アービィがしどろもどろになるが、ルティの剣幕は収まらない。

「朝から何か考え込んでいるかと思ったら、あんたはっ！
どういうことよ、一頭ってっ！
あたしはも、一緒に行く。
あんただけ危ない目――」

「ルティ、落ち着いて。
この話の要目は、僕なら暫くは食料が要らないってことなんだよ。
ルティの気持ちは嬉しいし、一緒に行きたい。
でも、どこまで行くか解らないし、食べ物があるかも解らない。
だから――」
「あたしが邪魔なのっ！？」
ルティがアービィの言葉を遮り叫ぶ。

「うん」
少し考え、アービィが答えた。
アービィはルティの身を案じての発言だったが、ルティにしてみればアービィと出会って初めての拒絶だった。

「どこか屋根のあるところを、拠点にできるわけじゃないんだ。
ターバにも立ち寄れない。
途中の宿営地に着替えを置いたら、そのままだよ。
ルティが来てくれても、何もしてもらえないし。
それよりルティはレイのお手伝いがあるでしょ？」
言葉を失うルティにアービィが畳みかける。

獣化した状態でターバを拠点とすることはできない。
遊撃戦になる以上、拠点自体築いているわけには行かなかった。
確かにルティはレイの補佐として、重要な位置にいた。そうそう長期間、ここを空けるわけにはいかない立場だ。さらに、秋も深まり行くこの時期、管理された畑以外から安定して食料を求めることは、既に困難になっている。

「解ったわよ。
待ってる。
その代わり、行きっぱなしじゃなく、時々帰ってきなさい。
行くときは、『移転』で送って上げるから」
長い沈黙の後、ルティは不承不承認めた。

「えっと、それはターバの手前までは、着いてくるってこと？」
『移転』には、移動先の明確なイメージがなくては、どこへ跳んでいくか解らない。
見たこともないところへ、自在に跳べるわけでも、モノを送り込めるわけでもなかった。

「そうよ、それくらい、いいでしょうよ。
ね、ランケオラータ様？」
ルティが雇い主に確認する。

「仕方なかろう。
前線視察という名目で、護衛を付けよう。
まさか帰りはルティ一人、というわけにもいくまい。
以前バードン殿が山脈地帯にもかなりの食料が見込めると言っていたので、雪に閉ざされる前にそれも見てきて欲しい。
アービィ、君一人に負担を掛けるのは心苦しいが、頼む」
ランケオラータはしばし考えた後、断を下した。

「ありがとうございます、ランケオラータ様。
護衛のことなんですが、今回は任務の性格上、僕のことを知っている人じゃないと拙いかと。
神官様と、バードンさんにお願いできませんか？」
アービィがバードンを護衛に指名した。好意的な感情を持つハイスティが南大陸へ去った今、アービィに匹敵する戦闘力を個人で持つものはバードンしかいなかった。

「大丈夫、よね？」
ルティはバードンがアービィに対して、良くない感情を持っていることは知っている。

「うん。
人間に対して剣を振るうような人じゃないよ、あの人は。
だから、僕が人間の姿をしている間は大丈夫。
じゃあ、あとはティアにも話しておこうね」
そう言ってアービィは、ルティを促してルムの家を出た。

バーカホの中心に位置するルムの家の隣に、プラボックの住居とアービィたちの住居が並び、その反対側にランケオラータたちの住居とバードンの住居が並んでいた。

アービィとルティがバードンの住居を訪ねたとき、バードンは笹茶を焙じていた。

「何の用だ、狼。
殺されに来たか？」
そっけなくバードンが言う。

「いや、そうじゃなくて。
護衛をお願いしたいんです」
苦笑いしながらアービィが答えた。

「気は確かか？
何で俺が貴様なんぞの護衛などしなきゃならんのだ？
そちらのお嬢さんの護衛ならともかく」
心底呆れ返ったようにバードンが言い捨てた。

「そうなんですよ。
僕じゃなく、ルティの護衛をお願いしたいんです」
そうしてアービィは長い説明を始めた。

「貴様の発案というのが癪だが、ターバの苦境を救えるなら協力してやる。
その代わり、事が済んだら俺に殺されろ。
このまま逃げようったって、そうはいかんからな。
ま、逃げる心配もなさそうだしな」
バードンは、ルティをちらりと見て答えた。

「お願いできますか？」
ルティが恐る恐る聞く。

「ご安心召されよ。
不死者どもは排除して見せましょう。
ルティ殿には指一本、触れさせませんぞ」
アービィに対する口調とは打って変わって、バードンはルティに答える。
バードン自身、ターバより手前にある不死者の拠点に乗り込む気でいた。彼が信奉する神の定めにまつろわぬ者を、彼は許してはおけなかった。
対人狼の純銀製の剣も、ここ最近で生産量が上がった銀山から材料を分けてもらって鍛えなおしてある。そして、南大陸から派遣されてきた軍に依頼して、精霊の祝福法儀式済みの剣も入手していた。

「ありがとうございます、バードンさん。
これで僕も安心して征くことができます」
アービィが笑顔でバードンに右手を差し出す。
バードンは少し躊躇ってから、勢いよくアービィの右手を張り飛ばした。

アービィが日本での記憶を取り戻してから作り上げた、日本の叡智。
少ない燃料で冬を乗り切るための、至高の暖房装置。

炬燵。

ティアは、この日本が誇る発明を、心行くまで楽しんでいた。
安定して生産できるようになった木炭を利用して、アービィは三人にあてがわれた家に掘り炬燵を作っていた。炭の粉をジャガイモ

から取った澱粉で固め、持続時間の長い炭団に加工していた。炭団は火力こそ弱いが、普通の炭に比べ爆跳することもなく炬燵には適しているため、炭箱に残った炭の粉末を炭団用に大量にストックしていた。

アービィとしては、蜜柑も必需品だと思っていたのだが、生憎この世界に蜜柑と同じ果実はなく、似た物も北の大地まで運ぶ方法がなかった。しかし、そこは知らない者の強みで、蜜柑がないくらいではティアの満足度は下がることはない。

炬燵布団代わりの毛布に首までくるまり、炭団が発する熱を全身で受け止めていたティアは、ふと思いついて獣化した。蛇の下半身で炭団を入れた鉢に巻き付くようにとぐろを巻いてみると、これがなかなか心地よい。いつしかティアはまどろみ始め、夢うつつの状態になっていった。

無意識に動く尻尾の先は、時折痙攣したかのような大きく跳ねる動きも見せていた。

アービィとルティが家に入ろうとした瞬間、絹を裂くような悲鳴が中から響いてきた。

慌てたアービィが家に駆け込み、ルティが後を追う。

必死の形相のティアがラミアの姿のまま這い出してきて、風を捲きながらアービィとルティとすれ違う。そして、呆気に取られる二人に目もくれず、ティアは土間に置いた水瓶に尻尾を突き刺した。

暫く肩で息をしていたが、徐々に落ち着きを取り戻し、尻尾を抱えて『快癒』を唱えた。

我に返って振り返り、涙目のままアービィとルティを見たティアは、きまり悪そうに獣化を解いて言った。

「びっくりさせてごめんなちゃい……

炬燵で獣化したまま居眠りして、尻尾焦がしちゃった」

「アホ蛇……」

ルティが額に指を当て、俯いたまま呟いた。

第７１話

冬が目前に迫り、遠くの山が白く染まり始めた頃、アービィは大荷物を荷馬車に積み込んで、ルティ、ティア、バードンとともにパーカホを出た。

当初、風の神官も同行する予定だったが、冬に備えた畑の準備や家畜小屋の補強、家畜の飼料の保管作業等、すべきことが山積していたためパーカホに残ることになっていた。

どの作業も重要だが、特に神官たちが重要視していたのが秋口に収穫したキャベツ、ハクサイ、ダイコン、ニンジン、ゴボウ、ジャガイモ、ナガイモ、タマネギといった野菜類を土に埋め、冬を通して利用できるようにすることだった。

神官たちの指導で、個人宅では地面に掘った約1？、深さ５０ｃｍ程度の穴に板を敷き、そこに野菜を並べて板を置いて土を被せている。その他に集落の其処此処に、小山のような即席の野菜貯蔵庫が作られていた。それは地面に麦幹を敷き詰め、その上に大量の野菜を積み上げて、周囲を傘のように麦幹で覆い、さらに３０ｃｍ程の土を被せたものだった。

生鮮野菜が極度に不足する厳冬期の北の大地では、ビタミンＣ不足から来る壊血病が脅威となっていた。この時代ではビタミンの存在や、その不足が壊血病を引き起こすことなどは当然知られてはおらず、生野菜の不足が原因という程度の経験的な知識しかなかった。南大陸の寒冷地では普通に行われている野菜の貯蔵技術が、北の大地に初めての安定した越冬をもたらしてくれそうだった。

厳しい冬を越すために、南大陸からは急ピッチで食料を始めとした戦略物資が運び込まれ、パーカホを始めとする平野の集落や、山脈に築いた哨戒拠点に備蓄が進められている。これと平行して山岳

地帯から続く街道の舗装と共に、雪避けの工事も進んでいた。もっとも、この時代の土木技術で完全な雪避けを造れるはずもなく、せいぜい道標になれば良いといった程度のものだったが。それでも厳冬期を除き、雪原を進まねばならない補給部隊にとっては、確実に避難小屋や集落への道を標してくれる心強い目印になるはずだ。

工事に勤しむ兵を横目に、増援を求める伝令は、戻る頃には道標が役に立つようになっているかもしれないという思いを胸に、馬を駆けさせて行った。

「おい、狼。
貴様、まさか俺の前で獣化する気じゃないだろうな？」
バードンが御者台のアービィに声を掛けた。
当面の目的が一致していたため協力はしているが、バードンは目の前で人狼が獣化した際に理性を抑える自信はなかった。

「大丈夫ですよ。
みんなが出て行った後にしますって」
アービィがのんびりとした口調で答えた。
それが、さらにバードンの神経を苛立たせているが、アービィは気付いていなかった。

「蛇、貴様もだ。
万が一にでも、俺の前で獣化してみろ。
狼共々切り刻んでやる」
ティアに対しても睨みつけるような視線しか向けていない。

「はいはい、解ってるわよ。
どうせ、アービィに剣を潰されちゃうくせに」
少々苛立っていたティアが混ぜっ返す。

ティアにしてみれば、人狼の子供たちを救済する機関の設立について、バードンにも話をしてみようと思っていた。しかし、きっかけを作ろうにも取り付く島もないバードンの態度に、苛立ちを感じていた。もちろん、バードンの頑なさは理解していたので、その場の雰囲気を和らげることのできない自分に対する苛立ちも含んでいる。

「口の減らねぇ蛇だな。
何で貴様が付いて来るんだ？
そんなに狼が心配か？
もう喰ったのか？」
バードンがやり返す。

「喰うって……
そんなことしたらルティに殺されるわっ！
なんだったら、あなたを喰ってもいいのよ」
ティアも負けじとやり返す。解ってはいるが、言われたままで黙っている気はない。

それと、今まではなんとなくバードンを避けていたが、今後のことを考えると言いたいとは言ってしまった方が良いとティアは思っていた。

「ふん。
てめぇなんぞに喰い尽くせるもんか。
あんまり、お安く見るんじゃねぇ」
バードンは魔獣如きに口ですら負けたくはなかった。

「じゃあ、試してあげましょうか？

今夜にで――ぴぃっ」
言い返そうとしたティアにルティの拳が飛んだ。
「ぐーで殴ることないでしょ、ぐーでっ！！」
涙目でティアが抗議する。

「黙って聞いてりゃ、あんたは。
何が、試してあげましょうか、よ。
どこでするつもりなの？
今夜は、野営です、野営。
馬車の中でなんか始めたら、叩き出すからね」
拳を震わせてルティが言った。

「バードンさんも。
聖職者じゃないんですか、仮にも
普段はもっと折り目正しいじゃないですか。
どうしたんです、パーカホ出てからおかしいですよ。
アービィとティアが原因だっていうことは解りますけど」
返す刀でバードンも斬り捨てる。

「いや、申し訳ございません。
狼や蛇を前にして、多少取り乱しておりました」
バードンはルティに対しては素直に謝るが、射殺すような視線をティアとアービイに向けていた。

ルティは、バードンはアービィを始めとした人狼に対して異常なまでの敵愾心を抱いているが、人狼と人の間にできた子供のことを悲劇と言っていたとアービィから聞いている。忌まわしい子供と憎まれ、嫌われた結果が、人間に対する憎しみや恨みを生んでいると、バードンは言っていたという。その悲劇の子供が成長し、同じ悲劇

を繰り返す。それを断ち切るというバードンの決意も聞かされていた。当然、そこに両親の仇を討つという怨念が篭っていることも。

この敵情視察の間に、じっくりバードンと話し合っておこう。ルティはそう思っていた。

夕刻に山脈地帯の拠点、イーバに入ったアービィたちは、哨戒任務に就く兵から不死者の集落の位置とその集落から一日行程にある宿営地の位置を確認した。まさか一騎で不死者の集落を討つとは言えないので、緊急の医療品を運ぶという名目にしている。そこではバードンの神父という身分が、目晦ましに役に立った。

夜半までイーバで過ごし、深夜山脈を降りて不死者の集落を目指す。馬車に取り付けられたカンテラは、内面に磨いた鉄板を貼り付けてあり、多少なりとも前方を照らす工夫がなされていた。もちろん、アービィの目には闇の中でもしっかりと障害物が映し出されており、手綱を通して馬に的確に指示を送っている。

不死者は既に集落に戻らなければ結界の外で日光を浴びる時間帯なので、その襲撃を恐れる必要はない。同時に集落の防備に就けられている合成魔獣も、陽が昇るまでには集落に戻っている必要があるため、こちらの襲撃も心配することはなかった。

やがて陽が昇り、アービィが拠点に考えている宿営地が見えてきた。

ちょうどその頃、地峡に続く山岳地帯の麓で増援を求める早馬に行き合った増援を知らせる早馬は、パーカホに到着していた。

到着後すぐランケオラータに面会し、あと数日で一個師団がパーカホに到着することを報告した。

その報告を受け、ランケオラータはルムとプラボックを呼び、北

大陸連隊司令部を召集した。

「パシュース殿下の発案で、ウジェチ・スグタ要塞が開放された。今までそこに配備されていた兵力全てが、北の大地の守りに就くそうだ。

兵力は、四個大隊を基幹とする四個連隊が一個師団で、計四個師団、約四万だ。

まもなく到着する一個師団は山脈の哨戒、後発の一個師団が補給と舗装を含む兵站担当、万が一に備えてウジェチ・スグタにも一個師団が置かれる。

残りの一個師団は休養を兼ねて予備兵力だ。

懸案だった舗装工事はある程度進められよう。

来春の泥濘の時期にも、通行が可能になるかもしれない。

そして何より、これで、ターバを見殺しにすることもない」

ランケオラータが状況を説明し、いちいち伝令将校が補足をする。

「それでは、我々は前線での哨戒を当面の任務といたしましょう。引継ぎが完了次第、連合軍の指揮下に入ります」

北大陸連隊司令部を代表し、戦務参謀が答える。

一領主の私兵ではあるが、インダミト国民である以上、連合軍の中に入りインダミト部隊の指揮下に入るべきと、戦務参謀は考えていた。同時に捕虜として長期間北の大地に留まっていたボルビデュス領の兵や義勇兵を、南大陸に戻す良いチャンスだとも考えている。

もちろん、北の大地で伴侶を得た者は残れば良い。そして残留を希望する者も、それは自由だ。

どれほどの兵が残留を希望するかは実際募ってみなければ判らないが、一個師団相当の兵が補充される以上、一個大隊程度が帰還しても当面問題にはならないだろうと戦務参謀は考えていた。

「話が美味すぎるな。
南大陸は、一体何を考えているんだ？」
プラボックには信じられない思いだった。
他人のために血を流すなど、余程の見返りがなければできるものではない。

「まあ、そう疑心暗鬼になるな。
別に南大陸が、北の大地を征服しようなどと考えているわけでもなかろう。
せいぜい、北の大地を南大陸の市場とする、といったところだろう？」
ルムがプラボックに言い、ランケオラータに同意を求める。

「その通りだ。
だが、ルム、甘く見ないほうが良い。
バイアブランカ王は、北の大地を市場とする気だ。
うかうかしていれば、経済を南大陸に握られてしまうぞ」
ランケオラータが注意を促す。

言うまでもなく、ランケオラータも北の大地を南大陸の市場とすることに反対していない。だが、急速な市場化は貧富の差を生み出し、政情不安の火種となりかねない。平和の内でしか繁栄できないインダミトにとって、北の大地が再度荒れ、南大陸が巻き込まれるようなことがあってはならなかった。決してお人好しでも、戦争を怖がるだけの平和主義でもなかった。

「解っているさ。
そのためにヌミフとオンポックを南大陸に出したんだ。

戦が一段落したら、俺ももう一度行く。
そのときには、商売に明るい者を連れて行くぞ。
せいぜい南大陸を利用させてもらうさ」
ルムは短期間の間に、レイに付いて必死に経済を勉強していた。
経済は、善意だけではどうしようもない魔物のようなものだが、
上手く手懐ければ北の大地は間違いなく富む。

詳細な打ち合わせは軍人同士でしてもらうとして、伝令将校と北大陸連隊司令部を下がらせ、プラボックはアービィたちに思いを馳せた。

「大丈夫かな……
よし、アービィを呼び戻そう。
連合軍と彼が鉢合わせすると拙い」
プラボックが言った。

人狼に対する恐怖は、南大陸の住人の骨の髄まで染み込んでいる。下手にアービィと連合軍が鉢合わせでもしたら、どちらかの血を見ずにはすまないだろう。通常の武器しか持たないのであれば、健脚にものを言わせてアービィが逃げ切るだろうが、祝福法儀式済みの武器を携えているとあってはそうもいかない。遠距離から矢を射掛けることも可能だからだ。おそらく、アービィが反撃することはないと考えられるが、万が一、その場にルティが居合わせて彼女に傷を負わせるようなことでもあれば、巨狼が牙を剥くことは確実だった。未だにハイグロフィラとカトスタイラス領の軍に、アービィの正体を明かしていない理由もそこにある。
折を見て司令部通達で知らせるつもりでいたが、安易に噂を広めるような真似は却って危険と判断し、棚上げのままになっていた。

「伝令を出そう」

ランケオラータが即答する。

ルムと共に南大陸へ戻る際、魔獣の襲撃を受けたときの護衛であれば、アービィの正体を知っている。現在その者たちは山脈で哨戒任務に当たっているため、彼等に書簡を渡せば間に入る伝令兵に余計なことを言わずに済む。

司令部付きの当番兵を呼び、早馬の準備を命じ、人選は司令部に一任した。

ルムの家に来た伝令兵に、ランケオラータはアービィ宛の撤収命令の書簡を書き上げ、厳重な封をして渡す。

兵は命令を復唱したが、書簡の内容を聞くこともせず、早馬を駆って山脈を目指し去っていった。

陽が高いうちに無人の宿営地に荷を置いたアービィは、食料の他に持ってきた物を確認している。

「ねぇ、アービィ、これ、何に使うの？
こんなところに炬燵でも置くつもり？」
ルティが粉末炭の詰まった大袋を指して言った。

３０リットルは入ろうかという大袋に詰められた粉末炭は、湿気を吸わないように厳重に油紙で包まれていた。
その袋が六つ、営舎の床に並べられている。

「うん、バードンさんにも来てもらえることになったから。
急いで詰めてきたんだ。
炬燵用の炭団は別に持ってきたよ。
さすがに、今来てすぐ帰るんじゃ辛いでしょ。

一晩、ゆっくりして行ってよ。
明日、みんなが帰る前に一度戻ってくるから、その時に手伝って欲しいことがあるんだ」
荷物を整理しながらアービィが言った。

一度獣化したら撤収までそのままのつもりでいたが、念のためにレーション数日分を持ってきている。その他にも獣化したまま食えるようにと、干し肉も一樽持ち込んでいた。その他、気休め程度に蒸留酒も二本持ってきている。ランケオラータが考えた麦芽の乾燥に泥炭を利用したものだった。アービィは、その話を聞いたときに、異世界でのスコッチを思い出していた。当然熟成が必要だが、若い酒でも飲んでみようと思ったのだった。

ランケオラータの前では食料がなくても平気とは言っていたが、やはりあるに越したことはない。いざとなれば大型の角を持つ草食獣、カリブーに似た獣を狩れば良いとアービィは考えている。そのまま腸ごと食ってしまえば、完全栄養食に近い。

馬車から分解した炬燵を降ろし、営舎の食堂に使えそうな部屋の中心に火鉢と共に設置する。
炭団に着火し、火鉢に入れてから炬燵布団代わりに毛布を被せ、天板を置いた。

「いい、ティア、もう炬燵で獣化しちゃだめだからね。
バードンさん、蛇が隠れて獣化していたら、構わず刺してやって下さい。
じゃ、ちょっと行ってくるから。
炬燵で待っててね」
アービィは瞬時に獣化し、ティアとバードンが咎める暇もなく営舎を飛び出して行った。

「あの狼、何考えてやがる。
今なら俺が剣を抜く前に噛み殺せただろうに」
呆気に取られたバードンが毒づいた。

「ま、ああいう人ですから、あの狼は。
ところで、炬燵に当たりませんか？」
ルティがアービィの荷物から酒瓶を抜き出して声を掛ける。

ルティにしてみれば、バードンの戦闘力ではアービィを傷付けるなど適わないことは解っている。アービィに対して異常なまでの敵愾心を剥き出しにしているが、人の姿のときに剣を向けていないことも知っていた。そして、自分に対しては敵意を持っていないことも。一度、じっくりと話し合ってみる必要があると、ルティは常々考えていた。今回は、その良い機会と思ったのだった。

「そういうことよ。
いいじゃない、一度じっくりと話してみたかったんだ、あなたと」
ティアもアービィの荷物から、もう一本の酒瓶を抜き出し、営舎の中からグラスを探し出してきて炬燵に潜り込んだ。

ティアと向き合った位置にバードンのグラスを置き、蒸留酒を注ぐ。
不貞腐れたような表情のバードンが炬燵に入り、黙ってグラスを掴み、中の液体を一気に喉に流し込む。それを見たルティが、長い、長い物語を語り始めた。
アービィがフォーミット村の入り口に立っていたこと。八歳から十八歳までの毎日のこと。魔獣と野盗の襲撃。そして旅立ち。
ティアとの出会いからは、ティアも語り始めた。レイやレヴァイストル伯爵との出会い。魔獣が人に初めて認められた喜び。アーガ

スの独走とランケオラータ救出。メディとの出会い。わずか二年足らずの出来事なのに、話すことは山ほどあった。

そして、アービィの本当の正体。

アービィが異世界から連れ去られたという話を、バードンはこのとき初めて聞いた。

「それは、真の……」

言いかけてバードンは言葉を飲み込む。

ルティの目は嘘を言っている目ではない。

頭の中が荒れ狂っていた。

何たる悲劇。何たる理不尽。言葉では言い表せない怒りが渦巻いている。

バードンにとって人狼は、不倶戴天の敵だ。忌むべき怨敵だ。

アービィ個人を憎んでいるのではない。人狼という生物種を憎んでいる。

ルティから伝え聞く話では、アービィがいたという異世界は、この世界より遥かに発達した文明を持ち、空すら人間の行動範囲に収めているという。そして、アービィが暮らしていた国は、戦争どころか人殺しの犯罪すら珍しい、平和な国だという。夜道は明るく、一人歩きに不安もない。

そんな世界から、何の前触れもなく、当然承諾もなく連れ去られ、人狼に封じ込められた。

これ以上、許しがたい暴挙を、バードンは知らない。

もし、ルティと出会わなかったら、アービィという個人がこの世界でどのような人生を送っているか、想像に難くない。忌み嫌われ、

憎まれ、憎み返し、人を恨んで喰らい尽くす、狂気に染まった人生になっているはずだ。

「どうです、これでアービィが危険な人狼ではないということは、お解りいただけたと思います。
育つ過程で充分な愛情があれば、人狼といえど、普通の人生を送ることができるんです。
人を喰らおうなどという発想すら抱かず」
まだ語りつくしてはいないが、ルティはそこで物語を終えた。

バードンは言葉が出てこない。
己の価値観が、崩れはしないが変わってしまいそうな、恐怖にも似た感情に囚われていた。

「あなたはアービィに言ったらしいわね。
『親も不幸なら、そんな生まれ方をした子供も不幸だ。
迫害され、呪われ、醜く歪み、人を呪う。
呪われれば呪い返すだろ。
それが次を生み出す。
そんなもの断ち切らなきゃならない』って」
ティアが言った。
バードンは無言で頷く。

「迫害されず、呪われずにいれば、アービィみたいにまっすぐに育つわ。
彼は人を呪っていない。
呪われていなければ、呪い返すこともない。
もっとも、彼が呪うとしたら、この世界に攫った相手か人狼に封じ込めた相手だけど、彼はそれすら呪っていないわ。

だから、あたしは気付いたの。
疎まれて生まれ、捨てられた子供たちも充分な愛情を注げば、歪まない。
それでも断ち切れるのよ」
ティアは、人間と人狼の間に不幸にしてできた子供の受け皿を作りたいという構想を語った。

「あなたの方法が間違っているとは言わない。
人を喰らうことを覚えてしまった人狼は、狩るしかないものね。
でも、その不幸な子供たちがあなたに狩られるまでに、どれほどの不幸の連鎖を作ると思う？
生まれてすぐ引き取って、疎まれたり、憎まれたりせずに育てれば、不幸の芽を生むこともないわ」
黙ったままのバードンにティアは畳み掛けた。

「そんなことを、俺が、この俺が、許すと、思うか？」
一言ずつ、区切りながら、己の信条を確認するかのように、バードンは言葉を絞り出す。
理性ではティアの言うことも理解できていたが、感情が許さなかった。

「人狼が俺の前を歩く。
俺の両親を食い尽くした相手が、俺の目の前を歩くことなど、許せると思うか？
貴様は、人狼の子供を集めて、人に対して軍を起こす気か？」
そんなことになれば、人は滅ぶ。
バードンがいくら奮戦しても、一頭狩る間にどれほどの人間が喰らい尽くされるか、考えるだけでも恐ろしいことだった。そんなことは許せるはずもない。だが、ティアの言うことも理解できたし、

アービィという個人が証明している。

「いいわ、どう思おうと。
あたしは、人に認められたことが嬉しかった。
いらない、いてはいけない存在だと思っていたけど、そんなあたしが認められた。
人狼だって――」

「黙れ。

黙れ、ラミア。
それ以上、言うなら、斬る」

叫ぶでもなく、だが、有無を言わせぬ口調でバードンがティアの言葉を遮った。

「いいえ、黙らない。
斬りたければ斬れば良い。
でも、斬り裂かれる前にこれだけは言わせてもらうわ。
人狼だって、真っ当に生きていれば認められる世界であって欲しいのっ！！」

その瞬間、バードンの剣が奔り、ティアに打ち下ろされた。

あまりの早業にルティは動けずに、息を呑んで見ていることしかできなかった。
ティアは目を閉じることなく、バードンの剣を避けようともしない。

ティアの額に髪一筋ほどの距離で止められた剣は、そのまま振り切られることなくバードンの鞘に収められた。
剣を抜いた際に跳ね上げられた炬燵を直し、散らかったグラスと酒瓶を拾い、三つのグラスになみなみと蒸留酒を注いでそれぞれの

前に置いた。

そのままバードンは無言で飲み始め、それ以降何度話しかけても言葉を発することはなかった。だが、ルティとティアのグラスが空きかけると、無言で蒸留酒を注ぎ足している。ほどなくして二本の酒瓶は空になったが、バードンは自分の荷物から隠してあった酒瓶を抜き出し、それを三つのグラスに注いだ。ルティとティアは、バードンが聞いていること気配で感じ取り、これまでの旅のことをまた話し始めた。

やがて、ティアの呂律が怪しくなり、いつの間にか寝息を立て始める。

「バードンひゃん、手伝っへ。
このまま寝ちゃら風邪引く」
充分呂律が怪しくなったルティがよろめきながら立ち上がった。

バードンは無言で立ちあがり、ティアを抱えて寝室へ運び、作り付けのベッドに横たえて毛布を被せた。
終始、丁寧な振る舞いで、魔獣に対する荒々しさなど感じさせはしなかった。

「ルティ殿、あなたも、もうお休みになったほうがよろしいのでは？
明日は、狼が戻って来るのでしょう？
あの口振りでは、何か私たちにもすることがある様子」
それだけ言うとバードンは別室へ下がり、内側から鍵を閉めた。

翌朝、頭痛に悩まされる二人と、寝不足からか真っ赤な目をした一人は炬燵で朝食を摂っている。
三人とも終始無言で、レーションを温めただけの簡素な朝食を終

えた。決して重苦しくない静かな朝が流れている。

やがて、扉の外に巨獣の気配が感じられ、やや遅れてアービィからの念話が届く。

――みんな、起きてる？　手伝って欲しいことがあるんだ。あと、一緒に来て欲しいんだけど。

ほとんど疲れを感じさせない脳天気な念話だった。

三人が扉を開けると、全身血塗れの巨狼が立っていた。

「どうしたの！？」

ルティが心配そうに訊ねる。

もちろん、その血は合成魔獣の返り血で、巨狼には傷一つ付いていない。

――うん、ちょっと邪魔な魔獣を片付けてきた。不死者もある程度は片付けたんだけど、時間がなくてね。

事も無げに巨狼が答える。

昨晩、日没と同時に不死者の集落に踊り込んだアービィは、侵入者に気付いたキマイラを瞬時に噛み殺していた。群がる不死者を噛み裂き、飛び掛ってくるマンティコアやサイクロプスの喉笛や腹を牙で食い千切った。巨狼に恐れをなした不死者たちが、日中眠るための堅牢な社に逃げ込むのを確認した巨狼は、集落を逃げ惑う合成魔獣を片っ端から噛み殺していった。一つの集落での殺戮劇が終わると、巨狼は不死者たちが立て篭もる社には目もくれず、次の集落へと駆け去っていった。

同じようにもう一つの集落を叩きのめした巨狼が、もう一つ残された集落へ向かおうとしたときに朝が訪れ、巨狼はルティたちが待つ宿営地へと戻ってきたのだった。

「まぁ、よくも軽々と。
あんた一頭いれば軍なんか要らないんじゃないの？」
ルティが呆れながら言う。

――でもさぁ、ドキドキだったんだよ。いつあの白い光が出るか。それで集落の周りの魔法陣壊すのに時間掛かっちゃってさ。本当は三つとも潰す気だったんだけどね。
グレシオフィが魔法陣の異常に気づいたときは、既に一つ目は壊されていた。
いつ二つ目に来るか、残されたどちらに来るかと構えてはいたが、魔法陣の外周から丁寧に削り取っていった巨狼に手を出すことはできなかった。魔法陣の中に入っていれば、何が来たかも分かるし、転生呪法を発動させることもできたが、外側からやられてしまってはどうしようもなかった。

「それで、手伝いって何をすればいいの？」
ティアが頭を抱えつつ聞いた。

――うん、粉末炭の袋を、四つ僕に背負わせて。で、また降ろして欲しいんだ。あと、ちょっと試してみたいことがあるんで、僕は獣化したままね。
バードンがいることは承知でアービィは姿を見せていた。
剣を抜くようであれば、前回同様噛み潰すだけだと思っていたが、今日はバードンの様子がおかしい。

思いつめたような表情のまま、粉末炭の袋を担ぎ出し、それをアービィに背負わせた。剣を抜くことはなかったが、袋を叩き付けるようにアービィの背に乗せ、ロープで括るときには必要以上に締め上げている。

アービィは、痛いやら苦しいやらだったが、とりあえず文句は言わずバードンのするがままに任せていた。

――じゃあ、行こうか。今日は二つ潰しておこう。乗って。時間が勿体無いから。

アービィはそう言って身体を低くし、三人が乗るのを待つ。

暫く考え込んでいたバードンが乗ったところで歩き出し、数歩進んだところから一気に駆け始めた。

巨狼と共に三つの影が動いている。

既に陽は高く登り、初冬の穏やかな日差しが差していた。

集落の中に音はなく、動くものの影もない。そこには凄惨な光景が広がっていた。

喉を食い千切られ、皮一枚でかろうじて首が繋がっているキマイラやマンティコア、腸を撒き散らし苦悶の表情で絶命しているサイクロプスの死体が転がり、胴を真っ二つに切断された不死者がふた握りの灰になって、其処此処に固まっている。地面には合成魔獣のものと思われる血溜まりが点在し、初冬の乾燥した空気に水分を奪われ粘ついた表面にしわが寄っていた。

「よくも、これだけ派手にやったわね。

人を連れてくるんなら、もうちょっと綺麗にしておきなさいよ」

またルティが呆れ顔で言った。

「それで、これをどうすればいいの？」

ティアが炭袋を叩きながら言う。

――あそこに社があるでしょ。あの中に不死者が隠れてるんだ。

扉を叩き壊すから、そしたら炭袋を二つ放り込んで。

アービィが指示を出す。
３０リットルの粉末炭は、それなりの重さになる。
ルティとティアで一つ、バードンが一つ投げ入れることになった。
――いい？　投げ込んだら、すぐ逃げてね。扉の近くだけじゃなく、窓の前も危ないから。となりの建物まで逃げてよ。
アービィは、そう言うや否や、社の扉に頭から突っ込む。
盛大な破壊音と共に扉が内側に弾け飛び、裏側にいた数体の不死者たちが巻き添えで身体を打ち砕かれた。

間髪を入れず、粉末炭の袋が放り込まれ、バードンが、ルティが、ティアが入り口や窓を避けて身を隠す。その間にアービィが『風刃』の詠唱を完了させ、袋を切り裂き粉末炭を宙に舞わせる。続いて『強風』を唱え、宙に舞った粉末炭が社の隅々まで送り込まれ、空間を満たした。アービィが『大炎』を社の中に叩き込んだ瞬間、大爆発が起こり、扉と窓から爆風に煽られた炎が噴出した。
日光を避けて社に身を隠していた不死者たちは、爆発に巻き込まれ灰すら残さず消滅した。

「何だ、何が起きたんだ!?」
『大炎』程度で社の中に潜む不死者全てを、痕跡すら残さず消し去るほどの爆発は起きないはずだ。いかに神父で黒の呪文と無縁とはいえ、バードンにもその程度の呪文の知識はある。今の爆発は『爆炎』の炎すら、遥かに上回っていた。

――粉塵爆発といいます。細かい粉末の可燃物が空間に充満した状態で火を着けると、一粒ずつが燃え上がるんですけど、それが瞬間的に連鎖で全部に火が着いちゃうんですよ。粉末の濃度が薄くても、濃過ぎても爆発しないんですけどね。一瞬で燃えちゃいますから、不死者たちは苦しむこともないと思います。

扉から吹き出した爆風をまともに浴び、煤だらけになった巨狼から念話が届いた。

「恐ろしい威力ね」

呆然としたまま、ティアが呟く。

――爆風の逃げ道がないと、建物全体が吹っ飛んじゃうんだ。だから扉を壊して爆圧の逃げ道を作っておいたんだよ。窓からも抜けるからね。危ないって言ったのはそういうわけ。さ、もう一つ行こうか。

説明しているアービィに、ルティが剣を抜いて近寄った。

「あんたは、なんで、いつも、危ない、真似、ばかり、するのっ！！」

一言ずつ、峰打ちに持ち替えた剣をアービィに打ち下ろす。

――爆発は男のロマンなんだよぉっ！！　ああっ、ごめんなさいっ！！　いやぁっ！！　痛いっ！！

必死に逃げ惑いながら、アービィが謝り、ルティがそれを追い回す。

傍目にはじゃれ合うようにしか見えない巨狼と人間の女を眺めながら、バードンは獣化した人狼を前にして剣を抜いていない自分が信じられなかった。

理性では目の前の巨狼に危険がないことは理解している。しかし、人狼に対する骨身に染み付いた感情が納得していない。同時に、この人狼に対しては、剣を振りかざしてはいけないということも、直感が告げている。

バードンは、自分の感情を持て余していた。

第72話

「どこで、あんな残虐な方法を思い付いたんだ？異世界の魔法か？」

二つ目の集落で、不死者の群れを焼き払った後、バードンがアービィに聞いた。

この世界で、偶発的に起きた粉塵爆発の例はあったが、悪魔や悪霊の仕業とされていた。アービィが暮らしていた異世界のような大規模食品工場や炭坑はまだ発達しておらず、大量に死者を出すほどの悲惨な事故が起きた例はない。そのためか、家庭の台所やパン職人の工房で、不運な偶然の積み重ねから起きてしまった小さな爆発は、死傷者を出すことがあっても原因を深く追求されることもなく、悪魔や悪霊の仕業として片付けられていた。

「あ、知ってました？

僕が異世界人だってこと。

う～ん、魔法じゃないんですよ。

僕のいた世界に、魔法はなかったんですよ。

さっきも言いましたけど、粉の一粒ずつが燃えてるだけなんですけど、大量に一気にいくから爆発しちゃうんです。

僕が異世界で生まれる百年近く前に、小麦粉を大量に作ってる施設でも、そういう事故がありましたし、炭坑でも今やったことと同じことが起きて、どれもかなりの人が死んでるんですよ」

この日にやるべきことを片付けて、人間の姿に戻っていたアービィが解説した。

だが、露天素堀の炭坑しか知らないバードンには、アービィの説明は一部解り難い。

それに気付いたアービィが、異世界での炭坑の歴史から説明し、粉塵爆発の原理と今後の技術発展の途上で予想される事故例を話した。異世界の技術や知恵に感心し、この世界が未発達で野蛮な世界であることを恥じているバードンに、アービィは言う。

「僕がいた世界も、五、六百年前はここと同じでした。

この世界も、あと数百年もすればそうなります。

もちろん僕たちは生きてませんけどね。

もっとも、僕のいた異世界は、今でも貧困や飢餓、戦争が耐えない野蛮な世界です。

僕の国が特別なだけですけどね」

アービィは、最後にそう付け加えた。

傍目には和気藹々とこの世界の技術発展について、意見を戦わせているように見える二人を、ルティとティアは遠くから眺めていた。このとき、バードンの中では人狼への憎しみより、知的好奇心のほうが勝っていたようだった。

「おい、狼。

あとひとつの集落はどうするんだ?

俺たちが帰ったら、あの袋を自力で投げ込むのか?」

バードンは、不死者に対して自分が信仰する神の力が通用しないことを知っていた。だが、だからといって指をくわえている気などさらさらなく、今回は兵士から精霊による祝福法儀式済みの剣を入手している。

アービィ一人に戦わせていては、悪魔狩りの名が泣くとバードンは危機感を覚えていた。今夜は自ら剣を振るい、悪霊を斬り伏せてやると、意気込みを見せていた。

「そうですね、せっかくですからご一緒いただきましょうか。
ひとりでも多くの人に、魔法陣を見てもらって、形とか特徴を掴んでもらった方がよさそうですもんね」
そう答えたアービィは、集落を出ようとする。

「ねぇ、キマイラとかの死体はどうするの？
最初の集落でも、そのままで来ちゃったけど」
ティアがアービィを止めた。

いくら合成魔獣とはいえ、もとは南大陸や北の大地で普通に暮らしていた動物たちだ。屍を晒したまま朽ち果てさせるには忍びないと、ティアは思っていた。このまま放置して疫病の素にでもなってしまったら、それも中央の民にとって厄介な話だ。

「あ、いいの、このままで。
ティアなら気配を感じないかな？
僕たちがいなくなるのを待ってる、狼とか、キツネとか、熊とかの気配
冬篭もり前だからさ、すぐに食い尽くされちゃうよ」
アービィには、さっきから焦ったような気配が感じられていた。
早く消えろ、早く出て行ってくれ、早く喰わせろ、多数の気配はそう語っていた。

「そうか、そうね。
じゃあ、早く出た方がいいか」
ティアは、精神を集中して周囲の気配を読んだ。
食欲と恐怖がない交ぜになった濃厚な気配を、ティアは拾った。

魔獣を恐れる必要なくエサにありつける期待に満ち満ちた感情と、人間と人狼、ラミアへの恐怖。冬を目前に控え、今喰わなければ死

が待っているという恐怖と、周囲にいる獣だけでは到底食いきれないほどの食料を前にした歓喜。そして、早く出て行ってくれという願望。

ティアは、獣たちのために、一刻も早くこの集落を出なければと感じていた。

アービィたちは宿営地に戻るとすぐに、作り付けのベッドに潜り込んだ。

特にアービィは徹夜で、合成魔獣と戦っていたため疲労が深い。アービィのベッドからはすぐに寝息が聞こえ始め、他の三人もそれぞれに場所を選んで眠りの世界へと落ちていった。

打ち合わせはしていないが、深夜に宿営地を発ち、明け方不死者たちが結界を張った社に潜り込む時間を狙って襲撃をかけるということになっている。それまでにこの日の疲れを取り、腹を満たしておかなければならない。バードンが同行してくれたお陰で不死者の集落を潰すという任務は、思ったより早く片が付きそうだった。

深夜、アービィたちは行動を開始した。

獣化したアービィの背に粉末炭を二袋括りつけ、バードン、ルティ、ティアが巨狼に乗って征く。だが、ほとんど無風状態とはいえ、狼の疾走に伴って必然的に発生する強風は、三人の体温を容赦なく奪っていた。冬間近の夜気は冷え込んでいて、ただ立っているだけでも震えが取り付くほどだった。毛皮に守られているうえに疾走によって体温が上昇しているアービィはともかく、背に乗っている三人は堪ったものではない。

「このアホ狼、少しゆっくり歩けぇっ！！」

バードンですら凍えている状況に、ルティがナイフを逆手に持ってアービィの腰の辺りに突き立てる。

当然、人狼の毛皮は純銀の武器や祝福法儀式済みの武器でしか貫くことは適わない。ルティが突き立てたナイフは、ちょっとした作業用の法儀式を施していない物なので、アービィの毛皮に傷一つ付けることはできない。それでもルティが力一杯突き立てたナイフは、巨狼に激痛を感じさせるには充分だった。

――ごめんなさぁいっ！！

狼から情けない念話が返され、疾走からゆっくりとした歩みに変わった。

バードンは人狼の背で揺られながら、深い思考に沈んでいた。

人狼を恨み、憎悪し、それを殺す技を身に付けるために長い時を過ごしてきた。そして、技を身に付けた後は、人狼を殺し、滅し去ることだけに自分の人生を費やしてきた。その自分が、人狼に身を委ねている、このうえない皮肉。いったい、何がどうしたのか、バードンには解らなかった。

スキルウェテリー卿に命じられ、インダミトに恩を売るためにランケオラータを救出に来て以来、人生の方向性が変わってしまったような気がしていた。ランケオラータを南大陸へ連れ戻る際に魔獣の襲撃を受け、絶体絶命の場面をこの人狼に救われている。そのときに純銀の剣を噛み潰され、その気になれば自分の喉を噛み裂くことなど造作もないはずだったのに、この人狼はそれをしなかった。イーバで仮初めの囚われの身として過ごしていたとき、何故かこの人狼が戻ってくることを確信していた。自分が殺そうとしていることを承知で、自分を救うために。そして、今この人狼は、自分を信頼し切っている。仮にバードンがその気になれば、人狼に純銀の剣を突き立てることは造作もない。この状態でそれを防ぐ術は、人狼にはない。だが、バードンは純銀の剣を抜くつもりにはなれなかった。

人狼を憎悪する気持ちに変わりはないはずなのに、今、身を委ね

ている人狼に対しては憎しみを感じなくなっている。狼は器で、中身が異世界から連れ去られた人間だからか。そうに違いないと、バードンは思うことにした。

ティアというラミアが言ったことも、否定できない事実だった。確かに人狼を狩り尽くすことはできないし、一頭狩っている間にも違う人狼による被害は続いている。人狼の寿命は人間と対して変わらないことを考えると、人を喰うことを覚えてしまった人狼を狩ることと、次世代の人狼をまっとうに生きるために教育することは平行してやってみる価値はあるかもしれなかった。だが、自分が人狼を、冷静に教育できるとは思えない。殺しを生業とする、闇に住む自分が表舞台に立つ資格などありはしないと思っていた。

魔獣とは、全てが人を害する存在だとバードンは信じていた。間違いなく、今後ろにいるラミアも、以前は男の精を喰らい尽くし、死に追いやったことはあるはずだ。しかし、今更それを咎めようとは思わなくなっている。それを言い出してしまえば、生きるために他の命を喰らうという点では、人間といえど同じ罪深い存在だからだ。

精を喰らうことを放棄しているラミアを、狩る理由をバードンは失っていた。

やがて、巨狼が歩みを止めたとき、バードンはようやく深い思考の闇から現実に引き戻された。

――バードンさん、これ見てください。

アービィが吻端で地面を指す。

そこにはこの世界で目にすることのないルーン文字と梵字に似ている文字のような、記号のようなものが描かれていた。

――これが集落を円形に取り囲んでいるんです。六ヶ所に鍵とな

る記号があって、その中間に補強する記号が書き足されています。中に入ってしまうと、これを書いた者に僕たちの存在が知られてしまいますので、必ず外側から壊さないといけません。

アービィは、ビースマックの王都シュットガルドで、反乱の首謀者であるプルケール邸に描かれた魔法陣に不用意に入り込み、酷い目に遭ったことを説明した。不死性を元々持つアービィだからこそ無事に済んでいたが、普通の人間があの光に包まれてしまえば、即、不死者へと転生させられてしまう。

――鍵になる記号は、補強記号を壊してからじゃないと、いくらやっても壊れません。記号を壊せば、これを描いた者に僕たちの存在は知れてしまいますが、鍵記号を壊してしまえば手出しはできなくなります。それまでは決して魔法陣の中に入ってはいけません。

そう言ってアービィは補助記号の一つを壊し始める。

――敵も手を拱いて壊されているわけではなく、そろそろ……

補助記号を一つ壊したところでアービィが鼻面を上げ、闇の中を睨み据えた。

バードンがかざしたカンテラに照らされ、四体のキマイラが闇から姿を現した。

周囲に緊張が走り、巨狼が合成魔獣と対峙する。キマイラの背後には、人の背丈の倍はあろうかという一つ目の巨人、三体のサイクロプスが巨大な棍棒を携えて、闇を割って姿を現す。

――魔獣は引き受けます。魔法陣の破壊を。不死者が出てくるかもしれませんから、気をつけて。

そう言うや否や、巨狼の姿が掻き消え、一体のキマイラが倒れ伏す。

三つの首の根元がもげかけ、そこからは噴水のように血が吹き上

がっている。

敵の姿を捉えきれない魔獣が怯んだ隙に、巨狼はサイクロプスの背後に降り立つ。

サイクロプスの肩に前肢を掛けて立ち上がった巨狼の両顎が、巨人の頭を噛み潰した瞬間、巨大な眼球が零れ落ちる。水っぽい衝撃音が響き、次いで岩石が砕けるような、腹の底に響く耳障りな音が辺りに充満し、巨人が崩れ落ちた。仲間の死に激昂した別のサイクロプスが棍棒を振り上げるが、巨狼は突っ込んできたキマイラの三つ首を顎に捕らえ、噛み千切りつつサイクロプスに投げつける。魔獣の死体と巨人が絡み合って倒れたとき、巨狼はもう一頭の魔獣の腹を噛み裂いて腸を撒き散らしていた。

魔獣の断末魔に巨人が怯え背を向け逃亡しようとするが、巨狼はその隙を逃さず背中に牙を打ち込んだ。もがく巨人を助けようと、投げつけられたキマイラの死体を跳ね除けたサイクロプスが、巨狼に背後から棍棒を打ち下ろす。咄嗟に身体を翻し、牙を打ち込んだ巨人を盾に棍棒の一撃を受け止めると、棍棒は巨人の頭を打ち砕いていた。

思わぬ同士討ちに残る巨人がうろたえたとき、巨狼の牙がその巨人の喉を切り裂く。

最後に残ったキマイラが戦意を喪失し逃亡に掛かるが、巨狼は回り込んで立ち塞がり、正面から巨体同士が激突したかに見えた。キマイラは山羊の角を突き立てて突っ込んでいたが、巨狼はそれをかわして三つ首の根元を噛み裂いた。

瞬転の間に勝敗は決し、周囲に血の匂いが充満する。巨狼の勝利を告げる遠吠えが、辺りの空気を震わせた。

アービィが魔獣を叩きのめしていた頃、バードンは不死者の群れに剣を振るっていた。

魔法陣の記号を片っ端から壊すルティとティアに指一本触れさせまいと、人狼を屠るために鍛え抜いた殺しの技術を、遺憾なく発揮していた。当初、純銀の剣を使用してみたが、案の定切る側から傷は塞がり、切断したはずの身体すら元に戻ってしまっていた。

咄嗟に祝福法儀式済みの剣に持ち替え、不死者に対して打ち下ろす。紙を切り裂くかのような手ごたえのなさに呆気に取られるが、不死者は藁のように打ち倒されていった。不死者は、膂力こそ人間を遥かに凌駕するが、動きの鈍さはどうしようもない。相手が捕まらなければいかに膂力に優れようと、そんなものは何の役にも立たない。バードンは軽やかに不死者の腕をかわし、剣を振るい続けていた。

「いくら斬っても、限がない。
いったい何人不死者なんか作りやがったんだ」
バードンが吐き捨てるが、当然どこからも答えはない。
あまりに隔絶した戦闘力の差に、不死者たちはバードンを敬遠し、ルティとティアに攻撃の照準を絞ってきた。

「こっちなら楽勝だと思ってるんでしょうけどね。
そうはいかないのっ！！」
振り向きざまに、ルティは剣を抜き打ちで薙ぎ払う。
腰の辺りで身体を両断された不死者が崩れ落ち、突っ込んできた他の不死者たちの足が止まる。

「効くかなぁ……」
ラミアのティアラを髪に飾り、『透過』を唱えたティアが呟きながら姿を消した。
完全に姿と気配を消され、目標を見失ってうろたえる不死者たちの首を、ティアはいとも簡単に切り落としていく。

――全部は壊さなくてもいいからね。
それぞれの脳裏に巨狼からの念話が届く。
既に魔法陣はその四分の三を破壊され、その役を成さなくなっていた。

東の空が白み始め、不死者たちの動きが慌しくなる。
バードンたちの攻撃を避けるより、陽を浴びる恐怖が先に立ったのか、雪崩を打って結界内にある社へと逃げ去っていく。
やがて陽が昇り始め、逃げ遅れた数体の不死者が風に吹き払われる埃のように崩れ去った。完全に陽が昇り、周囲が明るくなったときには、集落の中に動くものの影は見当たらなくなっていた。

――じゃあ、やるよ。
巨狼と三人が社の前に集まった。
昨日と同じ手順が繰り返され、盛大な爆発音と共にターバを脅かしていた不死者の集落は潰え去った。

アービィたちは宿営地で仮眠を取った後、イーバへの道を辿っていた。
途中で南大陸からの増援と撤収を知らせる早馬と行き会い、全員の顔に安堵の色が浮かんだ。それは役を成さなくなった早馬の伝令将校も同じで、アービィたちが怪我一つなく戻ってきたことに、安堵の表情を浮かべている。
イーバで一泊し、任務の疲れを癒した一行はパーカホへと戻る前に、山脈の資源調査に出かけて行った。

バードンが滞在していたときには気付かなかったが、哨戒任務に付いている山脈の民からの聞き取り調査で貴金属や鉄鉱石の鉱脈の

他、石炭の新しい鉱脈についての情報がもたらされた。
その他に、人があまり踏み込んでいなかった高山地帯をアービィが走り回り、温泉を見つけて帰ってきた。
別行動になっていたアービィが、いつまでたっても戻らないことにやきもきしていたルティに問い詰められ、アービィは温泉に浸かっていたことを白状させられ、しこたま拳を振る舞われていた。

「ちょっと獣化してごらん、アービィ」
その夜、ルティに言われ、アービィは営舎の一室で獣化した。
温泉で魔獣の血を洗い清められたアービィの毛皮は、換毛期だったこともあり、艶やかな冬毛に生え変わっていて、見るからに柔らかそうだった。

「これよ、これ」
ティアがルティを差し置いてアービィの腹に顔を埋める。
脂っ気が抜けたアービィの腹毛は、ふかふかした肌触りで心地よかった。

「ちょっと、待ちなさいって！
これは、あたしのっ！！」
ルティがティアを引き剥がし、アービィの腹に飛び込んだ。

「いいもん、こっちをもらうわよ」
ティアはそのままアービィの尻尾を身体に巻き付ける。

「何をしてるんだ、お前たちは」
バードンが酒瓶を持って入ってくる。
そこでは巨狼が困惑の表情で、女同士の毛皮の奪い合いをなす術

もなく眺めているという、異様な光景が繰り広げられていた。

「まあ、飲め。
とは言っても、その手や口ではグラスは使えんな？」
バードンは側にあった大皿に蒸留酒を注ぐ。
一つ余ったグラスは傍らに置き、残りのグラスに蒸留酒を満たし、毛皮に埋もれるルティとティアに手渡す。

「とりあえずは、貴様を殺すのは止めだ。
異世界から連れ去られ、狼に封じ込められた人間を、人狼として葬り去るのは忍びない。
俺の前を、人の姿を借りた狼が歩くのは我慢ならんが、仕方ない」
そう言って、バードンは憤懣やるかたないという表情でグラスを煽る。

――なんか、前にもこんなことがあった気がする……
アービィは首を伸ばして、大皿の酒を舐め始めた。

ティアは、渡されたグラスを一気に空け、バードンから酒瓶をひったくった。

「今夜は剣を持ってきてないのね」
バードンが丸腰であることを見て取ったティアは、意外そうに言う。

「ああ。
今、剣が必要だと思うか？」
忌々しそうにバードンが答えた。

「そうね、いらないわね。
ようやく、まともにお話ができそうね」
ティアの言葉から、刺々しさが抜けていた。

ティアから見たバードンの行動原理は、明快だった。
人狼狩りは両親の敵討ちを含んでのことだが、他人の幸せや安寧のために自らの命を賭けている。北の大地へ来てからの行動も、北の民を思えばこその部分がほとんどで、バイアブランカ王やランケオラータのように南大陸第一の考えでは決してない。そして、不死者やティアを含めた魔獣への敵愾心も、人々の安寧を思うが故であり、マ教の教義が何にも於いて優先されるなどという原理主義者でもなかった。
教団内での出世や栄耀栄華にも興味を示さず、マ教の教えが説くところの博愛の精神に則り、北の大地でも南大陸にいるときと何ら変わることなく人々に接している。
神父としてのバードンの行動原理は、弱者への奉仕であり、正しく聖職者であった。

この夜、ティアは人間と人狼の間にできた不幸な子供たちの救済について、再度熱く語った。ティアは、それが自分の成すべき仕事であり、使命だと思っている。今まで精を食らい尽くし、死に追いやった男たちへの贖罪でもあった。
人狼の救済は、数年単位の短い期間では、到底できるものではない。それにはラミアの長い寿命が役に立つ。殺されさえしなければ、おそらくティアはあと二、三百年は生きるだろう。その頃には人間と人狼が自然と並び立ち、愛を育むことが当たり前の世の中になってほしい。ちょうど、この目の前でじゃれ合う二人のように。
ティアは、そう話を締め括り、バードンの反応を窺った。

だが、ついにバードンから賛意を示す言葉は聞かれなかった。
それでも、数日前のような拒絶の素振りも見られなかった。無言でグラスを空け続けている。その表情からは読み取れないが、おそらく心の中では理性と感情が激しく葛藤しているのだろうと、ティアは思っている。
不死者の集落を潰しに行く前までに見せていた、アービィへの憎悪とも取れる敵愾心は、今は鳴りを潜めていた。二人が親しく話をすることはないが、巨狼の前に置かれた大皿が空になれば、バードンは黙って酒を注ぎ足していた。

いつの間にか、ルティが巨狼の毛皮に埋もれたまま、寝息を立てていた。
巨狼はルティを起こさないように身動きひとつせず、器用に舌で蒸留酒を静かに舐め取っている。大皿を空にすると小さく鳴いて、バードンにルティの状態を知らせ、目でベッドに連れて行くように訴えた。
やれやれという表情のバードンが大皿に酒を注ぎ足してからルティを抱え、寝室へ連れて行く。ベッドにルティを寝かせ、毛布を被せてから、バードンは飲み直しに戻る。

バードンが戻ってきたとき、既にティアは微睡みかけていた。ルティを運んでいる間に、ティアのグラスに満たされた酒の両が減った形跡はない。
呆れたような表情のバードンを見上げるティアの両目は、今にも閉じられそうになっている。そのままの表情で、バードンは無言で手を差し出した。ティアは思いもよらないバードンの行動に一瞬眠気が飛んだのか、閉じかけていた目を見開いた。
ティアは少し考え、差し出されたバードンの手を握り、引き寄せるように腕に縋って立ち上がる。二人は黙ったまま部屋を出ようと

して、床に伸びている巨狼に視線を送った。巨狼は、バードンとティアに視線を送った後、空になった大皿をもう一度舐め、大きく欠伸をしてから丸くなり、安心したように目を閉じた。

翌朝、山脈を降りる四人には、気の合うパーティという雰囲気こそないものの、以前のようなよそよそしさや刺々しさはなくなっていた。バードンは相変わらず会話に加わることはないが、パーティの中では無口なキャラクターという位置付けに見えている。往きの行程では馬車の中で不機嫌そうにしているだけだったが、今は適宜交代で手綱を握っていた。

「ねぇ、ティア、昨夜さ、バードンさん喰っちゃったの？」

バードンが御者台に上がった隙に、ルティが興味津々に聞いた。

アービィから二人がいい雰囲気だったと聞いて以来、どうしても確かめたかったことだった。

「さぁ、ご想像にお任せするわ。

アービィ、何余計なこと言ったのよ」

ティアは、ルティの追求など、どこ吹く風と言った様相だ。

実際の所は、聖職者として振る舞うバードンは、既に正体を失いかけていたティアを、やっとのことでベッドまで引きずっていき、ティアもなんとか途中で崩れ落ちることなくベッドに潜り込んでいたというだけだった。

マ教は性に関する戒律がそれほど厳しくなく、神父であっても妻帯は認められていたし、独身の神父が娼館に出入りすることは珍しくなかった。バードンも必要に応じて女を買っていたが、正体をなくした女に跨る趣味は持ち合わせていなかった。

だが、ティアは思わせ振りな態度でルティをからかい、バードン

には聞こうにも聞ける雰囲気ではなかったので、ルティの妄想は膨らむ一方だった。

アービィたちがパーカホに戻り、数日が過ぎた頃から、北の大地には本格的な冬が訪れていた。

最初のうちは、毎日雪掻きしていれば大した労力を要することはなかったが、次第に一日のうちに雪掻きに割く労力の割合が増えていく。それでも軍の移動を容易にするため、兵たちは毎日雪掻きに勤しんでいた。結果として、多くの集落や山脈の哨戒拠点の連絡は維持されていたが、それ以上に北の民たちが明るい表情になったことが大きな成果だった。

雪に埋もれ、家の周辺すら歩くこともままならない冬は、セックス以外の楽しみを見出すことは困難で、それが次の夏以降の悲劇を多数生み出していた。

嬰児を捨て、間引く。それ以前に妊娠が判った時点で冷たい水に身を浸し、流産を望む母親が後を絶たなかった。愛する相手の子種を宿すことは喜びでもあるのだが、それは食料の割り当てが減ることも意味している。中には態と妊娠して、食料の割り当てを増やしてから、密かに流産を促すような悪知恵の働く者もいた。だが、多くは祝福と非難がない交ぜになっている雰囲気を敏感に察知し、産むか殺すかを選んでいた。

そして、当然のことだが、産むことを選んだ女は、暫くの間労働力には数えることはできない。

それは、次の冬を乗り越えるための、食料を備蓄するべき労働力の減少を意味している。

本来であれば、この世界でもヒトの妊娠期間を考えると、夏から

秋にかけて作物が多い時期に子が産まれるように、農作業や狩猟ができない冬の間は性交に励むことは間違ってはいない。もっとも、動物の中では例外的に、一年中発情できるようになったヒトにとって、それはどうでもいい理屈にしか過ぎなかったが。

吹雪が続けば暫くは外に出られない日が続くが、約一万の除雪に携わる人手の存在は大きい。その他にも同じ数の補給部隊もいる。さすかに舗装工事は滞っていたが、その分補給任務に振り返られていたので、食糧の不足を来すことはなかった。

北の大地で初めて、明るい表情で過ごせる冬だった。

それでも、良いこと尽くめというわけにはいかない部分もある。北の民に対して良い感情を持っていない、ラシアス兵によるトラブルが頻発していた。さすがに将官たちは、骨の髄まで叩き込まれた軍人精神で、北の民への蔑視や差別を禁じた命令を尊守している。しかし、階級が下がり庶民階級が多くなるに従い、心の底に潜む北の民への感情を隠せない者が増えていた。

目に見えない些細なサボタージュも積み重なれば顕在化し、ラシアス部隊の作業効率は他国の部隊に比べ、明らかに劣っていた。それだけでなく、北の民へのあからさまな悪感情を隠そうともせず、駐屯地周辺の住民との諍いを起こす者が後を絶たなくなっていた。

連合軍司令部は、トラブルを起こした者に対して厳罰を持って臨んでいたが、ラシアス部隊の士気の低下には目を覆わんばかりのものがあった。連合軍全体の名誉に関わると判断した司令部は、ランケオラータに諮り、ラシアス部隊の後送を決定し、ウジェチ・スグタ要塞の勤務に限定せざるを得なかった。

ラシアス部隊の傍若無人な振る舞いに眉を顰めることが多かった他国の部隊にも、ラシアス部隊の後送は悪影響をもたらしている。

ウジェチ・スグタ要塞はラシアス国内の施設であり、そこでの勤務は地元にいることとたいして変わりがない。ウジェチ・スグタ要塞勤務内でのローテーションで、容易に故郷に帰省することが可能だった。

北の大地に展開する部隊が減り、ローテーションの間隔が長くなったことによって、当地に滞在する日数が増えていた。これによりホームシックにかかる将兵が増え、それに伴う士気の低下が無視できなくなり始めていた。特に生まれ育った環境と当地とが大きく違う、南大陸南部出身の兵にその傾向が著しい。

司令部やランケオラータは、抜本的な対策の必要に迫られていた。

その状況下に、衝撃的な報せが飛び込んできた。

ターバ陥落。

穏やかな晴れた日のことだった。

その日の雪掻きを終え、汗を拭う兵士たちに温かい湯気を上げる炊き出しが振る舞われようとしていたとき、一騎の早馬がパーカホに飛び込んできた。

息せき切って司令部に転がり込んだ兵は、イーバからの伝令だった。その兵が知らせた凶報は、ターバが一夜にして壊滅し、周辺の集落も最北の蛮族に恭順を誓ったというものだった。その後何人かの伝令が駆け込み、パーカホからも情報を求める伝令が駆け去る。あまりにも衝撃的な報せに情報が錯綜し、正確なことが判らなくなってしまっていた。

最初の伝令が駆け込んだとき晴れていた空は、凶報が連れてきた

かのように雪雲が広がり、僅かの間に吹雪へと変わっていった。北の大地の冬にありがちな天候の急変だったが、待ち受ける運命の過酷さを思わせ、前途への不安を掻き立てるに充分だった。特に情勢が安定し、次の春への希望が満ち溢れていただけに、北の民でも特に中央の民の落胆振りは、傍で見ていても目を覆わんばかりのものだ。

吹雪のせいで続報が入らなくなり、人々の不安は膨れ上がる一方だ。集落に住む古老の天気予想も、ラシアスで垣間見せたルティの天気予想も、当分の間吹雪が続くというもので、情報収集のための斥候を出すことも、生存者の救出部隊を送ることも不可能に成っていた。後方のパーカホですらこの混乱振りであり、一気に最前線と化したイーバの混乱振りが忍ばれる。

待つだけではどうしようもないと、吹雪をものともしないアービィが密かに獣化し、ターバへと長躯する。

そして、以前不死者の集落を叩き潰した際に拠点とした宿営地で、たった一人生き残ってはいたが意識不明になっていたターバの民をイーバまで連れ帰った。そこで息を吹き返したターバの民が話した内容は、イーバに詰める兵の背筋を凍らせるには充分すぎるほどの内容だった。

アービィたちが不死者の集落を叩き潰してから十日ほどが過ぎた、どんよりとした今にも雪が零れ落ちてきそうな曇り空の下、ターバの門を潜った小規模な集団がいた。

彼らは最北の蛮族であり、不死者への転生を強要されていたが拒絶したため迫害を受けて続け、それに耐えかねて彼らの領地から逃れてきたと言った。誰もが疲れ果てた表情を浮かべ、荷物もほとんど持たず、衣服もみすぼらしい物だった。

その境遇に同情したターバの民は、彼らを温かく迎え入れ、当分の間安心して過ごせるような空き家を提供した。周囲の家々では炊き出しが行われ、ほぼ着の身着のままで逃げ出してきた彼らに食を提供している。

そして、その夜、惨劇の幕が上がった。

逃げてきた集団に提供された家屋の扉が、内側から強烈な爆圧で吹き飛ばされた。

何事かと集まってきたターバの民が見たものは、長い犬歯を唇から覗かせ、青白い顔色をした不気味な人型の集団が、家屋の扉から湧き出る煙とともにゆっくりと姿を現すところだった。

呆気に取られて立ち尽くすターバの民に襲い掛かった人型の魔獣は、手近に人々の喉笛に長大な犬歯を突き立て、血液を吸い始めた。血を吸われる人々の顔色が、見る間に白くなり、纏わり付く魔獣と同じ色合いに変化する。周囲の人々が仲間の窮地を救おうと、人方の魔獣に飛びつき引き剥がそうとするが、恐ろしいほどの膂力に人間の力は通用しなかった。

やがて、血を吸われた人々の顔は、元は誰だったのか解らないくらい干乾びたようになり、犬歯も魔獣同様に長く伸びていた。次いで周囲の人々に魔獣同様に襲い掛かり、犠牲者の喉に喰らいつき、その血液を吸い始める。あとは次々に吸血魔獣が増殖し、扉を閉じて眠りに付いている家々にも雪崩れ込んだ。

朝が訪れ、吸血魔獣は朝日を浴びた者から灰と化し、崩れ去っていく。

一晩でターバの民の約五分の一が吸血魔獣と化し、そして今灰と化してしまっていた。

怒り狂ったターバの民が、最北の蛮族が占拠した家屋を取り囲み、口々に出て来い、町から出て行けと罵声を浴びせ始め、投石も始まった。

だが、その家屋の窓には板が張られ、扉も修復されている。
数人の若者が得物を手に扉をこじ開けて中に突入したが、彼らを待っていたものは灯り一つ燈されていない深い闇と、姿を見ることはできないが多数の吸血魔獣だった。
次々に血を吸われ、魔獣へと変わり果てていく若者たちの悲鳴が家屋から響き、やがて静かになる。そこへ突入しようという勇気を持ち合わせていたものは、皆無だった。

そして、その夜も多くの吸血魔獣が町に這い出した。
それどころか、灰になったはずの多数の吸血魔獣が月明かりを受けて復活し、これもターバの民を次々に同属へと変えていく。わずか二晩でターバの民のほとんどが吸血魔獣へと転生させられ、周囲の集落へのその魔手を伸ばし始めた。

それまで中央を席巻していた不死者と違い、朝までに進んだ所で灰と化しても、月明かりがあれば復活してしまう。つまり、行動範囲に制限がなくなったということだった。不死者に転生していない最北の蛮族が吸血魔獣に付き従い、周囲の集落に対して最北の蛮族への恭順を迫った。
断った集落は、その夜のうちに皆殺しにされ、その死体が他の集落に投げ込まれる。
事ここに至り、ターバに従っていた集落は、最北の蛮族の軍門に下り、中央部は最北の蛮族が支配する地になってしまった。

やっとのことでここまで話したターバの民は、後を頼むと言い残し息絶える。
ターバの民を丁重に葬ったアービィは、山脈拠点詰める兵たちに哨戒を厳重にするようにと念を押してから、パーカホへと戻って行った。

ランケオラータやルム、プラボックに連合軍司令部といった、戦の首脳陣を前にアービィが状況を説明した。

吹雪の中、どうやって情報を得てきたかと訝しむ声もあったが、あまりの緊急事態にそんな些細なことを詮索している余裕はなかった。誰もが対最北の蛮族の戦略を立て直さなければならないことは理解していたが、状況の急変に思考が追い付いていない。

北の大地は、混迷の中に叩き込まれていた。

第７３話

ラシアスの王城アルギールでは、臨時の緊急御前会議が開かれていた。

現王ロベリア＝グランデュローサの崩御に伴う摂政ニムファ・ミクランサ・ミリオフィラム・ネツォフ・グランデュローサ第一王女の女王即位と、ロベリア王の大葬礼に関する打ち合わせが、主な検討項目だった。

非公式に各国には即位式と、大葬礼の日程は伝えられている。既に各王都からは現王たちが、ベルテロイからは駐在王族武官たちが、二つの儀式に出席するため出発している。あと五、六日もすればアルギールに各国の王族が到着するはずだった。

内々にラシアスの駐在武官である第三王子ヘテランテラから、南大陸共同統治機構構想を聞かされていたニムファ女王は、既にその第一人者の地位に収まることを夢見ていた。老醜に冒された各国の王にその大役が務まるとは、ニムファの中では考えられないことだった。次世代を担う若き女王こそが適役であり、南大陸を率いて北の大地を討ち果たし、両大陸を統一した史上初の覇者の称号を得るために用意された天の采配だと信じている。

しかし、共同統治機構の発案者であるインダミト王バイアブランカは、パシュースの進言で構想の大転換を図っていた。

一人の人間に権力を集中させることは、五百年前に滅んだ大帝国の再来に他ならず、必ず第一人者の地位を巡って戦乱を引き起こすだけのものと気付かされていた。各国の内政はあくまでもその国の専任事項とし、共同統治機構は各国の利害調整や、目に余る専制があった場合の是正に努めるものと改めていた。

内政不干渉が原則だが、マイノリティへの差別や虐待、北の大地を含む他国への侵略については、最低二カ国の賛成で武力行使を含む懲罰が認められるとしていた。

改訂された構想は、パシュースを通じてベルテロイ駐在武官のみに披瀝され、各国の為政者たちにはまだその案は届いていない。もちろん、それはバイアブランカの差し金であり、ニムファ女王の即位式典とロベリア王の大葬礼の後に控える王たちの懇談の場で明かされる予定だった。

当然、ニムファは旧構想を知っており、その第一人者の席が回ってくることを心待ちにしていた。

最初は控え目に他国の王にそれを譲り、いずれ自分にそれが回ってきたときには二度と手放さないつもりでいる。決め事など、第一人者の権限を以ってすればどうとでもできるものだと、ニムファは思い込んでいた。

実際には、王たちの懇談の場で、旧構想は叩き台にされるだけだ。バイアブランカは思わせ振りに第一人者の権限を大袈裟に話しておいて、ニムファの自爆を誘ったうえで、新構想を切り出すつもりでいることを、ヘテランテラはパシュースを通じて聞かされていた。当然フィランサスもアルテルナンテもそれは承知している。南大陸を戦乱の渦に巻き込みかねない事件を引き起こした両国に、バイアブランカの新構想を否定するだけの発言力があるはずもなかった。

ヘテランテラは、世間知らずの姉が恥を掻き、国内に引き篭もることを望んでいる。

既にベルテロイ駐在武官の会合が、統治機構の新構想と同じ働きをしていることに、バイアブランカは気付いていた。

いずれ北の民から代表者が出されたときには、統治機構はベルテ

ロイからウジェチ・スグタ要塞に場所を移し、新たな駐在武官がベルテロイに送り込まれることになるだろう。

緊急御前会議の後、ニムファ女王は、宰相マクランド・シアメンス・コリンボーサを執務室に呼びつけた。

「何故、我が国の派遣軍のみが、ウジェチ・スグタ要塞に残されているのか、納得のいく説明をしなさい」

至高の地位を手にした瞬間から、ニムファから慎ましさは消え失せていた。

「はい、前線からの報告によりますと、北の民への度重なる暴言やサボタージュが原因とのこと。

我が国の国民感情を考慮いたしますと、致し方のないことかと存じます」

冷や汗を流しつつコリンボーサは答える。

適当に言い繕ったところで、一朝一夕に改善できるようなことではない。であれば、正直に報告するしかなかった。

「何故、それがいけないのです？」

理解できないという表情で、ニムファは問い返す。

勇猛かつ忠勇なるラシアス軍が前線に出られないなど、恥以外の何物でもない。

「派遣軍は、四カ国から一個大隊ずつを組ませた連隊を基幹としておりました。

他国からも厳重な抗議があったとなれば、総指揮官も対処せねばならなかったのでしょう」

北の民からの抗議など歯牙にも掛けないが、他の三ヶ国からの抗議とあっては致仕方ない。

「北の民どもに下手に出る必要など、どこにもありません。つけあがらないように、力で統治すべきではないのですか？総指揮官はラルンクルスでしたね。解任しなさい。

そもそも、何故派遣軍がインダミトの一侯爵の指揮下に入っているのです？

そんなものに振り回される必要など、ラシアスは認めません。すぐ、ウジェチ・スグタ要塞に残る我が軍に進撃命令を出しなさい。

最北の蛮族を討ち果たし、帰路に他の北の民を討てばよろしい。それまでは補給の役にでも立たせて上げましょう」

それだけ言い捨てると、ニムファはコリンボーサを下がるように命じる。

「何を仰います。

厳冬期に最北の地まで攻め込もうなど、自殺行為以外の何物でもございません。

あのアーガストルの惨劇を、繰り返すだけにございます。

それに独断専行などは、他国が許容するはずもございません。」

コリンボーサは反論を試みた。

「我が国の精鋭と、軟弱なインダミト兵を同列視するというのですか？

もともと我が国の兵は雪に慣れています。

どこに心配などする必要がありますか。

私が摂政でいる間、宰相が精一杯私を補佐してくれたことには感謝しています。

ですが、女王になった以上、補佐など恥を晒すだけです。

私に従うのが、臣下の努めではないのですか。

それが解らないのであれば、私にも考えがあります」
ニムファは拒絶し、解任をちらつかせるだけだった。

「宰相、浮かぬ顔だが？」
第一王子エウステラリット・ロトンディフォリス・ネツォフ・グランデュローサが声を掛けた。

「殿下、姉上様にはほとほと手を焼かされますな。
いや、女王陛下でしたな」
コリンボーサは、今しがた呼び付けられ、命じられた内容をエウステラリットに話した。

「どうしようもないな、姉上は。
それほど称号などくだらないものが欲しいのか。
ラシアス国民だけで両大陸を支配できるとでも考えているのか。
どれほど国民に負担をかける気でいるのやら」
顎に指をあて、エウステラリットが答える。
ニムファの弟に当たる第一王子は、もともと政治に興味が薄く、覇権欲もないためか、王位継承権では第二位だったが、早々にそれを放棄していた。
姉の即位に伴い、近く臣籍降下の予定であり、公爵への叙爵と非常勤の政務参議官への就任が決定している。もちろん、当人に政治に関ろうという意志は欠片もなく、労働などとは無縁の王族に収入を確保するための方便であった。

「はい。
陛下は両大陸の統治を甘くお考えです。
力で従わせれば良いとお考えのようですが、それではいたる所で反乱が起きましょう。

それを武力で鎮圧すれば、さらに恨みが渦巻きます。
摂政でおられる間に、多少なりとも政のご経験をお積みになったはずなのですが」
コリンボーサは、憤懣やるかたないという表情だ。
彼は権力欲に塗れてはいるが、かろうじて最低限の良識は備え、統治に掛かる収支のバランスには気を遣う政治家だった。
宮廷内の権力闘争には手段を選ばず、国民に貧困を強いることもあったが、それはこの時代の貴族としては当たり前の範疇に収まってはいる。しかし、大陸に戦乱を呼び起こしてまで、己が欲望を満たそうとする非道さは持ち合わせていなかった。

「以前、ベルテロイのヘテランテラ殿下より四国家共同統治機構のお話をいただきましたが、陛下はこれに色気をお持ちです。
ですが、先達て殿下から、新しい構想をお聞かせいただきました。以前のような統一国家を意識した統治機構とは違う形になっておりまして、随分と様変わりしております。
どちらもバイアブランカ王の構想のようですが、新構想はあくまでも国家間の利害調整や、国家による非道行為に対する是正勧告や懲罰が主です。
ヘテランテラ殿下からは、まだ陛下のお耳に入れぬよう釘を刺されておりますが、陛下はこれで南大陸を統一できると思い込んでおられるご様子。
いったい、ヘテランテラ殿下がどのようなお考えでいらっしゃるのか、私には解りかねます」
コリンボーサは話題を替えた。
ニムファの暴走について、愚痴を溢したところでどうなるものではないと、諦めが入っている。

「ヘテランテラは、姉上に恥でもかかす気か。
バイアブランカ王は姉上の即位式の後に、統治機構の話をするの

だろう。
姉上は以前の話ししか知らぬ。
大いに色気を出し、第一人者の権限を強めようとするはず。
バイアブランカ王は、それを引き出すだけ引き出して、第一人者を置く危険性を各国に周知させたうえで、新構想の話を切り出す気なのだろうな。
権力を伴わない第一人者など、姉上が欲しがるわけがないからな」
エウステラリットは、ヘテランテラの考えが手に取るようにわかる。
南大陸を円滑に運営させ、北の大地と共同歩調を取るためには、ニムファを排除する必要がある。
言い換えれば、旧来の考え方をしたままのラシアスは、いらないということだ。

「その八つ当たりの後始末は、私の仕事になるのでしょうね。
今から気が重くなります。
北の民に八つ当たりが飛ばないように、せいぜい私が受け止めると致しましょう」
諦め顔でコリンボーサが答えた。
彼が北の民に対して持つ意識は、一般的なラシアス国民と大差ない。
一体、何故北の民に良い思いをさせてやらなければならないのか、他の三ヶ国の思惑が理解できない部分も大きい。だが、北の民とこれ以上事構え、国庫を疲弊させるつもりもなかった。

「それはよろしく頼む、としか言いようがないな。
大帝国の愚を二度と繰り返さぬよう、南大陸は四国家がそれぞれの地域を統治する。
それが今のところ正しい姿だろう。
思うに、いずれは北の民の代表も、その統治機構に入るのであろ

う？

一人が両大陸を公平に統治するなど、過去数百年の歴史を振り返れば無理なことだ。

両者の利害や主張を調整する場、といったところが限界だろうし、それで正しい。

既に駐在武官たちの集まりが、その役を果たしているのだろう。私的な集まりを公式のものと認定し、その権限を強めるだけでよいのだから、新しい組織を一から作るより遥かに手間は掛からないな」

エウステラリットは、自らの考え方を言った。

エウステラリットとヘテランテラの間の第二王子はニムファとの仲に嫌気が差し、早々に臣籍降下し直轄領の一つを巻き上げてそこに引き篭もっている。第二王女は早々に嫁いでおり、第三王女も先王の喪が明け次第、ストラーの公爵家に嫁ぐことになっている。長兄の責任感から王宮に残っていたが、それもこれで解放される。王座に付く者の兄弟姉妹が王宮に残っては、後々の権力闘争の引き金になることを警戒され、自身の命が危なくなるだけだ。

それを差し引いても、ニムファの相手をしなくて済むなら、権力など要らないとまでエウステラリットは思っていた。

コリンボーサは、この無欲な王族にこそ王位を継いで欲しかった。

政治センスに優れ、民を思う気持ちも強い。無欲さは裏返せば責任感のなさでもあり、コリンボーサの権力を脅かすこともなく、思い通りの政治をすることができる。もっとも、自分を無欲ではなく無責任と自覚しているからこそ、エウステラリットは臣籍降下の道を選んでいたのだが。

対して同様に政治センスに優れ、民を思う気持ちも強いヘテランテラは、責任感の塊のような人物であり、コリンボーサの専横を許すとは思えなかった。そうであるからこそ、世間知らずで操りやすいニムファを担いだのだが、ここへきて急に自我に目覚めてしまっ

た。却って操れなくなったニムファを、コリンボーサは持て余していたといっていい。

「ラシアスの国権を侵されないのであれば、私としては何も文句はございません。

国家間の利害調整は、主張すべきことは主張し、引き時を心得ていれば済むことです。

ですが、国家による非道行為に対する是正勧告や懲罰という点は、明らかに我が国における北の民の扱いを念頭に置いてのことでしょう。

国が直接国内に住む北の民を迫害することはございませんが、民がしていることには目を瞑っている状態にございますれば、これは国が迫害に手を貸しているといわれた場合に申し開きはできませぬ。

統治機構は、我が国には不利になることが多いかと」

コリンボーサは統治機構に対する不満と危惧を述べた。

「そうは言っても時代の流れは両大陸の融和であろう？

マ教も原理主義のスキルウェテリー卿や、教化主義のデナリー卿の力が削がれていると聞く。

統治機構の決定を尊重し、国を作り変えていくしかないだろう。

他の三ヶ国は北の民との交易で莫大な利益を上げられるが、我が国に交易に資するような資源や産業がない。

彼らの交易に伴って発生する関税や通行税で、国を富ませるしかないのだ。

かと言って目先の利に惑わされて高率な税を掛けては、交易の行程が海に逃げる。

宰相、これからの舵取りは難しいぞ」

コリンボーサの不満は、エウステラリットはよく解っていた。

腹の底では、彼も北の民に対して良い感情は抱いていない。それは、北の民と千年以上も対峙して来たラシアスの国民性として、当

然の考え方であった。融和を目指す勢力としても、責められることではないと理解している。

「インダミトが北の民などと融和を考えているのは、商業国であるからですしな。

南大陸にこれ以上大きな市場を形成する場がない以上、新天地を求める気持ちは理解できます。

そして、それが戦で勝ち取るものではなく、平和の裡に行われるべきことであることも。

お言葉、よく胸に刻み込んでおきましょう」

そう言ってコリンボーサはエウステラリットとの突発の会談を切り上げた。

「もう、一年以上経ったか、姉上が勇者殿に袖にされてからは。

あれ以来、何かに取り付かれてしまったかのようだ。

まだ民には知られていないが、怪しい像を祀り始めたのもあの頃だったかな。

あくまで装飾品と言い張ってはいるが、あの禍々しさは尋常ではない」

去り行くコリンボーサの背に視線を送りながら一人ごちたエウステラリットは、王室の未来に不安を感じていた。

北の大地からハイスティに連れられてきたヌミフとオンポックは、この時点でベルテロイに滞在していた。

当初はインダミトで様々な商業を見て回っていたが、バイアブランカ王がラシアス先王の大葬礼に出席するに当たり、ベルテロイまで随行してきていた。

ベルテロイは南大陸の中央に位置するため、物流の中心でもあった。インダミト国内を巡るより、物流の最先端を見るにはベルテロ

イの方が適していると、財務卿ハイグロフィラ公爵が進言していたのだった。それを受けたバイアブランカは、二人をレヴァイストル伯爵に預けていた。パシュースに預けても良かったが、彼もニムファの即位式典と先王の大葬礼出席のため、ベルテロイを空けている。レヴァイストルであれば世事にも長けており、二人の面倒を見させるには適任だった。

「ヌミフ様、オンポック様、いかがですかな、ベルテロイは。マ教の教都でありますが、南大陸の商都でもあります。欲しい物があればベルテロイに行け、南大陸ではそう言われているほどでございます」

クリプトが二人を案内しながら言った。

レイがランケオラータに嫁ぎ、彼女の専属だった彼はその任を解かれ、今はセラスの専属執事になっていた。レヴァイストル伯爵から二人の面倒を見るように命じられ、ラガロシフォン領からセラスを連れてベルテロイまで出てきていたのだった。

「はい、以前は通過するだけでしたが、滞在するのは初めてで、すっかりと圧倒されるばかりです。人々がこんなに楽しそうに。買い物というものが、こんなに楽しいとは、私は思ってもおりませんでした」

素直にヌミフが答える。

食料や衣類を中心とした物々交換が主だった北の大地では、これほど多種多様な商品を並べた商店はなかった。

「悔しいです。僕は、北の大地では感じることがなかった楽しさを知りました。北の大地に、この楽しさがないことが悔しいです」

オンポックは北の大地が貧しいのは、自然環境だけが原因ではないことを感じ取っていた。

道を行きかう人々の目に、死への恐怖は薄い。もちろん、日常的な餓死や凍死の心配がないこともあるが、町ぐるみで略奪に合う危険性がほぼ皆無であることが、その原因だと解っていた。

野盗や人攫いがいないわけではないが、どの町にも公的な治安維持部隊が常駐し、人々の安全に目を光らせていた。集落や部族という単位ではなく、人々の安全を保障する国家というシステムに、二人は瞠目していた。

「お姉さまが行っているんですもの、あなたたちの土地も直にこうなると思いますよ」

相手が国賓クラスの客であることをレヴァイストル伯爵からきつく言い渡されていたため、セラスの口調はぎりぎりのところで丁寧さを保っていた。

ラガロシフォン領の経営を任されて以来、セラスの考え方も少しずつ変わって来ている。

当然、領地経営のノウハウを持っていたわけではないので、クリプトが補佐のために付き従っている。当初は以前のような我儘を言っては叱られていたため、クリプトを煙たがっていた。しかし、領民から施政について感謝の言葉を聞くたびに、クリプトの言葉が正しかったことを思い知らされている。そして、人から感謝されることの快感に気付いた今では、以前の我儘さはすっかり鳴りを潜め、より良い施政に心を砕くようになっていた。レイと比べられ、前が良かったと言われたくないというライバル心もあったが、民を富ませることが自らを富ませることだと気付いてもいた。

「僕と同じくらいの年齢で領地経営なんて、セラス様も大変ですね。

僕には到底務まるとは思えません」

オンポックにしてみれば、正直な感想だった。

補佐に大人が付いているとはいえ、カネ勘定から領民に諍いがあったときの仲裁、他の領地との折衝や領民保護。時には自ら剣を取って野盗や魔獣に立ち向う。ほとんどを力で解決していた北の大地での経験しか持たないオンポックには、それをやっているセラスは眩しい存在だった。もちろん、折衝に当たっての政治力や交渉力といった力が、純粋な力と置き換わっているだけで、そういった力を持たない者が生きてはいけないことは北の大地と同じことだと、オンポックは気付いていた。

「あら、あなたもいつかはやらなければいけないことですよ」

セラスは、少しだけ得意気に言った。

年齢が近い気安さからか、オンポックとセラスの仲は良い。

クリプトは父親の気持ちで、ヌミフは姉の気持ちで二人を眺めていた。

ターバ陥落の対策を話し合う席で、ついランケオラータが呟いた。

「ターバに祝福法儀式済みの武器まで送り込んでおけば、このような事態は避けられたのに、な」

ターバが陥落する以前の状況であれば、平野に展開する部隊に祝福された武具は必要なかった。補給を担当する部隊の武具を、ターバに送り込むこともできたはずだった。敵の全能力が判明していない以上、補給部隊を丸腰にするわけにはいかないことも事実だ。だが、結果論でしかないが、ターバを見殺しにしたことと、大した違いはなかった。ランケオラータは、口の中に苦いものを感じていた。

「いや、それでは精霊神殿の許容量を越えてしまうだろう。

ただでさえ、それぞれの神殿が一万人分の武具に、儀式を施すのに全力なのだろう？

いた仕方のないことだ」

プラボックはそう言って、ランケオラータに不要な後悔をさせないように気遣った。

実際、プラボックも同じように祝福された武具がターバにあればと考えていたが、それを口にすればランケオラータを責めることになってしまう。

「それに、同化能力を持つ魔獣だか不死者がいるとは、想像の埒外だ。

まさか、日中に灰化することを躊躇わずに、行動範囲を広げてくるものがいるとは思いもしなかった」

ルムがプラボックに同調する。

「当面の対処はどうされますか？

日光を浴びて灰化するという情報がありますが、これは既知の不死者とも共通しており、この点から吸血魔獣は不死者と見て良いかと思われます。

その線から個体への対処は可能と考えますが、群れで襲いかかられた場合はかなりの被害が予想されます」

連合軍司令部を代表して、作戦参謀が発言する。

総司令官はラシアス騎士団長ラルンクルスだが、遅れて到着した分状況把握は参謀たちのほうが的確だったことと、ラシアス兵の不祥事が頻発したこともあり、軍議に出席していてもほとんど発言することはなかった。

全員がそれは承知しており、プラボックやルムも気遣い無用と言ってはいたが、ラルンクルスにしてみれば傲岸不遜な国民の振る舞いに恥じ入るばかりだった。司令部も総司令官の意志を汲み、極力

参謀が発言するよう努めていた。もちろん、長年の付き合いからラルンクルスの考えは承知しての発言であり、司令部の意志統一に齟齬が見られることはなかった。

「この天候であれば、日中に灰化してしまえば吹雪で灰は飛ばされてしまうだろうから、無闇に前進することはないだろう。

だが、日光が弱まれば灰化しないかもしれん。

これからの時期、吹雪が酷くなれば日中ですら暗くなるからな」

プラボックが不利を指摘する。

「確かに、プラボック様の仰る通りであります。

真闇とまではいきませんが、影ができるほどの陽射しは期待できません。

さらに、吹雪いてしまえば闇に等しく、その中では篝火を焚くこともできません。

つまり、こちらは闇の中で、手探りで戦わなければならない状態です。

吹雪に紛れて接近急襲された場合、灯りもない状況で戦うことは、不可能と言わざるを得ません。

天候の回復を待ち、威力偵察を試みたいと考えますが、その前に山脈を抜かれるような事態がないとは保証できません」

必要以上に悲観的になることはないが、決して楽観できる状況ではないことを、作戦参謀が説明する。

「打つ手、無しか。

山脈は放棄せざるを得ないか？

拠点間の相互支援が吹雪で困難である以上、やむを得ないことだろうな。

ここは戦線を縮小し、反撃密度を高めるしかないか。

意見のある者は、遠慮は要らん。

忌憚のない意見を述べられたい」
プラボックが悔しさを噛みしめつつ言った。

イーバを含め、いくつかの哨戒拠点は結界処理が完成していたが、大半の拠点はまだだった。バードンや精霊神官たちが奔走していたが、吹雪に遮られ思ったよりひとつひとつに手間が掛かってしまっていた。

イーバだけ残して撤収しても、取り残された拠点がどのような運命を辿るかは、ターバを見れば子供にでも解る。

結界が中の人間を守ったとしても、そのまま補給線を切られてしまえば遠からず自滅するしかない。自滅しないまでも、遊兵化してしまえば、それは戦力としては計算に入れることはできなくなり、全滅したと同義だった。

「山脈に敵拠点を築かれてしまっては、春以降の反攻が著しく困難になります。

高地は攻めるに難く、守るには適しています。

高地を押さえておけば、敵の動きを観察する上でも有利は計り知れません。

逆に、敵がこれを押えれば、我が方の動きは丸見えになってしまいます。

以上の点から、なんとしても、山脈の放棄はするべきではないと考えます」

戦務参謀から意見が出されるが、それが希望でしかないことは全員が理解している。

それに対してはランケオラータやルムから、みすみす殺されることが分かり切っているのに、拠点死守の命令は出せないと反論が出た。戦務参謀の言わんとするところは、充分すぎるほど理解している。だが、あらゆる意見が必要で、安易に一方に傾くわけにもいかない。

「僕がいた世界に、ヴァンパイアという血を吸う不死者の伝承があります。
想像上の話でしかないのですが、血を吸った相手を同族に転生させることや、日光を浴びると灰化するなど、いくつかの点で共通する部分があります。
ひょっとしたら、他にも共通点があるかもしれません。
ヴァンパイアの弱点の一つに、流れる水を渡れないということがあります。
これが共通点であれば、有効な防衛手段になるのではないでしょうか」
もちろん、大外れということもありますと、アービィは付け加える。

石炭の産出量が上がり、それまでの燃料として普及していた薪や炭と合わせ、かなりの燃料が各拠点には備蓄されていた。
山脈地帯には豊富な森林資源もあり、備蓄以外にも燃料を求めることは、平野部に比べ容易だ。この燃料で降り積もった雪を溶かし、拠点にしている集落の周りに水を流せば、少なくとも拠点内への進入は防ぐことはできるかもしれなかった。橋や船があれば渡ってしまえるが、それがなければひと跨ぎできるような流れでさえ越えることができない。
知性の高い、高位のヴァンパイアであれば対処法を考えついてしまうが、それは自ら望んでヴァンパイアに転生した真祖に限られる。低位のヴァンパイアは、破壊衝動のみに支配されていると考えて良く、細い水路さえ確保できれば、確実に前進を止めることが可能だった

「それは試してみる価値はありそうだな。

ルム、伝令は雪に慣れている我ら北の民がいくべきだろう。人選を頼む」

プラボックは、最北の蛮族を撃退するためであれば、どんなことでも試してみるつもりだった。

もちろん、アービィのいた世界の伝承と、食い違っている可能性があることは否定できない。だが、もしそうだったとしても、プラボックはアービィを恨むつもりなど毛頭ない。当面有効な手段がこれしか思い付かないのであれば、賭けてみるしかないことも事実だった。

すぐさま伝令が選ばれ、吹雪を衝いて山脈へと向かう。南大陸の住人には到底無理だが、幼い頃から無理矢理雪に慣れさせられてしまった北の民の真骨頂だ。

間もなく、家から出ることすら適わなくなる厳冬期が訪れる。そうなってしまえば、いかな不死者といえど雪が物理的な障壁となり、それを越えることは無理ではないにしろ、多大な時間を要するだろう。逆にこちらの行動も大幅に阻害されることになるが、厳冬期には自然休戦になるのが北の大地のならいだった。

拠点の周囲に水を流すための工事ができる期間も、僅かしかない。間に合ってくれ。プラボックは常日頃から崇める神狼に、そう祈らずにはいられなかった。

「ねぇ、ルティ、この前ティアが言ってたことだけどさ」

深夜、日付が変わる時間に、アービィは水を飲みに起きたところでルティと行き合った。

「あの人狼の血を引いた子供たちのこと？

良い考えだと思うけど、どこに作るか、どうやってそういう子供たちを集めるのか、問題は多いわよね。

上手くいけばいいんだけど」
ルティが水を飲みながら答えた。
「フォーミットに作れないかな。
僕のこと知ってる人も多いから、他の町や村より受け入れてもらいやすいんじゃない？」
アービィは考えていたことを話し始めた。
魔獣を引き連れた魔術師を撃退していたことでアービィの正体は知られていたが、村を救ったうえに普段から人に危害を与えたことがなかったため、アービィ個人に対する嫌悪感を持つ者はほとんどいなかった。ベルテロイから派遣されていた神父ですら、村での友人たちは涙で見送ってくれていたし、ほとぼりが冷めたらいつでも戻って来いとも言ってくれていた。
南大陸から北の大地まで旅した中で、腰を落ち着けても良いかと思う場所は、ボルビデュス領を始めとしていくつもあるが、やはり育った村への郷愁は捨てがたいものがある。ルティにしてみれば、そろそろ老境にさしかかる両親を残したままだ。
人狼の里がどうなっているかも、アービィは気掛かりだった。血縁関係などなかったが、インディビジュアリストであり、エゴイストな人狼たちにしては珍しく、群れで生活している集団だった。
特段何かを協力するとか、個体間の繋がりが濃厚というわけでもなく、何となく集まっていただけなのだが、それが居心地の良い空間を作りだしていた。家を建てるわけではなく、獣化したままの狼の姿でいる本当の群れだった。
彼らのテリトリーに人が迷い込み、そのときに空腹の個体がいれば人を喰らうこともあったが、積極的に村を襲ったり、街道で旅人を待ち伏せたり、町や村に人化して入り込み人を喰うような個体は

いなかった。この点でも珍しい個体群だといえる。
彼らであれば、積極的ではないにしろ、何かしらの協力を得られるかもしれない。アービィは漠然と考えている。

アービィは、いずれルティと結婚するつもりだし、それはルティも同様だ。二人で食い物屋か酒場を開きたいというのが、アービィたちの夢だった。
しかし、ティアの言う施設は、一人で運営できるものではない。相手が子供たちであれば、面倒を見る者が必要だ。ミルクなどないこの時代、おそらくは乳母も必要になるだろう。狼として育てるだけで良いのなら、乳母代わりに野生の狼の雌や、飼い犬の雌を連れてくれば済む。だが、人間として育てるというのであれば、狼や犬の乳で育てるというわけにはいかない。

寄付だけで経営することは当然厳しいだろうし、公的な補助が受けられるとも限らない。当然のことながら、運営するためには、収入の手だても考えなければならない。いつまでも危険と隣り合わせの冒険者稼業を続けられるわけではないので、別の収入を得る手段は今から考えておくべきだろう。
一定の年齢まで育てて、後は放り出してしまうのでは無責任に過ぎる。一人で生きていけるだけの、手に職を付けさせる必要もある。
アービィたち三人だけでは、到底手が足りない。少しでも人狼に理解のある、フォーミットが最も適しているとアービィは考えていた。

アービィとルティがいずれ結ばれた後、二人の間に産まれてくる子供は人狼と人間のハーフであり、子孫には人狼の血が引き継がれていく。アービィはティアの考えついた事業を、自分こそが主体になって進めなければと考え始めていた。

「僕たちの子供がさ、人狼の血を引いていることを恥じなくて済む世の中になって欲しいよね？」

僕は、そうするための努力は惜しまない」

アービィは、意を決して言う。

今までは、二人で一緒に暮らせたらいいね、安心して二人が暮らせる地を探そうね、だった。

今、アービィは初めて『僕たちの子供』と、明確に言い切った。

突然ルティの目から涙が溢れ、口は動いているが、言葉が出てこない。

待っていた。

待ち焦がれていた言葉だった。

ルティは、アービィとの間に子供を作ることに、躊躇いはなかった。

人狼の血を引いていようが、充分な愛情を注がれて育てられたなら、決して歪まない。目の前にいる伴侶が、それを証明している。

「あのさ……」

ルティは、アービィが何か言おうとした口を、無理矢理塞ぐ。

「それが、誕生日の贈り物？」

ルティはそう聞いてから、アービィにキスした。

フォーミットを旅立ってから、二年の月日が流れていた。

この夜、少年と少女だった二人は、大人の階段を昇った。

第７４話

一夜が明けた。

ルティは素肌にシーツを纏い、丸くなった巨狼の腹に埋もれていた。

アービィが敢えて獣化した後、ルティはそのしなやかな毛皮の感触を素肌で楽しんでいたが、落ち着いてくるとあまりのくすぐったさにシーツにくるまっていたのだった。

先に目を覚ましたルティは手早く服を着ると、この世にある全ての幸せを独り占めしたような表情で眠りこける巨狼をそのままに、そっと部屋を後にした。

顔を洗っているところにティアが来て、黙ってルティの肩を叩いた。そして、驚いて振り向いたルティに向かい、無言のまま頷いて見せる。ルティの顔が、爆発したかのように真っ赤に染め上げられた。

「よかったね、ルティ」

ティアが真っ赤なままのルティに声を掛けた。

「うん。

でもね、最後まではしてないの」

ルティは少々残念そうに言った。

「また途中で獣化？」

額に指を当て、俯きながらティアが聞く。

「ううん、違うの」

ルティは、まだやらなければならないことが山積している状態で、

子供ができてしまうことを恐れた結果だと言った。まだ避妊具が普及していないこの時代、セックスはそのまま妊娠に直結していた。もちろん、女性の性周期についての知見もまだ蓄積されておらず、ルティは自分自身がどういう状態かを把握していなかった。

もし、これでルティが妊娠したら、旅はここで終わりだ。最北の蛮族の脅威が迫っている状態で、妊娠したルティが北の大地に残ることは危険すぎた。

「でもね、獣化しなかったのよ、抱き合ってても。

それに、えへっ」

そう言いながらルティの顔は、また真っ赤に染まっていた。

ティアは、満面の笑みで持っていたタオルを、床に叩き付けた。少しは照れなさいよ、もう、幸せそうなんだから。

ラシアスの王都アルギールでは、しめやかに先王ロマリア＝グランデューサの大葬礼が執り行われ、次いで翌日、盛大にニムファ女王の即位式が挙行された。

即位式の後、アルギール城の貴賓室では、王たちの懇親を深めるための宴が行われている。

「お悔やみと、祝辞を同時に言わなければならないのは、複雑な気分ですな」

インダミト王バイアブランカは、ラシアス女王に即位したニムファに軽口を叩く。

「申し訳ございません、バイアブランカ殿。

ですが、国の、いえ、南大陸の危急時故、王位の空白による混乱を防ぐためのことと、お察しいただければ幸いです」

軽口の真意を察することなく、ニムファは答えた。

本来であれば、王の大葬礼の後に即位式は行われるものではない。大葬礼を取り仕切る者がそのまま即位するのが習わしであり、事実上の即位式になっていた。弔事と慶事を同時に行うことははばかられていたため、先王の喪が明ける一年後を目安に盛大な即位式が行われるのが慣例だった。

だが、ニムファは待てない。

今すぐ、認められたかった。

既に各国の王たちは、ニムファを実質の王として遇してはいた。だが、摂政はあくまで摂政であり、形式上ではあっても重要項目に即答は許されていなかった。

そのフラストレーションが、前代未聞の大葬礼と即位式の連日挙行として表れていた。

「臣民を想う心根、敬服いたしますぞ」

盛大な嫌味を込めてバイアブランカが言ったが、ニムファはその真意はついに解らなかった。

「ときに、カレイジャス殿、貴国の勇者殿には、一方ならぬ世話になった。

この場を借りて礼を言わせていただきますぞ」

ビースマック国王ブルグンデロットが、バイアブランカのファーストネームで呼びかけた。

「こちらもです。

お陰様で我が国は、戦乱の引き金を引いたという汚名を被らずに済みました。

いくら感謝しても、し切れませぬ」

ストラー国王サウルルスが後を追う。

「いや、勇者殿は我が家臣ではございませぬ故、我が身には感謝など過分なこと。

そうでありましょう、グランデュローサ女王」

バイアブランカはニムファに話を振った。

一瞬奥歯を強く噛みしめたニムファは、必死に笑顔を張り付けにこやかに頷いてみせる。

「そうそう、ニムファ殿にも礼を言わねば。

我が国が騒乱になりかけた際、援軍を送っていただきましたな。

幸い、国境到着以前に片が着きました故、お手を煩わすこともなく、胸をなで下ろしておりました。

あのようなお気遣いをいただき、感謝の言葉もございません」

ブルグンデロットはニムファの胸の内など知らぬとばかり、馬鹿丁寧に言葉を紡いだ。

「いえ、友邦の地が騒乱に渦中にあるなど、見過ごせるはずもございません。

大したことはできませんでした故、お気遣いなどされては却って心苦しいといいものでございますわ」

ニムファは慎ましやかに返す。

「友邦の地が騒乱の渦中といえば、北の大地もそうですな。

最北の蛮族どもが、中央に住まう民を押し下げ、そして山脈地帯、平野部、山岳地帯と順繰りになっている様子。

古来より、北の民の南下圧は貴国にとって最大の障害でしたな、ニムファ殿。

ベルテロイの若者たちが諮って、最北の蛮族を討つ算段をしているようです。

ここはひとつ、彼らにそれを任せてみようではないですか。
勇者殿も北の大地でご活躍のご様子なれば」
バイアブランカが徐々に話題を核心へと導き始めた。

「南大陸として、各国がそれぞれに動いては、最前線が混乱しますな。
統一の指揮系統は必要でしょう」
ブルグンデロットが相槌を打つ。

「過日、カレイジャス殿のご発案として、娘より聞かされていた共同統治機構ですか。
まず、北の民との問題を解決するという場で、試そうと仰るか？
民の総数も増え、それぞれの国が抱える問題も増える一方。
事によっては我が国の愚か者どもがご迷惑をお掛けしたような事態が、またないとは言い切れませぬ。
この機会に各国が常に話し合える場を設けようというわけですな？」
サウルルスが訊ねた。

「左様にございます、オキプス殿。
いくつかの考えがありましたが、駐在武官を通して以前お知らせしたような形を考えておりました」
バイアブランカがサウルルスにファーストネームを呼びかけ、旧の構想から説明する。

「統治機構の第一人者は、どのようにお決めになるおつもりでしょうか？
また、どれほどの権限を付与されるお考えですか？」
ニムファが訊ねた。

「誰が第一人者になるか、ということでしたら、各国の代表者、これはそれぞれお決めいただくとして、その者たちで一年毎の持ち回りとしましょう。

当然、危急時や継続すべき懸案事項があれば、協議のうえ継続もあり得ること。

権限ですが、懸案事項の決が割れたときの決定権程度で、あとは、決議があれば代表して発表といったところでしょうか。

統治機構の機能としては、各国間の紛争があった場合の調停、紛争まで至らなくてもですな。

何処かの国において専制政治の兆候があれば、これの是正勧告、懲罰まで含めましょうか。

まだいろいろとありますが、重要な部分はこの二点です」

バイアブランカがあらましを説明する。

「その程度で第一人者といえるのでしょうか。

もう少し、権限を強化して、例えば連合軍の指揮権なりまで付与すべきではないかと思いますわ」

見事に、ニムファは墓穴を掘った。

バイアブランカはもう少し小出しにして誘うつもりだったが、軍事力の集中を求められたなら、これで充分だった。

「さようですな、そのような権限は第一人者を南大陸の、いや、両大陸の覇者としましょう。

危険。

危険すぎます。

かつての大帝国が、どのような道を歩み、どのように滅びたか。

愚者は己の経験に学ぶことで精一杯ですが、賢者たらんとしている我々は過去の歴史に学ぶべきでしょう」

バイアブランカがニムファの発言を斬り捨てた。

「当初はそこまでを考えておりました。
力なき正義は無力でしかない。
軍事力を背景とした、強制力を持たせた統治機構とするべきと、私も愚考したものです。
ですが、今は違う。
連合軍は組織しましょう。
それは常備の軍ではなく、必要に応じて各国の常備軍から抽出する形でなくてはなりません。
軍事力は、第一人者の力としてはいかんのです」
バイアブランカの説明は明確だった。

「そこで、私は構想を練り直しましてな。
ベルテロイの駐在武官の私的な集まりを、公式に認めてはいかがでしょう。
各国の内政は、それぞれの専任事項です。
これに干渉することは、何人たりとも許されざる行為と、私は考えます。
ですが、国内において、君主は何をしても許されるというわけではないことは、聡明な皆々様におかれては今更説教するまでもないところ。
国政を、外から一歩下がって眺めれば、どこに歪があり、どこで道を違えたかは、内政を見る者より冷静に判断できましょう。
また、駐在武官は王族でありますので、それぞれの国に対する責任感も強い。
いかがでしょうな、駐在武官たちは、特にベルテロイの防備に忙しいというわけではない。
ここを侵さないことは、各国の了解あってのことですがな。
彼らに、今後はひと働きしてもらうというのは」
ブルグンデロットとサウルルスは、二国間での騒乱を起こしかけ

た過去から発言力が低下しているため、バイアブランカの提案に乗るしかない。
ニムファは、唇を噛み締め、バイアブランカの提案に賛意を示すしかなかった。

「いずれ、北の民からも代表が送られてきます。
現在ベルテロイに滞在中のヌミフ殿の兄上であるルム殿か、オンポック殿の伯父上であるプラボック殿のどちらかかと思われますがな。
その際には、統治機構はウジェチ・スグタ要塞に移しても良いでしょうな」
バイアブランカの一言で、両大陸を治める統治機構の骨子が固まった。
後は、当事者であるベルテロイ駐在武官たちに詰めさせれば良い。いますぐ発足できるとは思えないが、向こう二、三年のうちには形になっていくだろう。

最北の蛮族が矛を収め、これに参画する意志があるのであれば、バイアブランカはそれを拒む気はない。
それだけ市場が増えるからだが、将来の市場を血で汚して恨みなど買いたくないというのが正直なところだ。

「ところで、勇者殿は我が国が召喚致しました。
所有権は我が国のものと考えますが、いかがでしょう？」
ニムファは第一人者の地位を手に入れることができない口惜しさから、思わず言わでもがなの事に触れてしまう。

「過日、勇者殿にお会いした際伺ったところによれば、この地に足を踏みしめた最初の地は我が国の南にあるフォーミットという村だ

そうです。
これは我が国の国民として生まれた、そう解釈もできますな」
平然とした顔で、バイアブランカはいなした。

「勇者殿は、どの国にも隷属はせぬと言っておられた。
仕官の意志はないようですな。
であれば、無理に縛り付けようとすれば逃げるのが道理。
ましてや、魔王すら倒すという力の持ち主を、我々が飼いこなすなど無理と言うもの。
せいぜい、冒険者として依頼をこなしてもらうのが関の山でしょうな」
ブルグンデロットが後を引き取る。

「所有権などと、人を人とも思えぬ発言ですぞ、ニムファ殿。
私も、勇者殿に我が国に滞在していただこうとしましてな。
アマニューク騒動の解決の褒賞として、王都に家を用意したのですが」
サウルルスが懐かしげな目で言った。

「孤児院として風の神殿に寄付されたそうで」
バイアブランカが笑いながら続けた。

「さよう。
ああされては、不敬などとも言えませんでした。
見事な逃げっぷりです」
釣られたようにサウルルスも笑う。

「とにかく、勇者殿を所有しようなど、最悪国を乗っ取られますぞ。
彼の者がそのような非道を働くとは思えませぬがな。
付かず離れず、せいぜい上手く利用することを考えればよろしい」

この話題はここまでだとの意思を込めて、バイアブランカは言い終えた。

王たちの懇談会は、このあとサウルルスの巧みな話術で、終始和やかなまま終了した。

だが、ニムファの心にどす黒い影を残していたことは、当人を含め誰も気付いていなかった。

珍しく吹雪かない日が十日ほど続いた、ある晴れた日の朝のことだった。

ウジェチ・スグタ要塞から行軍を開始しようとしている、一個師団規模の軍勢があった。

ラシアス女王ニムファの命を受け、騎士団長ラルンクルスの解任状を胸に、パーカホへ向かう指揮官ウェンディロフ・ラティフォン・ドン・テネサリム子爵は、ほころぶ表情を隠せなかった。

国軍の総司令官は国王だが、実際は軍務卿が国王の信任の下その任に当たるはずだった。本来、騎士団長など、国軍の指揮系統のなかでは、下位ではないが一個師団規模の指揮を委ねられるほどの地位ではない。それが、現騎士団長ラルンクルスはその働きぶりと実直さ、比類無き忠誠心が先王の目に留まり、第一王女の信が厚いというだけで、貴族階級ではないにも拘わらず、軍務卿に匹敵する地位を獲得していた。

宰相や、今は行方が分からなくなっている先代の宮廷魔術師などは、それを当たり前と受け止め、閣僚とは違う政治勢力になっていた。貴族の暴走を止める一種の冷却装置として機能していたが、当然それを快く思わない貴族たちも多数存在していた。

しかし、勇者の召喚と抱き込みに失敗した先代の宮廷魔術師ドーンレッドが失脚して以来、摂政への影響力を一手に収めようとした宰相コリンボーサによって、騎士団長ラルンクルスはウジェチ・スグタ要塞勤務に遠ざけられていた。新任の宮廷魔術師にコリンボーサ子飼いの若者を抜擢するに及んで、貴族の暴走を止める冷却装置は、完全に瓦解していた。

ベルテロイ駐在の第三王子ヘテランテラからの要請で、騎士団長ラルンクルスを総司令官とする南大陸連合軍が、最北の蛮族を討ち果たすために北の大地へと赴いていたが、駐在武官たちが描く長期持久戦略を唯々諾々と受け入れ、ラシアスの勇名を北の大地に示す機会はまだ得られていない。そのことを快く思わない貴族たちは、ウェンディロフを筆頭に多数存在していた。

だが、インダミト王バイアブランカが裏で糸を引いていることは公然の秘密であり、一国の王に対してその怯懦を非難するような真似をするわけにはいかなかった。

ラシアス兵と北の民の軋轢が原因で、ラシアス部隊が連合軍から事実上切り離され、ウジェチ・スグタ要塞防備にその任を限定されたことで、女王に即位していたニムファを始めとした対北の民強硬派の不満は頂点に達していた。

その結果、それまで最もラルンクスルを信頼していたニムファが掌を返し、コリンボーサの反対を押し切って解任を決めてしまった。コリンボーサは権力欲こそ強いものの、無闇に戦乱を引き起こすほどに愚劣ではなく、最低限の政に関するバランス感覚を有する、それなりに有能な政治家だったが、それがニムファの不興を買い、ラルンクルス解任に勢いを足すことになってしまっていた。

ニムファは、宰相解任をちらつかせて、ラルンクルスの更迭と、

ラシアス軍独自の最前線展開をコリンボーサに求めていた。コリンボーサは、せめて春の泥濘の時期が過ぎ去るまで、指揮官更迭と軍の展開を留まるように懇願していたが、ニムファは軟弱者の一言でそれを退けてしまっていた。

ラルンクルスの解任後に充てる騎士団長の後任人事は、当初難航した。騎士階級からは絶大な信頼を集める彼に、解任状を突きつける役を誰もが引き受けたがらなかったためだった。

北の大地の実質的な最高権力者が、インダミトの侯爵であることも、多少影響している。どう見てもラシアスの独断専行でしかない独自の最前線展開を、騎士階級の者が侯爵に対してねじ込むなど、国が違うとはいえ気が引けることだった。後々国同士の諍いに発展し、詰め腹を切らされては堪らないという心理が働いていたことも、無視できない事情ではある。

騎士階級ではいざというとき、侯爵相手に強く出られないということは、ニムファも理解できていた。軍の実質的な指揮官は騎士階級の古強者に任せるとしても、それなりの立場の者を送り込む必要もあった。

従って、騎士団長の職責は、あくまでも騎士団統率という狭い範囲に抑え、貴族階級の者を連合軍総司令官として送り込むことに決していた。

だが、王都や領地での安穏とした生活に慣れきった貴族の中に、わざわざ厳しい自然が待ち受ける北の大地へ行こうという者は多くない。

そこへビースマックの政変時に派遣され、国境でヘテランテラに厳重な叱責を受けて送り返されていたウェンディロフが名乗りを上げた。

ビースマックの一件以来、女王の寵愛著しいこの子爵を、当初は

侯爵に叙爵のうえ北の大地に送り込むことをニムファは画策していた。

しかし、さすがに伯爵を飛び越しての叙爵は、多くの貴族たちの反対に遭っていた。特に自らの地位を脅かされるという危機感を抱いた軍務卿の反対は激烈で、他の閣僚たちの眉を顰めさせる程だった。だが、反対派の貴族たちを纏めた軍務卿の意見は無視できないうえ、他の閣僚たちにしてみてもウェンディロフのような武辺一辺倒の政治センスに欠ける者の台頭は看過できるものではなかった。

結局、他の閣僚や反対派の貴族たちは軍務卿を煽て上げ、悪役を押し付けてウェンディロフを侯爵叙爵の阻止に成功する。それでも言ってみれば見習い貴族ともいえる子爵では、インダミトの侯爵に太刀打ちできるはずもない。ニムファの思惑とは別に、コリンボーサはウェンディロフに伯爵の地位を用意していた。

そして、ラシアスの前線派遣師団が行軍を開始しようとしたそのときに、見送りに来ていたニムファの名代から、ウェンディロフ司令官の伯爵への叙爵が仰々しく告げられる。軍の志気は天に届かんばかりに上昇し、ウェンディロフはそのとき得意の絶頂にあった。

最北の蛮族を討ち果たし、返す刀で北の民全てを平定しての凱旋ならば、ニムファの婚約者へ立候補しても誰が文句を付けられよう。彼の頭の中には、両大陸の覇者として、全ての民に君臨する自分の姿しか見えていなかった。

パーカホでは、短い晴天の間に雪掻き作業が盛大に行われていた。牛馬を利用し、鋤を応用した除雪機が活躍し、集落の外に雪の山を築いていく。派遣軍の中から黒呪文の使い手を選抜し、積み上げられた雪を片っ端から火の呪文で溶かしていた。

ルティの直感では、あと数日もすれば牛馬すら吹き飛ばされかね

ない地吹雪がやってくる。村の古老も同意見で、ルティの見解を支持していた。

いかにヴァンパイアといえど、物理的に吹き飛ばされては死なないまでも行軍は無理だ。暫くは雪に閉ざされるとはいえ、平穏な日々が続くと思われていた。

山岳地帯に、再びラシアス軍が足を踏み入れた。前回は連合軍の一部隊であり、現地との融和が最優先されていたため、それなりに紳士的に振る舞っていた。だが、今は北の民への蔑視を隠そうともしない、傍若無人な集団に成り下がっている。

ワラゴは集落を代表して、ウェンディロフに面会していた。

天候が優れないことの危惧、ラシアス軍の装備が厳冬期の活動には、あまりにも軽装であることへの危惧を伝えるためだった。さらには部隊の一部に、パーカホまでは目印ができているはずという、楽観的な予測により厳冬期の北の大地を甘くみる雰囲気が見て取れたからでもあった。ワラゴは、思い上がった南大陸の住人が、いくら凍死しようと知ったことではないが、命令を盲信させられ何故死ななければならないか理解できずに死に行く者を、少しでも減らしたいだけだった。

勝手に死ぬのはどうでも良いが、死体が春以降に疫病の温床にでもなったら、目も当てられない。

最後の本音を隠し、せめてパーカホまで道案内をすると申し出たワラゴに返ってきた言葉は、耳を疑うものだった。

「余程、カネが欲しいのか？

見ろ、この晴天を。

我らは知っておるぞ、貴様等がカネを欲していることなど。

道案内にどれほどふっ掛けるつもりだったか、言えまい。
我が精強なる師団に、北の民のような薄汚れたモノは必要ない。
食料だけ供出していれば、殺さずにおいてやる。
ありがたく思え」
師団の下級参謀に言われ、ワラゴは呆れかえり、死ぬなら誰にも迷惑を掛けずに死ねと、腹の中で毒づいて司令部を後にした。

数日の間、ラシアス軍は山岳地帯の食料を食い荒らし、平野部へと降りていく。
ルティが予測した吹雪を運ぶ天候の急変が、牙を研いで待ちかまえていることを、全能感に酔いしれたウェンディロフに見通すことなど、無理な相談だった。短い間とはいえ北の大地に滞在した兵も、軍隊という集団生活の中で命令に従って行動していただけであり、北の大地での生き方を身に付けていたわけではなかった。
後に『死の彷徨』と呼ばれることになる、無謀と無策の見本市とも評される行軍が始まった。

最初から躓きの連続だった。
パーカホを避け、一気に山脈地帯まで進出する計画を立てたのは、ランケオラータやラルンクルスの鼻を空かしてやるつもりだったからだ。まず、山脈地帯の哨戒拠点を占拠し、そこに展開する部隊を指揮下に収めた後にパーカホへ赴き、ラルンクルス解任と、ウェンディロフの連合軍総司令官就任を宣言するつもりだった。
後は軍事力を背景に、ランケオラータから北大陸総督の地位を奪い取り、切り取り放題に利益を貪る気でいた。

しかし、山岳地帯を降り、二日目の行程に差し掛かったところで、早くも北の大地は牙を剥いた。
それまで晴れていた空に、西の彼方から暗雲が広がっていく。あ

っという間に薄暗くなっていく周囲を見て、ラシアス北部出身の兵が吹雪の到来を告げた。

いかに精強を誇るとはいえ、生身の人間が吹雪の中を行軍できようはずもない。早速雪洞造りが始まった。ウェンディロフの指揮下、下級兵が一斉に雪を掘り始め、見る見るうちに雪洞が作られていく。

雪がちらつき始め、焦りの色が見え始めたウェンディロフが兵を急かす。兵たちは、氷点下に下がり始めた気温と風の中、汗みずくになって雪を掘り続けていた。

やっとのことで師団全員が待避できるだけの雪洞が完成し、部隊の掌握もそこそこにウェンディロフは雪洞に潜り込んだ。しかし、汗に濡れた衣服を交換する間もなかった下級兵たちには、一度下がった体温を上げる術がない。司令部や騎士階級の者が待避するための雪洞が優先されたため、下級兵が自らのために掘った雪洞は、横穴を掘る余裕もなく、ただの垂直な穴でしかない。

頭上からは雪を巻き込んだ冷風が吹き込み、兵士たちの体温を奪い去っていく。煮炊きをしようにも、踏み固められただけの雪の床は不安定で、火を熾せばたちどころに溶け始め、溶け出した水に火は消されてしまった。冷え切ったレーションを辛うじて腹に収めた兵たちは、寒さを凌ぐため身を寄せ合い、立ったまま足踏みを続けることで強制的に体温を維持しようとしていた。

兵たちが寒さと戦っている最中、ウェンディロフと幕僚は、狭いながらも快適な雪洞の中にいた。こちらも充分な火を熾すことは適わなかったが、風が吹き込まないだけでも兵たちの雪洞とは天国と地獄の差がある。辛うじてウェンディロフのレーションを温める程度の火は維持できたが、幕僚たちのレーションは冷えたままだった。熱いほどに温めなければ、もしかしたら全員の分を仄かに温めることくらいはできたかもしれなかった。だが、大勢に傅かれる生活に慣れたウェンディロフに、部下への気遣いを求めるなど、雪の中に

炎を求めるより無理な話だった。

体内時計では夕刻を過ぎていたが、熱く垂れ込めた雪雲と吹き荒れる吹雪で、外の明るさからは時間を推し量ることは不可能だった。突然吹雪く風の音がやみ、一気に雲が晴れていく。月が顔を出し、辺りを白く染め上げる。

兵たちは、これでようやく一息つけると安堵の表情に変わり、雪洞の横穴を掘る作業に取り掛かった。吹雪の中では横穴を掘ることはできても、掻き出した雪を縦穴から外に排出することはできない。風避けもない吹雪の中に出て行けば、あっという間に吹き飛ばされるか、雪に埋められるかの二つしか選択肢はない。

絶望的な状況から一転し、快適な塒を手に入れられるという希望は、兵たちに見えない力を与えていた。やがて、雪洞が完成し、一夜を快適に過ごすには充分すぎるほどの空間を、兵たちはやっとの思いで手に入れた。筈だった。

夜気を切り裂き、ウェンディロフの号令が響きわたった。

彼は、行軍の遅れに焦りを感じていた。半日以上雪洞で過ごしていたため、睡眠も充分取り、気力も体力も完全に取り戻したウェンディロフは、天候が快復したこの状況で行軍を再開しようとしていた。

幕僚の一部は兵たちの体力回復が先であると進言したが、下級兵の状態など想像すらすることのないウェンディロフには一顧だにされず、却って叱責を受けただけだった。

ウェンディロフにとって、平民階級の下級兵など、命令すればその通りに動く駒程度の認識でしかない。そこには感情もあれば、体力も消耗する人間という認識すらなかった。

庶民階級から見れば雲上人である貴族の命令に逆らうわけにもいかず、兵たちはようやく手に入れた快適な雪洞から這い出し、隊列を組んでいく。行軍が再開され、月明かりの下、兵站任務に就いていた部隊を教導に隊列は進んでいった。

だが、このとき、舗装工事の際に目印になることを期待して建てられた雪除けの壁は、南大陸の常識レベルの高さと強度しか持っておらず、厳冬期の風雪に埋め尽くされるか破壊し尽くされていた。兵站任務に就いていた工兵たちは万が一を考えて、壁の他に高い柱も立てており、それが辛うじて雪原に頭を覗かせているだけだった。

ラシアス部隊は壁の建設までしか北の大地におらず、柱については計画を聞かされていただけだった。

雪除けの壁が見つからず道を失い掛けていたが、柱について思い出した兵が、雪原に頭を覗かせる柱の列に気が付いた。だが、月明かりの下での視界では、場所によっては二本目の柱を目視することは困難だった。夜間の移動など、端から考慮する必要もないため、日中の視界しか意識していない感覚で、道標となる柱は建てられていた。

一本の柱を起点に斥候が次の柱を探し回り、それが確認されてから全軍が行軍するという尺取り虫のような前進と予定外の休憩が繰り返される。しかし、吹雪が止んでいるとはいえ、凍り付くような気温の中での立ったままでの休憩は、兵たちの体力を気付かないうちに確実に奪っていた。

山岳地帯からパーカホを中心とする集落群までの間に、道標となる雪避けや柱をくまなく設置する計画ではあったが、雪に妨害され総てを繋げるまでには至っていない。柱か建てられていない部分もまだ多く、ラシアス軍は徐々に道を失い始めていた。

夜間行軍で疲労を溜めていたラシアス軍に、さらなる試練が課される。

夜が明けたとき、彼らが見たものは、何の目印もない一面の雪原だった。それは、全ての命を飲み込もうとする、白い地獄と言い換えても良かったかもしれない。

夜の間は安定していた天候が、日の出とともに崩れ始め、太陽の方向を見て進軍の方位を求めることもできなくなっていた。突き刺さるような風雪は、ラシアスの冬を過ごせる程度の防寒着をあざ笑うかのように、兵も将官もひとしなみに凍り付かせていく。

天候の急変に対処が遅れ、雪洞を掘る暇もなく、全ての将兵は吹雪に晒されることになってしまった。

ウェンディロフが作業の遅れを大声で罵るが、声は吹雪にかき消されるだけだった。

兵たちは督戦されるまでもなく、雪洞を掘るという自然との闘いに没入している。しかし、それは既に上官たちに快適な雪洞を提供するための作業ではなく、自らの生き残りを賭けた戦いとなっていた。

辛うじて風の直撃を避けられる程度に掘り下げられた雪洞に、兵を押し退けてウェンディロフと上級幕僚たちが潜り込む。縦穴だけとはいえ、吹き曝しよりは遙かにマシだが、それでも寒気を凌ぐ役には立っていない。

兵たちは、絶望的な面もちで自らのための雪洞掘りに勤しむが、できる側から上位の者が縦穴を奪い取っていく。

昨夜無理な行軍を行わず、朝まで雪洞で過ごしていれば、この吹雪もやり過ごせたものをという怨差の声があちこちから上がり始めた。だが、その声は既に雪洞に潜り込んだ上級指揮官に届くことは

なく、虚しく吹雪の轟音にかき消されるだけだった。

吹雪が小康状態になった隙に、兵たちが潜り込んでいる雪洞では、一斉に横穴掘りが始まった。だが、自らの身体を使って何かを作り出すなどという発想が皆無のウェンディロフを含む上級将校は、舞い込んでくる雪を踏み固め続けるだけが精一杯の対応だった。横穴を掘る余裕がないだけでなく、横穴をどのように掘れば良いかという、根本的な知識の欠落もあった。

やがて、吹雪はまたその牙を向き始め、徐々に浅くなる縦穴に篭もって震えている上級将校を、あざ笑うかのようにその勢いを増していた。

犬橇を駆るワラゴを始めとする山岳地帯の民たちは、気が気ではなかった。

暴言を残して去っていった軍が、吹雪の中に潰え去ろうが、そんなことに良心の呵責はない。忠告を無視し、北の民ですら外出を躊躇う天候の中に踏み出して遭難するなど、自業自得以外の何物でもないからだ。

だが、一万の死体が春の訪れとともに腐敗し始め、野生動物に食い尽くされるならまだしも、水源を汚染するような事態でも招いたら目も当てられない。

せめて引き返させるか、パーカホまで導くかしなければ、北の大地に余計な災厄を招きかねなかった。

六日間吹き荒れた吹雪が去り、晴れ渡った空の下、ラシアス軍を追いかけることになったのだった。

山岳地帯を抜け降りて、平野部に入ったワラゴたちは、雪原をさまよう小規模な集団を発見した。

今にも全員が倒れそうで、足取りが覚束ない。甲冑や剣、槍といった武具はとうに捨て去られ、死者から剥ぎ取ったと思われる外套を重ね着している。一見すると遭難した旅人のようだが、紛れもなくラシアス軍の生存者だった。何故なら、この時期に好き好んで白い地獄に足を踏み入れる北の民がいるはずもなく、正常な判断力を有する南大陸の住人であれば、そもそも北の大地をこの時期に訪れようとするはずがない。

パーカホや山岳地帯に展開し、兵站任務に当たる連合軍も、この数日は吹雪をやり過ごすために駐屯地に篭もって動いていなかった。

犬橇を見つけたことで安心したのか、ラシアス兵たちがその場にへたり込む。中には雪の中にのめり込んで、動かなくなる兵も遠望された。

慌てたたワラゴたちが犬橇を急がせ、動くこともままならなくなった兵たちに駆け寄る。そして、救助された兵たちの口から、ラシアス軍の遭難が告げられた。

ワラゴたちが駆け寄ったとき、雪の中にのめり込んでいた三人の兵は、既に息を引き取っていた。へたり込む六人の兵も気息奄々の状態で、まともに口を利けた者は二人だけだった。誰もが酷い凍傷を負っており、生きて戻れたとしても軍への復帰どころか、日常生活にも大きな支障が出ることは確実に思われた。それどころか、壊死した四肢を切断しなければならない者も多く、その処置中に命を落とす確率も決して低くはない。

凍傷を負ってすぐであれば、治癒呪文で治療することも可能だったのだろうが、完全に壊死してしまっていては、それも適わなかった。軍には白呪文の使い手がいたはずだが、極限状態で睡眠不足ともなれば精神力の消耗も激しく、一度も呪文を行使しなくても使用回数限界を超えたと同様の状態に陥っていた。

六人の生存者を乗せた二台の犬橇が、最も手近な山岳地帯の集落目指して駆けて行く。

それとは別に一台の犬橇が、救援を求めるためパーカホに急行する。

現場に残ったワラゴを含む十二台の犬橇は、生存者の証言を基に捜索の輪を広げ始めていた。

三日間の捜索で、ワラゴたちは五十名近い生存者を救出していた。そして、その百倍以上の死者の群れも、深い雪の中から発掘している。生存者は一人の例外もなく酷い凍傷を負っており、そのまま死んでいた方がマシだったと泣く者すらいた。発見された死者のほとんどは、山岳地帯と平野部の境界付近に集中しており、道を失って同じ所を堂々巡りしていたことを窺わせた。飢えていたはずなのに、その背嚢からは手付かずのレーションが発見されたが、全ては凍り付き、食用の役には立たない状態だった。

師団としての統率は、最初の吹雪に襲われ野営した辺りから徐々に失われ、遭難が確定した頃には既に軍としての体裁は失われていたらしい。生存者の証言から、ウェンディロフが命令の発令と撤回を繰り返し、思いつきの対処命令に終始したため、可及的に兵の被害が重なり、ついには指揮系統が崩壊する様が生々しく伝えられた。

ある程度雪に慣れているはずのラシアス兵が、なぜ雪原で遭難したのか誰もが疑問に思ったが、基本的に冬季の軍事行動は想定されておらず、雪中行軍のための装備も経験も、全てが不足していただけだった。

せっかく雪洞を掘り、吹雪をやり過ごそうとしても、天井が薄いために降り積もる雪の重さに耐えかねて潰れ、そのまま生き埋めに

なった者や、充分な厚さを確保したが、中で過剰に火を熾し、雪洞の崩落を招いた例が多数見られた。中には充分な広さと強度も確保し、火の使用も最小限に留めたにも拘わらず、疲労が限界を超え全員が眠り込んだ隙に、雪洞の入り口が降雪で塞がれ、窒息死した集団もあった。

さらには、幻覚に惑わされ、雪原の真っ直中で狂死したと見られる遺体も多数見られ、中には極寒の中で全裸になった遺体すらあった。

死者に対して甚だ不謹慎ではあるが、雪中の遭難で見られる死に方の見本市の様相を呈していた。

現在ウェンディロフは救出も遺体の発見もされていないが、おそらくはその生存は絶望的とみられている。一万名に及ぶ師団が雪原に消え、約半数に相当する遺体が発掘された今、残る半数における生存者の割合が劇的に上昇するとは思えなかった。

ワラゴたちは各集落を結ぶ街道上にある避難小屋で起居しながら、天候の具合と相談しつつ捜索に奔走していた。

いくら後足で砂を蹴って出て行ったとはいえ、目の前で死なれては目覚めが悪いという心理と、生存者の惨状を見るにつけ、このまま放置するには忍びないという憐憫の情が彼らを動かしていた。もっとも、身の程知らずの自業自得のせいで、疫病が発生したり、貴重な水源を汚染されては堪らないという現実的な理由がワラゴたちを突き動かす最大の動機だったが。

雪の中から掘り出された遺体のほとんどは、芯まで凍結しており、手荒に扱うと首や間接部が簡単に砕けてしまっていた。

だからといって解凍するような場所も燃料もないため、避難小屋の近くの雪原に大きな雪濠を掘り、ひとまとめにして雪をかぶせ、

春まで凍結保存するしかなかった。少なくとも、水源の上にある遺体だけは、全て回収しないことには、春以降にどんな災厄が訪れるか分かったものではなかった。

さらに数日が経過し、山岳地帯の駐屯地やパーカホ周辺の駐屯地から、連合軍の兵が遺体回収に到着し、ワラゴたちは引き上げていた。ラルンクルスの命令で、ワラゴたちには必要以上の日当と、ラシアス軍が食い散らかしていった食料に対する賠償金が支払われていた。

その後連合軍の兵たちは時折襲う吹雪を避難小屋や雪洞でやり過ごしながら、生存者の捜索や遺体の回収に努めたが、十五日ほどで作業は打ち切られ、約千人が生存絶望の行方不明とされていた。

現場のことなど知ろうともせず、適切な判断を放棄した片や国軍の最高司令官、片や現場の最高指揮官という二人の指導的立場の者がもたらした悲劇は、こうして幕を閉じようとしていた。

ラシアスの女王ニムファは、全ての責任をウェンディロフを補佐する立場の幕僚に押し付け、強引な命令を下した自らは何の責任も取らずにいる。それどころか無能な騎士階級の幕僚たちのせいで命を落とす羽目になったとして、ウェンディロフに贈侯爵位を追贈し、その功績を讃えることまでしていた。もちろん、功無く雪原に軍を潰え去らせたウェンディロフに対して、腸が煮えくり返る思いだが、彼に責を負わすことは自らの任命責任を問うことになり、これを避けるがためだった。

騎士階級や庶民階級に、怨差の声が静かに広がり始めたことを、ニムファが気付くことはなかった。

「宰相に命じます。
ウェンディロフ侯爵の弔い合戦です。
至急兵を集め、北の民を討ちなさい」
決然としたニムファの声が、謁見の間に響きわたった。

このままで済むと思うな。これがニムファの思いだった。
寵愛の忠臣を無惨に殺され、おとなしく引き下がるほどラシアスは怯懦の国ではない。既にニムファは、冷静な思考力を失っていた。
あのウェンディロフがむざと殺されるはずもなく、また雪道などで遭難するとも思えない。待ち伏せにあったか、案内人が裏切ったに違いないと、ニムファは決めつけていた。

「お待ち下さい、陛下。
お怒りの程は解ります。
ですが、生還した兵からの報告では、北の民は此度の惨禍に一切係わり合いがないとのこと。
それを弔い合戦と称して討つなど、他の三国家が見過ごすとは思えませぬ。
そのための共同統治機構なのではございませんか。
不興を承知で敢えて申し上げます。
兵を集めることに異存はございませんが、再度北の大地へ兵を進めるのは、お考え直しいただきたく存じます」
必死の形相でコリンボーサが諫める。
こうなっては、左遷など覚悟の上だ。

いくら権勢を振るおうにも、民が疲弊しきっては税収も期待できず、現在の豪奢な生活など適わなくなる。それ以上にラシアス軍が北の大地に侵略したら、他の三国家がどう動くか判らない。現在の連合軍の派遣や北の民への支援は、文書化された成分条約や協定で

はなく、暗黙の了解の内であり、尊守義務がないといえばそれまでだ。だが、ラシアス単独での派兵の矛先が、山岳の民や平野、山脈、中央の民に向けば、他の三国家はラシアス懲罰に動くことは想像に難くない。

交易ルートがラシアスをバイパスする程度ならまだしも、今まで受けていた食料を始めとする援助の打ち切りや、武具などの物資購入に係る優遇措置の撤廃など、ラシアスを締め上げる方法はいくらでもある。

しかし、それで済めばまだいい方かも知れない。万が一にでも北の大地に展開する連合軍と干戈を交えるような事態でもあれば、三ヶ国から宣戦布告を言い渡されかねない。

そうなれば、ラシアスは南北から挟撃され、亡国の憂き目にあうだけだ。女王の八つ当たりの代償としては、あまりにも大きすぎる。

百歩譲って派兵を黙認されたとしても、現状に追加してさらに一個師団を編制するなど、国庫が持たない。

カネなど民から搾り取ればいくらでも湧いてくると思っているほど、コリンボーサは莫迦ではない。だが、ニムファはそれを理解したうえで、金貨の増産で対処しようとしていた。

「陛下、他の三国家がどう動くか以前に、新たな一個師団規模の増設は、国庫を破綻させます。

今回犠牲となった上級指揮官の遺族への保証や、兵の家族への一時金だけでも莫大な予算を喰っており、多くの公共投資が先送りになりました。

その状態で増設など、国が破産いたします。

このような国情で、国債を引き受ける国など、あろうはずもございません」

財務卿が悲鳴に近い声で訴えた。

「誰も彼も腰抜けぞろいですか、この国は。
あのような統治機構など、私は認める気はありません。
そのような体たらくでは、泉下の贈侯爵が嘆きましょう。
あなたたちが抱える金を、金貨に鋳造すれば済むことです。
足りなければ金山に増産を命じなさい」
ことも無げにニムファは言った。

「冗談ではございません！
必要以上の金貨が市場に流れ込めば、カネの価値が下がり、物価の急上昇を招きます！
そうなればラシアス一国の問題に留まらず、南大陸全土で経済が崩壊、戦乱への引き金となりますぞ！
どうか、それだけはお考え直し下さい」
暫く真意を掴みかねていた財務卿が、事態の深刻さに悲鳴に似た叫びを上げる。

貴族たちは、自分の権勢を誇示するために、装飾品としてやインゴットのままで多くの金を保有していた。それを供出しろとニムファは言っている。
正当な対価を払った結果、その金が市場に出回るのであれば問題はないが、無償で供出された金が金貨として出回れば、恐ろしいほどのインフレーションが起こることは火を見るより明らかだ。

「戦乱渦巻くならば、我が国にとっては結構なことではありませんか。
各国の常備軍は、北の大地。
であれば、南大陸は我らが切り取り放題。
王に対して反論は不敬と思いなさい。
これ以上は許しません。

従えないのであれば、職を辞し、国を去りなさい。
私に必要な人材は、私の政策を忠実に実行する、行動力に溢れた人物だけです」
そう言うなり、ニムファは席を立つ。

取り残された閣僚たちは、ある者は暗澹たる面持ちで、ある者は深い懊悩に悩む面持ちで、ある者はさらなる利権獲得に舌なめずりしながら、女王の背を見送っていた。

「財務卿、私はとんでもない化け物を、育ててしまったのかな。
あの国を想う少女の純真な面影は、今は欠片も見えはしない」
コリンボーサは思わず声に出して呟いた。

「宰相、滅多なことを仰いますな。
私は職を辞し、抗議といたします。
宰相には、まだまだ歯止めとしてお働きいただかなければ……」
財務卿は寂しそうに肩を竦めた。

「卿は狡いな。
私に全てを押し付けるお積もりだ。
ま、命あっての物種。
毒を喰らわば、か」
宰相と財務卿の会話の裏では、女王と軍務卿が組織した親衛隊が着々と権力を握っており、財務卿捕縛に向けて動き出していた。

第75話

ある日の夕食後、ルティの部屋でティアと二人炬燵に潜り込んで酒を飲みながら、世間話に興じている最中に、突然ルティが言い出した。

「何でアービィって手慣れてたんだろう？
まさか、ティア……」
ルティがティアを睨む。

「ば、莫っ迦じゃないの？
何言ってんのよ、そんなわけないじゃない！
あたしだって、まだ命は惜しいわよっ！」
ティアが顔を真っ赤にして言い返す。

「じゃあ、いつの間にか娼館にでも行ってたって言うの？」
負けじとルティも言い返した。

「あんたねぇ、恋人を信じてあげなさいよ。
だいたい、二十五歳まで異世界で生きてたんでしょ、アービィは。
あっちでそういう経験があったって、何の不思議もないじゃないのよ」
呆れ顔になったティアが言い捨てた。

「そうよね。
考えてみれば、そうよね。
でも、何か釈然としないわぁ」
もとより、ルティはティアを疑っているわけでも、アービィの娼館通いを疑ったわけでもない。

今まで縁のなかった艶っぽい話ができるようになって、はしゃいでいるだけだ。

「何を二人で顔赤くしてるのよ？」

レイが酒瓶を抱えて入ってきた。

違う家を借り上げていたが、時々こうして遊びに来ている。レイ自身はまだ酒は飲まないのだが、二人の飲みっぷりを知っているだけに、遊びに来るときはいつも酒瓶持参だった。

「レイ、ランケオラータ様はどうなのよ？」

何の前振りもなしに、ルティがレイに話を振った。

「何のことよ、いきなり？」

状況が把握できていないレイは、自分の茶を注ぎながらも困惑の表情を浮かべる。

「夜の生活のことよ。

よ、る、の」

ティアが止める暇もなく、ルティがあからさまに聞いた。

「な、何、急に……

だって、私たちまだ結婚してないのよ！

そんなこと、あるわけないじゃないの！」

今度はレイが顔を赤く染めた。

「やめなさいって言うか、はしゃぐんじゃないの、ルティ」

ティアがルティを窘めるが、ルティの暴走は止まりそうもない。

「どうしたのよ、ルティ。

ニヤけまくっちゃって。

ああ、さては……」
レイが察したところで、ルティが完全に暴走モードに突入した。
ルティは聞かれもしないのに、アービィとの一夜を事細かに話し始めた。
ティアにとっては、別に驚くようなことでもないのだが、レイにはまだかなり刺激が強すぎたらしい。
アービィが酒瓶と干し肉を抱えて入ってきたとき、その姿を見るなりレイの顔がまた真っ赤に染まる。

「不潔よ……
不潔よ、アービィっ！
信じらんないっ！」
そう言うなり、レイは部屋を飛び出していった。

「ん？
レイ、どうしちゃったの？
お風呂は入ってきたんだけどなぁ」
そう言いながら、アービィはルティの横に腰を下ろし、炬燵の上に干し肉を広げ始めた。

「あんたらは、わざわざ狭くしなくてもいいものを……」
ティアは、予定調和とも言うべき二人のバカっプルぶりに、頭を抱え込んでいた。まあ、幸せそうでいいけどさっ。

翌日、遭難者の証言からロベリア王の崩御とラルンクルスの解任を知らされ、その善後策を練るためにルムの家に主要な面々が集まった。
もちろん、公式の場においていちゃつくような莫迦は、一人もい

なかった。

「先王陛下の崩御は、この地にいる者を代表し、心よりお悔やみを申し上げる。
さて、ラルンクルス殿の処遇だが。
私としては、解任状が届いていない以上、効力を発揮していないと判断する。
引き続き、連合軍の指揮を執っていただきたいと考えるが、皆様はいかがか。
忌憚のないご意見を伺いたい」
プラボックが自らの考えを述べた。

現実問題として、ニムファ女王により解任状が書かれた時点で、その命令は効力を発揮しており、それが届くまではただの誤差とみなされる。プラボックの意見は詭弁に過ぎないことは、当人を含めその場にいるもの全てが理解していた。

「消極的賛成、といったところですかな。
私は、ニムファ女王からの解任状は届いていないが、効力はあると考える。
だが、現実問題として、次期指揮官が到着していない。
従って、それまではラルンクルス殿が指揮官で問題ないと思う」
ランケオラータは、詭弁には与しないがラルンクルスの留任は当然だと考えている。

「皆様のご好意はありがたく存じます。
解任状の存在が明らかになるまでは、本職に留まるべきと小官は思慮いたします。
解任状の存在が認められたなら、小官は職を退き、次席指揮官が指揮を継承すべきであります。

もちろん、次期指揮官が到着した時点で、指揮権を移譲することになります。
本職に未練があるわけではございません。
どうか、理に適ったご判断をお願いいたします」
ラルンクルスは、ニムファへの忠誠心では右に出る者はいない。
ニムファに解任と言われたなら、黙ってその命に従う覚悟はできている。

救助された者の証言では、解任状は次期指揮官ウェンディロフが持っていたという。その当人と解任状が行方不明とあっては、ラルンクルスとしてはどうしようもない。間違いなく解任状は書かれたとラルンクルスは信じているが、ないものはどうしようもなかった。

「ラルンクルス様のご意見そのままで良いのではないでしょうか。
いずれ、次期指揮官が送り込まれてくるとは思いますが、それまでは現状維持ということでどうでしょうか。
ウェンディロフ様の安否が確認され、解任状の行方がはっきりとするか、新たな解任状が届くまではラルンクルス様に指揮を執っていただければ良いと思います」
ティアが意見を述べる。

個魔獣的にはウェンディロフにこの地に来て欲しくはない。
またアービィを付け狙うことは確実だ。何度もあのときのような手が通用するとも思えないし、行軍がすれ違うだけではないので、どこで鉢合わせするかわからない。人の死を願うほど自分の性根が腐っていると思いたくはないが、救助されたらラシアスに送還されて欲しいと思っていた。

「私もティア様に同意見だ。
ラルンクルス殿に指揮を執っていただくことに異議を唱える理由

がない。
解任状が着てから考えればよいことだ」
ルムがティアの意見を支持する。
当然、ティアが言ったからなどという追従ではなく、ルムが自ら考えての意見だ。先に正論を言われてしまえば、それを支持するとかないが、プラボックはわざとルムに向かって意地の悪い笑みを向けていた。

「アービィ、ルティ、特に意見はないかね？
ない様であれば、ラルンクルス殿の処遇に変更はなし。
引き続き指揮をお願いする。
ということでよろしいかな？」
プラボックが決を採る。

細かい見解の相違があるとはいえ、結論が異なるわけではない。反対意見が出るはずもなく、ラルンクルスの指揮権に変化はなかった。ラルンクルスはプラボックが支持してくれているとはいえ、解任状の所在が明らかになった時点で職を辞する決意を固めていた。だが、どの面下げてニムファが待つアルギール城に戻れば良いか、ラルンクルスには解らなかった。ニムファの信を失っているのだとしたら、ラシウスに奉公できることはもうない。いっそ、国を捨て、北の大地で生きるのも良いかと、ラルンクルスは漠然と考え始めていた。

「おい、ヘッテ、お前の姉上は壮大な自爆をしたみたいだな。
仕事が増えた。
どうしてくれる」
笑いを噛み殺しながらビースマック代表フィランサスが言った。
アルギール城の貴賓室では、ベルテロイ駐在武官たちによる共同

統治機構の初会合が執り行われている。

「フィランサス殿、公式の場でそのようなご発言はいかがなものかと存じますが」

やはり、笑いを隠せないストラー代表アルテルナンテが窘めるが、まるで説得力がない。

「それで最初の議題が、連合軍次期指揮官の選定ということなんだ。ヘッテ、こっちで決めて姉上が納得するのか？」

インダミト代表パシュースが聞く。

アルテルナンテが一応睨みつけるが、どこ吹く風といったところだった。

「皆様のご推薦を得て決する指揮官です。女王といえど、それに反対できません。最北の蛮族への対処につきましては、共同統治機構に一任すると、四王の連名でご承諾を得ております故。

なんか言ってきたら張り倒す」

公式の場での発言に終始しようとしたラシアス代表ヘテランテラだが、最後までは我慢できなかった。

ヘテランテラのやるせない表情に、笑いが弾けた。

「ラシアス国の騎士団長を解任する権限は、ニムファ陛下がお持ちです。

従いまして、ラルンクルス殿の騎士団長という職は解かれるという点におきましては、何も問題はございませんし、我々は口を挟める立場ではございません。

しかしながら、連合軍指揮官の解任という点になりますと、ニムファ陛下にその権限はないと考えますが、いかがでしょうか」

場の雰囲気を引き締めるため、アルテルナンテは公式の場に相応しい言葉遣いで発言する。

「元々がラルンクルス騎士団長を連合軍総指揮官に推したのは、我々の決定でした。

ニムファ陛下には、それを解任する権限はないと考えて問題ありません。

従いまして、ラルンクルス殿の騎士団長解任について、我々が口を挟むことはできませんが、連合軍総指揮官解任は無効であると言って差し支えないと考えます」

さすがにいつまでも砕けたままでいけないことくらい、他の代表たちも理解している。

フィランサスが口調を改め、考えを述べた。

「小官も、フィランサス殿に賛成致します。

次期指揮官を選出する必要を、共同統治機構は認めません。

ニムファ陛下が新騎士団長を任命し、北の大地へ派遣することに我々は積極的に反対意見を述べることはできませんが、その人物が連合軍次期総指揮官への就任ということは、認める必要はないと考えます。

また、ラシアス軍が新たに編成され、これは貴国の国情を鑑みるに、失礼ながらあり得ないことと愚考致しますが、北の大地へ派遣されるという事態が起きた場合、我々としてはそれを制止すべきだとも考えます。

どうしても派遣を止められないというのであれば、連合軍の指揮下に入ること。

これだけは譲るわけには参りません」

パシュースが言った内容は、再度の悲劇を繰り返させないためではあるが、万が一強行するなら実力を持って追い返すとの牽制を含んでいた。

「小官といたしましても、皆様のご意見に異議はございません。これをもちまして、ラルンクルス殿の騎士団長解任と、連合軍総指揮官留任に付いての討議は終了とさせていただいてよろしいですか？」

莫迦女にどうやって認めさせるか、ヘテランテラは今から気が重い。

どうあっても認めさせるだけなのだが、あの莫迦女が次に何を言い出すか、それが分らない分説得には気を遣いそうだった。

「もう一つ、皆様に諮りたいことがございますが、よろしいでしょうか？」

ヘテランテラが席を立とうとした三人を止めた。

「また、姉上絡み、か？」

パシュースが頭を抱えつつ聞いた。

「ああ、そうなんだ。

次から次へと、あの莫迦女は……

いや、国家の一大事に、それどころか南大陸全土に関わる問題です」

そう言ってヘテランテラは、宰相コリンボーサがリークした、一個師団の急編成と、貴族たちが所持している装飾品やインゴットを無償で供出させ、それを貨幣に鋳造するという命令を説明した。

「それは、拙いなんてもんじゃないぞ」

「一時的には南大陸は好景気ね。

でも、そのあとどうなるか。

考えたくもないわ」

「最初は、ウチは大儲けだろうが。
一瞬だな。
一万人分の武具を急に作れというのなら、鉱山や加工場、輸送に関る商人が人を大量に雇い入れる。
だが、それで終わりだ。
需要が続くわけじゃない。
需要がなくなれば鉱山も加工場も輸送業も、要らなくなった労働力は切るだろう。
そのうえ、カネがだぶつけば……」
三人がそれぞれに呟く。

「そう。
一時的な好景気に南大陸は沸くだろうが、そのあとは失業者の群れに物価高騰。
そして貨幣価値の下落。
民の生活は立ち行かなくなるな」
ヘテランテラが三人の呟きを受け取った。

「しかし、貨幣鋳造権は国権だ。
これに干渉はできないが……
家臣に私財供出を強制する専制を理由に、是正勧告がいいところだろう。
しかし、是正勧告を出したところで聞く耳など持たなそうだな」
パシュースが考え込む。

「情報源も秘匿しておかないと、粛正なんてことになりかねないわ。
今、コリンボーサ宰相がいなくなったら、あなたのお姉様を止める人はいなくなるわね」
アルテルナンテの危惧は正しい。

下手に是正勧告を出せば、どこから情報が漏れたかの犯人探しが行われることは間違いない。

そうなったとき、ニムファが絶対権力に酔いしれた状態で癇癪でも起こせば、コリンボーサや財務卿を始めとした貨幣の増産反対派が、一気に粛正されかねなかった。

南大陸が一丸となって北の民を支え、最北の蛮族と雌雄を決しようというときに、南大陸自体が騒乱を引き起こしていたら、それどころではなくなる。極力穏便に、ニムファを排除するような過激ではない方法で、事に当たる必要があった。

「やはり、通商制限か。

しかし、商人たちの正当な商業活動を、国が規制するわけにもいかん。

規制したところで、彼らも生きるためだ。

裏で取引を始めるだけだろう。

それであれば、経済制裁か」

ビースマックやインダミトは、商業活動が止められたら生きてはいけない。ビースマックは武具を大量には生産できないが、素材をインダミトに輸出し、インダミトはそれを元に製造販売していた。フィランサスも考え込んでしまった。

「まずは、是正勧告を出すべきだろう。

それもなしにいきなり経済制裁では、いくらなんでも筋が通らん。

幸か不幸か、財務卿が辞意を漏らしている。

身の安全と引き替えに、そうだな、一時的に北の大地に身を隠しても良い、情報源になってもらうか」

ヘテランテラは、経済制裁による一時的な不況は甘受するつもりだ。

南大陸全土を巻き込んだ、世界恐慌より数段マシだった。

ニムファの暴走を放置すれば、間違いなく南大陸にはインフレの嵐が吹き荒れる。一時的な雇用増大や景気の好転は見られるだろうが、その後には悲惨な状況が待っている。好景気が過ぎれば失業者が町に溢れ、市場ではカネがだぶついた結果、物価は上がる。賃金の上昇も追いつけばいいが、失業者たちはカネを得る手段を失っているのだ。その状況に需要のさらなる減少を呼び、さらに失業者が増える。

結果、富が偏り、人々の不満は膨れ上がるだろう。

社会に不満を持った失業者が増大すれば、暴動に発展する恐れもある。それは、新たな戦乱の引き金となりかねない、危険な状況だ。

「いや、是正勧告はするとしても、今時点では早すぎる。下手にやって、裏に潜られたら目も当てられん。この際、後戻りできないところまで引き出して、叩く。南大陸全土が納得する形で、是正勧告を出そう。財務卿には護衛をつけておくべきだな。ドーンレッド殿の行方は、まだ不明か？彼に付いていた、リムノくらい腕の立つ者が欲しいんだが」

パシュースは、貴金属の供出まではさせるべきだと主張した。鋳造が始まってしまえば手遅れだが、貴金属の供出が始まった時点で財務卿に悪役になってもらう。

四人の各国代表は、公式な場であることも忘れ、言葉遣いを改めることなく話し続けていた。

冬も中盤を過ぎ、春の訪れはまだ遠いが、折り返し地点は過ぎていた。冬の日々を数えるより、春までの日々を数えたほうが少なくなっている。まだ雪は深いが、吹雪が荒れ狂う日数は、確実に減っ

ていた。
だが、積もっている雪の総量はほとんど変わらず、長い時間を過ごすうちに凍りつき、却って雪掻きには手間が掛かっている。

最北の蛮族の侵攻も、厚い雪と氷に阻まれて、ターバ以南にはまだ伸びていない。こちらからの逆侵攻も、当然のごとく山脈に前線を敷いただけで、一歩も前に進んでいなかった。連合軍は、敵の侵攻がない冬季の逆侵攻を計画したが、長年北の大地で生きるものたちですら自然休戦となる厳しい冬は、軍の組織的な行動を諦めさせるに充分だった。もちろん、ウェンディロフ率いるラシアス師団壊滅の悲劇も、冬季侵攻を諦めさせる原因の一つになっていた。

吹雪の合間を縫って、平野部と山岳地帯の境界に眠るラシアス兵の遺体発掘は進められている。生存者の証言からあと百人ほどまで行方不明者は減っていたが、いまだウェンディロフを含む師団司令部要員の行方は判っていない。だが、今の時点で見つかっていないのであれば、死亡と判定するしかなかった。アービィたちにしてみれば、迷惑以外の何物でもない人物だったが、死者に鞭打つ気はさらさらなく、故国で遺体の帰還を待っているであろう家族の下に、一日でも早くその遺体を返してやりたいと考えていた。

捜索の方法は単純で、何人もが一尋間隔の単横陣を組み、長い棒を雪に突き刺し、何かに当たれば近くにいる者総懸かりで、雪を掘り返すというものだった。

「これだけ捜して見つからないなんて、どこかで生きてるのかなぁ」
アービィが汗みずくになりながら呟く。

「そうだといいけどな、もう何日だ、遭難の報告を受けてから。
俺の村を出て行ってから、もう二十日だ。

おそらく、食糧もあるまい。
絶望的だな」
ワラゴが応じた。

山岳地帯の裾野にまで捜索範囲を広げたため、土地鑑のあるワラゴたちにも協力の要請を出していた。
ワラゴたちがウェンディロフ師団の態度のせいで投げ遣りになっているわけではなく、厳冬期に北の大地で遭難した者がどうなるか、経験から冷静に言っているだけだった。

「なんで、あんな迷惑掛けるような人のために、一所懸命になれるの、アービィは？」
ルティが訊ねた。

アービィの底抜けなお人好し加減は解っているが、それでも聞いてしまう。ルティが決して薄情ということではないが、ここまでして貴重な食糧と労働力を割く必要が解らなかった。生きている可能性があるならまだしも、ワラゴの村を出てから食糧の補給もせず二十日も経っている。どう考えても生存の可能性など、万に一つ、いや、億に一つもない。
ましてや、遺体を家族の元に返そうなどという理由で、二次遭難の危険性まで冒す気が知れなかった。

「うん、やっぱりさ、自分の目で確かめないと割り切れないと思うんだ。
行方不明でした、で終わりじゃ家族は納得できないよ」
アービィも生存の可能性が限りなく零に近いことは、言われなくても解っていた。

犠牲者の家族の内、北の大地までの旅費を工面できる者たちが、

三々五々山岳地帯の集落にやってきていた。もちろん遺体を担いで帰るなど、クーリーを雇い、馬車をチャーターできる裕福層に限られる。

それでも腐敗が進みかねない遺体を持ち帰ろうとする者はなく、集落から燃料を買い、近くで荼毘に付し遺骨を持ち帰るか、住人の許可を取って山岳地帯に埋葬する者がほとんどだった。

ラシアスの国民性を考えれば、北の民に殺されたと決めつけて激昂する者や、山岳地帯の民に危害を加えようとする者が続出するかと思われた。

だが、一家の大黒柱を失った衝撃から、茫然自失となったままここまで来た者が多数を占めていた。そのうえ山岳地帯に駐留している連合軍の将兵から、ラシアス軍の振る舞いを聞かされ、恥入る者も多くいた。

さらには、山岳地帯の民や、平野の民が遺体を丁寧に扱っていたことも、遺族の感情を和らげるのに役立っていた。一人二人の無謀な冒険者が、制止を振り切って飛び出したなら自業自得と笑われるだけだった。しかし、万に近いオーダーの死を見せつけられ、それも命令に逆らえずに間接的に殺された者たちとその家族には、さすがに同情を禁じ得なかった。

嘆き悲しむ家族に掛ける言葉も見つからず、山岳の民は宿を貸し、食事の世話を焼き、そして遺体の発見現場に案内した。パーカホにラルンクルスがいることを承知している者は、山岳の民の犬橇を雇い、パーカホまで足を伸ばす者もいる。いずれも山岳の民は好意的に協力していたが、さすがに無償というわけにもいかず、なにがしかのカネが落とされていった。

既に貨幣経済に馴染みつつあった山岳の民にとっては思わぬ臨時収入となったが、他人の悲しみや弱みに付け込むようで、金銭の受け取りに抵抗を感じる者が多かった。

このようなケースで人を泊め、世話をする経験などなかった山岳や平野の民は、駐留する連合軍将兵に南大陸の金銭的な常識を訊ねていた。

将兵は、泊める側は泊まる側の事情など推し量る必要などないと教え、標準的な一泊の料金や、現状で提供できる食材のレベルを考慮した一食分の値段も教えていた。

今回のことで、営利を求めるという発想がなかった山岳や平野の民は、南大陸の常識からは懸け離れた値段設定をしていた。だが、遺族たちにしてみれば、世話になりっぱなしと言うわけにもいかず、南大陸で常識的な金額を無理矢理渡していた。互いに気を遣い合ううちに、極一部を除いた両者の間に、好意的な感情が生まれたことは、自然な流れだった。

最北の蛮族を討ち、返す刀で残る北の民を平定することを手段として、『大陸間の諍いをなくす』というラシアス師団の戦略目的は、皮肉としか言いようのない全く違った形で成し遂げられようとしていた。

汗みずくのアービィが、上半身を裸にして雪を掘る。

アービィだけでなく、同行していたワラゴや山岳の民も、低い気温にも拘わらず、半裸で雪を掘り返していた。

以前アービィがワサビを発見した沢を下った峡谷の一角で、ラシアス師団司令部要員の遺体が発見された。周囲をくまなく捜索し、ほとんどの幕僚と従卒の遺体を回収していた。どの遺体も完全に凍り付き、死の寸前の姿を、そのまま留めている。

おそらくは、ようやく掘った雪洞の中で体力の限界に達し、横た

わったまま眠るように死んでいった幕僚と、周囲でそれに殉じた、結果的には美談になりそうだが、現実は上官の死に衝撃を受けたまま眠り込んだ結果だろうと推測される、従卒の姿だった。

中には、何かを追うようにして雪の中で息絶えた姿の者もいるが、それは幻覚を見た者を止めようとしたものなのか、自らが幻覚に惑わされたのか、それを判断することはできなかった。

どうやら司令部は、本隊とはぐれた後山岳地帯に戻ろうとしたらしい。

高い所を求めては、その度に次の峡谷にはまりこみ、そして、ここでついに力尽きたようだった。

その中に、ウェンディロフの姿は、ついに見つからなかった。

「ラルンクルス殿、ラシアスの中枢におられた貴官であれば、貴国の財政についてもある程度の情報をお持ちだろう。

他国民の私に全て明かす必要はないが、貴官の判断で教えて欲しい。

貴国は、もう一度侵攻するだけの余裕はあるかね？」

ランケオラータは、目下最も気掛かりな事項について、ラルンクルスに訊ねた。

回答によっては、今度こそラルンクルスを総指揮官から外さなければならない。

「ランケオラータ様、過分なお心遣いは我が身に余るもの。

どうか、お気遣いなきよう。

小官が受けた命は唯一つ。

北の大地に安寧をもたらすことであります。

最北の蛮族を討つことは、そのための手段であり、目的ではあり

ません。
　また、新しい命令を受領するまでは、それまでの命令を遂行するため全力を尽くさねばなりません。
　従いまして、小官は北の大地に安寧をもたらせとの命令を達成するうえで、障害となる勢力があれば万難を排してこれを討つ。
　例え、それが我が国の、軍であってもであります」
　ラルンクルスは決然と答えた。

　本来であれば、第三王子より女王の命令が優先されなければ、国も軍も組織が崩壊する。騎士として生活してきた三十余年の月日は、心の中でそう叫んでいた。
　しかし、女王からは命令を受けていない以上、第三王子から受けた命令が有効なままというのがラルンクルスの判断だ。

　そして、ラルンクルスには、今回のラシアス師団派兵の裏に、女王の邪な心根を見て取れていた。先王に誓った忠誠は、そのまま現女王への忠誠であることに変わりはない。だが、彼は北の大地に来て以来、王宮生活では見ることのなかった、庶民たちの暮らしや、現実な戦争を目の当たりにして、広い戦略眼を養っていた。彼には、女王の考えは危険なものにしか見えなくなっている。

「冷静に考えれば、我が国にもう一度北の大地に侵攻する余力はございません。
　既に此度の後始末で、国庫は払底致しましょう。
　仮に一個師団として、新たに一万に及ぶ武具を揃え、最低限の軍としての規律を教育するための経費は、貴族階級の財産を洗いざらい供出でもさせない限り、賄うことは適わないでしょう。
　王室の財産でも放出するのであれば、また可能かも知れませんが、そこまでするとは考えられませぬ」

ラルンクルスは、常識的に考えて答えを出す。

「そのようなことがあっては、南大陸の経済は遠からず破綻する。おそらく、我が国を含む三ヶ国が許すまい。
では、再度の侵攻はないと、考えて良い、かな？」
ランケオラータが念を押す。

「いえ、常識的に考えれば、南大陸全土を巻き込むほどの経済への影響を与えてまで、再度の派兵はありえません。
ですが、陛下の御心は、最北の蛮族への敵愾心で凝り固まっております。
アービィ殿を召喚したのも、最北の地に魔王が降臨したという神託があってのことでした。
勇者殿を手中に収められず、最北の地への侵攻が頓挫した今、陛下は再度兵を起こすことに躊躇いはございません。
小官は、再度侵攻があると、判断いたします」
ラルンクルスは、ニムファを貶めないように、言葉を選びつつ言った。

「では、侵攻があるとして、いつになると見る？」
ルムが聞く。
最北の蛮族を討つというだけなら良い。
だが、最北の地を平定した後、中央から山脈、平野、山岳地帯と、順繰りに叩きながら凱旋するというニムファの計画は、生存者から伝え聞いていた。

「予算が仮に通ったとして、既に兵を集める布告が出たと仮定しましょう。
軍として規律の取れた動きができる訓練に、短くて九十日、本来であれば一年は掛けるものですが。

その間に優秀な官僚が戦略物資の調達を行い、最低でも火の神殿で祝福法儀式を行っていれば、百日前後でアルギールから出立できましょう。

その後、ウジェチ・スグタ要塞まで二十日、そこからここまでは十日といったところです。

早ければ、春から初夏には、次の侵攻軍がパーカホを通過することになります」

ラルンクルスが頭の中で計算し、最短の時間を割り出した。

「その頃には、南大陸は一時的に、好景気で沸き返る。

そして、次の冬までに、悲惨な不景気に襲われるわけだ」

「短い好景気に沸いた後は、悲惨な不景気が続くわね」

ランケオラータとティアが似たような内容を同時に呟いた。

「それは、貴官が指揮したらのことだろう？

貴官以外の者がやったら、どれくらいなんだ？」

プラボックが聞いた。

「残された者にも優秀な者はおります故、遅れて数十日、といったところでしょう。

もっとも、そのような期間で編成すれば、兵の錬度には目を覆うものがありましょう。

その場合、烏合の衆でしかなく、軍としての戦力は、平均的な錬度の一個大隊にすら及ばないものと考えます。

逆に慎重な者が指揮を執り、陛下の干渉に耳を貸さなければ、早くて来年の春となります。

ですが、その場合、一個師団としての戦力は、それなりのものになっているでしょう」

ラルンクルスは、少々の修正を入れ回答する。

「そうか。
では、ラシアス軍の再侵攻があった場合、ラルンクルス殿には一時的に指揮官を外れていただく。
どう考えても、同胞相討つなど、気分の良いものではないからな。
もちろん、それが確定するまでは現状のまま。
再侵攻がなければ、何の問題もない。
あとは、殿下の手腕に期待しようじゃないか」
何か言いたそうな視線のラルンクルスに目配せし、ランケオラータが断を下す。

口ではそう言ったが、決してラルンクルスの心情を思い量っただけのことではない。
現在、連合軍のなかでラシアスの国籍を持つ者は、ラルンクルスを入れて数名しかいない。それも総司令部要員だけだ。総指揮官が同国人相手に苛烈な作戦を展開できるか、ラルンクルスの人となりを知れば不安はないが、全軍にそれが周知されているわけではない。
総指揮官や司令部の指揮に、不安を感じる者が出ることは避けられない。そのための処置だった。

その二人は、去年の秋に北の大地に移り住んできた。
南大陸の老人と、北の民の少女という、見方によっては蔑まれそうな組み合わせだ。

平野部と山岳地帯の境界にある、パーカホとはあまり交流を持っていない集落に、二人は居を構えていた。もちろん、カネで住居を買ったのではなく、前の住人が捨てていった空き家を手直しして住み始めていた。集落の者たちは、南大陸の住人が北の民の少女をカネで買った奴隷としていると見て、最初は近付きもしなかった。
老人と少女も積極的に集落の者と交流を持とうとはせず、小さな

畑を耕し、足りない物を物々交換する程度の自給自足の生活を送っていた。

老人の持つ知識は膨大で、黒呪文と白呪文を使いこなす大魔術師でもあった。

ある日狩りに出た者が、怪我人を担いで帰ってきたときに老人と行き会い、治癒呪文で怪我を治療されて以来、集落の人々の見る目が変わった。

なるほど言われてみれば、老人が過度の畑仕事をするのは無理であり、少女がその役を負うことは自然だ。また、両者の間に主従の関係は見られたが、明らかに対等な部分もあり、主人と奴隷という関係に収まらないことも確かだった。

祖父と孫とも違い、主人と奴隷でもない二人に注がれる視線は、日を追うごとに柔らかくなっていった。

二人も、集落に病人が出れば、北の民の知らない野草の利用法で薬を作って渡したり、魔獣の襲来に際しては戦闘に立って戦うなど、積極的な交流こそ持とうとしないものの、集落の住人としての努めは必要以上に果たしている。

少女の戦闘技能は目を見張るものがあり、老人の呪文と合わせれば無敵かと思うほどだった。

いつしか二人は、風変わりな家族として、集落の人々から認められていた。

ラシアスを追われたドーンレッドとリムノは、政争や諜報とは無縁なこの地で、初めての安寧を手に入れていた。

第７６話

「船を、作らせておくかな」

アルギールからウジェチ・スグタ要塞に移り、武官専用室をあてがわれたパシュースは、私室に戻ってから呟いた。

共同統治機構各国代表と立場を変えたベルテロイ駐在武官たちは、アルギールにヘテランテラを残し、他の三人はウジェチ・スグタ要塞に移動していた。当初は、ベルテロイに戻る予定だったのが、北の大地の現状を鑑み、その所在地を一時的にウジェチ・スグタ要塞に移すことになったのだった。

ラシアス国内に統治機構本部を置くことで、身の安全を危惧する者もいたが、ベルテロイに置いた各国の近衛第二師団がアルギールに睨みを効かせている以上、ニムファ女王が機構本部に手出しすることは不可能だ。

もちろん、統治機構本部要員だけがウジェチ・スグタ要塞に入ったわけではない。各代表子飼いの近衛第二師団は、二個大隊を擁する二個連隊を基幹としている。ベルテロイに第二連隊を置き、第一連隊がウジェチ・スグタ要塞防備と代表護衛の任のため、現在ラシアス街道を全力で北上している。

各国の標準的な四個大隊を基幹とする四個連隊で編成される一個師団、約一万名の兵力に対して、ほぼ半数の兵力でしかないが、ウジェチ・スグタ要塞防備としては充分すぎるほどの戦力だ。

万が一、北の大地掃討を制止されたニムファが短気を起こし、ベルテロイとウジェチ・スグタ要塞を同時に攻めたとしても、ニムファの手元には常備軍の生き残り一個師団と近衛第一師団を合わせて一万五千の兵力しかない。防備を固めた城や要塞を落すには、通常攻撃側は最低でも籠城側の三倍の兵力が必要だ。

ラシアスが現在抱えている兵力は、アルギールの防備を捨てて、洗いざらいウジェチ・スグタ要塞を落すために突っ込んでも、その最低限の兵力でしかない。他の三ヶ国もほぼ同数の兵力を国内に温存しているので、インダミトとストラーがそれぞれベルテロイとウジェチ・スグタ要塞救援に、ビースマックがアルギール制圧に、それぞれ駆けつけるまで耐え切るには充分な兵力だ。

ニムファがそこまで莫迦ではないと信じたいが、女王即位以後の言動が怪しすぎる。ラルンクルスの解任とラシアス師団の独断専行は、その表れだ。そのうえ、家臣の私財を徴発して、さらに一個師団を編成しようとしている。南大陸全土を巻き込むことが確実な、世界恐慌に発展することを承知の上でだ。

例えニムファにそこまでの経済の知識はなくとも、閣僚たちが説明しているはずだった。

ヘテランテラが統治機構全権として、ニムファに貴族の私財徴発と師団の編成を自粛するように要請するためアルギールに残ったが、どのタイミングでそれをするかは一任してある。弟殿下の要請など、女王の権威で蹴るかも知れないが、統治機構全権の要請であれば安易に蹴ることはできまい。統治機構の権威は、機構設置の合意書に四王の署名があることで裏付けられている。

統治機構の要請を蹴ることは、他王の権威を貶め、かつ自らの権威を否定することに他ならない。

それでも説得に応じないのであれば、専制の是正勧告が公式文書として記録に残る。

その次には経済援助の即時打ち切りや、段階的に通商規制から期限制限付き交易停止、無期限無制限の交易停止までの経済制裁が待っているだけだ。

連合軍派遣により、それまで対北の民の軍事的な対応を一手に引

き受けていた見返りとしての無償経済援助は、段階的に打ち切ることに統治機構は決定している。即時停止としなかったのは、その間に国内産業を育成し、援助の消滅による経済の停滞を防ぐためだった。ラシアスとしては、たいした国内産業が発達していない現状では、経済制裁より援助の即時打ち切りが恐ろしいはずだ。他の三ヶ国にしても、経済制裁より援助打ち切りの方が、圧倒的に効果があることは理解しているし、僅かながらでも交易で食っている民がいる以上、経済制裁はやりたくないことではあった。

だが、どのような形でも派兵を諦めさせられたニムファが、どんな八つ当たりをするか判らない。ラシアス国内を通る北の大地へ送る戦略物資に、法外な関税や通行税を掛けないとは言い切れない。もちろん、経済制裁の場合は、ラシアス国内を戦略物資は通せなくなる。それに備えて、三ヶ国は輸送船の確保に動き始めているが、海路による輸送は未発達だった。一回に運べる量はそれなりでも、足が遅いうえに船舶の総数が足りないため、今からでも船を造っておくべきだと、パシュースは考えていた。

船の需要は、これから増えることはあっても減ることはない。北の大地への物資輸送という、特需で終わることはないと考えて良いだろう。造船業に雇用が増大しても、今後数百年に亘り産業の発展は期待できた。それに、輸送航路がいくら発達しても、内陸まで船はモノを運べない。従来の陸路による輸送を生業とする者を、圧迫したり淘汰する心配もなかった。

パシュースは従卒を呼び、フィランサスとアルテルナンテに酒の誘いをするように命じた。

「何やってるの、珍しいじゃない。
寒い中にティアが出てきてるなんて」

朝も早い時間から、窓の外で騒いでいる声に目を覚まして出てきたルティが、不思議そうな顔で訊ねた。

その先では、ティアとバードン、そしてルムが二枚の板を雪の上に並べて、何やら話し込んでいた。

「やっぱり、気付いたね。
ティアなら気付くと思ってたよ」
遅れて出てきたアービィが声を掛ける。

「うん、ひと冬北の大地で過ごしてみてね、何か人を呼び込めるものはないか考えてたの。
で、ちょっと前に見たこれを思い出して、今ルムさんにやり方を教わってたのよ」
ティアが両足に板を装着しながら答える。

「それね、僕のいた世界にもあったよ
スキーって言ってたんだけどね。
冬になると、休みの度にやりに行く人が多かったな。
それで、スキーができる場所の近くは、でっかい宿とかいっぱいできたりしてさ、大きな産業になってたよ」
アービィが言った。
南大陸の雪上歩行器具は、かつて日本にもあったかんじきが主流で、スキーに相当する物は見られなかった。

「じゃあ、アービィもやったことあるんだ?」
アービィの言葉に力を得たティアが、恐る恐るという感じで滑りながら訊ねる。

「うん、何回かね。

僕は海に潜る方が好きでさ、冬は海ばかり行ってたから、あんまり上手にはならなかったんだ」

異世界にいた頃のアービィは、スキューバダイビングを趣味にしていた。

冬はプランクトンが減り、海水の透明度も透過度も高くなるため、ベストシーズンだった。魚の種類は初夏から晩秋が一番多くなり、水温は晩夏から初秋が最も高く潜りやすいが、海中も濁りやすく台風シーズンでもある。また、海水浴場が近いと混雑も激しく、磯周りでは釣り人との諍いも多い。そのため、天候が比較的安定し、釣り人も少ない冬から春に掛けて、アービィは休みの度に海に行っていた。

水温は低いが、ドライスーツを着ていれば、一時間くらいは楽に潜っていられる。魚が少ない変わりに透明度が高く、ソフトコーラルの林に潜れば時間を忘れて眺めていられた。

「ちょっと待って、アービィ。
冬に海に入るですって？
莫迦なの？
死ぬの？
頭大丈夫？」

ティアから、異世界でもダイビングをやらない人と同じ反応が返ってきた。

納得させるには、実際の海に潜らせなければ無理だ。百万の言葉を弄しても、海の世界の魅力は伝えられない。

まだ製鉄技術が発達しておらず、圧縮空気を詰められるタンクはこの世界では無理だ。手動の送気ポンプくらいは作れそうだが、ヘルメット式の潜水器具の知識を、アービィは持っていなかった。

「まあ、ティアは生きてる内に潜る機会もあるだろうからさ、そのときは僕の言葉を思い出してよ」
蛇に姿を変えれば、ティアはそれなりに潜れるはずだ。だが、この寒がりがわざわざ真冬の凍り付きそうな海に、潜りに行くとは思えない。この世界で、スキューバが開発され、ドライスーツが普及するのを待つしかない。それにはあと数百年は要するだろう。
とりあえず、アービィはその話題から逃げることにした。

「寂しいこと言わないでよ。
それはまあいいとしましょう。
それより、このスキー？　の話を聞かせてちょうだい」
ティアは話題を戻す。
北の民が雪の上を移動する際、二枚の板を足に装着し、二本の杖でバランスを取りながら滑っている様を見て、ティアは何となく直感で面白そうだとは思っていた。いずれにせよ、アービィには聞いてみるつもりだったのだ。
ティアに問われたアービィは、日本でのスキーの話をし始めた。

「あたしの直感は間違ってなかったのね。
娯楽産業にするなら、山岳地帯とか、山脈地帯向きのようね。
じゃあ、とにかくみんなでやってみましょうよ」
アービィの話に、この世界でもスキーが産業として成立すると確信したティアが提案する。

五人は板を担いで移動し、近場にある小高い丘の頂上に登った。
バードンは乗り気ではなかったのだが、南大陸の一般的な感覚を聞きたいということで、ティアが拝み倒して同行してもらっていた。
暫くスキーに興じていたが、生来の運動能力からか、バードンの

上達は目を見張るものがあり、既にほとんど転倒することはなくなっていた。
「便利なものだな。
見るだけでは解らんものだ。
ルム様、良い経験をさせていただきました」
バードンは、素直に面白さを認めていた。

さすがに日常の足に使っているだけに、ルムは華麗にターンを切っていく。アービィは、二十年以上前の記憶を手繰りながら滑っているが、苦手意識かあったせいか、バードンほどは上達していない。ようやくボーゲンで転ばずに、前に進めるようになった程度だ。

「アービィ、これ楽しいわ。
絶対、人を呼べるわよ」
ティアが叫びながら、転倒したアービィの横をすり抜けていく。

「登るのが面倒ねぇ。
何かいい方法はないかしら。
それがないと、ちょっと厳しいかもね」
アービィの横まで来たところで、盛大に転倒したルティが雪を払いながら言った。

「燃える石で雪を溶かして、その水を流して水車を動かして、それでロープを巻き上げて……」
アービィは、簡易リフトを作れないか考えている。
蒸気機関が実用化できれば、リフトを動かすくらいは造作もない。
しかし、この世界の製鉄技術は、それに必要な圧に耐え得る強度を持った鉄を、作れるほどには発達していなかった。

「犬橇とか、カリブーに曳かせるか……」

ルムも娯楽にするには、それが弱点になることを予見していた。

「問題点はあるにせよ、娯楽としては充分な可能性はある。いっそ、人力でも良かろう。冬の間の良い収入源にならないか？だが、もう一つ弱点があるな」

バードンは、登るくらい自力でやれと思うが、裕福層にそれを求めることは厳しいことに気付いていた。

スキーが普及すれば、ラシアス北部でもできてしまう。どう付加価値をつけて北の大地に人を呼び込むか、それも考えておかなければならない。当初は産業保護の観点から南大陸にスキー場を作ることを禁じてしまう手もあるが、いずれは自由競争になって然るべきだ。

「ルムさん、滑るのって他にもありましたよね？氷の上を滑るやつが」

アービィはスケートも娯楽化して、観光資源に結びつけようとしていた。

北の大地では、遙か昔から凍った川や湖、湿地帯を移動するために、スケートが発達していた。動物の骨を削り、木靴の底に打ち付けた物がスケート靴として普及しているが、この世界の製鉄技術でも、剣が作れるのであればエッジも充分に作れるはずだ。

アービィが皮と鉄を使用したスケート靴の説明をした。ルムもそれなら可能と判断したのか、鍛冶屋に相談してみようということになった。

南大陸北部でも場所によっては川も湖も結氷するが、期間が短く、氷もそこまで厚くは張らないため、スケートが発達する余地がなか

った。スキーよりは手軽にでき、道具も作成は楽そうだった。
そしてアービィは、もう一つ北の大地ならではにできそうな、冬の屋外での娯楽を思い付いていた。

「ルムさん、小魚が獲れる湖ってありませんか？」
アービィは、ワカサギの穴釣りができないか、それを考えていた。

「あるにはあるが、こんな真冬にどうしようというんだ？」
ルムは場所こそ知っているが、結氷した湖で何をしようとしているのか理解できなかった。
スケートに利用しようというのなら解るが、わざわざ魚が獲れると言っている。

「それは行ってからのお楽しみ。
道具を作りますので、昼ごはん食べたら竹藪の場所を教えてください。
あと、赤の染料を分けてもらえませんか？」
アービィはそう言って、スキーを履いたままパーカホへと戻り始めた。

昼食後、アービィは竹藪からよくしなる細い若い竹を切り出し、手バネ式のワカサギ用釣竿を記憶を手繰りながら作り、糸を巻けるだけ巻きつけた。もともと釣りはこの地でも発達しており、手ごろな糸と針はすぐに手に入った。
本来の穴釣りであれば紅サシやアカムシをエサとして使うが、厳冬期にその入手は望めない。アービィは散々考え、まだ魚たちが擦れていないことに期待してウドンを食紅で染めることにした。染料を分けてもらえるか聞いたのは、このためだった。

竿を作った後は小麦粉を練り、暫く寝かせ、その後は踏み込んで腰のあるウドンを打ち始めた。

夕食合わせて多めに作ったウドンを、干魚の出汁と白ワイン、塩、胡椒で味を調えた和洋折衷風に仕上げていた。幸い、この世界では、南北両大陸とも極端に広い大陸というわけではなく、四方を海で囲まれて入り浜式製塩が盛んになっているうえ、造山活動の結果隆起した地面も多く、塩湖の数にも恵まれていた。アービィが知る、この世界と雰囲気が似た中世ヨーロッパと違い、塩や香辛料の入手で四苦八苦するということは少なかった。ただ、アービィにしてみれば、充分な大豆に相当する豆の収穫が確保できず、醤油と味噌がないことが、この世界最大の不満だった。

南大陸ではパスタ様であったり、中華麺のような縮れ麺も普及していたが、ウドンのような太い麺は珍しい。思ったより多くできてしまったので、ルティとティアがそれぞれ周囲に食べに来るように声を掛けに行っていた。

アービィは、具材を多くしたタンメン風のウドンにするつもりだったが、思ったより多くの人々が集まりそうだったので、掛け汁を濃く調味し直し、具材も副食として作り足し、薬味用にワサビをおろし始めた。

「ウドンだけだと足りなくなっちゃいそうだったんで、野菜とは別々に食べてね。

で、ウドンは一口分ずつ取って、グラスに入れたスープにつけて食べて。

これを少しスープに溶くといいかもよ。

ルティ、溶く量には充ぅ分っ気をつけてね」

ウドンは氷水で締め、ザルに大量に盛り上げてあった。

「珍しい喰い方だな。
これも異世界の知恵か？
鼻に抜ける刺激が堪らん」
バードンは、アービィが作った料理を初めて食べる機会に遭遇していた。
冷製パスタはインダミトやストラー南部では珍しくない夏の食べ物だが、ザルウドンのように付け汁に付けながら食べる麺類は聞いたことがない。別口で温かい食べ物もあるため、体の芯から冷えてしまうようなこともなかった。

「ええ。
今はこういう食べ方にしてますけど、温かいスープに入れても良いです。
副食に出している野菜炒めをその上に乗せても良いし、肉をがっつり乗せても良い。
以前、バードンさんが山脈地帯で見つけた山菜を煮て入れても良いし、そのフライを乗せるのもありです」
もちろん、フライではなく天麩羅だ。
春が来たら山菜の天麩羅で一杯やろうと、アービィは心に決めている。

「これさぁ、北の大地の名物にしちゃったら？
宿の食事で充分使えるんじゃない？」
ティアが言い出した。

「これね、もう一つ食べ方があるの。
ちょっと待っててね」
そう言ってアービィは、鶏肉主体の寄せ鍋のようなものを作って

きた。

「まずは、中の野菜と肉食べちゃって、残ったスープにウドン入れて煮込んじゃうんだよ。

鍋にする材料は季節のもので良いし、準備も片付けも楽でしょ。

お客さんは自分で作りながら食べる楽しみもあるし。

僕が住んでた国では、冬の定番だったなぁ」

アービィの言う通りにして鍋を囲み、なんともいえないほのぼのとした空気が広がった。

「アービィ、あれ作ってよ、あれ。

冷たくて、甘いやつ」

粗方食べ終わったところで、レイがアイスクリームをアービィにねだる。

ルティの暴走から数日は、アービィに対してよそよそしい態度になってしまったレイだが、ようやくいつも通り接するようになっていた。

「レイ殿、冷たくて甘いものが欲しければ、表に砂糖を撒くと良いですぞ」

ルムとプラボックがレイをからかっている。

この中で最も歳若いレイは、からかい甲斐のある可愛い妹分として、皆から愛されていた。

「ルムさん、プラボックさんも。

そうじゃなくて、柔らかくないとダメです。

表のは、ガチガチに凍ってるじゃないですかっ」

からかわれているのを理解して、望まれた反応を返すレイは、やはり頭が良いとランケオラータは思っていた。

バニラビーンズと鉄の容器を密かに持ってきていたレイからそれを受け取り、アービィは表から氷を取ってくる。
南大陸から持ち込んだ乳牛から取った乳と砂糖、バニラビーンズを容器に入れ、氷の上で転がし、アイスクリームを作る。

「貴様、これは信徒を堕落させる悪魔の食べ物だ」
そう言いながらもバードンのスプーンを止めなかった。

何故、バードンが、アービィとティアに対してだけ、ぶっきらぼうな口調なのか不思議に思っていた面々は、この夜初めてその理由を聞いている。その割にはアービィとティアに危害を加えようとせず、アービィの作った物を何の疑いもなく食べているバードンに、皆は温かい視線を送っていた。もちろん、すごい速さでアイスクリームを食うバードンが、どうなるかという期待も込めて。
そして当然のごとく、頭痛に見舞われたバードンが、悪魔の食べ物だとアービィを非難し始め、思った通りの展開に、皆の笑いがはじけた。

皆が帰り、静かになった家の中でアービィは、再度ウドンを打ち始めた。
思ったより好評だったので、明日釣りに行くときのエサにするため作っておいた分まで食べてしまっていた。
一握りほどのウドンを打ち、茹で上げた後水で締め、染料で赤く染めた。寝る前に夜空を見上げたアービィは、この平和な時間が、このうえなく大切なものだと思っていた。

何故、最北の蛮族は不死者など作って侵略を始めたのか。
あれでは世界を征服したところで、誰も幸せになれない。当の最

北の蛮族だって、不幸なままだ。力による統治は、反乱を招く土壌でしかない。民心の離反に怯え、密告が常態となる社会は自由すらなくなり、国家は破滅へとひた走る。それは、第二次世界大戦の大日本帝國やナチスドイツ、ファシストイタリアが証明している。反乱や自由を求める欲求は武力による鎮圧を招き、死者の遺族は互いに憎しみだけを抱いていく。その統治をひっくりかえすにも武力が必要になり、それが次の反乱の種を残し、永遠に繰り返される。

今からでも遅くないから、両大陸共同統治機構に参加を表明して欲しい。アービィはそう願わずに入られなかった。

翌朝、晴れ渡った空の下、アービィたちはスキーを履き、犬橇に風除けになりそうな板や釣り道具を積み込んで、ルムの案内でパーカホ近くの小さな湖を目指した。同行者はルティ、ティア、ルム、プラボック、バードン、そしてランケオラータとレイ、ラルンクルスも同行している。スキーに慣れていないランケオラータとレイ、ラルンクルスは、犬橇に乗ってもらうことにした。

太陽が頭上に来る前に到着し、アービィは氷の上に剣で穴を掘り始める。ルムやプラボックも同様に穴を掘り始め、程なく全員が自分用の小さな穴を作り上げた。

「氷の下って意外と暗いん――」

「なんで、氷の下が暗いって知ってるの？

やっぱり潜るの？

莫迦なの？

死ぬの？」

案の定皆まで言わせず、ティアがアービィに聞く。

流氷ダイブの経験からだとアービィは説明したが、ティアには信じられないことだった。

「とりあえず、ティアは放っといて。
この穴から太陽の光が差し込んで、そこに小さな動物が集まります。
それを追って魚たちが集まってきますので、それを狙って釣るわけです。
僕が狙っている魚がいればいいんですけど」
アービィは簡単に説明すると、昨晩作った仕掛けとエサを穴に垂らした。

暫く糸の長さを変えてタナを探るが、やがて微かな魚信が竿に伝わり、アービィは少し待ってから糸を手繰り始めた。
程なく七本針全てにワカサギのような魚が喰らいついた仕掛けが、全員の前に引き上げられた。
アービィは手早く針を外し、エサを付け替えてから仕掛けを垂らす。氷の上に掘られたくぼみに放り込まれた魚たちは、あっという間凍り付いてしまった。

「深さは、七尋くらいで、糸巻きから二十一巻き解いたくらいです。
時間によって少しずつ魚がいる深さが変わりますから、魚信がなくなったら深さを少しずつ変えてみてください」
そういう間にもアービィはまた釣り上げている。
この世界のワカサギも、異世界同様水質への耐性は広いようだった。

「面白いわ、これ。
魚が喰い付いた感覚がなんともいえないのね。
で、釣ってどうするの、これ。
食べるにしても、どうやって食べるの？
凍ってるから持って帰るのも大丈夫だろうけど」
ルティが聞く。

「釣るだけでも充分楽しいけど、それだけじゃ足りないでしょ。どうやって観光産業に結びつけるかなんだけどね」
アービィは考えていたことを説明し始めた。

ワカサギが釣れる湖が近くにある集落があれば一番良いのだが、もしないようなら湖の近くに宿を建てる。
朝一番から釣りができるようにして、昼くらいで釣りは終了。資源保護の観点から丸一日釣りしていたら、資源の枯渇を招きかねない。
湖の近くに小屋を建て、そこに簡易調理施設を作りつけ、釣り人が自分でワカサギをフライか天麩羅にできるようにする。もちろん、釣り人全てが調理できるわけでもないだろうから、料理人も配置する。ワカサギだけで腹いっぱいになるのも大変だから、パンやウドンのような主食や、他に副食も提供する。集落から遠く離れ、宿を建てるのであれば、調理施設は宿が兼務すればよい。午後からはスキーを売りにしても良いし、スケートが売りになっても良い。
そう言ってアービィは、持ってきた鉄の器に石炭を入れて火を熾し、道具や材料を並べ始めた。

「みんなは釣ってて。
ちょっとまだ準備に時間掛かるから」
アービィは手早く人数分の天麩羅やフライの材料を用意し、必要な分量を容器に取り分け始めた。
人数分小さめの鉄の容器に熾きた石炭を分け入れ、小さな鍋に油を入れ熱する。
その間、アービィ以外の全員は、繊細な魚とのやり取りを楽しんでいる。
ほとんど擦れていないからか、技量の差が出るほどに個々の釣果に開きは見られなかった。

「じゃあ、みんな釣った魚を持って、鍋の前にそれぞれ立ってください」

アービィが衣の作り方、フライの下味のつけ方、油の温度の目安、揚げ方を説明し、それぞれは楽しげにおしゃべりをしながら天麩羅やフライ作りに取り掛かった。

「いいんじゃないか、アービィ。

これは楽しいぞ。

普段、私たちは厨房に入ることなどないが、こうすることは楽しいと思う。

特に、屋外ということが良い

貴族の間でも、抵抗なく受け入れられるんじゃないか」

ランケオラータは楽しげにフライを揚げている。

もともと貴族階級の者が食事を作るなど、極一部の趣味人を除いてあり得ないことだった。

もちろん、信念を持って食事作りなどしない者や、その発想すらない者もいるだろう。強制してしまっては、楽しめるものも楽しめない。それに、料理の勘が鈍い者だっている。ちょうど黒焦げのフライを量産したレイとルティのように。そのような者のためにも、料理人は配置する。野外で野趣溢れる食事をする。これが主眼であり、調理を自分ですることは、オプションの一つと考えるべきだった。

「アービィ殿、武辺一辺倒の私でも楽しませていただきました。

普段、食事など身体を作るための材料程度に考えておりましたが、これを家族でやったら、さぞ楽しいだろうと思います」

ラルンクルスも肯定的に受け入れていた。

「あたしたちは、食べられないの？」

黒こげフライ量産班と化していた、レイとルティが不貞腐れる。

「お嬢様方、ご安心ください。
こちらにご用意いたしましょう。
どうぞ、お座りになってお待ちください」
アービィが即席で対面式の調理台に並べ直し、レイとルティに天麩羅とフライ、パンをサーブする。

「これなら、料理なんてしないっていう貴族様も安心ね」
ルティがレイに言う。

「そうね、下手くそでも大丈夫かも」
レイがルティに負けじと言い返した。

問題は夏の間の売りだが、避暑がメインであればそれほど多くのオプションは必要ないだろう。
バカンスが一般的に普及していないこの世界この時代で、避暑に来ることを期待できる顧客層は、貴族や騎士階級、大商人や大地主といった裕福層だ。大勢に傅かれ、大勢を使うことに慣れた人々を相手に、接客の概念がまだ発達していない北の民に執事やメイドの真似をしろといっても、それは無理な相談だろう。
かといって、生産的労働をしない貴族階級の家庭において、主人家族が長期に家をあける期間は、使用人たちにとっては里帰りができる貴重な休暇の期間だ。わざわざ好き好んで主人のバカンスに付いてくる莫迦はいない。

南大陸から執事やメイドの技術を持った人間を雇い入れるにも、供給源がほとんどない。どこかの屋敷を首になるような人物ではどうしようもないし、暇を出されるにしても改易や商家の破産でもな

い限り大量に人があぶれることはあまりない。

暑さを逃れてくるのだから、遊びのオプションはそれほど多くなくても良いが、世話ができる人間の確保はかなり重要な売りだ。家にいるのと変わりない生活ができ、なおかつ目先の変わったものが食べられる、という点を売りにできないと集客は見込めないだろう。

湖での舟遊びや川遊び、ハイキングやトレッキングは南大陸でも充分できることだが、あまり突飛なことばかりを揃えても、それか何だか解ってもらえなければ集客には結びつかない。当たり前に見えて、それは南大陸とは違うということを見出してもらえなければ、観光事業が長続きするとは思えなかった。

「ランケオラータ様、南の各国にいる北の民の娼婦を身請けして、メイドの教育をしたうえで雇えませんか？

彼女たちであれば、南大陸の習慣も熟知していますし、接客という概念も完璧です。

もちろん、希望者に限りますし、一定の教養や常識は身に付けていることも条件で」

アービィがランケオラータに提案した。

ランケオラータ個人で身請けするか、共同統治機構が身請けするかはこれから相談すべきことだが、望まずして娼婦に身を落としたものの救済にもなる。当然、金銭のやり取りがあった以上、不正がないのならば娼館から正式に身請けする。救済を名目に娼館から娼婦を取り上げてしまえば、娼館の経営が成り立たなくなり、裏で人攫い等のが横行するだけだ。もちろん、人攫いによって供給された女と判れば、背後を洗い、娼館側の立場により身請けか保護かを決めればよい。

娼婦や娼館、人身売買組織をいくら摘発しても、その背後にある貧困を解決できなければ、いつまで経っても身売り人買いはなくな

らない。貧困に喘ぐ人々が、最後の最後に売り払える唯一の財産が、己が身体だからだ。

人類最古の職業といわれている売春婦を、自らの意志で選び、生き甲斐を感じているものが皆無とは言わない。だが、ほとんどは貧困から家族を救うために、カネを得ることを目的としている。身売りというだけでなく、自らを切り売りし、その売り上げで家族を養っている者だっているのだ。

人権を無視した売春はいけない、そういうことは簡単で、法で禁じることも簡単だ。だが、それだけでは売春は失くせない。そのためにも、継続的な収入を得られる方法を用意しておかなければ、一度救い出したとしても、また売春窟に舞い戻る羽目になってしまうだろう。

簡単な解決方法はないが、北の大地に産業を根付かせることで、少しでも身売りが減らせるならとアービィは考えていた。

「それは良い考えだな。早急にパシュース殿下に諮ってみよう」

ランケオラータは、私財では限界があることを理解している。もちろん、私財が惜しいのではない。南大陸にどれほどの娼婦がいるのか、人頭税の統計を見てもはっきりしない。娼館側が節税のため正確な数字を出さないし、査察の際には娼婦を隠すからだ。全てを救いたいという気持ちはあるが、どこかで息切れするのは目に見えているし、そうなっては不公平だ。

国がすべき事業だろうと、ランケオラータは判断した。

同時に、人身売買の旨みをなくすために、公娼制度も考えるべきだと考えている。

「うまく行くと良いけどね」

ティアが醒めたような口調で言った。

売春婦が人類最古の職業ということは、人類最古の需要ともいえる。セックス産業が現代日本でもなくなっていない以上、この世界から娼館を失くすことは事実上不可能だ。日本に比べてまともな部分もあるとはいえ、人権意識は比べ物にならないほど低い。一気に娼館を廃止するなどしたら、下手をすれば暴動が起きかねない。

男の精を喰らい続けていたティアには、その欲望は理解できていた。

人間の三大欲求だ。

なくなることはない。

それを目当てに手早くカネを欲する女が、自ら進んで春をひさぐ。奇麗事だけで世の中は片付かない。悲しいことだが、それが現実だった。

「うん、それは解るんだ。

でも、自分の意志じゃない人を救う努力は、してみるべきだと思うんだ」

男の欲求をなくすことはできない以上、人買いはなくならないだろう。

しかし、だからといって何もやらないより、可能性のあることは試してみても良いはずだ。

「そうよね、アービィ。

あたしだって、ああいう生活だったから解るの。

でも、そうよね、やる前から諦めることはないわよね」

ティアとて意地悪で言ったわけではなかった。

「アービィ、例えば南大陸の商人たちを呼び込むとしたら、彼らの泊まる場所も用意しておかなければならんのだよな？」

ルムが言った。

これまで南大陸の商人たちは、山岳地帯以北に足を踏み入れることはなかった。商用の際の宿は、山岳地帯のなじみの民家に求めていた。それは好意であり、商売ではない。当然、宿泊費が掛かるようになれば、商品の売価に転化され、商品の単価は上がってしまう。しかし、いつまでも好意だけで片が付く話ではない。

商業活動が活発になり、北の大地を訪れる商人の数が増えれば、それを好意で泊める北の民は食費だけで破産してしまう。北の大地にも正当な価格の宿という概念を植え付けなければ、まともな商業が根付かなくなってしまう。

「そうですね。

避暑と冬以外は、そういう商人宿として営業すれば良いですね。当然ですが、常時商人宿として営業する宿も必要です。

山岳地帯や、パーカホ、他の集落にも宿は必要ですし、避難小屋をそういった施設に変えていくことも必要だと思います」

途中が野営になる輸送業務や交易は、南大陸でも普通にある。全ての日程が宿である必要はないが、あまりも野営が続くようだと交易の足が遠のいてしまう。ラシアスの駅馬車路線を、アービィは意識していた。

「そうだな。

パーカホだけでなく、だな。

平野の民といっても、我々とあまり交流のない集落もあるんだ。無理に我々と統一歩調を取る必要もないが、そういったところが取り残されても困る。

放っておくわけにもいくまい。

後々格差が出て恨まれては適わん。

一度、そういった集落を回ってみる必要もあるな。

もし、こちらと共同でできるのであれば、仲間が増えるということだ。
追い返されるかも知れんが、それはそれでいいだろう。
ランキー、構わんか？」
最後の一言は、ルムが自ら行っても良いかという意味と、アービィたちを連れて行って良いかという二つの意味だった。

「構わんよ、ルム。
留守は預かる。
安心していって来い」
ランケオラータも、二つの意味で承諾の返事をした。

ワカサギ釣りからパーカホへ戻った数日後、ルムとアービィ、ルティとティアは、山岳地帯との境界に近い集落を目指した。
山岳地帯が北西に張り出し、なだらかに続く裾野にその集落はある。平野の南西部の一角を占める勢力だった。ワラゴの集落への道とは違い、別の山岳地帯の集落へ続く道た。およそ五日の行程ということだが、スキーで距離を稼ぎ、天候が崩れなければ、三日で到着できるだろうとルムは言った。犬橇を使ってもだいたい同じくらいで、到着できるらしい。
その集落群とは過去に諍いがあったこともあるし、手を取り合うこともあったが、今はほとんど没交渉になり、交流も抗争もなくなっている。
北の民がそれぞれの地域ごとに分かれているだけでなく、地域内でも殺し殺されしてきた歴史の証だ。
つまり、最北の蛮族とて、一枚岩ではない。
アービィは、まだ見ぬ集落の人々に、希望を見出していた。

第77話

平野部の南西に位置するラーラの集落で、アービィたちは懐かしい顔に再会した。

当初、敵意を顕わにするラーラの人々と対峙したルムを先頭にしたアービィたち四人は、会話の糸口さえ掴めず困惑するばかりだった。

両者が没交渉になったのは、比較的収穫が見込める土地の境界と、安全な水源を巡っての争いが膠着状態に陥っているからだった。感情の行き違いだけではなく、生きるか死ぬかの瀬戸際での攻防が続いただけに、そう簡単に水に流せる過去ではなかった。

突然訪れた敵の主将に対して、あまりにも当たり前すぎる対応だった。

ルムは、犬橇に積めるだけの食糧を始めとした物資を詰め込んできた。

敵意のないことを見せるためだったが、ラーラの人々は毒でも仕込んであるのではと疑って掛かっている。敵対勢力が四人という少人数で乗り込んでくるからには、それなりの策を講じていると考えるのが当然の対応だった。

ここまであからさまな敵意を向けられた経験のないルティは、既に涙目になっていた。

「どうして、信じていただけない。

今は我らが争っているときではないと言っているのだ。

あなたたちの土地を明け渡せなど、一言も言っていないではないか」

ルムは、なんとしてもラーラの人々と手を結びたかった。
平野の南西に点在する集落群を統べているのは、ラーラだった。
武力で制圧しているのではなく、緩やかな連合の中でラーラが最も人口を多く抱えていた。
ラーラがルムたちとの連合に同意すれば、他の集落は皆それになびく。

「過去を思い出せ、パーカホの人よ。
我らはあまりにも互いの血を流しすぎた。
今さら、それを水に流せと言われて、呑めると思うか。
お前がそう言われたら、どう思う？
解ったら、その荷を持って帰るが良い。
今なら命まで取ろうとはせぬ」
ラーラの代表は、怒りを無理矢理飲み込んだ表情で言い捨てる。

「あなたの言いたいことはよく解る。
私とて、いきなりであっては信じられぬだろう。
だが、聞いてくれ。
今、我々の集落には、中央を統べるプラボック殿が滞在している。
中央は、今や死者の群れに席巻されている。
最北の蛮族どもが、禁呪を使ったらしい。
過去は水に流し、我らは手を結んだ。
春が来れば、不死者の群れが平野に雪崩れ込んで来るだろう。
もちろん、そうはさせないように、山脈に防衛線を敷いている。
ここにいる三人を始めとした南大陸の住人たちも、我々に協力してくれている。
今まで、冬は生きるか死ぬかの瀬戸際だった。
南大陸の住人たちは、我らに食料と、畑を作る技術や暮らしを良くする技術をもたらしてくれている。
あなたたちに、土地と水源を返そう。

それで信じていただけまいか」
ルムは必死だった。
平野を一つに纏めなければ、最北の蛮族とは対抗は難しい。いくら南大陸の援軍があるからといって、北の民の諍いは北の民同士で決着をつけたいという思いが強い。現実問題として、南大陸からの恩恵に取り残されるという事態に、後々の火種を残したくないという気持ちも働いている。

「くどい。
中央の民と手を組み、南大陸に尻尾を振った貴様の言など、信じるに値すると思うか。
我々の怒りが抑えられているうちに帰れ。
土地も、水源も、返してもらうのは当たり前だが、代償に貴様等の命も貰い受ける。
さぁ、早く帰って戦の準備をしろ。
貴様等が死ぬ準備をしろ！」
ラーラの代表の、怒りが裂けた。
見たところ、ルムより少々若く、ヌミフと同世代に見える。まだ歳若い彼に、柔軟な交渉などまだ無理なようだった。

「まあ、いきり立つでない。
儂に任せていただけないかね？」
歳若い代表の肩に手を置いた、この世界では老人の部類に入る南大陸の住人が前に出る。
これでは、この場で戦が起きかねない。
もし、ルムの身に何かがあれば、パーカホを中心とした民が大挙して押し寄せてくる。話を漏れ聞けば中央の民も大同団結しているという。戦力比は一対二では済まないかも知れない。この時代では知られていないが、ランチェスターの自乗均等法則に従えば、実質

の戦力比は一対四。こちらが全滅しても、相手は半数以上が残る計算だ。

年の功か、いきり立つ若者を抑えて前に出た老人は、対峙する四人を見渡して目を見開く。

同時にアービィとルティ、ティアも、その目を大きく見開いていた。

「勇者殿!?」

「ドーンレッドさん!?」

両者から同時に驚愕の声が上がった。

「そのようなことに……」

ドーンレッドは、がっくりと肩を落としていた。

彼は、勇者の取り込みに失敗して以来、王宮内での権力闘争に敗れ、宰相コリンボーサから蟄居を命じられていた。当時は摂政だったニムファも、国家予算を食い荒らすだけの結果に終わった勇者召喚の責任者を庇いきれず、宰相の言うがままになってしまっていた。

その後、ドーンレッドはリムノを連れて王宮を去り、政争や権力闘争とは無縁の生活を送るため、北の大地へと渡っていたのだった。ラシアス国内に居場所はなく、他国へ流れても王宮の有力者だったドーンレッドを、各国の為政者が放っておくわけがない。ラシアスの機密の多くに彼が関り、その頭の中に収められていることは、子供にも解る理屈だった。

ラシアスを追われたとはいえ、ドーンレッドは先王ロベリア、そしてニムファ女王に対する忠誠心は、ラルンクルスと優劣をつけることができないほどだ。何しろ彼は先王に見出され、現在の地位を築く基礎を固め、女王の相談役を務めることでその地位を確固たる

ものにしたのだ。そんな彼が、ラシアスに弓引くような真似をできるはずもない。

そのようなしがらみを逃れるためには、南大陸の影響がない北の大地へ渡るしかなかった。物心付いたときには南大陸に連れて来られ、故郷を知らないリムノに安住の地を与えたいという気持ちも大きかった。

「お爺様、お気持ちは解りますが、どうぞお気を確かに」

リムノが声を掛けた。

主従という関係を越え、いまやリムノはドーンレッドを祖父と慕っていた。

アービィから先王ロベリアの崩御と、ニムファの女王即位。そして暴走とその結果を聞かされたドーンレッドは、愛する祖国の行く末に暗雲が広がるのを見ていた。ウェンディロフ師団が、雪の中に壊滅したことはラーラでは気付いていなかった。虚しく雪に消えた軍の中には、ドーンレッドと顔見知りの呪文を使える将兵も多数含まれていたのだった。そして、ラルンクルスによる今後の見通しも、ドーンレッドは知らされた。

ラルンクルスが王都を遠ざけられ、コリンボーサもニムファに疎まれ始めている。純真な民を思う気持ちから勇者を召喚しようとした行いは、倫理的な良し悪しは別として真っ直ぐなものだった。しかし、征服欲や権力欲という、覇権への欲求だけ真っ直ぐに育ち、民を思う気持ちをどこかに置き忘れた女王に未来はない。ドーンレッドは自分が側に仕えた十余年は何だったのかと、そればかりを自問していた。

「まずは、任されよ、勇者殿。

当事者同士では過去の恩讐に囚われ、冷静な話し合いは難しかろ

う。
　儂からラーラの民に話しておく。
　ここは一旦引き下がられよ」
　ようやく衝撃から立ち直ったドーンレッドが言った。
　ドーンレッドにしてみれば、罪滅ぼしだ。アービィの役に立てるのなら、残りの人生を捧げてもいい。アービィを異世界に戻す方法がない以上、彼にできることは他にはない。平穏に暮らしていたい世界から、何の前触れもなくこの世界に連れ去った彼は、アービィに殺されても文句はいえないということを、北の大地で暮らしているうちに思い知らされていた。
「あの……」
　リムノはアービィたちを前にして言葉が出なかった。
　アルギール城の正門前で、ルティに剣を向けようとしたとき見たアービィの目が忘れられない。氷の地獄を思わせる冷たい目。
「久し振りだね、リムノ。
　元気だった？」
　屈託のない笑顔でルティが言った。
　ルティは、アルギール城でのリムノの行動は、自分に剣を向けたことを含めて理解できている。殺意はなかった剣に、リムノの悪意は感じられなかった。何の怨みも、怒りも残っていなかった。
「はい……」
　まだリムノは三人の目を見られない。
「今度、遊びにおいで。
　今、あたしたちはパーカホにいるから。
　待ってるわよ」

ティアが言った。
まだ二年と経っていないのに、随分と懐かしい気がした。

「うん、待ってるよ。
でも、リムノ、今度は夜忍び込まないでね」
アービィが笑いながら言う。
ようやくリムノはアービィたちの目を見た。邪気の欠片もない、底抜けの明るい瞳が自分を見ている。

「きっと。
遊びに行きます」
初めて心の底から笑った気がした。
北の大地に来て、裏の世界から解放され、命のやり取りから解放され、やっと安寧の日々を送ることができた。そして、リムノは生まれて初めて、友を得た。

それから十日の後、ラーラからの使者がパーカホを訪れた。

「よくぞ無事に戻ったな。
して、首尾はどうだったかな？」
最北の蛮族を統べるグレシオフィは、疲れた浮かんだ顔色で目の前で俯く最愛の腹心オセリファに声を掛けた。

「猊下、首尾は上々にございます。
あの忌々しきターバは既に吸血不死者の都と化し、破壊された魔法陣の修復も完了いたしました。
新たにターバに三つ、さらにこの地まで『移転』で跳べる範囲の集落に、飛び石に魔法陣を描き終えてございます」
オセリファは答え、最愛の主の顔色を窺う。

その表情は、父から褒めてもらいたくて仕方のない幼子のようでもあり、くわえてきた獲物を猟師の前に差し出した猟犬のようでもあった。

「そうか、それは重畳。
これで我にまつろわぬ最北の民も手を挙げるだろう。
オセリファよ、また行ってもらうぞ。
雪が去ったら山脈まで半日行程の範囲に、方法は一任するが、できるだけ多くの陣を描け。
だが、護衛に合成魔獣は付けてやれぬ。
夏前に、平野に屯する憎き民どもに鉄槌を下す。
遅れは許さぬ」

満足げに頷いたグレシオフィだが、すぐに厳しい顔になっていた。
グレシオフィに従わぬ最北の蛮族にとって、逃げるとなれば最も近い集落はターバだった。これが陥落し、不死者の集落の魔法陣が修復された今、山脈までの道のりは、遠すぎるといっても良い。そこに住んでいた中央の民は、不死者に転生させられた後、アービィたちによって安息の死へと誘われていたが、新たに吸血不死者となったターバの民がそこに入っている。
強い日光さえなければ日中でも活動可能な吸血不死者は、グレシオフィに従わぬ最北の蛮族が逃げようとする道に立ち塞がる障壁となっている。

「もう一つ、猊下。
ターバにてお知らせを受けた想念の持ち主は、私と遭遇する前に息絶えておりました。
僅かに手遅れにございました。
申し訳ございません」

今度は怯えたような表情になったオセリファが、頭を垂れたままグレシオフィに目を合わせられずに報告する。

「ターバからは遠すぎた。
仕方のないことだ。
そなたを責めるつもりはない。
それにしても、軟弱どもが冬の我が大地を踏破など、思い上がりも甚だしい」
一瞬苦い物を噛み潰したような不快な表情を浮かべたグレシオフィだが、オセリファを責める事由ではない。
平野の民の目を掠め、山岳地帯の麓まで『移転』を繰り返したオセリファに、グレシオフィは労うような視線を投げ掛けた。

「して、いかがいたしましょう。
死体は持ち帰っておりますが、早く処理せねば腐り始めましょう。
暫くは、屋外に放置しておけば腐りはしませぬが」
オセリファが最後の報告を上げ、指示を待つ。

「いかが致そうかのう。
聞くところによれば、かなりの猪武者とのこと。
軍を預けるなど無理そうだな。
それにしても、あの者が今際の際に放った怨みを込めた想念は凄まじいものがあったな。
そなたも感じたであろう？
あれは、良い狂戦士になれる。
吸血不死者として蘇らせ、そなたに預けよう。
先陣を切らせるには、充分役に立つだろう」
しばし思案に耽っていたグレシオフィは、死者の使い道を決め、オセリファに伝えた。

「南大陸からの情報は、その後入ってまいりますでしょうか？
此度の侵攻は、一国の独断専行とのことですが、再度来るのであ

れば一網打尽にして、全て不死者の兵と転生させてしまえば、平野に屯する主にまつろわぬ民を根絶やしにできましょう」
オセリファが訊ねるが、グレシオフィは首を縦に振ることはなかった。

「あれ以降、彼の者は鳴りを潜めておる。
それにな、平野の民にしろ、南の住民にしろ、根絶やしにしてどうする。
我等を虐げた過去の罪は、一瞬で殺してしまって許すほど、生易しいものではない。
生きることを呪うほどの苦痛を与え、死に掛ければまた生き返し、肉体が滅びるまで永劫の地獄に落さねば、我らの怨みが晴らされることはない。
既に人の食物など不要な我々でも、生者の生血や肉は必要だ。
そなたを含む吸血不死者は、生者から直接啜らねばならんし、不死者どもには生者の肉を食らわせねばならん。
平野から南大陸は、我らの牧場にしなければならんのだよ、オセリファ」
不死者にも等級があり、グレシオフィは現存する唯一の完全な不死者だ。
完全な不死者であれば、日光を嫌うこともなく、銀の武器も弱点にはならない。魔界最強の悪魔を力の根源としているが、霊的な存在に転生しているために神の祝福を受けた武器すら、その身を傷付けることは適わない。唯一精霊の祝福を受けた武器がその身を切り裂くことができるが、グレシオフィが手に入れた不死の肉体は、その傷すら癒してしまう再生能力を持っていた。
生者の生血を啜る限り、その肉体が滅びることはない。吸血者同様、生者から直接啜ることも、杯に受けた生血を飲むことも可能だった。不純物を含む生者の肉など、差し迫った状況でなければ必要ない。

付き従うオセリファは、不完全ながらも最もグレシオフィに近い存在だった。

自我や感情を持ち、自らの意志でグレシオフィに従っている。日光は決定的な弱点ではないが、嫌悪の対象だ。銀の武器も、神の祝福を受けた武器も通用せず、精霊の祝福を受けた武器のみがその身体を傷付けることが可能な点はグレシオフィ同様だが、彼のような再生能力は備えていない。

中央に溢れかえる吸血者の最上位に位置する存在で、生者の生血さえあれば肉体が滅びることはない。もちろん、オセリファに血を吸われた者は、吸血不死者に転生し忠実な彼女の下僕と化してしまう。だが、不純物を多く含む生者の肉は受け付けず、生血のみが彼女の肉体を瑞々しく見せていた。

ターバを壊滅させた吸血不死者も、自我や感情、意志を持つが、たった一つ自らの意志ではどうしようもないことがあった。

転生の際にグレシオフィへの忠誠は強制に植え込まれている。あり得ないことだが、逆らう意志が芽生えるようなことがあれば、肉体は崩壊し始める。

オセリファ同様銀の武器も神の祝福を受けた武器も通用せず、生血を吸った相手を吸血不死者に転生させ下僕とすることに変わりはない。日光を受ければ灰になるが、月光を浴びれば復活できる。だが、月光を受けるまでに水に濡れたり、風で吹き散らされてしまえばそれも適わない。そして、白木の杭を心臓に打ち込まれてしまえば瞬時に灰化して爆散してしまう。さらには精霊の祝福を受けた武器で切断されてしまえば、傷口から瞬時に腐敗が進み、その身体は崩れ去り、復活することはできない。生者の生血を必要とすることはオセリファ同様で、不純物を含む肉は受け付けなかった。

不死者たちも、吸血した相手を転生させる能力こそないが、ほと

んど吸血者に準じた能力を有する。しかし、日光を受ければ身体は灰化して崩れ去り、精霊に祝福された武器で斬られれば、低位の吸血者と同様の運命を辿るしかない。血を啜ることはできず、生者の肉を生きたまま喰らうことでその肉体を維持していた。

自我などはなく、恐怖と歓喜の感情だけを持ち、破壊衝動だけに突き動かされる。グレシオフィやオセリファ、上位の吸血不死者には絶対服従が定められていて、逆らうなどということはあり得なかった。

最下級の不死者たちはそれこそ使い捨ての尖兵で、自我も感情も意志も持たず、日光で灰化し、精霊の祝福を受けた武器で斬られればその場で爆散してしまう。生者の生血も肉も摂取することは適わず、予め設定された時間が過ぎれば肉体は腐敗し始め、最後は腐臭を放つ液体と化し消滅してしまう。

いずれの者たちも、光の下で影を形成しないことで、不死者の一族と見分けることができた。

遥かな昔、両大陸に文明が生まれた頃に勢力争いに敗れ、最北の荒野に押し込められた彼らの怨みは、数千年の時を越え、今全世界に襲い掛かろうとしていた。

オセリファを下がらせたグレシオフィの背後には、黒山羊の頭と踵がない山羊の下半身を持つ神像が、妖しく両目を輝かせていた。

ラシアスのアルギール城の一室で、朝も早い時間から男女が激しく言い争いをしている。

男は語気こそ激しいものの理路整然と理を説いているが、女は言葉こそ丁寧だが頑なに聞き入れようとしていない。

「姉上、いや、陛下。

何故、民を苦しめてまで、己が欲望を満たそうとされるのか。
今、ここで一個師団規模の軍を編成しなおすなど、国庫を空にしても追いつきませぬ。
増税など、言語道断。
民に、何の利があると仰られるか。
現在、共同統治機構軍が最北の蛮族を抑え、和戦両面から打開を図っております。
そこへ軍を雪崩れ込ませるなど、両大陸を戦乱の渦に叩き込むおつもりか？」
語気激しく迫る男は、ラシアス第三王子にして共同統治機構ラシアス代表ヘテランテラだ。

「女王に対して、その口の聞き方は不敬でしょう。
弟といえど、許しませんよ。
だいたい、北の民に何を遠慮しているのです。
所詮、戦に明け暮れる蛮族どもです。
さっさと征服してしまえば、二度と南下などしようとは思いません。
服従するというのであれば、特に従順な者については褒美として南に迎え入れ、奴隷として使役してあげましょう。
それのどこに不満があるというのです？」
ニムファの目に狂気が宿っていることに、ヘテランテラは気付いていた。

「とにかくです。
共同統治機構は、ラシアスの独断専行を許しませぬ。
また、貴族たちから私財を挑発するというのであれば、女王が専制を行っていると判断し、これを是正するよう勧告を出す用意があります。
私としては、祖国が最初に是正勧告を受けるという恥辱は避けた

い。

陛下におかれましては、何卒お考え直しいただきたく、お願い申し上げます」

共同統治機構の代表は、南大陸の利害調整の役割を果たすと同時に、祖国の利益も守らなければならない立場だ。

是正勧告が出されれば、その後の国の立場は低下し、四国家間での発言力は低下する。もし、ビースマック騒乱以前に共同統治機構が成立していたならば、ストラーとビースマック両国に何らかの懲罰動議が出されていたかもしれない。結果的に駐在武官たちの間では、アルテルナンテとフィランサスの発言力は一段低くなっている。当然、それを政治的に利用することは当然のことであり、パシュースは遠慮などする気はさらさらない。二人はこれから長い時を掛けて発言力を取り戻す努力を重ねなければならず、それが両国代表としての重要な仕事になっていた。

ヘテランテラは、二人の肩身の狭さを間近で見ているだけに、ニムファが暴走した結果が祖国にどんな不利益をもたらすかを痛感している。

もちろん、祖国の面子や自らの立場だけのためにヘテランテラは動いているわけではないが、共同統治機構の目的とラシアスの安定の方向性は同じだった。

それだけに、ヘテランテラは是正勧告を出すことなく、ニムファに独断専行を思い留まらせたかった。パシュースたちが自分だけアルギールに残してくれた恩に報いるため、ヘテランテラは全力を尽くすつもりだった。

「貴族が所有する金を国のために供出するなど、臣下として当然の行いではないですか。

それを誰から聞きました？」

ニムファの目が険しくなる。
頭の中では情報を漏らした者を、どうしてくれようか考え始めているようだ。

「そのご下問にお答えする必要は認めませぬ。
それより、今は私財の徴発は専制に当たるとの、共同統治機構の見解を申し上げているのです。
万が一にも、これが行われてしまえば、我々は是正勧告を出さねばなりませぬ」
犯人探しなど、くだらないことに時間を費やす気は、ヘテランテラにはない。

「我々と言いましたが、あなたは我が国の第三王子なのですよ。
そんなくだらない仲良しの馴れ合いなどより、祖国の利益の方が重要なのではありませんか？
誰から聞いたのか、今すぐ言いなさい」
ニムファの目が狂気だけではなく、怒りにも染まっている。
ヘテランテラは、その怒りの根源が私財徴発を漏らした者へと向けられていると思っていたが、ニムファはそれももちろんだが目の前にいる物分りの悪い弟にも、その怒りの矛先を向けていた。

「私は我が国の第三王子ですが、それと同時に、陛下を含めた四王のご署名で権威を保障された、共同統治機構のラシアス代表でもあります。
私には、第三王子としての立場においても、ラシアス代表の立場においても、祖国の利益を守る義務がありますが、祖国の名誉を守る義務もあります。
是正勧告などという恥辱は、受け入れることはできません。
そして、機構が目的とする両大陸の安寧と、ラシアスの利益は同

時に成り立つ、いえ、両大陸の安寧なくしてラシアスの利益は確保できませぬ。

何卒、お考え直しを」

ニムファが癇癪を起こしては元も子もない。

ヘテランテラはひたすら低姿勢に努めているが、徐々に我慢の限界へと近付いている。

ニムファは共同統治機構の設立は認めたが、せいぜい親睦クラブ程度の認識でしかなかった。

自分が第一人者になれば有益な組織にできると思っていたが、駐在武官などという下級の者たちに何ができるという思いしか持っていない。それが四王の署名が保障する権威を振りかざして、偉そうなことを言ってくるなど片腹痛い想いだった。是正勧告を出すなら出せばよい。それ以上のことなどできるはずもないのだから、どうせ聞く必要などないとニムファは考えている。

「先程から是正勧告などといっていますが、それに強制力などありますまい？

出したいのであれば、お出しなさい。

それまでのことです。

それより、大方、私財が惜しくなったのでしょう、あなたに金の供出の件を話した人物は誰か、言いなさい」

ニムファの頭の中は、機構への嘲りと、私財徴発を漏らした犯人捜しに占められていた。

「何度も申し上げますが、その人物を教える必要を認めません。

陛下におかれましては、何卒ご懸命なご判断を下されますよう、お願い申し上げます」

限界だ。ヘテランテラは悟り、一旦言葉を途切る。

呼吸を整え、ニムファが口を開く前に、最後通告と言って良い言

葉を投げ付けた。

「もしも、是正勧告を無視された場合ですが、通商規制や交易の完全停止、通商上の優遇措置や経済援助の停止といった経済制裁が待っております。

確かに是正勧告に強制力などございません。

何故、強制力を持たないか、お考えになっていただけませんか。

国が、自らの力で正道に戻る、自浄能力がまだ残されていることを期待するからです。

是正勧告を無視することは、即ち、国に自浄能力がないことを、満天下に示すことに他なりません。

そうなれば、あとは、どうなるかくらい……

その莫迦な頭でもわかるだろ、姉貴。

それともあれか、目より上は帽子を飾る台か何かか？」

周囲に人がいないとはいえ、一国の女王に向かって言って良い言葉ではない。

弟とはいえ、臣下としてあるまじき振る舞いだ。それでもヘテランテラは言わずにはいられなかった。

一国の面子、いや一個人の欲望のために、世界が戦乱の渦に巻き込まれて良いはずがない。

「あなた、それが女王に向かって言う言葉ですか。

不敬ですよ。

弟でなければ、この場で手打ちにしてもおかしくないことです。

解りました。

あなたたち駐在武官は南大陸を乗っ取るつもりのですね？

下がりなさい。

バイアブランカ王、サウルルス王、ブルグンデロット王と協議します。

追って沙汰があると思いなさい」

そう言うとニムファは席を立つ。
既にヘテランテラの姿は目に入っていない。
有害な共同統治機構を廃止にする協議の場を設けることを三王に伝える手紙を書くため、ニムファは書斎へと向かおうとした。

「おい、莫迦姉貴、まだ間に合う。
是正勧告が出される前に、考え直せ。
俺は、少しでもそれを遅くできるよう努力はするが、このままじゃ間違いなく是正勧告は出されるぞ。
心して置けよ」
ニムファの背中に向かってヘテランテラは言ったが、返事は返されることなく扉は閉められた。

「おい、誰かいるか」
ニムファの背中を見送り、ヘテランテラが声を上げる。

「これに」
音もなく背後に男が姿を現し、床に膝をついて頭を垂れる。

「周囲に影は？」
ヘテランテラは子飼いの間諜に訊ねた。

「お引き取りいただいております。
既に周囲は我らが固めております故。
第一師団にも、話は付けてございます」
間諜の答えにヘテランテラは満足げに頷き、財務卿の保護について命令を下す。
予め打ち合わせてあった通り、間諜たちは事を運び、財務卿は夕暮れに紛れ城外の師団教練場に匿われた。

ヘテランテラが命令を下してすぐに、間諜は財務卿私邸に向かった。

応接室で財務卿の妻に面会し、ヘテランテラからの命令書を手渡し、家族と使用人をそれぞれ一室に集めるよう依頼した。

妻と娘が別室に入り、数十名の使用人が応接室に入った。財務卿には息子と娘が二人ずついたが、今家にいる次女以外は既に新たに家庭を築いている。

間諜は、使用人たちに解雇を告げ、夕方までに私物を纏めて屋敷を出るように申し渡す。突然の出来事に使用人たちは狼狽えるが、財務卿からの解雇通知を見せられ、渋々それを受け入れた。そして使用人たちがそれぞれの居室に戻り、私物の整理が始まると同時に、間諜たちの仕事が始まった。

使用人のうち、既に内偵で判明していたニムファの手の者に内通した者たちが、他の者に気付かれないうちに半数ほどが始末され、物置に放り込まれる。

財務卿を慕う使用人には間諜たちが囁き、女性は妻と娘の入る部屋へ、男性は応接室へと急がせた。そこでは女性の間諜が、妻と娘に使用人の服を着せ、暖炉の煤で顔を汚し、髪を乱雑に整え直していた。

使用人たちが部屋に入ると、女間諜は使用人たちにも着替えと顔や髪を汚すことを命じる。使用人たちは状況が理解できないが、妻に急かされ言うとおりに着替え、煤で顔や髪を汚していく。応接室でも同様に男性陣が着替えを行い、煤まみれになっている。

やがて、屋敷の一室から火の手が上がり、叫喚が沸き上がった。妻と娘、そして使用人たちは貴金属や宝石を詰めた鞄を抱え、用意

されていた馬車に乗り込まされる。
内通者が片っ端から斬り倒され、中には強姦される者もいた。そして、数人が命辛々屋敷を転がり出る。それを追うように妻と娘、数人の供回りを乗せた馬車が炎を突っ切り飛び出し、財務卿と落ち合うため師団教練上へ向かって走り去った。
僅かな手荷物を抱え、十数名の使用人が炎から逃れ裏口を飛び出し、後も振り返らず逃げ去っていく。
炎が渦巻く屋敷の中では、物置から財務卿や妻と娘に年格好が似た死体が引きずり出され、男の死体は首吊りに、女の死体同士は互いの喉を剣で貫かせる。死体に燃える水をかけて火を放つと、間諜たちは煙に紛れて姿を消した。
二人の息子の屋敷と、長女の嫁ぎ先の屋敷でも同様のことが行われ、財務卿の一族はアルギールから消滅した。

焼け跡からは、金属製の小箱の中に納められた、ニムファ宛の遺書が見つかった。遺書を検分した者たちには、当然箝口令が出されたが、ヘテランテラの意図を悟ったコリンボーサやエウステラリットの手の者により、財務卿一族は女王による私財徴発に対する抗議の自害を遂げたと、王宮には噂が広められていった。
明らかに殺害された使用人たちや、私財が消えていることは火事場泥棒の仕業と断じられていたが、貴族たちは疑心暗鬼に陥っていた。則ち、ニムファの命で私財徴発に異を唱えた財務卿は粛正され、私財は強奪されたという噂も、王宮内に静かに広がっていった。

プラボックは自分にあてがわれた家で、ルムと二人酒を酌み交わしていた。
「気に入らんな」
かなり酒が回り始め、プラボックは心の声を抑えることができな

い。口にする気はなくても、低い呟きは止められない。

「気に入らん」

今度はかなり大きな声だ。

「ああ、俺もだ」

やはり、ルムも心に鬱屈した思いを抱えている。

「お前もか。

どう思う、俺たちの、この体たらくを。

すっかり南大陸の犬だ。

奴らは、俺たちをどうしたいんだ。

次から次へと送られてくる食糧。

それだけじゃない、様々な便利な道具。

そして、もたらされる技術や知識。

俺たちは、いったい何なんだ」

吐き捨てるようにプラボックは言った。

彼は、劣等感に苛まれ、北の民の誇りを失いかけていた。

「あなたの考えている通りだ。

我らは蛮族と見下げられていた。

何故だ。

血も通っていれば、心もある。

ただただ暖かい、雪に閉ざされることのない土地を欲しただけだ。

だが、南大陸は受け入れなかった。

たまたま、そこに先に住んでいたというだけで、我らを北の大地に押し込めた。

何故だ。

今、我らは食うに困っていない。

南大陸から運ばれてくる食い物があるからだ。

ならば、何故。
我らが移住しても、食うに困らないではないか。
そうまでして、我らを雪に閉じこめたいのか、南大陸の住人たちは」
ルムの言葉は、血を吐くかのようだった。
二人には、南大陸の戦略が見えている。
北の民を以て最北の蛮族への障壁と成し、精鋭を以てこれを討つ。
北の大地に巣くう、南大陸を脅かす脅威を討った後は、北の民は北の大地に押し留めたまま、経済によって支配する。文化的後進地である北の大地は、南大陸で時代遅れになった不良在庫を吐き出すには都合が良い。捨てるしかなかった物がカネに換わり、そのカネで南大陸はさらに発展し、北の大地との差を広げる。下手をすれば、北の大地は南大陸の巨大なゴミ捨て場と化してしまう。

「おいおい、穏やかじゃないな。
また、我々の悪口かい？」
ランケオラータがレイを伴い、酒瓶とつまみを抱えて入ってきた。
ランケオラータは、北の民の不満は理解していた。二人がやるせない思いを抱えていることも、充分承知している。

だが、南大陸の住人として、住処を明け渡すわけにもいかないし、そんな気は更々ない。北の民には北の大地を開発し、発展させてもらわなければならない。南大陸の住人も、楽に今の生活を得たわけではないのだ。
北の大地に比べ、危険な野生動物や魔獣の生息数は遙かに多い。大型の動物ばかりでなく、昆虫類や果ては病原体まで、圧倒的な数量だった。
それに対抗するために、身体に抗体を作らせ、精霊と契約して白と黒の呪文を手に入れていた。大帝国成立前に南大陸の中心に居を

構えていたベルテロイという名の錬金術師が、その研究の過程で精霊と交信することに成功した。そして、精霊との何代にも亘る試行錯誤と、多くの人々の協力と犠牲の上に、現在誰もが契約だけで行使可能な呪文がある。いつしか、彼が居を構えていた地は、彼の名からベルテロイと呼ばれるようになっていた。

呪文の力と人々の叡智がなければ、肉体的に脆弱な人間など、野生動物や魔獣の餌となり、早晩絶滅していただろう。

父祖が勝ち取ってきた地を、おいそれと明け渡すわけにはいかなかった。

「そうはいってもな、ランキー。

我らの悲願は暖かい土地だ。

こんな地は、人の住むところではない」

最近は愛称で呼びかけるようになったプラボックが、レイから酒瓶を受け取りながら言う。

「まだ、お二人はアービィから異世界の話を聞いてないんですか？

異世界でも雪に閉ざされる国は多いそうです。

でも、燃える石や燃える水、燃える空気のおかげで、暖かい冬が過ごせてるらしいんです。

馬を必要としない車や、鉄でできた大蛇に鳥。

そして鉄の船。

旅が、この世界の何分の一、いえ何百分の一の時間でできるんですって。

私たちみたいに歩きや馬車で五十日も掛かっている旅が、アービィの異世界では半日も掛からないの。

アービィの世界も、五百年くらい前までは、ここみたいだったんですって。

だから」

レイが一気に言った。

少女らしい純真さは、すぐにでも南北地峡を開放してしまえばいいのにと思っている。しかし、レイの聡明さは、急激な開放がどのような混乱を両大陸に引き起こすか、それを見通していた。間違いなく南大陸に人が溢れ、北の大地は荒廃する一方だ。

今後産業革命が必ず起き、人口の爆発的増加は避けられないと、アービィは言っていた。そのときに、北の大地は必ず花開く。いや、増えた人々を養えるのは、北の大地しかない。南大陸のキャパシティは、せいぜい今の三、四倍といったところだ。現代日本の建築技術があれば、高層ビル群でかなりの住居を確保できるが、おそらく人口増加に科学技術の発展が追いつかない。

人口が増えれば、単純に耕地面積は減っていく。

「待て、と言うのか？

餌を前にして、主人から命じられた犬のように？」

プラボックは険しい目つきのままだ。

「今、移住を解禁したとします。

北から南へ、人々は殺到します。

そして、住みやすい場所を巡って諍いが起きるでしょうね。

それが先住の南の住民とあなた方なら、また昔に逆戻りです。

あなた方の間でも、足の引っ張り合い、潰し合いが起きるのでは？

南大陸の住人の中には、北の大地に新天地を求めようとする人々もいます。

そうすればアービィの同業者がそれに続き、ギルドが入り込んでくるでしょう。

そうなれば、南大陸に隙間ができます。

段階的に移住は認める方向に持って行きます」

プラボックの目つきに合わせ、レイは口調を改めた。

言われてみればその通りで、急激な開放は北の民の間にも諍いを起こすだけだ。

ただでさえ、住みやすい場所、作物が多く取れる土地を巡って、殺し合いを続けてきた民だ。その常識を南大陸に持ち込めば、たちどころに排斥の対象だ。

やはり、北の民と南大陸の住人が、北の大地で緩やかに混交し、互いに浸透するように入り交じるまでの『待て』は、間違いではないのだろう。

「レイ、ランキー、それは解っているんだ。

移住は慎重に開放するべきってな。

いまでこそ、俺とルムは酒を酌み交わしているが、それは最北の蛮族のお陰だ。

本来なら、顔を合わせたら、どちらかが死ぬまで剣を収めぬ相手だ。

間違いなく、今は戦と背中合わせだが、平穏なときだ。

だが、多分、移住を開放すれば、南大陸で、俺たち同士の殺し合いが起きることは確実だな」

プラボックは解っている。

わざと南大陸の住人に、不満をぶつけてみただけだった。

「今は、地均しか。

いつになるんだろうな、両大陸を自由に人々が行き来し、好きな場所に住めるようになるのは。

子か、孫か。

それとも、もっと遠い未来の話か」

ルムは遠い目をして呟いた。

「そう遠くないことだと、俺は思う。

もともと、南大陸には両大陸の民を両親とする子供は多数いる。
そして、北の大地にもそう言った子供たちが生まれ始めている。
その子供たちが大人になる頃は、今よりずっとマシな世界にしたいな。
それが俺たちの世代の仕事だろうよ」
ランケオラータは北の大地に捕らわれて以来、貴族然とした立ち居振る舞いが影を潜めている。その後、北の大地で生活するようになってからは、一層その傾向が顕著になっていた。
インダミトの王宮にいた頃は、良くも悪くも因習に囚われた考え方しかできなかったが、北の大地での生活は、彼に幅広いものの見方と、柔軟な考え方を身に付けさせていた。

「そうよね。
アービィが言うような、そんな早さで旅ができるなら、北の民も南大陸の住民も自由に行き来ができるようになりますね。
もう、南大陸も北の大地も関係なくなるんですよ。
鉄の鳥が飛び始めたら、国境や地峡なんて、意味ないですもん」
レイは、この世界にもそんな時代が来るなら、そこで生きてみたいと思っていた。

同じ夜、ティアの部屋のドアが叩かれた。
「ルティなの？
開いてるわよ。
どうしたの？」

「ティア。
あたし、どうしたらいいの？」
ルティは真っ赤に目を泣き腫らし、ティアに縋りついた。
寝巻きは乱れ、まるで今慌てて身につけたようだった。

「どうしたのよ？」
アービィがなんかしたの？」
ティアがただならぬ雰囲気に語気を強めて聞く。

「アービィがね……
寝言で『ショーユ、ショーユガホシー』って。
この世界の言葉じゃなかったわ。
きっと、きっと、異世界においてきた女の名前よ」
そこまで言ってルティは泣き崩れる。

「ねぇ、ルティ。
他に『ミソ』って言ってなかった？
それ、異世界の調味料だから。
って言うか、あんた、なんでアービィの寝言を聞いてるのよ」
暫く考えてから、ティアは訊ねた。

前日、翌春の作付けに付いて相談した際、アービィが大豆に似た豆の増産を力の限り主張していた。
栄養価も高く栽培も容易なのだが連作障害の不安があるため、畑を替えつつ作付けする必要があり、安定供給には手間が掛かることで皆が消極的になっていたのだった。それでもアービィは輪作や新たな開墾など、なかなか主張を収めずにいた。とにかく、来春はある程度の作付面積を確保することになり、輪作をどうするか、次はどこの畑を使うかなどの検討が行われていた。
その後、たまたまルティがレイに呼ばれて席を外していたときに、ティアはアービィにしては珍しい我儘にも似た主張の理由を聞いていた。

「え？

何で知ってるの？
いや、あの、ほら、きゃはっ」
ティアから思いもよらぬ質問を返され、ルティは顔を赤くしている。
あの夜以来、二人は時々抱き合って眠るようになっていた。もちろん、妊娠の可能性を考えて最後まですることはなかったが、互いの肌の温もりを確かめ合う夜が増えている。
この夜も、二人で眠っていたときに、突然アービィがはっきりとした寝言を呟いたのだった。

「きゃはっ、じゃないわよ。
まぁ、いいけどね」
ティアは別に責めているわけではなく、からかっていただけだった。
ティアとルティの寝室が並び、廊下を挟んでアービィの寝室がある。アービィとルティは足音や扉の開閉の音を忍ばせているつもりだったが、ティアには充分すぎるほど気配は伝わっていた。

「お願い、ティア、聞かなかったことにして」
ルティは、赤くなった顔をさらに真っ赤にして、ティアに懇願した。

第７８話

山脈の哨戒線は、雪に閉ざされた間は平穏だった。

いかな不死者や吸血魔獣といえど、吹雪に吹き飛ばされ、雪に埋められ凍りつかされては、前進するなど適わない。日光が遮られ、不死者たちの活動時間が長くなったとはいえ、雪そのものが自然の障壁として立ちはだかっていた。

それだけに、哨戒任務に就く将兵の心に油断があったことは否めない。さらに雪に閉ざされ、他の哨戒拠点やパーカホとの行き来が困難になり、閉塞感に警戒心が緩んだこともあっただろう。

吹雪が襲う回数がめっきり減り、太陽は顔を覗かせないものの気温も暖かくなり始め、集落の周囲に雪解けの水が流れ始めたある夜のこと。

小さな拠点から、夜半の哨戒任務に出た小隊が、予定の時間になっても戻らなかった。拠点を指揮する中隊長は就寝しており、警戒心が最も緩む深夜の担当は、次席指揮官である第一小隊長が執っていた。多少の遅れはよくあるが、この夜の遅れは誤差の範囲を超えていた。

中隊長に哨戒に出た小隊の異変を知らせると共に、次席指揮官の権限でできる対応、つまり捜索隊の編成を、第一小隊に下命した。

深夜に叩き起こされ、不機嫌の態をありったけにした中隊長が、集落の司令室に入ってきた。小隊長は手短に哨戒に出た小隊が戻らないことと、捜索隊を編成したことを報告し、中隊長の指示を待つ。

中隊長は、即断で捜索隊の出発を命じた。

まだ魔獣や不死者が山脈地帯に入り込んだことはないが、吹雪が止めばその可能性はないとはいえない。ターバが陥落し、吹雪に閉ざされた間は中央側の麓を偵察できなかった状況では、どこに不死

者や魔獣の拠点を作られていても分からないからだ。
もし入れ違いにでも小隊が戻ってくれれば、異常はなかったということで、叱責の一つでもしておけば良く、自分が後で笑われれば良いだけだと、捜索隊を見送った中隊長は考えていた。

集落は結界に守られており、不死者が入り込む隙はない。
念のため歩哨はたててあるが、集落の目の前に不死者が立ったとしても、こちらが結界の外に出ない限り、向こうからは指一本触れることは適わないはずだった。
歩哨は、結界が通用しない魔獣や生者を監視することが、主たる任務だった。

捜索隊を見送り、こみ上げてくる生欠伸を噛み殺し、目に溜まった涙を擦っていた歩哨は視界の隅に動く不穏な影に気付き、結界を刻んだ柵から身を乗り出した。
次の瞬間、その首が、音もなく切り離され、次には重い音を立てて地面に転がった。歩哨の死体が引き寄せられ、もたれ掛かられた柵に過剰な力が掛かる。雪の重みで脆くなっていた部分が倒れ、柵に施してあった結界効果がなくなった。死体の切断面から吹き出す血飛沫が周囲を朱に染め上げたとき、吸血不死者の群れが僅かに開いた結界の隙間から、哨戒拠点の集落に雪崩れ込んだ。

怒号と悲鳴、命令と復唱、武具を身に着ける際の金属が擦れあう不協和音が辺りを満たした。
破壊衝動のみに突き動かされた低位の不死者が、突入のための突破口を押し広げる。待ち受けていた精霊の祝福を受けた剣が、槍が、矢が殺到し、不死者の群れを打ち倒すが、爆散する灰を突き破り次々に不死者たちは雪崩れ込んできた。
死を恐れる生者と、死を恐れない不死者では、突進力の差は明ら

かで、徐々に防衛に就く将兵は押され始めていた。バリケードに不死者の群れの手が掛かり、次々に障害物が引き倒され、それを乗り越えた不死者が将兵に掴みかかった。一体を斬り倒す間に二対に掴みかかられ、腕をもがれ、首をねじ切られる将兵が続出する。

三交代で休息に入っていた将兵が武装を整え戦列に掛け付けたときには、既に勝敗は決しようとしていた。

防備の囲いを突き破り、寝所に踊り込んだ不死者が将兵を肉塊に変え、喰らっている。その横では吸血不死者が将兵の血を吸い、彼らを同族に転生させていた。忠実な下僕と化した新たな吸血不死者が、ついさっきまでの同僚を襲い、次々と吸血不死者が増えていく。

精霊の祝福を受けた武具があるため一方的な殺戮には至らないが、それでも戦況は不死者優勢に傾き始める。そして、将兵の背後から仲間だったはずの者たちが襲い掛かった瞬間、戦線列は崩壊した。哨戒拠点の集落は殺戮の嵐が吹き荒れ、生きながら血を吸われ吸血不死者へと転生する者、不死者に生きながらその身を食われる者が続出し、阿鼻叫喚の地獄絵図が展開されていった。

捜索に出ていた第一小隊が、行方不明になっていた小隊全員の死体を確認して、新たな指示を求めて集落に戻ってきたとき、そこは血の臭いだけが支配する静寂の中に沈んでいた。異常を察知した小隊長は、直ちに一個分隊を班ごとに斥候に出し、集落を探らせた。同時に二個分隊から一班ずつを抽出し、それぞれを周辺の拠点とパーカホに伝令を走らせる。

集落を探りに出た斥候の一班が戻り、小隊長に見たままの状況、不死者が仲間たちの死体を食らっていることを知らせた。小隊長は、生存者がいないことと、戻らないもう一班が集落に残った将兵と同じ運命を辿ったことを悟り、無謀な突入は控えて様子を覗うことに

した。

拠点の集落は、精霊の結界に守られていた。なぜ、それが破られたのか、小隊長は想像を巡らせた。

思いつくところは、油断しかない。

救援に飛び込む必要は既になく、怒りに任せて突っ込んでも不死者の数を増やすだけと気付いた小隊長は、配下の分隊長を集め作戦案を示した。

外側から破壊された柵の部分に聖水を撒き、結界を閉じることによって不死者を滅し去る。

単純にして明快な作戦だった。

一時的な効果しかないが、自らの拠点を乗っ取られたまま放置するわけにはいかない。

しかし、中の不死者たちに気付かれないはずはない。

それには結界の途切れた部分を聖水で繋ぐ間、不死者の群を集落の中に押し留めておく必要があった。結界を閉じるため聖水を撒く者と、その間不死者を近寄らせないための防壁となる者、場合によってはもっと多く必要かもしれないが、最低でも二人の決死隊が必要だった。

小隊が配下に収める三個分隊のうち、一班五名が戻らず、別の二個分隊から一班五名ずつを伝令に走らせていた。現在小隊長が保持する戦力は、三個分隊とはいえ実質は三班の計十五名。

突入し、聖水を撒く間時間を稼ぐための決死隊を、その中から選ばなければならなかった。

「さて、中には俺と、誰が行く?」

重苦しい沈黙が流れる中、小隊長が努めて明るく切り出した。

十死零生が前提の作戦など、既に作戦とは言えない。

小隊長は、その役は自分に課せられた使命だと考えていた。

「小隊長だけ、死なせるわけないじゃないですか。

全員で行きますよ」

沈黙を破り、努めて明るく次席指揮官の分隊長が言う。

敬愛する上官一人を死なせて、どの面下げてパーカホへ帰れというのか。分隊長の視線はそう物語っていた。

「冗談じゃない。

たかだか聖水を撒くだけの、十も数える間に終わるような仕事に、十五人も人が要るかい。

二人もいれば充分だ。

結界が繋がれば、その瞬間に奴等は灰になる。

それだけのことじゃないか」

無理だ。

間違いなく、不死者の群れに集られ、自分たちの命も消え失せるだろう。おそらくは不死者に転生させられ、結界が繋がると同時に灰と化し爆散するはずだ。

「無理でしょう。

不死者の数は、どれくらいいるか判りません。

我々を除いた集落に残っていた者も、どれほどが喰い殺されたか正確な数がわからない以上、全て不死者になっていると判断すべきです。

一斉に襲い掛かられたら、二人なんぞあっという間に飲み込まれます。

そしたら、次は三人が突っ込むんですか？

所要に満たぬ兵力の逐次投入は、絶対に避けるべきです。
こういう作戦ではいかがでしょう」
分隊長は、自分の意見を具申する。

突入した者が、聖水を撒く時間を稼ぐことは変わらない。
だが、迅速に事を運ぶため、聖水は二名で撒く。残存兵のうち黒呪文を使える者八名が前面に立ち、不死者の群れを食い止める。残り五名は祝福法儀式済みの武器で、近接護衛。悪いけど小隊長も前面の担当です。
分隊長は仲の良かった別の分隊長の顔を思い浮かべていた。お前だけ逝かせはしねぇさ。

「そうか。
そうだな。
じゃあ、全員で行こうか。
だが、いいか。
危ないと思ったら、人のことなど構わず脱出しろ。
後を振り返ることなく、な。
全員で死んじまっちゃぁ、誰がパーカホへ知らせるんだい？」
小隊長は、全てを吹っ切ったような明るい笑顔で皆に告げた。

「行きましょうか。
楽しいですよ、きっと。
だいたい、俺たちは人殺しが仕事じゃないですか。
人を斬りたくてしょうがなくて、法に触れることなく人殺しができるからって軍に入ったんでしょ。
それが、不死者を斬りたいだけ斬って死ねるなんて、軍人冥利に尽きるってもんです。
相手が不死者なら、誰も殺さずに済む。
神様ってのにお目に掛かったら、胸を張って言ってやりましょう

よ。
俺たちゃ、誰も、人殺しなんてしてございませんって。
そしたら言ってくれますよ。
ご一行様、極楽へご案内ってね」
分隊長は、心底嬉しそうに言って、精霊に祝福された剣を掴んで立ち上がった。

数刻後、十五人の男たちが、哨戒拠点だった集落を出た。
そして、集落に向かって深々と頭を下げた後、二手に分かれる。
片方は十三人の集団で近隣の集落へと急ぎ、残る二人はパーカホへと歩き出した。

哨戒拠点が不死者の群れに襲われてから三日後、行方不明になった小隊の捜索に出ていたため生き残り、仲間の仇討ちに成功した小隊長は、ラルンクルスを始めとしたアービィたちの前でことの仔細を報告していた。

「不死者は『大炎』で充分焼き払えました。
相手を観察する余裕はありませんでしたので、不死者か吸血魔獣かという判別はできませんでしたが、全てが簡単に燃え尽きています。
連合軍の制服を着用した不死者が確認されましたので、これが報告にあった吸血魔獣により同族へと転生させられたものと判断されます。
これも他の不死者同様、結界が閉じられた瞬間に灰と化したところから、吸血魔獣は不死者であることが確認されました。
尚、不死者の群れは全て灰化してしまいましたので、総数は不明であります。
また、どのような経路で哨戒拠点まで辿り着いたかも、現時点で

は不明であります。
現在は、近隣の拠点より聖水を分与し、結界を維持してあります」
背筋を伸ばしたまま、小隊長は報告を終えた。

「ご苦労。
下がってよいぞ。
貴官を含め、負傷した者たちには、暫く後方で休養を取ってもらう。
もちろん、その間に不死者対策を研究してもらうがな。
期日などは追って知らせる」
ラルンクルスに告げられ、小隊長は一礼して作戦室を出ていった。

小隊長が退出した後、ラルンクルスはランケオラータに向き直った。

「ランケオラータ様。
今回不死者の襲撃に遭った拠点には、結界を補修するため至急補充の隊を送り込みますが、そこに神官様のご同行を願います。
ですが、今後は哨戒の方法を考え直さなければ、また奇襲を受ける可能性があります。
拠点間の距離が遠すぎる現状では、いつ哨戒線を抜かれてもおかしくないと考えます。
当初は二重の拠点に六百の兵力でしたが、現在はそれが一万に増えているのに対し、拠点の数は増えておりません。
拠点を新たに構築するのも手ではありますが、ここは思い切って打って出るか、山脈を放棄するか、方針を検討するべきかと」
陣を敷いて両軍が正面からぶつかり合う、正規軍同士の合戦であれば、ラルンクルスは誰に対しても遅れを取る気はない。
だが、相手は神出鬼没の遊撃戦を仕掛けてきている。こうなると拠点主義は脆い。敵は拠点のどれを攻撃しても良く、こちらは全て

を守らなければならない。これだけでも不利だった。
そして、敵の本拠地は最北の地奥深くにあり、間には広大な中央部が障壁として立ちはだかっている。これを抜くには、軍の全力行進でも四十日以上掛かるだろう。当然のことながら、その間の補給も問題だった。

中央の敵情がほとんど判っていないことも、作戦を立て難くしている要因の一つだ。
ターバを落とされ、ここを吸血不死者の根拠地とされたことまでは判っている。だが、ターバ以北最北の地までの情報が、全くといっていいほど入ってこない。このままじりじりと押されっぱなしになるのであれば、ターバまでを奪回すべきと思われた。

「僕が行きましょうか。
ターバ以北を見てきます。
敵拠点の位置と、戦力を見てくればいいんですよね。
もし、『移転』で不死者を送り込んできているのであれば、それを壊せばいいわけですから、それほど兵力が要ることではないでしょう。
僕とルティ、ティア、バードンさんで充分です。
打って出るかどうか、それから判断してもいいかと思いますが。」
アービィが威力偵察を提案する。

「行ってもらえるのはありがたいが、その間の食料はどうする？
おそらく、中央に喰うものは残ってないぞ」
一年近く放置された大地に、人間の食用に適して作物が自生している可能性は、全くないとは言わないが限りなく低い。アービィに食料の心配がなくとも、同行者はそうもいかない。また、アービィが野生動物を狩ってきたとしても、人間は獣肉だけでは生きてはいけない。

プラボックはその点を指摘した。

「やはり、正攻法しかないか。
ターバを奪還しよう。
ターバを落とし、そこに本拠を進める。
山脈の哨戒拠点も、同様に前進させよう。
プラボック殿、哨戒線をどこに敷けばいいか、ラルンクルス殿と協議してくれ」

ランケオラータが断を下す。

もちろん、前線を進めるといって、明日からそうできるというわけではない。

平野部では食料の生産や人々の生活があるため、ここの防衛部隊も配置する必要がある。兵站が伸びれば、それだけ経費も兵力もそちらに割かなければならない。まだ平野部の地は、北の民と南大陸連合軍全てを食わせるには、力不足だった。

「中央に大きな集落はそれほど多くない。
ターバを含めて、二十もあるかどうかだ。
それを全て取る必要もなかろう。
最北の地へ兵を進める進路上だけ確保すればいい。
進路の両側半日の範囲にある小集落は、結界で囲み、不死者の手が触れられないようにすれば充分だろう。
今回、拠点が壊滅したのは、油断もあったが、結界が破壊されたからだ」

プラボックが案を述べた。

結界で囲むと不死者は灰化してしまうというのであれば、力攻めで多くの損害が見込まれる市街戦など展開する必要はない。
当然結界を描くことを妨害されるだろうが、それを排除しながら

の戦いの方が、市街戦より遥かに損害は少なそうだった。

「それを考えると、集落を落としてそこを確保していく必要もないんじゃないですか？
集落の維持管理に人を裂かれるのも大変ですし。
補給線に沿って拠点を作ってしまえば、それでいいんじゃないでしょうか。
物資の集積と寝泊りさえできればいいと考えれば、無理して集落を攻めるよりよほど楽じゃないかと思うんですが」
ふっと気がついたとばかりにアービィが言った。

「そうだ、それだ。
それでいいんだ。
無理して力攻めなんぞ、する必要はない」
ルムが同意する。

「手の届く範囲に宿営地を築き、そこを起点に次の拠点を築きましょう。
それでターバは迂回してしまえばいい。
その際、絶対に夜間の行動は控えること。
万が一日没後に行動しなければならないときは、神官様から聖水をいただいていくこと。
聖水で一晩程度であれば、結界を敷くことができますからね」
アマニュークでの経験からアービィが言った。

「ねぇ、聖水を集落の周囲に撒いていけば、結界を描くより早いんじゃない？
とりあえず不死者を灰化させちゃえばいいんでしょう？」
それまで黙って軍議を聞いていたティアが聞く。

「でも、それはかなりの量が必要だよ。プラボックさん、ターバって中央では何番目の大きさですか？何人かで手分けすれば、半日で集落の周りを歩けますか？」

アービィがプラボックに訊ねた。

確かにティアの言うとおりだが、聖水の効力はせいぜい持って一晩だ。

半日で集落を囲い切れなければ、最初に撒いた分の効力は切れてしまう。

「十人が均等に回れば、半日も掛からんが。ただ、それだけの聖水が確保できるのか？」

プラボックは少し考えてから答える。

「やっぱり無理か。ごめんなさい、良く考えもしないで」

ティアが済まなそうに言う。

聖水は、川の水のように際限なくあるというものではない。祝福法儀式よりは簡易だが、それなりに手間の掛かった代物だった。それにグラス一杯の水はたいした重さではないが、実際のところ水は重い。一抱えある樽は、満杯にすれば一人で持ち上げることはかなり難しい。

「ちょっと待っててね」

アービィは一言だけ言って作戦室を飛び出した。

暫くして戻ってきたアービィは、プラボックに簡単で構わないので中央の地図を描いて欲しいと言った。

全体図に山や川、湿地や湖、そしてターバを含む重要拠点になりそうな集落の位置と街道を書き込んだものを一枚。その他に、集落周辺の地形図を必要数。

かなりの枚数になりそうだった。

「かなり時間が掛かりそうなので、後は明日にしましょう。申し訳ありませんが、プラボックさんは明日の朝までに必要な地図を描いてきてくださいね」

まるでランチメニューを注文するかのような気軽さでアービィが言った。

「おい、今夜は寝られないのか、俺は？

一人じゃ無理だぞ。

知らない場所だってあるんだ」

慌てたプラボックが文句を言う。

「大丈夫ですよ。

中央の民は一人じゃないんでしょ。

全員とはいいませんが、多くの人に手伝ってもらってください。

たまには、息抜きも必要です。

今日はここまでにしませんか？」

そう言ってアービィは軍議を強引に打ち切らせた。

「ねぇ、アービィ。

どういうこと？」

早速息抜きと称して酒瓶を抱えたルティがアービィに聞く。

「拠点を結界の記号にしちゃったらどうかなぁって思ってさ。

神官様に聞いてきたんだけどさ。

そしたら、できるだろうって」

アービィがグラスに酒を注ぎながら答える。

「え？
どういうこと？
巨大な結界ってこと？」
なんとなく想像がついたティアが聞く。

仮に目標をターバとする。
ターバを取り囲むように円を描き、その円周上に結界の記号を描き入れれば、ターバを囲む結界が完成する。
ターバに近寄れば敵の妨害は激しくなるが、半日の距離を保てばそれは極端に減るだろう。その反面、結界の円周は長くなり、描き入れる記号の数も増えていく。だが、記号そのものを大きくすれば、描き入れる数も減り、結界の強度は上がるという。もちろん、地面が平らでなければ記号を正確に書くことはできないが、小結界で記号を囲めばその結界が記号の役を果たしてくれる。そうなれば、結界が結界を作ることになり、強度は飛躍的に上昇する。

記号を小結界で囲むというイメージは、仮に結界に必要な記号をAとすると、拠点の中心にAを描き、周囲を結界の記号を全てAに置き換えたもので何重かに囲んでいく。円周が大きくなるなら、同様にそれを繰り返す。円の数が増えれば増えるほど、結界の範囲や効力は上がっていく。だが、これだけでは容易に破壊されてしまうので、防御として正規の結界でその周囲を囲んでおくということだった。

拠点一つ一つを記号として拠点の配列を円にすれば、巨大な安全地帯を確保できることになる。その中にターバなり、不死者の拠点を取り込んでしまえば、円が完成した瞬間に不死者たちは灰化して爆散してしまうだろう。
神官から聞いた通りに、アービィはルティとティアに説明した。

最北の地を目指す進路の確保と同時にそれを行えば、前線を無理に広げる必要もない。

山脈を最終防衛線して、それ以南は集落や田畑の結界を強化し、補給路は物資の集積拠点だけしっかりと守れば良いということだった。

最北の蛮族の最大の兵器は不死者だが、結局底に住んでいる以上の人数の不死者は作ることはできない。補充するにはこちらの集落を吸血不死者に襲わせるか、魔法陣で囲み集落ごと不死者に転生させるしかない。

だが、集落そのものが結界の中に入っている以上、哨戒拠点が襲われたような失態を犯さない限り、不死者が集落に入ることは適わない。『移転』で集落内に不死者を送り込んでも、実体化した瞬間に灰化してしまう。そして、魔法陣で結界を囲まれようと、結界に不備がない限り転生呪法はその中に効力を及ぼすことはない。

合成魔獣に突っ込まれると多少厄介だが、重要拠点には兵力が充分に配置されているので、一気に陥落させられる心配もなかった。

神出鬼没の敵に対して不利ばかりが目立っているが、こちらが有利な点も多い。

結界の効力が魔法陣より強いこともその一つだが、こちらが魔法陣を自由に破壊できることに対し、不死者は結界に触れることもできず、従って破壊することもできない。

生者が敵にいれば結界への出入りも破壊も自由だが、最北の地からここまで多数の生者を送り込めるほど、食料の余裕があるとは思えない。

兵器の材料という資源に限りがある以上、兵力をいくらでも南大陸から補充できるこちらの方が、最終的には有利だった。突き詰め

て考えれば、多少の犠牲は甘受しつつ敵の消耗を待てば、遠からず敵は自滅する。
あとは、どうやって犠牲を減らしつつ、敵に出血を強要し、和平へ持ち込むか考えればよい。

「ね、これなら犠牲を極力減らして、相手に出血だけ強要できるでしょ。
不死者は無限じゃない。
民を矢の代わりにするような戦は、早くやめさせなきゃ」
アービィは太平洋戦争の特攻兵器を思い出していた。
日本人特有のファナティクな性質が生み出した、狂気の戦術と兵器だった。資源をほとんど産み出さない日本が、世界に唯一対抗できる資源は人間だ。それを弾代わりに使うようになっては、それは既に戦争ではなく、国家としての、民族としての自殺だった。

「なるほどね、それで地図が要るんだ。
プラボックさんも大変ね、差し入れでも持っていこうかしら」
ティアは、そう言って部屋を出て行った。

「貴官からのご報告を聞く限り、ラシアスに対する専制の是正勧告は、やむを得ぬものと判断せざるを得ない。
南大陸連合は、そう判断いたします」
議長を務めるアルテルナンテは、渋い表情のまま告げた。

共同統治機構は、南大陸連合とその呼称を変更していた。
統治を目的とせず、国家間の利害調整が主たる使命となり、呼称に『統治』と言う文言が入ることは不自然と判断されたからだ。そこには大帝国の再来と誤解されることを、防ぐ意味合いも含まれている。利害調整だけでなく、為政者の専制や民への弾圧、不当な差

別の放置、侵略行為等、人道に反れる行いを国家が犯した場合の是正勧告や懲罰といった強権も、四王の連名により保障されていた。

最終的な決定機関は四カ国の代表による円卓会議で、くじで決定される議長に二票、他三名は一票の決議投票権を持っている。もちろん、二票といっても票を割ることは許されず、意見が対立した際の議長裁決のためであることが、規約には明記されていた。

会議の席に円卓を採用した理由は、上席者を作らないためで、四国家が平等の立場であることを表すためだ。

現在のところ、議長はあくまでも議事進行の責を負うのみで、自由な発言が許されている。だが、いずれ北の大地の代表が参加した折りには、議長の発言権は廃止され、票決が割れた際の採択権に変更される予定になっていた。まだ素案の段階だが、南大陸内の事案は北の民の代表が、北の大地内の事案は南大陸の代表が議長を務めることで公正を保つことになっていた。

円卓会議の下部組織として、関税及び税制や専制、軍備、商取引、内政、人権等の監視委員会が設けられ、各国から閣僚経験者や将来の閣僚候補、政務に精通する官僚たちが送り込まれている。各委員会には各国の事務官が平等に割り振られ、どこか一ヶ国に有利不利が生じないように配慮されていた。ここで検討された案件は、重要度や緊急性によって、円卓会議の開催を要するもの、代表に持ち回りで判断を仰ぐものに仕分けられる。

この他に連合軍の召集権と指揮官の任命及び罷免権を持ち、必要に応じた軍の編制を可能にしていた。

ニムファ女王即位式の後に催された、四王の親睦会という名の最高権力者会議で、素案がインダミト王バイアブランカから示され、全員の同意を得たことで南大陸連合は発足している。

そして、この日行われた初の円卓会議では、二つの議案が採択されていた。

一つは現在北の大地に展開している軍を、制式な南大陸連合軍として認定し、総司令官にラルンクルスを任命したことだ。

もう一つは、南大陸連合として、つまり南大陸の意志として、ラシアスに対し国民の私財徴発を専制と認定し、その中止を求める是正勧告の声明を出すことだった。

是正勧告は、受け入れられなければ各国によるラシアスへの経済援助と関税の優遇措置の即時停止と、それでもラシアスが拒否するのであれば、経済制裁として交易の段階的停止を警告した厳しい内容になっていた。

特筆すべき点は、議案がラシアス代表ヘテランテラから提出され、円卓会議が全会一致で声明発表を採択したことだ。この点で、私財の徴発が国家の意志ではなく、ニムファ女王の独断であり、ラシアスが専制国家に転落しかけていると認定していた。

これに対しラシアス女王ニムファは、私財徴発は王権の範囲内であり、連合の是正勧告は内政干渉であると反論した。

最北の蛮族を討つための国家総動員の一環であり、未だ何の効果を挙げていない派遣軍は怠慢と切り捨て、それに代わって北の大地を平定する英雄的行為だとの声明を出していた。同時に連合の即時廃止を求めて、四王会議を開く要請を、他の三国家の王に書簡で送っている。

だが、三王からの返書は、連合の設立はニムファも同意したことであると指摘し、それを蔑ろにすることは自らの威光を否定し、惹いては三王の威光も傷付けることだというつれないものであった。

同時に、非業の死を遂げたとされる財務卿に対する同情の声が、

貴族たちの間だけでなく、庶民の間にも広まっていた。公式には病死扱いになってはいたが、白昼堂々と屋敷に火が放たれ、使用人の多くが殺害され、生き残った者も一生治らない外傷や心の傷を負わされた者がほとんどだ。これで病死などという公式発表を信じる者がいたら、王室の犬か、余程おめでたい奴だと後ろ指を差されるだけだった。

ヘテランテラやエウステラリットの間諜たちが効果的にばらまいた流言飛語により、自殺のうえ私財を焼き払ったという説と、ニムファによって殺害され、私財を強奪されたという二つの説が、燎原の炎のようにラシアス国内に広がっていった。

ニムファは三王に、非難される謂われはないので代表を諭して欲しいと書簡を送り返したが、それに対する返書が届くことはなかった。

財務卿に対しては、反抗罪で捕縛し私財を没収するつもりで軍務卿と諮っていたが、その前に死なれたうえ私財のほとんどが灰と化すか失われていた。自殺したと言われた財務卿一族の死体は、高温の炎に炙られほとんど炭化しており、ＤＮＡ鑑定など望めないこの世界では、報告書を認めるしかなかった。

さらに、狙い澄ましたかのようにウェンディロフ師団の生存者がアルギールに帰還し始めた。彼らの口から、九千余に及ぶ命を北の大地にただ撒き散らしただけに終わったウェンディロフの無能振りと、そのような者を重用したニムファの専横振りが伝えられ、遺族からは怨嗟の声が広がり、急速に人心は離れていく。

若き美貌の女王に誰もが期待していただけに、その反動はあまりにも大きく、ニムファの予想を遙かに超えていた。

自分に味方する者が無能者と周囲から蔑まれる軍務卿のみであり、

自力で事態を打開することは不可能であるという現実を突きつけられたニムファは、三王とは懇意の王太后、つまり母親に泣きついた。
だが、待っていたのは国の威信を傷付けたことへの厳しい叱責であり、ニムファが求めた庇護ではなかった。

事ここに至り、振り上げた拳の落とし所を完全に失った若き女王は、政務を放り出し自室に篭もるという、前代未聞の暴挙に出る。
本来であれば、手を尽くして女王の政務復帰を促すべきだが、閣僚たちの信を完全に失ったニムファを宥めに行く者は皆無だった。
軍務卿ですら、ニムファの居室に近寄ろうともしない。もっとも、この状態でニムファに味方しても利がないと、保身に走っただけだったが。

ニムファの生活に必要な空間は、全て居室に連なっており、食事さえ運ばせれば、一歩も外へ出なくとも事足りる。もちろん、排泄の後始末や浴室の準備と片付けをニムファにできるはずもなく、食事の運搬と身の回りの雑事をこなす侍女は確保してあった。いくらなんでも一国の女王を、垢まみれのまま糞尿の溜まった部屋に放置しておくわけにはいかないための処置だった。
ニムファにしてみれば現実逃避だったが、その実態は体の良い軟禁状態だった。

宰相コリンボーサは、ここぞとばかりに第一王子だったエウステラリットを口説き落とし、摂政に就任させたうえで政治の実権を掌握した。
女王は病気療養中と発表し、それが恢復するまでは摂政が政治を行うこと、そして国民の私財を徴発することはないと、内外に向けて宣言した。そのうえで、自殺した財務卿一族を悼む談話を摂政名で布告し、わざとらしいほど盛大に一族の葬儀を国葬並みの規模で執り行った。

こうして両大陸に激震をもたらした新女王は、即位から五十日も経たず表舞台から姿を消した。
春の訪れは目の前で、軍の移動が容易になる寸前の際どいタイミングだった。

「宰相、国の大掃除が必要だな。
財務卿の後任も早急に決めねばならないが、軍務卿の罷免も急がねばならん。
あれは、放っておくと国の足を引っ張ることしかやらん。
両卿の後任を早急に決めろ。
あまり、私に仕事をさせるなよ」
ニムファが政務を放り出してから五日が過ぎ、玉座に居心地悪そうに座るエウステラリットは、コリンボーサを呼び出していた。
本来なら宰相も即解任だが、それでは国政に通じた者が足りなくなってしまう。権力欲の権化だが、それなりに有能な政治家であるコリンボーサまでまとめて切ってしまっては、国が動かなくなってしまいかねない。
閣僚の欠員が埋まり、新任の者が政務に慣れるまでは、後始末をさせなければならなかった。

「仰せのままに。
その後、新任の者が政務に慣れましたら、此度の責任を取って、私は宰相を辞任いたします」
コリンボーサは心にもないことを言う。
摂政に引き立ててやった自分を、まさか切るまいと考えていた。

「辞任などする必要はない、宰相」
機嫌が悪そうなままエウステラリットは言った。

「勿体ないお言葉。
では、残り少ない余生を国のため、ぜんりょ――」
「何か勘違いしておるようだが。
後任が政務に慣れた時点で、宰相も解任だ。
辞任など、許さぬ。
あれほど言っておいたのに、輔弼の任を全うできなかったのだからな。
責任を取って、しっかりと後始末をしろ。
解ったら、さっさと後任を決め、引き継ぎを行え。
言っておくが、穏便に済ませたかったら、手抜きなどしないことだ。
それから、延命のために策を弄するようなことはするな。
どちらであっても、解任では済まされないと心得よ」
コリンボーサは、エウステラリットの言葉に、自らが登ってきた栄達の階が崩れ去るのを感じていた。

「殿下……」
コリンボーサは、縋るような視線をエウステラリットに向ける。

エウステラリットは、それまでの厳しい視線から柔和な眼差しに替え、コリンボーサに語りかけた。
「死罪にならなかっただけでもありがたく思うんだな。
卿ほどのものが、何故に権力などに溺れたか。
私は、それが残念でならない。
卿であれば、歴史に残る名宰相となれたものを。
これまで国を引っ張ってきた功績には感謝するが、それとこれとは話が別だ。
権力には責務が伴う。
政治は、結果責任であり、過程は評価の対象外なのだよ。

解任後、卿の功績に免じて沙汰はなしだ。
これが、せめてもの私の温情と心得よ。
政務参議官の席は用意しておく。
が、参議会への出席には及ばず。
早急に、新閣僚の案を纏めて提出せよ」
内心では、エウステラリットはコリンボーサの留任を望んでいた。

だが、南大陸での彼の評判は地に落ちている。ニムファをいいように利用し、政敵を遠ざけ、己が権勢の増強に努めていたことは、知らぬ者などいない事実だった。最終的にニムファを輔弼しきれず暴走を許した罪は、どう庇い立てしようと消せることではない。彼が北の民の南下に立ちはだかり、一歩も退かなかったことは誰もが知るところだが、それを差し引いても功罪を秤に掛ければ国を私していた罪に傾く。

内務卿や外務卿にはほとんど罪はないのだが、人心を一新するためには全てを入れ替える必要があった。
幸いにして、卿の立場に立てる公爵の数に不足はない。第二王子は早々に臣籍降下して政務参議官を勤めていたので、政治の世界にまったく疎いわけではなかった。
コリンボーサが院政を敷けないように、次期宰相は弟に任せ、自らは王として即位することはせず、摂政のまま弟の後ろ盾になる。後は弟に好きなように組閣させ、最終的な責任だけ自分が取ればよい。エウステラリットはそう考えていた。
王になどなってしまえば、この政変が王位の簒奪と世間が勘ぐる。その程度のことは、エウステラリットは理解している。

ウジェチ・スグタ要塞にある代表のために設えられた懇談室で、ラシアス代表ヘテランテラと、ストラー代表アルテルナンテが顔を

合わせていた。
沈鬱な表情で塞ぎ込むヘテランテラを、アルテルナンテが慰める格好だ。

「いい加減、元気を出しなさいよ、ヘッテ。
あなたは間違ってなんかいないわ。
仕方なかったのよ、姉上様がこうなってしまったのは。
そうね、いろいろと不運が重なってしまったのかしらね」
かつて、王同士の表敬訪問の際、ニムファに遊んでもらった記憶がアルテルナンテの脳裏に浮かんでいる。
優しかった年上の姫。
国を思う気持ちは、誰よりも強かった第一王女。

慣れない他国の王宮で不安げにしている幼いアルテルナンテを、楽しませるように遊んでくれたニムファは、決して悪人ではなかった。それだけにアルテルナンテも今回の結末には、すっきりとしない部分が大きい。もちろん、インダミトのパシュースも、ビースマックのフィランサスも同じ気持ちだった。
男同士、下手な慰めはヘテランテラのプライドを傷付けるだけだと判断した二人は、ラシアス政変の結末が伝えられてからは、ヘテランテラには業務以外で声を掛けないようにしていた。

「いいんだ、アルテ。
仕方ないのは解っている。
あの、莫迦女にはいい薬だ。
もう二度と表舞台には立てまい。
兄上には、寛大な処置を願ってあるが、民が納得するかどうか。
最悪の事態も覚悟はできているよ」
気丈に振る舞っているが、姉から王位剥奪をしたのは事実上自分だ。

まさか死罪にすることはないだろうが、これから死ぬまでの長い人生を軟禁生活で過ごさなければならない姉の身の上を考えると、果たしてこれでよかったのかと考え込んでしまう。

もっと時間を掛け、手を尽くして説得すべきだったのではないか、ヘテランテラは後悔にも似た思いに囚われていた。

最北の蛮族を討つため、ウェンディロフ師団を独断専行させたことは、許されない暴挙ではあったが、国を思う気持ちからであったことは間違いない。両大陸の覇者になるという野望もあったのは理解しているが、ラシアスにとっての脅威を取り除こうとしたことだけは間違いはない。

「ヘッテ、暫く休むと良いわ。
北の大地への侵攻や、民の私財徴発がなくなれば、ラシアスへの是正勧告も意味を成さなくなるし、経済制裁もなくなるわ。
北の大地も急を要するようなことはないと思うの。
もし、あってもラルンクルスに任せておけるでしょ？
勇者殿もいることだし。
安心して大丈夫よ」
そう言ってアルテルナンテは席を立った。

「すまない。
そうさせてもらうよ。
姉上がしゃしゃり出て来なければ、我が国は安泰だ。
もう、皆に迷惑を掛けることもあるまい」
いつになく弱気になったヘテランテラは、アルテルナンテの背を見送ってから、自室へと戻っていった。

優しかった姉。
悪戯盛りの自分を、眉を顰めつつでも丁寧に叱ってくれた姉。
母のお仕置きから、身体を張って庇ってくれた姉。
姉は誰よりも民を思う気持ちが強かったことを、ヘテランテラは知っていた。

どこで、何が狂ってしまったのか、彼にはまだ解らない。
勇者召喚の失敗からか。
勇者の抱き込みに失敗して以来か。
しかし、父王であるロベリア先王が不慮の病に倒れ、摂政の座に着いたときには、既に姉は変わっていたような気がしていた。
確実なのは、勇者に袖にされてから、ニムファが狂気にも染まっていったことだ。最北の蛮族を討ち、それを以って勇者と対等な立場になろうとしていた節がある。そうなれば、勇者に討たれるということも考えなかったのか。それとも対等であれば、勇者に自らを娶らせることも可能と考えたのか。

ヘテランテラの思考は堂々巡りに陥っていた。

第７９話

陽射しが暖かい日が増え、根雪が融け始めていた。
暫くすれば、雪解け水が北の大地を泥濘の中に沈めてしまう。河川の氾濫は毎年の恒例行事で、山林から僅かだが肥沃な土を平野にもたらしてくれる自然の恵みだった。この世界でも、春は南からやってくる。山脈を季節が越えるのには少々時間のずれがあり、平野が泥濘に沈む頃、中央では雪解けが本格化する。

アービィがプラボックに依頼した地図は、四日後になって漸く仕上げられていた。正確な地図などまだ望めないこの世界で、プラボックは四苦八苦しながら薄い板に炭で線を引いていた。
当然知らない土地もあることから、一人で全てを描き切れるはずもない。そこで、中央の民から戦の指揮を執った経験を有する者や狩りを生業としていた者を呼び出して、それぞれの記憶の擦り合わせをしながら地形を描いていた。この間、睡眠時間を極限まで削られ、神経をささくれ立たされていたプラボックは不機嫌の極にあり、地図の作製にあたったメンバーはそのとばっちりをまともに受けるという不運に見舞われていた。

ルティが差し入れに行ったり、ティアとレイも参加して製図に勤しんだ結果、アービィが地図を要求してから四日目にして初めて、戦略を立てるに能う地形図が完成していた。
アービィは自分に絵心がないことを自覚していたので、地図の決まり事を二、三注文を付けただけで、後は手を出さなかった。ルティも馬と牛の区別が角の有無でしか付けられない程度の画力だったので、ティアから手出し無用と切り捨てられていた。
そして、戦略会議を前にして、今日一日の完全休養が実現していた。

「アービィ、獣化して」
突然ルティが言った。

「いいけどさ。
そこら辺に誰もいないよね？」
人から恐れられている自覚はあるので、人前で獣化するようなことはないが、獣化すること自体にアービィは躊躇わなくなっている。

「いないわよ。
ほら、早く獣化してよ。
そしたら、仰向けに転がって」
ルティが急かすが、アービィはそこはかとなくイヤな予感が漂ってきていた。

今、家には二人しかいない。
ティアは地図の完成祝いと称した酒盛りに呼ばれ、昼過ぎからプラボックの家に行っていた。
アービィはいそいそと服を脱いで獣化し、床に仰向けになり、所謂犬の降参のポーズを取る。

ルティが降ってきた。

「あ～、やっぱりこれ気持ちいいわぁ」
腹の毛皮に顔を埋めたルティが、頬でその肌触りを楽しんでいる。

「あれ、アービィ、どうしたの？」
アービィから反応が全くないことを訝しんだルティが顔を上げる。

アービィは泡を吹いて失神していた。

どうやら、アービィの後肢側からルティが身体の正中線上に飛び込んだ際に、足の甲がアービィの股間を直撃していたらしい。もちろん、狙ってなどいないのだが、ベッドの上から飛び込んだルティが、少々目測を誤っていたようだった。

「ルティ、アービィ、プラボックさんがおいでって」

太陽はまだ頭上にあるというのに、早くもほろ酔い気分のティアが二人を呼びに来た。

部屋の中からルティがアービィを呼ぶ叫び声が聞こえてくる。

何か、途轍もなく嫌な予感がしたティアが慌てて部屋に入ると、床に長々と伸びた巨狼に泣きながら必死に声を掛け続けるルティがいた。巨狼はまったくルティの呼びかけに反応することなく、小刻みに痙攣を繰り返している。

「ちょっと、どうしたの!?
アービィ泡吹いて？
何があったの!?」

完全に取り乱したルティの肩を掴んでティアが詰問する。

僅かに落ち着きを取り戻したルティが、しゃくり上げながらここまでの状況をティアに説明する。

頭が痛くなってきたティアが、ルティをそのままにしてアービィに『快癒』をかけると、巨狼の全身を柔らかな白い光が包み込んだ。そして、意識を取り戻した巨狼がゆっくりとその身を起こす。

ルティが全身で喜びを表し、巨狼に飛びつこうとしたが、ティアがその首根っこを掴んで引き寄せた。

「ちょっと、そこに座りなさい、ルティ」
ティアに命じられたルティが正座すると、つられてその横に巨狼がお座りした。

「さぁ、どうしてそんなことしたか話して頂戴、ルティ。
アービィも、なんでそんなことさせてるの？」
胸の前で腕を組み、ティアが問い詰める。

――いや、獣化して仰向けに転がったらさぁ、いきなり目の前が真っ赤に染まって、そのまま真っ暗になってね、気がついたらルティが泣いてて、ティアが怒ってる。
アービィが見たままを念話で伝えた。

「あのね、アービィのお腹の毛皮に飛び込んだら気持ちいいだろうなぁって」
おずおずとルティが答える。
そして、陽が傾くまでティアのお説教は続いた。アービィは完全に巻き添えだ。

「遅かったな、何かあったのか？」
すっかり出来上がったルムがアービィに聞いた。

「ええ、特にお話しするようなことじゃないんですけどね」
気のせいか内股になったアービィが答える。
既に痛みなどないはずなのだが、思い出すたびに喉元に痛みがせり上がってくるような気がしてしまっていた。だが、それを言うのも情けない気がしたので、アービィは言葉を濁したままグラスを受け取る。

「アービィ、見てくれ。
俺だけじゃないぞ。
皆頑張った。
これが必要だったんだろう？」
胴間声が響き、プラボックがアービィの肩を叩く。

背後には、大きな板に描かれた北の大地の地図が置いてあり、重要拠点となりそうな集落やそれらを繋ぐ街道、周辺の地形が細かく描き込まれていた。しかも、地図は炭ではなく塗料で描かれているため、必要に応じてさまざまな書き込みもできるようになっている。測量技術が発達していないこの世界で、地図の正確性など望むべくもないが、それでも戦略を立てるに当って大きく役立ちそうだった。

「素晴らしい出来栄えです、プラボックさん。
皆さんも。
これなら充分役立ちますよ」
アービィは上機嫌でグラスを干す。
だが、注意すべき点があります、と前置きしてからアービィはインパール作戦やポートモレスビー作戦の悲劇を話し始めた。

太平洋戦争後期に実施された、補給や現地の自然環境を全く考慮せずに地図上だけで立てられた作戦だった。あまりにも杜撰で上官の権威のみに頼った作戦指導のせいで自滅に等しい歴史的大敗を喫し、日本陸軍が瓦解していく発端となった、無謀な作戦の代名詞だ。
アービィは地図の上だけで考えられた作戦が、現地の自然に大きく裏切られる危険性を説明し、作戦会議には現地を熟知したものの同席が必要だと説いていた。

やがて、酒が回り始め、喋る内容が徐々に他愛もないものに摩り

替わっていく。
誰かが父祖の地を取り返した後のことを話し始めれば、誰かが南大陸との交易の夢を語り始める。雑多な話が飛び交い、結論の出ない討論が繰り広げられていた。
疲れが心地よく酔いの背を押し、其処此処で眠り込むものが出始めた頃、地図完成の宴は終わりを告げた。

「アービィ、みんな楽しそうだったね。
早く毎日がこうなるといいね」
ルティがアービィの肩に頭を預けて呟いた。

「そこ、いちゃついてないで手伝いなさいっ！」
眠り込んでしまった者たちに毛布をかけて歩きながら、ティアが二人を叱り飛ばした。

春の訪れは皆の心を浮き立たせている。
これからある者は食糧増産のため畑仕事に精を出し、ある者は戦場へ赴く決意を固めている。現在のところ食料も戦闘要員も南大陸に依存した状態だが、北の民の手で中央を取り戻したいという欲求は当然ある。名誉とは別次元で、最前線で剣を振るうことを望む者は後を絶たなかった。ただ、現状で戦法も、民としての性格も違う両者を、統一指揮することは難しいという判断から、北の民の連合軍参加は見送られていた。別働の遊撃隊が組織されてはいるが、両者が共同で作戦を行うことは、今のところ予定されていない。
唯一の例外が山脈の哨戒任務だが、先日の拠点襲撃以外に戦闘は発生しておらず、作戦に従事しているという意識はそれほど高くなかった。

翌日、ルムの家に地図が運ばれ、それまではテーブルと椅子しか

なかった作戦室が、それらしく改装された。
アービィは木材の破片を切り出し、赤と青に色分けし、敵味方の位置が一目で分かるような目印を大量に作っていた。木片には釘を通し、地図の上に固定できるようにしてある。

アービィの注文で部屋の壁に地図を固定するのではなく、広いテーブルの上に水平に置くことにしていた。壁に吊してしまうと画一的な見方しかできなくなるおそれがあったからだが、水平に置けば自分の立ち位置を変えることにより、敵将の立場になって考えることもできるからだった。

作戦を練る際には、こうあって欲しいという願望や、自分たちの常識から敵もこう動くはずという決め付けがどうしても出てしまう。劣勢であればなおさらだが、作戦の要諦は敵が嫌がることを第一に考える必要があり、敵も同様である以上敵将の立場で考える必要がある。平面に置かれた地図は、戦場を有機的に見るうえでも、壁に吊された地図より遙かに優れていた。

「なるほど、こうして見ると、敵の意図が手に取るように分かりそうだ」
北側から地図を眺めたラルンクルスが呟く。
戦を生業としているが、南大陸は四百五十年の長きに亘って戦自体が起きていない。北の民との争いも、地峡を通り抜けた者を叩くだけで済んでいる。大帝国崩壊後の戦乱の時代に生起した戦が、軍人たちの教典に使われていたがそれを実地で確かめる機会はついぞなかった。

「ここさえ抑えておけば、我々は細い道を行くしかない。
良く考えられている。
頭の中で考えていたときでも、なんとなくは掴めていたが、こう

して見てみるとそれが良く判るな」
ルムが唸った。

ターバは山脈から最北の地へと続く、最短の街道の要所にあった。山脈を降り、不死者の拠点とされた三つの集落を経てターバを過ぎると、中央部を木の葉に見立てれば葉脈のように、街道が縦横に走っている。ターバさえ抑えていれば、最北の地を衝こうとしても大軍の行進には適さない細い街道を通らざるを得ない。細い街道は両側を崖に挟まれた隘路や、人一人が通るのがやっとといったようなず、至る所に迎撃ポイントが点在していた。

「正規の軍を通すには向いてませんが、小隊程度を分散させてターバを抜きましょう。
逆に言えば、これだけ間道が多ければ全てを守るのはお互いに無理です。
日中の行動を心がけ、野営の場合は街道から外れて結界を敷くようにすれば、被害が出ることは少ないと思います」
アービィが言った。

力攻めでターバを落すのであれば、連合軍の戦力全てを叩き付けなければ無理だろうと思われていた。
ターバの民のほとんどが吸血不死者に転生させられているとして、その数は千を軽く越えている。攻者三倍の法則に従えば最低でも五千名、半個師団の戦力が必要だ。それも要塞や城を落すだけでこれだけの戦力が必要なのであれば、広い市街を完全制圧するにはさらにその数倍が必要と思われた。
当然こちらの損害をゼロに抑えることなど無理であり、死傷者の後送に人員が必要になり、欠員の補充にも時間が掛かる。ターバを落せば戦が終わるのなら、全戦力を磨り潰しても落としに掛かるのだろうが、まだ緒戦ですらない。四国家の常備軍が近衛二個師団、

常備二個師団が標準であることを考えると、戦力の無駄遣いは許されない。
従って、ターバを直接攻めることはせず、周辺に結界を重ねた巨大な結界を敷くことで、ターバそのものを囲い込み、不死者の群れを灰化する。これが取り得る唯一と言って良い作戦だった。

アービィがピンに紐を結び、先を尖らせた炭を用意した。
そして、木片を切り出し、一般的な二個の直角三角形の定規を作った。

「ターバから日の一行程って、どのあたりですか？」
アービィの問いにターバから避難してきた民が何点かを指差した。
ターバにピンを刺し、紐の先端に炭を結んで即席のコンパスを作ったアービィが、ターバから一日の行程に円を描く。
そして、三角定規を使って正確に１５。ずつに円周を刻んでいく。

「この位置に結界で囲んだ記号を置いていけば、ターバは無力化できます。
不死者は全て灰化するはずです。
一旦不死者と化した人を元に戻すことができない以上、情において忍びないのですが」
アービィがターバから避難してきた男に向かって済まなそうに言った。

「仕方ないさ、一思いにやって欲しい。
少しでも苦痛がないように」
男は平静を装って答えているが、内心では激情の嵐が吹き荒れているはずだ。

「あとは、地図上では分かっても、現地で正確な場所が判るかどうかだが」
ランケオラータが呟く。
「地の神官様にご同行していただいてはいかがでしょうか。地の精霊のご加護があれば、正確な位置を把握できるのではないかと思います」
考え込んでいたティアが提案する。
「それだと、一気に、というわけには行かないな。いずれにせよ、結界を敷けるのは神官様しかいないのであれば、仕方ないか。地の神官様を護衛して二十四ヶ所の特定をしてから、それぞれの場所に結界を敷くところから始めるか」
ランケオラータが頷いた。
「これで見ると、何ヶ所か道がないところが続くな。小隊が入って行くにはかなりつらい。アービィ、行ってくれるか？」
南西から北西にかけて六ヶ所、９０。分が、小隊規模で行動するには適さない森林と断崖が連なっている。
「解ってますよ、僕が行きます。一人で充分です。この地形なら、不死者の動きの鈍さは致命的です。神官様自体が、対不死者であれば、並みの兵士以上の戦闘力を持ってることになりますからね」
アービィは用意していた答えを出した。
「それ以外は三隊に分かれよう。

地の神官様が四名いらっしゃるから、９０。ずつ担当していただく。

それぞれ護衛と物資運搬に一個小隊。

それから、不死者への対応を伝授してもらうために、ルティ、ティア、バードン殿にそれぞれの小隊に随行していただこう。

他に案があれば、遠慮なく言っていただきたい」

ランケオラータが決を採る。

当初北の大地へ渡った精霊神官は、風の神官が大半を占めており、地水火の神官はそれぞれ一人ずつだった。

だが、春の訪れに合わせて田畑を整備するに当たり、全神殿へ神官の増援を依頼してあった。雪の季節が過ぎるのをリジェストで待機していた神官たちが先日到着し、早速地の精霊の加護の下、作付けの指導に携わっている。

結界の設置は、可能な限り正確に東西南北を設定し、そこに基点の大記号を設置しなければならない。南北が決まると、そこから東西を割り出し、あとは細かく細分割していけばよい。細分割が多ければ多いほど、結界の強度は上がっていく。この世界、この時代では、普通太陽の位置から南や北を割り出していたが、コンパスに比べ正確性は劣っている。だが、神官たちは精霊の声に従い、方位も距離もほぼ正確に掴むことができていた。

翌朝、パーカホを出たアービィたちと地の神官一行は、イーバで挺身隊として中央に進出する三個小隊と合流した。

アービィが粉塵爆発を利用して不死者を焼き払った方法は、今回は使えない。粉末炭が不足しているのではなく、襲撃してくる不死者の撃退が主な戦闘行為になるからだった。粉塵爆発は不死者が閉じこもった閉鎖空間内を焼き払うには適しているが、壁がない開か

れた空間では粉末が拡散してしまい、燃焼が連鎖で起きず爆発に至らない。
それであれば、奇襲に注意を払い、剣や槍で撃退した方が確実だった。

ターバまで一日の行程を残し、アービィと地の神官の二人組と、ルティを擁する小隊は西へ、ティア、バードンを擁する二個小隊は東へ分かれる。
アービィたちが真西を、ルティの隊が真南、ティアが真東、バードンが真北のそれぞれを中心にした９０。を担当することになっていた。

ルティ隊が太陽の位置から大まかに真南を割り出し、適当に結界を敷いて精密な位置を確定するため神官が瞑想に入った。それを基準にターバの中心からの距離と方位を、地の精霊たちがそれぞれに散った神官たちに伝えてくれるだろう。多少の誤差は当然出るだろうが、正確な地図もなくコンパスもないこの世界では、今のところこれが一番精密な測定法方だった。

ルティは神官が瞑想に入ると同時に、腰の剣に手を掛けて周囲に注意を払った。
今が奇襲を受けたら最も危険だ。日中に不死者がうろつくことはあり得ないが、合成魔獣の急襲があれば厄介だ。精神を研ぎ澄まし、あたりの気配を探る。

ふと、ルティは何かに呼ばれたような気配を感じ、神経をそちらへ向けた。
目には見えないが、近くに何かがいるのが判る。邪悪さは感じないが、襲ってこないという保証もない。そして、人間の身では抗し

得ない、圧倒的な気の質量を同時に感じていた。巨大な気が結界の周囲を取り囲み、徐々に圧迫し始めている。結界は半球を伏せたような形になっていて、外からの圧には強い形状だ。それが真上から押され、周囲を締め上げられ、今にも弾け飛びそうな緊張感を漂わせている。

ルティはこめかみや背中に、冷や汗が流れるのを感じていた。神官がどうなったか心配なのだが、注意を逸らした瞬間に押し潰されそうな恐怖感があった。

当の神官は、涼しい顔で瞑想を続けていたが、結界への圧迫感が強まってからは少々困惑の表情が見て取れる。

ルティは視線を結界の頂点に合わせたまま微動だにせず、神官の表情に変化が見られたことに気付いていない。同行した小隊の将兵が、ただならぬルティの表情と、困惑の表情を浮かべた神官を見比べ、何が起きつつあるのか判断できずにいた。

突然大きく息を衝いた神官が立ち上がり、ルティの肩に手を置いた。

ルティは神経を結界の頂点に集中していたため、自然体で近づいた神官に気付くことができず、飛び上がらんばかりに驚いてしまった。

「驚かせないで下さいよ」

心臓の鼓動が早鐘のようになっているルティが、やっとのことで言葉を絞り出した。

「ルティ殿、何故お分かりに？

地の精霊たちがお越しになったのですが、ルティ殿の殺気に怯えております。

今暫く殺気を治め下さい」
神官は困惑の表情のままだった。

精霊と感応できるのは、それなりに修行を積んだ神官のみだ。呪文の契約も、神官を通してでなければ、さらには依り代となる神殿がなければ無理だった。
ルティが何故、精霊が近寄ってきたことに気付けたのか、神官には解らなかった。

「あ、ごめんなさい。
邪悪さは感じなかったんですけど、何て言うか、巨大な固まりって言うか、結界を包み込んでるって言うか。
押し潰されそうな感じがしたんですよ」
ルティは慌てて警戒心を解く。
同時に先ほどまで結界を圧迫していた質量が、自然な感じで結界に浸透してきた。

地の精霊の性質は『重み』だ。その巨大な質量が持つ、盤石の重みが地の精霊の力でもある。対して水の精霊は『圧力』で、風の精霊は『速度』。そして火の精霊は『熱』だ。
ルティが感じた結界への圧迫感は、大地から沸き上がった精霊が、入り込める隙間を探し求めて結界上を走査していた感覚だった。

「ルティ殿は神官の修行をされたことは？
どなたか血筋に神官の者がいらしたか？
いや、それではあり得ぬはず。
何故ルティ殿は精霊を感じられたのだ？」
神官の言葉の前半はルティへの問いかけだが、後半は呟きだった。
いや心の中で考えたことが、自然と口を衝いてしまったのだった。

「修行はしたこともありませんし、代々由緒正しい商人の家系です。
大昔は、南大陸の中心近くに住んでいたらしいですけど、今の四国家成立の頃から少しずつ南に移住して、もう二百年以上フォーミットにいますよ。
それよりも神官様、精霊から位置を教えていただくのではなかったですか？
あたしは、今何も関知できていませんが」
精霊の気配を関知できなくなったルティが、慌てて言う。

「ご心配召さるな。
既に感応はできております。
真南の位置は、少々ずらすだけでいいようですね」
神官の表情には安堵の色が浮かんでいた。

「あの、神官様。
精霊が位置を教えてくれるって、どんな感じなんですか？
神官様にだけは目に見えていて、ここって指さしてくれたり、とか？」
基準点が決まり、結界を修正しつつ、その中を記号で埋めながらルティが聞いた。

「いえ、精霊たちは目に見えません。
見えたとしても、姿形など意味のないことです。
明確に一点を指したりはしませんし、複雑な感情を含んだ思考が必要な質問にも、答えてはくれません。
漠然と、なんとなく、ここ、とか、あちら、とかですね。
風や水の精霊だと、天気などを予感のような形で教えてくれると聞いています。
他には河川の増水などでも、知りたいと思えば。

我が地の精霊たちも、地滑りや火山の噴火、果ては温泉の位置まで願えば知らせてくれますぞ。

我々は、それぞれが所属する神殿が祀る精霊との交信に特化しておりまして、私などは地の精霊としか感応できませんが、最高神祇官様であれば、全ての精霊の声が聞けるとか」

記号を細かく修正する手は休めず、神官は説明した。

エッシンフェルゲンで長雨に足止めされていたときや、グラース河の増水が何時治まるか、何となく知らせてくれていたのは精霊だったというのか。ルティは自分の中の何かが、必要に迫られてその感覚を鋭敏にさせていたのだと思っていた。それが何なのかは判らない。アービィの中に眠っていた狼のようなものなのか、それとも神官の説明にあったように精霊なのか。

ルティは意識の中で精霊に問いかけたが、答えるものは何もなかった。

「じゃ、いいですね？」

茂みに消えたアービィから、神官に声がかかる。

「いつでも。

これでも肝は据わっていると、自負しております」

神官からの返事を受け、獣化したアービィが茂みから這い出した。

――じゃあ、必要な物を僕の背中に括っちゃって下さい。お乗りになりますか？

巨狼から念話が届いた。

「どうぞお気遣いなく。

いよいよ人間の脚では踏破できないという場所では、遠慮なく乗

らせていただきます故。
しかし、噂でしか聞いたことのない、人と心を交わした人狼に対面できるなど、またとない機会ですな。
それにしても、見事な毛皮だ」
そう言って神官は楽しげに歩き出す。
その足取りに迷いはなく、何かに導かれるかのように森林に踏み込み、川を越えていた。

――神官様、ここへは初めてですよね？　どうして、そんな自信満々に歩けるんですか？
獣化したアービィにとって踏破不能な場所など、果てしなく続く大海くらいのものだ。魔獣に対する恐れもない。いくら精霊の加護を受けているとはいえ、生身の人間にとってやはり魔獣は脅威のはずだ。普通、人跡未踏に等しい山道など、どこを警戒して良いか判らないまま、おっかなびっくり歩くのが関の山だ。
それが神官は何の迷いもなく、何に恐れるでもなく、気負うことすらなく歩き続けている。

「精霊の御加護があれば、道など無くても有ると同じです。
魔獣が出ようと、あなたがおりますれば。
私とて、自分の身を守る程度のことであれば、なんとかなりましょう」
神官は巨狼に全幅の信頼を置いているらしく、まるで気負いが見えない。

――じゃあ、目指す場所は、もうお分かりに？
アービィが聞いた。

「先ほど、真南の位置が決まったと精霊たちからお知らせをいただ

きました。
大地の精霊であれば、ターバの中心からの距離や方位を知らせるなど、雑作もないこと。
あとは精霊たちのお導きのままに」
こともなげに答える神官に、巨狼は思わず唸り声を上げていた。

やがて陽が傾き始め、森の中は急速に暗くなっていく。
目の前に深い谷が現れたところで、この日は野営することにした。
無理して谷底に降りようとしても、途中で闇に包まれ、立ち往生するのが落ちだ。野営中、魔獣に背後から急襲される可能性がないともいえず、上から襲われるより、崖を背後に背負った方が対処しやすいと判断してのことだった。
手早く火を熾し、神官はレーションを温め始めた。

「アービィ殿、精霊たちは周囲に邪悪な気配はないとお伝えになっています。
獣化を解かれ、おくつろぎになってはいかがですかな?」
既に結界を敷き、夜間に動き出す不死者への対策を万全にした神官がアービィに声を掛けた。

――いえ、僕はこのままのほうが。
巨狼の耳まで避けたような口元が歪み、切れ長の瞳に笑みが浮かぶ。

「凄惨と言うしかないですな。
気の弱い者であれば卒倒するかもしれませぬぞ。
さようですか、そのままということであれば……
これの出番というわけですな」
神官は笑みを湛えて荷物を解き、中から巨大なボウルと蒸留酒のボトルを取り出した。

――ちょっと凹みますよ、卒倒だなんて。なんで、そんな物お持ちになってるんですか？

凄惨という言葉に凹んだアービィだが、ボウルをみて嫌な予感がしてきた。

「ルティ殿とティア殿が持たせてくれましてな。

狼がそのままでいるようなら、これで酒を飲ませろ、と。

その手ではコッヘルはお持ちになれますまい？」

笑いを堪えられないという表情で、神官はボウルに蒸留酒を満たし始めた。

他愛のない話で夜明けを待ち潰す間、アービィは酒の量を抑えつつ周囲に警戒の思念を張り巡らせていた。

それは神官も同様で、常時精霊と感応し合い、邪悪な気配を探ることを止めていない。

――ちょっと、出てきます。神官様は、何があってもここを動かないでください。

アービィが巨体を起こし、闇を見据えている。

「承知いたしました。

崖下に二体、木の上、いや、空に一体。

そのほか不死者が十体ですか」

地の精霊が伝える邪悪な気配は、合計十三体。

そのうち不死者の十体は結界から出さえしなければ、どれほどの脅威にもならない。問題は、崖下に潜む二つの気配と、上空にいるという一つの気配だ。

――空を飛んでいるわけではなさそうですね。キマイラが滑空できるとは聞いていません。崖下の気配もこちらを襲う気満々です。多分、この崖くらいは飛び上がれるんでしょう。

アービィはそう言い残し、闇に消えた。

巨大な鶏が絞め殺されるような断末魔の叫びが遠くから聞こえ、森の木々が激しくざわめいた。明らかに硬質な物体が倒れる音、砕ける音、動物の断末魔が二度。そして巨狼の遠吠えが一度。

「ほう、無闇と突っ込んでくるほど莫迦ではないようですな。アービィ殿からは出るなと言い渡されていますが、遠吠えが聞こえたということは、魔獣は始末できたということでしょう。どれ、お相手仕ろうぞ」

神官は、傍らに置いてあった棍棒と見間違えそうなほど無骨なメイスを取り上げると、一歩結界から出る。

そして、さらに一歩神官が踏み出した瞬間、メイスが振り出された。

不死者たちには到底届かないと思われていた距離だったが、メイスの先端は確実に不死者の脳天を捉え、スイカを床に叩き付けたような耳障りな音と共に、不死者の頭部を粉砕していた。

「いかがされたかな？
届かないと思われたか？」

また一閃。

不死者の胴体を深く捉え、振り抜く運動エネルギーが不死者を両断する。

メイスと思われていた神官の得物は、収納するために縮めてあった三節棍だった。刃物でもないのに不死者を両断したその技は、神

官の膂力と反射の速度を物語っている。

低位の不死者を下がらせ、三対の吸血不死者が前に出た。

感情を一切感じさせない低位の不死者と比べ、吸血不死者は明らかにその双眸に怒りを湛えている。人間とは思えない蒼白い顔が怒りに歪み、今にも掴みかからんばかりの表情を浮かべていた。

「さあ、遠慮などいらん。
掛かってくるがいい。
狼が戻ってくるぞ。
私の獲物は、渡さない」

両者が同時に歩み寄り、互いの武器が触れる間合いに入ったとき、三節棍が真横に薙ぎ払われた。

辛うじて両腕で受け止めた一体の吸血不死者が弾き飛ばされる。低位の不死者と違い、身体を両断されることもなく、目立ったダメージを受けた様子もない。ゆっくりと身体を起こした吸血不死者には目もくれず、神官は別の吸血不死者の脳天に三節棍を振り下ろした。

水っぽい、嫌な音が当りに響き渡り、吸血不死者の頭が砕け散った。

糸が切れた人形が崩れ落ちるように地に倒れ伏すと、吸血不死者は瞬く間に灰化する。神官は腰に下げた聖水を口に含み、灰の塊に吹き掛け、そして足で踏みにじる。完全に再生能力を奪われた吸血不死者一体が消え失せ、仇を討つかのような勢いで残りの二体が、五体の低位不死者が突進した。

神官が三節棍を引き、メイスの形状に戻した。

華麗な舞踏のように神官が舞い、全ての不死者たちが頭を叩き潰され、聖水を噴きかけられ、一握りの灰と化していく。

灰を蹴散らし、首を何度か捻りつつ、肩を回しながら神官は結界へと戻って行った。一言、手応えがないと呟きながら。

結界の周囲に魔獣の気配を感じたアービィは、上空から迫る悪意をまず先に叩くことにしていた。

甲高い鳴き声と共に舞い降りてきた巨大な魔獣は、鶏の身体に大蛇の尾を持ち、その視線には石化能力を秘めた凶獣コッカトリスだった。

上空からの攻撃という優位を活かした一撃は、視線による石化だ。おそらく、通常の敵であれば初撃で決していただろう。だが、限りない不死性、呪文や呪い、ステータス変異に対する異常なまでの抗堪性を持つアービィには、ほとんど効果がない。僅かに毛皮に石灰のようなコーティングをしたに過ぎなかった。水から上がった後のように、全身を振るわせただけで巨狼はあっさりと石化を振りほどいた。巨狼が大地を蹴って飛び上がったとき、滑空はできても飛翔能力は持たないコッカトリスの運命は定まっていた。

避ける術のない落下の過程で、すれ違いざまに首に牙を打ち込まれ、巨狼の跳躍力に引き摺られて首を大きく仰け反らされたコッカトリスは即死していた。

自由落下に任せて着地した巨狼が首を大きく振り、鈍い音と共に凶獣の死体を大地に叩きつける。

その音につられ、崖下から二つの鳴き声が響き、八本足の雄鶏が双眸を狂気に染めて飛び上がってきた。死体を一瞥した二頭の魔獣は、口から火を吹き、視線にはコッカトリス同様の石化能力を持ち、そして体液全てが猛毒という、最悪の凶獣といっても過言ではないバジリスクだった。

巨狼がどちらから料理してやろうかと舌なめずりしたところに、バジリスクの片割れが走り寄る。

バジリスクが巨狼に噛み付くが、巨狼は微動だにせずその嘴を受けていた。僅かに遅れてもう一頭が駆け寄って、巨狼に炎を吹き掛けた。

微かに毛皮が焦げる臭いが立ち込めるが、巨狼にたじろぐ気配はない。コッカトリスの石化と同様、唾液に含まれる毒をしこたま打ち込まれ、石化の視線を受け、そして炎を浴びて平気な生物は、この世界であっても存在しない。はずだった。

巨狼の切れ長の瞳が冷たく光った。発光などするはずもないのだが、バジリスクの吐く炎が反射した。オレンジの熱感を持った炎のはずなのだが、巨狼の瞳はそれを冷たく反射していた。

何かに怯えるようにバジリスクが跳び退った。

そして、これが直接の敗因になった。

跳躍した一頭のバジリスクの落下点に、巨狼が待ち構える。僅かに羽ばたきながら落ちてきたバジリスクの腹を牙の一閃で切り裂くと、振り向きざまに跳躍し、怯えに動けないもう一頭のバジリスクに頭から突っ込み、その首をへし折った。

巨狼はコッカトリスとバジリスクの死体が喰えないか、暫くは臭いを嗅いでいたが、とても喰えたものではないと諦めたか、結界へと戻って行った。

アービィが戻ってきたときには、全ては終わり、神官は一人蒸留酒を嗜んでいた。

巨狼用に用意されたボウルには、何故か酒の量が増えていた。

「ご無事でしたか。

噂に違わぬ戦闘力。

いや、敵でなくて何よりです」
神官は巨狼が座る前に、自らのコッヘルをボウルに打ち当てた。
――神官様も、敵でなくて良かったですよ。祝福法儀式済みの武具だと、僕も傷付けられますから。
アービィが念話で応じ、ボウルの前にお座りをする。

「何故、アービィ殿は人狼の身ながら人との共存をお選びに？
正直、それだけの力をお持ちならば、喰うに困るようなことはありますまい？
何故、わざわざ、苦難の道を選ばれた？」
神官は、悪意なく言った。

――では、どうして神官様は北の大地へ？　神殿にいらっしゃれば精霊と人との架け橋という、危険を冒すような仕事はせずに済みます。どうして不死者や魔獣が闊歩する、危険な大地で人助けのような苦難のお仕事をお選びになったのですか？

確かに、風の神官たちもそうだったが、北の大地へ渡ろうという希望者は多く、どの神殿でも人選は難航したと聞く。なにしろ最高神祇官からして名乗りを挙げていたくらいなので、その微笑ましい難航ぶりは想像に難くない。
地水火風の理を詳らかにしたいという、知的欲求が強い人種でもあるためなのだが、南大陸ではほとんど目にすることのない、北の大地特有の呪法を研究してみたいという欲求が最も強い。そのためであれば、危険や人助けの手間など、何ほどのことでもなかった。

アービィは、ルティと暮らしたいという素直な欲求を口にするのが、なんとなく気恥ずかしかった。
神官は、知的欲求だと言い切ってしまうことに、なんとなく罪の

意識を感じてしまった。
どちらともなく、問いには答えず黙り込み、黙々と酒を喉に流し込んでいた。

「既に今夜中にこの周辺に到達できる魔獣や不死者はいないと、精霊が知らせてくれています。
夜はまだまだ長い。
ひとつ、ゆっくりと飲みませんか」
神官の言葉に、巨狼がボウルを鼻面で押す。

金属同志を軽く打ち付けあう涼しげな音が響き、神官の笑い声と狼の遠吠えが、夜の谷間を渡っていった。

第８０話

アービィ組とルティ隊が順調に結界を敷いている頃、ティア隊とバードン隊はそれぞれ苦闘の最中にあった。

アービィが進出したターバの西は、せり出した高地が食いちぎられたような断層があり、人々の通行を妨げている。アービィ組が初日に野営していた場所がそれであり、その両側には人跡未踏に近い樹海が広がっている。今の時期は樹木の葉が生い茂る前で見通しもまだ良いが、夏になればアービィが獣化していても踏破を躊躇うような地だった。

それに対してティア隊とバードン隊が進んだターバの東側は、平坦な地形で森林も少なく、間道は細いとはいっても小隊規模であれば隊列を組んでの行進も不可能ではなかった。

だが、その分人々の居住にも適しており、比較的豊富な水資源もあったことから、ターバの衛星集落が点在していた。それらのうちのいくつかは、ターバが吸血不死者に乗っ取られた後滅ぼされていたが、ほとんどは生き残りの代償として、最北の蛮族に忠誠を誓わされていた。不死者への転生は強制ではなく志願者だけで、生者が皆無では日中の防備と魔獣の制御、そして哨戒に支障を来たすためだった。

アービィに前線拠点を焼き払われて以来、日中の哨戒の重要性に改めて気づかされたオセリファの進言を、グレシオフィが容れたため実現した処置だ。

このため、日中も衛星集落の民と接触しないように気を遣い、志願してこの征途に同行した元ターバの民の先導で、かなりの遠回りを強いられていた。七十名近くの行軍はそれなりに大規模で、斥候

に出ている元ターバの民と将兵の連携が絶妙でなかったら、容易く衛星集落の民に発見されてしまったことだろう。

もう一つの苦闘は、それはバードンの自業自得に等しいものだった。

普段から物腰柔らかく礼儀正しい神父の見本ともいうべきバードンだが、ティアに対しては正体を知っているが故にアービィに対する態度同様に横柄になってしまいがちだった。理由を知っているランケオラータやルム、プラボックたちは既に気にもしないが、普段行動を共にする機会の少ない将兵の前では、あまり出すべき態度ではなかった。ティアの正体がいきなり露見することも歓迎できないが、バードンが裏表がある人物と見られることも拙かった。

精霊神官の中には、四百五十年前の南大陸四国家成立時に聖地ベルテロイを譲り渡した経緯から、マ教を毛嫌いしている者も少なくない。

まさか作戦行動中に仲違いするほど子供ではないと思うが、バードンの人格が誤解されるようなことがあっては、真北まで進出しなければならないバードン隊が瓦解しかねなかった。今回派遣されてきた神官たちは、バードンがいるということを聞かされていたためか、極端なマ教嫌いは送り込まれていない。ベルテロイを押えている『勝者』の余裕からか、マ教側は精霊神殿の敵意を意識していないというより相手にしていない。特に布教活動が主任務ではないバードンは、四国家の身勝手な意向で聖地を追われたうえに、分割された精霊神殿に対して、同情とは言わないが、その立場や思考に対して理解を示している。

無理矢理下手に出たり余計な気遣いなどしていないが、精霊神官に対しても他の人々と同様に丁寧な態度で物腰柔らかく接するバードンは、彼等からも一定以上の評価を得ていた。

ティアに対する攻撃的な態度が、バードンに裏表のある人物という評価を与える素になってしまえば、神官たちからの評価は正反対になる危険性を含んでいた。バードンもその点は充分理解しており、ティアに対して人々と同じように接することを心がけてはいた。不死者の集落を焼き払いに行ったときの経験から、それほど敵意を抱かなくてもいい相手と認識が変わりつつあったことも、辛うじて紳士的な態度でいることを可能にさせている。

それでも時折出てしまうぶっきらぼうな態度は、誰に対しても丁寧なバードンが気遣いしなくて済む相手がティアであり、ティアがそれを窘めたりしないことからそれを許容していると認識されている。随伴している将兵に、そういった別の意味での誤解をさせるには充分だった。

ティアもバードンの態度かあからさまに変わっていることが却って気味悪く、時々からかうような発言でバードンの神経を軽く逆撫でしていた。

それがさらに将兵の誤解を招き、バードンが野営時に将兵から余計な問いかけをされる原因になっている。そして、それがティアの悪ふざけを誘発し、バードンの素の魔獣に対する態度が顔を覗かせ、それがさらに将兵の想像を掻き立てていた。それでも自分の正体を暴露しようとしないバードンに、ティアは頼もしさと感謝の念を抱いていた。

「蛇、貴様どういうつもりだ？
人を莫迦にするにも程がある。
作戦中でなければ、切り刻んでるところだ」

アービィ組、ルティ隊と別行動を採ってから五日目の野営時、明日は両隊が分離するという夜に、バードンはついに我慢できずティ

アを結界の外に連れ出している。将兵たちは、明日から別行動だしと、二人が闇に消えていくのを生温かく見送っていた。

「他意はないわよ。
ただ面白いだけ。
いいじゃない、別に」
ティアはバードンの怒りや苛立ちなど、どこ吹く風といった感じだ。

「そんなに人の神経を逆撫でするのが楽しいか？
やはり……魔獣の品性など高が知れたものだな」
魔獣という言葉を口に出す前に、バードンは辺りを窺っている。
それがティアには可笑しくて堪らない。

「あなたのその態度。
みんなに隠れて逢い引きしてるみたいよ」
笑いがこみ上げてきたティアは、からかわずにはいられなかった。

「貴様、あくまでも愚弄する気か？」
バードンの声が地鳴りのような怒気を含んだ。
傍目にはバードンの方が歳上に見えるため、べた惚れになっている小娘に手を焼いているようにしか受け取れない。しかし、実際にはティアは二百年近く生きており、そのほとんどを男の精を喰らうことに費やしてきている。その過程で男の思考など裏の裏まで知り尽くしており、バードンを手玉に取るくらい雑作もないことだった。

「そんなことないわよ。
その気になればあたしの正体なんて、いくらでも暴露できるのに、それはしようともしないじゃない。
そんなあなたを、あたしは信頼してるし、感謝してるわ」

これはティアの正直な気持ちだった。
手玉に取ろうとして、言葉を弄しているのでは決してなかった。

「ふん、何と言われようと、貴様を利用しているだけだからな。
人助けになるのであれば、魔獣だろうが精霊だろうが利用してやる。
それだけのことだ」

それだけ言い捨てると、バードンは結界へ戻るためティアに背を向けた。

ティアに対しての口先ではそう言ったが、実際のところバードンは精霊神官に対して悪感情は持っていない。
そして、そのまま去っていくことはせず、途中で足を止め、振り返ることなくティアに声を掛けた。

「貴様も早く戻れ。
合成魔獣がうろついていないとも限らん」

「解ってるわ」

ティアはそれだけ言って、バードンの後を追い始めた。
ちゃんと心配なんかしてくれちゃうのね、と、これは声に出さず口の中だけで呟いていた。

結界に戻ると、中にいた将兵が口々に、どこへ行っていたとか、心配させるなとか言ってきた。もちろん、バードンをからかうためであり、二人の安全については信頼しきっているようだった。

どの将兵もバードンがマ教の神父で、悪魔狩りを生業としている猛者であることは知っている。ティアについては、正体は判らないが、インダミトが送り込んだ王室直属の間諜や特殊任務に従事する影の軍人、それも折り紙付きの腕利きなのだろうと、漠然と考えているようだった。そうでなければ四人で不死者の集落を焼き払い、無傷で凱旋するなど説明のできないことだ。アービィとルティも同

様に考えられており、間諜相手に正体を探るなど自殺行為でしかないことを知り抜いている軍人たちは、彼らの正体を詮索するようなことはしていなかった。

就寝にはまだ早く、それぞれは結界の中でくつろいでいた。

神官たちは地の精霊を介して周囲を探り、敵意を持った気配がないことを確認している。同時に地の精霊と感応することで、真南の結界を敷いているルティ隊の様子や、真西の結界を担当しているアービィ組の状況は把握していた。

それぞれの隊が抱える状況の違いは理解しており、結界を敷く作業の進行状況に違いがでることは、既に織り込み済みだった。それ故か、まだ担当区域に到達すらしていないバードン隊にも、遅れが出ているなどという焦りは見られない。

「バードン殿、いいのですか？
随分と早いお戻りではないですか」

古来、軍隊の中で話される内容に、それほど違いはない。

健康な男子の集合体だ。それが日常から隔絶された戦場に来ている。

おのおの将兵は、イーバを出立して暫くは作戦の見通しや、今後の戦況の変動などを話し合っていたが、すぐに話の内容は女のことに集約されていった。当初こそティアに遠慮してかこそこそと話していたが、ティアが欠片も気にしなかったので、いつの間にかあけっぴろげな雰囲気が醸成されている。ティアにしてみれば、自らの食事の話をしているようなものだし、誰と誰がくっついていようと取るに足りないことでしかない。

バードンのことを突っ込まれようと、敢えて思わせ振りな否定の仕方をすることで、若い将兵の反応を楽しんでいる節もあった。

「何を仰いますかな。
ティア殿に失礼というもの」
殿という敬称に僅かに表情を歪めながら、バードンは若い兵を窘める。
その表情が、兵士たちの笑いを誘っていた。
ティアに面と向かってからかいの言葉を投げる者はいなかった分、バードンがそれを一手に引き受ける羽目になっていた。もちろんバードンは、若い男だけの集団の会話が、その方向へ行くことを否定しなければ、そういった話題を拒絶もしない。
バードン自身潔癖というわけでもないし、潔癖であろうと考えたことなど一度もない。長い修行や人狼殺しに従事する生活の結果、自身をある程度コントロールできるようになっていたし、必要なら南大陸に一度下がって女を買うことも考えていた。

今のところ、北の大地に娼館は存在しない。必要がなかったといえばそれまでだが、小規模な集団の中では作りようがなかったということもあった。
さらに、一集落皆殺しの後、性的に成熟している女は南大陸の娼館に売り飛ばされることがほとんどで、娼館という施設に対する否定的な感情があったことも確かだ。

そうはいっても健康な男子が、入れ替わり立ち代りでも延べにすれば約三万人が、北の大地で生活するようになった。相手を見つけられた者は良いが、そうでなければローテーションでリジェストに戻ったときに娼館に飛び込むしか、生理的欲求の解消はできなかった。
もちろん、南大陸連合軍に女性の将兵がいないわけではないが、多くは後方支援部隊や、幕僚として勤務することが多く、腕に覚え

のある者は裏の仕事に回されることがほとんどだ。純粋な力を必要とする前線に、女性の歩兵が配属されることはまずないといって良い。

南大陸の軍で教典されている過去の戦で、華々しい決戦の舞台は物理的な力と数が支配する暴力の空間だった。いかに技にすぐれていようと、個人技など数の暴力の前には塵ほどの抵抗も生じさせることはできない。昨日今日徴兵した素人であっても、数に任せて押し包んでしまえば、如何な技といえど発揮するまもなく槍衾に押し潰されてしまうのが道理だ。寡兵を以って大軍に勝つ戦法はあり得るが、一人が戦況をひっくり返せるなど、英雄譚の中でしかあり得ないことだった。

それであれば、女であることすら武器として遣える諜報活動の方が、女性兵の使い所も多く、かつ生存率も高いというのが為政者たちの判断だった。

南大陸連合軍が北の大地へ進出してから一年も経っておらず、後方支援としての娯楽施設などの建設は現在急ピッチで進められている。

兵舎や訓練場、物資の集積場の他、将兵の慰安のために南大陸の食材や酒を取り揃えた食堂や酒場、訓練も兼ねたフィールドアスレチックのような運動施設が続々と立てられており、娼館も建設計画に入っていた。軍にとっての食は重要な問題で、量と質共に兵を満足させられなければ、反乱にさえ繋がりかねない。それだけにランケオラータやラルンクルス、司令部幕僚たちは南大陸からの補給を重視している。北の大地の食料を食い荒らさないようにという配慮も当然あるが、食べ慣れた食材があるとないでは満足度に大きな違いが出てしまう。酒にしても同様で、民の嗜好はそうそうすぐに現地に慣れ親しめるものではなかった。

娼館の建設について、レイは反対していない。
確かに性を売り物とすることに、女性として反発する部分は大きいのだが、ラガロシフォン領経営の経験からなくてはならないものだと直感で理解していた。適度なガス抜きができなければ、性欲を持て余した者が性犯罪へと走りかねない。ましてやここにいるのは武具を携行することが常の軍人だ。
もちろん、娼婦は南大陸からの希望者だけにする予定だが、南大陸へ売り飛ばされてきた北の民の扱いに苦慮している。

売り飛ばされた者の中には、この期に故郷へ帰ることを夢見る者も多かったが、南大陸でどのような生活をしていたかは周知の事実だ。後ろ指を刺されないとも限らないし、売り飛ばした者に対する怨みを晴らそうと目論んでいるかも知れない。北の大地に、南大陸から余計な揉め事の種は持ち込みたくないというランケオラータの意向もあって、当面の娼婦は四国家の住人を両親に持つ者という括りをつけるつもりでいた。

以前、南大陸に売り飛ばされた北の民救済をアービィとランケオラータは話し合っていたが、北の大地に娼館を作るという事態になって、その難しさを改めて痛感していた。北の大地で生まれ育った北の民が、南大陸資本で北の大地に作られる娼館に勤めることの是非もそうだが、南大陸からやってくる南大陸の住人だけが娼館に勤め、昨日までの同僚が別の施設に勤められるという不公平と矛盾も出る。

これをどう解決するかは、難しい。
娼婦全てを救済すれば、娼館自体が存在し得なくなる。家族を食わせるために、意志と誇りを持って、文字通り身体でカネを稼いで

いる娼婦の立場を貶めるだけにしかならない。そして、その裏側に潜む貧困の根本的な解決を見ない限り、最も手っ取り早く金を稼ぐ方法である娼館に女が身を沈めることはなくなることもなく、裏世界での人身売買と売春が横行するだけだ。

どのような世界でも裏社会は存在し、一般人はそれを迷惑と感じつつも、娯楽の多くを裏社会に依存している面は否定できなかった。

町から町を渡り歩く芸人や、それを使って興行を行う興行師といった者たちは、縄張りや利権が複雑に絡み合い、いつの間にか血の抗争を展開することも増えていた。興行にはそれを打つ場所が重要であり、舞台に乗せる芸人が重要だ。その二つを多く抱えた者が興行戦争に勝利するのは自明の理で、いかに場所と芸人を確保するかが興行師の腕の見せ所でもあった。芸人からしてみれば、良いギャラを保障してくれる興行師は、なくてはならない存在だ。

自らが住む町に良い興行がやってくることは、娯楽の少ない時代では民衆にとっては重要なことで、良い興行を打てる人物が民衆の支持を集めることも自然だった。

自らが剣を振るって興行のライバルを打ち倒してしまっては、民衆は支持などするはずがない。いきおい社会から落ち零れた、いてもいなくても関係ないような破落戸が雇われ、ライバルに対する嫌がらせから直接の危害を加えることを担当し始めた。

当然、興行師が直接指示を出し、失敗した際に尻尾をつかませるようなことをするのではなく、興行師の支持者や世話になっている者がその役を担うようになる。そして、裏社会が形成され始め、人々は暗黙の了解の下、それらが提供する娯楽で日々の憂さを晴らしているのだった。

北の大地に進出する娯楽産業にも、当然裏社会の資本が入り込ん

でくる。

そして、少なくないカネが裏社会へと流れることも、否定できない事実だ。それが非合法な娼館、賭博場の経営や、世界に蔓延し始めた麻薬産業の資金となることも、また事実だった。

ランケオラータやルムが日々面会する民間人の中に、裏社会の者がいることは少ない。公式の場に彼らは姿を出すことは、ほとんどないからだ。しかし、裏社会の意を受けて、北の大地での活動資金を見返りに、商売の利権を優先的に得ようとする者は後を絶たない。

ランケオラータは、献金は丁寧に辞退し、あくまで公平な判断の元に商人や興行師との付き合いを決めていた。当然その中には、裏社会の意を受けた者も入り混じっている。ランケオラータは過去に政務の経験を積んでおり、清濁併せ呑む必要は理解していたし、インダミトの政治中枢が潔癖だったなどとは欠片も思っていない。それ故にランケオラータは、彼らの全てを廃除しようとは考えていなかった。目に余るような悪辣なことをするようなら容赦はしないと考えていたが、毒も少量であれば薬にもなるのだった。

だが、特定の者を重用することだけは、今のところ避けようとしていた。

いずれにせよ、現在目の前に転がっている将兵の性欲をどうするかという問題は、そう簡単に解決できる問題ではないことだけは確かだ。性欲だけについて考えれば娼館を作れば済むのだが、そこに働く者の感情にどう折り合いを付けるか、名案が早々出るはずもない。

公娼制度を実験的に導入するか、ランケオラータは迷っていた。

結界内の喧騒は収まることなく、両隊が共同で過ごす最後の夜は楽しげに更けていく。

バードンは若い将兵の人生相談に乗り、ティアは同じように女心についての相談に乗っていた。

最北の蛮族と戦うと聞かされ、南大陸の危機を救うと意気込んで北の大地に乗り込んできた若者の中には、いざ最前線に出てみると怖気付く者や、戦の名の下に人を殺すことが正当化されていることに疑問を持つ者も出ていた。そのような者にとって、聖職者であるバードンは、人生の疑問について相談を持ちかけるにはうってつけの相手だった。

将兵の中には北の民の女と良い仲になりかけている者もいた。彼らは民の性質の違いに戸惑いつつも、女心を掴むための涙ぐましい努力を重ねている。そのような者にとって、バードンに手を焼かせているような女に見えるティアは、女心の深淵を探るための相談を持ちかけるにはうってつけの相手だった。

バードンは、それが仕事の一部でもあり、別段対処に困ることはなかったが、ティアはそうもいかなかった。

男など食の対象でしかなく、男心を掴むためには『誘惑』を使うだけでよかった。女心などというものには全く無関心で、男から言い寄ってくる理由は作り上げた容姿と適度に磨いた話術だと思っていて、自らに女心というものがあるなどとはまるで気付いていなかった。

毎日横で見ているアービィとルティは互いに抱く感情を隠すこともなかったため、恋の駆け引きを間近で目にする機会にも恵まれていない。過去においても、そういったことにはほとんど無関心で、唯一の例外が百年ほど前の出来事だけだった。

こうしてみると、ティアは自分が恋愛については初心なのではないかと思い始めていた。

夜も更け、結界内の喧騒はさらに大きくなっていく。

中には戦闘行為が生起しないことを願う者や、剣を振るいたくて仕方のない者が混在し、時には仲違いも見られたが、概ね平穏な隊内の雰囲気だった。

「では、皆様。
健闘をお祈りいたします」
バードンが真東に残るティア隊に声を掛ける。

「バードン殿こそ、ご武運を。
ここからも、まだまだ衛星集落の側を避けなければなりません。
彼らとて、好きで最北の蛮族に従っているわけではありません故」
ティア隊の小隊長が答えた。
ティア隊はここで結界の敷設作業に入るが、バードン隊はまだまだ敵中を進まなければならない。だが、最北の蛮族や、望んで不死者へと転生したターバ民はともかく、生者として残された衛星集落の民に対しての殺戮は望むところではなかった。

「ありがとうございます、小隊長殿。
お言葉は賜りました。
言うまでもなく、生者との戦闘は望むものではございません。
結界が完成した暁には不死者どもも一掃され、彼らも解放されることでしょう。
もしも、彼らが我々に剣を向けようと、神の慈愛の御心さえあれば恐れるものではございません」
涼やかな目でバードンは真北を見た。

「気を付けてね。
まだ、いろいろと言いたいことは一杯あるから」
ティアがバードンに声を掛けた。

「ああ。
貴様もな……切り刻むのは俺だ……
……ティア殿も充分にお気を付けください。
では、後日イーバでお目に掛かりましょう」
前半はティアにしか聞こえないように、後半は全員に聞こえるように言ってからバードン隊は分離して行った。

「全く、あの人は素直じゃないんだから。
ま、だからこそだけどね」
そう言ってティアは、周囲の気配を探り始めた。

まずは、大雑把に結界を敷き、精霊が指定してくれた地点を大きく囲む。ターバの中心から真東の地点に結界の基準点となる記号を置き、小さな円で囲み、その円周上に結界と同じ配置で記号を置いていく。それを何度か繰り返せば、真東の基準点が完成する。その後は同じ要領で、ターバの中心から見て１５。の間隔に、円周上に記号を配置していけば良い。

真東の基準点が完成した後、神官が１５。刻みに残る結界を五ヶ所設置したところで、陽が暮れ始めている。
担当区域内で最も南にある結界を窺う、不審な気配をティアは感じていた。陽が高い頃から結界を仮設置している小隊をつけ回す、小規模な集団だった。当然地の精霊を解して、神官もその気配に気付いている。日中から不死者が襲ってくることはないし、魔獣であれば躊躇わず突っ込んで来るであろうことから、衛星集落の生き残りが斥候に出されたものと判断した。
二人は小隊長にそれを伝え、警戒を厳重にすることと、こちらから戦闘を仕掛けないで欲しいことを付け加えた。

戦闘をこちらから仕掛けない理由は、もともと生者は最北の蛮族に反旗を翻していた立場であり、ターバに巣食う不死者の群れを灰化すれば共闘できる立場だからだ。万が一突っ掛けて来たとしても、極力無傷で捕らえ、敵の兵力の数を減らすことになるので、それで充分だ。

衛星集落の生き残りにしてみれば、自らの命だけではなく家族の命を盾にされては、最北の蛮族に従わざるを得ない。ましてや、いくつかの集落が皆殺しになっているのを間近で見てしまっては、怯えるなというほうが無理な相談だった。戦士としての経験を積んだ男たちだけであれば、敵わぬまでも一戦を挑み、華々しく散るということも選択肢の一つだったかもしれないが、子供たちにそれを求めることはあまりにも酷過ぎた。

集落に巣食った吸血不死者が眠る社を日中に襲撃したとしても、それが他の集落に救う不死者たちに知られたら、即報復で皆殺しだ。彼らにはどうすることもできず、集落周辺の哨戒を黙々とこなす毎日だった。

そこへ平野から山脈を越えて、最北の蛮族に歯向かう者どもが進入したという。

当然日中の警備と、機会を見て撃退することを命じられた衛星集落の生者たちは、ティア小隊とバードン小隊を遠巻きに見守っていたのだった。そして、この日の朝、バードン小隊が分離し、七十名近い兵力が分割され、それぞれは三十余名の兵力になっている。

もう暫く待ち、半日の行程の距離が開けば相互支援は不可能になり、寡兵を以ってしても各個撃破が可能になると生者たちは判断していた。

日没を待ち、不死者たちの活動が可能になる時間帯を待って、衛星集落の民は行動を開始した。

数人が集落へ戻り、眠っていた吸血不死者に状況を報告する。その間、現場に残った者たちは、結界の敷設作業の妨害を始めていた。最初に作り始めたときに妨害行動を起こしてしまっては、一気に殲滅される危険性もあった。そのため、六ヶ所の仮結界が完成し、警備のため兵が少数に分散された結界を一つずつ襲撃する案が採られていた。

六ヶ所の結界は、基準の真東の結界に小隊長が直率する一個分隊、他の四ヶ所を小隊から抽出された一班五名ずつが警備に当たり、最も襲撃の可能性が予想された南の仮結界はティアと神官で警備に当たっている。

ティアと神官が残った結界は、衛星集落の一つからは半日も掛からない距離で、ここが最も危険と判断されていた。

不死者は結界に触れることすらできないが、生者であれば結界の破壊は容易だ。結界内にいる限り不死者を恐れる必要はないが、今の場合は生者の方が厄介な存在だ。

ティアは、既にラミアのティアラを髪に飾っている。もちろん、不死者に効果があるとは思わないが、生者に対してであれば『誘惑』でこちらの支配下に置くことができる。そうなれば結界内に生者を取り込み、ここを襲撃してきた不死者を殲滅することで集落を解放することも不可能ではない。

小隊長はそのような個所に二人だけ残すことはできないと主張したが、強引にティアが説き伏せている。

小隊長の主張はもっともだが、一般人のいる前でラミアの妖術を行使するわけにはいかなかった。神官は、アービィの正体を風の神官から既に知らされており、それであればティアも自らの正体を明

かしたところで問題はないと判断してのことだった。

「そろそろ来ますかねぇ」

のんびりとした口調でティアが言う。

「ええ、精霊からは、危険な気配が充満していると知らされております。

しかし、楽しみですな。

私は初めてです。

ラミアの妖術を目の当たりにするのは」

心底楽しそうな表情で神官が応じる。

神秘的な事象に対する好奇心を、神官は抑え切れないようだった。

「そんな、たいしたことじゃないですよ。

じゃあ、始めましょうか」

ティアは、そう言って焚き火を消して獣化した。

微かな星明りの中に艶かしくも優美な曲線を描く裸体の上半身と、紙一重で禍々しさに傾く危険な美しさを秘めた蛇の下半身を合わせ持つ、ラミア本来の姿が現出した。尻尾の一部に火傷の跡があることはご愛嬌だが、神官にとってそれはどうでも良いことだった。

「あなたなら、北の民の神になれますな。

男の精を喰らうことを放棄したラミアであれば、もうそれは神でしかない」

神官が感嘆の言葉を漏らした。

「そんなに褒めたって、何も出ませんからね」

ティアは音もなく結界を滑り出す。

結界の周囲を衛星集落の生き残りが取り囲んだとき、ティアは『誘惑』の詠唱を完了していた。

合わせて『透過』で姿を消し、風の白呪文『加速』も重ねて掛ける。

手に武器を携えて結界内を窺っていた集落の男たちは、突然灯りが消されたことに奇襲の失敗を悟っていた。

僅かな星明りの中、女の銀髪だけが揺れたと思ったら、それはすぐに掻き消える。

何かが頬を撫で、脳裏に逆らい難い強制力を持った何かが侵入して来るのを、集落の男たちが気付いたときには全てが終わっていた。

ティアの『誘惑』に捕らえられた男たちは、手にしていた武器を取り落とすと、まるで酒に酔ったかのような足取りで、結界の中に入り込んできた。

神官は、彼らに害意がないことを感じ取り、そのまま縛り上げて結界内に放置した。そして、メイスを手にして結界を出る。

「さて、今度は私の番だ。

悪霊に捕らえられた哀れな者どもよ、掛かってくるが良い。

見事、解放してくれようぞ」

一振りされたメイスが伸び、三節棍へと形態を変化させた。

振り向きざまに一閃された棍が不死者の側頭部を捉え、鈍い音とともに粉砕する。

音もなく灰化した不死者には目もくれず、神官は次の獲物に棍を振り下ろした。的確に不死者の四肢を叩き落し、首を跳ばす。突き、引き、払い、戻しが流れるように繰り返され、一指しの舞のようにも見える。

ティアも負けじと不死者を切り伏せる。

姿は見えなくとも殺気までは殺していないので、ティアの存在は感知されている。だが、『加速』で移動速度を上げているティアを、

不死者も、能力に勝る吸血不死者も捉えきれない。

程なくして、仮結界を襲撃した一団は、夜の闇の中に潰え去った。
獣化を解いたティアが結界内に戻り、不死者たちの灰に聖水を掛けて完全に滅し去っていた神官が少し遅れて戻ってくる。
仮結界内に残された男たちは、未だに何が起きたのか理解していない。ティアの妖術が途切れるか、ティア自身が打ち切るまでは、夢うつつのままだ。ティアが『誘惑』の効果を打ち消すと、漸く男たちは正気を取り戻した。
何が起きたのか、まるで理解できていない男たちは、自分たちが縛り上げられていることに気付き動揺を隠せない。ティアは『誘惑』が効いていた間の記憶も、効果と同時に消し去っていたからだが、神官が適当な嘘をでっち上げていた。即ち、男たちは悪霊に利用され、不死者に従っていたに過ぎない。そして人に害を成そうとしたときに、良心の呵責と悪霊の支配がせめぎ合い、気を失ってしまったのだ。そのときに悪霊の支配力が一時的に強まり自傷する危険性があったため、心ならずも縛り上げてそれを防いだ。真に以って申し訳ない、非礼の段幾重にもお詫びする。ティアが聞いていて呆れるほど、神官の嘘は澱みなく口から流れ出し、そして見事だった。

「何てことをしてくれたんだ。
これで、集落に残った俺たちの家族は皆殺しだ。
貴様らが大人しく殺されていれば、俺たちの家族は助かったんだ」
血を吐くような慟哭が、夜の森に響いた。

「ご安心召されよ、皆々様。
これより、我ら二人がご家族を解放してまいりましょう。
それまでは、この結界内でお待ちいただきます。
何、我が精霊のご加護があれば、悪霊に魂を売り渡した不死者など、物の数ではございません。

不死者を滅し去れば、後は集落をこれと同様の結界で囲みましょう。
さすれば、二度と、不死者どもは集落に一歩たりとも入り込むことは適いませぬぞ」
神官が諭す間、ティアが『透過』を唱え、再度『誘惑』を掛けて回る。

「ちょっと教えて欲しいの。
集落に不死者は後何体残ってる？
生者で最北の蛮族に通じている者はどれくらい？
あと、小麦粉の袋はどこに貯蔵しているの？」
ティアの問いに、男たちは抵抗などできるはずもなく素直に答えた。

誰一人として最北の蛮族に心酔しているものはいない。ターバや滅ぼされた集落の悲劇を恐れているだけだった。集落内に残る不死者は、指導的立場にある高位の吸血不死者二体と、その護衛の低位の不死者十体ほど。小麦粉は、不死者が眠る社に隣接した倉庫に、まだ二十袋は残っていたはずだ。
必要な情報を引き出した後、ティアは男たちに『催眠』も重ね掛けして、淫靡な夢の世界へと誘った。

「これで明日の昼くらいまで、目を覚ますことはありませんわ。
じゃあ、陽が昇ったら、ちゃっちゃと片付けちゃいましょうか」
そう言ってティアは荷物から酒瓶とコップヘルを二つ取り出した。

「何とも見事なものですな。
話に聞く自白剤など必要もない。
そのうえ、自白させられたことすら記憶に残らないし、後遺症も全く心配ない。

あなたと、狼の彼だけは敵に回したくないものです」

つまり、一番敵に回したくないのはルティ殿ですと笑い、神官は受け取ったコッヘルに満たされた酒を一気に煽った。

陽が昇るまでに再度の襲撃はあったが、地の精霊が逸早く知らせてくれたことや、ティア自身が気配を感知したことで、待ち伏せに等しい状態で迎撃することができた。

襲撃者たちは、不死者は一体も随伴しておらず、集落の男たちだけだった。

待ち伏せであれば獣化する必要もなかったのだが、久し振りの獣化はティアに高揚感をもたらしていた。再度獣化し、『透過』と『誘惑』、『催眠』の詠唱を済ませたティアは、男たちの襲来を闇の中で迎え撃ち、一人の怪我人も出さずに結界内に連れ込んでいた。

夜明け前、目を覚まさない男たちをそのままにして、ティアと神官は集落へと急いだ。

男たちが戻らないことを集落に残された家族たちが不審に思い、捜索に出る前に片を付けなければならない。

黎明になり、不死者たちは社に戻る。その期を衝いてティアと神官は集落に入り込み、倉庫から小麦粉の袋を運び出した。そのまま社の扉を大きく開け放ち、内に小麦粉を撒き散らす。光を恐れた不死者の群れが物陰に隠れた瞬間、燃え上がる松明を社に投げ込み、扉を乱暴に閉めた。

扉が閉じられる勢いに小麦粉が舞い上がり、社の中に充満する。松明の炎が小麦粉に燃え移り、連鎖的な燃焼が開始された。燃焼が次の燃焼を呼び起こし、一瞬で社の中は炎で満たされ、大爆発に発展する。扉を閉められたことで爆発エネルギーは水平方向の逃げ場を失い、そのほとんどを垂直方向、天井に向けて力を解放した。

粉塵爆発は、轟音とともに屋根と窓を吹き飛ばし、不死者たちの身体を爆散させた。爆風に舞い上げられた不死者の身体は、朝日を浴びて瞬時に灰化し、そのまま爆風と共に飛散していく。低位の不死者も、高位の吸血不死者も、ひとしなみに爆風に切り刻まれ、朝日に灰化され、入り混じったまま吹き飛ばされてしまっては、いくら月光を浴びようとも再生など適わない。

何事かと集落の人々が集まり、ティアと神官を取り囲んだ。

少なくとも、この集落を脅かしていた不死者たちが、滅んだことは理解できた。だが、そうであっても、それは次なる災厄を呼び込むだけでしかない。叛意ありと判断されたなら、申し開きなどする間も与えられず、皆殺しにされるだけだ。ひと思いに殺されるならまだ良い。生きながらにして、不死者たちの餌にされるなど、想像を絶する苦痛が待っている。

これから我が身を襲うであろう災厄を想い、呆然と立ち尽くす人々にティアの叱責のような声が飛ぶ。

「あなたたち、何呆けてるのっ！
不死者はもういないわ。
今すぐ逃げる用意をしなさい。
ターバはあたしたちが解放する。
あなたたちは、早く山脈のイーバに行きなさい。
途中にここの男たちが待っているわ。
さあ、早くっ！」

何気なく破壊された社の中を覗いたティアは、そこに大蛇の神像と覚しき崩れた石像を見つけていた。ならば、ラミアの姿は役に立つ。

昨晩の男たちの反応から慰撫は通じないと見て取ったティアは、

人々が呆然としているうちにこちらの掌に乗せてしまった方が得策だと瞬時に判断していた。次の瞬間、ティアは獣化し、人々の前に立ち、叱り飛ばすように叫んでいた。

ティアの声に我に返った人々は、その姿を見た途端、慌てて平伏する。

思惑通りに事が運べたと見て取ったティアは、人々に家に戻り持ち出す荷物を纏めるように言った。

大した荷物があるわけでもなく、程なくして当座の食糧を抱えた人々が、集落の外れに集まってきた。ティアは結界の位置を教え、まだ男たちは眠っているはずだから、叩き起こして状況を説明するように言う。

人々は状況を理解できてはいなかったが、ティアの言葉は神の言葉だ。無条件で信じるしかなかった。

その間に神官は集落を結界で囲み、二度と不死者たちがこの集落を利用できないようにしている。

中央を席巻している最北の蛮族が不死者だけならば、これで人々が避難する必要はなくなるはずだった。だが、魔獣は結界を踏み越えることができるし、他の集落には生者も残されている。どちらも結界を破壊する能力は持っていた。魔獣は自らの思考と意志で、結界を破壊する意義を見出すことはできなくとも、使役者が指示すればその対象を破壊する。

不死者にとって結界は見えもしないため、そこに何もないと同義であり、そこにあることにすら気付かない。つまり、魔獣にとって結界は、自らの価値観によって破壊するということはあり得ず、不死者には結界の存在そのものが認識できないため、破壊を指示することはできない。

だが、生者には結界は見える。他の集落の生者は、昨夜襲撃してきた男たち同様、家族を盾に結界の破壊を命じられてしまえば、逆らうことなどできはしない。そして、この集落が消えてしまえば、捜索を命じられることは明白だ。

この集落の人々は、災厄から逃れるためにはティアが神であるかどうか以前に、その言葉に従うしか選択肢は残されていなかった。

自分の姿は他言無用と固く誓わせた人々の背を見送り、ティアは周囲の気配を探り始める。

幸いなことに、魔獣は集落内に配置されていなかった。この集落にはもともといなかったのか、外をうろついているのかは判らないが、気を抜くわけにはいかなかった。神官が結界を完成させたら、すぐ人々の護衛に就かなければならない。ティアは周囲に気を配りながら、集落の中を巡回し始めた。

やがて、結界を張り終えた神官が合流し、二人は急いで人々の後を追い始めた。

その頃、イーバでは食糧を満載した荷車隊が、ターバ南の結界目指して進軍を始めるため整列していた。

荷車一台は、五人で曳く構造で、約５００ｋｇの物資を積み込むことができる。だが、仮に往復で十日の行程とすると、そのうち約１２５～１７５ｋｇは四人分の食糧だ。一般的に一人の兵は、一日に２～２．５ｋｇの食糧と０．５～１リットルの水、計２．５～３．５ｋｇ　の生命維持に係る物資を必要とする。四人で１２．５～１７．５ｋｇ、十日で１２５～１７５ｋｇの計算だ。それを差し引いた　３２５～３７５ｋｇが前線に届けられる分になり、三十人編成の一個小隊であれば、荷車一台で三日半から四日分の食料と水になる。

数値だけ見ると、現代日本で普及しているリヤカーが積み込める

だけ積んで、約４００ｋｇを一人で運べることに対して人数が掛かり過ぎるように思える。だが、ゴムタイヤや、軽量の金属フレームがない時代では、荷車の強度や重量、木製車輪の抵抗の大きさを考えるとこれが限界だった。

山岳地帯から平野部、そして山脈地帯までのように、食糧が生産と集積が可能な地域であれば、食糧を現地調達することも可能だった。しかし、山脈以北は最北の蛮族に席巻され、生者の人口は極端に減っている。自家消費する分の食糧を生産調達するのが精一杯で、とても遠征軍が現地調達する余裕はなかった。

アービィたちも当座の食糧は持参しているが、一人当たり十日分２５ｋｇも担いでしまうと、かなり行動が阻害される。重量もさることながら、その容積も馬鹿にならないからだ。各自が携行する食糧は、五日分１２．５ｋｇが限度だった。

そのため、アービィ組を除く三個小隊は食糧を満載した荷車を、小隊毎に三台用意していた。一個分隊に一台の計算だ。

これで各隊は食い伸ばせば各自の携行食が１２．５ｋｇで五日、十人当り荷車一台に５００ｋｇで二十日、計二十五日分の食糧を持っていることになる。

各隊が分離した、ターバから一日の地点まで五日。そこから真北の地点までは韜晦路を辿るため六日から八日。結界の敷設作業に六日から八日。ルティ隊とアービィ組はともかく、ティア隊はギリギリ、バードン隊は途中で食糧が不足する。これを補うため、ランケオラータは五日遅れで補給隊を出す予定だったが、荷車の集積が単純な連絡ミスから遅れを生じていた。

その結果荷車隊の出動は、各隊がイーバを出てから八日目になってしまっていた。

荷車隊は、人数割りは通常の小隊と同じ編制で、三個分隊がそれぞれ二班を擁し、一班が一台の荷車を曳く六台編成が三個小隊。それに護衛の一個小隊が随伴する一個中隊規模だ。輸送できる物資の総量は９，０００ｋｇ。もちろんそこからは輸送に携る者たちの分を引く必要があり、仮に往復で十日として中隊各将兵が携行する食糧五日分を除くと、その分が２，１００～３，０００ｋｇ。残量は６，０００～６，９００ｋｇ。一個小隊のおよそ六十五日から九十二日分、現地に展開している三個小隊であれば、単純計算でおよそ二十一日から三十日分だ。

まずは、一日一個中隊が、ターバの南に位置するルティ隊が築いた物資の集積基地を目指す。そのうち一個中隊は集積基地に留まり、ティア隊とバードン隊への補給を続ける。これにより不足するイーバと集積基地間の荷車中隊は補充する予定だった。もちろんバードン隊のように輸送距離が伸びれば、その日数は極端に減っていく。

ターバ以北は、前線を進めれば進めるほど補給に無駄が増えて行く。ある一点を越えれば、補給部隊の食料すら足りなくなってしまうのだ。ここが、現時点での南大陸連合軍の、攻勢臨界点といえた。

実際に食料の現地調達が可能な地域までしか進軍していなかったランケオラータやラルンクルスは、現場指揮官からの報告書を見て顔を蒼ざめさせていた。充分な補給部隊をつければ、前線はどこまでも伸びていくものだと、何の疑問もなく考えていたのだった。実際の戦を経験していない、南大陸の住人の限界でもあった。

それ故に、ターバを奪回することの重要性が、俄かにクローズアップされている。

ターバを奪回すれば、周囲の土地で食料を作ることができるようになる。

今のままでは、補給だけに兵力を割かれ、拠点としての活用も、防衛も適わないことだ。何を置いてもターバ周辺の土地を甦らせなければならない。もちろん、今では吸血不死者となってしまったターバの住人たちも、かつてはその土地で鍬を振るい、汗を流して作物を収穫していた。昨年来放置されてしまっているが、泥濘の時期を過ぎてすぐに土地改良を始めれば、夏にはそこそこの収穫量が期待できると見られている。

平野では農地改良が進み、春以降の収穫は今までの倍では済まない量が予想されている。いきなり魔法のように収穫量が上がるなど信じ難いことだが、それまでがあまりにも悲惨だったことの裏返しでもあった。それと同じことが中央部にも当てはまると、ランケオータやレイは考えている。

最北の地まで軍を進め、蛮族を討ち果たすにしても、和睦を持ち掛けるにしても、ターバの拠点化は絶対に必要だった。

ルティ隊は、山脈に最も近い区域を担当したため、移動のための時間をそれほど必要とせずに済み、六日間で結界の敷設も早く完了していた。

だが、ターバの衛星集落に生者が残っている以上は、結界を放置して撤収というわけにはいかない。ターバを囲む結界が完成するまでは、担当区域内の六結界に一班ずつを張り付けておく必要があった。当然、その間の食糧は補給しなくてはならない。自力で食料を調達できるアービィ組と違い、ティア隊もバードン隊も食料の補給は必要だった。そのための集積基地が、この結界を利用して建設されている。結界自体だけでなく、集積基地のための守備隊も必要だった。

バードン隊が真北に達し、担当区域に結界を敷いた瞬間にターバを囲む大結界が完成する。

それは地の精霊が知らせてくれるため、伝令やバードン隊の帰還を待つ必要はない。結界完成の時点で、アービィ組とルティ隊はイーバへ撤収して構わなかった。アービィ組の担当区域は、生者では進入不可能な場所ばかりで、魔獣と不死者しか結界周辺をうろつく者はいない。ルティ隊と別行動になって三日後に、アービィ組は西の基準点に辿り着き、それから六日間で担当区域の結界を完成させ、さらに三日経った昨日に南の基準点に戻ってきていた。

だが、アービィは南の基準点から動いていない。

以前焼き払った不死者の集落に、魔法陣が再建されていると、到着した補給部隊からルティに報告があったからだった。

魔獣の気配は感じられなかったため、周囲を偵察だけしてきた補給部隊からは、不死者の気配も感じられないという報告も上がっている。それでも魔法陣が完成しているのであれば、それを通して魔獣を送り込んでくることも可能だった。アービィが西区域で戦ったコッカトリスやバジリスクが、どういった経路でターバまで来たのか分からない以上、魔法陣から送り込まれた可能性は捨てるべきではない。万が一、敵が大兵力を送り込んできたとき、ターバの南に築いた結界は危機に晒される。至近距離で前後に敵を抱えることになるからだ。アービィは、ターバ側はティア隊とバードン隊に任せ、自分は南から来るかもしれない新たな敵に備えるつもりでいる。

魔法陣は、今後の補給作戦に、重大な影を落としていた。

アービィは、ターバを取り囲む結界が完成したら、ティア隊とバードン隊に先行して帰還する途上で、魔法陣は破壊していくつもりだった。

神官が同行しているので、集落を結界で囲み、二度と魔法陣を築かせないようにしておくことが可能なのであれば、放置しておく理由はない。相手が不死者だけであれば、魔法陣を破壊する必要もなかった。魔法陣ごと結界で囲んでしまえば、そこに送り込まれて不

死者は実体化した瞬間に灰化してしまうだけだ。だが、魔獣を狂乱状態で転送したり、生者を送り込まれたら、結界を破壊することは容易だった。

補給線上からそう遠くない地点に、三つも敵の矢が突き刺さっている状態は、決して放置していて良いものではなかった。

二人の神官は交代で瞑想に入り、ティア隊とバードン隊からの結界完成の報告を聞き逃すまいと、全神経を精霊との感応に集中させている。

ルティは、時折何かが頭の中に話しかけてくるような、不思議な感覚に襲われていた。

それは、決して不快ではなく、かといって全面的に心地よいものでもなかったが、どこか安心させてくれるような感覚だ。誰とはなしに、ティア隊が結界を敷いたと知らされた気がした。いや、解った。

たった今、ティア隊が、東の担当地区に結界を敷き終えたと、全身で解っていた。

数日前にターバの衛星集落から避難してきた人々を見て、ティア隊の成功を予感していたが、それが今確信に変わっていた。

やや遅れて、神官たちからティア隊の任務完了が告げられた。

ルティは、最初は半信半疑だったが、神官たちから告げられて自分の感覚は正しかったと知った。そういえば、アービィ組が結界を敷き終えた日にも、なんとなくそんな感覚があったことを、ルティは思い出す。そのときは、アービィの念話が届いたのだと思っていた。ルティも返事を思念で送ってみたが、距離がありすぎるのかアービィからの返答はなかった。

アービィが南の基準点に戻って来たときに、ルティはそのことを聞いてみた。

しかし、アービィは距離が距離だけに念話が届くとは思わず、何もしていなかったとのことだった。

フォーミットを出てから二年が過ぎたが、十二日という長い期間二人が離れたことはなかった。

基準点でアービィの顔を見たときには、ルティは泣きそうになっていた。もっとも本当に泣いていたら、随伴している小隊の将兵がどんな荒れ狂いようをするかは容易に想像できたため、周囲に気付かれる前に涙を拭っただけだったが。

そして、アービィが念話を送っていなかったという事実がルティに知れた後、朝まで正座させられているアービィの姿を見た将兵の数は、三十に近い数だった。

第81話

「やっと、到着ですかな？」

何も視界を遮る物がない、広い荒野にバードン隊は立っていた。

ターバの衛星集落の民に気付かれないように、かなり遠大な韜晦路を採った結果、真北の基準点への到達はティア隊と分かれてから六日を要していた。

この間、徹底的に戦闘を避ける方針を採ったバードン隊は、予定されていたルートの倍以上の距離を歩く羽目になり、携行してきた食糧に不安を抱えていた。

後追いの補給部隊が北上しているはずだが、追いつくことを焦るあまり韜晦を怠るようなことがあれば、バードン隊の苦労は水泡に帰すかもしれない。だが、補給部隊が敵との触接を避け、韜晦路を辿るということは、補給部隊自身が持ってきた補給物資を喰い潰すこと意味している。やはり、ターバが攻勢臨界点であり、ターバを落とすためにターバ以北で軍事行動を取るには、ターバを落とさなければならないという矛盾は、熱意や信念だけではどうにもできないことだった。

イーバを出てから十五日が過ぎ、食糧は十日分残っている。

結界の敷設に七日掛かったとして、完成すればターバ経由の最短ルートで、南基準点へ戻ることができる。そのルートであれば、ターバで一泊すれば翌日の夜中には南基準点に到着できるはずだ。

食糧は南基準点までは持つが、イーバまでの分はない。

だが、これはルティ隊にしても、アービィ組やティア隊にしても同じことだ。結界が閉じた瞬間に撤収しようと、イーバに最も近いルティ隊でも二、三日分が不足する。ルティや補給部隊の指揮官が、

冷静に判断して南基準点への物資集積を優先してくれていることを、バードンは願っていた。

「間違いなく、ここだ、と。
精霊からの知らせです。
しかし、どうぞ襲撃してくださいと言わんばかりの場所ですな」
神官が嘆息した。

「はい、なだらかとはいえ、周りは高く、ここが一番低い。
浅い鉢の底のようなものですな。
そのうえ、小規模ではありますが、至近距離にまで林が迫り、敵が何時飛び出してくるか、常時警戒しなければなりません」
随伴した小隊長が辺りを見回し、一つ一つ確認するように続けた。

「まあ、それほど悲観するものでもないでしょう。
林までは近いとはいえ、手が届くというほどでもない。
結界ができればさらに近くはなりますがな。
そうしたら、いっそ林も、結界で囲んでしまいますか。
それに、林から小川が流れ出ているということは、水には困らないということではありませんか。
将来を考えると、あの林まで確保した方が良いかもしれませんな」
バードンが悲観論に傾き始めた雰囲気を立て直した。

結界の敷設作業は順調だった。
ほとんど遮蔽物や障害物のない地形で、記号を置く位置の選定に他の三地区より時間を要しなかった。また、作業に当たる将兵も、偶然のなせる業か工兵の才能に溢れた者が多かったことも、大きな要因の一つだったろう。

他の三地区がほぼ六日掛かって完了させた結界の敷設作業は、バードン隊に関していえば四日目の夕方にはほとんど終わっていた。

翌朝、日の出と共に最後の仕上げをすれば、ターバを囲う大結界が完成する。

誰もが苦闘を讃え合い、明日早朝の完成を約束して、四日目の作業を日没と同時に切り上げた。

バードン隊の担当地区にある六つの結界を、不死者の群れが遠巻きにしている。

敢えて灰化することで生者に運ばせ、細い月明かりで再生していたのだろう。あちこちの地面から、湧き上がるように不死者が姿を現していく。生者の数は、それほど多くないようだ。もし生者を大量に連れてきては、裏切られ、逃げられる可能性を、ターバを占拠している指導的立場の吸血不死者は危惧したようだった。確かに、僅かに残った民のために、逃亡のチャンスをみすみす見逃すほど北の民は甘くはない。

もし、ここまで不死者の灰を運んだ少数の者たちが逃亡すれば、ターバに残る多くの人々が不死者に転生させられるか、皆殺しにされるのだろう。これが逆の数であれば、再起を期して民は逃亡するか、不死者の灰を水に投げ込むことを躊躇わない。

「随分と大勢様のお越しのようですな。

しかし、遅い。

待ちくたびれましたな、神官殿。

我々を歓待するのに、どれほどのご準備をいただいたのでしょうな」

バードンは、祝福法儀式済みの剣を振っている。

ここまで彼は退屈していた。やるべきことは多く、神官や将兵の

警護の傍ら結界の敷設作業も手伝っていたのだが、血が騒ぐのを抑えられなくなっていた。

「いくらなんでも、生者の数が少なすぎますな。これでは結界に辿り着いた者から殴り倒すだけで済みましょう」

神官は、三節棍を振り回している。

「生者が相手では、せっかくの祝福法儀式も役に立ちません。残念ですな。

不死者は、結界がある限り中にいる者に手を触れることはできません故、結界内で生者のみ相手するよう、命令は徹底してあります」

結界の防護策を構築するために持ってきた工具や竹を、手に馴染むかどうか確かめるように振りながら、小隊長が言う。

「申し訳ございませんが、それで結構です。軍の方々には、ターバの民の保護をお願いいたします。不死者は、我々が引き受けましょう。

神のお決めになった摂理に逆らう者が、我が眼前を歩くことがどういうことか、たっぷりと教育してくれましょう」

バードンが言う。

「小隊長殿、さすがに工具は危険では？

バードン殿、それは私の言うべきことでございます。精霊の調和を乱す者が、私の前を徒党を組んで歩くなど、私には許せることではございません」

神官は、引き絞られた弓に番えられた矢のような緊張感を漂わせていた。

しかし、その顔には不敵な笑みが浮かべられていた。

バードンと神官が結界を出ようとしたとき、不意に神官が動きを止めた。
辺りを見回し、先程見せていた緊張感と不敵な笑みが混在していた表情から、笑みが消えていた。

「いかがなされましたかな？」
バードンが、神官のあまりの変わり様に訝しんで声を掛けた。

「いえ、悪意が、この結界一点に集まってきております。
まるで甘いものに群がる蟻のように。
どうやら、基準点を破壊することに集中するようですな。
確かに、不死者の数こそ揃っていますが、結界に触れられない者ばかり集めても意味がない。
緒戦は生者を破城槌として結界を破り、中にいる者を不死者が喰らい尽くす。
疲れなど知らぬ不死者のこと、そうして一つずつ確実に潰していく腹積もりなのでしょう」
世界に遍在する精霊が、不死者の持つ悪意を感知していた。
周囲に散っていた悪意が、神官目指して集まってきていることを、精霊との感応で神官は気付いていた。
そして、仕上げに使う予定で残してあった聖水を、惜しげもなく結界強化に撒き始めた。

「では、打って出るのではなく、篭城戦ですな」
バードンは祝福法儀式済みの剣を腰に戻し、手近な竹の棒を手に取り、結界の内側に立つ。

「眼前にいた生者の数は、我らと同数程度でしたが、六隊分が合流するようです。
戦力比は一対六ですか。

少しは楽しい戦いになりそうですかな」
緊張を隠せない神官が呟いた。

ランチェスターの自乗均等法則に乗っ取れば、実質の戦力比は一対三十六。こちらが全滅しても、相手にはせいぜいかすり傷を負わせるのが精一杯というほどの、絶望的な戦力比だった。砦と化した結界を攻めるにも、攻者三倍の原則を充分すぎるほど満たす数だ。それに、結界は不死者に対してのみ有効であり、物理的な砦を築いているわけではない。見方を変えれば包囲された軍と、包囲した軍のぶつかり合いでしかない。

ターバの民を殺しても構わないというのであれば、バードンと神官、それに剣技に優れた将兵がある程度いれば問題ない。おそらく、訓練を積んでいない者の目に、バードンと神官の動きはこの闇に等しい夜の帳の中では捉えることは不可能だ。

だが、ターバの民を手に掛けるようなことがあっては、ターバ解放作戦の意義に関る。

大の虫を生かすために小の虫を殺すことも、ときに躊躇うべきでないことはバードンも神官も理解している。しかし、今ターバの民に死者を出してしまっては、拠点欲しさの殺戮という禍根を残すことになりかねなかった。

やはり打って出て、先手を取ってターバの民を殴り倒してしまおうかと、バードンは全身の力を抜き去って次の緊張に備えた。

「不味い。
神官殿、魔獣までご用意いただいたようですな。
やはり、我らは打って出ますか」
バードンは、跳躍に移ろうとした瞬間、不死者の後ろに焦臭い臭いを嗅いでいた。

一年ほど前、ランケオラータを南大陸へ連れ戻そうとしていた際に遭遇した、三つ首の凶獣と同じ臭いだ。

あの時はキマイラとマンティコア、そしてサイクロプスと遭遇した。さすがに三体の魔獣を相手取るのは、バードンにとっても少々荷が勝ちすぎで際どいところまで追い詰められた。アービィたちが間に合ってくれたお陰で九死に一生を得ていたが、そうでなければおそらく命を落としていた可能性が高かった。

今回キマイラは一体だけのようだが、不死者の群れは軽く百を越えている。あのときの状況と、たいして変わりはないかもしれなかった。

「然様ですな。

結界は連合軍の皆様にお預けし、我らは魔獣と不死者を刈り取ると致しますか。

小隊長殿、聖水による結界効果は物理的に破壊することは不可能です。

明日の朝くらいまでは、不死者どもがこの中に入ることはできませんが故、ターバの民を敢えて引き込み、結界の中で戦っていただきたい。

なに、記号がすべて破壊されても、明日作り直せばよろしい。

細かいことなどお気遣いなく、思う存分暴れられよ」

気負うでもなく、悲観的になるでもなく、神官は三節棍の素振りを続けている。

「小隊長殿、朝まで持ちこたえれば、勝ちです。

では神官殿、参りますか」

バードンの姿が闇に消えた。

小隊長がバードンの動きを追えず、目を瞬かせているうちに、神官の姿も消え失せていた。

ターバの民は、結界を囲んだまま躊躇うような素振りを見せ、突っ込んでくる気配はない。
こちらが焦って打って出るのを待っているかのようだった。だが、挑発するような行動を取るわけでもなく、徐々に距離を詰めている。どうやら、その後ろから不死者たちが圧力を掛けているようだった。
まるで悪名高いナチスドイツの武装親衛隊督戦隊か、ソビエト連邦労農赤軍督戦隊を髣髴とさせるような、不死者と魔獣、そして生者の布陣だった。

「第一分隊、整列っ！
突っ込んできたターバの民は、極力紳士的な方法でお休みいただけ。
そのまま結界内に引き込めば、不死者どもからは見えなくなる。
ターバの民さえ片付けば、この状況は終了だ。
各自、状況開始」
小隊長が直率する第一分隊に下命する。
他の結界から応援を呼ぼうにも、既に目の前に敵がいる状況では間に合わない。
神官が精霊に知らされたという悪意の集中に、他の三基準点を構築し終えた神官たちが気付いたとしても、応援に駆けつける頃には事は決していよう。
九人の構成員は眦を決して結界内に人間の防壁を形成し、突っ込んでくるターバの民を待ち受けた。

ターバの民と、第一分隊の間の空気が、極限まで圧縮されたと誰もが感じた瞬間、戦が爆発した。
僅かな躊躇いを見せつつも、背後からの圧力に抗する術を持たないターバの民が、結界に向かって雪崩を打ったように駆け始めた。

五月雨式になだれ込むタールバの民は、第一分隊が班ごとの二列横隊を形成しているのを見ると、その中央突破を図った。打ち合わせがあったわけではないのだが、迂回するより先頭の者が敵対列に突っ込んだ隙に、そこを乗り越えようとしたのだろう。中央の基準点を破壊するために、迂回するより最短距離を選んだというよりは、視野狭窄に陥り、迂回する余裕がなくなっていたと見たほうが良かったかもしれない。

迎え撃つ第一分隊は、結界内に飛び込んでくるタールバの民を、隊列の中心を開けわざとすり抜けさせた。

タールバの民は、第一分隊が恐れをなしたと見て、勝鬨を上げながら中央に設置された基準点に殺到する。だが、基準点そのものは一抱え程度ある丸太の断面に記号を掘り込んだもので、然程大きなものではないのだが、地中深く打ち込んであり、先端は地上に数ｃｍ程顔を覗かせているだけだ。当然、人力で引き抜けるようなものではなく、また何人もが手を掛けられるような作りでもない。

タールバの民が基準点に取り付き、引き抜こうとしたり周囲を掘り始めたり、または剣で切りつけたりし始めたとき、わざと中央を突破させた第一分隊は、タールバの民を包囲していた。

人数差から完全な包囲は不可能だが、それでも意識が中心に向かっているタールバの民を、第一分隊は背後から襲った。

中央に向かった人の波は、六十名近くが一点に集中してしまったためか完全に渋滞し、記号を取り囲む人の壁の外郭は混乱状態にあった。冷静な指揮官がいたならば、周囲の別の記号を破壊するため人を分派するのだが、視野狭窄に陥っているタールバの民にそのような余裕はなかった。第一分隊は、後ろからタールバの民に襲い掛かると、当るを幸い殴り倒す。剣は抜かず、拳が、肘が、脚が、膝が、的確にタールバの民を捉えていた。記号の破壊を妨害させないため、

外郭に位置するターバの民が第一分隊に向き直るが、統制の取れた動きではなく、また狭い範囲に押し縮められた結果、剣を振るうにも振るえず、一人ずつ確実に排除されていく。顔面に拳や肘を打ち込まれ、腹を爪先や膝で蹴り上げられ、短く悲鳴を上げたターバの民が次々に地に倒れ伏す。それでも中には果敢に反撃し、第一分隊の兵士に剣を突き立てる者もいた。

鈍器が肉を叩くような耳障りな衝撃音と、身体を切り裂かれた兵士の絶叫が入り混じり、結界の中は混乱の巷へと変貌していった。

バードンと神官は、キマイラを前面に押し立てた不死者の群れに突っ込んでいった。

二人の防壁を抜かれて困るのはキマイラだけであり、結界に突入できない不死者は無視して良い。キマイラへの攻撃を邪魔する者だけ排除すれば、あとはキマイラに集中できる。だが、ちょっかいを出してくる不死者を切り伏せながらキマイラに攻撃を集中することは、言うほど簡単なことではなかった。

二人は主目的を積極的にキマイラを殺すことから、結界に突入させないように気を逸らすことへ切り替えた。

「まるで、切りがないですな。
次から次へと」
文句を言いつつバードンが不死者を切り捨てる。

「全くですな。
まだ半分も潰してない」
神官が軽口で答える。

だが、二人とも息が上がり始めていた。
不死者の攻撃自体は難なくかわせる。しかし、キマイラを牽制し、

その攻撃を避けながらでは、やはり無理があった。キマイラと不死者が連携を取っているとは思えないが、バードンと神官の隙を衝いてそれぞれ攻撃してくると、息つく暇もなく攻撃は連続されてしまう。

バードンも、神官も吸血不死者の同化攻撃には気を付けていたためか、どうしてもキマイラに対して隙ができてしまう。結果、二人ともキマイラからは数回の打撃と噛み付きを受け、それなりに無視できないダメージを負っていた。

「神官殿、結界へ御退避ください。
ここは、私が引き受けましょう」
神官に叩き付けられようとしていたキマイラの前肢を、自らの身体で受け止めたバードンが言った。

彼は、徹底したリアリストであり、オプティミストではない。
引き受けたところで、結界内のターバの民を第一分隊が制圧していない限り、神官にとっての相手がキマイラと不死者からターバの民へと交代するだけだ。それでもここでキマイラに四肢を引き裂かれ、不死者に喰らわれるか、吸血不死者に同化させられるかよりは、まだ何とかなる可能性が残されている。

ざっと見たところ、キマイラは手傷こそ負わせているものの、それが却って凶暴性を増すことになっていた。不死者の群れはその数を減じさせているものの、自らが負ったダメージとは到底吊りあう取引にはなっていない。

「そうはいきますまい。
私一人逃げたところで、戦況には何の影響もない。
不死者を減らすより、キマイラを何とかしなければ、第一分隊まで危機に陥りますぞ」

肩で息をしながらも、神官は三節棍を構え直した。
見たところ、バードンの右腕は切り裂かれ、辛うじて筋肉の筋で繋がっているだけのようだ。ここで彼に任せて逃げ切れると思うほど、神官はオプティミストでもなければ、彼を捨てて逃げるほどリアリストでもなかった。
しかし、二人に限界が近付いていることは明らかだ。

バードンや神官がいかに鍛えていようと、合成魔獣の四肢や顎はその肉体をやすやすと引き裂くだけの力は持っている。不死者たちも、動きこそ鈍いが、その膂力は人類のそれを遥かに凌駕していた。一般人の首や腕など、粘土を引きちぎるより容易いことだった。

複数の不死者がバードンに突進し、神官を包み込む。
剣が舞い、三節棍がうなりをあげて不死者を薙ぎ払うが、それまでであれば切断できていた腕や首を斬り跳ばすまでには至らない。不死者たちが下がり、一息ついたと思った二人が顔を上げると、そこにはキマイラのライオンと山羊の首が感情の篭らない目で二人を見下ろしていた。

「あぁ、これはいけませんな」
「やり直し、というわけにはいきませんかな」
バードンが呟き、神官が答えた。

キマイラの四肢の筋肉が力みで膨れ上がり、大地に向かってそのたわめられた力が解放され、キマイラの巨体が跳んだ。
バードンと神官は、適わぬまでも一太刀とばかりにキマイラに剣と三節棍を振り抜いたが、どちらも空を斬っていた。態勢を崩し大地に突っ込んだ二人は、襲い来る不死者の群れを避けるだけの体力が残されていないことに気付いていた。

確かにキマイラは跳んでいた。
だが、それは自らの意志で跳んだのではなく、他者の意志で強制的に、この世から跳ばされていた。

――遅くなってごめんなさい。大丈夫ですか？

「何、邪魔しやがる、これからってときに」
瞬時に状況を理解したバードンは、つい悪態をついていた。

「どうして、こちらへ？」
訝しげに神官が尋ねた。

「精霊が教えてくれたんです。
ターバにいる悪意が北へ動いたって」
ルティがバードンを抱え起こしながら、神官に向かって答えた。

一昨日から昨日へと日付が変わった深夜、ルティ隊の神官が精霊との感応中に、ターバから悪意の塊が北へ移動していると伝えられていた。
アービィとルティが南基準点を飛び出し、人影がなくなったところでアービィが獣化して、ルティを背に乗せ東基準点へと駆けた。
そこでティアを拾い、二人を乗せて北基準点へと全力で駆け抜けたのだった。既に韜晦路を通る余裕はなく、最短ルートをアービィは駆け抜けていた。

「まったく世話が焼ける人ね、あなたは。
そんなんじゃ、アービィはおろか、あたしだって殺せないわよ。
切り刻んでくれるんじゃなかったの？」

『透過』を解除したティアが、バードンに『快癒』を掛けながら悪態をつく。

「余計なお世話だ、蛇。
こんなのかすり傷にもなりゃしねぇ。
それより、東の結界は、いや、南も西も放っておいていいのか？」
口ではそう言いながら、バードンは安堵のあまりへたり込んだままだった。

「西区域はご心配なく。
『人』では、あの辺りに踏み込むことなんてできませんから。
南も東も、精霊から悪意は向いていないから、大丈夫だって」
神官に『快癒』を掛けながら、ルティが言う。

結界が完成した以上、万を越える不死者が攻めようと、それを破壊することはできない。
西は人跡未踏の地であり、生者が入り込む余地はなかった。南と東の結界も、この緊急事態に補給部隊をそのまま守備隊として足止めしてある。多少食糧の節約は必要だが、状況が司令部に伝われば後方支援部隊から補給部隊は補充され、充足率は十割を維持されるだろう。

イーバとターバの中間を扼する不死者の集落が復活した情報は、既に司令部に届いていた。
アービィたちには知らせが届いていないが、不死者の集落を結界で封鎖するために、水火風の神官たちが護衛と共に向かっているはずだった。もともと神官たちは結界が完成した後に、ターバへ進出する取り決めがあった。それを前倒しして、不死者の集落封鎖後、ターバへ前進するために南地区の物資集積地へ入る予定になってい

た。

これもアービィたちは知らないことだったが、ランケオラータとプラボック、そしてルムの三者協議はここが勝負所と踏んで、ある程度は物資の損耗を覚悟のうえで、戦力の投入を決めていた。

連合軍司令部は、山岳地帯から平野部に係る兵站業務のうち、街道の舗装を一時棚上げし、補給作戦に全力を上げることを決定している。司令部機能もイーバに前進させ、連合軍司令官ラルンクルスが陣頭指揮に当たっていた。後方支援業務が不充分になるため、ランケオラータからウジェチ・スグタ要塞に陣取る南大陸連合会議に対して、補給業務の民間委託と、舗装作業に当たる工夫の派遣を依頼することにしていた。

ティアがバードンを、ルティが神官を支えて、知る範囲の状況を説明しつつ結界へと後退する。

背後から四人に不死者の群れが殺到するが、キマイラを瞬殺した巨狼が立ちふさがり、片っ端から不死者たちを噛み裂いていく。四人は振り返ることなく結界へと辿り着き、それぞれが『回復』や『治癒』で体力を恢復させるや否や、第一分隊とターバの民が入り乱れる混乱の巷へと身を投じていった。既にキマイラ亡き今、不死者の群れがいかほどいようと、結界に対して何の脅威にもなり得ない。

四人とも、巨狼がいる限り不死者の群れが一体たりとも後から追い縋ってくることはないと、全幅の信頼を置いていた。

不死者の群れを蹂躙し、四人が結界に突入するのを見届けた巨狼は大きく跳躍し、結界の横をかすめていった。

ルティがアービィの短刀や着替えの詰まったバッグを投げ、巨狼はそれを空中でキャッチする。そのまま林に走りこんで獣化を解く

と、服を着込み短刀を腰に佩いた。
アービィは獣化しない程度に狼の力を解放し、再度不死者の群れを中央突破した勢いで結界へと突入していった。

結界の中は混乱の極にあった。
ほぼ半数のターバの民は無力化され、結界内に転がされている。第一分隊も無傷ではなく、三人が倒れ伏し、それ以外の七人も大なり小なりの怪我を負っていた。殺して良いなら話は早いが、ターバ解放後の統治に関るも問題に発展しかねないため、極力命に影響のない方法での無力化が求められていた。
それ故にターバの民の排除は簡単にはいかず、本来の戦闘であれば受ける必要のない抵抗を受ける羽目になっていた。

基準点は相変わらず微動だにもしないが、第一分隊の将兵に疲労の色が濃くなっている。
ルティとティアの呪文で完全回復したバードンと神官は、躊躇うことなく混乱の巷へと踏み込んだ。
鍛え抜かれた個人戦闘のエキスパートは、混沌と化した戦況を一気にひっくり返すだけの打撃力を有していた。右に左に拳が、肘が、脚が、膝が飛び、バードンが通り過ぎた後には、ターバの民がうめき声を上げて転がっている。三節棍が優しく奔り、神官の周囲にターバの民が倒れ伏す。
ルティは兵士に『快癒』、『治癒』、『回復』を掛けて回り、誰にも気付かれないように『透過』したティアが獣化し、護衛に付いていた。
ルティや回復途中の将兵に気付いて突っ込んでくるターバの民を、目に見えない蛇の尻尾が捕らえ、頚動脈を一瞬絞めて意識を刈り取る。徐々にターバの民に立っている者は少なくなり、第一分隊が圧倒し始めていた。

「もう、やめてっ！
やめるんだっ！」
ターバの民が恐慌状態に陥りそうになったのを見て、アービィが叫んだ。

「キマイラは倒しました。
不死者からこの中は見えていません。
もう、皆さんを脅かすものはいないんです。
落ち着いて。
神官様、一刻も早く最後の仕上げを。
そうすれば、結界内の不死者は全て灰になります。
ターバに残された人たちも、解放されるんです！」
あらん限りの声でアービィは叫び続けた。

だが、ターバの民の動きが止まらない。
彼らを突き動かしていたものは、ターバに残された人々の命を救いたい、不死者に転生などさせてなるものか、という二点だ。もし、結界の完成を止められなければ、今現在ターバに残された人々は、問答無用で不死者に転生させられるか皆殺しと脅されていた。戦いに明け暮れた自分たちがあっと言う間に制圧された相手に、南大陸の軟弱どもが敵うはずもないと信じていたからこそ、彼らは結界を破壊する方を選んだのだ。
だが、現実にはキマイラが排除され、不死者の群れも蹂躙されていた。

新たに戦場に突入した二人の戦闘力は、人外の化け物と呼ぶに相応しいほど、一般人とは隔絶していた。そのうえ、見えない敵が片っ端から仲間を倒している。ターバの民の戦意は急速にしぼみ始め

ていたが、それでも同胞の命を救うため必死に結界の完成を阻止しようとしている者がいた。

アービィは、念話でティアに、『催眠』でタールの民を無力化するように伝え、自らもまたタールの民の排除に参加する決断を下した。

ラミア特有の呪術といえど、無限に使えるわけではない。ティア自身『催眠』を使うタイミングは窺っていたが、タールの民の数が多く全てを眠らせ切れないため、その行使を躊躇っていた。しかし、アービィからの念話で状況を把握し、全てを眠らせることはできなくても、戦意を溢れさせている者だけ狙えば良いと判断した。

戦場から一歩退いたティアが、的確に相手を選んで強制的な睡眠に誘っていく。たった今まで雄叫びを上げながら剣を振りかざしていた者が、攻撃を受けたわけでもないのに倒れていく。それも苦悶ではなく、安心しきったような、気持ちよさそうな表情を浮かべてだ。

明らかにタールの民が浮き足立ち、その隙を衝いて第一分隊が畳み掛けるように襲いかかった。

アービィの言葉に、神官が結界内の記号に聖水を振りかけ、精霊への祝詞を上げ始めた。

荘厳な言葉が紡ぎ出され、記号が一つずつ光を帯び始める。昨日まで、五つの結界の中で見た光景と、同じものが再現されていた。僅かに無傷のタールの若者たちが、神官の祝詞を阻止しようと突っ込むが、バードンに正面から拳を打ち込まれ、アービィの掌底に意識を刈り取られる。

この時点でタールの民に立っている者は一桁でしかなく、回復呪文に余裕のある第一分隊が有利であることは、誰の目からも明らかだった。

制圧は完了しつつあった。

基準点から始まった光の列は、一重ずつ結界内を満たしていく。
やがて、全ての記号に光が宿り、それまで見た五つの結界とは異なる現象が起き始めた。
一瞬、全ての記号が強い光を放ち、ゆっくりとした明滅を開始する。
明滅の間隔は十秒程だったが、数回ごとにその間隔は短くなり、光っている時間が長くなっていく。やがて、消える時間は瞬間になり、残光に幻惑されなくても明滅がなくなったと見えたとき、結界から白く、柔らかく、温かい光が宙天高く立ち昇った。
そこにいた全員が立ち昇る光の帯を見上げたとき、二十四本の光の帯がターバ上空と思しき辺りで一つになった。

結界の両側の地面に光の帯が走り、全ての結界が光で繋がったとき、夜空が爆発したかのように明るくなった。雪の結晶を思わせる光の粒が大結界の中に降り注ぎ、それに触れた不死者が灰と化して爆散した。

光の輪の内側にいた不死者は、高位も低位も関係なく、ひとしなみに光に飲まれ、瞬時に灰と化す。
ちょうど輪の上にいて、身体の一部を光の輪が通過していた者は、輪の内側に残る部分が瞬時に灰化し、身体を分断された。下半身を失った不死者たちが、僅かに残る灰化への恐怖心から光の輪を逃れようと、腕だけで必死に這いずるが、灰化した下半身を追うように上半身も灰化する。上半身を失った不死者は、どこへも逃げることもできず、その場に崩れるように灰化した。
縦方向に分断され、灰化を逃れた半身が光の輪の上に倒れ込むと、さらに分断され、のたうち回りながら四分五裂になりながら一掴み

の灰を周囲に撒き散らした。

結界内に歓喜が爆発した。

辛うじて灰化を逃れた不死者も二桁を超えていたが、日中のシェルターを失った者たちには、数時間後に太陽が容赦なく襲いかかるはずだ。

残敵掃討の必要を見い出せないアービィが結界内に腰を落とし、続いてルティが寄り添うように腰を下ろした。

精神力の全てを搾り切ってしまった神官が、大地に仰向けに倒れ、周囲の心配を余所に大の字のまま寝息を立て始める。同様に、疲労の限界を既に通り越していたバードンが、大地に崩れ落ちた。同時に獣化と『透過』を解除したティアがバードンに駆け寄り、その身を抱え起こして『回復』を掛ける。だが、うっすらと目を開けたバードンは、ティアに一言二言言葉を投げつけると、そのまま意識を失った。

ティアは、バードンをそっと横たえ、やるせない表情で立ち上がった。

「どうしたの、ティア。
バードンさん、大丈夫なの？」
ルティが心配げにティアに訊ねた。

「ええ。
『眠いからほっとけ』ですって。
失礼しちゃうわ。
癪に障るから『催眠』の追い打ち掛けちゃった」
憤懣やるかたないというティアの背後から、バードンの鼾が聞こ

えてきた。

「ねぇ、『催眠』って、効いちゃったら、どれくらい寝てるの？」

憮然として答えたティアに、アービィが慌てて聞いた。

「そうねぇ、普通なら一晩ってところだけどねぇ。

かなり疲れてそうだし、明け方も近いみたいだし。

今夜には起きるんじゃないかな」

平然とティアが答えた。

「じゃあ、バードンさんが起きるまで、ここで待機？」

次はルティが慌てた。

そうであれば、ターバへの帰還は一日遅れる。

ターバに巣喰う不死者は灰になっているだろうが、結界を襲撃した人々の安否を気遣い、同時に自らの運命に不安を抱く残された民たちは、眠れぬ夜を過ごしているはずだ。先ほどの戦闘で負ったダメージを回復次第、早急にターバへ戻るべきだ。

もちろん短い休息などで回復するはずもなく、ルティやティア、白呪文を使える将兵にドーピングを施して、無理矢理呪文の使用回数を回復させてのことだ。

「いいんじゃない、置いて行って。

この人なら、最北の地からだって独りで帰ってくるわよ」

あっさりとティアは言い捨てた。

「ちょっと、アービィ。

あんたも残りなさいよ。

もし合成魔獣とかうろついて――」

ルティがそこまで言って振り向いたとき、昨日から走り続けたアービィは、バードンに負けじと鼾を掻いていた。

ターバの民は呆然と、第一分隊はやれやれといった表情で、その場に立ち尽くしていた。

ルティの言葉が途切れると同時に、ターバの民が手にしていた武器を投げ捨て、そして第一分隊の将兵に抱きついた。たった今まで殺そうとしていた者の手を取り、全身で喜びを表すターバの民と、どうすればそんなに豹変できるのかと困惑する第一分隊の各員が、奇妙な調和の中にその身を委ねている。もとより怨みなどない両者の間に、ターバ解放の喜びを共有するまで時間を必要としなかったのは、自然な流れだった。

「帰りましょう、ターバへ」

東の空を眺めていたるティが振り返った。

翌日の深夜、ターバは歓喜に包まれていた。

結界が完成した日の夜半に、その阻止に躍起になっていた人々を、それを守るために躍起になっていた人々が護衛し、ターバに到着していた。

送り出していた人々は、不死者たちが灰化したことで結界の敷設阻止に失敗こそしたが、最良の結果に恵まれたことを知った。だが、送り出した人々の安否が判らない以上、手放しで喜ぶわけには行かない。到着が間に合わず結界が完成したのか、殲滅されてなのか、それとも排除だけで済んだのか。

しかし、一人の死者も出さず、疲れ果ててはいるものの、送り出した人々が無事戻ってくる姿を見て、冬の間沈鬱な空気に支配されていたターバに、久々の明るい笑顔が甦った。

もちろん近親者や、愛する者、親しい友人たちを失った悲しみは

あるが、それでも人々を恐れさせていた不死者の群れが消え失せた喜びは大きい。いずれ激情の嵐が残された人々を襲ってくるのだろうが、今ひとときくらいは喜びに浸っていたかった。衛星集落の民も同様で、不死者の群れが灰化するのを目の当たりにしてから、偵察も兼ねて三々五々ターバに集まっている。

そして生き残りの中で主立った者と、この征途に同行してきたターバの民による今後について話し合いが始まった。

ルティやティア、バードン隊の将兵と随伴していた神官は、その話し合いの場とは離れた場所でなんとも言えない開放感に浸っていた。

だが、これで戦が終わったということではない。周囲一帯を結界で囲んでいるため、ターバを巡る大規模な戦闘は、敵が生者の大軍を送り込まない限り今後生起しないと見てはいるが、敵の戦力に大きな損害を与えたわけではなかった。

ターバの民からの聞き取りでは、大元の吸血不死者は二十体にも満たない数だったという。今回直接の戦闘行為を行った不死者の群れは、そのほとんどがターバの民が転生させられたものだった。

最北の地へ続く道程はまだ遠く、ターバを拠点化しつつさらに先にも拠点を築かなければ、連合軍は補給が途絶えて立ち往生してしまう。

結界の敷設部隊を率いた将兵は、補給の困難さを身を以て知らされていた。持参した食糧は日に日に減っていくが、行軍の途上に集落はなく、あっても友好的な対応は望めない。仮に大量の金銀宝石を持っていたとしても、それと食糧を交換してくれる存在がなかった。ターバ以北にどれほどの集落が現存し、そのうちのいくつが滅ぼされ、もしくは最北の蛮族に恭順しているか、いくつの集落が抵抗し、もしくは見落とされているか、それらの情報が全くない。

まずは、その情報収集と、もし我が方に利する存在があるならば、

食料調達の交渉が必要だ。

言うまでもなく、徴発などしては反発を招くだけなので、充分な見返りは用意する。場合によっては、集落の周辺を結界で囲み、連合軍による開墾を行う必要も考えられる。

なにしろ千人単位が一斉に動くのだ。戦況によっては、それが万単位になる。それは蝗の軍団が畑を襲うと同じだった。既存の生産基盤では、食糧は食い尽くされ、その他の物資も漁り尽くされ、女すら喰らい尽くされる。

解放をうたった側が略奪を行うなど、質の悪い冗談にもなりはしない。

補給部隊は戦闘こそ行っていないが、舗装もされていない雪の残る道を、人力での物資輸送にのたうち回っていた。

荷車の牽引に馬を使おうにも、途中の餌料補給ができないため馬の餌料も積んで行かざるを得ず、結果的に輸送できる物資の総量が減るからだ。だが、大量に物資を消費する馬を使わないとしても、例え人であってもその輸送の距離が増えれば増えるほど、労力に対して輸送できる戦略物資の量が減る。根本的に方法を見直さなければ、大軍が数日行程前進しただけで、南大陸の継戦能力はいとも簡単に息切れしてしまう。

現状でのターバに食料生産能力は、ほとんど期待できない。働き手の多くが不死者に転生され、失われていたからだ。

だが、ターバ以北から逃れてきた中央の民は、平野部に大量に滞在している。プラボックもその一人だ。火事場泥棒のようにターバに入植するのは気が退けるが、本来の父祖の地を取り戻すため必要な措置でもある。どんな手を使ってでも、ターバ周辺の食料生産能力を上げられなければ、最北の地への道程は、いつまで経っても縮

まりはしない。

東と南の基準点に待機していた将兵と神官、ティア隊とバードン隊を追っていた補給部隊が、ルティたちに遅れてターバに到着した。各部隊から作戦上問題となっといた点を取り急ぎ纏めた後、ルティたちと指揮官の連名で、ランケオラータとプラボック、ルム宛の伝令を走らせた。

主な内容は、兵站維持の困難さだ。

南大陸では、グラース河の水運が発達しているためか、大量輸送が当たり前になっていた。

それに対して北の大地には、東西に流れる川は多いが、南北に縦貫するような大河はほとんどない。山岳から平野に向けて一本、山脈から中央に向けて二本あるにはあるが、最北の地への最短進行ルートからは大きく外れている。だが、千人単位の軍と民を喰わせるには、川を利用した水運が不可欠だ。

遠回りを覚悟で河を使えば、筏を利用して食糧を運び、筏をバラして前線基地を構築しつつ兵站を伸ばすことができる。

水源が近ければ、耕作地や放牧地の確保も容易なはずだ。河が繋がっていなくても、各地に点在するクリークや湖、大規模な沼も水運には利用可能だ。

補給中隊の指揮官たちは、そういった内容を纏めていた。

併せて首脳陣のターバ進出も進言している。最前線と根拠地間に十日の行程が横たわっているのは、情報の伝達に齟齬を来しかねない。単なる行き違いであれば、後々笑い話程度で済むのだろうが、貴重な物資を無駄に捨てる羽目になったり、人命を失うことになってからでは取り返しがつかないからだ。

同時刻、ターバへ向かう街道に、二つの影がか細い月灯りに伸びていた。

「あの蛇、覚えていろよ。切り刻む前に折檻してくれる」

「本当に置いて行くなんて……」

疲れ果てた表情の男が二人、ターバへの道をとぼとぼと南下していた。

第８２話

「蛇、貴様、どういう了見だ。
事と次第によってはただじゃ済まさんぞ」
怒気を孕んだバードンが吼えた。

「あら、あんまり気持ちよさそうに寝てたから、起こしちゃ悪いって思ったのよ。
あんだけ戦った後ですもの。
感謝の一つもして欲しいわぁ」
涼しい顔でティアがぬけぬけと言う。

「まあまあ、バードンさん、あの二人だったら普通のことですから。
軽く流してやって下さいよ」
ティアは涼しい顔をしているが、バードンの剣幕にアービィが取り成そうとする。

ターバを囲む大結界が完成した二日後、深夜に帰還したバードンとアービィは、ターバの民が藁を貯蔵していた小屋に潜り込み、泥のように眠った。
二人に人並みの部屋は用意されていたが、案内してくれるはずの者は深い眠りの世界に遊びに行っていた。アービィもバードンも、今は一秒でも早く体を横たえたく、手近にあった藁小屋に吸い込まれるように入って行った。
そのまま藁に潜り込んだ二人は、剥き出しの地面に比べて圧倒的な寝心地の良さに、再度深い眠りの中へと落ちていったのだった。
アービィはともかく、バードンは結界の中で眠った際に、直接地面に転がった寝心地の悪さに幾度も眠りを破られていたが、『催眠』

のせいで覚醒することができず、却って疲れが増している部分もあった。

「貴様も貴様だ、狼。
何故、起こさん。
いつまでも寝こけやがって」
ティアがあまりにも平然としていたせいか、毒気を抜かれたバードンは怒りの矛先をアービィに向けた。

「そんな無茶な。
バードンさんの方が先に目を覚ましてたしぃ」
実際、バードンが四、五回力任せに蹴り飛ばしても、アービィは目を覚まさなかった。

「次は切り刻んでくれる。
蛇、貴様はその前に生きてることを後悔するまで――」
「じゃぁ、今回のはいいんだ」
皆まで言わせず、ティアはバードンの言葉を食いちぎる。

「――ッ！
今回だけだ。
次は無い」
バードンの慌て振りに、ルティは笑いを堪えるのに必死だった。

「ルティ殿、付き合う相手は良くお選びになることですっ！」
そう言うなりバードンは部屋を出ていった。
その際、ルティの耳元で、ティアとアービィには聞こえないように囁いてから、盛大な扉の開閉音とともにバードンは去っていった。

「もう、本当に素直じゃないんだから、バードンさんは」
当人がいなくなったところで、ルティの我慢は限界を突破する。
笑い転げながら、ルティはバードンの言葉を反芻していた。呪文には感謝しています、か。直接言えばいいのに。

「猊下、大変好ましくない事態でございます」
無表情なまま、一切の感情を捨て去ってしまったかのような、抑揚のない声でオセリファが報告した。

「分かっておる。
以前、陣を破壊されたときとは、異なる波動を感じた。
そう、破壊されたときは、組み上げた石壁が崩れるような。
今回は、塩の塊が水に溶け去るかのような波動だ。
それ以降、陣の様子が見えなくなっておる。
大方、結界か何かで陣を封じ込めよったのだろうな」
グレシオフィは自らの見立てを語った。

何から何まで、こちらの思い通りに行くとは思っていない。
敵も必死の抵抗をするからだ。生活圏の奪い合いに負ければどうなるか、その程度のことは子供でも分かる。

「しかし、猊下。
陣が使えなくなったということは、進攻するうえで非常に不都合かと。
未だ山脈に陣は敷けておりませぬ故。
これは私めの不手際でございますので、何なりと罰をお与え下さいませ」
不死者の集落をアービィたちに破壊された後、オセリファは必死にその再建に努めていた。

その甲斐あって連合軍の足が止まった厳冬期には、三つの集落は魔法陣で囲まれ、再度『移転』のための拠点として利用可能になっていた。

同時にグレシオフィは、山脈の各所に魔法陣を敷くようにオセリファに命じていた。

だが、風雪を避けられる構造物が点在する集落とは違い、殴りつけるような吹雪が荒れ狂う山脈地帯では、いかに不死者といえど行動することはできなかった。生者とは違い、凍死や餓死の心配は当然ないのだが、物理的に吹き飛ばされ、雪に埋められてしまっては、魔法陣の敷設など無理な話でしかない。仮に吹雪を衝いて陣を敷いたとしても、地表に記号を敷設できなければ、雪解けと共に陣は崩れ去ってしまう。

このため、オセリファは春の訪れを待ち、雪解けが大地を泥濘に沈めるまでの僅かな隙を衝いて、魔法陣の敷設を行うつもりでいたのだった。

だが、連合軍の反攻は思ったより早く、春の訪れと同時にターバにその魔の手が伸びてきた。

もちろんグレシオフィはターバを明け渡す気などなく、防衛の手は打っていた。

西区域には生者を配置することは適わないため、意志を持つ中位の不死者を送り込んであった。万が一、あの忌まわしい狼が出張ってきたときのために、魔獣としての強さに不安はあるが石化能力を持つコッカトリスとバジリスクも付けてあった。

北から東周りの区域には、恭順を誓ったターバの衛星集落があったため、これらに徹底した妨害を命じてあった。

しかし、西区域はあっさりと狼に食い破られ、東の区域も韜晦に惑わされ、そればかりか一集落に逃亡を許していた。

南区域は不死者の集落に襲わせればよいと考え、北区域の妨害にようやく仕上げたキマイラまで投入し、あと一歩まで追いつめたが、これも忌まわしい狼に排除されていた。

そして、最後に残された砦だった不死者の集落も、日中の無防備な隙を衝かれ結界に取り込まれてしまった。

こうなってはいくら不死者を送り込もうと、陣の中に実体化した瞬間に灰化してしまう。

魔獣であればその心配はないが、現在は狼に食い荒らされた損害が回復しきっておらず、送り込めるだけの数に余裕はない。コッカトリスもバジリスクも、制御する者が付いていなければすぐどこかへ逃げ散ってしまい、そうなってはせいぜい出会い頭に会った者を石化させるくらいで戦略的には何の役にも立たない。生者を制御のために付けようにも、陣をくぐる際に不死者に転生してしまうため、これも結界内に実体化すると同時に瞬時に灰化する運命だ。

これでは、漸く地表が顔を出した山脈に陣を敷こうにも、『移転』で跳ぶための拠点がなければ、そこは歩きで行かなければならない。ターバを大きく迂回して歩いていては、山脈への到着は早くて初夏が過ぎる頃になってしまうだろう。

食糧の補給を要さない利点を活かし、一気に山脈から平野を攻め落とし、不死者の軍団を補充して南大陸へ攻め込むつもりだったが、今後の大方針の変更を余儀なくされていた。

「気にするでない、オセリファ。
戦に多少の齟齬は付き物だ。
相手あってのことだからな。
それに、少しは楽しませてもらわねばな。
反攻成ると信じ込んだ希望を踏みにじってこそ、我らが怨みも少

しは晴れようというものだ」

グレシオフィ自身の見通しの甘さもあったことは自覚しているため、オセリファを罰する気はさらさらない。

それに、オセリファの存在は、グレシオフィにとって何ものにも代え難いものがあった。

例え、全軍を壊滅に追いやることがあろうと、オセリファだけは別格の存在だった。

ターバさえ抑えてあれば、連合軍の攻勢を抑え込むことは容易なはずだった。

食糧を必要としないグレシオフィだが、補給の重要性は熟知している。碌な耕地のない中央部に、千、万の軍で侵攻されたところで、喰う物がなければ自滅を待てばいいだけだ。後背地にいくら食糧の備蓄があろうと、補給線が延びれば延びるほど、前線に運べる戦略物資の量は目減りする。補給部隊は帰路の食糧も必要とするからだ。

ある一点を超えると、運ぶ物資より運ぶための物資の量が多くなる。基地からの距離と運べる量は反比例の関係にあった。

現状ではターバまでが連合軍の攻勢臨界点であることを、グレシオフィは冷静に見抜いていた。

しかし、ターバを落とされた今、連合軍の攻勢臨界点は大きく伸びている。

全盛期には、万に近い人口を養っていたターバと、その衛星集落だ。ターバ周辺の大地は、大人数を養うだけの力を持っている。そこに南大陸の農耕技術が加われば、収穫の上昇はいかほどか。ターバ出身の者はそれほどいなくとも、この地を前から狙っていた部族は多い。このチャンスに北征を名目として、多くの者が入植して来ることは間違いがない。そうなれば、食糧を始めとした様々な物資

の生産力は必然的に増え、ターバは連合軍の一大反抗拠点と化してしまう。

己を含めた不死者が結界に触れることすらできないのであれば、ターバを落とすには周辺地域の穀倉化が進む前に、山脈以南との補給路を断ち、兵糧攻めにするしかない。だが、喉元に打ち込んでおいた不死者の集落まで潰されてしまっては、ターバを孤立させることは困難だ。

あとは結界を苦にすることのないグレシオフィに忠誠を誓う最北の民の生者と、魔獣を全面に押し立てるしかないが、どちらもその数は多くなかった。

もともと人口の少ない最北の蛮族にとって、中央以南の連合軍と正面からぶつかり合うことは自殺行為に他ならない。いかに不死者が死を恐れる必要も、食料の補給も必要ないとはいえ、永遠に存在できるわけではない。破壊されてしまえば一握りの灰となり、吹き散らされてしまう存在だ。

最北の蛮族に残された戦力として計算できる総人口は、不死者を含め二万に届かない。ここまで集めた情報では、中央以南の連合軍が総力を結集すれば、四万に近い軍勢を集められそうだ。そうなれば戦力比は一対二。仮に全ての者の戦闘力が均一だとして、ランチェスターの自乗均等法則に従えば、実質の戦力比は一対四。最北の蛮族が全滅するまで戦っても、連合軍はほぼ八割以上が生き残っている。これでは勝負とはいえない。

現実的には、ターバで養える将兵の人数は一個連隊二千五百が限度だろう。それに対して、グレシオフィに用意できる生者の数は、最北の地の洗い浚いをつぎ込んで五百が限度。戦力比は一対五。公式に当てはめれば一対二十五だ。不死者を含めれば戦力比は逆転するが、結界を破壊するか連合軍が結界から出てこなければ、不死者は戦力としては計算に入れることはできない。もちろん、この世界

でランチェスターの法則など知られていないが、一人当り五人を倒してこちらは無傷、などという奇跡が起きるとは、グレシオフィがどんなオプチミストであっても考えられるはずもない。

グレシオフィが生まれる以前の遙かな昔から、北の民同士で行われてきた戦の目的は生存圏拡大であり、収穫の期待できる土地を奪うことだった。

元はといえば、各地での勢力争いに敗れたが故に、痩せた最北の地へ押し込まれた者たちの集合体が最北の民だった。少ない収穫物を分け合って暮らしていた彼らにとって、少しでも収穫が多い南の土地は憧れでもあり、いつかは取り戻すべき父祖の地でもあった。

だが、中央での抵抗は頑強で、幾多の命が散らされていった。最北の民は中央以南の民に比べ、純粋に人数という戦力が足りていなかった。正面からぶつかった幾度もの戦で、中央に進むこともできなかったが、最北の地を奪われるようなことはなかった。幾度か中央の土地を掠め取ることもあったが、少ない人口で守りきることはできず、すぐに奪い返され貴重な命も失われていった。それでも中央以南の民が、最北の地に攻め込むことはなかった。何故なら、最北の地はわざわざ勢力圏に収めるほどの魅力がない、打ち捨てられた土地だったからだ。

過去の戦で敵将から投げられた嘲りの言葉に、全ての最北の蛮族は慟哭した。

出てこなければ命までは奪わぬ。

蛮族には蛮族に似合いの土地がある。

豊かな土地に出てくる資格など、最北の蛮族にあると思うな。

大人しく雪に閉ざされていれば良い。

中央以南の民は土地を奪い返した際に、最北の民の勢力圏の寸前

まで迫るが、決して境界を越えようとはせず、そう言い捨てて去っていくのが常だった。

存在まで否定されては、中央以南の民への怨みが生じても不思議ではない。そうやって積み重ねられた千年以上に及ぶ長い時間は、そのまま怨みの積み重ねでもあった。

グレシオフィは、最北の民を率いるようになったときから、既に不死者に転生していたわけではない。

グレシオフィも当初は生存圏の拡大を目指し、中央への進攻を企てていた。だが、中央最北部の小さな土地を奪い合いが繰り返えされ、次第にグレシオフィの目的は、土地の奪取から中央の民を殺すことへと変化していった。

北の民の戦の目的はあくまで土地の奪い合いであり、生命のやり取りはその手段でしかなかったはずだった。徹底的なジェノサイドは周囲の民に恐怖を撒き散らし、防衛のために団結を促す。そうなっては却って自らの部族に危機を招くことになるので、集落の皆殺しなど珍しくはないが、そうそう頻発することではなかった。

だが、最北の民はその一線を越えた。土地に住む民を皆殺しにして代わりに居座っても、中央部から弾き出された民に奪い返される。ならば、殺し尽くしてしまえばいいとグレシオフィは考えのだった。そして血で血を洗う凄惨な抗争が続く中、十五年前の秋にオセリファが戦の中で命を落としたとき、グレシオフィの中で何かが弾けた。

グレシオフィにとって、オセリファは子供のような存在だった。共に肩を並べて中央の民と戦った盟友が、妻を失った後に男手一つで育て上げた娘だ。収穫物が少なく、栄養状態が劣悪な最北の地では、出産は命がけだった。妻は慢性的な栄養不足に悩まされる中、最愛の夫の血を残すため、命と引き換えにオセリファを産んでいた。戦で盟友が命を落としたとき、オセリファは七歳になったばかり

だった。父の亡骸に縋って泣き叫ぶ少女を、子のいないグレシオフィは引き取り、我が子同然に育て上げてきた。グレシオフィに、家族がいなかったわけではない。愛する妻も子もいて、指導者として忙しく走り回る傍ら、家庭では良き夫であり、良き父親だった。

中央の民から奪い取った最前線の土地に率先して入植したグレシオフィの一家は、翌年の反攻でグレシオフィを残して惨殺されていた。グレシオフィが、偶然留守にしている間に起きた悲劇だった。

既に奪い返された集落に入ることもできず、妻と子の亡骸を葬ることすらできなかったグレシオフィを、オセリファの父であった盟友は慰め、励まし、絶望の淵から救ってくれた。その彼が戦の中で命を落とすことになり、グレシオフィは恩に報いるためにオセリファを我が手で育てる決心をしたのだった。

妻子を惨殺され、盟友を失った時点では、グレシオフィに理性は残っていた。

それからの十五年間は積極的な攻勢は控え、最低限の略奪に留めていたが、最北の民は南下への欲求を失ったわけではなかった。

グレシオフィの安定政策は民の反発を買い始め、圧力に抗しきれなかった彼は、大々的な進攻を行う決断をする。オセリファが成長し、彼の完全な庇護から離れ始めていたという安心感もあった。

だが、十五年振りの進攻は、最北の民から戦の勘を奪い、その間も戦に明け暮れていた中央の民との差を大きく広げていた。

いとも簡単に撃退され、最北の地へ撤退する殿を、オセリファが買って出た。

全軍壊滅の危機にあった中、グレシオフィが決断に迷っている隙に、オセリファは子飼いの部下を引き連れ敵の前に飛び出し、そして二度と還らなかった。

最北の民の勢力圏に命からがら逃げ込んだグレシオフィは、すぐさま軍を再編するとオセリファの救出へと急行した。
だが、時既に遅く、オセリファの部隊は文字通り全滅していた。
陵辱の跡がありありと残るオセリファの死体に取り縋り、妻子を失った時よりも、盟友を失った時よりも悲嘆に暮れるグレシオフィに、理性は残されていなかった。

死化粧を施したオセリファを連れ帰り、彼は禁呪に手を染めた。
邪悪な波動が辺りを圧し、オセリファを不死者に転生させた彼は、自らも完全なる不死者へと転生した。そして、最北の民以外の全てを眼前に跪かせ、その罪を償わせることを黒山羊の頭を持つ禁呪の神に誓った。
最北の地に、魔王が降臨した瞬間だった。

「問題は、ターバへの入植者の選定と、食糧増産が安定するまでの補給だな」
南北大陸連合軍の司令部移動を明日に控え、パーカホを始めとした平野の集落が喧騒に包まれる中、プラボックとルムはまだ頭を悩ませていた。

もともとターバは、中央でも突出した人口を抱えた集落だ。
衛星集落も全て数に入れれば、人口は二千に届こうとしていた。
それだけ基礎生産量が高いということで、この地を狙う部族もまた多かった。ターバから避難した人々が優先されることは当然だが、それ以外をどうするか悩ましい問題だった。

衛星集落の民にしても、中心地は欲しい。
ターバの民は避難を良しとせず、最北の蛮族にあらがってそのほ

とんどか不死者に転生させられ、今回のターバ攻防戦で灰と化してしまった。避難した一部の人々は、それに対して忸怩たる思いを抱えてしまっている。実際には、中央を席巻した最北の蛮族の脅威に対し、部族の絶滅を防ぐため半ば無理矢理避難させたのだが、実情を知らない衛星集落の民やターバの生き残りのなかでも一部の若者には、敵前逃亡とも受け取られ非難の対象になっていた。

避難した人々もそれは充分に理解しており、ほとんどの者は平野かターバ以北に新天地を求めるつもりでいる。だが、感情だけで片付くほど、事は甘くはなかった。

ターバを新しい住人に委ねるとしても、周囲の土地の特性はそこに住んでいた者でなければ解らないことが多い。どこで何が採れ、何が狩れ、どこが何の耕地に適しているか、いきなり入り込んだ者に判るはずがなかった。先の攻防戦の生き残りには若者が多く、それらの知識がまだ不足している。どうしても避難してきた人々の、特に老齢者の知恵が必要だった。

他にも問題はある。

市街地の約1／4は完全に破壊され、残った部分も多かれ少なかれ何らかの被害を蒙っていた。それとは別に、不死者にとっては無用の長物と化していた、穀物などの備蓄食糧が大量に残されている。無秩序な新規入植を行えば、快適な住居と食糧の奪い合いが起きることは、火を見るより明らかだった。南北大陸連合の中が、決して善人ばかりというわけでもない。

最北の蛮族という共通の敵がいるから、やむなく纏まっているという部分もあるのだった。軍事力を背景に、南北連合軍がターバを統治するしかないのだが、ターバ入植にあぶれた者たちの不満を解消する手だてがない。

人々は現状を鑑み、表立って不満をぶちまけることはしないだろうが、ターバには入れると期待して裏切られた人々の怨みは、後々

の火種となることは確実だ。実際には勝手に期待を抱き、叶えられないからといって怨むなどお門違いもいいところなのだが、一度思い描いた空想は当人の中では既定路線になっている。それが叶えられなかったとき、人々は政体に不満を抱き、反乱やクーデター、下克上の温床と化す。

「ターバの民は平野が引き受けよう。
だが、暫くの間は、ターバ復興に力を尽くしていただく。その後は、平野に移住だ。
乱暴かもしれん。
だが、ターバは最北の蛮族に対する一大反攻拠点だ。
軍の行動を優先させてもらう。
あとは、あなたの部族をどうするかだ」
ルムが自らの案を述べた。

「心配には及ばん。
俺たちは、シャーラを取り戻す」
プラボックは答えは簡潔だった。

ターバの入植に係る問題で、周囲が最もその動向を気に掛けているのが、プラボックの部族だった。
周囲の人々は、プラボックが現在保持している権力を使い、自らの部族を優先的にターバへ入植させると見ていた。プラボックの部族がターバを狙っていた過去は、誰もが忘れていない。権力は使うために存在するというのが、北の民にとっては一般な考え方で、プラボックの部族がターバを優先的に占拠することも、当然のことだと周囲の人々は捕らえていた。

乱世に超法規は付き物だが、それが通用するのは乱世のうちだけ

だ。

世の中が安定した時点で既得権化してしまっていては、必ず不満が渦を巻く。功績は、別の形で報いるべきだった。ルムが心配していた点は、ターバ内で勢力争いが起きた際、プラボックの部族が集中攻撃を受けるのではないかということだ。

もちろん、プラボックの部族に対する妬みや嫉みも、連合軍を瓦解に追い込みかねない要因で、こちらの方が現時点では恐ろしい問題になる可能性が高い。

しかし、プラボックにとってのターバは、魅力的な土地ではあるが根拠地があってこそだった。

プラボックの生まれ育ったシャーラはターバからさらに十日行程北にあり、中央のそのまた中央に位置していた。ターバほど大規模な集落ではないが、比較的肥沃な土地に恵まれた豊かな集落で、ターバと中央の覇を競い合った集落の一つだ。最北の蛮族が最も警戒していた集落でもあった。それ故に、戦乱の緒戦で落とされ、完全に破壊し尽くされている。これを奪い返し、復興させることがプラボックにとって至上命題であり、ターバを手中に収めたところで心が満たされるわけではなかった。

「それを聞いて安心した。

あなたの部族が良いとこ取りをしてしまっては、示しが付かんと考えていたんだ。

もちろん、あなたにはターバに入ってもらうが、それは住み着くためではないということを、満天下に示す必要があるな。

あなたの部族の方々には、当分の間平野か山脈に留まってもらうことになる」

ルムは、ほっと一息つくと、考えていた案を話し始めた。

ターバ入植は、公開抽選とする。
これであれば不公平は生まれない。引く人間に作為があると疑いを持たれないように、それも無作為に抽出する。いっそ、代表者を決めて阿弥陀籤でも良い。恨みっこなしの一発勝負で、入植する部族を決める。決定後の辞退は認めない。これを認めると、裏でどのような取引が行われるか、判ったものではない。脅迫、恫喝、果ては殺し合いまで起きかねない。もともとそういう性質の集団なのだ。

入植する部族には、権利と同時に義務も課す。
ランケオラータと話すにつけ、南大陸における権利と義務の考え方を、北の大地にも根付かせなければとルムは考えていた。やりたい放題の北の民にも、義務という概念を持たせたかったのだった。

「いいだろう。
俺は賛成だ。
ターバの民にも、抽選に参加する権利はあるのだろう？
それを辞退するかどうかは、彼らの自由だ。
住み慣れた集落を捨てるのは辛いだろうが、後ろ指を指されながら生きるのも辛いし、失ったものが大きすぎる。
家族、血のつながりのある人々、愛する人たちを失って、たった一人取り残されてしまった者もいるだろう。
それを乗り越えてターバを復興させたいというのであれば尊重すべきだし、新天地を求めるというのであれば、それも尊重すべきだ」
プラボックは賛意を示した。

誰もが納得する解決策などありはしない。
百点満点の回答を書き上げたいと思うのが人情だが、六十点で合格というのであればそれでも良い。百の問題のうち、一つだけ百点を叩き出してもあとの九十九が零点では話にならない。百の問題全

てに六十点なら、まだ現実的だ。
言い換えれば、百人の集団があったとして、百人全てが満足できるとは限らない。六十人が満足できる回答を、常に出せるようにするべきだともいえる。だが、その六十人がいつも同じ者たちというのでは、偏りが出ているというものだ。六十人の内訳は、常に流動的であるべきだろう。
プラボックもルムも、このやり方が最良だとは思っていない。だが、時間を掛け、人手も掛け、議論百出すれば最良の回答が出るとも限らない。
今は時間も人も足りないのだ。巧遅より拙速を取るべき秋であった。

「では、俺はランケオラータに話をしてくる。
あなたは、あなたの部族を納得させておいて欲しい。
余計な火種は抱えたくないからな」
ルムはそう言ってランケオラータの家へと向かった。

ターバに残ったアービィたちは、四人にあてがわれた仮の住居で来客に面会していた。
アービィも、ルティも、バードンも困惑の表情を浮かべていたが、最もその深刻度が高いのはティアだった。

「ですから、何度も申し上げている通り、あたしは神でも、その使いでもないんです。
あの時は、非常事態でしたから躊躇っている余裕がなかっただけで、本来であればあの姿は人様に見せるものじゃありません」
半ば凍りついた表情で、ティアは同じことを何度も繰り返している。

「ですが、あのお姿は我らが崇める神としか思えません。どうか、この地にお留まりいただき、我らをお守りください」

こちらは必死の形相で同じことを繰り返していた。

ティア隊が解放した衛星集落の民たちだった。

あの時、惚けていた民に正気を取り戻させるため、咄嗟の判断でティアは民の前で獣化していた。効果は絶大で、神の言葉であれば、避難する際の危険性など考えるに及ばないと、人々は一斉に集落を後にしていた。その後、無事ターバが解放され、落ち着きを取り戻した人々が礼を言いに来ただけと思い、気軽に対応してみればとんでもない話だった。

衛星集落の民が、ティアに対して心の底から感謝しているのは解る。

だが、その向こう側には、ティアを利用してターバの衛星集落からターバ圏の中心にのし上がりたいという、野望が透けて見えていた。ターバを中心とした集落群には、蛇を神としている部族が多い。複数の部族の集合体であるターバにも、当然蛇を祀る部族がいた。

今回の争乱で、目に見える形で人々を救ったのは蛇と狼だが、アービィはどさくさまぎれで正体を明かさずに済んでいた。そうなると、目に見えた神はティアだけだ。それも人前に立ち、人々に対して声を掛けた。その唯一声を掛けられた集落の民が、神に選ばれし者に準えたくなるのも無理はなかった。

ティアが衛星集落の民に手を焼き、『誘惑』で切り抜けるか『透過』で姿を眩ませるか悩み始めたとき、思いも寄らぬ所から助け船が出された。

「皆様は、神という者に対して、大きな思い違いをしていらっしゃるご様子。

こちらのティア殿に、ここに留まり守りをとおっしゃいますが、

神は人事を尽くした者に初めて救いの手を差し伸べるものでございます。

我が神も、これは同様。

安易な助けや守りを求める者には、却って強くあるように試練をお与えになられるものでございます。

皆様は、もし、ティア殿がここに留まると成ったときは、どうされるおつもりでございましょう？

都合の悪いこと、思い通りに行かないこと全てをティア殿に押しつけ、自らは願うだけで何もなさらぬおつもりか？

願いさえすれば、全てが思い通りにいくとお考えでございましょうか？

そして、それが成らねば掌を返すおつもりか？

それとも、ティア殿のお姿を利用して、他の部族に対し優位を確保しようというおつもりでございますか？」

それまで黙って両者の遣り取りを見ていたバードンが、横から口を出した。

それは見事なまでに、衛星集落の民の思惑を言い当てていた。

図星を指された格好の人々が言葉を返せなくなっているのを見て、バードンはさらに畳み掛けていった。

「私はマ教の神父でございます。

異境の神に対しては、幾分か利く鼻を持っております。

ティア殿とはずいぶんと長い付き合いがございますが、この世界にいる数多の神の一柱ではないことは、我が神の名において保証いたします。

もちろん、私はあなた方を教化しようなどという、大それた考えは持ち合わせておりません。

あなた方がどのような神を信仰し、祀り上げようと、それは人の自由というものでございます。

ですが、都合良く誰かを神に祀り上げ、それを後ろ盾として勢力を伸ばそうなどということは、あなた方の神に対する冒涜なのではございませんでしょうか？」

バードンの説教に、言葉を返せる者は誰もいなかった。

ある者は純粋に神と崇めたいだけだったが、それを否定されたことに落胆の色を隠せない。

神を詐称したという怒りがないわけではないが、あの状況を収拾するにはあれしかなかったと、落ち着いた今は理解できる。茫然自失に陥り、自ら判断する能力を失っていた人々を正気に戻したのは、ティアのとっさの判断があったお陰だ。考えてみれば、衛星集落の民たちの口から、ティアの正体が流布されてしまえば、一歩間違えれば迫害の対象になりかねなかった。

それを覚悟で蛇の姿を見せたティアの勇気には、感嘆するしかない。

ある者は、バードンに図星を指され、恥入るばかりだった。

さすがに神父の言うことだけあって、一々もっともであり、反論のしようがない。あそこまではっきりとティアを利用しようとしていたことを指摘されては、この後何をいっても信用など得られるわけがなかった。引き留められなかったことに対し、腹立ち紛れにティアが神を詐称した不埒者だと言い触らそうものなら、命の恩人に仇で報いた恥知らずな部族として、どこからも相手にされなくなるだろう。

目の前の利益のためなら離合集散が常であった北の民でも、名誉と信用は重要だった。生き残りのためなら裏切りも肯定される場合もあるが、このケースでは非難の声しか出ないであろうことは、子供にでも解ることだった。

「お分かりいただけたようでございますな。

お引き取りいただけましょうや？
数々の無礼な物言いの段、平にご容赦願えれば幸いでございます。
皆様に蛇神様の御加護と、我が神からも御加護がありますよう、
この神父及ばずながらお祈り申し上げます」
うなだれる衛星集落の民たちの背後に回り、バードンは丁寧な態
度で扉を開けた。

「あの、何て言って良いか分かんないけど。ありがとう」
素直にティアは頭を下げた。

「礼など言われる筋合いはない。
貴様が神だと？
そんなふざけた話があるか」
バードンは素っ気なく答えただけだ。

だが、ルティの笑い声に満更でもない表情で一礼すると、バード
ンはそそくさと自室へと入って行った。

「しょうがないわね、バードンさんは。
本っ当に素直じゃないんだから。
ねぇ、ティア、市場に行かない？
アービィ、久し振りに何か作ってよ、異世界の食べ物」
ティアは、何故ルティが笑い転げていたか解らず怪訝な顔をして
いたが、言わんとしている意図は理解できる。
三人は連れ立って、ターバの中心にある市場へと出かけていった。

最北の蛮族に占拠されていようと、生者には生者の生活があった。
虐げられようが、飯は食わなければ生きてはいられない。ターバ

の民は周辺地域の哨戒の合間に、僅かな機会を捕らえて狩りを行い、衛星集落と協力しながら食糧の確保に努めていた。
厳冬期は保存食だけで凌いでいたが、吹雪の回数が減り始めた時期には、積極的にカリブー等を狩りに出ていた。

自分たちの食い扶持もそうだが、不死者を運んできた最北の蛮族の生者にも食わせないわけにはいかなかったからだ。
遠慮なく保存食を食い荒らす彼らに眉を顰めつつも、不死者の戦力を背景にした恫喝には抗しきることは不可能であり、ターバの民たちは不満を飲み込みつつも食糧確保に奔走していた。

ターバ一帯が結界に囲まれ、不死者が滅し去られたときに、最北の蛮族の生者たちは皆殺しの瀬戸際だった。
ターバの民のほとんどは、身内や友、恋人や師といった大切な人々を失ったことで激昂し、最北の蛮族の生者を生きたまま八つ裂きにしても飽き足らないほどだった。だが、何人かの目端の利く者がそれを思い留まらせ、最北の蛮族の情報を引き出すため、集落の中心にある不死者が占拠していた社に監禁していたのだった。

貨幣経済が発達していない北の大地では、物々交換が主流だったが、貴金属との交換として南大陸の貨幣が浸透し始めていた。
ターバにおいても進駐してきた連合軍が貨幣を持ち込んでおり、随伴してきた避難していたターバの民が生活必需品との交換の橋渡しをしていた。もちろん、ターバの民たちが貨幣を使う機会はそれまではなかったが、連合軍が運んできた物資と貨幣を交換するようになっていた。最初から物々交換にすれば面倒もないのだろうが、それではいつまで経っても貨幣経済が根付かない。手間は承知でそうするようにとの、ランケオラータからの命令に将兵は従っていた。
その甲斐あってか、ターバにも徐々にではあるが、貨幣経済が浸

透し始めている。

アービィたち三人は、ターバの中心にある市場で買い物をしていた。

彼らがターバ解放の立役者であることは既に知れ渡っており、最初は誰もがカネもモノを受け取ろうとはしなかった。ターバの民たちはそうすることでアービィたちへの感謝の意を表していたが、三人は逆に申し訳なくなってしまい、いつもカネを押しつけるように置いていた。

ターバ解放から数日が経ち、ようやく人々に落ち着きが出始めた頃に、避難していたターバの民を通して説得してもらい、普通に買い物ができるようになってきていたのだった。

人口が激減してしまったため、保存してあった穀物などの主食は潤沢にあったが、生鮮食品はまだ不足気味だった。

結界を敷設するために来ていた地の神官たちは、早速農地改良に奔走しているが、数日で結果が出るようなことではない。連合軍は、不足しがちな副食の材料を中心に、生活必需品の輸送を続けていた。最も重量と場所を食う主食が輸送品リストから外されたため、暫くすれば様々な物資が市場に流れ込むはずだった。減ってしまった労働人口も、入植する部族が決定するまでは連合軍将兵が肩代わりするので、農地改良も滞ることはないはずだ。

今のところ市場に並ぶものは、主食の小麦粉や芋類のような穀物とパンなどの製品、長期保存が可能なチーズ、干し肉、乾燥させた根菜や芋柄がほとんどで、狩りの獲物とタマネギや成長の早い葉物といった生野菜が僅かにあるだけだった。

アービィは小麦粉とチーズ、生肉とタマネギ、香りの強い葉物や南大陸から持ち込まれた保存の利く香味野菜と香辛料を買い込んだ。

家に戻り、ルティとティアがアービィの指示通りに食材の下拵えを始める。
その間にアービィは簡単な石釜と、蒸籠を作り上げた。破壊された家屋が其処此処にあるため、材料には事欠かない。
やがて、ラガロシフォンで好評を得たピザと、グラザナイでラシアスの近衛第二師団特編中隊に振る舞った餃子を作る準備が整った。
ルティに言われ、バードンに声を掛けに行ったティアの足取りが軽やかだったことは、決して気のせいではないとアービィは思っていた。

第８３話

ターバには、連合軍司令部とプラボックが残ることになった。
当初はルムとランケオラータもターバに滞在する計画だったが、南大陸との交易事業や街道の舗装など、ターバにいては管理が滞る事項も多かった。ルムは平野を留守にするわけにいかないという事情もあり、ランケオラータにレイを伴って最前線に行けというのも酷だった。
ターバの管理はターバの民に任せれば良く、農業指導には神官がいれば話は済む。経済については、ランケオラータの専任事項のはずだが、ティアに任せておけば充分と見ていた。

軍の管理運営や戦線の維持、結界の守備はラルンクルスという専門家がいるので安心だ。
軍の独断専行については、ラルンクルスの人と成りからその心配はないと判断されていた。大方針だけ首脳が決めておけば、それに従ってラルンクルスは幕僚たちを駆使して、戦略を立て戦術を練るだろう。しかし、戦略を立て、戦術を練るうえで、現地に展開する実働部隊にある程度の自由裁量権を与えておかなければ、組織の運営は硬直化するだけだ。首脳三人は、ラルンクルスであれば、心配の必要などないと全幅の信頼を寄せていた。もちろんプラボックが同行している以上、独断専行の余地などなく、平野中央連合の最高権力者と、南大陸連合軍の総司令官同士の協議で物事は進められるはずだった。
司令部のターバ移動に伴い、山脈の哨戒任務師団から抽出された一個連隊が、戦略物資を満載した新編成の補給大隊を伴って、ターバ一帯の守備隊として赴任していた。
山脈は哨戒線としての機能は維持しつつ、ターバまでの街道整備の拠点としての整備が進められている。ウジェチ・スグタ要塞から

パーカホまでは、間もなく石畳による舗装が完成する見通しで、工兵が大挙して山脈へと移動できる状況だ。後方の安全がある程度確保された地域では、南大陸の資本が北の大地開発に参入し始め、南大陸の民間人や現地採用の北の民が、舗装作業や物資の輸送といった業務に汗を流していた。

もちろん、良いことばかりがあるわけではない。

平野に避難していた、ターバの民の全てが新天地を望んでいるということではなかった。だが、ターバへの帰還を望む者は、周囲の雰囲気に押され、ターバに戻りたいとは言えなくなっていた。愛する者が待つ町に戻りたい者と、愛する者が灰となって消えてしまった者では、世間の同情はどちらかといえば後者に集まり、前者には自制が求められる雰囲気が醸成されていった。

ターバに残った人々にしても同様で、苦しい時期を乗り越えたというにも拘わらず、ターバに残りたいと言える雰囲気ではなくなっている。ある者は愛する家族の帰還を心待ちにしているが、ある者は愛する家族が不死者と化し、挙げ句の果てに灰になって消えてしまった町からは、一刻も早く出て行きたい。こちらも後者に同情が集まるのは当然の成り行きで、前者は発言を封じられることが多かった。両者の間には積極的な主導権争いは起こらなかったが、徐々に目に見えない溝は深まっていた。

ターバに進出したプラボックも、パーカホに残ったルムとランケオラータも、目の前に山積する日常の問題に追い立てられ、ターバを巡る人々の心に潜んだ諍いの火種にまだ気付いていなかった。

アービィたちはそのままターバに残り、機を見てシャーラまでの強行偵察を敢行する予定になっている。

シャーラまでは、徒歩であればほぼ十日の行程で、途中にも様々

な規模の集落が点在している。最短のルート上にも五つの集落があり、網の目のように発達した側道に点在するものも含めれば、その数は二十に近い。もちろんシャーラ周辺にもターバ同様に衛星集落が存在し、北の大地中央部では最も人口密度が高い地域の一つだった。

シャーラを確保できれば、その周辺でもそれなりの収穫は見込めるので、最北の蛮族に対する前線を大幅に進められると期待されていた。

北の大地全土を、虱潰しに解放していく必要はない。

中央に位置するシャーラを押さえ、ここをターバ同様聖域化すれば、東西に広がる地域は放置して構わない。どれほどの集落が最北の蛮族に抗がっているかは不明だが、その数は限りなく零に近いと見られていた。もし、こちらに利する者があれば、シャーラ守備に組み込んで、互いを守り合った方が補給を行うより遙かに効率がよい。

父祖の地を離れさせることに抵抗はあるが、感情だけで方が付くほど甘い状況ではなくなっていた。

アービィたちの任務は、ターバ以北シャーラ以南のどの程度が最北の蛮族に押さえられ、どれほどの集落が生き残っているかを偵察することでもあった。

当然、食糧の現地調達は望めないため、ターバとシャーラを結ぶ街道上の集落を結界に収めながら前進し、アービィたちへの補給基地を確保しつつ、偵察を進める計画だ。万が一、協力的な集落が生き残っていたとしても、自分たちが食うのに精一杯なはずで、アービィたちに食糧を提供できるとは考えられなかったからだった。

シャーラ集落群から一日の行程までを確保できれば、あとはターバ解放と同様の手段でシャーラを取り戻せばよい。

ターバと違ってシャーラ集落群には、中央の民は残っていない。最北の民侵攻時に一敗地にまみれたとはいえ、プラボックの指揮の元残存兵力を纏めて見事な撤退戦を演じ、山脈地帯に避難を完了させたのだった。従って、シャーラには合成魔獣と不死者、そして最北の蛮族の生者しか展開していないはずだ。そうであれば、ターバ攻防戦よりは敵兵力は少ないはずだ。また、結界の敷設妨害を、実力で排除することに躊躇う必要もない。

夏までにシャーラを奪回できれば、秋までには僅かとはいえ収穫も期待できる。育成に時間の掛かる麦類は無理としても、ビースマック高地やストラーとラシアスの北部でも栽培されている芋類などの主食となりうるものは収穫可能なはずだ。

シャーラを過ぎればそこから十日ほどの行程で、中央部の南北中心線上の三大集落群の一つであり、中央部最北で最大の集落群ラーニャがある。

ここを過ぎれば、小規模な集落をいくつか経て、最北の蛮族が統べる地へと続いていた。

ラーニャは遙かな昔から最北の蛮族の脅威に晒され続けており、北方の土地の奪い合いと、その合間を縫っての南進を繰り返していた。ラーニャの戦略は、南方の土地を奪取して、最北の蛮族から逃れようとするのではなかった。

最北の蛮族への長年の怨みから、彼らに何一つ良い目を見させてやるものかという想いに凝り固まっていた。

このためかラーニャの民は頑強に最北の蛮族を追い返し続けていたが、プラボック率いるシャーラに対しては積極攻勢に出る力は残されていなかった。

二面作戦で疲弊気味だったラーニャは、最北の蛮族が一昨年に起

こした大規模攻勢に、ひとたまりもなく蹂躙され、多くの民が不死者に転生させられ、最北の蛮族の尖兵と化していた。

それまでは、不死者と生者の戦いは、日中の行動が完全に制限される不死者の方が、交代で夜もかろうじて行動可能な生者に対しては多少なりとも不利だった。そして、幾度かの戦いの中で、不死者は通常の武器では倒すことができないが、火が弱点とラーニャの民は気付く。その優位性があったからこそ、最北の蛮族の多くが不死者と化した後も、ラーニャの民は十年に亘って頑強に抵抗し続けられていた。

だが、その均衡を破ったのが、グレシオフィが大量に作り出した合成魔獣だった。

太古の昔より、キマイラやマンティコア、サイクロプスやギガンテスといった魔獣は知られていた。

それは禁呪に手を染めた魔道師によって作り出されていたが、大量に作るには南大陸にしか生息しない原料となる動物や、人生を捨てることになる人間を確保する必要があり、物理的にも人道的にも無理のあることだった。動物たちを北の大地まで生かしたまま運ぶ困難さや、人でなくなることを納得しない人間をだまくらかすなど、そう簡単に解決できない問題が山積していた。

グレシオフィは、不死者の優位性を活かせば、ラーニャなど一捻りと楽観していたが、その抵抗は予想以上の頑強さだった。

ラーニャを潰すため、合成魔獣の大量生産を思い立ったが、南大陸で活動するには資金が必要ということも知っていた。そのために、ラーニャ近郊ばかりではなく、各地の抵抗の少なそうな小集落を襲い、年頃の女を片っ端から南大陸の人売組織に売り飛ばした。アービィたちと旅したメディが南大陸に売り飛ばされたのは、ちょうど

この時だった。

そうして築いた資金と人脈とを活用し、グレシオフィは南大陸から合成魔獣の材料となる動物や人間を、密かに北の大地へと運び込んでいた。

合成魔獣の生産は、最初の数年は失敗続きだったが、三年目の夏からは徐々にではあるが軌道に乗り始めた。

だが、一度に運べる材料はそれほど多くなく、大規模攻勢に出るためには、まだ数年を要するとグレシオフィかは冷静に分析していた。それからも、各地の集落を襲っては女を南大陸に売り飛ばし、時には自らも南大陸に渡って材料集めや、合成魔獣の効率の良い生産や運用の実験を繰り返していた。

ラシアス第一王女ニムファが、グレシオフィが不死者に転生した直後に偶々火の精霊神殿に詣で、その際に魔王が降臨したとの信託を受けていた。世界を救いたいというニムファの命を受けたドーンレッドが異世界人を召喚したのが、ちょうどこの頃だ。

グレシオフィは、転生呪法に連なる譜系の呪術が発動されたことを、黒山羊の頭を持つ神が背負う魔法陣を通じて知った。そして、それが自らの脅威になると直感し、召喚呪術に干渉して異世界人を召喚の道から弾き飛ばした。消滅させることは適わなかったが、この世に落ちても人としては生きられぬように、合成魔獣の材料集めの際に何度か見ていた人狼に、その魂を封じ込めたのだった。

上手くいけば最北の民に仇成すために召喚した存在が、召喚した者に対して仇成すという、痛快な因果応報が見られるはずだった。

そして、三年前の初秋に充分な数の合成魔獣を生産し、その確実な操縦法を編み出し、満を持してラーニャに襲いかかった。

ラーニャの民は今までにない最北の蛮族の大攻勢に、周辺集落の

協力まで仰いでこれを迎え撃った。しかし、異常なまでの戦闘力を有する合成魔獣が戦列に加わったとき、最北の蛮族とラーニャの均衡は一気に崩れた。

不死者の群れに対し、互角に戦っていたラーニャの民に、合成魔獣が群れを成して襲いかかり、数刻も経たないうちに勝負は決していた。ラーニャの民も死に物狂いで戦い、合成魔獣の半数を倒した。だが、彼らにできた抵抗は、そこまでだった。

その時点で戦いは、最北の蛮族による残敵掃討の段階に移っており、夜明けが近くなった時点で投入された無傷の生者と、手負いとなり却って凶暴性を増した合成魔獣の総攻撃に、ラーニャの組織的な抵抗は潰え去った。

グレシオフィは、オセリファにラーニャの戦後処理を一任し、討ち減らされた合成魔獣の補充のため、何もできない北の大地の冬を逃れて南大陸へと渡っていった。

一気に減らされた合成魔獣の材料集めは、予想より多くの資金が必要だった。ラーニャの女を売り飛ばしただけでは資金に不足を来したため、材料となる動物が多く生息するインダミト南部の村を襲うことで、それを効率よく補うことにした。

配下に収めていた野盗団と、急遽現地で作り出した合成魔獣を率いて村を一つ壊滅させ、その村のカネを奪い、女を売り飛ばした。もう一つ村を襲うつもりだったが、警戒が厳しく百日近くは材料集めと次なる襲撃準備に費やした。インダミトだけではなく、他の三国家にも足を運び、妖術指南や女を売り飛ばすことの見返りに、幾ばくかの資金援助を引き出していた。ビースマックのハラやキリンドリクス、プルケールが転生呪法に興味を示したのは、ちょうどこの頃だった。

そして、それらの資金もいよいよ底を衝き、南大陸南部でも厳冬

期が訪れる頃、グレシオフィは二つ目の村を襲う決断を下した。

深夜、村の表口に立つ警備兵を合成魔獣が殺害し、村の裏口からは野盗団が雪崩込んだが、たった一頭の巨狼がこれを阻止してしまった。

合成魔獣を操るために村の入り口に立ったグレシオフィは、そこで巨狼と対峙した。このとき彼は、凶気に染まりかけた巨狼の双眸に、ラーニャの大軍勢を前にしても感じたことのない恐怖を、生まれて初めて感じていた。本能が告げるままに『移転』でその場を脱し、巨狼への復讐を誓いながら北の大地へと逃げ帰っていった。

一度北の大地で態勢を整えたグレシオフィは、南大陸で魔獣の材料を集めるに当って新たな拠点を築く必要性を痛感していた。ビースマックにはハラたちというシンパが存在していたので、しばらくはそこを拠点に資金集めや魔獣の材料集めに努めていた。レヴァイストル伯爵がアービィたちを護衛にして自領へ戻る際、キマイラの襲撃を受けセラスがさらわれかけたのは、ちょうどこのときだ。

資金や魔獣の材料集めはビースマックに拠点があればそれで済むが、それを北の大地運ぶには地峡を扼するラシアスをどうするかが問題だった。極秘の抜け道を持っていた野盗団は、狼に壊滅させられてしまっている。新たに野盗団を配下にするには手間が掛かる。抜け道を熟知し、官憲の及ばない隠れ家とカネになる人売組織とのコネクションの両方を持ち、且つ騙しやすい集団などそうそう転がっているものではない。

しかし、異世界人を召喚した呪法が、自らの神が操る転生呪法の譜系にあったことをグレシオフィは思い出し、その使用者に手を伸ばしてみることにした。

その時点でドーンレッドは既に行方を晦ませており、召喚に使用した魔法陣の前にニムファの姿を見出すことになる。

アービィに袖にされた後、ニムファは時間があるときは魔法陣の前で己が非力を悔やみ、悲嘆にくれる毎日だった。ドーンレッドが王宮を去って七日の後、ニムファは魔法陣が妖しく鳴動しているとの報告を受け、その前に立っていた。老人の姿が魔法陣の中に浮かび上がり、その柔和な相貌に神の使いと勘違いしたニムファを騙すなど、グレシオフィにとっては造作もないことだった。

召喚の神だと黒山羊の頭を持つ神を偽り、ニムファにマ教の信仰を捨てさせたグレシオフィは、野盗団が地峡の間道を抜けることを黙認させただけに留まらず、南大陸進攻の足掛かりまでできたことを確信していた。

グレシオフィは、ニムファが北の民を討ち鎮め、北の大地を平定しようという野望を抱いていることは承知していた。だが、平野と中央を討たせ、最北の民の前に立ったときに自らの正体を明かせば、そのままニムファが南大陸進攻の尖兵になると、グレシオフィは踏んでいた。それほど勇者を失ったニムファは、グレシオフィに心酔していたのだった。

当然、この時点ではグレシオフィは髪と瞳の色を変えており、ニムファは彼が最北の民だとは知る由もなかった。

その後、南大陸連合軍が北の大地に侵攻した際に、ラシアスが暴走したときにはグレシオフィは肝を冷やしたが、司令官が無能であることはニムファを通じて知っていた。

これをオセリファに誑かさせれば災い転じて福となり、連合軍を同士討ちで葬り去り、中央と平野を席巻した勢いで、南大陸を一気に衝けるとほくそえんだものだった。しかし、ウェンディロフのあまりの無能ぶりは、ラシアス師団を消滅に追い込み、自らの命も散らす結果に終わっていた。

グレシオフィは、武勇だけは優れたウェンディロフを不死者に転生させ、自らの忠実な近衛兵として利用することにしていたのだった。

シャーラを強行偵察しようとしているアービィたちは、プラボックからシャーラやラーニャがどのような運命を辿ったかは知らされていたが、その裏では自分に関ることが静かに進行していたことなど当然知る由もなかった。

「この辺りは、どんな作物を作ってました？
狩りの獲物は？
川や湖では、どんな魚とかが採れてます？
それから、周辺の鉱山とかは？」
ティアがターバの民に、矢継ぎ早に質問している。

事実上ランケオラータからターバの経済発展を、全面的に任されているようなものだ。
主食となる穀物はともかく、それ以外の農作物は他の地域と全く同じでは、小さな経済圏しか作ることができない。平野とは違う特色が必要だった。
本来であれば、ターバ以北の特色を調べ、北の大地全体を見渡して考えなければならないのだが、シャーラ以北の情報がない。さらに最北の地が敵地である以上、確保した地域を優先して考えるしかなかった。

「この辺りは土地が痩せています。
あまりたいしたものは採れてなかったんです」
ターバの民は言葉少なに答える。

実際、大麦と小麦、ライ麦の耕作地はそれなりに多いのだが、野菜はキャベツやカブ、ビートに似たものくらいで、組織だった農業が行われていたわけではなかった。

麦粥やパンが主食で、主な蛋白源は狩猟に頼っている。大きな湖が少ないからか漁業の従事者は多くなく、それほど大きな割合は占めていない。寄生虫による被害が多発し、いつしか廃れていったようだった。

石炭の巨大な鉱脈が発見されており、ほそぼそと露天の採掘が行われていた。

その他には金銀のそれなりの鉱脈が点在するが、シャーラや他の集落群との境界になっている山脈や丘陵地帯に集中しており、開発は進んでいなかった。

「どう思う、ティア？」

プラボックが訊ねた。

「そうですねぇ、農業は神官様たちにお任せするしかないですね。あたしには、ここの気候にどんな作物が適しているかなんて判りませんから。

シャーラの辺りがどうかも神官様に見ていただいてから、どう特色を出すか決めましょうよ。

今は、作れるものをとにかくたくさん作る方向で。

何となく、本当に何となくなんですけど、耕作地の半分くらいは酪農に切り替えちゃった方が良いような気がしますけどね。

何よりも、土地を痩せたままにしておけませんから、下肥とか堆肥をちゃんと作ることです」

特産物があれば、それを使った料理なりをアービィに考えてもらおうとティアは考えていたが、まだそれは望めないようだった。ボ

ルビデュス領やラガロシフォン領のように、元から社会基盤がある程度整備されていたなら、ティアは見聞きしてきたことからいろいろと改善案を出すことはできた。
しかし、全く何もない状態から始めるとなると、経済の専門家ではないティアには、どこから手を付けていいのか判らないというのが正直なところだった。

「あの、いいですか？」
アービィがターバの民に尋ねる。

「確かに大きな湖は少ないようですけど、川は多いですよね。
それも、かなり大きな川が多い。
海まで流れているのが、どれくらいあるかは分かりませんけど。
秋に大きな魚が上がってきたりしませんか？
アービィが念頭に置いているものは、サケマス類だ。
アービィがいた異世界同様、両側回遊をするサケマス類がいるのなら、巨大な市場を形成できる。アービィはターバの西側を走り回っていたときに、腐敗しきっていないサケのような魚の死骸を見かけていた。

「はい、秋にはかなりたくさん上がってきてます。
ただ、味があまり良くないし、当たる者が多くて、あまり採りませんけど」
役にも立たないものをと吐き捨てるような口振りで、ターバの民が答える。

「それ、火を完全に通すか、塩漬けにして干すと当たりませんよ。
塩漬けの干物は味も良くなるし、日持ちも良いですから、今年の秋には騙されたと思って作ってみてください。

それから卵は、旨いですよ。
塩漬けにしても最高です。
あと、完全に凍らせても当たらなくなりますから」
そう言ってからアービィは、板に炭で梁やエリの作り方を描き始めた。
イクラを思い浮かべ、アービィの口からは『醤油』という一言が漏れていた。

「それ、何の絵」
ルティが聞いた。

「魚を捕まえる罠
こんなのは作ったことはありませんか？」
前半はルティに、後半はターバの民に向けてアービイが言った。

「ありませんね。
どうなるんです？」　ターバの民が口々に聞いた。

「これは、魚の習性を逆手に取った罠なんです。
網を持って追い回すより、よっぽど楽ですから。
秋に来る大きな魚もこれで採れますし、春から夏にかけてもいろいろ採れますよ」
アービィが説明していたのは、簗とえりだった。

簗は、川の流れに向かって竹や木材でいかだのようなものを斜めに組み、水は通るが魚はいかだの上に残されるというものだ。えりは、魚の通り道に竹や木を並べて立て、奥にある袋網へと誘導する。どちらも竹や木の組み方に適度な隙間を作っておけば、一定のサイズ以下の魚は素通りするため、資源を根こそぎ採り尽くす心配もな

い。

多くの人々が興味を示し、泥濘の時期が過ぎ去ったら実際にやってみようということになった。

アービィは北の大地の気候風土から、サケマス類は必ずいると踏んでいた。

この他にもザリガニや、モクズガニといった甲殻類や、シシャモやワカサギ、チョウザメのような塑河性魚類、コレゴヌスやパイクのような一次淡水魚も期待できるはずだ。

一足跳びに養殖事業までは無理としても、かなり大きな市場を作ることは可能だと、アービィは考えていた。

塩漬けの干物であれば、真夏以外であればかなりの距離を運ぶことは可能だ。

北の大地を流れる川の水温や気候を考えると、初秋にはサケマス類の遡上が始まるはずだ。そうなれば、冬越しの食糧に余裕が出るし、翌春以降交易の材料にすることができる。魚卵はアービィのいた異世界では、古来地元民のスタミナ食でもあり、現代ではモノによっては同じ重さの宝石同等の経済価値を持っている。保存方法を改良できれば、莫大な利益を挙げることもできそうだった。

アービィは、あまり行ったことのない海の様子が気になっていた。

「最北の地へ、行くことになるのかなぁ？」

仮の宿に戻ったルティが不安げに言った。

産業復興の話し合いが終わった後、アービィたちはラルンクルスと強行偵察作戦の詳細な詰めをしてきていた。

ルティとしては、作戦に不安や不満があるわけではなかった。

レヴァイストル伯爵やプテリスに剣技を習い、日々鍛練を重ねる

うちにそれなりの技と自信は得ていた。何よりもアービィが同行するのであれば、戦力的な不安も、精神的な不満もない。
だが、これまでルティは『人間』を斬った経験がない。

魔獣や不死者であれば、数え切れないほど斬り捨ててきた。
しかし、最北の地へ乗り込むとなると、そこでは最北の蛮族の生者、つまり『人間』と剣を交えなければならないかもしれない。その『人間』が、悪意の塊で邪悪な存在というのであれば、剣を振り下ろすことにルティは躊躇いを感じない。綺麗事だけで生きていられるような、現代日本とは全く違う価値観をこの世界の住人は持っている。
アービィにしてもそれは同じで、召喚される以前の価値観は、その記憶を封じられて育つ間に得たこの世界の価値観に取って代わられている。もちろん、すべてが代わったわけではなく、アービィなりの折り合いを付けていた。

だが、最北の蛮族が生存圏を求める気持ちが、ルティには良く解ってしまった。
南育ちのルティにとって、雪は年に数回しか見ることのない一大イベントでもあった。空から氷が降るなど、それに悩まされていない地域で、且つ仕事をまだ持たない幼子にとっては、非日常の楽しい出来事でしかなかった。
見慣れた風景が白銀に染め上げられたとき、幼いルティの心は躍り上がったものだった。もっとも、ある程度育ってから雪掻きに駆り出されるようになってからというもの、雪に対して怨嗟の感情を持ったことも確かだったが。

雪に対する認識がその程度のルティにとって、北の大地の雪は常識の範囲を超えていた。
これでは凍らない土地を求めたくなるという欲求は当たり前だと、

ルティは思ってしまっている。贅沢のために民を虐げ、領地の拡大を図る貴族には嫌悪感しか抱かないが、生きるために南下しようとしている最北の蛮族と呼ばれる中にいる生者に対して、ルティは殺し合う意義を見出せていなかった。

「行くことになるよ。
僕は、行かなきゃいけない気がする。
呼ばれてるような気がするんだ。
そのときは……」
その後どう続けるか、アービィは言葉を飲み込んでしまった。

一緒に行きたい。
だが、これまで感じたことがない圧迫感が、北から伝わってくる。おそらく、危険度は相当高いと見ていいだろう。ビースマックで、アービィが一度倒されている相手の本拠だ。今度こそ、生きては帰れないかもしれないのだった。そんなところへルティを連れて行っていいのか、アービィには解らなかった。
飲み込んだ続きの言葉は、『一緒に行こう』と『待っていてね』の二つだった。

「あたしは、嫌よ。
夏ならともかく、この調子じゃ最北の地に着くのは冬になりそうじゃない。
凍えながら不死者と斬り合いなんて、ごめんだわ」
溜息をつくようにティアが言った。
しかし、よく見れば、目は笑っている。

実際のところ、ティアにしてみればここまで来たら、どこへでも行ってやろうという気分だった。

そして、最北の地へ行くのは、魔獣だけで良いとも思っている。相手は不死者や合成魔獣。けりは魔獣同士で着け、魔獣が人に害を成すばかりではないことを、ティアは証明したいと考えていた。その後に続く人狼を人間社会に溶け込ませるという目的のためには、最北の不死者を討ち鎮めることが必要だというのがティアの考えだ。

だが、ラミアにとって北の大地の冬は厳しすぎる。

この冬はできる限り外へは出ず、室内に篭っていたが、それでも体調を崩すことが多々あったのだった。幾度かスキーの実験などで外へ出た後は、決まって風邪のような症状が暫く続いていた。ようやく春めいては来ているが、今でも本調子とは思えない。

そのような状態の者が最北の地を衝こうとしても、足手纏いになるのではないかとティアは心配していた。

「だいたい、ここより厳しい環境で、厳冬期にまともな作戦行動など取れるわけがないだろうが。

心配するな。

シャーラかラーニャを落として、そこで冬篭りだ。

蛇は冬眠でもしていろ。」

呆れ顔でバードンが吐き捨てた。

作戦計画では、秋までにラーニャを確保するということになっている。もちろん、それは希望ということでしかなく、相手がいる以上、全てが計画通りにいくとは、誰も思っていない。

現実的には、シャーラを確保して拠点化するのが良いところだろうと、誰もが考えていた。

中央に春が訪れ、雪解けが山から流れ出し、泥濘が大地を覆いつくすのはそう遠くない。

それまでにシャーラを押えられるとは思っていないが、できる範囲の偵察を進めておきたいところだった。一気にシャーラを目指せば、泥濘が大地を覆いつくす前に確保だけはできる。だが、その後、

食料調達の全く当てがない状態で、その地に留まることはどう考えても無理だった。歩くだけでも精一杯で、運が悪ければ泥濘に沈み命すら落としかねない状態で、物資を満載した荷車の運用など考えるまでもなく、補給など望むべくもない。

現状でできることは、偵察と一つでも先の集落を結界に収める程度のことしかなかった。

「失礼しちゃうわね。

冬眠だなんて。

でも、言い得て妙、かな。

雪で動けなければ、冬篭りも冬眠も同じかしらね。

あたしの働きどころは、春からってことでいいかしら」

いずれにせよ、冬の間は軍事行動も、経済活動も極端にその活性を低下させてしまうのだ。秋までに進められるところまで進んだ後は、一度パーカホに戻るのも手かもしれない。

「あら、随分と素直じゃない、ティア。

以前だったら食って掛かってたのに。

どうしちゃったのかしら？」

珍しくバードンの言うことに納得したティアを、ルティがからかう。

「そうかしら？

何から何まで否定するなんて、子供のすることよ、ルティ」

今までアービィとのことをからかい続けてこられた仕返しでもあったが、ティアはどこ吹く風といったように軽くかわしていた。

「ティアは、ここに残っててもいいんだよ。

ターバの産業復興を見られるのは、ティアしかいないんだしさ」

アービィは、ランケオラータがパーカホに戻った理由を聞かされていた。
南大陸からやってくる人々の相手をしなければならないというのが一番の理由だが、ターバ復興はティアが適任と見ていたのだった。

「蛇が経済だと？
おい、狼、冗談も大概にしておけ。
男の精を喰らうしか能のない魔獣だぞ」
バードンが目を剥いた。

「あら、バードンさんはボルビデュス領やラガロシフォン領の経済発展はご存じありませんでしたか？
あれって、かなりの部分かティアの意見なんですよ。
特に税制改革とか。
男の人の精を喰らうってことは、否定できませんけどね」
ルティは笑いながら、バードンに言った。

ボルビデュス領もラガロシフォン領も、関税や通行税の大幅な引き下げで、良質な商品を安く購入できるようになっていた。
領主の収入は、確かに一時的に激減したが、半年も過ぎる頃には租税や売り上げ税、人頭税がそれを補ってあまりあるほどの増収になっていた。良い品を安く購入できるため、周辺の貴族領から人が買い物に流れ込み、そのまま住み着く者すら出始めた。人口が増えれば人頭税も当然増え、労働人口が増えれば租税や売り上げ税が増収になるのは当たり前だ。
口さがない近隣の貴族たちは、レヴァイストル伯爵やセラスが苛烈な税制を敷いていると王宮に讒言もしたが、調査官は僅かな瑕疵すら見出すことはできなかった。

「確かにランケオラータ様やレイ様から伺っておりましたが、まさ

か蛇の言い出したこととは」
　ティアやアービィが助言した事項が効果を現した頃には、バードンは既に北の大地に渡って来ていた。そのため、ボルビデュス領やラガロシフォン領の改革の成果は見ていなかった。

「あなたねぇ、ずっと蛇、蛇ってあたしのこと呼ぶけど、獣化してないときはティアって名前があるんだからね」
　ターバ衛星集落の民が押し寄せたとき、バードンが説教中に『ティア殿』と言い難そうにしていたのが、ティアには面白くて仕方がなかった。

「やかましい、獣化していようがいまいが、貴様は貴様だ。
考え方や信条までが変わるのか？
魔獣が人として扱われたいのか？
ラミアとしての誇りがないのか？
貴様のような奴は、蛇で充分だ。
解ったか、蛇」
怒りを含んだバードンの言葉が、ティアの心を抉った。

「『人狼だって、真っ当に生きていれば認められる世界であって欲しい』
貴様はそう言った。
それは人狼が人狼として認められるということだろう？
ならば、貴様はどうなんだ？
ラミアとして、ラミアが認められたいのではないのか？
『人の姿』であるならば、名で呼べ？
己に誇りを持てない者が、どうして人狼の子に誇りを持たせられると言うんだ？
笑わせるんじゃない」

言葉もなく立ち尽くすティアに、バードンは畳み掛けた。

面白半分にからかおうとしただけなのに、なぜバードンがそこまで怒りを顕わにしたか、ティアは最初の言葉では理解できなかった。

しかし、後に続く言葉で、ティアは己が浅慮を思い知らされていた。決してバードンはティアやアービィの存在まで、否定しているということではなかった。不死者の集落を焼き払った前夜までのバードンであれば、蛇も狼も蔑称としてそう呼んでいた。だが、その夜に聞いたティアの心からの叫びは、バードンの人生観や価値観を大きく揺るがせていた。

人間世界に存在を認められたいと思うなら己に誇りを持てと言いたいがために、それからも改めることなく頑ななまでに蛇、狼と呼び続けているのだった。

もちろん、バードンはむやみに正体を明かせだの、性急に事を運べと言ってはいない。

どちらの魔獣も、人々からは恐れられている。正体を明かすにしてもタイミングを間違えれば、即、迫害や弾圧、排除といった事態を招くであろうことは想像に難くない。最北の蛮族と相対する今、無用な混乱は避けるべきだということくらい、バードンは承知している。

既に信頼を置ける者たちには正体を明かせているならば、慌てることなく徐々に広げていけば良い。二頭が自由気ままに獣化できない世の中で、どうやって人狼の子に誇りを持たせられるというのか。

己の価値観を変えさせてしまった二頭に対しての、バードンにできる最大のエールだった。

ティアは唇をかみしめて、バードンの言葉を反芻していた。

いつの間にか、涙が滲んでいる。それは、悔しさからだとティア

は思っていた。
嬉し涙でもあったと気付いたのは、バードンが自室に戻ってしまった後、暫く経ってからのことだった。

第８４話

雪解けが本格化し始め、川のせせらぎが強い流れへと変わってきた。

アービィたち四人は、ターバとシャーラのほぼ中間に位置する集落ジャーウ進出していた。ここまで二つの集落を偵察してきたが、最北の蛮族の生者が展開している気配はなく、日光を完全に遮ることのできる家屋の中に不死者の影を見ただけだった。合成魔獣はおろか、普通の魔獣や、通常の野生動物が魔獣化したものも見られず、四人は少なからず拍子抜けといったところだった。

ジャーウに入っても状況は変わらず、不死者が巣喰う家屋を急襲し、全てを灰に変えている。

後発の神官を含む結界敷設部隊と補給部隊は、特に妨害を受けることもなく集落に結界を敷き、シャーラへの足掛かりを確実に築いていた。それなりの戦闘を覚悟していた将兵は、あまりの呆気なさに物足りない想いを抱えつつ、街道上の拠点構築に汗を流している。

ターバ解放の武勇伝は連合軍の中に流布されていたが、伝言ゲームのように大げさになりつつあった。若い将兵の中にはこの戦で武功を立て、軍における出世の足掛かりを掴みたいと思う者も少なくない。最北の蛮族を嘲る気持ちから、剣を交えれば鎧袖一触と思い込んでいる者が多かった。

局地戦に勝利を収めた結果だけが独り歩きし、なぜ勝てたのかという戦訓調査は極一部の上層部だけに留まり、下級兵には最北の蛮族への謂われのない嘲りが蔓延し始めていた。同時に早く国許へ帰れるのではないかという根拠のない楽観的な見通しが将兵の間に広まり、連合軍の士気は少しずつ緩み始めていた。

ラルンクルスはその危険な風潮に気付いてから、なんとか将兵の

士気を維持し、危機感を持たせようと腐心している。
祖国ラシアスが疲弊した原因が北の民の南下であり、攻め込んで南下を食い止められるのであれば、過去にこれほどの苦労はしていないはずだ。南大陸に比べ遙かに面積は小さいとはいえ、北の大地の懐は深かった。食料の当てのない北の大地で、大軍が長期間行動できるわけがない。徴発しようにも、山岳地帯の集落は小さく、師団規模の腹を満たすことは無理だった。
そして、無謀な突撃をした結果、アーガス率いる軍勢がなす術もなく北の大地に潰え去ったことは記憶に新しい。

それでも連合軍は今のところ最北の蛮族との直接戦闘では負け知らずで、アーガス軍の壊滅は指揮官の資質によるものと若い将兵は考えていた。ラルンクルスやプラボック、ルムやアービィたちに対する信頼の表れといえば聞こえは良いが、将兵の間に最北の蛮族に対する侮りが広まっているのは好ましくない。この冬に起きた山脈の拠点襲撃の被害は、不幸な偶然の積み重ねと考えているものが多く、結果的に拠点は維持できていたので原因を突き詰めて考える将兵はほとんどいなかった。必要以上に敵を恐れては戦などできはしない。敵を呑んで掛かることも時には効果的だ。だが、不必要な侮りは、思わぬところで足を掬われかねない。
平野に留まり後方部隊の様子を見ていたランケオラータとレイは、連合軍がどこかで大敗を喫するのではないかと気が気ではなかった。

「貴様がいれば食い物には困らんな、狼。
しかし、よく食えるな、そんな物が。
ルティ殿、あまり顔色がよろしくないようですが？」
焚き火で炙ったカリブーの肉にかぶりつきながら、バードンがアービィとルティに声を掛けた。

その横では巨狼が無心にカリブーの腸を貪っていた。鼻面を血で真っ赤に染め上げ、腸を食いちぎり、骨を噛み砕き、咀嚼することなく呑み込んでいく。

ルティは巨狼の摂餌を見るのは初めてで、さすがに顔色が良くない。動物の腸など見慣れたものではあったが、巨狼の食事マナーは決して洗練されたものとは言い難かった。血を舐めとり、骨を噛み砕く耳障りな不協和音は、普通の神経を持つ者の食欲を失わせるには充分だった。

「この、あほ狼っ！
今後はその姿での食事禁止！
見てみなさい、ティアなんか震えちゃってるじゃないの！」
カリブーを平らげ、満ち足りた表情を浮かべた巨狼の側頭部に、ルティの蹴りが食い込んだ。

ティアは血に染め上げられた巨狼の姿に、遺伝子に溶け込んだ恐怖を呼び覚まされたのか、真っ蒼な顔で肉を前に震えている。アービィが襲いかかってくることなどないと解ってはいたが、人狼に対する恐怖はやはり根深いものだった。

「い、いいのよ、ルティ。
アービィも、き、き、気にしないで」
ティアは二人に気遣わないように言ったが、ひきつった笑顔が痛々しい。

ティアはアービィたちと行動をするうちに、人狼に対する恐怖心は克服できたと思っていた。だが、本能を剥き出しにした人狼の姿に、アービィを知る以前の食われかけた記憶と、数多の祖先が食い散らかされた始原の記憶を呼び起こされてしまったのだった。

近くの小川で血を洗い流した巨狼が、申し訳なさそうにお座りする横に、ティアも申し訳なさそうに腰を下ろした。ティアが巨狼に何かを囁き、しょぼくれた巨狼が小さく頷く。そんな二頭を尻目に、バードンとルティは新たに焼き上がった肉の塊に挑んでいた。

「まあ、ルティ殿、そこら辺にしておきましょう。
残りの肉は薫製にでもして、持っていけるようにでもしますか？」
二頭の様子を気にも留めず、バードンは空き家へと入っていった。

家屋の裏に積み上げてあった薪をチップに砕き、鍋に入れて火にかける。
焼き網を鍋に敷き、その上に肉を並べた。もう一つ拾ってきた鍋を蓋として被せ、火加減を見ながらバードンは酒瓶を取り出した。

陽は既に傾き始め、次の集落を目指しても到着するのは夜もかなり遅くなってからになりそうだった。
不死者と無用の戦闘を避けるため、無理してまで夜に集落に入る気はバードンにはない。当然他の三人も同様で、今夜はジャーウで夜を過ごすつもりでいた。ルティは誰も使わなくなった居間の埃を払い、三人が寝る場所を確保し始めている。
その後、火加減を見ているバードンの傍らにルティは腰を下ろし、笑顔でシェラカップを差し出した。

ほどなくして巨狼とティアが民家に入ってきた。バードンが無言でティアにシェラカップを渡し、土間に鍋を置いて酒を満たす。ティアも巨狼も、特に異を唱えることもなく、大人しく呑み始めた。
ティアとバードンの間に、以前以上のギクシャクした雰囲気は見られなかった。

「貴様がいれば、最北の地まで簡単に行けそうだな、狼」
バードンは酔いと共に饒舌になり始めている。

既にターバを発って七日が経過しているが、酔うほどに酒を用意できたのはアービィが荷車を曳いたからだった。
ターバから暫くは、アービィとバードンが二人掛りで曳いていたが、ターバが見えなくなったあたりでアービィが獣化して荷車を曳き始めていた。十日分の食料と酒が積み込まれる予定だったが、主食のみ積んで残りの積載量は全て酒に替えていた。
イーバに滞在していたときに、バードンはこの地に食用になる野草が多く自生していることを見ていた。人が減った今は、野生動物が増えていることも期待できる。不死者に襲われ放棄された畑は、野生動物にとって何よりの贈り物になっていた。その年に草食獣が増え、翌年には肉食獣も増えている。
そして、自生する食用になる野草を採る人々がいなくなった結果、中央は野生動物の天国となっていた。
ターバの西を駆け巡ったアービィは、当面の食料の心配はないと判断し、主食となるパンや小麦粉を多めに積んでターバを出ることにしたのだった。

神官が随行する結界敷設部隊はそうもいかず、補給部隊を随伴しての行軍になっている。　神官が三人と、護衛と敷設作業のために一個小隊が派遣されていた。この三十三人の腹を満たすため、二個小隊が補給部隊として行動している。

ターバから四日の行程にある最初の集落をアービィたちが落とし、その集落とターバの中間地点に宿営地を築いていた。簡単な柵を張り巡らせ、結界でそれを囲んでから頑丈な天幕を張る。いずれは工

兵が進出し、木造や石造りの倉庫や兵舎が設営されるはずだ。将来、最北の蛮族との戦が終われば、ラシアスにあるような駅馬車の駅として活用されることになっていた。

ターバからシャーラまでの街道は、水確保の観点から幾筋かの川に沿って切り開かれていた。ターバの西から流れ出る川は、シャーラをかすめて東に流れを変え、そのまま海へと流れていく。この川を利用すれば物資の輸送は格段に楽になるが、そのための施設を整備する必要があった。雪解けが川を氾濫させ、北の大地を泥濘に沈める時期に、どこまでが危険区域かを見極めてから設置しなければ、無駄に資材と労力を川に流すだけになってしまう。それまでは、荷車を利用した補給に頼らざるを得なかった。

河川を輸送に利用できるようになれば、その輸送料は飛躍的に伸びる。

拠点構築の資材を筏に組み、食糧等の戦略物資を満載して流せばいいからだ。当面は資材の運搬も兼ねるため、遡上することは考える必要はない。もともとターバ以北はなだらかで平坦な地形になっているため、遡河もそれほど苦労はなさそうに見えた。東西に流れる川が多く、それが人々の南北方向の動きを阻害しているが、河川が輸送路になってしまえば、その障壁も取り払われたと同じだった。

河川同士が離れていても、半日も歩けば次の河川に辿り着く。途中大規模な湖やクリークがあれば、物資の輸送路は街道に拘る必要はない。

荷車が五人掛かりで５００ｋｇを運ぶのが限度であることに対し、筏は荷車より大きくする事が可能で１ｔ以上積み込むことができる。さらに一双の筏は、熟練者が操れば二、三人で運用可能だ。いずれ輸送船が建造されれば帆走も可能になり、輸送速度も飛躍的に速く

なるだろう。

帆走でなくとも、満載した荷車を曳くよりは圧倒的に早い。川筋のどこにでも停泊することができるなら、一日の移動距離も集落を無視して考えることができた。

流れの中に停泊できるなら、不死者がそれを越えて攻撃することはできず、生者と魔獣だけに備えれば良いことも、メリットの一つだ。どちらの撃退も容易ではないが、対象が三つと二つではその負担は大きく減らされる。

輸送部隊は、ターバから最初の集落とその中間の宿営地に、実験的に水運を利用して大量の物資を運び込んでいた。

この二つを基点に、一度街道から離れる川がどこを流れているか、それを調査する必要があると、補給部隊の指揮官は考えていた。

彼は、長年インダミト軍に奉職していたが、武芸は他の者に劣ることを自覚していた。

それ故か、華々しい決戦を求めがちな軍にあって、冷静に兵站の重要性を見極めていた希有な存在だった。インダミト師団の司令部は、そんな彼を最前線で剣を振るわせるのは人材の有効活用ではないと判断し、輸送大隊の指揮官に抜擢していた。

各連隊から抽出された大隊構成員は、決戦部隊から干されたと悲嘆を囲っていたが、彼はそんな者たちに親しく声を掛け、大隊の志気を高く保つ努力を怠らなかった。

生来学者肌でもあった彼は、輸送の効率化を研究するとともに、輸送路の開拓にも余念がない。大隊構成員にも中隊レベル、小隊レベルの調査研究課題を与え、各級指揮官には末端の構成員一人一人にまで責任ある調査研究を行わせるように命じていた。

彼は、今回の水運を担当している二個小隊に、近隣の河川の流域調査を命じることを決めていた。

大隊長自らが、小隊レベルに随伴して最前線視察に赴いた理由はそのためだった。

ジャーウを出たアービィたちは、一日行程の次の集落を前にしていた。

一日行程とは、日の出から日没まで移動した距離だ。半日であれば、その半分が目安になる。当然季節や移動手段によってその距離は変動するが、昼夜の比率がほぼ等しいこの時期は、平均的な時間と考えて良い。

アービィが荷車を曳いていたため、純粋に徒歩だけで移動よりは、かなり早く次の集落まで辿り着いていた。

――さて、どうします？　ここと次を偵察すれば、その後はシャーラです。

一旦戻って食糧を補充しなければ、シャーラから戻る途中で飢えることになる。いくらアービィが野生動物を狩るとはいっても、毎日都合良く目の前に現れてくれるわけではない。

「そうだな、ここを落として一度戻るか。さすがに腹が減っては戦はできん。手早く済ませるとしよう」

バードンはそう言って集落内に踏み込んだ。

「そうよねぇ、あんたは良いけどさ、肉しかないと、ちょっとね……」

「まあ、それですぐ死ぬってわけじゃないけどね。お肌には、よろしくないわ」

生鮮野菜が不足していることから、便秘気味になっていたルティとティアが、言葉を濁しながら二人組みで集落内に入っていく。

いくら食用可能な野草が自生しているとはいえ、どこにでも大量にあるということではない。保存の利かない物も多く、食用にするにはかなり手間を要する物も多かった。ここまでは持参したタマネギ等の長期保存が利く生鮮野菜も残っていたが、最初に落とした集落までの帰路は、肉食ばかりになりそうだった。

アービィは、魔獣の襲来を警戒し、集落の周辺を哨戒し始めた。ほどなくして、ティアから制圧完了の念話が届き、アービィは緊張を少しだけ解き、集落に入っていった。

「本当に、大変だったみたいね、この逃げ方は」

荒れ果てた民家に入ったルティが、誰にとはなしに言った。

大きな家財道具は放棄され、当座の物だけ掻き集めて行ったのだろう。

その家財道具も荒らされ、使えそうな物は何も残っていない。古来より戦場と化した集落では、よく見られた略奪の後だった。もちろん、アービィたちは戦を経験したわけではない。物語の中だけでしか知らない知識でしかない。

だが、こうして見ると、戦に負けるということがどれほど悲惨か良く理解できた。

残敵掃討のため何軒かの民家を回るうち、ルティは嫌な気配を感じていた。

陽の光を避けて社に集まっていた不死者は、完全に滅し尽くしたはずだった。窓と扉を破壊して陽の光を呼び込み、不用意に暴れる不死者は、それだけで灰になった。意志を持ち、直射日光を避けつつ襲い掛かる高位の不死者を斬り捨て、灰と化した後には入念に水を撒き、二度と復活できないようにしていた。

だが、怒りと脅えがない交ぜになった、濃厚な殺意を含んだ気配

が、集落の中を支配している。

「嫌な気配だな。
もう一度、社を調べてみよう」
バードンが全員を促し、社へと入っていった。

「これを見落としていたのね」
ティアが地下倉庫と思しき床の跳ね扉を見つけた。

「この中からよ。
物凄い殺気だわ」
ルティが剣を構え、扉の前に立つ。

「正面は、私と狼にお任せいただきましょう。
ルティ殿と蛇は、扉を引き上げていただきます」
バードンがそう言って、巨狼と並んで扉の前を占位した。

アービィとバードンに場所を譲ったルティと、ティアがその扉に手を掛け、一気に引き開ける。
次の瞬間、爆発するかのような勢いで、小さな影が飛び掛ってきた。

「僕の、お父さんと、お母さんを、返せっ！」
小さな影はそう叫ぶと、手近にいたバードンに爪を突き立てようと突進した。

咄嗟にバードンが太刀筋を変え、自らの剣に空を切らせる。
巨狼は、小さな影が吸血不死者特有の蒼白い顔をしていることを見て取り、直射日光から守るように横合いから覆い被さり、そのま

ま押し潰した。
小さな影は、巨狼に爪を、牙を突き立てようとするが、しなやかな毛皮は吸血不死者の攻撃をそよ風のごとく受け流していた。せめて一太刀浴びせようと必死にもがく小さな影は、体力の温存など考えることもしないように叫び続けている。

「どうして、お前たちは僕たちの邪魔ばかりするんだっ！
暖かい土地に住みたいだけなのにっ！
僕たちが住む場所くらい、いくらでもあるじゃないか！
少しだけでもいいのに、どうして、どうして僕たちを追い返すんだっ！？
僕たちは、お前たちを許さない！
絶対にだっ！」

北の民全ての想いが、小さな影の叫びに凝縮されていた。
アービィたちはその気迫に圧倒され、小さな影が巨狼の下で暴れ続けるのを、押し黙ったまま見ているだけだった。

僅かに巨狼がたじろぎ、押さえ込みに隙ができた。
小さな影は巨狼の束縛を逃れ、適わぬまでも最後の抵抗のために立ち上がる。だが、非情にも扉と窓を通して差し込んだ直射日光が、小さな影を照らしてしまった。
灰と化して崩れ去る小さな影は、最後に『お父さん、お母さん』とか細く泣き声を絞り出し、一陣の風に吹き散らされていった。

「あたしたちは、一体、何をしているの！？」
吹き散らされた灰を追うように手を伸ばしたルティが泣き崩れる。

「今の不死者、『お父さん、お母さん』って言ったわ。
あたしたちが滅し去った中に、その二人がいたのかしら」

悄然とした面持ちでティアが言う。

「間違いないだろう。

ルティ殿、仕方のないことでございます。

戦とは、こういうもの。

どちらかが正義で、どちらかが悪ということなどございません。

敵対する者は全て、悪なのです。

何が正しくて、何が間違っているかなど、それぞれが拠って立つ場所によっていくらでも――」

「嫌っ！

嫌よっ！

もう分からない。

あたしには、分からないわっ！」

慰めようとするバードンの言葉を遮り、ルティは叫んでいた。

ルティの心は折れていた。

純粋に生きることのみを求めた子供が、何故吸血不死者になどなったのか。遥かな昔から続く、北の民と南大陸の住人の間で続く争いの犠牲者であることは間違いない。南の地を奪い取ろうとしたこともあっただろうが、北の民が求め続けていたことは移住だった。

やっと両大陸の人間が手を取り合い始めたというのに、何故、これほどまでに憎しみが渦巻いているのか。

何故、最北の民とは手を取り合うことができないのか。

何故、こんな小さな子供まで不死者に転生し、殺し合いに入り込んでいるのか。

どうすれば、両者が和解できるのか。

最北の蛮族を打ち倒す意義は、正義はどこにあるのか。

ルティは分からなくなっていた。

「猊下、一大事にございます」
珍しくオセリファが色を失っている。

「どうしたというのかね？」
それに対しグレシオフィはあくまでも柔和な双眸と、柔らかい物腰を崩していない。

「はい、ピラムの部族が――」
「逃げたのだろう？」
オセリファに皆まで言わせず、グレシオフィが言葉を被せた。

「はい。
監視の目を打ち倒し、白昼堂々と。
集落は蛻の殻にございます」
オセリファは悔しさからか、整った顔立ちを歪めていた。

最北の民は、決して一枚岩ではなかった。
いくつかの部族はグレシオフィに反旗を翻し、長い闘争の歴史を捨てずにいた。もちろん不死者の群れで力攻めに徹すれば、か細い抵抗などひとたまりもないのだが、グレシオフィは敢えて放置していた。気が向いたときに反攻する部族から若い女をかっさらい、喰らうためでもあった。
反攻する部族同士にも相剋があり、連携することなく絶望的な抵抗を続けていたのだった。
敵の敵は味方ということは、部族同士にもグレシオフィにも当てはまり、反攻する部族は別の部族に不幸があれば、それは自らの身代わりとなってくれたとして、救援に赴くなどあり得なかった。
真綿で首を絞められるような状況に、どの部族も隙あらば中央に逃れようとしていたが、監視の目は厳しく、狩りに出る以上のことは阻止されていた。ラーニャをグレシオフィに押さえられていては、

それ以上南に逃亡することも適わなかったのだった。

グレシオフィはターバを落とされてから反攻の機会を窺っていたが、自らにまつろわぬ民を使って一計を案じていた。

ラーニャをわざとがら空きにし、どれかの部族がそれに気付くのを待っていた。ほどなくして、反攻する部族の中では最も優勢なピラムの部族がそれに気付き、与しやすい生者が監視に就く日中に、その囲いを破って逃亡した。

グレシオフィは、監視の生者たちには適度に戦い、頃合いを見て取り逃がすように命じてあった。

ピラムの部族が逃亡したとの知らせは、グレシオフィとオセリファにそれぞれの子飼いの間者から同時に届いた。

オセリファが状況把握に努める間に、グレシオフィは既に退路を断つように間者に命じていた。ラーニャに生者の部隊を展開させ、不死者の灰を持ち込ませた。日中の防備を固めるため、数に余裕のない中から数体のコッカトリスをラーニャに送り込んでいた。

「許せよ、オセリファ。
計画に絡む者が増えれば、それだけ漏れやすくなる。
南の間者が潜り込んでいるようなのでな。
さて、ターバをどう落としたかは覚えておろう？」

グレシオフィにオセリファを出し抜く気など更々ない。
だが、最近周囲を探ろうとする影の気配を感じていたため、敢えて知らせずにいたのだった。

「はい、猊下。
逃亡したと見せかけた生者に灰を運ばせ……
なるほど、ご慧眼、感服いたします」

オセリファは凄艶な笑みを浮かべた。

「さすがに察しが良いな。
奴らを疑心暗鬼に陥れてやろうと、な。
追い払えば敵が増え、取り込めば内部に亀裂が入ろう。
殲滅されるなら、こちらの手間が省ける。
ピラムたちとて最北の民。
むざと皆殺しにはされまい。
少しでも敵の兵力が減るなら、それで良い。
そのうえで、残る反攻を続ける者共に、喧伝してやればよい。
南大陸の者共は、やはり我らを滅ぼす気だ、とな」
グレシオフィは、この程度で戦況をひっくり返せるとは思っていない。
討ち減らされた合成魔獣の補充が済むまでの、時間稼ぎになれば充分と見ていた。間もなく南大陸との、魔法陣を介した連絡路が完成する見通しだった。
そうなれは、暫くはこの地をオセリファに任せ、自分は南大陸へ渡ることにしている。グレシオフィは、魔法陣の連結を心待ちにしていた。

ラシアス女王ニムファは、アルギール城の地下にいた。
南大陸四国家の王城には、万が一落城の危険が迫った場合に備えて、王族の居室から外部へ落ち延びるための極秘の通路か掘られている。特に北の民の脅威に晒され続けたラシアスの王城には、他国には見られないほど緻密なトンネルが造られていた。万が一出口を見つけられ、外部から入られても複雑な迷路になっているうえ、途中には様々なトラップや内部からしか開けられない扉が設置されている。
追っ手を逃れるため、王族は途中の扉の鍵も常時携帯しており、入浴時や就寝時も肌身離さずにいた。

ニムファが自室に籠もり始めてから、百日ほどが過ぎていた。
自室の扉がニムファによって開かれることはなかったが、食事を運ぶ侍女や入浴等の身の回りの世話をする侍女たちからは、ニムファが時折姿を消しているという報告は、現摂政エウステラリットに上げられていた。極秘の通路の存在は、エウステラリットも当然承知している。最初に報告を受けた際に間者を出口に派遣したが、ニムファが脱走したという形跡はなく、数刻後には居室に戻っていることが確認されていた。
エウステラリットは、ニムファが国政に口出ししないのであれば、大概のことは黙認するつもりだった。
亡命でもされて兵を挙げるようなことがなければ、極秘通路の中でなにをしていても放置で構わないと、間者に監視だけ命じている。それでも王族だけが持つ鍵で扉を越えられてしまえば、それぞれは専用の鍵しか持たないためそれ以上の監視はできなかった。

ニムファは自室内にある物をフル活用して、監視の目が届かない避難路内に魔法陣を敷いていた。
北の民を討ち鎮め、王宮内や四国家間での立場を回復するには、起死回生の策に走るしかなかった。ドーンレッドが開発した勇者召喚の呪法の源になった神の使いを呼びだし、それに縋るしかないとニムファは思っていた。

グレシオフィは、ニムファの前に姿を現したとき、髪と瞳の色を変え、北の民であることは隠していた。
そのうえで、魔王を討ち果たすための物資を運ぶという名目で、合成魔獣の材料となる動物が、人売組織の手によって地峡を通ることを黙認させていた。少し考えれば辻褄など合いはしないのだが、

勇者を召喚した魔法陣に降り立ったという事実がニムファの目を完全に曇らせ、正常な思考力を奪っていた。山羊がわざと目立つように運ばれ、食料輸送に見せかけてライオンと大蛇が隠されて地峡を越えている。人売組織への見返りとして、南大陸に戻る際には北の民の女が連れてこられるが、もともと北の民への蔑視が強いラシアスで、それを咎めようとする者は皆無に等しかった。

それ以降、居室に安置した黒山羊の頭を持つ神像が背負う魔法陣を介し、ニムファはグレシオフィと度々連絡を取っている。

彼女は神に縋りたいという気持ちのまま、グレシオフィに自らの窮状を語り、助言と助力を求めていた。グレシオフィがこれを逃すはずもなく、自らが移転するための拠点とするべく、ニムファに魔法陣を敷くように唆していた。いつの間にか、立場を回復させることから、このような境遇に自らを落としたものたちへの復習に目的がすり替わっていたニムファを誑かすなど、グレシオフィにとっては赤子の手を捻るより簡単なことだった。

「お待ちしておりました、お使い様」

ついに完成した魔法陣に降臨したグレシオフィに、ニムファは頭を垂れる。

「大儀であった、女王。
そなたの忠誠、しかと受け取った。
我らが神もお喜びだろう。立つがよい、ニムファよ」

当然のことながら、グレシオフィは髪と瞳の色を変えている。

「まだ、不死の身体への転生はお許しいただけないのでしょうか？」

不安げな表情でニムファは立ち上がった。

両隊陸の覇者になっても、いずれ死んでいくのであればたいした意味を成さない。永遠に両大陸に君臨することを、ニムファは望んでいた。不死者へ転生したいという望みは、言葉巧みにグレシオフィが唆した結果だった。

だが、グレシオフィは申し訳なさそうな表情を作り、ことさら重々しく首を縦に振った。

「そなたの願いは、いつでも叶えられる。

だが――」

「では、何故!?」

グレシオフィの言葉を食いちぎるように、ニムファは叫んだ。

「不死の身体に転生すれば、陽の光に背を向けねばならぬことは存じておろう？

まだ、我らが神はそなたに陽の光の下で成すべきことがあると、そうお望みになっておる。

我が神の忠実な下僕として励み、その成すべきことを成し遂げた暁には、必ず不死の身体へと転生させようぞ」

ゆっくりとした口調で、諭すようにグレシオフィは言う。

「ですが、私の身体は既に老いが始まり――」

「神の言葉が聞けぬと言うか？

案ずるな、今暫くだ。

別命あるまで、今まで通りの生活を続けよ」

まだ二十五歳になったばかりのニムファに、老いなど訪れているはずもない。

確かに十代の頃のような肌の瑞々しさこそ失われ始めていたが、これからはそれを補って余りある成熟した美しさが顕在化する年齢だ。だが、自室に引き篭もり、陽の光を浴びることなく続けた不摂生な生活は、ニムファから美しさを奪い取り、老いさらばえたかの

ような外見に変貌させていた。

「畏まりましてございます、お使い様」

慌ててニムファは平伏した。

グレシオフィにしてみれば、ニムファを不死者に転生させるメリットは大きい。

上手くいけば、王都アルギールを第二のターバと化し、不死者の王宮を築くことすら可能だろう。そうなれば、北の大地に展開している連合軍を挟撃することも、南大陸を攻め下ることも思いのままだ。

だが、グレシオフィはニムファの人となりに不安を抱いている。

まず、抱えている野望が大きすぎる。不死者としての能力をあまり与えすぎては、後々の手綱捌きが面倒になりそうだ。また、暴走癖も捨て鉢になりやすい性格も、グレシオフィとしては戦略に組み入れて計算するには不安が大きいと考えていた。

それ以上に、不死者の能力に目が眩み、転生させた途端に公言してしまいかねなかった。

雪中に潰え去ったラシアス師団の生き残りから、不死者に対する戦い方は近衛師団にも周知されていると見てよい。

確実ではないが、甘い見通しはしないほうが身のためだ。万が一にもニムファが不死者であることを公言でもしようものなら、たちどころに祝福法儀式済みの剣が突き立てられる。ニムファを惜しいとは欠片も思っていないが、南大陸に築いた拠点が惜しかった。

この頭の中身が足りなそうな女王を不死者に転生させるのは、もう暫く飼い慣らし、絶対の忠誠心を植え付けてからでなければ、デメリットのほうが大きいとグレシオフィは判断していた。

「解れば良い。

今暫くの辛抱ぞ。
さすれば、そなたはかつての美貌まで取り戻すことができよう」
それだけ言って、グレシオフィはニムファから合い鍵を受け取ると、アルギール城の地下迷宮を迷うことなく外へと歩を進めていった。

第85話

アービィたちが強行偵察から戻るのを待っていたかのように、雪解けの水は河川を氾濫させ、北の大地を泥濘の海に沈めていた。

通行は著しく阻害され、雪がなくなっていち早く芽を出した野草も呑み込まれ、大地は寒くないだけの冬へと逆戻りした感がある。

だが、山から肥沃な土砂をもたらす洪水がなければ、土地が痩せた北の大地では碌な作物は育たない。利便と引き替えに僅かではあるが豊穣を確約する河川の氾濫は、北の民が待ち焦がれる自然の恵みでもあった。

一年間の農耕の間に、養分を吸い上げられ、固く変貌した大地は、泥濘を被せられることでたいした耕作の労力を要しない、柔らかい土地へと変貌するのだった。

土を残して水が引けば、北の民は一斉に農作業を始める。

今はどの畑に何をどれくらい作付けし、それがどれほどの実りをもたらすかを楽しく想像する時期でもあり、その準備に忙殺される一年でも最も多忙な時期でもあった。

子供の吸血不死者が目の前で灰と化して以来、ルティは鬱ぎ込んでいた。

相手が不死者である以上、滅し去らなければならないことは理屈では理解している。不死者に転生した者は、もう二度と生者には戻れない。斬り捨て、灰にしてやるのがせめてもの情けと分かっている。そして、誰であっても斬り倒す覚悟も、できていたはずだった。

しかし、あのときは吸血不死者がまだ年端もいかない子供であったことや、散り際に漏らした言葉に衝撃を受け、取り乱してしまっていた。

巨狼の背に揺られ泣き続けているうちに、己が弱さを思い知らされ、また泣き続けるという悪循環に陥っていた。

慰めようとしたバードンの『戦に正義も悪もない』という言葉も理解していたが、自分が何に拠って戦うのか、その答えを見失っていた。

吸血不死者と化した子供が叫んだ『おまえたちを許さない、絶対にだ』という言葉が、ルティの心に深く刺さったままだった。何故あの子供が太陽に背を向けてまで自分たちを憎んだのか、ルティはその答えを探し続けている。だが、実のところルティには、その答えは既に解っていた。移住を許さない南大陸の既得権を守ろうとする、ルティを含むそこに住む住人たちの頑なまでの利己的な防衛本能だ。言い換えれば、自分たちだけ良いとこ取りのわがままといって良い。ルティはそれを否定したくて考え続け、そして、さらに鬱ぎ込むという悪循環に陥っていた。

アービィやティア、バードンが心配しているのは良く解る。だからこそ、三人の前では努めて明るく振る舞っている。

しかし、夜ベッドに入ると吸血不死者の言葉が思い出され、思考は堂々巡りにはまってしまうのだった。もし、あの子供が吸血不死者ではなく普通の生者であれば、保護してじっくり話し合うことも可能だったかもしれない。だが、既に灰と化してしまった子供からは、何も聞き出すことはできるはずもなかった。

「当分の間、ルティ殿を前線には出すな。
解っているだろう、狼、蛇。
狼、貴様は側に付いていろ。
暫くは、前線に出るのは俺……と蛇だ。
解ったか、蛇」

ターバに帰還して五日目、バードンの言葉にアービィとティアが無言で頷いた。

「ルティ、ちょっといいかな？」
その夜、アービィはルティの部屋を訪ねた。

「なにかしら？
随分と難しそうな顔しちゃって。
あたしのことなら大丈夫よ。
次の偵察は、いつかしら？」
ルティは平然を装っているが、表情には疲れが滲み出ている。
おそらく、ターバに戻って以来、ほとんどまともに眠れていないのだろう、目の下にはうっすらと隈が浮き上がっている。

「大丈夫じゃないでしょ、その顔じゃ。
当分前線には出ないよ。
もし、必要ならティアとバードンさんが行くって。
今は、ゆっくり休まないと、ね。
僕も、あのときは辛かった。
ルティの家に拾われたときの、僕と同じくらいだったよね。
解ってはいるけど、目の当たりにしちゃうと、やっぱり辛いよ」
アービィは敢えて子供の吸血不死者を話題にした。

「そんな、気を遣わなくても大丈夫よ。
あたしは割り切ってるつもり。
あのときは、あの子の言葉に圧倒されちゃって……
あの子に対する罪悪感がないとは言わないけど、もうあたしたちは……」
ルティなりに、自分の心に決着を付けようとはしている。

実際のところ、ターバ解放の際にどれほどの子供たちを灰にした

か、既にアービィたちの手は汚れていた。もちろん、望まずして不死者に転生させられた者たちと、望んでなった者たちを同一に語ることはできないが、今さらショックを受けて落ち込んでいられるほど、きれいな存在ではなくなっている。

あの子供の吸血不死者だけが、特別な存在なのではない。

今後、最北の蛮族と戦い続けるのであれば、同様のことは何度も起きるだろう。もし、相手が子供だということで憐れみをかけて殺さずにいれば、自分が殺されるか血を吸われて下僕にされるかのどちらかだ。迷って隙を見せれば、その瞬間に人生が終わる。

それが嫌なら相手が子供であろうと斬り捨てるか、北の大地から去るか、二つに一つだ。

もともとアービィも、ルティも、ティアも連合軍に所属している軍人というわけではない。

ランケオラータと個人的に契約を結んだ傭兵に近い状態だ。契約の内容に戦闘行為も含まれているが、軍事、財政、内政等多岐に渡る顧問のようなことが主たる業務と認識されていた。そして、パーティとして契約しているのではなく、あくまで個人同士の契約であるため、仮にルティが戦線離脱するというのであれば、一人だけでインダミトへ帰ることも不可能ではない。また、ランケオラータも契約解除に応じない、ということもないだろう。

もちろんアービィとティアがルティ一人を帰すはずがないから、三人同時に契約解除ということになるのだろうが。

バードンに至っては、既にこの地に留まる義務すらない。

スキルウェテリー卿からの命令は、ランケオラータをアービィたちが確保した瞬間を以て終了している。その後は彼本来の任務である人狼狩りのために、北の大地に留まっていただけだ。その対象と共闘している今は、その事実は隠してベルテロイに対して苦しい言い訳を続けている。俸給を受け取る身としては、何から何まで好き

放題というわけにはいかないからだ。
聖職者として、他人の不幸を見過ごせないという義務感が、彼をこの地に留まらせていた。

「そうだよね、ターバ解放のときには大人も子供も、不死者にされていた人たち全部、灰にさせちゃったんだよね、僕たち」
アービィはルティ一人を苦しませたくなかった。
既に大量殺戮者になってしまった以上、共に苦しみ、共に罪を背負い、ルティの負担を少しでも分かち合って減らしたい。それがアービィの想いだ。

「そうなの。　あの子一人に対して罪の意識を感じていたら、ターバの灰にされた人たちに申し訳ないわ。
でも、あの子が何で吸血不死者に転生することを選んだのか、何でそこまであたしたちを憎むのか、判っちゃったのよ」
自分を含めた南大陸の住人のエゴ。
認め難いが、それを認識しなければ、何も解決できない。ルティはそう結論していた。

南北連合は、今でも最北の蛮族との和平を望んでいる。もともと外交チャンネルが存在しないため、現状では交渉などできる状態ではない。
ターバを解放した際の捕虜に尋問はしていたが、詳細な組織や体制は不明のままだった。そのため、前線で最北の蛮族と対峙する状況になったなら、交渉のテーブルに付くように呼びかけたいと考えている。捕虜を解放して使者を随行させる手も考えられたが、捕虜から戻れば問答無用で殺されると峻拒にあっていた。
今のところは手詰まりだが、両大陸融和の上での大経済圏確立と

いう大戦略は変更する気はない。
対話の機会を作るために戦線を北上させているが、その糸口を掴むことは難しそうに思われている。

国家や民族の主張を代表した者が、舌先三寸で雌雄を決することが外交という戦いであるならば、国家や民族の力を代表した者が、その力をぶつけ合って雌雄を決することが戦争だ。
だが、そのどちらも保有しない最北の蛮族との戦いは、外交官同士が鎬を削り合う交渉や、軍隊同士で雌雄を決する会戦など望むべくもない。今後、最北の蛮族と全面戦争になったとして、南北連合は大人の『兵士』が前線に出るが、数に劣る北の民は、それこそ総力戦だ。この場合の総力戦とは、後方支援に子供まで駆り出すという意味ではなく、前線に子供までが不死者となって出てくることを意味している。軍隊という概念がない北の民が取り得る戦術は、いきおいゲリラ戦が主流になるが、そうなると正規の軍隊は脆い。
ゲリラはどこにでもいるし、どこにもいないからだ。姿を見せない相手とは、軍隊は戦えない。
正々堂々たる戦こそ武人の本懐と、骨の髄まで叩き込まれた南大陸の職業軍人が、そのような相手とまともに闘えるはずもなかった。
ましてや相手に子供が含まれるともなれば、どこで足を掬われるか判らない。疑心暗鬼は無用の緊張を生み、守る相手にすら攻撃を仕掛けるという失態を犯しかねない。
北の大地の制圧は、一見順調に見えているが大きな困難の壁にぶち当たっていた。

「そうだよね。
僕たちを含めて、南大陸の住人にしてみれば、北の民たちが大挙して移住してきたら、今まで手にできていた物が減るって思ってるんだよね。
だから、自分たちの取り分を減らされないように、地峡を閉じて

追い返してきた。
千年以上前から、ね。
すぐそこでは多少飢えても家の中で凍死することがない世界があるのに、どうしても入れない。
その怨みは深いよね」
異世界でも同じことを見ていたアービィは、南大陸の住人という立場から一歩退いて見ることができていた。

だからといって、性急な地峡開放ができるかといえば、それは無理だろう。
南北連合を形成している北の民が、南大陸へ移住したいと願いを不要としたわけではない。父祖の地に強い愛着を抱く者は少なくないが、多くの民は雪に閉ざされることのない南の地への憧れを捨て去っていない。北の民が北の大地を捨て、大挙して南大陸へ押し寄せたら未曾有の混乱が巻き起こり、各地でより良い住み場所を巡って紛争が勃発するだろう。
北の民と南大陸の住人の間だけでなく、北の民同士でも足を引っ張り合い、四百五十年に及んだ南大陸の平和は終わりを告げ、新たな戦乱の時代になることは、誰の目にも明らかだった。

それが見えていたからこそ、ルムやプラボックが北の大地を富ませると宣言し、南大陸が身銭を切ってインフラ整備に乗り出した。
ここまで事は順調に運んできたため、多くの民はルムとプラボックの言葉に賭けてみようと腹を決めた。もし、北の大地開発事業が頓挫したり、人々が思い描く生活を実現できなければ、移住への渇望は再び甦るだろう。
ランケオラータが北の民の生活改善に熱心に取り組むことも、南大陸四国家が全面的に支援するのも、北の民に北の大地での生活で満足させるために他ならない。

ほとんどの者は、南大陸の住人が既得権を手放さないための方策と見抜いている。
だが、移住した先で迫害が待っているかもしれないのなら、ここでの暮らしを良くすることに賭けてみようとなっただけだ。ランケオラータの善意から始まった部分もあり、インダミトの北の大地を市場化するという国家戦略に乗せられた部分もあったが、南大陸の住人と北の民の思惑は概ね順調に推移していた。

「ルムさんとも、プラボックさんとも解り合えたのに、どうして最北の蛮族って呼ばれてる人たちとはダメなのかな？」
ルティが言った。

「多分、最北の蛮族って呼ばれる人たちは、北の大地でも虐げられてきた怨みが深いんだよ。
長い間積もりに積もった怨みが、とうとう爆発したんだ。
あの子の言葉は、そういうことなんだと、僕は思う。
じゃあ、南大陸に住む場所を分けてあげられるか。
それも今は無理だよね。
彼らだけってことになれば、他の北の民が黙っちゃいない。
両大陸全部が戦乱の渦に巻き込まれちゃう。
今は、それぞれの場所を豊かにすることが、何よりも大事だと僕は思ってるよ」
アービィは、それはエゴだと自覚している。そして夢物語であることも。

居住地の条件が平等でない以上、より良い場所を求めるのは生物として当然の欲求だ。それを止める権利は誰にもない。いくら最北の地を富ませようと、雪に閉ざされる時期が長いというだけで、そ

こに住む人々は凍えない土地を目指すことを諦めない。いくらインフラ整備を優先しようと、それは目先の解決でしかなく、根本的な不満解消にはならない。

戦乱の芽は、摘み切ることはできないのだった。

アービィが住んでいた世界でも同様で、東西冷戦は不凍港を求めるロシアの遙か昔からの欲求がもたらした結果だ。

共産主義と資本主義のイデオロギー闘争など、最後に付け足されたおまけでしかない。共産主義では食えないことが解った途端、どっぷりと特権に浸かっていた指導層までが、あっさりと宗旨替えしたことがそれを証明していた。

結局のところ、これも住みやすい場所を巡る争いだった。

そんな歴史を見てきてしまったアービィには、南大陸が掲げる南北融和は夢物語にしか見えない。

だが、それがならなければ、子供まで不死者として送り込んでくる最北の蛮族との戦は、絶滅戦争に発展してしまう。それだけはなんとしても食い止めたい。

それが、人狼として狩られるはずだった自分を生かしてくれたこの世界に対する恩返しだと、アービィは認識していた。

「とにかくさ、次の偵察も何も、今は大地は泥の海だよ。しばらくは何もできないから、ゆっくり休もうよ。僕も、ちょっと疲れた」

辛い思いを抱えているのは、ルティ一人だけじゃないよ、とアービィは言いたかった。

だが、それは聞き様によっては、一人で悲劇のヒロインぶっているんじゃない、と言わんばかりの酷い言い様にも取れてしまう。

言葉を選びながら、アービィは言った。

「うん、分かってるんだ。
あたしだけが辛いんじゃないって。
あんたも、ティアも、バードンさんも。
今は、ターバの残された人たちが一番辛いんじゃないかって思う。
あたしだけ、浸ってなんかいられないよね」
ルティが答えるが、会話が噛み合わない。
お互いに言いたいことは一緒だったが、気遣うあまり言葉はすれ違いになっている。
なんとか気遣わせずにしようとして、足掻いているルティが痛々しかった。

「そう、そうだよ。
でも、今は休むときだ、ルティ。
休むことも大事だよ。
僕がビースマックで倒れたときもそうだった。
気持ちは焦るんだ。
しっかりしなきゃいけないって。
でもね、あのとき休んでよかったと思う。
じゃなきゃ、今ここに来ていなかったかもしれないよ。
あのとき休めって言ったのはルティだよ。
だから、ルティも、今は何も考えずに。
いや、ゆっくり考えると良い。
急いで答えを出そうとなんかしなくて良いんだよ」
アービィは、なんとかしてルティを落ち着かせたかった。
確かに見た目は穏やかに話しているし、行動が粗暴になっているわけではない。しかし、内心の焦りが透けて見え、視線がどこかしら泳いでいるように見えている。

「何をぐちゃぐちゃ言ってるんだ、狼。
ルティ殿も、無理をなさってはいけません。
あなた一人が悩むことではございません。
ここにいる者全ての問題でございます。
皆で知恵を出し合えば、完璧とは申しませんが、何らかの回答が見つかるはず。
煮詰まると、碌な考えなど浮かばないものでございます。
いかがです、憂さを晴らすのも大事なことかと。
狼、何か作ってこい」
バードンが酒瓶を抱えて入ってきた。

続いてティアが、つまみになりそうな干し肉や、木の実を抱えて入ってくる。
その時点でバードンは、テーブルに酒瓶とグラスを並べ終えていた。アービィは黙ってルティの手を引いてテーブルに付く。バードンの手で酒瓶の封が切られ、荒々しくグラスに注がれた。
ルティを囲む三人は、無理矢理明るい話題に終始した。
アービィはターバの西を駆けたとき見た自然の豊饒を熱っぽく話し、ティアは相変わらずバードンをからかい、バードンはいつもどおり魔獣二頭に絡み、ルティの笑顔を誘っていた。

難しい問題が山積し、一つ一つの解決は困難だが、それでも見通しが明るいことも多かった。
地峡からパーカホまではほとんど舗装が完成し、泥濘の時期にも拘らずある程度の物資輸送が可能になっている。その舗装事業は、南大陸の豪商たちによる将来の市場参入を睨んだ資本投下だった。
徐々に貨幣経済が北の大地にも浸透し始め、南大陸の商品が流れ込んでいる。
少なくとも平野から山脈地帯にかけては、人々の暮らしは便利に

なっていくはずだ。
北の民も積極的に働き始め、貨幣を手にすることで少しずつ意識が変わり始めている。
言い方は悪いが、カネさえあればいくらでも便利なものが手に入り、わざわざ南大陸へ行かなくても済むと思わせるようになっていた。依然冬や雪への心配は絶えないが、それでも北の大地は暮らしやすくなってきつつあった。

しかし、いつまでも南大陸の持ち出しでは、財政が破綻してしまう。
北の大地に貨幣経済が浸透したら、ランケオラータは税制を整備しなければと考えている。今のところ、租税も、人頭税も、売上税も北の民からは取っていない。南大陸からの商品にも、ほとんど関税は掛けていない。ラシアスを通過する際の関税や、諸々の通行に係る税、商人たちの経費を考えると、北の大地に入る時点で関税を普通に掛けてしまうと、とてもではないが庶民が購入できる額ではなくなる。

事実上ランケオラータが購入して、利益をほとんど乗せることなく北の民に販売している状態だ。
いくらカトスタイラス領やアンガルーシー領からの収入があるとはいえ、このままでは息切れする日もそう遠くない。インダミトからの物資は国からの寄付同然とはいえ、商人の生活を破綻させるわけにはいかないので、利益も出させなければならなかった。

いかにランケオラータが有能とはいっても、一人で全てを見きれるはずもない。
レイが補佐に付いているとはいっても、如何せん経験不足だ。ラ

ガロシフォン領の経営も、本家ボルビデュス領から有能なスタッフが送り込まれていたうえ、いざとなれば本家が尻拭いするという安心感も当てになった。

内政であればルムにある程度任せることもできるが、カネ勘定となると北の民はまだ育っているとはいい難かった。

そこで大きな力になったのが、ビースマックとストラーの政変で故国を追われた人々と、ラシアスから送り込まれた元財務卿だ。

特に自ら望んで北の大地に渡ったビースマックの重鎮、ブレフェリー元公爵と、元ラシアス財務卿の力が大きい。

政争に疲れ果て、環境の激変に辟易している他の元貴族たちも、少しでも暮らしを良くしたいがために、積極的にカネを北の大地にばらまいていた。今のところ北の民が商売を興すことはないが、南大陸の商人に使われながら、その準備を始めた者も多いと聞く。

レイは、山岳や平野、山脈の活況を、最北の蛮族と呼ばれる人々にも見て欲しい、そう願っている。

軍事の機密を見せられないことは理解しているが、経済に機密は今の時点ではない。

それどころか、積極的に視察して取り込んで欲しいくらいだ。手を結べずとも、経済が発展すれば、互いに交易で利を挙げることは可能だ。

現状で妥協点が見つけられずとも、利益の方向が同じになれば、競争と協同が自然と発生するとレイは考えている。

指導者が考えるより庶民は強かだ。

上層部同士がいがみ合い、軍同士の衝突の裏では、密かに交易ルートが維持されていたなど、戦乱の時代では珍しくもないことだった。南大陸の住人にできて、北の民にできない道理はない。レイはそう信じていた。

ルティが捕虜との面会に行くと言い出したのは、四人が飲み明かして二日酔いに悩まされた翌日のことだった。

一晩大人しくしていたせいで、酒の臭いはすっかり消え去っている。ルティにとっては、二日酔いの気分の悪さで余計なことを考えず、ひたすら眠り込んでいたため普段の寝不足が図らずも回復するという、皮肉なような、ありがたいような結果になっていた。

捕虜たちの収容所は、兵舎に隣接して設けられた仮設の小屋だった。

当初は集落の中心近くにある社に監禁していたが、守備隊の進出に伴って移送されていた。不穏な動きを監視できるように、兵舎に準じた造りになっている収容所には、密閉される空間がない。それは厠も同じことで、兵舎においては陰湿な虐めや自殺防止の観点から、簡単な仕切りのみの開放空間でしかなかった。さすがに男女の収容所は別々に造り、女性用は女性士官が監視に付いているが、そこにはプライバシーなどというものは一切存在しない。

それでも、最北の地では望めないほどの食料が支給されているためか、捕虜たちから扱いについての不満はほとんど出ていない。もちろん、南大陸に恭順を誓ったわけではないので、尋問等に協力的ということはなかった。

食料と命を握られている弱みから、積極的に反抗はしなかったが、紙一重の険悪さをはらんだ緊張感に収容所は包まれていた。

ルティがやってきたのは、その女性用の収容所だった。

朝からアービィの尻を叩いて焼かせた、カステラとプリンを人数分持ってきている。

もちろん、これで協力的になるとは思ってないが、会話の潤滑油程度にはなるだろうと考えてのことだ。

「私たちに、どんなご用かしら？」

四十がらみの女が、胡散臭そうな目でルティを見た。

「突然でごめんなさい。

あたしは軍に所属してないから、どうぞお気楽に。

お近付きの印ってほどじゃありませんけど、これでも食べながらお話しませんか？」

態度が固いのは承知の上だったので、ルティはあくまでも丁寧な態度を崩さなかった。

「そんな何が入ってるか判らないもの、食べられるわけないでしょ。

軍じゃなければ何よ？

私らから何を聞き出したいの？」

ルティが尋問官でないことくらい見れば判ったが、これまでの尋問の際には茶の一杯がいいところで、菓子など出されたことはない。

それがいきなり見たこともないような菓子を出されれば、警戒するなという方が無理だった。

「じゃあ、あたしが一つ食べますから、それで何ともなければいかがです？

そちらがどれにするか選んでください。

南大陸は、北の民と交易を通して平和的な共存を望んでいます。

今までは追い返すことに必死だったけど、そんな不毛な時代は終わりにしよう。

それが南大陸四国家の意志です」

ルティは選ばれたプリンを躊躇う素振りも見せず平らげた。

「ふぅん、それじゃ、いつでも暖かい土地に行って良いってことね？」

完全に疑いを払拭できてはいないが、甘い香りに鼻腔をくすぐられ、最北の民の女は戸惑いの表情になっている。

「残念ですが、誰でも、いつでも、というわけにはいきません。南大陸に、両大陸全ての人々を養う力も場所も、まだありません」

いきなりの地峡完全開放が、どのような混乱を両大陸にもたらすか、思い付くままにルティは正直に話した。

地峡に殺到するであろう、北の民同士の足の引っ張り合い。

それを抜け出した北の民と、南大陸の先住者との土地の奪い合い。

それに伴って必然的に発生するであろう、敗者という流民。

不足することが確実な、食糧を巡っての争い。

南大陸にその時点で存在する、全ての民を巻き込んでの土地の奪い合い。

新たな秩序の構築には避けては通れない混乱の、許容範囲を遙かに越えた混乱。

そして無人となり荒廃しきった北の大地に追いやられる、新たな階層の人々。

人々がシャッフルされるだけで、何ら今と変わることのない南北両大陸の関係。

「いかがでしょうか、性急な移民開放は危険だと、お分かりいただけたでしょうか。

もちろん、争いさえ起きなければ良いんですが、さっきも言ったとおり、南大陸にそこまでの力はありませんし、北の大地が荒廃しきってしまいます。

ですので、あたしたちは北の大地を豊饒の地に変えるために来たんです」

ふと見ると、持ってきたプリンは既に消え、カステラもルティの分を残してなくなっていた。

「お嬢ちゃんが正直に話してるのは分かったわ。で、私に何を望むの？

言っておくけど、私も最北の民。

おいそれと、仲間を売るようなマネはしないわ」

初対面の時よりは、幾分か口のききようが柔らかくなったとはいえ、敵意を捨てたとは到底思えない言葉が返ってくる。

「あたしは、あなた方とお話がしたい。

ただ、それだけです。

あなた方が何を思い、何を望むか、それが知りたい。

なんであたしたちを絶対許さないのか、それが知りたいだけです。

また、来ます。

次はどんなお菓子が良いですか？」

そう言ってルティは相手の返答を待った。

しかし、誰からも言葉が返されることはなく、時間だけが流れていく。

やがて、ルティは立ち上がり、寂しそうな笑顔でもう一度、また来ます、と言って収容所を出て行った。

「どうだった、ルティ？」

収容所の外には、心配そうな表情を浮かべたアービィとティアが待っていた。

「口はきいてくれたわ。
でも、まだまだおしゃべりなんか、できる雰囲気じゃないの。
あたし、しばらく通ってみることにする」
その日から、ルティは何かしらの差し入れを持って、捕虜収容所に通い始めた。

ターバの集落は静けさの中に、今にも爆発しそうな殺気と緊張を含んでいた。
泥濘が水気を失い、大地が元の姿を取り戻してから十日も過ぎた頃、蹌踉うような一団がターバに辿り着いた。言うまでもなく、最北の地を脱したピラムの部族だ。
もちろんターバの民は過去の失敗を繰り返す気はなく、連合軍も過去の戦訓を無駄にすることはなかった。

到着するなり投降してきたピラムの部族も、ターバを襲った悲劇については聞き及んでいた。
下手をすれば到着するなり、虐殺される可能性もあったのだ。それでもターバに投降することに躊躇いを持たなかったのは、ピラムの部族がそこまで追いつめられていたからだ。最北の地に残れば全員が不死者へ転生か、不死者の餌。戻れば他の抵抗している部族への、見せしめとして皆殺し。進めば怒りに狂うターバの民に皆殺しにされるかもしれないが、そうではない可能性も皆無ではない。
部族を率いる指導者は、低いながらも残された可能性に賭けたのだった。

連合軍司令部は、結界内で不死者が実体化し得ないことで、集落へ彼らを入れる決断を下した。
もちろん、厳重なボディチェックや、持ち物検査を実施のうえで

だ。ピラムの女性に対しては同じく女性のターバの民や司令部付き士官が、ボディチェックを行っている。敵意を剥き出しにするターバの女性を宥めつつ、連合軍の女性士官は入念にボディチェックを実施した。その間ターバの女性はいかなる不審物も逃すまいと、目を皿のようにして脱がされた衣服を検査し、女性士官に見落としがないか、背後からつり上がった目を光らせていた。

男性に関しては検査をする側に余裕があったためか、それほど日数は掛からず終わりそうだ。だが、女性士官はもともと数が少なく、こちらはそう簡単に終わりそうもない。

検査を終えた者とまだの者は、別々の宿舎があてがわれ、互いの連絡は絶っている。

どのような検査が行われているか、それが漏れたらかい潜る方法を考えられてしまうからだ。当然外出も制限され、宿舎の敷地から出ることは適わなかった。宿舎内にも監視の目は光り、厠の扉すら取り払われ、完全なプライバシーを保てる空間など、どこにも存在しなかった。

ピラムの民から不満の声が漏れ始めるが、ターバを落とされた経験から監視の目が緩められることはなかった。

ラルンクルスが、検査済みのピラムの民が集められている宿舎に、僅かな供回りだけを連れて赴いたのは、検査が始められて三日目のことだった。

現場担当の将校からピラムの民から不満が上がっていること聞き、ラルンクルスは直接説明をするために足を運ぶことにした。必要な措置であることを諭すには、現場の将校では若過ぎ、どうしても高圧的な態度になってしまう。ボディチェックや荷物検査程度で、幕僚を毎日派遣するとなれば他の軍務が滞りかねない。いずれ幕僚たちには、尋問等の重要度が高い仕事を指揮させなければならず、そ

れまでは手元の仕事を前倒しで片付けてもらう必要があった。
総司令官自らが出ていくことで、鼎の軽重を問われかねない判断だが、この場合現場の不満を解消するには有効だろうとラルンクルスは決定を下したのだった。

「この場における、最高責任者はどのお方かな？」
あくまでも、物腰柔らかく訊ねるラルンクルスに対し、一人の男が挙手しながら答えた。
「ここにいる中では私だが、族長はまだあなた方による身体検査を終えていない。
私に決定権などないが、それでもよろしいか？」

「心配なさるな。
小官はあなたが責任を問われるような、交渉をしに来たわけではない。
それに、族長殿があちらの宿舎におられるなら、この後伺うことにする。
あなた方の扱いに不満があると聞いて、その辺りについて説明させてもらおうと、それで来たわけだ。
申し遅れたが、私はクレナルト・ラルンクルス。
北の大地における連合軍の行動全てに責任を持つ者だ。
以後、よろしくお見知り置き願いたい」
ラルンクルスは苦笑いして答えた。

男は思わず息を飲んだ。
とんでもない大物だ。決してこのような場に来て良い立場の者ではない。交渉ではないとすれば何が目的か、男には想像が付かなかった。

「そう固くなられることはない。

小官は、あなた方にお願いに来ただけです」
男が身構えた気配を察し、ラルンクルスは警戒心を持たせないように言葉を選び始めた。
「お願いと仰られましても、私には何かをお話する権限はありません。
もし、いろいろとお訊ねになりたい件がありましたら、それは族長に直接お訊ねいただきたい」
警戒するなと言われても、それは無理な相談だった。
軍属の動向はともかく、ターバの民から向けられる視線の刺々しさは尋常ではない。集落内に適性勢力を抱えておくべきではないということは、男にも充分理解できる。軍がターバの民の圧力に屈し、ピラムの民を皆殺しにきたのではないかと疑っていた。
「いやいや、そうではない。
ここでのあなた方の扱いに、ご理解をいただきたいということでしてな。
ご存じの通り、このターバは避難民を装ったあなた方の同胞が持ち込んだ不死者の群れによって、一度は落とされた集落です。
我ら南大陸の住人はともかく、ターバの生き残りの方々は、最北の地に住まう人々を共に天を戴かざる敵と見ております。
あなた方を全て疑って掛かるのも、そのような経緯に拠るもの。
信じたくとも、信じられぬというのが本心です。
少なくとも、あなた方に敵意がないことと、不死者の灰などが持ち込まれていないことが分かるまでは、自由に集落内を歩き回られては、あなた方の安全を保障できません。
厠の扉も同じこと。
納得いかないことも多いと思うが、今暫くの辛抱と理解をお願いしたい」
ラルンクルスは要点を掻い摘んで説明した。

「仰りたいことは分かります。
ですが、総司令官が仰ることは、ここに配属されている将官のどなたかに、伝えさせれば済む内容です。
何故、わざわざ足をお運びに？」
人質に取られる危険を冒してまで、その程度のことを言うだけのために来るなど、総司令官たる重責を担う者がやって良い振る舞いではない。

「あなたの疑問はよく分かります
誠意、というところでしょうか。
いずれ、あなたを含め皆さんに、いろいろとお訊ねしなければならないときは来るでしょう。
ですが、小官は、それはあなた方がある程度の自由を、保障されたときであって欲しいと考えています。
捕虜尋問などではなく、聞き取り調査というかたちで実現させたいものですな。
できれば、酒など交えての。
それでは、小官はこれにて。
できる限りの便宜は図りますので、残していく副官にご相談いただきたい。
彼からあなた方には尋問などしないことは、小官の名誉と責任においてお約束しましょう」
信じられないという表情の男を残し、ラルンクルスは席を立ち、宿舎を出てもう一つの宿舎へと歩いていった。

密談していたわけではないので、他の民の耳にもラルンクルスの言葉は届いている。
総司令官自ら頭を下げられては、庇護を願う立場としては不満をぶちまけてなどいられない。ターバの民の心情は理解できるだけに、

この措置が間違いではないことも充分過ぎるほど分かっている。
男は民の不満を宥める役を、上手く押しつけられてしまったことを自覚していた。

「あら、ラルンクルス様、こんなところでお珍しい。
どちらへ、いらっしゃるのですか？」
検査を終了したピラムの民を収容している仮宿舎から、族長がいる仮宿舎へと移動しているラルンクルスに、大きな包みを抱えたルティが声を掛けた。

「おや、ルティ殿こそ。
今日は、アービィ殿やティア殿はご一緒ではないのですか？
小官は、今からピラムの族長に話がありましてな。
どうも、いろいろな検査に時間が掛かって、彼らの不満が溜まっている様子。
かと言って、いきなりターバの街中を歩かせるというのも危険でして。
最北の蛮族に怨みを抱いている民が多いですからな、この集落は。
その辺りを納得いただかないと、何が起きるか解りませぬ故」
突然声を掛けられ、考え事に沈んでいたラルンクルスは驚いて答えた。

「ええ、二人は家でいろいろと。
総司令官様もいろいろと大変ですね。
でも、それはどなたか幕僚の方に行っていただければよろしいのでは？」
小首を傾げてルティが聞いた。

「それは、そうなんですが。

やはり、誠意と申しましょうか。
総責任者が出向いてこそ、納得いただけることもあるかと。
誰か幕僚が行っても用事自体は済むでしょう。
ですが、一方的な申し渡しよりは、小官が出向くことで少しでも理解をしていただければよいかと思っております。
大きな声では申せませんが、彼らのもつ情報の価値は莫大なものです。
尋問などで聞き出すより、酒盛りの席などで胸襟を開いて話していただく方が、よほどよろしいかと」
ラルンクルスはピラムの男に話したことを、もう一度ルティに説明した。

「あたしと同じことを、お考えになっていらっしゃったのですか。
あたしは、捕虜になっている女性の宿舎へ行くところです。
以前、最北の民の子供、不死者に転生していましたが、その子に『お前たちを許さない、絶対に』って言われたんです。
どうしてなんでしょう。
あたしは、それが知りたい。
だいたいは解っているつもりですが、彼女たちからその理由を話して欲しい。
それで、少しでもお近付きになりたくて、アービィとティアにこんなもの作ってもらっていたんです」
ルティは、多めに作ってあった水羊羹を一つ、お試しくださいと言いながらラルンクルスに渡した。

ラルンクルスは受け取った水羊羹をしげしげと眺め、徐に口に入れ、そして目を輝かせた。
さっぱりとした甘さと、濃厚な豆の味が口の中に広がった。彼が今まで食べたことのある菓子といえば、下品なまでに甘みを聞かせすぎたケーキやクッキーなどだった。甘いものは贅沢品であり、甘

さをとことんまで追及したものが騎士や貴族階級では喜ばれる傾向があった。もちろん、味が良いという評価ではなく、高価な砂糖をふんだんに使っているというところに、ステータスを感じているのだった。

「ルティ殿、これの余分はございますか？
是非、仮宿舎に押し込められているピラムの民の皆に振舞ってやりたい。
もしも、可能であるならば、ターバの民にも行き渡るように。
作り方を教えていただければ、軍の給糧班に命じて作らせます」
甘いものを食いながら、喧嘩などできるものではない。
ピラムの民を宥めておくには良い手だと、ラルンクルスは考えた。

いずれ、彼らを集落の一員として迎えることになるだろう。
おそらくだが、彼らは最北の蛮族の中でも虐げられ、現在こちらに敵対する勢力とは相容れない存在だったのだろう。ここまで伝え聞く彼らの言動からは、こちらに敵対しようという意思は見られない。敵の敵は味方というわけではないが、共に肩を並べて戦える相手だと、ラルンクルスは判断していた。

ターバには一時的に身を寄せるに留め平野に移送するか、そのまま住み着くかは彼ら次第だ。戦略的価値が高いと判断された場合は、南大陸連合の本拠が置かれているウジェチ・スグタ要塞に行ってもらうことになるかもしれないが、暫くはターバに留まることになる。
当然ターバの主だった者たちとも顔合わせをさせる必要はあり、その場の雰囲気を和ませるためにも、この菓子は役に立つ。
僅かの間にラルンクルスはそこまで考えていた。

「申し訳ないのですが、今はこれしか持っていません。

材料は買い集めれば、市場に充分あると思います。
一度にたくさん食べる物じゃないですからね。
アービィは家にいますから、どなたかにお伝えいただければいいと思いますよ。
あの人のことですから、給糧班に行って作るんじゃないかと」
特に秘密にしている製法でもないので、ルティは気軽に答えた。

「かたじけない。
ところで、どこの地方の菓子ですかな?
ラシアスの宮廷ではお目にかかったことがない。
ルティ殿の故郷ですか?」
宮廷に住むような身分であれば、所謂高級菓子というものは、一度は口にしている。

「いいえ、『この世界』の物ではありません。
アービィの故郷のですよ。
他にもいろいろありますので、給糧班の方々にも教えるんじゃないかと思いますよ。
それでは、また」
ルティは包みを抱え直し、捕虜収容所へと急いでいった。

『アービィの故郷』。
異世界のことだ。
ラルンクルスは、呆然と立ち尽くしていた。

第８６話

「ごめんください、アービィ殿はいらっしゃいますか？
ラルンクルス総司令官より、お願いの儀がございましてお訪ねいたしました」
戦務参謀がラルンクルスの副官を通しての命令に従い、自身の副官を連れてアービィたちの家を訪れたのは、ラルンクルスとルティがそれぞれに仮宿舎と収容所を訪ねている最中だった。

「はーい。
おや、お久しぶりです。
どうされました？」
作戦会議や打ち合わせで戦務参謀とは顔見知りになっていたアービィは、彼らを家に気軽に招き入れる。

「はい、お忙しい中大変申し訳ないのですが。
先程、総司令官がルティ殿とばったり道でお会いしまして、羊羹、ですか、菓子の作り方をアービィ殿に教わるようにとのルティ殿からのご教示をいただき、それを受けてお招きに上がった次第であります」
戦務参謀は最初に言われたときには、軍務とどのような関係があるのかと訝しんだ。

しかし、副官から菓子をピラムの民に振る舞いたいこと、いずれターバの民と彼らを引き合わせる際の緩衝材として使いたいことを聞かされ、即座に事の重大性を理解していた。
そのままティアを伴い司令部へ行き、給糧班の指揮官に面会した。

「初めまして。
ラルンクルス様から、こちらでいくつか菓子の作り方を説明するように、と仰せつかりました。
素人のやり方でお恥ずかしい次第ですが」
アービィはそう挨拶した。

「よろしくお願いいたします。
総司令官閣下のお墨付きであれば、素人も玄人も関係ないと思慮するものであります。
至らない点がございましたら、何なりとご指摘くださいますよう、お願い申しあげます」
給糧班の指揮官は、背筋に金棒でも入っているかのような姿勢で挨拶を返し、見事な動作で敬礼した。

「そんな、たいしたものじゃないですから。
じゃ、今から言う材料を揃えていただきます。
それから、一つだけお願いがあります。
実際に作るときは、材料を必ず北の大地で採れたもので揃えていただきます
特に砂糖。
これは、何をさておいても最優先で」
アービィが気にしていることは、北の大地は南大陸に劣らない豊饒の地であると証明することだった。

「畏まりました。
ですが、今は手持ちの物で代用することを、お許しいただきたくあります。
もちろん、不足している物は、至急北の大地産の物を揃えて参ります」
指揮官は答え、アービィが挙げる材料を一つずつ確認し、部下に

調達リストをその場で作らせている。

「理由も聞かないのね。
かなり使える人材じゃない」
ティアが呟く。

やはり、入手困難と考えられていたのか、砂糖は南大陸産の物しか在庫がない。

これは至急買い揃えてもらうことにして、その間にアービィは水の黒呪文レベル2『凍結』を使える兵を集めてもらった。材料が届くまでの間に、保冷庫を充分に冷やしておきたかったのだった。

保冷庫の準備が整ったところへ、砂糖を始めとする材料が届けられた。

原料が北の大地で作られているビートだろうと、南大陸では一般的なサトウキビだろうと、砂糖の品質には関係ない。アービィが特に砂糖を北の大地産に指定したのは、指揮官も気付いているが、甘味が贅沢品であるという認識は北の大地でも同様で、砂糖をふんだんに使った料理や菓子は、豊かさの象徴になるからだ。

とりもなおさず、北の大地産の砂糖をふんだんに使った菓子は、北の民が豊かになったことの象徴といえる。そして、それだけの砂糖が生産できるということは、北の大地の豊穣の証明になると、アービィは考えたのだった。

餡子はすぐにできるものではないので、まずは下拵えを説明し、その間に持参した餡で　ラルンクルスからの注文通り、最初に水羊羹を作る。次いでカステラやプリンを作り、保冷庫に入れて冷やし始めた。その間に餡子の作り方の注意点を説明しながら仕上げたときには、兵の夕食作りが始まった。アービィとティアも手伝い兵食を作り終わった頃に、ラルンクルスが司令部に帰着し、相前後して

ルティがバードンと一緒に給糧班の調理場に顔を出した。

四人はどさくさで兵食をご馳走になり、その後の片づけを手伝った。そして、あんみつと大量の小麦粉ぜんざいを作り上げたときには、夜も更け始め就寝時刻が近付いていた。

アービィは専務参謀を通して、ラルンクルスに司令部と給糧班全員に試食をしてもらうように願い出た。給糧班と司令部要員を合わせるとかなりの人数になるが、多くの人々に試食してもらった方が良いと考えたからだ。さらに大量に作ったぜんざいを、兵の夜食に出してもらうようにも願い出た。

将校用食堂で、ラルンクルスを始めとした司令部要員や給糧班の要員が唸り声を上げたとき、兵舎からは爆発するような歓声が聞こえてきた。

「ねぇ、アービィ。

あたしにも、お菓子の作り方教えて」

唐突にルティが言ったのは、捕虜収容所に通い始めて三十日も過ぎた頃だった。

その間、アービィは毎日のように記憶を頼りに菓子を作りルティに持たせていたが、いい加減ネタ切れとなっている。

もともとアービィは料理が趣味だったというだけで、本格的に修行をしたわけでも菓子作りが趣味だったわけでもない。プリンから始まって、カステラ、羊羹、あんみつ、粟餅、小麦粉ぜんざい、杏仁豆腐もどき、手抜きシフォンケーキや葛桜あたりでネタが尽き、あとはカステラやシフォンをベースにしたデコレーションケーキに逃げていた。

「最北の民のみんなへ持っていくの？

やめとこうね、毒の差し入れは」
ワカサギのフライすらまともに揚げられないルティに菓子作りなど、そこら辺にいるキマイラに菓子を作らせるより難しい。

「なんて失礼な。
あたしは、自分の誠意を見せたいの」
顔を真っ赤にしてルティが怒る。

「だって、ルティにやらせるとさぁ。
入れちゃいけない物、入れまくるじゃない。
で、後で後悔するんだから」
アービィは根本的な問題点を指摘した。
発想することはいいのだが、想像力が決定的に不足している。
どの調味料をどれほど入れたらどんな味になるか、どの調味料を組み合わせたらどんな味ができるか、どの素材とどの調味料が合うかは、何度か料理をしているうちに自然と覚えるものだ。

どうやらルティは、そこに一捻り自分らしさを入れないと気が済まない性質のようだった。これは料理の中でも、最も危険な行為の一つで、もちろんこの世界にそんな言葉はないが『アレンジ・チャレンジ・大惨事』『地雷戦隊アレンジャー』と言われるやつだ。
そしてもう一つ、ルティがやらかす危険行為がある。
隠し味や香り付けに使う材料を、これでもかと入れてしまう癖だ。
少しで美味しいなら、たくさん入れればもっと美味しいはず、というのがルティの主張だが、アービィは『大匙はお玉じゃねぇ』と何度心に叫んだか、『隠し切れない隠し味』ほど恐ろしいものはない。
ルティに言わせれば『レシピどおりに作ったら負けかと思ってる』そうなのだが。

「つべこべ言わない。

何でもいいから教えなさい」
ルティがアービィに迫った。

「ダメよ、アービィ！
ルティに食べ物作らせちゃ！」
アービィから血の気が引き、後少しで首を縦に振りそうになったとき、不穏な気配を悟ってキッチンに乱入したティアが止めに入った。

「狼、それだけは阻止しろ！」
まさかのバードンまで止めに入る。

「どういうことよっ！
そんなにあたしが信じられ――」
「ないっ！」
「ないわよっ！」
「ませんっ！」
心の叫びが、四者四様に響いた。

「とりあえずね、アイスクリームを固めに作っておくから。
あと、衣も妥協する。
これ持って行って。
油は、これね。
あと、薄く切ったカステラと。
衣をひとつまみ落として、さっと走ったら大丈夫。
ほら、こんな感じ」
本気で泣き出したルティに、さすがに申し訳なくなったアービィが妥協した。
見た目の演出ができ、その場で調味料を一切使わないネタを考え

出していた。

「ほら、よく見なさいっ！
こうだからね、こうっ！」

ティアが必死の形相で、ルティの首根っこを押さえつけ、アービィの実技を見せつける。

薄く切ったカステラでアイスクリームを包み、衣を薄く付けて手早く揚げる。これだけのことだが、周囲が熱く中が冷たいというギャップが楽しい菓子だ。異世界にいた頃、テレビで見て以来やってみようと思っていたことだった。

「いい、ルティ？
これはね、冷たいものと熱いものが一瞬で融合するんだからね。
長く揚げてると、中が溶けちゃうから。
表面だけ、衣が固まったらすぐ上げて。
溶けて流れ出したら、本気で爆発するからね」

くどいぐらいに念を押すアービィ。

だが、ルティは何か考え込んでいる。

「ルティ殿、何か足すなどお考えになってはいけません。
このような菓子は、単純であればあるほどいいのです。
いろいろ入れるのは、あのデコレーションケーキだけとお考えください」

バードンの表情が、子供をあやすときのそれに近くなっている。

まだ、この菓子は食べたことはないが、いろいろ入れては素朴に味わうべきものが台無しになるであろうことは、容易に想像ができていた。

「あ、分かった。
ルティ、あとで良いこと教えてあげるから。

とりあえず、それ試食してて」
そう言ってアービィはプリンを作り始めた。

「いいじゃない、これ」
ティアは大喜びで食べている。
さり気なくバードンがティアに半分渡しているのを、アービィは見逃さなかった。

「じゃあ、ルティ、もう一つ。
カステラを薄く切ったら、餡子はさんでごらん。
餡子だけだよ。
これは揚げちゃダメ。
解ったね？
解ったら、行ってらっしゃい。
ティア、ルティ一人じゃ全部は持っていけないから手伝ってあげてよ。
話を聞くと、僕たち男は入らない方がよさそうだし」
アービィが前半はお使いに行く五歳児に対する口調でルティに、後半はティアに言った。

「構わないけど。
持って行くだけでいいの？」
ティアの目は何か言いたそうな不安を物語っていた。

「作るときもさ、手伝いってことで監視に付いててもらえる？
収容所で大惨事引き起こすわけにはいかないからね。
僕じゃルティは言うこと聞いてくれないし」
ティアの視線に気付いたアービィが付け加える。
ルティが再びふくれ上がった。

ルティが出かけた後、プリンを型に入れ冷やしている間に、アービィはバードンと連れ立って市場へ行った。

春というには暖かいが、初夏というにはまだ涼しいこの時期、市場には種類こそ少ないが果物も並んでいた。昨年に採れたベリー類や桃をシロップ漬けにした瓶詰めも、南大陸産、北の大地産の両方が並んでいた。

アービィは、生鮮のイチゴや桃、ベリー類をいくつかと、北の大地産の果物の瓶詰めを幾つか選び購入していた。

「どうするんだ、それ。ジャムにでもするのか？当たり前過ぎて面白くないんじゃないのか？」

アービィが買い込んだものを見たバードンが言った。

「いや、これは、そのまま使います。ルティの好きなように『飾れば』いいんです。調味料なんぞ一切使わず。さすがに僕もネタ切れで、あとは演出で見て楽しむほうにしてもらいます」

そう言ってアービィは雑貨屋へと歩き出した。

北の大地でも陶器加工は昔から行われており、それなりに味のある皿が作られていた。

中には南大陸へ輸出され、良い値で取り引きされている窯元もある。アービィは果実の原色とクリームの白が映えるであろう皿を人数分探し出し、それを纏めて購入した。

バードンは、今現在の状況を不思議な感覚で認識していた。

二年前に出会ったときには殺すことしか考えていなかった相手と、

今はこうして肩を並べて歩いている。
それどころか、旧来の友人のように交わっている。友というものを積極的に持とうとしなかったバードンにとって、心のどこかで初めて友と認識しようとしている相手が人狼だったということは、何と言う皮肉だろうか。修行と悪魔や魔獣殺しに明け暮れた毎日は、当然恋愛などというものとも無縁でいた。異性と話す機会を求める努力をするくらいであれば、自身の技を磨く努力に振り向けていた彼にとって、初めて構えずに話せる異性がラミアだったということも、これも途轍もない皮肉だ。
自身の矜持が崩れてしまいそうで、共通の敵と戦うための手段だと言い聞かせていたが、最近では自身から望んで接触を保とうとしている。
それすら逃がさないためと自身には言い聞かせていたが、バードンは人生で初めて他者との交流を楽しんでいた。

「飾るだけか。
ルティ殿の美的感覚次第、というわけか。
それなら大丈夫そうだな」
バードンは大きく笑った。

「後は、これが大事なんですが、最北の民の皆さんにもやってもらえる、ということなんです。
一緒に何か作るって、結構打ち解けるんですよね。
できれば、もっと手の込んだ物の方が良いんですけど、ルティですから」
辺りを見回す振りをしてから、アービィも笑った。

アービィは家に戻ったらバードンにどんな物を作ろうとしているかを、見てもらおうと考えている。一緒に何か作ると、打ち解けやすい。これを実践するつもりだった。

二人が家に帰り着くと、プリンはちょうどよく冷えていた。

「じゃあ、バードンさん、ルティにやらせようとしていることなんですけど」

そう言ってアービィは生クリームをホイップし始めた。

買い込んできた器にプリンを開け、周囲をホイップクリームで飾り、果物を並べ立てる。

「いかがです？

クリームの泡立てから飾りつけ、これをみんなでやれば楽しいんじゃないかと。

砂糖は予めクリームに見合った分を包んでおけば、大丈夫……ですよね？」

アービィはそう言って、バードンにボウルと泡だて器を渡した。

「これは、楽しそうだ。

失敗ということはないだろうな。

だが、狼、お前の美的感覚は、異世界に置いて来たのか？」

それから暫くの間、大の男二人でああでもない、こうでもないとプリンの飾り付けに興じていた。

その後、ホイップクリームで何かを思い出したアービィは、今度はメレンゲを作り始めた。

充分にホイップした後、寒天を溶かしメレンゲに足しては撹拌する。全ての寒天液を混ぜ合わせ、型に入れてそのまま保冷庫に入れた。同様に試しに作っておいたクリームチーズと生クリームを混ぜレモン汁を足して撹拌し、砕いた焼き菓子とバターを混ぜ合わせた

ものを敷き詰めた型に入れ、これも保冷庫に入れる。前者は淡雪かん、後者はレアチーズケーキだ。

「これのおかげで二つ、お菓子の作り方を思い出しましたよ。最初に作った方なんですけど、寒天の代わりにゼラチンで作ると、また違った感覚のものができるんです。

それは炙ってとろとろにして食べても良いんですよ。

そろそろ、二人が帰ってくる頃ですかね。

ちょうどできあがってると良いんですけど」

かなり満腹の二人は、南大陸から持ち込まれたお茶を啜りながら、ルティとティアの帰りを待っていた。

「ただいまぁ。

ねぇ、聞いてよ、アービィ。

すっごく、喜んでくれてね、初めて話が弾んだの。

他愛ない世間話だけだったけど。

あたし、もうそれだけで嬉しくて」

ルティが半泣きで鼻を啜りながら訴える。

「まあ、ヘマはしなかったから。

いいんじゃない、あたしは大変だったけどね。

最北のみんなも喜んでくれたから、良しとするわ。

全部、最北の地でも手に入る物っていうのが、一番嬉しかったみたいよ」

ルティの暴走を止めるのに、精根尽き果てたという表情のティアが言った。

「よかったじゃない、ルティ。

本当にお疲れ様、ティア。

とりあえず、座りなよ。
新しいお菓子用意して待ってたから。
バードンさん、クリームをホイップするのを手伝ってください」
アービィは、生や瓶詰めの果物をテーブルに並べる。

「ルティ殿、おめでとうございます。
お話が弾んだということは、いずれは聞きたいことも聞けるようになるということ。
狼にその手助けとなりそうな案があるそうです。
今から準備いたしますので、お楽しみにしていただきたい。
蛇、ご苦労だったな」
バードンはアービィからボウルを受け取り、一心にクリームをホイップし始めた。
アービィは、バードンの一言でティアの表情が安心感に包まれたことを見逃さなかった。

人口の少ない北の大地では、放牧に適した場所がいくらでもあった。
ターバの衛星集落で放牧を主に営んでいるところがあったため、そこから牛乳や生クリームといったものは、かなりの量入手することができた。ターバ自体の人口がまだそれほど多くないため、アービィたちで生クリームを独占してしまっても、今のところ問題はない。このところ菓子作りによく利用していたため、衛星集落に依頼して作ってもらっていたのだった。エイジングの期間を利用して、保冷庫を預け冷蔵した状態で運んでもらっていた。

「なになに？
楽しそうなことしてるじゃない。
で、プリンを皿に開けて……
やらせてっ！」

ルティが即座に飛びついた。

「なんで、それにしてくれなかったのよ。
それだったら、あたしも楽しめたのにぃ」
ティアがバードンからクリーム絞りを受け取り、嬉々としてデコレートし始めた。

「狼、これの方が良かったみたいだな。
お前と違って、二人とも美的感覚は大丈夫そうだ」
笑いを噛み殺しながらバードンがアービィを肘でつつく。

「いや、美的感覚に付いては、バードンさんにだけは言われたくないなぁ」
苦笑いしながらアービィもつつき返す。

「どうしたの、二人とも。
なんか、随分と仲良いんじゃない？」
ティアは不思議そうに二人を見ていた。
あれほど殺したくてしょうがなかった相手と、楽しげに話すバードンは始めて見た気がする。

「そう？
二人でこれ作ってたからかな。
新作もあるからね」
アービィは心の中で、それが目的だったんだよ、ティアに呟いていた。

ルティとティアのプリン・ア・ラ・モードが完成する頃、程よく冷えた淡雪かんとレアチーズケーキも並べられ、四人は濃いお茶と共に甘味を楽しんでいた。

南大陸にいた頃は、ここまで甘い物を食べる機会はなかった。ほとんどのサトウキビはフォーミットより南にある小島で生産されていたが、輸送費を始めとして諸経費や関税などで値段が上がり庶民には高嶺の花だった。シュガービートもストラーの一部で生産されていたが、砂糖への加工はほとんど行われていない。

この世界、この時代の人間として当然のように甘い物には常に飢えていたため、バードンが甘味に対して抵抗がないのは当たり前のこととして、アービィは異世界にいたときとは比べ物にならないほど、甘味に対して貪欲になっていた。

シュガービートの苗を風の神官が北の大地に持ち込んでいたのだが、余程気候が適合したのかストラーとは比べ物にならないほどの生産量になっていた。そのおかげで、北の大地では南大陸に比べ砂糖の入手が容易になっている。輸送に掛かる経費はないに等しく、関税も北の大地内では発生しない。庶民が気軽に買える、または等価交換できる物として認識されつつある。いずれは南大陸向けの主力輸出品になると、ランケオラータやレイは考えていた。

ラルンクルスは、緊張していた。

仮宿舎から歩いて数分の集会所には、ターバの民の主だった者たちが集められている。長いテーブルの片側にターバの民が付き、反対側はまだ誰も座っていない。

周囲の集落が不死者に席巻された後も踏みとどまり、同胞を不死者に転生させられその最後を見届けた者たちと、集落の根絶やしを避けるため心ならずも平野に避難した者たちからの代表が、最北の民との面会に臨んでいた。ある者は瞳に憎悪を滾らせ、ある者は諦念を漂わせ、ある者は反抗のきっかけにできることを期待し、ある者は和平を期待しながら、最北の民の到着を今や遅しと待ち構えている。

長大なテーブルの頂点にはプラボックとラルンクルスが並んで着席し、その両側を主席参謀と戦務参謀が固める。
その反対側の頂点には作戦参謀と情報参謀を中心にして、両脇に兵科参謀と輸送参謀が座っている。どちらもその背後には、万が一ターバの民が激昂した際の防波堤となるため、軽武装の兵が硬い表情で立ち並んでいた。

やがて、兵に先導された最北の民、グレシオフィたちの迫害を逃れてきたピラムの民の族長と主だった者たちが入ってきた。
射竦められるような視線や、値踏みするような視線、同情や憐れみが入り混じった視線に晒されながら、彼らはターバの民の反対側に言われるまま大人しく席に着いた。

「皆さん、今日は大変ご苦労様です。
こうしてピラムの方々と、ターバの皆さんをお引き合わせすることができて、南北連合軍総司令官としては喜びに堪えません」
ラルンクルスは、普段の軍人調の話し方を控え、ことさら普通を意識して話し始めた。

「我々は、ピラムの方々を歓迎したい。
ピラムの方々がターバに到着以来、我々は丹念にその持ち物を調べ、そしてお話を伺いました。
我々は、一度はターバを陥落させるとここなった不死者の灰や、魔法陣構築に必要な資材、自衛以上の武器防具が携行されていないことを確認しました。
そして、そのお話を伺うにつれ、ピラムの方々は多くの部分で我々と共闘できる条件を満たしていると、判断いたしました。
即ち、中央を席巻し、一度はこのターバを落とした不死者を操る、我々と敵対する者たちを共通の敵とする立場であるということであ

ります」

それでも所々に軍人調の喋りが出てしまうのはご愛嬌だ。

結論を先に述べ、その理由が解らないという者たちに対し、後追いで説明する。これも拙速を尊ぶ軍人の会話の仕方だ。

ターバの民、特に最後まで踏みとどまった者たちの瞳に、怒りの色が濃くなった。

「ターバの皆さんの中には、最北に住むというだけで同胞を灰にした敵と同一視する方々がいることは、私もよく承知しております。ですが、よくお考えいただきたい。

平野の中にも、中央の中にも相争う集落があったように、最北の地も一枚岩ではありません。

敢えて申し上げれば、我々南大陸の住人と、皆さん方北の民は、これまで長く地峡を挟んで対峙しておりました。

最北の地から不死者の群れを以って侵略を企む邪悪な勢力に対して、千年の恩讐を超え手を結び、肩を並べることができたのです。

聡明な皆さんに置かれましては、これと同じことが最北の地に住まう者であっても、敵を同じくするものとはできる。

私はそう信じております。

今日は、お互いに忌憚なく言いたいことを言い合い、過去の恩讐を水には流せなくとも一時抑えるために役立てればと考え、この場を用意しました。

一つだけ、皆さんにお願いがあります。

それは、相手に最後まで話させる。

途中で言葉を遮らない、ということです。

我々の会議でもよくあることなのですが、自らの主張を通すため、相手に説明をさせまいとしてしまいます。

こうなってしまうと、感情が先に立ち、纏まる話し合いも纏まりません。

相手を否定するためだけの発言に終始してしまうのです。

相手の言うことを最後まで聞くうちに、自分が冷静になれるのです。

では、よろしくお願いいたします」

ラルンクルスは席に座り、ピラムの族長に発言を促した。

「この度は、我々を受け入れるというご決断をいただき、誠にありがとうございます。

もちろん、全ての方々が我々を無条件で受け入れると仰っていただけると思うほど、我々は楽天家ではございません。

この場をお借りして、過去の暴虐についてお詫びをさせていただくと共に、今後に付いてよろしくと申し上げさせていただきます」

手短に挨拶し、ピラムの族長は着席した。

これから襲い来るであろう罵詈雑言は覚悟できている。何があっても激昂しないよう、自身に言い聞かせていた。

「ようこそ、ターバへ。

とは申し上げない。

あなた方の窮状は、こちらのラルンクルス殿から伺った。

我々は、血も涙もない冷酷な集団ではない。

助けを求める者が縋れば、これに手を貸し、助けよう。

だが、血も通い、涙も流すが故に、あなた方を歓迎する気にはなれない。

それは理解していただきたい。

二晩のうちに同胞のほとんどを不死者に変えられ、一瞬でそれが灰になって散り行く様をお考えいただきたい。

あなた方も、不死者の群れと戦っていると伺った。

だが、このターバが一度陥落したときのことをお考えいただきたい。

私はそこにいた。

最北の地から逃れ、ほうほうの態でこの集落に辿り着いた人々を

迎え入れ、そして多くの民を失った。
あなた方が、百万の言葉を弄しようと、私は、あの時ターバに残っていた者たちは、あなた方を信じることができない。
信じたくともだ」
ターバに踏みとどまった者の代表が、激昂を辛うじて抑えつつ、血を吐くように心情を吐露した。

「私も同様だ。
こちらにいる方々と違い、私たちは一度ターバを離れている。
あなた方の同胞の攻撃で、中央の集落が壊滅し、ここターバの命運も旦夕に迫った折にだ。
卑怯者の誹りを受けようと、我々の血を絶やすまいと、私たちは平野に逃れた。
未だに後ろ指を差されていることは充分承知している。
だが、遠く平野の空の下で、同胞たちの武運を、無事を、再会を願わなかった日は、者は、一日たりと、一人たりとなかった。
ターバ解放の際、私は外縁の結界にいた。
目の前に襲いくる、かつての同胞が成れの果ての不死者が、爆発四散するように灰と化し、散っていった様を忘れろといわれて忘れられるものではない。
それもこれも、最北の地から逃げてきたという者たちに、手を差し伸べた結果だ。
疑うことをしなかった者たちを責めることは容易い。
だが、我々は、普段殺しあっている部族であろうと、助けを求められたならこれを助けることを矜持としていた。
その矜持を逆手に取り、我々を滅ぼそうとしたあなた方の同胞を許すことはできない。
そして、あなた方は、今全く同じようにしてここへ来た。
どうしてこれを信じられようか」
そう言って、平野に逃れていた者の代表は着席する。

僅かに卑怯者との誹りが含まれた横からの視線を感じていたが、それに対する反論は辛うじて飲み込んでいた。

「仰ることは、ごもっともです。

我らには、その糾弾を跳ね除けるだけの材料がございません。

ただただ、信じていただくことを望むのみ。

それ故、ラルンクルス様からのご指示で、口には出せぬほどの屈辱を甘受し、あらゆる調べを受け入れてございます」

ピラムの族長は、そう答えた。

もっと激しい罵詈雑言を覚悟していたが、ターバを代表した二人の言葉は厳しいながらも自制されている。

「断っておくが、我々はあなた方を指弾する気はない。

もちろん、侵略の意図を持ってここへ来たというのであれば、この世に存在する罵詈雑言全てでも足りぬ。

そのうえで八つ裂きにしても足りぬくらいだが、我々が言いたいとはそうではない。

ラルンクルス殿を信じればこそあなた方を信じたいが、それができぬと言っているだけだ。

敵の敵は味方という言い分があるが、そうであればあなた方とは肩を並べられると思う。

だが、同胞を、家族を、父母や、子供たちを灰にされて、それができるかといわれれば、無理だとしか言いようがないことをご理解いただきたい」

踏みとどまった者のうちの一人が、張り裂けそうな怒りを飲んで、辛うじて叫びにならないように声を震わせて言った。

「皆々様のお気持ちは充分に理解しております。

我らは、ピラムの皆さんを徹底的に調べました。

もちろん、拷問などはしておりませんが、苦痛に耐えかねた者に

こちらの望む答えを捏造させたところでそれは真実ではないことが明白だからです。

全ての持ち物は没収し、こちらが用意した物のみで暮らしていただきました。

申し訳ないとは思いましたが、思い出の品であっても全て焼き払い、川に投棄しております。

仮宿舎からは全ての扉を撤去し、監視の目が届かぬ場所をなくしました。

厠も例外ではありません。

さらに、徹底した身体検査を行っております。

万が一、体内に不死者の灰を隠し持っていては、どこに不死者が湧いて出るか分かりません。

言うまでもなく、この集落は結界内ですから、どこに灰を撒こうと実体化した瞬間にまた灰と化します。

不死者の灰を持ち込まれようと、我々には何の痛痒でもありません。

ですが、反意ありと判断するには充分です。

従いまして、口腔内はもちろん、胃の中、尻の中、女性器の中まで、全て調べさせていただきました。

糞壷も同様です。

その結果、不審物は一切発見されておりません」

主席参謀が発言した。

ターバの民の中からどよめきが上がる。

まさか、そこまで非道な検査をしていたとは知らなかったからだ。

女性の検査は女性士官が担当したとはいえ、性器と肛門を衆人環視の中まさぐられた屈辱は、普通の神経では耐えられない。担当官の嫌悪感もどれほどのものだったか、それも想像には難くないことだ。

糞壷まで浚わされた担当官の苦痛は、言うに及ばずだ。そして、子供にとって無理矢理吐かされるなど、どれほどの苦痛だっただろう、

聞いているだけで心が痛んだ。

「我々といたしましては、そこまでしなければ到底ピラムの方々を信じるわけにはいきませんでした。

我々には、ターバを守るという使命があります。

徹底すべきことは、徹底しなければなりません。

そして、我々は身体検査と持ち物検査で不審物が見つからなかった後、言葉は悪いのですが、真実を述べてもらうため彼らを抱き込むことにしました。

打ち解けあい、心を開かせ、不審な思いを抱かせずに真実を引き出すためです。

もちろん、今でこそ言えることですが、その際には我々は自身を欺くことまでして、彼らと世間話から始めました。

その際に、あのアービィ殿からご教授いただいた、これが大きく役に立っております」

作戦参謀が従卒に合図し、アービィが教えた菓子が運び込まれた。

「酒の用意もしてあるが、いきなりではどのようなことになるか、予測が付かんのでな。

甘い物は心を安らげてくれる。

我らは、これまで少し荒みすぎていた。

たまには、こういうのもよかろう？」

ここまで一切発言せず、目を閉じてことの成り行きに任せていたプラボックが初めて口を開いた。

南北連合の北の大地代表の彼であれば、積極的に発言してもよさそうなものだが、過去の恩讐はそう簡単に中立の発言を許しそうになかった。両者の間に座る立場として、偏った発言はするまいと戒めていたプラボックは、最終的に紛糾した場合以外は総司令部に任せる気でいた。

「これは、南大陸の菓子ですかな？
さすが、豊かな土地の物だ」
ピラムの族長が唸り声を漏らした。

「やはり、北の大地ではこのようなものは作れません。
我らとしては、情けない。
痩せた土地、貧弱な作物では、如何せん無理というもの」
ターバの代表は心底悔しそうな表情になっていた。

「おや、ターバの民とは思えぬ発言。
貴殿は市場を見ては歩かないのか？」
プラボックが意外そうな声を上げた。

「いや、見てはおりますが。
南大陸から持ち込まれた品々に圧倒される毎日です。
ああも見せ付けられてしまうと、またぞろ地峡を破りたいという想いが頭をもたげてきますな」
ターバの民は、同じような答えを口々に返す。

「この菓子は、全て北の大地で採れた物で作りました。
皆様が思うほど、北の大地は弱い土地ではございません」
輸送参謀が発言し、ターバの民、ピラムの民から驚愕の声が上がった。

ターバ周辺は、この春の解放後漸く作付けが始まったばかりだ。
今出された菓子の材料の多くは、平野から運び込まれたものばかりだった。ランケオラータが捕虜生活をしていたときに撒いた土地改良という種は、二年の時を経て漸く結実しつつあった。以前とは全くといっていいほど、比べ物にならない収穫が上がっていた。

「市場には、確かに南大陸の品々が並んでおりますが、食料品はかなりの量が北の大地の物に置き換わっております。
もう数年もすれば、逆に南大陸に食料を供給できるようになると、我々は考えます。
品質に関しましても、南大陸の物に優るとも劣らないものと、我々は見ています。
平野の皆様の努力の結晶です。
近い将来、中央も、最北の地も、同様に豊饒の地となると我々は信じております」
戦務参謀が発言した。

「だから、南大陸には来るな、と仰りたいか？」
言葉だけ聞けば険悪な雰囲気に包まれそうだが、そう言ったターバの代表の目は笑っている。

「そうです。
こんなに良い土地を放棄するなど、少なくとも私には考えられません。
耕地だけではなく、牧畜に適したなだらかな丘も多い。
周辺の山脈や山岳地帯には、豊富な埋蔵資源もまだまだ眠っている。
鉄、銅、金、銀、光る石、燃える石、そして、燃える空気に燃える水。
南大陸の優越している点は、暖かいというだけです。
それ以外の資源は、既に北の大地のほうが優れている。
平野を調査しただけで、そう結論付けられています。
私は、退役後、北の大地に残り、一財産稼ぐつもりでいます。
総司令官閣下、退役願いを出してもよろしいでしょうか？」
補給参謀の言葉に笑いが弾けた。

それから暫くは他愛のない世間話が続き、ターバの暮らしぶりや最北の地の暮らしぶりがそれぞれの口から語られた。

グレシオフィが狂気に染まるまでは、最北の地もそれなりのコミュニティが形成され、協同して南下の意志を体現しようとしていた。人々は少しでも豊かな土地を窺い、利を同じくする同士の連帯があり、少なくとも最北の地の中では平和が保たれていた。最北の民を一つに纏め上げたグレシオフィという人物は、優れた指導者であることが窺われる貴重な情報だ。

それまでの聞き取り調査で彼の名前は挙がっていたが、その人物に関する評価はほとんど出ていなかった。敵対する人物を高く評価したくないという心根の現われだったが、打ち解けた雰囲気の中ではそれなりに誰もが饒舌なっているようだった。

頃合い良しと判断したラルンクルスが副官に指示を出す。

長テーブルが片付けられ、プラボックは一同に車座に座るよう促した。

酒と料理が運び込まれ、ターバとピラムの民が、長い歴史の中で始めて席を同じくする宴が始まった。

「ラルンクルス様、このまま酒席が進めば、何がしかの結論すら得られなくなると思いますが？」

暫くして、ラルンクルスが何の結論も言い出さないことに違和感を持ったターバとピラムの民から、異音同義に声が上がった。

「何、今日はお互いに言いたいことを言いあう席をご用意したまで。何を取り決めようというのです。

そのようなことは、また明日にでも考えればよろしい。

今日は、言いたいことを言いあい、楽しめばよいのです。

ご覧の通り、邪魔なテーブルも片付けました。

殴り合おうと仰るなら、審判は引き受けますぞ。
もし、私に挑戦なさるなら、私は受けて立ちましょう」
既に顔を赤くしたラルンクルスが、楽しそうに受ける。

「では、私が名乗りを上げようか、ラルンクルス殿」
これも顔を赤くしたプラボックが応じ、周囲の笑いを誘う。

すっかり毒気を抜かれたターバとピラムの民は、暫くの間それぞれの民同士で酒を酌み交わしていた。
幾つか小さな輪ができ、その間をラルンクルスとプラボックや司令部要員が酒瓶を片手に渡り歩く。そして共通の話題を見つけては互いの民を呼び込み、それぞれの意見をぶつけ合わせさせ始めていた。暫く互いの間を取り持つように発言を促していた参謀は、両者の論戦が酣になった頃合い良しと見れば違う輪に移動していく。険悪な雰囲気になりそうになったときには、警備に付く兵が無言の圧力を加えつつ、どこからか参謀たちが集まり話を有耶無耶にしていった。

作戦の是非を巡って日頃から、掴み合い寸前の会議を繰り返す司令部要員にとって、この場でおきる程度の些細な感情の行き違いから発生する小競り合いなど可愛いものでしかない。もし、憎しみが炸裂したならば、外に連れ出せば済むだけだ。片や全てを受け止める覚悟ができていて、片や理性では受け入れを認めつつ感情がそれを認めていないだけだ。
言いたいことを言い合えば、それだけでしこりは消えていく。
敵を同じくするもの同士、連帯感を醸成するにはそれが一番手っ取り早かった。

適度に座が荒れ始めた頃、わざと潰れたラルンクルスの鼾を合図に宴は終わった。

満ち足りた表情でそれぞれの寝床へと帰っていく人々は、またの機会を約束し、そして笑顔で別れていった。

「お嬢ちゃん、今日はまた、随分と大荷物だね。今度は、何を持ってきてくれたんだい？」

最北の民の女が聞いた。

その表情は、話して良いことと悪いことは弁えた大人の顔だったが、ルティとティアが運び込む荷物に向ける視線は、横に立っている少女と同じ色に染まっていた。

「今日はですね。

みんなで一緒にお菓子を作りましょう」

弾けるような笑顔のルティに釣られ、最北の少女が笑った。

第87話

「お嬢ちゃん、あんたは何を考えてるんだい？」
最北の民の女が、ルティに訊ねた。
名乗ることもなく、頑なに会話を拒否していたが、最近では世間話程度には応じるようになっている。

「どういうことですか？」
ルティは菓子作りの手を休めることなく聞き返した。

「あんたは、ここへ通い詰めてるけど、最北の地のことも、民のことも、何も聞きゃぁしない。
あんたは情報が欲しくはないのかい？」
質問に対して質問が繰り返される。
横では子供役で来ているのだろう、十歳くらいの少女がルティの手を見つめていた。
アービィが準備してあった砂糖を混ぜ込んでメレンゲをホイップし、これも分量を計ってあった寒天を溶かして混ぜ合わせる。
淡雪を作りながら、ルティは答えを考えた。

「情報ですか。
欲しいことは欲しいですけどね。
あたしは軍人じゃないですから。
あたしが欲しいのは、あなた方と構えずに話す場というか、雰囲気というか。
最初に会ったときにも言いましたけど、何であなた方があたしたちを許さないか、それなんですよね」
アレンジのしようがなければ大惨事を引き起こすこともない。
アービィは余分な調味料や素材を一切持たせていなかった。

いつもはできあがった物を持って来るだけだったが、作り方を見せて欲しいと少女がねだったため、アービィは最も失敗が少ないと思えるネタをルティに教えていた。
卵黄は別の全卵に足して濃厚なカステラにしてしまえばよく、その分の砂糖も小麦粉もアービィはポーションにしていた。

「後のお嬢ちゃんはどうなんだい？
あんたは私らに何を求めてるんだい？」
一切のアレンジやチャレンジを許すまいと、ルティを後から監視しているティアに最北の民の女は聞いた。

「あたし？
あたしは、何も。
戦がなくなればいいわ、あたしは。
あなた方を滅ぼそうなんて思っちゃいないわよ。
何で、戦に訴えるかなぁって思いはするけど。
たった一、二年よ。
こんな物ができるようになるまで。
あなたはまだ信じてないけど、材料は全部北の大地で採れたものだからね。
砂糖も卵も。
南大陸から持ってきたら、砂糖はこんなに使えないし、卵は腐っちゃうわよ」
ティアは冷静にルティを監視しつつ、そう答えた。

相手が女性であろうと『誘惑』は有効だ。
だが、ティアはそれを使おうとは思っていない。
ルティの手助けはしたいと思っているが、相手が心底から協力し

てやろうと思うことが重要だった。最北の蛮族の組織体系や弱点を探ろうというのであれば、ティアは妖術の行使を躊躇いはしない。だが、信頼関係を築こうとしているルティの手助けとしては、妖術は却って逆効果になることをティアは理解している。

「何回聞いても、北の大地でこんなに物が採れるなんて、信じられない。

何もないし、何も採れないのか北の大地よ。

食べ物の選り好みなんかできやしない。

その日に採れた物を、どれだけ食い繋ぐか、それぱっかり考えてるの。

南大陸の物ばかりなのは、見れば分かるのよ」

彼女の常識はそうだった。

横で満面の笑みを湛え、ルティとティアの顔色を窺う少女も同じ考えなのだろう、女の最後の言葉に時折頷いていた。

「どうしようか、ティア。

ラルンクルス様に聞いてきてくれない？

畑と砂糖作りを見せられないかって」

思案していたルティがティアに言った。

「そうね、いいわよ。

ルティが妙な物作ろうとしないならね」

淡雪もカステラもここまでくれば、片や冷やすだけ、片や焼くだけだ。アレンジもチャレンジもしようがなく、大惨事も起きそうもない。

ティアは司令部に行くことにした。

「皆さん、この娘がこれ以上何か入れようとしたら、殴ってでも止めてください。

食べられなくなるくらいなら、まだいいんですけど、毒ができちゃいますから」
喉元まで罵詈雑言が上がっているであろうルティを無視して、ティアは司令部へと走っていった。

「酷いと思いません？
あの娘の言うこと。
『ウチの人』も、砂糖とか粉とか、全部計って渡すんですよ。
あたしには任せられないって」
『ウチの人』と言葉にした瞬間から、ルティは真っ赤になっていた。

「あんた、結婚してたんだ。
とても、そうは見えないけどね」
ルティは　その一言で撃沈された。

「はい……
実は、まだなんですけど……」
打ちひしがれつつルティは答えた。

「そうかい。
でも、その人はあんたにこれだけのことを教えてくれるんだろ？
なら、大丈夫だよ。
私はあんた方は嫌いだけどね。
お嬢ちゃん、あんたは応援してやるよ
……あれ、どうしたんだい？
そんな、何泣いてるんだい、あんたは？」
女の言葉にルティの歓喜が爆発した。

ラルンクスルは何の躊躇いもなく、ティアからの申し出を許可した。

もちろん、善意が欠片ほど入っていたが、戦略上の利点を考えてのことだった。

北の大地の可能性に彼女たちが気付けば、それだけ南下の意欲がなくなることはないにしろ、多少なりとも薄れるだろうということだ。

北の大地は東西の広がりに比べ南北はそれほど長くなく、中央と最北の地で気候の違いは極端なほどは違わない。耕作に適した開墾しやすいと地の広さが、両者における決定的な違いだ。

それも牧畜が盛んになり、牛馬を使役しての開墾ができるようになれば、人力では手を付けられなかった地も耕地に転用でき中央との差は縮まり、元々人口が少ない最北の地であれば、食料の確保は困難ではなくなる。

そうなってしまえば、最北の民が南を窺う理由の一つは消滅する。

だが、暖かい土地を目指そうとする欲求が、消えるわけではない。ならば、最北の地を他の部族に渡したくないと、思わせることが必要だった。困難なことではあるが、最北の民にとってそこが押し込められた牢獄のような地ではなく、出て行く必要などないない地であることを証明しなければならない。農地改良もそのための方策の一つだが、他地域と同じ様なことではなく、そこにしかない付加価値を持たせる必要があった。

アービィは、最北の近海にカニを始めとする、莫大な水産資源が眠っていることを期待していた。

この世界では、ラシアスで水産業は盛んになっているが、極限られた地域内の小さい産業でしかない。自給自足に近い集落同士の自

家消費と物々交換でしかなく、内陸の中心地では省みられることのない産業だった。輸送技術が未発達なこの世界では、海産物を鮮度を保ったまま中央の地域まで運ぶ術がなかった。せいぜい塩漬けにされた魚が、晩秋から春に掛けて僅かに王都に持ち込まれる程度だった。

それでも海辺に領地を持つ貴族たちの間では、海産物は珍味であり、美味であり、輸送に氷を必要とすることから財力の象徴にもなっている。アービィは、かつてボルビデュス領で川魚をルイベにした『凍結』の応用は、海産物を内陸に運ぶ技術に転用できると踏んでいた。

運びたい物そのものに『凍結』を掛けていては、解凍も早く何度も溶けかかってしまい品質の劣化が著しい。

海産物であれば、運びたい物を海水ごと凍らせ、現地で流水や自然解凍させるのが最も効率も品質も良い。火を通すものであれば、そのまま火に掛けれればいい。

ルティが最北の女から聞いた内容や、ピラムの民から聞く話では、最北の海にはかなりの期待がもてるとアービィは踏んでいた。東西に長い北の大地の地形は、最北の民がその海を独占できることを示してもいる。

ティアが警備の兵を伴って捕虜収容所に戻ってきたとき、カステラが焼き上がり冷めるのを待つばかりとなっていた。

「じゃあ、ちょっと出掛けましょうか。　あなた方に、この砂糖や卵が北の大地の物であることを、お見せしましょう」

ティアの一言を合図に、兵たちが最北の女たちに腰縄を打とうとする。

「あ、それはなしで行きましょう」
ルティが兵士の動きを遮った。

「しかし、ルティ様、万が一のことがあっては、取り返しの付かないことになりかねません」
若い兵士は軍規に違反することなど、あり得ないという態度で反論する。

「そのときは、あたしたちか全責任を負います。ですから、腰縄はなしでお願いします」
ティアも横から口を挟む。

兵士は暫く考え込んでいたが、二人の戦闘力であれば騒乱が起きる前に斬り伏せられると判断したのか、ぼやきながらも腰縄を打たずに扉を開いた。

兵が先導し、ルティが列の中心に、ティアが最後尾について最北の女たちを、先日稼動し始めたばかりの砂糖の加工場に連れて行った。
砂糖の加工場にはアービィとバードンが待っていて、兵から以後の警備を引き継ぐことをラルンクルスから了解を得ていることを伝えた。

「いかがですか？
これで信じていただけますか？」
ルティが最北の女に言った。

加工場の中は、シュガービートから取った糖液を煮詰める甘い香

りが充満していた。
アービィが工員からシュガービートの搾り汁をもらってきて、最北の女たちに渡した。

「嘗めてみてください。　仄かに甘いでしょう？
細かい行程は省きますけど、これを煮詰めると砂糖になります。南大陸の南端では別の植物から作りますけど、これで作った砂糖は、それと全く同じ物ができます。
これはストラー北部の狭い範囲で作られていた作物ですが、北の大地の方が生産に適しています。
北の大地が砂糖の生産地になれば、南大陸の北半分は、迷わずこちらから買うでしょうね。
そうすれば、北の大地で不足しがちな作物は、南大陸から買うことができます。
もちろん、主食のほとんどを南大陸に依存するのはいろいろと危険ですから、砂糖だけ作ってるってわけにはいきませんけどね」
今年はまだたいした量ではないが、早い時期にシャーラが確保されれば、来年は南大陸に売るほどの砂糖が作れそうだった。

もちろん品種改良を重ねた、二十一世紀の異世界で栽培されているシュガービートとは、比べるまでもない糖分だ。だが、人口が少ないこの世界では、充分すぎるほどの砂糖が作れる収穫が上がっている。
完全な平和な世界であるならば、北の大地がシュガービートしか作らないという選択もできる。しかし、武力を用いた戦争が起きなくても、将来経済戦争が起きることは確実だ。そのときのために、北の大地で暮らす人々が餓えることがない程度の各種食料の自給率は、上げておかなければならない。
ルティはそう説明した。

最北の女は、砂糖の加工作業を不思議なものをみるような眼差しで眺めていた。
そこでは、南大陸の住人も北の民も、能力に応じた職責を担い、平等な立場で忙しく立ち働いていた。管理職こそノウハウを持つ南大陸の住人が就いているが、現場の作業工程には両者が入り乱れ、工程による偏りはほとんど見られない。

「私には、信じられないんだけど、南大陸の住人と北の民が、同じことをしているように見えるね
見回りしてるのは南大陸の住人のようだけど、働いてる南大陸の住人は罪人か何かかい？
身形からはそう見えないけど。
北の民を、使役しているわけじゃないんだね、これは？」
最北の女は、信じられないといった口振りで訊ねた。

「はい。
皆さん、全く同じ立場でこの加工場で雇用されています。
管理職は、南大陸で砂糖を作っていた方にやってもらっていますけど、これは経験がないと作業が正しく行われているかが分かりませんからね」
ルティが笑顔で説明する

「ランケオラータ様からのご指示で、北の民の皆さんには、今は加工場の運営や経営を学んでもらっています。
いずれご自分たちで加工場を建てて、経営してもらうつもりです」
ティアが補足した。

「じゃあ、次に行きましょうか」
ルティが先頭に立ち、養鶏場へと最北の女たちを案内した。

養鶏場は、砂糖の加工場からそれほど離れていない、集落の外れにあった。

砂糖の加工場から出るシュガービートの葉と搾り滓を家畜や家禽の飼料として利用するためだ。養鶏場に並んで、牛舎や豚舎も建てられていた。どれも泥濘の時期に作業ができなかった工兵たちが、寄ってたかって作り上げた物だった。短期間の急拵えなので、そこここに粗が見えるが、使うには充分すぎる屋舎ができあがっていた。

囲いの中には多くの鶏が放し飼いになっており、騒がしく鳴き喚いている。ルティはその囲いを通り過ぎ、養鶏場の中へと最北の女たちを案内した。

一羽ずつに仕切られたケージから首を伸ばし、ケージ全面の樋に入れられた餌を鶏たちが啄んでいる。

傾斜を付けられたケージの床に生み出された卵は、餌入れの樋の下に作り付けられた受け皿部分に転がり出ていた。床は網になっていて、糞は下におちるようになっている。ここでも南大陸の住人と北の民が、砂糖の加工場同様入り交じって働いている。ある者は卵を回収しつつ樋に餌を撒き、ある者はケージ内の水を足し、汚れた水皿を交換して歩いている。

「もっと水を効率よく上げたいんですけど、いい道具が作れなくて」

アービィが恥ずかしそうに言った。

アービィは異世界にいた頃見学で行った養鶏場を、記憶を頼りに再現していた。

だが、自動給水器の造りがどうしても思い出せず、水皿に手作業で水を足し、汚れたら交換する方式を取っている。小規模のうちはなんとかなるだろうが、規模が大きくなってしまったら給水も水皿の交換も追いつかなくなることは明らかだった。

現在、誰からでもいいので、給水器のアイディアを募集中だと、アービィは説明した。

ケージの下から回収された糞は、堆肥へと転用されシュガービートを始めとした作物の育成に利用されている。当然牛舎や豚舎で出る有機廃棄物も同様だ。

焼き畑で大地の力を奪い取るだけだった北の大地の第一次産業は、循環型へとその形態を急速に変えつつあった。それだけに留まらず、兵による物資の輸送業務に民間の資本が参入し始め、第二次産業もその形態を一気に発展させつつあった。

南大陸から多くの人々が一旗揚げるために、続々と北の大地へと渡ってきていたのだった。

「参ったよ。
お嬢ちゃんたちの言うことは、本当だ。
これを私たちの土地にも作ろうって言うのかい？」
最北の女は、目を丸くするばかりだった。

「それなんですけど、これと同じじゃ最北の地に利点がありません。運ぶための経費が、より多く掛かっちゃいますから。
最北の地には、違う物が必要です。
運ぶためにカネが掛かっても、欲しいと思わせる物が」
ルティがそう言ったとき、それまで感心するばかりだった女が気色ばんだ。

「そんな物がありゃぁ、私たちは苦労しないっ。
何もないから、南へ行こうとしてるんじゃないかっ！
なんだい、あんたは期待だけさせて」
吐き捨てるように言った女の言葉を遮り、アービィが話し始めた。

「ありますよ、最北の地には。
どこにも負けない、素晴らしい資源が周りにいっぱいあるじゃないですか。
もちろん、農地や放牧地、今見ていただいたような施設も作ります。
基本的な食料の自給率が低いと、それだけで戦の火種になりますからね。
大声出すと働いてる人たちが驚きますから、ちょっと外へ出ましょうよ」
アービィは、最北の女たちを外へ連れ出し、養鶏場の従業員から見えないところへ連れ出した。下手に最北の民がいるなどと知れたら、余計な騒動が起きかねなかった。

養鶏場から少し離れた丘を越えた所で、アービィはピラムの民から聞いていた海の幸の話をした。
南大陸で造船業がかつてない活況を呈していることも、ランケオラータから聞いている。建造されているのは沿岸航路用の輸送船がほとんどだが、それはたいした改造をしなくてもそのまま漁船に転用できる。これを最北の地へ回航し、ラシアスやストラーから腕の良い漁師を招聘すれば、一大産業が築ける。

アービィは、新鮮な海産物が安定供給できれば、ストラーの人々が後は味付けしてくれると踏んでいた。
最北の民に水の精霊と契約する者がいれば、保存技術も自前でできる。輸送まで賄うほどの人口を有するのであれば、北海漁業は最北の民の独占も期待できた。後は漁場を巡ってのトラブルが起きないように、南北連合がそれぞれに利益を確保するよう調整すればよい。いずれどの民にも海を目指すもの、大地に根ざす者が特化し始め、北の大地全体での民の再編が起こるはずだ。

武力ではなく、浸透するように南北大陸の人々が入り交じるのであれば、それは歓迎することだった。

「不死者も、魔法陣も、使い方を間違えなければ、この世界を一気に発展させられる物です」

アービィは、敢えて誤解を恐れずに言った。

ルティやティア、そしてバードンが目を剥くが、アービィはそれを手で制して話し始める。

「ピラムの方々に伺いました。

あなた方は、魔法陣を介して物を送ったり、情報の伝達をしているそうですね？

僕たちが今できる、最も効率よく物を運ぶ方法は、川や湖を伝って船で運ぶことです。

それが一番早くて、一番多く運べますが、川も湖もない地方はそのせいで発展できません。

一番早い情報の伝達方法は早馬ですが、これも例えばここと南大陸の僕たちの故郷とでは、往復で五十日以上掛かります。

魔法陣は、これを一日で、途中の輸送や伝達に関わる人々や馬の食料も掛からずに、済ませられてしまいます。

もちろん、限界はあるでしょうけど。

その技術を持っているというだけで、あなた方は優位です」

侵略のための戦略兵器としてしか認識されていなかった魔法陣に、そんな使い方があるとは誰も考えていなかった。

確かに、現状で利用されている魔法陣は、生者を不死者に転生させるための物だが、物資であれば何の変化もないし、死体は死体のままで不死者として復活するわけでもなかった。

送り手と受け取り手の安全さえ確保すれば、これほど容易で安価

な輸送方法はなかった。

「不死者に転生してしまった人たちですが、日光を受け付けないのであれば、夜間の作業を受け持ってもらえばいいんです。
もちろん結界内には入れませんが、戦をする必要がなければ結界も必要ありません。
戦が終わった後、自らの民のために不死者に転生した人だけ根絶やしにするなんて、僕は考えたくない。
生きるために、敢えて日の光を捨て、不死者になったんですから。
もっとも、人を傷つける意志を捨てないのなら、殲滅しますけどね」

確かに、施設の修理などは夜間に行った方が、効率は良い。
もちろん、アービィはこれが理想でしかないことは、充分すぎるほど承知している。

悪意を以てすれば、物流拠点は侵略拠点に早変わりし、不死者の群れは人々を襲うだろう。
だが、破壊衝動のみに突き動かされている最下級の不死者はともかく、ある程度高位の不死者は思考力も意志も持っている。侵略や征服の意志さえなければ、充分に和平に辿り着ける可能性をアービィは捨てていない。
生者同士ですら、殺し合うのが人間だ。逆に生者と不死者が手を結べるのも人間だと、アービィは思っていた。絶対並ぶことなど不可能だと考えられていた人狼と人狼狩りが、共通の目標のために、今こうして肩を並べているように。

「あんた、このお嬢ちゃんが『ウチの人』って呼んでた人かい？
恐ろしいほどのお人好しか、底抜けの莫迦だ。

一人、たった一人、悪意を持った者がいただけで、あんたの考えてることは全部ダメになる。
私は、そうなると断言してもいい。
不死者に転生した者たちも、それを率いる猊下も、あんたたちなんかと手を結ぶなんてあり得ない。
もちろん、私もね。
なんで好き好んで、不死者なんぞに転生するものか。
あんたたち全てを、最北の民以外全てを、私たちの前に跪かせるためよ。
長い、長い年月を、食べる物すら満足に作れない、最北の地に押し込められて過ごした、祖先から受け継がれた、血肉に溶けた恨みを晴らすためよ。
私たちは、あんた方が私たちの前に這い蹲って許しを請うても許さない。
絶対に」
アービィたちは、最北の女の叫びを、ただ黙って聞いていた。

「解っています。
僕が言ったことが夢物語であることは。
でも、こんな夢物語を現実にしてくれた、この娘のことは、ルティのことは、信じてやってください」
そう言ってアービィは、その場で獣化した。

優美な毛皮を持つ殺戮の化身が、最北の女たちの前に立った。
禍々しいまでの切れ長の眼に、狂気の色は見られない。ありとあらゆる生あるものを、殺し尽くさずにはいられないような荒々しい目つきだが、その瞳は深い湖のように澄んでいた。
丘を越えた風が、灰色とも白銀とも取れる毛皮を揺らしている。

最北の女たちは、巨狼の姿に腰を抜かし掛けていた。その眼には絶望の色が浮かび、表情は凍り付いていた。
あまりにも至近距離に出現した悪魔に、誰もが逃げることも泣くことすら諦めて、風に吹かれるままになっている。

巨狼がゆっくりと歩を進め、ルティになついていた少女に近寄った。
無惨なまでに全身を震わせ、眼に涙を溜めた少女の口が絶叫の形に開かれたとき、巨狼はその少女の頬を優しく嘗める。
次の瞬間、ルティが罵声の限りを巨狼に叩き付けながら、剣を峰打ちに持ち替えて滅多打ちにした。

「あたし以外の女の顔を嘗めるなんて、どういう了見よぉっ！」

――ちょっと待って！　落ち着かせようと！　ちっちゃい子は対象外っ！　いやぁっ！　斬っちゃダメぇっ！　痛い痛い痛い痛い痛い痛いっ！　ごめんなさぁいっ！
殺戮の化身からは、情けなさ過ぎる念話がだだ漏れになっていた。

「あれは愛情表現みたいなのもだから、気にしないで」
腰が抜けた最北の女に手を貸しながらティアが言った。

「私は、奇跡を見ているのかい？
人狼が、あの人狼が、人を見て、喰おうともしていない。
これは夢かい？
私も、あんたも、みんな喰われちまって、死んだことにすら気付いてないんじゃないのかい？」
信じられないものを見たという表情が、最北の女の顔に張り付いていた。

「大丈夫、心配しなくて良いですよ。
あの狼は、他の人狼とは違います。
あなたを食べたりはしませんよ」
魂が空の彼方に飛んでいってしまったような表情で呆けている少女に、バードンが優しく語り掛ける。
他の最北の女たちも、今生きていることが信じられないといった表情だ。

「みなさん、本っ当に申し訳ありません。
後で、あの莫迦狼にはよく言って聞かせますから。
驚かせてしまったことは、許してください」
ルティは心底申し訳なく思っている。
十歳くらいの少女の心に、大きな傷を負わせてしまったのではないか、それが心配でならない。

――ごめんなさい、驚かせようなんて思っていませんでした。こんな僕でも、人と一緒に暮らせるってことを見て欲しかったんです。
刀傷を舐めている巨狼から念話が届く。
見る間に傷が塞がっていくのが分かる、驚異的な回復力だ。

人狼が人と並び立つなど、最北の民が他の民と和解するよりあり得ないと思われているようなことだ。
そんなものを見せ付けられてしまっては、この巨狼が言うとおりいつかは全ての民が肩を並べることができるかもしれない。最北の女は、自分の心に小さな、小さな希望が芽生えたことに気付いていなかった。

「宰相、陛下の居室から何やら怪しい波動が発せられていると報告

があったが、調べはついたかね？」
　ラシアス摂政エウステラリットが、未だ宰相の任にあるコリンボーサに訊ねた。
　ニムファが引き篭もり始めてから、身の回りの世話の者は女王と気心知れあった者たちが行っている。
　当然、摂政の息の掛かった者も紛れ込ませてあり、その者からはニムファの動向を逐次報告するように命じてあった。

「殿下、現在全力で内偵を進めておりますが、何分地下の抜け道は途中までしか入れませぬ故、なかなか」
　コリンボーサは言葉を濁した。

　エウステラリットとしても、抜け道の途中にある鍵より先に内偵を進められないことは充分承知していた。
　だが、そのために身の回りの世話をする者の中に間者を紛れさせていたのであり、抜け道の中で行っていることを聞き出すことも任務の一つのはずだった。しかし、ニムファは地下迷宮に入っていることを隠しはしないが、そこで何をしているかはどうやっても聞き出せずにいた。ニムファと気心知れあった者はそう多くないが、それだけに結束は固く、紛れ込ませた者がその輪の中に入れないことも、ニムファから核心を聞き出すことを難しくさせていた。

「どうもきな臭い。
　ビースマックの二の舞にならねば良いが。
　武具の祝福法儀式は進んでいるか？」
　エウステラリットは当然ビースマック騒乱の顛末は、全て報告を受けている。
　不死者に通常の武具が通用しなかったことを知り、軍が所有する武具全てを火の神殿に依頼して祝福法儀式を施すことに決定していた。莫大な予算を必要とするが、事が事だけに一括ではなく年単位

の分割払いで話をつけていた。もともと祝福法儀式への対価は、儀式を行った神官が精神力をかなり削られてしまい、数日寝込むような事態になるため、その間の補償という形であり、儲けを求めてのことではなかったからだ。

他の三国が既に同じ様な形で武具の施術を行っていたことも、火の神殿が分割に応じた理由の一つだった。

騒乱の当事国であるビースマックを含め他の三国は騒乱の直後から施術を進めていたが、ラシアスはかなり立ち遅れている。

ニムファにその気が全くなかったからなのだが、エウステラリットはその点が気になっていた。北の呪術が関係しているにも拘らず、ニムファは精霊の祝福法儀式を嫌うかのごとく施術には消極的だった。民の支持が篤い神殿に対し、ニムファはもともと良い感情を持っていなかったが、ライバル心のようなものだとエウステラリットは理解していたつもりだった。しかし、祝福法儀式に対する消極さは、何か自分を脅かすものに対する恐怖でも持っているのではないかと感じさせるような異質さを感じさせていた。

そのため、北の大地派遣軍の武具に対する法儀式は、ヘテランテラの独断でなんとか行われていた。もっとも、ウェンディロフ師団の壊滅と共に、せっかくの祝福法儀式済みの武具は虚しく北の大地に逸散していたが。

「はい、完全な祝福法儀式では、何年掛かるやも知れませぬので簡易でありますが。

現在、第一、第二近衛師団の武具には、完了しております。

近日中には常備第二師団の一連隊分も終わる見通しにございます」

コリンボーサは恭しく頭を下げた。

完璧な祝福法儀式では全ての武具の施術が完了するまでに、年単位の時間を必要としてしまう。

このため、エウステラリットは他国の状況を調査し、不完全であっても全ての武具の施術が迅速に完了するほうを選んでいた。同時に北の大地からの報告で不死者が火に弱いことが判明していたため、常備軍から火の呪文の使い手を近衛師団に異動させ、常備軍には新兵として採用していた。

政治に興味がないはずだった第一王子は、摂政の座に着くやそれまでとは打って変わって積極的な政治家に変貌していた。

他の三国との協調体制の修復はもちろん、北の大地支援の戦略物資に対する関税の引き下げや、それを主要な収入源にしている領主に対する税収の補填、関税の不足を補うための広く薄い売上税の導入などを矢継ぎ早に実施していた。ニムファの失態も、他の三国に実質的な損害を与える前に収集できたことから、ラシアスに対する経済援助は引き続き行われており、ほぼ無償で入ってくる生活必需品に対する売上税で、ラシアスの国庫はなんとかぎりぎりの線で収支のバランスが取れていた。

既に退任が決定しているコリンボーサは、先王が政治の舞台から消えて以降初めて、信頼に値する者の下で働く充実感を感じていた。

「いずれにせよ、場合によっては陛下を、いや、姉上を拘禁することも考えねばならぬ。

その上で地下迷宮の徹底調査だ。

どうも、私は姉上がよからぬことをしているとしか思えぬ。

宰相、ビースマックに人をやり、例の魔法陣の詳細な図面を提供してもらえ。

もちろん、何が起こるか分からぬ故、図面上での結界処理には充分気をつけるように」

エウステラリットは、そう言ってコリンボーサを下がらせた。

「おじさん、本当に怖くない？
食べられたり、しない？」
おずおずと少女がバードンに聞き、恐る恐るといった動きで巨狼に近付いた。

「はい。
それは、我が神の名に賭けて保証します。
おい、狼、解っているだろうな」
バードンは優しく少女に答え、巨狼に注意を促した。

――大丈夫ですよ。驚かすようなことはしませんって。
巨狼から念話が返され、それを感じ取った少女が狼に寄り添った。

――乗ってごらん。
アービィは、少女を極力驚かさないように気を付け、頭の位置を低くする。
巨狼の念話に頷いた少女が狼に跨った。

――しっかり、掴まってて――
「あたしも行く」
ルティが巨狼に飛び乗り、少女を後ろから抱えた。

――何、心配してんの？　大丈夫だよ、危ないことなんかしないから。
ルティは、巨狼の念話に答えることなく、怒ったような顔で馬に拍車をかけるようにその脇腹を力一杯蹴り込んだ。心なしか、ルティの顔が赤く染まっているように見える。
ティアが、笑い転げた。

「笑うな、ボケへ――」

ルティに皆まで言わせず、巨狼が駆けた。

事の成り行きを唖然と見守るだけだった最北の女たちが、少女の身を案じて追いかけようとするが、巨狼はあっという間に遠ざかっていってしまった。

「大丈夫よ、あの狼は。
あたしだけ正体を隠してるなんて、公平じゃないわね」
ティアは、ラミアのティアラを髪に飾ると、アービィ同様その場で獣化する。

「あんたまで、とはね。
どこの部族の神なんだい？」
ラミアはそれほど知られていないのか、最北の女に脅えはみられなかった。

「違うわ。
あたしは神なんかじゃない。
彼とは違う意味で、忌み嫌われるラミア。
魔獣よ。
男の精を喰らい、喰らい尽くして殺してきた、魔獣よ」
少しだけ、悲しげな表情を浮かべ、過去を悔いるようにティアが言う。

「もし、私が南大陸の軍に魔獣が紛れ込んでるって言ったらどうなるのかね
南大陸の住人全てが、あんたたちを受け入れてるっていうわけじゃないんだろ？
北の民だって、南大陸の住人が魔獣を先頭に立てて、北の大地を侵略しようとしているって言ったらどうなると思う？

それを覚悟でその姿になったんでしょうね？」
心底意地の悪そうな笑みを浮かべ、最北の女が問う。
弱みを握ったらこっちのもの、そういった雰囲気を漂わせていた。

「そうねぇ。
今なら、南大陸連合軍は大混乱。
北の民は離反、かな。
それで迷ってるのよ、いつ公表するかって」
あっさりとティアが答えた。

「正気、なの？
間違いなく、殺されるわよ、あんたたち。
何で正体を明かそうなんて、そんなこと思うの？」
人狼もラミアも、人を喰らい、男の精を喰らうため、人に化けて人々の間に潜む。
それが正体を明かすなど、悪魔狩りを呼び込むか、民衆になぶり殺しにされるか、迫害され追放されるか、どの結末になろうと自殺行為としか思えない。

「魔獣全てが、人に対して害を成したいと思ってるわけじゃないわ。
彼もあたしも、人の側で平和に暮らすことを望んだの。
少なくとも、あたしたちの周りにいる人たちは、受け入れてくれてるわ」
もちろん、全ての魔獣がそう考えているなど、ティアもアービィも思ってない。

二人を利用して人に近付き、人を喰らおうとする魔獣が出ることも予想された。
そのような魔獣は、今まで通り討伐すれば良い。その点については、これまでと何も変わらない。

「なんで、そんな面倒を。
姿を変えられるんでしょう？
人として暮らせるじゃない。
無理して魔獣の姿でいる必要なんて、ないじゃないの」
最北の女は、そこが理解できなかった。
既に二頭の魔獣は、人の間に溶け込んでいる。
無理して面倒を呼び込むなど、二頭の気が知れない。

「誤解しないでね。
あたしは人間になりたいわけじゃないの。
あの子たちと旅を始めた頃、そう思ってたこともあったけどね。
あたしも彼も、魔獣として生きたいのよ。
魔獣であることを、隠さなくていい世の中になって欲しいの」
バードンをちらりと見てから、ティアは答えた。
ティアの視線に気付いたバードンは、素知らぬ振りをしている。

「今まで、どれほどの人が魔獣に殺され、喰われたと思ってるの？
そんな存在を、人間が受け入れるとでも？」
最北の民の中にも、当然のように魔獣に襲われ、命を落とした者がいた。特に人狼と言う存在は、会えば死を意味するものとして認識されている。

「人間の方が、よっぽど人を殺してるじゃない。
あなたたちもそうだし、南大陸の住人だって。
魔獣は戦争なんかしないから」
理性や思考力を持つ魔獣はラミアと人狼の他、最北の民が転生した吸血魔獣を入れても、それほど多くはない。
吸血魔獣は悪霊の一形態といってもよく、厳密には魔獣とは違う

存在だ。
　かつては人虎や人熊、人兎、人狐等の、所謂ライカンスロープもこの世界に存在したが、大帝国が南大陸を統一していた時代に全てが絶滅していた。

　人狼は人間並みの繁殖力を持ち、人間との混血も可能だが、ラミアはそうではなかった。五、六百年の寿命が尽きる際に、命と引き替えに一個の卵を残すだけだ。遠い神話の時代にラミアという種族がこの世に生まれ、どれほどのラミアが世界に散らばったかは知らないが、現在ティアの他には数個体しかいないと見られていた。
　ティア自身、ラミアの別個体に会った記憶は、遙か昔のことだった。

　ラミアが実質的に驚異とならない以上、魔獣としては寿命の短い人狼の次世代を教育できれば、アービィやティアの存在を利用して人を喰おうとする魔獣は、根絶できるとティアは見ている。
　それ以外のゴブリンやコボルド、オークといった思考力はあっても知性が高くない魔獣に対しては、二頭を利用して人を喰らうより、二頭を利用して人と共存する方が利があると知らしめれば良い。それでも人に害を成そうとするならば、それこそ今まで通り討伐すれば良いだけのことだ。

「あんたは、私たちよりずっと先を見ているんだね？
　こう言っちゃなんだけど、何で魔獣風情がそんなことを考えたんだい？
　あんたにしても、あの狼にしても、わざわざ生き方を難しくしてるだけじゃないか」
　最北の女は、半ば呆れ気味に聞いた。

「じゃあ、聞いていただこうかしら。

どうしてあたしが、そんなことを考えるようになったか。
そのためには、あの二人のことから知ってもらわないと、ね」
そうしてティアは、長い、狼と少女の物語を語り始めた。

第８８話

火の神殿は、グラザナイに開闢以来未曾有の多忙さの中で祝福法儀式に勤しんでいた。

当然のことながら、祝福法儀式だけに人員を割いていて良いというわけではない。精霊との交感のための祈りや、日々訪れる人々が精霊と契約する際の依り代としての役割といった基本的な神事から、それぞれが抱える神秘的な事象や真理の探求といった精神性や知性を高める自己研鑽、さらには神殿運営に係るカネ勘定まで含めた雑事など幅広い業務が山のようにある。

だが、両大陸の平和に関ってくる武具の祝福法儀式は現在最優先事項になっており、普段であれば精霊との交感こそ最優先の役割であるはずの最高神祇官までが祝福法儀式を行っていた。

そこへ、予告も事前に面会の約束を取り付けることもなく最高神祇官を訪ねて来た者がいた。

遠見の術を精霊の加護により身につけた火の最高神祇官は、既に来訪者を数日前に見通しており、この日の祝福法儀式を他の者に委ね居室でしばしの休息を取っていた。ところが、予想していた時間になっても来訪者は姿を現さず、不審に思った彼は再度遠見の術を行使し、そして頭を抱え込んでいた。

やがて、最初に見通したときより少ない人数、五人だったはずが一人になった来客が、火の最高神祇官が待つ居室の扉を叩いた。

「ええい、騒々しい。
もっと静かにできんのか、そなたは」

火の最高神祇官の呆れ果てたような叱責に動じることなく入ってきた来客は、完璧な所作で挨拶した後、進められる前に傍らの椅子

を引き、火の最高神祇官の前に腰を下ろした。

「いやいや、これは大変申し訳ございません。
いい加減、お耳が遠くなっているのではないかと思いまして、よくお聞き取りいただけるようにと。
本日はお忙しい中、お時間をいただきまして誠にありがとうございます。
旅立ちの前に、一つご挨拶に伺おうと思いまして、こうしてまかりこした次第でございます」

四十半ばに見える男は、丁寧な口調ながら細かいことは気にしないという雰囲気を漂わせている。

「結局、そなたを止め切れなかった、ということじゃな。
ひとつ聞きたいのじゃが、五人で参ったと見ておったが？」

無礼さは相変わらず、と諦めの表情の火の最高神祇官は、分かっていることを敢えて聞いた。

「おや、ご存知でございましたか？
他の者には、用を言いつけ、戻ってもらいました」

悪びれる様子もなく、男は答える。
見ていたなら聞くまでもなかろう、という雰囲気が全身から滲み出ていた。

「これは異なことを……
……今しがた、こちらに運び込まれたようじゃが。
あまり、手荒な真似をするでない」

暫く双眸を閉じ、遠見の術を行使した後、火の最高神祇官は苦々しく言った。

「実力を以って止めようとして者を、実力を以って排したまででご

ざいます。
暫くお預かりいただき、後日帰還するようお伝えください。
あ、もう一言。
『悔しかったらここまでおいで』と」
しれっとした表情で男は答えた。

「全く、飽きもせずそなたらは。
何故、そなたの元に人が集まるか、儂には理解できん。
して、そなたが抜けて不都合はないのか？」
信じられないという表情で答えたあと、心配していたことを火の最高神祇官は聞く。

「ご心配には及びませぬ。
それも併せてお願いに上がりました故。
五人ばかり、こちらに派遣していただきたい」
直後、風の最高神祇官エンドラーズは、火の最高神祇官の血管が千切れ飛ぶのではないかと思えるほどの罵声を背に浴びながら、居室を叩き出された。

「さて、お戯れはこれくらいでよろしゅうございましょうか」
最高神祇官居室に舞い戻ったエンドラーズが言った。

「やはり、そなたが行かなければならんほど、状況は良くないということか？」
火の最高神祇官がエンドラーズに問う。

「既にお見通しの通り、アルギール城の地下迷宮を邪悪な気配が通っております。
間違いなく、最北の地より参ったものでありましょうな、御老の

お見立て通り。
おそらくは、いえ、ほぼ間違いなく、その者の目的は、狼の彼に滅し去られた合成魔獣を再生産するためでありましょう」
エンドラーズの元には、北の大地へ派遣された風の神官から、逐次詳細な報告が届いている。
もちろん、遠見の術を持っていないエンドラーズの元に報告が届くのは、現地を使者が発ってから二十日近くを経過しているが。

「そうであろうな。
人を攫って魔法陣を通してしまっては、不完全な不死者しか作れぬ。
死体なら通せるが、死体からでは高位の不死者は作り出せぬ。
せいぜい、合成魔獣の材料といったところじゃろうて。
かといって、南大陸で不死者の群れを作ることは、我らが見逃さぬ。
せいぜい、数十体の不死者を作った辺りで、我らに殲滅されよう。
今、邪悪な気配の主がどこにいるかは見通せぬが、魔法陣を敷けばたちどころに居場所は見通せる。
アルギール城の地下迷宮のように、な。
マ教も頭を下げてきたこと故、聖水を渡しておいた。
不完全だが、祝福法儀式済みの武具に準じたものが作れよう。
悪魔狩りどもを各地から呼び寄せ、聖水を配っている頃じゃろう」
火の最高神祇官はアルギール城の地下迷宮で、魔法陣の発動があったことにはすぐに気付いる。だが、そこに湧いた邪悪な気配の主は、遠見の術で魔法陣周辺からアルギール城内を見渡したときには、既に城外へ出ていたのか視界に捉えることはできなかった。

だが、南大陸で不死者を生産しようと魔法陣を新たに敷けば、その気配はすぐに捉えられる。場所が特定できれば、手近な神殿かマ教教会から神官なり悪魔狩りを送り込めばよい。　せいぜい数十体

の不死者を作った辺りで魔法陣を破壊できるはずだ。

「合成魔獣であれば、死体からでも作れますな。
獣を狩り、死体を手近な魔法陣から最北の地へ送れば、おそらく、そこには合成魔獣を作る準備が整えられていましょう。
まず間違いなく、ビースマックの山奥か、インダミトの南部で獣狩りをするはず。
あまりにも辺鄙なところでは、御老が遠見の術で捉えていても、こちらの手の者は追い切れません。
死体を最北の地へ送った後、魔法陣は使い捨て、自身は『移転』で跳べば、なかなか捕まえられるものではございませんな。
相当数の合成魔獣が、最北の地で作られるでしょう。
そうなれば、狼の彼や蛇の彼女が正体を隠し通したまま戦うのは、ちと厳しいかと存じます」
自らの出番ができることが楽しみで仕方がないという表情で、エンドラーズが答える。

「そなたはいつも儂のことを『御老』と年寄り扱いするが、そなたとて儂と十ほどしか違わぬ『老』ではないか。
しかし、何故その狼の彼や蛇の彼女に、そなたはそこまで肩入れするのじゃ？」
憮然とした表情から興味津々といった表情に変えながら、火の最高神祇官が聞いた。

「年寄りを年寄り扱いするは世の習いにございますれば。
それより、齢は重ねましたが、この若々しい肉体のどこが『老』でございましょうや。
彼の二頭は、我ら人間の未来を握っております。
このまま人間同士醜く争い続けるか、魔獣ですら共存できると気付き、全ての者が繁栄できるか。

彼の二頭の魔獣が人と並び立てば、自ずと未来を指し示しましょう。

私は、人々の安寧のため、精霊に身を捧げ仕える者にございますれば」

いけしゃあしゃあと、そして決然とエンドラーズは答えた。

エンドラーズがアービィやティアの正体に気付かないはずはなく、アマニュークの一件以来、魔獣が人と共存する様を楽しく見守っていた。

だが、二頭の魔獣が正体を隠し続けるには、北の大地の状況は厳しくなりそうだった。どこで二頭が人の前で獣化しなければならないか予断は許さず、そうなっては人として生きようとしている二頭がどのような不利益を被ることになるか、エンドラーズには手に取るように分かっていた。

二頭の正体が露見する前に、エンドラーズは全精霊神殿が二頭を祝福すると宣言し、二頭の存在を人間に認めさせる気でいる。

もし、人外の存在を許さないというのであれば、これも人外の存在である精霊はその加護を人間に与える理由が消失する。精霊自体は人間がいなくなろうと、何の痛痒も感じない。だが、人間から見ると、もし精霊が消え失せてしまうと、マ教と精霊信仰が微妙なバランスを取っている南大陸に、一気に戦乱の渦が巻き上がりかねない危険性を秘めていた。教会への従属と喜捨という名目の私財の提供を求め、他宗派の存在を基本的に認めないマ教に対し、何ら強制力を持とうとしない精霊神殿は、南大陸の住民の精神安定に欠かせないものだった。

精霊の加護が消え失せれば、後はマ教による宗教的な大陸統一が始まることは、火を見るより明らかだ。

それぞれの四国家の王族から民までは、そこに存在する神殿の属性に無意識に準じていたが、マ教に対する信仰の度合いは人によりまちまちだった。

教会の行事等で信仰の篤い者が優遇され、薄い者は冷遇される程度ならまだしも、マ教が大陸を統一しマ教への忠誠を求めるようになってくると厄介なことになる。宗教の上での優遇と、社会生活における法の上での平等は別物だ。宗教の戒律と法は倫理的な部分で一致することも多く、その二つが並立共存しているなら問題は少ないが、政治の上に宗教が置かれてしまうと、神のお告げといった不確実なものが人々の命を左右することになりかねない。行政のサービスは法を守っている限り平等だが、宗教への信仰心という恣意的に判断できる物差しでサービスに差をつけられては堪ったものではない。

王が特定の宗教を深く信仰するということは、為政者より法王が上位であることを意味する。四国家の王に対してマ教の法王が強い影響力を持ってしまうと、王の挿げ替えやマ教にとって都合の悪い人物の弾圧が始まる。表面上は四国家の王家が政治を行っていても、実質はマ教による大陸独裁と化してしまう危険性を孕んでいた。

独裁は民への猜疑心を生み、次第に独裁を脅かすものへの警戒から密告社会が形成され、親と子が、夫と妻が監視し合い、自由のない社会ができあがる。そのあとは革命という名の暴動から内乱、全大陸を巻き込んだ戦乱の世が始まることは、エンドラーズだけではなく精霊に仕える者全ての共通認識になっていた。

今の時点でエンドラーズは、アービィとティアが魔獣として生きることを選んだことは知らないため、そのように判断していた。アービィとティアにとっては渡りに船というものだが、エンドラーズはどうやって二頭に魔獣として生きることを納得させるか頭を悩ませていた。

もっとも、エンドラーズが悩むなど、数瞬のことでしかなかった。エンドラーズは、二頭の魔獣が姿を偽らずに生きることを選ぶと、何の根拠もなく確信した。

アルギール城を抜けたグレシオフィは、迷うことなくビースマックへ向かう駅馬車のチケットを買い求めた。

人跡未踏の山が多いビースマックは野生動物の宝庫とも言え、インダミトとの国境沿いの南部山脈には多くの大型獣が生息している。これまで作り出してきた合成魔獣では、あの忌々しい人狼に対抗できないと考えたグレシオフィは、さらに強力な合成魔獣を作り出すため、熊、狼、虎といった大型獣や、ゲイズハウンドといった野生の魔獣を狩るために南大陸に来ていた。

もちろん、何でもかんでも合成してしまえばよいとは思っておらず、それぞれの動物にない部分が補い合うようにする必要がある。熊の強力に虎や狼の跳躍力を合わせれば互いの長所が補完しあうが、狼と虎では長所が被り合って却って効率が悪くなる。ゲイズハウンドのような鈍重な魔獣に対しては、これも虎や狼の持つ俊敏さが必要だ。熊も俊敏ではあるが、力強さのほうが際立っており、それであればゲイズハウンドが優れている。ゲイズハウンドと熊を合成するのであれば、それぞれを別個に強化した方が良い結果が得られると、グレシオフィは考えていた。

『移転』で跳ぶことも可能だったが、アルギール城の地下迷宮を抜けた後グレシオフィが見た物は、数年前とは別物のように発展した町並みだった。

場合によっては跳ぶ先がイメージと違っているかも知れず、そうなっていては時空の狭間に弾き飛ばされかねない。安全に『移転』を行使するために、一度目的地までは呪文を使わずに移動することにしたのだった。

馬車の中は行き先を同じくする者同士の奇妙な連帯感に包まれ、決して居心地の悪い空間ではない。

退屈しのぎにそれぞれが故郷の話を始め、皆がそれに様々な質問をするというのが、駅馬車の旅の一日目に良くある恒例行事ともいえた。

南大陸の住人などと話などしたくはないのだが、無用な騒動は起こさないに越したことはないとグレシオフィは考え、人々の話に適度に相槌を打っていた。

無口ではあるが決して愛想が悪いというわけではない人物を装い、グレシオフィは人々に喋らせるだけで、自らは最小限の言葉しか発せず、南大陸の情報収集に努めていた。この場で全ての乗客の血を吸い、吸血不死者に転生させて下僕と化すことは可能だが、陽の光の下では転生した瞬間に灰と化してしまう。駅舎に宿泊している夜にそうしても、朝になれば灰と化し、馬車を操る者がいなくなってしまう。下手をすれば祝福法儀式済みの武器を携えた討伐隊を呼び込む羽目になりかねない。

いつしか話題は北の大地の状況に移り、グレシオフィは身を固くした。髪と瞳の色は南大陸で一般的な栗色に変え、北の民であることは隠していたが、顔立ちまでは変えられず、見ようによっては混血と取れなくもなかった。グレシオフィの認識では、南大陸の住人から北の大地や北の民について、好意的な話題などあり得なかった。当然嘲りや罵り、口汚い言葉が飛び交うことが予想でき、激昂しないように心を落ち着ける努力を始めた。

ところが、彼の意に反して人々の口から飛び出す言葉は、北の大

地の活況に関することや、北の民への今までの見方を改めさせられたといったものが多かった。

もちろん、その場にいる全ての人々が北の大地や民を手放しで褒めているわけではなく、中には今まで通りの見方から疑義を呈する者もいる。褒めている者も、全てを褒めちぎるということではなく、ここは良いがあれはまだダメだ、こちらはこうすればもっと良くなるのに、といったことも多い。好意的な立場の者は北の大地で一仕事して故郷に戻る者たちで、疑義を呈した者は北の大地に渡ったことのないラシアスの民たちに多かった。そして、疑義を呈した者の中にも、いずれ北の大地へ渡り一旗挙げたいと言う者や、そのために今から故郷に戻り商売を整理するという者が何人もいた。

グレシオフィは体中から力が抜けるような感覚とともに、人々の話を聞いていた。

好意的に北の大地を語る者の言うことは建設的で、両大陸の繁栄を考えていることが読みとれる。四百五十年に亘る南大陸の長い平和な世の中に慣れた人々は、北の民が南大陸を侵さないのであれば、それなりに手助けして共に繁栄しようと考え始める者が多いようだ。

インダミト第三王子パシュースを始めとした南大陸連合や、四国家の王と摂政が積極的な北の大地との融和政策を発表していたこともあり、南大陸の住人の間では徐々にではあるが意識改革もなされていた。最北の蛮族に対しても、手を結べば共に肩を並べられるものをと、惜しがる声さえ聞かれた。

山脈以南の安全地帯にいる南大陸の住人にとって、最北の蛮族など南大陸のどこにでもいる野盗程度の認識でしかなかった。

北の民の多くも、南大陸が領土的野心を持たないことを理解して以来、ターバ以南では多くの者が南大陸の住人と交流を持ち、共に働くようにまでなっている。

だが、会話の途中で南大陸の住人が何気なく漏らした『いままで

してきたことを、這い蹲って許しを請えば、仲間に入れてやるのに』という言葉は、グレシオフィの心をささくれ立たせ、誇りを傷つけ、憎しみを増幅させるには充分すぎた。こう話した男に悪意など全くなく、中央以南の北の民から聞いた話が元になっていただけだ。しかし、グレシオフィには、南大陸の住人の言葉に酷く莫迦にされた気がしたうえ、全ての民が最北の民だけを繁栄から置き去りにしようとしているように感じられてしまった。

超人的な精神力で魔力の解放を辛うじて堪えているグレシオフィと、両大陸の繁栄を願い希望を胸に秘めた人々を乗せた駅馬車は、表面上は和やかな雰囲気のまま、順調にビースマックへの行程を消化していた。

獣化したアービィは、ルティと最北の少女を背に乗せ、ターバの北を大きく迂回し、かつて結界を敷いた西の山地へと駆け抜け、基準点を敷いた崖の上に立った。

ほぼ全力疾走だったが、いいかげん乗り慣れたルティが少女を抱えるようにしていたため、なんとか振り落とされずに済んでいた。それでもスピードへの恐怖からか、少女は強ばった表情のまま、巨狼の毛皮をしっかりと握りしめ自ら振り落とされない努力を欠かしてはいなかった。

「アービィ、そこに、臥せっ！」

巨狼の背から少女を下ろしたルティが、にこやかに呼びかけ、次いで怒鳴りつけるように命じた。

反射的に巨狼が臥せの姿勢を取る。

そこへルティが剣を峰打ちに打ち下ろした。岩石と金属を力一杯ぶつけ合う音が響き、巨狼がのたうち回わる。

「お姉さんは、神様なの？　悪魔なの？
人狼が従うなんて、私には信じられない」
見てはいけないものを見てしまったという顔で少女が言った。

「失礼しちゃうわね。
神様でも悪魔でもないのよ。
あなたと同じ人間ですからね」
ルティが笑いながら答える。

――悪魔……
ぼそっと巨狼の念話が届き、目を吊り上げたルティが振り向いたとき、巨狼はひとっ跳びに跳び退る。
そして、崖っぷちまでの目測を誤った巨狼は、着地の姿勢を保ったまま崖下へと消えていった。悲しげな遠吠えがドップラー効果で音程を下げながら遠ざかり、鈍い衝撃音に食いちぎられるように途切れた。

「――！」
声にならない悲鳴が少女の喉から押し出された。

「大丈夫よ。
あのボケ狼は死なないわ、この程度じゃ」
呆れ返ったルティが乾いた笑いと共に言った。

「でも、でも、こんなに高い……
助けに行かなきゃ……」
少女が半泣きになって崖下を覗きこみ、ルティへ振り向く。

「大丈夫。
そろそろ帰ってくるから。

ここで待ってましょ」
少女を安心させるようにルティが話していると、背後から何事もなかったかのように顔で巨狼がさっき通ってきた道を登ってきた。
――ごめんね、驚かせちゃって。
傷一つない巨狼が少女の前に立った。
凶相だが、狂気の影も見えない瞳に少女は安心し、巨狼の首に抱きついた。

「あんたたちも大変だね」
長い物語を聞き終え、最北の女が呟いた。

「同情して欲しいわけじゃないわ。
あたしたちが人間に甘えてるって事は充分承知してる。
魔獣として生きたいなら、無理して人間と暮らす必要なんかないのよね。
でもね、あの子とあの人狼が並んでるのを見てるとね、人間同士で争ってるのが莫迦みたいに見えるのよ」
ティアが呟きに答えた。

「同情なんかするもんかね。
共感はするけどね。
人間が、文明を持って両大陸のほとんどを占有しているこの世界じゃ、あんた方も暮らし辛かったろうって思うだけよ」
最北の女は現状を打破しようとする思いは一緒でも、方法論が異なる魔獣に親近感を持ち始めていた。

「あなた方には感謝しているのよ。
昔からずっと見ているとね、人間って共通の敵があると、昨日ま

でいがみ合っていた同士があっさり手を組むの。
今のところ、あなた方がいてくれたお陰で、平野と中央が手を組んだわ。
後はあなた方だけ。
別に仲良しなんかじゃなくていいのよ。
必要なことは、正式に交渉して決める。
普段からべたべたと馴れ合う必要もないわ。
利害の衝突はどうしたって生まれるの。
今は手を組んでいる平野と中央、南大陸の中でもね。
でも、殺し合いまでする必要はないと思うわ。
そのために、口と言葉と、心があるんじゃないの？」
ティアは解っていた。
最北の民が何故不死者まで作り出して、自分たちより南に住む民に挑んでくるのか。

復讐だ。
千年を越える虐げられた記憶が、復讐へと駆り立てている。

食料の確保が目的であれば、現状で充分だ。
不死者などに転生する必要など、欠片もない。南大陸が北の大地を市場にしようとしていることは承知のうえで、それに乗れば経済的な支配は受けるかもしれないが、生きることは格段に楽になっている。現に、中央以南の民は、南大陸の文化を受け入れつつあり、そこから自分たちに合ったやり方を編み出そうと猛勉強を始めている。
生きる楽しみを、太陽の下で生を謳歌する愉悦を、子を成し子孫を繁栄させる喜びを捨てるほど、不死者としてこの世に残ることに魅力や喜びはない。
僅かに残された生者も、日中の警護のためだけに転生していないだけだった。

仮に、最北の民の侵略がなければ、中央以南がそれぞれ南下する緊急性も生まれず、今までどおり地峡を挟んで両大陸が対立するだけだった。

不死者という強大な軍事力を持った最北の民が南を窺ったからこそ、南大陸は目を覚まし、北の民は団結した。後は最北の民との融和が成れば、両大陸に仮初めかもしれないが平和が訪れる。ティアはそれを説いた。

「そうねぇ、復讐よね。

一時恥を忍んであんた方に頭を下げれば、食べ物はもらえるだろうしね。

アンタ方から技術を学んで、道具を買うっていうのかい？

道具を手に入れれば、最北の地だって豊作になるんだろ？

そうなれば、少なくとも土地の奪い合いは起こらないわよね。

南の温かい土地に住みたいって気持ちはなくならないけど、少なくとも他の民を殺してその土地を奪おうってことはなくなるわ、きっと」

最北の女は北を眺めながら言った。

だが、最北の民は不死者への転生を選んでしまった。

既に、人間の食料を必要としない身体だ。気が向いたときに生者の生血や肉を喰らえば、それで済んでしまう。グレシオフィに従わず、最北の地に抑え込まれている不服従の最北の民は、不死者の餌として生かされているようなものだ。それとて、無理して補充するほどのことではない。生者がいなければいないで、人間以外の野生動物で代用の利くものだ。今更食料援助や耕作地の分割では、最北の民が復讐心を抑えるには意味合いが違ってしまう。

「復讐を諦めろなんて、あたしには軽々しく言えないし、そんな偉そうな立場じゃないんだけど。
それを承知で敢えて言う。
復讐より、明日どうやって食べていくかよ。
アービィたちが連れて行ったあの子まで、不死者にするつもり？
きっとあの子は受け入れちゃうでしょうけど、復讐をあの子の世代にまで押し付けるの？
あなた方が親世代から押し付けられたからって、次の世代に押し付けなきゃいけないなんて決まりはないはずよ。
悲しい連鎖は、食いちぎっても良いと思うんだけどな」
ティアの言葉が、最北の女の心に食い込んだ。
押し黙ったままの最北の女を見て、ティアは言葉を続ける。

「あなたたちの世代は肉親を殺されている人が多いのは解るし、復讐をただ押し付けられたわけじゃないことも解るけど。
どちらかと言えば押し付けられたより、受け継いだってところかな？
あの子の世代にもいるでしょうけど、これから産まれてくる子供たちに、負の遺産が初めからあるなんて、それは可哀想じゃないの？
それとも、もう子供を産まない気？
生まれたそばから不死者にするの？
不死者という兵器を作るために子をもうけるの？
違うでしょ？
愛する人と、血を残すためよね？
南大陸は、あなたたちとの和睦を望んでるの。
もちろん、平和だけじゃなく金儲けのためよ、どんな綺麗事を言ったってね。
それでも、カネがこの地に落ちれば、少なくとも餓えることは減るわ」
餓えを克服しても復讐心を捨てるはずはないと、ティアは解って

はいるが、それでも言わずにはいられなかった。

復讐に燃える大人たちは、それでいい。　だが、純真な、疑うことを知らない子供たちに、会ってもいない者への復讐心を植え付けるのは、洗脳と同じことだ。いま話している最北の女や、収容所にいる男たちと戦場で剣を交えることになるかも知れないが、ティアはその覚悟はできている。しかし、アービィたちが連れていった少女と、戦場で出会うなど絶対に許せない。不死者に転生した子供も、あの少女も、戦場の露と消えるなど大人たちのエゴでしかない。

そんなことをし続けていては、最北の民は遠からずこの世から消えてしまう。

次の世代を担う者まで戦場に投入するなど、国家や民族の末期症状だ。ファナティックな悲壮感に酔いしれ、全ての民を道連れに滅びようとしているのなら、ティアは最北の『蛮族』を許すことはできない。

「解っていて言うなら、私も敢えて承知で言うわ。
私たちが復讐心を捨てるのは、あんたがた全ての民が私たちの前に這い蹲って許しを請うたときよ。
そう簡単に殺しなんかしない。　生まれてきたことを後悔するまで、苦しみ抜いてもらうわ。
そうじゃなきゃ、私たちの虐げられた千年を超える怨みは消えるもんじゃない
両大陸の民を、未来永劫私たちの足下で這い蹲らせてやるわ」
悲しそうな顔で最北の女が言う。

「復讐心を捨てることになってないじゃないの？」
ティアが場にそぐわない口調で言い返した。

「あら、そう言われてみれば、未来永劫だなんて、その通りね」
思わず最北の女は笑い出した。

「そんなの虚しいだけよ。
全ての民を殺し尽くして、不死者だけが残って、その後はどうする気？
考えてないでしょ、どうせ。
不死者だって永遠の存在じゃないわ。永遠なんか、この世には存在しないのよ。
生者がいなくなって、動物すら狩り尽くして、あとは長い長い時間を無為に過ごして朽ち果てるだけ。
生者は死ぬから一所懸命に生きるの。
そして次の世代に世界を渡すのよ。
いつまでも生きてちゃ、邪魔なのよ、どんな生き物もね」
笑いを収め、ティアは表情を厳しくして言った。

「そんなに、人間が大事なの？
こう言ってはなんだけど、あんた魔獣でしょ？
餌じゃないの？」
最北の女はそれが解らなかった。

所詮魔獣にとって人間は餌。そう認識していた。
それを必死に守ろうとしている。敵でさえ。

「そうねぇ。
あたしたちラミアは、人間に依存して生きてきたからかしら。
なんたって、主食が男の精だし。
人間がいなくなるなんて、ラミアにとっては死活問題よ。
実は、いなけりゃいないで普通に飲み食いしてればいいんだけどね。

そうなると今の人間が占めているところはあたしたちラミアと、アービィたち人狼のものになるだけよ」

事実、アービィたちと旅を始めてからというもの、ティアは男の精を喰っていない。

アービィもルティも相手を死なせないという条件付きであれば、禁止する気はさらさらない。だが、ティアはなんとなく遠慮しているうちに、その必要を感じなくなっていた。

「もし、和睦したとして。
私たちはどうなるの？
不死者たちは？」
最北の女は問う。

奴隷として南大陸に売られるならまだいい。
形こそ違え、悲願といってもいい、南の土地に住めるのだ。しかし、中央以南の北の民に隷属するなど、真っ平御免だ。それならば、いっそ戦って華々しく散った方が、民の誇りは守られる。

「そうねぇ。
まずは、基本的な境界線の決定のため、南北連合への代表を決めてもらうわ。
もちろん、立場は対等。
境界が決まれば関税や通行税の取り決め、社会基盤整備や運営、南大陸を含めた中央以南との交易、野盗や魔獣から民を守る軍の設立、整備、運営、他にも山ほどやることはあるわ。
戦なんかしてる暇すらないわよ」
ティアの言葉の羅列を、最北の女が理解するには多少の時間が必要だった。
てっきり、戦後処理の一環として、見せしめ、または鬱憤晴らし

の処刑や、略奪、暴行、奴隷として売り払うなり使役するなりという、苛烈な制裁が待っていると思っていた。

「良いことずくめじゃない。
裏がありそうね」
訝しげな顔が並んでいた。

「そうかしら。
裏があるかどうかはともかくね。
今、ターバにはピラムの民が避難してきているわ。
あなたたちの中にも、いがみ合ってる部族は多いんでしょ？
親子兄弟のように仲良くなれとは言わないけど、それなりに話し合いができるようになっていて欲しいわね。
南大陸の四国家だって、表面上は協調路線を取っているけど、裏に回れば命の遣り取りまで含めた暗闘はあるの。
それぞれの国の中だってそうよ。
政治の実権を握ろうとする権力闘争から、商人同士の足の引っ張り合い、農民同士でも土地の境界線を巡っての係争なんかがあるわ。
でも、そんな諍いを調整しながら、村や町、国、大陸連合を一つに纏めている。
あなたたちにも、最北の民を纏めてもらわなきゃ、和睦すらできないわ」
共通の敵があれば、国家や民族は一つに纏まる。
だが、権力闘争や商業が絡むと、他勢力への内通者も出る。

部族単位で纏まっていた北の民に、国家という概念を持たせるのは、それなりに苦労が伴うだろう。
そのために平野と中央の指導者の血縁者であるヌミフとオンポックが南大陸へ『留学』しているのだが、ここに最北の民からもそれなりの人物を加える必要がある。

「纏めるにしても、力で服従させることはするな。
そういうことね？
力が全ての北の大地で難しいことを言うわね、あんた。
最北の民の中でも殺し合いはあったわ。
下手をすると、南の部族に対する怨みより、深い怨みを持ってる者もいる。
特に、今、不死者を以て服従なり抑圧なりされている部族と和解するのは、あんた方と和睦するより大変かも知れないわ」
最北の女はため息混じりで答えた。

「でも、それをやってもらわなきゃ困るし、調停はするけど最北の民の問題は、あなたたち自身で解決しなきゃいけないことよ」
突き放すようにティアは言った。
直接干戈を交える同士であれば、和平交渉もできるが、最北の民同士の問題に判定を下す立場ではない。

「どうして、そこまで平和を求めるの？
わざわざ最果ての地まで来て。
面倒ごとを抱え込むより、地峡を閉じていれば済むことじゃない。
南大陸の住人は、底抜けのお人好しか、嫌になるくらいのお節介焼きの集団？」
他人事に身銭を切るだけでなく、血まで流して介入する理由が、最北の女には解らない。

「南大陸は北の大地にある燃える石や水、金銀銅といった貴金属や宝石、鉄なんかが欲しいの。
でも、北の民を皆殺しにして奪うなんて、費用対効果が悪すぎるのよ。

軍の派遣、それに伴う人件費や物資に掛かる経費、輸送費なんかがね。

敵地じゃ食料も買えないでしょ。

略奪なんかしたら、それ一回切りで後に何も残らないし、敵が増えるだけだもの。

だったら、正当な取引をして北の大地の資源を南大陸へ運び、そこで製品にして北の大地へ売ればいい。

いずれ北の大地に製造業が根付いて、両大陸規模での交易が始まれば、今以上に経済は発展するし、良い物が安く作れるようになるわ。

これが南大陸連合の公式見解よ。

その本心は金儲け。

それ以上でも、それ以下でもないの。

アービィが言うにはね、燃える石と水があれば今より良い鉄が作れるようになって、鉄の道の上を走る馬の要らない荷車が、馬車千台分の荷物を一日で大陸の端から端まで運べるようになるって。

彼のいた世界では空を飛ぶ船が馬車百台分の荷物を、十万台分の荷物を鉄の船が運んでるんだって。

空を飛ぶ船は、最北の地から南大陸の南端まで、半日で行ちゃうらしいわ。

そうなったら国境も、大陸もなくなる。

行きたい所にいつでもいけるようになるわ。

もっとも、あと数百年は掛かるだろうって言ってたけどね」

ティアはアービィから聞かされた異世界の話をした。

自分が生きているうちに、見られるかどうかは判らない。だが、アービィからイメージを念話で送られ、ティアはそれが嘘でも夢物語でもないことを知っている。

もちろん、アービィは技術の発展がもたらす、戦争の悲惨さも見せていた。

火を噴く丸太や、『爆炎』でさえ火花にしか見えないような爆発を起こす黒い玉。丸太を積んだ自走する荷車や船が火を噴き、人間が紙屑のように吹き飛び原形を留めぬまでに引き裂かれ、空を飛ぶ羽のある船がその黒い玉で市街を焼き払う。この世界でも飢饉の折りには見ることもあった栄養失調に腹だけを膨らませた人々が、虚ろな目で火を噴く丸太を見つめている。

ティアは、続けざまに見せられた恐ろしい光景に、涙と震えが止まらなかった。

アービィが生きていた世界は、科学技術が発展し、平和に満ちた世の中だとティアは思い込んでいた。

それだけの科学を持ち、世界には人が溢れているのであれば、統治方法も優れたものに進化し、人々はなんの不満もなく繁栄を謳歌しているものだと、アービィの話を聞くうちはそう思っていた。この両大陸が、この世界が、アービィが見せたような地獄の劫火に包まれるなど、ティアは許容できない。科学や技術の発展が戦争を呼び起こすのであれば、そんな発展はいらないとまで、ティアは思っている。

魔獣である前に、この世界の生物であるティアは、この世界を愛していた。科学技術の発展は歓迎するが、あんな地獄がこの世界で展開されることは、絶対に受け入れることはできなかった。だからこそティアは、最北の民がしようとしていることを止めたい。何故、恩讐を超えて手を結ぶことができないのか、それがもどかしくてしょうがなかった。

男の精を喰らうためエクゼスの森にある泉に住み着いたとき、ティアはまさか自分がこんなことを考えるようになるとは思ってもい

なかった。旅慣れていない少年と少女に出会うまで、自分がこのような信念を抱くことになろうとは思ってもみなかった。

ティアは戦争の悲惨さを、熱っぽく最北の女に説き続けた。

人狼の子供たちの社会参加支援施設を作りたいと、バードンに説いたときと同等、あるいはそれ以上の情熱が溢れている。復讐は復讐を呼び、戦争が繰り返されるだけで、征服者と被征服者が入れ替わるだけだ。

四百五十年前に終結した、南大陸全土を巻き込んだ戦乱の時代も、平和などあり得ないと思われていた。

事実、戦乱終結直後は、それぞれの国同士にわだかまりが残り、国境を超えることをはばかられる時代が暫くは続いていた。しかし、南大陸の住人はそれを克服している。温暖な気候に恵まれた南大陸は、戦乱に荒れ果てた広野を短い期間で復興させた。

他国との殺し合いに熱中していたエネルギーを、国土復興に振り向けたのだった。

食糧を始めとした物資に余裕ができるに従い、南大陸の住人の心にも余裕が広がった。次第に国境の監視が緩くなり、人々の交流が大帝国時代のレベルへと回復する。そして、戦乱終結から十年と経たず、現在に通じる南大陸の平和の基礎が築かれたのだった。

もちろん、政治レベルでの血の滲むような折衝から、民間レベルの交流まで、時の為政者たちによる巧みな努力があったことは言うまでもない。

幸い南大陸は温暖な気候という条件に恵まれたため、たいして発達していない昔の技術でも、大きな収穫をあげることができた。

それに対し北の大地は、寒冷な気候という不利がある。だが、南

大陸で発展した技術と、ストラーとビースマック北部やラシアスの寒冷な気候にも適応できるように選別という品種改良された農作物は、北の大地の気候という不利を補って余りある。南大陸の住人にできたことが、北の民にできないはずはない。現に食糧を始めとした物資に余裕ができた中央以南は、平和的な融合を果たしている。

後は、あなたたちだけ、とティアは話を締めくくった。

「あんたの言いたいことは、よく解るわ。

そうあるべきってこともね。

でも、私が首を縦に振っても、他の最北の民がどうするか、私は保証できないの。

それに、昨日まで殺し合っていた相手と、明日から笑顔で肩を抱き合うなんて、そんなすぐには……」

最北の女は寂しそうに微笑んで言った。

彼女は、捕虜の女性の中では指導的立場ではあったが、最北の民の指導者ではない。

和平の交渉権を持っているわけではなかった。彼女がティアに共感し、和平を望んだとしても、それは個人的感情なだけであって、最北の民の意志とは言えなかった。

「いいのよ。

そう言ってくれるだけで充分。

南大陸が完全に平和になるのだって、戦乱終結から何年も掛かってるわ。

今すぐなんて言わない。

あの子たちが大人になる頃、両大陸の人たちが自由に行き来できる世界になっていればいいのよ。

あたしたちは、そのためにしなきゃいけないことがたくさんある。

いい？　あたしたちっていうのは、あなたもそれに入ってるの。

仲良く馴れ合いながらじゃなくて、ときには喧嘩したって良い。
それがより良い世の中にするためだったらね」
いつしかティアは涙ぐんでいた。

「そろそろ、あの子たちも戻ってくる頃よ。
そうしたら、あたしたちも帰りましょうか」
涙を隠すように、巨狼が走り去った方に向き直り、背中越しにティアは言った。
やがて、砂塵の彼方に、ルティと少女を背に乗せた巨狼の姿が見えてきた。

陽は傾き始め、初夏へと季節は移り掛けていたが、夕闇の訪れとともに急速に肌寒くなり始めていた。
女たちの話に入り込もうとせず、いつの間にか姿を消していたバードンが、人数分の外套を養鶏所から借り出し、それを担いで歩いてくる。

「お話はお済みでしょうか、皆様。
収容所に着くまでには、かなり冷え込みましょう。
蛇、狼に言ってあれを作らせろ。
以前、釣りに行く前の晩に喰ったやつだ」
バードンは女たちに外套を渡しながら、ティアに言った。

冷え切った身体を暖めるには、収容所の食事より鍋物の方が良いと判断してのことだ。さらに、同じ鍋をつつき合うことで、さらに打ち解けやすくなる。それは自身の経験からも言えることだった。
甘い者を食べながら喧嘩はできないのと同様に、鍋には連帯感を醸成する効果があった。

その日、捕虜収容所は、深夜まで喧騒に包まれていた。

第89話

捕虜たちと語り合った翌朝、太陽が昇る前にルティはベッドの中で目を覚ました。
まどろみの中で、ルティは昨日あったことを思い出している。

ティアたちが待つ場所の近くで巨狼の背から降り、アービィが手近な茂みの中に消えて獣化を解いている間にルティは少女を連れて戻っていた。

「お帰りなさい、楽しかった？」
ティアが少女に訊ねた。

「うんっ！
とってもっ！
人狼が怖くないなんて、夢みたいっ！」
少女の笑顔が弾けた。

その場にいた最北の民の女たちが驚愕の表情のまま固まり、その頬に涙が流れる。
家族や友を戦や病等で失って以来、少女からは笑顔が消えていた。

この子がこんなに笑うのは、いつ以来だろう、誰もが思い出せなかった。友の中には南大陸へ娼婦として売り飛ばされた者もいたが、少女に真実を伝えるのは酷すぎると、病で死んだことにしていた。
だが、目の前で衰弱していったならともかく、明日の再会を約束していた元気な友がいきなりいなくなれば、いくら子供とはいえ、どういうことかくらいはうっすらと想像が付く。全てを失った少女は、

生きて帰れないかも知れないターバ攻略に自らの意志で参加していた。

道中、大人たちが話しかけても必要最小限の返答をするだけで、一切我が儘も希望も口にすることはなかった。表情の変化も、感情の起伏も乏しかった少女は、ルティの持って来る菓子や知らない土地の話に徐々に心を開きつつあった。

最北の民には甘えることはなかったが、次第にルティには甘えるようになっていた。同胞に甘えることは、同格の戦友であるという自らの矜持が崩れてしまいそうだったからだ。その点、直接剣を交えたわけでもなく、歳近いルティは姉の投影だったのかも知れない。何ともいえない安心感を与えてくれたルティに少女は懐き、ルティがいればこそ死と同義の巨狼の背に身を委ねられたのだった。

ルティに懐いているが故に、ルティの質問に答えることが怖かったが、アービィの後押しで正直に答えていた。何故、吸血不死者に転生した子供が、南大陸の住人を『許さない、絶対に』と言ったのかは、代々受け継がれた復讐だ、ということを。

予期していた通りだったから、ルティはショックを受けることはなかったが、やはり落ち込んでいた。

長い間に積み重ねられた怨みが、少女を殺戮の巷へと踏み込ませていた。

いずれ、戦友との間にも友情や愛情が芽生え、その対象を失えば新たな怨みが残る。元はと言えば土地の奪い合いに端を発した係争が、抜け出すことが困難な絶滅戦争という死と怨みの螺旋へと発展しようとしていた。

少女から聞く限りでは、グレシオフィという指導者に付き従う最北の民のうち、二割程度が生者として生かされているらしい。

このまま戦が続き、不死者が損耗すれば、その二割が転生を強制されるのは時間の問題だ。その前に彼らに従わない最北の民が、知性を持たない最下級の不死者に転生させられるだろう。

どちらも大人は構わない。

前者は民族の誇りのため自ら転生を望むのであろうし、後者は戦うことを選び敗れたのであれば仕方ない。逃走は、闘争の一手段だ。捲土重来を期し、一旦退くことは決して敗北主義との誹りを受けるようなことではない。小さなプライドや意地にしがみつき全てを失うことの方が、一時の恥辱より遙かに愚かしく、後の世まで嘲笑の的となる恥ずべきことだ。それでも戦い、武運拙く敗れた以上は、従容と運命に従うしかない。

だが、まだ未来にどんな花を開かせるか判らない子供たちまで、大人の身勝手な都合に付き合わせて良いということは決してない。

『もう殺し合いは嫌、人を殺さないで済む世の中に住みたい』という少女の言葉は、ルティの心に突き刺さって抜けなくなっていた。

知性を残した吸血不死者と違い、低位の不死者は破壊衝動に突き動かされるだけで、思考能力は限りなく低い。

これまで相対した最北の不死者たちの割合は、大半は低位の不死者で占められ、吸血不死者は一割程度と見られている。中央の民をわざわざ中位以上の不死者に転生させるとも思えず、最北の民の中での割合がどれほどかは知れないが、統治するうえで知性が高い者は少ない方が楽であることは、考えるまでもない。ましてや人外の『力』を持った者たちだ。いつ、指導者に反旗を翻さないとも限らない。

いうなれば、低位の不死者は戦場を飛び交う矢であり、剣であり、槍であり、消耗品でしかない。

ルティはアービィからイメージで見せられた異世界の戦争で、自らを砲弾に擬して敵に突っ込んでいった特攻兵に、低位の不死者を重ね合わせていた。

特攻兵も低位の不死者も、敵に突っ込んだ時点で、転生を果たした時点で、積み重ねた経験も、身に付けた知恵も、夢も希望も、何もかもが陽炎のように消えてしまう。

資源や財力だけが民族の『力』ではない。そこに住む人々の知恵や経験、活力こそが、民族の力だ。それを消耗品扱いするような民族に、未来はない。

もちろん、特攻兵も自ら望んで転生した者も、止むに止まれぬ事情があったことや、民族に命を捧げる崇高な魂をルティは否定する気はない。本音の部分は民族を守るというより、愛する者を守りたいということも理解している。敵に突っ込む自分の心を騙すには、民族のためと言う他はないからだ。

だが、十死零生を命令し、自らは安全圏から見るばかりの指導層は、ルティは許せそうもなかった。

ベッドの中で、ルティは取り留めのない思考の渦に巻き込まれていた。

ふと、横を見るとアービィが幸せそうな顔で眠っている。無性に腹が立ったルティは、八つ当たりとは判っていたが、アービィをベッドから蹴り出していた。

「何てことをするっ！？」

まだ目が覚め切っていないアービィが、ルティからシーツを剥ぎ取ろうとする。

「うるさいっ！

一人だけ幸せそうな顔して寝てんじゃないわよっ！」
ルティは奪われまいとして、シーツを抱え込んだ。

「何、その言い掛かり？
ルティと一緒に寝てるのは、幸せじゃないか！」
アービィが言い返したとき、ティアの部屋と仕切る壁から、太いロープを叩き付けるような鈍い衝撃音が響いた。

「朝っぱらから何痴話喧嘩してんのっ！」
廊下に二人を正座させ、説教をかますティアの眼は、安眠を妨げられた怒りと、寝不足による充血で朱に染められていた。

「あんまり、捕虜たちに肩入れしちゃダメよ、ルティ」
いつものように菓子の差し入れから帰ってきたルティに、ティアが言った。

「あの子のことが気になるのは、解るんだけど。
ターバの人たちからすれば、町を壊滅させた仇よ。
それだけじゃない。
ピラムの人たちから見ても、あの子たちは敵なんだから。
わざわざ冷酷に扱うことはないけど、必要以上に馴れ合っちゃだめ。
あたしたちの立場が悪くなるだけじゃないの。
ラルンクルス様、プラボックさんや、パーカホにいるルムさん、ランケオラータ様にレイたちまでね」
現状で、最北の敵対している勢力に、情報収集という名目があるにせよ、必要以上に肩入れすることは、いらぬ誤解を生みかねない。
ターバの民から見れば、ピラムの民は懐に飛び込んできた窮鳥だ

が、捕虜になっている最北の民は騙し討ちで同胞や家族、友、愛する人を不死者に変えた許し難い仇だ。
理性のうえではいずれ和睦するものだと理解はしているが、まだ感情が追いついていない。ターバ解放の際にも、軍の到着があと一日遅れていたら、怒り狂った生き残りのターバの民が八つ裂きにしていたかも知れなかった。

そのような存在に何かと便宜を図っていてばかりでは、立場が悪くなるのはルティたちばかりではなく、捕虜たちにも今以上の反感の目が向けられてしまう。
戦時である以上、線を引くべき所はきっちりと引くべきだった。その戦を終わらせるべく、最北の民との友好関係を築こうとしているルティの気持ちは解らなくもないが、戦略に則っていなければ、全ての足を引っ張る結果しか招かない。
最北の民の復讐心を、少女の心に燃え上がらせないようにするため、ルティは周囲が見えなくなっていた。

政争や戦を生業とするランケオラータやプラボック、ルム、職業軍人のラルンクルスと違い、所詮ルティは二十歳そこそこの小娘だ。鋭い洞察力を垣間見せることも多いが、やはり人生経験や薄汚い人生の裏道という部分では疎いところが多い。底抜けにお人好しなアービィとの付き合いが、ルティにすれっからしになるべき部分まで素直に成長させてしまっていたのかも知れなかった。

フォーミットのような、生まれてからずっと同じコミュニティで暮らし続けるならいざ知らず、今は自覚があろうがなかろうが命がけの毎日だ。
最北の民に肩入れする余り、ターバの民やピラムの民を気付かないうちに蔑ろにするようなことがあれば、不満が噴き出したときに

迫害や暗殺といった事態を引き起こさないとも限らない。
ここ三十日ほどのルティの行動は、ティアにそういった危惧を抱かせるには充分すぎるものだった。

「うん、気を付ける……」
ティアに指摘されるまで、ルティはまるでその危惧に気付いていなかった。

昨夜遅くまで収容所で、アービィたち四人と捕虜たちは話し込んでいた。
男性を収容した屋舎に集まったのだが、特例としてトイレに扉を設置している。これだけでも、『必要以上の便宜』といえるだろう。ルティとティアに配慮してのことなのだが、それが外に知れ渡ればどんな反応があるか解らない。
細かいことだが、諜報活動の手助けと取れなくもないのだった。

「うん、早めに言わなかったあたしも悪いと思ってる。
昨日もね、厠の扉とか付ける前に、どうにかできたはずだもんね」
ルティの必死さにさせるがままにしていたティアも、やりすぎていたことを自覚していた。

連合軍司令部からは、諜報活動の一環、和平への一環として黙認されてはいた。
しかし、あまりおおっぴらに捕虜を優遇していては、民の反発を買いかねない。

「今日ね、アービィに新しいお菓子のことで訪ねてきた戦務参謀さんに言われたのよ。

お気をつけ下さいって。
言い難そうだったから、申し訳なかったわ」
ティアは捕虜の扱いについて、アービィと戦務参謀を交えて話し合ったことを、ルティに説明した。

以前より、ただ飯喰らいと後ろ指を指されていた捕虜たちを、工兵の部隊に組み込んではどうかとアービィは考えていた。
だが、市街や主要街道の整備は軍規に触れることも多々あり、工兵部隊への組み込みの実現は難しそうだった。それならばいっそ、町の外にある農地を一部整備させて、収穫物は買い上げてはどうかとなったのだった。

土地整備の名目で工兵を一緒に行動させ、南大陸の技術を知らしめると共に、ピラムの民が整備し始めた区画の隣をあてがう。
境界は当然柵で仕切り、警備兵が監視に当たるが、柵を乗り越えて乱闘でも起こさない限り、互いの交流は阻害しない。
ピラムの民からは南北連合への協力を取り付けており、積極的に捕虜に話しかけてもらうことになっている。ピラムの民にとってはターバの民や南大陸の住人に受け入れてもらえるかの試金石でもあり、長年の怨みを呑んで協力に同意していた。もちろん、最新の農耕酪農技術の取得は魅力的であり、父祖の地を富ませることができる、と建前の逃げ道を作ることを、交渉に当たった戦務参謀は忘れなかった。

ターバの民の批判を交わし、ピラムの民を南北連合に引き入れ、最北の蛮族を切り崩す一環として、捕虜たちが労働に従事することが決定している。
早ければ、今日中にもその通知はなされるだろう。当然のことだが、最下級の兵に準じた日給が支給され、それなりの収入も保障されている。幼子であっても労働力の一部と見なされているこの世界

では、あの少女にも能力に応じた給金が支給される。
日常に必要な消耗品から、市場にあれば贅沢品まで、所持金に応じて入手可能となるのだった。

そこへルティがこれ以上贅沢品でもある甘味の差し入れを続けることは、余計なお節介でもあり、捕虜への過剰な肩入れと見られても仕方がない。収入がある者は、その懐具合と相談して、購入する物を決めれば良いだけのことだからだ。
捕虜の農作業を、手伝いに行くのも論外だ。軍は、捕虜の人数能力にあわせて労働を決めている。そこへルティが入り込んでしまえば、労働量と給金の釣り合いが取れなくなる。昼食の支度も労働に組み込まれている以上、炊き出しの手伝いも同様にするべきではない。
ルティと捕虜の接触を断つための措置としてわざわざそうしたわけではないが、結果的には無用な悪評を立てられることもなくなりそうだった。
戦務参謀の差し金だとしたら、のほほんとした顔の裏にどんな能力を秘めているのか、ティアは頼もしくも恐ろしくもあった。

「急に掌返しする必要はないからさ、今から一言断っておけばいいんじゃないかな」　お互い納得尽くとは言え、いきなり態度が余所余所しくなるのもおかしな話だ。

「うん、ちょっと行ってくる」
複雑な表情を浮かべながら、ルティは帰ってきた道をまた戻っていった。

「神官殿、火急のご用件と伺いましたが、いかがなされた?」

エンドラーズが意気揚々と北の大地へと旅立ってから十日ほど経った夕暮れ時、アルギール城の謁見の間では火の最高神祇官の名代である神官と、ラシアス王国摂政エウステラリットが対面していた。

「ご公務の終了間際にお邪魔して、大変申し訳ございません。本来でございますれば、明朝参上仕るところではございますが、最高神祇官より一刻も早くお目通りいただくよう、仰せつかっております」

いかにも恐縮といった表情の中にも、焦りを隠せない神官が早口に述べた。

「最高神祇官殿の命とあらば、時刻など気にする必要もない。ご用件を申されよ」

神官のただならぬ雰囲気に、エウステラリットは宰相コリンボーサを始めとした閣僚たちを次の間に下がらせる。

「ご配慮ありがとうございます。実は、アルギール城地下迷宮より、生者とは思えぬ邪悪な気配を最高神祇官が感じ取りましてございます。最北の地より北の大地を侵しつつある、不死者のものと我らは見ております。今、精霊のご加護によって、我が両眼は最高神祇官の遠見の窓となっております。その術を以て、地下迷宮にて何が起きたかを実見し、ご対策を講じていただくようにとのことでございます。もちろん、我らも必要なことがございますれば、全力を挙げる所存でありますが、なにぶん距離もございますれば、当面は摂政殿下にご対策いただかねばなりませぬ」

「さようか。

が、神官殿、地下迷宮はご存じの通り、国家の機密故、我らの調査をお待ちいただきたい」

内心の焦りを隠し、表面上は平静を装ってエウステラリットは答える。だが、言葉の調子はいかにも歯切れが悪く、堂々と正論を以て神官の申し出を退けるような勢いはない。

「大変申し上げ難いのでございますが、事は南大陸全体に関わることでございまして、かつ、急を要すことでございます。場合によっては結界を敷く必要もあると、最高神祇官は申しておりました」

言葉とは裏腹に、悪びれる様子もなく神官は言う。

「しかしだな、地下迷宮は我らの避難通路であることはご存じであろう？

それを王族以外にお見せするわけには――」

「我らがグランデュローサ王家に弓引くとでも？

世俗の一切の権力とは無縁の我らが、どうして王家の機密を他言いたしましょうや。

それ以上に一王家のご都合により、大陸全土の安全保障が脅かされるような事態に陥ることは、殿下のお望みとは思えませぬが」

神官にも焦りがある。

まさか、摂政が地下迷宮の調査に、消極的になるとは思ってもいなかった。

確かに、地下迷宮は王族の緊急避難用通路であり、詳細を知られてはかなりの不都合があるのは解る。

だが、それは他の三ヶ国や北の民に知られたら、ということだ。

精霊神殿はどの権力組織とも通じてはおらず、ましてや王朝転覆を企むような権力欲など微塵もない。神官は、知られたくない理由を考え始めていた。

精霊神殿が王族の機密を掴んでそれを如何こうしようとは、エウステラリットも考えてはいないという確信は神官にはある。であれば地下迷宮に入られたくない理由は、そう多くない。十中八九、身内の恥だ。そこまで考え、神官は悩んでしまった。事がことだけに、王家の恥などという瑣末な理由で、南大陸を危機に晒すわけにはいかない。しかし、性急に事を進めた結果、グランデュローサ王家と対立するような事態も招きたくはなかった。

エウステラリットも悩んでいる。

おそらく、いやほぼ間違いなく、私室に引き篭もっている女王ニムファが、何がやらかしているということだ。神官が地下迷宮に入ること自体は、エウステラリット個人としても、ラシアス王国摂政としても、何ら問題ないと考えている。だが、ニムファがやらかしていることが満天下に露見することは、グランデュローサ王家の人間としては認め難いことだ。

神官の言うことに嘘偽りがあるとは思えず、火の最高神祇官の見立てが間違っているとも思えない。

つまり、目下南大陸の全住民と、北の大地中央以南の民全ての敵である最北の民と、ラシアス女王が通じていることの証明になってしまうのだった。クーデターを起こされても、文句の一つすらいえない状況だ。国家反逆罪どころの騒ぎではない。

しかし、おそらく神官が最も調査したいであろう場所への扉は、ニムファが持つ鍵でしか開けることはできない。そして、その鍵をニムファが渡すとはとても思えないし、まず何よりもその通路へ入るには、ニムファの居室を通らなければならない。

それもニムファが許すとは考えられず、城外の出口もニムファしか知らないのだった。

エウステラリットは困惑の表情を浮かべ、口では神官の申し出に

対し言を左右していた。
しかし、神官は摂政の右手が、玉座の横に設えられた署名用のサイドテーブルに置かれた紙片の上で、ペンを握ったのをみた。なるほど、と無言で頷き、わざと堂々巡りの問いかけを行い、摂政の思考の比率を紙片上のペンに傾けさせた。
ややあって、摂政が紙片を懐にしまい込み、側の者を呼び出した。

「神官殿もお疲れのご様子。
ささやかだが、食事などいかがかな？
それまでは、今夜の部屋をご用意してあるので、そこにておくつろぎいただきたい」
そう言ってエウステラリットは、神官との会見を切り上げた。

用意された部屋に入るなり、神官はサイドテーブルに向かい、備え付けの便箋にペンを走らせ始めた。
やがて、エウステラリットの使いの者、明らかに尋常ではない目つきの者が、先ほどエウステラリットが書き記したと思われる紙片を封筒に入れて持ってきた。
蝋封された封を切り、内容に目を通した神官は、予想通りの内容に自らの上奏書を手直しすることなく封に入れ、摂政の蝋封の上から精霊神殿の蝋封を施し、それを使いの者に渡した。使いの者は無言で受け取り踵を返したが、神官はその背中に声を掛けた。

「お役目ご苦労様です。
あなたの剣は、祝福方儀式済みでございましょうか？」
無言のまま、使いの者は首を横に振る。
彼は、何故そのような問いをされたのか瞬時に悟るが、立場上丸腰であることが建前であり、隠し持てるような短刀に方儀式を施す機会はなかった。

「さようでございますか。
お立場上やむを得ぬことでございましょうが、今後立ち向かわれる相手は通常の武具は通用いたしません」
神官は聖水の取り扱いを手早く説明し、使いの者に持たせた。

神官が食事を摂っている間、エウステラリットは一枚の紙を前に考え込んでいた。
遠見の術により地下迷宮の出口は全て判明しており、幻惑のための側道を排した道順も、同様に見通されていた。しかし、ニムファ専用の避難通路途中にある広間には、邪悪な結界が中から敷かれているようで、遠見の術を以てしてもその様子を見通すことが適わなかった。
精霊の結界を敷こうにも、広間の周囲をくり抜かなければならず、そのような工事をするわけには行かない。同様に地上に結界を敷こうにも、民家や商業施設が建ち並び、それらを立ち退かすことも不可能だ。

神官からのメッセージは、広間の城外への出口前に結界を敷き、市街への不死者の侵出と、ここを通った者の帰還を同時に阻もうというものだった。さらに、城内への侵入を防ぐために、ニムファの居室そのものか、廊下の要所に結界を敷くとも、記されている。
前者については、なんの問題もないだろう。それこそ、今夜中にでも片の着く話だ。だが、問題は後者だ。

ニムファが居室から出てくることはないが、廊下で何をやっているかは音も伝わるであろうし、身の回りの世話をしている侍女たちからも伝わる。
彼女たちは、当然といえば当然だが、ニムファには逆らえない立場であり、ニムファに対する忠誠も、憧れも強い。当初は抱き込ま

れないようにエウステラリットの息の掛かった者たちが侍女として事に当たっていたが、自分に対する敬意や憧憬、忠誠には人一倍敏感なニムファに見抜かれ、早々に任を解かれていた。エウステラリットは、身の回りの世話さえできればよいと考えていたこともあり、それならいっそニムファのお気に入りの侍女たちに任してしまえば波風も立たないと思い直していた。

これまでは引き篭もり女王の我が儘に付き合わされるだけの侍女たちだったが、今後は女王直属の、能力は皆無に等しいが、眼にしたことを伝える程度のことはできる間者として見なければならなくなる。

神官や閣僚の殺害や、流言飛語の類を流布するような真似は無理としても、結界を壊す程度のことはできるだろう。

かといって、いきなり全員解雇してはニムファに気付かれ、さらなる厄介を抱え込みかねなかった。地下迷宮ニムファルートの外への封印は構わないとしても、城内への封印をどうするか、エウステラリットは頭を悩ませていた。

神官には、エウステラリットの苦衷が理解できる。

権力欲や支配欲など欠片もない精霊神殿だが、人民の統治機構として権力や支配力は必要なものだと理解している。こられなくしては、人間は文明の萌芽以前、力のみが支配する殺戮の時代へと逆戻りしてしまう。

正直なところ、グランデュローサ王家がどうなろうと、精霊神殿は知ったことではない。

王家は民を支配し、税を徴収する権利を有し、民は納税の義務を負うが、無条件に服従しているわけではない。明文化されてはいないが、王家に支配者たる資格なしと民が判断すれば、革命を起こし、王家を倒す権利を民は有している。そして王家は徴税や諸々の権利

の代償として、民の安全な生活と精神の安寧を保障する義務を負っている。この世界の司法権は王家が有しているため、民には王家の罪を裁く場がない。このため、王家の罪が支配者としての権利を超越した場合、民には王家を倒す権利があると認識されていた。

今、女王ニムファがしようとしていることは、既に王に許された範囲を遙かに超えようとしていた。侵略勢力と結ぶなど、民を蔑ろにするにもほどがある。

もし、エウステラリット以下の王家やコリンボーサ以下の閣僚に、自浄能力がないとなれば、グランデュローサ家とその輔弼機関である閣僚たちに残された道は、断頭台か絞首台のどちらかしかない。

だが、万が一、現状でグランデュローサ家が倒れた場合、ラシアス王国は荒廃する。国が成立し、人々が曲がりなりにも安全に暮らすために法が定められ、法に背く者を捕縛し、裁くことを国家に民が付託している今、王家の崩壊はとんでもない混乱を招く。全ての人々が博愛の精神に則り生きているわけではないからだ。

圧政に耐えかねた民衆が、王政を倒し、新たな政体を樹立しようというのであれば、それなりの準備もあり、混乱は短期間で済む。しかし、今回のケースは突然すぎ、混乱を収めるための新たな政体があるわけではない。南大陸連合が臨時に統治するにも、グランデュローサ王家の人間であるヘテランテラの処遇次第では、説得力がなくなってしまうこともあり得る。

砂を噛むような食事を終え、神官は寝室へと戻った。その扉には、一枚の紙片が挟まれており、エウステラリットの私室へ来るようにと記されていた。

エウステラリットは、深い懊悩に沈んでいた。

テーブルには王族にしては質素ではあるが、庶民のひと月の稼ぎでも購いきれないような料理が冷え切っていた。もちろん調理が拙

いわけでも、素材が悪いわけでもなく、単にエウステラリットの食欲が消失していただけだ。ついにナイフとフォークを手にすることなく、給仕係に料理を下げるように命じ、次いで執事を呼び料理人たちに謝罪の言葉を伝えるように命じた。さらに影の者を呼び出し、いくつかの命令を下す。

一つは神官を居室に呼び出すことだが、もう一つの命令を下す決断のため、今夜の料理が犠牲になっていた。

ニムファのやろうとしていることは、国家反逆罪しか当てはまらないほどの大罪だ。それどころか、南大陸だけではなく、北の大地も血にまみれようとしている。

そのようなことを企む当事者に言い訳など許されず、断頭台の露と消えるのみ。そして、一族郎党皆殺しだ。つまり、ニムファを断罪するのであれば、エウステラリットは自分自身を絞首台に送らなければならなかった。彼自身だけではなく、南大陸連合に出向しているヘテランテラや臣籍降下済みの次兄、他家に嫁いだ妹たち、先王の菩提を弔う毎日を送る皇太后たる母ばかりでなく、血筋の者一人残らずだ。それは、ラシアスから公爵家が消滅し、ほとんどの侯爵伯爵家の跡取りが消失することを意味していた。

そうなっては、亡国だ。

エウステラリットは、己が命が惜しいわけではなかった。

ラシアスを滅ぼすことだけはできない、いずれ異なる血筋の王家が勃興するなり、新しい政体が打ち立てられるなりは構わないが、祖国を荒廃させることだけは避けたかった。

つまり、ニムファを完全に幽閉する覚悟を固めたのだった。

地下迷宮の出口は結界で塞ぐが、途中の広間からニムファの居室までは結界が敷けない。

どう言葉を労しようとも、ニムファを説得できるとは思えなかっ

た。居室から一歩も出てこないニムファの外界を覗く眼は、身の回りの世話をしている忠実な侍女だけだ。これを交代させることが事実上不可能であれば、ニムファの眼を塞ぐには寝返らせるしか方法はなかった。

女王の侍女ともなれば良家の子女であることも条件の一つであり、それなりの俸給も保障されていることから、金品で釣ることは無意味と思われた。そうであれば、残された手段は一つ。男だ。同性愛者であれば、もちろん女も用意する。

エウステラリットが影の者に与えたもう一つの命令は、女王の侍女をあらゆる手段を用いて籠絡することだった。

「お呼びと伺い、参上いたしましてございます。
して、ご用の向きは如何なることにございましょう」
まだ宵の口と言って良い時間帯に、神官は摂政の居室を訪れた。

「ご足労をお掛けして申し訳ない。
地下迷宮の実見だが、出口から広間まで遡るのであれば、神官殿のご都合のよろしいときに、いつでもお願いしたい。
だが、広間から女王陛下の居室までは、摂政の私では許可の出しようがないことをご理解きただきたい。
陛下は誰ともお会いにならず、身の回りの世話をする者以外、居室への入室を禁じておられる。
神官殿のお見立て通り、地下迷宮に不死者の拠点を築いているのであれば、陛下の居室の出口を結界で塞いでしまえば良い。
そのため、我らは、いや、私は外道の方法を採ることに決した。
それをお伝えしたかった」
神官に口を挟ませることなく、エウステラリットは一気に言った。

「しかと、承りましてございます、摂政殿下。して、陛下の居室周辺の結界は、いつ敷けばよろしゅうございましょうや？」

半分諦め顔で、神官は答えた。

当然神官が見聞きする事象全ては、遠見の術により火の最高神祇官の知るところだ。この会話も、全て伝わっている。

今頃は最高神祇官から主要な神官たちに、必要と思われるあらゆる指示が飛んでいることだろう。

そして、こうなることを予見して、最高神祇官は神官に対してアルギール常駐を命じていた。

いつ如何なるときでも結界を敷設し、武具に対する祝福法儀式は無理でも、聖水を作り、城内に貯蔵しておくためだ。万が一、魔法陣を通して不死者の群れを送り込まれても、それだけの準備が整えられていれば、落城だけは防げると考えられたからだった。

「まだ、手を打つことを決めたばかりでな。今日明日というわけには参らぬ。神官殿に申し訳ないのだが、しばらくの間この城に逗留していただきたい」

為政者の表情でエウステラリットは言った。

弱みは知られているが、それでもそのことは億尾にも出さず、努めて威厳を保つ努力をしていた。

「畏まりましてございます。こんなこともあろうかと、聖水をこちらで生産できるよう、準備は整えて参りましてございます。

何処か、何人の邪魔も入らぬ、精霊に祈りを捧げることが可能な部屋をご用意いただきたくお願い申し上げます」

やはり、という表情が浮かびそうになるが、神官は必死に平静を

保とうとした。
精霊と交信する際の無心の境地を思い出し、国難に当っても身内の情を優先する為政者に対する失望を、顔に出さないようにするため神官はあらん限りの努力を続けていた。

神官同様、エウステラリットも努めて平静な表情を作ったつもりだが、苦衷は滲み出てしまっている。
エウステラリットは、ニムファを暗殺するべきかどうか悩んでいた。

現状を鑑みるに、ニムファがいつ不死者を呼び寄せないとも限らない。国を傾かせるような要因はこの瞬間にでも取り除くべきであるということは、エウステラリットは理解している。
本来であれば、ニムファの罪状を国民に対し詳らかにし、断頭台へ送るべきだということは理解している。だが、それは同時にラシアスから治安維持機構が消滅することをも意味している。犯罪の嵐が吹き荒れ、無辜の民が路頭に迷う近未来をエウステラリットは許容できなかった。それ故暗殺か幽閉で、迷っていたのだった。そして、彼の政治センスは、暗殺するべきだと告げている。だが、下手にことを運べば、王位簒奪と受け取られかねない。
美貌の若き女王の人気は、決して低くはなかったからだ。

彼が生来の為政者であれば、少なくとも帝王学を学んでさえいたのであれば、ニムファを暗殺することに躊躇いはしなかっただろう。しかし、早い時期に臣籍降下を決心し、国政を学ぶこともなかった彼に、非情に徹するように求めることは酷だったのかも知れない。
そのうえ、優しかった姉の面影が、その非情の決断を鈍らせている。

決して我が身惜しさではないと言い聞かせているが、心のどこかで助かろうと足掻く自分がいることも自覚していた。できれば姉を幽閉するだけに留め、国難を解決した後に和解したい。エウステラリットの儚い望みがラシアスの命運を左右しようとしていた。

最北の地は、狂気のような忙しさに陥っていた。

ありとあらゆる猛獣や魔獣などの死体を、南大陸に渡ったグレシオフィは送りつけてきている。それを腐らないように氷漬けにする作業が、黙々と続けられていた。その横では、送られてくる死体と保存されている死体を魔法陣の中に並べ、合成魔獣を作り出す作業も続けられている。必要な組み合わせで死体が送られて来ることは稀で、ほとんどの場合はその場で合成に回すものと保存するものの仕分け作業も必要だった。

如何に身体を休める必要のない不死者とはいっても、高度な精神活動を可能にしてる中位以上の吸血不死者では、却ってそれなりの休息は必要だった。

通常は日中太陽が照っている時間がそれに当てられていたが、戦時急造態勢とあってはそれもままならない。至る所で命令、復唱、報告が飛び交い、苛立ちの入り交じった怒号が錯綜する。もともと動きの鈍い低位の不死者への苛立ちと、その理解力の低さに対する苛立ちが、吸血不死者たちの神経を紙ヤスリで逆なでするかのような作用を及ぼしていた。

それでも肉体的疲労とは無縁の不死者たちは、グレシオフィ不在の間を預かるオセリファの指揮の下、サボタージュという発想すら抱かず勤勉に合成魔獣の生産に努めていた。

オセリファは、わざと見逃したピラムの民の動向が気になってい

た。

グレシオフィは、ターバの民は彼らを受け入れないと読んでいた。彼らはターバを陥落させた最北の民とは相容れない存在ではあったが、ターバの民から見れば同じ穴の狢だ。敵の敵は味方になり得るが、ピラムの民が独自に侵略行動に出たのかも知れないとの疑いは捨てられないだろう。そして、最北の地からの難民という立場は、ターバを陥落させたときと同じ状況を作り出していた。

もし、情報を欲しがって南大陸軍がピラムの民を取り込めば、ターバの民と南大陸の住人の間に、埋めがたい溝を作ることが期待できた。

「オセリファ様、ピラムのウジ虫どもは、どうなったのでしょうな」

オセリファの背後に立った、身長１９０ｃｍを超える偉丈夫が不安と期待に満ちた表情で口にした。

「そちの気にするところではない。

どう転んでも、我らにとって悪いようにはならぬ。

捕虜となった者たちが脱走してくれれば、もう少し状況も分かるが。

それより、そちに命じておいた、我らに恭順を拒む者共の制圧は、どうなっている？」

一切の感情を感じさせない目つきで、オセリファは偉丈夫に言葉を叩き付けた。

ターバの民も南大陸の住人も、ピラムの民を受け入れないという選択肢はある。

もし、ピラムの民が拒絶されたことで自暴自棄になり、ターバ周辺で一戦交えるというのであれば、敵の総数を減らすことになるので歓迎すべきことだ。

ターバと争わなくても、行く先々で諍いを起こしてくれるだけでも充分だ。

最悪の事態はピラムの民がターバに受け入れられることだが、それだけはないだろうとオセリファもグレシオフィも考えていた。安易に考えているのではなく、中央以南の民と最北の民は、相容れない存在であると認識されていたからだった。

それとは別に、最北の地に居住する民の中には、グレシオフィに従わない者も数多くいた。第二第三のピラムの民が出ては、最北の戦力が枯渇してしまう。反抗する生者は、尖兵たる使い捨ての不死者の原料だからだった。制圧後は不死者へと転生させ、最前線に放り込むための原料なら、いくらあっても不足はない。

その原料調達が、偉丈夫の仕事だった。

「それが、今暫くお時間をいただきたく。
敵も必死に砦を守っております。
不死者どもの損害が無視できぬ状況でございまして」
偉丈夫が歯切れ悪く答える。

「やはり、そちは無能者か？
その量の眼より上は、兜を乗せる台か何かか？
力攻めしかせぬから、相手も必死になるというのが分からんか。
守りを固めた砦を落とすには、攻める側は守る兵の三倍は必要ということも知らんのか。
相手は食料も休息も必要とする生者ぞ。
我が方の生者と不死者を善く使えば、包囲するだけで乾殺しにできるものを。
功ばかり焦りおって」
相変わらずオセリファの眼には、感情が現れない。

集団戦闘において、個人の武技の優劣など些細な要員でしかない。戦は数だ。どれだけの槍衾を、敵の前に敷き並べられるかで全て

を決する。いくら十人力、百人力の兵がいようと、それ以上の兵力で押し包んでしまえばそれまでだ。百発百中の砲一門は、百発一中の砲百門に勝るなどということは、絶対にあり得ない。百発百中の砲一門が一発放つ間に、百発一中の砲百門から百発の砲弾が殺到する。確率でいえば、その中の一発は命中するはずだ。百発一中が一撃目に集中する確率も、ゼロではない。もちろん、一撃目が全弾外れる可能性もあるが、百発百中の砲が百発撃つ間に、百発一中の砲百門から一発当たりが出ればいいだけだ。

偉丈夫には、その理屈が解っていない。

個人の武技だけで、防備を固めた砦を落とせると信じ込んでいる。決闘で全てが決するならそれでも良い。だが、集団同士のぶつかり合い、特に包囲戦は、隙間を無くすことこそ重要であり、いくら武勇にすぐれようと一人の将が砦や城を包囲できるはずはない。

文明が発達する以前であれば、個人の武勇に敵が怯えて開城することもあっただろうが、集団戦に慣れた北の民には数こそ重要という認識が強く、勇将の名声だけで戦いが決することなどあり得なかった。戦の演習しか経験していない偉丈夫には、それが理解できていなかった。

ウェンディロフ元ラシアス王国子爵は、貴族の権威に敵は平伏すものという過去の常識から、未だ解放されてはいなかった。

砦に対し、大音声で名乗りを挙げ、貴族の権威を振りかざして降伏を求め、拒絶されれば正面から兵力を叩き付ける。

ウェンディロフの作戦は、単純で稚拙だ。

グレシオフィから与えられた中位の不死者としての能力が、彼をして低位の不死者を灰へと駆り立てている。逆らうことなど発想すらしない従順な不死者に囲まれて、彼は全能感に酔い痴れていた。

決戦兵器としてなら彼は有能だったかも知れないが、将としての器は欠片もなかった。

「そちを中位の不死者として蘇らせたのは、徒に我らが民を灰にするためではない。
今度こそ再生など不可能な灰になりたくなければ、全力で、不死者たちを無駄に失うことなく、我らにまつろわぬ者共を討ち果たしてまいれ。
いつまでも、次があると思わぬことだ」
オセリファは、ついに感情を露わにすることなく、まだ何か言いたそうなウェンディロフを追い払った。

「狼、シャーラへ行く。
以前、貴様が不死者の集落を焼き払った手を使う。
神官殿にご同行いただき、不死者を滅したあとに結界を敷いていただく。
いいな、蛇。
出発は十日後。
新たな神官殿がここにご到着しだいだ。
解ったら準備だ。
ルティ殿、よろしゅうございますな？」
夕食後、料理の不備をアービィとティアに責められ、ルティが涙目になっているところにバードンが入ってきた。

「解りました。
粉炭はかなりの量があります。
僕が曳けるだけ持って行きましょう。
途中、食料の調達はどうしますか？
水さえあれば、小麦粉で持って行けばいいでしょう。
パンとかレーションだと重さを喰います。なるべく軽くしていきましょう」

アービィが確認するように言う。

「シャーラの前までは南大陸の軍が進出しているはずよ。ある程度の食べ物は分けてもらえると思うの。持って行く食料と水は、予備程度で充分でしょ」

「そうね、あとは、あんたが狩ればいいわ。バードンさん、これは短期の作戦？」

ティアの言葉にルティが続けた。

「はい、短期ではありません。可能であれば秋までに最北の地を衝きます。ラルンクルス様からは無理押しは無用とは言われておりますが。シャーラ奪回後は、我々は軍と共に防備に当たることになりましょう。

場合によっては、そのまま冬篭もりです。幸い、幾筋か使える河があるそうですので、物資の補給に苦労はしますまい」

バードンが答えた。

最北の民に肩入れしているように見えたルティたちは、機密保持の観点から作戦会議に呼ばれることが減っている。

司令部としては、ルティたちを軽視する気は全くないが、まだ年若いルティとアービィ、それより幼く見えるティアに多少の警戒感を抱いていた。そのため、今回の作戦はバードンのみが、立案時から携わっていた。

最北の地を衝くとなれば、捕虜たちの身内の安全は保障しかねる。もちろん、和平が成立すればそのような心配も消えるが、今のところ和平の手がかりすら見いだせずにいた。もしも、ルティが出立に際して捕虜たちに北へ行くとでも言ってしまえば、ある程度の知恵があればそれが何を意味するかすぐに知れてしまうだろう。ピラム

の民であれば問題はないが、捕虜たちが身内を案じて脱走でもすれば面倒なことになる。アービィたちを妨害する程度であればいいが、行き掛けの駄賃に結界を破壊されでもしたら大問題だ。
いよいよ最北の蛮族との最終決戦へ向けて全てが動き出す今、機密保持に気を使い過ぎるということはない。

「じゃあ、それなりの荷物になる？」
春から住み始めたとはいえ、家財道具はそれなりに増えていた。
大荷物を抱えての行軍は、四人にとって負担が大きくなることをティアは心配している。

「それは、後発の軍が運ぶ。
我々は、それこそ身体一つでいい。
最低限必要な物だけ纏めておけ、蛇。
どの作戦でもそうだが、我々を起用するのは機動性故だ。
いいか、あれば便利はなくても平気だ。
それからルティ殿。
捕虜には他言無用に願います。」
それだけ言うと、バードンは家を出て行った。

「お別れも言えないのね」
しょげたようにルティが呟く。

「しょうがないわね。
行き先を聞かれたら、面倒よ。
どこから機密が漏れるか分からないもの。
黙って行くしかないわね」
僅かでも機密漏洩の危険性があることは、避けるべきだということはルティもティアも承知している。

一年後、捕虜がどう扱われているか予想も付かないが、願わくは友好的な再会ができればと、ルティは思わずにはいられなかった。

「しょうがない、か。
暫くベッドともお別れね。
気に入ってるんだけどなぁ、ここの。
ま、帰ってくる楽しみがあるってことにしよう」
ルティは名残惜しそうに言った。

「十日後、か。
精霊神殿も大変だね。
どんどん神官様がこっちに来ちゃって。
残った神官様の仕事量が増える一方だ。
エンドラーズ様が逃げ出したりして」
アービィの言葉に、ルティとティアの笑いが弾けた。
アービィは冗談で言っただけだったが、十日後にそれが現実になろうとは、三人とも思ってもいなかった。

第９０話

「エンドラーズ様、相も変わらずご壮健のご様子、恐悦至極にございます。
過日のお取り計らいのお陰様をもちまして、道中ご覧いただきました通り、北の大地も豊饒の地へと生まれ変わりつつございます」
パーカホにあるランケオラータの家を改装した平野中央連合の政務室で、風の最高神祇官エンドラーズの来訪を受け、主だった面子が集まっていた。

ランケオラータが丁寧に挨拶し、レイやリンドリク元公爵、元ラシアス財務卿がそれに続く。
そして武人であることを誇示するかのようなきびきびした動作で、ルムが一礼した。ルムに付き従うパーカホの重鎮たちも、ぎこちない動作ではあるが、感謝の念に溢れた礼をした。

「いやいや、これほどに大地を生まれ変わらせたのは、皆々様のご努力の賜物。
私のしたことなど、苗や種を多めに用意しただけに過ぎません。
我らに手柄があるとすれば、それは先にこちらに渡った神官たちのもの。
そのような御礼は、私には過分にございます。
お気持ちだけ、ありがたく頂戴いたしましょう」
エンドラーズか返答する。

「して、最高神祇官様がわざわざおいでになるほどの理由は、如何なるものにございましょうか。
我々はこれからシャーラ奪回の作戦を実施いたします。
確かにそれに当たりまして、結界の構築に神官殿の派遣を依頼し

ておりました。
ですが、最高神祇官様のお手を煩わせるような任務ではございません。
エンドラーズ様のお考えを、教えていただけますでしょうか？」
ランケオラータが訊ねた。

結界の構築は、わざわざ最高神祇官が出てくるような、特別な作業ではない。
それこそ、一人前と認められる神官であれば、誰でも務まる程度のことだ。それに、先に派遣された神官たちは、それぞれに仕事を抱えており、シャーラ奪回後の農地改良まで手が回らない。北の民もそれなりに技術を身に付けつつあるが、結果が出るまでに時間の掛かる農業は、その検証や過ちの修正にも同様に時間が必要だ。来年までは、現在受け持った区域を離れることは、やりっ放しになってしまうためできなかった。
最高神祇官に農業指導などやらせるわけにはいかず、本音で言えば多数の神官を派遣してもらいたいところだった。

「私などが独りで参ってしまい、大変申し訳ない。
ところで、アービィ殿とティア殿は、こちらにはいらっしゃらないか？」
エンドラーズもその辺りは理解している。

しかし、神官は後から派遣すればよいが、今はエンドラーズの権威が必要だった。もっとも、神官たちを同行させてもよかったのだが、気ままな独り旅を楽しみたいがためにエンドラーズは他の神官を置き去りにしていた。『悔しかったらここまでおいで』と言ってある以上、さほど日を置かず火の神殿に預けてきた神官たちは、追いついてくるはずだろう。使命を果たすためと、エンドラーズに一矢を報いるために。

「アービィ殿たちはシャーラ奪回のため、プラボック殿とラルンクルス殿を始めとした司令部共々ターバに進出しております」
ルムが答えた。

「エンドラーズ様、アービィたちにご用が？」
レイがただならぬ雰囲気を感じて訊ねた。

「如何にも。
今、こちらには北の大地の主だった方々がおいでですな？
ならば都合がよいと言うもの。
本来であれば、アービィ殿とティア殿に一言言ってからにすべきことではありますが、わざわざ呼び戻したり、ターバまで往復するような面倒は省きましょう」
エンドラーズはそう言って言葉を区切る。

レイだけでなく、その場に居合わせたすべての者がただならぬ雰囲気を感じ取った。
エンドラーズは、わざわざアービィとティアの二人だけを名指しにしている。二頭の正体を知るランケオラータ、レイ、ルムの背筋に冷たいものが流れた。

「我ら全精霊神殿は、アービィ殿と、ティア殿を」
エンドラーズは再度言葉を区切り、厳かな表情を作ってランケオラータたちを見渡した。

「彼の人狼とラミアを祝福することといたしました」
その場に居合わせた人々の間に、どよめきが走った。

ある者はこの日が来るのを待ち焦がれていた安堵から、ある者は予想もしなかった事態に、ある者は恐怖から、ある者は正体を謀っていたことへの怒りから。理由は様々だが、部屋全体が大きく動いたようにも感じられた。

「冗談ではございません！
精霊神殿は、気でも狂いましたか！？
そのような悪魔と、肩を並べろと仰るのですか！？」
半数の人々が、人狼への恐怖を隠せない口調で詰問する。

口汚く人狼を罵り、ラミアを罵る。
あまりにも当たり前の反応だった。しかしエンドラーズは、このような反応など折り込み済みとばかりに、平然とした態度を崩していない。

「皆々様の反応は、極々当たり前にございます。
ですが、思い返していただきたい。
彼の二頭が、あなた方に仇成すような真似を、したことがありましたでしょうか？
アービィ殿が、人を喰らっておりましたか？
ティア殿が、男の精を絞り尽くしていたでしょうか？
精霊は、全てを見通しております。
全く、そのようなことはございません。
彼の二頭より、邪悪な気配など、一切、感じ取ることは、ございませんでした」
怒りと困惑に表情を歪める人々を見渡し、エンドラーズは一言ずつ確認するように言った。

「精霊神殿が、すべての責任を持ちましょう。

彼の二頭に弓引く者は、精霊神殿に弓引くとお心得願いたい！」
裂帛の気合いを込め、しかし、口調を荒げることなくエンドラーズは言い切った。
尚も数人が何か言い募ろうとするが、ランケオラータがそれを遮るように話し始めた。

「彼らが正体を隠していたのは、私たちが止めたからだ。
既に、昨年北の大地に渡った時点で、彼らは正体を公表する気でいた。
しかし、無用の混乱を避けるため、私たちが止めていたのだ。
諸君が人狼やラミアを恐れる気持ちは、よく解る。
私とて、最初は恐怖したものだ。
レイに至っては、旧知の仲であるにも拘わらず、その姿を見たときには卒倒している。
だが、私たちが彼らを怖がっているように見えるか、諸君？
人狼やラミアを恐れる気持ちは、正しい。
しかし、アービィとティアを恐れる必要など、私たちには全くない！
彼らは友人ではないのか？
共に戦い、苦楽を共にする戦友ではないのか、諸君！？」
ランケオラータの頬には涙が流れていた。

北の民はともかく、南大陸でそれなりの地位にいた者、つまり、この場に同席を許されるような立場の者は、当然ラシアスやアマニューク、ビースマックでのことは知っている。
アービィたちがヒドラ殺しの英雄、アマニュークの英雄、ビースマックの英雄と呼ばれていることも、ラシアスのニムファによって、勇者として異世界から連れ去られた人物であることも当然知っていた。思えば、アービィが悪事を働いたという例は聞いたことがない。
そして、アービィやティアがいなければ、ターバ奪回どころではな

かった。いや、ほとんどのことが上手く行ってはいないだろう。
これまで、アービィが人狼としての本性を現したことも、ティアがラミアとしての本性を現したことも、人々の記憶にはなかった。

振り上げた拳から力が抜け、きまり悪そうな表情を浮かべて、人狼とラミアを罵った人々は声を収めた。
決して彼らの感情は悪意ではない。この世界に生きる人々として、当然の反応だ。エンドラーズもランケオラータも、それを責める気など全くない。

「皆々様、よくよくお考えいただきたい。
北の民と南大陸の住人は、手を結ぶことができたのです。
悪意を持たぬ魔獣と、人間が手を結ぶ。
新しい時代ではありませんか。
魔獣に肉親や友を食われた方々もおりましょう。
その方々の悲嘆は想像に余りあるものでございます。
ですか、ですが、よくよくお考えいただきたい。
魔獣による被害より、人間の戦争による死者の方が圧倒的に多いのです。
日々暮らす人々を脅かしているのは、魔獣よりも野盗や人攫い、奴隷狩りの方が圧倒的に多いのです。
魔獣を憎むのであれば、人間をも憎まなければなりません。
仮に、親子兄弟、友、愛する人を野盗に殺されたからといって、奴隷狩りや人攫いに連れ去られたからといって、人間そのものを憎むでしょうか？
その犯人が他国の者だったとして、その国の民全てを憎むのでしょうか？
いいえ、野盗や奴隷狩り、人攫いという犯罪者やその個人を憎むことはあっても、人間そのものを、国民全てを憎むことはありません。

魔獣であっても同様です。
悪意を捨て、悪意などそもそも持たぬ魔獣に、他の魔獣の罪を着せ、手近にいるからといって迫害することは正しい行いでしょうか？　それは人の道に外れると、私は、最高神祇官としての立場を離れ、そう考えるのでございます」
詭弁であることは百も承知でエンドラーズは人々に語りかけた。

だが、言われてみれば、確かにそうだった。
アービィの、底抜けのお人好し加減は、演じてできるようなものではない。ティアにしてみても、あの開けっ広げな裏に企みを持っているとは、到底思えない。
ルティの存在が、それを裏付けている。年相応の子供っぽさが演技であれば、この世には悪魔しかいないと言ってもいいくらいだ。ルティが二頭を認めているなら、何よりの保証になる。一時怒りや恐怖を露わにした人々も、そう思い直し始めていた。

「まだ、この場で聞いたことは他言無用。
諸君の反応を考えれば、兵や民がどう動くか想像に難くない。
いずれ、時来たれば公表するが、今はまだ早い。
諸君の胸のうちに収めておいていただきたい」
ルムが言った。
やはり、性急に事を進めるべきではない。

シャーラ解放の暁には、アービィたちの正体を公表しても構わないと、ランケオラータは考えていた。
シャーラが解放されたなら、後は一気に最北の地を衝くだけだ。
シャーラからさらに十日ほどの中央部最北最大の集落ラーニャが事実上最北の蛮族の出城となっている現状では、シャーラ以北の拠点を築くことは難しい。やってやれなくはないが、師団単位を磨り潰す規模の会戦を覚悟しなければならないだろう。夜を主戦場とする

不死者と、日中でしか大規模な会戦ができない生者とでは、どう考えても夜目が聞く不死者が有利だ。
大規模な会戦は、極力避ける必要があった。

シャーラを結界で要塞化しラーニャとの間に拮抗状態を作り、隙を衝いてターバ解放と同様にラーニャを結界で囲むか、いっそラーニャを抜いて少数精鋭を最北の地に突入させるか、難しい判断に迫られている。

「ランケオラータ殿、私が危惧しているところは、戦場で兵が今の皆様のような反応をしてしまうことでございます。
ラシアスのアルギール城地下迷宮に、邪悪な魔法陣が発現いたしました。
おそらくは、不死者、それもかなり高位の者が南大陸に潜入しております。
南大陸では既に各国が祝福方儀式済みの武具にて武装しておりますれば、不死者が群れで攻めようと脅威ではございません。
彼の者の目的は、アービィ殿に討ち滅らされた合成魔獣の補充と見られております。
もし、合成魔獣の群れを結界内に放り込まれれば、大混乱は必定にて、二頭の魔獣が獣化せねばならぬ事態が起こりましょう。
その際のさらなる混乱を防ぐため、私が参ったのでございます。
仮にも最高神祇官にござりますれば、その権威を以て混乱を最小限に留められましょう」
エンドラーズが本来の目的を話した。

如何に火の最高神祇官が遠見の術を身に付けていようと、所在不明の者まで捜し当てることは困難だ。
魔法陣の発動は、精霊とは対極の邪悪な気配を振りまくため、どこであろうと感知はできる。だが、発動していない魔法陣は感知し

ようがないため、合成魔獣の材料となる野生動物や魔獣を北の大地へ送った後でしか場所の特定はできない。場所さえ特定できれば、火の最高神祇官と精霊を介して視界を共有したうえで『移転』で跳び、数日以内にそれを破壊することはできる。しかし、どうしても後手に回ってしまうのだった。それ故、北の大地には大量の合成魔獣が溢れかえると、覚悟しておかなければならない。

如何にアービィといえど、数百の合成魔獣相手に、獣化せず戦うことは不可能だ。

「先ほどの皆の反応を見れば、それも難しいことかと存じます。如何でございましょうか、私が彼の人狼に命を救われたと噂を流しては。

段階的に不死者の集落を焼き払ったことや、ターバ解放も彼の二頭の手柄であると、噂にしてみては如何でしょう。

もちろん、ご同行いただいた神官殿たち、ターバの皆さん、将兵諸君の手柄でもありますが、戦闘詳報を読んだ限り、彼の二頭の功績は突出しております。

私が南大陸へ戻る際の、二頭の功績につきましては言うまでもありますまい」

ランケオラータが話を締めくくった。

「では、そのようにお取り計らいいただきましょう。

私は、これにて。

数日もすれば、風の神官が四人こちらに到着しましょう。

『悔しかったらここまでおいで』と、お伝えいただきたい」

碌に休息も取らず、エンドラーズはターバ目指して発っていった。

ビースマックに潜んだグレシオフィは、野生動物や魔獣を狩り、

急造の魔法陣で最北の地へ獲物を送りつつ、精霊神官やマ教の悪魔狩りの手を逃れ転々としていた。

魔法陣を発動させればすぐに精霊神殿に探知され、精霊を介した地形イメージが神官や悪魔狩りに伝えられ、早ければ数刻、遅くとも二、三日以内に追っ手が差し向けられている。未だグレシオフィの面貌が割れておらず、魔法陣発動後は、すぐ『移転』で離れた集落近くへ跳んでいるため、追っ手も特定の人物を追跡するまでには至っていない。

集落の側に移転する度、グレシオフィは情報収集のため人々と接することに努めていた。

一気に不死者を大量生産することも可能ではあるが、夜間しか移動できない不利を突かれるのは確実だった。それに、簡単に不死者にしてしまっては、苦痛や悲嘆を与えることができず、怨みを晴らすという目的を果たせない。不死者への転生は、忠実な配下だけに留めると、グレシオフィは戦略を換えていた。

ビースマックに生まれ育った南大陸の住民と、北の大地から売り飛ばされてきたり、どさくさで移住してきた北の民との関係は、ビースマックの国民気質からそれほど険悪ではない。

ビースマックに起居する北の民の多くは、社会を底辺から支える奴隷や娼婦として重要視されている。奴隷は大切な働き手であり、娼婦は性犯罪を防ぐための大切な緩衝材と認識されている。長い間北の民の脅威に晒され続けたラシアスとは、根本的に付き合い方が違っていた。かつて、今回同様合成魔獣の材料集めにこの地を訪れた際も、にこやかに言葉を交わすビースマックの民と北の民を見て、不思議な感覚に囚われたことはあった。しかし、今回はそのときよりも、さらに両者の距離が近くなっている気がする。

奴隷や娼婦としては歳を取り過ぎた北の民が、違和感なく地域の

コミュニティに溶け込んでいた。

何にはどう見ても若い北の民が、奴隷や娼婦という立場以外で、ビースマックの民の間を自由に泳いでいる。

商店の売り子であったり、飲食店の接客であったり、商品の輸送に携わる者がいた。若者も、歳を取った者も、『生業』を得て、生計を立てていた。

はっきりと明言されたわけではないが、アービィたちの残した影響だった。

アービィがビースマック騒乱を解決した後、その時点では別れていたが、メデューサがアマニュークの英雄の一人であることが知れ渡った。北の民にも、英雄足りうる人物がいる。メディの存在は、南大陸の住人の目を開かせ、北の民の希望になった。そして、メディの義父はギーセンハイムの重鎮の一人であり、人物を保証するにしても充分すぎる立場だ。

メディが義父の元で治癒師として開業したことも、北の民にとってプラスに働いた。

これまでの治癒師は、水の白呪文しか使わない者が多く、疾病に対しては対処療法の域を出るものではなかった。

怪我はそれでも良かったが、最近やウィルス、真菌やリケッチャ、寄生虫による病は、受けたダメージこそ回復できるが、根本的な病根を取り除かない限り何度でも再発していた。もちろん、ダメージを回復することで抵抗力も回復し、病根を克服できることもあったが、それは軽微な細菌症に限られていた。この時代はまだ細菌やウィルスなどの存在は知られておらず、微細な生物由来の毒素によって病が引き起こされたり、人体の免疫防衛反応で発熱するという事実は知られていなかった。

アービィから疾病の基本的な情報を得たメディは、火の白呪文と

組み合わせた治癒を行い、目覚ましい成果を挙げていた。

治癒を求める患者が当に門前市を成しといった状態で、メディが過労で倒れてしまうのではないかと両親が心配するほどだった。

それでもメディは北の民の社会的な地位向上を目指し、最低限の休みを取るだけで治癒に当たっていた。中にはその繁盛振りに嫉妬し、北の邪法で患者を作り出していると、ありもしない誹謗中傷をしたり、北の民如きに完璧な治癒など無理と決めつける商売敵も多かった。

しかし、それらのほとんどは、火の白呪文の使いどころが見当も付かないか、火の白呪文そのものを使えないかのどちらかで、中には患者を囲い込むためにわざと不完全な治癒しかしない者すらいた。

メディ自身は北の民への誹謗中傷など慣れたものであり、全くと言っていいほど気にしていない。

ビースマックの民の気質は、すぐれた技術者であれば出自や立場に囚われることなく尊敬の対象としている。メディの義父が社会的に上位であるだけでは、メディまで尊敬の対象とはなり得ない。だが、メディの持つ治癒師としての技術は、尊敬を集めるには充分すぎるほどのものだった。メディに対して誹謗中傷や嫌がらせを行う者たちは、嫉妬にまみれた信用ならざる者共として、社会的な信用を急速に失っていった。

もちろんメディは、治癒師としての目の付け所は、アービィからの知識であることを自覚している。反対勢力を駆逐してしまっては、後々手酷いしっぺ返しが北の民全体に降りかかることも理解していた。メディの両親は、南大陸連合から各国王室を通して発布された特許や意匠登録を利用し、低位の水の白呪文だけで対処可能な疾患に関しては、商売敵へ紹介し批判を反らす努力もしていた。

いずれにせよ、今のところはメディの謙虚な性格と、両親や三人

を取り巻く人々のお陰で、メディの存在そのものが北の民の社会的地位向上に非常に役立っていた。

もちろん、メディのような成功例は稀で、多くの北の民は虐待や迫害にこそ遭わないが、社会の底辺から脱出することはまだ困難だ。日々の糧を得る手段が奴隷としての単純労働や、娼婦として性を売り物にするしかないのでは、別の職に就くための保証人すら見つけらない。結局、奴隷や娼婦から解放しても、今度は合法的に元の立場に舞い戻るしかなかった。

彼らを使役する所有者にしても、入手の契約の時点ではあくまでも合法であり、無償で手放すことは認め難いことだった。国が補償するにも数が多すぎ、騒乱で疲弊しているビースマックにはその余力がない。

ギーセンハイムにも余裕などあるわけないのだが、メディは時間の許す限り、奴隷の持ち主や娼館の主人と面会し、彼らの自立を促す方策について検討を重ね続けていた。

非合法な手段で現在の立場に身を落としている者たちについては、奴隷にせよ娼婦にせよ使役者も承知のうえで買っている以上、公式に解放すると言われたら断りにくい。

だが、奴隷や娼婦に対する賠償責任までは、使役者に負わせることは難しかった。無償で解放させられてしまえば、ある程度稼ぎがあったところで丸損になってしまう。自由を奪う代わりに、最低限とはいえ衣食住の保障をしていたからだ。特に娼婦は不健康な体型では客も付かないため、食に関してはかなり恵まれたものでもあり、その分多大な経費が掛かっていた。

何よりも使役者の多くは、北の大地から連れてこられた経緯はともかく、合法的に奴隷や娼婦を入手していたからだ。

賠償責任の拒絶はもとより、購入代金の補償を求める声が挙がることは、当然の成り行きだった。

流民として南大陸に渡り、貧困から合法的に奴隷や娼婦に身を落とした者たちも、貧困を解決できなければ何度でも元の立場に舞い戻ってきてしまう。インフラストラクチャーの整備ばかりではなく、社会全体のリストラクチャリングが必要だった。

解決にはまだまだ道程は遠いが、道筋は朧気に見えており、誰も絶望はしていなかった。

グレシオフィによって最北の民の勢力拡大のために南大陸に売り払われた少女が、結果的に南大陸における北の民の社会的地位向上に貢献しているなど、彼には想像も付かないことだった。

同様に、勇者として召喚された現代日本人のアービィを、役立たずにするために人狼に封じ込めていたが、アービィの行動もまた結果的に北の民の地位向上に役立っていた。北の大地に光臨した魔王を倒し、北の民を討ち鎮めるはずの勇者が、悪魔の化身と化し北の民と汗を流している。しかし、悪魔の化身に封じたはずの勇者は、却って大きな力を身に付け魔王の前に北の民と南大陸の住人のため立ちはだかった。召喚した者とそれを妨害した者の行為は、不十分な形でそれぞれ成功していたが、各人の思惑を外れ世界を一つに纏め上げようとしていた。

世界の覇者となり、世界を一つに纏めて手中に収めようという野望は、皮肉な形で前半だけが実現しようとしている。

「えっと、ご公務は大丈夫なのですか？」

困惑の表情に固まるアービィたち三人の前で、風の最高神祇官エンドラーズは満面に笑みを湛え、静かに茶を喫していた。

「大丈夫と思えば、大丈夫なのですぞ、そのようなものは。
いえ、大丈夫か、ではなく、大丈夫にする。
この意志こそが、重要なのでございますっ！」
無駄に力強く、エンドラーズが言い放つ。

「でも、ご公務の代行は、お残りになっている神官様たちで――」
「気合いと根性！
どうにかなるものでございます！
どうにもならないことがあったなら、それは既にどうにでもなっていいことでもございますっ！」
ルティの問を食いちぎるように、エンドラーズが言葉を被せる。

「なんて無茶苦茶な……」
ティアは、残された神官たちの苦労を想い、他人事ながら頭を抱えた。

「それにしても、慌てると碌なことにはなりませんな。
こちらにいる神官と精霊を介して感応し、途中何ヶ所か間を置いて『移転』を行使しましたが、明確な光景が伝わる前に発動してしまいましてな。
危うく時空の狭間に弾け飛ぶところでした」
そう言ってエンドラーズは豪快に笑った。
アービィたちはどう答えていいか解らず、曖昧な笑みを浮かべるしかなかった。

パーカホを出た後、エンドラーズはターバに滞在している神官と精霊を介して道中のイメージを共有し合い、『移転』の呪文を使って一気にターバまで跳躍を繰り返していた。呪文の使用回数が尽きた後は、触媒と回復薬を併用し、無理矢理使用回数を元に戻して僅か半日でターバに辿り着いていた。イメージは記憶から精霊が映像

として取り出すため、神官の記憶が曖昧でも精霊の補正があるので、どこかに弾き飛ばされる心配はない。
だが、先を急ぐエンドラーズは、精霊から明確なイメージが伝わる前に『移転』の詠唱を終え発動させたため、危うく時空の狭間に落ち掛けていたのだった。

茶のお代わりを運んできたバードンも、困惑の表情ではないものの苦笑いを浮かべている。
マ教嫌いで鳴らす最高神祇官の顔は、直接面識はなくとも知っている。これから共に闘うことになる戦友に喧嘩を仕掛ける気など全くなかったが、こちらを嫌っている相手にどう声を掛けて良いか迷っていた。
初対面でどれほどの罵声を浴びせられるか、ある程度の覚悟はしていたが、拍子抜けするほど友好的な態度に毒気を抜かれていたのだった。

「いや、ご心配なく。
公務に関しては、火の神殿より応援をいただいております故。
ストラー国常備軍の武具への祝福法儀式も粗方片が付きましてな。
それほど仕事は溜まってはおりません」
涼しい顔でエンドラーズは答え、バードンが持ってきた茶を悠々と受け取り、丁寧に頭を下げてから口を付けた。

「お口に合いますでしょうか。
北の大地では南大陸のような茶が育ちません。
これは、最高神祇官様がお通りになってきた路傍にも生えている、笹を干して煎じた物。
旨みが南大陸の茶とはまるで違いますが、私は病みつきになっております」

エンドラーズから頭を下げられ、毒気を抜かれたバードンが笹茶の説明をした。

「何ともいえぬ旨みですな。
神父殿が病みつきになるのも分かりますぞ。
しかし、あなたがアービィ殿と肩を並べているとは」
バードンの顔をしげしげと見ながら、エンドラーズがにやりと笑った。

「私をご存知で？」
バードンが聞いた。
神殿の奥深くに起居する最高神祇官が、聖職者でありながら汚れ仕事を生業とし、裏街道を歩き続けたバードンのことなど知っているとは思いもよらなかった。

「申し訳ございませんが、一方的に。
あなたも私のことは一方的にご存知だったのでは？
私が、あなたの所属する教団を、徹底的に嫌っていることを、ね」
そう言ってエンドラーズは爆笑した。
高らかに笑うのではなく、バードンが反応に困ることを期待しての、爆笑だ。原理主義者であればここで殴り合いの喧嘩にでもなるのだろうが、布教からは一歩引いているバードンは苦笑いを浮かべるだけだった。

「えっ？
エンドラーズ様、いつ、僕の？」
アービィがエンドラーズの言葉の意味に気付くには、少しだけ時間が掛かった。
ティアもその意味に気付き、顔色を蒼ざめさせている。

「アービィ殿、私とて伊達に最高神祇官などやっているわけではございません。
クシュナックでお目にかかったときから。
ティア殿、どうされましたかな？」
エンドラーズは、嫌味も悪意もない笑顔で二頭の魔獣を見て言った。

「この度、私が北の大地へ渡ったのは、このためです。
あなたがた二頭の魔獣を、全精霊神殿の名において祝福する。
こちらに来る前に、ランケオラータ殿にもそのようにお伝えしてございます。
あなた方は、もう暫くすれば正体を隠す必要はございません」
エンドラーズの言葉に四人が息を呑む。

「ランケオラータ様は、なんと仰っておられましたか？
僕たちの正体を明かすには、時期尚早ではないでしょうか？
迫害を恐れるわけではありません。
いずれ、近いうちにとは思っていましたし。
あと、僕たちを利用したり、名前をかたり人間を喰らおうとする人狼やラミアが出ないとも限らない、そう思うようにもなっているんです」
アービィがいくつかの危惧を挙げた。

「おそらく、それを利用しようという、悪辣な人狼やラミアが出ましょう。
ですが、精霊神殿の告知であなた方の居場所は大雑把ではありますが、民に知らされることになります。
作戦の機密には触れずにですが。
差し当たり、今ならターバにいるといった程度にです。
あなた方と志を同じくしようという魔獣がいれば、水の最高神祇

官が審査に当たります。
彼女は読心の術を水の精霊の加護により身に付けておりますのでな。
つまり、あなた方を祝福することで、そちらの神父殿の仕事もしやすくなる。
炙り出しですな。
お気を悪くしないでいただきたい」
エンドラーズは、最高神祇官自ら北の大地へ渡った理由を説明した。

「一体、それはどういうことでございましょう!?
仮にも人々の信仰を集める精霊神殿ともあろうものが、魔獣を祝福するなど!」
エンドラーズの言葉に、断じて許し難しとの気合いを込めたバードンの叫びが重なった。

「おや、これは神父殿、ではマ教で祝福なさると?」
バードンの叫びなど意に介さぬとばかりに、エンドラーズは平然と答える。

「冗談で済む話ではございませんぞ、最高神祇官様。
人を喰らう人狼を、男を喰らうラミアを、我らが祝福などするはずもございません。
例え精霊神殿であろうと、民の敵を祝福するというのであれば、我らは黙って見過ごすことなど、できようはずもございません!」
一言ずつ、自らに言い聞かせるように、バードンは叫んだ。

「その人狼とラミアと、神父殿は肩を並べていらっしゃる。
この二頭に害がないことは、神父殿、あなたが一番ご存知のはず」

バードンの心を見透かすように、エンドラーズは静かに言った。

バードンも理解している。

アービィもティアも、魔獣として人間と肩を並べて生きることを望み、人間に害をなす可能性は皆無であることを。決して人間になりたいというのではなく、魔獣を魔獣として、共に歴史を紡いでいくことのできる仲間として認められたいと願っていることを。精霊の祝福に何の問題もないことも、バードンは理解している。だが、それを認めてしまうと、自分の人生を否定されてしまう。

そんな予感が、精神の防衛本能が、必死に否定していたのだった。

バードンの葛藤を解すように、エンドラーズは言葉を続ける。

「こちらの人狼、アービィ殿からは人の生き血の臭いなど痕跡すら感じられませんな？

つまりは、生まれてよりこの方、いえ、異世界人の魂が狼の子に封じられてより現在に至るまで、一度たりとも人を喰らったことがない、と。

こちらのラミア、ティア殿が男を喰らい尽くすことを放棄すると決心なさったことも。

人を喰らわぬ人狼と、男を喰らい尽くさぬラミアは、もはや害をなす魔獣ではございません。

二頭が魔獣の姿を封じて人として生きるもよし、何時如何なるときでも望む姿で生きるもよし。

精霊神殿は、誰がどう仰ろうとも、この二頭の魔獣を祝福いたします」

バードンの心を見透かし、念を押すかのようにエンドラーズは言った。

「精霊神殿は、我らとこと構える、そう仰るのでございましょうか、エンドラーズ様？」

地鳴りのような低い声が、バードンの喉から漏れた。

「それをお決めになるのは、教皇猊下でございましょう？
神父殿は『これまで通り』、アービィ殿と肩をお並べになればよろしい。
神父殿のこれまでの行動自体、我ら同様の行いですぞ？」
柳に風とばかりにエンドラーズは受け流し、バードンにとっては痛い所を突いた。

どう言い繕おうと、一年以上に亘って神父が人狼とラミアと行動を共にしているなど、教会に知れたら譴責どころの騒ぎではなかった。下手をすれば人狼やラミアに荷担する者として、悪魔狩りの対象にすらなりかねない。
別の見方をすれば、マ教が人狼とラミアの存在を、認めたとも受け取れる状態だ。

「さようで、ございますか。
精霊神殿は、教会を敵に回すお覚悟と、受け取ってよろしゅうございますな？」
そう言ってバードンは、エンドラーズの言葉を待つ。

「覚悟も何も、教皇猊下の御心は、那辺にございましょうや？
マ教による、南北両大陸の思想統一をお望みか？
まつろわぬ者たちを根絶やしにする、戦乱の世をお望みか？
それ以前に神父殿、ご自分の心を偽り続けるのは、いかがなものでございましょうな？」
これがとどめになった。

エンドラーズの視線が、涙ぐむティアに向けられたことを、バードンは気付いた。　ティアは目に涙をいっぱいに溜めながら、不安

げな視線でバードンとエンドラーズの論争を見守っていた。その視線に気付いたバードンは、ルティからも同様の視線を送られていることにも気付き、長い、長い沈黙へと沈んでいった。

当事者であるアービィもティアも、バードンの言葉を待って沈黙している。

バードンが口先はどうあれ、二頭の魔獣に対し好意を抱いているのは、ルティを含めて解っている。しかし、公式な場となってしまった状態で、公式の立場からものを言わなければならないとなると、本心だけを言っていればいいというわけではない。マ教の神父が、悪魔狩りが、対人狼の最終兵器が、ラミアを愛し、人狼を友と呼ぶなど、到底認められるはずもない。

やがて、永遠にも感じられた静寂を破り、一言一言を自らに言い聞かせるように、バードンが静かに言葉を紡ぎ出す。

「私も、教会の一部に蔓延る原理主義には、ほとほと嫌気が差しておりました。

猊下の御心は全ての民の融和にございます。

猊下の御心は、神の大御心をお映しになられたもの。

なれば神の大御心は、全ての民の融和。

我がマ教は他を、他の神を、他の存在を認めましょう。

私は、マ教の神父として、猊下の、神の大御心に従うのみ。

この二頭を排斥しようと刺客を送る者は、猊下の、神の大御心に背く者として、私が排除いたしましょうぞ。

何も心配する必要など、ない！

ティア！」

長い沈黙のあと、晴れやかな表情でバードンは言い放った。

次の瞬間。

涙で顔をぐしゃぐしゃにしたティアが、バードンに抱きついた。
同時にルティがアービィに、こちらも涙で顔をぐしゃぐしゃにしたまま飛びついた。
バードンもアービィも、泣きじゃくる二人を抱き締めている。アービィの両目にも光るものがあった。
結局、バードンは二頭の存在を、既に認めていた。あとは感情に整理が付けばいいだけだった。誰かに背中を押してもらいたかったことに、バードンは気付いていた。

既にティアもルティも、しゃくりあげてしまって言葉にならない。
バードンとアービィの名を呼び、その後に何かを続けようとするが、言葉としての呈を成していない。幼子のように、二人の胸に顔を埋め、ただ泣くだけになっていた。

バードンは、人狼に肉親を喰らわれて以来、初めて他者を愛しいと感じていた。
二度と失いたくない他者。父を、母を、兄弟姉妹を失ったときの悲しみを、二度と繰り返したくないからこそ、他者を拒絶していたことにバードンは改めて気付いた。そして、頑なな心をいつの間にか解きほぐしてくれていたラミアに、限りない愛しさを感じている。
魔獣であることなど、些末な問題でしかない。愛する者、守るべき者を、バードンは遂に手に入れていた。

「年寄りには、刺激が強すぎますな」
エンドラーズの満足げな言葉は、四人の耳に届いていなかった。
そして年嵩らしい配慮を見せ、四人の邪魔にならないように、そっと用意された宿舎へと戻っていった。

その夜、ティアの部屋のドアが開く音が聞こえ、足音が遠ざかり、戻ってくることはなかった。

第９１話

ティアは、昼近くになって戻ってきた。

所用で出掛けていたルティが戻り、埃まみれになった顔を洗ってから、濡れた髪を拭きながら居間に入ると、そこでは獣化したティアが満ち足りた表情を浮かべ尻尾を振っていた。

シャーラ奪回の作戦打ち合わせのため、エンドラーズとバードンに伴われて司令部へ行ったアービィが戻るのは、早くても夕暮れ時になるはずだった。

「ティア、昨夜バードンさんのこと、食べちゃった？」

興味津々といった表情で、ルティが訊ねた。

「気付いてたの？

うん、もう満腹よ。

何年振りだろ、ちゃんと食べたの

でもね、どっちかっていうと、あたしが食べられちゃったのかなぁ、きゃっ。」

顔を真っ赤にしつつも、嬉しそうにティアが答えた。

ティアは、もう愛する人と夜を共にするのはあんただけじゃないのよ、といった雰囲気を纏っている。

「ほぉ、そりゃあ、ようございましたねぇっ！

まったく、きゃっ、じゃないわよ」

軽くこめかみに青筋を浮かべ、ルティは応じた。

昨日までは自分が一方的に惚気まくっていたことなど、すっかり棚に揚げている。

「ほら、ラミアは死ぬ間際にしか卵生まないから、ね」
だから妊娠の心配もないから、と続けたティアの言葉に、ルティは持っていたタオルを床に叩き付けた。

「でもね、人間を愛しても、その人の子を成せないって、寂しいわね」
それまでのはしゃぎっぷりが嘘のように、寂しげにティアが言った。

それだけではない。
現在はまだ三十を過ぎたばかりのバードンだが、この世界の平均余命であればあと三十年程度だ。六十歳を過ぎた老人は、この世界ではまだ稀だった。平均的な人間より体を鍛え込んでいるバードンであれば、五十代で寿命が尽きることはないにせよ、老齢医療が発達していないこの時代に、突出した高齢を期待することは無理な相談だ。
それに対してティアは、あと三、四百年は生きるだろう。バードンを、愛する人を見送らなければならないだけでなく、その後どのような生を歩むかが怖かった。
百年前、共に暮らした男と別れた後、その男との思い出が褪せないように、二度と誰かを愛さないと心に決めたこともあった。

しかし、現実にティアは、バードンを愛してしまっている。
もちろん、百年前の記憶が色褪せたわけではないが、これからはその思い出を封印する日々か続く。バードンが天寿を全うし見送った後、またいつ誰かを愛さないとも限らない。ティアは、バードンの記憶を、封印したくなかった。それもあってか、エンドラーズに背中を押されるまで、自分の感情に嘘をついていたのだった。
ティアはそのことも、寂しげに口にした。

「命の長さがねぇ、根本的に違うしね。
結婚とか、そういった意識も違うだろうしねぇ。
そこはあんまり深く考えなくても、いいと思うよ、ティア。
見送った後、忘れなければいいんじゃないかぁ」
ルティは慎重に言葉を選んだ。
あたしたちのこともね、と、これは声に出さずに付け加える。

「あの人と同じこと言うんだ。
神の御下に召されても、覚えていてくれたらそれでいいって」
寂しそうな表情のまま、ティアは答えた。

前夜、バードンの胸に抱かれ、ティアはその不安を口にした。
恋人に抱かれながら、前の恋人の話や、当人の死後の話をするなどマナー違反もいいところだが、バードンの気持ちを聞きたかった。
しかし、人間とラミアの違いを理解しているバードンは、ティアの不安を包み込むように答えていた。

「ティアが人間との間に子を成せないことなど、俺にとって些細なことだ。
確かに俺の血筋は、俺で途絶えることになる。
だが、神に仕えた時点で、俺は家名を捨てた。
血筋を残すことを、俺はそこまでの価値があるとは思わない。
いや、誰も彼もということではなく、俺にとって、俺の血筋をということだ。
俺が神の御下に召された後、ティアの記憶に残っていれば、それでいい」
種族が違うことへの諦めではなく、偽らざるバードンの本心だった。

「あたしは、あなたを忘れない。
あたしをラミアとして、人ではなくても存在を認めてくれた、あなたを忘れない。
だから、神様の御下に召されても、あたしを忘れないで」
ティアの心は、バードンで占められていた。
人との縁薄かったこれまでの半生を取り戻すかのようにバードンはティアを求め、ティアはラミアの食欲とは別次元の喜びを百年振りに感じ、その渇望を癒すかのようにバードンを求めた。

ルティに問われるままに昨夜の行為について、ティアは微に入り細に穿って話していた。
「そういうこと言ってると、今度はティアがレイに不潔よって言われちゃうよ」
ルティが顔を真っ赤にして言った。
フォーミットに戻るまで妊娠は避けるべきと話し合った結果、ルティとアービィは最後までことをし切ったわけではなかった。故郷の友達からも聞かされ続けたガールズトークとも最近はご無沙汰になっており、他人の睦言に抱く年相応の興味と、あと一歩を踏み出すわけにはいかないもどかしさから、ティアを質問責めにしていたのだった。

「ルティが聞くからでしょうよっ！
あたしったら、なにを喋ってたんだか。
恥ずかしいったら、ありゃしないわ」
ティア自身、調子に乗っていたことは否めない。
これまで惚気まくっていた二人に対する、ささやかな対抗意識があったのかも知れなかった。

「バードンさん、気を付けてくださいね。あの二人、油断してると夜にあったことを、全部他の人に喋りますから」

アービィが、レイから不潔と言われたことを思い出して、バードンに言った。

「それがどうした。何か困ることでもあるのか？」

涼しい顔をしてバードンが答えた。

修行時代には女を買うこともあり、孤児院を出た後住んでいた聖騎士団の宿舎では、誰かしらが女を買ったときの話を微に入り細に穿って話していたものだった。

プライバシーの中でも、性生活や性の嗜好が最も他人に知られたくないという、現代日本の意識が深層心理として残るアービィには考えられないとこだ。だが、それを言っても仕方がなさそうなので、僕たちの夜のことも筒抜けなんだろうな、という諦めと共に話題を換えた。

「ところで、今夜は何にしましょうか。まだ市場には物が残っているでしょうから、買出ししてから帰りませんか？」

アービィはバードンとエンドラーズに聞いた。

「どこか、酒場に繰り出すなど、まだまだ先のことのようでございますな。

レイ殿から聞かされた、アービィ殿の腕に期待しましょう。先に言っておきますが、精霊神殿に食の禁忌などございません。食卓に出されたものであれば、命をいただくことでもありますので、ありがたく全ていただきましょう。

私にご遠慮などございませんよう」
エンドラーズは楽しそうに言った。
まだ北の大地に、酒場文化は浸透していなかった。

人間の歴史と共に始まった酒の歴史は、当然北の大地にも根付いているが、小規模な集落での半ば共同生活は、外食という文化を発達させることはなかった。
家族以外との食事は、誰かの家か集落の中心となる社などに集まり、総出で準備から何からする一種の祭りのようなものだった。誰かと酒を飲もうと思えば、物々交換で手に入れた酒や、自家製の酒を持って相手の家を訪ねればよかった。質より量が優先される北の大地の食文化で、料理を職業としようという発想は生まれなかった。

「ストラーの方は、無意識に美食に慣れておいでなのでは？
貴国の食文化は奥が深い。
人狼狩りで初めて貴国に行ったとき、それはそれば驚かされたものでございます」
昨日の蟠りなど、欠片も感じさせない口調でバードンが言う。

「確かに。
ストラーの食文化は奥が深い。
普通では考えも付かないような食材であったり、調理方法であったりですな。
ですが、それが全てとは思えません。
どこへ行っても美味い物は旨い。
自国至上主義は、他との諍いしか起こしません。
誇りも持てぬ祖国など糞喰らえでございますが、過剰な誇りと自意識過剰は他者を貶める結果しか招きませんぞ。
全てをあるがままに受け入れれば良いのです」
素直に認めつつも、自慢にならないようにエンドラーズは答える。

五人で囲む食卓には、アービィが北の大地で手に入る物で作った料理が並んでいた。

未だ醤油も味噌も作られていないことから、どうしても中華っぽいものやイタリアンに近いものが多くなる。日本にいた頃、白米と乳製品の食べ合わせが苦手だったアービィは、生クリームを多用するフレンチに近いストラー料理のレパートリーが少なかった。ならばエンドラーズが食べ慣れたものの劣化コピー作るより、作り慣れたものの方が喜んでもらえるのではないかと、いつも作っている家庭料理がこの日の食卓に並べられていた。

宮廷で見られるような豪華絢爛なコース料理には程遠いが、ささやかながらも心のこもったエンドラーズ歓迎の宴が始められていた。

席上、バードンは、斥候からもたらされた情報を元に、司令部が解析したシャーラ以南の敵情を、ルティとティアに説明した。

北大陸の東西の幅が最も広くなるシャーラ周辺は、いくつかの大河が東西に蛇行しながら走っており、水運による物資の輸送が容易であるとともに、集積地や所謂物流センターとして活用できる重要地点になっている。だが、北の大地の中央を貫通する、ウジェチ・スグタ地峡から最北の地までを結ぶ街道の半分までは南北連合が押さえているとはいえ、東西に広がる広大な大地は相も変わらず最北の蛮族が押さえている。

シャーラを物流の拠点として活用するには、最低でも河川流域は押さえる必要があった。

最北の蛮族の不死者を中心にした軍編成は、日光を遮ることができる拠点から往復一日以内の行動範囲しかない。しかし、ターバを落とした戦訓は、最北の蛮族内で周知されていた。

敢えて不死者たちを日光に曝し、灰としたうえで生者が運搬する。然るべき地点で夜を待ち、月光で再生させてから南北連合の拠点を包囲し、夜陰に乗じて生者が結界に穴を開けてから不死者を突入させていた。この戦法でいくつかの拠点に大きな損害を受けていたが、全てを放棄するまでには至らずにいる。最初に襲撃を受けた拠点こそ、不意を衝かれ全滅に等しい被害を受け一時後退していた。だが、迅速な後方予備戦力の展開が功を奏し、奪回に成功している。他に急襲を受けた拠点も、不死者の突入までは許したが、辛うじて結界を聖水で塞ぐことで不死者を滅し、生者の多くを捕虜にしていた。

捕虜への尋問は、後々怨みを残すようなことがあってはならないと、拷問などは禁止されていたため、遅々として進んでいない。

東西の敵情は依然不明のままであり、現在敵襲が止んでいるのが戦力の枯渇なのか、戦力を再編中なのか判然としない。このため司令部にいるティアの正体を知る者から、非公式に尋問の補助を依頼されていたが、今のところ回答は保留していた。ティアと捕虜しかいない状況でラミアの妖術を行使して尋問を行っても、供述の信憑性の裏付けが取れない。

どうしてもティアの正体を公表するか、参謀級の者に固く口止めしたうえで同席させる必要があったからだ。

そこへきて風の最高神祇官が、二頭の魔獣を全精霊神殿の名において祝福するという。

リアリストが揃った司令部ではパーカホでのような混乱は見られなかったが、各部署がそれぞれの抱える最も困難で危険な任務にアービィたちを使いたがり、部署ごとの鞘当てが激化するという混乱が見られていた。これは決して、魔獣だから使い捨てにしてしまえということではなく、少しでも成功率を上げるための合理的な判断からだ。

司令部にはアービィたちと顔見知りの者や、親しく言葉を交わす

者も多い。
アービィとティアの正体は軽い衝撃とともに、概ね好意的に受け入れられていた。

ラミアの妖術については、民の生活を守るために存在する軍人にとって周知の事実であり、後遺症を残しかねない拷問や自白剤による尋問より遙かに有用であると気付いた者も多かった。
それ故ティアに尋問への協力依頼が舞い込んできていたのだが、正体を軍上層部に限定して公表した今、断る理由もなくなっていた。

シャーラに進出する部隊に随行する神官たちがターバに到着する前に、ある程度の敵情を掴んでおきたい。作戦参謀から正式に協力依頼が出たのは、当然の流れだった。
戦の道具として自分を認識されることは、あまり歓迎すべきことではないとティアは思っているが、和平に繋がるのであればと引き受けることにした。もちろん、アービィも狼の力は戦のためではなく、ルティを守るためのものと認識しており、必要以上の侵攻作戦には消極的だ。
アービィとしては、最北の民との戦いは殲滅戦争ではなく、武力を以て侵攻しても無意味であることを悟らせるための戦いと認識していた。

これは司令部のみならず、パーカホにいるルムやランケオラータ、ウジェチ・スグタ要塞に詰めている南大陸連合の共通認識でもある。
基本戦略は、あくまで和平。中央までを武力で解放することはあっても、最北の地を侵すことは決してない。作戦上の必要から最北の地へ武装した部隊を送り込むことはあるかも知れないが、占領を目的とした作戦を立てることも、決してない。
和平の成立後、中央と最北の地の境界線は、当事者同士で解決する方針だ。

そして、当面移住は歓迎しないが、交易による越境を阻害する気はない。

交易であるならば、それぞれの地をそれぞれの民が行き来することは、却って歓迎すべきと認識されていた。

戦争責任など、両者の長い対立の歴史に鑑みれば、どちらかが負うなど考えることすら莫迦莫迦しい。当にお互い様であり、そこには正義も悪も存在しなかった。

南大陸と北の大地の関係も同様で、こちらは既に良好な関係を築き始めている。もちろん、互いに蟠りを抱えながらではあるが、食うことより優先されることなど、この世には存在しなかった。

もっとも、衣食住の保証は当たり前で、食べる物に苦労するなど想像すらしない階層も存在する。その中には、征服欲や覇権欲を心の中で暗く燃え上がらせている者もいた。

グレシオフィは、満足げな表情でアルギール城地下迷宮に戻ってきた。

ビースマック山中で思いの外多くの獲物を狩ることができ、インダミトまで足を伸ばす必要がなくなったのだった。特に、寒さに弱いと思われていたスライムの変種が大量に採れ、対人狼に有効と思われていた。急所が核しかなく、切り裂けばその数だけ分裂する特性を仕込んだキマイラであれば、人狼最大の武器である牙は通用しない。もちろん、他の合成魔獣にも仕込んでおけば、その対人狼の効果は計り知れない。唯一の弱点は、耐寒性を得た代わりに普通種以上に火に弱いことだが、これは耐熱性を持つ魔獣と掛け合わせれば帳消しになると見込まれていた。

グレシオフィは合い鍵で広間を通り、最北の地へ帰還するための

魔法陣を素通りした。
そのままニムファの起居する女王居室へと歩を進め、ニムファが浴室から出てくるのを待つ。
侍女たちが不意の侵入者に声にならない叫びを上げるが、浴室の内側からニムファの声が響いた。

「怖がる必要はありません。
その方は、私が崇拝する方です。
お使い様、御首尾は如何でございましょう？
いますぐ、そちらへ参ります」
待ち焦がれたといった勢いで、身体から湯を滴らせたまま全裸のニムファが浴室から飛び出す。
慌てた侍女が急いでバスローブをかぶせるが、ニムファは羽織るのももどかしく、グレシオフィの前に平伏した。

「女王よ、なかなかに満足のいくものであった。
これであれば魔王を打ち倒すことも、造作もない。
魔王を討ち果たした暁には、そなたの名前は世界を救った女王として語り継がれるであろう。
そなたには、儂と同じく不死の身体を与えようぞ。
栄光と共に、永遠なれ」
そう言ってグレシオフィはニムファに立つように命じた。

ニムファが立ち上がると、羽織っただけのバスローブが足下に落ち、ニムファの全てが再び露わになる。
不死者と化したグレシオフィに既に性欲はないが、それでも息を呑むほどに美しい裸体だった。

「いよいよ、老いることのない身体を手に入れられるのですね」
恍惚の表情でニムファが一歩前に出る。

そこには威厳に満ちていたはずの女王の姿はなく、ただ、欲望に忠実な、内面の醜さが滲み出した女の姿があるだけだった。

「よいな、これでそなたは陽の光に背を向けることになる。後悔はないであろうな？」

グレシオフィは重々しく訊ねる。

だが、返ってきたのは逡巡の欠片もない、老いから逃れたいという欲望と、栄光の中で永遠に讃えられたいという欲望に支配された、思慮分別を失った肯定の叫びだった。

醜い、と口には出さずグレシオフィは呟いて、ニムファの首筋に長く伸びた二本の犬歯を突き立てた。

侍女たちが、なにが起きているか理解できずに立ち尽くす間に、グレシオフィはニムファの血、正真正銘の処女の血を心ゆくまで吸い尽くした。

みるみるうちにニムファの身体が干からび、乾いた音を立ててグレシオフィの足下に倒れる。侍女たちが一大事とばかりに、ある者はニムファに駆け寄り、ある者は助けを呼ぶため大扉に走るが、グレシオフィの『地縛』の呪文が侍女たちの動きを止めた。

恐怖を顔に張り付けたまま動くことも適わぬ侍女たちに、グレシオフィはゆっくりと近付き、一人ずつ首筋に犬歯を突き立てその血を吸い始めた。最後の一人が絶望の感情を発散させつつ干からび、藁束を倒すような音と共にグレシオフィの足下に崩れ落ちた。

女王の居室に動くものはグレシオフィしかなく、燭台の蝋燭は床に倒れ臥したニムファと侍女の干からびた死体の影を照らし出している。

そろそろか、と呟いたグレシオフィがカーテンを開け放つと、満月の灯りが居室内に差し込んだ。数刻が過ぎ、差し込む角度を換え

た月明かりがニムファたちの死体を照らし出す。
　干からびていた死体から影が消えると同時に瑞々しさが戻り始め、やがて元の姿より若返ったようにも見えるニムファが立ち上がる。続いて侍女たちも何事もなかったかのように立ち上がり、そして全員がグレシオフィの前に平伏した。

「お使い様、何なりとご命令を。
この永遠の身体、お使い様の物でございます。
存分にお使いくださいませ」
意志の力を感じさせない目で、ニムファが言った。

「別命あるまで何もしなくてよい。
陽光にのみ注意し、普段と変わらぬ生活を装うのだ。
勝手にことを起こすでない。
一つだけ命じておく。
何人たりとも、この部屋に入れぬようにな。
もし、押し入る者があれば、誰であっても殺せ。
だが、血は吸うな。
今はまだ、不死の者を増やしてはならぬ。
それについても別命あるまで待て」
それだけ言うと、平伏しているニムファたちには目もくれず、グレシオフィは地下迷宮へと降りて行った。

　今のところ、すぐに南大陸に戻る予定はないが、地下迷宮の魔法陣は守っておく必要があった。
　いずれ北の大地を征服した後、魔法陣を通して不死者の先遣隊を送り込むためだ。
　地下迷宮の通路は大軍の行進を阻むために、人間が二人も並べば身動きが取れないほどの狭い部分が各所に作られていた。当初グレ

シオフィは、合成魔獣の群れを送り込むつもりでいたが、実地で検分して無理だと判断していた。地下迷宮を通せるほどの合成魔獣では、体が小さすぎて物理的な攻撃力を充分に持たせられないからだ。

最北の地へ帰るに当たり、魔法陣の発動はどうしても感知される。今これを壊されては、不死者の先遣隊を送り込む最も効果的な拠点を失うことになる。

当然ビースマックの山中にも発動させずにいた魔法陣が多数ある。だが、人里離れた上に地理が分からない場所に不死者を送り込んでも、火の光を避ける拠点までは作る時間がなかったため、朝が来た瞬間に灰と化すだけだ。こちらは合成魔獣を送り込むために使えばよいが、や人里から離れすぎているということは、南大陸の住人に被害を与えるには不確実要素が多すぎる。使役者を同時に送れないとなると、魔獣がどこに向かうか予想も付かない。

下手をすればそのまま野生化して、攻撃兵器として役に立たない可能性もあるからだった。

グレシオフィはニムファを地下迷宮の守備に使うため、不死者へと転生させていた。

生身の人間では、地下迷宮への道を守り切るには不安が残る。武装した兵に突入されでもしたら、如何に女王といえど、押し留めることは不可能だ。相手が祝福方儀式済みの武器を持っていたら厄介だが、不死者と判らなければ女王に剣を突き立てられる者などいないとグレシオフィは見ていた。

魔法陣が発動し、中心に立ったグレシオフィの姿が掻き消えた数刻後、女王居室の大扉が激しく叩かれた。

「陛下、陛下っ！

扉をお開けくださいっ！

国家の存亡に関る一大事にございますっ！
無礼は承知のうえっ！
事が済みますれば、お手討ちにされても構いませんっ！
どうか、どうかっ、ここをお開けくださいっ！」
エウステラリットの声が、女王居室前に響いていた。

彼の背後には、所用で女王居室を離れていた次女が二人、摂政の女王居室乱入という不祥事を未然に食い止めるため、必死の形相で縋り付いている。
神官が地下迷宮で魔法陣の発動を感知し、女王居室からの調査を強固に願い出た。これまでのらりくらりと神官の調査願いをかわしていたが、二度目とあってはこれ以上誤魔化し続けるわけにも行かなかった。エウステラリットがグレシオフィに荷担するなどということはあり得ないが、身内の恥を満天下にさらすなど、耐えられるはずもなかった。仕方なしに自ら姉の部屋を調査し、神官に対処方法を考案してもらうことにしたのだった。
そして、この甘さが彼の破滅を招いた。

二人の侍女を振りほどき、内側から開けられた大扉の中にエウステラリットが転がり込む。
見た目にはほとんど生者と変わりない全裸のニムファが、四人の侍女を従えエウステラリットを待ち構えていた。薄く笑いを頬に貼り付け、感情を一切感じさせない眼差しがエウステラリットを捕らえる。普段は形だけでも恭順の姿勢を採る侍女たちが、傲慢な態度で彼を迎えた。

「陛下、地下迷宮より邪悪な気配を感じました。
神官殿からの報告では、最北の地に巣食う不死者のものと見られております。
陛下にもしものことがあっては国の一大事。

地下迷宮に調査をご承諾くださいっ！」
本来であれば姉の胸座を掴んで迫りたいところだが、かろうじて女王と摂政という立場の違いが彼に臣下の礼を取らせていた。

エウステラリットはニムファがなにかやらかしたと認識もあり、神官から不死者についての情報も得ていた。
本来であれば護衛を一人でも伴い、大剣でなくとも祝福方儀式済みの短刀くらいは帯剣して行くのが、常識的な判断だろう。何かあれば国政が滞り、場合によっては国が傾きかねないのだ。
だが、王族の恥というつまらないメンツのために、エウステラリットは単独で、かつまさか姉が不死者への転生を果たしているとは夢にも思わず、丸腰でニムファの前に立ってしまった。

「何を慌てているのです、摂政？
見ての通り、私は今から入浴しようというところ。
如何に姉弟といえど、女性の部屋に乱入するなど、王族でなくとも男性としてあるまじき振る舞い。
ましてや、女王に対し不敬ではありませんか。
邪悪な気配など、欠片も感じません。
早々に立ち去りなさい」
怒りとは無縁の表情で、声の抑揚すら感じさせずニムファが言う。

「そうは参りません。
陛下にもしものこ……！？」
エウステラリットの言葉が途切れた。

エウステラリットは尚も言い募ろうとするが、ニムファと付き従う侍女たちの足下から、言いようのない違和感が伝わっていた。
視界の隅を掠める燭台の灯りを見た瞬間、エウステラリットはその意味に気付いてしまった。

影がない。

意味することは、たった一つ。

ニムファは、姉は、ラシアス女王は、不死者ということだ。

「貴様、国を、民をどうするつも――」

エウステラリットの言葉は、そこで強制的に途切れさせられた。

ニムファの爪が横に一閃され、エウステラリットの喉笛を、首の半分ほどまで切り裂いていた。

水の黒呪文レベル１『水流』を髣髴とさせる勢いで噴き出す血液が、壁に叩き付けられる音をエウステラリットは聞いた。そして、僅かに遅れて痛みが襲ってきた瞬間、エウステラリットの意識は暗転した。

水溜まりに柔らかい物を叩き付けるような音が響き、ニムファは全身に浴びた返り血を指で拭い舐め取った。

「不味い血……

この穢らわしい物を、取り片付けなさい。

この者は、あろうことか女王を手篭めにし、国政を壟断せんと企んだのです。

よって手討ちにしました。

あなた方は、必死に止めようとしてくれましたね？

あなた方も証人です。

努々、偽証などしませんように。

私は、ここで政務を司ります。

外との連絡は、あなた方二人にその役を申し付けます。
コリンボーサを呼びなさい」
エウステラリットを止めようとした生者の侍女二人は、ニムファの言葉に魅入られつつある。
アルギール城は、不死者の城となりつつあった。

ラシアス王城アルギールが、不死者に乗っ取られようとしていた頃。
現代のように電信等の通信技術が発達していないこの世界で、アービィたちがその事実をリアルタイムで知る術はなかった。

エンドラーズがターバに到着した日から遅れること四日目の夕暮れ時、北の大地にも夏が訪れた頃に風の神官たちが到着した。
風の神官たち四人は、司令部で挨拶した足でまっすぐにアービィたちの家を目指した。エンドラーズが宿舎に帰ることなく、そこに入り浸っていると参謀の一人に聞いたからだった。
火の神殿へ行く途中でエンドラーズに叩きのめされ、運び込まれた神殿で二日間寝込む羽目になっていた。それがようやく動けるようになり、判る範囲は『移転』を使い、跳ぶ先のイメージに不安が残る行程は己が足を使い、エンドラーズに一矢を報いるため北の大地まで追い縋ってきた。北の大地に入ってからはエンドラーズを奇襲するため、ターバに滞在する神官との精霊を介しての交感を封印し、日に夜を継ぎ、ようやく追いついたのだった。

「アービィ殿、ご無沙汰しております。
あっ、どうかお静かに。
ウチの老い耄れは、どこでのたくってておいででしょうか？」
物影から突然声を掛けられ、挨拶を返そうとしたアービィを押し留め、風の神官の一人がエンドラーズの居場所を訊ねた。

「え？
あぁ、それなら家の中で……」
状況を悟ったアービィが家を指差すと、風の神官たちは一礼した後、音もなく家の中に滑り込んだ。

数瞬の後、ルティとティアの悲鳴、バードンの怒声に混じって盛大な破壊音が響き、アービィの側に神官の一人が放り出されてきた。
そして瞬きをいくつかした後に、さらに一人が叩き出される。そして、裏口から二人の神官の襟を両手で掴んで引きずりながら、エンドラーズが姿を現した。

「アービィ殿、お取り込み中大変失礼いたしました。
未熟者めらに鉄槌を下します故、どうか家の中にお入りいただきたい！」
心底楽しそうにエンドラーズが叫んだ。

「まったく、何をなさっていらっしゃるのですか。
家に入れって言ったって、この格好でどうしろと仰いますか」
水浴びを途中で切り上げたアービィは、嵐のような五人を尻目に身支度を始めた。

「大変、申し訳ございませんっ！」
欠片も申し訳なさを感じさせない、エンドラーズの声が返ってくる。

「いいですけど。
ところで神官様方、いつからそちらにお潜みに？
僕の前にルティが水浴びしてたんですけど。
何なら、エンドラーズ様のお手を煩わせる前に、僕が殺して差し

上げましょうか？」
アービィがにこやかに、頬を引き攣らせつつ拳を握りしめた。
「なんと不埒な！
もしそうであれば許し難し！
私を呼ばぬとはっ！」
エンドラーズの言葉が終わるや否や、アービィが無言で服を脱ぎ捨て、瞬時に獣化する。
全員が息を呑んだ瞬間、巨狼の牙がエンドラーズの頭を捕らえた。
――ご冗談はその辺りで。噛み砕きますっ！
もちろん、牙が打ち込まれるはずもないのだが、あまりの殺気にエンドラーズのみならず、その場にいた神官たち全てが戦慄した。
「あんたは、何を、やってん、のっ！」
エンドラーズを追う様に薪を片手に出てきたルティが、火こそ消えているとはいえ、赤熱した先端で巨狼の脳天といわず、体躯といわず乱打する。
――痛ぁっ！　いやぁっ！　熱い熱い熱い熱い熱いっ！　やめてぇっ！　毛皮焼いちゃだめぇっ！
悲鳴を上げて逃げ惑う巨狼を、エンドラーズと神官たちは、放心したように眺めていた。
その後、アービィたちの家の裏庭では、正座させられた五人の男の横に巨狼が並んでお座りさせられ、ルティの説教は深夜まで続いた。

翌朝、シャーラ奪回作戦の最終打ち合わせの席には、多くの出席者に混じって寝不足で目を赤く染めた男たちが六人並んでいる。

作戦は単純明快。

アービィたちがシャーラに突入し、不死者たちを焼き払う。

同時に神官たちはシャーラを結界で囲み、討ち漏らした不死者を灰化するとともに、新たな不死者の侵入を防ぐ。

アービィたちが不死者の集落を奪回した作戦と、ターバ解放作戦を組み合わせたものだった。

その二つの作戦との相違点は、シャーラを囲む結界がシャーラから離れていない点にある。

ターバと異なり、シャーラは集落の集合体であり、居住区と農地が混在していた。ターバは、巨大な居住区を中心に農地が広がり、その外側に衛生集落が点在する。それに対してシャーラはそこそこの居住区が任意の距離に点在し、その周辺を農地が囲む。中心地たる居住区はあるが、ターバのような巨大なものではない。独立した集落というには距離が近過ぎ、同じ集落というには微妙に離れていた。

百戸程度の集落が共同防衛のために三十程集まり、全てを取り囲むように防壁が築かれていた。

それぞれの集落を虱潰しにするにも、全ての集落を一気に収める結界を敷設するにも時間が掛かりすぎる。纏まって行動することで守備力が向上する利点より、時間の無駄という欠点の方が大きかった。

また、連携を取るにもシャーラは広すぎ、それぞれが自由に動くことによる機動性を重視した方が利点は大きいと判断されていた。

つまり、最初から連携や相互支援など、ないものとして考えれば

良かった。

相手方の進行状況を無視して、それぞれの分担をこなすことだけを考えれば良い。

ともすれば緻密に組み上げられた作戦を立てる参謀こそ優秀であると、もてはやす風潮があった。しかし、緻密な作戦というものは、僅かな齟齬が全体を一瞬で崩壊させる危険性を孕んでいるものだ。

それぞれが充分な実力を持っているならば、細々した取り決めなど足枷でしかない。

輸送部隊は、シャーラの手前にあるジャーウの集落に戦略物資をピストン輸送し、これを拠点化する。

シャーラ確保後、当面の食料が生産できるようになるまで、守備隊が食い繋ぐためのものだ。シャーラ確保が夏の始めにできたとしても、農地を生産可能なまでに再生するには時間がかかる。ジャーウ以南は、ある程度農地の再生ができていた。このため、全ての物資を片道十日の輸送に頼る必要はないが、保存が利く主食はできる限り備蓄に余裕のある後方から輸送したいところだった。

アービィたちには、もう一つ重要な任務がある。できる限り派手に行動し、敵の戦力をシャーラに引き付けるという、囮としての役割だ。

シャーラ奪回に併せて、東西に走る河川流域の敵拠点の掃討作戦が計画されていた。

この作戦の目的は、効率の悪い陸路輸送に頼ることなく、戦略物資の移動を容易にすることだ。

敵戦力がシャーラに集中すれば、河川流域の確保が容易になる。

河川流域に敵戦力が集中するならば、そとらからはいったん後退してシャーラ確保を優先して、その後に一拠点ずつ潰していけばよい。

同時達成が理想だが、無理押しして各個撃破されては元も子もな

い。敵戦力が分散されるのであれば、逆に各個撃破のチャンスでもあるが、こちらも戦力を分散する以上無理押しは禁物だ。

シャーラが結界により聖域化されたなら、不死者はシャーラに対する脅威ではなくなる。仮に雲霞の如く押し寄せたところで、不死者だけであれば戦力となり得ない。そこへ合成魔獣を投入しようと、知性と意志を持った生者が同行していなければ、結界の破壊は偶然に頼るしかない。最北の民に生者がどれほど残されているかは不明だが、アービィたちを押し切れるような大軍勢を集められるほどではないはずだ。

河川流域に点在する敵拠点も、内部事情はたいして変わらないと推測される。

日中の警備に就く少数の生者と、主戦力たる不死者、そして合成魔獣の混成軍だろう。日中に攻勢を仕掛ければ、さほどの被害を出さずに拠点を潰すことは可能なはずだが、合成魔獣を出されるとそれなりの損害を覚悟しなければならない。

そのためにも、アービィたちは派手に行動し、できる限り敵戦力をシャーラに吸い上げなければならなかった。

「委細、承知仕りました。

見事、シャーラを解放してご覧に入れましょう」

「じゃあ、僕たちは、できるだけ目立つように動けばいいんですね？奇襲ではなく、強襲、ということで。

当然、道中も、ですね？」

作戦会議は、エンドラーズとアービィの発言を以て終了となった。

プラボックは、故郷の解放作戦で先頭に立って突撃できないことが、不満で仕方がない。

確かに指揮官先頭は兵の志気を上げるためには有効だが、総指揮

官がやって良い行いではない。南大陸各国の軍の教典では、会戦の際に指揮官が取るべき行動として、先陣を切って突撃することとされている。だが、南大陸より狭いとはいえ、北大陸全土で戦が展開されている現状で、総指揮官が一局面で視野狭窄に陥っていては全体を見誤る。

その一戦に両軍が全戦力を注ぎ込み、一回で勝負が決し戦が終わるというなら、それも構わないだろう。

しかし、シャーラ奪回は戦局を大きく左右する要素ではあるが、最終決戦ではない。今後の戦局を有利にするためには、何が何でもシャーラを取らねばならないが、それでようやく戦の流れがこちらに傾き始めるといったところだった。序盤から中盤といった辺りで、総指揮官が率先して戦死などという事態になったら、どのような混乱が起きるか判らない。

この作戦会議のほとんどの時間は、プラボックにターバに留まるよう説得するために費やされていた。

「では、出立は三日後でよろしいですかな？」

ようやく会議から解放されるという喜びを全身から発散させ、エンドラーズが席を立つ。

「はい。

ティア殿にお手伝いいただくのは、明日いっぱいもあれば充分と考えます。

明後日はご準備にお使いいただき、三日後の払暁を期して、状況を開始するものであります」

席を立った作戦参謀が答え、それが会議の終了の合図になった。

「ティアは？」
家に戻ったアービィが、一人で手持ち無沙汰にしていたルティに訊ねた。
ルティは、憮然としたような表情だが、少しうれしそうな動作でバードンの家がある方向を背中越しに親指で指した。

「あ、そう。
久し振りだねぇ、二人っきりなんて」
アービィはそう言って、テーブルを挟んでルティの前に腰を下ろした。
ティアがバードンを家で待っているのであれば、明日予定されている新たな捕虜の尋問については、バードンから説明があるはずだ。

「何でそっちに座るの？
いつもみたいに、ここでもいいじゃない」
少しだけ口を尖らせ、ルティが自分の横を指した。

「ずっと並んで座る感じだったもんね。
ティアとメディが前にいて。
今はメディの代わりにバードンさんがいるんだよね。
でもさ、たまには、正面からルティの、顔見ていたいよ」
つっかえながらも、アービィが言った。
アービィの顔が朱に染まっている。

「自分で言って照れてるんじゃ、世話はないわね。
そうね、どれくらい振りだろ？
エクゼスの森以来かな？」
そう言うルティの顔も、真っ赤に染まっている。

「やっぱりこっち来なさいよ。

なんか落ち着かないし、それに……」
ルティが言った。
確かに、触れ合うにはテーブルが邪魔だった。

「うん」
アービィは頷いて、いつもの位置に腰を下ろす。

ルティが寄りかかりながら、アービィを見上げた。
ベッドの中でなら自然に交わせるキスが、今のアービィにはとても気恥ずかしいものに感じられた。
ルティも同じように感じたのか、いつもより顔が赤いまま目を閉じる。

「お邪魔いたしますぞっ！」
遠慮というものを全く感じさせない勢いで、エンドラーズが酒瓶片手に乱入してきた。

「お、これはこれは。
どうぞ、ご遠慮などなさらぬように」
いましもキスを交わそうとしていたアービィとルティが咄嗟に離れるが、そんなことお構いなしにエンドラーズは二人の前に腰を下ろす。

「じゃ、お言葉に甘えて、遠慮なく」
照れ隠しにアービィが言う。

ルティの拳が、アービィの顔面にめり込んだ。

「ところで、ティア殿とバードン殿は？」

ようやく座が落ち着いたところで、エンドラーズが訊ねた。
四人はいつでも行動を共にしていると、誰もが認識するほどだった。実際にはアービィとルティですら別行動の日が多いのだが、何かの用件があるときは、だいたい四人に共通の用件があるため、そういった認識になっていた。

「さようでございますか。
では、あちらに参ってみましょう。
いや、実は明日の尋問に、是非立ち合わせていただきたいのでございます。
ラミアの妖術は存じてはおりますが、これから使うということが判ったうえで、詠唱から拝見するなどまたとない機会。
我らが行使できるようなものとは思いませんが、その一部始終を是非とも拝見させていただきたいと」
最高神祇官といえど、真理探究に対する興味は失っていない。
いや、そこらの神官などより、余程情熱を燃やしているといっていい。

神官たちは、普段から所定の公務以外の時間を、真理探究のために使うことができる。
しかし、最高神祇官には人付き合いを含め、雑多な公務が神官たちより遙かに多い。王族との面会など、両者の権威を世間に知らしめるためだけの、形式的な儀式にまで時間を割かれていた。
その反動もあるのだろうが、エンドラーズの知識欲は他の追随を許さないほどだった。

「行くのは構いませんけど、扉を開けるのはノックしてからにしてあげてくださいね。
反応がなければ、諦める、と。
エンドラーズ様であれば、明日いきなり行っても大丈夫だと思い

ますし」
ルティの言葉を背に、エンドラーズはバードンの家へと向かった。
数刻も経たぬうちにアービィの家では、三人での酒盛りが始まっていた。

第９２話

吸血不死者へと転生を果たしたラシアス女王ニムファは、宰相コリンボーサを前に傲然と胸を反らせていた。

厚いカーテンで全ての窓を覆ってある部屋の中程に、玉座を擬したように置かれたお気に入りの椅子にニムファは深々と身体を沈めている。

人前では慎み深く振る舞っていた気品ある姿は影を潜め、まるで大帝国時代に身体で国政を乗っ取ろうとしたとされる、伝説の悪妃を思わせる態度だ。暖かみを一切感じさせない、見下ろすような視線は、扉の外に平伏するコリンボーサをそれ以上一歩も近付けさせまいとするかようだった。

「宰相、先まで摂政の任にあった愚弟エウステラリットは、不埒にも私を手篭めにしたうえで王位を簒奪せんと企みました。肉親の情においては忍びがたいものはありましたが、国を思う気持ちから手討ちとしました。

夜が明けたらば、民に知らせなさい。

私は、今後この部屋で国政を司ります。

王家の私事で、国政に空白期間を作るわけには参りません」

ニムファは国政への復帰を宣言した。

コリンボーサにしてみれば、解任されるところを救われた様なものだ。

再度国政の中心に立つことができ、そのうえニムファはこの部屋から出ないと言う。どう考えても、報告さえ適当にでっち上げておけば、コリンボーサのやりたい放題にできる。もともと政治センス

など欠片も持ち合せていなかったニムファのことだ、コリンボーサがニムファの我儘を適当にあしらいつつ政治を仕切るのは以前と変わらない。内心小躍りしたい心境だ。

だが、コリンボーサには、なぜ女王がこの部屋から出ようとしないのか、権力の象徴である玉座に戻ろうとしないのか、それが解らなかった。閣議室や謁見の間へ行くには、どうしても陽の光を受ける廊下を通らなければならず、ニムファにはそれができないからだが、この時点でコリンボーサは、まだニムファが不死者であることを知らない。

「陛下、何故、この部屋にて……？
執務室はいつでもお使いいただけますよう、整えてございます。
何より、謁見の義をこの部屋で執り行うわけには参らないかと存じますが？」

冷や汗が全身を流れるような、言い様のない嫌な感覚を感じつつ、コリンボーサが異議を唱える。

政治自体は何とでもなるが、謁見の義だけはコリンボーサでは代行できない。

「下賤の者に、私がなぜ謁見などしなければなりませんか？
私が会う方は、ただ一人、神のお使い様のみ。
それ以外のくだらぬ者など、私の前に出るなど無礼千万。
卿とて、それは同じ。
行き違いがあってはと、直接申し付けねばならぬと思えばこそ、この場にいることを許しているのです。
今後は、この二人を通して命令を伝えます。
永遠の命と、老いぬ身体を授かった私に、卿らのような下賤の身が会えるとは、努々思わぬよう。
下がりなさい」

見下ろすような視線を投げ掛け、ニムファはそう言うと身を翻し、

部屋の奥に戻って扉を閉めさせた。
コリンボーサは女王が言った意味不明の言葉の意味を問い質そうと扉に駆け寄るが、未だ生者であり続ける侍女二人がそれを阻んだ。

「無礼者っ！
そこを退かんかっ！
私は、陛下に、まだ、お話がっ！」
侍女を扉の前から引き剥がそうとするが、逆に押し返されながらコリンボーサは叫んでいた。

「無礼者はどちらでしょう？
陛下にお目通り適うのは、私たち六人のみ。
今後平穏に暮らしたかったら、私たちの言うことには逆らわない方がよろしくてよ」
侍女たちは、まだ若く日常では力仕事も多くこなしている。
対してコリンボーサは男であるとはいえ既に老境に差し掛かり、頭を使うことを主たる仕事とし、武芸の鍛錬からも遠ざかっている。
両者の純粋な力の差は明らかだった。

「宰相であろうと、他国の王であろうと、不老不死の陛下にとってはくだらない存在。
いつか命尽き果てる者の機嫌など、取る必要はございませんの。
お解りになりましたら、さっさとお下がりなさいまし」
廊下にへたり込み肩で息をするコリンボーサに、侍女たちは冷たい言葉を投げかけた。

「もし、陛下の御前に出られる栄誉に浴したいのでしたら、陛下はもちろん私たちにも服従することを誓いなさい。
そうすれば陛下に、お使い様へお伺いしていただけるよう、取り

計らうことを考えてもよろしくてよ」

言葉遣いこそ汚くはないが、一国の宰相に言って良い内容ではない。

だが、吸血不死者という後ろ盾を得た二人の侍女は、既にコリンボーサに対する礼は不要と考えていた。

コリンボーサは激情を抑え、肩を震わせながらその侍女たちに背を向けた。

「陛下のおみ足に縋ってお願いすれば、あなたも不死の身体にしていただけるかもしれなくてよ」

コリンボーサの背に侍女たちの言葉が、追い打ちとなって突き刺さる。

悔しさのあまり、強く握りしめられたコリンボーサの拳の中では爪が掌に食い込み、唇をあまりにも強く噛み絞めたため口の中には塩気の強い鉄の味が広がった。

――永遠の命と、老いぬ身体？　陛下は確かにそう仰った……

蔑むような侍女たちの視線を逃れるように己の執務室に戻った彼は、女王の言葉を反芻している。

コリンボーサは、エウステラリットが独自に面会していた神官を、執務室に呼び出した。

ラシアス宰相コリンボーサの決断は、素早かった。

彼は、不死者になり永遠の命を手にすることも、不死者の下で働くことも、そんなことは真っ平御免だった。権力欲こそ人一倍だったが、自分を愛する心はさらにそれを上回っている。永遠の命は魅力的だが、太陽に背を向け、美食も、愛も性欲も失って、何が人生の華か。彼はそう思っている。権力も欲しいが、尊敬も賞賛も富も欲しい。そして、得た富で贅沢に、豪奢に暮らすことができないな

ら、いっそ死んだ方がマシだ。
自らに付き従う者が、己の意志などほとんどない不死者など、こちらから願い下げだ。

不死者は確かに忠実に命令に従うが、それは確固たる意志を持った忠誠ではない。
恩義を感じることもなく、献身を捧げることもない。にも拘らず、盾になれと命じれば、何の疑問を抱くことなく身体を散らす。もはや、それは服従ですらなかった。ただ、自らを不死者に転生させた者の命令に、何の疑問を抱くこともなく、賛同の喝采をあげることもなく、唯々諾々と機械的に従うだけだ。
機械的にプログラミングされた、システムでしかなかった。

彼が欲する忠臣とは、彼を慕い尊敬し、彼のために命を投げ出すことを厭わず、彼の栄達を望んで止まない者たちだ。もちろん、彼自身そんなカリスマ性を持っていないことは熟知している。それ故の無い物ねだりだ。
美しかった女王には、そのカリスマ性の片鱗はあった。だが、不死の身体を手にした女王からは、そのカリスマ性はすっぽりと抜け落ち、自身を不遇にした人々への復讐心と、両大陸に君臨したいという欲望しか彼には感じられない。
自身が家臣を服従させていることを棚に上げ、コリンボーサはニムファへの服従を拒絶していた。

「神官殿、殿下はいったい何と仰っていたのです？
どうやら、王家どころの騒ぎではなく、国が、いや、南大陸が存亡の危機にあるのではないですか？」
神官が部屋に入るなり、コリンボーサは単刀直入に聞いた。

「隠し立ていたしましても仕方ありますまい。閣下の思われるとおりでございます。殿下は、陛下が不死者と通じていることに、お気づきになりました。

我が火の翁は、この城の地下迷宮に北の大地に蔓延る不死者の気配を感じ、私を派遣したのでございます。

私は殿下にお目通りを願い、そして地下迷宮の調査を願い出ました」

そこで神官は目を伏せる。

何がどうあれ、強引に地下迷宮に踏み込んでいれば、エウステラリットを死なせることもなかったのではないかと、強い後悔の念を抱いている。

「して。殿下は何と仰られた？」

その先を早く聞かせろという焦りが、コリンボーサの口調に溢れていた。

「国家の機密ゆえ待つように、と。

ですが、陛下のお部屋から伸びる通路に関しては、外側から広間までの調査をお認めいただきました。

さらに、広間から外へと繋がる通路に結界を敷くことまでは、ご許可をいただきました。

ですが、明日、結界を敷こうというところで」

いかに精霊神官であっても、材料の用意もなく無限に結界を敷くことはできない。

アルギールの町で材料を調達し、明日にでも結界を敷くというところでエウステラリットが殺害されてしまったのだった。神官が怠慢だったわけではない。これ以上はないという迅速さで、結界の準備は完了していた。

だが、予想もしなかったグレシオフィの帰還が、全てを狂わせていた。
魔法陣の発動を火の最高神祇官ばかりでなく、神官も感じていた。ただごとならぬ気配にエウステラリットの居室へと急いだが、時既に遅くエウステラリットは単身丸腰で、不死者と化したニムファの前に立ってしまったのだった。

「陛下は、いったい何をお考えになっていらっしゃるのか。
ラシアス女王の、何がご不満なのか。
それほど、『両大陸の覇者』などという称号を望まれるのか」
コリンボーサの思考が口から漏れる。

「陛下のご本心は、水の媼でもなければ解りませぬ。
ですが、思い通りにならなかったことが多かった。
陛下のお望みになったことを、叶えずにいた者に対する怨み。
お助けしなかった者への八つ当たり、といったところでしょうか」
神官が、あくまで個人的な推測ですがと前置きしたうえで、自身の考えを述べた。
諮らずもコリンボーサが感じていたことと、神官は同じことを考えていた。

突然、生者である侍女の一人がコリンボーサの居室を訪れた。
何事かと身構えるコリンボーサと神官に、侍女は冷たく一瞥をくれた。そしてニムファの前にいたときよりさらに傲岸不遜な態度で、重々しくニムファの命令を伝える。

「宰相、性的に成熟した処女を十名、明日の朝陛下のお部屋によこしなさい」
反論どころか質問すら受け付けないという態度で、侍女はそれだ

け言うとコリンボーサの部屋を出ていった。

怒気を孕んだ目で侍女を見送ったコリンボーサとは対照的に、神官の爆笑が夜気を切り裂く。

涙まで流して笑い転げる神官を、コリンボーサは気でも触れたかという心配げな表情で見つめている。

「これは、これは、たいしたご使者だ。

討たれる恐怖が全身より滲み出ていましたな。

いつ声がひっくり返る、ハラハラしてしまいました。

虎の威を借る狐どころか、鼠。

いや、あのような者に例えられたらば、鼠が憤慨しましょうか。

鼠に対し、失礼でしたな。

仮にも、自ら命を長らえるために、必死に生きる者に対して」

突然、表情を厳しく改めた神官が、コリンボーサに威儀を正して向き直る。

「宰相閣下、大変失礼をば致しました。

幾重にもお詫び申し上げます。

閣下のご認識通り、今やラシアス、南大陸ばかりでなく、北の大地を含めた全世界が存亡の危機。

幸い北の大地には、閣下が陛下と共に異世界より召喚した勇者殿がいらっしゃる。

お任せしていれば、あちらは心配ありますまい。

勇者殿とお仲間には、全精霊の祝福とご加護がございます故。

勇者殿の異世界での暮らしを叩き壊した罪滅ぼしの機会でございましょう。

こちらはこちらで対処するべきでございます。

いえ、しなければなりませぬ。

ただいまの陛下のご命令は、十名を喰らうためでございましょう。彼の不死者は処女の生き血を、何よりも好みます故。閣下、陛下のご命令を聞かぬとは申さず、しばし時間をお稼ぎください」

早急に手を打たねばならない。

性成熟している処女十人を要求したニムファの望みは、生き血を飲むことはもちろんだが、その生き血を浴槽に満たし浸かってみたいというものだ。アービィが生まれた異世界の史実にある、エルゼベエト・バートリ伯爵夫人の伝説をニムファが知るはずもないが、処女の生き血には美貌や若さを保つ神秘的な力があると思わせていた。

そのような裏事情をコリンボーサや神官が知る由もないが、侍女を通して告げられた命令に、二人は同時に焦臭いものを感じていた。

冷静に考えれば、ニムファを討たなければならないのだ。

王家どころか国や大陸を存亡の縁に立たせるような者は、討つしかない。不死者への転生も、服従もコリンボーサは拒絶していた。理屈では分かっているが、コリンボーサはかつて敬愛していた女王を討つ決断を下せずにいる。家臣が主君を討つ勇気は、生半可なものではなかった。

幼少時には、自分の娘同様に可愛がっていた女王だ。父が娘を討つなど、そう易々と決断できるわけがない。

それでも神官の言葉に従い、侍女が礼を失した態度で退去した後を、遅れてコリンボーサは追った。

女王に取り次ぐ、取り次がないの押し問答を繰り返しながら、ニムファの居室前までコリンボーサはやってきた。取り次ぎに関しては最初から望みはないと判っていたが、ニムファに声を聞かせるこ

とが重要だと考えてのことだ。

「陛下、ご命令の内容は承伏致しかねます！
何分にも急すぎます！
暫くのご猶予をっ！」

侍女二人が追い返そうとコリンボーサを引き摺り剥がそうとするが、それだけ言うと彼は踵を返す。

「陛下に対し無礼でありましょう、宰相。
身分を弁えなさい！」

ヒステリックに叫ぶ侍女に、コリンボーサは一瞥をくれた。

「己の吐いた言葉、そのまま返してやろう。
何をほざいたか、忘れぬことだ」

背中越しにそう言って、コリンボーサは自身の居室へと歩き去った。

ニムファが居室から出てこないのであれば、コリンボーサにとって歓迎すべきことだった。

先の命令など、のらりくらりとかわせばよい。世俗や政治に疎い侍女を誑かすことなど、政争に明け暮れ権謀術数の中に身を置き続けたコリンボーサにとっては造作もないことだ。だが、処女の生血が手に入らないことに苛立ったニムファが、城内の侍女たちを手に掛け始めたら。

それればかりか、命令に従わない者たちを手に掛け始めたら。

自身や重要閣僚には、影の者が人知れず付き従っている。

焦りに囚われエウステラリットのように、ひとを遠ざけるというエラーを犯さなければ、そう簡単に命を奪われる危険はないと考え

て良い。しかし、実際に国を動かしている官僚全てに、護衛が陰にまで付き従っているわけではない。自身だけが生き残っても、権力を振りかざす相手がいなくては何の意味もない。

コリンボーサは、国や民のためではなく自分自身だけのため、ニムファを討つことなく、封じ込める断を下した。

北の大地の短い夏は、急ぎ足で通り過ぎようとしている。

朝晩の空気にひんやりとした肌寒さを感じ始めた頃、シャーラ奪回の大きな歯車が動き始めた。

戦局は、全体的な形勢自体は南北連合に傾いているが、夜を主戦場にする不死者を攻め倦ねている状況だ。日中に拠点を制圧しても、夜間哨戒の緩みを衝かれ一進一退の攻防が続いている。夜行性ではない人間という生物は、いくら日中に充分な睡眠を取ったとしても、夜間に十全な活動ができるわけではない。昼夜が逆転することで、あからさまな能力の低下や情緒不安定などの弊害が目立ち始めていた。

その弊害を解消するため、昼夜の担当を定期的に入れ替えているが、その交替直後に大きな事故が発生するようになっている。

最北の蛮族との戦線の膠着は、昨年以来緊張続きだった兵の間に目に見えない疲労を蓄積させていた。

変化のない毎日に、その歪みが一気に噴き出してきているようだった。シャーラ奪回は戦略大方針に基づく作戦だが、ラルンクルスたち司令部やランケオラータやルム、プラボックを始めとする指導部は、怠んだ雰囲気を一掃する効果を期待していた。

アービィとルティの家でエンドラーズが酔い潰れた翌朝、東西に

伸びる河川流域での小競合いで捕虜にした者たちに尋問するため、ティアは司令部に出頭していた。

アービィたちも当然同行しているが、その中には当たり前のような顔をしたエンドラーズもいる。昨夜はバードンの家へ行ったものの、いくら呼んでも中から反応がなかったため、早々に引き上げていたのだった。言うまでもなく、バードンは在宅でティアもいたのだが、外からのノックなど耳に入っていなかった。もっとも、耳に入っていたところで、対応に出る気など欠片もなかったのだったが。

結局エンドラーズは尋問の直前まで、ティアからの了解を待たなければならずにいた。

司令部に入った五人は作戦参謀と簡単な打ち合わせの後、尋問を行う部屋に通された。

殺風景な部屋の中心には長テーブルが一つ置かれ、その両側にはイスが五個ずつ並べられていた。壁際には事務机が一つ置かれ、記録を取る係官のための席が設えられている。その他に事務机の並びにはイスが五個置かれ、アービィたちの席が用意されていた。

ティアを中心に、両側に作戦参謀と情報参謀が副官を伴って陣取ったところで、捕虜が五人兵に先導されて部屋に入ってきた。

このとき、既にティアはラミアのティアラを髪に飾っている。テーブルを挟んで捕虜たちと対峙したとき、ティアは『誘惑』の詠唱を開始した。

「しかし、お前の妖術は恐ろしい。
側にいるだけで、強大な魔力が伝わってくる。
長いこと悪魔狩りをやっているが、お前ほどの魔力を感じたことは、そうそうないぞ、ティア。
あれでは、俺も抗しきれないかも知れん」

尋問が終わった後、司令部の一室に五人は集まっていた。
バードンは、ラミアの妖術を使った捕虜尋問を思い返している。
『誘惑』の詠唱が完了した瞬間、憎しみや悪意に満ち満ちた捕虜の顔から、一気に悪感情の一切が消え失せた。
惚けたような表情の捕虜に、満を持した武官が質問したが、その声に捕虜は答えず頑なな表情に戻るだけだった。『誘惑』はラミアに対して一切の警戒心や敵意を抱かせず、ほぼ完全な服従を強制する効力を有しているが、他の者に対しての感情までは変化しない。武官の質問に答えさせるには、ティアからの命令が必要だった。
ティアは焦り気味の武官を制し、名前や住んでいる集落などの簡単な質問をいくつかする。捕虜の緊張を解きほぐした後、武官からの質問に包み隠さず知る限りのことを答えるように命令し、尋問を武官と交替した。
そして尋問は順調に続き、夕方まで掛かることなく全ての捕虜が尋問を終えていたのだった。

「あなたにそう言われると、気味悪いわよ。
最強の人狼狩りともあろう者が、ね。
でも、何も聞き出せなかったしなぁ。
あんまり役に立ってないね」
最北の民の情報統制は、思ったよりしっかりしていた。
ティアはそれを思い出して溜息をつく。

有用な新情報は皆無。
これまでに判明していたこと以上の収穫はなく、過去の事実に裏付けが取れただけだった。捕虜たちは、口を割らなかったのではない。ラミアの『誘惑』に、抗する術などないからだ。
捕虜たちの尋問に対する回答は、大きく分けて二つ。
知らない。分からない。

つまり、攻撃目標と日時だけが伝えられただけで、それ以外はどの集落がどこの拠点をいつ襲撃するかはもちろん、攻撃終了後の処理すら指示がなかった。南北連合の拠点をの攻撃し、その後は集落に引き上げようが占拠しようが、略奪しようが現地の判断次第。攻撃方法や兵力の規模も、現地で指揮を執る集落の指導層に一任。敗走した場合のみ、全員低位の不死者へ転生という脅しがあるだけだった。

吐くべき情報がなければ、ラミアの『誘惑』を以てしても無駄だ。

結局南北を縦貫する街道周辺に敵勢力は少なく、東西には依然有力な敵勢力が展開しているものとして行動するしかない。

陽光下で不死者は行動できないとはいっても、必ずしもこれまでいくつもの集落で見た、社のような日光を避ける施設が必要なわけではない。指揮官がいれば夜間に穴を掘らせるなり、天然の洞窟などの地形を利用することも可能だ。日中警護当たるに生者の疲労が莫迦にできないため、拠点を集落に築き不死者を収容するのに社が適切だったというだけだ。

もし、自然の中に拠点を巧妙に隠されては、これを完全に掃討することは困難と司令部は見ている。

だが、不死者はともかく、生者に対する補給は必要なはずだ。最北の地からわざわざ危険を冒して戦略物資を補給するとは思えず、食料は自給自足と推測されている。

集落のほとんどは位置が判明しているため、この周囲の哨戒を密にして補給線を断ち切れば、潜伏のための拠点は遠からず自滅させられるものと期待できていた。魔法陣による物資の移送をすれば、エンドラーズが北の大地にいる以上見逃すはずはない。

魔法陣発動後に拠点を移動しても、移動距離はだいたい掴めるので捜索範囲も絞ることが可能だった。

結局、ラミアの『誘惑』による尋問は、ティアの能力を司令部に示しただけに終わり、尋問そのものは作戦を有利に進めるためには、今のところ役に立っていない。

しかし、ティア本魔獣、アービィやルティ、そして誰よりもバードンは、ティアが受け入れられたことを、何よりも喜んでいた。アービィとティアという二頭の魔獣は、戦略兵器として認識される危険性を孕んではいたが、司令部や職務上正体を知る立場にある者たちから、好意的に受け入れられていた。結果的に尋問自体が役に立たなかっただけで、ティア自身が役立たずではないと証明されたからだった。

悪意を持たない魔獣は、畏怖と共に改めて仲間と認識された。

捕虜の尋問が不調に終わった後、アービィの正体を知った腕自慢の将兵が、その実力を見たいと立ち会いを求めてきた。

「あんまり、見せびらかすようなもんじゃないんですけど。
それに作戦前に怪我でもしちゃったら、拙くないですか？」
将兵からの希望を伝えに来た戦務参謀に、アービィは戸惑いながら言った。

「ご心配は理解致します。
ですが、将兵からはアービィ殿たち四人でシャーラ攻略が可能か、不安視する声が挙がっております。
作戦が不首尾に終わることを恐れてのこともありますが、アービィ殿たちに護衛を付けなくて大丈夫かという危惧でもあります。
もちろん、試合であります故、祝福方儀式済みの武具は使用いたしません。
是非、人狼のお力をお見せいただきたい。
こちらの安全にも留意いたします故、手加減など無用でお願いい

たします」
戦務参謀は、アービィが獣化した際の戦闘力を見ていない。
アービィが消極的な理由を、大きく見間違えていた。

「いや、祝福方儀式済みの武具でもいいんですけど。
どうしよう？」
獣化する事は構わない。

行動を共にしてきた将兵が、掌を返したとも、立ち会いの結果返すとも思わない。それでも、作戦前の大事なタイミングで、万が一にも将兵に怪我でもさせたらと思うと、アービィは乗り気になれなかった。

「いいじゃないか。
今後の人狼対策の一助にはなろう」
困惑顔のアービィに、バードンが助け船を出した。

「そうですね、バードンさん一人に任せ切れることじゃないし。
一人でも人狼の動きを見ておいた方がいいか」
ようやくアービィは、将兵との立ち会いを承諾した。

陽が落ちた闘技場には、篝火が赤々と燃えている。
アービィと対峙する十名の将兵が、祝福方儀式済みの武具ではなく、防御に重点を置いた通常装備に身を固めていた。アービィはさすがに全裸で人前にでるわけにもいかず、薄手のローブだけを纏い闘技場の端に立っていた。
司令部要因の他、ターバ駐留の将兵で手空きの者は、一人残らず闘技場に集まっていた。

「一人ずつでも、十人同時でも構いません。
皆さんがお持ちの武器が通常の物であることは聞きました。
最初、僕は避けません。
人狼の防御力がどんなものか、実感してください。
次は避けながらやります。
一太刀でも当たれば、皆さんの勝ち、ということで」
そしてアービィは、傍らに控えているバードンとルティ、ティアに耳打ちする。
通常の剣を正面から受けた後の立ち会いでは、ある程度の力を解放するつもりだ。
将兵が打ち倒された後まで闘技場に放置されていては、適切な防御ができず巻き添えを喰った際に大怪我になりかねない。そうなる前に、三人には倒れた将兵の確保を頼んでいた。

「じゃ、始めましょうか」
アービィの言葉が終わったとき、重武装兵十名の前には、禍々しい巨狼が立っていた。

――最初は、存分にどうぞ。
十名の頭の中に巨狼の念話が響く。
音声としては認識されないが、間違いなくアービィの声だ。

リーダー格の青年将校が、巨狼に向かって真一文字に駆けた。
巨狼の真っ正面に肉薄した彼は、既に抜刀し、大上段に振りかぶっている。剣戟の間合いに入ったと見えた瞬間、裂帛の気合いと共に打ち下ろされた彼の剣は、巨狼の眉間へめり込んだ。ように見えた。
微動だにしない巨狼の前で、彼は剣を取り落とし、衝撃に肩まで痺れが走った両腕を、信じられないという面持ちで見つめていた。

次いで一人の古参兵が、剣を正眼に構えたまま巨狼に突撃する。
眉間に吸い込まれたかに見えた剣は、重い金属音と共に大地に落ち、古参兵は突進の運動エネルギーが反作用となって弾き飛ばされた。

闘技場の土の上で呆然と天を仰ぐ古参兵の両側を、四人の若い兵士が駆け抜けた。
戦闘開始から一歩も動いていない巨狼に駆け寄り、四本の剣が雨霰と降り注ぐ。一頻り巨狼を殴り続けた兵士たちが肩で息をし始めたが、巨狼は毛一筋すら切られていない。
残り四人の将校が、それぞれ得意とする得物を振りかざして突入したとき、兵士たちは失意の表情で道を開けるしかなかった。

最後に残された将校四人は、二人が槍、一人が薙刀を思わせる長柄の長剣、一人がハルバードを巨狼に叩き付ける。
最初の一撃で槍が一本と、長剣の柄がへし折れた。ただの棒きれに成り下がった得物を手に、呆然と立ち尽くす二人を尻目に、残された槍とハルバードが巨狼の脇腹に突き立てられた。
だが、膂力の限りを尽くして突き立てられた柄は、たわみの限界をあっさりと超え、乾いた音を残して折れ跳んでしまった。

――純銀の武器か祝福方儀式済みの武器じゃないと、僕を傷付けることはできません。バードンさん、お願いします。
巨狼の念話を受けたバードンが、腰に佩いた純銀の剣を抜く。

無造作に巨狼に近寄り、肩から胸へと袈裟懸けに剣を振り下ろす。
肉を切り裂く鈍い音が響き、巨狼の肩から血飛沫が上がった。だが、どう見ても致命傷としか思えない裂傷が、十も数えないうちに

塞がっていく。噴き出す血飛沫の勢いがみるみる治まり、やがて流血が止まる。傷口からは泡と湯気のような煙が上がり、百数える前に何もなかったかのように全てが再生してしまった。

「皆様、ご覧の通りです。
人狼を倒すには、心の臓を突くか、完全に切断するしかございません。
この人狼は特に強力な再生力を有しておりますが、通常であれば先程のような傷を負わせれば苦痛にのたうち回るでしょう。
その隙にとどめを刺せば、さしもの人狼であっても倒すことができます」
剣を腰に戻しながら、バードンが将兵に説明した。

――バードンさん、斬り過ぎ。できれば手加減してくださいよ。
思いっきり斬ったでしょ？
傷口だったところを嘗めている巨狼から、抗議の念話が届く。

「やかましい。
全力で斬らなきゃ、貴様の毛皮に刃を通せん。
見本にならんだろうが」
全力で斬っていたが、心臓まで刃は届かなかった。
自分如きが挑んで良い相手ではないということを、改めて思い知らされていた。そして、バードンははっきりと悟った。
この人狼は寿命以外で、死ぬことはない、と。

――次、始めましょうか。祝福法儀式済みの武具でいいですよ。
太刀が入っちゃっても、さっきの通りですから。殺す気で来てください。
巨狼が将兵たちに、念話で新たな武具を取るように促す。

殺す気で来いということは、絶対に死なない自信の裏返しだ。つまり、将兵がどれほど奮戦しようと、巨狼に一太刀すら浴びせることは適わないと言っているようなものだった。

闘技場の空気が一変した。

巨狼を殺すことが可能な武器を手にした将兵から、揺らめく陽炎のような闘気が立ち昇る。通常の武器で人狼を傷付けられないことは、先刻承知のことだった。それ故に先程までは、殺気の欠片も両者から感じることはなかった。しかし、巨狼の念話もあってか、将兵から遠慮がちだった態度が消失していた。

試し合いではなく、殺仕合の空気が闘技場に充満した。

将兵の発する殺気を受け、巨狼が闘気を発散する。

津波が押し寄せたかのような圧迫感が将兵を襲い、彼らは思わず一歩後ろへと下がった。だが、下がったくらいでは巨狼の闘気から逃れられるはずもなく、北の大地の戦場でも感じたことのない恐怖感を掻き立て、将兵たちの心胆を縮み上がらせる。

ほどなく、一人の兵が恐怖を克服できずに、剣を構えたままへたり込んだしまった。後の戦闘に巻き込まれることを恐れたバードンが、慌てて首根っこをひっ掴んで闘技場から連れ出す。連れ出された兵は、顔を蒼ざめさせ、歯の値も合わないほど震えていた。

今回の試合に誰よりも先に名乗りを上げ、人狼を倒して名を上げることを目論んでいた男だった。

兵が闘技場から連れ出されると同時に、巨狼が跳躍した。

充分な間合いを取っていたと思っていた将兵は、着地後の巨狼の動きが予測できず、そのまま跳躍の軌跡を目で追ってしまった。そこに隙が生まれ、さらに巨狼の跳躍力は将兵の予想を遙かに上回っ

ていた。二重の隙を巨狼が衝き、将兵一人ずつの喉笛に、切り裂かない程度に牙を当てていった。
ルティが十数える間もなく、九人の将兵全てが唖然として立ち尽くしていた。

仲間の喉に巨狼が牙を立てる瞬間は、目が捕らえきれなかった。
いや、自分の喉に牙を当てられた瞬間も、殺気を喉元に感じ、死を意識したまま何の対処もできずにいただけだった。

――まだ、やります？
立ち尽くす将兵の脳裏に、アービィの声が響く。
九人の男たちが、闘技場に膝を付き、両手を衝いて項垂れた。

「皆様、これにて終了でよろしゅうございますかな？
私であろうと、瞬殺でございます。
対処など、考えるまでもなく無理。
目では追いきれませぬ」
エンドラーズが場を収め、この日は解散となった。

ティアによる捕虜尋問、巨狼と将兵の試合の翌日、作戦発動を翌朝に控えたこの日は、ほとんどの将兵は完全休養日になっていた。
もっとも、完全休養とは名目ばかりで、兵舎の片付けや私物整理、遠征に必要な私物の整備とやるべきことは山ほどある。
私室を与えられている将校と違い、分隊単位の大部屋に起居する兵士の私物は、身の回りの日常品に非番時に着用する数組みの私服くらいの物だ。しかし、個人の空間がベッド周辺だけとはいえ、百日近い時を過ごしていればそれなりに私物も増えてくる。兵舎は公共の施設であり、自分が出ていった後は別の人間が起居するようになる。その者が気持ちよく入れるように、自分が使った場所は入っ

たときより整備して出ていくというのが、この世界の兵士のたしなみだった。義務ではないが、発つ鳥が後を濁していけば、少なからず良くない噂となって人物評に悪影響を与える。とりもなおさず、勤務評定に影響し、後々の出世にまで響いてくる。

兵たちは申し合わせたように兵舎を磨き、破損した部分の修理や足りなくなった公共物の調達と、朝から忙しく立ち働いていた。

宿舎をきれいにして明け渡すという点においては、将校たちも同様だった。

こちらは副官や従卒が付いているとはいえ、ベッド周辺だけしかプライベートな空間がない兵とは違い、小さいながらも居室が与えられているため、かなりの大仕事になっている。下級将校は数人で相部屋になっているが、それでも兵とは専有面積が大きく違う。日常においては身の回りの雑事は従卒が担当しているが、当然のことながら従卒たちは自らの居住スペースの整備に忙殺されている。階級が上がれば上がるほど、片付けなければならないスペースは増えていく。

この日ばかりは雑事の量が、将校と兵で逆転するという珍事が出来していた。

アービィたちにとっても同様で、ターバ解放以来百日以上を過ごしてきた家の大掃除に、朝から汗を流していた。

一つだけ助かっていたことは、機動性重視の作戦のため持ち物を限界まで減らしていくため、家財道具などは後発の輸送部隊に委ねていけるので、荷造りなどに輸送部隊の兵が助っ人として動員されていることだった。その中には昨日獣化したアービィと立ち合った兵が一名混じっており、作業の合間に何かと話しかけてきていた。

あれほどの力を持ちながら、決して自らの欲望のために力を行使することなく、そのうえ底抜けなまでにお人好しなアービィに、そ

の兵は心酔していた。

「アービィ様、あなたほどのお力があれば、この世界など簡単に手中に収められると思うのですが、何故、そうなさろうとはお考えにならないのでしょう？

何より、私たちの常識では、人狼が人と平和に暮らそうと考えているなど、理解し難いのです。

どういった経緯か、もしくは契約があってのことなのでしょう？差し支えなければ、お聞かせ願えないでしょうか」

兵の疑問は、この世界に生きる者ならば、誰でも抱く疑問だ。

死と恐怖、そして悪魔の代名詞ともいわれる人狼が、人間の側に立ち、人間と変わらずの暮らしをしている。話だけ聞いたなら、俄には信じられないことだった。

「まずですね、制圧だったらできるかもしれませんけど、僕に統治なんて難しいことは無理です。

全ての民の幸せを背負い込むなんて重圧、僕にはとても耐えられません。

力で抑えつける統治は、遠からず破綻しますよ、反乱が起きて。

そのたびに粛正なんかしちゃったら、統治する相手がいなくなっちゃうじゃないですか。

仁政を敷くなら、今の王族の方々が既にやっていらっしゃる。

それを破壊して同じ状態に戻るなんて、無駄な血が流れるだけですよね」

兵の問いにアービィは考えることなく答え始めた。

「では何故、あなたは人狼でありながら、人間との平和な暮らしをお望みに？」

納得し難いという表情で、兵はもう一つの疑問を口にする。

「僕は、ルティの家族に拾われました。
今から十二年前くらい前のことです。
僕自身、人狼であることに気付いていなかったんです。
もちろん、ルティも、父も母もです。
それからずっと、僕は人間として育てられてきました。
バードンさんが言っていたことなんですけど、人狼として差別され、忌み嫌われ、迫害され続けているうちに、人間に対する怒りや怨みを心に育ててしまうんじゃないかって。
僕は、差別も、嫌悪されたことも、迫害されたこともありません。
人間として育てられましたから。
だからかもしれませんが、人間に対する怒りも、怨みも持っていないんです。
普通に育ち、ルティと暮らしているうちに……
これ以上は恥ずかしいから勘弁してください」
アービィの顔が真っ赤になっている。
年齢は充分大人なのだが、ものごころ付いてから十年ほどしか経っていないアービィは、まだ精神年齢が肉体年齢に追いついていない。そのせいか、どこかしら年齢不相応の幼さが残っている。

「では、もし、アービィ様がルティ様のご家族に拾われなかったとしたら？」
兵の疑問は止まることがなかった。
決して悪意から聞いているのではないことは、その表情から窺い知れる。

「そうですね、多分、今頃は人間を喰らう生活だったかもしれませんね」
答え難そうだが、真摯にアービィは答えた。

「しかし、捨て子や迷子など珍しくもないのに、よくアービィ様を

拾ってお育てになろうと思われましたね。
もしも、アービィ様が野に放たれていたら、今頃私たちは生きていなかったかもしれません。
言ってみれば、ルティ様とそのご家族様は、人間の救世主だったのでしょうか。
思えば、ティア様もそうですね。
ルティ様が人と魔獣の間をお繋ぎになっている。
北の民との間も、皆様がおいでになってからというもの、急速に親密になっています。
これなら、最北の蛮族と呼んでいる人々とも、そう遠くない未来に和解できるのではないか、私はそう思います」
最北の蛮族を滅ぼしたいと思っている者は、皆無に等しい。
経済的な支配こそ目論んでいるが、それ故に最北の民を絶滅させてしまえば購買層が消えてしまう。

五十年に亘る戦乱の時代を経てようやく得た太平の世を、南大陸の住人は何よりも大切に思っている。
日常的な貧困や飢餓、無法者の略奪などはあるが、国家が総力を上げて他を絶滅または支配抑圧搾取しようという戦乱が起こる気配は、南大陸にはない。今後北の大地に南大陸の住人が移住するのであれば、この地においても彼らが戦乱を望むはずがなかった。広大な市場が待っているのだ。怨みを買うような方法で支配してしまっては、市場の拡大など夢のまた夢だ。

「何恥ずかしい話をしてるんですかっ！
アービィ、余計なこと言わないで。
それ以上こそばゆいこと喋ったら、後でどうなるか覚悟しなさい」
行李を抱えたルティが、照れのためか顔を赤らめて通り過ぎた。

「照れないの、ルティ。

なんだかんだ言って、あんたのお陰なんだから。
あのとき、あんたがお父さんとお母さんに訴えかけなきゃ、アービィはここにいなかったんだし。
そうなれば、あたしもここにいないし。
アーガスの莫迦踊りで、ランケオラータ様が囚われて、そのままだったかもしれないし。
バードンが来ていたかも知れないけど、あの合成魔獣に襲われたときに、全てが終わってたかもね。
そしたら、あたしはあのひとと会えなかった」
ティアは、このところバードンの家に入り浸りになっていた。
そのため、遠征に持って行くような身の回りの物はバードンの家にほとんど移動していた。それでも後から運んでもらう物や処分する物、官品の返却など、居室の片付けはそれなりの量があったので、アービィたちの家に戻っていたのだった。

「あ、今、呼び捨てにしたっ！
そう呼んでるんだ？
そのうえ、『あのひと』？」
照れ隠しか、ルティが混ぜっ返した。
確かに、『あのひと』という呼び方だけ見れば、それほど特別なことではない。だが、ルティはティアが『あのひと』と呼んだとき、頬を赤らめたのを見逃さなかった。
出陣前の慌ただしいひとときは、平穏な雰囲気の中ゆったりと過ぎていった。

「さあさあ、皆様、ご準備はよろしいですかな！？
払暁を期して作戦発動でございますぞ！
夜が明けてから動き出すのではございません！
夜が明けたときには、既に動き出していなければなりません！

払暁を期して作戦発動とは、そういうことでございます！」
まだ真っ暗なアービィの家の庭に、エンドラーズの大声が響いた。
背後には四人の風の神官たち、バードンとティアが眠そうな目を擦っている。

その声量には、作戦の秘匿性も何もあったものではない。
もっとも、司令部は秘匿性など、最初から考えてもいない。河川流域制圧のためには、シャーラ奪回に最北の蛮族の目が向くことは歓迎すべきことだった。

「まだ真っ暗じゃないですかぁ。
いえ、いつでも出られますけど、夜明けまでにはまだかなり時間がありますよ、エンドラーズ様」
上半身裸のアービィが、バードンやティア同様に目を擦りながら出てきた。

「準備はできているんですけどぉ。
ベッドが離れたくないって」
ルティは不満げにブツクサ言っている。

「ルティ、ベッドがじゃなくて、アービィとじゃないの？
その格好じゃ説得力ないわよ」
いかにも慌てて身支度をしてきたというルティの服装を見て、ティアが茶々を入れた。

「余計なこと言わないで。
あんたがそうだったからって、他の人全部がそうとは限らないのっ！」
図星を指されてルティが真っ赤になる。

「その言葉、そっくりお返しするわよっ！
この、先天性胸部未発達症！」
ルティの言葉にティアも真っ赤になっていた。

「何よ、後天性年齢過多！
ちょっとは年の功ってものも見せてみなさいよ！」
最も言われたくないことに触れられ、ルティが暴発する。

「いい加減にしろ」
ティアの首根っこをバードンが掴む。

「莫迦やってないで支度するよ。
僕たち待ちじゃないか」
ティアに向かって牙を剥くルティの首根っこを引きずり、アービィは家に戻っていった。

やがて、東の空が白み始める頃、ターバを囲む結界から、九つの影が出て行った。
そして、陽が昇り始める直前、九人を追うように小規模な集団が、ひっそりと人目を避けるようにターバを後にした。

第９３話

アービィたちの目的であるシャーラ奪回が成れば、最北の地までは指呼の距離と言って良い。

元々は中央域の勢力圏内にあったラーニャの集落があるとはいえ、現時点でそこは最北の地の出城という位置づけになっている。そうである以上、シャーラに陣を構えれば、最北の民の主力と激突する可能性もある。場合によっては、和平交渉の糸口を掴めるかも知れないいし、大きな会戦が生起する可能性も考えられた。

南北連合は南大陸という巨大な後背地があり、単純に数万の兵を食わせるということであれば造作もない。ターバまでの舗装道路と河川による補給路が完成しつつある現在、シャーラへ補給線を延ばすことは、簡単とはいえないが不可能ではなくなっている。中央街道を確保するだけで、精鋭部隊をシャーラに展開することは可能だ。

さらにターバ以北の河川流域を制圧できれば、シャーラの維持態勢は盤石になる。

対して最北の民は、このままではじり貧だ。

民の八割近くが不死者に転生し、食料の必要量が減少したとはいえ、生産体制も貧弱になっている。生者は交代制であれば、効率は落ちるが丸一日稼働することは可能だ。だが、破壊衝動が行動原理である不死者に、食糧増産などできようはずもない。

そして、陽光下で灰化するという決定的な弱点を持つ不死者だけでは、攻勢をかけるにも防御に徹するにも、簡単に殲滅される危険性が高い。夜間に攻勢を掛けようにも、簡易な結界でも敷かれてしまえば、不死者だけでは手出しができない。そして、日中に拠点を焼き払われてしまえば、それまでだ。

どうしても生者を食わせておかなければ、戦にならないのだった。

しかし、最北の地には、グレシオフィに従わない生者も多い。両者間での耕作地の奪い合いは、熾烈を極めている。いくら広大な耕作地を確保しようと、防御の手が足りない現状では、徐々に耕作地を侵蝕されてしまっていた。せっかく守り通した耕作地も、農耕に従事する頭数も足りないため、荒廃する一方だ。

不死者の脅威に押される一方だった反抗勢力は、ここへ来て息を吹き返しつつあった。

これらの情報を南北連合はまだ掴んでいなかったが、ピラムの民から最北の地の勢力図については、ある程度の情報を得ている。アービィたちが派手に動く目的は、河川流域に展開しているであろう敵を北方に釣り上げると同時に、最北の地の反抗勢力の目を向けさせるという狙いもあった。シャーラを確保できれば最北の地の情報も入手しやすくなる。逆に最北の地でグレシオフィに抵抗する勢力も、南北連合の動向に気付きやすくなるだろう。

巧くいけば、反抗勢力と手を結び、最北の蛮族に和平交渉の席に着くよう圧力を掛けられるかもしれなかった。

司令部は、ターバ解放の際に捕らえていた捕虜たちと面談し、徹底的に話し合ったうえで取引を持ちかけていた。

則ち、戦乱終結後の処遇でターバ侵略の戦争犯罪に問わないことを条件に、最北の地に残る生者たちのうち、グレシオフィに従う者たちの離反を煽動するように持ちかけたのだった。全ての捕虜が同意したわけではないが、半数にあたる六人の捕虜が最北の地へと戻ることになった。アービィたちに同行すれば道中の安全は確保されるのだろうが、それでは最北の蛮族に捕虜立ちは寝返ったと公表するだけでしかない。そのため、彼らはアービィたちから付かず離れずの距離を保ち、シャーラを落している間に一気に追い越し、最北

の地へ戻ることになっている。

残りの捕虜たちも戦乱の終結を望む気持ちに変わりはないが、様々な理由から最北の生者を煽動することに同意はしなかった。

彼らにも和平交渉の一環と言うことは理解できるが、南大陸の走狗となって仲間たちを裏切るという後ろめたさを感じていたのだった。最北の民の悲願を達成するため、自ら太陽に背を向け、人間としての喜びや快楽の全てと決別した仲間たちの心情を思うと、それが両大陸に平和をもたらすためと解っていても、生者を煽動するために最北の地へ戻る気にはなれなかった。

彼らは、最北の地へ向かった仲間たちと、最北の地に残る仲間たちの無事を、ただ願うばかりの無力な存在になっていた。

司令部は、捕虜全てに無理強いはしていない。

彼らの心情を思い測った部分もあったが、最北の地へ着くなり裏切られても困るからだ。南北連合にとって裏切りであっても、彼らにしてみれば元に戻るだけのことであり、責める謂われはないのだが、河川流域制圧の情報が漏れることは歓迎できることではない。ターバ解放の際に思い知らされた、勢力圏外での補給の困難さを解消するための作戦を、わざわざ困難にする莫迦はいない。現状ではシャーラが攻勢臨界点であり、最北の地を衝くためには河川流域の確保は必要絶対条件だった。司令部は期待と不安に苛まれながらも、最北の地へ送り出した捕虜たちを信じるしかない。

その中には、ルティたちに懐いていた少女も含まれていた。

「ねぇ、ちょっとは手加減した方が良かったんじゃないの？
人狼はやっぱり危険だって、思われちゃうよ？」

ターバを発って暫くしてから、ルティがアービィに話しかけた。

「それは考えなくはなかったよ。
でもさ、バードンさん一人で、同時に二ヶ所以上は見られないから。
マ教だけに任せっぱなしってわけにもいかないし、国がやるべき事業だよ、安全保障は。
そうなったら実務は常備軍がやることになるでしょ。
僕が手加減して人狼の力を見誤ったまま、全力で挑んでくる人狼と戦ったらどうなると思う？
実際、危険なんだし、人狼って」
そうなったら、死しかない。

アービィは冷静だった。
これからも機会があれば、獣化した状態で将兵の訓練に付き合うつもりでいる。自身は人の間に溶け込んで生きるつもりだが、当然それを望まない人狼もいるはずだ。その人狼が人との接触を断ち、野生動物として暮らすなら何の問題もない。
山に迷い込んだ人間が野生動物に喰われるなど、当人の不注意を指摘されることはあっても、その動物を討伐し狩り尽くそうとまでは誰も考えない。動物が意識して人間を食うのではなく、偶々目の前に狩り易い獲物がいたという認識でしかないからだ。
だが、人間を喰らおうと、人の姿で人間社会に忍び込もうとするならば、討伐の対象だ。

人狼にとって人間とは、非力で動きが鈍い狩り易い獲物でしかない。
しかし、アービィだけが特別な食性を持っているのではなく、どの人狼も人間に準じた食性を持っている。狼としての本能は獣肉を好ませているが、基本的には雑食性だ。普通に働きカネを得て、食料を購入し食事をとることで、健康に悪影響が出ることはない。人間という食材は、人狼にとって必要不可欠な物ではなかった。人間

さえ喰らわないのであれば、人狼が人間社会に溶け込むうえで不都合はない。

だが、利己的で、徹底した個人主義の人狼にとって、他との協調など考えるまでもなく面倒すぎて願い下げだ。

職を得て、収入を得るには、少なからず他との協調が必要だ。

例え事業を興し、材料の調達から加工まで全てを一人でこなしたとしても、販売は他との交流なしには成立しない。店舗の運営を一人で行うことは可能だが、客がいなくては経営が成り立たない。家や店舗を借りるにも、他者との交わりは不可欠だ。それを避けて材料から何から独力で行おうにも、道具の作成からなどという遠大な手間を一般的な人狼のように短絡的、享楽的な性格の動物が惜しまず掛けるとも思えなかった。

人狼が人間社会に溶け込むには、他者との交わりは避けて通れないことだった。

最北の蛮族との争いが終わったら、全精霊神殿から知性を有する魔獣に対して呼び掛けをする予定になっている。

魔獣としての素性を隠すことなく人と共に生きるか、野生に帰るかを選び、人と共に暮らすのであれば、自立支援を惜しまないと。もちろん、素性を隠したいのであれば、それも構わない。いずれの道を選ぶにせよ、人間に害を加えないことは大前提だ。自然に帰るなら、互いに不干渉を貫けばよい。

野生の掟に従い生きる中で、テリトリーに偶然迷い込んだ人間を狩ることまでは、推奨できることではないが止められることでもない。

度が過ぎれば討伐の対象になることは、互いの生存を賭けた動物同士の生存競争として当たり前の現象でしかなかった。そうなったときため、人狼の動きの特性やスピードを知っておくことは必要な

ことだ。必ずしも目の前の敵を倒すことだけが、戦いではない。逃走も、立派な戦術戦略の一つだった。
不安げな表情を隠せないルティに、アービィはそう説明した。

「あんたがそう言うなら、あたしはいいよ。
でも、気を付けてね」
諦めたように言うが、ルティの心配が尽きるということはなかった。

「俺は、今まで数え切れないほど、人狼を狩ってきた。
それも、獣化したものばかりをだ。
不完全な獣化しかできない人狼など、チーズでも切るかのようだった。
完全獣化した人狼も、昨日お前を斬ったときの斬撃で斬れない者はいなかった。
お前は、何者だ?」
もちろんバードンは、昨日の試し斬りでアービィを殺そうとは思っていなかった。
しかし、全力で斬らなければ、アービィの毛皮に刃を通せないと直感が告げていた。そして、全力であっても、心臓まで刃を通せないということも。
アービィという人狼は、バードンの知る人狼とは全く別の生き物だった。

「ちょっと、バードン!
どういうこと!?
昨日、アービィを斬り殺すつもりでやったの!?」
バードンの言葉の意味に気付いたティアが、色を成してバードンに突っかかった。

既にルティの目には、冷たい色が浮かんでいる。

「大丈夫だよ、二人とも。
バードンさんから、殺気なんか感じなかったでしょ？
あれくらいしなきゃ純銀製の剣とか、祝福法儀式済みの剣の威力は解らないって。
それに二人とも、昨日のあのとき、僕が危ないって感じた？」
誰よりも、バードンに殺意がないことを理解していたアービィが取り成す。

「確かにそうだけどさ。
あの血の出方は心臓に悪かったんだから。
意図は理解するけど、お願い、だから、もうあんなことは、しないって、約束して」
半泣きになりながらも、辛うじて冷静を保ったルティがアービィに懇願する。

「大変申し訳ございませんでした、ルティ殿。
決して狼を殺そうなど、そのような考えはございません。
どうか、お怒りをお解きください」
さすがにやり過ぎだったかと思ったバードンは、ルティに向かって素直に頭を下げた。

落ち着きを取り戻したルティが、照れ臭そうに応答する。
確かに、アービィの言うとおり、人狼の力を見誤らせるような手加減は不要だった。しかし、バードンの全力ですら斬り裂けないなど、却って恐怖を煽ってしまったのではないかという不安もあった。

「もし、またこういうことがあったとき、アービィにもしものことがあったら承知しないからね。

お願いだから、怖いことだけはしないで、二人とも」
ティアもそのときの光景を思い出し、涙目になっていた。
バードンもアービィも、ティアにとってどちらも大切な存在だ。
こんなことで両方を一気に失うなんて、ティアには耐えられない。

「ごめんね、今度は気を付けるよ」
「済まなかった」
二人の男が頭を下げる。
アービィとルティの面前で照れ臭いのか、バードンは手短に一言謝っただけだ。
ティアはふくれっ面のまま頷くが、まだ言い足りないといった表情だった。

「そろそろ、頃合いでございますかな？」
話題を変えるように、大げさな仕草で辺りを窺ったエンドラーズが言った。

「さようでございますな。
もっとも、この先に南大陸の民間人はおりません。
気にすることもありますまい」
バードンが答え、アービィに目配せした。

頷いたアービィが繁みに消え、ややあってから多数の枝をへし折る音が周囲に響く。
繁みを掻き分け、巨狼が姿を現した。ここまでアービィとバードン、そして四人の神官で曳いてきた荷車を巨狼に繋ぐ。
食料や聖水、回復薬と触媒、そして酒といった物資を満載した荷車を、巨狼は軽々と曳きはじめた。

――乗っちゃってください。
暫く曳いて、荷車の重さを確かめた巨狼から、それぞれの脳に直接念話が届いた。
一行は、馬車よりも軽快な速度で、シャーラを目指し進み始めた。

司令部は捕虜たちと平行してピラムの民からも代表を募り、グレシオフィと敵対する集落へ使者として送り出すことに決定していた。
かつて互いの血を流し合った集落同士とはいえ、最北の地に不死者が蔓延ることは許しがたいと考える者同士だ。交渉次第では、共に肩を並べることも可能なのではないかと、司令部では期待を持たれている。しかし、グレシオフィたちに対する敵愾心はどちらも甲乙付け難いが、もともと狭い範囲で農耕地の奪い合いを繰り返してきた間柄でもあった。交渉次第ということは、逆に言えば敵を増やすことにもなりかねない。ピラムの民がグレシオフィたちの手先に成ったと思われる可能性もあるが、南大陸の走狗として問答無用で討たれてしまうかも知れない。だが、各自が連携を取れない状態でバラバラに戦っていたのでは、各個撃破をしてくれというようなものだった。
ピラムの民は、危険を承知で困難な任務に就くことを了承していた。

もちろん、ピラムの民が純粋な厚意から、この任務に志願してきたわけではない。
グレシオフィが率いる不死者や、それに付き従う生者たち憎しの想いも当然だが、戦後処理で他の部族たちに対して少しでも優位に立ちたいという思惑があった。南大陸への移住権まで転がり込んでくれれば言うことなしだが、地味の肥えた土地を優先的に専位できるだけでも良い。ターバに滞在するうちに、ピラムの民は交易で人々

が富めることを知っていた。これまでは集落内だけでの自給自足が常識だったが、分業制の効率の良さに気付いたのだった。それが平和のうちでなくては、成立しないことにも、ピラムの民は気付いていた。

この任務を完遂すれば、南大陸の商人たちから一目置かれる存在になれる。同時に、最北の地での指導者の地位も手に入れることができると、ピラムの民は考えたのだった。

司令部としては、捕虜たちにしろピラムの民にしろ、過大な期待は抱いていない。

むしろ、駄目で元々、敵に混乱を生じさせることができれば上出来とみている。だからといって、今や敵地となった最北の地へ赴く者たちを、蔑ろにしようとは思わなかった。ターバ解放時の捕虜たちは脱走を装えば、敵を利用することも可能だが、ピラムの民は敵対勢力が周囲に多いため、単独行動では危険と判断されている。

命辛々逃げ延びてきた道を、再度歩むことになるのだ。

そのため、ピラムの民はアービィたちに対する補給部隊に随行させ、シャーラまでは護衛することになっている。

シャーラ奪回後はそこに一時滞在し、その後戦況を睨みつつ単独で最北の地に戻るか、アービィたちに随行するか、護衛部隊を別に同行させるか改めて検討することになっていた。

補給部隊の準備が整い次第、ターバを発つピラムの民たちは、残る者たちとのしばしの別れを惜しんでいた。

捕虜たちは、アービィ一行から半日行程程度の距離を保ちながら、最北の地を目指す予定だった。

司令部は当初、アービィたちにも捕虜の動向を知らせておくつもりでいた。しかし、アービィたちが捕虜たちに気を取られ行程に狂いが出ても困るし、ましてや危険を避けるため常時庇護下に置くよ

うな気遣いでもされたら、捕虜たちの立場が最北の蛮族に知られてしまう。アービィたちの存在は、あくまでも捕虜たちが野生の魔獣に襲われるなど、緊急時の救援程度に留めるというのが司令部の描いたシナリオだ。

そのため、敢えてアービィたちには、捕虜たちを最北の地に派遣することを知らせずにいた。

ターバを発って半日ほどは、予定通りの距離を保つため、捕虜たちは結界の外にある小さな森に身を潜めていた。

だが、昼前にアービィが獣化して荷車を曳き始めてしまったため、捕虜たちは大きく取り残されることになってしまった。司令部からは引き離されても無理して距離を詰める必要はないと言われてはいたが、取り残される不安感は常に漂っている。

「狼のお兄ちゃんと一緒じゃ駄目なの？」

ルティにことさら懐いていた少女が、不安そうな目で呟いた。

「ああ、駄目だ。

死にたくなければ、我々だけで行かなければならん。

あくまでも、我々はターバを脱走したのだ。

そうでなくては、裏切り者として、明日にでも討たれてしまうだろう。

街道を目立つことなく、南北連合の警備兵の目を掠めるようにして、脱走者の振りをしながら行かなければならんのだ」

年嵩の男が答えた。

彼は、この作戦に誰よりも先に志願した。

幾多の仲間を失い、不死者への転生を見送り、ターバの民が灰と化す光景も目の当たりにしていた。その後、ターバに戻ってきた灰と化した人々の身内が見せた、身体がよじ切れるのではないかと思

わせるほどの慟哭が、彼に戦乱を終結させる決意を固めさせていた。
司令部からの要請を受け、捕虜たちを取りまとめ、最北の地へ向かう人選を彼は引き受けていた。

少女はルティに対して心を開いて以来、徐々に同胞たちとも会話をするようになっていた。
それまでの頑なな表情が消え、年頃の少女らしい素直さと幼さが戻り、周囲の大人たちに甘えるようにもなっている。大人たちはその変化を歓迎すべきことと理解しているが、同時に戦場では命取りになりかねない危険な兆候だとも危惧していた。今回の作戦に少女が志願した理由は、ひとえにルティたちの役に立ちたいということなのだが、周囲の大人たちは却って足手纏いになりかねないとして翻意を迫っていた。一つ間違えばかつての同胞と殺し合いになりかねない、危険な任務なのだ。それに、一度笑顔を取り戻した少女を、殺戮の世界へ連れ戻すことに誰もが賛同することはできなかった。だが、それが却って少女の頑なな心を呼び覚まし、頑として自分の主張を翻すことはなかった。
そして、ついに大人たちが折れ、少女は再び戦乱の巷へと足を踏み出していた。

「目を掠めながらって、食べ物はどうするの？
何も持ってきてないよ？」
少女は荷物の少なさから、食料が各自一日乃至二日分しか携行されていないことに気付いていた。

「そりゃぁ、そうだ。
我々は脱走したのだからな。
有り余るほどの食料を持っての、物見遊山というわけにはいかんだろう」

男が苦笑いとともに答えた。
食い伸ばせば三日分くらいの食料は持っている。

決意はしたが、やはり歳相応なのだと、少女を見ながら男は次の言葉を考える。
ターバ攻略へ向かう際には、充分な食料と水を携行していた。途中にある集落も、彼らの勢力圏内だった。そこでも充分な支援を受けられた。往路は少女の目から見れば、順調に見えていた。もちろん、余裕があるわけではない食料の備蓄を持ち出すことに関して、最北の地においても、途上の集落においてもそれなりの根回しや見返りといった苦労が伴っていた。
中にはあからさまに食料を出し渋り、荷車から食料他の物資を抜き取ろうとする集落さえあった。

心を閉ざし、周囲に壁を作っていた少女は、当然この顛末は知る機会がなかった。
大人たちも同胞の情けない姿を見せたくないという思いや、少女には食べる心配をさせたくないというささやかな親心のようなものがあり、極力少女の周りからトラブルを遠ざけていた。見るもの聞くものに心を動かされることが少なかった少女には、大人たちの心遣いは届いていなかった。
互いに心配掛けまいとする心遣いはすれ違い、ぎくしゃくした雰囲気のままターバ攻略に向かっていたのだった。

しかし、今回は何もかもが逆転している。進む方向、使命、携行する食料を始めとした物資の量、そして、パーティの感情や心の動き。
大人たちも少女も、互いを気遣うことに安心を感じていた。無理矢理心を押さえ込み、周囲に対しての『良い子』を演じる必要がな

くなった少女は、往路で見せた大人びた雰囲気を捨てていた。我が儘で周囲を困らせることはしないが、歳相応に甘えるようになっている。大人たちも、それを好ましいものとして、手を焼きつつも目を細めていた。そんな少女を連れて行くことに反対意見を述べる者も、当然のように多かった。

しかし、少女が言った、私の変わり様を見ればみんなも考え直すかも、という言葉に反駁できる者はいなかった。

「じゃあ、どうするの？

この先はシャーラの手前まで、お兄ちゃんやお姉ちゃんの仲間の人たちしかいないんでしょ？

盗む、の？」

兵の目を掠めて、ということであれば、途中の集落で食料を入手することはできない。

狩りなどしていたら、アービィたちから引き離されてしまう。消去法に頼らずとも、導き出される答えは一つしかない。

しかし、そんなことをしてしまっては、今度は南北連合から追われかねない。

「そうだ。

その通り。

もっとも、何故かは知らないが、判りやすく、持ち出しやすいようになっているものだけだがな」

少女を安心させるように、周囲の大人たち全てが笑った。

釣られて少女も笑うが、わざと解り難く言われたことに頬を膨らませるが、そのまま噴き出してしまった。

恥ずかしさから顔を赤く染めた少女がこのうえなく愛しい存在に感じられ、大人たちは自らの責任の重さに改めて身震いした。

アービィたちは、シャーラの手前で二手に分かれた。
不死者の掃討を担当するアービィ、ルティ、ティア、バードンは、そのままシャーラに侵入した。結界の敷設を担当するエンドラーズと四人の神官は、シャーラを取り囲む基準点を決めるため、アービィたちと別れた場所で精霊との交感に入っている。
シャーラの防壁からおよそ一日行程の位置に結界を敷くのは、タービ解放と同じ要領だ。この距離であれば、万が一外部からエンドラーズたちが襲撃されようと、巨狼が全力疾走すれば充分救援に間に合う。
それぞれが一個分隊程度の戦闘力を有する神官が四人と、その四人を足下にも寄せ付けないエンドラーズがいれば、それで充分だった。

アービィたちは、エンドラーズたちと同心円を描くように、敷設中の結界基準点に最も近い集落から制圧することにしていた。
結界が完成すれば、その中にいる不死者は全て灰化する。それぞれが勝手に動き回るより、相互支援が可能な距離にいた方が何かと都合がよいからでもある。アービィの念話と精霊神官の思念通話があれば、両者の意志の疎通に不都合もない。何よりも、糧秣の運搬をアービィたちに統一しておけば、エンドラーズたちは身軽に行動できるという利点があった。
さらには後追いの補給部隊も、二ヶ所に分散する必要がなくなり、効率を上げられるとともに危険を減らすことができる。

アービィたちは、不死者の掃討は日中に行うつもりでいた。
日中であれば拠点を焼き払うだけでよく、合成魔獣や生者との戦闘もやり易い。結界敷設の妨害は、不死者が活動できる夜間に集中すると予想されているためでもある。実際のところ、エンドラーズが盛り上がりきっているため、救援はほとんど必要ないだろうと思

われていた。
下手に手出しをしようものなら、エンドラーズが獲物を取られたと暴れかねない。

シャーラを構成する最外郭の集落に侵入したアービィたちは、過去の戦訓から社や集会所から検索していた。
だが、社にも、集会所にも不死者の気配は認められず、それどころか民家などにも生者の気配すら感じられない。

「ルティ殿、これをご覧ください。
ティア、どう見る？」
生者が生活していたと見られる民家を調べたバードンが、その痕跡を同じく家屋を調べていたルティとティアに見せ、意見を聞いた。

「少なくとも、昨日今日のじゃないですね」
「食器に残った物の腐り具合というか、乾き方から見て、三日？
それ以上かな。
それにしても、慌てて出て行ったみたいね」
二人は痕跡から読みとれたことを話した。

その他にも、小麦粉などの食料は、全て持ち去られるか焼かれているか、水に浸されているかしている。
家屋までは破壊していないが、最北の蛮族は焦土作戦を展開していったようだった。おそらく、ターバの戦訓から無駄に不死者を灰化させるより、戦力の温存を選んだらしい。アービィたちの接近をもっと早く察知していたら、食料だけでなく、家屋なども破壊していったに違いない。しかし、通常の徒歩での移動より遥かに早い巨狼の健脚が、完璧な焦土作戦を阻んだのだった。
だが、最低でも食料の現地調達だけは阻もうという強烈な意志が、

水を掛けたうえでぐしゃぐしゃに踏みにじられた小麦粉の袋から窺い知れた。

――何の臭いもしませんよ。人も、不死者も、合成魔獣も。
屋外で警戒に当たっていた巨狼から、念話が届いた。

「どうやら、我々の動きをどこかで察知したらしいな」
屋外に出てきたバードンが、不機嫌そうに吐き捨てた。

「どこで、ですかね？
ターバに監視でも付いていた、とか？
まさか……」
ルティは不安げな表情で言った。

「それはないわ。
アービィの脚に追い付けるはずないもの。
ターバを見張られてたかもしれないけど、人間の脚じゃ追い越すなんて無理
ましてや、捕虜たちが脱走なんて、もっと無理よ」
ティアがルティの不安を解きほぐすように言う。

――街道全部が制圧できているわけじゃないからね。どこかに監視の拠点があってもおかしくないよ。最前線なんだもんね、ここは。
でも……
巨狼の念話がティアの意見を後押しした。

「そうだ。
奴らが反撃密度を上げるために、シャーラを放棄したというのなら良い。

だが、浮いた戦力を河川流域に投入しようとしているのなら、これは由々しき事態だ」
バードンは、アービィの懸念が解っていた。
もともと囮の性格も有しているシャーラ奪回作戦の一端が、崩れた可能性は否定できない。

「どうしよう、戻る？」
その危険性に気付いたティアが、バードンを見上げながら言った。

「論外だな。
我々は河川流域制圧の詳細は知らん。
慌てて戻ったところで、間に合わない可能性の方が高い。
それよりも、今は我々の使命を果たすべきだ」
バードンは一切の迷いを見せずに言い切った。

――敵はそれを狙っているのかもね。ここで僕たちが引き返せば、またシャーラに戻ってくるんじゃない？
アービィもバードンと同意見だ。

「あたしたちだけなら、それほど食料もいらないし。
とにかく、シャーラを確保しちゃいましょう」
不安な気持ちを残したまま、ルティもバードンに同調した。

――エンドラーズ様たちは大丈夫かな。結界の妨害に全力を向けたってことはないかな？
ふと気付いたアービィが、念話を漏らした。

「大丈夫だろう、神官殿たちは。
もし、危なければ、お前に思念が届いているはずだ」
バードンは、エンドラーズたちを全く心配していない。

神官の戦闘力は、ターバ解放時に目の当たりにしていた。それが四人束になっても適わないエンドラーズがいるのだ。アービィほどではないにしろ、そうそう危機に陥るとは思えなかった。

――そちらも手持ち無沙汰でございますな？

巨狼の念話を拾っていたエンドラーズから、思念がアービィに届いた。

――エンドラーズ様、そちらも何もないのですか？

巨狼が念話を返す。

――まるで、何も。この分であれば、予定の半分で終わりそうでございますな。

エンドラーズの思念が巨狼に返された。

――エンドラーズ様、あたしたちが別々に動く利点はないようです。合流しませんか？

唐突にルティが念話と思念の会話に割り込んだ。

――おや、ルティ殿でございますかな？　よくぞ会得されましたな。では、合流すると致しましょうか。我らはこの場で皆様をお待ちすればよろしゅうございますか、ルティ殿？

平静を装っていたが、エンドラーズの思念に驚きが含まれていた。

「じゃあ、みんな、行こうか。
エンドラーズ様たちと合流しましょう」

ルティがバードンとティアに振り向いて言う。

「――――！？

ルティ殿、今、エンドラーズ様とお話しされていたのですか！？

いつ、どこで、その業を!?」
バードンが驚愕の表情で聞いた。

ティアは割り込まなかったが、魔獣の特性として念話が使える。
アービィとエンドラーズの会話は聞いていたが、特に意見を述べる必要もなかったので割り込まなかっただけだ。ルティが思念を向ければ念話と会話ができることを、ビースマック騒乱のときに知っていたので驚きはしなかった。
しかし、バードンは念話も思念も、どちらも特別な者しか使えないものと認識していた。念話は魔獣の特性のようなものであり、思念は精霊の専売特許のようなものだという認識だったため、所謂一般人のルティが思念を扱えることに腰を抜かさんばかりに驚いていた。マ教が長年かけて会得しようとして、ついに諦めた業だったからだ。

「ええ、いつの間にか。
かなり前のことなんですけど、離れた場所にいたアービィが念話で話しかけてきたときに、頭の中で答えていたら通じていたんです」
困ったように顔をしてルティが答えた。

「あなたは、一体……
狼といい、あなたのその思念といい……
私には解らないことばかりでございますな」
頭を横に振りながら、バードンは呻くように言葉を押し出した。

「どういうこと、バードン?
誰でもとは言わないけど、そんなに驚くようなことなの?」
不思議そうにティアがバードンに聞いた。

「そうだ。

驚くようなことだ。
念話は、お前たち魔獣しか使えん。
思念を使えるのは、精霊神殿で過酷な修行を積んだ者だけだ。
ルティ殿が、そのような修行を積んだとは、聞いておらん。
それが、いきなり……
あり得ん。
我々マ教も思念を使えるようになるために、どれほど苦労してきたことか。
だが、精霊の加護を受けていない我々は、ついに使えるようになれなかった」
バードンは首を横に振りながら、エンドラーズたちとの集合地点へと歩き始めた。

ラシアスのアルギール城は、緊迫した空気に包まれていた。
宰相コリンボーサの前には、ニムファに付き従っていた侍女の首が二つ転がっている。つい先程まで生者だった侍女の身体は、地の泥濘の中で小刻みな痙攣を繰り返していた。コリンボーサの執務室は、むせかえるような、吐き気を催す血の臭いが充満している。彼の横では無表情のまま血刀を提げた影の者が、侍女の死体を見下ろしていた。
やがて、意を決したコリンボーサの視線を受け、影の者は音もなく天井裏へと消えていった。

この七日間というもの、コリンボーサはニムファが発した性的に成熟した処女十人を召し出せという命令を、のらりくらりとかわし続けていた。
ニムファからの度重なる催促も、侍女たちからの陰湿な嫌がらせも、風にそよぐ柳のように受け流した。政争に付き物の権謀術数の

渦中にいた彼にとって、ニムファや侍女たちをあしらうなど朝飯前といって良い。巨悪に敢然と立ち向う勇気は持ち合わせていなかったが、絶対権力者のご機嫌を取りつつ自分の良いように事態を操作する能力が、彼は意識していなかったが初めて人々のために役立っていた。

コリンボーサは、不死者への転生も、盲従も拒絶していたが、かといって主君たる女王を討つ決意はできなかった。

彼の頭の中には保身が渦巻いている。もし、ニムファを討てば王位簒奪と民が騒ぎ、下手をすれば国が崩壊する。それを防ぐにはニムファが不死者であることを自身の口から証明させなければならないが、民衆の眼前に不死者を無抵抗の状態で引き出せるとは思えない。灰となったニムファの残骸を示したところで、民には到底信じられまい。いきおい、コリンボーサによる王位簒奪、正義のないクーデターと看做されるのが落ちだ。昨年ビースマックで勃発したクーデター騒ぎは、民衆の記憶に新しい。

政争の延長線上のように、女王を宥め空かし、事実上の幽閉時様態に持ち込むことが、彼にできる精一杯のことだった。

しかし、この間に火の神官は、アルギール城近迷宮に結界を張り終えていた。

そして、いよいよ女王を封じ込めるため、ニムファの居室前の廊下に結界を敷こうとしていたところを、生者だった侍女に気取られてしまった。あきらかに女王居室を隔絶しようとしている線引きは、結界の知識を有さない侍女からみても、悪意がある障害物としか見えなかった。もちろん、ニムファに報告が上がり、夜半にコリンボーサを呼び出したが、その時点で彼は姿を隠していた。陽が昇り、活動可能な『敵』が生者の侍女二人となってから、彼は執務室に戻り、平然と政務を開始した。

激昂した侍女二人が彼の執務室の扉を乱暴に開け、突き殺さんばかりの勢いで雪崩込んできたのは、執務開始から数刻と経たない頃だった。

「宰相、どういうつもりか、説明なさい！」

「陛下のお部屋前の廊下に、何をしようというの！？事と次第によっては、大変なことになるわよ！」

コリンボーサは侍女の問いには答えず、ただ冷たく見据えるだけだ。

黙って見ているだけで、何の反応も示さないコリンボーサに侍女たちは益々激昂した。

王宮勤め、それも女王付きとは思えないほどの下品な言葉を並べ立て、目を吊り上げてコリンボーサを罵倒する。かつて、城に出仕した際に見せていた美しさや勤勉さ、誠実さの欠片も残らないほどの変化だ。それでも彼は、執務こそ中断させているが、侍女たちを何か音の出る壊れた玩具か何かといったふうに見ているだけだった。

「それが貴様の答えか、宰相！？」

「我らに聞く口はないと！？陛下の命に従わぬと！？よろしい、ならば貴様を誅し、陛下に忠実な者を宰相に据えるのみ！覚悟は良いな！？」

口調まで変わった侍女たちは、懐に呑んでいた短剣を取り出すと、コリンボーサに向かって一歩踏み出した。

だが、彼女たちが二歩目を踏み出すことはなかった。

音もなく黒い影が彼女たちの背後に降り立った瞬間、重く固い物が床に落ちる音の後、盛大な血飛沫を噴き上げながら床に崩れ落ち

た。その光景をコリンボーサは、感情のこもらない目で眺めている。影が侍女の死体を踏み越えて、コリンボーサの前に片膝を付いた。頭を垂れ、主からの命令を待つ姿勢だ。コリンボーサは執務机を離れ、彼の前に立ち、いくつかの命令を下した。

影は立ち上がるとコリンボーサの横に並び立ち、命令を彼の耳元で復唱し姿を消した。

コリンボーサは血の海と化した執務室を後にすると、衛兵に後始末と神官を居室に呼ぶことを命じた。

居室に戻ったコリンボーサは、血塗れの衣服を着替えると神官の到着を待つ間、まだ昼前というのに蒸留酒の栓を抜いた。グラスに満たした琥珀色の液体を一息に飲み干すと、食道と胃を同時に灼かれるような感覚を感じた。まるで、心を灼く焦燥感が現実のものになったかと思うほど、強烈な感覚だった。

これまで数え切れないほど飲み、慣れきっていたはずの酒が、未知の飲料のように感じられていた。

コリンボーサは、痺れたような頭で考えている。

彼の野望は、幾多の政争に勝ち抜き、国を恣にできる立場になることだった。だが、それは平和の中にあって、初めて可能なことだった。宰相を継げる家柄に生まれ、放っておいても国政をわたくしできる立場だったが、権力を欲するものは彼だけではなかった。醜い争いが繰り返され、幾多の宮廷人を生物として、人として抹殺し続け、現在の地位を築き上げていた。しかし、物理的な力を持って国が荒れては、権力などものの役には立たない。

純粋な暴力の前に、権力は無力だった。

あらゆる権謀術数も、不死者という爆発的な力にはあらがうことは適わない。

コリンボーサは、己の才覚が平和をお膳立てしてもらっていなくては、何の役にも立たないことに気付いてしまった。戦乱の世に軍を率いて戦うことも、国を乱す災厄に先頭に立って民を率いることも、彼の有する能力の範疇ではなかった。民の生活とは懸け離れた、民から見ればある意味無責任な権力争い、言い換えれば王にどれくらい気に入られるかの競争だけが、彼の能力を発揮できる場だった。

不死者との対決が避け得ない状況にあって、逃げ出したいという欲求とコリンボーサは戦い続けていた。

やがて、居室の扉が叩かれ、神官の到着が告げられた。

悪霊を封じる戦いに赴く決意を固めた表情が、怯えを一切感じさせない足取りでコリンボーサの前に進んできた。

「閣下、ご決断なされたようでございますな？

閣下からご依頼さえお出しいただければ、今宵不死者どもが外に出る前に結界は敷けましょう。

既に近迷宮の結界は、敷き終えてございます。

陛下の御部屋前の廊下も、障壁結界を敷くばかりとなっておりますれば」

神官はコリンボーサの決断を促した。

「神官殿。

お願い致す」

長い沈黙の後、コリンボーサはそれだけをやっとのことで音声に変換した。

救国の決断というには、あまりにもお粗末なものだった。

ニムファを封じた後、王族の後ろ盾を失う彼は、権力闘争に勝ち抜く自信がなかった。ニムファの寵臣という事実が、彼を宮廷で生

き延びさせてきた。それなくして、どれほどこの場で生きながらえることができるか、エウステラリットからの扱いが全てを物語っている。既に臣籍降下している元第二王子が王籍復帰して摂政位を継ごうが、南大陸連合に出向している第三王子へテランテラがアルギール城に戻ろうが、コリンボーサの政治家としての生命は旦夕に迫っていた。

それでも不死者に喰らわれるよりはマシだと、コリンボーサは決断したのだった。

「しかと、承りましてございます」

それだけ言うと神官は、力強い足取りで宰相居室を出て行った。

白昼堂々、神官は女王居室前の廊下に、結界を敷いた。

不死者を滅するための結界は、壁や構造物などのさまざまな障害物があるため効果的に敷くことができない。このため、不死者が踏み越えることができない線状の結界しか引けないが、それでもニムファや三人の不死者と化した侍女たちが表へ出ることは充分防ぐことができる。地下迷宮の広間から外へ出る通路にも同様の結界を強いているので、廊下の結界が完成すれば合成魔獣でも放り込まれない限り人的被害が出ることはない。神官は当面はこれでお茶を濁し、いずれコリンボーサを説得して城を完全に結界で囲む、またはアルギールを結界内に治めるつもりでいた。もちろん、独力で城や町を収める結界を敷くなど、途方もない労力と時間が必要だ。ニムファが合成魔獣でも呼び寄せたら、結界などあっという間に破壊されてしまう。

神官は、ニムファが封じ込められたまま手を拱いているほどの莫迦ではないだろうと、最悪の事態を想定している。

ニムファにとって邪悪な気配が、女王居室の扉を通して伝わって

きた。

とりもなおさず、結界が完成したときに発する波動だった。彼女は生者である侍女を呼ぶが、当然何の反応もない。苛立ったニムファは、不死者と化した侍女に廊下の状況を報告するように命令した。侍女は扉の衛兵を呼ぶが、これも当然のごとく何の返答もない。焦れた侍女が扉を開けた瞬間、開け放ってあったカーテンから陽光が差し込む。一人の侍女が声を発する余裕もなく瞬時に灰化し、残る二人の侍女が慌てて扉を閉めた。

ニムファに上がった報告は、侍女一人の喪失と、夜までは何もできないという現実だけだった。

ニムファにとって状況は最悪だった。

手元の戦力は、純粋な力だけであれば数百人の軍勢にも匹敵すると思われた自らの力と、多少劣るがそれでも百人程度は相手取れる侍女二人だ。純粋な暴力のぶつけ合いになれば、アルギール城の衛兵など瞬時に壊滅できると信じているか、陽光だけは如何ともし難い。コリンボーサを呼びつけようにも、扉の衛兵すらいない状態では、いくら叫んでも遠く離れた執務室まで聞こえるはずもない。

活動可能な夜まで、女王居室の中で蹲っているしか、ニムファたちに外を確認する手段はなかった。

永遠と思えるほど長い昼が終わり、ニムファは侍女二人に廊下の状況を確認するよう改めて命じた。

恐る恐るといった風情で扉を開け廊下に出た侍女たちは、邪悪な波動の向こう側に、これも邪悪な気配を漂わせた剣を携えた屈強な兵の姿を見出した。

「貴様ら、女王陛下の居室前である！
その無礼な振る舞いは何か！？

納得する説明をしてもらおう！」

城の中でも人気のあった侍女の可愛らしい顔は、その面影がすっかりなくなっていた。

アービィの世界の伝わる般若の如くに顔を歪ませ、目を吊り上げて兵に詰め寄った侍女は、不用意に結界の上を踏み越えようとしてしまった。

結界を過ぎた部位から瞬時に灰化する身体を、侍女は驚愕の表情で見詰め、次いでその口が絶叫の形に開かれた。

だが、兵に詰め寄ろうとしていた勢いは殺せず、喉元まで競りあがっていた絶叫が音声となる前に、侍女の身体は結界を越えてしまった。侍女の身体はそのまま灰と化し、開け放たれた窓から吹き込む初秋の風に跡形もなく吹き散らされ、彼女の痕跡はこの世から消え失せた。

兵たちも、唖然とした表情で侍女の自爆を見守るだけだった。

姉妹のように仲良くしていた侍女が灰と化す瞬間を見た残る一人の侍女が、声にならない叫びを上げつつ兵たちに突進する。

城内で一、二を争うと謡われた美貌はすっかりその影を潜め、怒りと怨み、狂気に染まりきった顔が兵たちに肉薄した。侍女は、結界が不死者を滅却したとは思わず、何かわけのわからない法術が仲間を消し去ったと信じ込んでいた。そして、その自身にのみ都合の良い思い込みが、彼女の命運を決していた。獣のような咆哮を上げながら兵たちに突入するかに見えた侍女は、結界の上を通り過ぎた部位から瞬時に灰化し、これも吹き込む風にその痕跡を消し去られた。

暫くしてから窓から月光が差し込んだ。しかし、吹き散らされ霧散した灰から侍女たちを復活させることは、もう手遅れだった。

唐突に途切れた咆哮を不審に思ったニムファは、いくら待っても戻らない侍女の安否を確かめに廊下へと出た。

そこには侍女たちの痕跡は何一つなく、屈強な兵たちと、彼らを率いる神官の姿を見ただけだった。

「陛下。

御労しや。

一体、どのような妄執が、陛下をそのようなお姿に。

民を想い、民をお労りになられた、美しい陛下は何処に……っ！？」

神官は、心底残念、慙愧の念に耐えられないといった口調で、ニムファに問い掛ける。

言いようのない恐怖に駆られたニムファは、無言で身体を翻し、居室へと飛び込み、内側から扉を閉め、鍵を掛けた。

生者からは考えられない暴力が、テーブルを、ベッドを、バスタブを内開きの扉に叩き付け、見る見るうちに巨大なバリケードを築いていく。一頻り家具を扉の内側に積み上げたニムファは、外側から乱雑に叩かれる扉の音に耳を塞ぎ、地下迷宮へと降りていった。虚ろな目は、既に何も見ておらず、怨み以外の感情は宿していなかった。蹌踉うように広間に辿り着き、そこにも鍵を掛け、うろ覚えの呪文で魔法陣を起動させる。詠唱が完了する前に魔法陣の中心に移動したニムファは、自身を囲む円陣が不気味に、しかしニムファにとっては心地よく鳴動し、明滅を繰り返すのを見た。

凄艶な笑みを浮かべたニムファは、躊躇うことなく詠唱を完了する。

次の瞬間、ニムファの姿は掻き消え、ラシアスから女王が消失した。

第９４話

巨狼は、地を駆けていた。
エンドラーズたちが野営する地点から、不死者の脚で半日行程と思われる範囲をくまなく捜索している。魔獣が身を潜められるような森林ばかりでなく、直射日光を遮ることができる洞窟や、狩人たちの避難小屋、果ては穴を掘ったと思われる地表まで、神経質と思えるほど執拗に調べ回り、徐々にその捜索範囲を広げていた。臭いを嗅ぎ、気配を読み、敵の存在を感知しようとして、ありとあらゆる感覚を駆使している。
やがて、周囲一日行程の範囲に敵がいないことを確認した巨狼は、長い遠吠えの後に野営地に向かって駆け始めた。

――やっぱり、なにもいないですね。
野営地に向かいながら、アービィは念話で全員に伝えた。

――じゃ、早く戻ってきてよ、みんな待ってるから。
ルティが代表して思念を返してきた。

一気に丘陵地帯を駆け抜けた巨狼は、川の畔で既に酒盛りを始めていた一行の姿に、思わず力が抜けそうになった。
繁みで獣化を解き、服を着込んだアービィが近付くと、頬を赤く染め始めたルティが酒瓶を振り回している。車座になり焚き火を囲む八人は、それぞれにシェラカップを呷り、火にかざされた干し肉にかぶりついていた。ルティが開いている自分の横を指差し、ティアが隙間を広げるようにバードンに寄り添う。
アービィは、ルティのティアの間に腰を下ろし、少しだけルティに近寄った。

「間違いなく、最北の民はシャーラを放棄していますね」
一息に酒を呷ったアービィが、偵察の結果を改めて報告した。

「我らも精霊と交感して周囲を探りましたが、全く害意を持つものの気配は感じませんでした。
やはり、反撃密度を高めるため、防衛線を縮小したということで間違いないでしょう」
神官の一人がアービィの言葉を裏付けるように言った。

「されば、我らとしては、このままシャーラを確保するだけでございます。
吊られてラーニャを一気に衝こうなどとは、思わないことでございますな」
エンドラーズが頷く。
調子に乗ってシャーラより先に進んでも、それこそ補給が追いつかない。
兵站距離が伸びれば伸びるほど、陸路の補給業務は無駄が多くなる。補給部隊も喰わなければ動けないし、帰り道の食料も必要だからだ。荷車に満載した食料が、行程を消化すると共に将兵に消化されていく。一定の距離を越えれば、運び始めた食料の半分以上が、輸送部隊の腹に消えるのだ。
一度壊滅したターバ以北の食糧生産が軌道に乗るには、まだ数年掛かると見積もられていた。

「本当にそれだけでしょうか？
今頃、河川流域に展開した部隊に、合成魔獣と不死者が襲い掛かっているなんてことはないですよね？」
不安げにティアが誰とはなしに聞く。
実際問題として、その危険性が一番高い。

シャーラを落とし、ラーニャを落としても、河川による補給路が確保できなければ、大部隊を進出させたらその維持はできない。

今回のように、精鋭部隊や大規模な侵攻部隊を進出してきたと見たら一旦兵を退き、拠点に縛り付けたうえで補給路を絶てば、少ない犠牲で大きな被害を与えることができる。精鋭部隊も大規模な軍団も、その育成には多大な時間と経費が必要だ。ましてや、将兵一人一人が積み上げる経験は、カネを出して買えるというものではない。当然それは最北の民にも、当てはまることでもある。正面からぶつかり合うシャーラ防衛より、神出鬼没の遊撃戦に徹することが可能な河川流域防衛の方が圧倒的に少ない兵力で済む。戦力の消耗が避け得ないのであれば、それがより少ない方を選ぶということは当たり前の判断でもあった。

河川流域の制圧を阻止できるということは、最北の地への侵入も同時に阻止することを意味していた。

「その危険性はあるよね。

でも、昼間にバードンさんが言ったとおり、あたしたちが今から引き返しても間に合わないでしょ。

どこに行けば良いか判らないんだし。

それに、ピラムの皆さんを放り出していくわけにも行かないでしょ？」

そのような事態になっていたら、河川流域制圧部隊が奮戦するしかない。

如何に巨狼の脚が速いといっても、行き先が分からなければ宝の持ち腐れというものだ。

もし、どこで制圧部隊が襲われているか分かったとしても、せいぜい石畳程度の舗装しかなく、サスペンションやスプリングといった快適に乗用するための補助機構が発明されていないこの時代では、巨狼の全力疾走に曳かれる荷車の振動に長時間耐えられる人間も魔

獣もいない。どうしても適宜休憩を取らなければ、到着した時点で乗り込んでいた者たちは、疲労と打撲等の肉体的ダメージで戦力にならなくなっている。
ルティの返答は、昼間に話し合ったことを確認するだけだった。

「ここで考えていても仕方ございません。
早々にシャーラを確保し、ピラムの方々の橋頭堡を築きましょう。
秋のうちに最北の地を衝くか、ここで冬篭りか、一旦ターバかパーカホまで退くかは、司令部が考えることでございます。
狼、干し肉ばかりではかなわん。
まだ食料に余裕のあるうちは、何か旨い物を作れ」
堂々巡りになりそうな会話を、バードンが干し肉と共に食い千切った。

「分かりましたよ。
作りますけど、手伝ってくださいね」
アービィはそう言って席を立つ。
言い出した手前、放っておくわけにも行かず、ティアに睨まれたこともあり、渋々といった態度でバードンも席を立った。

「あの二人、なんだかんだ言っても仲良さそうね」
笑みを湛えたティアがルティに言う。

「あたしがバードンさんを始めて見たときも、仲良く飲んでたみたいよ」
噴き出しながらルティが言った。
その声が聞こえたのかバードンは照れ臭そうに振り返り、ルティに困ったような顔で頭を下げた後、アービィを力一杯張り倒した。

「見て見て、兄弟みたい、あの二人」
笑いを堪えきれず噴き出したティアに吊られ、焚き火を囲む七人全員の笑い声が夜の森に木霊した。

自身を包んだ白い光が消失した後、ニムファは目を開いた。
ラシアスのアルギール城地下迷宮から魔法陣を通ってどこへ来たのか、ニムファは把握していない。グレシオフィをまさか最北の民とは思うこともなく、神の使いと信じ込んでいたニムファは、眼前に驚愕の表情で立つ女を見て鏡写しのように驚愕の表情に染まっている。
グレシオフィはニムファの前に姿を現す際には、髪の色を栗色に変化させていた。顔立ちまでは変えることはできないが、ニムファの濁った眼力ではグレシオフィを北の民と見抜くことは適わなかった。
それ故に、魔法陣で転移したニムファは、ここが最北の地とは欠片ほど思ってもいなかった。

唐突に起動した魔法陣に慌てて駆けつけたオセリファは、そこに南大陸の住人が立ち尽くしているのを見た。
南大陸の住人で魔法陣を使用できる者は現在一人しかいないとグレシオフィからは聞かされていたが、唐突過ぎる出現にそれが誰であるかオセリファはそのとき認識できなかった。

「誰か？
この神聖な魔法陣を汚す貴様は、誰かっ！？」
誰何しながら、オセリファは混乱した頭で考えていた。

現在彼女が前にしている魔法陣は、グレシオフィが最も重要視しているものだった。

即ち、南大陸への侵攻の際に足掛かりにするため、二年かけて築き上げたラシアス地下迷宮へ繋がるものだ。どう考えてもそれを通ってくるものは一人しかいない。それも生者であるはずがない。その者がグレシオフィから受けていた命令は、ラシアス地下迷宮にある魔法陣の守護のはず。

僅かの間にそう考えたオセリファは、眼前に立つ不死者に対し頭に血が上る感覚を感じていた。

「貴様、何故ここに。

猊下からどのような命を受けていたか忘れたか？

どういうことか、説明してみるが良い」

驚愕の表情を収め、冷徹ないつもの立ち居振る舞いを取り戻したオセリファが言う。

だが、驚愕の表情のまま固まったニムファは、口を無為に開閉させるだけで言葉としての音声を発することができないようだった。

無理もない。眼前に立つオセリファは、生粋の北の民だ。目が覚めるような金髪に、南大陸の住人に比べ掘りの深い顔立ち。どう見ても巡幸の際に目にすることのあった、貧民窟に屯している貧しく卑しい、恥知らずな北の民と、同じようにしか見えない。次第にニムファの心に眼前の無礼な女に対する怒りが湧き上がり、それが却って冷静さを取り戻させた。

一息大きく深呼吸したニムファは、静かに口を開いた。

「そなたこそ、何者ですか？

私はラシアス女王ニムファ・ミクランサ・ミリオフィラム・ネツォフ・グランデュローサ。

そなたの物言い、無礼極まりないものです。

身分を弁えなさい、北の民」

轟然と胸を反らし、ニムファは言い放った。

「それがどうした。
貴様は、何の権限があって猊下の命に背く？
地下迷宮の魔法陣の守護はどうした？
グレシオフィ猊下の命はどうした！
答えろ、ニムファ・ミクランサ・ミリオフィラム・ネツォフ・グランデュローサ！」
叩き付けるようにオセリファは叫んだ。
その言葉にニムファが反応した。

「そなた、卑しい北の民如きが、お使い様の名を軽々しく口に出すでない！
お使い様よりいただいたこの力、そなたの身を以って思い知るが良い！」
そう言うなり、ニムファは魔法陣を飛び出し、オセリファに掴みかかった。

吸血不死者に限らず不死者は、自らを転生させた者に逆らうことはできない。
だが、ニムファを転生させたのはグレシオフィであり、オセリファに対する服従に義務は生じていなかった。グレシオフィにしてみれば、ニムファはあくまでも南大陸での橋頭堡という位置付けであり、北の大地へ呼び寄せる気などさらさらない。オセリファと顔を合わせる予定もなく、もしあるとすればグレシオフィがオセリファを帯同して南大陸へ赴くときだ。
ニムファの勝手な行いが招いた、予期せぬ遭遇だった。

「猊下より聞き及んでいた通りの、短慮。
救いようのない思い上がりと、莫迦さ加減。
どうして猊下はこのような者に、力をお与えになったのか」

オセリファは、嘆息と共にニムファの一撃をかわす。
態勢を崩し、無様に目の前を過ぎようとするニムファの延髄に、オセリファの手刀が打ち下ろされようとした。

「そこまでだ、オセリファ」
背後から柔らかな声が聞こえ、オセリファの動きが封じられた。

声に拘束の魔力など秘められていないが、オセリファにとってその声はこの世界の何よりも強制力を伴うものだった。
ニムファの首を打ち落とす寸前で手刀が止められ、勢いを止められなかったニムファだけが、無様な姿を晒して床に転がった。ニムファが身体を起こし、怒りに染め上げられた目でオセリファを睨んだ時には、既にオセリファはグレシオフィの前で片膝を付き、頭を垂れていた。
その光景を、ニムファは信じられないといった面持ちで、眺めるしかなかった。

オセリファの前に立つグレシオフィの髪は、本来の金髪だった。
ニムファの知る神の使いではなく、最北の民を率いるグレシオフィが、初めてニムファの前に姿を現した。その姿にニムファは戸惑いを隠せず、ただ唖然としたまま立ち尽くすだけだった。
騙された、そういった思考が頭を過ぎるが、転生の際に植え付けられた絶対服従の強制力が、ニムファの自暴自棄を抑えつけていた。

「お使い様、これは一体、どういうことでしょうか？
まさか、お使い様が北の民などと……」
やっとの思いで、ニムファはそれだけの言葉を口にした。

「それが如何した、女王。

何故、王城からここへ？
そなたには、魔法陣の守護を申し付けておいたはず。
何が起きたか、話すが良い」
柔和な顔に僅かな厳しさを漂わせ、グレシオフィはニムファに命じた。

「宰相や神官どもが、寄ってたかって私を居室に封じ込めようと。
廊下に怪しげな結界を敷き、それを越えようとした侍女は瞬時に灰と化し、危険を悟った私は魔法陣でこちらに」
ニムファは目を伏せながら、要領を得ない返答をする。

「つまり、貴様は魔法陣を放棄してきた、ということか！？
あれを築くため、猊下がどれほどの労力をお払いになったか。
それを貴様は……っ！」
あまりの口惜しさに、オセリファは絶句した。
おそらく、いや、間違いなく、精霊の結界が敷かれたのだろう。
いずれ城を囲む結界が敷かれたら、魔法陣に転移し実体化した瞬間に、グレシオフィであろうと灰化する。

これではアルギール城の地下迷宮に侵入しても、南大陸に攻め込むことはできない。
合成魔獣を転移させることはできるだろうが、結界を破壊できるかどうかは偶然に頼るしかなく、確かめる術はない。単独で送り込まれた合成魔獣は、それなりの被害を与えるだろうが、所詮それまでだ。開けた場所ならともかく、人一人がやっと通れるような隘路がある地下迷宮では、身動きも適わず本来の力を発揮する前に討たれてしまう。
ニムファの先の見えていない行動に、オセリファは暗澹たる思いに囚われていた。

「そなたは、本当に役立たずよのう。
ラシアスの王族貴族は、無能ばかりということか。
あの偉丈夫も役立たずであったし、この女王も先がまるで見えておらぬ。
如何いたそうかの、オセリファ？」
南大陸侵攻が露のように消失した現実に、グレシオフィは顔には出さないが大きく落胆していた。
ラシアスを起点に南大陸に侵攻し、北の大地で直接刃向かう小賢しい者共を絶望の淵に落とし込んでから殲滅するつもりだった。

ニムファに不死者転生の能力を授ければ、南大陸に不死者の軍を作り出すことは容易だった。
だが、場当たり的で捨て鉢になりやすい性格のニムファに、現時点でその力を与えた場合暴走する危険性が大きかった。力を得る度に使い道を誤り、自らの立場を危うくしては現実から逃げ、また新しい力を望み、手に入れまた使い道を誤る。ニムファが繰り返してきたことだ。勇者という力、摂政という力、女王という力、不死者という力。どれもこれも上手く使いこなせれば、ニムファの望みは簡単に叶えられていたはずだ。しかし、ニムファにその器はなかった。そのような者に過剰な不死者生成の力を与えてしまっては、片っ端から不死者を生み出し、倍々ゲームで南大陸から生者が消え失せる危険性がある。
それでは面白くない。

徹底的に虐げてやらなければ、最北の民の怨みは晴らせない。
不死者に統治され、一切の自由、一切の快楽、一切の幸福を取り上げて、緩慢に死へ向かわせてやるつもりだった。グレシオフィはニムファを洗脳しきった時点で、その力を与えるつもりでいた。しかし、不死の身体を手に入れた時点で全能感に溺れ、欲望に流されたニムファが全てをぶち壊しにしてしまった。

南大陸へ行くには、中央部から平野部という敵地を、突破しなければならなくなっていた。

グレシオフィは、いつの間にか平伏したニムファに冷たく一瞥をくれると、オセリファに立ち上がるよう促した。

グレシオフィとオセリファが並び立ち、ニムファに新たな命令を下す。

「知らぬこと故、この度のオセリファへの無礼は罪に問わぬ。
だが、オセリファの言葉は我が言葉と心得よ。
未来永劫、絶対服従とな。
女王、一度だけ汚名返上の機会を与える。
居室を与える故、別命あるまでそちらに控えよ」

グレシオフィは重々しく言い放つと、オセリファを伴い魔法陣の間を出て行った。

ニムファは、転生の際に植え付けられた絶対服従の強制力に、従わされただけではない。

国を捨て、全てを投げ出した彼女は、グレシオフィに放り出されてしまっては、心の拠り所を喪い気が狂ってしまいそうだった。自ら命を断つ以外、死ぬことのない不死者の身体は、永劫の精神的苦痛が残るだけだ。もちろんニムファに自害する度胸などなく、脚に縋ってでもグレシオフィの歓心を買う以外、考えは浮かばなかった。

居室に蹲り、ニムファは纏まらない思考の深淵に沈んでいった。

グレシオフィは苦り切っていた。

戦略が大きく狂っている。シャーラまでを明け渡しラーニャ以北を聖域化することで、最北の地での反撃密度を高め、何度攻め込ま

れても撃退できる体制を整え、長期不敗体制を築くというのが彼の戦略だ。アービィたちを疑心暗鬼に陥れた監視者など存在せず、シャーラの放棄は規定方針に従ったことだった。もちろん、空き家となったシャーラを南北連合が放っておくとは思わず、必ずある程度の部隊を送り込んでくるとグレシオフィは読んでいる。そのためにターバ以北の河川流域には遊撃部隊を展開させ、シャーラへの補給を寸断する。陸路のみの補給では、シャーラに大部隊を配することは不可能だからだ。ターバが一大拠点となっても、それ以北のインフラ整備は平野部に比べれば遙かに困難だ。南北連合がどれほど頑張ろうが、河川流域の制圧無くしてはシャーラが攻勢臨界点だった。

シャーラを餌に、グレシオフィは南北連合の大部隊か精鋭部隊という大物を釣ろうとしていた。

もちろん、南北連合も馬鹿ではないと、グレシオフィは認識している。

南北連合が補給の困難さから部隊を失うことを危惧して、シャーラを放棄するならそれも良し。不死者にとって家屋は整備されている必要はなく、直射日光さえ遮ることさえできれば充分だ。警戒に当る生者の住処くらい、夜間に不死者を動員すれば再建など造作もない。もし、シャーラを死守しようというのなら、河川流域の締め付けを強化すればそれ以上の北上は阻止できる。うまく事が運べば、南北連合の戦力を大きく削ることができる。

南北連合に出血を強要する膠着状態を生み出すことは、どちらにせよ可能だった。

秋までに膠着状態を生み出せば、そのまま冬がシャーラの拠点化を阻んでくれる。

然る後にニムファに不死者生成の能力を授け、南大陸に不死者の軍団を作り出す。育成に多大な時間と予算を喰う兵と違い、不死者は一瞬で作り出せるため、短期間でかなりの軍勢を揃えられるのだ。

南大陸の資源と技術力を以てすれば、直射日光を遮る天幕などいくらでも増産できる。そうなれば不死者の軍勢に、移動範囲の限界はなくなる。春までに南大陸を手中に収めることは、不可能ではないはずだった。あとは北の大地に残る小賢しい南北連合を、鉄槌と金床の理論で叩き潰せばよい。

来年の夏には、グレシオフィの世界制覇が完了するはずだった。

それをニムファがぶち壊しにした。

冬の到来と、南大陸に不死者の軍勢を生み出すことを前提に、シャーラを捨てたのだ。改めて南大陸の拠点作りから始めていては、金床の完成はいつになるか解らない。いくら河川流域を抑えていようと、南大陸からの人的、物的補給を止めなければ、いつかは押し切られてしまう。

早急に打開策を講じる必要があった。

しかし、大戦略が崩れた今、付け焼刃の対応でどうなるものでもない。

この世界にも、『急いては事を仕損じる』に類する言葉はあり、そのようなときには『急がば回れ』に類する言葉が処世術として存在していた。

「時間稼ぎに使うか……」

グレシオフィはそう呟くと、ニムファを呼び出し、いくつかの命令を簡潔に伝えた。

シャーラの結界は、当初の予定より八日早く完成していた。

アービィが獣化して稼いだ日数が四日あったうえ、不死者も合成魔獣も妨害に出てこなかったことから作業が捗り、シャーラ到着から十日で完了を見ていた。アービィたちに遅れること六日目に、何

の妨害も受けずに補給部隊が到着したことも、作業の進捗に大きく寄与していた。シャーラに到着するなり輜重兵は工兵に早変わりし、神官たちの結界敷設作業に加わっている。アービィとティアは獣化して周囲の警戒に当り、ルティとバードンも、ピラムの民も作業に加わっていた。もともと、ターバからシャーラまで十日、結界の敷設に十四日を見ていたが、アービィたちのターバ出発から十六日目にシャーラは完全に南北連合の勢力下に収められたのだった。

もちろん、良いことばかりではなかった。

アービィたちは知る由もなかったが、ティアの危惧したとおり、河川流域の制圧は遅々として進んでいない。

最北の蛮族は過去の戦訓に習い、拠点を設けずに遊撃戦を仕掛けてきた。ほとんどの生者は攻撃に参加せず、日中不死者が直射日光を避けるためのシェルターを掘ることに専念していた。日没後、知性を持つ吸血不死者に率いられた少数の生者と合成魔獣、そして低位の不死者が、河川流域に展開する南北連合軍の拠点を攻撃する。生者は拠点に張られた結界の基準点を見極め、合成魔獣に破壊させた後、不死者の群れが拠点に突入するという、山脈地帯でも見られた戦法だった。そして、巨大な攻撃力を有する最北の蛮族たちだが、日の出を警戒してか長時間の戦闘は避け、一撃離脱に徹していた。

南北連合の将兵も必死に防戦に努めたが、合成魔獣による被害は馬鹿にできず、有力な拠点のいくつかを放棄に追い込まれている。

それだけではない。

壊滅した拠点は放棄するにせよ、損害を受けた拠点に将兵の補充や食料、医療品といった戦略物資を送らなくてはならないが、それも狙われたのだった。河川の流れが緩やかな場所の水深は深く、水深が浅ければ流れが速い。どこであっても筏をひっくり返されては、武装した将兵は泳ぐことも儘ならず、溺死者が相次いでいた。襲撃時に運良く甲冑を着けていないか、咄嗟に外すことができたとして

も、本来の活動場所ではない水中で合成魔獣の爪や牙から逃れることは至難の業だ。
人的被害も、物的被害も馬鹿にはできず、河川流域制圧は頓挫する寸前になっていた。

河川流域制圧部隊の苦境は、シャーラに到着した補給部隊第二陣から、アービィたちに知らされた。
同時に、司令部からはシャーラの維持と、ラーニャの偵察を指示された。ピラムの民にも、最北の地への潜入が指示され、ラーニャまでの護衛がアービィたちに指示されていた。ラーニャを過ぎれば完全な敵地であり、ピラムの民の危険度も上昇するが、そこから先の護衛は指示されていない。
ピラムの民から抜け道の存在を聞かされていたこと、シャーラ防衛に大人数は割けないこと、見知らぬ者を連れての潜入工作は却って危険であることが考慮された結果だった。

「いいんですか、戻らなくて？
河川流域の安全確保を先にしないと、シャーラは維持できないんじゃないですか？
春先ならともかく、これからの時期じゃここでの自給自足も無理です。
陽動作戦は失敗と見て、いったん陣を退くべきと思います」
危惧が的中してしまったティアが、焦燥感を含ませて言った。
シャーラの中でも比較的傷みの少ない家屋に設えた会議場で、アービィたちと補給部隊の将官たちが今後の行動について意見を述べ合っていた。

「ご心配をお掛けして、まことに申し訳なく思います。
ですが、河川流域の確保につきましては、こちらにお任せいただ

きたくあります。
間もなく冬が到来いたしますが、この間は河川を使用した補給はいずれにせよ無理であります。
従いまして、冬季シャーラへの補給は、橇を使用する予定であります。
アービィ殿たちにおかれましては、冬までにラーニャの偵察及び、ピラムの方々をラーニャまで護衛していただきます。
その後は、補給につきましては責任を持って当たらせていただきます故、シャーラの結界を防衛していただきたくあります」　申し訳なさそうな表情で、輸送部隊の指揮官が言った。

「つまり、僕たちと神官様たちは、次の春までここにいろ、そういうことですね？」
厳しい口調でアービィが聞き返す。

「はい、その通りであります」
指揮官は簡潔に返答した。

「もうちょっと、こう、なんていうか、言い方ってもんがありません？」
余りに直球な返答に、ルティが苦笑いしながら言う。

「申し訳ございません。
どう言い繕おうと、結果的には同じであります。
皆様の行動につきましては、自由裁量で構いません。
無理と思われたなら、被害が出る前にターバにお戻りください。
もちろん、ピラムの方々も、潜入するに当たって危険とご判断なされたら、無理せず一旦お退きいただきます」
真面目な顔で指揮官は言ったが、内心の苦衷が窺い知れている。

「解りました。
もともと、ここで冬篭もりの可能性があるってことは解ってましたし。
それに、ピラムの方々を置いていくわけにもいかないでしょう」
アービィの底抜けな楽天さが発揮された。

「他にも、最北の地を脱してくる民がいるかもしれない。
そういうことでございますかな？」
バードンが指揮官から視線を外し、席を立って窓から北の空を見ながら言う。

「ご慧眼。
当然そのような事態も、想定されております。
そのために、こちらの備蓄糧秣は皆様方が冬を越ために必要とする以上の、過大な量を輸送する予定でおります。
最北の地を脱してきた民に、充分とは言えませんが分配できるはずであります。
もっとも、充分に備蓄ができるかどうか、河川を利用できない現状では心許なくもありますが、精一杯に任務を遂行いたします。
また、万が一、最北の地を脱してくる民に追っ手が掛かった場合、その排除をお願いします。
とにかく、シャーラを過ぎれば一日行程内の集落を確保してありますので、なんとかターバまで落ち延びさせることは可能と考えます」
指揮官は、バードンの背に向かって返答した。

「我らの命綱は、そこの狼、という認識でよろしゅうございますかな？」
振り向いたバードンは、笑いながらアービィを視線で差し、指揮官に言った。

「解ってますよ
ちゃんと狩ってきますから」
アービィも笑いながら言い返す。

「アービィ殿お一人にご負担をお掛けすることになりますが、よろしくお願い致します」
指揮官の言葉で会議は終了した。

「アービィ、いつラーニャに行く？」
巨狼の毛皮の感触を、素肌で感じながらルティが聞いた。

――そうだね、みんなと、ピラムのみんなもだけど、相談してからだけどさ、早い方がいいよね。
少し考えてからアービィの念話が返ってくる。

補給部隊からの差し入れで、久々に石鹸で毛皮を洗った巨狼は、ふかふかに膨れ上がっていた。
仮の住居に使用できる家屋はそれほど多くなく、エンドラーズを始めとした神官たちとアービィたちで、それぞれ一軒ずつを占有していた。いずれ第三陣、第四陣の補給部隊が到着した際には、修繕可能な家屋はできるだけ再生することになっている。プライベート空間の確保は、長期間他人同士が暮らしていくうえでなくてはならないものだった。
巨狼の腹に埋もれようとしたティアは、ルティに蹴り出された後、バードンに引きずられて居室に消えていた。

「そうね。
いつまで続くのかな、この争い。

和平交渉って、手掛かりもないんでしょ？
早く終わって欲しいね」
巨狼の首を抱えながらルティが言う。

――厭戦気分は最北の民の間にも、あると思うよ。ピラムの皆さんが、上手く煽動してくれるといいんだけどね。
欠伸をして、長く舌を伸ばし、巻き取るように口に収めながら、アービィは念話を返した。

最北の地でグレシオフィに抵抗している部族は、ピラムを含めても十はない。
人口比で言えば、グレシオフィが束ねる勢力の十分の一程度まで討ち減らされていると見積もられている。生者だけの比率であれば僅かに逆転するだろうが、グレシオフィの勢力を昼間だけで殲滅できるほどではない。
グレシオフィ側の生者を寝返らせることができれば、戦局は一気に動くと見られていた。

「みんなの意見も聞いてみないと解らないけどさ、明日準備、明後日発っていうのも、あり？」
眠たげに目をしばたかせつつ、ルティも欠伸を噛み殺しながら言う。

――そうだね。その線で明日、話してみようか。
早く終わらせたいという気持ちは、アービィも同じだ。
面倒になったわけではない。怨みや意地、面子といったもののために、人が死んでいくことに嫌気が差してきたのは誰もが同じだった。
攻めてこなければ撃退もしないと、南大陸の住人や中央以南の北の民は言う。抵抗するなら殲滅するまでと、最北の民は言うのだろ

う。どこまで行っても平行線だ。簡単に引っ込められるなら、それは怨みとは言わないだろう。

どこかで、互いが全てを摺り潰すほどの全力をぶつけ合うまで、この争いは終わらないのかも知れない。アービィはそう考えていた。

取り留めのない思考の中、ふと気付くとルティの寝息が聞こえてきた。

巨狼は欠伸を一つして、ルティを包み込むように丸くなった。

二日後の早朝に、シャーラを発つ一団があった。

アービィたち四人とエンドラーズ、十人のピラムの民がラーニャを目指した。ピラムの民は食糧事情から十人に絞り、残りはシャーラで待機している。ラーニャをアービィたちが偵察し、その状況如何で残ったピラムの民はターバへ戻るか、最北の地へ潜入するかが決定される。ターバへ戻るのであれば補給部隊に随伴し、最北の地へ潜入するのであれば、再度アービィたちが護衛に付く手筈になっている。

いずれにせよ、ラーニャにどれほどの戦力が展開しているか、それを見てこなければ話にならない。

ラーニャまでの道中は、平穏そのものだった。

人間が減り、野生動植物の宝庫となった北の大地は、十四人がほぼ補給を要さないほどの実りを与えてくれている。アービィが動物を狩り、バードンが食用可能な植物を見分け、ピラムの民が南大陸の住人が知らない野草を探り出す。エンドラーズはピラムの民が見つけだす野草を見る度、嬉しそうな表情を隠せなかった。新しい知識と経験ほど、精霊神官を楽しませる者はない。

知り、食べ、覚え、見つける。ピラムの民について野草を探し回るエンドラーズは、疲れを知らない子供のようだった。

もちろん、エンドラーズは遊びに来ているわけではない。
常に精霊との交感を維持し、周辺の害意や悪意を探っている。アービィも気になることがあれば、随時隊列から離れ周囲を走っていた。だが、不死者も、生者も、合成魔獣も姿を現すことなく、ラーニャを遠望できるところまで、何事もなく行程は過ぎていった。どうやら最北の民は、シャーラだけではなくラーニャ以南を放棄して、その戦力を最北の地と河川流域に集中していることは間違いない。そして、中央街道沿いでは、不完全ながら焦土作戦を展開しながら戦線を引き上げている。
ラーニャまでの途上に点在する集落では、生者が生活した痕跡はあっても、食える物や使える物は何一つ残されていなかった。

「じゃあ、行ってくるね。
何かあったら、すぐ念話で伝えるから」
ラミアのティアラを髪に飾ったティアが獣化する。
話には聞いていたが、ピラムの民がティアの本当の姿を見るのは初めてだ。思わず息を呑む気配が伝わるが、ティアはピラムの民に軽く微笑んだだけだった。
そして、艶かしい笑みを残してティアは『透過』を詠唱し、姿を消した後ラーニャの集落に潜入した。

ラーニャから中が見えにくい林に身を潜め、アービィたちはティアからの連絡を待っている。
時折、人影を見たとか、不死者のいそうな社があるとか、合成魔獣の檻を幾つも確認したという念話が届いてきた。エンドラーズとバードンが、ティアからの情報を元にラーニャの簡単な地図を羊皮紙に描き、見つけた施設等を描き込んでいく。それまで通ってきた集落とは比べること事態莫迦らしいほど、ラーニャは要塞化されて

いた。
ティアは順調に偵察を進め、やがて陽が落ちた。

――嫌ぁっ！
唐突に、ティアから叫び声が念話で届く。

――どうしたの！？　ティア、返事してっ！
アービィが念話で答えるが、ティアからの返答はない。

――バードン！
その一言が伝わり、ティアからの念話が途切れた。

ただならぬ気配に、アービィが瞬時に獣化する。
無言でルティとバードンがその背に飛び乗り、巨狼が地を蹴った。

――エンドラーズ様、ピラムのみんなをよろしくお願いします！
ティアを連れてきますっ！
遠ざかるアービィから念話が叩き付けられた。

――お任せあれっ！　少し離れた場所にてっ！
事態を悟ったエンドラーズから、アービィを安心させようとしている思念が返された。

巨狼はティアの気配を探りながら、ラーニャの集落を駆けた。
何事かと家屋から顔を出した最北の生者たちが、禍々しい気配に気圧されてその場に尻餅を付く。

やがて、実体化し、何かを掻き抱き、地面に蹲るラミアの姿が見

えた。

「アービィ、あれっ！」

ルティの叫びに呼応した巨狼が大きく跳躍し、ティアの真横に降り立った。そのときには正面にバードン、背後を守るようにルティがティアに寄り添う。

「ティア！
どうしたっ！
答えろっ！
ティ――っ！？」

バードンがティアの肩を掴んで引き起こし、叫び、そして息を呑んだ。

石の塊がティアの腕から重い音を立てて零れ落ち、ティアの手が力なく垂れ下がる。

その胸元には、夥しい流血の中に鈍く光る短剣が深々と突き刺さっていた。

「ティアっ！」

バードンとルティの叫びが重なり、巨狼の唸りがそれに被った。

「あ、ヘマしちゃった……
ごめんなさい、心配掛けちゃった……ね」

血の気の失せた顔で、ティアが薄く目を開けバードンに言った。

「何があった！？
いや、もう喋るな！
狼、撤収だ！」

今までに見たことがないほど狼狽したバードンが叫ぶ。

ルティが『快癒』の詠唱を開始したとき、微かに聞き覚えのある声が響いた。

「逃すか、南大陸の犬どもも」

突然社の中から巨体が現れ、ルティに向かって突進し、勢いを殺すことなく剣を振り下ろした。

ルティは咄嗟に体を入れ替え剣をかわすが、『快癒』の詠唱は強制的に中断させられてしまった。

同時にティアが咳込み、大量の血を吐いた。バードンが必死の形相で呼びかけるが、ティアの意識は闇に墜ちて行った。

バードンの喉から、言葉にならない叫びが迸った。

ティアの身体から急速に熱が失われていくのを感じた巨狼が、尚もルティに突っかける偉丈夫に全力のタックルを敢行した。

家屋の壁をぶち抜いて吹き飛ばされた偉丈夫が、立ちこめる土埃の中から立ち上がる。一気に間合いを詰めた偉丈夫が繰り出す剣の突きを、巨狼はその額で真正面から受け止めた。甲高い金属の破断音を残し、偉丈夫の剣が折れ飛び、その表情に恐怖と焦りが浮き上がった。

その背後から、これも聞き覚えのある女の叫びが偉丈夫を叱咤した。

「ウェンディロフ、あなたの力を見せてみなさい！

あなたから名誉も誇りも、地位も、命も、何もかも奪った、私を裏切った勇者に、怨みの力を叩き付けてやりなさい！」

傲然と胸を反らすニムファの言葉に後押しされ、ウェンディロフが雄叫びを上げ、巨狼に掴み掛かった。

――あなた方は、何故!?
ウェンディロフの突進をかわしながら、戸惑う巨狼から念話が漏れた。

「嫌ぁっ!?
なんでっ!?
どうしてっ!?」
突然ルティの悲鳴ともつかぬ叫びが、夜の大気を引き裂いた。

ティアに再度『快癒』を行使しようと、態勢を立て直そうとしたルティは、足下に転がっていたティアが抱いていた石の塊に足を取られてしまった。　痛みを堪えて立ち上がろうとしたルティの視界に、それが何であるかよく分かる角度で石の塊が入り込んだ。
切羽詰まった状況であるにも拘わらず、否応なしにそれが何であるか認めてしまったルティの喉は、こみ上げる悲鳴を止めることはできなかったのだった。

ルティに懐いていた少女が、恐怖と絶望の表情のまま、石と化していた。
華奢な身体は、どこを眺めても見つからない。石像に鈍器を力任せに叩き付けたらこうなるだろうと思われる破片が、そこら中に散らばっていた。ティアに『快癒』を掛けなければと思う心と裏腹に、ルティの身体はいうことを聞かなくなっている。
ルティは、石と化した少女の首を抱いて、その場に崩れ落ちた。

「穢らわしい北の民のクソ餓鬼が、百万匹死のうが石になろうが知ったことか!
なんだ、そんなに大事に抱えおって?
貴様等の飼い犬か!?

ならば、貴様等も後を追わせてやろう！
この不死の力を持ってすれば、石を砕くなど雑作もないことよ！」
一旦巨狼から距離を取ったウェンディロフが、叫びながら飛びかかる。

ウェンディロフを受け止めた巨狼は、その勢いでルティが抱えた物を見てしまった。
その瞬間。
巨狼の目が狂気に染まり、突っ込んできたウェンディロフの腰を銜える。そのまま頭を大きく振りかぶり、ウェンディロフの巨体を大地に力一杯叩き付けた。バウンドしてきたウェンディロフを前脚で押さえつけ、上方に向かっていた運動エネルギーを強制的に身体に封じ込め、もう一度大地に向けて叩き付ける。腰から背中、そして後頭部を地面に痛打したウェンディロフの身体は、意志に反して再度跳ね起きようとした。
巨狼は、跳ね起きてきたウェンディロフの頭を巨大な口に収めると、両前脚でその身体を抑えつけたまま、自身の上体を大きく、力の限りに反り返らせる。

肉が挽き千切れる鈍い音が響き、ウェンディロフの身体は、肩の直下から二つに分断された。　胸から下の身体が瞬時に灰化し、巨狼の口からは唾液にまみれた灰の塊が吐き出される。まだ身体の形状を留める灰の塊を、巨狼が踏みにじりながら詠唱した『暴風』が吹き散らした。
ラシアス王国贈侯爵ウェンディロフ・ラティフォン・ドン・テネサリムは、痕跡すら残さずこの世から消滅した。

怒りが治まらない巨狼の、狂気に染め上げられた両目がニムファを捉える。

恐怖のあまり、腰を落として後退るニムファは、切り札であるコッカトリスを呼び出した。
化鳥の叫びのような鳴き声を上げ、五頭のコッカトリスがニムファの声に呼応する。

「こいつらを、石にしてしまいなさいっ！」
ニムファの勝ち誇ったような声が響く。

しかし、姿を現したコッカトリスを、巨狼が睨み据えた。
コッカトリスの本能が、巨狼に対する恐怖を湧き上がらせ、その動きを封じていた。その臆病風は、その次に用意されている本能、即ち生存本能をも封じ込めてしまった。もし、その本能を掻き立てることができたなら、五頭の合成魔獣は生き延びる可能性があるかもしれなかった。
しかし、恐怖にすくんだ身体は動くことはなく、ニムファから発せられた追い打ちの命令が、コッカトリスの命運を決することになった。

バードンは、自身の身を切り刻むような焦燥感に灼かれていた。
ティアの身体から急速に体温が消えていく。取り乱したルティに、正確な呪文の詠唱は望めない。何よりバードンは治癒系呪文を持っていない。
このままではティアの命は、消えてしまう。

確かに戦闘で喪われた命は、水のレベル４『蘇生』で呼び戻すことは可能だ。しかし、チャンスは一度きり。失敗すれば、二度と蘇生は適わない。命が身体を離れて時間が経てば経つほど、成功率は下がる一方だ。全ての呪文を完全に修めたエンドラーズを呼び寄せるにも、そこへ戻るにも、ピラムの民の護衛として一旦後方に下が

らせているため距離がありすぎた。
一刻も早く目の前の障害を消し去り、ルティが呪文に集中できる状況を作り出さなくては、ティアを永遠に喪うことになりかねない。

巨狼が地を蹴った瞬間、知性などないはずのコッカトリスの脳裏に、死が認識されていた。
瞬く間に合成魔獣の喉を噛み裂いた巨狼が、ニムファの前に立ちはだかる。後ずさりしながらニムファが罵声を浴びせるが、巨狼は狂気に染まった目で見下ろしていた。

ニムファの心が、張り裂けた。
恐怖と絶望を通り過ぎたところには、理不尽な我が儘が、欲望が、本性が剥き出しになっていた。

「薄汚い、人狼がっ！
私の前に立つなぁっ！
私は、ラシアス女王なる、ぞっ！
貴様など、私が呼び寄せた、勇者などではないっ！
何故、何故、何故っ！
何故、皆が私の、邪魔をするっ！
私は、女王なるぞっ！」
まるで、自分の思い通りにならない子供が駄々をこねるかのように、ニムファは手足をばたつかせ、口汚く眼前の巨狼に罵りのありったけを浴びせかけた。

「皆、私のいう通りにしてるだけでいいんだっ！
何で思い通りにしてくれないっ！
何で貴様は私のものにならないんだっ！
全部、全部、私のものにっ！

私のものにならないものなんか、全部壊れてしまえっ！
死んでしまえっ！
壊してっ！
その薄ら穢い北の民のクソ餓鬼みたいにっ！
殺してや――」
――世界は！　人間は！　あなたの玩具じゃないっ！
巨狼から横っ面をはり倒すような念話が突き刺さる。
底抜けにお人好しな『アービィ』が、人を憎むという感情をどこかに落としてきたような『アービィ』が、初めて怒りを、殺意を、憎しみを露わにした。

巨狼が鼻筋をひきつらせるように立て、低い唸りを喉の奥で鳴らした。
短く息を吸い込むような短い悲鳴を上げ、ニムファは這い蹲ったまま社の扉を引き開け、中に転がり込んだ。ニムファはグレシオフィ以外の存在に、初めて気圧され、畏怖し、恐怖した。僅かに残る本能が、逃げろと命じる。全てをぶち壊しにする者から、全てを邪魔する者から、全てを奪い去る者から、逃げろ。捲土重来を期すため、逃げろ。
復讐。その意志だけを抱きしめて、ニムファは社の壁に描かれた神と魔法陣に飛び込んだ。

ニムファの姿が、禍々しい羊の頭を持つ神が背負う魔法陣に吸い込まれると同時に、白い光が魔法陣から真っ直ぐに迸った。
アービィがビースマックで浴び、暫くの間狼が姿を消すことになった光と同じものだ。それが、床から垂直にではなく、壁から水平に伸びる。そのとき魔法陣から伸びる光の同一線上に、巨狼とルティが偶然並んでいた。　魔法陣が光を放つ寸前、巨狼がルティを銜えて跳んだ。その拍子にルティの腕から少女の首が零れ落ち、光の帯が少女の首を包み込む。

暴風に吹き晒された砂山のように少女の顔が崩れ、消滅した。

「なんてことを……
なんてことをっ！」
ルティの怒りが裂けた。

着地した巨狼の口を振り払い、魔法陣に向かって突進する。
もう一度光が襲ってくるかもしれないなど、このときルティの脳裏からは完全に消え失せていた。ティアを傷付け、少女を殺した相手は、八つ裂きにしても、切り刻んでも許せない。剣に手を掛け、気合一閃、魔法陣の描かれた壁に向かって抜刀し、一気に振り下ろす。真下に打ち下ろし、左から右へと薙ぐ。どれほど剣を振るったか、壁が崩れ始め、音を立てて崩落するまでルティの斬撃は止まらなかった。
剣を振り下ろす対象が消え失せ、ルティはその場に崩れ落ちた。

「ルティ殿っ！
ルティ殿っ！
お願いでございますっ！
ティアを、ティアをっ！」
地面のへたり込み、肩で息をするルティに、バードンの悲痛な叫びが届いた。

血塗れのティアを掻き抱き、あらん限りの声を絞ってバードンはティアに呼びかけ続けていた。
自らも血塗れになることを厭わず、バードンはティアを抱きしめている。少しでも力を緩めれば、そのままティアの体が消滅してしまうとでも思っているかのようだった。既にティアは息をしていな

い。心臓も鼓動を止めている。一刻も早く、一秒でも早く『蘇生』を掛け、魂を繋ぎとめなければ、ティアは本当に冥界へ旅立ってしまう。

バードンの叫びにルティが覚醒した。

「バードンさん、ティアから離れて。

短剣を抜いてあげて。

機会は一度きり。

あたしの、命を注ぎ込むつもりで。」

ルティは、意を決して言った。

バードンがティアを大地に横たえ、深々と胸に食い込んだ短剣を引き抜いてから一歩後ろに下がる。

巨狼は、不死者や生者が突入してきたときに備え、少し離れて位置で周囲の気配を探っていた。

「ティア、今あなたを失いたくない。

いえ、今じゃないわ、永遠によ。

あたしたちを見送るって約束、あたしたちの子供を、子孫を見守るって約束は、絶対に破らせない。

……

帰ってらっしゃい、ティア！」

長い呪文の一言ずつに、自分の命を擦り込むような集中力で詠唱し、ルティは『蘇生』を唱えた。

ティアを青い光が包み込み、やがてゆっくりと明滅が始まる。

永遠と思えるような時間が瞬く間に流れ、光が徐々にティアに吸い込まれていく。ティアの瞼が、僅かに動いたように見えた。

間髪を入れず、ルティは『快癒』を唱え、呪文使用回数の限界まで、重ね掛けした。

ティアの心臓が力強く鼓動を始め、口から息が吸い込まれる。胸にあった傷は、跡形もなくなっていた。

やがて、深い眠りから目覚めるようにティアは目を開け、上体を起こした。

「お帰り、ティア」

ルティが一言だけ言った。

「ただいま、みんな。

――ちょっと、バードン！

何、何!?

どうしたのよ!?」

恥ずかしそうにティアが答え、辺りを見回して驚いた声を上げる。

家族を失って以来、人前で涙を見せなかった人狼狩りが、声を上げて泣いていた。

第９５話

魔法陣に飛び込んだニムファは、闇の中を漂っていた。
巨狼の牙を脱し、グレシオフィの砦に移転するはずが、いつまで経っても闇から抜け出せない。正しく魔法陣が発動したのならば瞬時に移動は完了し、闇を漂うなどということは起こり得ないはずだった。
このまま闇に飲み込まれ、二度と現実世界に戻れないのではないかという恐怖に、ニムファは苛まれ続けていた。

その恐怖の中で、ニムファは全てに対し怨嗟の呪詛を吐き散らしている。
何もかもが思い通りにならなかった。このような境遇に落とされたことへの、全世界に対する怨嗟がニムファの中に渦巻いていた。
何から何まで、自分に敵意を持っているとしか、ニムファには思えなくなっていた。

唐突に、闇の中に鈍く光る球体が現れ、ニムファに接近してきた。
球体は闇に浮遊し、ニムファの周囲を漂っている。やがて球体は明滅を繰り返しながら変形を始め、人様の姿となってニムファの前で静止した。しかし、その頭部には二本の角を有し、両肩の背後には巨大な翼を広げている。相貌は角を備えることに違和感のない草食獣のそれであり、両腕こそ人間と同じではあるが、下肢は相貌に釣り合う蹄を持つ草食獣のものだった。
だが、とてつもない違和感を、踵がない両足は醸し出していた。

「あなた様は、神、様？」

自室にあった神像を思いだし、ニムファは黒山羊の頭を持つ異形に問いかけた。

「我はそなたらが崇める者
ニムファよ、そなたは何と戦う?」
低い声が答えた。

「私は、私の生きたいように生きたかっただけにございます。
それを、誰もが邪魔立てし、私を、女王たる私を蔑ろにっ!
私は、私を蔑ろにした者を赦しとうございません!
私に楯突く全てを打ちのめし、平伏させ、全世界を我が物に!
どうか、私に今以上の力を、力をお与えくださいまし!」
幼い頃は、全てが思い通りだった。

蝶よ花よと育てられ、人の命以外であれば、欲しいと思った物は全て手に入ってきた。
それがいつからだろう。慎ましく、控え目であることが求められ始め、欲しい物は最低限の物に抑えられ始めた。何かを言えばすぐ手に入るが、決まって両親から叱責された。やりたいことも我慢させられ、玉座の横に控え、笑みを絶やさないことを求められた。巡幸の合間に垣間見る庶民の子供たちが、道具は粗末でも楽しそうに遊ぶ姿が羨ましかった。
両親に遊びに行きたいと訴えても、立場を弁えろと一言で切り捨てられていた。

もちろん、ニムファだけが特別厳しく育てられたわけではない。ラシアスに限らず、どの王家も同じようなものだ。王や王族の一言や無配慮な仕草一つで、使用人の首が物理的に飛ぶ世界だ。何かを欲しがり入手できなければ、食事が口に合わず僅かでも顔をしかめれば、担当者が次の朝を迎えることはない。

それ故、王族には厳しい自制心が要求され、分別がつき始める年齢に達すると、まずそこから徹底的に叩き込まれるのだった。

国のため、民のため、王家のため。

全てが自分以外のためとされ、望みも夢も通り過ぎていく。幼心に刷り込まれた次期女王としての自覚が、ニムファの心を徐々に、当人すら気付かないうちに歪ませていった。家臣に気遣い、民を思いやる、慎み深い王女という評判が南大陸に広まるにつれ、自分を抑え、個を殺し、全てを諦めなければならなかった。

私は違うと叫ぶ自分の存在は、少しずつ心の中に育っていた。

最北の地に魔王が降臨したと聞かされたとき、勇者を召喚しようと思い立ったのは、純粋に民を想う心からだったと今でも信じている。

だが、魔王を滅したあと、勇者と契り合えば世界が手にはいると、考えていなかったとは言い切れなかった。魔王すら倒せる勇者の力を以ってすれば、世界を手中に収めるなど雑作もない。そう考えていなかったとは言い切れなかった。いや、それを望んでいた。そうなれば、何かを誰かに望む必要などなくなる。全てが自分のものだからだ。

だがそれは、自身が新たな魔王となるということに、ニムファは気付いていなかった。

「そなたは、我に何を望む？
全ての生きとし生けるものの殺戮か？
この世の破壊か？」
感情というものを、一切感じさせない瞳がニムファに問いかける。
「力を。

誰にも負けない力を！
私の前に全てが平伏す力をっ！」
ニムファが叫んだ。

「ほう、力か？
我に願えば、そなたの手を汚すことなくこの世を滅ぼせるものを。
そなたは力を望むか？」
それまで感情が表れることがなかった瞳に、興味深そうな光が浮かんだ。

「私を、私を蔑ろになどさせない。
全ての民が、私の前に平伏す力をお与えください！
永遠に、この世界に君臨できる力を、私にお与えくださいっ！」
ニムファの両目から血の涙が滴っている。
怨みを晴らしたい、全てを己がものとしたい、永遠に君臨し、褒め称えられたい。ニムファは満たされなかった想いを吐き出していた。それは、純粋な欲望の塊だった。

「面白い。
これは、面白い。
そなたに力を与えよう。
これからは、我の力を以って、そなたの思い通りにするが良い。
陽の光を恐れる必要もない。
そなたと共に、絶望を喰らい尽くそうぞ」
黒山羊の頭を持つ異形が腕を一振りする。

ニムファを赤い光が包み込み、全身に力が漲っていくのが感じられ、異形の姿が朧になり、ニムファの意識が止みに包まれていく。

――精霊にだけは気を付けろ。我を封じることが能う者は精霊の

み。
闇が意識を包み込む寸前に異形の言葉が脳裏に響き、その直後ニムファの意識は暗転した。

「あ～びっくりしたわ、本当に。
でも、一回くらい死んでみるもんね、あなたが号泣するところなんて、めったに見られるもんじゃないもの」
ラーニャにある仮住居の一室で、他人事のようにティアが言った。
蘇生が成ったからこそ言えることではあるが、それにしても軽い物言いだった。

「ティア、それを言ってくれるな。
一世一代の不覚。
恥だっ！」
床に手を付かんばかりの落ち込みようで、バードンが呻く。

「あのときの、バードンさんの取り乱し様といったら。
もう見てらんなかったよね、ルティ」
ティアの口調につられたように、アービィが応じた。

「狼、言うなぁっ！」
アービィの茶化しにバードンは跳ね起き、怒気を孕んで剣を抜いて突き付ける。
アービィは脱兎の如く切っ先を逃れ、そのままルティの影に隠れた。

「あんまりからかわないの、二人とも。
生き返れたから良いようなものの、あたしが呪文をしくじっていたらと思うと、今でも冷や汗が出ちゃいそうなんだから」

最も精神力をすり減らしたであろうルティが、アービィを小突きながら窘める。

その物言いは随分と軽いものだったが、ルティだけでなく、アービィもティアも、バードンも表情は冴えない。石化し、消滅してしまった少女のことを思うと、心が重くなってしまう。無理矢理明るく振る舞っているようにしか見えなかった。

アービィたちは当初の計画を大きく変更し、ラーニャに留まっていた。

元々、今回は偵察だけに留めるはずだった。だが、ティアを蘇生させたあと、巨狼が押し寄せてきた不死者を殲滅してしまい、結果的にラーニャは陥落してしまった。ウェンディロフとニムファの暴虐に辟易としていた生者たちが、不死者による支配そのものに疑問を抱いてしまったこともあり、不死者によるくびきが外れたことで、ラーニャを守っていた生者が全員投降してきたのだった。

そこで大きな問題が持ち上がった。

投降してきた生者たちは捕虜として扱うしかないのだが、アービィたちだけでは管理しきれない。

最北の民がラーニャ奪回に動いたとき、捕虜たちの動向まで気を配る余裕はないからだ。恭順を誓うと言われても、簡単に信じるわけにもいかなかった。状況を察知したエンドラーズと十人のピラムの民が応援に駆けつけていたが、正式な軍務の訓練や教練を受けていないアービィたちでは、緊急時に捕虜を管理するなど無理な相談だった。たとえ最北の蛮族が襲ってこなくとも、食糧の配給、捕虜たちの健康管理、精神的なケア、慰撫、果ては屋舎の整理整頓までを含めた管理と、やらなければならないことが多すぎる。

結局、投降してきた生者たちは、補給部隊に託してターバへ送り届けるしか方法がないのだ。

幸いなことに、ラーニャに配置された生者たちの冬篭もりのため、備蓄してあった食糧にはかなりの余裕があった。

百人からの備蓄量は、ターバまでの道中、生者と補給部隊の糧秣として運び出しても、アービィたち五人であれば冬の間喰うに困らないほどだった。さらに、食料の生産者がいなくなったとはいえ、畑には収穫を待つ作物も残されている。河川を輸送に使えない現状では大部隊を展開させることは無理であっても、アービィたちがラーニャに留まることは不可能ではない。だが、アービィたちまで撤収してしまっては、今回の戦訓を鑑み、ラーニャが要塞化される危険性があり、そうなっては再度の攻略が困難になる。百名からの生者が、一気に失われたのだ。最北の地に残された生者の人数は多くなく、そう簡単に生者の戦力は再編できない。合成魔獣や不死者だけの襲来であれば、却ってアービィが獣化していれば対処が容易だ。

そのためにも、アービィたちはラーニャに留まる必要があったのだ。

そして、当初の規定から大きく外れ、全体の計画で修正しなければならなくなった点はそれだけではない。

まず、シャーラ以北に進出する予定のなかった補給部隊をラーニャに呼び寄せ、捕虜となった生者たちの後送護衛と糧秣輸送の人手を確保しなければならない。そして、シャーラに残る神官たちとピラムの民も、ラーニャに進出する。片道分の食料だけを、それも自分たちの分だけ持ってくれば良いので、輸送部隊や神官たち、ピラムの民のラーニャ到着は、通常の行軍より早く八日程度と見積もられていた。ラーニャとシャーラ間の連絡は、エンドラーズと神官たちの精霊を介した交感が常時繋がっているため、数秒のラグもなく可能だった。このおかげで輸送部隊の指揮官は、状況の変動に即応することができた。

臨時にラーニャまでの輸送部隊を編成し、残っているピラムの民

を帯同し、その日の内にシャーラを発っていた。

後送輸送部隊が到着するまで、アービィたちと先発していたピラムの民は、捕虜となった生者たちと積極的に情報を得ようと努力していた。

ピラムの民も、今回の任務は一人でも多くの協力者を作り出すことであると理解しているため、過去の経緯に囚われず、虐げられてきた怨みや怒りを抑え、捕虜たちに間に分け入っていくことができたのだった。もちろん、勝者と敗者という立場の違いがピラムの民に優越感を覚えさせ、鷹揚に振る舞うことを可能にさせていた。さらには戦後処理で優位な立場を確保しようという、打算があったことも確かだった。

しかし、たとえ打算があるにせよ、ピラムの民の働きが大きく戦局に寄与することは間違いない。

不死者を殲滅した直後から、ルティは投降してきた生者に、何故ターバにいるはずの少女がラーニャにいて、石と化していたのか聞いて回っていた。

この事情を知りたい。知ってどうなるわけでもないのだが、知らずにはいられなかった。ターバで捕虜となっていた最北の民から六人が選抜され、グレシオフィに付き従う生者の離反工作に派遣されるという噂は、アービィたちも事実確認はしていないが聞き及んでいる。しかし、捕虜たちの指導者を含め、派遣された者たちは全て大人であろうとアービィたちは考えていた。そのような危険な任務に、少女を担ぎ出すことはないと思われたからだった。しかし、現実には少女は砕かれた石となってそこにいた。ピラムの民にとっても、少女たちを襲った悲劇は他人事ではない。下手をすれば明日は我が身だ。

ルティの思惑とは別に、ピラムの民も捕虜たちを襲った悲劇につ

いて、積極的に聞いて回っていた。

少女を含む捕虜たちは、アービィたちがシャーラに結界を敷設する間に追い越し、ラーニャに到達していた。

ラーニャに配置されていた生者たちも、ターバを奪い返されたことは当然承知しており、その際に彼らが殺されていなければ奴隷として使役されているものと認識していた。それがラーニャに独力で辿り着いたのだ。確かに出立時より人数は減っているが、戦闘があったのであれば人員の損耗も不思議ではなかった。しかし、よく見なくとも、誰もが血色も良く、使役されていれば当然肉体に刻み込まれる疲弊など、欠片も感じさせなかった。明らかに、優遇とはいかないまでも、虐待されていたようには見えない。ターバ陥落の際に捕らわれ、捕虜として拘禁されていたとはいえ、北の民の常識では考えられない健康状態だった。

それが脱走し、最北の地へと逃れてきたという。

訝しむ気持ちを抑え、ラーニャに配置されていた生者の責任者は彼らを迎え入れた。

敵の間者と成り果てている危険性は充分に注意し、破壊工作や生者の殺害、不死者の灰化等の敵対行為を防ぐため、行動は制限し常時誰かしらの監視を付けることにしていた。到着時に身体検査をし、護身用の武具以外はもっていないことは確認してあり、その武具も勢力圏内で携帯する必要はないという理由で没収していた。

捕虜たちは特に不満の声を上げることなく、当然の顔をしてその処置に従い、指示された家屋に入り、そこで起居を始めていた。

やがて、ラーニャの責任者は、捕虜たちを呼び出し、敵情に付いての聞き取りを始めた。

しかし、捕虜たちから南北連合の戦略、戦後処理の方針等を聞い

たラーニャの責任者は、考え込んでしまう。話半分、いや、話一割に聞いても、このまま不死者に支配され続けるより、南北連合に身を投じた方が利点は大きいと感じられた。最北の地をして世界の頂点となし、グレシオフィにまつろわぬ民全てを膝下に敷くという戦略は、一見して魅力が大きい。だが、南大陸の支配に最北の民が出て行く必要はなく、現地に不死者を大量生産して恐怖で締め上げれば住むことだ。そのうえ、最北の地から生者が出て行ってしまえば、いつ日中に反抗勢力が討ち入るか判ったものではない。

結局、生者である最北の民が、南大陸に出て行く機会は、永遠にない。

一般的な最北の民にしてみれば、世界の制覇より暖かい土地への移住だ。

南の土地へ移り住めると信じてグレシオフィに従っていたが、戦が始まってみるとどうも風向きがおかしかった。不死者へと転生した指導者は、不死者を優遇し生者が省みられることはなくなった。異を唱える生者や、もともと従うことのなかった生者は、問答無用で不死者に転成させられ、それを拒み通せば喰われていった。恐怖に支配され、南大陸の住人や敵対していた北の民を蹂躙することで憂さを晴らしていたが、一向に南下できる気配はなかった。そこへ持ってきて、ターバを脱してきたという捕虜たちの言葉だ。何より、頑なだった少女が誰よりも熱心に、南北連合との共闘を説いたことが決め手になった。

最北の民に対する離反工作であると責任者は気付いたが、それを承知で離反の決意を固めていた。

それからは、いかにしてラーニャを脱し、南北連合の勢力圏まで逃げるかということが、不死者の目を掠めて討議され始めた。

できることなら保障として捕虜たちに同行して欲しい、というのがラーニャに配置された生者たちの希望だが、捕虜たちにはまだ最

北の地へ赴くという、重要な任務が残っている。いまここでターバへ戻るということはできなかった。

他にも問題がある。如何にして不死者に気取られぬようにラーニャを脱出するか、それが最も危険で大きな問題だった。下手に気取られたならば、その場で皆殺し、不死者の餌になりかねない。夜陰に乗じて脱出するなど、不死者に見つけてくれというようなものだ。綿密な打ち合わせが繰り返され、持ち出すものは最低限の食料に留め、それもすぐに持ち出せるように纏めて置き、早朝不死者が日光を避けて隠れた直後に脱出すると決められた。

いよいよ、明日にラーニャ脱出を控えた夜、破局が訪れた。

元ラシアス王国贈侯爵ウェンディロフが、ニムファと共にラーニャに送り込まれたのは、捕虜たちが到着した翌日のことだった。

幾多の不死者を無策で失い、オセリファに疎まれていたウェンディロフと、南大陸への足掛かりをぶち壊し、まるでそのことの重大性を理解していないばかりか、オセリファに対して異様な反抗心を剥き出しにしたニムファは、グレシオフィによって最前線で南北連合を討ち返すことを命じられた。汚名返上の機会とばかりに意気込むウェンディロフも、かつての同胞を討ち果たすことで恭順を証明することを求められているニムファも、過剰なまでに気負いが勝っている。

深夜到着するなり、僅かに警備を残して就寝していた生者を集め、南大陸への怨みと己が功名心ばかりを叫び、最北の民の生者を人とも思わない演説をした二体の不死者を、生者たちは厄介な者が来たとしか思わなかった。

人心を掴むことは、作戦や任務遂行のうえで最も重要なことだ。

家臣に傅かれることが当たり前だった二人に、それまで縁もゆかりもなく、王族や貴族の権威などが通じない最北の民相手のそれが

最も困難な課題であることは、全く気付くことはなかった。北の民を完全に見下すことでしか己がプライドを満足させられない二人に、北の民を戦友として信頼することなどできるはずもなかった。純粋な力を以って無理矢理彼らを従わせるしか、ラーニャの秩序を維持する方法がなかった。最北の民の反乱を防ぐため、コッカトリスをコントロールするための呼び笛を取り上げた二人は、日中の寝所の近くに常時コッカトリスを待機させ、近寄る者は誰彼構わず石化させるように命じた。

誰も近寄れなくしておいて、ご機嫌伺いのひとつもないと憤り、僅かに侍る知性を有しない不死者に二人とも八つ当たりを繰り返すだけだった。

僅か二日で誰からも省みられることがなくなった二人は、少しでも生者たちを平伏させるためにその力を見せつけることを企んでいた。

最北の生者がいくら死のうと、二人が気に止めることはない。適当な犠牲者を仕立て上げ、それを石化したうえで破壊してみせる。そうすれば圧倒的な力に恐れをなし、残る生者たちは自分たちに平伏すはずと、二人は考えていたのだった。

そして、ラーニャ脱出の最終打ち合わせをしている生者の屋舎に、そのようなことが行われているとは知らずに二人はコッカトリスを連れてやってきた。

「貴様ら、何を話し合っている!?

まさか、脱走か、反乱でも起こそうというわけではないだろうな!」

ウェンディロフの大音声が大気を切り裂いた。

突然の破局に、生者も捕虜も何もすることはできなかった。

不死者の気配を察知することは通常の生者には困難なことであり、二人が乱入するその瞬間まで生者たちはまるで気付いていなかった。打ち合わせに集中し、周囲の警戒を怠ったことも破局を招いた原因になった。

ウェンディロフは当てずっぽうに言っただけだったが、図星を指された格好になった生者たちは、ただその場に固まるだけだった。尊敬の念を欠片も見せない無礼な者たちが集まっていれば、自分たちに対しする悪意のある企みをしているものに違いないと、ウェンディロフは過去の経験から判断していた。南大陸で生者だった頃からそうだったのだ。

あることないこと喚き散らすウェンディロフを、生者も捕虜も呆気に取られ、黙って見ているだけだった。

「まあ、よいではないですか、贈侯爵。
わざわざ集める手間が省けたというものです
それよりも、早く」
ニムファが静かに言った。

「畏まりましてございます、女王様。
魔獣よ、来たれ！」
ニムファに一礼し、ウェンディロフがコッカトリスを呼び出した。
扉をぶち破り、見た者を石に変える能力を持った魔獣が、広間に乱入した。

「誰か、名乗り出よ。
さすれば、残る者どもの命は助けよう！」
コッカトリスを背にニムファが叫んだ。

生者も捕虜も、二人が何を言っているのか理解できなかった。
意味が解らない。あることないこと喚き散らすウェンディロフの

言動からは、生者の脱走を捕虜が扇動したと見抜いたようには見えない。誰かが名乗り出ることと、残りの者の命を助けることの因果関係が、全く見えなかった。
いや、理由などなく何人かを血祭りに上げようということだけは、コッカトリスを呼び寄せたことと、二人の冷酷な薄ら笑いから想像できた。

誰もが言葉を失い、生者の屋舎は水を打ったような静けさに包まれた。
誰も名乗り出る気配がない状況に、ウェンディロフが痺れを切らした。

「お前、始めてみる顔だな？
立て。
ちょうど良い」
ウェンディロフがルティに懐いていた少女を指差した。
少女は無言で立ち上がり、ウェンディロフに脅えたような目を向けている。

「我らはターバを脱してきた者にございます！
漸くここまで逃げ果せて来たというのに、一体どういうことでございましょう！？」
捕虜のリーダー格の男が立ち上がり、ウェンディロフに食って掛かった。

「ターバを落とされ、奪い返すこともなく、よくもおめおめと。
貴様らのような役立たずは、この私が処刑してくれよう。
皆も見ているが良い、役立たずがどのような末路を辿るかということをな！」
ウェンディロフは、格好の獲物を発見したとばかりにコッカトリ

スを嗾けた。

少女を守るように取り囲んだ男たちを嘲笑うかのように、コッカトリスの視線が少女を捕らえ、瞬時に少女を石に変えた。

怒りに我を失った男たちが、素手でコッカトリスとウェンディロフに掴みかかろうとするが、数歩も奔らないうちにコッカトリスの視線が男たちを捉える。ウェンディロフとニムファの嘲笑が響く中、六体の石像が絶望と苦悶の表情で立っている。

生者たちの間で言葉を発する者は、一人もいなかった。

「見よ、我が力をっ！」

呆然と見詰める生者たちを尻目に、ウェンディロフの拳が少女だった石像に繰り出された。

少女たちを襲った悲劇の顛末を聞かされたアービィたちは、ティアが蘇生した喜びや安堵をすっかり消し飛ばされていた。

特にルティの落ち込みようは目も当てられず、その夜は一晩中泣き明かしている。少女を蘇生させようにも、石像が砕かれていた時点でもう無理だった。ルティもティアも、全ての状態異常を回復させることのできる火の白呪文レベル４『全解』を、行使することできるようになっていた。だが、石化を解いた瞬間に首を落とされた状態の生身の身体は、即死する。ティアを生き返らせた『蘇生』を行使しても、身体が打ち砕かれた状態では、『蘇生』が成功した瞬間、再度即死するだけだ。破片を全て拾い集め、一かけらも欠けることなく石膏などで接着した上で『全解』を行使しても、一度破壊された身体が再構成されるわけではなく、引き裂かれた生身に石膏が入り込んだ状態で即死するだけだ。

どう足掻いても、少女たちを生き返らせる術はなかったのだった。

どうすれば償えるか、ターバに残る捕虜たちにどう言えばいいのか、ルティには判らない。

ターバへ送られた生者たちの口から、南大陸の住人が行った非道が伝われば、南北連合が瓦解してしまうかもしれない。だが、いつまでも落ち込んでいられない状況であることも、ルティは理解していた。それ故に努めて明るく振る舞っていたが、何かの折に少女の面影が脳裏に浮かび、その度に打ちひしがれてしまうことを繰り返している。アービィやティア、バードンにしても同じことで、努めて明るく振る舞うように気をつけているが、やはり少女のことを忘れることはできなかった。

一日も早く、少女の仇を討ち、両大陸の諍いを鎮める。ルティは少女に誓っていた。

ラーニャを確保して十日が過ぎた。

配置されていた生者たちは、補給部隊と共にターバへと去っていった。ピラムの民も、全員が最北の地へと旅立っている。秋が深まったラーニャには、アービィ、ルティ、ティア、バードンと、エンドラーズたち神官の十人が残った。アービィたちは交代でラーニャ周辺の哨戒任務に就き、神官たちは畑の手入れや取り残された作物の収穫に勤しんでいる。既にラーニャを囲む結界は、暇を持て余したエンドラーズによって完成していた。平穏な日々が続いていくように思える静かな秋の夕暮れ時が幾度も過ぎていくが、誰も緊張を解くことはない。

最北の蛮族がいつ押し寄せてくるか、これから気の抜けない日々が続くと思われていた。

河川流域の状況は不明だが、一進一退の攻防が続いていると補給部隊の将兵から聞かされていた。

ラーニャが陥落し、最北の地の喉元に剣を突きつけられた状況で、

最北の蛮族がどう動くか予想が難しい。シャーラからラーニャを日干しにするため、河川流域の防衛に力を注ぐか、河川流域から戦力を引き上げ一気にラーニャからシャーラを奪い返しにくるか、どちらの可能性も捨て難いものがあった。大規模な会戦こそ生起しないものの小競り合いは頻発し、当事者たちは血みどろの戦いを繰り広げていた。合成魔獣を先頭に立て、日中に拠点結界を破壊してから、夜間不死者が雪崩れ込む戦法は変わらないが、合成魔獣の戦闘力が強くなっているようで効果的な迎撃が困難になっているらしい。そのため、夜間までに結界の補修が間に合わず、不死者の侵入を許すケースが増え、徐々に被害が蓄積しているようだった。

もちろん、南北連合もやられっ放しではない。

ターバまでの舗装が完成し、南大陸からの戦略物資と人員の補充が容易になっていた。

いかに合成魔獣が強大であろうと、数に頼んで押し潰してしまえばそれまでだ。輸送能力の向上に伴い、春には一個師団を維持するのがやっとだった兵力が、今では四個師団まで膨れ上がっている。将兵の補充だけでなく、多くの人々が北の大地に渡ってきていた。ビジネスチャンスを求めてきた商人や、広大に農地に夢を託した農民、一攫千金を狙う鉱山経営者、それに伴う製造加工業を生業とする職人、そして娼館の経営者といった、雑多な人々が流れ込んできた。当然冒険者ギルドも入り込んできており、正規の軍人以外にも河川流域の戦いに身を投じる冒険者が後を絶たない。

ターバ以南は、空前の活況を呈していた。

ラシアスの政変も、却って良い方に転がっていた。

北の大地を侵略しようとしていたニムファが消えたことで、片棒を担いでいた軍務卿が粛清され、コリンボーサが政務と軍務を掌握した。臣籍降下していた第二王子が王籍復帰し、現時点では摂政としてコリンボーサの補佐を受けながら政治を行っている。本来であ

ればコリンボーサも失脚して然るべきなのだが、そうなると政治全般を見渡す戦略眼を持った者がいなくなってしまう。ベルテロイ駐在武官として経験を積んだ第三王子ヘテランテラならば、あるいはと思わせるものがあるが、彼を連合から引き抜くわけにも行かない状況だ。各国の王族武官で構成されている南大陸連合は正式にルムを北大陸代表として迎え入れ、南北大陸連合と名称を変更し、両大陸を上げてラシアスの安定に奔走している。

ラシアスの立場が弱くなっている今、誰に対しても言うべきことを言えるヘテランテラの存在は連合に欠かせない。

併せて騎士団長ラルンクルスが南北連合軍の総司令官を辞し、ラシアス派遣軍の指揮官へと転属したことにより、ラシアス軍の規律が完全に取り戻されていた。

代わって南北連合軍総司令官に就任したそれまでの次席指揮官は、ラルンクルスの方針を堅持し、過渡期の混乱を最小限に食い止める働きを見せている。河川流域制圧に齟齬を来たした理由もそれであったが、ラルンクルスでさえ厳しかった状況を破綻させずに持ちこたえた手腕は、並々ならぬものがあった。いずれは正式に総司令官を任命する予定でいた南北大陸連合は、次席指揮官をそのまま総指揮官に任命することで話が纏まっている。

これまでバラバラだった南北両大陸の歯車が、しっかりと噛み合い動き出していた。

生者たちを伴い、ラーニャを発った補給部隊が二十日ほどの帰路を踏破し、ターバに近付いたとき、それは起こった。

ターバを囲む結界まであと一日となり、それまで最北の民による襲撃も、合成魔獣との遭遇もなかったことから、部隊全体の警戒心が薄れていたことは否めない。最終の野営時、簡易結界を敷いた中に全員が収まり、緊張を維持できるようにと六交替で兵が歩哨に立

っていた。不死者の襲撃が最も多いと統計が出ている深夜半までの歩哨を増やし、黎明が近付いた時点で最小限の人数まで減らすという、理に適った警備計画であるはずだった。

だが、襲撃は、それまでの常識を覆す方法で行われた。

まだ夜明けにはしばらくあるが、戦闘状態に突入すれば夜明けまでには収束できないだろうという時刻。

一瞬の風切り音が数度響き、篝火の中に血飛沫が舞った。計画通り員数を減らされた歩哨に立っていた兵は、最も緊張感が鈍り眠気を抑え難い時間帯に当ったことに対して悪態をつきながらも、逆に最も敵襲の少ない時間帯に当ったことに感謝してはいた。周囲の異常に気付いた兵は、全員を起こすための呼子に大きく吸い込んだ息を全力で吹き込もうとした瞬間に、意識が暗転した。水溜りに柔らかいものを投げ落すような水音と鈍い音が響いた後、獣特有の唸り声が耳障りな不協和音を奏で、三頭の合成魔獣、キマイラが野営地に突入した。

僅かに態勢を整えることに成功した歩哨の槍がキマイラに突き刺さるが、手負いの魔獣は却って凶暴性を増し、殺戮の嵐が吹き荒れ始めた。

歩哨の数が減った時間帯を狙った奇襲は、成功しようとしていた。だが、通常の軍隊生活では、夜明けと共に行動を開始するため、ほとんどの兵が起床しようとしていた時間帯でもあった。多くの兵が異常に気付き、そのうち何人もの自己犠牲の発露と共にろくに武装を整えないまま、キマイラに突撃した。残った兵は冷静に武装を整え、戦友の犠牲を無駄には終わらせるものかと眦を決し、陣を組んでキマイラに迫っていく。補給部隊といえど戦略物資を狙う敵の襲来があれば、武器を取ってこれを撃退することを任務とする将兵の集団だ。他の戦闘部隊と同様の訓練は積んでいる。初撃こそ奇襲を許したが、急速に戦闘態勢を整え、キマイラを包囲していった。

三つの輪が出来上がり、死傷者を出しつつも輸送部隊はキマイラを包囲していた。

このとき、目の前に脅威に気を奪われ、重大な失態を犯したことに輸送部隊の将兵は気付いていなかった。

いつまで経っても合成魔獣に付き物の生者や不死者が姿を現さないことに不審に思う将兵はいたが、余計なことを考えた瞬間には獅子の首が、山羊の首が、蛇の首が迫り、獅子の腕が薙ぎ払い、山羊の肢の蹴りが飛んでくる。戦局は有利に見えていたが、三つの輪は徐々に結界を構成する線に迫り、無意識のうちにそれを踏み壊していた。

破局が訪れた。

結界の消失を待っていたかのように不死者が雪崩込み、かろうじて膠着状態を保っていた戦況は一気に覆る。

多くの将兵が二度目の奇襲になす術もなく打ち倒され、噛み裂かれ、引き倒されて踏みにじられ、絶命する。捕虜として連れてきたラーニャに配置されていた生者に付き従い、貴重な情報源を守ろうとした小隊の防壁も、あっという間に蹴り破られ、命が藁屑のように散っていく。将兵に混じって吹き飛ばされた捕虜の身体をキマイラが銜え、何度も振りたくるうちに首が、腕が、脚が引きちぎれ、元は人間だったとは思えない肉塊を合成魔獣と不死者が奪い合う。

明らかに救い出しに来たとは思えない振る舞いに、捕虜たちの表情が恐怖と絶望で染め上げられた。

戦況の不利を悟った指揮官だが、まもなく黎明が訪れ、その後には太陽が昇ってくる時間であることは冷静に把握している。

あと僅かな時間を凌げば、不死者たちは撤退していくはずだった。行きがけの駄賃に数人が殺害されることはあるだろうが、それでも部隊と捕虜が消滅することはないと、声を枯らして督戦に勤め、自

らも剣を振るう。しかし、いくら耐えても不死者が撤退する気配は見られなかった。周囲では疲労の色が濃い部下将兵が、次々に打ち倒され、踏み潰されている。

やがて、周囲が明るくなり始め、東の空に待ち望んでいた曙光がさした。

それまで優勢だった不死者の群れが、動きの過程で灰と化す。

不死者に喰われ、転生していた仲間の将兵の死体も、同時に灰となり崩れていった。しかし、キマイラが消滅することはなく、次々に疲弊したし将兵と捕虜を血祭りに上げ、それまで不死者に奪われた獲物を取り戻すかのように荒れ狂う。指揮官顔が絶望の表情に染め上げられ、どれほどの人々が残るか分からないが最後の戦闘行動に移る命令、つまり逃走の命令を下そうとしたとき、とどめとなる一撃が輸送部隊に襲い掛かる。

鬨の声を上げながら、最北の蛮族の生者が突入してきた。

数刻後、破壊された荷車から引き摺りだした食料を貪った生者たちは、周囲に打ち倒されている将兵や捕虜を一人ずつ覗き込み、丁寧にとどめを刺していく。

やがて、野営地だった場所に動くものは、最北の蛮族の生者のみとなり、空間を埋め尽くしていた呻き声も完全に途切れた。破壊を免れた荷車に、喰い尽くせなかった食料と、原形を留めている死体を積み込むと、何処へと姿をくらました。

河川流域での戦法が、これと同じに変化するのは、翌日からのことだった。

最北の地、グレシオフィの館の地下牢に、二つの影が繋がれている。

片方は、腰まで伸ばした北の民に共通する金髪を一つに纏めた女

性で、これも北の民には共通の碧眼に憂いを湛えていた。年の頃は２０代半ばだろうか、艶やかな表情は男たちを振り向かせるには充分な魅力に溢れ、少々吊り気味の瞳と適度な高度を持つ鼻梁、控えめな口元はそれぞれが整ったバランスを保っていた。しかし、その表情には疲れが見え、傍らに繋がれるもう一つの影に労わるような視線を向けている。

最北の地に多くの信徒を持つ神に仕える巫女の服装を纏った女性から、労わりの視線を向けられたもう一つの影は、こちらも神官の服を纏っていた。紫を基調とした配色は他の巫女や神官に同じ配色の者はいないことから、最高位の神官であることを伺わせていた。しかし、二人がまとう衣服は薄汚れ、所々に明らかに打撃による破れ目があった。

「猊下、我らの身体は、あとどれくらい現世に留まることが可能でしょうか。

神のお力が消え失せて、もうかなりの時が経ちます。

神のお力なくては、不死の身体も腐敗するのみ。

一体何が起きたというのでしょうか」

両腕を壁から伸びる鎖に捕らわれたオセリファが、同様の姿勢で鎖に繋がれているグレシオフィに言う。

「オセリファよ、おそらくは、あの、女王。

我らよりもどす黒い、あの女王。

我らは、神ではなく、悪魔に魂を、売り、渡していた。

悪魔にとって、我らより、彼の女王のほうが、利用しやすいのであろう」

柔和という言葉を受肉化させたらこうなると思われる、穏やかな表情でグレシオフィは答えた。

既に悟り切った、いや諦め切った表情にも、オセリファには見える。僅かに残っていた北の民の象徴である金髪は、白いものに全て置き換わり、切れ長の眼窩に納められた碧眼からはかつての意志に溢れた力強さは窺えない。弛みが増え、深い皺を刻んだ頬に支えられた高い鼻と、自嘲を湛えた小振りな口元は、これが最北の蛮族を率いた男かと思わせるほどの零落振りだ。

「それは、一体、どういうことでございましょう？
神ではない？
悪魔？
魂を売り渡す？」
オセリファは、混乱の極にあった。

グレシオフィが世界に対して戦乱を引き起こしたのは、民の怨みを晴らすためだった。
だが、数に劣り、体力的にも劣る最北の民が、世界を相手に戦うにはなにかしらの超常的な力を必要としていた。グレシオフィがその力を手に入れるため、どの部族の省みることのなかった神を神話の中から見つけ出し、それに帰依したおかげで不死の身体を手に入れたと誰もが認識していた。
しかし、今、彼の口から、衝撃の事実がオセリファに伝えられていた。

「おそらく、悪魔は我らでは満足できないのであろう。
彼の女王は、怨みだけで動いておるのではない。
欲だ。
世界を手中に収めんとする、欲だ。
全てを己が意のままに動かしたいという、欲だ。
悪魔にとって、これほど魅力的な者は、いない。
我らは捨てられた。

世界を『治めよう』とした、我らは捨てられたのだ」
グレシオフィは、残り少ない力を振り絞り、オセリファに説いた。
オセリファは、己の価値観が崩れて行くことを感じつつ、グレシオフィの言葉に耳を傾け続けていた。

「この世に神など、おらぬ。
全ては、人間が作り出した、幻影。
歴史を紐解いてみよ、オセリファ。
未だかつて、人間に力を貸した神がいただろうか。
おらぬ。
そのような者は、おらぬ。
神などという者は、人間が、倫理を踏み外さぬように作り出した、制御装置に過ぎぬ。
悪魔を神と崇め、不死者などという倫理を踏み外した我らには、もとより未来などあろうはずもなかったのだ。
だが、このままでは、女王と悪魔は互いを利用し合い、この世は闇に包まれよう。
せめてもの罪滅ぼしだ。
行け、オセリファ」
そう言うと、グレシオフィは目を閉じた。

オセリファは、グレシオフィの身体から急速に熱が退き始め、その熱が自らの身体に移行する感覚に包まれた。
主が、その命を、現世に身体を繋ぎ止めるエネルギーを、オセリファに注ぎ込んでいる。それを止めるためオセリファは叫ぼうとしたが、声が発せられる寸前に、オセリファの意識は暗転し、その身体は地下牢から消滅した。

第９６話

ニムファは、得意の絶頂にあった。

不死の身体ばかりでなく、神の力をも手に入れていた。自分を無能呼ばわりした年寄りと、生意気な女は地下牢に封じ込めてある。周りを固めているのは、神の力という強制力を以って従わせている吸血不死者と、意志など持たない低位の不死者ばかりだ。あとは死の恐怖で生者を従わせ、まつろわぬ民は根絶やしにしてしまえばよい。全てが自分を崇め、眼前に平伏す光景を、ニムファは思い描いている。最北の地の南に立ち塞がる者どもなど、神の力を以ってすれば何ほどのものでもない。

ニムファは、民衆の熱狂的な歓迎の中、ラシアスに凱旋することを夢見ている。

石以て自らを追い出した、ラシアスの閣僚は許さない。

まずは、国内の粛清からだと、ニムファは考えている。既にラーニャ以南に展開する南北連合の軍など、全て撃破しているつもりになっていた。数日前からニムファの策で実施した河川流域の奪回作戦は、多くの不死者を失っていたが、その分新たな死体の入手に成功しているため、最北の兵力は減少することなく推移していた。連合軍将兵の死体で再生可能なものは全て、魔法陣によって不死者へと転生させていた。

不死の軍団を以って北の大地を征服し、ラシアスを再び我が物にすることは、ニムファの中では規定路線だった。

コリンボーサを始めとする役立たずは、生まれてきたことを後悔するほどの責め苦で苛んでくれよう。

決して殺さず、這い蹲って許しを請うまで、マ教の説く地獄など子供の遊び場と思えるような責め苦に遭わせてやる。然る後、恭順

を誓ったところで、無慈悲なまでに消滅させてやる。近衛師団を不死者に転生させ、自分を蔑ろにした他の三国に目に物見せてくれる。何も知らぬ民衆は、逆らわぬ限り生かしておいてやろう。おとなしく、エサとなっている限りは。

神の像が、微笑んだ。気がした。

「由々しき事態であります。

このままでは、ターバの結界を破られるのも、時間の問題であります。

何故なら、敵は兵力の損失をおそれず、日の出すらものともせず、攻撃を続行しております。

敵の生者を相当数倒しております故、現在敵の攻勢は停滞しておりますが、兵力が回復してしまえば現在以上の攻勢が予想されます」

ターバの司令部で作戦参謀から報告が読み上げられ、状況の説明が終わった。

「小官と致しましては、河川流域の制圧は急がず、兵力を温存しつつ均衡状態を生じせしめ、ターバ防衛に全戦力を投入し、冬の到来を待つべきと考えるものであります」

ラルンクルスの跡を継いだ総司令官が、一言ずつ確認するように私見を述べる。

冬までに河川流域全体を制圧し、春からの攻勢に備える計画は頓挫したと見て良い。

まさか不死者が灰になることを厭わず攻撃を続けるとは、想定の範囲外だった。そのうえ、打ち倒した敵兵を回収し、それを不死者として甦らせて戦線に投入するという外道の戦法を取ってくるなど、これも誰一人として想像の埒外だった。明日は戦友を灰にしなけれ

ばならないか、戦友の手に掛かることは覚悟できても、戦友を手に掛ける嫌悪感は想像を絶するものがある。
たとえ、それが意志を持たない戦友の抜け殻だとしてもだ。

「河川流域の確保に、拘る必要はない」
それまで瞑目して司令部からの報告を聞くだけだったプラボックが、目を見開いて力強く言った。

「それは、どういうことでありますか？」
プラボックが何を言い出したのか理解できないという表情で、戦務参謀が問い返す。

「それではここまで投じた戦費が、すべて無駄になってしまいます。それに、明日の勝利を信じて死んでいった将兵に、心ならずも不死者に転生させられた将兵に、申し訳が立ちません！」
血涙滴らんとばかりに、戦務参謀はまくし立てた。

「戦務参謀の気持ちは、よく解る。
私も、同じ思いだ。
だが、倒れた将兵に申し訳ないからといって、さらに多くの将兵を死地に追いやるわけにはいかん。
死んでいった将兵が、それを望むと思うかね？
河川流域の制圧作戦は、中止する。
冬が来る前に、展開している兵力を安全な地帯まで下がらせてくれ。
撤退の方法の選定と実施については、司令部に一任する。
私が全責任を負うので、司令部の皆さんにおかれては安心して、撤退作戦の実施に当たっていただきたい」
プラボックの言葉が、会議の終了の合図になり、参謀たちは己が職責を果たすために席を立った。

「総司令官、此度の戦は最北の蛮族が積もりに積もった怨みを晴らさんがため、周到な準備の下、始まった。
いや、一方的な侵略になりかけていたものを、皆さんのお力で戦といえるまで持ち込むことができた。
これまでは部族、集落ごとの小競り合いしか経験してこなかった我々が、蹂躙されるままにならずに住んだのは、あなた方のおかげだ。
しかし……」
一人司令部要員の中で残った総司令官に、プラボックは頭を下げた。

「それは過分に過ぎるというものであります、プラボック様。
戦は、始めることも難しいが、終わらせることは、もっと難しいものであります。
プラボック様、戦乱の後、どのような世の中をお作りになられるお積もりですか？
戦乱の後の世を描く能力は、我々軍人にはありません。
人々が笑い、安らかに暮らすため、我々は存在しています。
人殺しを生業とする者が、人々の平穏のために存在するなど、なんという皮肉でありましょう。
ですが、皆が平穏を望んでいようと、一方的に破られることは多々あります。
力なき正義など、弱者の泣き言に過ぎませぬ。
攻め込んでくる敵が悪とは、決して申せませんが、自らの正義を全うできる力は必要です。
どうか、我々が無聊を囲うような世の中を」
そう言って、総司令官はプラボックの目を見つめた。

「私は、万民の誰もが満足できる世の中が、作り出せると思うほど

自惚れてはいない。
だが、万民すべての幸せを、望むことはできる。
誰もが自由に、行き来できる世界。
誰もが素性を、偽らずに暮らせる世界。
誰もが毎日の食べ物に、飽きたと言える世界。
誰もが王の悪口を、気兼ねなく言える世界。
そんな世界を、私は望む」
プラボックは力強く視線を返し、総司令官に答えた。

「ならば、我らはその礎となりましょう。
この度の撤退作戦、見事成功させてご覧に入れます」
プラボックの視線に負けない力強さを言葉に込め、総司令官は返答し、部屋を出ていった。

「アービィ、どうしたの？」
ラーニャ周辺を哨戒中のルティと獣化したアービィが、異様な気配に気付いたのは夕暮れが迫る時刻だった。

――あれ。ちょっと下がって。あの魔法陣と同じ波動が感じられるんだ。
鼻面で先を示した巨狼が、ルティに注意を促す。
ビースマックで喰らった魔法陣からの一撃は、これまでで唯一アービィに大ダメージを与えたものだった。

「うん、でも、危ないと思ったら、逃げるんだよ」
ルティは素直に木の陰へと身を潜めた。
どうがんばっても人間の力でどうこうできそうな代物ではない。
実体があるというのであればともかく、エネルギーの塊でしかない状態では、遠巻きに見ているしかない。

森林地帯の空白にあるちょっとした広場のような空間に、邪悪としか言いようのない波動が球体を成している。
地上１ｍ程に浮遊する球体は全くの透明ではあったが、重力レンズのように向こう側の景色が歪んで見えていた。全方向に波動を放ちつつ浮遊していた波動は、アービィたちの気配に気付くと急速に近寄ってくる。球体は上下に細長く伸び始め、やがて人の形を作り始めた。景色の歪みが人型を浮き上がらせた後、徐々にその人型は実体化し始めている。
北の民特有の金髪に、同じく北の民の証である碧眼を備えた、二十代半ばと見られる女性が、実体化すると同時に地に倒れ込んだ。

――ルティは出てきちゃダメ。
念話でルティを制止し、巨狼が倒れた女性に近付いていく。
完全に実体化した時点で邪悪な波動は鳴りを潜めているが、気配は濃密だった。警戒し過ぎてし過ぎということはない。

――邪悪な気配はしないから、多分大丈夫だけど。
倒れた女性は、全く動く気配がない。
不死者特有の気配こそ微かに感じられるものの、誘い込んで不意打ちを食わせようという気配は全くない。

――大丈夫？
念話で呼び掛けつつ、巨狼が前肢を倒れた女性の肩に置く。

まるで反応がない女性の頬を、巨狼がひと舐めした瞬間。
巨狼の目から、火が出るかのような衝撃が脳天を貫いた。
邪悪ではないが、生きとし生ける者全ての心胆を、寒からしめるような怒りを含んだ気配を感じた巨狼が恐る恐る振り向くと、まさに怒髪天を衝くといった表情のルティが剣を逆手に持ち替えつつ立

っていた。

「アービィ、なにしてるの？」

地鳴りのような低い問いがルティの口から漏れる。

――いや、あの、その、これなら気付くかなぁ……って、そのまま振り下ろしちゃだめぇっ！

そのまま巨狼は降参のポーズを取るが、顔のすぐ横、目の前の地面にルティの剣が突き刺さった。

「莫迦な真似はこれくらいにして。

その人、不死者よね？

まだ陽があるのに灰にならないなんて」

ルティは呼吸を整えつつ、アービィに問いかける。

――うん。息もしてないし、心臓の鼓動も感じられない。でも気配はあるんだ。

神妙な顔でお座りしている巨狼が答えた。

たとえ不死者であっても、女性の胸に耳を付けようものなら脳天を剣で抉られかねない。もちろん、ルティがそんなことをするとは思わないが、どんなお仕置きが待っているか判ったものではなかった。

ややあって、倒れこんでいた女性が身を起こし、巨狼とルティに向き直る。

生きた人間のような暖かみはないが、敵意は全く感じられない。

今しも戦闘が始まると身構えていたルティが全身の力を抜き、口元からは大きな溜息が漏れた。

「そなたが、猊下が狼に封じたる異世界よりの人か？」
何の脈絡もなく、身を起こした女性が巨狼に問う。
全て分かっているというように、何の躊躇いもなく、誰何するでもなく、女性は問うた。

――そうだよ。猊下っていうのが誰かは知らないけど。僕は異世界から呼ばれた。いや、異世界に呼ばれた、かな。あなたは？　最北の民だよね？
目の前の女性やルティから見れば、アービィが日本人として生きていた世界は異世界だ。しかし、日本人からしてみれば、この世界こそ紛れもなく異世界だった。

巨狼の問い掛けに、女性は静かに頷いた。
艶やかな表情は男たちを振り向かせるには充分な魅力に溢れ、少々吊り気味の瞳と適度な高度を持つ鼻梁、控えめな口元はそれぞれが整ったバランスを保っているが、今にも泣き出しそうな表情だ。

「私は、最北の民を率いるグレシオフィ様に仕えし、オセリファ。
異世界の人に問う。
そなたは、何故、我らと戦う？」
オセリファの表情には、気が付いて以来焦りの色が浮かんでいた。

――何故って？　明確な答えじゃないし、矛盾するけど、これ以上戦乱を広げないため、かな。
巨狼はオセリファに戦意や敵意を感じなかった。そのため巨狼も闘気を発散させることなく、オセリファに対峙している。

「ならば問う、異世界の人よ。

そなたにとって、この戦いは何を以て終結する？
我らか、そなた等の滅亡か？」
焦りの色に、疲労、苦痛といった色がないまぜになった表情を歪め、オセリファはさらに聞いた。

――僕は、いや南北連合の意志は、あなたたちの滅亡でも、僕たちの滅亡でもないよ。対等の立場で和平。それができたときが、この戦いの終結だよ。
一切の逡巡もなく、巨狼は言い切った。

「ならば、その後の世界は？　どのような未来図を、そなたは描く、異世界の人よ」
興味深そうに、オセリファが問う。

――誰もが、生まれた所や姿形で差別されない世界。行きたい所にいつでも行ける世界。生まれ故郷に誇りを持てる世界。僕にできることはそんなにないけど、そうなって欲しいと思ってる。
これも一切の逡巡なく、巨狼は言い切る。
髪や目の色で差別される北の民と、姿形で差別されるアービィやティアといった魔獣たちは、形は違うが同じような立場だった。

「ならば、我らの怨み、如何にして晴らせばよい、異世界の人よ。
そなたら南大陸の住人や我ら以外の北の民を、永遠に我らの膝下に組み敷かねば、千年を超える怨みを晴らすなど、できるものではない」
鬼の形相に悲しさを浮かべ、オセリファが吐き捨てる。

――永遠なんて、どの世にもないよ。僕のいた世界にも、この世界にも。そうやって僕たちを、南大陸やあなたたち以外の北の大地を征服したとしても、今度はあなたたちが怨まれるだけ。武力にし

ろ何にしろ、征服するとか怨みを晴らすなんて、繰り返しになるだけ。そんな悲しい循環は、作っちゃいけない。

巨狼が静かに反論した。

「そなたは、迫害された過去を、差別された過去を、簡単に水に流して終わりにできると？

人狼が、悪鬼が、悪魔の化身が、人と並び立てる世の中が来ると、信じているのか？

我ら最北の民が、蛮族と蔑まれる我らが、我ら以外の北の民と、南大陸の住人と、対等に交わる日が来ると、本気で信じているというのか？」

話にもならないといった口調で、オセリファが言い返す。

「あたしは、信じてる。

アービィは、狼の素性を隠すことなく、人間社会で生きていけるようになったの。

小さなことから、少しずつ信用を積み重ねてね。

だから、あなたたちにそれができないとは思わない。

南北連合は、あなたたちの席を用意しているのよ」

ルティが横から割り込んだ。

石に変えられ、砕け散った少女を思うと、これ以上戦いを続けたくなかった。

父を母を返せと叫んで灰と化した少年の、悲痛をこれ以上生産したくない。ルティは、そのことをオセリファに熱く語った。それは、最北の民とかそれ以外の人々といった区別などない、誰においても起きてはいけないことだと、ルティはオセリファに向かって言った。

怨みを、怒りを、悲しみを作り続け、抑圧を、支配を、暴虐を続けるなら、人間そのものが滅びてしまうと、ルティは説き続けていた。

「あなたたちの言いたいことは、よく解ったわ。
これなら私は、私たちは、安心して、滅びていける。
私がここへ来たのは……」
突然口調を変えたオセリファの表情から厳しさが消えたが、言葉の途中で苦痛に歪み始めた。

「どうしたの!?
何が――」
「南大陸の女王が、私たちの神を奪った。
猊下は、最後に残った魔力で、私をここに送り込んだの。
あなたがいることを信じて、ね。
でも、もう時間がないみたい。
女王が私の居場所に気付いて、引き戻そうとしている。
私たち以上の力を神から与えられた女王なら、私を引き戻すくらい容易なこと」
オセリファの姿が、明滅するように消えていく。

「あなたが言うように、怨みを晴らしたところで、その繰り返しになるだけ。
神を奪われて、その力であなたたちに復讐しようとしている女王を見ていたら、そのことに気付いたの。
お願い、最北の地へ来て。
女王を止めて――」
オセリファの姿が薄くなり、口は動いているが声が聞こえなくなる。

「大丈夫!?
必ず、行く。
また、そこで会えれば――」

「そのときには、私は私でなくなっている。
引き戻されたら、女王の下僕に作り変えられる。
だから、今……私を……殺して……」
姿を薄れさせながら、オセリファが懇願した。

「何で！？
それって！？」
躊躇うルティと巨狼の前からオセリファの姿は消滅し、同時に周囲に充満していた邪悪な波動の気配も急速に失せていく。

――あなたたちとは、敵として会いたくなかった……
オセリファの残留思念がそれだけを伝え、邪悪な波動の気配は完全に消失した。

――行こう、最北の地へ。僕が決着を付けなきゃいけないんだね。
呼び、呼ばれた同士が。
決然とした表情で、巨狼が北の空を見つめた。

「さようでございますか。
なれば、一刻も早く最北の地を衝かねばなりませんな」
エンドラーズが深刻そうなそぶりで言うが、誰もその通りには受け取らない。

「なんか、まるっきり深刻そうには見えませんね、エンドラーズ様」
眉間に皺を寄せてティアが言う。

「そのようなことを仰いますな。
これでも由々しき事態と、認識はしておりますぞ」
やはり、どう見ても浮かれたように風の最高神祇官は言った。

「絶対、浮かれてます、エンドラーズ様は」
決めつけるようにルティが言う。

「それは否定致しません。
公式に、最北の地へ足を踏み入れた南大陸の住人は、未だかつておりませんからな。
あとで歯噛みして悔しがる顔を思い浮かべると、これはもう……」
堪えきれずにエンドラーズは笑い出した。

最北の地に、南大陸の住人が足を踏み入れた記録は、公式には残っていない。
ルムたちが住む平野部ですら、南大陸から見れば未開の土地だったのだ。余程の物好きでも、山岳地帯を抜けることはなかった。行く用事がないこともさることながら、間違っても好意的ではない人々の中に飛び込んで、生きて帰ってくるはずもなかった。
ましてや、最北の地に興味を示す者など、精霊神官以外には皆無と言って良かったのだった。

それが今、目の前にある。
精霊神官の目には、未知の世界がどれほど魅力的か、少年のように瞳を輝かせるエンドラーズを見れば良く解る。世界の存亡が懸かっていることは理解していても、知的好奇心を抑えることなど死と同義の神官には、やはり心が浮き立ってしまうのだった。

「ですが、エンドラーズ様。
我々の使命は、ラーニャの確保にございます。
古来、独断専行は軍の崩壊を招くものとして、厳に戒められておりますが」
バードンとしては、最北の地を衝くことに異存はないが、司令部

との連携は無視するものではないとの思いがある。
ティアが暴走したと見られたくないという考えがあることを、否定する気もない。

「私が、悪いっ！」
エンドラーズの言葉に、全員が間髪を入れず頷く。

「皆様、そこは否定するのが予定調和ではございませんか」
少しだけしょんぼりとした口調でエンドラーズが異議を唱えるが、誰も取り合わなかった。

「まあ、そこは置いておきましょう。
私が、皆様を最北の地へと誘った。
ただただ、私の我が儘。
これでいかがでございましょう」
これならどなたも罪に問われることはございません、とエンドラーズは付け加えた。

「それは名案ですね」
「誰も不思議に思わないもんね」
「あたしたちは被害者って、みんな同情してくれるんじゃない？」
「では、周囲に気取られる前に出立いたしますか」
四人は一斉に賛意を示す。
風の最高神祇官は、これまで誰にも見せたことのない、寂しそうな表情を無意識に作っていた。

「アービィ、なんか不思議な感じだね。
あんたがフォーミットに、あたしの家に来て以来、あたしは普通

の人が経験できないような人生を送ってる。
これからも、ずっとそうなんだろうけどね」
巨狼の毛皮に埋もれながら、ルティが話しかけた。

――そうだね。僕もそう思う。この世界に来てから、ずっとそう思ってる。
ジェットコースターのような人生だと、アービィは思っている。

少々一般的ではない職業に就いていたとはいえ、波瀾万丈とは縁遠い人生を送るはずだった。
明日も今日の繰り返しに、少しだけ違う色が着くだけの毎日のはずだった。いつかは結婚して、子を育て、送り出し、老いて平凡に死んでいく。新聞にお悔やみ記事など乗ることなどあり得ない、埋没した人生を送っていくはずだった。
それが、異世界に召喚され、人狼に転生させられ、ルティと出会って旅をしている。

「あの、オセリファさんだっけ？
殺し合わなきゃいけないのかなぁ。
ニムファ様とも。
殺し合いが決着なんて、嫌だよ」
ルティが泣きそうな顔で呟いた。

――嫌だよね。でも、戦乱は止めなきゃ、もっと膨大な、数え切れない死が生まれちゃう。話し合いで済むなら、それに越したことはないけどさ。
巨狼が溜息とともに答えた。

「あんたの力は、それを止めるためのもの？
あんたが召喚された意義って、それ？」

ルティが巨狼を見上げるように言った。

――そうかもしれないね。殺し合いのためじゃなく、戦乱を止めるための、ね。

北を見つめながら、巨狼が答える。

そこには部屋の壁があるだけだが、巨狼には明確な光景が見えていた。

まだ見ぬ最北の地を、巨狼は思い浮かべている。

「もし、もしも、よ。

あんたが十二年前に、人狼に封じられずにニムファ様の前に、日本人のまま召喚されていたらどうなってたんだろうね」

歴史に『もし』や『たら』、『れば』は禁物だが、ルティは何となく聞いてみた。

――多分、言葉が通じない時点で、何にもできなかっただろうね。思い出してみて分かったけど、日本語とこっちの言葉ってまるで違う言語体系だから、日本人のままじゃ適応できなかったと思うよ。食べ物もね、やっぱり微妙に違ったし。役立たずのまま殺されたか、どっかの塔とか地下に幽閉されて発狂したかだね。

巨狼は考えていた答えを出した。

ニムファによる召喚が、グレシオフィの妨害を受けずに成功していたなら、おそらく日本人としてのアービィの運命はそうなっていたに違いない。

そして、ニムファの望みを叶えられる、新たな勇者を召喚し続けることになっていただろう。それが何人の犠牲者を生むことになるか予想が付かないが、アービィが行方不明になったことでそれは防がれていた。

グレシオフィによる横槍は、期せずしてアービィと多くの人々の

命を救っていたのだった。

その横槍の結果、日本人としてのアービィは人狼に封じ込められ、この世界で最強と言っても過言ではない力を予期せず与えられた。

そのまま人狼として成長し、人間を喰らうことを覚えていたら、今頃はバードンの手で狩られていたかも知れない。それがほんのちょっとした偶然でルティに出会い、人として育ったことでその運命も避けられている。そのおかげで人狼が人狼のまま他を慈しむことを覚え、力の制御を覚えることができた。人狼の力を、他の役に立てることができるようになり、勇者と呼ばれてもおかしくない存在に成長している。

魔王と化したニムファを滅するため、ニムファ自ら召喚した勇者が立ちはだかる。

必然だったのか、偶然なのか、アービィにはいくら考えても答えは出せなかった。

「アービィ、アービィってばっ！」

取り留めのない思考の海に沈んだアービィの意識を、ルティの呼び掛けが現実に引き戻した。

――あ、うん、ごめん、なんか考えが纏まらなくなっちゃった。

心配そうに見上げるルティの頬を巨狼が一舐めし、身体全体でルティを包み込む。

「あたしこそ。

なんか変なこと聞いちゃったね。

あんたがこうしてここにいるのは、偶然でもなんでもなく、必然よね。

そうすると、ニムファ様ってあたしの恩人？」

災厄を撒き散らす魔王と化したニムファを、恩人と呼ぶには抵抗

がある。だが、ルティにしてみれば、アービィと引き合わせる原因を作った張本人だ。

――そうなんだよね、なんか複雑な気分だけど。だから、僕が決着をつけなきゃいけない。そう思うんだ。

巨狼が答え獣化を解いたとき、家の扉を叩く音が聞こえた。

「なんかさぁ、アービィがずいぶんと悩んでるみたいだったしぃ」

半分できあがったティアが言った。

「もう酔っぱらっているのに、狼が悩んでいるから、励ましに行くと言って聞かなかったものですから。

ルティ殿たちのお邪魔をする気はございませんでしたが、申し訳ございません」

野暮な真似をすることになってしまったバードンが、ルティに頭を下げた。

「大丈夫ですよ、バードンさん。

ここ久しくみんなで呑むこともなかったし、あたしたちは歓迎ですから。

それにしても、ティア、何で判ったの？」

グラスを並べながらルティが答えた。

いい雰囲気ではあったが、それを邪魔されたという意識はない。

ましてやアービィを心配してきてくれたというなら、尚更だ。

「だってえ、念話が駄々漏れでねぇ。

聞く気はなかったけど、聞こえちゃったんだもん」

魔獣同士ならではの理由だった。

――えっ？　漏れてたの？　恥ずかしいなぁ、もう。
あまりにも急なタイミングだったため、服を着るより獣化した方が早かった巨狼が答えた。

「いや、俺には何のことか判らなかったんだが、急に貴様のところへ行くと言いだしてな。
そういうことか。
便利なんだか不便なんだか、判らん能力だな」
呆れ顔で酔っぱらったティアを見つつ、バードンがアービィに向かって言った。

――普段は必要な相手を指定できるんですけどね。余程思考に集中してたみたいで。お騒がせしちゃって、ごめんなさい。
巨狼の申し訳なさそうな念話がバードンに届く。

「ま、その様子なら心配するほどのことでもなさそうだな、狼。
しかし、この後、貴様はどうするつもりだ？」
肩から力が抜けたバードンが、ティアからグラスを取り上げ、それを一気に干してから聞いた。

――そうですね、フォーミットに帰って、人狼の子供を集めた施設を作ります。手に職を付けさせて、人間と暮らす術を教えて、僕みたいな人狼を増やしていかないと。
魔王を倒し世界を救うという勇者として召喚された意義より、アービィはそちらを優先して考えている。

「もう、先のことを考えていたのか。
俺は、どうやって最北の地を衝くか、そればかりを考えていた。
もちろん、その先のことも漠然とは考えているがな。
しかし、俺より貴様の方が、未来を見ているんだな」

溜息混じりにバードンが言った。

人狼狩りとしての仕事は、放棄したわけではなかった。

それ以上の脅威を討ち鎮めることを、今は優先しているだけだ。

だが、いつか、人に仇成す人狼を狩り尽くした後、どう生きていくかまでは考えていなかった。

ティアと二人、どこかの教会でひっそりと神父の仕事をしながら、生きていくのだろうと漠然と考えていただけだった。

――僕を、ルティとティア以外で、初めて認めてくれた人に言われたんです。『この世に生を受けたもの全てが、それぞれに成すべきことがあるはずだ。』って。ルティと二人で平穏に生きていける場所を探すために、僕たちは旅を始めました。その途中でそう言われてから、僕はずっと考えていたんです。ルティと二人で、そうやって生きていくって。この世界に召喚された意義は、それなんだって。

巨狼の念話を、誰もが無言で聞いていた。

ルティの頬には涙が流れている。

二人で生きていくことには、変わりはない。ルティは、極論すればアービィさえいてくれたら、それで充分だった。自らの存在意義など、考えたこともなかった。ティアが考えていた人狼の保護施設を手伝いながら、アービィのそばで笑っていられたら、それ以上の幸せはないと思っていた。

だが、この人狼は、ルティに生きる意義も与えていたのだった。

「じゃあ、あたしもフォーミットに行くわぁ。

別々にやるなんてぇ、効率悪いしぃ。

そのうちぃ、増やしていかなきゃぁ、いけないけどねぇ」

ティアは、己の存在意義をそれに見出している。

アービィとルティがいたおかげで、男の精を喰らい尽くす一生に決別できた。
そのうえ、生きる意義、存在意義にまで気付かせてもらっていた。二人と別れて生活するなど、ティアの選択肢にはない。

「ティア、ありがとう。
あなたたち二人の生き方を、あたしはどうこう言えないと思ってた。
だから、以前言ったことは、忘れてくれて構わないと思ってるの。あたしたちのことも、子孫も、遠くから見守ってくれたら、それでよかったの。
でも、ティアがそう言ってくれるのは、とっても嬉しいよ。
バードンさん、ありがとう」
ルティは、ともすれば涙で声が途切れそうになるのを、必死に堪えながら言葉を繋いだ。

だが、バードンは、ルティの言葉に困惑したような表情で、曖昧に頷くだけだった。
もちろんバードンは、ティアと別れて暮らす気など、欠片も持ち合わせていなかった。
しかし、それはそれ。仕事は仕事だ。人に仇成す人狼がいるならば、地の果てまでも行かなければならない。それがバードンの人生であり、存在意義でもあった。曲がりなりにも人として道を外すことなく育ててくれた、マ教への恩返しや忠義でもある。
もちろんマ教も、人狼狩りや悪魔狩りを、バードン一人に押し付けているわけではない。だが、バードンほどの力を持った悪魔狩りはいないことも、また事実だった。当然、後継者の育成は続けてはいるが、返り討ちにあう者も皆無ではなく、バードンの変わりとな

る人物は今のところまだいない。愛に殉じると言えば聞こえは良いが、使命を放棄することは、バードンの矜持が許さなかった。
それ故、バードンは、この争乱の後はしばらく旅に出ると、ティアと話し合っているところでもあったのだった。

「どうしたんですか？
なんか、気に障るようなこと、いいました？」
言い難そうにしているバードンに、ルティが訪ねる。

「そうじゃないのよぉ。
バードンは暫く旅に出るって。
人狼狩りの仕事は、放棄できないもんねぇ。
さっきも、その話してたのぉ」
あっさりとティアが言った。

「ちょっと、どういうことよ、ティア。
あんたは寂しくないの？
やっと二人で暮らせるって人と、巡り会えたんじゃないの？」
ティアの軽い回答に、ルティが血相を変えた。

「そりゃぁ、寂しいわよぉ。
でもねぇ、代わりがいない仕事なんだしぃ。
それに、それで別れるって訳じゃないしぃ。
心は繋がってるからねぇ
あたしのぉ、寿命からすればぁ、五年や十年なんてぇ、一瞬よぉ、一瞬」
平然と答えてはいるが、ティアは涙ぐんでいるようにも見えた。

「そういうことでございます、ルティ殿。
お近くで力になる前に、片づけなければならない仕事がございま

して。
親兄弟の仇も、まだにございますれば。
それにティアを巻き込むわけには参りません。
ティアと二人生きていくために、一人でやり遂げたいのでございます。
マ教も後継者を育てております故、仇討ちさえ首尾良く終われば、悪魔狩りを引退できましょう」
バードンが宥めるようにルティに言った。

「バードンさんもっ！
ティアと離れ離れになっちゃうなんて、それでいいんですか！？
あたしたちのことなら気にせず、ティアのことを第一に考えてあげてください。
あたしたちがティアを縛り付けたいわけ、ないじゃないですか」
ルティは涙ぐみながら、バードンに抗議した。

「ルティ殿、お気持ちはありがたいのですが。
私は、必ず帰って参りますし、行きっぱなしにする気もございません。
私は、ティアと二人生きていくため、為すべきことを為すだけでございます。
先程、狼が申したように、この世に生を受けたもの全てが、それぞれに成すべきことがあるはずでございます。
先程も申しましたように、後継者が育てば引退もできましょう。
そう長く、家を空けることも、ございますまい」
バードンは決然と言った。

涙ながらに頷くティアを見て、ルティは何も言い返すことはできなくなっていた。
それでも救いを求めるように、巨狼に視線を投げる。だが、巨狼

は寂しそうな目をしつつも、首を横に振った。

「解りました。
解りましたよ、バードンさん。
でも、ティアを悲しませるようなことになったら、あたしが許さない。
もし、死んだりなんかしたら、『蘇生』で生き返して、そのまま地獄に放り込んでやるんだからっ！
アービィ、お酒っ！」

精一杯の強がりを見せ、涙を誤魔化しつつルティが怒鳴り、巨狼に向かってグラスを突き出した。

――どうやって注げ、と……

困り切った巨狼の念話と、救いを求める視線に笑いが弾けた。

「バードン、ルティはやるって言ったらやるわよぉ。
死ぬときはぁ、こっそり死になさいよねぇ」

ティアは、ルティの様子に安心したのか、それとも内心は納得できていないのか、怪しくなった呂律でバードンに憎まれ口をきいた。

「それだけはご勘弁ください、ルティ殿。
死ぬときは、必ずおまえの横だ、ティア」

これ以上はないバードンの惚気に、大喜びするティアの横で、ルティと巨狼は思い切り鼻白んだ。

ついこの前までの二人が惚気まくっていたことなど、このときばかりはきれいさっぱりと棚上げされていた。

――来客だよ、ルティ。

「ごめんくださいっ！」

巨狼の念話と、大声が同時に響く。

「お歴々、おそろいでございますな。
先にこちらをお訪ねして正解でございました。
さて、南大陸に残りし地水火の最高神祇官より、精霊を介した交感で報せが届いてございます。
本日、正午に、全精霊神殿は、正式に、アービィ殿とティア殿を祝福したと発表してございます。
そして、驚くなかれっ！」
そこまで言って、エンドラーズは悪巧みを隠し切れずに笑みを漏らす少年の顔になった。

「マ教が正式発表で、お二人を害獣ではないと宣言いたしましたっ！
もう、これで何も恐れることはございません。
おめでとうございます、皆様」
空間を、静寂が支配した。

巨狼とルティが見つめ合い、ティアとバードンが見つめ合う。
四人の視線がそれぞれに向けられ、最後に全員の視線がエンドラーズに集まった。
してやったりという、満面の笑顔でエンドラーズが頷いた瞬間。

歓喜が爆発した。

ルティもティアも、しゃくり上げて声にならない。
巨狼の瞳にも光るものが溢れていた。シャーラに滞在していた際に、エンドラーズからいずれ発表があるとは言われていた。それが現実のものとなったのだった。

歓喜の中でバードンは、嬉しさが爆発はしているが、マ教が魔獣の存在を認めるなど信じられないという顔だ。

「エンドラーズ様、私にはまだ信じられません。あの、頑迷なマ教が、いえ、タンゼンデ教皇猊下や全ての民の融和を掲げるカーナミン卿であれば、とは思いますが、全ての民の教化を第一とお考えのデナリー卿や、私の上司でもある原理主義者、スキルウェテリー卿が納得されたとは、まだ信じられません」

軽く頭を振りながらバードンは呻くように言った。

タンゼンテ教皇の意向は誰も無視はできないが、それでも面と向かって反対意見を述べることは許されているし、枢機卿の意見が割れた場合は決が流れることも少なくない。

当然、激しい駆け引きがあっただろうし、南大陸に帰還後のバードンに対する風当たりが強くなることも予想された。もちろん、そんなことを恐れるバードンではないが、大恩あるスキルウェテリー卿を裏切ってしまったのではないかとの思いが、心のどこかで燻っていた。

涙を流し、抱き合って喜びを爆発させている三人に水を差す気などないが、バードンは不安も感じていた。

「中立というか、枢機卿の意見調整を己が本分とお考えになっていらっしゃる、ルビン卿のご活躍ももちろんでございます。ですが、この話はスキルウェテリー卿が、ご提案なさったと私は聞き及んでおりますぞ、バードン殿」

悪戯っぽく笑ったエンドラーズからの返答は、この世が終わってもあり得ないと思っていたものだった。

精霊神殿はアービィとルティの祝福に関して、マ教との水面下での折衝を続けていた。

神が作り賜た人間に対する悪魔からの挑戦と位置づけられていた魔獣の存在を、公式に認めるなどマ教としては許せるはずもなかった。下手に精霊神殿が突っ走れば、大陸を一気に戦乱の渦に巻き込む可能性もあったのだ。教都ベルテロイに地水火の最高神祇官が集まり、タンゼンデ教皇と直談判が行われる前に、各枢機卿に対する働きかけが当然あった。

その中で真っ先に賛意を示したのが、誰も予想もしなかったスキルウェテリー卿だった。

バードンにとっては父のようなこの人物は、原理主義者として名を馳せているが、決して頑迷な人物ではなかった。

マ教の教えこそ、全ての民を救う唯一の教えと信じるが故、他の益体もない宗教を排斥する姿勢を見せているが、民を迫害するという考えは持っていない。マ教の説く、博愛、自己犠牲の精神を、誰よりも体現しているといっても過言ではない人物でもある。それが悪魔狩りや人狼狩りを担当する部署を、一手に所轄するという現状に表れていた。

最も危険度の高い仕事を、誰よりも率先して行う。

誰よりも他者の幸せを望む、彼の行動原理だった。

そんな彼にとって、バードンの行動は頭痛の種でもある。

魔獣と愛を誓った人狼狩りなど、前代未聞の不祥事といっても良い。だが、スキルウェテリーにとって、バードンは我が子同然だった。我が子の不幸を望む親などいないように、スキルウェテリーもバードンの幸せを望んでいる。人に対して心を開くことがなかったバードンに、人並みの愛を教えたラミアに対する感謝の気持ちがあったことも確かだったろう。

だが、このままではティアやアービィを狩ろうとする悪魔狩りや人狼狩りと、バードンが剣を交わすことになりかねない。バードンに匹敵する戦闘力を有する悪魔狩りや人狼狩りなど、世界中どこを

捜してもいはしない。そのうえ、ラミアと人狼が戦いの矢面に立ったとなれば、誰一人として還る者はいないだろう。バードンを教敵にするわけにはいかないという親心が、そして組織の保全が、スキルウェテリーに決断させた。

帰ってきたら説教責めだと、吐き捨てるように言ったスキルウェテリーは嬉しそうな顔だったと、折衝に当った神官から最高神祇官に伝えられていた。

スキルウェテリーから提出された、アービィとティアの存在を認めるという動議は、神官たちの水面下での工作もあり、特に反対意見が出されることもなく枢機卿会議を通過した。

不死者を作り、民に戦いを仕掛けるような邪教は排撃すべしという、ルビン卿の意見が背中を押したことも大きい。その不死者たちに第一線で戦いを挑んでいる人狼とラミアが、人間の敵であろうはずがない。全会一致の上奏を受けたタンゼンデ教皇は、最高神祇官たちとの会談を経て正式にアービィとティアの存在を認めたのだった。

エンドラーズの話に呆気に取られた顔になっていたバードンの頬に、熱い涙が流れていた。

まさか、スキルウェテリー卿がそこまで自分を思っていてくれているとは、バードンの想像の埒外だった。優秀な人狼狩りを手に入れるため、行き場のない自分を拾って育てただけと考えていた部分があった。人の心の温かさを、バードンはティアと愛を交わして以来感じるようになっていた。自身の感情が豊かになっていることを、バードンは自覚している。

すべて、ティアのおかげだった。

「さあ、皆様。

マ教の方々に、公式宣言が間違いではなかったと、証明しようではありませんかっ！
行きますぞ、最北の地へっ！」
エンドラーズが話を締めくくる。

――行こう。
「行きましょう！」
「最北の地へ」
「最北の地へ！」
二頭と二人の言葉が、重なる。

この年初めての冠雪が、遥か北の山々に静かに降りた夜だった。

第97話

「アービィ、あたし気になってることがあるの」
最北の地を目指す一行は、ラーニャを発った後野営を繰り返し、最北の民の勢力圏を突っ切っていた。
十度目の野営時、ティアが改まった雰囲気でアービィに話しかけた。
――どうしたの？　急に、改まって。
巨狼が首を傾げた。
「なんていうか、あたしたちって、北の民を利用してるような気がしちゃって」
ティアは、北の民を討ち果たすことと引き替えに存在を認められるということは、北の民を踏み台にするような気がしてしまっていた。
不死者と化した人々全てが、最北の民の繁栄を願って太陽に背を向けたわけではない。
グレシオフィに従わなかっただけで、意志すら持たない不死者に強制的に転生させられた者も多かった。既に人間としては死んでいるが、またそれを灰にすることはどう見ても殺人と変わらない。もし生きているときに話し合う機会を得られたなら、もしかしたら肩を並べることが可能だったかも知れない人々だ。
その人々の二度目の死が、自身の存在を認めさせることの代償にすることに、ティアは嫌悪感に似た思いを抱いていた。
――そうなんだよね。最北の民を、利用していることは、確かだ

よ。

アービィは、それを否定する気はない。　自分の存在を許容させるために、他者を踏み台にしているという後ろめたさは、常につきまとっている。

しかし、とアービィは思う。破壊衝動しか残っていない不死者は、殲滅するしかない。

だが、知性を有する高位の不死者であれば、自分がそうであるように共存の可能性は残っている。

ニムファが怨念を以て不死者たちの頂点に君臨したのであれば、このままでは全ての民が虐げられることは想像に難くない。既に付き従う生者も不死者も、ひとしなみに特攻に投入しているようでは、最北の民が真っ先に滅びてしまうことは火を見るより明らかだ。その後は征服した民を不死者に変え、順次南下していくのだろう。勝者のいない戦を、これ以上続けさせるわけにはいかない。

ニムファを排除し、最北の民と講和しなければ、両大陸は不死者しか残らなくなってしまう。

アービィは、そうしたことを話した。

「そうだよね。
あたしたちは最北の民を滅ぼそうなんて、そんな戦いをしてるんじゃないもんね」

それでもティアの表情が晴れることはない。
自身でも分かっているのだが、誰かに肯定して欲しい。それが、ティアの偽らざる気持ちだった。

――そうだよ。相手を負かすためじゃない。民を征服するためでも、滅ぼすためでもないんだよ。

涼やかな目の巨狼が言った。
ふと見ると、かつての凶相は影を潜め、禍々しさがなくなったよ

うに、ティアには感じられた。

もちろん、不死者になることで最北の民の繁栄を夢見た者も多いことは、考えるまでもなく分かっている

アービィはそのことも否定する気は、さらさらない。己が属する民の繁栄を願わぬ者など、いるはずもない。ただ、やり方を間違えただけだと、アービィは考えていた。最北の民が繁栄を望むことは、何人たりとも阻むことは許されない。しかし、その繁栄が他者を虐げるというのであれば、話は別だ。積年の怨みを晴らすことが先に立ち、己が立場に他者を貶めるのであれば、それは負のスパイラルでしかない。

新たな怨みを生み出し、さらなる死を生み出すだけだ。

アービィは十日ほど前に出会ったオセリファなる女性に、もう一度会いたいと思っている。

もし、彼女と話し合いが可能であれば、和平交渉ができるかもしれないと考えていた。しかし、消える寸前にオセリファが残した『そのときには、私は私でなくなっている。引き戻されたら、女王の下僕に作り変えられる。だから、今……私を……殺して……』という言葉が意味することも、アービィは理解している。

次に会うときは、命の遣り取りしかできないということを。

「何の話かと思えば、難しい話をしてたんだな。

気にかける必要はない。

結果的に、最北の民を利用する形にはなったとしてもだ。

お前たちのやってきたことが、認められただけのことだ。

ルティ殿も含め、ティアも狼も、ビースマックやストラーでは既に英雄だ。

インダミトにおける評価も、ランケオラータ様救出の英雄であり、

北の民と南大陸の住人の橋渡しの役を果たしたと言っても良い」
突然バードンが話に割り込んできた。

ティアがアービィと話し合っている最中、ルティもバードンと似たようなことを話し込んでいた。
バードンにしてみれば、父と慕うスキルウェテリーの心根は、ただ素直に嬉しく思っている。だが、それを嬉しく思う反面、南大陸の混乱を収めるための道具として、マ教はアービィとティアを利用しようとしているのではないかという疑問もあった。バードンの言うように、アービィたちは一定の地位にいる者たちには、既に英雄として認識されている。
ラシアスに端を発した混乱はまだ収まりきってはおらず、そこから民の目を逸らすにはうってつけの存在と見られたのかもしれなかった。

「それに、もう、そんなことを言ってる場合じゃないと思うの。
最北の民が、事実上ニムファ様に乗っ取られた今はね。
今までの最北の民のやり方だったら、戦乱の後どっちが勝ったにせよ全ての人々が滅びるってことはないわ。
抑圧や、暴虐、経済的であっても支配があるとしてもね。
でも、ニムファ様は違う。
なんていうか、全部が自分の思い通りにならないとすまないって方よ、あの女王様は。
もし、あの方が世界に君臨するようなことがあったら、気に入らないってだけで人を殺して、不死者しか残らない世界になっちゃう。
それどころか、思い通りにならないとなったら、世界を道連れに滅びようとするかもしれない。
もう、南大陸の住人も、北の民も、最北の民も関係ないの。
人間が生き残るかどうかの戦いよ」

続いてルティが話に入り込んだ。

それにも増して気になることが、バードンにはあった。

以前にもアービィが言っていたことではあるが、二頭の存在を公式に害獣ではないと認めることは、さまざまな混乱を招き入れる原因にもなる。これを期に、人間との共存を望む魔獣が多数出るであろうことは、既に予想されていた。人間に姿を変えられる者や、元の身体が人間と大差ない者、大きさも人間と同程度、または家畜や犬猫といった馴染みのある者であれば、たいした問題ではない。

だが、人間に姿を変えられず、巨大な魔獣であったりすれば、人間社会に溶け込むことは難しい。そもそも集落内に入ることすらできないだろう。

しかし、真に問題となるのは、遙かに厄介なことだった。

アービィが最も気にしていることだが、口先だけ人間との共存を謳い、人を喰らい害を成すために人間社会に入り込んでくる魔獣がいないとも限らない。エンドラーズが以前言ったように、水の最高神祇官の持つ読心術によってそれを確かめたにしても、以後そのことをどうやって証明していくかが問題だ。許可証や刺青などは、どうにでも偽造できる。魔獣による被害が増えれば、アービィとティアに対する風当たりが強くなることは、考えるまでもないことだ。エスカレートしていけば、魔獣による人間に対する侵略の尖兵だとして、討つべしとの論調が巻き起こらないとも限らない。

バードンは、それが心配の種だとルティに打ち明けていた。

ルティは、それに対して以前から答えを用意していた。

メディから聞いたとのある、北の民に伝わる呪法を応用できないかということだ。もともと征服した民の服従を絶対にするための呪法で、あまりに非人道的であることから使用が躊躇われ、いつのま

にか失われていった呪法だが、知識としてであれば古老が知っているかもしれないとのことだった。

征服した民全てにその呪法を施し、万が一、一人でも叛意を持つものがいれば、呪法を施された者全てが一本の巨木に纏め上げられ変化させられ、数千年という永遠にも等しい時間をただ立ち尽くすだけという、外道の呪法だ。さらに、巨木の一部として纏め上げられた一人一人の意識だけははっきりと残され、風のそよぎにも痛みを感じるようになっている。外部に意思を伝える方法はなく、北の大地にその呪法を解く呪文は存在していなかった。

それを応用すれば良いと、ルティは考えていた。

もちろん、その呪法をそのまま使うのでは外道の誹りを免れない。だが、精霊の加護の元、火の白呪文『全解』で解呪できる程度の効力に抑制し、魔獣そのものに呪法を施すのではなく、身分証明書となるものに呪法を施す。第三者から証明書を奪った者や、偽造した者に対して呪法が発動するようにすれば、悪意を持つ者だけが立ち木に変化するだけで済む。身分証明書を持たない魔獣は、共存の意思を持たぬ者として、これまでどおり討伐の対象として扱えばよい。もちろん、水の精霊神殿が街中にある以上、審査に訪れる魔獣は証明書を持たないので、厳重な警備を施すか、審査の場は町の外にするべきだろう。

人間であれば治安維持の兵による取り締まりも可能だが、人外の力を持つ魔獣に対してはその程度の罰則があってもよい。どんな残虐な刑が存在しようと、それを適応されるような罪を犯さなければ済むだけのことだった。

それほどまでに、魔獣は人に対する脅威と認識されている。

そこまでルティはバードンに言って、でも魔獣に殺された人より、人間に殺された人の方が何億倍も多いんですけどね、と寂しそうに付け加えた。

「奇麗事だけじゃ生きていけないよって、自分に言い聞かせようとしていたんだけど。
どうにもしっくりしなかったの。
でも、無理矢理考えて、何かをこじつけたり、言い訳を考える必要はないのかなぁ？」
ティアがバードンに向き直る。

「そうだ。
利用することは悪いことではない。
陥れるのでなければな。
何よりも、今我々が戦う相手は、最北の民を率いてはいるが、ニムファ様だ。
これは、最北の民を解放するための戦いでもある」
バードンが応じた。
どことなく苦々しげな表情になっているのは、母国の王族を打ち倒すべき相手としなければならなくなった現状を憂いているからなのかもしれない。

「こうして見ると、ニムファ様が魔王を倒すために勇者を召喚したのは、間違いじゃなかったのね」
溜息と共に、ルティが呟いた。

「そうです。
私は、マ教の神父として、マ神の意志が働いたと考えます。
もちろん、この世界には数多の神が居りますれば、何れかの神か、全ての神の意思か。
もしかしたら、神とは唯一の存在で、数多の姿をお持ちなだけかも知れませんが。

いえ、もしかしたら、神とは我々人間が考え出した倫理の抑制機関であり、神などこの世に存在しないのかもしれません。
世界の意思と言い直すべきでしょうか」
バードンの言葉は、神父としてあるまじき発言だった。

だが、魔獣の存在を作ったのは誰か。
世界を神が作り、人間を神が作り出したのであれば、楽園だけが存在したはずだ。悪魔や悪霊、魔獣などといった、人に仇成す存在が、生まれ出るはずがなかった。共食いなど当たり前の獣という存在から、知恵を使い、道具を使い、共食いとは決別し、同じ種を交尾の相手以外も慈しむようになり、人は人間になった。その過程で倫理という概念が発生し、それを守るために神という抑制機関を作り出してきたのではないかと、バードンは考えるようになっていた。
法を作り、維持するのが国家の役割であるならば、宗教は倫理の番人であるべきだ。

「そうよね、あたしの感情なんて後でどうとでもすれば良い、か。
ここまで見てきた最北の地の惨状からすると、ね」
ティアは記憶を呼び起こし、首を振りつつ言った。

最北の地へ侵入して以来、多くの集落を過ぎてきた。
偶然なのだろうが、アービィたちが通り過ぎてきた集落は、すべて魔法陣に囲まれていた。とりもなおさず、そこに住む民全てが不死者へと転生していた、ということだった。だが、ティアの表情からは、忌まわしいものを見てきたという感情が読み取れる。
それは、幾つかの集落を通過した際に見た、まるで日常がそこで食いちぎられたかのような光景だった。

畑には農具が散乱し、家の中には食事の支度が放置され、貴重な食料が腐敗臭を放っていた。

魔法陣で囲われたほとんどの集落では、すべてのものが片付けられ、家々の窓は遮光され、そこに住む民の覚悟の形跡が欠片も見られなかった。だが、幾つかの集落では、その覚悟の形跡が欠片も見られなかった。

つまり、望まない転生だ。

食事の支度途中の食料が腐敗臭を放っているということは、転生邪法が発動してからそれほどの時間は経過していない。一度の食事に使われる食料など、十日もあれば跡形もなくなってしまうはずだ。山野を彷徨う野獣や虫の類が、彼らを追い払う人の気配の消えた集落の食料をいつまでも放っておくとは思えない。

この集落の民が強制的に転生させられたのはつい最近、アービィたちがラーニャを落として以来のことだと判断できた。

既に『最北の蛮族』に、不死者の原材料となる生者のストックはないのかもしれない。

となれば、彼等に反抗する不死者への転生を拒んできた民を、強制的に不死者に転生させるしか、『最北の蛮族』に戦力を維持する方法はないはずだ。河川流域制圧戦の最前線で、南北連合の戦死者の死体から不死者を生産し、かつての同僚同士を戦わせるという非道を行っていることからも、それは推測されている。もっとも、南北連合の継戦意志を挫こうという策略であることも、解り切ったことではあったが。

ここまで来てしまっては、ニムファを討つ以外に戦乱を終結させる方法はない。

だが、ニムファという共通の敵ができたことで、最北の民の生者たちと南北連合が共同歩調を取ることができるかもしれなかった。

グレシオフィが『最北の蛮族』を率いていたときは、互いに反目し合っていたとはいえ、同じ最北の民同士だった。敵の敵は味方という理論と感情が複雑に絡み合い、南北連合を救世主と見る民もあれば、自らの敵を勝手に討ち減らしてくれる道具と見て、消極的な

協力体制にある民もあった。だが、グレシオフィを廃し、新たに舞い降りた魔王であるニムファは、もともと南大陸の住人であり、最北の民を繁栄させようなどという意志は欠片もない。
ただ、自らの欲望を満たすための道具としてしか、見ていない。

「皆様、お客様のお越しでございますぞっ！」
それまで、周囲の探索に出かけ、夜になっても戻らなかったエンドラーズが、嬉々とした表情で結界に舞い戻ってきた。

同時に、魔獣としての本能がアービィとティアに、研ぎ澄まされた感覚がルティとバードンに敵の到来を告げている。
結界の中で、敵がどう出てくるかを窺っていたが、周囲に濃密な殺気を感じるだけで一向に襲ってくる気配がない。アービィの鼻は、合成魔獣特有の焦げたような臭いも感知していなかった。どうやら、敵勢力の中に合成魔獣は、含まれていないと判断してよさそうだった。

「汝らに問う！
汝ら、我ら最北の民を滅ぼすために、この地に来たか！？」
闇の中から、大音声が響いた。

「答えろ、南大陸の住人！
我は、不死者となり、最北の民を守らんとする者！
汝らが、最北の民を討ち滅ぼすというのであれば、我を倒さねば先には進めぬぞ！
尋常に勝負されたい！」
声の主が姿を現す。

焚き火の光に照らされたその姿は、間違いなく北の民の象徴である金髪と碧眼を備えた偉丈夫だ。
そして、その背後には、同様に金色の長髪と碧眼を持つ少女が、華奢な身体を偉丈夫に寄り添わせている。
しかし、透き通るような白い肌を持ち、僅かに頬を紅潮させ、生者であることを無言のうちに語る少女に対し、偉丈夫の白というより蒼いその肌は、不死者であることを雄弁に物語っている。生前の姿を残している堀の深い面持ちは低位の不死者ではなく、かなり上位の、それも吸血不死者であることを覗わせていた。
獣化を解いたときのービィより一回り大きな巨躯は、重厚な筋肉を搭載し、首は頭と同じ太さを有している。腕はルティのウエストほどもあろうという太さを持ち、その胸板は鍛えこんだバードンすら子供同然に見せるほどだった。

「臆したか、南大陸の住人よ。　我と勝負しようという勇気の持ち主は居らんのか？
この従者や不死者どもに、勝負に手出しはさせぬ。
壁となるためだけに連れて来たものだ。
汝らが我に勝てばここを通るが良い。
我が灰と化せば、周囲の不死者も灰と化す。
見事我を打ち負かし、ここを通って見せよっ！」
吸血不死者は、そう言って結界に隣接して、不死者に直径約６ｍの円陣を組ませた。

――じゃあ、僕が。同じ条件でやりましょう。少し時間をください。
巨狼がバッグを咥えて繁みに消える。
ややあって、獣化を解いたアービィが姿を現し、吸血不死者と対峙した。

「僕たちは、あなたたち最北の民を滅ぼそうなんて考えていません。でも、言葉で分かっていただけるとも思わない。ならば、あなたを殴りつけ、完膚なきまでに叩きのめして、分かってもらいます。
さあ、いつでも」
アービィが一歩前に踏み出し、ゆっくりと拳を吸血不死者に向けて突き出した。
かつて、イーバで再会したバードンと殴りあったとき以外、固めることのなかった拳だ。

「我らの悲願、汝らが百万の言葉を弄しようと諦めるなどあり得ぬ。汝ら南大陸の住人を、すべて我らの前に這い蹲らせるが我らが悲願。
汝を叩きのめし、喰らい尽くし、思い知らせてくれようぞ」
吸血不死者が呼応するように一歩前に踏み出し、アービィの拳に自らの拳を合わせた。

両者の拳が触れ、離された瞬間が戦闘開始の合図となった。
吸血不死者が、常人では考えられない速度で拳を繰り出す。不死者の動きは遅いという常識を、覆す動きだ。
アービィは、それを避けることなく、正面から頬に受け止めた。脳をシェイクするような感覚が襲い来るが、アービィは崩れ落ちることなく拳を打ち返す。
おそらく常人がそれを受ければ、首から上が吹っ飛びそうな打撃が、吸血不死者の眉間に食い込んだ。
吸血不死者は僅かに一歩後退するが、倒れることなく第二撃をアービィの顎に打ち返す。

脳震盪を誘う打撃が二度繰り返されたが、アービィが倒れる気配

はなく、打撃のダメージを感じさせることなく第二撃を吸血不死者に叩き込んだ。
的確に吸血不死者の頬を捉えた拳が振り抜かれるが、吸血不死者も倒れる気配は見せなかった。

「何故、汝は剣を使わぬ？
祝福法儀式済みの剣であれば、我を滅することなど雑作もないはず。
何故、拳で挑む！？」
そう言いつつ、自らも殺傷力のある武器を使わず、打撃による攻撃を繰り返す吸血不死者が問う。

「言ったはずだ。
僕たちは、あなたたちを滅ぼすために戦うんじゃなって」
同様に殴り返しながら、アービィが答えた。

吸血不死者の動きが唐突に変わり、打撃ではなく突進したままアービィに組み付いた。
一呼吸の動作でアービィを抱え、そのまま後ろに投げつける。投げられたアービィが立ち上がると、そこへ走り込んだ吸血不死者の膝が飛んできた。顔面にまともに膝を受けたアービィが、鼻から血を吹きながら地面を転がる。その勢いで周り囲む不死者の列に飛び込んだ。
不死者からの攻撃を予想し、加勢に飛び込もうとしたルティをエンドラーズが、ティアをバードンが引き止めた。

「何故です！？」
「なんで！？」
ルティとティアの叫びが同時に響くが、エンドラーズもバードンもそれには答えず、黙ってアービィを指さした。

不死者の列に突っ込んだアービィは、不死者から攻撃などないと信じ切った表情で立ち上がっている。
不死者たちも、アービィが突っ込んだ衝撃に耐え切れず列を乱していたが、列を正そうとはするもののアービィに攻撃を加える気配はなかった。
アービィは、背後を不死者に向けたまま、黙って吸血不死者と対峙しなおした。

吸血不死者が次の攻撃のため突っ込んでくる。
アービィは、吸血不死者の突進を受け止める直前、ルティに向かって微笑んだ。そして、態勢を低くして突っ込んできた吸血不死者の顎に、下から膝を突き上げて棒立ちにさせると、そのまま背後に回って羽交い絞めにし、一気に後ろに投げる。アービィの身体は、吸血不死者を羽交い絞めにしたまま見事な弧を描き、その巨躯を後頭部から大地に突き刺した。
大地に激突した衝撃が吸血不死者の身体を貫き、さらに反作用で弾むはずの身体はアービィに押えられているため、そのエネルギーもすべて身体を貫いていく。

羽交い絞めを外したアービィは立ち上がり、吸血不死者が立ち上がってくるのを待つ。
のろのろとした動作で立ち上がる吸血不死者の腹に、アービィの拳が吸い込まれた。
両者の動きが止まり、時だけが流れていった。

「見事だ、南大陸の住人よ。
いや、人狼。
汝に戦いを挑むなど、如何な吸血不死者とて無謀の誹りは免れぬ。

だが、汝は人狼の力を解放することなく、我と戦った。
我を滅する剣を使うことなく、我と戦った。
汝の言うことは、間違いではないのかも知れぬ」
やがて、吸血不死者がアービィから離れて言う。

アービィは、全身から力を抜き、リラックスした姿勢になっている。
殺気は影を潜め、『試合』のあとの満足感すら漂わせていた。

「我は、汝らの大陸から来た女王に操られるならば、我が身を灰と化す道を選ぶ。
彼の女王は、魔宮と化した我らが主の館にいる。
人狼よ、汝の力があれば、我は案ずることもない。
我らを呪縛から解き放たれよ。
ここに集う不死者は、我が眷属。
我が滅すれば、同時に灰と化す。
心残りは、この者の幸せを見届けられぬこと。
魔宮までは、この者が案内しよう。
さらばだ人狼。
さらばだ、南大陸の人々よ」
吸血不死者は、その言葉が終わると同時に結界に踏み込んだ。

咄嗟に引き止めようとしたアービィの腕は宙を掴み、内側から突き飛ばそうとしたバードンの踏み込みは間に合わず、吸血不死者は結界の上を通った部分から灰と化す。
突然の事に動くことさえできなかったルティと、灰と化す寸前の吸血不死者と目が合った。それは、ルティには微笑んでいるよう見えた。　同時に、周囲を取り囲む不死者が、一斉に灰となり崩れ去る。
まるで再生を拒む彼らの祈りが風の精霊に通じたかのように、一

陣の風が彼らの灰を吹き散らしいった。

「僕の攻撃は、あの人に全然効いてない。
不死者に痛みはないから、殴りつけても無駄なことは判ってたんだ。
破壊するしか、祝福法儀式済みの武器がなければ、破壊するしか不死者は倒す術はないんだ。
僕が剣を持たなかったから。
あの人の攻撃は、本気じゃなかった。
僕に当る寸前で、力を抜いてた」
アービィは、惜別の情を言葉に込めた。

「もう、ね、泣かないよ、あたしは。
行こう、魔宮へ」
ルティは、涙を堪えている。
独り、取り残された少女が、歯を食いしばって無表情を装っていた。

白昼堂々、ターバの結界を越える武装集団があった。
だが、その武装集団は、ターバの衛星集落の前で自ら武装解除した。そして、その衛星集落の防備に当たる部隊の指揮官を呼ぶ大音声が響いた。その声には、どこか切羽詰った焦りのようなものが感じられる。やがて、完全武装の小隊が衛星集落の囲いを越え、彼らの前に姿を現した。両者の間に会話が発生し、一個分隊が慌てて集落に戻る。残る二個分隊が彼らを囲うようにして、集落へと移動し始めたとき、彼方から鬨の声が上がった。
やがて、集落から飛び出してきた一個中隊と、彼方から押し寄せた三十人程度の集団との間に戦闘か発生し、程なく終結した。

ターバの司令部に、南北連合に出向したルムを除く首脳陣が集結している。

プラボックとランケオラータ、リンドリク元ビースマック公爵、元ラシアス財務卿が文官代表として出席している。南北連合総司令官と参謀本部、ラルンクルスを始めとした各国の指揮官の他、師団長と大隊長レベルの各級指揮官、それぞれの参謀部が、軍を代表して出席していた。

ランケオラータが開始を宣し、統合幕僚会議が始まった。

「各位におかれましては、困難な河川流域からの撤退戦を無事完遂され、誠にお疲れのことと存じます。

本来であれば、しばらくは戦力の整理などに時間を費やし、休息を取るべきときではありますが、緊急かつ重大な案件の発生つき、皆様方にご参集いただくことになりました」

連合軍総司令官が挨拶に立った。

「では、司令部から状況の説明をいたします。

まずは、皆様方にはご存じのこともございましょうが、全体の認識を共通のものにするべく、現在の状況を説明いたします」

総司令官に促された戦務参謀が、部屋の中央に設えられた兵棋板の横に進み出る。

プラボックたちが作り上げた地図を基に、輸送部隊が任務に際し行った測量を反映させて改良したものだ。

正確な測量などまだ発達していないこの時代、精密さには難があるが、北の大地の全貌を朧気ながらも描き出していた。

戦務参謀は手際よく敵味方の兵力配置を、赤と青に塗り分けられ

た駒で兵棋板上に再現する。
　連合軍の兵力配置を表す青い駒は凸型に作られ、その大きさから兵力規模が一目で読みとることができるようになっている。対して最北の蛮族の兵力配置を表す駒は、諜報活動や捕虜の供述から判明したものは凸型で大きさから兵力規模が読みとれるが、ほとんどは兵力規模不明を表す円形の駒が置かれていた。

「これが現在の状況であります」
　戦務参謀に並んだ作戦参謀が、指示棒で兵棋を指しながら説明を始めた。
　ターバにもっとも大きな青い駒が置かれ、シャーラには一まわり小さな駒が配置される。衛星集落及び結界基準点にそれぞれ二まわり、三まわりと小さな駒が置かれている。さらに、二つの集落を結ぶ街道上には結界基準点と同じ駒がいくつも置かれている。
　そしてシャーラ以北には、青いピンが何本も刺されていた。

　対して赤い駒は、最北の蛮族が本来維持していた勢力圏の中に、大きな円形の駒が配置されている。
　そしてターバ北東側の結界に近い位置に一まわり小さな丸い駒が十と凸型の駒が四つ置かれ、北西側の山岳地帯から少し離れた位置に円形の駒が二つ配置されていた。制圧に失敗した河川流域には、青だけでなく赤の駒も配置されていない。
　赤い駒の配置は、敵兵力がターバに集中されていることを表していた。

「捕虜の供述から、未だ兵力規模が詳細不明としてある敵の配置も、せいぜい我々の基準で言うところの小隊規模と推測されます。
　ですが、過小評価は禁物であります故、敢えて大隊規模を想定しているものであります」
　作戦参謀は、結界基準点に置かれた兵棋を指した後、シャーラに

置かれた兵棋を指した。

「神官殿からのご報告から、ラーニャは確保できたものと判断して良いと思われます。
現状では、エンドラーズ様がアービィ様たちを引きずって最北の地へ突出されております故、ラーニャには五人の神官殿のみであります」
ラーニャと北の地に突き立てられた青いピンの一本を、交互に指しながら言った作戦参謀の言葉に、周囲から苦笑いが漏れた。

「もちろん、五人の神官殿に不測の事態か起こらぬとも限りません故、ラーニャにはシャーラより一個中隊を分離して配備いたします」
作戦参謀の言葉に従い、戦務参謀はシャーラから大隊を意味する兵棋を取り去り、ターバの衛星集落に置かれたものと同じ中隊を意味する兵棋を、シャーラに三個、ラーニャに一個置く。

「ラーニャへの補給は、どうするのかね？」
ランケオラータが、作戦参謀に尋ねる。

「もともとラーニャには、百人以上が冬篭もりするための糧秣が備蓄されていたとの報告がございます。
従いまして、一個中隊百五十名程度が雪で身動きが取れなくなる前まで駐屯するに当たり、補給はほぼ必要なしと判断いたします。
アービィ様たちが戻り次第、一個中隊は撤収いたします。
万が一お戻りにならなくとも、雪の到来とともに撤収する計画であります」
戦務参謀は用意していた回答を即座に返す。

「アービィたちが戻らなくても撤収って、見捨てるって言うの？」

レイがその発言に喰って掛かる。
大切な友人を見捨てるとも取れる発言に、公式の場にあるまじき物言いになってしまっている。

「雪が深くなれば、如何にアービィ様といえど身動きは取れません。いえ、人狼であればともかく、エンドラーズ様を始めとしてルティ様、バードン様は人間でございます。
また、ティア様はラミアにございますれば、厳冬期に屋外で活動されることは命取りになりかねません。
お戻りにならない場合は、最北の地で冬越しをなさるものと判断いたします。
アービィ様がいらっしゃれば、むざと殺されることもございますまい」
そう言った後、作戦参謀は紫に塗ったピンを、最北の地に置かれた赤い駒の周辺に数本まとめて突き刺した。

「レイテリアス様のご心配は、ごもっともなことでございます」
作戦参謀は、最北の地に突き立てられた数本の青いピンと、紫のピンを交互に指す。

「こちらの青いピンはピラムの方々、紫のピンはピラムの方々が煽動に回っている集落を表しています。
ピラムの方々の働き次第で、この紫はすべて青に変わります。
決して希望的観測ではなく、捕虜たちの供述に基づく、理論的な予測であります。
おそらく、ピラムの方々に煽動されずとも、これは青に変わるものと、小官は確信するものであります。
何故なら」
ここまで言って、作戦参謀はしまったという表情で、ラルンクルスをみた。

「敵の総帥が……ニムファ……に代わり、最北の民でも不死者たちに従わずにいたものたちが、決定的に反旗を翻した、もしくは翻すだろう、ということだな？」

血を吐くように、ラルンクルスが言った。

「その通りであります」

作戦参謀が、かつての上官に無表情に答えた。

ラルンクルスの胸中では、敬愛するニムファ女王を呼び捨てにしなければならない状況への激情が渦巻いているはずだ。

だが、それに対して気遣いを見せることや、同情するなど、尊敬するかつての上官を侮辱することにほかならない。それを理解しているが故に、作戦参謀は敢えて無表情に回答したのだった。

ラルンクルスは、作戦参謀の配慮に胸中で手を合わせていた。

「つまり、ピラム及び幾つかの集落が、アービィたちの冬越しの場として活用できる。

そう判断した、ということか？」

プラボックが尋ねた。

「その通りでございます」

作戦参謀の言葉に、レイの表情が和らいだ。

「捕虜たちの供述から、最北の地にはもはやラーニャに対する攻勢に出るだけの兵力は、残されていないものと判断できます。

欺瞞の可能性がないとは言えませんが、最北の民の人口から、結界を破壊できるほどの生者兵力を、本拠地の防備から割けるとは考えられません。

従いまして、ラーニャは雪まで持ちこたえられたなら、放棄しても戦略上何ら問題ない。
現在、シャーラの拠点化は急速に進められており、周囲の農地改良も順調であります。
来春には、ラーニャ攻略、その後の補給の目処が立ちます。
遅くとも、夏までにはラーニャを完全に確保できると、参謀本部では見通しを立てているものであります」
作戦参謀は、そう言うと兵棋板を離れ席に戻った。

「現在の状況は、以上の通りであります。
それでは、本題に入らせていただきます。
先日、衛星集落の一つに、最北の民が投降し、それを阻止せんとした最北の民と、連合軍の間で小規模な戦闘が発生致しました。
三十名程度の小規模な部隊でありました故、こちらの損害は軽傷数名に留まり、投降してきた最北の民に死傷者は出ておりません。
また、戦闘を行った最北の民も、死者を出すことなく全員を確保することに成功致しました。
投降してきた者たちの供述では、多くの部隊で投降を望む者が多数存在するとのことであります」
最後の一言を、これが重要な点です、と戦務参謀は強調した。

「つまり、最北の民に、厭戦気分が蔓延している？」
プラボックの答えに、戦務参謀は頷いた。

「それだけではなかろう。
上層部、連合軍に置き換えれば、司令部と現場部隊の間で、意志の統一が為されていない」
ランケオラータが続けた。

「その程度では、済まないかも知れません。場合によっては、指導部と軍全体の反目までいっている可能性もあります」
戦務参謀が答える。

「それも、ニムファがすべての原因と考えて良い」
今度は躊躇うことなく、ラルンクルスは力強く言い切った。
敬愛する女王を輔弼できなかった自らを断罪するかのようであり、過去との決別であるかのようだった。

「左様でございます、総司令閣下。
あ、いや、大変失礼を致しました、ラルンクルス司令官閣下。
仰るとおり、我がラシアス王国女王であった、ニムファが最北の蛮族の実権を握ったから、そう考えて間違いないものと参謀本部では分析しております」
尊敬するかつての上官に、往年の覇気が戻ったと見た戦務参謀は、つい以前の職名で呼びかけてしまい、赤面して慌てて言い直した。

現連合軍総司令官など認めていないと受け取られかねない、参謀職にあるまじき振る舞いだ。
だが、同じ思いを抱く総司令官は苦笑いを浮かべ、元ラシアス財務卿も軽く顔をしかめるだけだった。当人同士が冷や汗を流す慌て振りを、誰もがほっとした表情で見守っている。

「確実性はどうなのだ？
投降者を受け入れるのはいいが、集落の中で一斉に蜂起され、それに外から呼応されては手が付けられんぞ。
内側から結界を破壊され、夜に不死者と合成魔獣を突入させられでもしたら、いくら四個師団であってもかなりの被害になる」

インダミト軍司令官が問題点を指摘した。

「だが、敵はそれで全戦力を摺り潰すな。
仮に、生者の三割に重傷を負わせれば、それで終わりだ。
敵軍は全滅と見ていいだろう」

ストラー軍司令官が言った。

「三割で？
後送に二、三人は必要、ということですね？」

三割の重傷者で軍が全滅と判定される意味を、レイが質した。

「ご明察。
敢えてとどめを刺さず、かつ再起不能程度の傷を負わせる。
ひと思いに殺すより残虐です。
もちろん、相手を屈服させるための戦において、初めて採る戦法です。
死体をわざわざ回収して逃げる軍など、この世には存在しません。
逃げなければならない状況では、死体などより我が身の方がよほど大事でしょうからな。
ですが、負傷者を放置して逃げてしまうと、明日は我が身という不安、忠誠を捧げた者に捨てられるという失望や絶望から、士気は維持できません。
もっとも、重傷者を放置して逃げられると、大変なことになりますが。
そして、そうする可能性が高い」

ビースマック軍司令官が答える。

「重傷者を放置するとは考えられません。
確かに、三割の損害は全滅と判定しても良いものではありますが」

戦務参謀が同意するが、表情は困惑している。

どう自分の意見を述べようか、迷っているようで言葉を止めていた。

「我々にしてみれば、戦場に放置された敵軍重傷者を放置するなど、騎士道精神に悖る行為。
ですが、それは我々の価値観に過ぎぬ。
北の民は、北の民の価値観に従って行動する。
どちらが良いも悪いもない。
しかし、ただでさえ少ない兵力を、放置するとは考えられない、ということか？」
ラルンクルスが応じた。

「夜襲の場合、当然不死者が投入されます」
ラルンクルスの問いに答えずに出された戦務参謀の発言の意味を、そこにいる者全員が正確に理解した。

「つまり、効果的な治療ができないのであれば、重傷者はすべからく不死者に転生。
いや、負傷者は、その場で転生させてしまう、ということか？」
ランケオラータが腕を組みながら言った。

「そう考えても不思議はありません」
作戦参謀が吐き捨てるように言う。

おそらく、どれほどの不死者や合成魔獣が雪崩れ込もうと、しっかりと陣を組んだ師団単位の防御を掻い潜れるとは思えない。
相当の被害は出るだろうが、最後は押し包んで殲滅されてしまうのがオチだ。それでターバを脅かす敵兵力は一掃できよう。だが、局所的な戦術的勝利が、全体の戦略的な勝利に直結するとは限らない。

最北の民の生者が失われてしまえば、和平交渉の相手が消えてしまう。そうなれば狂信の生者と不死者を殲滅するまで、戦は終わらない。南北連合の戦略は、最北の民との対等な和平。それが達成できなければ戦略目的は果たせず、

「もし、敵軍に離反があると、仮定してだが。
放置しておけば、不死者が増えるだけだな。
ターバ大結界に篭城してしまえば、補給の当てがない敵軍の生者部隊は崩壊する。
碌な施設もなく、北の大地の冬を越せるとは思えん。
不死者だけで結界は破れんし、合成魔獣を突入させようと、四個師団で押し潰してしまえる。
何と言おうと、戦いは数だ。
これだけの広さを持ったターバは、今更奇策でどうこうできるものではない」
プラボックが考えていることを、そのまま言葉に出す。

「おそらく、狂信的な者と、それなりに現実を見ることのできる者。後者が投降しようとしている。
そう判断して良いかと存じます、ランケオラータ殿。
私は、投降者を受け入れるべきと考えます」
リンドリク元ビースマック公爵が意見を述べる。

「受け入れの後、すぐに後送してはいかがでしょう。
パーカホまで、最北の民が長駆できるとは考えられません。
幸い、食料、護送の人員等に不足はございません故、ターバに不安を抱えることもないと考えるものであります」
情報参謀から意見が上がる。

「それは魅力的な提案でありますが、パーカホで蜂起されたら。兵力の大半をターバからシャーラに展開している現状で、パーカホに不安を抱えることは避けるべきではあれませんか。南大陸から増員があれば良いが、いかな南大陸の四国家といえど、ラシアスの政情が完全に安定するまでは、南大陸の治安維持も重要であります。

今以上の増派はできないと考えます」

戦務参謀から反対意見が返される。

普段は俺貴様で話し合う仲だが、公式の場であるため言葉遣いが丁寧なものに変わっている。

「捕虜の供述に、どれほど信憑性があるか、だな。

ティアがここにいれば、すぐにでも判明するのだが」

ランケオラータが呻き声のように呟いた。

昼過ぎから始まった会議は、日が沈んだ後も終わる気配を見せなかった。

その夜、ターバの北側の原野や林から、倒けつ転びつ走り出す集団が幾つもあった。

追い縋る集団との間に戦闘が起こり、ある場所では生き残ったほとんどがもと来た道を戻り、ある場所ではそのまま走り去る。やがて、ターバとシャーラを結ぶ街道で数を減らされた集団が合流し、ターバへと南下を始めた。月明かりの下、蹌踉うようにターバを目指す一団を、無言のまま待ち構える集団が街道上に現れた。待ち構える集団をはっきりとした人の姿を月が照らし出すが、その足元には本来あるべき影が見られなかった。

やがて、鬨の声が上がり、絶望的な表情で蹌踉っていた一団が、影を持たない集団に突進した。

第９８話

「あなたたちは、逃げて」
アービィと戦い、自ら灰と散った吸血不死者に付き従っていた少女が、抑揚のない声で言った。

あの戦闘から二日が過ぎたが、少女が喋ったのはこれが二度目だった。
吸血不死者が灰と化した直後、『ついてきて』と一言言って以来のことだ。
そのときは、さすがに深夜でもあり、アービィの疲労も考慮して、そのまま野営したのだが、少女は黙ったまま焚き火の炎を見つめているだけだった。少女の心情を思い測って声を掛けなかったアービィはともかく、ルティやティアが話しかけても頷くか首を横に振るだけで、自らの意志を積極的に表示することはなかった。
その少女が、突然口を開いたのだった。

「罠よ。
あの人の名誉のために断るけど、あなた方の誰かと戦って、敗れたら灰になることは決めていた。
そうなったときは、私に案内させることも決まっていたけど。
でも、あの人の言ったことは、本心。
あの女王は、恐ろしい人。
あの人は、もし、あなた方と戦うことを女王の前で拒めば、その場で灰にされていた。
もちろん、負けて戻っても。
だから――」
そこまで一気に言葉を吐き出し、少女は黙り込んだ。

「落ち着いて。
もし、あなたが一人で帰ったら、どうなるの？
あなたも、殺されちゃうんじゃないの？」
宥めるようにルティが言う。
その言葉に、少女は首肯するだけだった。

「あの人が灰と化した今、私には生きている望みがない。
一刻も早くあの人の元へ行きたい。
女王が私を殺すというなら好都合」
二の句がつなげないルティに、少女は言い放つ。

「もし、殺されずに、不死者に転生させられちゃったらどうするの？
あの人が拒んだことになっちゃうんじゃないの？」
少女の気持ちを落ち着かせようと、ルティはなんとか言葉を返した。

「そのときは、舌でも噛み切って命を――」
「無理だよ。
舌噛んだくらいじゃ、人は死なない。
せいぜい、血が出る程度。
舌は急所じゃないんだよ。
付け根から噛み切ったって、それだけじゃ死なない。
切れた舌も喉に詰まるほどは大きくないし、血が喉を塞いで固まるまで口も開けられないし、口の中の唾で血は固まりにくくなってるし。
出血だって、それで死ねるほど血は出ないよ。
ただ、ひたすら痛いだけ。
それに、もし死んだとしても、死体からでも不死者は作れるんでしょ？
あの人がそれを望んでいるとは思えない。

だったら、君こそ逃げなきゃ。
僕たちは、大丈夫」
アービィが話に割り込んだ。

「死ねればいいのっ！
その後のことなんか、知らないっ！」
少女は、突然泣き出した。

強がっていただけだった。
少女にとって、生前の吸血不死者は庇護者であり、将来を誓った相手だった。将来を誓った相手だった。その最愛の人が、自らを守るために不死者へと転生し、そして灰になった。民の繁栄と、積年の怨みを晴らすという願いを果たすため、愛する人を残して二度と情を交わすことのできない不死者へと転生し、そして灰と化した。敵であるアービィたちの前では、最愛の人の遺言に従い必死に心を支えていたが、突然その限界が襲ってきたのだった。
少女は、自分が何故泣いているのか、理解できなかった。

ルティは少女を抱きしめ、髪を撫でている。
最愛の人の仇とばかりに、剣を突き立てられるかもしれないという疑いや恐怖は、一切感じていなかった。どうしようもない感情の爆発に、どうして良いか解らず泣く少女を抱きしめるくらいしかできることはなかった。まだ十代の半ばにしか見えない少女の体は華奢で、女性であるルティが力一杯抱きしめるだけでも折れてしまいそうだった。
少女から女性への移行期にあるまだ線の細い身体は、ルティの胸の中で小さく震えていた。

「泣きなさい。
あの人のこと、好きなんでしょ？

思いっきり、泣いてあげて」
それだけ言って、ルティは自分の胸に少女を埋めた。

突然、ふわりと抱きとめられ、優しく髪を撫でられた少女は、それでもなかなか泣き止まなかった。
それでも涙が止まったのは、決して涸れたからではなく、ルティの行動に呆気に取られてしまったからだった。こうやって抱きしめられ、髪を撫でられたのはいつ以来だろう。最愛の彼が生者だった最後の日以来だろうか。
最愛の人に抱きしめられたときとは異なる安心感が、少女を包み込んでいた。

「連れて行くぞ」
バードンが短く宣する。

「そうね、一人にしちゃ危ないわ」
ティアが同意した。

「じゃ、決まり。
僕たちを案内してくれたら、その後は一緒に南へ行こうね」
アービィが少女に呼びかける。
だが、アービィの言葉は少女に届くことはなかった。
ルティの胸に抱かれた少女は小さな寝息を立て、安心しきったような寝顔を見せていた。

「ここで、野営でよろしいですかな？」
皆の答えを聞く前に、エンドラーズは結界を強化し始めていた。

いくつもの小隊が、ターバの北東から北西を完全武装で展開した。

既に太陽は中天に差し掛かり、不死者が活動することはできない時間帯だ。それぞれの小隊は、ターバ周辺に配置されている最北の民に、投降を呼びかけるために出撃していた。しかし、夜明けとともに行動を開始していたが、まだ投降者は一人も現れていない。

兵たちは交代で大声を張り上げ、生者たちと不死者が身を潜めていそうな洞窟や林に向かい、投降を呼びかけていた。

「小隊長殿、ここでも反応は見られません。敵は撤退したのではないでしょうか？」

若い兵が言った。

「私は、この洞窟は空だと判断いたしますが、敵が撤収したとは考えません。

何故なら、街道上に小規模ではありますが、集団同士が争ったと見られる形跡があり、且つ、足跡及び人体と思われるものを引きずった跡が残されております。

投降者であれば、足跡はターバを指向するはずでありますが、それらの足跡は明らかにターバから離れ、街道を外れるように消えています。

しかしながら、この数日、我が軍と最北の蛮族との間に、戦闘は発生しておりません。

撤収であれば、争いの跡が残るはずもありません。

以上の点から、投降者とそれを引き留めようとした者との間に戦闘が発生し、投降者が殺害、ないしは拘束されたものと断定して良いと考えます

そして、これは完全に推測でありますが、投降しようとして阻止された者は不死者に転生させられたものと思われます」

若い兵にレクチャーするような口調で、叩き上げの下士官は意見を具申した。

「つまり、敵は継戦の意志を捨てず、未だこの周辺に潜伏している、ということか？」

小隊長は、下士官の目を真っ直ぐに見つめ、現在の行動を無駄と言うのか、という問いかけを視線に込めて聞き返した。

「仰るとおりであります。

しかしながら、すべての最北の民が、継戦の意志を持っているとは考えられません。

おそらく、まだ状況を見極めようと、息を潜めている者も多いと思われます」

誰もそんなこと言いやしませんよ、という意志を視線に乗せ、下士官は答える。

「そうか。

まだ撤収はできない、ということだな」

若い兵をちらりと見て、ニヤリと笑った小隊長は、戦闘服に付いた泥を払い落としながら立ち上がり、捜索の継続を小隊に命じた。

同じ頃、移動を始めた小隊からさほど離れていない林の奥で、声を抑えながらも激しく言い争う一団があった。

四十人ほどの集団が、およそ十人対三十人に別れ、その代表同士が論戦を繰り広げている。互いに一歩たりとも退く気配を見せず、相手を従わせようと必死に言葉を叩き付け合っていた。

人数比から見れば三十人の方が優勢になってもおかしくないのだが、両者には明確な違いが見られる。明らかに十人の方が体格も武装も優れたものを備え、三十人の方は劣った体格と粗末な武装しか携えていない。

「まだ、あなた方は、あの女王の妄言を信じるのか？

これまでにどれほどの同胞が散り、灰になったと思っている。
我々は楯でも矢でもないっ！」
三十人を代表するやや背の低い男が言う。

「無礼者！
貴様は死を恐れるのか！？
我らはニムファ様について行けば、それでいいのだ。
グレシオフィについていた頃には、夢でしかなかった南大陸が現実になろうとしている。
不死者が消えようと、下僕が死のうとそんなことは知ったことではない
最北の民の礎となることは、名誉ではないか」
十人を代表する体格の良い男が、恫喝するように言い返す。

「あなたは、河川流域で何を見て、何を思った？
食料もなく、碌な武具もなく、飢えと寒さに苛まれ、生きて帰ることを夢見ながら、敵陣に突っ込んだ同胞を見て、あなたは何を思った？」
血涙滴らんばかりに、背の低い男が問う。

「食い物がなければ、大地に求めればよい。
それがなければ、敵から奪え。
剣が無くとも、腕があり、脚があり、爪がある。
それを失っても、歯があるではないか！」
体格の良い男はそう言い放ち、傲然と胸を反らせた。

少数派ではあるが体格の良い十人は、最北の民の中でも優位な部族だった。
西の河川流域を統括していた彼らは、血で血を洗うような激戦の最前線からは一歩引き、連合軍の手の届かない安全地帯に引きこも

っていた。最前線の生者に分配すべき食料も優先的に囲い込み、前線からの補給要請に耳を貸すことはなかった。

ニムファによる戦略の変更に従い、ターバを包囲するように配置を換える際にも、最前線の生者や不死者を捨て石にして、自らの安全を最優先していたのだった。

前線の窮状を見ることもなく、やっとの思いで引き揚げてきた生者の報告を分析することもなく、ただ喚き散らすだけの無能な指揮官に、誰もが失望していた。

そのうえ、生者も不死者も一緒くたに十死零生の突入作戦に投入し、すり減らされた兵力は連合軍戦死者を不死者に転生させることで補充するに至り、それまで付き従っていた生者たちは離反を決意した。決死を求める命令は許容できるが、死を前提とした命令は、命令の限界を超えていた。

かつては尊敬の対象だった男たちを正道に戻すため、背の低い男は論戦を挑んでいたはずだった。

――狂っている。背の低い男は、現実から目を逸らすように胸を反らせた男を見て、落胆の表情を隠せない。

その表情を見た十人の男たちに、勝ち誇るような嘲りの色と、見下しきった満足感が浮かんだ。

――これでは、最北の民から生者が消える。グレシオフィ様は、それはお望みにならなかった。不死者を守る楯としてではあったが、不死者もまた生者の営みを守る楯であったはずだ。子々孫々の繁栄を、守る楯が不死者のはずだ。

背の低い男は、民のために転生した不死者に対し、限りない畏敬の念を抱いていた。

破壊衝動しか残らず、生前の記憶を保つこともないのであれば、

身体が動こうとそれは死以外の何物でもない。
それを敢えて受け入れ、民の楯とならんとした崇高な魂には、彼は畏敬の念以外を抱くことはできなかった。然るにその不死者を消耗品扱いすることは、その魂を踏みにじる行為に他ならない。死に対する冒涜だ。望まぬ転生を強制され、かつての同胞との戦を強制された敵対していた者たちの気持ちが、彼には今更ながらに悲しかった。
彼は、ようやく過ちに気付いていた。

――俺は取り返しのつかないことをしてきた。民のためとはいえ、望まぬ転生をさせた者たちを、同胞同士の殺し合いの先兵としてきた。俺の命で償えるほど、軽い罪ではない。あの世とやらで、あなた方に殺されるまで、今暫く生きながらえさせてくれ。
背の低い男は、心の中で死んでいった者たちと灰と化した者たちに手を合わせると、眦を決して振り返り、一つ頷いてから体格の良い十人に向き直る。

「事ここに至れば是非もなし」
決別の言葉が背の低い男の口からこぼれると同時に、背後の三十人が一斉に十人の男たちに襲いかかった。

「小隊長殿っ、林の奥で戦闘が発生しておりますっ！」
若い兵の報告に、小休止を取っていた小隊が、一斉に戦闘態勢を整える。

「第一戦闘序列。
目標、南西の林。
駆けあ――」
「お待ち下さい、小隊長殿っ！

敵情が全く不明の状況で、指揮官先頭の第一序列は危険であります。

ここは、第二分隊を全面に展開し、偵察を行いながら前進する第三序列にすべきかと」

下士官の意見具申に小隊長は頷き、命令を変更した。

第一分隊第一班を先頭にした縦陣が解かれ、後方から第二分隊が班毎に別れ、先頭に出る。

万が一の遭遇戦で指揮官が討ち取られでもしたら、小隊はその瞬間に瓦解しかねない。指揮官をすべてが見渡せる位置に置く警戒態勢の第三序列が、この場合適していると下士官は咄嗟に判断していた。闘志が旺盛な指揮官を頼もしく思う反面、経験不足に危機感を抱いていた下士官は、安堵の溜息をつきながら、部下を率いて真っ先に林へと足を踏み入れる。

林に消えた部下を見送り、冷水を浴びせられた心を落ち着けた小隊長は、残る第一分隊に前進を命じた。

「つまり、ターバ北部に展開する最北の蛮族は、ほぼ制圧に成功したと見てよいのだな？」

南北連合軍総司令部に、野太い声が響いた。

下級指揮官から順次上げられた報告は、その都度各級参謀たちにより検討を重ねられ、最終的に総司令部参謀本部による分析を経て、総司令官に報告されているところだった。

「はい。

捕虜たちの供述も、それを裏付けております。

不死者の群れも、九割九部以上壊滅できたものと、我々は判断しています」

首席参謀が胸を張って答える。

ターバ北西での最北の民による同士討ちは、期せずして他の拠点にも波及し、続々と投降する者が後を絶たない状況になっている。
自主的に武装解除し、ほぼ丸腰の状態でターバの衛星集落に投降した最北の民は、それぞれの集落に駐屯する連合軍が受け入れ、身体検査や持ち物の検査を済ませた後、ターバへと送られていた。衛星集落でも事情聴取が行われ、拠点はすべて連合軍により破壊ないし占拠されている。同時に不死者たちが潜む洞窟も、火の黒呪文レベル４を行使可能な者が『爆炎』か、アービィが使った粉末炭による粉塵爆発で焼き払っている。灰の状態で運ばれていた不死者たちは、月夜に再生することなく川に流されていた。
徹底した調査が行われ、ターバの西から北、そして東の地域で、組織的な最北の蛮族の抵抗は終結したと、参謀本部では判断している。

「期せずして、河川流域の制圧が成ったようだな。
直接戦闘が起こらなかったことは、最北の民から怨みを買うことにならずに済んだということだ。
華々しさには欠けるが、これが最良の結果だろう」
総司令官は部下の労苦を労った。
参謀たちは、満足そうな表情で一礼した。

「誠に、ご苦労だった。
プラボック様やランケオラータ様には私から報告をする。
諸君は、決して気を緩めることなく、今後も警戒に当って欲しい。
状況判断は慎重に、各級部隊の休息、人員の入れ替え等は行ってもらいたい。
ある意味、今が一番危険な状況という認識は、末端の兵一人一人に持たせるように。
くどいようだが、ここで油断してはすべてが無に帰す」

総司令官は、部下の反発を買うことを承知で、敢えて言った。

投降してきた最北の民が、すべてニムファに対して愛想を尽かし、南北連合に加わろうとしていると判断するにはまだ早い。

ターバ内で一斉蜂起され、結界を破壊されて合成魔獣と不死者の群れに突入されたら、その被害は甚大なものとなる。最北の民がどう思おうと、当分の間は徹底した監視と警戒を緩めるわけにはいかなかった。戦闘の終結宣言を心待ちにしている兵たちには申し訳ないが、もうひと働きしてもらう必要がある。

総司令官は、改めて気を引き締めていた。

「畏まりましてございます。

総司令閣下のお考えは、充分に理解しております。

各級指揮官には、今暫く第一警戒態勢を解くことなく、暫時休息を取りつつ待機と命じてあります。

閣下、これで河川が輸送に使用可能であります」

作戦参謀から了承の返答が返り、続けて決断を促すような一言が付け加えられた。

川が使えるならば、シャーラからラーニャまでの補給は容易だ。

ラーニャを確保している部隊を、撤収させる必要はなくなった。

補給部隊をそのまま進攻の尖兵とするべく、ラーニャに留まらせることも可能だ。陸路に比べ、河川を利用した輸送は一度に運べる物資の量が段違いに多い。艀一艘で荷車百台近くに相当する物資が積み込めるうえ、輸送業務に必要な人員は荷車一台か二台分でしかない。さらに護衛部隊を編成する必要もなく、せいぜい一艘につき一個小隊の武装兵がいれば事足りる。

雪が降り積もるまでに、かなりの物資をラーニャに移送することは、充分可能だった。

「よし、兵には申し訳ないが、もう暫くの辛抱だ。戦闘の終結が近いと期待させると、士気が緩む。まだ、見通しは甘くないと、下級部隊には伝えるようにしてくれ。それから、至急シャーラおよびラーニャへの物資輸送、人員の再配置を計画しろ。下がれ」

プラボックやランケオラータに報告を上げるため、総司令官は席を立った。

総司令官は、決して楽天家ではない。最北の蛮族の組織的な抵抗こそ終結したと判断してはいるが、最も厄介な状況であるとも認識している。組織的に敵が運動すれば察知は容易だが、少数に分かれどこから攻撃を仕掛けてくるかわからない状況は、いつどこの結界を破壊されるかもしれないという緊張を強制される。これまではターバの南側に大規模な敵は展開していなかったが、南側の警戒もより一層厳重にしなければならない。

ここで油断しては、全てが無に帰す。総司令官は自らを戒めるように呟いた。

「どうやら、ラーニャ以南は、完全に制圧できたようでございますな」

エンドラーズが、ターバに残った神官からの、精霊を介した交感で得た情報を披露した。

「しかし、便利でございますな、精霊の交感というものは。我らマ教にもそのように術があれば。いや、口惜しいというか、なんと言うか。それで、我々には何か命令なり指示はございましたか？」

一頻り感心したバードンが、一番大事なことを早く言って下さい

と視線で催促する。

「こちらのことは気にせず、好きに遊んで来い、と」

満面の笑みを湛え、エンドラーズが答える。

「絶対嘘ですね」

「本当は、なんと？」

「どの口がそういうことを言いますか？」

「……」

四人の反応は冷たかった。

「本当でございますっ！」

エンドラーズは必死に弁解するが、四人ともまるで取り合わない。

実際、アービィたちの突出は、総司令部や指導部共に黙認している。

もちろん、上層部はアービィたちがニムファを討ち取ってくるとまでは、考えていない。

来春の実施が確実になった北上作戦に、貴重な情報を加味して修正できるという期待を抱いていた。最北の地の地理は、南北連合の誰一人として知る者はいない。地図すらない広大に地域に大部隊を突入させることは、補給路の確保がなっていても、やはり大きな危険が伴う。隘路で襲撃されるようなことがあれば、アーガスの暴走と同じ結果が待っているだけだ。僅か二年前に平野部で起きた南大陸の大敗北は、すべての将兵の記憶にまだ新しい。

それ以降に軍に入った者にも、当然初期教育で叩き込まれている知識になっていた。

「で、実際にはなんて言われました？」

ルティが目を細くしてエンドラーズを横から見た。

「はい、適宜敵情を探り、早急に報告するように、とのことでございます」
四人の視線に耐え切れず、エンドラーズは白状した。

雪の到来まで、もう間がない。
最北の地の厳冬期を、協力者もなく乗り切るなど、人間には不可能なことだ。ピラムの民がどれほど最北の地に残る生者を離反させることに成功したかにもよるが、上層部としてはアービィたちに一度戻って欲しいと考えていた。

「次の春なんか待ってられない。早く決着をつけなきゃ、最北の地に生きている者がいなくなっちゃう」
アービィが言い、ルティとティアが頷く。

「そうだな、これでは何も報告することがない」
バードンが続ける。

「そうでございましょうとも。さあ、皆様、夜明けと共に参りましょうぞ」
エンドラーズは満面の笑みを湛え、酒瓶を振り回した。

相変わらず、少女が会話の輪に入ることはない。
数日前に一頻り泣いて以来刺々しさはなくなっていたが、今は何かを思い詰めているように見える。五人からの問い掛けには素直に答え、時折笑顔も見せてはいるが、明らかに作られた笑顔だった。
それは想笑いなどではなく、心配掛けまいとして向けてくる笑顔だが、アービィたちには却って痛々しく映っていた。下手な慰めなど、

何の役にも立たない。
余計な気遣いは、さらに少女の笑顔を痛々しくするだけだと、アービィたちは気付いていた。

「ピラムのみんなは、どうしてるかしら。
無事だといいんだけど」

夜の静寂が辺りを覆い、夜行性の動物の息吹を感じ始めた頃、結界に近付く人の気配を誰もが察知した。

「アービィ殿、何故、このようなところに？
その女は？」
闇からカンテラをかざして現れたピラムの民が、僅かに闘気を発散するアービィに話しかける。
ラーニャ以来の邂逅に、緊張が緩んだ。

「皆さんも、よくぞご無事で」
アービィがここまでの事情を、掻い摘んで話した。

オセリファがラーニャに現れ、最北の地に呼ばれたこと。
ニムファに因るものと思われる、強制的な不死者への転生が起きていること。
最北の民を思う不死者と戦い、これを撃破したこと。
彼から、少女を、最北の民の未来を託されたこと。

「奴らの中にも、心ある者はいた、ということですね。
いや、彼らは彼らで民の繁栄を願い、此度の戦を起こした。
決して相容れぬ者同士ですが、彼らの気持ちは痛いほど解ります」
ピラムの民はそう言って、灰と化した吸血不死者とその眷属のた

めに瞑目した。

「して、皆様のご首尾はいかがでございましたかな？」

バードンが聞いた。

「状況は、同じようなものです。

抵抗を続けていた集落のうち、かなりの数が不死者へと転生させられています。

このままでは、最北の地から生者が消える。

我々が煽動するまでもなく、彼らは決起するつもりでいます。

来春に予定されている、我々の進攻に合わせて起つように説いているのですが、彼らの状況がそれを許しません。

彼らは追いつめられています。

中には我々同様、逃亡するしかないと考える集落もあります」

ピラムの民の表情に、焦燥感が溢れている。

「僕たちが、征きます。

冬が来る前に、終わらせます。

皆さんは敵の本拠地を包囲して下さい。

誰も逃がさないように、誰も入れないように」

冬になってから逃亡するような事態になれば、どれほどの死者が出るか。アービィは、ラシアス師団の遺体捜索をした経験から、背筋に冷たいものを感じた。

いくら雪に慣れているとはいえ、数十日の行程を協力者も中継点として使える場所もなく突っ切るなど、無謀以外の何物でもない。

平時であれば家に篭もり、秋までに蓄えた食料を食い繋ぐだけの日々だ。好き好んで豪雪の中に踏み出す者は、いなくて当たり前の時期だった。だが、雪が止んだ一瞬の隙を不死者に衝かれては、集落の防衛も無理な話だ。逃げるなら、もう一刻の猶予もない。

魔宮と呼ばれた、ニムファの館を衝くしかなかった。

「危険が迫っている集落が避難するかどうかは、そこの方々に判断を任せます。
とりあえずラーニャまで逃げ切れば、後は何とかなるでしょう。
ただ、その道中に何かあっても、どうすることもできませんけど。
できれば、魔宮包囲に参加して欲しい。
一人でも多く。
自分たちの手で、最北の地を解放したって事実が、後々モノを言いますから」
ルティがピラムの民に言った。

「あたしたちは、魔宮の中に潜んでる悪霊を狩ってくるわ。
後はあなた方次第。
同族相討つも、手を携えるも良し。
あたしたちと南へ行くも、あたしたちと戦うも、ね」
突き放したようにティアが言う。

最北の民が一枚岩ではないことは判っているが、これから先は地域として利益を上げていかなければならない。
骨肉の争いを続けていた者同士が手を携えることは難しいと理解できるが、それができなければ新たな戦乱が起きるだけだ。最北の民同士で殺し合うか、南北連合に挑むか。いずれにせよ、明るい未来が待っているとは、どれほど楽天家でも考えはしないだろう。
それを承知のうえで、ティアは言ったのだった。

「とにかくですね、今はどれだけ多くの人を、仲間に引き入れるか考えて下さい。
ただ、その中で後々誰が使えるか、先頭に立てる人かは、よく見

極めて下さいね。
その人たちが、最北の民の宝になりますから」
ルティがフォローを入れる。

戦乱終結後、最北の民の後ろ盾になりうるものは、資源しかない。
しかし、最北の地は表土の下に眠る石炭や石油、天然ガスといったエネルギー資源、様々な鉱物資源、そして周囲を取り巻く海洋資源といったあらゆる資源の宝庫だ。まだどうやって採掘するかの目途や、利用法すら確立していない物ばかりだが、いずれ最北の民を富ませる物が、それこそ無尽蔵にあると言って良い。
それを南大陸に収奪されてはならない。

資本の投下なくしては開発など不可能だが、利益を全て南大陸に持ち去ってしまったら、過去千年の繰り返しでしかない。
また、新たな怨みと妬み、怒りと嫉妬が渦を巻き、遠からず次の戦乱を呼び込むだけだ。最北の地に、自由競争を持ち込むのは、まだ早い。国家の統制の下に資本を投下し、最北の民から資源を購入する形にしなければ、瞬く間に最北の民は南大陸の商人たちによって奴隷化されてしまう。
明らかに順序は逆だが、ルティはそのための準備を促し、ティアはそうできなかったときにどうなるかと、敢えて先に脅しをかけていたのだった。

「ご安心いただきたい、ティア殿。
これからは、武力ではなく知力の時代。
私はそう認識しております。
我々は、まだまだ知恵が足りない。
あなた方から学び取らなければならないことが、たくさんある。
それに、我々がどう背伸びをしようと、南北大陸を支配するだけの人数もおりません。

ですが、カネは集めることはできる。
我々は、カネを武器とし、あなた方と戦うのではなく、競い合いたい」
ピラムの民は、ティアの目を見つめて答える。

「それを伺って安心致しました。
皆様、夜も遅い。
今夜はここで野営していってはいかがでございましょうや」
エンドラーズがほっとしたような顔と心配げな表情を交互に見せ、ピラムの民に話しかけた。

「お心遣い、誠にありがとうございます、エンドラーズ様。
ですが、我々もやるべきことがございます故。
皆様が彼の女王の下に着くときに合わせて、我々も行かねばなりません。
一刻たりとも時間が惜しい。
進めるだけ進みたく存じます」
そう言ってピラムの民は、一斉に立ち上がる。

「あと、どれくらいなの、あなたが案内してくれる場所まで」
ふと気付いてルティが少女に問いかけた。

「あと、五日」
少女がぽつりと呟いた。

少女は、この道を一人で歩いてきた。
背嚢に、愛する人とその眷属の灰を背負い、独りで歩いてきた。
夜、月が出るのを待って不死者を蘇らせ、愛する人の胸に抱かれて眠り、朝の訪れと共に灰に姿を変えてしまった愛する人をまた背負い、歩き続けてきたのだった。少女の脚に合わせているため、ア

ービィたちだけで歩くよりは少々遅い。
だが、ここで焦ってアービィが獣化して荷車を引いても、ピラムの民が扇動した人々と魔宮に辿り着くタイミングが合わない。もちろん、ピラムの民は距離感を肌で理解しているため、アービィたちがいつ魔宮に到着するかは判っている。携帯電話のような移動中の者同士が意思を疎通させる方法などないこの世界で、互いの行動を合わせることは多少の齟齬が生じることを覚悟しておかなければならない。しかし、アービィたちが早く着くならともかく、遅れてしまっては人々に犠牲が出かねない。かと言って早すぎても、最北の民が最北の地を解放したという事実が作り出せない。
どうやってタイミングを合わせるか、難しい問題だった。

「どこで落ち合う？
何か、目印になるものはないの？」
ティアが聞いた。

「魔宮から、半日の辺りに大きな一本杉の立つ丘があります。
彼の集落より北には、もう何もありません。
峻険な崖が連なる高地が続いています。
われわれも、手分けすれば五日で志を共にする者たちを引き連れて行けましょう」
ピラムの民が答える。

「じゃあ、余裕を見て七日後。
その丘の南側の麓で会いましょう」
ルティが少し考えてから期限を切った。

「解りました、ルティ殿。
では、七日後に」
そう言ってピラムの民は一斉に立った。

「お気をつけて。
それでは、丘の麓にて相見えましょうぞ」
バードンは、いくつかのグループに別れて闇に分け入っていく、
ピラムの民の背に声を掛けた。

「僕たちも、行こうか？」
アービィが誰とはなしに言う。

「慌ててもしょうがないじゃない。
いざとなれば、あなたが獣化しちゃえば良いし」
あっさりとティアが却下し、改めてシェラカップに蒸留酒を注ぐ。

「いいのかなぁ、ピラムのみんなはあんなに急いでるのに」
半ば呆れ顔のアービィが腰を下ろし、ルティからカップ受け取った。

「ここまで来れば、もうじたばたしてもしょうがないの。
だいたい、二日も余裕があるんだし。
あんまり早く着きすぎて、見つかっちゃっても困るでしょうよ」
ルティがアービィを落ち着けるように言った。

「あなた方、怖くないの？」
少女が呆れ顔で聞いた。

「怖い。
怖いですよ。
ニムファ様がどのような力を手に入れたか、私たちは知りません。
もしかしたら、手も足も出ずに殺されてしまうかもしれない」
バードンが優しく少女に言う。

強がったり、取り繕ったところで、少女には解ってしまうだろう。
そう考えたバードンは、飾ることなく素直に心境を言うことにしたのだった。

「じゃあ、逃げればいいじゃないっ！
なんで、なんで、最北の民なんかのために、あなた方みたいな南大陸の住人がっ！？
みんなそうよ。
なんで、あたしたちのためなんかにっ！？」
少女の叫びが、闇を裂いた。
少女には、バードンたちの行動原理が解らない。
怖ければ逃げれば良い。あの人の下へ旅立ちたい自分のような者はともかく、なにも好き好んで殺されに行く必要など、欠片もないのだ。

「私たちは、行かなければならないのです。
世界を、破滅させるわけにはいかない。
そして、この狼の決着のため」
バードンがアービィに目をやりながら答えた。

「そうよ、もしも、ニムファ様が恐ろしい力を持っていたとしてもね。
逃げる場所なんか、世界のどこにもないの。
いつかは追いつかれて、殺されるわ。
誰も彼も、ね。
そんなことは、認められないの。
アービィがきっかけの一つだとしたら、あたしたちはそれを止める義務があるわ。
あたしたちは、行かなきゃいけないのよ」
ルティが諭すように言った。

「莫迦よ、あなたたち」
少女は、力なく呟いた。

「そう。
莫迦でございます」
エンドラーズの言葉に、全員が一斉にエンドラーズを見て頷く。

「皆様……」
エンドラーズの呟きに、笑いが弾けた。

「どうだい、落ち着いてきたかい？」
ウジェチ・スグタ要塞にある豪奢なサロンに、五人の男女が集まっていた。

「ああ、なんとかな。
今回のことは、皆に何と礼を言い、どう償えばいいか、俺には解らん。
それに、まだ民には公表していないが、あの莫迦女が最北の地を乗っ取っている。
我が王家は、民に顔向けができん。
兄上は、事が終わったら、退位を考えている」
インダミト代表のパシュースの言葉に、ラシアス代表ヘテランテラが答えた。

「おい、それはやめてくれ。
漸く落ち着いた国情をまた混乱させる気か？」
ビースマック代表のフィランサスが慌てたように言う。

「別に、私たちはあなたの家のことを思って言うわけじゃないわ。混乱が完全に収束して、国情が安定してからにして、そういうことは。

それに、いきなり放り出すようなことされたら、また貴国が混乱するわ。

王制を廃止するのか、別の王朝に禅譲するのか。

いずれにせよ、政治的空白ができるのは、貴国の民だけじゃなく両大陸の民が困るってことを自覚してよね」

ストラー代表のアルテルナンテが叱り付けるように言った。

「ヘッテの気持ちは良く解るんだが。

王家内の内紛というか、権力闘争なんて、どこにでもあることなんだろう？

別にいいじゃないか、そんなに深刻に考えずとも。

貴国の姉上が最北の蛮族を率いるようになっているとはいえ、もともと姉上とは関係なく始まった戦だ。

気にすることはない」

北大陸代表のルムが、ヘテランテラの愛称で話しかけた。

北大陸の代表として南北連合に出向してから百日ほどが経過したルムは、すっかりと各国王族の中に馴染んでいた。

「皆の気持ちは嬉しいが……

やはり、けじめは付けねばなるまい」

暗い表情でヘテランテラは答えた。

「こう言ってはなんだが。

エウステラリット殿がお亡くなりになっているんだ。

それで、もう充分だろう。

あとは、王位をお継ぎになるエリオカウロン殿と、よく相談するんだな。

もっとも、そんな暇があるとは思えんが」
パシュースが宥めるように言う。

戦乱の後、北大陸の復興にどれほどの労力が必要か、考えただけでも寒気がする。
そこにラシアスの政体もしくは王朝交代など起きようものなら、北大陸の復興はいつになるか判ったものではない。ヘテランテラの言うこともっともだが、今は混乱を敢えて起こすべきではない。もちろん、民が求めるとなれば話は別だが、それでも北大陸の玄関口であるラシアスを、北の民に反感を抱く者たちに委ねるわけにはいかない。ヘテランテラのグランデュローサ王朝が退き、次に国権を握る政体が必ずしも北の民との融和を望むとは限らないからだ。今の状態であれば、両大陸を混乱に陥れたラシアスは連合の場で強く出ることはできない。
口では奇麗事を並べているが、ヘテランテラを除く四人の心の内は、その一点に絞られている。

「しかし、ことの真相が民に知れたら……」
ヘテランテラも、そのようなことは充分に承知だ。
立場か弱くなった連合で、国益を守らなければならないという使命感は失っていない。
しかし、その困難に立ち向う気力を、一連の騒乱で失いつつあることも確かだった。使命感と無力感の狭間で、ヘテランテラは揺れている。

「正直に言っちゃうとね、あなたにはここにいてもらわないと困るの。
仮に新しい代表が来たとして、その人物の保証は全くないわ。
南大陸の世論が、北の民蔑視でなくなるまでは、ね」

アルテルナンテがじれったそうに言う。

「そうだな。
我々も、南大陸の玄関口で追い返されては堪らん。
また、過去千年の繰り返しだ。
ここは、ひとつ我慢していただくしかない」
ルムがわざと意地悪げな笑顔を浮かべる。

「このために勇者殿を召喚したんじゃないのかい、君の姉上は。
現在、勇者殿は最北の地にいる。
任せておこう。
姉上の望みが叶うかも知れん」
ニムファは最北の蛮族に対抗するために、最北の地へ飛んだ。
そこで自ら召喚した勇者と力を合わせ、南大陸へ侵攻しようとした最北の蛮族に戦いを挑む。その激闘の中で、不幸にしてニムファは敵の刃に倒れたが、その遺志を継いだ勇者が見事最北の蛮族を討ち果たし、南大陸に凱旋する。
言いようによっては嘘ではない。
現実にニムファは、最北の蛮族を率いていたグレシオフィを排している。

今から十三年前、ニムファは北の地に降臨したという魔王を討つために勇者召喚した。
その勇者が最北の地に舞い降りたニムファという魔王を討ち果たせば、それは十三年前の望みが、民の平和を想う崇高な願いが現実のものとなる。

「そうかも知れん。
いや、そうだな。
姉上は、最北の蛮族との戦いで倒れた。

勇者殿が仇を討ってくれることを期待しよう」
都合の良すぎる解釈だとはわかっているが、ヘテランテラはそう思うことにした。

ニムファは、独りで邪神の像に向かっていた。
凄艶な笑みを浮かべ、両者の間に浮かぶ映像に見入っている。
そこにはアービィの姿が、映し出されていた。一度は裏切られたと怨み、全てを奪い、全ての障害となる存在と憎悪した相手だが、不死の身体と神の力を手に入れたニムファは、そのことはきれいさっぱり忘れ去っていた。
全てが自分の思い通りでなければならないという考え方は、思い通りにならないことは全て自分以外の誰かが悪いと言う考え方に繋がっている。勇者が自分の思い通りにならなかったのは自分に落ち度があったのではなく、勇者を誑かした悪女のせいだ。
ニムファはそう考え、そう思い込んでいた。

「勇者殿、さあ、早く我が下へ。
勇者殿を誑かす悪女は、私が排しましょう。
手を取り合い、共に世界を……」
アービィと行動を共にするティア、バードン、エンドラーズの姿が映し出される度、ニムファの顔に翳りが浮かぶ。
そして、ルティの姿が映し出されたとき、ニムファの表情は悪鬼の如くに歪んだ。

映像を腕の一振りで消し去ると、ニムファは扉を開け次の間へと出る。
そこには数十体の吸血不死者と、オセリファが直立不動の姿勢で待っている。微動だにしないその姿を見て、ニムファは満足そうな笑みを浮かべた。

「そなたに命じます。
ルティという、あの忌々しい小娘を殺しなさい。
肉の一片すら欠けさせずに、ここへお持ちなさい。
全て、喰らい尽くしてくれましょう」
瞳に冷たい炎を宿らせ、ニムファはオセリファに命じた。
その命令に、オセリファは従順に頭を下げ、ニムファの足元に跪き恭順の姿勢を取る。

「いかがですか？
命令に逆らえない身体というものは？
散々私を莫迦にしてくれましたが、神にいただいた力を使えばそなたごときはこのとおり。
なぜ、黙っているのです？
声と思考は元のままにしてあげています。
復唱もできないのですか？」
オセリファを見下ろし、嘲るようにニムファは言った。

「不死の身体を、これほど怨めしく思ったことはない。
私は、貴様に服従などしておらん。
復唱など、求めるだけ無駄。
どうせ、私の身体は貴様に操られているのだ。
思い通り動くのは、当たり前だろう。
満足か？
人形を思い通りに動かし、自分に頭を下げさせて満足なのか！？」
恭順の姿勢を取りながら、オセリファが血を吐くように叫んだ。

「これ異常なく、満足しています。
そなたが恭順の姿勢を取ることにではなく、意に反して恭順の姿勢を取らされることに」

ニムファは高笑いしながら言葉を叩きつける。
その言葉に、オセリファの背後に並ぶ吸血不死者たちの表情が一変した。

「そなたら、この女を打ちのめしなさい。
女王に不遜な言葉を吐く者は、罰を与えます」
さらに表情を歪め、ニムファは吸血不死者たちに命じた。

ニムファの命令に逆らうことなく、数十体の吸血不死者の群れがオセリファに襲い掛かる。
ニムファの足元で恭順の姿勢を取っていたオセリファを引き倒し、殴る蹴るの暴行を加えるが、その表情は今にも泣き出しそうだ。
オセリファは一切抵抗することなく暴力の嵐に身を委ねているが、襲い掛かる吸血不死者たちに対して怒りの色を浮かべることはなかった。

「オセリファ様、お許しくださいっ！
我らの身体は、既に我らの意志をっ！」
血涙滴らんばかりに吸血不死者たちが叫ぶ。

「既に不死の身体。
いくら殴られようが、蹴られようが痛みを感じることはない」
オセリファは、吸血不死者の身体が自身同様、ニムファに操られていることは知っている。

それから数刻の間、暴力の嵐は吹き荒れ続けた。
衣服のあちこちが破れ、美しく伸びた金髪が埃塗れになっても、オセリファの身体には傷一つない。祝福法儀式済みの剣以外では傷付けることの適わぬ身体には、欠片ほどのダメージも残されていない。それでも同胞相討つという精神的なダメージは、深く吸血不死

者の心に残された。オセリファに暴力を振るっていた吸血不死者は今にも泣き出しそうな顔を歪めるが、既に死した身体から涙が流れることはなかった。

第９９話

その女性は、音もなくアービィたちの前に立った。
艶やかな表情は、男たちを振り向かせるに充分な魅力に溢れている。少々吊り気味の瞳と適度な高度を持つ鼻梁、控えめな口元はそれぞれが整ったバランスを保っていた。だが、その表情は、今にも泣き出しそうだ。
美しい金髪が風にそよぎ、悲しみを湛えた碧眼が、アービィたちを均等に眺めている。

少女の顔が凍り付き、恐怖に身を竦ませる。
その少女を庇うようにルティが一歩踏み出すが、人なつっこい笑顔を浮かべ、女性に話しかけようとした。

「来ちゃダメっ！」
その瞬間、その女性、オセリファの叫びと同時に両腕が水平に突き出され、指先が怪しく輝いた。短い呪文の詠唱が完結し、赤錆色の光弾がルティに襲いかかる。咄嗟に剣を抜き放ち、光弾を弾こうとするが、粘着質の泥を塗りつけられたかのように、光弾は弾けたまま剣にまとわりついてしまった。

「何、何が！？
オセリファさん、何を！？」
続けざまに襲い来る赤錆色の光弾を剣にまとわりつかせながら、ルティが悲鳴のように叫ぶ。

「これは腐食の呪文なの！
私は、私は意識はそ――のままに、身体を操ら――れてる。

――

もう、私には、どうすることも――

――できないのっ！」

必死に叫ぶオセリファは、言葉の合間に呪文を詠唱し、矢継ぎ早に繰り出してくる。

呪文を受け止めた剣は、祝福方儀式の効力で六発目までは耐えていた。

だが、刃全体を赤錆色に染め上げられたとき、火の精霊の祝福加護は限界を超えた。みるみるうちに錆が進行し、まるで砂のように鍔から先が崩れ去る。ルティは護身用の短剣を抜くが、それは一発食らえばもう役に立たなくなることは明らかだった。

オセリファと戦う意義を見い出せないルティは、どうして良いか判らなかった。

エンドラーズとバードンが飛び出し、少女を引き戻し荷車の影に伏せさせる。

ティアが『封魔』を放つが、オセリファの周囲に張られた重力結界に阻まれ効力が届かない。次の赤錆色の光弾がオセリファの指から放たれ、ルティに向かって飛翔した。ルティは短剣で光弾を浮けるが、祝福方儀式を受けているとはいえ、刃渡りの短い剣は一発の光弾で赤錆色に染め上げられた。

あとは護身用のナイフしか残されていない。精霊の加護が腐食の呪文を相殺していたが、ナイフには何の処理も施していない。そんなものでは光弾を防ぐことなどできそうもなく、ナイフで受ければ身体ごと腐ってしまいそうだった。

次の光弾を防ぐ手だてを、ルティは失っていた。

今にも泣き出しそうに顔を歪め、オセリファは呪文の詠唱を完成させた。

ルティに向かって赤錆色の光弾が襲いかかったとき、ルティはナイフを顔の前にかざし、思わず目を閉じた。次の瞬間腐食の呪文が炸裂すると覚悟して、それを食い止めるため効果があるかどうかは判らないが、『全解』の詠唱を開始する。もし、オセリファの放つ呪文が即効性であれば、『全解』を唱える前にルティの身体は腐敗しきってしまう。それでもルティは、可能性に賭けた。

しかし、『全解』詠唱を完成させ、あとは発現させるまでになっても、腐食の呪文がルティに効力を発現させることはなかった。

何が起きたのか確かめるため、ルティは目を開いた。

そこには、頭から身体の前半分の毛皮を赤錆色に染め上げた巨狼が、ルティとオセリファの間に微動だにせず立っている。永遠とも感じられる一瞬が過ぎ、巨狼が水から上がったときのように身体を振るった。赤錆色は一瞬で飛散し、元の灰色の毛皮が現れた。

巨狼の眼が狂気に染め上げられ、オセリファに向かって跳躍する。

「お願い、私を殺して。
女王は、あの子を殺すように。
あなたは生かすように、命じてる」

オセリファに牙が届く前に、巨狼の身体に周囲の数倍とも思われる重力が襲いかかる。

巨狼が異変を悟った瞬間、その巨体は地面にめり込んだ。

巨狼の膂力と重力がせめぎ合い、全身を震わせて立ち上がる。だが、立っているのが精一杯で、次の行動に移る際に少しでも力が抜ければ、また地面にめり込まされてしまう。それでも巨狼は一歩ず

つ、歩幅は僅かでしかないが、だが着実にオセリファに這い寄っている。
その姿にオセリファは、また悲しそうに表情を歪めた。

巨狼を援護するためにバードンが飛び出すが、巨狼の念話がそれを遮る。

――ダメっ！　来ちゃダメっ！　来るなぁっ！
巨狼だからこそ、生きていられる。
ルティを傷付けようとした者に対する狂気を、重力によるダメージが正気に戻し、辺りの状況を巨狼は把握していた。

鍛えているとはいえ、バードンは人間だ。
この重力結界に飛び込んで、無事に済むとは思えない。巨狼の叫びが今までにないほど切羽詰まっていたため、結界の寸前でバードンは蹈鞴を踏んで立ち止まろうとするが、その勢いは殺し切れていない。少女が思わず目を瞑った瞬間、バードンの腹に蛇の尾が巻き付き、力一杯結界から引き剥がすように、その身体を引き寄せた。
肩で息をつくティアの前にバードンの身体が落ち、なんとか結界に突っ込むことを回避した。

――なぜ、あなたは、こんなことを!?
巨狼の念話がオセリファに問い掛ける。

「お願いだから、殺して。
私には、もうどうすることもできない。
私の身体は女王に操られる傀儡子でしかない。
私には、女王の力に抗う力はない。

私が壊れるしか、止めることはできないの」
オセリファの声は、泣いているようにしか聞こえない。
だが、不死の身体から、涙が落ちることはなかった。

――どうすれば呪縛から逃れることができるの？
必死に這い進みながら、巨狼が問う。

「私が壊れるしか、その方法はない。
だから、私をもう一度殺して。
不死の身体も、破壊すれば、破壊して水に捨てれば再生できない。
お願い、私を、私の身体を、破壊して」
血を吐くようにオセリファが叫ぶ。

エンドラーズはタイミングを計っていた。
おそらく、重力結界は悪霊を力の源にしている。聖水を使えば穴を開けることはできると、エンドラーズは見ていた。だが、先兵たるオセリファですらこの手強さだ。聖水のストックは無限ではない。ここですべてを使い切ってしまっては、あとに不安が残る。最も効果的な部分を探し、エンドラーズは聖水を叩き付けるつもりでいた。
その側に、ティアが寄り添った。

「エンドラーズ様、あたしの尻尾に聖水を。
突入します。
尻尾であれば、万が一潰れても命に別状はありません。
それで結界に穴が開けば、オセリファさんに……
バードン、もしもの時はお願いね。
尻尾が腐り始めたら、斬り落として」
そこまで言って、ティアはすべての状態異常や魔法攻撃、物理攻撃から身を守る、地の白呪文レベル４『全壁』を詠唱し始めた。

『全壁』が重力攻撃や腐食の呪文に対して効力を発揮するか、やってみなければ判らない。

万が一にも効果がなければ、ティアの尾は重力に潰され、腐敗させられてしまう。そのときは、躊躇わずに斬り落すつもりでいるが、間に合わなければバードンにやってもらうしかない。身体の一部を失うことは怖いが、命をもう一度落すことは御免だった。だが、尾を斬り落せなど、ルティには頼めない。

それはバードンにやって欲しかった。

バードンとエンドラーズが頷く。

エンドラーズがティアの尾に聖水を振りかけ、さらに『加速』と『全壁』を重ね掛けする。バードンは純銀の剣に聖水を振りかけ、赤錆色の光弾に備える。状況を把握したルティは、ティアの援護のため『快癒』の詠唱を始めた。

その間も、巨狼は這い蹲りながらも一歩ずつ、オセリファに向かって着実に進んでいる。

「早く、私を、破壊して……」

オセリファの目が閉じられた。

ティアが重力結界の寸前まで這い寄り、尻尾を振り上げ結界に叩き付けた。

聖水の効力が重力レンズをチーズのように切り裂き結界を開啓するが、水に刃を通したようにすぐに結界は閉じられる。地面で振り下ろした尾は重力に押えられ、ティアはその場に縛り付けられたようになってしまった。

「尻尾――を、切って、逃――げて！」

目を開いたオセリファが、ティアに向かって絶叫する。

ほぼ同時に繰り出された腐食の呪文がティアに襲い掛かり、一発は短刀が受け止めたが、もう一発が右腕に命中した。

『全壁』が効を奏し、腐食の呪文が無効化される。

だが、『全壁』の効果は永遠ではない。時間の経過と防いだ呪文の強度によって、その効力は徐々に失われていく。立て続けに炸裂する腐食の呪文を、尾を押さえられ身動きの取れないティアは避けることができず、『全壁』の効力はやがて限界に達した。

正面から襲い来る赤錆色の光弾を、ティアは右腕をかざしてかろうじて直撃だけは避けた。

痛みとは違う衝撃が右腕に走り、感覚が消え失せ、みるみるうちに腐臭を放ち始める。

恐怖に顔を歪め、ティアは『全解』の詠唱を開始するが、集中できずに効力が発現しない。エンドラーズとルティが慌てて『全解』を詠唱するが、腐食の進行は早く、呪文が発現するまでに心臓まで達してしまいそうだった。エンドラーズは『全解』を諦め、そのまま『蘇生』の呪文に切り替える。万が一、ティアが命を落としたときに備えての行動だ。

ルティも『全解』を諦め、別の呪文の詠唱を始めていた。

バードンがティアに駆け寄り、純銀の剣を抜き放つ。

右腕を斬り落し、次いで重力結界に捕らわれた尻尾を、躊躇うことなく切断した。次いで尻尾を押えている辺りに、懐から取り出した聖水を撒き散らす。エンドラーズも聖水を結界に叩き付けるように撒き、緩んだ隙間から切断された尻尾を引き摺りだした。

ルティが唱えなおした『快癒』で尻尾を元通りに付け直し、エンドラーズが改めて『全解』で斬り落とされた右腕の腐食を食い止める。さらにルティの『快癒』が右腕に掛けられ腐食が回復され、エンドラーズが『快癒』を行使してティアの肩に右腕を付け直した。

瞬く間に、ティアは重力結界から解放され、負ったはずのダメージはほとんど残らない状態になっていた。

「ありがとう、みんな。
ごめんね、手間掛けさせちゃって」
オセリファから距離を取り、ティアの言葉に四人は頷く。

「あなたたち、なんてことを」
オセリファは、驚愕の表情で固まっていた。

まさか本当に尻尾を切断するとも、腐食の呪文が浸透した右腕を斬り落すとも思わなかった。
オセリファが受けていた命令は、ルティの殺害とアービィの確保だ。邪魔する者は排除しろとも、命令されている。自らが殺されることを願いつつ、オセリファの持てる力の全てがルティ殺害ただ一点に注がれていた。もちろん、ティアやバードン、エンドラーズが邪魔立てするなら、その殺害も躊いはしない。
アービィを生かして連れてこいという命令さえなければ、それほど困難とは思っていなかった。

もちろん、この時点でオセリファ個人に、殺意など欠片もない。
殺されることを願い、ルティたちを傷つけずに済むことを祈りながら、転移させられていた。自身の意識とは裏腹に、五人を追いつめてしまっているが、オセリファは形成逆転を心から願っていた。
だが、邪神の力は強大であり、五人が全力で懸かってようやく均衡を保てる程度だった。
どうすることもできない焦燥感に、オセリファは身を焼かれるような感覚に囚われていた。

ティアの尾を引き抜いたとき、一瞬できた隙に重力結界が弛んでいた。
オセリファですら気付かなかった僅かな緩みは、全身を押さえつけられていただけに、巨狼には伝わっていた。
全身の力を四肢に込め、巨狼が跳躍した。

――オセリファさん、ごめんっ！

巨狼の念話が全員の脳裏に響き、鋭い牙がオセリファの脳天に振り下ろされた。ように見えた。

結界は弛んだとはいえ、消えたわけではなかった。
跳躍の勢いはそのままに、巨狼の身体が再び大地に叩き付けられる。不自然な姿勢で叩き付けられた巨狼が、細かく痙攣を始めた。
助けたくとも誰も飛び込めない重力結界の中、オセリファの足元に巨狼が這い蹲らされている。
ルティの悲鳴が、大気を裂いた。

「私には、何もできない。
あなたたちを傷つけたくないのにっ！」
巨狼を見下ろすオセリファの手が振り上げられ、手刀の形に振り下ろされようとしたとき、その額に亀裂が走った。

「くっ！　はっ！
ありがとう、でも、まだ…
私は壊れない…」

見えない何かに押さえつけられ、身動きの適わなかった巨狼の動きが変化した。
それまでは重力に坑がってなんとか息を吸い込み、次いで抑えつけられるまま一気に吐き出していた。それが意識を失い呼吸すら止

められそうだったが、荒い呼吸ではあるものの、押さえつけられた動きではなくなっている。

「重力結界が消えた？」

エンドラーズがいち早く気付き、巨狼に向かって『快癒』を放つ。

いったん距離を取ったオセリファが態勢を立て直し、一気にルティとの距離を詰めた。

丸腰のルティは、オセリファが繰り出す手刀を、ただ避けるしかできない。もともと戦いの中に育った北の民と、習い覚えた剣技しか持たないルティでは、体術の勝負になってしまってはどちらが有利か考えるまでもない。そこへ持ってきて、オセリファには腐食の呪文がある。殴る蹴るの単純な暴力の手段を持たず、攻撃魔法も拾得していないルティは、ひたすらオセリファの攻撃から逃げ回るしかできなかった。

バードンとエンドラーズが牽制に入るが、腐食の呪文が襲いかかり、あと一歩が踏み込めない。

「何やってんのよっ！

アービィ、いつまで気絶してるつもりっ！？」

聞き覚えのある声が響き、ルティの側に剣が突き立った。

咄嗟に剣を引き抜き、ルティはオセリファに牽制の斬撃を繰り出す。

跳びすさって斬撃をかわしたオセリファが腐食の呪文を詠唱し、赤錆色の光弾をルティに向かって立て続けに放つ。

握りしめた剣の柄から活力が流れ込み、ルティは光弾に斬撃を放った。

さっきはまとわりついた光弾は、剣の一撃を受けると爆散し、赤錆色の霧を残して消え失せる。それは、まるで柔らかいチーズを切るかのような感覚だった。次々襲い来る光弾を、ルティは斬り裂き続けた。

呆気に取られるバードンとエンドラーズの側に、一本ずつ剣が突き立った。

「これはっ！

アマニュークの英雄が揃いましたなっ！」

エンドラーズが歓喜の声を上げる。

「どうして、あなたがここに！？」

「そんなことはどうでもいいからっ！」

二人の言葉を遮り、メディがルティとオセリファの間に割って入る。

「あなたの気持ちは、良く解るの。

でも、でもね……私は……私は……」

メディは大上段に剣を振りかざした。

「ありがとう……

ごめんなさい……

どんなに謝っても、あなたには赦してもらえないことは、解ってるの。

早――く、――わ――た――し――を――」

その言葉を掻き消すように、オセリファの意に反して腐食の呪文は詠唱され、立て続けにメディに襲いかかる。

反射的にルティが一歩踏み込み、光弾を薙ぎ払い、一瞬の躊躇いの後、オセリファの左腕を切り落とした。
だが、その一瞬の隙に放たれた光弾が、自身のしてしまったことに呆然とするルティの脇をすり抜け、メディに向かって殺到する。

「大丈夫。
私に、あなたの呪文は、通じない。
全ての精霊の、祝福を受けたのよ。
安心して」
腐食の呪文は、メディの身体に炸裂するが、赤錆色の霧を散らすように無効化されていく。
メディの言葉にオセリファの表情が、まるで母の胸に抱かれる幼子のように和らいだ。

「メディっ！　ダメっ！」
ルティの叫びと、メディの斬撃が重なった。
オセリファの身体が両断され、さらさらと灰になって崩れていく。
オセリファの精神力のなせる技か、一気に灰化せず足元から崩れていく。

「オセリファさんっ！」
ルティの悲鳴に、宥めるようにオセリファは微笑んだ。
そして、ルティを抱きしめるように残る右腕を差し出した。

「いいの。
ごめ……んなさい。
これでい……いの。　あ……なたの……手にか……かるな……ら……それで……い……い……」
ルティとメディに言葉を投げかけ、オセリファの身体は崩れていく。

ルティの顔にオセリファの手が触れた瞬間、その身体は一気に灰化し、ルティの頬を撫でるようにして崩れ去った。

――あ……たた……かい……

一陣の風がその灰を吹き散らしたとき、オセリファの残留思念が呟き、消えていった。

「あ……

あ……」

呆然と突っ立ったままオセリファの灰を見送ったルティが、その場に泣き崩れた。

「ごめんね、ルティ。

でも、私は許せないの。

私の一族を殺して、私を南大陸に売り飛ばした連中は、ね」

泣き崩れるルティの肩に手を置き、メディが言った。

「あたしたちが、みんなが、どんな想いで戦ってるとっ！」

その言葉に反応したルティが跳ね起き、メディの頬を叩こうと手を振り上げる。

だが、その手は振り抜かれることなく、メディの肩を掻き抱いた。

「ありがとう、メディ。

ありがとう。

あ……りがと……う、メディ……」

顔中涙でぐちゃぐちゃにしたルティが、メディにしがみついた。

嘘だと判っている。

確かにグレシオフィによってメディの一族は滅ぼされ、メディ本

人は南大陸に売り飛ばされていた。しかし、オセリファは、その一件には関わっていない。偶々か、それともグレシオフィの配慮なのか、オセリファは殲滅戦に参加することはあっても、人身売買に絡むことはなかった。もっとも、大きな括りの中では直接手を下すか、間接的に関わるかだけの差であり、南へ侵攻した最北の民である以上、メディにとっては両親や一族郎党の仇には変わりない。

だが、敢えてそのことをメディが持ち出した理由を、ルティは理解した。

融和を第一義に掲げる南北連合は、過去の怨みを水に流したい。直接の被害が少ない南大陸は、最北の民に対して怨みもほとんどないために残虐行為を行うことはなかった。しかし、北の民にはそれが不満の種でもあった。

指導層に属する者たちは、ある程度清濁併せ呑む器量は持っている。

だが、庶民はそこまでの器量はない。

もちろん、皆無とまではいかないが、極少数であり、ほとんどの者は最北の民に対して、良い感情は抱いていない。ちょうどラシアスの民が北の民に抱く感情と同じことだ。そして、彼らの中には身内を傷つけられたり、殺された者も多くいる。そういった者にとって、崇高な理念など邪魔なものでしかない。

メディは、敢えてそうした感情を持ち出した。

過去を水に流す。

アービィが生きていた、現代日本にもある思想だ。過去の過ちをいつまでも問わないという、日本人の美徳でもある。だが、怨みが消えるわけでもなく、やられ損でしかない。だが、この言葉は被害を受けた者から言い出して、初めて成立するものだ。加害の側から

言い出しても、被害を受けた側にすれば怨みが消えるわけでもなく、やられ損でしかない。何らかの補償があって然るべきことだ。
最北の民が受け続けた千年を超える差別と蔑視、様々な不利益と抑圧は、そう簡単に水に流せるものではなく、北の民が受け続けた最北の民による略奪や暴虐も、赦すの一言で片の付くような軽いことではなかった。
どこかで誰かが、その怒りと怨みを一身に背負って死ななければ、いつまでも新たな戦乱の火種がくすぶり続けるだけだ。
メディの剣は、負の螺旋を断ち切るための一閃だった。

「アービィはいつまで寝てんのよっ！」
地面に長々と伸びている巨狼に歩み寄ったメディが、『快癒』を掛けつつ脇腹にけりを一発入れた。

――うぅ……、ごめん……、まだ頭がぐらぐらする……
よろよろと立ち上がった巨狼が頭を振った。

「もう、頭大丈夫？」
少しだけ心配げにメディが聞いた。

――何、その軽くむかっとする心配の仕方……
苦笑いを含んだような巨狼の念話に、ようやく皆の顔に明るさが戻った。

「遅くなっちゃって、ごめんね」
メディが軽く頭を下げた。

「いや、僕の方こそ、無理言っちゃって。

メディだって生活があるんだし。
だけど、助かったよ、ありがとう」
今度は獣化を解いたアービィが頭を下げた。

「ちょっと、どういうことよ？」
ルティとティアが異口同音に聞く。

「あのね、こっちに戻るときに、メディに手紙出しておいたんだ。
グロッソさんに、僕たち三人の剣を新しく鍛えてもらって、全精霊の祝福を受けてきて欲しいって。
不安だったんだよ、風と火の祝福だけじゃね」
グラザナイを発つ際に、アービィは三通の手紙を書いていた。

一通目の手紙は、メディに宛てた新しい剣をグロッソに鍛えてもらい、それに対する全精霊の祝福法儀式を施すことを依頼していた。
二通目の手紙は、当時はベルテロイ駐在武官であったパシュースインダミト第三王子に宛てた、メディの関所通過に係る便宜を依頼するものだ。
三通目の手紙は、これも当時はベルテロイ駐在武官であったヘテランテラシアス第三王子に宛てた、ウジェチ・スグタ要塞通過の便宜を依頼するものだった

「とにかくね、スライムがまた増えちゃって、砂鉄集めに時間が掛かったのと、風の神殿で祝福法儀式に四十日待ちになっちゃってさあ」
そう言ってメディは、エンドラーズを横目で冷ややかに睨んだ。

「申し訳け、ございませんっ！」
まるで悪びれるふうもなく、エンドラーズが謝った。

「絶対、悪いなんて思ってませんね、エンドラーズ様」
今さら、といった呆れ顔で、メディは謝罪を受け流す。

「で、パシュース殿下のおかげで国境はほぼ無審査だったのと、ヘテランテラ殿下のご厚意で近衛師団から一個中隊も護衛付けてくれて。
みんな、アービィたちによろしくって。
知り合いだったのね。
あとね、レヴァイストル伯爵とセラス様、から防具もいただいたの。
アービィたちのサイズは判ってたんだけど、エンドラーズ様とバードンさんが一緒って分かったのはかなり後だったの。
お二人の分は汎用の物なんですが、そこはご勘弁下さいね。でも、ヘテランテラは、アービィからの手紙を受け取るや否や、メディの便宜を諮るため行動を起こしていた。
ウジェチ・スグタ要塞の通過については問題ないが、三人分の剣は女一人で運ぶには無理がある。女の一人旅も、安全とは言い難い。ましてやラシアスを北の民の女一人で通過するなど、襲ってくれと言うようなものだ。

そこでアービィたちが北の大地に渡るため、ビースマックからラシアスを抜ける際、ウェンディロフとのトラブルを避けるべく護衛にと付けた部隊がメディの護衛として就くことになった。
アービィたちとウジェチ・スグタ要塞で別れた後は、それぞれ原隊に復帰していたが、今回の任務のため再度編成されたのだった。
近衛師団が長期間国を空けるわけにもいかず、ウジェチ・スグタ要塞までの随行だったが、それでもメディ一人で四国家を回るよりは遙かに楽だ。
また、護衛部隊を見たグロッソが剣を余計に、レヴァイストル伯

爵が防具を持たせてくれたことで、バードンとエンドラーズの分まで運ぶことができたのだった。

そして、ウジェチ・スグタ要塞以北は、別の騎馬小隊がメディの護衛に就いた。

すっかり石畳の舗装が完成した街道を、山岳地帯から最北の地まで一気に駆け抜けたのだった。もちろん、ウジェチ・スグタ要塞に居を移した南北連合の五人の名で、道中の便宜は完全に諮られていた。馬の交換や泊地の手配、細かいところでは携行食や日用品の購入資金まで、その配慮は行き届いていた。

馬車が曳く荷車には、厳重に梱包された酒まで入れられているというおまけまで付いている。

「こうなることを予期してたのか？」

防具の装着具合を確かめながら、バードンがアービィに訊ねた。

「ええ、なんとなく、なんですけどね」　自身の防具を付けながら、アービィが答える。

「で、なんでメディまで防具を持ってるの？」

訝しげにティアが聞いた。

「帰れなんて言わないわよね、ティア。

私にだって、あなたたちの結末を見届ける権利はあるはずよ」

頬を膨らませてメディが言い返す。

「お家のことはいいの？

というか、お父さんとお母さんが心配するんじゃない？」

それが心配なの、という問い掛けを視線に込めてルティが言う。

「友達が困ってるときに助けに行かず、何が友かって、お父さんもお母さんも言ってくれたわ。
それよりルティ、胸当ての大きさは大丈夫？
セラス様が、ちょっと大きいかなって」
ご心配には及びませんことよ、と視線に乗せてメディが答える。

「ええ、ぴったり。
大丈夫よ」
あのガキ、戻ったら絶対張り倒してやると南の空を睨みつけるルティに、周囲の誰もが恐怖した。

「それにしても、凄い変わりようね、北の大地は。
パーカホからターバまでの街道なんか、ラシアスの駅馬車路線に負けてないわ。
パーカホの集落も、ちょっとした町よね」
半分呆れたようにメディが言った。

パーカホの発展振りは、南大陸の比ではなかった。
安全が確保された拠点が他に少ないとはいえ、山岳地帯を降りて最も近い大規模集落という点が有利に働いていた。続々と運び込まれる南大陸の物資や、次々にやってくる人々が、一大経済圏を築きあげている。物流の活性化のために関税を低く抑えていることも、活況を呈する大きな要因だ。
まだまだインフラ整備が必要だが、南大陸の中規模な町と比べてなんら遜色はない。

「ランケオラータ様の経営がお上手だからだよね。
さすが、王宮でお勤めになられていただけのことはあるよ。
レイもいるしね」

満足げに防具を外しながら、アービィが答える。

「最初から武力で侵略なんかしないで、こうしていればよかったのに」

ルティが溜息混じりに呟く。

「無理、だったんでしょうね。

色んなことが絡み合って、今の状況があるのよ、きっと。

最北の民が南下して、ちょうどその頃にアーガス様が突出した。

そのせいで、そのおかげで、ランケオラータ様が北の大地で捕虜になって。

たまたま、あなたたちが旅に出ていた。

ランケオラータ様の言うことをルム様が取り上げなければ、きっとそのまま終わっていたわ。

ルム様の器量があってこそだし、ランケオラータ様の知恵も、ね。

もし、アービィがレヴァイストル伯爵と知り合っていなければ、ランケオラータ様もルム様も、あのキマイラの襲撃でお亡くなりになっていたかもしれないし」

結局は後知恵だ。

様々なことが絡み合い、現在がある。何か一つが欠けただけでも、今はないのかもしれない。例には挙げなかったが、リジェストで足止めを食った際に、ティアが暴走していたらどうなったか。もっと良い結果になっていたかもしれないし、今ここにいる誰もが生きてはいなかったかもしれない。結局、今がすべてだ。

メディはそう考えていた。

「最北の地も、そうなるの？」

それまで一言も話さなかった少女が、口を開いた。

「そうよ。

後、三、四年もすれば、あなたが大人になる頃には、必ず、ね。
あなたも、一度南大陸へ来ない？」
メディの言葉に、少女は小さく頷いた。

「一人でも多い方が、道行きは楽しゅうございましょう。
ピラムの皆様との会合まで、後三日。
さあ、急ぎましょう」
エンドラーズはそう言って、新しい武具に身を固めたまま歩き始めた。

慌てたアービィたちが後に続き、メディに随行してきた護衛小隊がその後を追う。
冬の太陽は、一行の影を長く伸ばしていた。

「一体、何が起きたというのっ！？」
魔宮の奥でニムファの叫びが上がった。
オセリファが灰と化したと同時に、始祖が滅すればその眷属も存在し得ないという、血の盟約が発動した。
彼女を始祖として転生していた不死者の一群が、音もなく灰となって崩れ去った。

「オセリファ様が、消滅なされたということにございます。
始祖が滅すれば、眷属もまた滅します。
我らも、グレシオフィ様が滅すれば、共に」
僅かに残った吸血不死者が、血の盟約を説明した。

既にグレシオフィに意識はなく、邪神の力を現世に発現させる依り代とされているが、まだ滅したわけではない。
しかし、グレシオフィが滅すれば、残った不死者は全て滅する。

それはニムファも例外ではない。もし、神の力を得て下剋上に成功した際に、怒りに任せてグレシオフィを亡き者にしていたら自らも消滅していたのだ。

その事実に気付き、ニムファは愕然とした。

「どこまで役立たずなの、あの女は。

いいわ、勇者様を誑かし、私から奪ったあの小娘は、私が殺してあげる。

目の前であの小娘を殺せば、勇者様も目が覚めるはず。

そうすれば、世界は私たちの物」

狼狽を気取られないように、僅かに残った不死者に、ニムファは新たな命令を下す。

「城門に全てのキマイラを。

出来損ないの合成魔獣は、集落南の丘に展開させなさい。

邪魔者は排除しなさい。

勇者様とあの小娘だけ、ここへ」

闇の中で、先王の隣で見せていた微笑みとは、対極の笑みをニムファは浮かべていた。

邪神の力を得て太陽を恐れる必要のなくなったニムファはともかく、他の不死者にとって陽の光は大敵のままだ。

キマイラを門に配置しても、僅かな生者では太陽光の下で制御しきれるものではない。ニムファが出来損ないと蔑むゲイズハウンドとスライムの核を合わせた合成魔獣も、知性がない以上制御する者が必要だが、生者を魔宮の防備から外せない状況で太陽光の下に放てば二度と戻せなくなる。それを解っているはずなのにそのような命令を下した理由は、もし合成魔獣が逃げ散ったとしても、その存在自体が南北連合にとって脅威になりうるからだ。

「どれほど穢らわしい最北の蛮族を集めても、合成魔獣が蹴散らしてあげる。
ここにくるのは、勇者様、それとあの小娘だけ。
あとは、喰らい尽くされてしまえばいいわ」
既に意見を具申する者はいない。
不死者は、神の力による忠誠を強制させられていた。盲従と信頼を、ニムファは大きく考え違いをしている。

そして、グレシオフィに付き従ってきた生者は、ほとんど残っていない。
ニムファが最北の蛮族を乗っ取って以来、兵力不足を補うために片っ端から不死者に転生させてしまっていた。その理不尽さから戦線を離脱し、南北連合側に寝返った集落も一つや二つではなかった。
今現在、ニムファの下に残っている生者は、過去の暴虐から南北連合に投降しても安全の保障がないと思いこんでいる者たちだけだ。
毒を喰らわば皿までに類する言葉はこの世界にもあり、彼らの心境は当にそれだった。

「状況は変わった。
南北連合は、全力を挙げてアービィ殿を援護する。
ラーニャに対する補給、最北の地において、不死者に抗する人々への補給を、何より優先する。
両大陸の興廃、この一戦にあり。
各員、一層奮励努力せよ!」
ターバの連合軍操錬所に、総司令官の野太い声が響く。

「諸君、長い戦いも先が見えてきた。
最北の蛮族は、瓦解寸前と見て良い。
最北の民は敵ではない。

滅ぼすべき対象でもない。
討つべきは、人の死を弄び、己が欲望を満たさんとする魔王ただ一人。
アービィたちの障害となるものを排除せよ。
私は各員がその義務を全うすることを確信する！」
ランケオラータの見送りの言葉に、兵たちの喚声があがる。

メディィが一個小隊を伴ってターバを通ってから、七日が過ぎていた。
エンドラーズとターバに残った神官との交信で、アービィたちの意図は知らされている。そして最北の民の窮状も、同時に知らされていた。多数の人々が動くのであれば、大量の物資が必要だ。当面の必要量は賄えているのだろうが、戦闘行動が発生すれば特に食料の需要は飛躍的に増大する。戦闘前に節約などしては、士気に影響しかねない。今からでは戦闘までには新しい物資は間に合わないが、その後の心配をしなくて済むようにするだけでも充分だ。シャーラとラーニャに待機している神官を通して、物資の移送は既に始まっていた。
後は、不足のないように後詰めをすれば良い。

北の大地の東西に広がる河川流域を、期せずして手中に収めたことが効いてくる。　河川を利用できれば、陸路に比べ圧倒的な輸送量と安全性を確保できる。連合軍の攻勢臨界点は、陸路による補給のみであればシャーラまでだが、河川を利用できればラーニャどころか最果ての地まで伸ばすことも不可能ではない。兵站が効率化されれば、部隊の展開や撤収、民間人の避難誘導までが容易となる。
戦の後始末や最北の地の復興のためにも、河川流域は重要だった。

「それでは、我々もシャーラへ移動します。

最北の民が安心して冬越しできるよう、全力を尽くします。
しかし、アービィ殿がいらっしゃらなければ、この争乱はどうなっていたことやら」
軍の移動が開始され、やがて誰もいなくなった操錬場に残った総司令官が、ランケオラータに話しかけた。

「くれぐれも、よろしく頼む。
アービィがいなければ、今頃は南大陸が不死者で溢れかえっていたかもしれん」
ランケオラータは軽く言ったが、戦慄する内容だ。

「思えば、多くの人々が不死者へと転生させられ、灰と化しています。
このような争乱は、二度と起こしてはなりません。
我々が、軍人が、その活躍を期待されるような世の中は、もうたくさんであります。
ルム様が出向なされた南北連合が正常に機能すれば、この世界ももっと良くなるのでしょうか」
総司令官が胸のうちを明かす。

「私は、決して争乱を肯定しない。
しないが、もし、この争乱が起きなければ、まだ千年は北の民は虐げられたままだったろう。
こうして北の民と肩を並べる日が来るとは、誰も思いはしなかった。
両大陸は、これから飛躍的に発展する。
死んでいった者たちは、その礎となるために死んだのか。
彼らの死を無駄にしてはならない。
それは、残された我々の責務だ」
ランケオラータは、人々の死を無駄にしたくなかった。

戦争を肯定するのは容易い。
古くから伝わる英雄譚は、戦争の物語だ。民族の興亡史も、戦争の物語だ。人々は巨大な死に心を躍らせ、心を痛める。もちろん、敵役は小ずるく卑怯に汚く描かれ、その滅びに人はカタルシスを感じる。しかし、悲惨な戦争を体験した人々は、戦という言葉にすら嫌悪感を抱く。平和であることが最も重要なことは当然だが、平和を望むと唱えていれば平和になると盲信する者は、容易く悪意を持つ侵略者に利用されるだけの存在でしかない。
否定するのも、また容易いことだ。
だが、否定するだけでは、戦争はなくならない。

「アービィ殿は、何故この世界に、いや、何故アービィ殿がこの世界に喚ばれたのでしょうか。
聞くところによれば、召喚を妨害され人狼に魂を封じ込められたとか。
アービィ殿のご活躍は、人狼の力に因るところが大に思えます。もし、妨害が入らず、ドーンレッド様による召喚が成功していたら、今現在はあったのでしょうか。
もし、アービィ殿がルティ殿と出会わず、人狼として覚醒していたら、どうなってしまったのでしょうか」
総司令官が根源的な疑問を口にする。

「全ては偶然であり、必然だったのか。
アービィの異世界人としての魂が人狼に封じ込められたことも、ルティと出会ったことも。
親に愛され慈しまれて育てられても、歪む者は歪む。
そうならなかったのは、アービィの元々持っていた人格に因るものだ。

封じ込めた器としての人狼が、まだ子供であったことと、素直な性格だったのかもしれない。
素直であればあるほど、周囲の影響を受けやすい。
本来、人狼とはそういった性質の生き物なのかも知れんな
おそらく、召喚呪法は誰彼構わず呼び寄せてしまうのだろうが、その場にアービィがいたことは、世界の意志としか考えられん」
ランケオラータは、自身の推測が正しければ、人狼に新しい歴史が始まると考えていた。
そして、アービィとの交流から、推測は確信に変わりつつあった。

「両大陸を人狼が一つに結びつける。
新しい歴史が始まります。
それに立ち会えることを、その手助けができることを、私は誇りに思います」
そう言って総司令官は、送り出した軍を掌握するために操錬場を後にした。

「一人の少女が世界を救う。
もし出会えるなら、八歳のルティに礼を言いたい気分だ。
君は十二年後に世界を救った、と」
ランケオラータは総司令官の背中を見送りつつ、そう一人ごちた。

「あの丘がそうじゃない？」
ルティが小高い丘の上にある杉を指した。

「間違いないかと。
ですが、素直には行かせてもらえないようでございます」
バードンが早くも剣を抜き放ち、闘気を全身から発散させる。
その視線の先にはゲイズハウンドが群れていた。

おそらく何らかの合成処理をされているのであろうゲイズハウンドの群れは、辛うじて統率が取れている。
そのために駆り出されたと思われる、生者の姿も散見された。だが、群れに対して生者の人数が少なすぎる。生者を狩れば制御を失ったゲイズハウンドが、野に放たれてしまう。山野に紛れ込まれては、誰に対しても脅威になりかねない。生者を拘束し、ゲイズハウンドは逃さず狩り尽くす。
困難な戦闘になりそうだった。

「ルティとティアとメディは、この子から離れないで。
僕とバードンさん、エンドラーズ様で突入します。
小隊の皆さんは、生者の確保をお願いします」
アービィが役割を割り振った。

「任せて。
何があっても、この子にはゲイズハウンドなんか近寄らせないから」
ティアはラミアのティアラを髪に飾ったままだ。
全精霊神殿の祝福により、いつでも獣化できるようになって以来、ティアラは髪から外されることはほとんどなくなっていた。

「ティア、ちょっと私にも貸してくれないかな。
最近、どこにも売りに出てないのよ」
戦闘前の緊迫した空気にそぐわない口調で、メディが言った。

「いいけど。
いいの？
あたしは、あの子たちに会えるのは嬉しいけど」

ティアが不安げに言う。
メディが呪法を受けた姿を露わにする気でいることに、一抹の不安を感じたのだった。

自身とアービィは、精霊神殿の祝福がある。
だが、メディは正体を隠したままだ。

「いいの。
役に立つと思うよ」
あっさりとメディは言った。
まるで町の雑貨屋で商品を選ぶかのような物言いだった。

「ご心配には及びません、ティア殿。
私を誰とお心得でございましょうや。
メディ殿がどのようなお姿であれ、人物に些かも関係するものではございません。
例え、その髪が蛇であろうと」
そう言ってエンドラーズは威厳に溢れた表情で、その場にいる一同を見やった。

「え……？」
「エンドラーズ様、ご存じだったんですか？」
メディが固まり、ティアが聞き返す。

「ですから、私を誰と。
皆様がどういう方々か、クシュナックでお目に掛かった際にすべて」
ニヤリと笑って、エンドラーズは剣を抜き放つ。

「じゃあ、もう気にすることはないわ。

あたしも使うから、すぐ返してよ」
ティアはラミアのティアラを髪から外し、メディに手渡す。

「兵士の皆々様、よくお聞きいただきましょう。
メディ殿のお姿がいかようなものであろうと、人物が変わるわけではございません。
ましてやメディ殿は、邪法の被害者。
被害者が迫害されるなど、あってはならない非道にございます。
風の精霊神殿は、メディ殿を祝福致します」
エンドラーズが高らかに宣言する。

メディの人権が保障された瞬間だった。
これまでラミアのティアラの力で、邪法を受けた姿を隠していた。
もしも、その事実が知れ渡れば、その姿や見たものを石に変える力を恐れられ、迫害を受けることは間違いない。人間の姿を取り戻した現在は、石に変える力も封印されてはいるが、それでもメディの粗探しをしようとする者が皆無ではない以上、隠し通さなければならないことだった。
しかし、精霊神殿の祝福は、その危険性をすべて封じた。
祝福を受けた者を迫害するなど、全精霊神殿と信仰を持つものすべてを敵に回すと同義だからだ。

「ありがとうございます、エンドラーズ様。
もう、父と母に心配を掛けることもないんですね」
涙を堪えきれないメディがティアラを髪に飾った。

「礼には及びません。
当然のことでございます。
それより、今は目の前の危険を排除致しましょう」
普段の破天荒さの微塵も感じさせず、慈愛に溢れたエンドラーズ

の眼差しがメディに注がれた。

「見直しちゃった、さすが最高神祇官様ね。
アービィ、ここは任せて、思いっきり暴れちゃいなさいよ」
涙を拭いながら、鼻声になったルティが剣を構え、アービィに発破を掛けた。

「うん。
征ってくるよ、思いっきり」
その言葉を残し、アービィが獣化する。
次の瞬間、巨狼が地を翔け、三十頭ほどのゲイズハウンドの群れに突っ込んでいった。

「あの莫迦、また服を無駄にして……」
ルティが巨狼に向かって罵声を放つ。

「怖がらないでね。
見たものすべてを、何から何まで石にしちゃうわけじゃないから。
でも、あなたを傷付けようとする者は、容赦しないから」
邪法を受けた姿、髪を蛇に変えたメディが少女に寄り添った。
メディの意志が伝わったのか、蛇たちも少女に対して威嚇の姿勢は取っていない。

「神様、なの？」
メディとティアを見て、少女がぽつりと呟く。
南の地に対する憧れの裏返しか、北の民には北の大地には生息しない蛇を神と崇める部族が多い。少女の部族もその一つだった。

「残念ながら、違うわ

あたしは、ただの魔獣。
メディは、あなたと同じ北の民よ」
獣化したティアが少女に寄り添う。

「どうして、あなたたちは？」
考えられないといった表情で、少女は首を振る。

悪魔の化身と恐れられる人狼が、人と並び立っているだけでも信じ難いことだ。
それぱかりではなく、ラミアと化け物にされた北の民だ。少女の常識では、ルティのような南大陸の住人が、行動を共にする相手では決してない。初対面の時点では、最愛の人を失った悲しみに沈んでいて、そのようなことを考える余裕もなかったが、徐々に落ち着くにつれ少女は混乱するばかりだった。

巨狼がゲイズハウンドの群れに突入し、手近にいた不運な一頭を肩からのタックルで弾き飛ばしたあと、バードンとエンドラーズはやや遅れて戦場に駆け込んだ。
二人の参戦とほぼ同時に、輸送任務に鬱憤を溜めていた小隊の将兵は、丘の頂付近に布陣する最北の生者を包囲しつつある。ゲイズハウンドを制御するためその場を離れるわけにはいかない生者たちは、なす術もなく包囲されるに任せるしかなかった。殺害を目的としてはいないが、三十人対十人では戦いの行方は考えるまでもない。
やがて、立っている金髪の男たちは皆無となり、ゲイズハウンドの動きに異変が起きた。

それまでゲイズハウンドの群れは統率の取れた動きで、巨狼に攻撃を集中していた。
本能が逃げろというほどの人狼に対する恐怖と、合成されたとき

に植えつけられた制御者への絶対服従。この二つが相克し、絶望の感情を振り撒きながら、ゲイズハウンドは戦っている。

巨狼の牙が喉を噛み裂き、バードンとエンドラーズの剣が四肢を、身体を、胴を切り裂く。

だが、固い甲羅のような皮膚の手応えの後、ゼラチン状の筋肉を何の抵抗もなく斬り裂くが、刃が通り抜けた後は元通りに癒着してしまう。それは巨狼の牙であっても同様だ。アービィは、どこかでこの感覚に出会っていたと、必死に記憶をまさぐりながら、ゲイズハウンドを弾き飛ばし、噛み伏せていた。

「なんだ、この手応えはっ！
斬っても、またくっつきやがるっ！」
苛立つバードンが罵声を放つ。

「スライムのような手応えでございますな。
完全に離断しなければ、動きは止まりませんぞ」
エンドラーズの叫びと、巨狼の記憶が合致した。

――核を、核を探してくださいっ！　多分、心臓の辺りか、身体の正中線のどこかですっ！
確証はないが、試してみるしかない。

だが、心臓を狙おうにも、六本の脚で踏ん張った下腹を抉るのは困難だ。

背中に乗って、心臓や正中線を狙おうにも、他の個体が突っかけてくる。攻撃の瞬間が最も無防備になるという隙を、自ら作り出すことは危険すぎる。もし、スライムと合成されているのであれば、その唾液すら猛毒を持っている。限りなく不死に近い巨狼ならともかく、万が一にもバードンやエンドラーズが牙の一撃を受けたら、『解毒』の呪文が功を奏する前に毒が回り切ってしまうだろう。ま

してや激闘の最中、全身の血流が上がっているのだ。通常より毒の回りは早いと見てよい。
それればかりか、下手に返り血でも浴びようものなら皮膚が爛れてしまう危険性もあった。

当然、エンドラーズもバードンも、スライムについての知識は有している。
迂闊な攻撃ができなくなり、一瞬の間戦闘が膠着した。

――僕が首をっ！　その隙に止めをっ！
巨狼がゲイズハウンドの首に噛み付き、振りたくって仰向けにひっくり返す。

そのまま前肢でゲイズハウンドの身体を押さえ、首に噛み付いたまま力一杯反り返る。
固いゴムを引きちぎるような音が響き、ゲイズハウンドの首が胴体からちぎり取られた。痙攣しながら猛毒の血を流し、それでもスライムの生命力のせいで這いずり回るゲイズハウンドに、バードンが馬乗りになって正中線上に剣を突き立てた。そして力任せに剣を曳き、ゲイズハウンドの身体を縦に両断する。
その間、エンドラーズはバードンが万が一返り血を受けたときのために、『解毒』と『快癒』を同時に放てるように詠唱を続けている。

一頭のゲイズハウンドを屠ったとき、突然群れの動きが変化した。
ちょうど小隊が最北の生者を無力化し、全ての者を拘束した瞬間だった。
統率は失われ、絶望の感情が一気に恐怖に染め上げられる。算を乱して逃げ惑うゲイズハウンドに、巨狼とバードンが襲い掛かる。

さらに二頭を仕留めたとき、バードンがまともに返り血を浴びてしまった。

間髪を入れずエンドラーズの『解毒』が発現し、猛毒の血液の浄化を開始する。

だが、スライムの猛毒すら強化してあった合成魔獣の血は、エンドラーズの『解毒』と拮抗している。毒を喰らった皮膚が爛れ始め、進行こそ食い止めているものの、バードンの身体を激痛が襲う。エンドラーズが『快癒』より『解毒』を優先すると決し詠唱を開始したとき、バードンのすぐ横から『解毒』の呪文が発現した。

姿を消していたティアが実体化し、さらに『解毒』を発現させる。

そこへエンドラーズの『解毒』が発現し、ようやくゲイズハウンドの血液は浄化された。

だが、一度爛れ始めた皮膚から広がる激痛に、絶叫こそしないもののバードンの呻きは止まらない。歯を食い縛り、脂汗を流して激痛を耐えるバードンに、ティアが『快癒』を発現させ身体から痛みを取り去る。

「お邪魔でしたかな？」

エンドラーズの含み笑いに、ティアが顔を朱に染め上げた。

その隙を衝いて、ゲイズハウンドの群れは潰走を始めていた。

四方八方に、無秩序に走り去ろうとするゲイズハウンドを、二人と一頭では仕留めきれるはずもない。もし、合成されていないゲイズハウンドであれば、最北の地の冬を越すことは不可能であり、放置していても構わない。だが、合成魔獣に生まれ変わったゲイズハウンドが、どのような生物特性を持っているかはまったくの未知数だ。スライムの特性を引き継いでいるならば、寒さに対する抗堪性があってもおかしくはなかった。

一瞬の逡巡の後、巨狼がメディの元に駆け寄った。

――メディ、お願いっ！

アービィの意図を悟ったメディが、蛇の神をなびかせて巨狼の背に飛び乗った。

――距離はどれくらいで発動するの！？

「やったことなんかないけど、弓が届くくらいで充分よっ！」

巨狼の問いに、メディが叫び返す。

足の遅いゲイズハウンドがいくら必死になろうと、全力で駆ける巨狼から逃れられるはずはない。

恐怖を絶望が再度上回ろうとしたとき、ゲイズハウンドの群れは次々に石と変えられていった。

それでも四方八方に散ったゲイズハウンドを、一瞬で全て捉えることは無理だった。

一頭のゲイズハウンドが逃げた方向が、偶然ルティと少女のいる方向だった。巨狼がメディを拾いに走った際に、全ての個体はルティたちの居場所を逃走方向から外していた。巨狼の意図を読む能力がない以上、巨狼と同方向に走ることなど本能が拒否している。しかし、メディを背に乗せ、取って返した巨狼が走り去ったとき、何頭かのゲイズハウンドは巨狼と反対方向に逃げることを選んだ。

そのうちの一頭が、ルティと少女に向かって来たのだった。

「逃げて。

奴らは真っ直ぐ走るだけ。

かわすのは難しくないわ」

ルティが少女に言ったが、ゲイズハウンドの巨体に気圧され、少女の足は止まってしまっていた。

さすがに少女を抱えて逃げるほどの余裕はない。
もし、ゲイズハウンドが食欲を優先させでもしたら、確実に追いつかれ喰われてしまう。ルティは腹を決めていた。剣を構え、『解毒』を詠唱し、ルティはゲイズハウンドを待った。
動きは遅いが、純粋な力は巨狼に匹敵するものがある。ルティ一人であれば難なく避けることができるが、背後に少女を守った状況では逃げるわけにもいかない。もし、ゲイズハウンドの体当たりを正面から受けてしまえば、人間の身体など簡単に弾き飛ばされ、衝撃で骨は砕かれてしまう。ルティの攻撃が、ゲイズハウンドの突進を止められるかどうか解らない。
僅かでも怯ませることができれば、少女が逃げる余裕ができるとルティは考えていた。

だが、少女は、その場にへたり込んでしまった。
これでは完全にゲイズハウンドの行き脚を止めなければ、喰われないまでも踏み潰される。バードンも、エンドラーズもティアも、援護するには距離が離れている。全力でこちらに駆けてくるのが見えるが、同一線上にあるためエンドラーズの黒呪文が使えない。

「立ってっ！
逃げてっ！
早くっ！」
ルティが背中越しに叱咤するが、少女が立ち上がる気配はない。

もう、少女が逃げたとしても、ルティはかわし切れそうもないところまでゲイズハウンドが迫った。
ルティはゲイズハウンドの喉を狙い、剣を顔の横で水平に構えた。返り血を浴びようが、弾き飛ばされようが、骨を砕かれようが、少女を踏み潰させるようなことはしない。どのような被害を受けようと、落ち着いて呪文を行使すればなんとかなる。痛いのはちょっと

の間だけよ、万が一即死してもティアには貸しがあるからね、とルティは口の中で呟いた。
息を止め、腕の緊張を解き、ゲイズハウンドの巨体を見据える。

ルティが斬撃を見舞おうとした瞬間、感性の法則を無視したようにゲイズハウンドの突進が止められた。
首を下げ、全力を込めた六本の脚全ての筋肉が躍動し、今にもルティに体当たりを敢行せんとする石の巨像がそこに立っている。確実に相手を屠れると確信したかのような瞳は、灰色の彫刻となっていた。
その彫刻の向こう側から、ルティの目の前に巨狼が舞い降り、メディがその背から降り立った。

「間に合ったぁ。
ごめんね、ルティ」
――刺しちゃだめぇっ！
メディの言葉に、巨狼の悲鳴が重なった。

少女は、呆けたような表情で、ことの成り行きを見守っていた。
巨狼が駆け、バードンとエンドラーズが一陣の風のように駆け去った。三頭のゲイズハウンドが惨殺されている間に、ティアが姿を消してしまった。自分たちに随伴していた小隊が僅かの間に生者を無力化し、ゲイズハウンドが逃げ散ったと思ったら、一頭がこちらに迫ってくるのが見えた。逃げなければと思えば思うほど、少女の足は動かなくなり、ルティが剣を構えた。
もうだめだ、踏み潰されると思った瞬間、ゲイズハウンドが石になり、巨狼とメディが現れたのだった。

ここまで随行してきた小隊が、捕虜とした生者を連れて去ってい

く。

最終決戦に際して不確定要素は取り払うべきと指揮官が判断し、アービィたちはそれに従うことにした。この場に留まり、アービィたちの帰還を待つという選択肢もあるが、食料に余裕があるうちにラーニャに戻るべきだとエンドラーズが勧めていたのだった。

万が一、この後合流するピラムの民や、他の北の民に惨殺でもされたら後に禍根を残しかねない。捕虜となった最北の生者と、誰の間に怨みつらみがあるか判らない。捕虜を引き渡せといわれたら、小隊は断固として拒否する。ここで北の民と南大陸の住人の間に、諍いを起こすわけにはいかなかった。軍人として、最終決戦の場に参加できないことは悔しいのだろうが、指揮官はそのような素振りは全く見せず、アービィたちに見事な姿勢で敬礼し、背を向けた。

小隊が去って数刻後、ピラムの民に先導され、北の民の群れが南から来るのが見えてきた。

第１００話

アービィたちと北の民が邂逅した丘から、ニムファがいる集落までは、僅かに半日の行程だ。

一気に敵本陣を衝くことは充分可能だが、今からでは集落への到着が夜になり、不死者の群れに突入することになりかねない。それならば、今日はここに陣を敷き、夜明けとともに集落に向かった方が安全だ。そう判断したアービィとティアは獣化を解かず、メディも姿を戻さずにいた。

そしてエンドラーズは巨狼を伴い、結界の敷設を喜々としてこなしていた。

「エンドラーズ様、何かお手伝いすることはありませんか？」

「何なりと、お申し付けいただきますよう」

ルティとバードンが連れ立ってエンドラーズに申し出た。

「いかがなされましたかな、お二方。

明日は決戦にございます。

私の手伝いより、お休みいただく方が重要ではございませんか？

何も、畑仕事をしようというのではございません。

この程度のこと、最高神祇官の力を持ってすれば、容易いことでございます」

嬉しそうな表情を浮かべつつも、エンドラーズは独壇場を渡そうとはしなかった。

事実、並みの神官が人数を揃え、数日掛かりで敷設する規模の結界を、エンドラーズは僅か数刻も掛からぬうちに完成させようとしていた。

もちろん移動の速度は人の限界を超えるものではなく、『移転』も回数の限界があるため、基点間はアービィの背に跨ってのことだ

った。

「それは解っているんですけど。
エンドラーズ様もアービィも、ティアとメディも働いているのに、あたしたちだけ寝ちゃうのは……
哨戒はともかく、結界の敷設は手伝えるところは手伝って、みんなで早く終わらせちゃった方がいいんじゃないかと」
ルティが巨狼を見ながら、おずおずと答える。

「ルティ殿は、狼が心配なのでございますよ。
エンドラーズ様、そこをお汲み取り下さいませ。
そうなると、私一人寝ているのも――」
「素直に、ティアを手伝いたい、って言ったらどうですか、バードンさん」
顔を真っ赤にしてルティが言った。

「いや、私は決して……」
わざとらしく咳込みながらバードンが取り繕う。

「決して、何よ。
あたしはほっぽらかしとけばいいって？」
闇の中からティアが実体化し、背伸びしながらバードンの肩に腕を組んで乗せ、その上に顎を重ねた。

「――っ！
お前、いつの間にっ！？
いや、決して放っておいていいなんて、言ってない！」
慌ててティアを振り払い、取り繕ったバードンに、笑いが弾けた。
だが、ティアの目は笑っておらず、尻尾をバードンの首に巻き付けた。

「まあ、いいわ。
後でじっくり聞かせていただきましょう。
決して、の後になんて言おうとしてたかね」
凄艶な笑みを浮かべ、ティアはバードンの頬を撫でる。

「後でと仰らず、今からで結構でございますぞ、ティア殿。
ここの基点は完成いたしました。
後一つで結界は完成いたします。
アービィ殿とルティ殿に、お手伝いいただきましょう。
哨戒はメディ殿とピラムの方々にお任せして。
ティア殿、男とはか弱きものにございます。
手加減なさいませ。
バードン殿、しっかりなされませ」
エンドラーズは高らかに笑った。
そして、困り切った表情のバードンと、顔を真っ赤に染め上げたティアを残し、ルティを伴って巨狼の背に乗る。

――バードンさん、僕の苦労を少しくらいは知っ――!?　だめっ！　やめてぇっ！　刺しちゃだめぇっ！　やぁめぇてぇっ！
アービィに皆まで言わせず、ルティの剣が巨狼の延髄にあてがわれた。
騒ぎに目を覚まし、何事かと辺りを見回した少女が、巨狼に剣を突き立てるルティを見て凍り付く。

「大丈夫よ、いつものじゃれ合いだから」
少女はティアの言葉に胸を撫で下ろしたが、バードンの首に何が巻き付いてるのか見て、また凍り付いた。

「ご安心、ください、ませ。

何、たいした、ことで――」
そこまで言ったところで、ティアが尻尾に力を入れた。
「男とは、かくもか弱きものにございます。　心にお刻み下さいませっ！」
大笑いしながら少女に言って、エンドラーズは巨狼の背を叩いた。
それを合図に巨狼が跳躍する。
大きく後ろに振られたルティが態勢を崩し、巨狼の延髄から剣が外れた。転げ落ちそうになったルティをエンドラーズが抱き止め、巨狼の背をまた叩いた。
「覚えてなさいっ！
あとで、ぎったぎたにしてや――きゃんっ！？」
――舌噛むよ。遅かった？
――覚えてなさい、アービィ……
――女とは、げに強きもの。
音声による会話は、巨狼の疾走に遮られた。
念話と思念が飛び交い、エンドラーズの笑いが闇に消えていった。
「どういうこと！？
誰か、説明しなさい！」
薄暗い部屋の中にニムファの叫びが響いた。
一本杉の丘に展開させた『出来損ない』の合成魔獣を率いさせた生者から、いつまで経っても敵を殲滅したという報告が入ってこない。
斥候を放とうにも、これ以上魔宮から生者を減らしては日中の防備が覚束ないうえ、切り札として温存してある合成魔獣の制御すら

妖しくなってしまう。かといって、太陽光の下を歩くことができる不死者も、僅かしか残っていない。自身の楯として、その数少ない中位の吸血不死者は手放したくないニムファは、外界に対する目を失っていた。もともとの予定では丘の一本杉に魔法陣を刻み、監視の目とするはずだったが、その魔法陣が完成した様子もなかった。

「おそらく、合成魔獣共々殲滅されたか、捕縛されたものと思われます」

恐る恐るといったふうに、中位の吸血不死者が答える。

言葉こそ丁寧だが、神の力による強制的な服従だ。決してニムファに心酔し、忠誠を捧げているわけではない。

「役立たずしかいないのですか、最北の民にはっ！
まさか、寝返ったということはないでしょうね？
キマイラ制御部隊の締め付けは大丈夫ですか！？
万が一に備えて、何人か人質を取りなさい。
子供がいれば、それが一番良いでしょう」

ニムファは吸血不死者に命じ、邪神の像に向き直った。

もちろん、ニムファはそれを邪神などとは認識していない。

自らの望みを叶えてくれる最高神だ。

小難しい説法ばかりで、何の利益もないマ教などとは違う。不死の身体を与えられ、不死者を生み出す力を与えられ、不死者を操る力を与えられた。

死なないというだけで、無敵の力だ。

世界を制覇する力だ。

世界に、君臨する力だ。

それを邪魔する者は、すべて滅ぼしてくれる。

足を引っ張る者も、同様だ。

「神よ、私に力を。
私の勇者様を誑かした、邪悪な女を排する力をお与えください。
ご加護を、お与えください。
……まだ、そこにいたのですかっ！？
早く、命令を遂行しなさいっ！」
ニムファの背に一礼し、このまま太陽光の下に身を晒したいという願望を抱きつつ、吸血不死者は人質を選ぶため魔宮の前庭へと歩を進めた。

「エンドラーズ様、なぜ、あたしに？」
最後の基点に祈りを捧げるエンドラーズの背後に立ったルティが、怪訝な顔をして聞いた。
ここまで同行しただけで、特にな何かを手伝ったということはない。

「……
いえ、充分でございます。
いずれ、お解かりになるときが」
いつもの破天荒さを全く感じさせない笑顔で、エンドラーズは振り向いた。

「どういうことです？」
まったく腑に落ちない、という表情でルティは聞き返した。

「全ての精霊よ、この結界にひと時の安らぎを」
ルティの問いには答えず、エンドラーズが最後の祈りを捧げたとき、結界を白い光が包み込んだ。
あちこちからどよめきが上がり、やがて潮が引くように静まっていく。

「お答えいただけないんですか？」
結界内に満たされた精霊の気配を感じ取りながら、ルティは笑みを浮かべつつ聞いた。
答えを聞けないことは不満といえば不満なのだが、結界が完成した瞬間から何ともいえない安心感に満たされていた。

「やはり。
いえ、今はご説明してもお解かりにはならない。
いずれ、ルティ殿が自覚いたします。
それまでは、私にもどう説明してよいかわかりません。
ただ、ルティ殿をここへ連れてこなければならない、そう感じただけでございます」
一仕事終えたという満足感を漂わせ、エンドラーズは答えた。
エンドラーズの目には、ルティが白い光を纏ったように見えていた。

「なんだが煙に巻かれたような感じです。
でも、エンドラーズ様がそう仰るなら、もう聞きはしません。
なんか、とっても満たされた気分。
アービィ、戻りましょうか。
ベッドはないけど、ゆっくり眠れそうな気がする」
一歩退いた所でお座りしている巨狼に、ルティは声を掛けた。

――うん。僕もなんかそんな気がする。ルティが、ふわっとした感じに見えるよ。
巨狼の瞳が優しくなっている。

「なんか、犬よね、最近のアービィ。
穏やかな目になってきてるよ」

くすっとルティが笑った。

――犬って言うな、犬って

口を尖らせたような、ふてくされたような念話が返ってくる。

「はいはい、狼だもんね、アンタは」

いつか交わした会話を思い出し、ルティは噴き出した。

思えば、遠くへ来てしまった。

南大陸のほぼ南端から始まった旅は、北の大地の最北まで来てしまっている。アービィが獣化を自在に制御するために精神力を養いつつ、二人が安心して暮らせる場所を探す旅だったはずが、いつの間にか自由に獣化してもよくなっていた。安心して住める場所も、探す必要などなかった。二人は、帰れば良い。

だが、その場所に帰るために、終わらせなければならないことがある。

最北の民の乱。

今ではニムファの変と呼ばれる争乱を、アービィの手で終わらせなければならない。この世界に異世界から呼んだ者と、呼ばれた者の決着が、まだ残っていた。

――ほら、明日に備えて寝なきゃ。今日はお酒はなしだよ、ルティ。

巨狼はルティが背に乗りやすいようにその場に伏せる。

気付けばエンドラーズは姿を消していた。

「うん、戻ろうか」

短く答え、ルティは巨狼の背に乗った。

払暁。
結界の中が騒がしくなり、やがて潮騒のように人々の声がうねり始める。

「じゃあ、行こうか」
獣化を解いたアービィが立った。
続いてルティが、ティアが、メディが立ち、バードンとエンドラーズが立ち上がる。

「参りましょうぞ、いざ。
怒りと妬みが渦巻くの魔窟へ」
エンドラーズが士気を鼓舞した。
応、と応える声がアービィたちを中心に広がり、結界内を満たしていった。

「どうして獣化しないの？」
丘を越え、最後の集落を目指す道すがら、獣化したままのティアが訊ねた。

「ほら、僕は獣化してると身体がでかいでしょ。
もし、ニムファ様のところへ行くときに、扉を通れなかったら面倒じゃないか」
苦笑いしつつ、アービィが応える。
以前、避難小屋で獣化した際に、外に出られなくなったことをアービィは思い出していた。

「そうよね。
私の家に飛び込もうとしたときも、壁に突っ込んでたけどさ、あ

れ窓からじゃどう考えても入れなかったと思うわよ」
思い出し笑いが本気の笑いに変わったメディが、苦しそうに言う。

「あれは凄かったわ。
アービィ死んだかと思ったもん。
よく壁が壊れなかったわよね、あのときは」
ルティも笑いが止まらなくなっていた。

「もうちょっと、心配してくれてもよさそうなもんだけどさ。
なんだよ、あのときの『頭大丈夫』って。
確かに頭から突っ込んだんだけどさ」
アービィがふてくされながら言い返す。

これから死を賭した戦いが待っているとは、とても感じられない雰囲気だ。
まるで、近所の山にピクニックにでも行くような気楽さが、アービィたちの間に漂っていた。もちろん、それは意識したことであり、合成魔獣や不死者に対して恐怖感を払拭しきれない最北の民たちの気持ちをほぐすためであった。いつどこから合成魔獣が突っかけてくるす判らない状況で、軽口は叩きながらもアービィたちは周囲の気配を探り続けていた。

「あれよ」
先頭を歩いていた少女が短く言った。

簡素な柵に囲まれ、切り立った崖を背にしてその集落は沈黙していた。
人の気配は感じられないが、邪悪な波動が数百mはなれたこちらまで伝わってくる。柵の一部に切れ目があり、そこが集落への入り

口だと判るが、両側に立てられた門柱には魔法陣が描かれており、意に沿わぬ侵入者をすべて不死者に変えてしまおうと辺りを睥睨していた。おそらく、門柱以外にも魔法陣が攻撃兵器として描かれているはずだ。魔法陣の射程距離が分からない以上、不用意に近付いては危険であることは誰の目にも明らかだった。

「一気に突っ切るよ。
僕が、魔法陣をぶっ壊すから」
そう言ってアービィは獣化した。

――通れなけりゃ戻ればいいもんね。
後肢で首元を掻きながらアービィは念話で言い訳した。

「精霊のご加護と、皆様が信仰する神々の守りは、皆様の下に！
さあ、南大陸の人々に、最北の民の意地をお見せください！
我らも、及ばずながらお力添えさせていただきましょうぞ！」
エンドラーズがピラムの代表に言う。

鬨の声が上がり、巨狼を先頭に群集が駆け始めた。
集落の入り口の門柱を、巨狼が全力のタックルで打ち倒し、続いてルティが剣を抜き放ち渾身の斬撃を残る門柱に叩き込む。盛大な衝撃音と共に門柱が倒れ、群集が一気に集落に雪崩れ込んだ。門柱のあった場所から溢れた人々が、簡素な柵を乗り越え、打ち倒し、踏み越えていく。
誰もが不死者の頚城を振り払い、南大陸と堂々と渡り合うため、この一戦に命を賭けた。

不意に集落の中から獣の唸り声が響き、十五頭のキマイラが社前の広場に躍り出た。
社の屋根に十五人の生者が陣取り、魔法文字を刻んだ杖を両手で

捧げ、必死にキマイラを制御している。キマイラは社の入り口となる巨大な門扉を守るように布陣し、人々を牽制する。一瞬怯んだかに見えた群集が、部族ごとの集団に分かれてキマイラに襲い掛かる。

何人かの目端の聞くものが、制御を妨害するために社に向かって投石を始めていた。

――制御は止めさせちゃだめっ！　キマイラが散ったら大変だっ！

ゲイズハウンドを狩り尽すのに多大な苦労を要した経験から、却って制御させていたほうが得策とアービィは見抜いていた。

一頭のキマイラを噛み伏せながら、念話で群集に指示を飛ばす。

「みんな、無理に突っ込まないで！

牽制していればいいわっ！

私が、石に変えてやるっ！」

メディが混乱の巷を駆け巡り、手近にいた一頭のキマイラを石に変える。

制御者は、キマイラが扉から離れ過ぎないように、意識していた。

最北の民の群衆にキマイラを突入はさせても、一撃放っては扉の前に戻す。敵を殺傷するよりも、扉に近付けないことを優先していた。いかに合成魔獣といえど、数の力には勝てない。突入させてしまえば、いつかは押し潰されてしまうことは、火を見るより明らかだ。

それでも合成魔獣の力は強大であり、群衆の中に躍り込めば、三つの首が当るを幸い最北の民を打ち倒していった。

人々の悲鳴と絶叫が上がり、跳ね上げられた人は地面に叩き付けられ動かなくなる。

間近にいる人を獅子の首が噛みちぎり、山羊の角が腹を裂き、胸

を貫く。蛇の首に毒を打ち込まれた人々が、断末魔の絶叫を放ち地面に崩れ落ち、短く痙攣して絶命する。それでも人々は剣を振るい槍を突き出し、必死にキマイラを討ち取ろうとしていた。

漸く一頭のキマイラが膝を折り、ゆっくりと崩れ落ちて三つの首が血を吐き出す。損害を出しつつも、最北の民の群集は、キマイラを社の前に追い詰め始めていた。だが、キマイラは当初の目的通りとばかりに、扉を塞ぐ形になり、容易に突入できない状態ができ上がってしまった。

戦場は、混乱の巷から膠着状態に陥り、両者とも動くに動けず奇妙な沈黙が支配された。

――あの扉、やっぱり外開きかなぁ？

巨狼の念話がルティに届く。

「守ることを考えれば、そうでしょうね」

最前線でキマイラと対峙しつつルティが返す。

他の集落との戦いに明け暮れた北の大地では、集落の神を祀る社が南大陸における城や砦と同じ位置付けにある。

集落に攻め込まれた場合は、ここに立てこもって戦うのだった。扉が内開きでは、外からの衝撃に対してあまりにも脆弱だ。攻城槌にあたる丸太で突撃でもされたら、一発で打ち抜かれてしまう。反撃に際しても、開け放つ勢いそのままに飛び出していける外開きが、圧倒的に適している。

「じゃあ、突っ込むか？

メディ殿、エンドラーズ様、よろしいですかな？

ティア、いくぞ」

バードンが人垣を掻き分けてきた。

「行きましょう」
「望むところでございます」
「一気に飛び込んじゃおう」
三人に嫌はない。

――僕が突っ込むから、もし開かなかったら、閂を斬ってね、ルティ。
巨狼が突入手順を説明した。

「いいけど、頭打ってひっくり返らないでよ」
どうせ考え無しに頭から行くんでしょうけど、とこれは声に出さずに呟いた。

狼の遠吠えが響き渡り、キマイラが一瞬萎縮した。
群集を割って巨狼が飛び出し、矢のような勢いでキマイラを蹴散らして、そのまま扉に突っ込んだ。盛大な破壊音と木に石を叩き付ける音が響き、扉が大きく撓む。巨狼が開啓したキマイラの隙間をルティたちがすり抜け、扉に身体を叩き付けている巨狼の背後を固めた。
キマイラが妨害のために突っ込もうとするが、背後から最北の民が、正面からはルティたちが牽制する。

幾度目かの体当たりで閂の支えが弾け飛び、扉を押さえるものがなくなった。
だが、外開きの扉を引き開け、一度後ろに下がってから中に入り、それから扉を牽いて閉めるという一連の行動は、いがいともたつく作業だ。ただでさえ巨大で重い扉が、巨狼によって歪められている。簡単に引き開けられる、というものではなくなっていた。

バードンとエンドラーズがそれぞれ左右の扉に取り付き、渾身の力で引き開けようとするが、やはり歪んだ扉は容易に開けない。

その間、キマイラの妨害を防ぐため、巨狼が先頭に立ち、ルティとティア、メディが左右に展開して牽制する。混戦の中では巻き添えを恐れて石化能力を封印していたメディだが、戦線が整理されたことでその力を開放した。もちろん最北の民の真っ只中に飛び込んだキマイラには使えないが、不用意に突入してきたキマイラをまた一頭石に変えた。

一瞬で石に変わったキマイラを見て、制御者は他のキマイラを最北の民に突入させざるを得なかった。

「大丈夫じゃない、こんな大きな扉なら獣化したままで」

巨狼が楽々潜れそうな巨大な門扉の前で、メディは巨狼に振り向いた。

最北の民とキマイラが入り乱れた状態では、巻き添えが発生しかねず石化能力使えない。

もし、一気に突っ込まれてしまえば、一頭を石に変えている間にメディは噛み裂かれてしまう。

背後から最北の民がキマイラを牽制するが、却って手負いになったキマイラは凶暴性を増し、与し易しと見た最北の民を威嚇し近寄らせない。

バードンとエンドラーズが、やっとの思いで扉を引き開けた。

巨狼が社の中に飛び込み、ルティとティアが後を追う。バードンが扉の中に滑り込もうとした隙を衝いて二頭のキマイラが躍り掛かる。だが、殿を固めていたメディによってまた一頭が石に変えられた。だが、反対側から同時に突っ込んだキマイラまでは石に変えることはできず、メディは蛇の首に痛撃を浴びてしまった。肩にざっ

くりと食い込む蛇の牙から、人間であれば即死させてしまう量の毒が注入されていく。

――メディっ！

巨狼がキマイラを弾き飛ばし、メディの肩から牙を引き剥がす。

蛇の首に吊り下げられるようになっていたメディは、その場に崩れ落ちた。

「ティアっ『解毒』っ！

エンドラーズ様、『快癒』をっ！」

慌てて戻ってきたルティが叫び、『蘇生』の詠唱を開始する。

「大丈夫よ、ルティ。

でも、エンドラーズ様『快癒』だけお願いします。

私の属性が何なのか、みんな忘れてない？

私に蛇の毒は、効かないわ」

肩を抑え、痛みを堪えながらメディは立ち上がった。

ティアとルティの掌で発現を待つばかり呪文の光が、急速にしぼんでいく。

『快癒』をメディに発現させたエンドラーズが、メディの目を見て頷いた。

また一頭突っ込んできたキマイラの首の付け根を巨狼が噛み裂き、三つの頭の息の根を同時に止めた。そして巨狼が振り向きざまに扉に飛び込む。ルティとティア、そしてバードンがその後を追いかけた。バードンが扉を閉めようと振り向いたとき、エンドラーズが扉を蹴り、メディが身体全体で扉を押した。

「何、をっ！？」

バードンが、信じられないものを見るような目で、二人に叫んだ。

「私、残るよ。
アービィが決着つけるんでしょ？
任せて、合成魔獣は。
全部、石に変えてやるから」
扉を背中で押しながらメディが言った。
髪の蛇たちまでが鎌首をもたげ、一匹残らず臨戦態勢に入っていた。

「私も、残りましょう。
言うだけでは、どなたにも信じていただけません。
精霊の加護を最北の民の皆様に捧げましょうぞ」
エンドラーズが、手持ちの聖水を全てルティに投げた。
アービィたちからの返答を待たず、扉を閉め切ったエンドラーズとメディが向き直り、キマイラと対峙する。

「さぁ、メディ殿、存分にっ！
いくらでも治癒させていただきますぞ。
皆々様、後一押しでございますっ！」
エンドラーズの声に押され、群集がキマイラに襲い掛かる。
エンドラーズはそのままメディを庇うように前に一歩進み、剣を抜き放って正眼に構えた。

閉められた扉を見つめ、アービィはメディとエンドラーズに向かって、胸の内で手を合わせていた。
だが、すぐに社の奥へと向き直る。邪悪な波動が突き刺すように、一層強く伝わってきていた。

アービィたちが飛び込んだ社は、切り立った崖を背に建てられて

いる。
　扉の内側には大きな広間があり、その奥は崖の岩が剥き出しになっていた。そこに人一人がやっと通れそうな扉がひとつだけある。巨狼の姿では通り抜けられないと見たアービィが獣化を解き、レヴァイストル伯爵から送られた防具を身につけた。
　やがて、その扉が開かれ、中から五体の吸血不死者が進み出てきた。

「ニムファ様は、この奥でその二人をお待ちになっている。
我らは、二人を案内するように命じられている。
抵抗せぬなら危害は加えぬ。
それ以外の者たちは、ここで死んでいただくがよろしいか？」
吸血不死者は、そう言って四人と対峙した。

「悪いが、それは断る。
我々は、誰も死ぬつもりなど、欠片もない。
神の定めた法理に背き、理法を無視する不死者どもよ、貴様らこそ地上に存在してはならない者。
灰に還るが良い」
バードンが一歩進み出て、祝福法儀式済みの剣を両手に構える。

　次の瞬間、一気に間合いを詰めた吸血不死者の腕が振り下ろされ、長い爪がバードンに襲いかかった。
　バードンは軽く体をかわし、態勢を崩した吸血不死者を見下ろした。腕を振り抜いた勢いのまま身体を一回転させ、態勢を整えつつバードンに向き直った吸血不死者の視界を銀色の影が過ぎる。大上段に振り上げられた二本の剣は、そのまま真下に叩き付けられた。
　まるで豆腐を切るかのように、何の抵抗もなく振り下ろされた二本の剣は、吸血不死者の身体を縦に三つに切り裂いていた。

「偉そうな口をきいた割には、たいしたことねぇな。
次はどいつだ、灰になりてぇ奴は！？」
人狼狩りをしているときの口調に戻った、バードンが吼える。

「汚い口きかないのっ！」
ティアが窘めるように行って姿を消す。
程なくして一体の吸血不死者の首が落ち、灰となって吹き散らされる。

突進してきた吸血不死者を、ルティはすれ違いざまの居合い抜きで斬り捨てた。
胴を両断され、上半身と下半身がそれぞれ灰化しながら崩れ落ちる。

残る二体の吸血不死者のうち、手近にいた方に駆け寄ったアービィは、人狼の力を完全開放した拳を振り抜いた。
野球のピッチングフォームにあるスリークォーターのように振り抜かれた拳は、的確に吸血不死者の側頭部を捕らえていた。弾き飛ばされた吸血不死者が、最後に残った一体に頭から激突し、その腹を貫通し串刺しの状態で停止する。
そのまま二体の吸血不死者は灰と化し、細かい粒子は入り交じり、例え月光を浴びたとしても二体の身体には復活できなくなってしまった。

「準備運動にもなりゃしねぇ。
行こう」
つまらなそうにバードンが吐き捨て、四人は扉に向かった。

扉を開けると、狭く長い石造りの登り階段が、遙かに伸びていた。

所々に照明としてランタンのような物が設置され、通り過ぎて行く四人の影を揺らしている。照明の他に通風口なのか、細い穴から風が吹き込んでいた。

やがて、階段が尽き、広く長い廊下が現れた。その奥には扉があり、それを通して一際強い邪悪な波動が伝わってくる。

四人は無言で頷き合い、扉を開けて中に入った。

「お待ちしていました、勇者様。

二年前、ラシアス王城アルギールでお目に掛かって以来ですね」

ルティとティア、そしてバードンをちらりと見て、僅かに顔をしかめてからアービィに視線を合わせてニムファが言った。

誰もそれには答えない。

ニムファが座る玉座の背後には、魔法陣を後光のように背負った黒山羊の頭と踵のない蹄を持つ異形の像が立っている。その手には一人の老人が、即身仏のように座らされていた。それが死体ではないことは、見開いた目に潤いがあることから判断できたが、その目は既に何も写してはいないようだった。

その人物がこの争乱を起こした張本人であり、アービィの魂を人狼に封じ込んだ人物であることは、オセリファの話から推察された。

「あのときお預けした答えをお聞かせください、勇者様。

国を、私を、差し上げても構わないと、あのときは申しました。

今なら、私と手を携えていただけるなら、世界を差し上げましょう。

私同様、不死の身体を手に入れ、永久に世界に君臨――」

「何も、変わっていないんですね。

僕の答えも、変わっていません。

女王様、いや、あなたを尊称や名で呼ぶことすら、僕には我慢で

きない。
何故、あなたはそんなにすべてを欲しがる？
人の幸せを、人の自由を、人の心を、何故そこまで踏みにじる？
僕は、あなたを滅すると決めて、ここに来たんだ！」
ニムファの言葉を遮り、アービィは一気に言い捨てた。
欲望の塊、征服欲の権化、称賛のみを求める暴虐の女王。
アービィの脳裏を、そんな言葉が通り過ぎて行く。もちろん、最後の女王は尊称などではなく、それ以上の者を知らぬという意味合いだ。

「何故、お分かりいただけませんか、勇者様。
乱れた世界を救いたいという私の崇高な願いを、何故お分かりいただけないのです。
生ある者に依る治世は、代替わりに混乱を招き、権力闘争の果てに世界を戦乱に巻き込むこともあります。
不死の身体を持つ者が、永遠に世界を統治して、初めて世界は救われるのです。
下等な人間は、導かなければならないのです」
徐々にニムファの目が狂気に染まりつつある。

「いつか死ぬからこそ、人は生きた証を遺すために必死になるんだ。
僕は、あなたの存在は許容できない。
あなたは、世界を破滅させようとしているだけだっ！」
アービィには我慢ならなかった。

ニムファにとって民とは、自分を称賛させるためだけに存在する。
それ以上でも、それ以下でもなかった。自分を褒めそやし、すべての命令に従順である者だけを求めている。称賛しなければ強制し、従順でなければ虐げる。それでも意のままにならなければ、殺すことに躊躇はない。

最早、それは治世ではない。

「どうあっても、私と手を携えるのは嫌と？
その小娘か？
勇者様を誑かすのは。
死を以て償うがよい」
憎しみに満ちた目でルティを睨み、玉座から立ち上がる。

ルティを指す指先から得体の知れない光弾が弾け、ルティの胸に炸裂した。
精霊呪文にはない攻撃魔法、マジックアローに類するものだが、全精霊の祝福を受けた防具は貫通されることはなかった。だが、衝撃までは無効化できず、ルティは悲鳴とともに吹き飛ばされた。
咳込みながらも何とか立ち上がろうとするルティを庇うように、アービィが立ちはだかり、バードンが手を貸し、ティアが『治癒』を唱える。

「それがあなたの本性だ。
気に入らなければ排除する。
従わなければ虐げる。
刃向かおうとすれば、殺してしまう。
その後に何が残る！？
そうやって世界にあなただけになって、何が残るんだっ！」
アービィが剣を抜いて床を蹴る。

全精霊の祝福は、重力結界を易々と無効化し、ニムファの眼前に立ったアービィが剣を振り下ろす。
滑るように下がったニムファは剣をかわし、信じられないという目でアービィを見た。

「あなたまで！
私の意のままであれば、誰も殺さぬ。
すべてが私の意のままであればいいんだ！
逆らわなければ、従えば、それだけでいいんだ！
消えてしまえ。
私の物にならない勇者など、消えてしまえっ！」
ニムファが狂ったように叫び、指を振り下ろした。

突如空間が裂け、ニムファとアービィの間の宙に、黒い亀裂が入った。
亀裂が広がり、その表面が滴を落とされた水面のように王冠型の盛り上がりを作り、アービィを飲み込んだ。そして、アービィを飲み込んだ亀裂が閉じようとする。
突然のできごとに、ルティの悲鳴が響いた。

「アービィっ！？」
ルティが叫び、反射的にアービィを追いかけた。
そのまま空間の亀裂に、ルティは飛び込んだ。

危険を感じたティアとバードンが、咄嗟にルティを止めに入る。
縋り付き、抱え込もうとするが、ルティは二人の手をすり抜けていた。宙を掴んだ手を呆然と見つめる二人の前で、空間の亀裂は塞がり何もなったかのように元通りになった。
ティアの悲痛な叫びが木霊した。

アービィは、どこかで感じたことのある感覚に捕らわれていた。
真っ暗な中、細いチューブの中をゆっくりと滑り降りるような感覚にとらわれていた彼は、しびれたような頭でルティのことを考え

ていた。いきなり消えちゃって驚いているだろうな、と考えたとき、チューブの先に光が見え、人影がいくつか見えたと思った瞬間、彼の目の前には元いた世界が広がっていた。

懐かしい家が視界に入り、その中が透過して見えてくる。父が、母が、仏壇の前に正座し、位牌に手を合わせている。その上の額には、紛れもなく自分の姿が写された写真が納められている。

――お父さん……お母さん……

懐かしい呼び方を、彼は不意に思い出した。

縁が薄いと思い込んでいた両親は、いなくなった自分のことを忘れることはなかった。

十数年の時間とは思えないほど、両親は老いていた。自分がいなくなったことによる心労が、両親を過剰なまでに老いさせていたのだ。拗ねていたのは自分だったと、彼は今更ながらに気付かされていた。

気付けば、彼の姿は日本人に戻っている。

「望めば、戻れよう。
どうだ、お前は、元の世界に帰りたくはないか？」
呆然とする彼の背後から、唐突に重々しい声が響く。

「誰だっ！？」
振り向いた彼の前に、黒山羊の頭と踵のない蹄を持った異形の巨人が立っていた。

「誰だ、てめぇは？」
日本人の口調に戻った彼が問いかける。

「我に名前などない」
異形は重々しく言った。

「今、てめぇは『望めば帰れる』と言ったな。
どういうことだ。
今さら、どういうことだっ！」
彼が叫んだ。

「お前の姿が、お前の心を表している。
異世界での姿でいるお前の、望郷の念を、な
女を捨て、仲間を捨てたいと思う、お前の本心がその姿だ」
嘲るような笑いを浮かべ、異形が言った。

「ふざけるなぁっ！
誰が、ルティを捨てるかっ！
ティアを、バードンを、エンドラーズを、仲間たちを、誰が捨てるかぁっ！」
彼は絶叫した。
気付けばアービィの姿に戻っている。

「ほう、それではそこに見える悲しみに暮れる両親を捨てるというのだな？」
黒山羊頭にある目を細め、楽しそうに異形は言った。

「親父……お袋……っ！
てめぇ、人の心を何だと思っていやがる……」
怒りのあまり、砕け散るのではないかと思うほど、彼は歯を軋らせた。
姿が日本人に変わりつつある。

「楽しいやつだな、お前は。
問う度に姿が変わる。
どうだ、望めば元の姿を取り戻し、元の世界への扉を開いてやろう」
すっかり日本人の姿に戻った彼に、異形は楽しそうに問いかけた。

「アービィっ！」
突如空間が裂け、ルティが彼の横に降り立った。

「ルティっ！？」
ルティが見たことのない人物が、ルティに呼びかけた。

「あなたが、アービィなの？」
初めて見る大人の姿に、ルティは戸惑いを隠せない。

「ああ、そうだ。
俺がアービィだ。
今の姿は、日本人だけどな」
彼はそう言ってルティに近付く。

「そんな大人だったんだ。
あんなに子供っぽいのにね。
なんか、笑っちゃうな。
見てたよ、ずっと。
帰りたい？
アービィ、ニホンに帰りたい？」
彼の目を覗き込むようにルティが聞く。
異形はことの成り行きを楽しそうに、残忍な笑みを浮かべて眺め

ている。

「……」

彼は、返答に窮した。

当然、見てしまえば帰りたい気持ちが湧いてくる。

だが、ルティを置いて帰るなど、彼の選択肢にはない。しかし、老いてしまった両親を放っておくという選択肢も、また彼の中にはなかった。

「いいんだよ、あたしのことは気にしなくて。

今までずっと、側にいてくれたんだもの。

今度は、お父さんとお母さんを、安心させてあげて。

いいんだよ、帰っても」

ルティの目から、大粒の涙が零れる。

被さるような異形の笑い声が響いた。

「貴様……っ。

人の心を弄ぶのが、そんなに楽しいかっ！？」

彼が異形に言葉を叩きつけるが、それもまた楽しそうに受け流す。

「怒り、妬み、怨み、苦しみ、悲嘆、どれも我が最高の食い物だ。

人の心が、我の食い物であり、最高の玩具だ。

もっと苦しめ、もっと迷え、もっと悲しむが良い」

異形の高笑いが、空間を占める。

「アービィ、もう悩まないで。

帰りなさい。

あなたのいるところは、元の世界なんだから。

無理矢理連れて来られたところに、いつまでもいちゃダメだよ。

だから……
……行っちゃ……やだ。
行かないでっ！
あたしと、あたしと、ずっと一緒にっ！
あなたをお父さんとお母さんから引き剥がすことになってしまっても、あたしは、あなたにっ！」
ルティが号泣しながら彼に縋りついた。

彼は、それでも迷っていた。
ルティを抱きしめたいのだが、抱きしめた瞬間に日本との縁が完全に切れると直感で解っていた。両腕を広げ、ルティを抱きとめる寸前で、彼の動きは止まっていた。

――あなた、あの子はどうしてるかなぁ？
――どこかで、元気にやっているさ。死んだことになっているが、俺にはそうは思えない。どこかで元気にしていると、そう信じられるんだ。なんたって、あいつは俺たちの子だからな。それに、もう三十幾つだ。あのときいなくならなくても、今頃はとっくに親元を離れていたさ。いつまでも子供扱いでもないだろう。
――いつもそればっかり。でも、私も最近そう思えるの。やっぱり、あの子は生きている。もう二度と会えないけど、どこかで元気にしているって。あの子は私たちの子供だから。

彼の前から日本が消えた。
彼の心から、迷いが消え失せた。

「安心して、ルティ。
僕は、迷わない。

どこにも行かない」
力強くルティを抱きしめたアービィが獣化する。

「ほう、親を捨てたか。
お前は、酷いやつだ。
狼になってどうするつもりだ？
我の姿は虚構。
牙は通用せんぞ？」
異形が笑いながら巨狼に言った。

巨狼が低い唸りを発し、異形と対峙する。
次の瞬間、巨狼が跳躍し、牙を異形に打ち込むが、虚空を切り裂くだけだった。異形は何をするでもなく、笑いを顔に貼り付けたまま巨狼を見下ろしている。延々と続く巨狼の独り踊りを、異形の嘲笑が包んでいた。

「アービィ……。
あたしは、あたしは、どうすれば、あなたの助けに……」

――ルティ……。ルティ、私と契約せし者の子孫よ。
その声は、重々しく禍々しい異形のそれとは違い、軽やかで神々しさに溢れていた。

「誰、あたしを呼ぶのは！？」
虚空からの呼びかけに、ルティは叫び返した。
ルティの焦りとは裏腹に、その声は優しく落ち着き払っている。

「あなたは、一体誰なの？
よりによって、こんな時に！」
その落ち着きが、却ってルティを苛立たせる。

目の前で苦闘を続けるアービィに、手助け一つできない自分がもどかしい。

――私は、世界の均衡を司る者。地水火風の精霊たちは、私が使いし者たち。精霊の王と呼ぶものもいます。

落ち着いた声が答えた。

かつて、歴史が始まる頃。

千年帝国が成立する遙か前の時代のことだ。

人間の数はまだ少なく、各地に集落は点在するが、大規模な町はまだ形成されていなかった。集落はそれぞれが独立した国家であり、狩り場や農地を巡っての諍いはあるものの、北の大地のような殺し合いをするほどには切迫してはいなかった。

次善は充分すぎるほどあり、交渉と譲り合い、駆け引きで平和は保たれていた。

人間同士の殺し合いが起きない理由が、もう一つあった。

魔獣の存在だ。

当時、呪文や系統立った戦闘術などはまだ確立されておらず、闘いといえば、力任せの殴り合いでしかなかった。その中で剣や槍、弓などの武器が発達し、それを防ぐために立てや鎧、兜が発達した。

しかし、人間の物理的な力など、魔獣の前には無力に等しかった。

魔獣の群れの襲来は、天災だった。

それを防ぐため、防護柵が改良を重ねられ、鉄の利用法が確立された。そして、強大な敵に立ち向かうため、集団戦闘の訓練が始められ、軍隊へと発展していく。

それでも純粋な、物理的な力の差は圧倒的で、人々は魔獣に脅え

ながら暮らさなければならなかった。

南大陸の中心地にある集落に、ベルテロイという錬金術師の家族が住んでいた。

錬金術の研究の過程で、まったくの偶然から精霊との交感回路を開いてしまった。そして、地水火風の精霊が純化した力を、一定の言葉と共に現世に呼び出すことに成功し、呪文が誕生した。だが、その彼は呪文を一家の占有とすることを、良しとは考えなかった。魔獣から身を守るために呪文が役立つと気付いた彼は、精霊と一定の契約をすれば誰でも行使可能なものであるべきと考えたのだった。

精霊と彼の子孫の何代にも亘る試行錯誤と、多くの人々の協力と犠牲を経て、いくつかの呪文が汎用化された。

その過程では、あまりにも強大な力を有するため、封印れた呪文も存在する。その後も彼の子孫は呪文の改良に励み、大帝国成立の頃には現在の呪文体型が完成していた。知識として残された『禁呪』は一子相伝で代々受け継がれたが、その使用は固く禁じられた。

いつしか、彼が居を構えていた地は、家族の名からベルテロイと呼ばれるようになっていた。

南大陸を統一した帝王が、その子孫に目を付けたのは当然のことだった。

既に伝説となっていた禁呪の封印を解けば、最終兵器を手にしたと同然だ。帝王は莫大な報奨金を提示し、呪文の封印を解くことを求めた。しかし、その家族は峻拒した。世界を破壊しかねない強大な力を解放してはならないと、代々いう戒められていた。そして、精霊からもその力の解放は拒絶されている。現実問題として、知識だけを売り渡しても、精霊が拒絶している以上解放は無理だった。

だが、自身を全能の身と信じていた帝王は、そうは考えなかった。

叛意あり。

その家族を反逆者と断定し、大帝国からの追放を公布した。しかし、周囲はその家族の人柄やかつての人々への貢献を忘れていなかった。ベルテロイを逃れ、大帝国の実効支配が行き渡りきっていない、大陸南端に住み場所を求めたのだった。いつしかベルテロイという家名は、大陸南部訛りでバルテリーと呼ばれるようになっていた。

そして、『禁呪』を封印するため、その子孫は錬金術師を廃業し、商人として生きる道を選んだのだった。

それだけの情報が、一気にルティの頭に入ってきた。

いや、始原の記憶が浮き上がってきたといって良い。

「あなたの言うことは解りました。

それで、あたしに一体、どうしろと？」

恐る恐るルティは聞いた。

自分そんな大それた存在だったなど、信じることなど不可能だ。

――禁呪を解放します。一度だけ。ここは世界とは異なる空間です。破壊されるものなどありません。ですが、一度だけです。二度は、あなたの身体が持ちません。一度でも、危険なことには変わりはないのですが。

落ち着いた声が返ってきた。

「あたしにそんな力が？

やるっ！

アービィを助けられるなら、何でもやるっ！」

ルティは即断した。

今まで、戦いの中でアービィを助けたことなど一度もないと、ルティは思っていた。強大な力を持つ人狼が、すべての障害を噛み裂

いてきた。ルティは、ただその後ろをついてくるだけだった。

アービィにしてみれば、精神的にどれほどルティに助けられていたか解らない。

だが、それはルティにしても同じことで、それはお互い様だと考えている。それ故に、命の危険に晒されたとき、アービィに頼りっぱなしだった自分が情けなかったのだった。

――いいですか、どんな力を以ってしても、あの異形を倒すことは不可能です。何故なら、あれは、人の心。

穏やかな声がルティに言った。

「人の心!?

あんなものが、人の心?

あたしの中にも、いるってこと!?」

驚愕に顔を歪めてルティが聞き返した。

――そうです。人の心です。怒り、悲しみ、妬み、怨み。ありとあらゆる人が持つ負の側面が具現化したものです。あなた方が言う、悪霊の権化と思ってください。ですから、人がこの世に存在する限り、あの異形もまた、存在し続けるのです。

少しだけ悲しそうな声がルティに伝わる。

「じゃあ、禁呪を解放しても、倒せない?」

肩を落としてルティが言う。

こうしている間もアービィは異形に牙を振るっているが、虚空を噛み続けているだけだった。

異形は一切攻撃せず、腕を組んだまま巨狼を見下ろしている。

――ああして攻撃が通用しないことで、狼の怒りを買い、それが

異形の力となるのです。そして、いつしか怒りに我を忘れ、異形に取り込まれ、同化されてしまうのです。ですが、そうなる前にわたしの力を一気に叩き付ければ、あの異形とて一時的に散り散りにできるでしょう。その隙にあなたが『雷電』で空間を切り裂き、この異空間を脱するのです。私が空間を閉じれば、あの異形の力を封印することができます。

落胆するルティに、落ち着きのある声は優しく説明した。

「あたしは、黒呪文を――!?」

ルティの意識の奥底から、全ての黒呪文が浮き上がってきた。

――あなたは、私と契約した者の子孫なのです。生まれたときから、既にあなたの意識下にはすべての呪文が埋め込まれています。禁呪も浮き上がってきていますね?

ルティの前に光の玉が現れ、それが次第に巨大な人の形を作り始めた。

脳裏に響いていた声が現実のものとなり、ルティの前に立つ光の巨人から聞こえてくる。

「はい。
始めます」

呼吸を整え、ルティは『禁呪』の長い詠唱を開始した。

「ほう、無駄なことを始めたようだな。
この身を吹き飛ばそうと、打ち砕こうと、人がいる限り我は何度でも蘇る」

異形は、ルティと光の巨人に向かって吐き捨てる。

――そうだ。人がいる限りお前は何度でも蘇るんだろう。でも、

お前を生み出すのが人の心なら、お前を押さえ込むのも人の心だ。
いつになるか分からないけど、僕たちはお前を飼い慣らす。
巨狼の脳裏にも、ルティが会話していた内容が聞こえていた。
一切の攻撃を止め、哀れむような、慈しむような眼差しで、巨狼は異形を見つめた。
もう、旅立った頃の凶相は、その面影を残していない。澄み切った湖のような、深く静かな切れ長の瞳がそこにはあった。

「なんだ、その目はっ!?
我を哀れむのかっ!?
情けを掛けると言うかっ!?」
それまで嘲笑の形になっていた異形の表情が、怒りに歪む。

――哀れんでもないし、情けを掛けてもいないよ。僕の中にもいるんだろ？　僕には解る。同胞の怨み、怒り、悲しみ。それがお前だ。解るんだよ。
巨狼は静かに言った。
ルティが始原の記憶を呼び覚まされたとき、同時に巨狼の脳裏にも人狼という生物種の記憶が浮き上がっていた。
長い長い迫害の歴史は、異形を作り出すに充分だった。
自分の中にも異形が存在することを、アービィは自覚していた。

「やめろ、そんな目で我を見るな。
怒りを忘れたか？
迫害の歴史を忘れたか？
人間に対する怨みを、貴様は忘れてしまったのかっ!?」
慌てふためくように、どこか悲しそうに表情を歪め、異形が叫んだ。

「お前もだ。

祖先が人々に恩を仇で返された悲しみ、怒り、怨み。
得られるはずの称賛や尊敬を失った失望や怨念を、忘れたとは言わせぬ。
何故、我を受け入れぬ？
何故、我と同化せぬのだっ！？」
黙って澄んだ瞳を向けるだけの巨狼から視線を逸らせ、『禁呪』を詠唱するルティに対し、異形は言い募る。

――忘れはしない。でも、しがみつきはしない。前に進むんだ。
「怒りも怨みも落胆もたくさんあったけど、愛も喜びも嬉しさもたくさんあった。
これからもきっと。
怒りを感じたり、怨んだり、落胆したり、悲しんだり。
きっと、たくさんあるけど、愛があって、喜びがあって、嬉しいことがあれば、人は生きていけるわ。
あなたが何度蘇っても、受け入れてあげる。
あたしたちが包み込んであげるわっ！」
長い詠唱が完成し、目を開いたルティが異形に慈愛に満ちた視線を投げ掛け、そして『禁呪』が発現した。

地水火風すべての精霊が、持てる力を一度に解放した。
性質の異なる力が互いに衝突し、不協和音のように調和のとれない共鳴を開始する。耳障りな共鳴が一気に高まり、徐々に調和がとれ始め、共鳴音が潮が引くように静まっていく。
一切の音が消失した瞬間、巨大な破壊が発生した。

精霊の結界がルティと巨狼を包み込み、破壊からその身体を守っている。
すべての力をその一身に受けた異形が、痕跡すら残さずに消失した。

――ルティ、『雷電』を。空間が不安定になっている今しか、斬り裂く機会はありません。

結界が消滅し、破壊が荒れ狂う空間にルティと巨狼は放り出された。

身体全部が軋むような圧迫に、動きを封じられ、思考さえも止まろうとした。

――早く、ルティ。空間が安定してしまっては、もう斬り裂けなくなってしまいます。

慌てたような声がルティの脳裏に響く。

だが、荒れ狂う破壊の圧力に、ルティの身体は完全に動きを止められていた。

巨大な圧力に身体をちいさくまるめられ、まるで胎児のような格好になっている。

――悔しいよ。アービィ、巻き添えにしちゃってごめんね。死ぬのかな、あたし。

意識が遠のき始め、視界が暗くなる。

光の巨人が叱咤するが、指一本動かすことができず、そうする気力も失われ始めた。

やがて視界が真っ暗になったとき、急に身体に感覚が戻った。

身体の回りを、しなやかな毛皮が覆っている。巨狼がルティを包み込み、圧力から守っていた。

――ルティ、帰ろう。みんなのところへ。

巨狼から届いた念話に、ルティが覚醒した。

短い詠唱の後、『雷電』を発現させるため、ルティが身体を伸ばそうとする。
巨狼がルティを包み込んでいた身体を一瞬弛め、その隙間を衝いて『雷電』が一条の光となってルティの指から伸びた。通常であれば雷光が撃ち出され、一瞬で効果が消失する『雷電』が、ルティの指先に持続されていた。
巨狼がもう一度身体を弛め、ルティが腕を振り下ろす。

宙空に一筋の亀裂が入った。

ティアとバードンは、追い詰められていた。
アービィとルティが消えたことで生じた動揺を衝かれ、魔矢をしこたま喰らっていた。防具に覆われていない顔や喉といった部分への、致命的な直撃は辛うじて避けていたものの、数え切れないほどの被弾は着実に二人の体力を奪っていた。回復呪文を唱える暇も与えずに襲い来る魔矢に、反撃の糸口を見出せずにいた。

「口ほどにもない。
這い蹲って許しを乞い、不死者になるなら許しましょう」
尊大な、卑しい笑みを浮かべニムファが言う。

「やかましいっ！
誰が貴様なんぞにっ！」
「死んでも御免よ、そんなことっ！」
次々と飛来する魔矢を叩き落としながら、バードンとティアは同時に叫んだ。

その隙を衝かれ、ついに魔矢がティアの右腕を、バードンの左太腿を貫通し、どちらも骨を砕いていた。

腕を押さえうずくまるティアの視界に、もんどり打って倒れ込むバードンの姿が飛び込んだ。気力を振り絞り、『快癒』をバードンに掛けようとしたティアの左上腕に、さらに一本の魔矢が貫通する。
呪文の詠唱を強制的に止められたティアは、反射的にバードンに覆い被さった。

無数の魔矢が殺到し、二人の全身に命中する。
だが、貫通するはずの部位に命中した魔矢は、貫通どころか皮膚を傷付けることさえなく消滅した。ニムファは次々に魔矢を撃ち出すが、どれも二人を傷一つ付けることなく消滅し、ついには宙空で消え失せてしまった。

「何故!?
何が起きたというの!?」
慌てふためきニムファが叫ぶ。

そのとき、ニムファと二人の間の空間に、一筋の亀裂が走った。

「何!?
そんなことが!?」
再びニムファが叫んだとき、ルティを背に乗せた巨狼が舞い降りた。

「これで終わり。
あなたの神は、消滅したわ。
もう、あなたに力はないの」
ルティが切っ先をニムファに向けた。

「何故、なんで、みんな私の邪魔ばかり……」
力が消失したことを自覚したニムファが、か細い声で呟いた。

突如、背後の神像に亀裂が走り、全身へと広がっていく。
グレシオフィの身体が灰化し始め、砂の城が波に溶かされるように崩れ始めた。

――オセリファ……
グレシオフィの思念が伝わった。

ニムファの身体が、グレシオフィと同期して崩れ始める。

「嫌……
嫌っ！
嫌ぁっ！
まだ世界はっ！
世界は私の物になってないっ！」
半ば原形を留めていない状態でも、ニムファは世界を望んでいた。

――終わりだよ……僕を喚んでくれてありがとう。あなたも、僕を……
巨狼はグレシオフィに目を遣り、その牙をニムファの首に突き立てた。

エピローグ

春がようやく来た街道は、汗ばむほどの陽気だった。

三つの影が並んで進む脇を馬車が通り過ぎ、早足の旅人が追い抜く。

一つの影はのんびりと歩き、一つはじゃれ付くようにまとわりつきながら歩いている。もう一つの影は、少し離れて歩いていた。

若い男性一人と女性が二人、楽しげに南へと向かっていた。

「もうちょっと急ごうよ、ルティ」

狼の耳と尻尾を持ち、刃渡り３０ｃｍほどの短刀を腰に佩いた身長１７５ｃｍほどの男性が、女性の一人にまとわりつくように言い募る。

服装は周囲の人から浮かない程度に一版的なデザインで、薄茶色に統一されていた。くすんだモスグリーンのマントとフードが一体型の外套を羽織り、フードは後ろに撥ねている。マッチョではないが、充分筋肉が発達した身体で俊敏さが伺えた。

顔立ちはあどけなさが残るが、少々長い灰色の髪と切れ長の目が精悍さを醸し出し、年上の女性からは可愛がられるタイプと言って差し支えないだろう。

「うっさいわね、アービィ。

せっかくいい気持ちで歩いてんだから、あんたも少しのんびりしなさいよ。

それから、まとわりつくな。犬っ！

アンタも笑ってないで、何とか言いなさいよ」

姉がやんちゃな弟を窘めるような口調で言う女性は、身長１６０ｃｍほど。刃渡り７０ｃｍほどある細身の剣を腰に佩き、スレンダ

ーな体型を軽量タイプの革鎧で固めている。鎧の上から少年とおそろいの外套を羽織り、フードを撥ねている。
年の割りにしっかりした顔立ちで、芯の強さがうかがい知れる。美人と言えるが肩と腰の中間まで伸ばした栗色の髪は、年相応の可愛らしさも引き立たせていた。

「え、いいんじゃない？
可愛いし」
少しだけ憂いを含んだ瞳と、下半身に脚ではなく長大な蛇の尻尾を持ち、小太刀を腰のベルトに差している女性が答えた。
豊かな胸の主張を隠すように軽量タイプの革鎧を纏っている。しなやかな銀髪は腰まで伸び、一見幼くも見える目元は僅かに垂れ気味で、それと絶妙のバランスを取る鼻梁と口元は、二百年を生き抜いた時の重さを感じさせることはなかった。

「犬って言うな、犬って
ティアも可愛いとか言わないでよ」
アービィと呼ばれた男性が、ふてくされるような口調で答える。

ルティと呼ばれた女性が、うんざりしたように応じた。
「はい、はい、狼だもんね、アンタは。
ティアも調子に乗らせるようなこと言わないの」
そのせいで途中大変だったんだから、それを忘れるんじゃないわよ、とルティが続ける。

「だから、いいじゃない。
可愛いんだし」
ティアと呼ばれた女性が、笑いを噛み殺しながら言う。

「反省してるってばさ。

これからは気をつけるよ」
本気で済まなそうにしているアービィに、ルティは追い討ちを掛けた。

「反省って、何回目よっ。
酒場の女相手に鼻の下なんか伸ばしちゃってっ！」
「喜んでくれてるんだからいいじゃないかっ」
アービィが地雷を盛大に踏んだ。

「どっちが喜んでるのよっ！」
ちやほやされて喜んで、あたしの身にもなってみなさいと言いながらアービィの耳を引っ張る。

「やめて～、ルティっ。ごめんなさいっっ。
伸びる……耳伸びるっ！」

「だいたいね、あんたは有名人になっちゃってるんだから、少しは自重しなさいよっ！
狼の耳と尻尾つきで酒場に入ってきたら、誰だってすぐ判っちゃうでしょうがっ！」
力いっぱいアービィの頭を叩きながらルティが怒鳴る。

「ちょっ、今ここで、それを大声で言う？
僕がやったことと大差ないんじゃ？」
アービィの反撃にルティは口を押さえて辺りを見回し、人が聞いていないことを確認して少々残念な胸を撫で下ろす。

「ちょっと、うっかり、しただけじゃないの。
あんたに言われたくないわ」
「撫で下ろしやすそうな胸でよかったね」

ルティとティアの胸を見比べつつ、再度アービィは地雷に両足で飛び乗った。

「やかましいっ！」

アービィの後頭部にルティの脚が飛び、アービィは道端に昏倒した。

「ちょっと休憩。休憩よ」

ルティは伸びてるアービィを道端に蹴り転がし、側にある石に腰を下ろす。

ルティは道端の石に腰を下ろし、ここまでのことを思い返していた。

ニムファが灰と化した後、バードンとティアを回復して四人は魔宮を出た。

長い階段を降り、広間を通って扉を押し開け、外に出る。そこで四人は、疲労困憊のメディと相も変わらず意気軒昂なエンドラーズ、そして事の行方を固唾を飲んで見守っていたピラムの民を始めとする最北の民に出迎えられた。

四人が姿を現したとき一瞬の静寂が広がり、その後熱狂が同心円状に広がった高揚感を、ルティは忘れられない。

ルティが四人を代表して、中で起きた一部始終を語り始めた。

誰に言われることもなく、促されることもなかったが、ルティの口からは言葉が迸り出ていた。熱狂の中、一人の声など掻き消されて当たり前だが、ルティの言葉は魔宮前庭に犇めく人々の脳裏に届いていた。その言葉に人々は一人、また一人と耳を傾け、ルティが語り終えて暫くは辺りは静まりかえっていた。やがて潮騒のようにざわめきが広がっていく。

ざわめきは喧騒に変わり、あちこちから啜り泣きが聞こえ、そして歓喜が爆発した。

人々の熱狂は、終わる気配を見せなかった。

集落や部族ごとに喜び合っていた人々が入り交じり始め、さらに驚喜の輪が広がっていく。それまでは呉越同舟といった雰囲気を漂わせていた群衆が、最北の民として一つになっていった。やがて、陽が傾き、風花が舞い始め、人々の熱狂を優しく冷ましていく。

アービィの念話が、最北の民に届いた。

――さあ、帰ろう。

最北の民が、夜の道をそれぞれの集落目指して帰っていく。

ついさっきまで、夜は不死者の世界であり、出歩くことは死を意味していた。それが今では大手を振って歩けるようになったのだった。最北の民を見送る間に、不死者の恐怖が去ったことを、エンドラーズが精霊との交感を介し両大陸に伝えた。

北の大地全体が、どよめいたような錯覚に、アービィたちは捕らわれた。

ラーニャに戻ったところで、本格的な降雪が始まり、北の大地は雪に閉ざされた。

普通であれば、そのまま雪に閉じ込められ、帰還は来春になる。だが、アービィの発案で馬車を応用した橇を作り、獣化したアービィがそれを曳くことにした。雪の中で男で三人と、ラーニャに駐屯する部隊が橇を短期間で作り上げた。ルティとエンドラーズが精霊の加護を賜り、橇の中は常に火の精霊が一定の気温を保ってくれる。

駐屯部隊に見送られ、巨狼が引く橇は雪の中へと滑り出した。

シャーラで総司令官と互いの労を労い、ターバを目指す。

ターバでは、北の大地に残るランケオラータとレイ、プラボック

に別れを告げ、再会を約して南へ向かった。パーカホを過ぎ、ワラゴの集落で再会を喜び合い、山岳地帯を抜けて二年振りに南大陸へ足を踏み入れた。

ウジェチ・スグタ要塞にパシュースとヘテランテラ、ルムを訪ね、その際にアルテルナンテとフィランサスを紹介された。救国の英雄に、アルテルナンテとフィランサスは篤く礼を述べ、人狼の社会適応施設に南北連合は全力を挙げて協力することを確約した。

ウジェチ・スグタ要塞は、南北連合の本拠となっているが、平和記念館として一部を一般公開すると決定していた。その展示品の一つとして、アービィがここまで曳いてきた橇を寄贈して欲しいと、ルムが持ち掛けた。この先はラシアスの駅馬車路線があり、北の大地への物資輸送のために整備され、厳冬期の運行も可能になっている。アービィたちに嫌はなく、橇を置いてウジェチ・スグタ要塞を後にした。

両大陸の行く末を決める五人と、見習いとして側に付いているヌミフとオンポックに見送られ、アービィたちを乗せた馬車は一路ベルテロイを目指す。エンドラーズはストラーへ、メディはビースマックへと帰るため、ここで分かれることになる。

ベルテロイでは、レヴァイストル伯爵とセラスを伴ったファティインディィ伯爵夫人に迎えられた。アービィたちが帰還すると聞いて、ボルビデュス領から出てきていたのだった。

別れの前夜、ささやかな宴の席での出来事を、ルティは忘れられなかった。

宴もたけなわとなった頃、突然エンドラーズがルティの前に跪いた。

「えっ！？
何をなさってるんですか、エンドラーズ様！？」
事態を飲み込めないルティが狼狽する。

「ルティ・バルテリー殿。
いえ、ルティ・ベルテロイ様。
我らはこのときを、どれほど待ち焦がれたか。
お帰りなさいませ」
エンドラーズが深く頭を垂れると同時に、地水火の最高神祇官から同様の思念が届く。

「いえ、あの、ちょっと待ってください」
慌てふためいてルティがエンドラーズの前に両膝を着いた。

「我らが真祖のご子孫様が、大陸の南におわしますことは以前より判っておりました。
ですが、大帝国の手を逃れて以来、真祖のご子孫様はお力をお封じになり、我らの前からお姿をお消しになられていたのでございます。
我ら神官の間には、世界の危機が訪れたとき、真祖が再びご光臨なされるとの伝承がございます。
五百年前、大帝国が崩壊し、戦乱の世が始まったとき、当時の誰もが伝承が現実になることを願いました。
ですが、戦乱は五十年の長きに亘り、やはり伝承は我らの期待でしかないと諦めていたのでございます。
それが現実となり、その場に居合わせることができた我らは、これ以上はない、幸せ者に、ございます。
よくぞ、お戻り、ください、ました」
ルティの手を取り、エンドラーズは泣いていた。

翌朝、エンドラーズとメディを見送った後、バードンが自分の荷物を担いだ。

「ここで、俺は行く。
ティア、しばし待たせるが、許せよ。
ルティ殿、ご安心ください、時々伺います。
ティアを放っておくような真似は、決して致しません。
アービィ、またな」

そう言ってバードンはティアを強く抱きしめてから、マ教の総本山を目指し雑踏へ消えた。

初めてアービィと呼んで。

爽やかな寂しさの中、三人はフォーミットまで歩くことにした。
ゆっくりと、これまでの旅路を確かめるように。

まだ全世界が完全に一つになったわけではない。
今のところ、北の大地は発展途上だ。南大陸におんぶに抱っこでいなければ、すぐに息切れしてしまう。南大陸が北の大地から収益を上げるのは、まだまだ先のことと思えた。その間、南大陸の各国家は活況に沸き、不況に喘ぐかまだ判らない。北の大地が独立した歩みを始めたとき、南大陸と平等な立場となれるか、覇権を巡って再び争うか、これもまだ予想もできないことだった。ラシアスの国民感情も、まだ北の民を完全に許容はしていなかった。人を喰らう人狼も、まだまだ跋扈している。

アービィたちが考えている人狼の子供を集めた施設は、まだ端緒にも着いていない。

まだ、これからやらなければならないことは、山ほどある。

「いいかげん、起きなさいよ」
ルティに蹴り飛ばされ、アービィは渋々身体を起こす。

「まったく、ルティは手が早いんだから」
ティアが呆れたように呟いた。

「アービィがいけないんでしょ。
人の気も知らないで」
あまりにももっともなルティの言葉に、アービィは返す言葉も無くしょぼくれる。

「ま、いいわ。
早く次の町まで行っちゃいましょ。
日も暮れ始めたし。
アービィ、完全獣化しちゃいなさいよ」
既にアービィとティアの正体を隠す必要はなくなっている。

「そうだね、早く飲みに行こうよ」
アービィが獣化し、ティアが獣化を解く。

二人を乗せた巨狼が、地を駆けた。

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6823j/

狼と少女の物語

2011年5月21日02時36分発行